

成り代わりリンクのGrand Order

文月葉月

気がついたら、ハイラルにて『リンク』という金髪碧眼の少年になっていた元ゼ
ル伝プレイヤー。

躊躇いながらも、成ってしまったからには『リンク』に恥じない生き方をしようと努めた彼は、ゼルダ姫に会い、マスターソードの主となり、『勇者リンク』その人として戦いの運命に投じることとなる。

自らが『リンク』となったことで、その運命の過酷さと理不尽さを思い知った彼は、『ゼルダの伝説』という壮大な物語を終わらせる決断を下す。

女神の祝福、万能の願望機たるトライフォース。

人が持つにはあまりにも強すぎたそれが、もう誰の運命も狂わせることの無いようにと、末代の勇者は最後の願いをかけた。

姫はただの女の子として幸せに、魔王は砂漠の国を発展させる立派な王に。

そして勇者は、トライフォースを永遠に保有、及び管理する役目を負った者として、共に封印の眠りについた。

そうして、大きな犠牲を払いながら、争いの運命を終わらせた『リンク』だった

が……彼は思いもしていなかった。

時間軸の認識と情報の整理を目的に書いていた、膨大な量と化していた『ゼルダの伝説』の著書一式が、封印後の遺品整理で発見されて。

ハイラルが滅びた後に新しく興った後の文明にまで遺り、とある黄金の古代王によって発掘されて。

「この伝説を人類の至宝とする!! 我の威光の全てを以って、子々孫々、文明の端々にまで伝えてやろうではないか!!」

……と、感動に咽びながら宣言した王の普及活動によって、数千年の時をかけながら全世界・全文明にまで、その物語、かの緑衣の勇者の活躍を知らない者はいないというレベルで広まっていくことを。

最古にて、最高の勇者。

人々にそう称されていた彼の、二度目の冒険は、焼却された世界に遺された人々の想いに、勇者という名の希望を求める声に応えたことから始まる。

←末代の勇者のハイラルでの活躍を描いた外伝はこちら

<https://syosetu.org/novel/184842/>

召喚時のセイントグラフの裏側を、トライフォース仕様で描いて頂きました。
リナ葱さん、ありがとうございました！

ピックアップにて活動中のぐっちーさんという方が考案し、フリー配付された設定に影響を受けて作った作品です。

ピックアップの方でも投稿しています、見かけたらよろしく願います。

時系列に沿った本編は、『邪竜百年戦争』以降からとなります。



目次

Prologue	勇者の帰還	1
初期設定&試作品		17
最古の記述		17
マテリアル	クラス『勇者』 真名『リンク』	22
マテリアル	クラス『勇者』 真名『リンク』 続	49
成り代わりリンクの封鎖終局四海(仮)	前	97
成り代わりリンクの封鎖終局四海(仮)	後	129
資料&ネタ語り		173
歴代のゼル伝シリーズをプレイした纏め		173
『ゼル伝』が人理に与えた影響	インド編	230
『ゼル伝』が人理に与えた影響	叛逆の騎士編	260

『ゼル伝』が人理に与えた影響 反逆の騎士編 後……………

取り戻すための旅路へ……………

イベントの物語

デッドヒート・サマーレース プロローグ……………

デッドヒート・サマーレース 平原エリア……………

デッドヒート・サマーレース 火山エリア……………

デッドヒート・サマーレース 水辺エリア……………

デッドヒート・サマーレース 谷間エリア……………

デッドヒート・サマーレース ゴール前……………

デスジェイル・サマーエスケイプ 脱獄開始……………

デスジェイル・サマーエスケイプ 監獄の一日 朝～昼……………

デスジェイル・サマーエスケイプ 監獄の一日 夜……………

デスジェイル・サマーエスケイプ 脱獄成功～フィナーレ……………

禁忌降臨庭園

やり直しの果てに	537
舞台裏	578
開演前	593
一度目の公演	624
魔女狩り将軍	670
二度目の公演 前	682
二度目の公演 後	698
狂気の日々	742
開廷	762
最終公演	791
降臨	814
終幕	832

カーテンコール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

邪竜百年戦争

森の中の出会い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

契約成立・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

束の間の平穏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

VS 骸骨兵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

魔女の復讐・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

VS 翼竜・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

新たな旅仲間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

現状把握・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『終わり』の続き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

惨劇の街・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

二人のジャンヌ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

VS ヴラド三世

VS カーミラ

屈辱の撤退

立香の懸念

音楽魔術

暗中の聖女

聖女の試練

総力戦開始

VS マルタ&タラスク

新たな道標

竜殺しの英雄

オルレアンの聖女

音楽家の慧眼	1133
束の間の一人旅	1152
連なる悔恨	1165
勇気ある者	1173
VS ランスロット(狂)	1185
反転攻勢	1202
竜の奮闘	1217
決戦前夜の語らい	1231
狩人と獲物	1243
VS サンソン&デオン	1253
VS カーミラ(再)	1274
『伝説』の再臨	1284

邪惡の失墜……………

出会っていた運命……………

最後の進撃……………

暴かれる真実……………

狂人の言祝ぎ……………

黒き聖女の誕生日……………

天文台に集う……………

カルデアの日常 1

天文台の食堂物語……………

ダ・ヴィンチの勇者論……………

ブラックカルデア改善計画……………

立香の試練 前日譚……………

立香の試練 事前準備

立香の試練 本番

日常の終わり

永続狂気帝国

薔薇との邂逅

VS カリギュラ

首都の繁栄

不穏な始まり

防衛戦の合間にて

勇者の暗躍

作戦会議

紅のアン王女

伝説が蘇る時……………

上演前の舞台袖にて……………

勇者の名演……………

これにて一件落着……………

困難を砕く……………

灯りたての勇氣……………

VS スパルタクス……………

蛮勇にあらず……………

幻の少年……………

VS カエサル……………

VS ゴーレム……………

ガリア戦終幕……………

形ある島・・・・・・・・・・・・・・・・・・

姉妹の再会・・・・・・・・・・・・・・・・・・

勇者の試練・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第一階層・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第二階層・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第三階層・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第四階層・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第五階層・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第・・・・・・・・・・・・・・・・・・

懐かしき強敵・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『力』と『勇氣』・・・・・・・・・・・・・・・・・・

四つの剣・・・・・・・・・・・・・・・・・・

幾度目かの決着	2149
真の勝者	2173
捻じれた姉妹	2195
全軍集結	2212
VS スパルタ	2220
不死者の軍勢	2240
VS ダレイオス三世	2259
VS 諸葛孔明（？）	2274
道半ばの覇王	2303
静かな始まり	2319
先達者の怒り	2333

真なる皇帝	2356
VS ロムルス	2369
黄金劇場	2393
悪魔の問い	2411
神の鞭	2449
騎士王の真実	2466
VS アルテラ	2484
薔薇の花嫁	2503
カルデアの日常	2523
2	
ローマの名残り	2523
カルデア改善計画その2	2533

見えない刃……………

勇者の天敵……………

カルデアの休日 前……………

カルデアの休日 後……………

封鎖終局四海

天文台よりの船出……………

海賊女王……………

嵐の夜……………

P r o l o g u e

勇者の帰還

二度と覚めない筈の眠りから浮上した。

永遠だった筈の封印が綻んだ。

1
それ自体は驚くようなことじゃない、一応予想は出来ていた。

女神が創り上げた退魔の聖剣、万能の力の結晶であるトライフォース。

そして……自分で言うのも何だけど、『勇者』そのものにだって価値を見出せる要素はあるだろう。

いつか、俺達の伝説が本当に『伝説』となるような遠い未来、それらを狙う連中が現れることは十分考えられた。

だけど残念。

生憎と俺には、その思惑に応えてやる気は全く無い。

俺は『リンク』としての役目を果たしきった。

世界が滅びに瀕し、人々が苦しめられるような、『勇者』の登場と活躍が望まれるような時代はもう終わった。

終わらせたんだ。

目覚めたい気持ちがある…もう一度、今度こそ本当に『ただの俺』として生きたいと

望む気持ちが無いわけじゃない。

だけど、余計な争いの火種となってまで叶えたい望みだとは思えない。

繰り返される争いの運命から、世界は、人々はやっと解放されたんだ。

それがどれだけの悲劇と争いの末に叶った奇跡なのか、未来の人はわからないだろうし。

あの頃には無かった別の問題だって、色々あるんだろうけれど。

それは他でもない、『いま』を生きる人達の手で乗り越えなければならないことだと俺は思う。

だから、皆で頑張ってほしい。

俺みたいな、遠い過去の遺物なんかには頼らないで。

そう思いながら再び微睡みかけた意識が再び、今度は一瞬で覚醒した。

声が聞こえる。

苦しむ声。

悲しむ声。

祈る声。

願う声。

信じる声。

声、声……世界中から届いてくる。

助けを、救いを。

奇跡を。

『勇者』を願っている。

『その瞬間』に、世界中の人々が抱いたのであろう想いの残滓が、残響が。

焼き尽くされて、人も歴史も無くなった世界にまだ残っている。

思考が焼き切れるような心地がする。

怒りが、悔しさが、歴史を焼いた炎以上の赤と熱をもってこの身を焼く。

この事態に誰が抗えた、どう頑張れた。

首謀者以上に、自分自身の見通しと考えの甘さに対して腸が煮え繅り返りそうだ。

祈りの声は尚も届く。

応えるべき相手は、救うべき世界は、もはや消え去ってしまったというのに。

.....
残っている。

.....
いや。

まだ諦めていない。

まだ戦っている人達がいる。

その場所の、その人達の存在を認識した次の瞬間。

俺は俺を、『勇者』を呼ぶ声に応え、手を伸ばしていた。

運命なんかじゃない。

逃げられなかった訳でも、諦めて受け入れた訳でもない。

助けを求めて、『勇者』を願う人達がいる。

それに応えたいと思った俺の、『勇者の力を受け継いだ俺』自身の中で決めたこ

とだ。

『ゼルダの伝説』は、『勇者リンク』の物語は確かに終わった。

ならばここからは正真正銘。

俺の…リンクの物語だ。

…俺はリンク、俺は勇者。

何故だろう。

ずっと、何となく違和感を感じていたその名前が、肩書きが。

初めて、本当の意味でしっくりと来たような気がした。

本編を開始します。

どれだけの長さで、どれだけの時間がかかるか…そもそも、書ききれられるかわかりませんが。

彼らの人理修復に、お付き合いいただければと思います。

初期設定&試作品

最古の記述

後の世に伝わったこの一節があまりにも有名なため、彼は後世で『最古のゼル伝ガチ勢』として認識されています（事実）。

『彼』は、何故に勇者なのだろうか。

何をもって人々は『彼』を勇者と呼び、『彼』は勇者と成ったのだろうか。

退魔の聖剣に認められたただ一人の主だったから？

あらゆる武器を使いこなす達人だったから？

百発百中の弓の名手だったから？

困難な旅路を力強く駆け抜け抜ける愛馬が共にいたから？

時には宵闇に紛れてでも果たすべき役目を果たしきったから？

不思議な道具や力を駆使してあらゆる苦境を乗り越えたから？

たった一人で魔物の群れに立ち向かう無謀にも怯まない戦士だったから？

その全てが正しく、そしてその全てが間違いである。

『彼』は立ち上がった。

『彼』は歩み出した。

『彼』は諦めなかった。

『彼』は戦った。

そして『彼』は証明した。

絶望の果てに掴める希望があることを、自らが『勇氣』の体現となつて。

もはや事細かに語るまでもない……『勇者』という言葉が、『勇氣ある者』を意味するならば。

それを『彼』を意味するために用いることに、何の疑問が、何の躊躇いがあるろうか。

これより続く長い人の歴史の中で、特出した戦士や英雄が現れ、名を上げること

も時にはあるだろう。

その予想はもはや確信ではあるが、それでも私の心を揺るがすには至らない。誰が現れ、何を為そうと、真の『勇者』はただ一人。

至高の王たる私の心を、空の高さに夢を馳せる少年の如く昂らせた『彼』なのだと。

一時ながら玉座を下り、唯一の友のみに許した私室で、今この時だけただの『私』となることを私自身に許して。

友と二人で笑い合いながら、既に感触を手が覚えてしまった表紙に触れ、彼の者の活躍に胸が昂る夜を過ごす度に思うのだ。

『ギルガメッシュ叙事詩』より抜粋

古代ウルクの王ギルガメッシュが『ゼルダの伝説』を愛読していたこと、かの伝説が当時既に存在していたことを証明する貴重な一節である。

*
*
*
*
*

ゲートオブバビロン開く↓ゼルダの伝説・原本（持ち主曰くエアに並ぶ至宝、世界的・歴史的・文化的にも超下級のお宝）登場

「サイン下さい!!」

「ぎやああああ何でそれ残ってんのおおおおっ!!!?!」

「リンクさんのおばあ様が、リンクさんが時の神殿に封印された後に発見され、王家に献上されたと伝説に残っておりますが…」

「ばあちゃああああああんっ!!!」

「お願いしますそれ返してください、さもなければ燃やしてください跡形もなく!!」
「

何を言うか、これは私の至宝！　いくら勇者に伏して頼まれたとてこればかり

は断じて聞けぬ！」

「割り込んじゃって悪いけど、それに関しては僕も全力で止めさせてもらうよ。

確かにその本は、リンク君にとってはただの記録に過ぎないのかもしれない……だが
けど現状、君が残した君の伝説は今や人の歩みと歴史に無くてはならないものなんだ。

……^{⑧秘}ノートが知らないうちに全世界流通していたショックは計り知れないけれど、勇者としてどうか堪えてほしい」

「半分死んだ慈愛の眼差し向けんじゃねえ、ドクターのアホーーーーっ！！！」

マテリアル クラス『勇者』 真名『リンク』

マスターソードの設定についてご指摘をいただき、それがしっくりと来たので多少手直しをしました。

ステータス

【出典】ゼルダの伝説

【CLASS】勇者（ブレイヴ）

【真名】リンク

【性別】男

【身長・体重】155cm・52kg

【属性】中立・中庸（ちなみにゼルダが秩序・善、ガノンドロフが混沌・悪と仮定）

【ステータス】 筋力 B 耐久 B 敏捷 A 魔力 B 幸運 A 宝具 A

善の女神『ハイリア』の加護のもと、かの女神の名を拝した地にて、神代をも越えた遙か太古に繁栄した前史文明『ハイラル』。

幾万にも渡った永き年月の中で繰り返された栄枯盛衰、その転換期における戦乱や混乱を鎮め、幾度となくハイリアの地と歴史と人々を救った、正しく『最古の英雄』と呼ぶべき者である。

彼の活躍が記された伝説は、世界中のあらゆる時代、あらゆる国、あらゆる文化に強い影響を与えている。

故に、世界のどこで彼が召喚されたとしても、人が生き文明が存在する地である限り、最高ランクの知名度補正を得ることが出来るであろう。

……最後の最期まで、誰かのため、平和のために身を尽くした『勇者』たる彼が、魔術師の身勝手な願いに応えてくれればの話だが。

* * * *

クラススキル

トライフォース
黄金の聖三角

EX

既に失われた時代に存在していた三柱の女神達が紡ぎあげた力の結晶、所有者の手の甲に紋章として刻まれる。

『勇氣』『知恵』『力』の三角によって構成されており、全ての力が統合された折には『万能の願望機』とも成り得たという。

人々のために紡がれた祝福ではあったが、後の世に『勇者』『姫』『魔王』の長き歳月に及ぶ因縁の大元となってしまった。

末代の勇者は聖三角が存在するかぎり囚われ続ける自分達の運命を嘆き、姫の、そして魔王の魂の解放を最後の願いとして、自らを聖三角の永遠の保有者であり管理者とすることで全てを終わらせた。

『最後の願い』を受諾した聖三角からは、もはや『万能の願望機』としての側面は失われている。

それでも『女神の祝福』という名の膨大な力の結晶であるという事実は変わらず、『燃料』として用いれば万能の願望機に匹敵する結果を紡ぎ出すことも可能と思われる。

しかしこれの唯一の持ち主、伝説を終わらせた末代の勇者は聖三角が再びの騒乱を巻き起こすことを望まず、己の現界や戦闘を補助するためや、隣人のありふれた望みを手助けするといったことにのみ使用し、彼が為した偉業や彼に許された権利からすればあまりにも細やかで健気な振る舞いを周囲に見せている。

「フォウさんの手、フォウさんの手、包丁を使う時はフォウさんの手を忘れずに……」

「マシュ、力を入れ過ぎだ。それでは逆に危ないぞ、もっと落ち着いて」

「あ、あ、危ない!? この料理はやはり失敗してしまうのですか!？」

「なぜそうなるのかね、指を切りかねないという意味だ!」

「指を切ってしまうくらいどうってことありません!」

センパイは楽しみにして下さっているのに……私が至らないせいでそれを裏切って

しまったらと。

優しいセンパイなら仮に失敗しても笑って食べてくれる、それがわかっているからこそ……怖くて怖くて、手が震えて」

「……マッシュ、大丈夫だから」

「ほわっ!? リ、リ、リンクさん！」

「深呼吸」

「ふっ……すうー、はぁー……」

「大丈夫、大丈夫……ほら、落ち着いてきた」

（……ドクター以外で、背中を撫でてもらうなんて初めて。

ドクターとは違う温かい手、気持ちが落ち着いて、息が楽になってくるのがわかります）

「……はい、もう大丈夫です。ありがとうございました、リンクさん」

「頑張れよ、俺も楽しみにしてるから」

「はいっ！」

「何とも温かく、優しい力なのだ、離れた所で作業していたキャットにまでわかったぞ」

「万能の力、ライフフォースかあ…あれを料理を成功させるんじゃない、あくまでマシユを落ち着かせてあげるために使う辺り、やっぱりリンク君はわかっているねえ」

「勇者たる者はやはり違うな…あの力があれば、それこそどんなことでも為せるだろうに。」

あの力を自らのために用いる権利が、彼には間違いなくある筈なのに…」
「それをしない、いや出来ない、そういう子なんだよ。」

……私には、ちょっと無理かなあ」

「キャットも自信がない、極悪な本体には猶更だ」

『二人の少年が背負っている運命ではない。全ての因縁は、私の代で終わらせる』
それが、彼の最後の言葉だったか」

「……終わっていないよねえ、結局最後まで一人で全部背負ったんだ。」

大事なお姫様だけでなく、因縁の相手だった筈の魔王まで最後には助けちゃって。

そして自分は一人ぼっち」

「何を言うブーディカ！」

「え……？」

「よく見て、そして思い出してみる、今のリンクのどこが孤独のぼっち少年に見えるというのだ？」

「……そうだね。ああ、そうだね、その通りだ。

よおーし、マシユのメインに負けないように、頑張ってサイドメニュー色々と作りますか。皆で食堂に集まって、賑やかに食べよう！」

「おうとも！」

（あまりにも見てられなく咄嗟に手を出したけど。

……大丈夫かなあ、トライフォースこんな使い方して怒られないかなあ。

……誰につて、誰かに。

一応正当な保有者だし、管理責任だって果たしてるし。

ぶっちゃけ俺のだよね、これ。使っていいよね、大丈夫だよ。

………たまに軽く使ってるけど、何か言われたことは無いし、気付かれても無

いっばいし。

大丈夫だろう、うん)

* * * *

宝具

退魔の聖剣^{マスターソード}

ランク…B+ 種別…対魔宝具

『黄金の聖三角』と同じく女神によって作られた神剣。真の勇者のみがその手に出来る^{と伝えられる。}

悪しき者、魔の者との戦闘においてその切れ味は更なる輝きを放ち、どのような堅い守りでもその刃を防ぐことは叶わない。

激しい戦闘で損傷してしまったとしても、女神の加護の賜物か、時を経ることで復活を果たすことが出来る。

『ゼルダの伝説』の記述によれば、女神達から使命を授けられた精霊と共に試練を越え、神剣の真の力を目覚めさせた少年もまた『勇者』の魂を持つ一人であったという。

その誕生から終末までを勇者に寄り添い、戦い続けた神剣は、役目を終えた今も変わらず、ただ一人の主である勇者の魂と共に眠る。

今も、昔も、そしてこれからも、勇者の眠りは決して孤独なものではないのだという事実は、『ゼルダの伝説』に魅せられた人々を絶えず慰め続けている。

勇者^エの愛馬^{ボナ}

リンク・B 種別…対軍宝具

膨大な時を経て紡がれる『ゼルダの伝説』、その幾つかの章に跨いでその名と存在が記されている勇者リンクの愛馬である。

誰もが認める名馬でありながら、その誇り高さ故の扱い辛さから周囲の者達からは敬遠されていたことも。

しかし、ただ一人の主と認めた勇者に対しては一心の忠誠と愛情を捧げ、彼の旅

路に立ちはだかった困難の多くをその健脚で乗り越えてみせた。

他のどのような馬でさえその走りに追いつくことは叶わなかったという掛け値なしの駿馬ではあるが、かの馬を勇者の愛馬とした一番の要因はその優れた精神性である。

一歩先に何があるかも分からない未開の地も、魂を凍えさせるような悪天候の下も、怖ろしい魔物へと立ち向かう時も、怒号と剣戟の飛び交う戦場の只中でさえも。本来臆病な馬ならば竦んで動けなくなる筈の如何なる状況をも、かの馬は背の上の主と共に、『勇氣』をもって駆け抜けたのだ。

今の世にて度々巻き起こる、『史上最も偉大な名馬とは』という論争にて、真っ先にその名が挙がる内の一頭である。

時を跨ってその名が現れる理由については、勇者の馬にはその名をつけるものという慣習があったのだという説や単なる偶然という説の他に、神剣と共に愛馬の魂もまた、時を経て勇者と共に在ったのだという、感傷的ながらも賛同者の多い説も存在している。

シークリーストーン
古代の叡智

リンク・A + 種別：対人宝具

『ゼルダの伝説』に記されていた当時、遙か太古に確かに築かれていた大いなる文明の一端が形となったもの。

見た目こそ只の小さな石板（硬度や加工技術からして間違いなくオーパーツの括り）ではあるが、しかし勇者がその面に意図をもって触れることで真の姿と力が現れる。

この石板に込められた力は幾つかあるが、最も分かりやすく表すならば、『あらゆる情報を保存し、纏め、取り出すことが出来る力』である。

単純でありながら強大な魔術の術式を保存し、必要時に即座に発動させる。

魔法薬の素材や入手した武具、更には自作した道具を一旦『情報』として収納し、任意で取り出す（内部でその情報を『数値』に変換すれば、既に登録済みの別の情報から異なる素材・道具を精製することも可能）。

他にも画像の撮影・保存や詳細な周辺地図の作成など、その価値を理解できる者からすれば感心を通り越して恐怖すら覚えかねない程の機能を備えている。

「どうだい、調子のほどは。」

僭越ながら、この天才の全叡智を結集して頑張らせてもらったんだけどねえ」
いつもの完璧な微笑みを浮かべながら、いつもの自信満々な謙遜を口にする万能の天才。

その口元がほんの僅か強張っていることに、その声が柄でもない緊張にほんの僅か抑揚を失っていることに、その笑みと声を向けられた当の本人は気付いてしまい。
オペレータールームの一角に新たに備え付けられた機材の前で、居合わせた全スタッフの注目を一身に浴びながら、刺すようなそれを一切気にすることなく、自身の宝具を組み込んだそれを操作することのみにみ集中する勇者様は。

一般の魔術師が知れば、目を剥いてひっくり返って泡を噴きかねないような超貴重な魔術素材を惜しみなく使用し、高レベルで科学技術と融合させた装置は、マスターとサーヴァント達のレイシフトと戦闘を常に見守っている画面と各種コンピュータに繋がっている。

ダ・ヴィンチに教えられた手順を正當に踏んだリンクは、自身の宝具にのみ記録されていた筈の情報が目の前の大画面に無事に表示されたことにホッと肩の力を抜き、続いて周囲から上がった歓声と感嘆の声に思わず苦笑いを零した。

「問題ないみたいだ、流石はダ・ヴィンチちゃん」

「当然だとも……と、胸を張って言いたいところだけどねえ。」

この天才も、今回ばかりは流石に肝が冷えた。

リンク A + 相当の宝具をポンと託されて、更にはあんな凄い素材まで山と貰っちゃったからねえ……『絶対に失敗できない』と追いつめられる凡人の気持ちと苦労が、分かったような気がするよ」

「欲しかったらまた取ってくるけど?」

「そういうところだよ君、並の英雄なら命や生涯を懸けてるようなことをあっさり言わないで欲しいなあ!」

気が抜けて思わず本音を零してしまった上に、慣れないツツコミまで入れてしまったダ・ヴィンチに、リンクは無邪気な少年そのものといった笑い声で返す。

美女と美少年の気の置けないやり取りは、何とも目の保養となるであろう光景

だったのだが：生憎と、居合わせた者達にそれを純粹に堪能できる余裕は無かった。常日頃から特異点の様子を見守っている大画面に、今現在所狭しと表示されているのは、各特異点に置ける今までの戦闘や冒険において、リンクが小まめに残してきたありとあらゆる記録の数々である。

竜やゴーストといったエネミーは、生々しい鱗や牙の数から、薄っすらと透けて記録映像だというのに怖気が走りそうな体軀までが詳細に見て取れる。

現地の人々の装いや日々の暮らしの場景は、その存在を認めることが出来さえすれば、歴史研究家達が興奮のあまり狂気に陥りそうな貴重な資料の数々だった。

『外』においては一枚だけで世界がひっくり返る騒ぎになりそうな資料の山が、ダ・ヴィンチが心血を注いで作り上げた装置を通じて、オペレータールームの各機材に共有されている。

レイシフトに赴いたマスターやサーヴァント達に、これからはカルデア内の設備に頼った存在証明に限らず、現地から得た詳細なデータを基により実用的な分析や情報提供が出来るようになったのだ。

これでより一層、危険な戦いに赴く若者達をサポートしてあげられる。

まるで我が身の安全が保障されたかのように喜ぶオペレータールームのスタッフ達を、微笑まし気な眼差しで見るリンクに、それまでのやり取りを珍しく無言で見守っていたロマニは思わず声をかけていた。

「……ちょっと聞いていいかい、リンク君」

「なに、ドクター？」

「此度の君の申し出は、僕達にとって本当にありがたいものだった。

君の宝具の詳細を知って、あまりの凄さに面食らって……本当は、僕達の方から申し出ようと思ったんだよ。

君の宝具……『シーカーストーン』に収められた情報をカルデアに提供してもらえらるならば、僕達のサポートをより確実なものとする。

だから僕は……カルデアの、所長代理として……」

宝具の、サーヴァントによつては生涯そのものとも言えるものの提供を求めようとした。

仮令それが勇者を怒らせることになろうとも、人理のため、カルデアのため、年若いマスターとサーヴァントの少女のため、自らがそれを背負おうと覚悟を決めて。

そんなロマニの予想と覚悟は無駄に終わった。

当の本人が、自分から、宝具に収められた情報を提供するために、ダ・ヴィンチに専用の装置の開発を依頼したことによって。

そのようなことは、普通ならあり得ない筈なのだ。

サーヴァントが、自ら宝具を他人に、魔術師達の手は何の見返りもなく委ねるだなんて。

自分達を信用してくれたのだと思うのは容易い。

しかし、『何をもって』という疑問と不安がどうしても付きまとう。

カルデアの所長代理としてだけでなく、ロマニ・アーキマンという個人として、どうしても確認せざるを得なかった。

「リンク君……君はどうして、そこまでしてくれるんだい？」

どうして、そこまですることが出来るんだい？

本当に訊ねたかった一言は、ロマニの口の中で噛み砕かれて消えた。

ロマニの真剣な問いと表情に、リンクは思わずといった様子でキョトンと目を瞬かせ……次の瞬間、その身に纏う空気と表情をふっと変化させた。

「ねえドクター、ひとつ質問……俺が今も変わらず負っている肩書きは何でしょう、わかる？」

勇者リンク：それとも、サーヴァント・ブレイヴ。

脳裏に過ぎった当たり前すぎる答えを却下したロマニは、少し考えた末に答えへと辿り着いた。

「……ハイラル王家、戦術顧問」

「正解、おめでとー。

……とっくの昔に跡形もなくなった国の肩書きなんて、負うだけ無意味なのかもしれないけれど。

一人でも多くの兵士が、家族の元に帰るために……一人でも多くの民が、何の不安も無い日々を過ごせるために……俺は役立つことが出来る、俺に出来ることが確かにある。

そう教えてくれた、導いて、気付かせてくれたあの瞬間と、ゼルダを同志として共に頑張った日々は、今も変わらず俺の誇りなんだ。

俺は必ず、この無謀な戦線を最後まで導いてみせる……一人の脱落者も出さず、共

に頑張ってきた全員と一緒に、光輪の無い本当の青空を見てみせる。

その為に、出来ることがあるなら何だってやるさ。

……只でさえ、既に一人取りこぼしてしまっているんだ。

これ以上は、絶対に許さない」

悔しそうに拳を握り、歯を噛みしめたリンクの表情に、ロマニは彼が口にした『取りこぼし』という言葉に違和感を覚えた。

戦況こそ常にギリギリなれど、彼がそこまで言う程の犠牲が出たことは……そこまで考えたところで、彼の思考は静かに凍りつく。

「リンク君……君、オルガマリー所長の事を。」

でもあの時、君はまだカルデアには……」

「わかってる、どうしようもなかった。

それを俺のせいだとか、俺がその場に居ればとか、勝手なことを言って勝手に背負うつもりは無い。

間に合わなかったことなんて、俺の……オレの、僕の時にだってあったんだから。だけど忘れないことは出来る、その人が残してしまうしかなかったものを引き継

ぐことは出来る。そうだろうか？」

知らず力が込められていたリンクの瞳に、声に、不意に幾つもの『彼』以外の誰かが現れる。

末代の『彼』に統合された、代々の勇者の想いがそこにあった。

人理の、カルデアのために力を尽くすことは全ての『リンク』の総意なのだと、そう言われたようにロマニは思った。

（ハイリア王家…史上、最年少の戦術顧問。

彼は13歳の若さでそれに就任し、15歳で勇者の運命へと向き合った。

……今、僕の目の前にいる彼こそが、本当に、彼の全盛期の姿なんだ）

その事実を改めて思い知ったロマニは、自身の両目に熱いものがこみ上げるのを感じた。

仮令老いて衰えた最期を迎えていようとも、召喚された際にはその者の全盛期の肉体でもって顕現する。

サーヴァントとはそういうものだった。逸話上で大往生を迎えていながら若々しい身体と力を得ている者は実際に多い。

その差異の大抵は、見た目に釣り合わない老成という形で表れている。

しかしリンクは違う。彼は若い身体に成熟した精神を持ち合わせているという訳ではない。

彼は本当に、この歳、この姿の時に、たった今日の当たりにしたばかりの英雄性を身につけていたのだ。

魂に背負った勇者の運命と相對する為に。

もう数年もすれば成長期の身長は更に伸び、無理やり成長させた精神が相応の器に収まり、本当の全盛期を迎えていただろうに。

彼がその時を迎えることは無かった。そしてこれからも決して無い。

伝説の英雄に想いを馳せるだけではわからなかった残酷な現実、それを改めて目の当たりにし、それでもかと思ひ知ってしまったロマニ。

彼の両目はもはや堪え切れないほど熱くなり、ギリギリ落ちていないだけの滴を湛えていた。

大の大人が大量の涙を両目に溜め、今にも決壊しそうな様子でプルプルと震えている光景は、彼の問いかけに真面目に応えるべく勇者モードとなっていたリンクを

戻ってこさせるのに十分な威力を備えていた。

「え、ちょっ…何泣いてんのさドクター、俺何か変なこと言った!?」

「リンクううううううっ!!」

「どわっ!? 立香、何がっ…ってこら、抱き着くな縋るな!!」

「神さま仏さま勇者さま、どうかこの哀れで惨めで無力なマスターを助けてえええええっ!!」

「……マシユ、何があつたの?」

「あの…本日はオペレータールームのメンテナンスでレイシフトが出来ないのことで、キャスターさん達のご指導のもと、魔術の勉強をしていたのですが。

本日の授業内容が、その、マスターの苦手な霊薬の調合で……」

「……………成果は?」

「一応できました……可哀想なお薬が」

「それでも、一回くらいはちゃんと成功したいと思って頑張ったんだよ…」

「キャスターさん達が止めるのも聞かずに突っ走った結果、素材倉庫の中身が全て生ゴミと化すという惨劇です」

「先生達めっちゃ怒ってる…メディアさんなんか今にも刺しそうな顔してた……」

「リンクさん、私からもお願いします。」

どうか素材をお譲りください。手持ちのQPが心もとないので、申し訳ありませんがツケでお願いします」

「どんな理由だ……それならそれで、普通に頼めばいいのに」

「それじゃあー!」

「ツケもいいけど、その代わり代金は三割増しな」

「……………二割」

「ルールブレイカーで刺される?」

「三割でお願いします」

「ドクター、ダ・ヴィンチちゃん、そういう訳だからシーカーストーン回収してください。」

記録が追加されたら、その度にまた……って、え、なに、皆どうしたの!!」

「しっかりして下さい、ドクター!! 痛いんですか、苦しいんですか!?!」

「ダ・ヴィンチちゃん、ドクターとオペレーターの皆何で泣いてんの、メンテナン

ス失敗した!？」

「いやいや大丈夫、メンテナンスなら無事成功しているよ。

……そうだねえ、現状を一言で説明するのなら。

『少年少女の戯れマジ尊い』ってところかな……っておいしい、酷いな、引くことはないだろう」

「変な冗談を言う方が悪い」

「あははっ、ごめんねえ」。

………あながち冗談でも無いんだよねえ、これが。

立香君……君が伝説の勇者をただの少年と見て、何の気負いもなく友達になれる子で本当に良かった。

リンク君……紛れもなく勇者である君を確かにそうだと認識しながら、一人の少年としての君も同じく受け入れられる、カルデアがそんな場所で本当に良かった。

いつか終わりを迎えるその時まで、存分に笑いながら過ごすといい」

人類最後の希望を背負ったマスター、世界を知らないデミ・サーヴァント、そしてひとつの伝説を全てその身に負った勇者。

とんでもない肩書きと使命を負った少年・少女達が、同じ年頃の何の変哲もない子供達のように、賑やかで楽し気なやり取りを交わしながらオペレータールームを後にする。

その背中を見送りながらそっと呟かれたダ・ヴィンチの言葉に、込み上げる熱を堪えられた者はいなかった。

リンク君のサーヴァントとしての成り立ちは、末代の成り代わりリンクを精神的な主体とした『勇者リンク』という存在の統合形、イメージとしてはハイサーヴァントに似たものと考えています。

「私は時のオカリナ章の〜」「俺は息吹の〜」という個人的な好みの違いはあれど、『勇者リンク』という存在に対する認識は『ゼルダの伝説』に登場する代々のリンク全てだと思うんですね（実際魂は同一のものみたいです）。

それがサーヴァントとなった際に実際に統合され、精神や意識は成り代わりリンクのものだけれど、各時代のリンクの能力を違和感なく使えたり、何となく覚えて、何となく懐かしい程度の記憶の共有があったりします。

成り代わりリンクには、実はもともとそういう存在だったのではないかという考察がありました。

あの本を書けたり、魔物に対する知識を幼い頃から得ていたのは、長い長い戦いを経てきた魂の記憶を末代の勇者は全て、臆げながらも覚えていたからではないかと。

だからこそ、今度こそ本当に終わらせようという決意を抱くに至ったのではないかと。

「人に見せるもんじゃないです、完全自分用で！」「忘れないためのもので！」と、不本意ながら著書の現在の持ち主であるギルガメッシュへと必死に返還を訴えるリンク君を、少し離れた所から「やっぱりそうだったんだ…」という眼差しで見る人達。

またしても、ズレが生まれていることに気付かないリンク君でした。

トライフォースの使用に関しては、実際はサーヴァントどころか、職員でも気づけてしまうレベルの力の行使故にバレバレです。

彼がその力を使う理由、向ける相手があまりにも細やかで優しいものなので（やつと仮眠が取れたロマニの眠りを深く穏やかなものにしてあげるとか）、一同空気を読んで温かく見守っているのが現状。

勇者としての気高い精神性と言うよりは、強大な力の扱いにビビる庶民感情から来ている行動なのですが。

その旨を指摘され、正当な保有者であることと個人で利用できる権利にお墨付きを貰えたとしても、それで彼の心や行いが変わることはありません。

あと、書いてて思いました。

三角（の要素）から構成…手の甲の紋章…膨大な力の塊。

……令呪の元ネタって、トライフォースなのでは？

シーカーストーンのポイント制は、ゲームでアイテムを売買するのをイメージし

ました。

現代のもので構わないので何か適当な素材を入れることで、数値（ルピー）に変換、及びゼル伝系統の素材やアイテムの調達ができます。

設定を作った際に、それ関係の小ネタも合わせて書くことが多く、バラバラに投稿したら分かり辛いので敢えて一緒に載せました。

設定と文章がごっちゃになっていて分かり辛いかもしれませんが、そういうものだと思っ止めて頂けると嬉しいです。

マテリアル クラス『勇者』 真名『リンク』 続

プレイヤーとして本格的に参戦したのが「ブレスオブザワイルド」からなので、一応他のタイトルに関しても調べてはいますが、描写や出てくる要素が明らかにそちらに偏っています。

時系列としてはその次の世代という設定なので、そういうものだとご了承ください。

保有スキルその1

武芸の極致 C

その手に取れるものならば、ありとあらゆるものを己が武器として使いこなして

みせたという伝説の再現。

瘦身に見合わぬ剛力と逸脱した技量を前に、あらゆる武器は力不足の代物と化してしまい、彼にとって女神の神剣以外の武器はその尽くが使い捨ての消耗品も同然であった。

達人であったが故に陥ってしまった難点を、勇者は達人としての技量でもって克服した。

愛用の神剣が分類される片手剣に限らず、両手持ちの大剣から間合いの広さと形状によって扱い方が一変する槍、棍、更には大斧や槌といった重量系の武器に至るまでを見事に使いこなした。

武器の耐久力が持たない長時間の戦闘においても、敵対相手の武器を奪ったり、そこいらの本来ならば武器ではない何かを用いることで戦い抜いてみせたという。敵の策に陥れられた窮地や無防備なところへの奇襲といった、あらゆる危機を乗り越えた逸話は、『常在戦場』の心得と対応の具体例として世界中の様々な戦士や流派に伝えられている。

しかし『言うは易く行は難し』の言葉通り、この達人技と称することも躊躇わ

れる程の技量はそう簡単に身につけられるものではない。

間合い、重量、威力、武器としての性質や特徴を、例え初見のものでさえも手に取ったその瞬間に判断する理解力や応用力、更にはそれを実行に移す度胸や技量、全てが最上級のレベルで求められるのだ…それも、戦闘中という極限状態の中で。長い歴史の中でその技の使い手として具体的に名を残しているのが、円卓の騎士の一人であるランスロットのみであるという事実だけでも、勇者の凄まじさが窺えるというものである。

スキルとしてのランクが思いがけず低いのは、サーヴァントとしてのこのスキルが、『敵サーヴァントや神秘によって守られた相手に攻撃が効くようにするためのもの』だからである。

拾った枝が真剣と鑢迫り合いが出来るようにはならない、10の威力があくまで10として相手に通るようになるのみ。

もし仮に、現実には、ただの枝が剣と渡り合うような事態が起こったとしたら…それを為し得るのはサーヴァントとしての能力やスキルではなく、勇者自身の達人技のみである。

in 第二特異点

「……………いや、まあ、確かに危ないところだったよ。助けてもらったのは本当に感謝してる、けどねえ」

「あのさあ、リンク……………いくら敵で、皇帝陛下の命を狙った刺客だったとしても、これはちょっと…流石に、あまりにも……………」

「ネロ皇帝陛下、お願いします……………陛下のお命を狙った刺客であることは十分承知しています、ですが」

「わかっておる、皆まで言うなマッシュよ。」

もはやこいつは死んだも同然、二度と刺客として立ち上がることは出来まい。

……………これ以上鞭打つような真似はいくら皇帝たる余でも出来ぬ、あまりにも哀れすぎるではないか」

「……………ああ、そうだ、その通りだな。」

始皇帝の命を狙った、刺客として命と全霊を賭けたあの時、もし私の身に同じことが起こっていたら……刺客としての矜持が根元から折れるどころか引き抜かれて粉と化する。

例え座に招かれたとて、それが歴史に残ってしまった事実に絶望して自ら永遠の虚無へと堕ちることであろうよ」

「いやいやいやいや敵だし、刺客だし、皇帝陛下ガチでヤバかったし!!

これ使ったのもその時丁度手に持ってたからってだけで、別に深い意味なんて無いし、威力が無いから制圧するには手数で攻めるしか無くて……そもそも、わざわざ飯時に襲ってくる方が悪いじゃん!!

え、マジでちよっと待って、これ俺が悪いの!？」

* * * * *

保有スキルその2

普遍の美貌 EX

『ゼルダの伝説』で描写されていた美貌の勇者の有り様が、長い時間の中で認識を通り越してもはや概念と化したもの。

伝説に曰く…靡く髪は天上から注ぐ光、輝く瞳は最上級の碧玉、透き通る肌は雪原の如く。

互いに美を競い合うのが常のような年頃の女性達ですら、勇者を相手には素直に負けを認め、むしろその美しさへの憧れを顕わにしたという。

他にも、姫の遊び相手になれば相応しいと侮ってきた者を自ら振じ伏せることで黙らせた、地位ある男性からの求婚に困っていたゼルダ姫を守るために影武者を務めた、などの逸話からも、勇者の美しさを周りの者達もそうと認識していたことを窺わせる。

勇者の容姿と、それに関係する逸話について描写されていたのがゼルダ姫が記した最終章のみという点も、末代の勇者が自身の前世とも言える存在の外見を事細かに記す必要性を感じていなかったからと推測できる。

勇者と強い信頼関係を築いていたゼルダ姫が残した描写と逸話だからこそ、勇者

の真実に最も近い情報のひとつであると言えるだろう。

末代の勇者自身もまた、歴代の中には、男子禁制の街に女性を装って潜入を果たした者が居たことや、代々の勇者の容姿は多少の差異はあるものの特徴として酷似していることを自身の著作内で明記しており、それもまた後の世の認識を補強した要因となっている。

「ちょっ…何それ、俺知らない!! ゼルダあつ、何つーもんを後世に残してんの!!

……まあ確かに、見た目で馬鹿にしてきた奴は、戦術顧問が舐められる訳にはいかないとぶっ飛ばしたし。

影武者は………ああ、うん、そういやあった、そんなこと。

思い出しちゃったよ、せつかく忘れてたのに………ああいや、女装そのものはあまり気にしてない。

ゼルダに迫ってた奴がさ…俺が影武者って知ったら、矛先こっちに向けてきて………うん、ちゃんと言った、男だって。構わないって言われた、阿呆かこつ

ちが構うわ。

姫の、と言うより女のプライドずたずたにされたゼルダがビンタ一発で見事にバカ貴族張り倒して……影武者そのものよりも、その後でゼルダの機嫌を取る方がよっぽど大変だった」

「……い、意外とアグレッシブな人だったんだね、ゼルダ姫って」

「どんな『ゼルダ』もそんな感じだったよ。」

ジツとして守られてるだけなんて我慢できない、誇り高い行動派。

……女性陣からの憧れ？ さあ、そっちはちよつと覚えが無い（↑仕事熱心のあまり気付いてなかっただけ）」

成長期も半ばと思われる華奢な少年が、女神の加護が宿った輝かしい武具を携え、屈強な兵士ですら慄く怪物を相手にも怯むことなく立ち向かい、幾度となく世界を救う偉業を為す。

そんな最古の英雄譚に遥か昔から魅せられてきた人々は、殆ど必然とも言える流れで『女性とも見紛う美貌の少年』という存在に神秘性と英雄性を見出すように

なった。

それを証明できる事実として、名のある英雄が、時に女性を装って窮地を切り抜ける逸話は古今東西に存在している。

「あつ、それボクにも覚えがある！」

大勢が集まる儀礼の席とかではやたらと飾り立てられてさー、ボクより強い奴は沢山いたのにそっちのけで前に出されてさー、もう騎士なんだかパンダなんだかわからなかったよ！

でもまー、みんな喜んでくれたし、たくさん褒めてくれたからボクとしては特に問題は無かったけどね。

デオンはどう…って聞くまでもないか、大人気だったでしょ」

「はい…お仕えした王家や貴族の方達にも、『ゼルダの伝説』は非常に好まれておりましたから。

よく請われて、ゼルダ姫と自身を重ねる姫様方のために、僭越ながら、勇者様を演じさせていたことがございます……」

「……どーしたのさデオン、お腹でも痛い？」

「い、いえ…今になって思うと、本当に恥ずかしくて顔から火が噴きそうなのです
が。」

あの、当時、あくまで当時ですよ……私はこれでも、自分ほど『勇者リンク』を
その身でもって表せられる者はいないと、それなりに自信があったのです。普段こ
なしている役目もありますから。

でも…こうしてサーヴァントになって、当のご本人と相對することになってみる
と……ああもう、あの頃の私のバカ!!

あんなにも格好つけて、調子に乗ってみっともない、本物の輝きを知らぬまま自
信満々に胸を張ることの何と愚かしいことか!!」

「あっはははは、何だデオン、そんなこと気にしてたの！」

………わかるなー、ボクも初めてリンクに会った時、『えー、ボクってばあん
なノリノリでこの人になったつもりでいたの?』って死にたくなったもん」

「待つて待つて! この内容といいアストルフオ達の反応といい、さっきから
何かおかしい!!」

「何もおかしくは無いと思いますが…だってリンクさん、本当にお綺麗な方ですもの」

「マッシュまで!!」

「この天才が辿り着いたものとは、また違う方面における美の極致であると認めるに吝かではないよ」

「ダ・ヴィンチちゃん!？」

その認識は今や人理に深く浸透し、例えば表現の世界においては、勇者を演じる役者は決して少女で妥協したりはせず、相応しい少年が果たさなければならぬという暗黙の了解が存在している。

『ゼルダの伝説』を公演するにおいての最大の難関は、いつの時代もこの勇者役探しであり、遜色ない者を見つけられればその時点で成功は決まったも同然とされ、何人もの歴史に残る名優が世に現れるきっかけとなった。

演劇関係者の中には、自らが思い描く勇者を演じるに値する理想の少年探しに心血を燃やしすぎて、後の世で「そういう趣味の持ち主だったのでは」と考察されて

いる者もいる。

「違います!! 断じて!! 純粹に役者を探していただけですので!!

と言うかこれですか、色々な方々がアンデルセン殿を妙に心配していた理由は!!
…ご本人に、実際にお会いしてみて?

それはもう、吾輩心底感服、そして感動いたしました!!

これぞあの時吾輩が、今もなお多くの演劇関係者が追求し続ける伝説の具象!!

あの時吾輩がやっとの思いで見出した彼に不満などありません。今でも変わらず、吾輩の思い描く伝説の世界観を見事に表現してくれたと感謝しておりますとも。至らなかつたのは他でもない、吾輩自身の想像力と表現力の方…自信に満ちた生涯を終え、サーヴァントとして第二の生を謳歌する今となって、その現実を突きつけられてしまうとは。

しかし、ここで打ちのめされたまま終わる吾輩では当然ありません!!

新たな『ゼルダの伝説』の脚本は絶賛執筆中、今度こそ心から満足のゆくものを書き上げてみせますとも!!

公演が叶った際には、リンク殿には是非とも特等席で……他人が自分を演じているところをあまり見たくない？ 恥ずかしいですと？

はっはっは、勇者殿は何とも奥ゆかしい方ですな」

『ゼルダの伝説』を知る誰に訊ねたとしても、同じ答えが、「勇者リンクは類稀なる美しい少年だ」という共通の認識が返ってくることだろう。

何故なら、既にそれは、人類が持つ共通意識の中に深く刻み込まれてしまった普遍的な概念と化しているからだ。

どんな時代の、どんな国の、どんな文化の、どんな価値観を持つ人であろうと、勇者リンクを前にした者は、その者の個人的な嗜好にすら左右されることなく、心の底からこう思うことであろう。

「何と美しい者なのだ」と。

「これか、これが原因か!!」

「ここまで読んできて思ったけど…何かこれ、『無辜の怪物』の別パターンっぽい

な。

……ああ、でも違うか。

『無辜の怪物』は勝手な噂や思い込みが広まりすぎて、本人に影響が出たって奴だし。

リンクの見た目が半端なく綺麗だったのは、紛れもない事実だからな」

「立香、お前まで……」

「諦めた方がいいよ、リンク君。

古代メソポタミアから数千年に渡り、『ゼルダの伝説』は愛されてきた。

それだけの時間をかけて、君への憧れを人々は積み重ねてきたんだ。

動かすことはまず不可能だよ」

「うう……わかったわかった、目の前の現実を否定するほど馬鹿じゃない！

俺は美形、覚えた！

……認めたけど、やっぱり恥ずかしいな」

（センパイ、ドクター、やりました！ リンクさんが自覚して下さいました、作戦成功です！）

（当人の知らないところで俺達がどれだけ、それが原因で起こった事態に振り回されたか…これで落ち着いてくれるといいんだけど）

（ナルシストも大概だけど、無自覚ってのもそれはそれで面倒臭いんだね）

「さてと、そうと分かれれば早速」

「リンクさん、どこへ行かれるのですか？」

「マタ・ハリさんのところ、色仕掛け教えてもらうならゴルゴン姉妹よりもあの入道」

「……………は？」

「不本意なものとはいえ、スキルはスキルなんだ。

ちゃんと詳細を確認、把握して使いこなせるようにしておかないと。

……冷静に考えれば、諜報や潜入仕事を補助するのに打ってつけのスキルだ。

マタ・ハリさんも自分と同じ仕事が出来る奴が少ないってこぼしてたことがあるし、少しは手伝えるようになるかもなし、

「ちよつ、待……ストップストップ、駄目だよリンク君、本格的にそっちに行かないで世界のために!!」

「デオン、アストルフォ、マスターとして命ずるそいつを止めて!!」

「いやーっはっはっは、リンク君の必要もしくは最善と判断した場合の躊躇わなさっぷりを甘く見てたねえ」

「笑い事ではないですダ・ヴィンチちゃん、止めるのを手伝ってください!!」

「何を言うのですマッシュ殿、止めるなんてそんなもったいない。

やはり見込んだ通り、マスター殿と勇者殿の周りにはイベントが絶えませんなあ」

* * * * *

保有スキルその3

戦術顧問（対魔） A++

長い時間を越えて、幾度もの世代を経て、転生と運命への対峙を繰り返す勇者の魂に蓄積された戦いの記憶と経験が、末代になって結実したもの。

人々を脅かす魔物の弱点、対処法を見出し、『強大な怪物』を『危険だけれど対

処は可能な厄介者』程度のものへと変えてしまう。

このスキルの真価は、見出した対処法を自身ほどの力や技術が無くとも実践可能なものにまで洗練もしくは単純化させ、他の者に広めることが出来るという点にある。

どんなに恐ろしくとも、どんなに強大な敵相手でも、背後にある大切なものを守るために、決して投げ出せない戦いならば。

皆で勝とう、皆で生きて、皆で帰ろう…その為の道を開く、『勇氣』をもってついて来い。

頼もしいその背に導かれて多くの者が立ち上がる、それは目映い姿に憧れるあまり己の分を見失った蛮勇などでは決して無い。

己に出来ることを己の戦場で為せばいい、勇者の導きにはそんな教えも含まれているのだから。

メソポタミア文明の、今後続く筈の『人』という種の命運がかかっている第七特異点、『絶対魔獣戦線バビロニア』。

日々襲い来る魔獣の群れから人の生存権を守るための北壁はその最前線であり、鍛え抜かれ、かつ覚悟を決めた兵士達による必死の攻防が、日々繰り広げられている。

街にいる友や家族のため、自分達が生まれ育った国のため、今も玉座で誰よりも必死に戦い続けている王のため：確かな覚悟を決めた兵達ではあったが、犠牲の無くならない日々は彼らの戦意に決して少なくはない影響を与えていた。

……のは、ほんの数日前までのこと。

実態、数にすればほんの僅かな変化がもたらされたことで、北壁における戦況、繰り広げられる光景は一変していた。

巨大な体躯を怒らせ、長い毒の尾を振りかざしながら咆哮を上げるのは、ウルクを脅かす魔獣の一種、毒の竜ムシュフシュ。

挑発されてあからさまに苛立っているそれと真っ向から相對しているのは、一人の：たった一人のウルク兵のみだった。

移動を全く考慮していない、分厚く巨大な盾にその身の殆どを隠しながら、端から辛うじて突き出した片手と長柄の槍でムシュフシュに執拗なちよっかいを出している。

痛手を負うような攻撃では無いものの、あまりにもしつこく鬱陶しい。

牙や爪での攻撃を試みるものの、兵が持つ槍の間合いはムシュフシュのそれよりも遥かに長く届かない。

真っ直ぐに長く向けられた槍を真正面から攻略するのは流石に難しく、ならばと横や後ろに回り込もうと試みても、巨大な盾は円錐状の下部を地面に突き立てる形で固定される形状となっており、手早い移動こそ不可能なものの、その場で回転して敵の移動に対処することは容易であった。

弱く脆い筈の獲物、それもたった一人を狩ることすらままならない現状に、ただでさえそれほど堅いものではなかったムシュフシュの忍耐が限界に達する。

槍の間合いを越え、盾の護りをも突破できる威力を期待できる最大の武器、人々

にサソリを連想させる巨大な毒の尾を高く構える。

怒りと苛立ちを込めた渾身の一撃が放たれたその瞬間、兵士は片足を後ろに下げ、盾を支える腕から地面を踏みしめる足までの一直線となった体幹を全力でもって固定させた。

毒針が盾に深々と突き刺さり、凄まじい衝撃が盾の向こうの兵士を襲う：しかし、そこまでだった。

この瞬間のこの一撃を耐えるという、自身に与えられた役割を見事果たしきった兵士の働きに仲間が続く。

ピンと伸ばされ無防備となった上に、盾に突き刺さったことでほんの一瞬でもその動きが固定され、更にはムシュフシュ自身の意識が完全に誘導されていて隙だらけ極まりないその尾へと、雄叫びと共に刃が降り上げられた。

ムシュフシュの尾は恐ろしい兵器ではあるが、機敏に動かす必要があるために他の部位に比べて防御は格段に弱く、更には大事な毒腺や神経が集中している急所でもある。

そんな場所に、最大限のお膳立てを整えられた上で、後先考えない全力の一撃を

振り下ろせばどうなるか。

耳障りな絶叫と共に、断ち切られた勢いのままに飛んだ毒の尾が地に落ちる。

体の最も敏感な部分のひとつが切り飛ばされた、その激痛と衝撃に一瞬白んだムシュフシュの意識は、その後戻ってくることはなかった。

意識が飛んで抗いようもなかったムシュフシュの目を、喉を、心臓を、この瞬間のために待機していた他の兵士達の槍が一斉に貫いたからだ。

ほんの少し前までは、一頭を倒すために更なる人数を費やし、犠牲を免れたとしても体力と気力を盛大に使い果たしていたというのに。

止まったばかりの神経の名残に少しだけ痙攣しているムシュフシュの死骸の前に、体力は未だ十分、気力は尽きるどころかより一層漲っている。

「よし、この調子だ！ 次行くぞ、気を抜くなよ！」

「気を抜かないのは当然、気合いを入れるのも結構ですが!!

あまり張り切りすぎては気が逸ります、それは大きな失敗の元ですよ!!

三頭倒した時点で撤退、交代のち休憩、次の順番まで待機、この決まりをどうか忘れずに!!」

「心得ております、レオニダス王!!」

遙か頭上、聳え立つ壁の先から降ってきた声に返すと共に気合いを新たにし、兵士達は戦線へと戻っていく。

北壁の縁に立つレオニダスは、感慨深げな感嘆の溜息と共に眼下の戦線を見守っていた。

「犠牲者の割合、手順の効率、討伐までに要する時間……戦闘行為に必要となるあらゆる『数』、そのどれもが以前とは比べようもない。

極限状態の中でいかに戦うか、いかに鼓舞するかは心得ているのですが。

……逸り過ぎないように、気を張るのを怠らないようにと戒めるのは初めてです。まさか、サーヴァントとなった今になって、戦場で学ぶようなことがあるうとは」少しの困惑と、それを覆い隠してしまう程の喜びと感動に満ちた呟きを零すレオニダス。

彼のサーヴァントとして、戦場に立つ王としての優れた感覚が周囲の空気が微妙な変化を迎えたのを感じた。

それは背筋が粟立ち冷えるような不快なものではない、むしろ歓喜や高揚といっ

た高ぶりの類い。

北壁に常駐する兵士達、中でも運よく『彼』の訪れに居合わせた者達の感動と驚愕の気配が少しずつ近く、大きなものへとなっていく。

変化の主に察しをつけたレオニダスは兜の下でふっと微笑み、振り返った先に、予想通りの人の姿を捉えた。

「これはこれは、リンク殿、よくぞ再びこの北壁へと参られました!!」

「お邪魔していますレオニダス王、戦線の様子はいかがですか？」

「どうぞ、その目でもってご覧になって下され」

そう言って数歩移動し、壁向こうの戦況を見守る為の特等席を譲ったレオニダスの厚意に甘んじ、リンクは眼下一面の戦場を見下ろす。

数日前にリンクが目の当たりにした、思わず眉を顰めてしまった悲惨なそれから一変した、活力と希望に溢れた光景がそこにあった。

明確な役割分担は、こなすべき一点に集中することによる戦闘効率の上昇、「それさえ出来れば」という安心感と心の余裕を生み、共に戦う仲間達との信頼関係をより強固なものとした。

更にその役割分担自体も、レオニダス自らが指揮を取った選抜試験によってその者に最も適切と判断されたものを個々に宛がわれており、それも兵士達の自尊心を高め戦況を維持するのに一役買っている。

自身が考案し、推奨した戦術の確かな成果を確認したリンクは、ホッと息をついて僅かに強張っていた口元を綻ばせた。

「良かった、どうやらお役に立てたみたいで」

「お役立ちどころの話ではありませぬ。

僭越ながら、戦いとは計算であることを理解し、頭脳派を自負しておりましたが、やはり専門の方には敵いませぬなあ」

「戦術をすぐに実行に移せたのはレオニダス王の常日頃の特訓があつてこそ、そして何より彼ら自身の国を守りたいという懸命さが成し得たことです。

自分の働きを卑下するつもりはありませんが、全てが自分のおかげと思ひ上がるつもりはありませんよ」

「謙虚ですなあ、それもまた好ましいものです。

……それはそうと、ギルガメッシュ王は未だ、カルデアの皆様を認めてはおられ

ぬのですか?」

多くの特異点、多くの困難を乗り越えてきた彼らならばきっと、ウルクを救う重要な役目を果たしてくれるだろうに。

何がギルガメッシュを頑なにさせているのか、思わず首を傾げて考えるレオニダスに、リンクはこちらも思わず笑みを零しながら自身の推測を口にした。

「多分ですけど…認める認めない以前に、ギルガメッシュ王はきっと、立香達に『ウルク』という国を見てもらいたい、ここで生きる人達を知ってほしいと思っています。」

『書類上の会ったこともない一万人』よりも、『笑顔と温もりを思い出せる一人』の方が、絶体絶命の危機や絶望の最中に力をくれるものなんですよ。

わかります、俺がずっとそうでしたから」

「……………成る程、それは確かに大切なことです。」

私も知っております…守るべきもの、失いたくないと思えるものを明確に思い描ける、それがどれだけの力をくれることか」

「一旦俺は立香達と合流します、戦況に変化が起きたら王宮を通じて呼んで下さい。」

ほんの少し耐えてくれさえすれば、すぐさま駆けつけます…約束しますから」
「心強いお約束をありがとうございます、その時は必ずや」

そんなやり取りを最後に、踵を返したリンクは足早に北壁を後にする。

その横顔を、後ろ姿を、数えきれないほどの感謝と尊敬の眼差しが見送った。

ここにいる誰もが目の当たりに、そして誰もが忘れられずにいる光景がある。
今からほんの数日前、戦況が大きな好転を見せる少しだけ前のこと。

北壁の向こう側に群がるムシュフシュの群れ、撃退せねばと急いで準備を整える
兵士達のほんの僅かな隙をつき、何者かがその只中に一人飛び降りた。

予想外どころではない事態に北壁はたちまち騒然と化した。絶体絶命の危機に迫
いやられた『誰か』が瘦身の少年であることが明らかになってからはより一層の焦
燥が彼らを追い立てる。

状況を確認せんと、話を聞きつけた多くの者が向こう側の様子を見渡せる壁の縁
に集まり、レオニダスも張り詰めさせた戦意と共に駆けつけた…そんな彼らの眼下
で、少年は、毒竜ムシュフシュの群れを相手に善戦を繰り広げていたのだ。

次から次へと繰り出される攻撃を盾を用いて最小限の動きでいなし、僅かな隙も見逃さず曇りなく輝く刀身の片手剣で果敢に攻める。

眼下に広がる光景に素直に驚愕し、目を奪われる兵士達をよそに、レオニダスは少年の戦いぶりに僅かな違和感を覚え…数秒の思考の後に、そう感じる理由へと辿り着いた。

ほら、今もまた…あの少年ならば攻めきれたであろうムシュフシュの隙を、彼は敢えて見逃した。

手加減した攻撃をわざとかわさせることもあれば、逆に避けられた筈の攻撃を敢えて盾や剣で受け止めたりといったことも見受けられる。

彼は一体何をしているのか、何を狙っているのか。

少年が本気で戦えば、今頃あのムシュフシュの群れは一掃されているであろうことをレオニダスは確信していた。

そんな攻防がしばし続き、戦闘開始時より半数ほどに減ったムシュフシュと、致命傷こそ無いものの細かい傷を全身に負って息を荒げる少年が、改めて戦闘態勢を取り向かい合う。

一頭のムシュフシュが毒の尾を突き出し、それを少年の盾が受けとめた、次の瞬間。

『そこだ、見切った!!』

渾身の一声と共に盾の角度をずらし、真正面から受け止めた筈のムシュフシュの尾を滑らせる。

真っ直ぐに、全力で狙った攻撃をずらされて体勢を崩したムシュフシュへと、少年は利き手の剣を振りかぶり、毒の尾を一刀両断、返す刃でその首をも切り飛ばした。

倒れ伏す死骸にはもはや目もくれず、少年は次の個体へと戦闘対象を即座に切り替える。

次の戦闘は、直前のものよりも遥かに呆気なく終わった。

尾の一撃を誘い、盾でいなし、無防備になった尾を切り捨て、その際に出来た隙を利用して本体に止めを刺す。

敢えて長引かせた戦いの最中に幾度となく考慮し、確かめ、ついに確立させた必勝パターンの確認作業でしかなかったからだ。

そのまま一氣に残ったムシュフシュを一掃した少年は、竜の亡骸の山の中に傷だらけの体で立ち、体力と精神の多大な消耗に大きく息を荒げながらも、今までの戦闘で得たものを考察、整理することをやめられずにいた。

『あの尾の一撃を流すにはちよつとやそつとの盾と技術じゃ無理だ、いつそマシュのような巨大な盾で受け止める専門の人員を…その役目を負った人が注意を引きつければ、他の人が攻撃に全神経を集中できる。

そうすればあの尾を切ることは十分可能だ。他の部分に比べて強度は格段に低かった。

そうして怯んだ隙に、生命維持に関わる部分を攻撃すれば…比べ物にならないくらい丈夫ではあったけど、体の仕組み自体は普通の動物と変わらなかった。

脳…喉…そして心臓……狙いどころはこんなところ、あとはどう、一瞬で的確に潰すか………』

思わずといった様子で零れ出ていた声が途切れ途切れになり、もはや限界といった様子で少年がその場に膝をついた。

そんな頃になってようやく、全てを見守っていた一同はまともな思考力と判断力

を取り戻した。

レオニダスに指示されるまでもなく、今にも意識が飛びそうな少年を北壁内の医療施設へと運び込み、多くの者が必死に祈りを捧げる中で懸命な治療が施された。大勢の心配をよそに、少年はしばらくの間泥のような眠りについたかと思えば、あっさりと起き上がってみせた。

そして、北壁の者達に告げたのだ。自分はギルガメッシュ王の命を受けた戦術家であり、最前線の戦況に一石を投じる為にやって来た。

他ならぬ王が愛読し、国中に普及させた物語の勇者と同じ名を持つという少年のその後の働きは、かの伝説の勇者もこのような方であったのだろうと、誰もが心から思う程のものであった。

勇者と同名の少年が、正しく勇者その人であることを同じサーヴァントとして唯一知っているレオニダスは、心の底から安心していた。

彼がいる…自分が果ててもまだ彼がいる、自身が守りたかった全てを彼が引き継ぎ守ってくれる。

ならば自分は、自らの『役割』を果たすべき時がいつ訪れたとしても怖くはない。

彼が兜の下で浮かべた微笑みは、自身の終わりを覚悟した者のそれとは到底思えないような、穏やかで優しいものだった。

「よくぞ参った、勇者よ。」

北壁におけるそなたの働き、及びその成果は我の耳にも届いておる。

まさに流石としか言いようのない働きぶりよ、これは査定の厳しい我とて素直な評価を下す他はあるまい。

構わん、如何様な望みでも……」

「あら、リンク様、お約束の時間よりも随分お早いですね」

「よっ、よよよよくぞ参った勇者よ、北壁におけるそっそな、そなたの働き」

「冗談ですわ、ギルガメッシュ王」

「……………」

「緊張は解けましたか？」

そんな全身ガチガチのままでは、またリンク様の前で醜態を晒してしまいますよ。気さくで面白い方だと好意的に受け取って下さっているのが現状のようですが、下手に悪化させることの無いよう気をつけるのは必要なことでございましょう」

「……………ああ、その通りだな。流石だぞシドゥリよ」

「痛み入ります」

* * * *

保有スキルその他

単独行動 EX

マスター不在、魔力供給無しでも長時間現界していられる能力。

理解者や後援者といった『仲間』と呼べる存在は多かったものの、その戦いや旅

路自体には孤独な印象が大きい故に付与されたスキル。

『トライフォース』というほぼ無限の供給源を手に行っているが故に、魔力供給に困るといような状況はまずあり得ない。

限り無く善寄りの思想と行動理念の持ち主でもあるため、その旺盛な行動力をマスターや仲間達の為に存分に役立ててくれることだろう。

「ダ・ヴィンチ、またリンク君の単独レイシフトに許可を出したのかい!? 今度は何で釣られた!!」

……いや、助かってるのは確かだよ、彼のおかげでカルデアの食糧・物資不足はあらかた解消されたし。

だけど、心配するのはそれとは別問題じゃないか。

せめて一人で行くのをやめてほしい、もしかしたら彼はそっちの方が慣れているのかもしれないけれど、それでも……えっ、リンク君は勇者？

そんなことわかっているよ、今更何を聞いているんだい」

「ほんと、余計なものまで背負うねえ、君って奴は……まあそんな君だからこそ、

あの子達も慕って、頼りにしてくれているんだろうけれど」

道具作成 C

魔力を帯びた器具を作成できるスキル、この場合は宝具『シーカーストーン』を用いない彼自身の能力を示すもの。

主に霊薬の精製や、その応用で霊薬と似た効果を持つ料理の作成に発揮されるが、彼の場合は技術よりも素材頼りなところが大きい。

現代ではとても手に入れない、神代以前の貴重な素材を惜しみなく大量に使用するその様子は、まともな感性の魔術師が見れば失神したとしてもおかしくはないだろう。

「素材の管理、適当…下処理、これも適当。

環境、手順、火加減、時間……本来ならば霊薬の精製において、細心の注意を払うべきありとあらゆる要素がどれもこれも全て適当。

何でこれで成功するのよ、しかも凄い効能だし、魔術師舐めてるの!?

…そんなつもりが無いことは重々承知してるわよ、自覚して自重しなさいって言ってるの!!

……マスターが霊薬の精製を苦手としているのって、もしかしくてもあなたのせいでしょうね。

何故って…基本知識も無い真っ白なところにこんなムチャクチャを見せられて、認識や感性がズレない訳がないでしょう。

あなたが個人的に使うのはともかく、間違っても人に教えてはいけない代物よ、これは。

……悪かったと思うならサポートなさい、素材さえ切らさないようにしてもらえれば後は私達で矯正するから」

サバイバル B

文明から遠く離れた未開・未踏の僻地で生き残り、その上で目的を遂げるための

活路を見出す知識や技術、加えてそれらを可能とするための精神力や心構えを表すスキル。

採取したものが飲食可能かどうかの判断が出来なければ、時には体力を温存して状況の好転をただ待つことが出来なければ、過酷な環境を強い心を保ったまま乗り越えることが出来なければ。

後の世の人々を夢中にさせた勇者の冒険は、恐ろしい敵を激闘の末に討ち果たし、困難な迷宮を踏破して宝を手に入れる前に終わってしまったことだろう。最大限に発揮するならば、能力としてはAランクに分類されて良いものらしいのだが、当人曰く「今更そこまでして生き延びたくない」とのことで敢えてランクは下がっている。

「ゲイザーの目玉で引いてなかった奴がランクBって…Aだとただけ生存力あることになるんだよ、このスキル」

「それなりに美味かったし毒も無い、強烈な見た目も調理が終わったらさっさと忘れてしまえばいい。」

はつきり言って、アレはそれほど選択肢として酷いものじゃ無かったぞ」

「じゃあ具体的に、この『そこまでして』ってのはどういう状況を指してたわけ？」

「……………炭」

「え？」

「調理する間もなくて生肉齧ったこともあるし…………でも最悪はやっぱりアレだな、食材が尽きて遂に鉾石で腹をもたせる羽目に」

「もういい、分かった、もういいから!! 見ろよ、円卓の連中が『マジか』ってどん引いてる!!」

* * * * *

伝説の終幕

『ゼルダの伝説』という最古の英雄譚…正確な年数や年代の記載は無いものの、深く冷静に読み解きさえすれば、軽く見積もって数十万年に及ぶ壮大な物語であるこ

とが窺い知れる。

その物語に、あまりにも長く翻弄され続けた三人の運命に終止符を打つ。

歴代の中で最も画期的で、最も無謀で、最も気高くて、そして最も痛ましい。

そんな運命を自ら選んだ末代の勇者が、自らの魂が経験してきた『勇者』としての全てを覚えていた、または知識として持ち得ていたというのは、『ゼルダの伝説』において確定事項と推測される説のひとつである。

そうでなければ、「末代の勇者による『ゼルダの伝説』の執筆」というそもそもその始まりに説明がつかないのだから。

両親を幼くして亡くした末代の勇者は、未だ小さく幼い手に玩具や菓子ではなくペンを握り、何かに追い立てられるかのように日々書き綴った。

同じ年頃の子供達と遊ぶことも自ら律し、幼少の身に許された時間の殆どを執筆に費やしていたにも関わらず、完成には10年もの月日が費やされた一大叙事詩。

それこそが、後に伝わる『ゼルダの伝説』である。

それがただ単に、想像力豊かな少年が自身が思い描く物語を懸命に紡ぎあげたと

いうだけの話だったならば、事はもっと単純であり、後の歴史も随分と変わっていたことだろう。

しかし、数多と綴られていた全ては、紛れもない『事実』だったのだ。

著書に記載されていた内容が、ハイラル王家や周辺の友好国、民族に伝わる伝説や御伽噺の一般には秘められていた真実に合致、もしくは空白の部分を補完するようなものだったこと。

末代の勇者が史上最年少の戦術顧問として王家に仕えるきっかけとなった、村をろくに出たことも無い筈の幼い少年が書き記した、魔物の種類と対処法を事細かにまとめた本という確かな実績を伴った現物が既に存在していたことが、若くして使命に殉じた勇者が一人背負っていたものの重さと大きさを遺された者達に知らしめた。

彼が…彼らが戦ってきたことを、彼らが生きていたことを、彼らが確かに居たことを決して忘れたくない、忘れられてほしくない。

そんな想いを込めながら、末代のゼルダ姫が懸命に綴った、彼女の勇者の物語を最終章として『ゼルダの伝説』は完結。

それと同時に、彼らの運命と共にあったハイリアの歴史も、ゆっくりと終わりの時を迎えていくこととなる。

個人の解釈や好みの違いから論争が絶えない『ゼルダの伝説』の研究家や愛好家が、こればかりはと揃って『末代の勇者の異端ぶり』を口にする。

異端とは言っても決して悪い意味ではない。歴代の勇者の中で彼のみ該当する明確な差異がそう表現されるのだ。

『戦士』や『冒険家』としての活躍が多くの勇者達に見受けられる中で、明確に『学士』や『指揮官』としての側面と能力を発揮したのは、唯一彼のみなのである。

多くの戦いと冒険を経てきた『勇者の記憶』を元に、多くの兵士の生還と民の平穏を導く功績を成した末代の勇者は、魂に刻まれ連綿と続いてきた争いの運命を終わらせるという最大の偉業をも成すこととなる。

悩み、苦しみ、決死の覚悟で決断したであろう『彼』に対してあまりにも無礼、

侮辱に過ぎるものかもしれないが。

『彼』が『彼』であったこと、そのあまりにも困難な決断を下せる者が全ての知識と記憶を得た上で『勇者』となったことそのものが、『終幕を導く者』という彼自身の運命だったのだという考察が、決して無視できない規模で存在している。

* * * * *

エクストラクラス『勇者』

ゼルダの伝説で語られる『勇者リンク』の逸話と活躍はあまりにも多岐に渡るものであり、彼という存在をひとつの『クラス』で括することは非常に難しい。

神造の聖剣を携えているからには『セイバー』であり、あらゆる武器の達人として槍を振るった逸話も残されているので『ランサー』としての適性も備え、更に弓を持たせればこれも百発百中の腕前であったとのことで『アーチャー』としても申

し分ない。

愛馬エポナを始めとした、様々な生物や乗り物に騎乗しながらの心躍る未知への旅路は、『ライダー』の適性を物語るものでもある。

ある時は託され、ある時は自ら冒険の果てに手に入れた魔術道具の数々を見事に駆使して、あらゆる難関を乗り越えられたのは『キャスター』としての素質とも捉えられる。

潜入や諜報、闇討ちなどの影に紛れる行動も必要とあれば是とした事実は、正当な手段でなくとも善は為せるのだと後の世の多くの『アサシン』に多大なる影響を与えている。

恐ろしい魔物の群れに単身で挑んでみせる、狂気と称しても違和感が無い程の勇猛さは、『バーサーカー』の適性と解釈しても決しておかしくはないだろう。

それらの要素を全て、余すことなく備えていたからこそ、彼は『勇者』としての様々な偉業や冒険を成し遂げたのだ。

彼は小さな『クラス』の枠組に無理やり当て嵌められるような存在ではない。むしろ世界の方が彼の為に、彼を表すための新たな『クラス』を作り出した。

長い歴史、数多の英雄の中で唯一の、エクストラクラス『勇者（ブレイヴ）』の適用者。

それこそが、世界最古にして最高の『勇氣ある者』と名高い彼なのである。

『ブレイヴ』とは、良く言えば万能、悪く言えば器用貧乏となってしまうクラスである。

万能の戦士であり冒険者でもある、勇者としての能力と利点を弱体化させないために設けられたクラスではあるが、それでも『サーヴァント』という決められた枠組に無理に押し込められた事実に変わりは無いからだ。

『退魔の聖剣』を宝具として持ち得てはいるものの、その所持と扱いに特化した『セイバー』のクラスでは無いのが原因か、真名解放が封じられその真価を発揮することが出来ない。

槍や弓も、扱うこと自体は出来るのだが、やはり『ランサー』や『アーチャー』と比べられれば見劣りしてしまう。

『エポナ』は間違いない名馬ではあるのだが、その生まれはあくまで普通の馬であ

り、他の『ライダー』が所有する神秘を持つ獣や特大火力を誇る宝具には及ばない部分が多い。

魔術も、隠密も、狂ったような戦いぶりも、それを専門とする各クラスのサーヴァント達に敵うようなものではないのが現実なのだ。

しかし、その現実の先にこそ、クラス『ブレイヴ』の真価が存在している。

彼自身がそれを『必要』と判断した際に、惜しみなく目の当たりにさせてくれることだろう。

世界の危機を幾度も救った、勇者の真の力というものを。

ブルーディカを手伝って食事の準備をしていたリンク、気分転換に遊びに来ていたネロと周囲の一同を狙った刺客の攻撃を鍋のフタで回避し、木べらでタコ殴りにしたの巻。

ちようどスープを掻き混ぜていたところだったため、身体よりも精神のダメージで撃沈する元刺客の全身から漂う美味しそうな匂いと所々にこびり付く具材の欠片が何ともシュール。

敵にかける情けなど無いことは重々承知しているし、個人的にも信条であるのだが：同じ刺客であるだけに我が身に置き換えて盛大にS A N値が削れてしまった荊軻の目は、この後しばらく死にっぱなしだったという。

『保有スキルその2』の終盤近くを書いてる時に思いました：これ『マテリアル』じゃなくて『幕間の物語』だ、しかもスキル強化されたっぽい。

『ゼルダの伝説』が、長い時間をかけて歴史にどんな変化を加えてきたのか。

それを、スキル解説のついでにサーヴァント達との絡みを添えて書いてみました。生前の有り様がそのままではなく、後の世の認識や伝説上の逸話も加えられた上で顕現を果たす：それがサーヴァント。

だとしたら、メソポタミア文明よりも古くから存在し、長い年月をかけて世界中に浸透していった『ゼルダの伝説』と勇者リンクに対しては、相当強い認識と概念

の力が加わっているのではないかと思ったのです。

普通の感性を持つ者が得たら恥ずかしくて表に出られなくなりそうなスキルですが、成り代わりリンク君は問題ありません。

美しいのは『自分（中身）』ではなく『リンク』の方だという認識が強く、更には「公式設定だしな」と納得もしてしまえますから。

必要とあらば躊躇いなくスキル・能力として使用し、イベント時の概念礼装のコスプレ撮影の要望も躊躇うことなく引き受ける（報酬が出るのでクエストの感覚で受諾、英雄王という無限のスポンサーがいるのでダ・ヴィンチちゃんもノリノリでクオリティを引き上げる）。

そんな勇者様と、何だかんだ気が合って一緒に悪乗りするマスターと言う名の悪友に、カルデアはこれからも振り回されることとなるのです。

私の方でイメージしている、末代のリンクとゼルダの関係は『同志』です。

民を救いたい、その為に自分にできることを全てやりたい、そんな想いと誓いを分かち合った同朋。

本編では書けませんでした、ゼルダが思わず姫の装いを忘れて張り倒す程に怒ったのは、自分よりもむしろリンクの身が辱しめられそうになったことに対してです。

身分だけは確かな相手に対して、平民出身な上に自らの果たすべき役割を何よりも優先するリンクは、今後を憂うあまりに抗い切れないかもしれない。

そんなゼルダの怒りと心配を、リンクは欠片も理解どころか想像もしないままとにかく宥めようとしたせいで、かえって怒りを長引かせてしまったという真相でした。

賢王が晒した醜態について考えてみたのですが…多分、緊張のあまり、初対面でのあの階段つきの玉座から転がり落ちたんじゃないですかねえ、あの人。

純粹に日々の激務で疲れていたのだと、そんな身でわざわざイレギュラーの異邦人である自分達を自ら迎えてくれたのだと好意的に解釈するリンク君と。

ギルガメッシュの勇者リスペクトを知っていたので目の前で起きたことの原因を正確に察し、生ぬるい表情になるカルデア一同の間にまたも生まれる微妙なズレ。

その後受けることになった塩対応（勇者除く）は、もしかしたら深い事情など無く、あの時思わず浮かべてしまった表情のせいかという勘繰りを否定しきれない一同なのでした。

成り代わりリンクの封鎖終局四海（仮） 前

Fate界における難敵の代名詞とも言える存在を相手に、リンク君のサーバーントとしての能力と戦闘シーンを描写したくて書いた本編のプロトタイプです。後日後編も投稿するので、どんな感じで本編を書こうとしているのかをイメージして頂ければと思います。

「ころ、した。ころした、ころした、ころした！

なにもしない、こどもを、ころした！」

「ちちうえが、そうしろって。

ちちうえが、おまえはかいぶつだから、って！」

「でもぜんぶ、じぶんのせい、だ。

きつとはじめから、ぼくのころは、かいぶつだった」

果てしなく水平線のみが広がる特異点の海、戦いの喧騒が満ちる船上に、人の心を持った怪物の悲痛な叫びが響き渡る。

胸に走る痛みと共に悲痛な表情を浮かべる者、昂る熱に顔を顰め歯を食いしほる者、どこまでも嘲り見下す者。

誰に、何に見られようと構うことなく……少年は、怪物は、アステリオスは、生まれて初めて、心から抱いた願いを叫ぶ。

「でも、なまえを、よんでくれた。

みんながわすれた、ぼくの、なまえ……！」

「なら、もどらなくっ、ちゃ。

ゆるされなくても、みにくいままでも。

ぼくは、にんげんに、もどらなくちゃ……!!」

命をも賭すほどの決意が込められたその『願い』には、悲痛な想いが込められて

いた。

『ミノタウロス』は、『怪物』はもう嫌だ。

皆が呼んでくれた『アステリオス』でいたい：『人間』に戻りたい。

自分ですら忘れてしまった名を呼んでくれた皆と、自分のような存在を受け入れてくれた皆と、もつとずっと共に居たい。

その為になら……と心の底から思いながら、それと同時に、『嫌だ』と悲鳴を上げる自分もいることを、アステリオスは自覚していた。

だって、あの狂った大英雄とこのまま対峙しつづければ、間違いなく自分は死んでしまう……そうしたらもう、皆と一緒にはいられない。

（いやだ……いやだ、はなれたくない。

みんなと、えうりゅあれと、ずっとずっといっしょにいたいよ）

何処からか込み上げて瞳を熱くさせる何かを、折角の決意を鈍らせる雑念を、泣き叫びながら訴えてくる自分自身の紛れもない『本心』を、アステリオスは必死に

なって押し殺す。

きつとこれが、これこそが、自分に与えられた罰なのだ。

生まれて初めて、本気で抱いた願いが叶わない……人の心を知り、人の温かさを得た瞬間にそれを奪われる、自身の罪深さを思い知りながら死んでいく。

（ぼくが、ころ、した、あのこたち……ないてた、さけんでた、『たすけて』って、ひっしになって。

こんな、きもちだったんだ……それを、ぼくは、ふみにじったんだ。

なんで、ぼく、へいきだったんだろう……やっぱり、かいぶつは、ちゃんとぼつをうけないと）

視界の端に、仲間もろとも構わないという様子で、宝具の槍を振りかぶるランサーの姿を捉えた。

目の前の狂戦士を、ほんの一時でも留めておけるとしたら、自分に出来ることはこれしか思い浮かばない。

泣き叫びながら必死に縋る少年を、心の奥底へと押し込めていく……だけど、少年の叫びは、抵抗は、アステリオスの予想を超えて大きく、必死なもので。

人のものではない赤い輝きを放つ瞳から、生肉を貪る怪物の口から、ほんの僅か、ほんの一瞬だけ零れ出た。

「……………す…け、て」

雨粒よりも小さな一滴は、零れる間もなく頬を汚していた返り血の赤に交じり、瞬く間にその熱を失った。

声の体裁を成していたのかすらも怪しい囁きは、戦場の騒乱が、眼前で雄叫びを上げる狂戦士の存在が無かったとしても、誰の耳にも届くことなく掻き消えたであろうもので。

元より届くわけなど、聞き届けられることなどあり得ないのだと、発した自らによって否定される怪物の哀訴。

「駄目だぞアステリオス、そういうのはもっとちゃんと、皆に届くように大きな声で言わないと」

「今度から頑張ろうな」

それに、応えてくれた者がいた。

青く神秘的な刀身が陽光に煌き、自分よりも遥かに小さく華奢な背中が自分を庇うのを、大英雄の圧倒的な巨漢と威圧を相手に怯むことなく立ち向かう様を、アステリオスは見た。

「りん、く……どうして？」

「助けを求めて泣いている…それを必死に押し殺して死に向かおうとしている子供を、見過ごせるような性分じゃあない」

「だけど…りんく、いったい」

『ゆうき』をだせて…そうすれば、それができれば、だれだって『ゆうしゃ』だって。

だから、ぼく……」

「確かにそうだ、だけどお前が今出そうとしていたそれは違う。

嫌だ嫌だと泣き叫ぶ本心を、無理やり押さえ込んでまで捻りだしたものは『勇氣』とは呼ばない。

恐怖は、悲しみは、否定して押さえつけるものじゃない…認めて、受け入れて、その上で乗り越えるものなんだ。

本当の『勇氣』をまだ見つけられていないお前を、これから必ず見つけられるお前を、俺はこんなところで終わらせたくはない」

口調は強く、だけど込められた想いはとても優しく。

そんな声を背後のアステリオスへとかけながら、その目と戦意と切っ先を眼前の狂戦士から決して離すことのない。

一見しただけではそれは、状況を正確に判断できない少年戦士の、それこそ蛮勇にしか思えない光景である。

しかし、冷静な判断力など捨ててきた筈の狂戦士は、大英雄ヘラクレスは、片手

で軽く捻り潰してしまえるような少年の前に、なぜか動くことが出来ずにいた。

そんな彼へと、先程までの余裕をかなぐり捨てた怒号を上げたのは、矢で危うく眉間を貫かれるところだったという命の危機を辛うじて免れたばかりのイアソン。その傍らでは、余裕綽々の隙だらけで攻撃への対処など欠片も出来なかったイアソンを守るために、宝具の発動を中止せざるをえなかったヘクトールがため息をついていた。

「何をしているヘラクレス、このノロマが、さっさとそのクソガキを叩き潰してしまえ!!」

とんでもない奴だ、目の前の脅威を差し置いて将を狙うとは!!」

「いや、あの一瞬でいい判断でしたわ：やっぱりあのガキ只者じゃねえな。」

あの状況じゃ俺は守りに転じざるを得ない、発動された宝具を食い止めるよりも、遥かに楽で確実な一手でもってミノタウロスを守りやがった。

しかも、狙ったのが眉間ってあたりがまた嫌らしい。

目に向けられる攻撃は、『自分は今殺されかけた』って認識を圧倒的に強くする

からな…見ろようちの大將、狙い通り激昂してくれちゃって。

こりやもう、ミノタウロスのことなんか完全に忘れてるな……」

「殺せヘラクレス、しかしタダでは殺すな、散々苦しめて鬨り殺せ!!」

そいつは偉大なる王の命を狙った反逆者だ、世界を救う英雄の偉業を阻む悪辣者だ、自分という存在が今まで生きて存在してきたことを恥じて悔やませろ!!」

研ぎ澄まされた戦士の勘が鳴らす異様な警鐘に身構えていたヘラクレスだが、それは駆り立てられた狂気と戦意を押し止められるほどのものではない。

赤く滾る理性の失せた瞳は、大気を震わせる咆哮と共に放たれた威圧感は、アステリオスが未だ無事であることにほんの一瞬安堵した一同を更なる絶望へと叩き落して余りある恐ろしさだった。

《逃げるんだリンク君、いくら君でもヘラクレス、しかもバーサーカーなんて相手が悪すぎる!!

何とかして…ああもう、どうして僕はこんな状況でこんなことしか言えないんだ

!!

でもごめん、こんなことだろうと今の僕はこう言うしかない!!

逃げてくれリンク君、何とかして生き延びるんだ!!》

「ははははっ、声だけが聞こえて姿はさっぱり見えないが、どうやら状況を的確に判断出来ている者もいるらしい。

その通り、ヘラクレスだ…ギリシャの、いや、史上最強の大英雄だ!!

どこぞの木っ端英霊が敵う相手じゃ無い、ましてやお前みたいな、自分がもうじき死ぬってことすら理解出来ないようなガキなんぞ、気付かれないまま踏み潰されるアリも同然さ!!」

「りんく、やっぱりぼく…っ!!」

『怖くない』と言って笑いかけてくれた、頭を撫でてくれた、『勇者』への道を教えてくれた。

大切な友達を嘲られた怒りに目尻を吊り上げ、毛を逆立てながら飛び出しかけたアステリオスの巨体を、リンクは片手一本で制した。

「りんく！」

「駄目だって言っている…どうしてそう身を投げ出そうとするんだ、殺されるだけの相手だってわかっているだろう」

「……………わかってる、こわいよ、でもぼくはやらなきゃ。

ぼつをうけなきゃ…つぐなわなきゃ……そうしないと、ゆるしてもらえないと、ぼくはみんなといっしょにいられない。

みんなといっしょにいることを……ぼくが、ぼくにゆるせない」

「…罰を受けて、償って、許してもらえればいいんだな？」

「……………うん」

「エウリュアレ!!」

女神エウリュアレ、尊き御身に願ひ奉るお許しを頂きたい!!」

「なっ……………ええ、許可するわ」

女神という存在であることそのものは認めながらも、対等な仲間としての態度や

立ち位置を揺るがすことのなかったリンクから急に恭しい態度と口調を向けられて。

一瞬驚いて呆気に取りられてしまったエウリュアレだったが、すぐに自覚と誇りを取り戻し、慣れ親しんだ女神としての自分を示した。

しかし、そんな彼女の神々しい振る舞いは、次の瞬間向けられた『願い』の内容にあっさりと崩れ去ることとなる。

「犯してしまった罪の重さに苦しみ、罰と償いを求める者がここにいる!!」

どうかこの者に禊ぎの機会を、女神の試練を与え給え!!」

「…っ!! アステリオス、人の心を捨てきれなかったが故に苦しむ怪物よ、聞きなさい!!」

リンクの意図を察した瞬間に、エウリュアレは女神としての体裁を忘れて、ただひたすらに声を張り上げていた。

助けたいののに、失われてほしくないのに、その為にどうすればいいのかが分から

なかった。

そして今、いざ目の前に差し出されたそれに必死になって縋りつく、『女神』という属性を負っただけの一人の少女がそこにいた。

「生きるのよ、死んではだめ……死んで楽になるなんて、何も為さないまま後悔と罪悪感の苦しみから解放されるだなんて、それこそ許しがたい所業だわ!!

多くの罪なき少年少女を喰らったあなたには、罰として、その数百……いや、千、万……数億倍の命を救うという、果て無き難行への従事を命じます!!

過去から現在、未来に至る人の営みの全てを、人理を救うという未だかつて無き大偉業!!

この旅路の供となって、星見の天文台を守り、人類最後のマスターの力となる!!
これがあなたのこなすべき試練よ、肅粛と受け入れなさい!!」

数十人の生け贄を食い殺した償いに、時間にして数千年、総数にして数千億人にも及ぶであろう人々を救う……単純に数で比べるだけならばあまりにも割に合わない

い、過酷すぎる試練であろう。

そんな理不尽な神託を、アステリオスは何の言葉も発せないまま聞いていた。信じることなど、受け入れることなど出来ない……あまりにも都合が良すぎて、罰や試練と考えるにはあまりにも幸せすぎて、到底認められるようなものでは無かった。

そんなものを、受け入れてしまっただけだ。はいけないと思う……だけど。

「戻ってきて……戻ってきなさいアステリオス!!」

この私の言葉よ、あなたは黙って聞けばそれでいいの!!

あなたに試練を課したのは私、その末に罪は許されると認めたのは私!!

この、女神エウリュアレ!!

私が許したのよ、誰にも文句は言わせないわ、誰にもあなたを否定させない!!」

「だ、そうだ……アステリオス、ほら。」

早く戻って、お前の女神様を慰めてやれ」

「……でも、ぼく。」

だめだよ…こんなのばつでも、しれんでもなんでもない。

うれしすぎて、しあわせすぎて、ぼく、ぜんぜんつぐなっていない」

「その罪悪感こそが、お前がこれから永遠に背負うべき本当の罰だ。

どんなに幸せな瞬間でも、お前は自分が犯した罪を、殺してしまった人達のことを忘れきれない。

その上で生きるんだ…お前に生きて幸せになってもらいたいと願う、皆の気持ちに応え続けるんだ。

これはきつと、お前が今想像しているよりもずっと、辛くて苦しい試練になる……わかるか？」

「……………うん、わかるきがする。

でも、ぼく……………これからどんな、つらくて、たいへんで、いやなことがあったとしても。

それをぜんぶがまんするから、がまんできるから。

いまはとにかく、えうりゅあれをなきやませたい……………そうおもうんだ」

「見つけたな、お前の『勇氣』」

満面の笑みと共に向けられたリンクの言葉に、数秒呆気にとられたアステリオスは、何かを乗り越えたような本当に嬉しそうな笑顔で返してくれた。

簡単な伝言を託したアステリオスが『黄金の鹿号』に帰還し、エウリュアレの癩と一同の歓待で迎えられているのを確認したリンクは、安心したおかげで少しだけ緩んでいた意識を再び戦闘のそれへと引き戻す。

今にもヘラクレスをけしかけようとしていた筈のイアソンは、何を思ったのか、ヘラクレスの戦意を一旦落ち着かせてまで、目の前で繰り広げられるリンク達のやり取りを見据えていた。

終わったことを察するや否や、フンッと鼻を鳴らしながら嘲りと見下ししか見受けられない表情を向けられて、呆れた心地に肩を落とす。

アレと『英雄』で一括りにされるのは嫌だな……この短い間に、何度同じことを感じたかもはや覚えていなかった。

「茶番は終わったか……少しは見ものになるかと、どんなに下らなくとも余裕をもつ

て受け入れてやるのが支配者の慈悲と思ってはみたが。

……くっだらない、やはり茶番は茶番だな!!

馬鹿馬鹿しすぎてもはや哀れみさえ覚えてくる、こんなことならいっそ途中でぶち壊してやった方が誠実な対応だったか!!」

「はいはい、わざわざ待ってくれてドーも。」

こっちはもういいよ、さっさとその人けしかけて終わらせてくれない?」

クソ野郎の唯一の取り柄と称されていた喋りをあっさりと聞き流され、更には自慢のヘラクレスを嘗め切っているとしか思えないリンクの態度に、イアソンの蟀谷が盛大に引きつったのを一同は察した。

「お前……馬鹿なのか、いや聞くまでもない、馬鹿だな!!

大英雄ヘラクレスを前にしてその態度、もはや蛮勇を通り越してただの自殺志願者だ!!」

「……ねえ、ドクター。」

別にふざけているわけでも何でもない、本気の、切実な質問なんだけど、聞いていい？」

《この状況で!?

ああいや、この状況でも聞かなきゃいけないような大事な質問ってことか…いいよ、手短にね!!》

「ヘラクレスって誰だっけ、具体的に何をやった人？」

焦燥の中で必死に冷静さを保とうと努めていたロマニが、質問を受諾した次の瞬間。

リンクはまるで、今日の夕飯のメニューを尋ねるかのような気軽さで、あっさりと爆弾を放り投げた。

誰も彼もが言葉を失い、何とも言えない沈黙が数秒世界を包んだ後に、一足早く復活したダ・ヴィンチの馬鹿笑いが通信の向こうから聞こえてくる。

《あははは、はははははっ、あっははははははっ!!

ごめんごめん忘れてた、この私としたことが完っ全に盲点だった!!

そうだね、知ってる筈無いよね、私達がちゃんと気付いて教えてあげなきゃいけないことだったねこれは!!》

通常の聖杯戦争のように、聖杯からある程度の現代知識を与えられている訳でもない状況で、きっかけも無しに知り得ている筈がないのだ。

どんな英雄も、どんな偉業も、『いま』に連なる人類史の全てが彼にとっては遙か後世のものなのだから。

そんな言葉となって出て来るはずだった後半部分は、本格的に堪えられなくなつた笑いのせいで結局形にはならなかった。

「あっ：ありえない、お前今何て言った!?

ヘラクレスを知らないだと、こいつの伝説を、あの大偉業を耳にしたことがないだど!?

どんな田舎、どんな僻地、どんな辺境で生まれ育てばそうなると言うんだ!!」

嘲り、罵り、相手よりも上の位置に立つために舌を動かすことも忘れて、ただひたすらに純粋な驚愕と受けた衝撃の凄まじさを顕わにするイアソン。

そんな反応を前にリンクが見せた表情の変化は、『んなこと言われたって知らないものは知らないんだよ』とでも言いたげな、子供のような拗ね顔だった。

「おいおいおいおい、あいつ大丈夫か!？」

あのヘラクレス相手に剣を向けられるだなんて、馬鹿なのか無謀なのかとヒヤヒヤしてみりゃまさかの『知らねえ』だと!!」

「てゆうか…今更だけど、あの子誰なの？」

サーヴァントなのは気配でわかるけどそれ以外がサッパリだわ、剣も弓も使うし、決め手が無さすぎよ」

オリオンとアルテミスが思わず口にした当然の疑問に、立香とマシュはこちらも思わず顔を見合わせた。

彼らがそう思うのも無理はない：何しろ今のリンクは伝説でお馴染みとなっている勇者の装束を、深い森を思わせる緑衣を纏っていないからだ。

古代ハイリア人の特徴である尖った耳と、リンク自身の強い印象となる金の髪と青い瞳、何より美しい顔立ちもフードによって半ば隠されてしまっていて、外見特徴から彼を『勇者リンク』であると気付くのは難しいことだろう。

『リンク』と名乗ってはいるし、フードも時折あっさりと外して（ドレイクを含む海賊連中が思わず息を呑んでいた）いたのだが、今の今まで疑問を抱かれること自体が無かったのだ。

『変に隠したり誤魔化したりする方がかえって疑われるんだよ、ドレイク船長なんかその辺り特に鋭いだろうさ。

立香、お前だって、パツと現れた奴が伝説や歴史上の登場人物の名を名乗ったとして、「もしかして本人？」なんて、こんな状況でもなければ思わないだろ？』

万が一の事態に備えて、自分という存在に関しては出来る限り秘密にしておく：

そう言ったのと同じ口で、彼のことを隠さなければと気を張っていた自分達をよそにあっさりと真名を明らかにして。

また同じ口で、「言い出しっぺのくせにどういうつもりだ」と問いつめる自分達をあっさりと黙らせ、『隠し事があります』と顔にも声にも態度にも出ている立香達の方がよほど怪しまれてたぞ、フォローしておいたけど」と最後の止めまで刺されたのだった。

しかし、いくら何でも、この状況で彼にまだ『隠す気』があるとは思えない。

「センパイ…もしかしくなくても、リンクさんは」

「戦うつもり…：…なんだろうな、『本気』で」

自分の本当の力が必要になる…そんな時が来れば、惜しみなく見せてやろう。

未だ発揮していない力の存在を仄めかせつつ、そう言って笑っていたリンクの姿を思い出す。

「……ヘラクレスがとんでもなく強くて、恐ろしい敵なんだってことはわかってい
る。

歴史とか、伝説とか、カルデアに来るまであまり詳しくなかった俺でも、名前だけ
でなくどんな活躍をしたのかってところまで多少は知ってるような大英雄だし」

令呪の浮かんだ拳が握られる、思わず唾を呑み込んだ唇がかすかに震える。

それを不安と恐怖故のものと受け取ったマシュは、マスターを何とか励まし、元
気づけようと発しかけた声を、寸でのところで呑み込む羽目となった。

巨体の大英雄に真っ向から対峙する勇者の、比べてあまりにも小さく華奢すぎる
後ろ姿を見る立香の瞳は、期待と希望に輝いていたのだから。

『頑張って説明してくれるマシュには悪いけど、本の内容よりも、目の前にいる本
人の印象の方が強いし……そんな熱心に「勇者様」って言われても、あまりピンと来
ないや。

それに……多分だけどあいつ、あまりそういう扱いされるの好きじゃないと思う。

あいつが「勇者」だってこと自体は事実だし、否定する気なんかないけど…それでもやっぱり、俺はあいつのことを「勇者」よりも「友達」だと思いたいな』

立香のリンクに対する扱いや認識が軽いように感じて、それは立香がリンクの逸話や功績の凄さを知らないからだと思って。

今後の二人の為と信じて懸命に『ゼルダの伝説』を語り、その結果思いがけない答えが返って来た時のことを、マッシュはなぜか思い出していた。

いつの間にか物陰からやり取りを聞いていて、仲を取り持つどころか壊すきっかけを作ってしまったと血の気を引かせたマッシュをよそに、白い肌に血の気を浮かべて恥ずかしそうに、それでいながら何故かとても嬉しそうだった、リンクのことも同様に。

なぜ立香は『偉大な勇者』よりも『一人の友人』を尊んだのか、なぜリンクはそれを侮辱とも蔑ろとも思わずに喜んだのか。

そして今、なぜ立香は、このどうしようもない苦境の中で揺るがない信頼を貫くことが出来るのか。

『ゼルダの伝説』はまだ読み切れていないと言っていたのに、『勇者』ではなく『友人』だと思おうと言っていたのは彼自身なのに…その『なぜ』を、今のマッシュはまだ理解できない。

過去の混乱と今の混乱が入り混じって動けずにいるマッシュをよそに、状況は刻々と移り変わる。

自身が最強と信じる英雄を『知らない』と言われ、頭に血が上ったイアソンは、戦闘態勢を整えたヘラクレスをよそに彼の偉業についてを激昂のままに怒鳴り散らしていた。

素直に『偉業』だと、『大英雄』の生き様だと認めるしかない伝説を前に、表情と体勢を若干改めたリンクの様子に、気を良くしたらしいイアソンが更に舌を滑らせる。

遠い生前の話ではない、今現在の脅威として立ちはだかる狂戦士の話をするために。

リンクが意図せず乱したせいで緩んでいた戦場の空気が、あの絶望感が改めて戻ってくる。

「そいつの宝具『十二の試練』は蘇生魔術の重ね掛けだ、十二回殺されなければヘラクレスは倒せない。

更に言えば、そいつの体はBランク以下の攻撃を無効化する。

お前達にそれだけの攻撃手段が存在するかな、仮にしたとして止めの事実を教えよう。

既知の攻撃に耐性が出来るんだよ、よって同じ攻撃で二度そいつを殺すことは不可能だ。

要するに…お前達がヘラクレスに勝つには、Aランク以上の攻撃手段を十二種類用意して、十二回殺しきらないといけないのさ。

数々の難題を踏破し、多くの怪物を殺して伝説となった、その上で理性を失くし目の前の敵をぶち殺すだけの存在となった化け物をなあ!!

さあさあ、勿体ぶらずに教えてくれよ勇猛なる少年戦士君!!

今まで散々コケにしてくれた、かつてないほど苛立たせてくれたこの偉大なるイアソンの怒りを鎮めご機嫌を取るために、君は一体どんな見苦しい醜態で反省と後

悔を示してくれるというんだい!?

聞くだけは聞いてやるよ、叶えてやる気はこれっぽっちもありはしないがなあ!!

┌

「黙れ」

調子が戻ってきてより一層うるさくなったイアソンの笑い声が、それよりも遥かに静かなものだった筈のたった一声で遮られる。

絶好調だった筈のイアソンが、なぜあのたった一言で静かになってしまったのか、ならざるを得なかったのか。

その理由は、先ほど危うく眉間を貫くところだった矢よりもよほど鮮烈に、この身を射抜き竦ませていった青い瞳を、直接目の当たりにしたイアソン自身にしかわからない。

「お前が辱しめているのは俺じゃない…お前自身が自慢に、誇りに思っているヘラクレスの方だ。」

自覚して口を閉じろ、その回る口が自分の『能力』だっていう認識がちゃんとあるならな」

顔を蒼白にして黙り込んでしまったイアソンに最後の一瞥をくれてやると、リンクは改めて目の前の脅威へと向き合った。

剣の柄を握る手にミシリと力が籠められる、手袋に隠された紋章が熱を持ち始めているのがわかる。

詳細までは流石に把握し切れていない歴代の各々はともかく、少なくとも自分にそんな性分は無かった筈なのにと、頭の冷静な部分では思いながらも…胸の、魂の内から込み上げてくる熱い衝動を、無かったことにして押し込めるなんて出来やしない。

（『リンク』という存在そのものが統一化した影響か……でもまあ、悪くない）

嫌いではない、楽しくない訳がない。

そうでなければ、今はもう『あの世界をゲームとして楽しんでた』程度の臃な認識しか残っていない『前』の自分が、『あのゲーム』にあそこまで夢中になる訳がなかったのだから。

「ヘラクレス：あんたが人類史の中で、トップクラスの偉業と勇猛さを誇る大英雄だって言うのなら。

それを相手取ることが出来れば、それは、俺の力が多くの英雄相手にも通用することの証明になる訳だ。

生憎と、今のあんたは俺にとって、人理修復という道半ばに立ち塞がった障害物でしかない。

不遜ながら、踏み越えさせてもらおう!!」

「行けリンク、新しい伝説作っちゃえ!!」

「了解だ、マスター!!」

周りが止める間もなく、徐々に昂りを見せていた二人の闘志がついに爆発した。

気合いの一声と共に飛びかかってきた少年の鋭い剣戟を、ヘラクレスは斧剣で受け止め、咆哮と共に弾き返す。

体勢を崩すどころか吹っ飛ばされた少年の瘦身は、虚空で器用に身を翻し…その全身を、彼自身の手の甲から迸った目映い閃光と膨大な力の奔流が包み込んだ。

思わず目を覆ってしまう程の眩しさの向こうに、一同は見た。

形は違えど、どの国、どの時代にも余すことなく伝わっていたとある『伝説』…そこに記され、描かれていた、形を持った女神の祝福。

後の世に万能の願望機と伝えられる、『黄金の聖三角』の紋章を。

「あ、あの紋章は……あのお方は、まさか!!」

余人と異なる耳を生まれ持った彼女は、幼少の頃よりとある『太古の民』の存在について聞かされることが多かった。

女神の声を余さず聞くための大きく長い耳を生まれ持ち、長い長い時を善なる女神と共に生きたのだという『古代ハイリア人』。

姫はその血に連なる者なのだろう、溢れんばかりの魔術の才能もきっと……そう言われる度に、彼女は恥ずかしく思いながらも嬉しかった。

伝説の『勇者』も『古代ハイリア人』だったのだ、憧れの英雄に近しい血を受け継いでいると言われて光栄に思わない訳がない。

（お会いできるのならば……もっと違う場所で、違う形で叶いたかった）

哀しそうに、悔しそうに……残念そうに息をつくメディアは、目の前の状況を誰よりも早く、冷静に受け入れていた。

「手の甲にて、黄金に輝く紋章……まさかあれば、あいつは、あの『伝説』の!？」
「マジかよ、俺はガキの頃あいつの物語を教本に育ったんだぞ!？」

紛れもない偉大な『歴史』や『神話』の存在である筈の自分達ですら、生きていた当時『伝説』として嗜んでいた物語の英雄が、抱いていた情景に相応しい『勇者』

の目映さをもって眼前に降り立つ。

その『奇跡』をまともに受け入れ、噛みしめ、堪能することが出来た者は、残念なことにはこの場には存在しなかった。

成り代わりリンクの封鎖終局四海（仮） 後

活動報告にて、読んで下さっている皆さん宛ての、今後執筆を続けていくための重要なお願いごとを記載しました。

一人でも多くの方に目を通して頂くことを期待します、特にゼル伝のガチ勢や古参プレイヤーの方々には是非とも。

居合わせた全ての者の目を眩ませる眩い光の中、辛うじて窺えた人影が、異様とも思える程に重力を感じさせない軽やかさでもって甲板へと降り立つ……と思われるたその瞬間に、誰もが予想し得なかった第一射が放たれた。

大気を裂く快音を立てながら、並の英雄ならば勝負が決まっていたであろう速さと威力を備えていた一撃に見事に反応して見せたのは、狂化しながらも流石は大英雄と言ふべきか。

剛腕で振るわれた斧剣によって弾き返され、それでもまだ勢いを殺しきれなかつ

た矢が甲板に深々と突き刺さる。

この時、ヘラクレスの心を蝕む狂気が、思いがけない形で彼の利となって働いた。正しい理性を備えた彼ならば、例え戦闘の只中であろうともほんの一瞬目を奪われ、感心と敬服の念を抱いていたであろう程の見事な腕前に、何の関心も覚えなければ何の反応も示さなかった。

そのおかげで、第二第三と続いた同威力の矢の連撃に、間髪入れず対処を続けることが出来たのだから。

「流石は大英雄、最初の一発で決めるつもりだったんだけど…なっ!!」

反撃を許すまいとする勢いで放たれる矢の雨を浴びながら、それでも機と見れば、それまで居た場所を粉碎させる威力の攻撃を放って来る。

たった一撃当たりさえすれば、ヘラクレスとは比べようもない華奢な体は粉々になる。

誰もが理解できる現実が、大空に向けて瘦身が高々と飛び上がる度に遠ざかる。

両翼を広げた大鷲を思わせる立派な弓を携え、鳥の羽をあしらった衣装を身に纏いながら。

重力を全く感じさせない軽やかな動きでもって矢の雨を降らせるリンクは、正に獲物を狩る猛禽類の如くであった。

「『跳ぶ』を通り越して『飛ぶ』ような身のこなし…ありゃあ風に加護だな、相当なもんを持ってやがるぞ」

「しかもあれは、『力を授けてやろう』なんて類いのものではないわ。

彼は何かしらの『空の民』達に、同胞として同じ空を飛ぶことを認められたのよ。独自の領域を持ち、そこに生きる者達は、まず間違いなくその世界に対して強い誇りを持っているものなのよ。

凄いわあの子、一体どこで何をしちゃったのかしら！」

「さすがにお前は知らんか…今度教えてやるよ。

俺も結構、あいつの物語読んでたんだよな」

オリオンとアルテミスのそんなやり取りを、立香は意識の隅で聞いていた。他に気を割く余裕などなかった。

目の前で繰り広げられる凄まじい攻防。その最中に時折、かすかに過ぎる不思議な光景。

風を纏いながらの長い滞空時間の中で、弓を引くリンクの傍で共に飛ぶ、鳥の姿を捉えることに夢中になっていたから。

人と変わらぬ大きさで、翼は空を飛ぶだけでなく立派な弓をも携えて、気難しそうな顔立ちで。

それでも、リンクを見る目には確かな信頼が宿っている。

サーヴァントとマスターという繋がりを持つ立香だからこそ捉えることが出来た、風の加護の象徴として共に在る彼らの姿を、もしもマッシュが目にすることが出来ていたなら。

口にしていたことだろう、誇り高いリト族の戦士達の名を。

《な、な、な……何だこれはあああああっ！！！！》

死闘と呼ぶにはあまりにも華麗すぎる光景を前に、完全に目を奪われていた一同の意識が、通信の向こうから突如響いた素っ頓狂な叫び声によって戻ってきた。

「どうしたのさドクター、何かまずいことでもあった!？」

《ま、まずいって言うか…ねえレオナルド、測定器の故障っていう可能性は?》
《あり得ないよ、レイシフトを行うにあたって私を含めたスタッフ全員で徹底的に確認している。》

観念して認めるんだね、目の前のそれは紛れもない現実さ》

《一応足掻いてはみたけど、やっぱりかあ……立香君、マシユ、落ち着いて聞いてくれ!!》

『黄金の聖三角』が光を放った前後で、リンク君の霊基が大きく変化した!!

このパターンは…間違いない、今の彼は『アーチャー』だ!!》

現実をそうと認めながらも未だ受け入れがたいロマニ、息を呑みながら改めて戦

場へと向き直った立香やマッシュ達の前で。

リンクは、咆哮を上げながら向かってくるヘラクレスを、不安定な虚空からの三本同時射ちという離れ技で迎え撃ってみせた。

必殺の一撃を保ったまま、範囲攻撃として放たれたそれらを避けるには身を返すだけでは足りず、ヘラクレスは突撃の勢いが殺がれるのを覚悟で斧剣を振りかぶる。そうして生まれた隙は、リンクが改めて間合いを取る為の猶予としては十分すぎるもので。

近付いてしまえば、弓兵の強みは失われる。

当たり前の、分かり切っている筈のことだというのに。

その為の好機を攻撃にいちいち対処するせいで幾度となく逃しているヘラクレスに、イアソンの苛立ちがついに爆発した。

「ええい、まどろっこしい!!

いい加減にしろヘラクレス、今の貴様に半端な攻撃は効かぬのだ、狂った頭に叩き込んでおけ!!

如何様な強弓とて気にかけることはない、構わず突っこんでさっさと」

その続きは言葉とはならなかった。

怒号を発するために大きく開けられた口は、その形を保ったまま硬直する。

イアソンの沸き上がった思考を一瞬で凍りつかせたもの、それは、ヘラクレスの両目を貫通させる勢いで深々と貫いた二本の矢。

イアソンの声に気を取られたヘラクレスが、思わず動きを止めたほんの一瞬の隙を、リンクは見逃しはしなかった。

「まず一回」

何の感慨も、興奮も無かった淡々とした呟きが、既に穴だらけの甲板に大英雄が力なく膝をつくという光景と共に、異様な迫力をもって一同の思考に刻み込まれる。真っ先に声と思考を取り戻したのは、目の前の現実を色々な意味で受け入れられないイアソンだった。

「馬鹿な……こんな馬鹿な、何故だ、あり得ない!!

Bランク以下の攻撃はヘラクレスには無効の筈だ、あの棒切れに伝説級の逸話があると言っても言うのか!？」

《いくら何でもそんな馬鹿な、リンク君が使っていた矢は何の変哲もないありふれた奴の筈……わかったスキルだ、『武芸の極致』!!》

「し、しかしドクター……リンクさんのあのスキルは、確か、どんな武器も使えるようになるというものだった筈では」

《それは違うよマシユ、『どんな武器も使える』というのは、リンク君がサーバーア
ントになる前から身につけていた彼自身の技術だからね。

あのスキルが持つ真の効果は、『どんな武器も通じるようになる』というもの。
リンク君は、戦う相手が何かしらの神秘による護りを持っていた場合、それを無
効化することが出来るんだ!!》

《本来だったら、『武器の選択肢が広がるもしくは狭められない』程度の細やかな
効果に留まるものなんだろうけど。

リンク君自身の達人技と合わさることで、ある意味凶悪とも言える代物と化しているね。

純粋な技量のみで、彼みたいな出鱈目と戦うことを強いられるというのは、随分と厳しいものがある》

感心と戦慄が半分ずつ混ざっていきそうなダ・ヴィンチの言葉に、一同はとある恐ろしい事実に思い至り、殆ど反射で背筋を竦み上がらせてしまった。

彼が持ち得ているスキルが、戦闘能力を向上させるような類いのものではないと言うならば。

ほんの一瞬、実質殆ど無かったような隙を逃さず、あのヘラクレスの両目を同時に射抜いてみせたのは、彼自身の實力以外の何物でもない。

リンクは今、確かに、何の小細工も無い、彼自身の純粋な力量のみで、大英雄ヘラクレスと真っ向勝負で渡り合っているのだ。

攻撃が通じているからと安心して気を抜くリンクではない、一度殺して終わる相手ではないことは重々承知している。

脳を貫かれたダメージが回復し、反撃される前にと放たれた矢が、ヘラクレスの心臓を真っ直ぐに狙う。

しかし、その鏃は心臓を貫く前の分厚い胸板で留められ、先ほどまでと比べて明らかに威力が落ちていることに気付いたリンクの眉間に皺が寄った。

「確か、死因に耐性が出来るとも言ってたな……」

全く効かなくなったという訳ではなさそうだが、矢による攻撃はもはや決定打とはなり得ないと考えた方がいいだろう。

戦いを見守る者達も数秒遅れてそのことに気づき、ある者は口の端を上げ、ある者は逆に強張らせ。

それら全てを置き去りにして、ほぼ復活を果たしたヘラクレスへと、リンクは自ら間合いを詰めて飛びかかった。

「リンクさん、何を!？」

マッシュが思わず上げた絶叫が、全員の内心を代弁する。

アーチャーの耐久力でバーサーカーの攻撃は到底耐えられない、今の今まで距離を保つように努めていたリンクがそれを把握していない筈が無いのに。

天高く跳躍し、自身を目がけて真っ直ぐに向かってくるその身へと、ヘラクレスは斧剣を振り上げる。

誰もが思わず、惨劇を予想してしまったその瞬間、太陽と重なったリンクの影が更なる光に塗り潰された。

視覚が役に立たなくなった中、一同は、予想の範疇に全く無かったものを…超重量の『何か』と『何か』が真っ向から激突した、大気を重く鈍く震わせる轟音と衝撃を耳と全身で味わった。

「い、今のは一体…？」

「リンク!!」

眩んだ瞳を、揺れる意識を何とか奮い立たせながら、船べりから乗り出さんばかりの勢いで戦場へと向き直る。

そんな立香達が真っ先に目の当たりにすることとなったのは、下手をすれば倍以上は体格差がありそうな者同士の、超重量武器による鏢迫り合い。

小さい方がそれを制し、相対した巨体を甲板へとめり込ませた衝撃映像だった。

「ウォアアアアアアアアッ！！！」

反撃どころか、起き上がって体勢を整える猶予すらも許さない。

戦闘の熱に両の目を完全に滾らせ、ヘラクレスにも負けない咆哮を喉から迸らせながら、リンクは、下手をすれば自身の体よりも大きく重そうな両手剣と共に虚空へと身を翻した。

先ほど鏢迫り合いを制した際と同じように、超重量武器を振り上げ、重力任せに振り下ろしたその一撃に、自身の全体重と全臂力を加えて注ぎ込む。

巨岩をも砕くようなその一撃は、後ろの甲板に衝撃を逃がしてしまうような無駄

を一切許すことなく、ヘラクレスの肋骨とそれに守られた臓器を叩き潰した。

魔物の頭蓋骨をそのまま加工したかのような兜と、毛皮を材料に守りよりも攻めと動きやすさを重視したと思われる装束を纏ったリンクの有り様は、矢を放っていた時の華麗さから一転、獣のような猛々しさを一同へと見せつけていた。

刃よりも鈍器と称した方が相応しい両手剣の攻撃への耐性を得て、猛攻が一旦弱まった隙を逃さずに復活を果たしたヘラクレスは、大英雄の名と威厳を見せつけるかのように、不利な体勢と状況で三度目の粉碎を見事防いでみせた。

斧剣を携えた剛腕の全力で弾き返されたリンクだったが、今度はそのまま吹っ飛ばされるようなことはせず、甲板の板張りにヒビを走らせながら踏み止まる。

息を吸い、全身に力を滾らせたほんの一瞬の間を同じくして、両者は再び、轟音と衝撃をもって互いの武器を真っ向からぶつかり合わせた。

《霊基パターンがまた変わってる、今度は…何てこった、『バーサーカー』だ!!》
《とんでもない計測結果が出ているよ、マグマを溜めに溜め込んだ火山ってところさ!!》

通信の向こうから聞こえる興奮しきった声も、もはや黙って見ているしかない一同の眼差しも。

互い以外の余計なものを一切を排除し、大気を震わせ、轟音を響かせながら、二人の狂戦士はただひたすらに真正面から激突し合う。

人の腕によって振るわれたものがぶつかる音だとは到底思えないそれが、幾度目かの拮抗が、突如響いた『嫌な』音によって傾いた。

重く硬い何かが、圧力に耐えられずひび割れたような鈍い音……その源は、リンクが振るう大剣の方だった。

刀身に走った、最初こそたった一本だったヒビは、もう一度二度と鏢迫り合いが続く度に数を増やし、更には大きくなっていく。

ギリギリまで耐えた大剣は、止めの一撃でもって折れるのではなく粉々に砕け散り、対抗する術を失って全くの無防備となってしまう持ち主のみを後に残す。

これ以上、もはや何もやらせぬと言わんばかりの雄叫びによってマッシュ達の悲鳴を掻き消しながら、斧剣を振りかぶるヘラクレス。

リンクはそれに、逃げるでも覚悟を決めるでもなく、腰を落とし、渾身の気合いを込めながら、自身の胸元で両の拳を打ち合わせた。

硬質な何か粉々に弾ける、甲高く鮮烈な音が辺りに響く。

それは敵味方を問わず、一瞬前に誰もが思い描いた予想から程遠いもの。

鉱石の結晶を思わせる赤い結界がリンクの身を瞬時に覆い、ヘラクレスの斧剣を受け止めると同時に弾き返したその瞬間。

立香は確かに捉えていた、視覚ではなく感覚で。

『岩の如く』という表現が決して例えでは無い、正しく岩のような巨人達が、一人はリンクが用いていたものと同じ大剣を片手で軽々と扱いながら、誇らしげな顔つきで彼と共に立つ姿を。

「ウゝァゝァゝァァァァァッ！！！！！！」

再びの咆哮を上げながら、リンクは、渾身の一撃を余すことなくはね返されて体勢を崩したヘラクレスへと飛びかかる。

振り上げたその手には、いつの間にか、両刃の大斧が握られていた。

自身の体を軸に大きく振り回し、その遠心力によって生まれた膨大な力を完全に制御し、余すことなく叩きつける。

一般の戦士が手にしたならば一生ものの名器であっただろうその斧は、振るう側から、振るわれる側からしても、生憎と力不足の代物で。

リンクの剛力とヘラクレスの耐久性に容赦なく板挟みにされた斧は、ほんの数回の使用であえなく粉々になってしまった。

またしても武器が無くなった……しかし、『そんなこと』はリンクにとって、攻撃をやめる理由になどなりはしない。

先ほどの斧と同じく、いつの間にか手にしていた大槌の振り上げで顎を砕き、続いての振り下ろしで脳天をかち割る。

数度の使用でまたも限界を迎えてしまったそれを、今度は躊躇なく投げつけることでヘラクレスの反撃を阻んでみせた。

今現在、ヘラクレスは何度死んだのか……もはや覚えていない、数える余裕があるくらいなら徹底して攻め倒すと言わんばかりの猛撃が続く。

既知の攻撃に耐性を得るという能力を、素で十分強靱すぎる肉体を、本来ならば対抗策が尽きていた筈の状況を、ありとあらゆる武器を次から次へと使い潰すという力技で強引に押し通す。

これで決められるかもしれない。

そんな考えを立香達の脳裏に走らせたリンクの猛攻は、彼自身には何の非も無いことを原因に中断させられた。

二人の戦場と化していた、どちらかが攻撃を放ち、どちらかがそれを防ぐたびに確実に崩壊を続けていた船の甲板が、ついに限界を迎えたのだ。

船底からへし折れ、今の今まで辛うじて船の形を成していた木材が、もはやただの瓦礫と化して二人もろとも水底へと沈まんと崩壊していく。

この状況で、体格の差が両者の明暗を大きく隔てた。

巨体故に瓦礫に飲み込まれたヘラクレスと、躊躇なく武器を手放して上手く隙間を抜けることに成功したリンク。

立香達の歓声は、分厚い板を突き破って伸ばされた巨大な手に足を掴まれたリンクが、そのまま崩壊に引きずり込まれた光景を前に中断させられた。

「リンク!？」

「リンクさん!!」

船一艘が崩壊の後に沈没した影響は大きく、『黄金の鹿号』と『アルゴノーツ』の甲板にいた者達が思わず体勢を崩してしまう程の大波が襲う。

それに耐えながら船べりに縋りついた立香とマシユは、未だ収まらない沈没の影響を、膨大な潮のうねりとそれに巻き込まれてひしめく船の残骸を、その只中に仲間が引きずり込まれた事実を前に蒼白にならざるを得ない光景を目の当たりにしてしまった。

名を呼ばなきゃと思うのに声が出ない、『大丈夫』と信じている筈なのに『もしや』と考えてしまうのをやめられない。

凍りついてしまった状況を動かしたのは、海面にひしめく残骸の中でも、特に巨大なものを吹き飛ばしながら浮上したヘラクレスだった。

『アルゴノーツ』の甲板でイアソンが高笑いを上げたのがわかったが、生憎と今は

構っていられる余裕は無い。

「リンクさん、リンクさんはどこですか!？」

《まさか、あの崩壊に巻き込まれて…》

「ドクター、縁起でもないこと言わないで!!」

ヘラクレスはそんな『黄金の鹿号』船上の混乱に目をくれることなく、水から完全に脱するために瓦礫の中でも特に大きなものへと身を乗り上げ……かけたその胸元に、美しい白銀が煌いた。

水中から放たれ、ヘラクレスの心臓を背中から貫き、太陽目がけて高々と掲げられた『ソレ』は、光り輝く三叉槍だった。

繊細な細工が施され、陽光に輝く鱗のような優美さを備えると共に、ヘラクレスの強靱な肉体を一撃で貫いた事実をもって武器としての真価をも証明してみせたその槍は、既に半身を乗り上げさせていたヘラクレスを一瞬で海中へと引きずり戻した。

薄暗い水中で尚も輝く槍が、持ち手の姿を瓦礫と波の隙間に薄っすらと浮かび上がらせる。

まともに動くどころか上下の感覚さえ見失いそうな水中で、それでも何とか自身に迫る槍の穂先を認識したヘラクレスは、引きずり込まれてもなお手放さなかった斧剣を全力でもって振り回した。

大英雄の臂力は水の抵抗をはね返し、逆に捕まえ、かき回されたそれは辺り一帯に巨大な渦潮を作り出す。

未だ辺りに漂っていた船の残骸をも巻き込んでとんでもない威力を備えてしまったそれに、陸の者が呑み込まれてしまっただけはひとたまりもない。

しかし：呑み込まれたのが陸ではなく水の者ならば、それも数々の困難を乗り越えてきた歴戦の勇士だったのならば。

そんな『もしも』が現実となって、一同の目の前で繰り広げられた。

薄暗い水中に光の軌跡を残しながら、渦潮を乗り越えるどころか突き抜けてみせたその者は、水面にひしめく船の残骸を避けて深く潜り：反転して急速浮上、煌く水面目がけて高々と突き出された穂先にヘラクレスを捉え、それでもまだ止まらな

かった勢いのままにもろとも水上へと飛び上がる。

最初から最後まで全てを見ていた一同の瞳に、優美な三叉槍に貫かれた状態で空中高く突き上げられたヘラクレスと、槍に見受けられるものと酷似した細工が施された青い鎧を纏った持ち手、リンクの姿が鮮明に焼き付けられた。

「ヤバい、心底たまげた……化け物野郎がサメにでも食らいつかれたのかと思ったよ」

《リンク君の霊基パターンまたも変化、いい加減慣れてきたな!!
今度は『ランサー』だよ、見てわかると思うけど一応ね!!》

あんなランサーありかよ!! ……というヘクトールの声を意識の隅で聞きながら、マッシュは『ゼルダの伝説』に記されている勇者の逸話の一部を思い出していた。

ある時は使命に、ある時は死によって隔てられた、勇者と『水の民』の姫の恋物語。

今は加護となって共に在る彼女達の眼差しは、その場面を未だ読んでいない立香

でさえ、変わらぬ想いを察することが出来るほどに優しく愛しげなものだった。

槍で深々と貫いたヘラクレスと共に、盛大な水飛沫を立てながら着水したリンクは、再び水中深くへと消えていった。

槍の輝きすらも見受けられなくなり、激闘から一転して恐ろしさすら感じるほどの沈黙が辺りを支配した。

……と思ったのも束の間、ほんの数秒の後に、今までのものとはまた違う異様な音と衝撃が辺りに響き始める。

その現象の最も大きな特徴は、『アルゴノーツ』とその船上にいる者達のみ起こっているということだった。

「きゃああっ!!」

「一体何なんだ、この音と衝撃は!!」

「ま、まさか、そんな冗談……じゃねえマジだ、『アルゴノーツ』の船底が直接攻撃されてやがる!!」

「ヘラクレス……おい、どうしたんだ!!」

私の声が聞こえないのか、さっさと戻ってこい、ヘラクレス!!」

呼べば来ると心から信じるイアソンの声に、応えたいというヘラクレスの想いは、例え狂化されたとしても変わることはない。

だとしても、海底に槍でもって礫にされ、引き抜こうとするも膨大な水圧に動きそのものを妨げられる現状では、呼び声に早急に応えるというのは難しいものがあった。

ヘラクレスが戻ってきてしまえば、流石にこんなことが出来る余裕は無くなる。出来る限りの全力、全速力で、手持ちの槍数本と引き換えに『アルゴノーツ』の船体に結構なダメージを与えたりリンクだったが、残念ながら穴を開けるまでには至らなかった。

（それでも、かなり力を削げた…十分だ）

遙か下、真っ暗闇の水底に感じるヘラクレスの気が、少しずつ大きく強くなって

いるのを感じる。

焦ることも、欲張ることもせず、リンクは人によってはもどかしく感じるほどの潔さでもって身を返した。

ヒレを持ち合わせているかのような俊敏さで、瞬く間に『黄金の鹿号』へと泳ぎ着いたリンクは、深い水中から水面へと向けて全力で水を掻いた勢いでもって魚の如く水面から飛びあがった。

『黄金の鹿号』の甲板よりも高く飛んだリンクは、一同が思わず開けたスペースへと降り立つたために空中で身を翻し：その全身を、またしても、『黄金の聖三角』の力と光によって包み込む。

軽快な音と共に甲板に降り立った時、既にその装いは一変していた。

熱い砂の風が吹く砂漠の民を思わせる衣装は繊細な造りをしていて、髪をまとめ上げて露わにされた容貌の美しさを余さず引き立てている。

加えて上半身の肌が大胆に露出されており、成熟しきっていない少年の体だからこそその艶めかしさを感じてしまった一部の：結構多くの者達が、咄嗟に視線を逸らせる羽目になってしまった。

自分がそんな類いの注目を浴びているとは欠片も考えていないリンクは、未だ戦場にいる気概を保ったまま、若干頬を赤くさせていたドレイクへと向き直った。

「ドレイク船長、アステリオスに頼んでおいた件は!？」

「あ：ああ、問題ない、いつでも行けるよ！」

リンクの説得を受けて『黄金の鹿号』へと戻ってきたアステリオスは、とある伝言を託されていた。

曰く：『どんな風も捕まえ、どんな波も乗り越えられる準備を整えておいて欲しい』とのこと。

意図が掴めきれないながらも、言う通りにしておいた方がいい案件だと判断したドレイクは、リンクとヘラクレスが激闘を繰り広げる最中に部下達を急がせておいたのだ。

ドレイクの返事を確認したリンクは、頷き、若干混乱が落ち着きかけている『アルゴノーツ』の一同へと向けてパチンと指をひと鳴らしさせた。

瞬間、大気を割る轟音と共に、枝分かれする稲妻が『アルゴノーツ』周辺に炸裂した。

ヘラクレスの不在と併せて、完全にパニック状態に陥ってしまったイアソンの様子がここからでも窺える。

ヘクトールとメディアが懸命に宥めようとしているらしいが、そう簡単に落ち着くようには思えない。

この隙を逃さずに生かすため、リンクは、両手のひらに収まる大きさの何かを取り出した。

深く美しい青を湛え、両手で構えることを想定し、指の位置に幾つもの穴が開いた『それ』が何なのか。

知る者は多く、目を疑い、言葉を失った者は、それと同じ数だけ存在した。

「リンクさん：そ、それはまさか、時のオカリナ!!」

《伝説の聖なる楽器、『勇者リンク』が原初の音楽魔術の使い手としても認識されている理由だ!!

成る程ね…今の君の靈基は『キャスター』、それを真の力でもって扱うための前提条件って訳か!!》

ダ・ヴィンチの言葉に返せるほどの余裕を未だ持たないまま、リンクはオカリナにそっと口をつけ…既に指が覚えているメロディーを、其れそのものが力を持つ曲の一節を響かせた。

くるりくるりと何かが回り、時に跳ね上がるかのような軽快な旋律。

普通に考えるならば、小さな楽器をもって短い曲を奏でた、ただそれだけの筈のこと…しかし。

そんな僅かな疑いすら抱く間もなく、旋律の力は瞬く間に現れた。

晴れ渡っていた筈の空が瞬く間に暗雲に覆われ、降り注ぐ豪雨に叩きつける暴風、それに伴い海までもが大型帆船を上下左右に揺さぶる高波で荒れ始めた。

「うっそだろ、今の今まで完全にピーカンだった!!」

嵐どころか雨や風の気配だって無かったんだ、あり得ないよこんなの!!」

「あり得なくてもこれが現実なんです、落ち着いて下さい船長!!」

海の知識と経験を深く得ていたが故に、人一倍混乱してしまったドレイクだったが、立香の言葉を受けて流石の適応力と立ち直りの速さを見せた。

予め荒海を越える準備を整え、ドレイクの一喝で冷静さといつもの調子を取り戻した船員一同は、船体を傷つけられた上に船長が混乱状態にある影響で動けずにいる『アルゴノーツ』を尻目に、嵐の海の向こうへと瞬く間に消えていく。

イアソンが正気を、空と海が元の穏やかさを取り戻した頃には、既にその船影は水平線のどこにも見受けられなくなっていた。

「ふう………あー強かった、流石は大英雄」

「軽い、軽すぎますよリンクさん!!」

《あのとんでもない戦いをそれで済ますのかい君は!?!》

「これでも疲れてるんだよ……」

『黄金の鹿号』の船べりに腰かけ、体力回復の一環として串焼き肉を頬張りながら、マッシュとロマニのツツコミに苦笑いを浮かべつつも律儀に返す。

そんなリンクへと、抗議、もしくは詰問のような勢いで詰め寄る者がいた。

「ちょっとリンク、あなたどうして逃げたりしたのよ!」

あの調子だったら……あなただったら、ヘラクレスを最後まで倒しきれたんじゃないの!?!」

「それはあたしも聞きたいねえ……いや、戦ってたのはあんただ、あんたが撤退すべきと思ったんならそれに否やを言うつもりはない。

ただ、エウリュアレの言う通り、『行けたんじゃないか』って思う気持ちが大きいのさ」

「俺としても、倒せるなら倒しておきたかったんだけど。」

……現状でそれは無理だ、あれ以上戦っていたらどんな状況は悪くなっていた。
撤退は、最善の選択とタイミングだったと思ってる」

「現状…と言うと？」

「準備不足」

そう言うリンクは、腰に下げていたシーカーストーンを手に取り、壁面に指を当てて起動させた。

首を傾げるドレイクやエウリュアレ達をよそに、それがリンクの宝具のひとつであることを知っていて、別の場面で動かしているところを見たことがある立香とマシュは、先ほどの戦いでリンクが見せた武器の持ち替えのタネがそれであることも気づいていた。

「俺の戦法は、ぶっちゃけて言えば『ド派手な消耗戦』なんだ。」

矢も、武器も、盛大に使い潰しておきながら無限じゃない。

使った分は無くなるし、無くなった分は補充しなければ増えない。

事前にどれだけ準備していたかが、非常に重要なんだけど。

ここの特異点、殆どが海で、武器や道具を何かのついでに補充できる機会が無かった。

上陸の機会が皆無って訳じゃなかったけれど、大抵が他の重要な目的があったり、団体行動優先だったりして、個人的に動ける時間はやっぱり無かったんだよな。

それでも、そういう事態も考慮した上でレイシフト前に準備しておいたから、十分余裕があった筈なんだけど……対ヘラクレス戦で吹っ飛んだ。

流石は大英雄、出し惜しみなんて余裕は無かったよ。

矢は殆ど使い果たしたし……あの巨体に効果的に痛手を与えられそうな重量系の武器は、もうあと何本も残ってない」

「勝つための決定打を失いかけてたってことか……成る程ね。

わかった、撤退の判断に間違いは無かったよ」

「でも……それじゃあどうするの、どうやってあのヘラクレスを倒すって言うのよ。あいつらは絶対に諦めない……今は落ち込んでるかもしれないけれど、すぐに気を

取り直して追って来るわ」

「……ああ、俺もそう思う」

「急いで奴らを追うだど？」

何を考えているんだ、それでも貴様は護国の英雄か!?

ヘラクレスをあそこまで追い詰めた奴…あの伝説の勇者を相手に、無策で突っ込んでどうすると言うのだ!!

今はヘラクレスの蘇生魔術を補充するのが最優先だ、メディアに全力で当たらせている!!」

「あそこまで追い詰めておきながら、撤退を選んだ理由って奴を落ち着いて考えてもらえませんかねえ!!

倒しきれない、もしくはこのまま戦っても不利に転じる、そう判断するだけの何かがあったんだ!!

急いで追撃すればその利点を生かせるかもしれない、逆にモタモタして猶予を与えたら対応されちまうかもしれない!!

どちらが勝ちの目が大きいのか、計算式は単純そのものだと思うぜ!!」

「…………アルゴノーツの修理を終え次第、追撃を開始する。

ただし!! ヘラクレスの回復を怠らせ、戦力をガタ落ちさせた責任はしっかり果たしてもらうぞ!!

次の機会に勇者の相手するのはお前だ、ヘラクレスの邪魔をさせないよう精々時間を稼ぐんだな!!」

「…………へいへい、了解っと」

「多分今頃、こんなやり取りをしてる頃じゃないかな。

イアソンだけなら、ビビッて躊躇い続けてくれることもあるだろうけど……ヘクトールがいる。

猶予が無いのは俺達の方だってことを正確に察して、イアソンを焚きつける筈だ。これから急いで適当な小島に上陸したとしても、そこが資源に溢れた豊かな島だっていう可能性は、ヘラクレスを今度こそ倒しきれほどの準備が整えられる確実性は低い」

「リ、リンクさん……それでは一体、どうすると言うのですか？」

「……イアソンの目的が気になるな」

「あのクソ野郎の目的だって？」

そんなものに意味があるのか……とでも言いたげに表情を顰めたドレイクをよそに、リンクは口もとに指を添えながら考え始める。

歴戦の戦士から一転、多くの兵士を生還させた戦術家としての、知恵と思考力を

武器とする者としての彼がそこにいた。

「言動といい、考え方といい：確かにことごとく腹が立つような奴だったけれど、あいつの性根は恐らく善性のものだ」

「アレで!？」

「そう、アレで。」

『善』っていうのは要するに、『自分が正しいと思ったことを尊んで実行できる』性質のことを言うんだよ。

もしあいつに、『自分の行動によって世界が滅びかねない』という認識があったら、あんなに自信満々にはなれない。

むしろあれは逆：自分は正義を成す英雄だという矜持、世界を救うのだという使命感、それらがもたらす万能感と優越感に浸りきってひたすら調子に乗っている、という認識が正しそうだ」

《彼は、手にした聖杯を『何か』に使う気満々だった。

聖杯を回収して特異点を修正できなければ、人理の修復は叶わない。

……うん、彼が自分の行いで世界が救われると考えているのなら、それは間違いなく思い込みの勘違いだね」

「何よそれ……一体何がどう影響すれば、そんな風に思い上がれるというの？」

「何の誘導も根拠も無しに、盲目的に思い込めるようなことじゃない。

間違いない『誰か』が裏で操作している……何らかの明確な目的をもって」

瞬間的に、脳裏に過ぎった影は二人分。

中でも、リンクの印象に強く残ったのは、杖を携えた華奢で可憐な魔術師の方だった。

「戦闘準備を怠る気は無い、そこは当然。

だけど、それ一本に固執せず、別の角度からあいつらの『裏』を探ってみる意味は十分にあると思う」

「……それでもし何も無かったら、あなたは一体どうするつもりなの？」

「エウリュアレはまだ不安か……分かった、払拭させておこう。」

その場合は、もう一度俺が相手をするさ。

今度は広くてしつかりした足場、陸の上で。

あの状況では使えなかった手、先のことを考えて敢えて温存した手を全て使う」

「まだ奥の手があったと言うの!？」

「ああ、まだまだ出し切ってはいない。

思っていることを正直に言うとな……いくら大英雄とは言え、たまに勘が働く以外はほぼ力任せに突っ込んでくるだけのバーサーカーを相手に、負ける気は一切無いんだ」

自信と確信をもってキッパリと言い切ったリンクに、一同は頼もしさに先んじて、寒気を錯覚させるほどの畏怖を覚えたのを自覚した。

（まあ……こちらではなく向こうが、俺とヘラクレスの一騎打ちをまた許してくれる確証は無いんだけど。

……これに関しては言わないでおこう、士気を下げてまで周知させておくこと

じゃない)

そもそも…忘れている者も多そうだけれど、ヘラクレスはこの特異点において最終目標ではない。

その前に立ちはだかる、最低限乗り越えなければいけない難関のひとつに過ぎないのだ。

イアソンの裏で糸を引く黒幕、その隠された真の意図は必ずある。

自分が相手をする以外の、ヘラクレスへの対処法も必ず。

水平線の彼方を見据えながら、確信を抱くリンクだったが。

後々見つかることとなるその『対処法』が、自分達のマスターにとんでもない無茶ぶりを要求するものだったことまでは、流石に予想しきれなかった。

あらゆる状況・環境に対応できる勇者リンクの万能っぷりと、服を着替えることで何かしらに特化するゲームシステムを元ネタに、トライフォースを膨大な魔力リ

ソースと考えることで確立させたクラス『ブレイヴ』の独自能力。

それが、『自らの意思によるクラス変換』です。

スカサハやBBもやっていましたが、アレは『着替えるために霊基を弄った結果クラスも変化した』なので狙った訳ではなく、明確に狙った上で気軽にポンポンとは流石に行きません。

多少弱体化させた上で、『ブレイヴ』のクラスに押し込められた一部の特化要素のみを独自に選び取り、相応しいクラスに当て嵌めて解放させることでその真価を発揮させる。

『勇者』のマテリアルで書いた宝具やスキルは『リンク』というサーヴァントの土台です、上乘せさせる形での変化なのであっちの能力はどの時でも使えます。

普通ならば個人で聖杯でも持っていなければ到底出来ません、魔力の消耗が激しすぎますから。

トライフォースを所有しているリンクだからこそ実現できた、あらゆる意味で彼のみが生かすことが出来る特殊能力なのです。

『リト』でアーチャー、『蛮族』でバーサーカー、『ゾーラ』でランサー、『熱砂』でキャスター。

更に『忍び』でアサシン、『クライム』でライダー、『英傑』でセイバーとなります。

加えて、勇者であることを隠すために着ていたフード付きの普段着は『ハイリア』のシリーズです。

着替えたからってあんな能力はつかない、ゾーラの鎧であんな泳ぎ方は出来ない……と思われる方は当然いると思いますが。

服はあくまでクラスチェンジを見た目で分かりやすくするためと、クラスごとに発揮される能力を象徴するためのものです。

今の彼はサーヴァント、逸話や解釈によって新たな姿や能力が付与されることがあります。

特に彼の場合は、世界各国で愛読されているので影響も大きいです。

その辺りを考慮し、『ゼルダの伝説』から能力や仕様をただ持つて来るだけではなく、サーヴァントとなったことで起こるであろう変化や新たな付与を想定して設

定を作っています。

なので、シリーズ全般を通したゾーラ族関係の能力と逸話の象徴として、ゾーラの鎧にはミカウの仮面をかぶった時に得られるような泳ぎの能力も付け加えました。

他の服も、同じような仕様と能力を想定しています。

セイバーではマスターソードの真名解放とハイリアの盾が解禁。

オカリナを筆頭とした音楽関係の能力や、各種アイテムの使用はキャスターにて。移動や乗り物関係はライダーです、ウルフリンクへの変身はこちらを想定しています。

あと変わり種で考えているのが：『顔を変える』ことを『違う自分になる』ことと解釈し、アルターエゴで各種仮面の使用を解禁、ですかね。

リンク君自身、サーヴァントと化した自分の能力を少しずつ仕様確認しながら戦っているの、出てくるタイミングに関しては長い目で見たいただければと思います。

資料&ネタ語り

歴代のゼル伝シリーズをプレイした纏め

シリーズ全体と個々のゲームにおいてのネタバレあります、ご注意下さい。

代々の勇者達に関してを、私的に抱いたイメージや解釈も交えながら纏めてみました。

二つ名に関しては、『時』や『風』など公式のもの以外に個人的につけたものもありますので、その辺りはご了承ください。

加えて、リンク達的能力を、サーヴァントとしてのクラスに振り分けるとどんな感じになるのかを考えてみました。

リンク達は皆、基本的な7つのクラス全てに適性を持っていますが、そのリン

クが独自に持っている能力なんかも数多くありますので。

『彼の場合は特にこのクラスが合っている』というのも、後ほど書いていきます。

セイバー

リンクの標準武器は剣なので、基本的に全員が当て嵌まるクラスです。

中でも特に適している者を選ぶとすれば、剣の製造に関わった者、特殊な剣を得た者といった付加要素によると思います。

アーチャー

リンクの弓使いとしての側面を抽出するのならば、肝心なのはやはり『光の弓矢』の存在です。

トライフォースの黄金の力を込めて放つ矢で、その威力は反則級。

あらゆる闇の力を打ち消し、まともに当たればラスボスをスタンさせ、雑魚敵なら一瞬で消滅します。

ランサー

水中での移動や戦闘を可能、もしくは容易にする、道具や能力の所持。

水という領域において深く関わるゾーラ族が、基本的に使用する武器が槍なのと、猛スピードで泳ぎながらの回転アタックや水面ジャンプが突攻撃っぽいので。

ライダー

エポナを始めとした騎獣だけでなく、船や機関車なんて例もあります。

更に、何かに『乗る』だけでなく、クローシヨットやパラセールなどの『アイテムを使用した移動』に関してもこちらに加えます。

キャスター

特殊な効果を發揮するアイテム、能力、魔法の杖、楽器の所持。

ゼル伝のゲーム内においては、敵を倒すためと言うよりも謎を解いて先に進むための力というイメージが強いのですが、Fateの視点と世界観から見ると、彼が物理に特化した戦士であると同時に魔術師としても大変な使い手であることがわかります。

アサシン

隠密や潜入の実績、更にはそれを手助けする能力やアイテムの所持。

そもその話として、強大な魔王とそれに従う無数の魔物を相手に一人で立ち向

かい、目当てのものを手に入れる為に敵と仕掛けの巣窟であるダンジョンに単身乗り込むというゲームシステムそのものが、完全にアサシンのそれですから。

ブーメランやカギ爪ロープなどの、魔力ではなく技術で使うちょっと特殊な揃め手タイプのアイテムも、このクラスに対応するものとします。

バーサーカー

理屈で考えて作戦を立てるのではなく、膨大な戦闘経験の中で得てきた技術と勘を無意識レベルでフル活用しながら暴れまくるという、完全戦闘モードへの移行をイメージしています。

『誰か』が『特別』に持っている要素という訳ではないので、特別に書き出してはいません。

エクストラクラス

基本の7つのクラスには収められないような、特別な能力や実績があって、更にそれが何かしらのエクストラクラスに当て嵌まるようなもの場合は、それに関しても書いておきます。

大空の勇者

出典…スカイウォードソード

機種…Wii・WiiU・NSW

特化クラス…セイバー・ライダー

末代の勇者が知るやらかしエピソード…とある店で店主自慢のシャンデリアを盛大にぶっ壊し、弁償代わりに働くことになった際に、届け物のスープを手前でうっかり飲み干してしまい、大急ぎで再往復する羽目になった（二杯目のスープ代はもちろん自腹。…ちなみにこれ、私自身が実際にやってしまった失敗です。シャンデリアの方はアイテムとイベントを回収するための仕様でしたが、スープに関してはボタンを押し間違えました）。

『終焉の者』との戦いから自身の民を逃がすため、女神ハイリアによって浮かべられた空の大地『スカイロフト』にある騎士学校の生徒。

不自然な竜巻に巻き込まれ、目の前で遙か雲海へと落ちていったゼルダを捜すべく、お伽噺の存在とされていた『大地』へと剣の精霊ファイと共に旅立つ。

後の世で、選ばれた勇者のみがその手に出来るとされる神剣『マスターソード』をその手で鍛え上げ、その魂で以って永遠に神剣の主となった『初代』勇者。

前触れなく渡された楽器を程なく弾きこなし、新しい曲をただ一度聞いただけで覚えてしまうという規格外な音楽のセンスは、この頃から持ち得ていたらしい。

騎士学校では寮住まい、寝坊癖のある彼を起こしに来るのが幼馴染なゼルダの日課で、それが同窓の男子生徒達からの妬みを買っている。

その筆頭が『バド』という名の同級生で、ゼルダにいいところを見せたい、好きな子と仲のいい男が気に食わないという気持ちが大に空回りし、リンクに対して卑怯な苛めっ子そのものな振る舞いをして、当のゼルダからは嫌われてしまったのだけなど。

行方不明になったゼルダの手掛かりを知っているらしいリンクに、強引について

いって共に降りた大地で、『勇者』として強大な敵と戦う彼の姿を目の当たりにしたことをきっかけに、リンクは凄い奴なんだということを素直に認め、その上で自分出来る精一杯のことで彼を助け、困難を前に『お前なら出来る』と激励してくれる、リンクの孤独な戦いを支える存在になってくれた。

スカイロフトの民は、『ロフトバード』という人が騎乗出来るほどの巨大な鳥と、一人につき一羽の生涯に渡る絆を結ぶ。

これは何か儀式が必要だとか、試練を越えて探しに行くとかではなく、その時が来ると運命の鳥が目の前に現れるというもので。

幼い頃のリンクが相棒としたのが、とうに絶滅した筈の紅いロフトバードだったことが、当時随分と周りを驚かせたとか。

このロフトバードこそが、『聖三角』と『翼』で構成されるハイラル王国の紋章の、『翼』にあたる存在になる。

いずれ現れる勇者の旅路を手助けするために、女神ハイリアによって造られた神剣の精霊ファイ。

目の前に現れたものや現状を分析し、それに基づいた助言を行ったり、目的

のものの特徴を覚えて本体（神剣）の剣先でそれを追える『ダウジング』の能力によって、勇者の旅路をサポートする。

リンクのことを『マスター』と呼び、『○○の確率○○%』といった感じのコンピュータじみた口調や思考回路を備えていた彼女は、ただの果たすべき務めだった筈の旅路の中で、掛け替えのない想いを得る。

『ありがとう、マイマスターリンク。いつかまた、あなたの魂と共に……』

リンク（マスター）の剣（ソード）……それは与えられたものではなく、彼女自身誇りと歓びをもって名乗ったものなのかもしれません。

創剣の勇者

出典…ふしぎのぼうし

機種…GBA・WiiU

特化クラス…セイバー・アサシン

末代の勇者が知るやらかしエピソード…ピッコル族と同じ大きさになった姿での冒険が面白すぎて、溢れてやまない好奇心と探求心を子供らしからぬ身体能力で満たしまくり、出会い当初こそ我が儘で横暴だったエゼロを正当なストッパー役に昇華させた（あまり効いていなかったけれど）。

大地に降りて新たな生活を始めたスカイロフトの民、その子孫達によって建国された、ハイラル王国一の鍛冶屋の孫。

王国には『ピッコル族』という、親指ほどの小さな体を持ち、かつて勇者に聖剣を授けた不思議な妖精の伝説が伝わっていて、年に一度のピッコル祭りは毎年賑やかに行なわれていた。

100年に一度の、ピッコルの世界と繋がるという特別な周期に重なったその年の祭りは特に盛大で、リンクも幼馴染のゼルダ姫と共に楽しんでいただけれど。その喧騒の中に紛れ込んだ謎の男『グフー』によって、かつてピッコル族から授

けられて無数の魔物を封印する鍵となっていた聖剣が破壊され、ゼルダ姫は石化の呪いをかけられてしまった。

封印から解き放たれてハイラル中に蔓延る魔物達の脅威と、娘の身を蝕む呪いの両方に対抗するために、ハイラル王はピッコル族の助けを求めることを決めた。

グフーに折られてしまった聖剣、『ピッコルの剣』。

それを蘇らせることが出来れば、魔物を再び封印し、ゼルダの呪いも解くことが出来る筈。

しかし、ピッコル族は不思議な種族で、その姿は子供にしか見つけることが出来ない。

祖父の推薦に頷き、王の要請を受け入れた幼い勇者の、ハイラル王国とゼルダ姫を救うための冒険が始まった。

ピッコル族が住むという森に向かったリンクはその道中で、自らの意思で動いて喋る不思議な帽子『エゼロ』と出会う。

後に明らかになる彼の正体は、力を求める欲望に憑りつかれた弟子のグフーによって呪いをかけられた、ピッコル族の賢者だった。

弟子の暴拳を食い止めようと何とかここまで来たものの、帽子の身で動くのは流石に辛く、目的を同じくするリンクの頭上に収まったエゼロ。

彼の力を借りて小人化し、森や山だけでなく人の町でも密かに暮らしていた、ピッコル族達の助力や導きを得ながら乗り越えていく冒険の先で。

リンクは、『ピッコルの剣』を越える新たな剣を……最大で三体の、所有者の能力をそっくりそのまま写した分身を作り、力を込めて振ればあらゆる呪いを解くことが出来る聖剣『フォーソード』を完成させ、その最初の担い手として、力に吞まれた末路の姿『魔神グフー』を打ち倒すこととなる。

この作品で個人的に最も魅力的だったのは小さくなった視点で見る世界、特に人間の町で密かに、実際はかなり大胆に間借りしながら暮らしている、ピッコル達の暮らしっぷりでした。

思い出したのは、『借り暮らしのアリエッティ』ですね。

梁の上とか壁の隙間とかのちょっとしたスペースで、人間からこっそり頂戴するだけじゃない、ピッコル達自身の高度な文化の存在を窺わせる描写が冒険していて凄く面白かったです。

この次のタイミングで、復活した魔神グフーを相手にフォーソードを携えて戦う『四つの剣』があるのですが、現状では手に入らなくて未プレイなので省略します。

時の勇者

出典…時のオカリナ・ムジュラの仮面

機種…N64・3DS・NSW

特化クラス…セイバー・キャスター・アルターエゴ

末代の勇者が知るやらかしエピソード…森育ちの上に子供だったため、適度に負けてもらわないと商売にならないのだということをつ分からずに、賞品や賞金が出るゲームや競技で情け容赦なく荒らしまわり、『緑の悪魔』呼ばわりで悉く出禁にさせられた。

迷いの森の奥深くに住む、いつまでも子供の姿のままという不思議な性質を持ったコキリ族の、誰もが持つ筈の相棒の妖精がいつまで経っても現れないことで、仲間達からも変わり者とされていた少年。

本人も知らなかったその正体は、戦火を避けて森に逃げ込んだ女性の、我が子を最期まで守ろうとしていた姿に心を打たれたのと、その子自身が大変な運命を担っていることに気づいたコキリ族の守り神『デクの木』によって、森の民を装いながら育てられたハイリア人だった。

悪しき力によって命を蝕まれていたデクの木から、今わの際の言葉としてそれを告げられたリンクは、彼の言葉通りに自身の運命と向き合うべく旅に出る。

時の勇者は、『ゼルダの伝説』という物語全体における重要な転換期となる存在です。

彼が時を越える冒険を行ない、幾つもの可能性を残したことで、後の世界線が分岐しました。

『力の魔王』は『知恵の姫』を捕らえ、『知恵の姫』は『勇気の少年』を導き、『勇

気の少年』は『力の魔王』を打ち倒すという、トライフォースにまつわる運命の三竦みの構図が最初に築かれたのも、彼の時代でのことになります。

ゼルダから託された時のオカリナで数多くの力持つ曲を奏で、それによって自身の運命を成し遂げたりリンクは、去ってしまった友を捜すための新たな旅路の途中で、次なる戦いの舞台へと、終焉を前に繰り返される三日間の中へと身を投じる。志半ばで力尽きてしまった魂の無念を癒し、存在そのものを身につけることでその姿と能力をそっくりそのまま受け継ぐ『仮面』の力は、音楽を始めとして他にも色々要素がある『キャスター』の枠に追加で収めるのには、それ単体であまりにも強力かつ特殊すぎるのではないかと思つて。

『仮面をまとう』ことは、実態としても概念としても『別の自分になる』ことではないかと考え、『アルターエゴ』の枠に合致すると解釈しました。

彼が『勇者』として成し遂げた冒険、世界を救ったのだという偉業は、過去に戻り、ガノンドロフが本来起こす筈だった凶行を未然に防いだため、彼がその後生き続けた世界線においては『無かったこと』になってしまいました。

冒険の中で得た絆や思い出も、覚えているのは自分だけで、この世界にいるのは

大切な人達とよく似た別人で。

ファン達の間では、世界を救った末に一人ぼっちになってしまったリンクがあまりにも可哀想だという声や、彼のその後の人生は無念と未練に満ちたものだったという解釈も、結構多いみたいですけれど。

彼だって人間ですし、そういう気持ちが欠片も無かった筈はないと、世界が救われたのならば自分はそれで構わないと心から思えるような聖人なんかではなかったと、私だってそう思うけれど。

それでも、大切な人達との絆と思い出は決して忘れずに、新しい人達との出会いに恵まれ、寂しさや後悔で開いた心の穴を少しずつ埋めながら、それなりに幸せに、前向きに生きてくれたんじゃないかとも思いたいです。

現実では救いようのない展開やキャラクターを幸せに出来る、それは『二次』の領域を超えた創作活動そのものの大きな醍醐味だと考えています。

『彼（彼女）は幸せに生きたんだ』と信じれば、少なくとも自分の中にひとつは、その人が幸せに生きられる世界線を作ることが出来ます。

そもそも、執筆するにあたって私が設定した『リンク』の人物像が、大切なもの

を守るために必要ならば幾らでも戦うけれど、平和に暮らせるのならそれに越したことは無く、家族や友人を蔑ろにしてまで戦いのスリルや功名を求めようとは思わない、感性としては普通のものを持った少年なので。

勇者ではなくただのハイリア人として、幼い頃の分を補えるような家族を持って、平凡で幸せな人生を過ごして……その先に居てくれたのが、『黄昏』の彼だったと。新たな勇者を導くために今一度、安らぎを捨ててかつての勇者として立ち上がってくれたのだと、そんな世界がある可能性を示してみたいです。

『時のオカリナ』で分岐した。三つの可能性のひとつ。

時の勇者がガノンドロフに敗れ、後を継いだ者達の奮闘によって、多大な犠牲と引き換えに魔王の封印が辛うじて成し遂げられた世界線。

このルートでの魔王ガノンは封印されながらも強い力を保ち続けていて、彼自身や信奉者による復活の試みが幾度となく行なわれ、それに対抗できる新たな『勇者』も、それと同じだけ現れることとなった。

目覚めの勇者

出典…神々のトライフォース 夢をみる島

機種…SFC・NSW GB・NSW

特化クラス…セイヴァー

末代の勇者が知るやらかしエピソード…面白半分の悪戯でコッコ（ニワトリ）にちよっかいを出した結果、群れごと盛大な逆襲を受けて、謝罪も反省も聞き入れて貰えずに情け容赦なくズタボロにされるという恐怖と絶望を魔物ではなく鳥を相手に味わわされ、来世にまで引きずるような因縁とトラウマをその魂に刻まれた。

かつて行われた『封印戦争』で最前線にて奮闘し、滅亡寸前の憂き目に遭いながらも魔王封印の最大の功労者となった、ナイトの一族の末裔。

かつての惨劇が遠い過去の伝説となったハイラル王国で、自身の血筋の秘密を知

る機会も無く、両親こそいないものの親代わりの伯父と共に平和に暮らしていた彼は、ある雨の夜に『勇者』として導かれることとなる。

魔王を倒す力を秘めたマスターソードを手に入れ、ゼルダ姫を含めた魔王復活の生け贄として捧げられた娘達を助け出し、魔王ガノンの復活を阻み、王国に再びの平和をもたらした彼はその後、新たな力を身につけるための修行の旅に出た。

それを終え、ゼルダ姫達が待つハイラル王国への帰路についた海上で嵐に巻き込まれたリンクは、地図に載っていない不思議な島へと流れつき、その住人によって助けられる。

その島から出る方法を探すため、自身を待つ人々の下へと帰るために、謎のフクロウに導かれながら島での冒険を始めた彼は、その道中でこの島の真実と、自身がこの島に辿り着いたのは偶然ではなく、果たすべき務めがあったからだということを知る。

『ゆめよ　どうかさめないで

ひとはねがうけれど

ゆめは いつかさめるもの

それがときのさだめ

かぜのように すべてきえさっても

おもいでのをらをおよぐ

ゆめは きえてしまっても

いつもきみのなかに』

救うために滅ぼす……そんな重すぎる業と責任を、最後まで背負い抜いて。

誰かが覚えていてくれば、忘れられさえしなければ、例え幻でもその存在は永遠だという新たな希望を示され、それを確かに叶えてみせた彼は、F G O においてはまだ未実装で F a t e シリーズ全体からしても非常に珍しい、セイヴァー（救世主）クラスの適性があるような気がしました。

ことわり
理の勇者

出典…ふしぎの木の实『時空の章』『大地の章』

機種…GBC・3DS

特化クラス…キャスター

末代の勇者が知るやらかしエピソード…たてごとやロッドを使用して状況を変化させた際に、どう変わるのかを計り損ねて穴や水に落ちたり、魔物の群れの中に放り出されたりと、何度か洒落にならない事態に陥りかけた。

謎の導きを受けた少年リンクは、それに応えてハイラル城を訪れ、その地に安置されていたトライフォースの力を手に入れる。

それによって新たな試練を与えられたリンクは、ハイラル王国から遠く離れた場所に飛ばされ、その地で特別な役目を果たしていた巫女が悪しき者の手で連れ去られる現場に居合わせてしまう。

巫女を失ったことで理が歪み、めちゃくちゃになってしまった世界の均衡と平和を取り戻し、攫われた巫女を助け出すための、勇者の新たな冒険が始まった。

冒険の舞台と巫女は、『時空の章』と『大地の章』でそれぞれ異なります。

『時空の章』では古くからの歴史が伝わる地『ラブレヌ』の、『時の巫女』ネール。『大地の章』では四季に恵まれた豊かな地『ホロドラム』、『大地の巫女』ディン。それぞれの話はソフトとしては独立していますが、『あいことば』の機能を使用することで、前後こそプレイする順番によって入れ替わるものの、連続する同一の物語として成り立たせることが出来ます。

ラブレヌでは『時のたてごと』の力で過去と現代を行き来し、過去の世界で植えた種が現代で育っていたり、長い年月の中で地形が変化していたり、どちらかではなく手に入らないアイテムを探して持っていたりといった時間の経過を。

ホロドラムでは『四季のロッド』で周囲の季節を変え、夏ならば鳶が伸びて足場になっていたり、冬ならば水が凍って渡れたりなどの環境の変化を利用して、先へと進んでいきます。

そうして、魂、森、獣、炎、土、山、海、星の8つの『時空の理』と、同じく8

つの、土、時、太陽、雨、ぬくもり、風、実、四季の『大地の理』を得た彼は、その力で以って乱れてしまった世界の拮抗を正し、巫女を攫った悪しき者へと戦いを挑みます。

タイトルにある『ふしぎの木の実』は、戦闘や謎解きに使用するギミックアイテムで、ぶつけることで対象を燃やす『アチチの実』、物理ダメージを与える『イテテの実』、自身の移動速度を上げる『サッサの実』、ぶつけた相手を吹っ飛ばしたり自分自身を任意の場所に移動させたりする『ピューの実』、普段はランダムで特殊な状況では特別な効果を発揮する『ハテナの実』があります。

OPの段階で既にトライフォースを、それも完全版を手に入れていたり、二度の冒険を経ながら世界の理を得たり、間違いなく☆5キャスターだと思えるような凄まじい力を持ったアイテムを駆使していたりと、何気に『リンク』の中でも上位に食い込むような実力の持ち主だった気がします。

『合言葉』を使用した二度目の冒険ではゼルダ姫が登場し、通常のラスボス戦が終了した後続いた更なる物語の中で、彼女が三人目の巫女として攫われます。

巫女達を攫い、民の恐怖や絶望で世界が満たされることを促そうとした者達の目

的は、『太古の魔王を復活させる』こと。

その魔王とはもちろん、シリーズお馴染みの彼のことです。

次元の勇者

出典…神々のトライフォース2 トライフォース三銃士

機種…3DS

特化クラス…フォーリナー

末代の勇者が知るやらかしエピソード…ロウラルから戻るために亀裂を進んだら、出た先が見知らぬ誰かの家の中で、盛大に不法侵入をかましてしまった。

鍛冶職人見習いの少年リンクは、謎の男『ユガ』によって人が絵に変えられ、連

れ去られるという事件の現場に居合わせる。

他人だけでなく我が身をも絵に変え、攻撃がまともに届かないユガを相手に、リンクは手も足も出なくて。

倒れてしまった彼を助けて家まで運んだのは、紫のローブを纏い、不気味な兎のようなフードを深くかぶって顔が窺えない謎の少年、旅の商人を名乗るラヴィオだった。

彼に押し切られて家への滞在を許したリンクは、宿代替わりだという謎の腕輪を受け取った後に、此度の事件について報告すべくゼルダ姫の元を訪ねる。

緑の少年が邪悪な者と戦う夢を見ていたゼルダ姫は、リンクを今代の勇者と確信し、事件と犯人についての調査を進めることを頼んだ。

その結果、ユガが狙っているのはかつての賢者の末裔であることに辿り着いたりリンクは、ラヴィオの腕輪を身につけることで備わっていた、ユガのように我が身を絵に変えて、壁の中と外を自在に出入りし、絵と化したまま壁の中や亀裂を移動することも出来る能力を駆使しながら、ユガの企みを阻止するべく奔走する。

しかしその手は僅かに及ばず、ゼルダ姫を含めた当代の賢者達は残らず絵に変え

られ、ハイラルの至る所に走った次元の裂け目の先、ハイラルとは表と裏、光と影の関係となっている異世界『ロウラル』へと連れ去られてしまった。

魔王ガノンの力を手に入れようとしているユガの企みを知ったリンクは、ゼルダ姫によく似たロウラルの姫君ヒルダによって導かれ、出かけている隙に完全に家を乗っ取って商売を始めてしまったラヴィオから攻略用のアイテムを借り、または買い取りながら、囚われた賢者達を助けるべく、ロウラル各地のダンジョンへと挑んでいく。

自分自身を絵に変えて、敵の攻撃から逃れ、壁面を伝って移動する。

……書くだけなら簡単ですけど、普通にこれ、凄まじい能力だと思います。

壁面化すれば、同じく壁画となった身同士でなければダメージを与えられないという点からしても、ただ絵になっただけではなくて、三次元から二次元へと存在そのものを移動させてますよね。

次元の割れ目を通り道にロウラルへと移動出来る力でもありますし、その辺りから彼の二つ名は『次元』かなと思いました。

フォーリナーのクラスに関しては、リンクに外宇宙の神や旧支配者の要素が混じ

り込むことはあり得ないと、最初は思っていたのですが。

クトゥルフ由来の『降臨者』に限らず、遠いところや異なる世界からの『来訪者』という意味でもあるそうなので。

異世界であるロウラル由来かつ、異なる次元を行き来するという力の性質からして、フォーリナーに相当すると解釈しました。

そんな力をリンクに託したラヴィオが、一体何者かというところ……言うなれば彼は、平和な異世界を巻き込んでしまう企みを阻止するため、二度と帰れないことを覚悟で『ハイラルの勇者』を探しに来た、『ロウラルの勇者』です。

調べてみたら続編だったらしい『トライフォース三銃士』も、一応プレイしてみたのですが……三人での協力プレイが前提となっているシステムを、一人でこなすのが厳しすぎて、作品の雰囲気とストーリーを把握した段階で止めてしまいました。別々の能力を持った三人がそれぞれの役割を果たす必要があるのを、協力プレイならそれぞれで動けるのを、一人でかつ一時停止無しのリアルタイムで切り替えながら、一瞬の判断と操作を要求されるアクションをこなさなきゃいけないなんて、とんだ鬼畜難易度でしたよ。

あと、多少シュールな要素がシリーズを通して存在しているゼルダの中でも、ストーリーとノリが特にコミカルで、はつきり言って他のゼル伝シリーズと比較しながらまともに考えてしまうとやってられない感がありまして。

物語の始まりからして、国を挙げてオシャレであることを絶対の価値観としているドレース王国の、中でも最も美しいと評判のフリル姫が、魔女の呪いによってクソダサな全身タイツ姿にされてしまい、哀しみと恥ずかしさのあまりに閉じこもってしまった姫を救うべく、9…1分けの髪形と立派な揉み上げを備えていることという、ドレース王国に古くから伝わる姿を条件に勇者を集い、そこにリンクが現れるというものでした。

特殊な材料を使用したドレース王国特製の服は、どれも着るだけで様々な効果を得られるという優れもので、そういう国の象徴である姫様が最も重要な力を奪われたというのが国を揺るがす重大案件だということは、紛れもない事実ではあるんですね。

『末代の勇者』の本には、友好関係にあるドレース王国が窮地にあることを聞きつけたゼルダによって、リンクがハイラルの勇者として派遣されたなんて感じの流れ

が記されてそうです。

再生の勇者

出典…ゼルダの伝説・リンクの冒険

機種…FC・NSW

シリーズの最初期、FCソフトとして発売された一番目と二番目で、『リンク』としての個性や能力の差異などがまだ描かれていない頃の作品で、クラスとエピソードに関してはちょっと分からないので除外しておきます。

長きに渡る魔王ガノンとの戦いの中で荒廃し、幾つかの小国へと分かたれてしまった、かつての大国ハイラル。

旅の途中にこの地を通りかかった少年リンクは、魔物に襲われていた老婆を助け、彼女がハイラル王国の系譜を受け継ぐゼルダ姫の乳母インパであることと、力のトライフォースを奪った魔王ガノンの手によって、ゼルダ姫が攫われてしまったことを知る。

王国の人々が苦しめられているのを見過ごせなかったリンクは、力のトライフォースを得た魔王ガノンに対抗するために、もうひとつの知恵のトライフォースを探してハイラルの地を冒険する。

囚われる寸前のゼルダ姫が、それまでもがガノンの手に渡ってしまわないようにと、八つに砕いてハイラルのあちこちへと散らせた知恵のトライフォースを集めたリンクは、その力で以って魔王ガノンを倒し、ゼルダ姫と王国を救った。

魔王ガノンを倒した後も、主の復活を企む残党の魔物が暴れまわっているせいで、王国は平和とはいえない状況にあった。

旅を続けずにハイラルに留まり、ゼルダ姫を手伝って復興に精を出す日々を送っていたリンクは、16歳の誕生日を迎えた朝、自身の手の甲に正三角の紋章が浮かび上がるのを目の当たりにする。

それを見たインパが驚愕の後に語ったのは、以前リンクが取り戻した『力』と『知恵』の他に実はもうひとつ、『勇氣』のトライフォースがあるということと、とある古い過ちの話。

伝説の物語となるような遙か昔、まだ大国だったハイラルは完全なトライフォースの力によって収められ、繁栄を謳歌していた。

しかし、ある時の代替わりにおいて次代の王子は、トライフォースの全てを受け継ぐことが出来なかった。

当時のゼルダ姫、妹が自身を差し置いてその謎を父から聞いていたことを知った王子は、側近の魔術師を伴いながら彼女を問い詰めるも、姫は決して口を割ろうとはしない。

王子以上に業を煮やした魔術師は、流石に止めようとした王子を弾き飛ばしながら、ゼルダ姫に決して覚めない眠りの呪いをかけてしまう。

完全なトライフォースを手に出れなかったのは、とんでもない過ちを犯しかねない危うさが自身にあったからだ、妹を失ってから気付いた王子は酷く後悔して、遠い未来で誰かが彼女を目覚めさせてくれることを信じて、彼女の身を秘密の部

屋に安置し、王家に生まれた娘には代々『ゼルダ』と名付けることを命じた。

そしてその後、国の繁栄をトライフォースの力に委ね切ってしまったハイラル王国は、その恩恵を受けられなくなったことで徐々に衰退し、今に至ってしまったのだという。

当時の王が遺し、不思議なことにリンクにしか読み取れなかった巻物には、真のトライフォースを得るに値する者が正しく成長した暁にはその証が紋章となって現れるということと、勇気のトライフォースを手に入れるための方法が記されていた。

インパから改めて、勇気のトライフォースを見つけ出し、王国に再びの平和を取り戻すことと、今も眠り続けるゼルダ姫を救い出すことを頼まれたリンクは、魔王ガノン復活の鍵として自身の命を狙う魔物がひしめくハイラルの地へと、再びの旅に出る。

上記のストーリーは当時付属されていた説明書に記されていたもので、実際にプレイしたゲームの中には一切出てきません。

今ではどのゲームも、始めたばかりの時はチュートリアル込みで操作方法を説明

されるのに、スイッチのオンラインでプレイしてみた際にはそういうのが一切無くて、いきなりフィールドに放り出されたので思わず『へっ!?!』となつてしまいました。

調べてみたら、私が生まれた頃に発売されたゲームなんですね……そんな昔と思うべきか、たったそれだけの年月でゲームはここまで進化したのかと驚くべきか。ゼルダシリーズとしては偉大なる初代なのですが、時系列として見てみると結構後の方の、それもハイラル王国が衰退してしまっている時代に活躍したリンクなんですね。

公式では『始まりの勇者』という二つ名がついているのですが、メタ視点が無いと何が『始まり』なのか分からないので、別に考えてみました。

失われてしまっていたトライフォースを再び集め、『勇者』の伝説と活躍を蘇らせ、ハイラル王国がかつての平和と繁栄を取り戻すための第一歩となつた彼は、『再生』の勇者です。

時の勇者が魔王ガノンを倒し、勇者自身は彼の時代に帰ってしまったものの、勇者が魔王を倒して王国を救ったという伝説は確かに、後の世へと伝えられていった

世界線。

後の世で復活したガノンドロフが、再びハイラルへの侵攻を開始した時。

人々は、また勇者が現れて自分達を救ってくれると信じ、一心に祈りを捧げたのだけれど、残念ながら勇者は現れなかった。

時の勇者は彼が生きていくべき時代へと帰ってしまった、ここは『勇者の魂を持つ者』がいなくなった世界線だったのだ。

ハイラル王国は水底深くに沈み、その後長い時が経ち、果ての见えない水平線の中にぽつぽつと島が顔を出しているだけの世界が、『そういうものなんだ』と人々の間で当たり前になっていた頃。

とある島に、一人の少年の姿があった。

風の勇者

出典…風のタクト・夢幻の砂時計

機種…GC・WiiU NDS・WiiU

特化クラス…セイバー・ライダー・キャスター

末代の勇者が知るやかしエピソード…新手かつ凄腕の海賊が現れたという噂を耳にして、『テトラ達以外にも海賊っているんだ、物騒だな』と思っていたら、帆を張った小さな小舟でルートも何も関係なく爆走し、大砲を所かまわず撃ちまくり、ドンピシャの狙いで海底の宝物を根こそぎ頂戴しているという目撃証言が続いて、『それ僕だ』と赤獅子の王と一緒に虚無顔になった。

穏やかで平和な時間が流れるプロロ島で、祖母と妹との三人家族で暮らす少年リンク。

12歳の誕生日を迎え、島に古くから伝わる祝いの風習として勇者の緑衣を身につけた彼は、一人の少女が謎の怪鳥によって攫われている姿を目撃する。

船からの砲撃を受けた怪鳥は少女を離し、その身を心配したりリンクは彼女が落下

した森へと駆けつけ、男勝りな女海賊テトラと知り合った。

その後、彼女と共に森を出たリンクの目の前で、『耳の長い少女』を狙って再びやってきた怪鳥は、テトラではなく彼女と同じ特徴を持っていた妹ア ril を連れ去ってしまう。

孫を攫われて憔悴しながらも、もう一人の孫の気持ちを尊重して背を押してくれた祖母や、島の皆に見送られながら、リンクはテトラが指揮をする海賊船に乗って妹を助け出すための旅に出る。

それがいずれ、世界を救う旅になるのだということを、この時はまだ想像すらないまま。

テトラの海賊船とは早い段階で別行動となり、リンクの相棒は意思を持った不思議な船『赤獅子の王』となります。

彼から与えられた『風のタクト』の力で、航海の命である風向きを自由自在に操り、砲弾を撃ちまくって要塞を攻略したり立ちはだかる敵船や魔物を沈めながら未開の海へと乗り込み、宝の地図を元に財宝を探す。

文句のつけようのないライダークラス、海賊系サーヴァント達にとっては偉大な

る大先輩にあたるのでは。

先だって書いたように、風の勇者がいるのは『勇者の魂』が存在しなくなってしまった世界線で、彼自身は他のリンク達がそうであるような、勇者の転生体ではありません。

勇者が現れることのない世界で、それでも何とかしなければと足掻いた赤獅子の王によって『彼ならばもしや』と見出され、それに応えてマスターソードすらも認めさせてみせた、正真正銘の新たな勇者です。

『リンク達』に関しては、彼らは皆お互いを前世や来世の『自分』と言うよりは、『同じ運命を負って戦い抜いた者達同士』という括りで考えているので、風の勇者に関しても『君もそうなんだね』と普通に受け入れています。

なので彼と、彼の次代となる『大地の勇者』も、ちゃんと『勇者リンク』の一人として『末代の勇者』の中に加わっています。

かつてハイラル王国が存在していた故郷の海での冒険を終えた後、自分達の手で新たなハイラルを興せる新天地を探して旅立ったリンクとテトラ。

その道中、謎の幽霊船に出くわしたテトラは、正体を暴いてやると意気込んで乗

り込んだままでは良かったものの、敢え無く囚われてしまった。

リンクも慌てて後を追ったものの、懸命に伸ばした手は届くことなく、その身は海へと落ち、見知らぬ海域のとある砂浜へと流れついた。

テトラを助けるべく幽霊船を追うことにしたリンクは、幽霊船に積まれていると噂の宝を求める船乗りラインバックと共に、新たな海へと船出する。

航海可能な範囲を増やすには新たな海図を手に入れる必要があるのですが、そのために必要なのがタイトルとなっている『夢幻の砂時計』と、それを利用するのダンジョン探索です。

海図が収められている神殿は、点在している聖域以外では居るだけで生命力を消費するという厄介な仕様となっているのですが、この砂時計を使用している間だけは、その消耗を避けることが出来るのです。

……呪いや結界によるダメージやデバフを回避して、時間制限ありとはいえ万全な状態での潜入を可能にすると考えると、とんでもないキャスター殺しのアイテムですね。

しかも、砂の力を復活させるために必要なのは、一旦外に出て日の光を浴びせる

ことだけ。

時計の砂はボスを倒すごとに少しずつ増えていき、物語が進むごとに、神殿の更なる深部を探索できるようになっていきます。

そうして完全な力を得た砂時計と、旅の中で鍛えられた剣を合わせることで作り出されるのが『夢幻のつるぎ』。

短時間ながら時間停止をも行えるという、登場するのがここだけなのが惜しいくらいに凄まじい力を持った剣です。

大地の勇者

出典…大地の汽笛

機種…NDS・WiiU

特化クラス…ライダー

末代の勇者が知るやらかしエピソード…線路沿いの魔物や障害物に片っ端から砲撃をかまし、スピードに目覚めたゼルダ姫と共に機関車を爆走させて歓声を上げる日々を送っていたら、周辺の人々から『あれが例の魔族が乗っているという汽車か』と噂され、賢者達から二人揃って怒られた。

新天地を求めて旅立ったテトラが、辿り着いた先で興し、それから100年ほどの時が経った新たなハイラル王国。

この国では、広大な国土中に張り巡らされた線路を利用して走る機関車が交通と物流の要で、それを操る機関士は国から認められた者だけが就けるような特別な職業だった。

機関士見習いの少年リンクは、一人前の機関士となるためにハイラル城を訪れ、任命式の中でゼルダ姫から密かに呼び出される。

赴いた先で彼女から頼まれたのは、近頃王国内の至る所で起こっている、線路が消えるという異常事態について調べたいため、賢者が住むという『神の塔』まで連

れて行ってほしいというものだった。

それに応えて彼女を密かに連れ出し、神の塔へと向かう途中で、ゼルダ姫が密かにリンクを頼らざるを得なかった原因である大臣が、二人の前に立ち塞がる。

魔族だという正体を明かした彼はゼルダ姫へと魔力を放ち、それによってゼルダ姫は魂と肉体を分離させられ、大臣は空っぽの肉体を奪って去っていった。

魂となってしまうゼルダ姫を何故か問題なく見ることが出来たリンクは、当初の予定の通りに、彼女と共に賢者を訪ねる。

そこで知ったのは、神の塔にはかつての魔王マラドーンが封じ込められていること。塔を起点に張り巡らされた線路はただの交通網ではなく、封印のための力を各地の神殿から神の塔へと送る役割を持っており、それが消えるのは魔王復活を企む輩の仕業だと考えられること。

そして、奴らがゼルダ姫の肉体を奪ったのは、優れた巫女としての力を備えているその体ならば、魔王の新たな器として耐えうると見なされたからだろうと告げられた。

『魔王の復活なんて断固阻止です!!』と、国と同じくらい、もしくはそれ以上に

自分の体を案じながら震え上がるゼルダ姫。

彼女の体を取り戻し、魔王マラドーの復活を阻止するため、賢者から託された『神の汽車』を操る機関士リンクとゼルダ姫の冒険が始まった。

膨大なゼル伝シリーズの中で何気に珍しい、『最初から最後までゼルダと共に冒険する』リンクです。

魂だけになってしまったゼルダは、リンクと賢者以外の普通の人には見えないし、物にだって触れませんが、魂だからこそそのやり方でリンクをサポートしてくれます。

各地のダンジョン以外に、線路を復活させて行動範囲を広げるために、神の塔の上階に挑む必要があるのですが、そこには『ファントム』という強力な敵が巡回しています。

このファントムにゼルダ姫が乗り移ることで、ファントムの能力と頑丈さを利用しながら、二人が協力することで先に進めます。

この作品におけるリンクはまだ幼い子供寄りの少年で、ゼルダも同じ年頃の少女なので、そんな二人が互いを信頼し合い、協力し合いながら冒険を進めていく姿は、

大変な旅路の筈なのにどこか微笑ましかったです。

リンクが操縦する機関車は、襲ってくる敵を大砲で撃退したり、魔物によっては汽笛で追い払えたり、魔の機関車へと聖なる力を纏いながら体当たりをかましたりと、結構なハイスペックです。

これを是非とも、いつのことになるのかは分かりませんが、第五特異点のアメリカ大陸に走らせたいと思っています。

大海原を奔った風の勇者に続いて、笛の音と共に地を駆けた大地の勇者。

彼の存在と逸話によって、蒸気機関開発の偉業とその方向性が補正され、キャスターではなくライダーとしての適性が上がった人の存在なんかも考えてます。

当人としては恐らく、大切にしたいのはキャスターとしての功績の方なんでしょうけれどね。

魔王ガノンを倒した時の勇者が過去へと帰り、その後を生きた世界線。

『ムジュラの仮面』の事件が起きたのは、この時間の流れにおいてのことです。

本来ならば、ハイラル王国を手中に収めていた筈のガノンドロフの野望が、未来から帰ってきたリンクと彼の言葉を信じたゼルダによって未然に明らかにされたこ

とで、彼はその企みを実行に移す前に捕らえられ、世を乱した魔王を勇者が打ち倒すという事実そのものがこの世界においては無くなりました。

『緑衣の勇者』はあくまで古いお伽噺の存在で、魔王によって世界が脅かされるとか、世界の危機には勇者様が現れてくれるとか、本気で思っている人は全くと言っていいほどいなくて。

そんな世界にだって不穏の種はあるし、いざという時には、勇者たる存在が現れるのです。

黄昏の勇者

出典…トワイライトプリンセス

機種…GC・Wii・WiiU

特化クラス…アサシン

末代の勇者が知るやらかしエピソード…狼に変身して匂いや痕跡を追っていた際に、夢中になりすぎて壁に激突したり、氷が浮かぶ冬山の川に落ちたりした（私のことです）。

牧畜が盛んなトアル村、そこで愛馬エポナと共に日々山羊追いに精を出しながら暮らす牧童の少年。

優れた乗り手である上に剣の扱いにも優れている彼は、大人達からは頼りにされ、子供達にとっては憧れの対象だった。

王都に献上品を運ぶという重要な仕事をこなすことになり、旅立ち前の最後の時間を過ごしていたリンクは突如魔物達の奇襲を受け、幼馴染の少女と自身を慕う子供達を目の前で攫われてしまう。

咄嗟に彼らを追ったリンクが、村はずれに奇妙な領域が発生しているのを見つけ、足を止めたその瞬間、謎の手によって向こう側へと引きずり込まれてしまった。我が身を蝕む闇の力の中で悶え苦しむリンクは、自身の手の甲から光が迸った次

の瞬間、狼と化して気を失ってしまい。

次に目を覚ました時には、獣の姿のままどことも知れない牢屋の中で鎖に繋がれ、そんな有り様をあざ笑う、謎の魔物ミドナを前にしていた。

幼馴染と子供達が攫われた事実を改めてリンクにつき付け、助けに行きたいだろうと、でもその状態では無理だと、逃がしてやるし元の姿への戻り方も教えてやるから代わりに自分の言うことを聞けと、交渉という名の強要をするミドナの提案を今のリンクは受け入れるしか無く、彼女に先導されながら牢を脱出。

そうして、自分が今いたのがハイラル城の地下であったことと、この事態が『影の世界』の者達がハイラル王国に侵攻してきた影響であることを、囚われの身になっていたゼルダ姫から教えられた。

自身を狼へと変えた元凶、影の領域『トワイライト』を消滅させて元の姿に戻るためには、その地を守護する光の精霊に力を取り戻させる必要がある。

それを成し遂げ、取り戻した光の世界で元の姿に戻ったリンクは勇者の緑衣をまとって、光の精霊も彼のことを『勇者』と呼び、ハイラルの命運を託した。

ウルフリックへの変身は、最初は初期のヘシアン・ロボのようにライダーかなと

思っていましたけど。

実際にプレイしてみると、正体を隠しての暗躍とか、感覚を研ぎ澄まさせて目には見えないものを捉える能力とか、アサシンクラスへの適性を思わせるものでした。最初こそ厄介な呪いでしたが、ストーリーを進めるうちに人の姿と獣の姿を自在に変えられるようになり、能力のひとつとして躊躇なく使いこなすようになります。謎の魔物ミドナ、その正体は家臣の反乱によって玉座を追われ、民を奪われ、呪いによって姿までをも変えられてしまっていた、影の世界の王女。

タイトルの『トワイライトプリンセス（黄昏の姫君）』とは、他でもない彼女の
こと。

最初こそ、影の世界を取り戻すことしか考えていなく、ハイラルのことなんてどうでもよくて。

リンクのことだって、光の世界の民がトワイライトに取り込まれれば、普通ならば闇の魔物と化してしまう筈なのに、なぜか獣と化すだけで済んでしまった彼のことを『使える』と思い、利用してやる気満々で接触したのに。

攫われた顔見知りだけでなく、旅先で知り合った人達のため、ミドナのために頑

張ってくれるリンクやゼルダの姿に、元が善良だった彼女は徐々に絆され、救うべき影の世界だけでなく、大切な相棒リンクと、彼が守ろうとしている人達や光の世界のためにも考えるようになります。

勇者が活躍した事実が無いこの世界で、ただ一人だけ、リンクのことを立派な『勇者』となれるように導いてくれる人がいます。

それは、旅路の中で時折遭遇し、剣の奥義を授けてくれる骸骨剣士の亡霊。

彼の正体は、自身が世界を救ったことを誰も知らない、どこかその事実そのものが無くなってしまった世界で生きた、かつての時の勇者。

黄昏の勇者は、そんな彼の直系の子孫にあたる存在なのです。

当人曰く、こんな姿でこの世に残ってしまったのは、勇者として生まれながらその名と功績を残せなかった無念故に、とのことでした。

プレイしながら私は、『それは建前で、自分と同じ勇者の運命を果たすことになった子孫に、自分が戦いの中で築いたものを、もう勇者ではないのだから別にいいかな』と思って子に託したりはしなかったものを、改めて授けてあげたかったんじゃないかな』とっていました。

時の勇者のその後は、『勇者であったこと、世界を救ったという事実は無くなっ
てしまったけれど、辛い思いをして戦う必要のないところで、家族と一緒に幸せに
暮らしました』でいいのではないかと信じたい派なので。

万を越える年月の中で、分かたれながらも隣り合わせに並行していた三つの時間が統合し、全ての可能性の先に存在するただひとつの世界線。

野生の息吹に満ちた、どこまでも広がっているかのような美しい世界の至る所に、かつて繰り広げられた数多くの冒険を思わせるものが残っている。

息吹の勇者

出典…ブレス・オブ・ザ・ワイルド

機種…WiiU・NSW

特化クラス…ルーラー

末代の勇者が知るやらかしエピソード…人里離れた秘境や強大な魔物など、様々な困難を乗り越えてみせた彼を最も苦しめたのが、食糧不足及び空腹のあまりに適当なものに手を出したことによる地獄の腹痛だったという事実（めげずかつ懲りずに繰り返した結果、ゴロン族のダルケルと共に岩を齧って平気でいられる鋼の胃袋を手に入れたので、本人としては結果的には良かったと思っている）。

ハイラル王国に古くから仕える由緒正しい騎士の家系、幼い頃から天才剣士と名高かったその嫡男。

史上最年少で近衛兵となり、真の勇者のみが扱えるという神剣すらも抜いてみせた彼は、迫る厄災ガノン復活の時に備えて結集された『英傑』達の筆頭となり、その長であるゼルダ姫の護衛役ともなった。

しかし、入念な前準備も空しく、厄災ガノンはそれら全てを無意味なものとする形で復活を果たす。

頼れる仲間達は皆死んでしまい、リンクもまた、命尽きるその瞬間までゼルダを

守って戦い抜いた。

そんな彼を、遥か未来へと託す最後の希望として回生の眠りにつかせたゼルダは、我が身と引き換えにしてでも封じ、時間を稼ぐべく、厄災ガノンの下へと一人赴く。

そうして長い時が経ち、ハイラル王国の滅亡を人々が昔話として語るようになった、そんな頃。

死の運命をも覆すための治療が終わり、100年ぶりに勇者が目覚めた。

自分は誰なのか、なぜ一人眠りについていたのか、何が起こったのか、何をすべきなのか。

何もかもを忘れてしまった、寄る辺の無い一人の少年として。

私にとっての記念すべき初ゼルダです、時系列で最も新しいこの時代から遡って色々とプレイしました。

用意された広大すぎる箱庭で、どんな順番で冒険を進めようと、何をしようとプレイヤーの自由。

かつて『時のオカリナ』が3Dの時代を切り開いたように、再び『ゼルダ』がゲー

ムを変えた、オープンワールドの新基準を作り上げた、発売後の評価で書かれているのを見たことがあります。

このゲームに関しては、現状で最も手に入れやすいゼルダだと思うので、ここで詳しく解説するよりも、是非とも自分の手で遊んでみてもらいたいです。

『ルーラー』というクラスに関しては、王国周辺の友好民族を含めて募った実力者を任命した五人の英傑、そのリーダーであることからですね。

リンク自身としては、上下関係とか自分が纏めなきゃとかは考えていなくて、あくまで頼れる仲間なのだけだ。

魂になってもリンクを信じ、彼が来てくれることを待ち続けていた英傑達と彼らが操る神獣は、リンクがリーダーとして号令を出せば、必ずや応えてくれることでしょう。

……あと、『最終的に目的を果たしさえすればそれでOK』な認識で、『俺がルーラだ』を何の悪気も無く素で体现しているの、その辺りも含めて。

以前コメントでいただいた、『ルーラークラスのリンクの号令で神獣達がビームを一斉に発射する』というネタを『それいいなあ』と思ったので、調整しながら使

わせて頂きたいと思います。

この数百年後に『末代の勇者』が現れ、彼の活躍によって、『ゼルダの伝説』の物語とハイラルの歴史は幕を下ろします。

その辺りは『外伝』の方で描かれていますので、未読の方は、是非一度ご覧になって下さい。

勇者リンクと仲間達による人理修復物語を、これからも頑張って書いていきます。

現状で手に入れられるだけの『ゼル伝』をクリア出来たので、そろそろ戻ってき

ます。

途中、気分転換に『外伝』の方でセイレムを幾つか投稿していたので、まだ見ていないという方は是非ご覧になって下さい。

『ゼル伝』が人理に与えた影響 インド編

原典（マハーバーラタ）をきちんと読んだ訳ではありません、どのようなイベント、経緯が二人の間やその周囲にあったのかをある程度把握しているくらいです。多少の齟齬や思い違い、解釈違いがあるかもしれませんが、ご了承ください。

原典における二人の因縁は、上流階級出身者対象の弓の競技会に飛び入り参加して大変な結果を叩き出したカルナが、その上で自身と同等（断トツ）だったアルジュナとの決闘を望んだものの、『自身の身分を明らかにする事すら出来ない、ど

この誰とも知れない者が何を馬鹿なことを』とあしらわれて叶わなかったことから始まったとのこと（拾われ子でガチでどこの誰とも知れない上に、育ての親も御者という下級層の出身でしかなく、流石のカルナも何も言えなくなってしまった）。

そこで唯一、『たかが身分如きに目が眩んで素晴らしい戦士を辱めるとは何と愚かしい』と言ってくれた、『彼がクシャトリヤ（王族）ならいいんだな』とその場で着飾らせた上で就任式みたいなことまでしてくれたドゥリーヨダナ、アルジュナを含めたパーンダヴァ五兄弟と後に敵対することになる男に感謝したカルナが、彼に生涯の友情と忠誠を誓ったことで、未来の敵対関係が確定してしまった時でもあった（着飾られたことで本物の王侯貴族並みの風格を醸し出したカルナに、居合わせた者達は一瞬ガチで感心しかけたものの、息子の晴れ姿に感激した父が思わず駆け寄ったために出身がバレてしまった。一転して嘲笑と蔑みの雨を浴びせられることとなったカルナへの仕打ちにドゥリーヨダナは本気で怒り、心底氣に入った彼をそのまま連れて行き、一生の親友となった）。

『ゼルダの伝説』の存在の影響がまず出たのは、鍛冶屋の孫だったり牧童だったり、どこの誰とも知れないみなしごだったり、まともな『身分』があったことの方が

圧倒的に少ないリンクの活躍に幼い頃から憧れていた、今現在騒いでいる連中のように自分を笠に着ることなく、この逆境の中で臆することなく、己の実力を確かな行動のみで示してみせた彼こそが真の『勇気ある者』だと思い、そんな彼が他でもない自分を求めてくれたのだということに感激したアルジュナが、自身もまた『勇気』を出してカルナという人と自分自身の本心を認め、『身分など関係ない、私もあなたと勝負をしたい』と口に出来たことだった。

当人の意思と希望をよそに周りが騒いだことで結局は叶わず、カルナもドウリーヨダナの下へと行ってしまったのだけれど、去り際にカルナはアルジュナへ感謝の言葉を告げ、また会って勝負をしようという約束と共に二人は別れた。

クシャトリヤでありながらどこの誰とも知れない男に敬意を払うアルジュナに、周囲は善意から『思い直せ』『お前らしくない』といったことを口にする。

『皆が認める理想の英雄（良い子）』でいようと努め続けた Fate 原典のアルジュナだったら、ここで周囲の期待に応えようと自分を諫めたのだろうか。

既に一度思い切ることが、心の殻に穴を開けることが出来ていたこちらのアルジュナの気持ちは、別方向に動いた。

子供の頃から本人も気づかないまま溜め込み続けていたものが、いずれ黒い自分を生み出していたであろうストレスが風穴から爆発して、遅めの反抗期に突入。

取るものも取りあえず殆どその場の勢いで家出をしてしまった彼は、『良い子』であり続けるために誰にも言うことなく諦めていた、勇者のように旅をしたい、腕試しをしたい、広い世界を見てみたいという幼い頃の夢を叶えることになる。

例え反抗期真っ只中だとしても、旅先から小まめに手紙を出す揺るぎなき良い子。そんなアルジュナに甘えて押さえ過ぎていた、与えていたつもりが求め過ぎていたことを自覚した家族は反省し、彼が手紙に記して送ってくれる冒険譚の続きを楽しみにしながら、彼の生まれて初めての我がままを温かい目で見守ることにした。そんな旅路の中で、思いがけずカルナに再会。

勝負の約束はしたものの出会い頭に殺し合うような因縁は無く、むしろお互いに好印象を持っていたために、素直にそれを喜び合う。

約束通り技を競った二人はお互いへの尊敬を一層高め合い、『あなたともっと勝

負をしたい、色々なことを共に経験してみたい』という、本人からすればあくまで希望を口にしただけだったアルジュナの求めに応じる形で、カルナが彼の旅路に同行することになる（求められたから施したのではなく、生まれて初めて、自分自身の確かな意思と希望でそうしたかったのだということを、カルナは後に自覚する）。戦いの技だけに留まらない様々な競い合いを日課にしながらの、人助けをしたり、恐ろしい魔物を倒したり、人の手の及ばない秘境へと挑んだり、大変な苦行や苦難を共に乗り越えながらの二人旅は、それだけで抽出してひとつの物語にされるくらいの、マハーバーラタ前半の一番の見所となる。

冒険譚の妄想例

神へ生贄を捧げる風習に縛られていた村に辿り着き、その現場に立ち会ったことで『生贄なんてものを要求する上に、碌な見返りも寄こさない神などもはやただの魔物だ！』と激昂したアルジュナが、『実質魔物とはいえ分別上は紛れもない神な

のだから下手に殺しなどしてはまずい』というカルナの言葉と制止を振り切り、生贄の娘の身代わりとなる形で神（魔物）の下へと乗り込んだ（英雄譚の鉄板ネタのひとつである、美しい青（少）年が女装して大活躍の逸話の一端）。

完全に油断しているところに強烈な一射を食らわせてはやったものの、やはり神の端くれなだけあって相応に手強く、徐々に追い詰められた拳句に窮地に陥ったアルジュナの下に、神への強力な特効武器を手にしたカルナが駆けつけた。

その武器が、自分の仲間達が彼に与えたものであることを察した神は、激昂しながら一体何をしたのかをカルナに問い質し、その問いに対してカルナは、アルジュナを止めることに失敗してしまった後に急いで（普通なら数日かかるような険しい道のりを不眠不休で駆け抜けて）神々の下へと乗り込み、仲間が生贄などという碌でもないものを要求していることと、それをずっと見過ごしてきたことへの了見を問い質し、神としての矜持がまだあるのなら相応の対応と誠意を見せろと要求をしたところ、『かの者はもはや同胞ではない、例え殺したとしてもその件で我々が報復するようなことはない』という明確な見解と言葉、更には今回限り、使用後にすぐに返すという条件で武器を与えられてきたことを明らかにした。

お墨付きを得た上で神殺しの偉業を見事成し遂げた後、強大な敵だからこそしっかりと根回しをして準備を整えるべきというカルナの真意に気付かず、ただ単に臆したものとばかり思っていて一人で勝手な行動を取ってしまったことを詫びたアルジュナに、カルナもまた自身の言葉足らずを謝り、強大な敵と知りながらも立ち向かい、自分が駆け付けるまでの時間を稼ぎ切ってくれたおかげで生贄となる筈だった娘を含めた多くの者が助かったのだと、彼の勇氣と健闘を讃えた。

他にも、近頃やけに評判な二人組の信頼関係を玩んだ上にぶっ壊してやろうと企んだマラー（カーマ）が片方を攫って閉じ込め、残された方が突然消えた相方を必死になって探していることを把握した上で、『もう諦めた』『もう見捨てられた』と証拠（捏造）込みで攻めても『あいつはそんな奴じゃない』の一言であっさりと跳ね除けられ、ならばともう片方に渾身の妨害工作を施してみれば全て粉碎され、その後二人がかりで情け容赦なくボコボコにされたことが完全にトラウマとなり、カルデアで鉢合わせた折には『ひいひいっ、カルデアにはあいつらまでいるんですか!?! もうやだ私帰ります!!』となる……などというのも考えました。

カルナの実家にお邪魔して友人としてご両親に挨拶したり（された方はアルジュ

ナの正体に気付いて心臓が止まる思いをした)、念入りに変装した上で馬の世話や御者の仕事を手伝わさせてもらったり、疑似体験した下級層の生活に色々と複雑なものを感じたり、ということもあったかもしれません。

両親を手伝って馬の世話をする毎日の中で、オカリナの音で愛馬を呼ぶ勇者の姿に憧れた幼き日のカルナが、自身が作った素朴な笛を自己流で奏でつつ馬達に聞いてもらう日々を送ったところ、大人になった頃にはその音色に猛る獣を宥めさせる効果が付与されるまでに洗練されて。

暴れまわって危険だという理由で咎なく退治されようとしていた猛獣と、それによって害を被っていた人間の両方をそれによって救ったという逸話があって、カルデアにおいても、ロボを落ち着かせられる貴重な人材を担っているとか。

……まあ、この辺りは願望重視の妄想ですが、だとしても笛は奏でさせたい。一見して無粋な戦士が、ふとした瞬間に何気なく垣間見せる美しく繊細な技と姿というギャップが好きです。

そんな日々が続いたある時、アルジュナの兄弟達とドゥリーヨダナの仲がますますもって険悪になり、彼らはお互いに、相手勢に対抗するために頼れる仲間を招集をかける。

カルナとアルジュナはそれを共に受け取り、突然のことに躊躇いながらも、愛する家族や恩ある親友の助けを求める声に応じないという選択肢は無く、落ち着いたらまた会おう、また共に競い合い、また旅にも出ようと約束して別れた。

いがみ合い、罵り合い、傷つけあう両陣営で、家族や友のために貢献しながら、『何とか和睦できないか、互いに譲り合うことは出来ないか』と考えることをやめられないカルナとアルジュナ。

機を見て話を持ちかけてはみるものの、互いにもはや利益ではなく私情や面子の問題となってしまうていて。

優れた戦士である彼らならば個人の情よりも大局を選べる筈という信頼から、パーンダヴァ兄弟もドゥリーヨダナも、弟や親友の言葉を悪いと思いつつも却下し続け

た。

そんな彼らの思惑通り、内心ではどう思っているとも、いざ公の場となれば容赦なく（そんな余裕を持てるような相手では無いことをお互いが一番よく分かっているし、不甲斐ない姿を絶対に見せられないとお互いに思い合っている）激突し合う二人の勇姿とそれを目の当たりにした者達の恐れが、両陣営の敵対心を更に煽る悪循環となっていた。

しかしそんな状況の中でも、幸いにも彼らは完全に孤立しているという訳ではなかった。

『傷つけ合うこと、奪い合うこと、大切なものがどんどん失われていく負の連鎖をやめようと言っているだけなのに』と、分かり辛く落ち込みながらのカルナの愚痴を、アシユヴァッターマンは日々受け止めていたし。

恐るべき敵将となってしまったカルナとの思い出を、未だ欠片も損なわれていない彼への尊敬と信頼の気持ちを優しく微笑みながら聞いてくれる母と過ごす時間は、その頃のアルジュナにとっては貴重な癒しのひと時だった（もう一人の息子への想いを、日々募らせてしまっていたことなど知る由もなかった）。

パーンダヴァ兄弟からしても、アルジュナが旅先から送ってきた手紙を読んで、又は本人から聞いたことで、直接会って話したことが未だ無いことが不自然に思えるレベルで、分かり辛いながらも疑いようもなく誠実な人柄を知っていたカルナに關しては、立場上官言出来ないだけで結構な好感を抱いていたし。

ドウリーヨダナもまた、自分よりも先にカルナを認め、周りからどんなに窘められようとも、彼への尊敬と信賴だけは決して偽ることなく貫いていたアルジュナに關しては、他の兄弟達のように嫌ってはいなかった。

カルナとアルジュナがめげることなく訴える話し合いと歩み寄り、それに対する妥協案として、『カルナ（アルジュナ）個人に關しては、こちら側につく気があるのなら受け入れてもいい』と両者共に提案したところ……『それは私（オレ）に、家族（親友）を裏切れと言っているのと同じことだ!!』とブチ切れさせてしまった。追い縋る手を払いながら自室に戻り、時間の経過によって冷えてきた彼らの頭の中に、先程の提案が響き渡る。

怒りは心からのもので、発言だって撤回するつもりはないのに。

旅の頃のように、誰に憚られることなくまた共に過ごせるようになるかもしれない

いという抗いがたい魅力から、『こんな提案をされたんだけど』ということ伝えるくらいならばいいのではないかと思つて認め始めた手紙が、半分ほど書けた頃。恐る恐るといった様子でやって来て、一生懸命に謝り、機嫌を取り、許しを請いだした、しばらく顔も見たくない筈だった兄弟（親友）の姿に思わず笑みを零しながら、『捨てるなんて出来る筈が無い、それはお前も同じだろう？』と書きかけだった手紙を棚の奥底にしまい込み、手を付けることは二度となかった。

それが発見され、板挟みにされた彼らがどれだけ悩み苦しんでいたのかを一同が改めて思い知り、もはや取り戻せないものを悔やむことになるのは、まだずっと先のこと。

そんな日々の果てに、ついに迎えてしまった開戦の前夜。

陣地をこっそりと抜け出した二人は、再会を喜び、何のしがらみも無い個人として向き合えるのがこれが最後だということを嘆き、果たせなかった約束を心から惜しみながら、新たな約束を交わし合う。

『戦士として全力を出し合うことを誓う、お前（あなた）を殺すのはオレ（私）だけだ』と。

そうして泥沼の戦争が始まり、何度か相対する機会がありながら、約束通り本気の戦いを繰り広げながらも、二人が決着をつけることは出来なかった。

そんな時に、アルジュナの母がこっそりとカルナの元を訪れた。

自身の息子達と敵対している勢力の真っ只中で、動揺して言葉を詰まらせる彼女を急いで保護したカルナは、あなた方のことをアルジュナから聞いていたと、彼は愛する家族のことをよく話してくれて、おかげで初めて会った気がしないと……と、りあえず落ち着かせようと思って振った話題で、何故か逆に声を上げて泣き出してしまったことに慌てたカルナは、次の瞬間息を呑んだ。

彼女は自分がカルナの本当の母であること、望んだ神の子を授かれるという能力を若気の至りの好奇心で試した結果、未婚かつ結婚を控えていた身で産んでしまった挙句に手放さざるを得なかった最初の子が、他でもないカルナなのだということを明かして（その結婚相手が子供を作ると死んでしまうという呪いに苛まれていたため、夫公認で能力を用いて神の子達を産んだ）。

兄弟で殺し合うのをやめて欲しい、今からでも遅くないから家族で共に暮らしましょうと。

私のことを憎むのは構わない……けれどアルジュナが、弟が可愛いのであれば、どうか聞き入れてほしいと懇願した。

原典においてカルナは、血縁の情に訴えながら弟達を殺さないで欲しいと懇願する母親に対して、『母の頼みならば仕方ない。宿敵のアルジュナは流石に無理だが、他の兄弟を殺すことはしない』と誓ったのだけけれど。

こちらのカルナはその言葉に、あまりにも強烈過ぎて自分でもそうと認識できなかったほどの大ショックを受け、明確な返事が出来ないまま母を帰すことになってしまった。

最後の瞬間に、『会いに来てくれて嬉しかった。産んでくれて……一思いに殺してしまった方が面倒が無かったであろう赤子を、わざわざ生かしてくれてありがとう。おかげで俺は幸せだった』とだけを何とか告げて。

その後、父たる太陽神に祈りを捧げるための、大切な日課である箭の沐浴を殆ど惰性で行ないながら呆けてしまっていたカルナの下に、息子を勝たせる（死なせな

い) 為にカルナから黄金の鎧を奪うべく、人間に変装した雷神インドラが現れる。乞われたものを施さずにはいられない性分を利用しようとした思惑をカルナは見抜いたのだけれど、構わず彼は肉と同化していた鎧をナイフで剥ぎ取り、インドラに渡した。

その時カルナの中にあつたのは、誰が相手でも、どんな時でも自分らしくありたいという矜持ではなく、むしろその逆。

不死身の鎧を失い、自身の皮とも言えるそれを剥いだことで重傷を負い、数多の呪いに苛まれた現状であれば、『全力を出す』という約束を破らないまま、弟を生かすことが出来ると。

戦士としてではなく兄として最期を迎えることを選んだ彼は、心から安堵していた。

そんなカルナの想いを知ったインドラは、鎧を奪うための口実的な意味合いが殆どだった槍を本当の意味で彼に与え、息子の兄である彼もまた、自身の息子であると認めたのだった。

そんなことがあったなどと知る由もないアルジュナは、カルナとの約束を守るべく戦場を駆け、そして見つけてしまう。

形を持った太陽神の加護を失い、彼でなければとうに死んでいたであろう重傷と幾重もの呪いに苛まれながら、動けなくなってしまうていたカルナの姿を。

今すぐにでも駆け寄って彼を助けたいという個人の想いと、ここは戦場で彼は敵なのだという公の戒めと、全力を出して必ず殺すという約束に雁字搦めになりながら、震える手で弓を構えるアルジュナ。

原典では、迷いながらも最終的には放つことが出来たその矢を、こちらのアルジュナは延々と躊躇い続けた。

彼と共に過ごした、人生の中で最も楽しく輝かしかった日々の思い出が、いくら掻き消そうと努めようとも次から次へと思い浮かび、溢れる涙となって視界を奪う。どんなに優れた戦士であろうとも、戦場の混沌で長々と平常心を失ってしまえば、それはもはや命取り。

敵のものか味方のものかも分からない、気持ちが生るままに適当に放たれて、撃つ

た当人ですらどこに飛んで行ったのか把握していないような完全な流れ矢が、周りが完全に見えなくなってしまうていたアルジュナへと突き刺さり。

その衝撃で、震えながらも確かに矢を番えていた手の力が抜け、彼が放ったものとは到底思えないような弱々しい鏃が、負傷や呪いとは関係なく動けなくなってしまうていたカルナへと向けて飛んでいった。

天を裂く雷のような、天ではなく心を裂くような悲痛な絶叫が戦場に轟き、戦いの狂気に陥ってしまったていた両陣営の戦士達に正気を取り戻させた。

彼らが思わず振り返った先にあったのは、胸に矢を受けながら倒れるアルジュナと、同じく矢を受けた身で、爪が割れて血が滲む指先で地を削りながら、体が這いずった跡におびただしい血痕を残しながら、そんな彼へと懸命に手を伸ばすカルナの姿だった。

「すまないアルジュナ……俺が間違えた、俺は腑抜けてしまった。

お前が弟であるを知って、殺したくないと、死なないでほしいと、生きて幸せになつてほしいと望んでしまった。

そうして、血迷った結果がこれだ。

戦士アルジュナに最期をもたらしたのが、誰が撃ったとも知れない流れ矢だと……？

俺が殺してやりたかった、殺してやるべきだった。

戦士としての全霊で以って……誰よりも誇り高い最期を、お前に与えてやりたかった」

「……………そうだったのですね、道理で他人とは思えなかったと。

カルナ、兄上……………無念なのは私もです。

このアルジュナの矢が、あなたに最後に撃った矢が、あなたを殺した矢があんなものだなんて到底認められない……………認めたくない。

こんな口惜しさを抱きながら逝くなんて……………あの時迷うのではなかった、生涯最高の一射で以ってあなたの首を断つべきだった、それを手向けとしたかった」

当たり所が違ふ意味で悪かった為の、死ぬに死ねない地獄の苦しみの中で。

固く手を握り合いながら、命尽きるその瞬間まで、『また会おう』『また戦おう』と約束を交わし合った兄弟。

太陽が泣いているかのような雨と、慟哭にも聞こえる雷の下で、陣営を問わない多くの戦士達が、その誇り高くも哀しい最期を前に涙を流していた。

兄弟の父達の嘆きを妨げないようにと、太陽が隠れ、雷が鳴っている間とはいう条件で、戦争は一時中断された。

死してなお、固く手を繋いだままの二人の遺体を共に安置する為に設けられた、中立の非戦闘地帯にて、完全に冷たくなってしまった兄弟の体に縋りながら泣き続ける母親の姿があった。

彼女だけでなく、陣営を問わずの多くの者達が誇り高き戦士を悼むためにその場所を訪れ、魔物のように恐れていた敵将の真の人柄を、自陣営でどれだけ慕われていたのかを、二人が激闘の裏で停戦と和睦を訴え続けていたことを知り、聞く耳を

持たないまま彼らを失うところまで来てしまった自分達の愚かさを悔やんだ。

大切な兄弟を、親友を失ったことでようやく冷静になれたパーンダヴァ兄弟とドゥリーヨダナは、彼らが生きているうちに叶えてやる事が出来なかった話し合いをようやく行うことが出来た。

丸一日の停戦の後に再会された戦争、その戦場には、もはや狂気も混沌も無かった。

怒りと憎しみのままに殺し合うのではなく、二度と取り戻せないもののために更に奪い合うのでもなく、始めてしまったものを終わらせるための戦い。

誰が死んでも遺恨は残さず、全ての因縁をこの戦場で終わらせる。

どちらが勝っても、カルナとアルジュナを共に丁重に弔うことを誓い合った両者は、狂気ではなく誇りを、あの二人に胸を張りたいという思いを胸に、最後の戦いに臨んだ。

そうして勝利したパーンダヴァ兄弟は、愛する兄弟と、彼から話を聞くばかりで、密かに憧れるばかりでついに語り合うことが出来なかった長兄の為に立派な神殿を造り、二人を対の戦神として祀った。

カルナとアルジュナの死に様が戦士達に誇りを取り戻させ、戦場に秩序をもたらしたおかげで非道な夜襲を行わずに済んだアシュヴァッターマンは、戦後この神殿に腰を据え、祭司として、友として、彼らの為に祈り続けた。

アシュヴァッターマンのマイルーム会話

「カルナ、それにアルジュナじゃねえか、あいつらまでいんのか!!

そうか、今は一緒にいるんだな……そうか、そうか、良かった。

……ちよっ、何言ってやがるんだマスター、誰も泣いてねえよ!!」

その後インドの戦士達には、戦いを始める前に、そこに不正や余計な思惑が無いことを、戦士としての誇りを忘れないことを兄弟神に宣言し、全力を尽くすことを誓うという儀式が伝えられて行きました。

それは現代のインドにも形を変えて残っていて、戦いに限らず、スポーツなど何

かしらの勝負ごとに真剣に取り組む際には、その旨を彼らに誓うという風習があります。

不正の有無や真剣味を疑う際に、『それをカルナとアルジュナに誓えるのか?』みたいな言い回しをすることも。

『カルナ派? アルジュナ派?』みたいな定番の話題ネタがあったり、抜粋された二人旅の物語だけを読んでその冒険譚に夢中になった人が、その後の彼らについて調べてしまつて撃沈したりなどの、インド人あるあるネタを妄想しました。

胸躍る冒険譚、慕い合っているながら時勢に裂かれた悲劇の兄弟、自分達の命を以って戦争を終わらせた英雄、神として祀られて現代でも多くの信仰を得ているという諸々の要素が付加されたことで、原典よりも知名度UPしています。

それと個人的に、クー・フリーン（キャスター）の狼とか、アスクレピオスの蛇とか、最終再臨の絵にだけ現れるような動物の眷属とかいたらカッコいいなあと思います。追加で考えてみました。

旅の途中で親を失った仔虎の兄弟を拾って可愛がっていた二人が、別れ際になつて『兄弟を離してしまうのは可哀想だ、どちらかがまとめて引き取ろう』と寂しさを堪えながら話し合っていたところ、兄（しっかり者）がアルジュナに、弟（甘いん坊）がカルナにそれぞれ擦り寄つた。

虎達に氣を使わせてしまったと、苦笑しながらも嬉しかった二人は、『この子達を再会させてあげる為にも、必ずまた会おう』と改めて誓い合い……そして結局、兄弟虎の再会が叶つたのは、彼らが立派な大人になった後。

悩み、苦しむさまを傍で慰めることしか出来なかつた主達の、遺体の傍らでのことだった。

正式な弔いが行われるまで遺体に寄り添ひ続け、兄弟の神殿を守りながら寿命を迎えた彼らはその後、神使として認められて天上の主達の下に無事に辿り着けたとされている。

兄弟神の神殿では現代でも御使いとして虎の飼育を続けていて、絵や彫刻で二人の戦士と二頭の虎が描かれていれば、それはカルナとアルジュナを描いたものだろうと解釈されるのが通常の流れとなっている。

霊基の再臨と強化を続けることでカルデアでも顕現させることが出来るようになり、人の側で生活できるようにしつかりと躰けられた人懐っこい良い子達なので、全身で抱き着けるモフモフ粹として大人気。

カルナとアルジュナの死後、寿命を迎えるまでの面倒を看てくれたアシュヴァッターマンには、もう一人の主人として特別に懐いている。

サーヴァントになってからに関してですが、カルナは一見したところはあまり変わりません。

乞われたら応えずにはいられなくて、義理堅くて、口下手で、天然で。

だけど内面はずっと人間味が出ています、『頼まれたから』ではなく『自分がしたいから』、『喜んでもらえるのが嬉しいから』という想いがあることを自覚しています。

施しの結果大失敗したことも忘れていないので、乞われたからと何でもかんでも与えたりせず、本当に与えていいのか、後で何か悪いことにならないかときちんと

考えたり、周りに相談だってします。

それでも『駄目』の判定条件が酷く緩いので、結局は『施しの英雄』です。

アルジュナはかなり変わります、オルタのプロフィール曰く素のアルジュナは穏やかで素朴な性質の持ち主であり、弓のアルジュナが一見固いのは、完璧であろうと常に気を張っているからとのこと。

そこに至るための、『完璧な英雄』への脅迫観念というべき義務感が既に解消されている上に、戦争時ではなくカルナと共に旅をした頃を最盛期と認識しているの
で、原典に比べて若い姿と心で現界します。

好奇心とチャレンジ精神が旺盛で、立香とは最初こそ主従だけど絆が上がるごとに友人的な心の開き方をするようになる、メイヴや女神達も舌を巻く天然のおねだり上手です。

おかずを一口とか、余っていたものをひとつだけとか、細やかなお願いを叶えてあげるだけで本当に嬉しそうに笑う（物の価値の問題ではなく、甘えや我がまを許してくれること自体が嬉しいから）ので、撃墜された保護者勢が更に気合いを入れて甘やかし、『英雄』を期待されているのではなく純粋に愛してくれていること

をきちんと信じられるのでそれをまた笑顔で喜び、更なるループに繋がるといいう、正しく『授かりの英雄』です。

聖杯戦争で召喚された際の彼らの願いは、今一度戦い、あの無様な最期を払拭させられる形できちんと決着をつけること（払拭したいのが『自分』ではなく『相手』の死に様だという辺りが肝心）。

しかし、それはあくまで『出来れば』なので、他に優先すべきことがあればきちんとそちらを選べるし、切実な願いを抱く者がいれば聖杯を譲ることも吝かではない。

共闘だろうと、敵対だろうと、再び会い、どんなに短くとも同じ時をまた共に過ごせさえすれば、彼らの本当の願いは既に叶っているから。

この設定のアルジュナが Fate 原典のアルジュナと会いでもしたら、もの凄いガチの殺し合いに発展しそうです。

こちらのアルジュナは、原典のアルジュナがきちんとカルナに引導を渡せたこと

を、首を飛ばしたほどの見事な一射を食らわせてやれたことを心から羨ましがるでしょうし。

原典のアルジュナとしても、卑怯な矢を放たずに済んだことに対して同じように思うでしょうし。

更に言えば、そんな風に思ったこと自体が、お互いに対しての最大の地雷かつ逆鱗なわけですから。

この世界観におけるLB4は恐らく、最後の流れ矢がアルジュナではなく、カルナの方に飛んで行ってしまったIFなのでしょうね。

助けたいという個の願いも、この手で殺すという約束も果たせないまま、独り戦場に取り残されてしまったアルジュナの孤独と絶望は、果たしてどれ程のものだったか。

最終戦にてようやくカルナを認識し、人間性を取り戻したことで、彼と共に過ごした頃の面影が失せて異形と成り果てた自分と、そんな自分が今まで何も感じるこ

となくやってきたことまで自覚し、それら全てをカルナの前に晒してしまったことに気がついたせいで恐慌状態に陥ってしまい。

空想樹どころか、異聞帯そのものや自分自身まで崩壊させかねない勢いで、形振り構わず力を揮いだした弟^{アルジュナ}を救うべく、彼が見られたくないと思っていることを承知した上で、それでも真っ直ぐに見据えながら槍を構える兄^{カルナ}。

「……………随分と長い間、独りで待たせてしまってますまなかった。

あの時の約束を、今こそ果たそう」

そうして、数千年越しの約束を叶えたカルナは、もう終わった、もう十分だ、よく頑張った、ゆっくり休めと、何度も何度も優しく繰り返しながら、霊基の最後の一欠けらが消滅するその瞬間まで、神たるアルジュナを抱きしめ続けた……という流れを考えてみました。

このカルデアにオルタが来れば、もう充分頑張ったのだからと、これからはずっと楽していいんだとベッタベタに甘やかして何から何まで世話を焼こうするカルナ

兄さんに、気持ちわかるけど落ち着けと突っ込みが入れることでしょう。

以上、インド兄弟関連のネタ語りでした。

正しくバタフライ・エフェクツ的に発展した妄想でしたね、差異を加えたのは本当に最初の頃だけだったのに変化が更なる変化を読んで、その流れに乗っただけでどんどん広がっていききました。

インド兄弟は大好きなので、余計に臆虞をしてしまった気がします。

他のところも考えようとは思いますが、個人的に好きで思い入れがあった為に特別に思考が回った自覚があるので、他の面子でも同じようにできる自信がハッキリ言っておりません。

なのでもし宜しければ、『こんなの考えたのですがどうでしょう』というのがあれば、是非教えて頂ければと思います。

そのまま使うことは無くても、参考にさせていただくことや、それをきっかけに更に発展させていただくことは出来ると思いますので。

作品巡りをしていたまに見かける、『挿絵を描いてもらった』とか『三次創作をしてもらった』とかが結構羨ましいです。

新たな創作意欲を誰かに抱かせられるほどのものを作りたい、作れればいいと思
いながら、日々書いています。

そういう方がもしいらっしゃったら遠慮なく為されてください、その後で見せて
もらえたりでもしたら感無量です。

『ゼル伝』が人理に与えた影響 反逆の騎士編 前

ずっと温めていた第二特異点の山場（まだありますが実質的にはそうだと思う）を書き切ったのとリアルで忙しくなってきたのが合わさって、執筆が滞っています。前回の更新から少し間が開いてしまったので、中継ぎとして久々にネタ語りを入れることにしました。

彼女の登場はまだ先ですが、共に戦える時が今から楽しみです。

まず初めにFate原典との違いとして、こちらの世界のブリテンでは、騎士達が自分にとっての騎士道というものを模索するための一種の教本のようなものとして『ゼルダの伝説』が扱われていました。

この物語を読んで何を考えたか、自分ならどうしたいと思ったのが、自身の為

すべきことを見定めるためのヒントやきっかけになるのだと。

モルガンの元ではきっかけが無く、アーサー王の元で騎士となってから初めて『ゼルダの伝説』を手にしたモードレッドは、ぶ厚い本の山に尻込みしながらも、父に認められるためにも己の騎士道を求めて手を伸ばします。

そうして、始まりこそ義務感と勢いであったものの、徐々に本心から胸を躍らせながら太古の英雄譚に没頭していったのだけれど。

『伝説』を読み終えた彼女が最も強く抱いていた想い、彼女にとっての騎士道となり得るもの。

周りの騎士達に前以って聞いていた例の中には一切存在していなかった、自分でもどうしてこんなことが気になるんだろうと首を傾げてしまったそれは、勇者の強さに対する憧れや、自分も彼のように人々を守らなければという使命感といった在り来たりなものとは異なっていました。

「どうして勇者は、そこいらにいるような何の変哲もない連中の、魔王を倒して姫や世界を救うという使命と比べたら鼻で笑えそうなちっぽけで下らない悩みや願い

に、いちいち付き合ってやっているんだろう」

自分の騎士道は自分の力だけで得るべきだと、実年齢もあってささやかな意地を張ったモードレッドは、誰に相談するでもなく彼女なりに考え続けた末に、彼女なりの答えを出します。

それは、考え始めた彼女の頭に最初に思い浮かびながらも、そんな単純なことではない、もっと深い意味や理由がある筈だと即座に斬り捨てて、巡り巡った末に戻ってきたものでした。

守る、もしくは助けると心から誓った筈なのに、それを成し遂げられなかった。あらゆる困難に悩まされていた国の中枢、それに最前線に対応する騎士という立ち位置の周辺では有り触れていた様々な実例を前にしながら、モードレッドは考えました。

何かを助けるといふ行為には総じて限界があり、当人がどんなに望んでいたとしても、その枠から溢れ出してしまったものは諦めるしかないのだと。

多数を救うために少数を切り捨てるといふ決断は、その人が非情だからではなく、本当は全て救いたいのを仕方なく割り切っているだけなのだ。

「誰だって本当は、勇者みたいに全てを守りたい。

誰かが困って助けを求めていれば、それがどんなにちっぽけなことであっても応えてやりたい、喜んで笑顔になってもらいたい。

やらないんじゃないで出来ないだけ……本当に大変なことなんだ、あの父上でさえ難しいくらいに。

勇者が強くて特別な奴だったのはその通りだけど、その意味は俺が最初に思っていたこととは少し違った。

あいつの本当に凄いところは腕っぷしじゃなくて、世界を救うという絶対の使命に加えて、目につくものをありったけ抱え込んでも零さずにいられる容量のかさなんだ」

（ちなみに、当の本人がこの考えを耳にすれば「いやいやいや流石にそれは考えすぎだから、たまたま知り合った人の困りごとや頼みごとをあくまで俺に出来る範囲で手伝っただけで何もかも全部助けるなんて流石に無理だから!!」と全力で首を横に振ることになるけれど、守ると決めたものをきちんと守り抜いてきた事実を知っている周りからの同意は得られない）

ひとつの答えを得たモードレッドは、自身の騎士道をこう決めました。

「少数を犠牲にしても多数を救う……そう決めて実践している奴は既にたくさんいるんだ、そっちは任せておいて問題ない。

だから俺は、そいつらが取り零しちまった少数の方を何とかする。

父上や他の円卓の奴らが大勢を助けて、手が届かなかった連中を俺が何とかして、最終的に全部を守り抜くことが出来れば。

ブリテンは完璧だ、父上だってきっと俺を認めてくれる」

大のために小を切り捨てるという非情な判断を（見かけとしては）たやすく下すアーサー王が、敬われると同時に人ではない別の何かのように思われて畏れられていた状況でその考えに辿り着き、純粹に力になりたいと思っていたモードレッドは、ほんの少し何かが上手く噛み合いさえすれば、忠臣として、あるいは息子として、王の元で尽くすことが出来たのかもしれないかったけれど。

残念ながら、誰に相談することもなく一人で考え、一人で答えを得たモードレッドには、自分が何を思って行動しているのかを周りと共有するという発想がすっぽ抜けていました。

犠牲なんて冗談じゃない、王の決断なんて知ったこっちゃないと言わんばかりに、命令や基本方針の逆張りで動き続けるモードレッドの姿は、多数のためならば躊躇うことなく少数を犠牲にする非情で完璧な王への不満と反骨精神の表れにしか見えず、王自身もそう受け止めていました。

王の意向に従わない者を円卓に置く必要は無い、不穏分子を追い出してしまえと

いう声も、かなりの大きさであったのだけれど。

王に見捨てられ、絶望のさ中であつたところをモードレッドに救われた者達が、心からの感謝と忠誠を以ってモードレッドの下に集まっていました。

多数を救うためには仕方がないと切り捨てられた少数派だった者達が、少しずつながらも確実に増えていった結果、いつの間になら一大勢力と化していたのです。王への不審と不満を胸中に燦ぶらせながら、モードレッドが望んでいないからというただそれだけの理由で大人しくしている彼らは、モードレッドの意向次第で躊躇うことなく反逆者となるであろうことは分かり切っていて。

ただでさえ問題だらけな現状で、更に余計な敵を作り出すわけにはいかず。

注意は怠らないものの、円卓に落ち着いて最低限のラインを越えないでいる間は余計な手出しは無用ということで、モードレッドの存在は王に近い者達の間ではいつ火がついてもおかしくない爆弾のような認識をされていました。

しかし、もっと下っ端の騎士達や噂を耳にした一般人達の間では、僅かな人達を決して見捨てなかった騎士の中の騎士として、モードレッドの人気と評判は鰻登りで。

モードレッドがアーサー王の落胤で、王に認められて後継者となることを望んでいるという噂もどこからか広まり、あくまで噂だと念を押しながらも、それが本当であることと叶うことを願う民の声は、アーサー王の元にまで聞こえていました。

進む先しか見えていない自身の行動がアーサー王を暗に責め立て、円卓の騎士達に不穏なものを感じさせているとは知る由もなく。

「見てるか父上、俺は頑張ってるぜーっ！」という純粋な気持ちで自身の騎士道を邁進していたモードレッドは、認められるどころか遠ざかっているような現状に首を傾げながらも、それで自身が為してきたことの是非を疑ったり、歩みを止めてしまうような落ち込み方はしていませんでした。

助けた者達の笑顔や感謝の声といった分かりやすい成果が、父に認められること一択だった彼女の価値観に少しずつ変化を与え、アーサー王に認めてもらうためではなく、ただ単純に助けを求めている誰かのためにという気持ちが強くなっていたのです。

……いつものように、切り捨てられた弱者達を助けようと奮闘したモードレッドが、そのために我が身を賭したことで瀕死の重傷を負ったのは、そんな心境の変化を自覚し始めていた頃のことでした。

死の淵を彷徨いながらうわ言で父を呼ぶモードレッドの姿に、モードレッドの部下達は悔しさと遣る瀬無さに涙を流しました。

モードレッドの傍で、彼女の本心に触れる機会が多かった彼らは、モードレッドの行動が世間で思われているような王への反逆ではなく、王の力の及ばなかった部

分を補って、息子として認めて褒めてもらいたかったからであることを正しく認識していました。

国のため、多数のためと、自分達のことをあっさりと見捨てた王への信頼や忠誠なんて消え失せているし、反逆だって上等だけれど。

そんな自分達を諦めずに助けてくれたモードレッドが、王の愛を、王の元で力を尽くすことを求めているのならば、全力でそれを手助けしよう。

そう誓っていた彼らは、実際に行動を起こしました。

文句と不満がこみ上げそうで、会うどころか顔を見ることすら嫌だった王へと、命を賭した直談判に向かったのです。

それを叶えてくれるのならば、自分達全員の命と引き換えにしても構わない。

自分達のことを反乱分子として危惧していたのは分かっているし、実際にそれは正しいのだから、一掃してしまえるのは望ましいことの筈。

それ程の覚悟と対価を引き換えに望まれたのは、普通に考えれば吊り合うとは到底思えないような……しかし、モードレッドにとっては心から渴望し、自身の全てを賭けてでもと願っていたこと。

死にかけているモードレッドを見舞ってやってほしい……父としてではなく王としてで構わないから、優しい言葉をかけてやってほしいと。

その場に居合わせた者達は、それを叶えてやってもいいのではないかという考えを見せました。

それで後顧の憂いを無くせるのならと打算的に考えたところはあったけれど、それ以上に、モードレッドが本当に死にかけていることを知っていたから。

王の考えや方針に歯向かうという騎士としてあるまじきスタンスや、不穏分子の筆頭として国を脅かしかねないという事実を問題視していたとしても、弱者を決して見捨てないモードレッドの考えや行動自体は間違っていないと思っていたし。

自分達には取れなかった選択をして、出来なかったことを成し遂げて人々の尊敬を集めるモードレッドのことを、個人的には認めていたから。

そんな空気の中で、いつものように涼しげな表情で立つアーサー王の内心は、かつてない程に追い詰められていました。

何故ならば、ここで彼らの要望に応えれば、様々なものを認めることになってしまふと思ったから。

身に覚えのない不義の子であるモードレッドを、彼女がこれまで為してきた王^{じぶん}への反逆行為の正しさを。

それしか無いのだという現実を前に、我が身を切られるような思いで許容してきた数多の犠牲が、王としての正解だと信じて行なってきたことが、実は間違っていたのだと。

自身が王として立つための芯と言えるものを揺るがすような選択を前に、頭の中が真っ白になったアーサー王が無意識に取ってしまった行動は、その場から逃げ出すことでした。

青ざめた顔色で、引きつった表情で、これ以上この場に居ることが耐えられないと言わんばかりの駆け足で。

そんな無様な真似だけは晒すまいと、最後の理性がかぶせた王としての振る舞い。

死の床にある恩人のために、顔も見たくなかった王へと下げたくもなかった頭を下げながら、命を懸けて懇願する……『騎士の王』と讃えられる者ならば、そうで無くてもほんの少しでも人の心というものがあれば震えずにはいられない筈の姿を、

熱の失せた冷たい眼差しで一瞥するだけで、あっさりと背を向けて去っていく。

当人からすれば一生懸命に取り繕った結果であるだけの後ろ姿は、『知ったことか、いつそそのまま死んでしまえ』という、機構に徹するあまりに人ではなくなっただけかと思えないような王の冷徹な声を、居合わせていた全ての者の頭の中に響かせました。

この時、この瞬間のアーサー王の選択と行動が、その後の展開を左右する大きなターニングポイントであり、円卓に走った最も大きな亀裂であったのだという考察が、後世において様々な形で行われることになります。

絶え間なく襲ってくる熱と痛みに意識を暗転させていたモードレッドは、必死になって自身の名を呼ぶ者達の声と、自身の手を握る優しい温もりに呼び起こされた。

目を開けることすら出来ない程に弱ってしまった状態で、数少ない判断材料である聴覚が、辛うじて状況を教えてくれます。

モードレッドの身が危ういと聞きつけた王が見舞いに来て下さったと、今手を握っていると、あなたの献身と功績を王は喜んでおられると。

だから頑張って、死なないで下さい、生きて下さいと涙ながらに訴える声に釣られるように、閉じたままのモードレッドの瞼から涙が溢れ出す。

喜んでもらえた、励ますことが出来たと思っただけで安堵した一同は、次の瞬間、浮かれ気分を叩き壊されました。

モードレッドが震える口で発したのが、王が来てくれたことへの感謝や感激では

なく、自分達に対する謝罪の言葉だったから。

王の手の形や温もりがどのようなものかなんて知る由も無いけれど、それが『男』の手では無いことだけはモードレッドには分かっていたのだということを、励ますどころか残酷な現実を突き付けてしまったと打ちひしがれる一同は知る由もなく。力の入らない体で、開かない瞼から音も無く涙を溢れさせながら、ただひたすらに「ごめんな」と呟き続けるモードレッド。

騎士として王に、息子として父に見捨てられ、生きる意志と希望を失ってしまった（と思った）モードレッドを繋ぎ止めるべく必死になって声を上げる一同は、そのことに夢中になるあまりに気付くことが出来ませんでした。

モードレッドが口にする謝罪の意味が、「（こんな馬鹿な真似をさせてしまった）ごめんな」ではなく、「（父上に認められることばかりに夢中になって、お前達みたいなのがずっと傍にいてくれたんだってことに気付けなくて）ごめんな」であったことに。

この後、モードレッドは奇跡的に回復し、自身のことを明確に切り捨てたアーサー王へとついに本格的な反逆を始めるかと、キャメロットは一時騒然となったのだけだ。

そんな危惧や思惑をよそに、モードレッドはいつの間にか、一人姿を眩ませていたのです。

『騎士としても息子としても至らぬ身でした、陛下の治世が続くことを祈っております』という、決別とも取れるような一言のみを残して。



『ゼル伝』が人理に与えた影響 反逆の騎士編 後

円卓及びキャメロットの崩壊は、モードレッドの失踪をきっかけに始まったと後の世では考察されていて、それはその時代の当事者達すらも実感していた事実でした。

大きな理由はふたつあって、ひとつは、騎士達の命を賭した歎願を冷たく切り捨てた事実によってアーサー王の求心力が著しく落ちてしまったこと（それがかつて犠牲もやむなしと切り捨てられたことがある者達だっただけに、今一度信じようとしてくれたのを裏切ったという事実が余計に強烈だった）。

そしてもうひとつは、モードレッドが防いでいた弱者や少数派の犠牲がそのまま

出るようになってしまったこと。

自身の判断によって多くの犠牲が出たことを報告されたアーサー王は、きちんと覚悟していた筈のそれに想定外のショックを受け、自分がいつの間にかモードレッドのフォローが入ることを前提に動くようになっていたという事実を突きつけられました。

王の命に逆らい円卓の輪を乱す不穏分子と思われ、扱われていたモードレッドが、キャメロットの正しい有り様を守るためにどれだけ大切な役割を果たしてくれていたのかを、多くの者が思い知りました。

……だと言うのに、彼女の後を引き継いで同じ役割を果たそうとする者は現れませんでした。

アーサー王が見せた態度は、モードレッドがこれまで上げてきた功績を、彼女の存在ごと纏めて否定したと判断するには十分な程に明確なもので。

彼女がキャメロットを去ったのは王によって追放されたからだ、一般的には認識されていました。

切り捨てられた弱者を救うという、誰が見ても正しいような行ないだとしても、

自身の意向に齒向かうことは絶対に認めないし許さない。

そんな考えが実行に移されたような状況では、『何があるかと王と国に尽くす』という騎士としての心構え以前に、保身としてモードレッドに続くことが出来なかったのです。

極限状態で無意識に取ってしまった態度がとんでもない受け止められ方をしている現状に、一時の恥を覚悟で訂正するべきではないか、モードレッドの汚名を雪いで自分も彼女に助けられていたという事実を明らかにするべきではないかという考えが、アーサー王の脳裏に一瞬浮かんだのだけけれど。

王は全てにおいて正しくなければいけない、不貞や無用な犠牲の許容モードレッドというあらゆる間違いの象徴を認めるわけにはいかない。

心身を縛る枷であると同時に、長年に渡って一人立ち続けるための大切な芯でもあった考えによって、自覚するよりも先に潰されてしまったのでした。

モードレッドを認めない、彼女によって為されていた弱者の救済も必要ない。

行き違いから生じた誤解だった筈のそれを、『決して間違えない正しき王』というスタンスを貫くために許容してしまったアーサー王の統治は盤石さと正当性を失

い、モードレッドが最後に残した言葉とは裏腹に、斜陽の時を迎えるのです。

円卓の騎士ランスロットとギネヴィア王妃が不貞を行ない、それを咎められて抵抗したせいで犠牲を生じてしまった一件は、円卓を割ったふたつめの……致命的な亀裂と化しました。

個人的な思惑としてアーサー王は、女である自分が男として玉座にあり続けるための偽装結婚の相手とされてしまい、世継ぎを生むという最も大切な役目を果たせないことを責められて立場が無く、だからと言って自分に非は無いと言うことも出来ずにいるギネヴィアに対しては、心から申し訳なく思っていたし。

彼女を愛し、彼女からの気持ちを受け止めてもくれたランスロットに対しては、裏切り者と怒るところか感謝の気持ちすら抱いてもいました。

どうにか二人を助けてやりたいのだけれど、それはこの件に関わってしまった者達の立場や責任というものを度外視した夢物語。

絶対的な封建制度によって成り立っていた国と時代で、騎士でありながら王を、妻でありながら夫を裏切るという、その場で切り捨てられても文句は言えない程の事をしている筈なのにそれを裁こうとせず、何とか穏便に済まそうとしているとし

か思えないアーサー王に、怒りと不満を爆発させた者達がいきました。

モードレッドの臣下は、彼女が姿を晦ませたとほぼ同時に一人残らずキャメロットを去っていて、内部の不穏分子は一掃されたとばかり思われていたのですが。

モードレッドが受けた仕打ち、それをさも当然と言わんばかりの表情で押し通したアーサー王の態度は、モードレッドや彼女の身に起こった顛末を周りで見ていただけの者達の内心にも、確かな燻ぶりを抱かせていたのです。

一見すれば反逆行為に思えるけれど、実際には止む無しと切り捨てられた多くの者達を救い、王とキャメロットに貢献し続けていたモードレッドが冷遇の末に追放されて。

それだけならばまだ、彼女が確かに王の意向に逆らい続けていたことと、反乱分子の多くを懷に抱えていた事実を鑑みて難しい決断を下したのだと、好意的な解釈を出来なくもなかったけれど。

どんな時も、誰が相手でも、王として正しく厳しい判断を下してきた筈の人が、自身に対する明確な裏切り行為を働いた者達を相手にそれが出来ずにいるのは、どう考えてもおかしなことでした。

なぜ、反逆者と誹られながらも多くの人を救ったモードレッドが円卓を追われ、忠誠を誓った王の妃を奪うという段違いの裏切りを働いたランスロットが赦されるのか。

二人の間にどんな違いがあれば、こんな訳の分からないことになってしまうのか。それを考えた人々は、とある……今までの当たり前からすれば、突拍子もなさすぎる答えに辿り着きました。

二人の騎士が辿った顛末に、深い意味や理由など無かったのではないか。

自分に何かと歯向かう上に、やたらと人気の高いモードレッドが気に食わなくて、傍に置いておきたくなかったから。

子を為せない不出来な妻が靡いた程度では怒らないくらいに、最強の騎士と名高いランスロットを好ましく思っていたから。

好きか嫌いか……一般市民でも理解できるような、その程度のごく単純なことしか、王は考えていなかったのではないか。

決して間違えない正しき王、『王が決めたことならば』という一言で以って多くの騎士を付き従えた完璧な王、人ならざる清廉な騎士王。

それは本当は、正しいか間違いかではなく、個人的な好みや都合で国を動かしてしまふような、俗世じみた人の王だったのではないか。

最初こそ『まさか』と一蹴されたその考えは、消し切ることも出来ないまま徐々に肥大化していった。

自分達だけで消化しきれず、ついに行動を起こしてしまった者達に対して、アーサー王はいつものように『正しい判断』を下しました。

しかし、多くの者達が向こう側の言葉に同調していた状況で行なわれた、口や行動に出さずとも同じように抱いていた不安を『国への害悪』として問答無用で切っ捨てたそれは、王に対する不信を決定づける一手となってしまいました。

王が守る『多数』とは王にとって都合がいいものの、切り捨てる『少数』とは都合が悪いもの。

王は正しさではなく私事で以って国を動かしている……清廉な少年のまま変わらないのは姿だけで、数十年を絢爛な玉座にて過ごした王の中身は今や老害と成り果てた。

涼しい顔の下でとっくの昔にキャパシティの限界を迎え、王は正しく在らねばな

らない、王は間違えてはいけないという機構としての発想と思考回路に雁字搦めに縛られて。

『老害』という表現が間違っではないような精神状態に陥ってしまっていたアーサー王に、ブリテンの各地で行動を伴いながら次々と上がる声を収めることは出来ませんでした。

そうして、ブリテン全土を巻き込んだ反乱は、多くの血を流した末にカムランの丘で決戦を迎えました。

多くの強き騎士がアーサー王の元を去り、または反乱軍側に加わり、『数』という分かりやすい戦力差が明確になっても、王の強さは並外れたもので。

アーサー王一人の存在によって戦力が拮抗し、王の人外ぶりを改めて突き付けられると同時に、かの人が届きうる実力の持ち主がいけないという事実には、反乱軍側の士気が下がっていきます。

このままアーサー王の陣営が押し切るかと思われたその時、戦場に思いがけない乱入者が現れました。

地位や実力の違いによって造りや装飾の差異があれど、誰もが立派な鎧を纏って

いる騎士の戦場に不釣り合いな、草臥れた軽装の旅装束。

見すばらしい様相とは到底釣り合わないほどに立派な剣を持ち、頭から深くかぶった外套で顔が分らないその者は、あまりに突然のことに反応しきれずにいる騎士達の間を抜け、時にはその頭上を踏み越えながら、戦場のご真ん中……アーサー王の下へと向けて一直線に駆け出します。

王の危機を察し、咄嗟に立ちはだかった騎士が振り抜いた剣の切っ先が外套を引っかけ、千切れながら舞ったその下から、綺麗な金髪と王によく似た顔が現れました。

『反逆の騎士』の名が、戦場全体に波のように広がっていった。

王側の騎士達に戦慄をもたらしたそれは、反乱軍の者達に爆発する士気と共に歓声を上げさせました。

好機を見いだせずに攻めあぐねていた反乱軍は、この瞬間から、たった一人の騎士が行くための道を確保することに尽力しました。

彼らによって開かれた道を、振り切って立ちはだかる強者がいれば自ら退けながら駆ける、反逆の騎士モードレッド。

彼女の剣……アーサー王が繰り出した反撃を避けようとせず、致命傷を負うことも構わずに放たれた覚悟の一刀は、王の体に届きました。

今の一撃に何もかもを込めていたのか、あっという間に力尽きてもたれかかってくるモードレッドの体を受け止める形になりながら、その場に崩れ落ちるアーサー王。

彼女の耳に、モードレッドの最期の言葉が聞こえてきました。

「もういい」

「もういいんです、父上」

「あなたは十分に頑張りました」

「休んでください、誰にも文句は言わせませんから」

「
.....
」

「あ
あ、
そう
か」

「私は、
間違っ
ていた
のだな」

「正さねば」

「やり直さなければ」

「私は、
ブリテンの」

「お前が誇った、
王^{ちち}なのだから」

息も鼓動も既に絶えたモードレッドの、自身の膝の上に乗った頭にそっと手を添えながら。

死に際のアーサー王は、世界が持ちかけてきた契約を受け入れたのでした。

『反逆』という不穏な二つ名にも関わらず、後世におけるモードレッドは、王に逆らう不穏分子として危険視され、それによって円卓を追われようとも、弱者を救うという騎士道を貫いた真の騎士として高く評価されています。

キヤメロットを去ってからカムランの決戦に現れるまで、どこで何をしていたのかという明確な記録が一切無いため、好きなように想像及び創作が出来る格好のネタとして、絵画や小説、ドラマや映画といった様々な形で、その期間に起こったことを描いた作品が作られていたりします（行く当てもなく旅をして、機会があれば人助けをしながら、実際にそれなりの冒険をしていたらしい）。

当時も今も、騎士としてかなりの評価をされているモードレッドだけれど、当人はそれを喜んで受け入れる気にはあまりなれません。

何故ならば、当時の自分が騎士道と信じて盲目的に行なっていたことが、物事の道理というものを知らない子供が単純な発想のままに突っ走ったも同然のものであり、力になりたかった筈のアーサー王に多大なる迷惑と心労を与えていたことをきちんと認識しているから。

それによって多くの人を救ったこと自体を悔いてはいないし、自分が定めた騎士道が間違いだったとも思っていないけれど、一番重要な目的を果たせないどころか逆張りだったところに関しては、穴を掘って埋まってしまうくらいだと思っています。

ちなみに、これはサーヴァントになってからではなく生前の、キャメロットを離れて各地を旅していた頃に、『父上』でいっぱいになっていた頭が冷えて精神的な余裕が生まれ、様々な知識や経験を得られたことによって気付いたものです。

アーサー王の立場では、突如現れた不義の子を、しかも覚えが無い上に現実的にあり得ない存在を簡単に認めるわけにはいかないということも理解しているので、アーサー王に対する恨みや不満というものは一切無く、むしろ『ご迷惑をおかけして、しかも気付けずに散々上塗りしてしまってます……』と頭を下げて謝りたい所存であったり。

剣士としての確かな実力があるだけでなく、判断力や責任感といった精神的な強さも持ち合わせているモードレッドの有り様は、一見すれば頼りになる立派な騎士のそれなのだけれど、彼女の素はあくまで原典と同じ、猪突猛進なやんちゃ坊主と

いったもの。

自身が定めた騎士道と、結果としてキャメロットの不和を作り出してしまったことへの使命感と責任感に迫われ、無理に大人になってしまった子供の痛々しさは、ちよつと氣を付けて見ていれば聡い者ならばすぐに分かるだろうし。

信頼関係の構築と共にモードレッドの氣が緩む機会が増えれば、素の悪ガキっぷりに触れる機会だって多くなることでしょう。

騎クラスになってからの、年相応の遊び心と無邪氣さを全開にさせたはっちゃけぶりのギャップは、原典よりも大きなものになると思われます。

こちらのアーサー王……アルトリアが聖杯問答にて、真面目な表情で原典と同じことを口にすれば、ギルガメッシュとイスカンドルは『建前はいいから、今は本音をぶっちゃけろ』と促すことでしょう。

そして、要領を得ないやり取りを何度か繰り返した先で、『自分が本当に望んでいるものは何なのかすらも分かっていないのか……』と、心底呆れて肩を落とされることでしょう。

原典の彼女も十分すぎるほどに余裕が無かったとは思いますが、こちらの場合はより一層、聖杯とそれを使って願いを叶えるということに対して切羽詰まっていると思われます。

『国』や『国民』という大まかで分かりにくいものよりも、明確に思い描ける特定の誰かのことを意識していた方が、イメージのしやすさと共に、想いや覚悟はより強固なものと化す筈ですから。

……例えそれが無意識下のもので、自分では全く気づいていなかったとしても、こちらの切嗣も、アルトリアのことをガン無視はしながらも、『反逆^むの騎士^この方でなくて良かった、自分の方針とは絶対に合わないし最悪反逆されるから』と思っています。

実際には、切嗣の思想と願いを本当の意味で理解して後押ししてくれる者がいるとしたら、それはモードレッドの方だったわけですが。

もしカルデアで居合わせるようになった場合、勇気を出して改めて交流を試みようとするアルトリアと、自分の存在と一挙一動がアルトリアにとっては地雷と厄災でしかないと思い込んでいるモードレッドが、曲がり角とかでばったりと出くわし……。

「げっ、ちちう……じゃなかった陛下!!

申し訳ありません、これは本当にたまたま、運悪く鉢合わせてしまっただけです

ので!!

お目汚し失礼いたしました!!」

と、一目散にその場から逃げ去り、一人残されたアルトリアが伸ばしかけた手と開きかけた口を持って余しながら立ち尽くすというような光景が、時々見受けられることになると思われます。

モードレッドの過剰反応が、これ以上父に迷惑をかけたくない、これ以上嫌われないという子供の自己防衛本能から来ているものだということを周りも察しているのです、何の策も無いまま下手に仲介を試みるわけにもいかず。

すれ違った末に絡み合ったどころか、そのまま嚴重に結ばれてしまった二人の問題は、当分の間カルデアを騒がし続けることでしょう。

特別な場所と環境によって成り立った騎クラス（水着霊基）とは別に、こちらのモードレッドは通常の仕様として殺クラスの適性があります。

周りから騎士として認められていなかったこと、どこに行って何をしていたのか、が全く分からない期間があること、最後の決戦に顔と正体を隠した状態で現れたことなどがその理由です。

モードレッド自身も、周りや後世の評価とは裏腹に、自分は立派な騎士なんかじゃないと思っています。

自身の真価を発揮できるのは剣クラスであるということを承知しながら、実際に機会があれば殺クラスで現れることが殆どです。

それを敢えて剣クラスでの現界が叶うとすれば、適切な触媒が用いられていたか、真の実力を発揮しなければならぬと思わせる程の何かがあったか。

……生前に、全てを賭してでも成し遂げようと、成し遂げなければならないと思った最後の騎士道。

『多数のために犠牲となる少数を救う』という誓いが、実際には叶えられてはいなかったのだということを知ったか。

このモードレッドは絶対に獅子王の下へはつきません、断固として叛逆を貫くことでしよう。

その辺りはまだ、ネタの段階でも全然詰められていないのですが、今の内から少しずつ考えておきたいと思います。

取り戻すための旅路へ

「……………」
「い」

……………

.....
だれ？

「.....
なさい」

「起きなさい」

……て、
いうか

お
れ
は
だ
れ
？

「起
き
る
の
だ
」

「君はそうしなければならぬ」

「失わないため……いや」

「取り戻すために」

テレビの電源が入ったかのように、一瞬でパツと取り戻された意識と視界に飛び込んだのは、そのような状況でも瞳を焼かなかったほどに柔らかく優しい光と、それに照らされて輝く美しい庭園。

現実味を全く感じられない光景に、半ば夢見心地で呆然と言葉を失っていた少年は、それによってもっと狭い範囲の詳細な状況を把握するのに時間がかかった。庭園の中央には、椅子とテーブル付きのこれまた美しいガゼボが建てられていて、自身はそこに腰かけていたこと。

目の前のテーブルには、美味しそうなお菓子と湯気の立つお茶が、二人分用意されていたこと。

テーブルを挟んだ反対側には、自身と向き合う形で何者かが座っていたこと。

長く伸びた鼻筋、毛皮を纏って頭の両側から伸びる大きな耳、額に生えた二本の角……優雅な手つきでティーカップを傾けるその人物が、人よりも獣と表したほうが正しいような異様な風体であったこと。

それら全ての異様を正しく認識し、半ば椅子から飛び上がりながら驚愕の声を上げるのに、10秒ほどの時間を必要としてしまった。

品がないと呆れられ、失礼だと怒られても無理もないようなその態度に対して“獣”が返したのは、柔らかく弧を描いた眼差しと口の端から零れる笑い声。

僅かに開いた口元から覗いた歯は、肉を食いちぎるための牙と表せるほどに鋭く、少年は再び自身の背筋が竦み上がったのを感じた。

「ふふっ……すまない、驚かせてしまったね。

私のような様相の者は、我が王国の名残があった頃でさえ、既に珍しいものとなっていたのに。

伝説の世を越えた、遙か彼方の時に生きる君にとっては、さぞかし異様なものと

映るであろう」

「……………い、いえ、すみません。

確かに、ちょっとびっくりはしましたけど……」

優しく穏やかな声と、瞳に宿る確かな理性と知性の存在は、目の前にいるのは獣ではなく人であると認識するための根拠とするのには十分なものだった。

少年がよく知る「人間」のそれとは違う、独特の浅黒い地肌を指から肘にまでかけて無骨な装飾で彩った腕が、少年に何事かを促す。

それが、その存在に気付いた時と比べて少しだけ湯気が小さくなってしまっているティーカップであることに気付いた少年は、零さない程度に急いで手にしたそれを、火傷をしない程度に恐る恐る傾ける。

喉から鼻へと抜けていった香りと味わいは、これまでに口にしてきた飲み物のどれとも比べようが無い不思議なものだった。

「良かった、口に合ったようだね。

少し心配だったんだ、我々と君達とでは好ましいと思う味に違いがあるのではないかって」

「えっ……あ、ハイ、美味しくいただきました。」

……あの、すみません、あなたは一体」

「私の名はラウル。」

悪いが今教えられるのはこれだけだ、後はまた然るべき時に」

「ラウル、さん？」

「どうぞよろしく。」

では、次は君の名前を教えてはくれないかい？」

「俺は………」

言葉が詰まったのは勿体ぶったからではない、むしろ自己紹介を先んじてくれた彼の誠実さにすぐにでも応えたかった。

自分の名前……何よりも身近なものである筈のそれが分からない、『自分』というものが見当たらない。

足場が一瞬で崩壊し、底なしの暗闇に落ちていくかのような恐怖と不安に、少年はたちまちのうちに呑み込まれた。

「分からない……えっ、何で、どうして」

「少年」

「俺は……」

「少年！」

「おれは、だれ？」

「少年、気をしっかり！」

ぐちゃぐちゃになっていた思考を殴りつけたかのような一声によって、半ば強引に覚醒させられた少年の瞳が、不思議な力と光が宿った眼差しとがち合う。

テール越しに延ばされた、ラウルの浅黒い肌の手のひらが、歯が鳴るほどに震えていた少年の頬を、こちらを労わる優しさと奮い立たせようとする力強さを感じさせる温かさで包み込んでいた。

「案ずるな、それらは断じて君の中から失われた訳ではない。

落ち着いて……自分を信じて、もう一度探してみるのだ」

優しく、そして力強い声に導かれながら、少年は再び自身の内側へと目を向ける。右も左も、上も下も分からないような暗闇の果てに、僅かに灯った道しるべのような輝きへと、彼はそつと手を伸ばした。

明るい色の長い髪を結んだ白衣の青年が、緑の服を着た金の髪と碧い瞳の少年が、長めの前髪の隙間から紫色の瞳が覗く少女が……他にも大勢の人々が、こちらへと向けて優しく笑いかけている。

彼らが呼ぶ名が自身のものであると、何の違和感も無く受け止めることが出来た。

「……………おれは」

「俺は、藤丸立香」

「カルデアの……人類最後のマスター」

まだ少し瞳を揺らしながら、それでも確かな自信をもって。

少しだけ遅れながらも、自己紹介の返事を確かに口にすることが出来た少年……
立香の姿に、ラウルは満足げに笑いながら頷いた。

「ありがとう。」

改めてよろしく、立香」

「あ、はい……よろしくお願いします。」

で、でも俺、まだ……」

自分の名前が藤丸立香であること、カルデアという組織に所属する人類最後のマスターであること、あんなにも温かい声と笑顔で名を呼んでくれる人が大勢いること。

今はまだそれらを辛うじて思い出すことが出来ただけ、『藤丸立香』を構成する要素の大部分が未だ闇の中に散らばったまま。

再びの不安に襲われて唇を噛み締めた立香に、ラウルはその先を促した。

「ならば、君が思い出せる最初から、順を追って聞かせてはくれないか。

君と、君の仲間達の旅路を……ばらばらになってしまった本のページを拾いながら、再び綴じていくように」

思いもよらない提案に呆気に取られた立香だったけれど、数度のまばたきと深呼吸を経て気を取り直し、徐に語り始めた。

人理修復の旅路を駆け抜けた自身の物語を……その1ページ目、吹雪に閉ざさ

れた謎の施設の廊下での、紫の瞳を瞬かせながら自身を「先輩」と呼んだ少女との
出会いから。

邪竜百年戦争。

永続狂気帝国。

封鎖終局四海。

死界魔霧都市。

北米神話大戦。

神聖円卓領域。

絶対魔獣戦線。

そして、終局特異点。

加えて悪性隔絶魔境、伝承地底世界、屍山血河舞台、禁忌降臨庭園。

思いがけず挑むこととなった、四つの亜種特異点の話までをも終わらせるには、随分と長い時間が必要だった気がする。

ようやくとの区切りをつけて、深々と息を吐きながら肩を落として全身の力を抜く立香を、ラウルの笑みと拍手が労った。

使用する言葉に迷って詰まったり、入れ込むあまりに客観的な視点を失ったりと、本職の語り手には遠く及ばないであろう拙い語り。

聞き手に楽しんでもらおうと意識したものではなく、立香自身の軌跡を歩み直す過程においての副産物に過ぎないそれを、ラウルは一言も漏らすことなく聞き届けた。

「本当に、大変な旅路だったんだね。

おめでとう……その全てを乗り越えてきた末に、君は今確かにここにいる」

本人が自覚するだけではなく、第三者がその存在をしつかりと認めて証人となることで、霧散しかけていた『藤丸立香』という存在が確かな形を取り戻していく。

そしてそれは同時に、彼をこのような状況へと陥らせた元凶へと、再び対峙しなければならぬ時の訪れでもあった。

「うつ、ぐ……ああああああっ！！？」

右手の甲から始まり、瞬く間に腕全体を襲った気も狂わんばかりの激痛に、左手で右腕を掴む以外の力が抜けた立香の体が堪らず崩れ落ちた。

派手に傾いたテーブルから転げ落ちたティーカップや食器が、甲高い音を立てながら石畳の上で碎け散る。

一瞬遅れて、その破片の上に倒れかけた立香の体を既のところで受け止めたのは、浅黒い肌と無骨な装飾が特徴的なラウルの腕だった。

「立香!!」

「な、何これ……俺の腕、どうなって」

今にも飛びそうな意識を懸命に繋ぎ止めながら、やっとの思いで視界に捉えた右腕が、これぞ『穢れ』と称するべきおぞましい何かに侵食されている。

あんまりな現実を認識してしまったことで飛びかけた立香の意識を、ラウルの声がギリギリのところまで繋ぎ止めた。

「しっかりしろ、耳を澄ませて!!

聞こえる筈だ、君の傍で足掻く者達の声が!!」

『バイタルが一気に低下……何てこった、落ち着いたと思ったのに』

『くっ……おい貴様、本当に手は無いのか!？』

『残念ながら……高ランクの浄化、もしくは解呪の術を心得たサーヴァントならば対応することも可能でしょうし、カルデアにも何人か所属しておりましたが。』

新所長殿もご存じのように、サーヴァントの多くは監査に先駆けて一時退去しておりました。

落ち着いてからの再召喚が叶うように霊基パターンの記録は残してありますが、それを元に召喚を行なうのには、マスターであるミスター立香の存在が不可欠です』

『ぐぬぬぬ……こやつを救うためにはサーヴァントの力が必要だというのに、サーヴァントを喚ぶためにはこやつの力が必要だというジレンマ、か。

……………ええい、仕方がない!!

所長命令だ、今すぐこやつの右腕を切り落とせ!!』

『なっ……バカ、何言ってるんだおっさん!!

あんたも聞いてただろ、そんなことをしたら……』

『もちろん聞いていたとも……こやつを苛む呪詛は令呪に巢食い、令呪の魔力を利用して侵食を進める類のものであると。

右腕はもはや諦めるしかないが、逆に考えるなら、右腕で済んでいる段階で切り落としてしまえば少なくとも命は助かる!!』

『マスターとしての力と引き換えにな!!』

『それがどうした、やらねばこやつは死ぬのだぞ!!』

.....
おれ、
しぬ
の？

なにが、あったの？

.....

おもいださなきゃ、もういちど

『お疲れさまでした、先輩。

今日この時をもちまして、先輩の人類最後のマスターとしての職務は終了です』
『過去が変えられる危険性を考えてレイシフトも凍結か……色々と大変だったけど、いざこの時が来てみると少し寂しいな。

……浸っていても仕方がない、切り替えよう。

俺達がこれから為そうとしていることには、カルデアスもレイシフトも関係ないんだから』

『はいっ！』

不肖マシユ、どこまでも先輩にお供いたします！』

『いい、いいではないか!!』

こんな地の果ての工房に期待などしていなかったが、まさかこれほど近代的な施設だったとは!!

むしろロンドンのどの工房より進んでいないか、これは素晴らしい拾い物だ!!』
『人理修復の激務の中、皆で懸命に守り続けてきた場所を気に入って頂けたよう
で何より。』

旧カルデアを代表して歓迎しますよ、ゴルドルフ・ムジーク新所長殿』

『ほほう、そして貴様が所長不在の代理を務めたというレオナルド・ダ・ヴィンチ
か。』

貴様以外のサーヴァントは、既に全員が退去したとの報告を受けているが……………
ええと、その、だな。

例外などは存在していないかね……例えばかの勇者殿ならば、自身が救った世界
のその後を案じたとしてもおかしくはないと思うのだが』

『残念ながら、新所長殿……報告書にも記載した通り、勇者殿は人理修復まで我々

を導くという大役を果たし切った時点で時の神殿へとお戻りになりました。

彼は自身の存在が、平和が取り戻された筈の世界で新たな諍いを招きかねないことを危惧していましたからね。

かの人が先んじられたからこそ、私の強いサーヴァント達も大人しく退去命令を受け入れたという話でもあるのです』

『そ、そうか……見返りも求めずに何とも潔い、流石は勇者殿と言ったところであるな』

『んもう、嫌ですわ閣下ったら。

伝説の勇者様にお会いしたかっただなんて、可愛らしいところもありますのね♡
……全く、洒落にもならないことを言わないで貰いたいものです』

『……査問が終わるまでは重罪人扱いだって言われたけど。

四人一組で押し込められてはいても、カメラでの監視なんかはされていないし、食事やトイレなんかも別に制限はされていないし。

むしろ食事に至っては、できる限りちゃんとしたのを出そうとしている心遣いすら伺えるし』

『一声かけさえすれば外出すらも自由なのには驚いたね、流石にこの状況で気軽に
出る気はしないけれど』

『あの新所長、冷徹さを装おうとはしているみたいだけど、根は悪い人じゃ無いよ
うな気がするな』

『ほほう、てことは何か。』

あのおっさんを脅すなり、懐柔するなりして仲間入りさせるってのも、立香に
とっては選択肢に入るってこと？』

『うーん……まあ確かに、あの新所長に私達の目的を知った上で改めて雇い直して
もらうってのが、一番手っ取り早くて後腐れも無いんだよね。』

残留することになるAチームメンバーの反応次第になるけれど、その可能性も
ギリギリまで残しておこうか』

『私もそうなれば嬉しいです、皆で少しずつ整えていったこの場所にはやはり思い
入れがありますから』

『じゃ、新所長に関してはそういうことで。』

……コヤンスカヤと言峰神父については、引き続き要注意で行こう。

でも今はまだ私達が無茶をする段階じゃない、もうちょっとだけ一人で頑張ってもらうことになるね。

なあに、心配はいらないよ。

勝手を知り尽くしたカルデア内での隠密活動なんて、《彼》にしてみれば何気ない日常生活も同然だし』

『人理修復が完了した時点で真っ先に退去しただなんて、よくもまあ白々しいことを……』

『ふふんっ、美女は嘘と秘密で着飾るものなのさ』

『一体何なんだあいつらは、カルデア内でいきなり銃撃戦なんか始めやがって!!』
『ムニエルさん落ち着いて、今はとりあえず安全の確保を優先しよう』

『その通りですミスター立香、危機的状況への対応力は流石は人理修復を成し遂げたマスターと言ったところか』

『ホームズも、来てくれてありがとう。』

『……ところで、あいつは今どこに?』

『ダ・ヴィンチ女史らへの救援に向かわれた、なのであちらは心配無用と考えて良

いだろう。

ミスター立香らの護衛は私が務める、急いで例の場所まで避難を……』

《ああ……あああ、誰か、誰か……っ!!》

『……っ、この声は!』

《誰でもいい、誰か、誰かいなのかあ!!

何だって私がこんな目に遭う、私を誰だと思っているんだ!!

私はゴルドルフ・ムジークだ、ムジーク家の長男なんだぞ!!

今日という日からカルデアを栄光に導く男……栄光、そう栄光、その筈だったの
に!!》

『……………ゴルフ、所長』

《…………なぜだ、なぜなんだ。

何でいつも、最後になって裏切られるんだ。

いつもこうだ、私はいつもこうだった。

どこに行っても私はのけものだった、敗者だった、爪はじきものだった》

《知っているさ、私が嫌われ者だってことぐらい!!

でも、だからってどうしろと言う!!

嫌われる理由が分からない、人に好かれる方法なんて分からない!!

私だって努力はしたんだ、私なりに最善を尽くしてきたんだよ!!

何も一番なんて望んではいなかったんだよ、二番でも三番でも満足だった!!

…………だが、はは、結果はどうだ。

三番どころか成果すら出せなかった》

《くそう、今まで何もいいことが無かったのに!!

やっと、やっとここで成功できると思ったのに!!

どこまで行っても私の人生はどん詰まりなのか……ちくしょう、ちくしょう!!》

《死にたくない、まだ死にたくない!!

だってそうだろう、私はまだ、一度も、一度も………》

《一度も、他人に認められていないんだ!!

まだ誰にも、誰にも愛されていないんだよ!!》

『……ごめんホームズ、助けに行かせて!!

この状況で無茶だったのは分かってる、でもあの台詞を言われちゃあ裏切れない
!!』

『安心したまえ、ミスター立香。

その言葉自体に否は無いが、わざわざ我々が足を運ぶ必要は無いと見える』

『えっ?』

《すまないゴールドフ殿、少し遅れてしまったようだ》

《なっ……き、貴様は、料理長!?!》

《査問の際には世話になった。

料理に詳しい貴殿が入ってきてくれたおかげで時間が短縮したし、色々と話も出て楽しかったよ。

私の代わりに皆の食事にも気を配ってくれていただろう、その分の礼という意味もある》

《そ、そうか、それは大儀で………いやいやいや、ちょっと待て!!

貴様は確か調理室担当のスタッフだった筈だろう、何なのだねその剣は!!》

《今は安全を確保することが優先だ、詳しいことはまた後で話そう。

道を開く、着いてきてくれたまえ……行くぞ、トレース・オン》

『通路を塞いでいた氷は融かしたわ、早く行きなさい!!』

『あ、ありがとうオルタ!!』

『助かった……』

『だから行けってば、私が逃げられないじゃないの!!』

……あの女、ちょっと洒落にならない。

マスターもいないし、悔しいけど今は時間稼ぎが出来れば上々ね』

『……ああ、腹立たしいわ。

私、熱いのは嫌いだけれど、家臣の不手際はもっと嫌いな。

直接会って、時間をかけて尋問までしておきながら、人間とサーヴァントの区別すらつかないなんて。

担当したのは一体誰なの、芯まで凍らせて砕いてやらないと気が済まないわ』

『フォローするつもりはないけれど、別に査問管達の目が節穴だった訳じゃないわよ。

だって私達自身、ついさっきまで、自分がサーヴァントだってことを忘れてただのスタッフだって思い込んでいたもの。

スタッフとしても働いていたのは事実なんだから証言に嘘は無いし、そんな状況

でもしかしたらサーヴァントかもなんて疑う方がおかしいでしょう』

『……………まさか、あり得ない。』

人間ならまだしも、サーヴァント相手にそれだけ強力な暗示をかけるなんて、高ランクのキャスタークラスだとしても難しい筈よ』

『それは暗示に対して抵抗した場合、かけられる方が全面協力していれば話は違うでしょう。』

更に言えば、私には『復讐者』アウエンジャークラス特有の『忘却補正』っていうスキルがあつてね。

キャスター連中の暗示もちよつとしたきっかけで解ける算段だったの、そして私が解ければ他の連中も続くようにしてあつた。

……こんな馬鹿げた襲撃なんて行わなければ、私達の暗示は最後まで解けなかったし、カルデアの譲渡だって穏便に行われていたってのに。

眠れる魔女を叩き起こしたのはあんた達自身よ、少し焙られることくらい甘んじて受けるのね!!』

『
.....
あつ、
来
ま
し
た
!!
』

『ひい、ひいいゝゝ……駄目だ、もう、限界』

『頑張れ、あと少しだ!!』

『止まるんじゃない、冷気がもうそこまで来てるわよ!!』

『エミヤにジャンヌ・オルタ、ゴルドルフさんも早くこっち!!』

よし、あとはあの二人が来さえすれば……良かったあ、ギリギリセーフ』

『いや、アウトだよ』

『えっ?』

『残念だったね、藤丸立香』

『……………り、立香。』

立香っ！！！！』

『言峰神父、立香君に何をした!!』

『お初にお目にかかる、勇者リンク殿。』

伝説にて数多の怪物を屠られた貴殿は、我ら聖堂教会にとっても偉大なる先達だ。お会い出来て光栄ではあるのだが、一步ほど遅れてしまったようだね』

『質問に答えなさいよ、このエセ神父が!!』

立香に何をしたらって聞いているの、消し炭にされたいわけ!!』

『その呪いを作ったのは私の同僚なのだが、カルデアのマスターにはちょっとした恨みとやらがあるらしくてね。

隙あらば食らわせてやって欲しい、とのことで符を預かってきたのだ。

私としては、呪う暇があるのなら殺してしまえばいいのにと思うのだが、同僚との仲はなるべく円滑にしておいた方が仕事の効率も良くなるというものだろう？
加えて、大事なマスターを目の前でむざむざと害されたサーヴァントの、怒りと絶望に打ちのめされた表情にも興味があったのだが。

……うむ、中々に趣深い』

『殺す、燃やし尽くしてやる!!』

『落ち着けミスオルタ、魔力を抑えるんだ!!』

『この状況で何を馬鹿な『マスター立香に負担がかかっている!!』……………何ですって?』

『よく気付いた、流石は世界一の名探偵と言ったところか』

『……呪いは専門外ではあるが、判断材料がこれだけ揃ってればね。

マスターの証たる令呪に巢食いながら、令呪の魔力を利用して術者が干渉せずとも自動的に侵食を進める類のものと見た。

更に言えば、ミスター立香とサーヴァント達は令呪を介することでパスを繋げている。

この状況で戦闘行為等を行ない、魔力の流れを乱すなり消耗させるなりといったことは、令呪を侵す呪いを刺激してしまうことに他ならない』

『じゃあどうしろって言うのよ!!』

戦わないと……こいつらを追い返すなり私達が逃げるなりしないと、それこそマスターが!!』

『手遅れになってしまいうな、既に一刻を争う事態へと片足を踏み入れかけていると見え……ぐはっ!?!』

『言峰ええええっ!!』

『ゲボッ………ああ、成る程。』

聖三角を所持されている貴殿は、パスを切ってしまったても自前の魔力だけで充分に戦えるのか』

『聞いている通りだ、俺なら行ける!!』

今のうちに脱出の準備を、急いで!!』

『コヤンスカヤ、こちらも急ぎだ。』

私一人で勇者を相手にするのは、流石に少々手厳しい』

『……ホームズさん？』

『まったく、下手に頭が回るのも考えものだね』

『なぜ、ドアを閉めてしまうのですか』

『現状で打つべき最善の手を、否応なしに導きだしてしまう』

『リンクさんが、まだ外で戦っているのに!!』

『瀕死のミスター立香を守りながらの逃亡劇には、一切の追走も追撃も許してはならない。』

ここで完全に後続を断たねばならない……その為には、我々が脱出した後も足止めを続けてくれる者の存在が必要だ。

マスターがいない状況で、言峰神父とコヤンスカヤを同時に……そんな無茶が可能なのは一人だけ、私よりも貴女の方がご存じでしょう』

『そ、そんな……』

『だったらせめて私も出しなさい、マスターとのパスを切りさえすれば戦っても大丈夫なんでしょ!!？』

今ある魔力が切れた時点で消滅するんだろうけど、あいつ一人だけ置いていくよりはよっぽどマシだわ!!』

『それも駄目だ。』

何故ならこれは……他でもない、彼自身の望みなのだから』

《…皆、聞こえてる？》

《ありがとうホームズ、俺の気持ちを汲んでくれて》

《皆はまた、一人で勝手なことをって怒るんだろうけど》

《もう完全に性分だな、俺が頑張りさえすれば皆を守れるって状況で堪えるのはやっぱ無理だ》

《今までありがとう、本当に楽しかった》

《もう終わったとばかり思っていた日々の、掛け替えのない続きだった》

《だからどうか、勇者としてじゃない、ただのリンクとしてのお願いを聞いてくれないか》

《……………立香を》

《俺の友達を、助けてほしい》

《俺も絶対に諦めない、最後の最後まで戦う》

《だから、今はさようなら》

《いつかまた、必ず会おうね》

「……リンク。」

リンク、ぐっ……ううう……っ！」

溢れる涙を拭えないのは、右腕を苛む呪詛のせいだけではない。

声を上げて発散することも出来ないまま、胸の中で膨れ続ける口惜しさと不甲斐なさの方が、全てを思い出した今の立香にとってはよほど辛かった。

このまま、本当に破裂して死んでしまえば、どれほど楽になれることかと思ってしまう。

胸中を埋めるそんな考えが、自身の紛れもない本心であることを自覚して……音を立てる程の大きな息と共に吐き出した彼が、再びその目を開けた時。

滲んだ蒼い瞳に、見覚えのある光が宿っていることに気付いたラウルの瞼が、眩しげに細められる。

それは紛れもない、ラウルにとっての『勇者』がかつて示して見せてくれたものと同じ。

困難に立ち向かう『勇氣』の輝きだった。

「ラウルさん、帰り方を教えて下さい」

「皆が俺を助けようと頑張ってくれている、俺も戻って戦わないと」

「あいつを、迎えに行かないと」

「勇者だの何だのは関係ない」

「友達なんだ」

「ならば立香、私と契約をしなさい」

「酷な話ではあるが、今現在君らが居るあの場所に、その呪詛をどうにか出来るだけの設備や人員は存在していない。

このまま無理に帰還を果たしたとしても、悶え苦しんだ末に死に至る……右腕を放棄して命だけは取り留めたとしても、君が何よりも宝と称していた数多の英霊達との繋がりは失われる。

どちらにしても、君はこの先、大切なものを取り戻すために戦うことは出来なくなるだろう」

「……………それは、困るなあ。

ラウルさんがいれば、どうにかなるの？」

「君の命と、英霊達との繋がりの証であり資格でもある令呪、その両方を共に守ってみせると約束しよう。

……………その代わりと言っては何だが、君もひとつだけ約束してほしいんだ。

君がこれから歩む旅路は、人理修復のそれをも上回るほどに過酷で、残酷なものとなるだろうけれど。

……………それでも、どうか諦めないでほしい。

遙か遠い未来で目覚めた彼が、世界にたった一人だけという孤独を味わう間もなく、掛け替えのない友人達と共に再びの生を得ることが出来た。

そんな存外の奇跡をくれた、君達を育んだ世界のことを」

少し不安そうな表情をしながらの、かなり不穏なものを感じさせる内容であったというのに。

悩むまでもなく頷いた立香に目を瞬かせたラウルは、零れるような笑みを浮かべながら、ゆっくりと延ばされた立香の呪詛まみれの右手を自身の浅黒い手で受け止める。

そこから生じ、温かさを伴いながらゆっくりと広がって右腕を包み込んだ光が、呪詛の苦痛を和らげてくれたことは気のせいではない。

動かすのが少しだけ楽になった口が、とうに馴染んだ呪文を紡ぎ始める。

「素に銀と鉄、礎に石と契約の大公……」

たった今まで、呪詛によって生と死の境を、殆ど死の際の方で彷徨っていた立香

を救うべく奔走していた一同は、突然の異様を前にそれまでの喧騒が嘘のように言葉
葉を失っていた。

死人のような真っ白い顔で、もはや呻き声を上げることすらも出来なくなっ
てしまっていた立香の、令呪の赤色すら分からなくなるほどにどす黒く変じてしまっ
ている右腕……それが今、眩いばかりの魔力の輝きを纏っている。

明らかな異変ではあるけれど、それは同時に、人理修復の旅路を手助けしてきた
カルデアのスタッフ達にとっては既に慣れ親しんだ現象でもある。

魔力の光が、まるで虹色の羽が舞うかのような光景を作り出しているこれは、最
高位ランクのサーヴァントが現れようとしている前兆であることが既に判明してい
た。

「……ダ・ヴィンチちゃん、これは」

「立香君、一体何を喚ぼうとしているんだい!？」

密閉空間の中で、何の準備も心構えも出来ていなかった状況で突如発生した魔力

の奔流に妨げられ、中心にいる立香のもとへと誰も近づくことが出来ない。

永遠にすらも感じられた幾ばくかの時を経て、魔力の風と光が収まっていくのを待つしかなかった一同は、それらが過ぎ去った後に現れた光景が予想外のものであったことに目を瞬いた。

横たわる立香の傍らに現れると想定していた、新たなサーヴァントの姿がどこにも見受けられない……召喚自体が失敗だったのか、今の一瞬の間に霊体化したのか。いくつかの想定が出来たし、何かしらの確認や対応だつて必要になるけれど、現状で最も優先すべきものは他にある。

なけなしの治療道具や礼装を手に駆け寄った一同は、今度は本気で言葉を失い、その場で呆然と立ち尽くす羽目になった。

今の今まで本当に死ぬ間際だった立香の顔色が、呼吸が、もう大丈夫だと一目で判断できる程の血の気と力を取り戻している。

それを素直に喜ぶことが出来ない程に、目の前に広がった光景はあまりにも異様なもので。

「……………ねえ、シャーロック・ホームズ。」

世界一の顧問探偵、君はこの現象をどう考える？」

「レオナルド・ダ・ヴィンチ、万能の天才、君が今考えているそれと同じだと思ってくれて構わない。」

……この異形の右腕こそが、ミスター立香を救った新たなサーヴァントだ」

呪詛へと対応するために上着を脱がせていたので、右腕だけに収まらず肩から脇腹の辺りにまで及んでいる変化は誰の目にも明らかだった。

何とか気を取り直した者が、立香へと声をかけようとしたのとほぼ同じタイミングで、鳶をそのまま巻き付けたかのような無骨な装飾によって彩られた、甲に令呪の赤い輝きが無ければ立香のものだとは到底信じられなかったであろう異形の右腕がゆっくと動き出す。

その動きは融合したサーヴァントの意思によるものなのでないか、立香を傷つけるつもりなのではないかという懸念を、一同にほんの一瞬抱かせたそれは、立香の首を絞めるでも頬を張るでもなく、天井の明かりを掴もうとするかのように軽く掲

げ上げられただけの位置で止まった。

震えながらもゆっくりと開かれた立香の瞳に、霧散しかけていたこの身を再構築するのを手伝い、再び歩んでいけるように導いてくれた人の腕が、自分自身のものとしてそこにあるという謎の光景が映し出される。

訳が分からないまま混乱し、慌てふためいてもおかしくはないような現実を、彼は『ああ、そうなんだ』とあまりにも自然に受け入れた。

「……………ありがとう。」

お借りしますね、ラウルさん」

裏切りのAチーム、地上の白紙化、異星の神とその使徒達。

呪詛によって蝕まれた状態のままカルデアを飛び出し、今の今まで生死の境を彷徨っていた立香は、旧カルデアの一同を混乱と絶望に叩き落した諸々の事象についてまだ何も知らない。

知ればもちろん驚くし、何時間かは落ち込むかもしれない……………それでも。

諦めないし逃げもしない、何故なら既に約束したから。

遙か古の時代、仲間達と共に同じように絶望へと立ち向かった王の右腕が誓いの証であることを、腕の本来の持ち主と立香だけが知っていた。

魔術礼装『決戦用カルデア制服』の手袋の穴から除く変色した右手を見て、ティアキンのリンクの右腕が瘡気に侵されて死にかけていたところを助けるために光の力を持つラウルが自らの腕を貸したものだということを知って、ティアキンを進めるうちに明らかになっていった右腕の能力諸々を考察して。

思いました、「これリンクじゃなくて立香が持った方が面白そう」だと。

礼装でガチガチに固めた右腕の隙間から覗く肌の色に、無理に魔力を活用しすぎた後遺症だ、礼装は壊れかけのそれを補助するためのものだとばかり思っただけで侮っていたら実際には気配を隠蔽するためのもので、満を持して解放されたその下からと

んでもない力を秘めた腕が現れて驚愕する……なんてのを、ゲームをやりながら妄想して楽しんでました。

右腕の力は凄まじい身体能力を持つリンクだからこそ活用できているところも大きいので、ゲーム本編のような使い方は到底できませんし、マスターでありながら前線に出てサーヴァント達と肩を並べて戦えるようにもなりません。

スクラビルドやトーレルーフ等の名前付きの能力に関しては、リンクが使用した場合の数十分の一くらいのレベルで、旅路を多少便利にするのが精々でしょう。

活用するとしたらむしろ、光の力による解呪や浄化などの方が機会が多そうです。しかしそれも、立香に技術が無いために『川辺のゴミを掃除するためにダムの水を全力で放水する』レベルでのゴリ押しになりそうなので、後々にゴルドルフ所長やカドックが白目を剥きながら胃の痛みを堪える羽目になると思います。

マスターである立香を天然のデミ・サーヴァントじみたものにする……それも神と謳われたゾナウ族、ハイラル王国の初代国王であるラウルを相手に。

流石にちょっとやりすぎかなと思ったこのネタを行うこうと思ったのは、立香がマスターだからこそ生かせる右腕の能力を思いついたからでした。

ゲームにおいては賢者達の分身を宿して共に戦っていましたが、あれをサーヴァントで出来ないかな〜と。

宿らせることと呼び出すこと自体が右腕の力なので超省エネ。召喚にも維持にも余計な魔力を使わないで通常のそれとは完全な別枠扱いとなります。

デメリットとしては、本来はあくまで賢者の分身を追従させるための力なので、サーヴァントを適用させるには、一時的にでも『シャドウ』のレベルまで存在を落とさせる必要があること。

大した負担もなしにすぐ傍で立香を守れるのならば、自動モードで戦うことしか出来ない影になるのも許容範囲。

後で必ず元に戻してくれると信じているし、仮に非常事態が起こってしまったとしたらそのまま使い潰されたとしても別に構わない。

心からそう思えるくらいの信頼関係が存在していることが条件であり必須だと考えています、具体的に言うのなら絆レベルが7以上といったところでしょうか。影ではなく青い光によって形作られた姿で、基本的に自動で戦うけれど、立香が直接指示を出せばダウングレード版かつしばらくの間呼べなくなるけれど宝具も使えて。

ネタはこんな感じになります、いつか本編で書ける日は来るのでしょうか……。

ラウルの右腕を得たことで考えている、第二章以降のネタをもうひとつ。

ずばり、『ゼルダの伝説』に由来する英雄達の召喚を解禁です。

マシユの円卓の盾があらゆる英雄達との縁を繋いでいるように、『初代ハイラル国王』というハイラル由来のあらゆる縁の中心にいるような存在の腕が、新たな触媒となることを考えています。

人理修復に関しては、血筋、歴史、信仰、思想などの同一の縁や繋がりを持たない、既に完全な終焉を迎えたハイラルとは全く関係ない新たな歴史の中で起こった

事件、そこで生きる者達の手で立ち向かうべき問題でしたが。

第二章の地球白紙化、世界同士の生き残り闘争に関しては、ハイラルの人達にとっても大問題です。

それは、最終的に勝ち残った異聞体が、『過酷な環境や偏った価値観を持つ者の独裁の中でゼルダの伝説という物語が失われた』もしくは『ゼルダの伝説がそもそも発掘されなかった』歴史である可能性が十分にあるからです。

『ゼルダの伝説』というのとはそもそも、遠い未来で蘇る日が来るかもしれないリンクが新しい世界でも孤独にならないようにと願い、新しい人々の中に彼を受け入れる土台が作られることを期待して遺されたものです。

それが失われ、リンクが新たな人生を歩めるようになる余地が一切消え失せた世界なんて、ハイラルの人達からすれば認められるものではありません。

人理焼却という未曾有の大惨事が起こってしまった故であったとしても、リンクが目覚めて、彼を勇者ではなくただのリンクとして見てくれる仲間にあえて、また生きたいと思わせてくれた。

そんな奇跡が起こった汎人類史こそが、ハイラルの英雄達にとっての守るべき世

界であり、先んじて駆けつけることが出来たのが蝕まれた右手云々で強い縁が生まれたラウルだったという訳なのです。

ブレワイの1万年前にも勇者と姫と魔王の戦いがあったらしいことから、『伝説』として語られていないだけで緑衣の勇者の冒険は他にも色々あったと考えています。

ティアキンの物語もその中のひとつだったとして、

『ラウル』って名前自体は、他の章で光の賢者のものとして出ているけど

初代ハイラル国王？ ゾナウ族？ 古代文明？ 息吹の勇者の新たな戦い？
何それ知らない……

となって困惑する一同をよそに、一人だけ『そういえばあったな』となったり
ンクが『何日か時間ちょうだい、ちょっと書いてくるから』とか言い出して大騒ぎ、

みたいなことになりそうです。

ちなみに、時代を大きく隔てているのにも関わらず同じ名前の国や村や人が度々現れているのは、ゲームのメタ性を除いて考える場合、世界の管理者である女神ハイリアの存在とセンスに関しては変わらず一貫しているからかなと想定しています。

街づくりゲームを場所や条件を変えて改めて最初から始めても、プレイしている人が変わらないと結局似た感じになるようなもので。

随分と長い間書いていなかったので色々と四苦八苦しなりましたが、自分の中にある物語を何とかして形にする工程はやはり苦しいながらも楽しかったです。積み分も発売予定のものも含めてまだまだやりたいゲームがあり、時間とやる気を捻出するのが大変そうではありますが、書く気自体はまだまだあります。

今度はあまり間を開けないよう、どんなに短い時間でも執筆を日々の習慣にするよう努めていきますので、お付き合いいただけると幸いです。

「どうだ、コヤンスカヤ」

「んんん………駄目ですねえ、影も形も気配も見受けられません。

隠蔽工作もしっかり施されているようですし、この状況で今から追うのは獣にとっても無茶ぶりです」

「……逃げ切られた、と思ってよいということか」

「大した問題ではありません、あの悪趣味な呪いはきっちりくれてやったのでしょ
う？」

判断が遅れて死ねば良し、ばっさり切り落としたとしてもマスターとしてはやはり死ぬのでそれも良し。

カルデアはもはや脅威ではないという事実は変わらない、寸分たりともね」

「ふむ……それもそうだな、念のため警戒を続けておく程度の対応で良からう。叱責を受けるようなことはあるまい、思いがけない手土産も出来たのだから」

「手土産って……もしかしてあなた、『あれ』を成果にカウントするつもりですか？
もの自体が最上級品であることは確かに認めますけれど、使えなければ意味が無い
のでは？」

「飾っておくだけでも士気を向上させるには十分だろう、あれはそれだけの力を持つ代物だ」

「そういうものですかねえ。」

……まあ念のため、我が社の商品を集めるついではなりますが、あれをどうにか出来る方法についても探しておきましょう。

難しいとは思いますが……何しろ、あらゆる魔の根源とも言うべき存在を、万年単位で押さえ込むことすら可能とするような代物なのですから」

「……意外だな、獣たる君がああ『伝説』を嗜んでいるとは」

「あら偏見。」

こう見えてわたくし、あらゆる魔物の王たるかのお方に關しては、本当の本気でリスペクトしておりますのよ♡」

表面だけが和やかな二人の人外が、同じく表面だけのやり取りを交わす、あらゆる命が消えうせた極寒のカルデア。

乱立する氷の柱に紛れて、巨大な宝石のような結晶が静かに佇んでいる。

あらゆるものを拒まんとしているかのように、冷たく硬質なその中心では……緑の服を纏い、手の甲に聖三角の紋章を刻んだ金の髪の少年が、閉じた瞼に碧い瞳を隠しながら、穏やかな微笑みと共に眠りについていた。

リンクの救出、及び合流が出来るのはオリュンポスあたりになりそうです。

封印に閉じ籠った状態でも夢の中でAチームの皆と密かに交流して（Aチーム側は知らないもしくは覚えていない）、彼らの結末や心の在り方をちょっとだけ変えてくれたりしたら嬉しいですね。

イベントの物語

デッドヒート・サマーレース プロローグ

イベント関係のネタが溜まってきたので、本編の合間に書くことにしました。
未来設定で、まだ本編に出ていない人もいるので、その辺りも楽しんでいただければと思います。

それは、とある夏の盛りのこと。

微小特異点の発生をいち早く察知した女神イシュタルが、とある『前例』を参考に、いつもとは一味違った形でそれを解決する方法を思いつき、カルデア全体を巻き込んだ一大イベントを企画した。

その名も、『デッドヒート・サマーレース』。

コンビ、もしくはトリオを組んだ参加者達が自慢のマシンを繰り、その車輪の軌跡によって大地に陣を刻むことで大規模な術式を構築し、楽しく平和的に特異点を消滅させるという。

選手として参加する者、運営に回る者、観客として楽しむ者。

熱意や理由の差異こそあれど、カルデアの誰もが何らかの形で関わることとなったお祭り騒ぎに、立香とマシュは発起人であるイシュタルと共に、サポートスタッフの筆頭として加わっていた。

「えっと、あと必要なものは……」

「大きなイベントを運営するという経験は初めてですが、こんなにも大変なものですね」

「文化祭とは訳が違うな。」

リンクが手伝ってくれば、もっと色々と楽だっただろうに」

「どこに行ってしまったんでしょうね、リンクさん……」

「俺が何だって？」

「えっ」

「リンク!？」

思いがけず聞こえてきた声に驚き、咄嗟に振り向いた二人の目に飛び込んできたのは、レースの開幕が大々的に伝えられて以降見かけなくなっていたリンクの姿だった。

数日ぶりに相対した彼が身にまとっていたのは、肌を大胆に露出し、繊細な装飾をあちこちに施している、どこか暑い地方の民族衣装を思わせる服。

戦闘中になれば見かけた覚えのある、見るからに涼しそうな恰好を、何故か今ここにしている。

その事実からとある可能性を導き出した立香は、浮かんだ疑問をそのまま問いかけた。

「まさかお前、レースに出るの？」

「まあな、でも俺は誘われて引き受けただけのサポート役。」

やる気満々なのはあっちだよ」

リンクが苦笑いを浮かべながら指差したその先から、大きく手を振って声を上げながら駆けてきた少女。

立香とマッシュがその名をすぐに呼べなかったどころか、それが『彼女』であることに、ほんの数秒とはいえ気付けなかったのも無理はなかった。

当世風に表すならばアラブ風と例えられそうな衣装は、女性としての美しさではなく、丈夫さと動きやすさを優先した少年のそれにも見えるもので。

それだけで深層の令嬢を連想させるような白く美しい肌は、健康的な小麦色に日焼けして。

いつもならば華奢な背中を美しく彩っている、光を束ねて形作ったかのような長い髪は、頭の上でまとめられてくるりと可愛らしい円を作っている。

輝くような笑顔と軽快なフットワークは、それ自体は本当に美しく魅力的だったのだけれど、責任のある立場と務めに相応しくあらんと常に自身を戒めていた、『姫』や『賢者』と呼ばれるに相応しい淑やかなイメージとはなかなか重ねられな

くて。

しかし、どれだけ違和感を募らせようと、『美しい姫君』という概念の大部分を形作る美貌に変わりはなく、目の前にいる少女が『彼女』であることを疑いようもなく証明していて。

考えを巡らせるどころか、殆ど真っ白になってしまっただけ何も考えられない思考状態で過ごしてしまった数秒の後に、立香とマッシュは重ねた声を響かせた。

「『ゼルダ姫（さん）！！？』」

「はい、ゼルダです。」

……と、言いたいところなのですが。

今この時、と言うよりこの姿の時の私は、どうか『テトラ』とお呼び下さい。
リンクと違って、私の中に『彼女』がいる訳ではないのですが……同じ『ゼルダ』として、尊敬すべき先輩としてちょっと真似をさせて頂くくらいなら、許してくれると思いますので!!」

「ちよっとリンク、お姫様どうしたの!!

キャラが違うレベルでテンション上がってるんだけど大丈夫!？」

「大丈夫大丈夫、心配しないで。」

このお祭り騒ぎに浮かれて、羽目が外れて、普段頑張って抑えている分が爆発しているだけだから」

「まさか、リンクさんを誘ったのは……ゼルダさん、レースに出られるのですか!？」

「勿論です、出ないなんて選択肢はありません!!」

荷を運ぶのではなくただひたすらに速さを追求した乗り物で、大勢で競い合うなんてことは、ハイラルではありませんでした!!

すっごく楽しみです、頑張るので応援してくださいね!!」

「……マシンは?」

「俺のマスターバイクを貸すことになったよ。」

ダ・ヴィンチちゃんが、前に作ったサイドカーを改めて調整してくれたから、俺はそっちに乗ってサポートする」

「操縦は出来るの?」

「ライダークラスの霊基と同時に『騎乗』スキルを得ているから、その辺りは問題

ないと思う。

……そもその話、同じ『ゼルダ姫』だとしても決して同一存在というわけではない海賊王女のご概念を、『レースに出たい』の一心で会得してみせた時点でもうゼルダは止められないって。

ゼルダはな、普段はきちんと立場を自覚して自重している分、いざ思い切った時の行動力が凄まじいんだ。

こうなったらもう、観念して付き合った方がいい」

「……お前、慣れてるなあ」

「まあね」

肩を竦めながらそう言ったリンクの笑顔は、呆れたような口調とは裏腹に、立場と責任を優先して我慢することが多いゼルダが全力で楽しんでいることを心から喜ぶ、優しさと思いやりを感じられるものだった。

古今東西の名だたる英霊達が名乗りを上げ、錚錚たる顔ぶれが集ったサマーレースは、発起人であるイシユタルでさえ驚きを隠せない程の大盛況の中で始まった。

何でも、リンクとゼルダが参加することを聞きつけた某王様が、設備や物資の不足といった類いの不具合であの二人の活躍が曇るような事態は万に一つも起こしてはならないと、錢ゲバ女神が変なところでケチらずに十分な運営資金を投入するかどうかと言われれば信用出来ないと、急遽スポンサーとして名乗りを上げたとのこと。

レースそのものにまでは流石に口を出さなかったものの、屋台の出店を取り仕切ったり、見やすさや待遇の違いで観客席を詳細にリンク分けした上でチケットを売り切ったり、高品質の録画環境を整えたりと、投資した分を取り戻すどころかどれだけ黒字を重ねられるかというリンク違いの概念で戦っているギルガメッシュに、イシュタルはレース開始前から早々に奥歯を噛み鳴らしていた。

「……落ち着け、落ち着くのをイシュタル、女神たるもの常に優雅たれ。

あんな小金を稼いで満足しているような金ぴかなんかに、私は負けはしないわ。最後に勝つのはこの私よ、今までの負け分を帳消しどころか何倍にもして取り戻してあげる」

秘密の野望を、己が内にのみ抱えるイシユタル……その真の目的を誰一人として知らぬまま、スタートの瞬間は着実に近づいてきている。

各チーム自慢のマシンが並ぶコース上では、立香とマッシュが律儀にも、出場チームのひとつひとつ、選手の一人一人に最後の声掛けと激励を行っていた。

そんな彼らが最後に赴いたのは、その存在だけで観客どころか選手達からの注目をも集めている、開始前に行なわれた人気投票第一位のチーム。

勝敗でも利益でもなく、スピードと競い合いを純粹に楽しむ気満々ではしゃいでいるゼルダと、そんな彼女を何が起ころうと手助けするべく入念に準備を整えるリンクの下だった。

「よっ……ようっ、リッカにマッシュじゃないか！

わざわざ激励に来てくれたってのかい、ありがたいことだねえ！」

「えっ」

「ゼ、ゼルダさん……？」

「……………すみません、今のは忘れて下さい。」

姿と能力の一端だけとはいえ、せっかく『テトラ』になれたのだから、もっと彼女になり切ってみようと思ったのですが。

霊基を変えて浮かれ気分になっている今の私でも、この言葉遣いと振る舞いは流石に恥ずかしいです」

「そりゃそうだ。」

血筋こそ王家の直系でも、生まれと育ちは紛れもない海賊であるテトラと、何の支障もなくお城で姫として育ったゼルダとじゃあ、生きてきた環境と受けてきた教育が違うんだから」

「彼女の在り様を格好いいと思って憧れているのは、確かなことなんですけどね……」
「そりゃあ、まあ……テトラって多分、王族としての堅苦しい教育を受けなかったのと、『国』という重すぎる責任を負わなかったことで、一番素の自分を出せていた『ゼルダ』だったんだろうし」

「リンク、何か言いましたか？」

「いや何も、ゼルダはそのままでもいいってだけ。」

……立香、マッシュ、お前達はそろそろ戻った方が良さそうだ。

運営側のお前達に鼻屑をしろとは言わないから、せめて心の中だけでも応援してくれよ」

「ああ、それは勿論。」

……ごめん、行く前にちょっと耳貸して」

マッシュと話すゼルダが気を取られている隙を見計らった立香の言葉に、リンクは素直に従って耳を傾け、小声で伝えられたイシュタルからの伝言にほんの僅か眉を顰めた。

「特異点の支配者から妨害が入る可能性ね。」

確かに、このレースが特異点を消滅させるための儀式の一環である以上は、実際に起こり得ることとして考えておくべきだろうな」

「俺達はスタッフとしてレースに追隨して、何か問題が起これたら出来る限り早く駆けつけるつもりではいるけれど」

「現場にいる者とは比べ物にならない、か。」

分かった、何か起こったら俺が先だって対応するよ」

「悪いな、参加者なのに余計な負担をかけて……」

「気にするなって、俺が出場したのはゼルダが心置きなくレースを楽しめるようにサポートするためなんだから。」

レースの進行を邪魔する要素に対処するのは、十分にその一環に入るだろ」

そんなやり取りが繰り広げられた後、イシュタルから儀式を遂行するためのマシンパーツが各チームに配布され、レース全体の概要の最後の説明とチーム紹介が行なわれた。

《このチームが参加するって聞いた時の、金ぴかの喜びようがうざったらしくて仕方がなかったわ。

まあでも、あいつがリスpektするのも分かるくらいの、大変な偉業を為してきた子達よね。

チーム名は『ウィズダム・アンド・ブレイヴ』、マシンは『マスターバイク零式

（サイドカー付属ヴァージョン）』。

ドライバーはライダーの霊基を得てやる気満々のゼルダ姫、勇者リンクは何とサポートに徹するそうよ。

何でもゼルダは、リンクが操縦するマシンにタンデムしたことはあっても、自分でハンドルを握るのは今回が初めてなんですって。

『騎乗』スキルを得た上に、勇者リンクのサポートがあるとはいえ、お姫様がどれだけやれることか。

注目ポイントのひとつね、楽しませてもらうとするわ》

そうして、全ての出場チームの紹介と、各マシンの準備が終わり。

イシュタルが振ったスタートフラッグと、立香が押したスタートランプ点灯の合図と同時に、真夏の特異点横断レースが大歓声の中で始まったのであった。

【出典】ゼルダの伝説

【CLASS】ライダー

【真名】テトラ（ゼルダ）

【属性】混沌・善

誇り高く淑やかな、正に『理想のお姫様』と称するに相応しいゼルダ姫でさえ、夏の陽気には抗えなかった!?

実はスピードを感じるのが大好きだという、思いがけないアクティブな一面を絶好の機会に露わにした彼女が求めるのは勿論、勝利の証たる優勝カップと、それを手に入れるまでに得られる全て。

「勝っても負けても、最後に『楽しかった』と笑い合える。

そんな最高の思い出を、皆さんと一緒に作りたいと思っています!」

そう言いながら、夏の爽やかな青空を思わせるような輝かしい笑顔を、いつもの彼女とは違う意味で最高に魅力的な表情を見せてくれたゼルダ姫。

そんな彼女の後ろで苦笑いを浮かべていたリンクが、「一応俺は、自分の発想や行

動が大概だって自覚してるけど、ゼルダは完全に素だからな……ストッパーになっていた務めや責任から解放されたこの状況で、果たしてどれだけはっちゃけることか」と零していた発言の真意を、この時はまだ誰も分からなかった。

デッドヒート・サマーレース 平原エリア

そうして始まったサマーレースは、自己の責任と判断で休憩や整備を行ない、四つに分けたエリアごとに踏破したタイムを記録しながら数日をかけて特異点を横断するという、何ともスケールの大きなものだった。

乾いた草とサボテンが点在する荒野を、各チーム自慢のマシンが土煙を上げながら爆走する。

始まったばかりの今こそ、レースは正々堂々とした純粋な競い合いの体を為しているけれど、参加者は誰も彼もが一癖ある者達ばかりのサーヴァント。

一部の過激な思考回路を持った者達が、穏やかで安定した現状に対して早々に不

満を抱き始めていた。

「むう、代わり映えのしない光景よな……余は何だか飽きてきたぞ、もっと刺激が欲しい!!

というわけで、どうする黒メイド。

そろそろ仕掛けてみる、というの?」

「気に食わないが気が合うな、こちらも理性の抑えが効かなくなってきたところだ。

……だが、しかし」

「ん、どうした?」

「一波乱起こること自体は大歓迎だが、その口火を我々が切るのはハッキリ言って避けたいところだな。

あのチームに、最初の標的にされる可能性が非常に高い」

「……ああ、成る程」

「勇者リンクとゼルダ姫は紛うこと無き善人だ、疑いようは欠片も無い。

だがそれ以上に彼らは、数多の魔物が人々を脅かしていた上に、人間ですら完全

な一枚岩とは言えなかったハイラルで、世界を救い民を守るためにあらゆる危険や理不尽に最前線で立ち向かい続けた方々なのだ」

「自ら無益かつ無用な争いを吹っ掛けるようなことはせぬが、喧嘩を売ってきた相手を返り討ちにするに關しては欠片も躊躇わぬであろうな」

「そういうことだ、レースは始まったばかりだというのに早々にロックオンされては目も当てられん。

歯痒いのは確かだが、ここはもう少し様子見を……んっ、これは」

「どうした？」

「……私が最も嫌う態度の悪い客の気配だ、どんどん近づいてくるぞ」

ほぼ横並びになりながら荒野を走っていた一行はいつの間にか、朽ちて倒壊した建物の痕跡が枯れた大地にぽつぽつと窺える、水気が失せて酷く荒廃した一帯へと差し掛かっていた。

直観力に優れていたアルトリア・オルタに少し遅れて、他の選手達も異常事態の接近に気づき始める。

レース参加者達のそれを掻き消しかねない程のエンジンの異様な爆音を轟かせながら、某世紀末覇者の世界ばりの荒廃っぷりを見せる周囲の状況に相応しいような、ある意味で惜しいもしくは凄まじく間違っているような、現代の言葉では『チンピラ』や『暴走族』と言い表せそうなバイク乗りの集団が、朦々とした土煙と共に一同の進行方向を塞ぎながら現れた。

「ヒヤッハーツ!!」

「ここを通すわけにやいかねえなァ!!」

「そこで止まりな、カワイコちゃんたもああああああっ!?!」

「うええええっ!?!」

「ひぎゃああああっ!!」

状況を理解した一同が戦闘態勢を取るよりも、レースの状況の中継で見守っていたイシュタルがトラブルという名のイベント発生に嬉々としてマイクを構えるよりも、チンピラ達がお決まりの台詞を吐き切るよりも先に、荒野ではなくコンクリー

トジャングルの方が相応しそうなその体は、バイクを薙ぎ倒しながら突如発生したつむじ風に巻き込まれて宙高く吹っ飛んだ。

つむじ風は、まるで意志を持っているかのような異様な動きで頭から落下する寸前のチンピラ達を追いかけ、渦の中に捕まえていく。

意気揚々と戦闘を開始しようとした出鼻を挫かれ、呆氣に取られる一同の前で、目を回したチンピラ達を一人残らず纏めて山積みにしたつむじ風……その発生源となっていたものは、大きく弧を描きながら持ち主の下へと戻っていき、掲げていたその手の中へと収まった。

自ら風を生み出しながら飛び、狙いをつけることでその軌道にある程度自在に操ることが出来るという不思議な力を秘めたブーメランの持ち主は、もちろん。

「……随分と間の抜けた強盗ですね。

あんな大きな音を立てながら近づくなんて、これから襲いますって宣言しているようなもののなに」

「多分だけど、実力行使に出るよりも先に、自分達の存在と恐ろしさをアピールし

て怖がらせて、言うことを聞かせようとするのがこいつらのやり方だったんじゃないかな」

「それこそ正しく、自分達は本当は弱いですって大声で主張しているようなものではないですか。」

この程度の虚勢で恐れを抱いてしまうような、理不尽な脅しや暴力への対抗手段を持たないような弱者を相手にしか通じない手です」

「それで何とかなると思っっているような連中に限って、『返り討ちにされるかも』なんてこれっぽっちも考えてないんだよなあ」

「前にリッカさんが言っていましたよ、『撃っていいのは撃たれる覚悟がある者だけだ』って」

「……あいつ、争いの少ない平和な国で生まれ育ったという割には、たまに変なところで真理を突いてくるのは何なんだろう」

そんなやり取りを繰り返して、何事も無かったかのように改めてエンジンを吹かし始めた二人の前に、泡を食って飛び出した者がいた。

「待て待て待て待て台詞くらい最後まで言わせろ、いくら何でも問答無用すぎるだろうが!!」

「あれ、アタランテさん?」

「カルデアのアタランテさんじゃないな、この特異点の人か」

「いいか、大人しく……本当に大人しく聞けお前達、この土地はなあっ!!」

あまりに切実なものが込められていた声に圧され、まずは黙って彼女の言い分を聞くことにしたリンクとゼルダであったが、徐々に力が入っていくその表情は、アタランテの話が終わっても緩む気配は見受けられなかった。

「……さて、どうするゼルダ。」

今の俺は君のサポーターだから、君の判断に従うよ」

「では強行突破で。」

もたもたしている間にまた変な人達に囲まれてしまったので、道を開けて下さい」

「了解」

「えっ!!!?」

「逃げたきゃ逃げろ、爆発するぞー」

返事を待つことなくさっさと放り投げ、宙高く弧を描きながら飛んできた青い球から、その瞬間まで余裕綽々の笑みを浮かべていたチンピラ達が蜘蛛の子を散らすが如く逃げていく。

ぽっかりと開いた空間に落ちて弾んだ球は、『もしかして道を開けさせるためのハッターだったのか』というふと過ぎった考えをあっさりと裏切り、轟音と共に土煙を巻き上げた。

それを割って飛び出したマスターバイクと、搭乗する二人の後ろで、悲痛な叫び声が響く。

「あゝ あゝ ああああ あっ!!

種籽リングが、我が子らの掛け替えのない明日がああああっ!!……!」

「……アタランテさん半分泣いてるみたいだけど、いいの？」

「いいの、と言われましても。」

エレナさんも指摘されていたように、リングはこのような荒れ地で育つようなものではありません。

知らなかったのならば早々に諦めさせた方がいいですし、知った上でのことならば、食糧問題に本気で取り組んでいると受け止めるのには無理があります。

アタランテさんの『我が子達』への愛情を疑う気はありませんが、ある程度の力仕事も十分に可能そうな身で、真っ当に働いてアタランテさんの想いに応えるのではなく、手っ取り早い強盗と略奪に走った彼らの性根に関しては、素直に信用する気にはなれません。

偏見を出来るだけ除いたとしても、答えとして思いつくのは、情と涙に訴えて躊躇った隙について襲うか」

「もしくは、大事なものを自分達の方が先に踏みにじられたという理由で、略奪の大義名分を作ろうとしているか。」

……アタランテさんが思いつくようなことじゃないな。

もしかしたらあの人自身は、現状に無理があることを本当は分かっているが、何らかの理由や事情で立場を貫かなきゃいけないだけなのかも」

「……だとしたら、悪いことをしてしまいましたね」

「今からでも止まる？」

「いいえ。」

だって、アタランテ^そさんの事情^れとレース^れとは話は別^れですもの」

「……………アタランテさん、悪いことは言わない。」

なるべく早く、まだダメージが少ないうちに諦めて」

「他の皆さんには悪いですが、今のうちにリードを広げますよ!!」

「はいはい、了解」

苦笑いを零し、悪意のない横暴っぷりを心の中でアタランテに詫びながらも、『ゼルダが楽しんでる』という一点で全てを許容してしまうリンク。

そんな彼の耳には、どさくさに紛れて他の選手達の突破まで許してしまい、短い時間で急激に高まったストレスが爆発したらしいアタランテが、辺り構わず矢を乱

射しまくっているらしい轟音が僅かに届いていた。

この後の展開は本編通りです。

リンク君が他の参加者達を差し置いて動いたのは、『現場で何か起こったら対応する』と予め約束していたからでもあったのですが。

彼の行動力を見誤っていたことを把握したイシユタルは、この後サポートスタッフの立香を通して『レースの見せ場が無くなりかねないからもう少し手加減して』と若干光の失せた目で頼み込むことになるのでした。

2017年の夏イベを把握していない方もいらっしやると思いますので、参加チームとメンバーについて簡単に記載しておきます。

チーム名…タイラント・シューティングスター

マシン名…レッド・ヴィーナス（赤いスポーツカー）

メンバー…ネロ、アルトリア・オルタ

参加理由…レースの目玉になる高ランクサーヴァントを参加させようとしたイシュタルに、マスターを装って「君だけを応援するから一位になる姿を見せてくれ」と囁かれて、ゴールテープを切った先で待っている『自分のためだけのマスターの特別な愛』というエサに釣り上げられた。

確実に勝利を収めて優勝賞品（愛）を手に入れるために、性格的には合わないけれど実力は確かだと認めている相手と組んだ二人は、お互いに同じ理由で参加していることを知らない。

チーム名…スチームエレクトリカル With パ

マシン名…バベッジ・ロコモティブフォーム（機関車に特殊変形したバベッジさん）

メンバー…フラン、バベッジ、モリアーティ

参加理由…夏の暑さでオーバーヒート気味になっていたフランが、レースに参加すれば風を浴びて涼しくなれるのではないかと考えてバベッジに相談していたところ、何処からか話を聞きつけたモリアーティが横やりを入れてきた。

カルデア内に予め配布されていた対処法マニュアルを参考にしたフランが『パパ』と呼び掛けたところ、犯罪界のナポレオンの心臓はかつてない衝撃によって打ち抜かれ、可愛い娘のために頑張らなければと一念発起。

『ちよつと興味があつた』という理由で密かに変形機能を仕込んでいたという、過去の悪事を暴露したことによりマシンの準備が整い、レースの参加資格が満たされた。

チーム名…左馬権頭と三蔵法師

マシン名…京極&白竜（二人の愛馬、例えでも何でもなく普通に馬）

メンバー…源頼光、玄奘三蔵

参加理由…年若い娘が大胆に肌を晒す水着姿と、開放的な気持ちを促す夏という

季節そのものによる風紀の乱れに嘆いていた頼光の我慢が限界に達し、バーサーカー（母）からランサー（風紀委員）に靈基チェンジ。

一番ヤバイのはあなたです！と突っ込みたくなるような大胆極まりないビキニとセーラー服で、この夏一番の風紀の乱れを正すべくレースに参加。

チームメイトの三蔵は、そんな頼光の行く末に興味を抱いて旅路の供となった。

チーム名…サティスファクションE・T・E

マシン名…クマラ・ホイール&サンダードーム（マハトマと直流と交流の合わせ技）

メンバー…エレナ、エジソン、テスラ

参加理由…生前からのトラウマを盛大に揺さぶられ、機嫌もテンションもダダ下がりになってしまったエレナを元気づけようと考えたエジソンとテスラが、常日頃の因縁を一旦横において協力関係を結び、気分転換を目的に彼女をレースに誘う。勝てるのならばそれに越したことは無いけれど、一番大切なのはエレナがレースを楽しんでストレス発散出来ること。

チーム名…恐怖の第六天魔王X

マシン名…V6天魔王号（ヒロインXの宇宙船）

メンバー…織田信長、謎のヒロインX

参加理由…ある日突然ロックスターを目指すと言い出した信長が、中継を利用して宣伝とライブを行なうことを目論んで参加を決意。

その準備のためにぐだぐだ組の資金を私も公も含めて全て注ぎ込み、怒り心頭で叩き出されてしまったために他所でパートナーを見つけなければならなくなった彼女に声をかけたのが、謎のヒロインXだった。

個人としてマシンを所有していることと、それを操る確かな腕前を基に自身を売り込んだその目的は、『レース中の事故ということにすればセイバー（観客席含む）をぶっ殺し放題』とのこと。

『目的のためなら手段を選ばない』というところで気が合った二人による、史上最悪のチームが結成された。

チーム名…デザート・ビューティ

マシン名…ザ・ファラオレジェンド（砂漠の太陽神スカラベをイメージしたマシン）

メンバー…ニトクリス、シェヘラザード

参加理由…常日頃からファラオとしての理想と責任感ばかりが高いニトクリスが、成功体験から自信をつけさせてやろうとしたオジマンディアスの命でレースに参加することに。

オジマンディアスの真意を察せられずに、勝てなければファラオ失格、オジマンディアス様の期待を裏切ってしまうと、またしても余計なプレッシャーを感じながらサポーター探しに奔走し、レースが終わった暁には死の脅威から逃れるためのとっておきの護符を用意するからという約束でシェヘラザードを勧誘。

シェヘラザードは護符が欲しいことに加えて、自身とは別の影法師が亜種特異点で散々にやらかし、マスター達に多大な迷惑をかけていたことを知って、何とか償いたいという気持ちもあってレース参加を了承した。

以上、イシユタルカップ参加の6チームでした。

フランチちゃんとモリアーティ教授、ノツブとヒロインX、ニトクリスとシェヘラさんなど、このレースの縁をきっかけにその後も絡むようになった人達は結構います。

デッドヒート・サマーレース 火山エリア

進路上に多数配置されていた地雷が起動し、参加者の多くがギャグマンガのラストシーンの如くキノコ雲に吞まれるという波乱の展開を経ながらも、全ての参加チームが何とか第一エリアを走り抜くことが出来た。

状況と観客席の盛り上がりを見計らい、マイクを手にしたイシュタルから、続く第二エリアへの進行が告げられる。

同時に切り替わったモニターの大画面に映し出されたのは、赤く溶けた灼熱の溶岩が画面越しにも熱さを伝えてくるような活火山の大地。

そこで、第一エリアでのアタランテのように待ち構えていたのは、騎兵^{ライダー}ではなく

アヴェンジャー

復讐者の霊基で現界し、『ローマ』に加えて『余所者に土地を蹂躪される』という行為、そして前年度の夏イベで☆3の礼装用でしか水着になれず、今年は満を持しての実装かと期待していたのを裏切られたことに対しての怒りと憎しみに燃えるブーディカだった（あまりそういったことを言うとしリアスが壊れるからやめた方がいいぞと、よりにもよって信長に突っ込まれた）。

この先に進み、レースを続けるための条件として彼女が提示したのは、『自分と火口に向かつてのチキンレースを行なって勝つ』こと。

あまりにも危険すぎる条件（一人はなぜか『鶏』^{チキン}という単語に対して）に慄く一同だったが、そこはやはり人理に名を刻むだけの活躍をした英雄達というもので、だからと言って走りを止める者はいなかった（死を恐れる語り部と、彼女に巻き込まれたフアラオを除いて）。

降り注ぐ火山弾や突如現れる溶岩流に阻まれながらの、過酷どころか危険極まりないレース模様の中で、多くのチームがそれぞれの理由で先頭争いから脱落していった。

そうして、最終的にブーディカと火口に向けての一騎打ちを行なうことになった

のは、因縁深きネロとアルトリア・オルタのチーム。

火口に落ちたとしてもネロに勝ち、無残な敗北者を死の瞬間まであざ笑ってやろうとしたブーディカへと、勝利の女王ならば完全に勝てと、やけっぱちではなく完全な実力で勝利を収め生還した上で余を笑えと、ただ勝つか負けるかだけの楽しい勝負がしたいネロの真っ直ぐな言葉がぶつけられる。

自分がどんなに憎しみを募らせ、それを容赦なくぶつけたとしても、ネロの魂は決して折れない。

それを悟ったブーディカは、皆知る彼女のような優しい笑みを浮かべながら、ブレーキを入れることなく火口に飛び出し、ネロとアルトリア・オルタの連携によって助けられた。

「……分かつちやいた筈なんだけどなあ、あたしはとくに亡者だってさ。

生前のあたしと英霊のあたしは違うんだ、ちゃんと割り切ってるって、一度は格好つけたのに。

土地の影響かなあ、ここに呼ばれたらいつもと霊基の調子が違って……ついつい

カーツとなっちゃったよ、迷惑かけてごめんね」

「気にするでない、余やローマを憎むのはそなたの正当な権利である。

それに楽しかったからな、余は満足であるぞ！」

「……まったく、本当に傲慢な皇帝様だ」

文字通り憑き物が落ちたような晴れやかな表情で、体の端から少しずつ金の粒子と化し始めているブーディカと、満足そうな笑みを浮かべるネロ、呆れてため息をつきながらも口元は確かに微笑んでいるアルトリア・オルタによって交わされる、激戦を締め括るに相応しい穏やかなやり取り。

それを容赦なくぶち壊すエンジン音が迫ってきたのは、聞こえ始めてからほんの数秒のことで、いくら彼女達が歴戦の猛者とはいえ呆氣に取られた状態で反応するのは難しくて。

「ブレーキブレーキブレーキブレーキそれアクセルうわああああああっ！！！！」
「きゃああああああっ！！！！？」

ギリギリのラインを見計らって止まるどころか、直前で急加速した勢いのままに火口へと飛び出したマシンが、金の髪の毛の搭乗者達を伴いながら瞬く間に視界から消え去るまでを、三人は開いた口と点になった目で見送った。

衝撃のあまりに吹っ飛んでしまった思考が再起動するよりも先に、長いロープを伴いながら火口から飛んできたカギ爪状の金具がネロ達のマシンに引っかかり、頑強な金属音を立てながら固定される。

慌てて覗き込んだ先には、咄嗟にマシンを捨ててロープを伸ばし、溶岩への落下を免れたリンクと、苦笑いの彼に片腕で抱えられながら、犯した失態の恥ずかしさに赤らんだ顔を押さえるゼルダの姿があった。

「……ゼルダ、俺がフォロー出来ないところで一人で運転するの禁止ね」

「……………はい、ごめんなさい」

せつかくいい感じに締め括られようとしていた第二エリアの攻防は、この直後敢

えて空気を読まずに飛び出してきた挙句に、マシンの仕様ミスでリンク達に続いて火口へと突っ込み、こちらはそのままリカバリ不可で溶岩まで飛び込み、宇宙船の謎動力によって火山の噴火を誘発してしまった信長&ヒロインXチームの暴挙によって、ド派手ながらもぐっだぐだな結末を迎えることとなる。

噴火の勢いで宙高く吹っ飛び星と化した信長とヒロインX、先程までとは比べ物にならない勢いで襲ってくる噴石と溶岩から必死になって逃げる参加チーム一同の様子を中継越しに見守る羽目になった一同の表情は、総じて乾いた苦笑いであった。

第二エリア終了後の補給地点にて。

「リンク、そのマシン火口に落ちてなかったっけ？」

「ある程度手元から離れたら、自動的に回収されるようになってるんだ。」

だから、危ない時に乗り捨てるのは選択肢として普通にあり」

「溶岩に落ちたくらいで壊れるほど、シーカー族の技術は柔なものではありませんね」

「ハイラルばねえ」

デッドヒート・サマーレース 水辺エリア

ガチで命の危険を潜り抜ける羽目になった、灼熱の火山エリアを抜けた先に待っていたのは、過酷なレースの只中での一時の潤いを思わせる涼やかな水のエリアだった。

平原エリアでのアタランテ、火山エリアでのブーディカのようにその地で一行の前に現れたのは、『美しい』という言葉に対するトラウマで悉く過剰反応をする、アマゾネスの女王ペンテシレイア。

曰く、『美しさによって速さに補正がかかる』というレースを盛り上げるための特別ルールが適応されていて、多くの者が自身の美しさをアピールするであろうこ

の場に居れば、この身の美しさをも紛れてしまうだろうと見越したそう。

ある意味で自意識に溢れた発言に周囲を呆れさせながらも、これまでの二人のようにならぬに妨害を行なうつもりは無いと言うペンテシレイアは、『美しさ』という曖昧な基準を明確にするための二人の審査員を伴っていたのだけれど、その人選に場の空気が一時停止した。

派手な仮面で一応顔を隠しながら「君達への気遣いだよ、審査員が最も美しいなんて判定される側からすれば酷な話だしね」とのたまう自称『マスカレイド伯爵』は、他のスタッフに業務を丸投げしていつの間にか姿を消していた万能の天才だった。

エジソン製の戦闘用外殻を思わせる見た目をした、本人曰く『判定員に相応しい能力を持った人物の人格をインストールした機械』こと『ミスターK』の、誰を基にしたのかが一発で分かる発言の気持ち悪さが、レース参加者の大部分を構成している女性陣の精神と背筋に怖気を走らせた。

……中には、そんな彼女達とは別のところで困惑している強者もいたのだけれど。

「ミスターKさん……って、黒髭さんですよ？」

何というか、あの、人格とかではなく普通に中身が……」

「そこまでだよゼルダ、立香曰くこういうのは『お約束』なんだってさ。

どんなに正体がバレバレでも、当人が隠そうとしている、もしくは仮の名前や姿で乗り切ろうとしている時は、周りもそれに乗るものなんだって」

「そうなのですか……わかりました、ダ・ヴィンチさんと黒髭さんではなくマスカレイド伯爵とミスターKさんですね」

「そうそう、その調子。

……で、肝心のアピールだけど、出来る？」

「あまり自信はありませんが、やるだけやってみます」

リンクが口に出しかけた『俺がやろうか？』という言葉を遮りながら、浮かべられた満面の笑顔は、身内の鼻根目を抜きにしても十分に輝かしく美しいものに見える。

陽光を受けて煌めく水面に照らされながら、各チームのアピールが順調に進んでいく。

マシン部門審査の担当だったマスカレイド伯爵が、レースの都合ではなく芸術家としての矜持を優先して自身が良いものだと思った全てのマシンに満点をつけたので、レースとしての優劣は実質的にドライバーを対象とした審査一択に委ねられていた。

ミスターKの審査は、個人の美意識に委ねられているだけに基準が偏っていて、その上かなりの辛口仕様だった（しかし審査内容と基準に関しては成る程と思わせる部分も多かったので、心中でこっそり感心していた者は少なからずいた）。

的確な助言を出せる者がチームメイトにいて、審査員の琴線に触れるアピールを行なうことが出来たフランとエレナのチームだけが上手い具合にスピードに乗ることが出来て、気に入られるような工夫など考えもせずに自身の感性のみを押し出したそれ以外の者達が敢え無く失速していく。

対応策を考えるために様子見をしていた結果、順番が一番最後になってしまったリンク達は、このエリアで先頭争いを行なうことを半ば諦めていた。

「あ、あの……先程は、やるだけやってみるとは言いましたけど。

黒ひ、いえ、ミスターKさんが喜ばれていたようなものは、やはり私にはちょっと……」

「うん、分かってる。

やろうとしたら止めてるし、無理にやらせようとする奴がいたら殴るから」

そう言われて、安心した様子で笑ったゼルダは、当初の予定の通りマスターバイクのサドルに横座りになった。

城のバルコニーから城下に向けて、もしくは道行く馬の背の上から道路脇に集った人々に対して。

手を振りながら歓声に応えた機会はよくあったので、こういう振る舞いには慣れている。

自身のように国を統べる者であったネロやアルトリア・オルタの笑顔が、『想定範囲内で意外性も面白みも無い』と軽く流されてしまったからには、これもその括りに入ってしまうのだろうか。

しかしゼルダは、だからと言って腐ることなく、王国の誰からも愛された微笑みをその顔に浮かべながら、慣れた様子で優雅に手を振った。

「ミスターKさん、お疲れさまでーす」

「ハイ正義ーーーーーっ!!!!!!」

「きゃああああああっ!?!」

「うわーーーーっ!!」

機械の身で行なわれた流れるような五体投地は、目撃した三蔵が思わず感心してしまう程で。

突然の絶叫がスイッチだったかのように、特級の美しさ判定による急加速を得た二人の姿が、思わず心配になってしまう程の勢いで瞬く間に小さくなっていく。

今まで行なわれてきた、基準こそ偏ってはいたものの進行自体は真つ当なものだった審査をひっくり返すような突然の奇行に、現地でもモニター越しの観客席でも、訳が分からずに混乱する者は多かったのだけれど。

慣れた様子、と言うより分かり切った様子で、屋台の軽食を肴にラム酒のラッパ飲みを平然と続ける海賊コンピの姿が、観客席の一角に見受けられていた。

「分かりますわ、その気持ち……わたくし達のような海の荒くれの間でも、『ゼルダの伝説』は一等好まれておりましたけど」

「アネゴの……海賊王女テトラの人気は、全体の中で頭ひとつどころか、ふたつみつつ余裕で飛び越してたからね。」

本人という訳では無いとしても、存在として限りなく近い上に姿までアネゴみたいになった人から、名指しで微笑まれた上に手を振られたなんて……」

「寄ってたかって殺されたとしても文句は言えませんかね。」

……あの髭、どうしてくれましょうかしら」

「ボクは刻む」

「ではわたくしはハチの巣で」

表情と口調は朗らかな笑顔で、発言と空気には重苦しい殺気を滲ませながらきちゃきやうふふと絡み合う美女達から、周囲の者達は少しずつ距離を開けていく。

レースの状況を報せるモニターの中では、美しさ判定を貰えずにプライドを木っ端微塵にされた女性陣によって装甲を剥がされた、中の人こと黒髭がボコボコにさ

れる様子が大写しにされていた。

『我が生涯に一片の悔いなし』と言わんばかりの表情で、親指を立てながら水面に沈んでいくさまは気持ち悪いを通り越して逆に清々しいほどだったと、目撃者達は語っていたという。

デッドヒート・サマーレース 谷間エリア

ゴールへと向かう直線前に広がる最後のエリアは、自然に出来たものとは到底思
い難いような……女性の非常に豊かなものを彷彿とさせる、丸く大きなふたつの山
によって形作られた深い谷のエリアだった。

『柔らかそう』だという、地形を表すのには程遠そうな印象を何となく抱いただけ
の者もいれば、明確にそれを連想して微妙な気持ちになった者もいて。

気持ちを切り替えてレースに集中しようとした一同の頭上から、突然の矢の雨が
降り注ぐ。

威嚇が目的だったらしく、十分に対応の余地があったそれを避けるなり防ぐなり

してみせた一同が振り仰いだ頭上には、先程抱いたばかりの既視感を彷彿とさせる人『達』の姿があった。

「……女神アルテミス」

「が、何かいっぱいおるんじゃない?」

「すとおすとおっぷ！」

ここはアルテミス谷です、簡単に通れるとは思わないことね！」

アルテミス達曰く、大量に現れた偽物に紛れて逃げたオリオンを探して捕まえるために、自分も対抗して増えたのだとか（女神としてはさほど難しいことではないらしい）。

それでも逃げ足が速いオリオンを捕まえて、自分のところまで連れてきてくれれば、ここを通してあげると。

オリオンが捕まらなければ絶対に通してあげない、どころか八つ当たりには思いつき矢を降らせてやると。

女神らしい無邪気な笑顔と傲慢さで宣言したアルテミスに、無視して強引に押し通ろうとするか、オリオン探しに協力するかで、参加者達の行動は二分された。

前者の者達は、分身込みのアルテミス達による一斉掃射によって足止めされ、後者の者達は、ただでさえ小さくすばしっこい上に無数に増えたオリオン（ぬいぐるみ）に翻弄され、レースは完全な停滞状態を迎えてしまっている。

アルテミスから逃れようと躍起になりつつ、水着姿の美しい女性達へとどきくさに紛れて纏わりつけるといふ状況を楽しんでいるらしいオリオンに、画面越しに状況を見守っていたマッシュが大きなため息をついた。

「オリオンさんってば、またあんな……アルテミスさんに執着されてしまっていること自体は、とても大変で可哀想だと思うのですが。

いざ自由になればあの調子だということを考えると、助けようって気にはあまりなれないですね……」

だとしても、アルテミスという高位の女神の機嫌を取るためにオリオンを犠牲に

しているという事実を意識すると、マシユの表情は自然と暗くなってしまう。

そんな彼女の様子に気付いた立香は、若干首を傾げながら口を開いた。

「マシユってもしかして、オリオンはアルテミスのことを嫌いだって思ってる？」

「きつ、嫌いだとまでは思っていないませんが!!」

でも……本当に好きな人からは、逃げたりなんてしないと思うんです」

マシユの考えは、一般的な感性や価値観からすれば至極当然のものであった。

それが分かっていた立香は、何て言って説明したものかとしばし考えた先で、自分があのだ二人に対して最初に抱いた印象と解釈、更にはそれを考えるための参考にした元ネタをそのまま話せばいいのだと思い至った。

「連載自体は俺の両親くらいの世代にされていた、作品として少し古いものなんだけど、今見ても凄く面白い名作のマンガがあってね」

「……………はい？」

「それに登場する主人公とヒロインが、オリオンとアルテミスにそっくりなんだ。主人公は女の子が大好きで、可愛い子を見かけると声をかけずにはいられなくて。」

ヒロインの方はそんな主人公のことが大好きで、でも凄いヤキモチ焼きで、自分のことだけを見てもらいたいって思っていて……主人公がちよっと目移りしようものなら、容赦なく主人公のことをしばき倒す。

『ダーリン、浮気は許さないっちゃ!!』って感じで」

「オリオンさんとアルテミスさんです!!」

「だよ、俺もそう思ったよ。」

この主人公もオリオンのように、自分が女の子と仲良くしようとするとな怒るヒロインから、毎度毎度逃げ回ってる」

「……………」

「でも彼は、ヒロインのことが大好きなんだ。」

大勢の可愛い女の子と、たった一人のヒロインという選択を本気で迫られたら、迷うことなくヒロインのことを選ぶくらいに」

「えっ…?」

立香が語ったことの意味が、マシユには理解できなかった。

誰か一人を特別に想うことと、その相手を拒絶する行為が、どんなに理解しようと努めても決してイコールで結ばれない。

脳から煙が噴きそうな思いで悩むマシユへと、立香は続きを語り始める。

「マシユは本が好きだね、特に『シャーロック・ホームズ』とか」

「は…:…はい、そうですけど」

「それを、『俺は本が嫌いだからもうやめて』って言ったら、マシユは今手元にある本を全部捨ててくれる?」

「…っ!?!」

戸惑いながらも何とか起動していたマシユの思考は、その一言によって一気に凍り付いた。

大切な^{マス}センパイ^{ター}がそうして欲しいのなら、自分の行ないによって彼が不快な思いをしてしまうのなら……思考ではそう思いながらも、マシユの本音は全力でそれを拒否している。

頭どころか、体や表情まで止まってしまったマシユを、立香は慌てて揺り動かした。

「マシユ、マシユ？」

しっかりして、例え話だから。

俺も、あまり難しくなければ本は結構好きだし、マシユから好きなものを奪おうだなんて思わないから」

「……………ご、ごめんなさいセンパイ、私」

「いいのいいの気にしないで、急に変な話をしてごめん。」

……でも、それだけショックを受けた今のマシユなら、もうイメージ出来るんじゃないかな。

『女の子が好き』なオリオンも、アルテミスから『自分以外の女の子を見るのをや

めて』と言われた時に、同じように嫌だと思ったんだって」

「……!!」

「本人に確認を取ったわけじゃない、俺なりの勝手な解釈なんだけど……例のマンガの主人公やオリオンが言う『女の子が好き』ってのは、『甘いものが好き』とか『音楽が好き』とかと同じような趣味嗜好の分類に入るんだと思う。」

だから、傍から見ればどんなに不誠実な浮気者でも、当人からすれば『私のことが好きなら一番の趣味を諦めて』って言われたような理不尽さなんじゃないかな。……でも彼らはそうしなかった、どんなに怒られて酷いお仕置きをされても好きなことをやめなかった。

やりたいことを我慢したり、意思に反して束縛され続けるっていうストレスは、どんなに大切な想いでも絶対にすり減らしていくから。

『あいつのせいで』とか、『あいつがいなければ』とか、思いたくないから。

我がままで嫉妬深くてすぐ束縛して、世間一般で言う誠実な向き合い方をすればあつという間に心身が擦り減らされそうだけど……でも本当に好きな人を、ずっとずっと、変わらず好きなままでいたいから」

あの二人の、傍から見れば今現在破綻していないことが既におかしいような関係が成り立っているのは、アルテミスがオリオンを逃がさないから仕方なくなんかない。

我慢や自重という概念を持ち合わせていない女神様の無茶ぶりに振り回されながらも、それが彼女だからって結局は許容して、どうしても我慢できなくなったら逃げたり気分転換することでガス抜きしながら……変わらず一緒にいられるために気を配っているのは、むしろオリオンの方なんじゃないかなって俺は思ってる。

俺の勝手な考えだけどね……という、少し前にも言っていたようなことで締められた立香の発言は、どれだけ頑張っても理解できなかったのが嘘のように、マシユの無垢な心に自然と染み入っていった。

呆れながら溜め息をついていた先程までとは、一風変わった心地で見直したモニターに大寫しにされていたのは、敢え無く捕獲された後に献上されたらしいオリオンが、物理的に潰されかねないほどの容赦ない全力でアルテミスの豊満な谷間に抱き込まれながら、絶望の涙を流している光景で。

「……………センパイ、その考察自体はとても素敵なものだと思うのですが。

『個人の勝手な解釈』だと仰られていたそれが、実際にそうではないという可能性はどれくらいでしょうか」

「結構当たってると思うんだけどなあ……」

苦笑いを零しながらも、自身の考えと発言を撤回するつもりは欠片も無いらしい立香に、文句は言わずとも大きなため息をついたマシュ。

そんな彼女が、立香の考察が正しかったことを……ただ一人の女神に捧げられる真の想いが確かに存在していたことを思い知るのは、まだ随分と先の未来。

遙か天上へと向けて放たれた愛の一射が、女神の心と孤独を見事撃ち抜いてみせた、涙に滲む美しい光景を目の当たりにした時のこと。

「好きな人を好きでいるために、その人から自由でいたい」

原作ではなく劇場版のことではありますが、これは実際に、くだんの主人公が口にしていたセリフです。

攻殻機動隊で有名な押井守さんが若い頃に監督したもので、人気マンガの劇場版という括りを除いた、アニメ映画全般の中でも非常に評価が高い作品です。

実際私も、初見の時は『一体何が起こっているんだ』と引き込まれてしまいました。

誰にとっても面白くて感動できるような『名作』ではなく、一部の人に強烈にぶっ刺さる『怪物』の部類に入るものだと思うので、大々的に『絶対面白いよ!』とはあまり言えませんが。

個人的にももの凄かったのは確かなので、興味と機会があったら是非一度見てみて下さい。

タイトルは『ビューティフル・ドリーマー』、原作マンガは高橋留美子先生の名作『うる星やつら』。

オリオンとアルテミスはあの作品を知っていると絶対重ねますよね、作った方も意

識してゐるんじゃないかと思ひます。

デッドヒート・サマーレース ゴール前

レースを締めくくる最終エリアは、これまでのタイム差を考慮してスタートのタイミングをずらすだけの、他に特殊な要素は一切ない単純なコース。

これで最後だと、ゴールを真つ先に通過することが出来ればマシンもこの身も壊れたって構わないと言わんばかりの、全てのチームが奥の手まで含めて全てを費やす最後の激走が始まった。

「リンク、私達も全力で行きますよ!!」

「了解」

相棒の返事を認識すると同時に、元々は非常時の緊急脱出用として備え付けられていた、サイドカーの切り離しスイッチを押す。

そもその話として、純粹に速く走るだけならば、マスターバイクにそのまま二人乗りをすれば良かった。

それをわざわざサイドカーを取り付けたのは、サポート役であるリンクの居場所を確保し、自由かつ迅速な行動を妨げないためで。

これ以降は完全なスピード勝負であるというならば、そこを考慮する必要は無くなった。

猛スピードを保ったまま、離れていく別の車両から飛び移ってみせるという荒業を難なくこなしてみせたリンクが後ろ側で落ち着いたのを見計らい、アクセルを一気に全開にする。

急激なパワーの上昇に一瞬車体が浮きかけたけれど、それを冷静に抑えてみせたゼルダに、自分が対応しようとしたリンクは苦笑しながら上げかけた腰を下ろした。

「好きにやれ」

「信じてます」

たった一言ずつの簡潔なやり取りだけど、この二人の場合はこれで十分。

古代の英知の粋を注ぎ込んだスペックを全開にさせた、曲がり切れずに吹っ飛ぶのも止む無しと言わんばかりの無茶苦茶な走りっぷりを、絶妙な体重移動や、時には爆弾やロープといった運転手以上の強引な力技で既定のコース上に収めていく。……レースという非日常の中で、浮かれていたのはゼルダだけではなかった。

その事実を……一歩離れたところから、ゼルダだけでなくレース全体の安全管理を行なうつもりだった筈の自分までもが、熱中して視野が狭まってしまっていたことをリンクが思い知ったのは、巨大な渓谷を跨ぐ大橋、ゴール前の最後の直線に、参加者一同で一斉に飛び込んでしまった後のこと。

「全員止まれっ！……！」

そうやって咄嗟に放った警告を、リンクは次の瞬間には後悔していた。

これが、歴史に名を刻んだ英雄たる彼ら彼女らにとって歯牙に欠けるまでもない、どこぞの誰かによって発せられたものだったなら。

彼ら彼女らはそれを些末事だと一瞬で切り捨て、集中を乱す余地すら無かっただろう。

しかし『勇者リンク』の警告は、聞き逃すわけにはいかないと、一考の余地があるものだと、歴戦の英雄達にさえも瞬間的にそう思わせるだけの価値があるものだった。

だとしても、ゴール手前、最後のラストスパートの真っ只中で、状況と心理に真っ向から反することを言われたとしても、瞬時に理解して行動することは難しい。

実際に、咄嗟に反応してブレーキをかけることが出来たのは、声の出处に一番近い上に、その判断に対して反射神経レベルで全幅の信頼を置いていたゼルダだけだ。間違っただけではなかったとしても、それを発するタイミングが悪すぎた警告は、一同の集中を途切れさせた上に、判断力と思考力をほんの一瞬とはいえ奪ってしまった。

リンクが咄嗟に反応した敵意と害意、遙か谷底から放たれたそれによって、巨大な橋が切り刻まれる。

いきなり足場を奪われたマシン達は、体勢を整えたり、脱出したりする余裕が全く無かった搭乗者達を伴いながら、底が窺えないほどに深い谷底へと消えていった。その運命は、唯一回避行動を取ることが出来た筈の者達にまで迫っていて。

「くそっ、しくじった……ゼルダ、怪我は？」

「私は大丈夫です、だけど他の人達が」

「全員サーヴァントなんだし、死んだり再起不能の怪我を負ったりはしてないと思うけど……」

「この事態を起こした者達が、下で待ち受けているでしょうね」

「確実にな」

落ち着いた様子で状況を判断し、冷静な考察を続ける二人だけだ。

立香やマッシュがこの場にいたら、もしくは中継用のドローンが生きていて現状が

把握されていたら、盛大なツツコミを入れられていたことだろう。

『そんなこと話してる場合!?』『まず安全確保してください!!』なんて感じで。

細切れになって落ちてしまった橋の一角、欄干に辛うじて残りながら微妙に揺れている残骸のひとつに、カギ爪状の金具が引っかかっている。

そこから伸びるロープの頼りなく揺れる先端……ほんの少し瓦礫のバランスが崩れるか、ロープを掴む腕が力尽きるかしてしまえば真っ逆さまになることは確実な、普通の人を取り残されれば絶望のあまりに発狂しそうな虚空に彼らの姿はあった。

「イシュタルさん、立香、マシュ、聞こえてる!？」

こちらの状況は把握してる!？」

「……………返事がありませんね」

「中継は丸ごと切れてると思って良さそうだな。

でもまあ、ゴールは近かったからすぐに誰か様子を見に来ると」

「嫌です」

「まだ何も言っていないけど!？」

「言われなくても分かります。

『俺は下の様子を見に行くから、君は先に避難しておいて』でしょう？」

「……………」

「それが今後の展開を良くするためにどうしても必要なことであるならば、あなたが冷静な思考でそう判断したのならば、私はそれを尊重します。

だけど今は違う……あなたはただ単に、私を何が起こるか分からないところに連れて行くのを躊躇っただけ。

私を危険に晒すのは嫌だという、あなた個人の我がままを、私自身の意見も聞かないままに押しつけようとしただけですよね」

形こそはいつも通りの、伝説の姫と称される彼女らしい美しい笑みなのだけけれど、そこに込められている圧の凄まじさにリンクの表情が引き攣った。

彼女の地雷を踏んだこと……寄りにも寄ってこの身が刻んだトラウマを掠めてしまったことを、口に出してしまった後で思い知る。

（あーもう、さっきからミスばかり……やばいな、ちょっと本気で気を引き締めないと）

「先に行ってますよ」

「先に……って、え、えええええっ!!?」

自身の首元にかかっていた腕の感触と、そこを起点に感じていた重みがあっさりと消えた事実には、目を剥きながら絶叫するリンク。

拗ねた表情で頬を膨らませながら、底が窺えない谷底へと落ちていく彼女を追って命綱の手を離すことに、欠片の躊躇いも無かった。

現場で起きたことを確認するために、ゴールの瞬間を待つて待機していた会場からイシュタルのマアンナに乗って駆けつけた立香とマシュが、惨劇の舞台となった橋と揺れるロープを目の当たりにするのは、このすぐ後のこと。

デスジェイル・サマーエスケイプ 脱獄開始

細切れとなって崩壊した橋の残骸に、レース参加者の姿を誰一人として確認することが出来なかった立香とマシユ、そしてイシユタルは、彼らが姿を消した谷底へと天船^{マアンナ}を急がせた。

全員がサーヴァントである以上、死んだり再起不能な怪我を負ったりという類の心配はしていなかったのだけれど。

駆けつけた先に、各チームのメンバーとマシンの姿が無かったことと、代わりのように立っていた人物の存在が、別種の不安を否応も無く掻き立てた。

「あなた達見ない顔だけど、こんな谷底でハイキングなんて変わった趣味ね。だけど人の趣味はそれぞれだね、健康的なのはいいことだわ。」

見たところ普通の人間みたいだけど、でも一応確認だけはしておきますか。あなた達が私の国民なら……まず何を言うべきか、分かってるわよね？」

見知った白いコート姿ではないけれど、軍服を思わせる真っ赤な服を纏いながら鞭を持つ姿と、身の内から溢れる自信によって輝く笑顔は、疑いようもなく『彼女』のもので。

一緒に来ていた筈のイシュタルの姿がいつの間にか見えなくなり、戦力に不安がある状態で含みを込めた笑みと共に投げかけられた問いに、立香は殆ど条件反射で答えていた。

「メイヴちゃん、サイコー!!」

自身の国民であることを示す完璧な答えを受けて、満足そうに頷いた女王メイヴ。

この地が自身の治めるコノートであり、カルデアが行なっていたレースによって国土を荒らされたと言って怒りを露わにする彼女だったのだが、次の瞬間には、その不屈き者を一人残らず捕らえたと上機嫌に笑いながら去っていった。

そんな彼女の向かう先には、外からの侵入を拒むのではなく、中からの脱出を拒むことを目的として形作られた建造物……メイヴ曰くの『大監獄』が、美しく残酷な女王の居城に相応しい風貌で聳えたっていた。

その後、自身を参加チーム数分のぬいぐるみのようなデフォルメ体に分け、収容に合わせて潜り込むことに成功したイシユタルを介して、参加者達とのやり取りが可能となった。

そうして、参加者全員が無事であることと同時に、監獄全体がメイヴの絶対権力者としての概念が具現化した結果によって覆われていて反乱も脱出も不可能であることと、イシユタルに実力行使を躊躇わせるような何者かが監獄内に存在している可能性が明らかとなり。

現状を今すぐ打破することは不可能だと判断したイシユタル……これが本当にどうしようもなかったことならば、彼女もすぐに長期戦に備えて気持ちを切り替えて

いたのだろうけれど。

ここまで酷いことになる前に、何かしらの対策が取れていたかもしれない。

そんな『もしも』が無茶な願望ではなく、十分に在りえた筈だという事実を前に自身を抑えられるほど、イシユタルの性分は穏やかなものではなかった。

「ゼルダ、それにリンク、あなた達は一体何をしていたの。

橋の崩壊に巻き込まれずに済んだあなた達なら、もっと他の立ち回りが出来たよ
うな気がするのだけれど？」

《そうじゃそうじゃ、もっと言ってやれ銭ゲバ女神!!

あの『番犬』を無効化しておきながらなぜあそこで引きおった、折角のちゃんす
であつたろうに!!》

いつものおちゃらけ半分ではなく、珍しく本気で腹を立てているらしい信長の、
通信越しでさえ熱気を感じそうな怒号が響く。

彼女のように表に出すことは無くとも、同じような不満と疑問を抱いていた者達

の脳裏に、あの時の光景が蘇った。

かつて魔都新宿にてカルデアを苦しめ、改めてカルデアのサーヴァントとなった
今も、利害のみで繋がれた関係だというスタンスを崩そうとしない狼王と首無し騎
士……その力と形を模して、メイヴの王国に仇なす者へと対処するために造られた
治安維持システム。

稼働出来る時間と動く目的をごく限られたものにする事で、サーヴァントの集団を相手に優勢を取るような凄まじい戦闘力を発揮したそれは、堪らず膝をつき始めた者達へと向けて、止めと言わんばかりに巨大な牙が並んだ口を開けた……その瞬間。

黄金に輝く正三角によって、サーヴァントを追い詰めることが可能なほどに頑強だった筈のその身は、身じろぎすらも叶わないレベルで完膚なきまでに囚われた。

『リンク、今です!!』

『はあああっ!!』

落下の勢いを止めながら突き下ろされた刀身が獣の眉間に深々と減り込み、その身を魔力の残骸と化して四散させた。

代々の『ゼルダ』達が負った使命であり、彼女という存在の代名詞とも言える『封印』の力をクラスが変わっても使えたことや、落下中に谷底の異変を察した二人が途中の岸壁に一旦その身を落ち着け、参戦するタイミングを見計らっていたこ

となどは、特におかしなものでは無かったのだけれど。

番犬の思いがけない敗北に、国土を荒らされて只でさえ苛立っていたのも加わって激昂しながら現れたメイヴ……このまま続けて打倒するかと思われた女王に対して二人が取った行動は、参加者一同が予想もしないものだった。

『国土を荒らした罪人、ですか？』

『その通りよ!!』

ここは紛れも無い、私の国コノート!!

戦車の女王である私に無断でレースを行なって、国民も大迷惑な連日の馬鹿騒ぎ!!

国を統べる女王として、プライドを踏み躪られた個人として、対処するのは当然でしょう!!』

『それは……そうですね、その通りです。

申し訳ありません、ご迷惑をおかけしてしまって』

『……………あ、あら、思いがけず殊勝なことだ。』

偉いじゃない、ちゃんと罪を受け入れて反省するのは大事なことよ。

無罪放免とまでは行かないけれど、ある程度の酌量の余地はあると認めて、模範囚として扱ってあげる』

『『『『『ええー……っ!!?!?』』』』』

『あんた達は変わらず重罪人よ、反省する態度や言葉どころか自覚すら無いなんて!!

特別プログラムでみっちりと更生させてあげるわ、覚悟なさい!!』

《すみません……ですが、メイヴさんに許可を取らずに勝手なレースを開催して迷惑をかけ、彼女の女王としての面子を潰してしまったことは、紛れも無い事実でしたから。

あの状況で開き直すことは、私にはとても……》
《……………ああ、そうか。

そう言えばそなたは、わしのように周辺国との戦を繰り返したり、ローマの皇帝やエジプトのファラオどものような、自国の権威と隆盛こそを最上とする価値観で統治を行なったのではなく。

かつての同胞が犯した罪や過ちを詫びながら、実績を積み信頼を得ることによって友好関係を築き上げ……その後は、より発展させるためではなく、穏やかに終わらせるために尽力した者であったな。

非は自らにあると認めた上で我を通すことは、個の性分としても君主の誇りとしても出来ぬか》

《ごめんなさい、私だけでなく皆さんの問題でもあったのに……》

《謝るでない、こちらこそ済まなかったの。

そなたという存在の芯に関わる話であったのに、無粋なことを言ってしまった》
《うむ、そういうことであるな。

そもその話として、あの状況で唯一選択肢があつた者達が決めたことに、力尽き連行されるのみであつた余らが異議を挟める筋合いは無いのだ》

《それでもまだ気に病むようなら、わしのニューアルバムを買って、ついでに宣傳してもらえると色々ありがたいのう》

《分かりました、後ほど購入させていただきますね》

《やっほう!!

聞いたかヒロインXよ、ゼルダ姫の鼻屑となればバカ売れ間違いなしじゃ!!》
《義理で買うと約束しただけでしよう、曲を気に入るかどうかは別問題でしょうに》

「こらこらこら!!

そうじゃないでしょう、何をあっさりと許しちゃってるのよ!!

個人的な心情が何であろうと、今現在サーヴァントとしてカルデアに所属している以上は、特異点の解消とそのためのレースは選択肢の最重要項目じゃないの!？」

《ええ、勿論です》

「なっ……そこで断言するくらいなら、どうして個人の考えを優先するようなことを」

《……イシュタルさんの発言を、ひとつ訂正させていただきたいのですけれど。

大切なのは特異点を解消することで、レースを続けることではないですよね?》

「へっ!？」

ちよっ、な……何を言ってるのよ、特異点を解消するためにこそレースが重要なわけ」

《今回のレースは、戦闘とそれに付属する行為が大部分を占める特異点の攻略を、たまには変わり種の方法で楽しく行なってみてもいいのではないかと、イシュタルさんが企画されたことが発端です。

つまりレースは、この特異点を解消させるために必要な絶対の条件ではなく、あくまで余裕があったからこそ出来たものなのです。

スムーズな進行が不可能となった状況においては、いつも通りの……特異点発生の原因と考えられる異変を解決するという本来のやり方に切り替えるというのは、至極妥当な選択ではないかと思うのですが》

《なっ……ゼルダ姫、つまりあなたは》

《私は確かに、メイヴさんの国を荒らして彼女の矜持を踏み躪った罪を認め、大人しく刑に服すことを誓いました。

だけどそれは、私だけなんですよね》

《俺は何も認めていないし、誓ってもいない。

ついでに言えば、一城の主を狙う際の最初の難関は、いかに消耗を抑え、かつ騒がれないようにしながら、標的の領域まで潜入するかってこと。

それを一部すっ飛ばして、一番厳重な警戒網の内側まで招き入れてくれるって言うんだから、これはもうお言葉に甘えるしか無いだろう》

ゼルダから引き継ぐ形で発せられたリンクの言葉に、一部の者は言葉を失い、それ以外の者は感心の息を零した。

メイヴがゼルダを疑わなかったのは、知らなかったとはいえコノートの地を荒らしてしまったことへの反省の気持ちと言葉が、紛れも無い本物だったから。

その上でリンクは自分が果たすべき役割を察し、ゼルダもまたそれを託した。

お互いの考えを共有するようなやり取りは一切しないまま、思いがけず発生した選択肢への対応を完璧にやり遂げてみせた。

『伝説』の時代においても彼らは、固く結ばれた信頼関係とお互いへの理解力によって、様々な困難を同じように乗り越えてみせたのだろう。

そんな浪漫を否応も無く感じさせる光景を前に、一同の考えは少しずつ変わり始めていた。

レースを無理に強行することから、模範囚であるゼルダの相方として同じく警戒が薄れているであろうリンクを軸に、特異点発生元凶と思われるメイヴの打倒を目指すこと……イシュタルが望まぬ方向へと向けて。

「だ、だめ……絶対にだめよ、レースを続けなきゃ!!」

「イシュタルさん？」

「マスター、皆もお願い、どうかレースを続けて!!」

「し、しかし、イシュタルさん。」

ゼルダさんも仰られていたように、現状では方針を切り替えた方が、特異点の修正が確実に行われると」

「特異点はもう関係ないの、私がレースを続けたいの!!」

だって頑張ったのよ、一生懸命に企画して……皆で準備を進めて、やっとの思いで形にしたレースなのに!!

ゴールテープが切られる瞬間を、大勢の人達が楽しみにしていたのに!!

それが、こんな形で終わってしまうなんて絶対にいや!!」

「……イシュタルさん」

「お願い、マスター……」

細分化したことで、ぬいぐるみようになったイシュタルの瞳から大粒の涙が零れる。

その源となったものが、胸の奥から込み上げる本物の悔しさや哀しさであること

に、立香は気付いた。

「……なあリンク、ゼルダ姫。

二人が考えていたやり方は、選択肢のひとつとして当然残しておくとして。

とりあえず、どうしようもなくなるまでは、レースの再開を諦めない方針で進めてもいいかな」

《……仕方ないですね、私としてもレースを中止にしたかった訳ではありませんし》

《その代わり、判断はシビアなものにしてくれよ》

「ありがとう二人とも!!」

「良かったですね、イシュタルさん!!」

「ありがとうマスター、皆も!!」

本当にありがとう!!」

主に聞こえるのは、立香とマッシュがイシュタルと共に喜びあう声だったけれど。

様々な思惑で参加したレースが続くことを喜ぶ雰囲気もまた、各チームの方から感じられる。

今の段階でこれ以上影響を与えることを断念した二人は、自分達の下へと配置された分身イシュタルの認識の範囲外で、こっそりと目線を交わし合った。

（随分としぶといな）

（何を考えているのかはまだ分かりませんが、ここまで粘るからには相当のことなのでしょーうね）

（とりあえず今は様子を見よう、油断したタイミングで粗を出すかもしれないし）

声には出さずに行われたそんなやり取りに、危ういところで計画が繋がったことに心底胸を撫で下ろしていたイシュタル（分身）が気付くことは無かった。

その後、映画か何かのワンシーンを思い出したらしい立香の意見を参考に、参加者各自で自分達の独房を調べてみたところ、脱出に役立てられそうな穴をそれぞれが発見することが出来た。

「結界とやらを信用し切っているせいで、物理的な部分へのメンテナンスが手抜きだったようね。

これは……次は地面を掘る、ということになるかしら」

参加者一同は昼間のうちに他の受刑者と接触し、この監獄に関する多少の情報を集めていた。

それを考慮した上で考えられた、この状況を打破するための作戦が、監獄結界の隙間を何とか探し出してそこから抜け出すこと。

そして、独房から抜け出せる穴を作り出すことに成功したこの時、『地下』という単語が最も重要かつ確実な選択肢として一同の脳裏に浮かび上がった。

「そうだわ、思いついた!!

脱出してマシンを取り戻すのを待つ必要は無いわ、ここからレースを再開しましょう!!

イシュタルカップの第二幕、脱獄レースの始まりよ!!」

《あの、すみません》

「……ゼルダ、今度は何なの？」

《その脱獄レースなのですが、私達は棄権させて下さい》

「ええっ!？」

「な、何だよ!!」

まさか、自分達だけ脱獄しないでメイヴを狙うなんて言うんじゃないでしょうね
!!」

《まさか、決まった以上は全体の方針に従います。

ただ、その……マシンに乗って、純粋な速さやそれに伴う駆け引きを競うのなら
ばともかく。

閉ざされた監獄から、限られた要素を駆使して身ひとつで脱出というような話に
なると。

もはや私達……と言うよりは、『彼』の独壇場になるのではないかと思ひまして》

「あっ……」

「成る程、確かに」

立香とマッシュだけでなく、イシュタル通信を介してサーヴァント達からも、ゼルの言葉に納得する脱力した声が聞こえてきた。

『勇者』の逸話は強大な魔物を打ち破る武勇伝だけでなく、知恵と工夫を駆使して難解なダンジョンを突破して宝を手に入れたり、敵の巢窟から単独で脱出を果たしたりというような冒険譚まで多岐に渡る。

素人同士横並びでと言うのならばともかく、単独で突き抜けたプロを相手にしなければならぬような状況は、レース参加者達も流石に御免被りたかった。

《……すみません、実は。

リンクしたら、『穴を掘る』という話が出た時点でもう始めてしまったんです》

「何でよ、レースにするって言ったのに!!」

《そういうことになる前です。

急いで呼び戻そうとしたのですが、もう声が届かないみたいで》

「どんだけ掘ってるの!？」

『モグマググローブ』を装備して行きましたから……下手をすると既に、結界付近にまで辿り着いている可能性も』

「分身の私……って、もう穴に入って追いかけてるみたいね。

早く止めて、レースがめちゃくちゃになるーっ!!」

「残念ですがイシュタルさん、もうなってます」

「あいつに悪気は無い……どころか、レースを再開させたいなら急いだ方がいいだろうって、最大限に気を使ったんだろうけど」

「どうしてこうも噛み合わないのでしょうかね……」

「……………あいつ、参加させない方が良かったかしら」

心労が積み重なっているらしいイシュタルの弱々しい声が、周囲の者まで巻き込むような脱力感を伴いながら響く。

モグマググローブの爪では掘り進めない岩石地帯にぶち当たり、ここからどうしたものかと考えていたリンクを呼び戻すことに成功するのは、この少し後。

そこをひとつの山場に出来た筈なのに……と悔しみに拳を震わせながらも、問題を解消する手段を探すべく努めて気持ちを切り替えるイシュタルの、健気な姿がそこにあった。

デスジェイル・サマーエスケイプ 監獄の一日 朝～昼

女王メイヴの優雅なモーニングルーティンが、コノート国民お馴染みかつ必見の番組として朝のチャンネルを独占している頃。

更生プログラムの一環として、規則正しい生活を強要されている囚人達の日も、また始まるうとしていた。

「起床時間です!!」

「あっ、ナイチンゲールさん」

「おはようございます」

「おはようございます、リンクさんにゼルダさん。」

あなた達は毎朝きちんと起きて下さいますね、模範囚の鑑です。

他の方達も見習っていただけると有難いのですが……最低限の規則正しい生活すらも送れないようでは、釈放など考慮すらされません」

「そ、そうですね……」

（他の人達は毎晩遅くまで穴を掘ってるから、その辺りは仕方ないんだよね……）

疲れているだとか、寝不足だとかは関係なく、ただ単に性分として起こされるまで起きないという者もいるのだろうが、この場では横に置いておく。

自分達の檻の前から去っていくナイチンゲールを苦笑いで見送った数秒後、既にお馴染みとなってしまうたやり取りがいつも通りの大音量で聞こえてきた。

「起床時間です!!」

「ぎゃああああああっ!!!?」

「目覚まし代わりに銃を撃つなど何度言わせるんじゃないとお主は!!」

「それはこちらのセリフです、何度撃たれば分かれるのですかあなた達は!!」

しかし私はめげません、必ずやあなた達に正しい生活習慣を身につけさせてみせます!!

そう、例え永遠の眠りにつかせたとしても!!」

「本末転倒でしょう!!」

こうして、バーサーカーな婦長が奏でる銃声の多重音によって、監獄の朝は至極賑やかなのであった。

監獄には、ただ単に犯罪者を閉じ込めておくだけでなく、社会復帰を目指して更生を促すための教育施設という側面もある。

メイヴの個人的な都合と好みだけを反映させる形で築かれているこの監獄にも、そういった類いのカリキュラムは存在していた。

しかしそこはやはり、世界的に見ても屈指と言っていいレベルで戦闘狂なケルトの価値観によって築かれた監獄。

ここでは、通常ならばカリキュラムの大部分を占めているであろう社会奉仕や軽作業といったものの代わりに、ロープが軋む音、叩きつけや着地に伴って床が盛大

に鳴る音、華々しい飛翔によって空気が唸る音などをバックに、女性の陽気な笑い声が響き渡っていた。

「ハァーイ、今日も楽しいルチャの時間デース!!

精も根も尽き果ててぶっ倒れるまで、とことん戦い抜いて下さいネ!!」

アステカ文明における太陽と金星の女神、本人曰くルチャの女神であるケツアル・コアトルの渾身の悪人顔から発せられた凶悪な発言は、並の者ならば背筋を凍み上がらせた上に腰まで抜けかねないようなものだったが。

そこはやはり歴戦を越えてきたサーヴァント達というものの、うんざりとした様子を見せても気後れはしない。

それには、この場を無事に乗り越えることに、その日の脱獄作戦を順調に進められるかどうか左右されるからという意味合いが大きかった。

彼女が指揮を執るスパーリングは、この監獄における唯一の明確な更生プログラムで、きちんとこなしたかどうかを厳重に管理されているので、どうにかしてやり

過ごすというようなことが出来ない。

戦闘狂の女神とトレーニングという名の実戦を行なうという、100%のケルト式に適応した無茶なプログラムに、それも監獄結界によって大幅な弱体化を受けた状態です。

ここで下手に消耗してしまった場合のデメリットを考えると、半端な気持ちで臨むわけにはいかなかった（狂った婦長に粘着される可能性という意味もあって）。一人、また一人と、悲壮さと決意が交じり合った表情で死地のようなリングへと赴く者達の背中を、自身の番を既に終えたリンクは無言で見送り続ける。

彼の口が次に開いたのは、全員分の、最低限の予定が終了したその瞬間だった。

「ケツアル・コアトルさん、次は俺とお願いします」

「オーウツ、やる気満々ですネ!!」

結構なことデス、では早速……と、言いたいところなのですが。

何かこの頃、あなたとばかりトレーニングを行なってしまっているような気がします。

やる気のある人に応えたいとは思いますが、流石にそろそろ、他の人達の相手もしてあげないと……なっ!？」

別のことに思考を割いていた最中だったのにも関わらず、何の前触れも無しに凄まじい勢いで迫ってきた気配に瞬間的に対応し、女性の胴体を目がけて何の遠慮も無しに繰り出された渾身の蹴りを見事受け止めてみせた辺りは、流石は肉弾戦特化の女神と言うもの。

普通の感性の持ち主ならば、冗談でなく死にかねなかったような一撃を不意打ちで食らわされてきた暴拳に対して怒るのが、反応としては正しかったのだらうけれど。普通ではなかったケツアル・コアトルの心のパラメーターは、想定される反対方向へと向けて跳ね上がった。

「ロープの反動も無しに何というキックを……素晴らしいデス!!

もう我慢できない、肉体言語で語り合います!!

ルチャドーラお得意の空中殺法を、思う存分お見舞いしてあげマース!!」

太陽の如く目を輝かせながら浮かれるケツアル・コアトルに、副監獄長としての務めを果たさなければという理性はもはや無い。

この様子では今日もまた、囚人達をしばき上げるために用意された時間を、リンク一人を相手に使い切ってくれることだろう。

脱獄レースからリタイアした彼には、夜中にこっそり穴を掘るという予定は存在しない。

その分生まれた体や時間の余裕を使って参加者一同をサポートしたい、具体的にはケツアル・コアトルの相手を一手に引き受けようと思っているとリンク自身が言い出した際には、下手をすれば毎日の穴掘り以上の無茶ぶりに躊躇った者も多かったのだけだ。

その懸念はリンクがとある宝具の存在を明らかにした際に霧散し、今はもう、ルチャの女神を彼一人に押しつけることを誰も心配せずに、脱獄の準備や打ち合わせをそれぞれで進めている。

今にも跳び上がりそうな程に浮かれているケツアル・コアトルと対峙するリン

ク、その腰元には美しい黄金色の煌めきを落とす砂時計が揺れていた。

『夢幻の砂時計』とは、ひとつの世界を創造し得るほどの力を持ったとある神の、失った力の細かな結晶を内包した砂時計。

完全な力を取り戻せば時間停止すらも成し遂げるそれは、砂が足りない半端な状態でさえも、あらゆる呪いや弱体化を砂が落ちている間だけとは言え無効化するというとんでもない代物である。

かつて『風の勇者』は、その場に居るだけで生命力が奪われるという理不尽な仕様となっていた神殿内の探索を、この砂時計を使うことによって行なった。

そして現在、試しに使用してみた砂時計の力は、監獄結界に対しても問題なく働いていたのだ。

本来の力を発揮できない囚人達を相手に、名目こそ実戦だとしても、本質としてはあくまで指導レベルのスパarringをこなし続けて、血沸き肉躍るぶつかり合いというものに対する渴望を密かに溜めていたと思われるケツアル・コアトルの心臓^{ハート}に、勇者リンクの全力というものは凄まじい威力で突き刺さっていた。

更に言えば、ケツアル・コアトルのトレーニングが行なわれる場所が屋外の訓練

場で、しかも昼間だということも幸いした。

砂時計の力は当然無限ではない、一旦砂が落ち切ってしまったえば回復させない限り再利用は出来ない。

その、砂の力を回復させるための手段というのが、『太陽の光に当てること』であった。

屋内や地下への侵入に用いるのならば、時間切れとなったタイミングで一旦外に出なければならなかっただろう。

しかし今はわざわざ陽の光を求める必要は無い、タイミングさえあればいつでも砂時計を回復させられる。

実際にリンクは、ルチャリブレの試合という形式に拘るケツアル・コアトルが律儀に挟んでくる休憩時間を利用して、砂時計の再スタートに成功していた。

（残り時間的にあと一回か二回ってところかな、だけど……）

「しっかりと体を休めて下さいね、後に引きするような無茶な真似をしたらダメですよ」

（他の囚人達のことを忘れる程に理性が吹っ飛んでる……かと思うのは微妙なところなんだよな、完全に頭に血が上る前にはやめるくらいの判断力はちゃんとあるし。もしかしたら、色々と察した上で、何かしらの思惑で動いてるんじゃない……）

今の状況を考えると、その考察がもし当たっていた場合は大変なことになりかねないのだけれど。

ルチャかぶれの戦闘狂だという側面を持っていたとしても、本質としては紛れもなく、秩序を重んじる善寄りの女神であるケツァル・コアトル。

そんな彼女が向けてくる笑顔は、『大丈夫よ』と言わんばかりの優しいもので。その印象を信じてもいいのではないかと考えることを、リンクの『勇者』としての勘が躊躇うような気配は無かった。

デスジェイル・サマーエスケープ 監獄の一日 夜

規則正しい生活と健康的な運動という完璧な校正プログラムを、今日も滞りなく終わらせて、監獄の一日は終わりを迎える。

しかし、脱獄を目指して夜ごと地道な穴掘りに精を出している一同にとっては、むしろこれからが本番であった。

メイヴ大監獄の護りは確かに嚴重なのだが、それは監獄全体を覆う結界の力によるものが大部分を占めていて、それ以外の人員や設備によって賄われる部分はむしろザルと言って良い。

朝の点呼が行われるまでに戻るのが間に合いさえすれば、脱獄作戦の進行は不可

能では無かった。

雌伏の時を経て蓄積した鬱憤を晴らさんと、小さなスプーンを手に今夜も地に潜る脱獄囚一同。

彼らが行動に出た頃を見計らって、同じく動き始めた者がいた。

「じゃあ、行ってくるよ」

「お気をつけて」

囚人一同の中で唯一の留守番役……不測の事態が起こった際に、それを地下にいる者達に報せる務めを担っているゼルダに見送られながら。

リンクは既に手慣れた様子で、部屋の隅に置かれていたそこその大きさがあつた水がめの上下をひっくり返した。

この監獄は全体的に設備や備品のチェックがおざなりで、壊れたり脆くなつていたりするものが少なくない。

この水がめもふちが欠けている程度ならばまだ良かったのだが、底に穴が開いて

しまっている状態では、想定されていた役割を果たすことは出来ないだろう。

……とは言うものの、水はきちんと新鮮なものが、模範囚とされているリンクやゼルダだけでなく他の者達へも同様に提供されているので、いつから溜まっているのか分からないような澱んだ水を飲まなければならないような事態にはなっていないのだが。

（ならば何故このようなものが備え付けられているのかという疑問には、『雰囲気作り』という答えで落ち着いた）

何はともあれ肝心なのは、宛がわれた牢獄内に使えそうなものがあつたということと、それを実際に使用することに特に問題は無いという事実。

お馴染みの緑の帽子を片手で押さえながら、ひっくり返した水がめの底にヒョイと飛び乗ったリンクの服の裾と帽子が、足元から立ち上る魔力の風によってはためく。

何らかの詠唱と思われる光の文字が、頭の上をぐるりと一周した、その瞬間。

今の今まで確かにそこに立っていたリンクの姿は、水がめの底に開いていた穴に吸い込まれて消えてしまった。

かなり衝撃的な光景の筈なのだが、それを最初から最後まで目の当たりにしていたゼルダに狼狽える様子は無い。

人間の親指ほどの大きさになった彼が、上手い具合に欠けて出入り口のようになっていた水がめのふちから出てくるのが分かっていたのと、それがすぐに実際の光景となったから。

その姿は子供にしか見えず、特別な力と技術によって聖剣を打ち、時に願望器すらも創り出すことが出来た不思議な小人、その名はピッコル族。

そんなピッコル族の名高き賢者を相棒に旅をしたある時代のリンクは、彼の力によつてピッコル族と同じ大きさになることで、人間の体では入れない場所で冒険を行なったり、他のピッコル族達の助力を得ることが出来た。

本当なら相棒の存在が不可欠な能力だったのだけれど、サーヴァントとなり、逸話によつて補完されることで、かつて共に旅した頃と変わらず扱えるようになった。尤もそれには、昔も今も変わらず、『エントランス』と称される大きな体と小さな体を中継するための出入り口が必要なだけけれど。

リンクは既に、牢獄内の水がめと合わせて、安定したエントランスを確保するこ

とに成功していた。

ゼルダへと向けて今一度、小さくなってしまったこの身でも分かりやすいように努めて大きく手を振りながら、門のような大きさとなった鉄格子の隙間をあっさりと通り抜ける。

そのまま、向こう側が六車線の大通りよりもずっと遠くなった廊下を一気に横切り、普通の人間の大きさなら気づかないかもしれないような壁の亀裂へと潜り込んだ。

迷路のような狭く入り組んだ空間をしばし進み、倉庫と思われる部屋に出て、穴が開いた状態で放置されていた木箱を利用して元の大きさに戻れば。

勇者リンクの牢獄生活、その夜の部が本格的に始まるのであった。

「こんばんは」

「……お前か。」

よくもまあ、こうも毎晩飽きもせずに見れるものだ」

「そりゃあね、何たって六チーム分の溶解液を提供してもらってるんだから。」

いくら差し入れがあつたとしても足りないでしょう、それ以外のところでちゃん

と食べておかないと」

そう言って笑いながら、光る石板から巨大な肉の塊を幾つも取り出していく少年の悪意の無い様子に、胸のあたりでつかえていた息を吐き出すゴルゴンだったが、体の方は依然強張ったまま。

他の囚人達とは違うタイミングで初めて接触した際、最上級クラスの魔獣であるこの身を屠りうる神剣の輝きを容赦なく鼻先へと突き付けられた怖気は未だに、ふとした折に蘇っていた。

「何を一方的な被害者みたいな顔をしてるんだか、出会い頭に襲ってきたのはそっちが先なのに」

『『こいつは早々に片付けなければまずい』と野生の勘が叫んでいたのだ、実際に間違っただけじゃないかな』

彼が夜ごと差し入れを持ってくる理由……胃の中身を頻繁に吐き出しているゴル

ゴーンの身を案じてというのは嘘では無いが、それに加えて、溶解液を安定して出してもらうために体調を整えておいてもらいたいのと、勝手な気まぐれで提供を止めたりしないように、自分が怖がられているという事実を正しく認識した上で牽制するためという、怪物たるこの身でさえどん引きするような冷徹な打算があることに、ゴルゴーンはしっかりと気づいていた。

（私がそれに気づいたこと自体が、こいつが意識して匂わせた結果だという可能性もあるな……）

やはり人間は恐ろしい、神や魔物などよりもずっとずっと性質が悪い。

表には絶対に出さないし、普段も努めて忘れてはいるが、ふとしたタイミングで思い出してしまう本心が、我慢出来なくはないけれど無視も出来ない棘となってゴルゴーンを内側から苛んでいる。

（ふんっ、まあいい。

連中が現実を突きつけられるのもそろそろだろう、纏めて鬱憤を晴らしてや」

「今晚あたりかな、皆が結界にぶち当たって進めなくなるのは」

「……………」

「その反応、やっぱり監獄結界は地下まで隙間なく展開されているのか」

「なっ……き、貴様、謀ったな!？」

それを予想出来ておきながら、なぜ連中をそのままにしておった!!」

「確信は無かったので。

そのまま出られれば良し、駄目なのが確認出来れば改めて次の手を考える。

ただそれだけの話、特に問題は無いでしょう?」

強がりではなく本心からそう思っているのだということが分かる、本当に何気ない様子であっさりと言い切ったリンクに、ゴルゴーンはしばし呆然として。

その後、胸に込み上げた滾るものを懸命に堪えながら、音を立てて握りしめた手のひらに自身の鋭い爪を食い込ませる羽目となった。

（ああ、これが……これだから、人間という奴は）

失敗してもいい、またやり直せばいいと、心から言い切ることが出来る。

何度だって立ち上がり、諦めずに頑張ることが出来るのが人間の強さだという言い分を、かつてゴルゴーンは鼻で嗤った。

それは、自身の弱さと世界の理不尽さを知らない愚か者だからこそ口に出来る、現実を目の当たりにしたと同時に潰されるような戯言に過ぎないと。

だけど、今の彼女は少しだけ知っている。

現実どころか底なしの絶望を突きつけられながらも、胸にともった僅かな勇気の輝きのみを頼りに、どこまでも諦めずに頑張る続け、ついには運命すら覆してみせるような人間達が、確かに存在するのだと。

この胸に込み上げた熱いものは、理解しがたいものを突きつけられたことへの苛立ちなのか、それとも……。

そんなことを考えてしまう自分がいるという事実そのものが、何よりも腹立たしかった。

リンク達が予想していた通り、監獄結界に阻まれて引き返すこととなった一同が、爆発寸前まで鬱憤が溜まっていたゴルゴーンに絡まれ、彼女のちよつと過激なストレス発散に付き合わされることとなるのは、もう少しだけ後のこと。

（そのまま脱出することは諦めたとしても、他の方法を探すために今後も穴掘りは行われるだろうし。

ゴルゴーンさんへの差し入れ自体は、このまま続けた方がいいだろうな）

頭の中では思考を進めながらも、音と気配を消すことと周囲の警戒は怠らない。敵地に単独で潜入しながらの探索というものは、時代と世代を超えて同じようなことを幾度となく乗り越えてきた彼にとっては、既に日常の一部とすら言えるほどに自然とそこにあるものだった。

囚人を逃がさないためではなく、女王メイヴの身を護るために行なわれている警戒の隙間を縫いながら調べた内容を元にマッピングを行ない、時には物陰に身を潜めながらケルト兵や他の囚人達の話に耳を傾けたりと、慎重に探索範囲を広げていった結果。

仲間達の脱獄に役立てることが出来そうな情報を……ゴルゴーンと同様に、地下深くの特別房に隔離されている凶悪犯が更に二人、この監獄に収容されているという事実を掴んだ。

（国家転覆を企んだ凶悪な『神代思想犯』に、姿だけでなく霊基までもを変じて見せる『怪人^{むげん}∞面相』か。

どういう人達なのか、今後協力を頼むような事態になるのか、そもそもの話として協力してもらえるのか。

まだ何も分からないけれど、とりあえず接触しておくに越したことは無いだろうな）

「誰かそこにいるの!？」

高いヒールが石畳を鳴らす音と共に上がった、他者を詰ることに手慣れていることを伺わせる女性の声に、リンクは反射的に物陰で身を伏せた。

あつという間に暗闇の中で溶け込んでしまった彼を見つけ出すことは、隠れる瞬

間まで含めて全てを目の当たりにしていた者でさえ難しいであろう。

アサシンというクラスの賜物か、リンクの気配の片鱗をふとした瞬間に掴んだ女性……カーミラも、彼が身を隠した物陰のすぐ傍まで来ているというのにも関わらず、自分の勘違いだったという方向に思考を傾け始めていた。

「……嫌ね、面倒な連中に振り回されているせいで疲れたのかしら。

今日はもう休みましょう、大して寒くもない筈なのに鳥肌が立っているわ」

何か、とてつもなく凶悪で恐ろしいものが間近に潜んでいる。

そんなことを考えさせるような嫌な予感に迫られ、怖気に粟立つ肌をさすりながら、カーミラは早足でその場を去っていった。

彼女の気配が十分に遠ざかった頃を見計らって、物陰で塊となっていた影がゆっくりと身を起こす。

つい先程まで紛れもなく人型であった筈のその姿は、艶やかな毛並みを闇に溶け込ませる狼のものと化していた。

（危なかった、ちょっと考えに集中しすぎてたか）

今後の方針を纏めるためにも、一旦仕切り直して落ち着いた方がいいかもしれない。

順調に探索が続けていた甲斐があつて、凶悪犯達の独房があると思われる場所の目星も、そこへと向かうための道筋も大方の見当がついている。

いつもと比べて少し早いけれど、今日はもう戻ることに決めたリンクは、ケツァル・コアトルとのトレーニング等が行われる屋上の広場へと狼の姿のまま歩み出て……ふと思ひ立ち、まるでスイッチを切り替えるかのように、自身の把握する世界の様子を一変させた。

狼の姿となったリンクには『センスを研ぎ澄ます』という言葉で称される能力があり、人よりもずっと優れた狼の感覚を最大限に活用することで、匂いを追ったり霊的なものを視たりすることが出来る。

そして今、センスを研ぎ澄ませたリンクの五感は、夜空を遮って監獄全体を包み

込む結界の全貌と、広場のど真ん中に堂々と鎮座する女王メイヴの巨大な石造の頭部に、監獄結界と全く同じ色と質の魔力が核を思わせる塊となって存在しているという事実を余すことなく認識していた。

（やっぱり監獄結界は、あそこを中心に展開されているみたいだな。

あれを壊すなり、中に入ってスイッチを切るなりすれば結界を解除出来るんだろうし、俺がやってもいいんだけど。

……とりあえず保留にしておこう、またイシュタルさんにレースの山場を潰したって怒られそうだし。

結界を何とか出来そうだってことに関しては、聞かれたら答えればいいか）

夜ごと土まみれになりながら穴を掘り、それ以外にも色々と四苦八苦した末にやっとの思いで監獄結界の真実に辿り着いた囚人一同が、リンクの方はとっくのとうにそれに気付いていたことを知って、なぜすぐに教えてくれなかったのだと反射的に怒りかけて。

しかしそれは、無自覚に企画を潰しまくったリンクが反省し、同じようなことを起こさないようにと彼なりに配慮したからなのだということに思い至り、何とも言えない表情を浮かべることになるのは……まだしばらく先の話。

「やあ、待っていたよ。

『彼』と約束したんだ、君達に協力するってね。

そもその話として、君達の脱獄を手助けすることには、僕にとっても十分な利があったんだ。

それに加えて、あれだけ有意義に語り合うことが出来た対価となれば、もはや焦らず間すら惜しい。

何でも言うてくれ、君達は僕にどんな働きを求めているんだい？」

「ようやく来たか、遅かったなあ！

話は緑の兄さんから聞いてるぜ、俺に出来ることがあれば何でも言うてくれ。

……兄さんには出会い頭で遊んでもらった上に、思いがけず世話になっちまった。俺じゃない誰かが俺の中で混ざりあっている、どこまでが俺でどこからが違うのかが時々分からなくなる。

そんな不安を受け止めてもらえたのは初めてだ、どんなことにも先達ってのは居るもんなんだなあ。

受けた恩は気が済むまで返すぜ、それが任侠の生きざまってもんだろ」

「話が早いこと自体は本当に助かるんだけどさ」

「凄まじい存在感ですね、脱獄レースをリタイアして完全に別行動を取っている筈なのにその気がしません……」

「あいつをどうしようかって考えるの、もう疲れたわ……」

デスジェイル・サマーエスケープ 脱獄成功〜フィナーレ

「何なのよもうっ、確かにコノートは私の土地なのに!!」

そりゃまあ散々好き勝手に支配したけど、だって私は女王だし当然でしょ!!

納得いかない納得いかなーいつ、もうどこに行けば素敵な勇者に会えるのかしらーっ!!」

「ムーチョ ムーチョ!!」

……と、いきいたところですが。

楽しいルチャタイムもそろそろお開きにしないとですかネ、看守が出所者を引き留めるなんて本末転倒ですし。

ここで消えておくのが交換条件でしたしネ。

よーし合格、ククルカン式卒業試験これにて終了デース!!」

ひたすらに穴を掘って、地面の下まで覆っていた結界に阻まれて、穴を開通させるよりも先にメイヴや結界そのものに対処することへと目標を切り替えて。

神代思想犯ことエルキドウ、怪人∞面相こと燕青の助力を得ながら、囚人一同はついに暖かな陽光の下での自由を取り戻した。

更には、脱獄の情報を聞きつけて待ち構えていたメイヴとケツアル・コアトルの打倒にも成功し、後顧の憂いを完全に断つことが出来た。

各チームに配分するための小さな体を、身の内から溢れる激情によって震わせるイシュタル……その中の一部が、『最も警戒すべき相手が無事に排除された』ことに対する安堵であることを、微笑ましく見守る者達には悟らせないまま。

ゴール寸前という最高のクライマックスを前に、随分と長いこと中断されてしまっていたレースを再開させる宣言が、久々に元の姿となったイシュタルの口から高々と唱えられる。

メイヴが口に使っていた『惑星のテクスチャ』という言葉の意味や、この地を特異点へと変えている聖杯の在りかなど、色々と気になるところはあったのだけれど。囚われの身から脱したという解放感と、レースの再開という明確な目標、更にはレースを無事に終えさえすれば全てが解決するという事実、それらの疑問を些細なこととして一同の思考から追い出した。

もう少し気にしておけばよかったと……誰も彼もが夏の解放感に浮かれて、『悪魔』とも『銭ゲバ』とも称される女神のことを信じ切ってしまったと。

彼女が行動する理由はどこまでも『自分の利益』、それも価値と質量を伴った即物的なものなのだという、十分すぎるほどに分かり切っていた筈なのにいつの間にか薄れてしまっていたことを、一同はゴールテープを切った先で改めて突きつけられることとなる。

華々しくゴールテープを切った者達だけでなく、過酷なレースを最後まで走り抜いた全てのマシン、全てのチームを讃えるはずだった表彰と閉会のセレモニー。

その開催を控えて、つい先ほどまで歓声と花吹雪によって彩られていた会場は、突如発生した巨大な積乱雲の接近によって騒然となってしまっていた。

サーヴァントの中でも直観力や危機的状況への対応に長けている者達が、驚愕と焦りを露わに姿や精神が子供のサーヴァント達の避難を促す。

観戦と同時に観測を行っていた管制室のスタッフ一同も、計器の異様な反応を前に声を上ずらせていた。

人理焼却に抗う最後の砦に集い、幾つもの世界の危機を乗り越えてきた百戦錬磨の強者達が抗うよりも先に逃げることを考える、サーヴァントの霊基すらも砕くほどの力を持った暴風と雷鳴。

それ程までの大災害が、何の前触れもなく現れた。

……前触れは無かった、しかし一同は目の前で起こっていることの原因を即座に察した。

誰もが混乱し、これからどう動くべきかを必死に考えているような状況で、歓喜の高笑いが響き渡ったのだから。

始まりから終わりまでレースを盛り上げ続けていたのと全く同じ声が、同じようにマイクとスピーカーを通して状態で。

「ふふっ、ふふふ………あー……ふっふっふっ!!

完っっっ壁、完璧に成功したわ!!

私ったらどこまでパーフェクトなのかしらーっ!!

巻き込まれなくなったら逃げなさい、私も鬼じゃないし命までは獲らないわ!!
でも掛け金の払い戻しは会場にいるサーヴァントだけ、逃げ出した英霊のチケットは無効とするのであしからず。

あっははははは!!

文句があるなら、天地開闢から続くこの法則に言うのね!!

『賭け事は どの時代でも 親の勝ち』。

賭場ってもんはどんなゲームであれ、胴元が勝つように出来ていと分かったか

しらーっwwww

「イシユタルさん、あなたって人は!!」

「立香……何をしているの、さっさと逃げなさい。」

ここは今、人間どころかサーヴァントでさえ危険な場所になっているわ」

「センパイ、イシユタルさんの言う通りです!!

ここは危険です、いつ雷に直撃するか……」

「安心なさい、よく働いてくれたあなた達に稲妻を落とすような真似はしないわ。これ以上、私の邪魔をしなれば、ね」

「……っ!!」

瞳に不穏な光を宿らせながら浮かべた笑みは、まだ親睦を深められていなかった頃によく目に見ていたもの。

自身の考えや行いは全てにおいて正しいと疑わず、目の前にいる人間の命をほんの些細な気まぐれや不快感で奪うことを躊躇わない、美しくも恐ろしい『神』としての彼女の表情だった。

何度も助けてもらったことや、レースの進行に一喜一憂しながら笑いあったことなどに嘘は無かったと、その辺りはちゃんと信じている。

しかし、それはあくまで彼女が持つ顔のひとつ。

どんなに打ち解けようとも、基本的には独りよがりで残酷な性分の持ち主……それが女神イシュタルなのだということを、決して忘れてはいけなかった。

立香達に次いで集まってきたレース参加者のサーヴァント達の前で、彼らのゴールを迎えたセレモニー会場の建造物こと『イシュタル神殿』が変容を始める。

息を呑みながら警戒を続けていた一同の表情が、目と口をぽかんと開けた間抜け面と化するにそう時間はかからなかった。

装飾に多少の趣味の悪さは見受けられたとしても、『神殿』と言うだけのことはある程度には神々しかった建造物が、拝金主義全開の巨大なATMへとその姿を変えたのだから。

レース開始直前にイシュタルから配られていた付属パーツが、各チームのマシンから外れてそのATMへと吸い込まれていく。

レースという名の、『特異点を消失させるため』という名目で行われた儀式によって集められていた膨大な量の魔力が奪われていくのを、想定外の連続に混乱する一同は見送ることしか出来ない。

歯噛みしながら彼らは、角の先が天を衝くほどの巨大な牡牛、神獣グガラナの顕現をその目に焼き付けた。

儀式の成功を見届けて機嫌を天元突破させたイシュタルは、高々と笑いながらこ

の上なく軽くなった口を滑らせ続けた。

彼女は最初から、失われた神獣グガランナを新しく造り直すためにレースの開催を企画したのだと。

『騙したのか』という詰問に対しては慌てた様子で首を横に振り、『特異点に関してはグガランナの力でぶちっと解決させるつもりだった』という言い分は本当らしく、自分の望みを叶えた上でカルデアの一員としての務めもきちんと果たそうと、彼女なりに考えてはいたようなのだけれど。

グガランナの全力の蹄には、特異点を潰すどころかその下にある正しい人理にまでダメージを与え、大地そのものに物理的な大穴を残しかねないほどの力がある。その上で特異点のみを綺麗に消してみせるような、念には念を入れた力加減や気遣いなどといった繊細な概念は、イシュタルとは全く以って無関係であることを誰もが知っていた。

立香を始めとした、つい先程までレースの成功を共に喜びあっていた者達から容赦なくぶつけられる、幾つもの不信と疑いに満ちた眼差しに、イシュタルの機嫌は見る見るうちに悪くなっていく。

手順こそ騙し討ちも同然の形で整えたけれど、レースを成功させるために力を尽くしたことや、その過程で交わしあったあれやこれやは紛れもない本物だった。

強引な手段を取ったことを多少怒られたとしても、最終的には認められて、カルデアに強大な戦力が加わったことを喜んでもらえると思っていた。

彼女なりにマスターやカルデアのことを考えて、一生懸命に努力したことを認めてもらえないどころか、寄ってたかって責められる。

それは、イシュタルの怒りと苛立ちを誘発し、女神としての残酷な一面が本格的に露わとなるきっかけとしては十分すぎるものだった。

「あっそう、そうなの……分かったわよ、やろうってのね!?

グガランナはまだ前肢部分しか実体化していないけれど、あんた達をまとめて踏み潰すには十分だわ!!

この力を体感して私の威光にひれ伏しなさい、女神に楯突いたこと後悔させてあげる!!」

カジュアルな水着とパーカーから、いつもの女神としての装束へと切り替わったイシュタルの姿は、他の者達と同じように、夏の陽気とレースの熱気に少なからず浮かれていた彼女の思考が、神のそれへと完全に切り替わったという事実を明確に物語っている。

特異点の解消を成し遂げなければならぬという責務と、あれだけ必死になって走り続けたレースの締めくくりがこれだなんて認められないという意地から、夏の太陽にも引けを取らないような女神の怒気へと立ち向かう一同。

そんな彼らを叩き潰さんと、轟音と地鳴りと共に振り上げられたグガランナの巨大な蹄が、黄金の正三角によって囚われた。

「なっ!？」

「そこまです、イシュタルさん」

「もう観念してもらえませんか、今のうちならまだダメージも少ないですから」

「リンク、ゼルダ姫!!」

「す、すみません、お二人のことをすっかり忘れていました!!」

彼らと最後まで別行動を取ることもなったのは、まだ脱獄を果たす前、メイヴ大監獄の中のことだった。

脱獄レースからリタイアした彼らの牢獄には脱出用の穴が無く、他の者達と同じタイミングで抜け出すことが出来なかったのだ。

それに加えて、色々と事情があったとはいえ、公式にレースの一環として扱われていた脱獄に参加しなかった以上は、本来のレースの方でもゴールテープを競うわけにはいかないとも言い出して。

『他の皆が脱獄を成功させて、監獄内が混乱したどさくさに紛れて別ルートで脱出する』

『ラストスパートには加わらないとしても、最後までちゃんと走って、閉会式には間に合わせるから』

そう言って快く背を押してくれたことに甘えて、彼らを残して一足先にレースを

再開させた。

ゴールを見届けた歓喜と高揚に浮かれながらも、遅れて現れるであろう彼らをきちんと、他の皆と同じように拍手と歓声で迎えようとしていたところまでは覚えていた。

その後の騒動の中で完全にすっぽ抜けてしまっていたことを自覚し、慌てて謝る立香とマシュに、ハイラルの二人は『氣にしてないよ』と言わんばかりの表情と仕草で返した。

そんな何気ないやり取りによって僅かに緩んだ空気の中で、グガランナの蹄を止められるという衝撃的な光景を前に思考を吹っ飛ばしてしまったイシュタルも、懸命に氣を取り直した……のだけれど。

「……わ、私のグガランナマークIIを、蹄だけとはいえ止めるだなんて。

流石ねゼルダ、『封じる』ということに関してはあなたの右に出る者はいないわ。だけど、それだけで私が諦めると思っっているんだっただけ甘いわよ。

グガランナマークIIの全身が実体化すれば、いくらあなたでもそう簡単、に……

は。

「えっ、あ？」

[illegible]

懸命に取り戻した平常心は、さほど長続きしなかった。

ギルガメッシュやエルキドゥが聞いていれば、腹をかかえてのたち回りそんな渾身の絶叫が、暴風や稲妻の轟音をかき消す勢いで響く。

それを、あまりにも穏やかな笑みを浮かべながら聞き流したゼルダの姿は、この夏の日々の中ですっかり見慣れた小麦色の肌と海賊王女の衣装ではなくなっていた。

輝かんばかりに美しい白い肌に、背中を彩る金の髪……純白の布地を細やかな金色で彩っただけのシンプルな造りだからこそ、まとった者自身の美しさと神々しさを際立たせる装束。

膨大な歴史を持つ大国の姫ではなく、神に連なる力を宿す巫女としての自分を全面的に押し出す姿で現れた彼女の、上向きに掲げられた手の平の少し上のところ、グガランナを捕らえているものとは大きさだけが違う正三角によって固められた、凄く見覚えのあるパーツが浮いていた。

「このパーツが、グガランナのどの部分を構成するものなのかは、生憎と分かりません。

10 にも満たない僅かなチームへと振り分けられたもので、特異点の解消を可能とするほどの膨大な魔力を全て注ぎ込む必要があったことを考慮すれば。

このたったひとつを取り込み損ねたというだけで、グガラナナの完全な実体化は決して成しえないと判断出来るのですが、如何でしょうか？」

「いっ、今からでも遅くはないわ、それを返しなさい!!」

混乱と焦燥に逸ったイシュタルの指から、それなりの威力が込められた弾が放たれる。

しかしそれは、瞬時に割って入ったリンクによって敢え無く弾き返され……相棒を信じて防ごうとも避けようとしなかったゼルダは、その場にいた誰もが注意を向けていなかった空へと向けて声を上げた。

「ケツアル・コアトルさん、今です!!」

「取りました、ベストポジション!!」

センキューデース二人とも、注意を引き付けてくれて助かりましたーっ☆
「ケツアル・コアトル!？」

何で、どうして、目の前で確かに消えた筈なのに!!」

遙か天高くから突如現れ、半ば実体化したグガランナの頭の上へと再登場を果たしたケツアル・コアトルに驚いたのは、リンクとゼルダ以外のイシュタルを含めた全員だった。

目を剥く立香達へと向けて、ケツアル・コアトルはこれまでの経緯と、自分が今ここにいる理由を軽く説明する。

自分がこの地に召喚された理由は、特異点の解消という名目で碌でもないことを企んでいたイシュタルに対するカウンターであったこと。

イシュタルの方も、自分と同じ属性の力を持つ神であり、グガランナに対しても優位を取ることが出来るケツアル・コアトルのことを警戒していたので、油断させて行動を促すために怪人∞面相の力を借りて消滅を装ったのだということ。

リンクとゼルダとは途中からその目的を共有し、密かに協力関係にあったのだということ。

愕然として目と口が開きっぱなしになってしまったイシュタルへと向けて、ゼルダの口から止めの言葉がかけられる。

「さあイシュタルさん、お選びください。

もはや成功し得ない儀式を強引に推し進め、半端に形を得たグガランナをケツァル・コアトルさんの手によって粉碎されるか。

自らの意思で諦め、グガランナを解体して魔力リソースを返還するか。

……イシュタルさんは良かれと思っていたこと、根本的なところに悪気はなかったことは、ちゃんと分かっています。

それでもあなたは迷惑をかけたのです、楽しいレースで特異点を解消すると言ったあなたを信じてついでにきた人達を結果として裏切ったのです。

そのことに対しては、きちんと反省して謝らなければいけません」

間違っていたとただ責めるのではなく、分かり辛くとも確かに存在していた善意を認めた上で、それでも結果として迷惑をかけてしまったのだから謝ろうと促すゼルダの言葉は、否定されたせいで頑なになってしまっていたイシュタルの心に正しく届いた。

しかし、だからと言って簡単に素直になれるようなら、事態を穏便に済ませることが出来るようなら、『イシユタル』と書いて『はた迷惑』と読むような認識をされてはいない。

成功を確信していた計画を寸前のところで覆された悔しさや、(彼女にとっての)理不尽に対する遣る瀬無さによって崖っぷちにまで追い詰められたイシユタルは、盛大に口を滑らせた。

「……………何だよ。

寄りにもよって、どうしてあなたがそんなことを言うの!?

肝心な時に役に立てなくて、確かに持っていた筈の力が今あればって、そんな悔しい思いをあなただっただけだった筈なのに!!

ねえそうでしょう、ハ・イ・リ・ア!!」

「なっ……………ちょ、バカ、イシユタル」

「私はゼ・ル・ダですっ！！！！」

グガラんなの頭上……凄まじい反射神経で退避したケツアル・コアトルが今の今まで立っていたところと、逃げ遅れたイシユタルを中心に、黄金の輝きを放つ力の塊が豪雨の如く降り注ぐ。

リンクの誘導によって避難こそ出来たものの、そこから先は見守るしか無かった一同の前で、相応の轟音と破壊力を伴ったそれはかなり長い時間をかけて続いたのであった。

「……あの名前は彼女にとっての地雷であると、十分に理解していたハズなのに。なぜ全力で踏み抜くのですか、うっかりにも程がありマース。

気合を入れていた分、正直言って不完全燃焼ではあるのですガ……やめておいた方がいいですネ、これ以上は引退沙汰デース」

「ケツアル・コアトルさん、色々とうございました」

「そう言って貰えるのは嬉しいけれど……同じくらい恥ずかしいデスね、何しろ肝心なところで何も出来ませんでしたタから。

……あとはお願いしますネ、あまり追い打ちをかけないであげて下サイ」
「そうします、流石に堪えたみたいですし」

苦笑いを浮かべながら頷いた立香に、ケツアル・コアトルもまた、いつもより少しだけ強張った笑みを浮かべながら消えていった。

協力してくれたサーヴァントの退去を見送るという、マスターとしての大切な役目を終え……意を決して振り返った先には、先程までとあまり変わらない混沌の光景が広がっていて。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「……………うーむ。」

よもや我がこの駄女神に対して、もう十分なのではないか、これ以上はやり過ぎなのではないかと思うような事態が起こりうるとは。

しかしまあ、こやつのことだから熱さが喉元を過ぎるのも早いであろうし、例の石板自体はやはり出しておくでしょう」

「ではそれも入れて撮りましょうか、この焦げ具合をきちんと写したいので急がないと。」

もっと寄って下さい、でないと端の人が見切れてしまいますよ！」

「終わったかマスター、ならば早く来い」

「メイドに同意だ、余の隣が空いておるぞ！」

黒焦げになって謝罪BOTと化したイシュタルを中心に据え、見るも無残な残骸と化したイシュタル^A神殿^Tをバックに、意気揚々と記念撮影を行おうとしているサー

ヴァント達の図太さには、流星の立香も表情が引き攣るのを堪えられない。

しかし、レース参加者達の晴らさずにはいられない鬱憤も、念には念を入れて釘を刺しておくべしというギルガメッシュの言葉も分かるので。

結局は切り替えて記念撮影に加わる立香の後ろ姿からは、様々な困難を乗り越え、頼れるサーヴァント達という色ものの集団に振り回されつつも纏める、マスターとしての経験と貫禄というものが垣間見えて。

こうして、カルデアが一丸となつて盛り上げた夏の一大イベントは、様々な教訓と反省を伴いながら、掛け替えのない思い出の1ページとして皆の記憶に刻まれたのであった。

「最後のあたりは、ちょっと残念でしたけれど……それでも楽しかったです、参加して正解でした」

「それは良かった」

「リンク、今度またマスターバイクを貸して下さい」

「構わないけれど、その時は俺も一緒に行くよ」

「はい、よろしくお願いします。」

「……そうだ、あなたも一緒にませんか？」

「……何故そうなる」

「何故って……レースに誘うのを諦めさせたのですから、代わりにそれくらい付き合って下さっても良いのでは？」

「……そもその話として。」

あのようなふざけたレースに俺を誘うなどという発想が、一体どこから湧いて出たのだ」

「だってそうすれば、チーム名を『黄金の聖三角』^{トライフォース}に出来たではありませんか」

「……………おい、小僧。」

長い付き合いの姫であろう、しっかりと手綱を握らんか」

「長い付き合いだからこそ、『あ、これは止められないな』ってのが分かるんだよ」
「たまにはいいでしょう？」

「馬鹿馬鹿しい。」

誘うならアレキサンダーの小僧にしろ、あいつならば断わらん」

「私はあなたを誘っているのです。」

彼は彼であって、決してあなたではありません」

「……………」

「さて、いつにしましうか」

諦めろと言わんばかりに笑う『勇氣』、慣れないまま振り回されてため息をつく『力』、少し先の予定を考えて楽しそうに微笑む『知恵』。

一度しっかりと区切りをつけながらも、やはり完全には断ち切ることが出来なかった、数十万年にも渡る筋金入りの腐れ縁。

以前と比べると、少しだけ穏やかな形で結ばれた繋がりを共有する何気ないひと時が、終わりがけた夏の片隅に存在していた。

2017年の夏イベのネタでした、楽しく進めた記憶があるので書ききることが出来て良かったです。

本編とは時系列が違う時のことをかけるので、本編ではまだ出てきていないサーヴァントや、先のネタを少しだけ出せるのもいいですね。

その筆頭だったゼルダ姫、彼女の登場は本編の方でも考えています。

とはいっても、まだいくつか特異点を解消した後のことなので、当分時間がかかりそうですが……。

頑張っ続けて続ける気概はありますので、飽きずにお付き合いいただければと思います。

終わり近くに出たネタについて、少々補完します。

ゼルダは事実として『彼女』の生まれ変わり、もしくは子孫で、そのことは『伝説』にも描かれて周知されている上に、『ゼルダ』という存在を『彼女そのもの』と考える認識や解釈は相当に大きいです。

サーヴァントとなったゼルダにもその要素が付加されて、基本として高い『神性』スキルがあるので……ギルガメッシュのように、その事実を受け入れがたいとする本人の意志が強いので、普段はランクが下がっています。

しかし、『本人』扱いされているゼルダのそれは、あくまで『血を引く』レベルなギルガメッシュ以上に強靱なもので、ブチ切れるなどのきっかけで普段抑えている分まで含めて爆発したりして。

今回のイシュタルは、うっかりにもその地雷をど真ん中で踏み抜いてしまったという事です。

禁忌降臨庭園

やり直しの果てに

時系列に沿って書こうとすると機会が来るのは相当先のことになってしまいうので、外伝の一環として別のところで書いていたのですが、やっぱりこれも分類としては本編だよなと思ったのでこっちに移すことにしました。

常にも増して『残酷な描写注意』です、人によっては『R-18G』表記が必要となるかもしれません。

宜しいという方は、是非ともお進み下さい。

新たな特異点の観測……そんな、世界や人理の側からすれば紛れもない『異常』

すら、『日常』の一端と化していたカルデアにおいても、その一報は正しく異常事態であった。

北米東海岸のとある地域、今現在においては近代的な街並みが広がっている筈のごく限られた場所が、その地に暮らしていた五万人もの人々を巻き込みながら、突如観測された特大の魔力反応と共に謎の闇の中へと閉ざされた。

科学的にも魔術的にも、あらゆる干渉から断絶されたその地の名は『セイレム』。かつて町全体が魔女裁判の狂気に陥り、多くの犠牲者を生み出してしまったという、知る人ぞ知る暗い歴史の残る場所である。

きっかけは、『アビゲイル』という名の子を始めとした少女達。

通常の状態では考えられないような奇行を繰り返すようになった彼女達の様子に、人々は魔女の仕業と考え、大々的な魔女裁判が行われた。

その裁判と事態が泥沼化した原因は、霊的証拠の重要性が認められてしまったことだった。

『夢や幻で現れた』という、客観的な判断や考察など下しようの無い、少女達の個人的な印象や証言でしかないものが正当な告発とみなされ、『少女達によって魔女

と告げられただけ』の者達が次から次へと投獄され、その多くが処刑にまで至ってしまったのだという。

思春期の少女達が閉鎖された田舎町で集団ヒステリーを起こしたあの、少女達の中に本当の魔女がいたのだのと同様に嘯かれ、表の歴史的にも魔術的にも大きな意味を持つその場所が、膨大な魔力反応を伴った謎の異常事態に襲われている。

それまでに経験した前例から、最終決戦の地から逃亡した魔神柱の関与を確信したカルデアは、多くの問題をクリアして彼の地に潜入する為のとある策を以って行動に移った。

旅の芝居一座として、質素で敬虔な毎日を送る人々の非日常として、立香とマシュ、そして選抜されたサーヴァント達はセイレムへと赴き、そして……………。

（…………そして、何だっけ）

（アビゲイル、ラヴィニア、ティテユバさん）

（カーターさんに、ホプキンス判事）

（色んな人に会った、色んなことが起こった）

（……………何が、起こったんだっけ）

（ここは、どこ？）

（どうして、俺、こんなところにいるんだろう）

酷くばやけた思考の中で、辛うじて形となった意思の端を、立香は懸命に掴んで手繰り寄せた。

やめた方がいいと、このまま何もかもが終わってしまうのを待つのが自分自身の為だと、どこから聞こえてくる声があるのだけれど。

それが、墮落を仄めかす悪魔の声なのか、せめてもの救いと安らぎをもたらそう

としてくれている天使の声なのかは分からなくて。

……どちらにしても、従った方が本当に自分の為になるのだと、妙な確信を抱いてもいるのだけれど。

安寧に逃げてしまっただけじゃないと、それこそ本当に何もかもが終わってしまうと、身と心を守りたいという本能を抑えて叫ぶ意思がある。

今の自分に許されている、ほんの僅かな自由の中で、立香はギツと力を込めて歯を噛みしめ……舌から走った鋭い痛みと、口中に広がった血の味と共に、堕ちかけていた自我を強引に覚醒させた立香は、目の前に広がる光景と幾分かまともになった思考で把握した現状を前に、引き攣った口元から自嘲の笑みが零れ出た。

「……………ああ、そういえばそうだった。

何も出来ないからって、よりによって現実逃避とか……………情けないなあ、俺ってば」

厳しいようで何かと甘いサーヴァント達なら、逃げっぱなしで終わらせずに、何

とか踏ん張って戻ってきただけでも大したものだと、そんな言葉で慰めたり励ましてくれるのかもしれないけれど。

そんな予想は、今の彼をこれっぽっちも助けてはくれない。

年経た大樹が佇む丘の上……まとわりつくような嫌な風が吹き、あらゆる色が褪せてしまっているかのようなその場所です。

立香は一人、自身の首をかけることになる吊り縄を前に佇んでいた。

その日のセイレムは、久方ぶりの安堵と希望に沸いていた。

神の祝福を受けている筈のこの地を突如襲った悲劇と惨劇、その元凶が公正な裁判と審議の結果明らかとなり……流れの芝居一座の座長を装い、この地への侵入を果たした悪魔への刑の執行が、もう間もなく行われるからだ。

これで全て終わると、元の平和で穏やかな暮らしが戻ってくるのだと信じてやまない市民達は、悪魔の最期を見届けてやろうと集まった丘で、自分達と同じく悪魔によって騙され、要らぬ辛酸を味わわれたと、この悔しさや喜びを分かち合えると信じている者達の姿を探した。

絞首台に立つ少年の無実を知り、一座ごと親しんでいた少女以外の市民の誰も

が、彼の死を今か今かと待ち望んでいるという現状に耐えられなかった彼女達が、絞首台とそれを囲む市民達を遠巻きにしながらたった一度の機会を伺い続けていることなど、想像すらしないまま。

「センパイ、ああ、センパイ!!

そんな、何で……一体どうして、こんなことに」

「落ち着けマッシュ、難しいのは分かるけどそれでも落ち着くんのだ。

俺達がミスったら、それこそマスターは助からねえぞ」

「君も十分酷い顔をしているよ、落ち着きなってコマドリ君。

案ずることはないさ、マスターには既にこのキルケー特製の仮死薬を投与してあるし、念には念を入れた首の強化も済んでいる。

執行が済んで、人々の気が緩んだ瞬間を見計らって攪乱の魔術を使用するから、それに紛れて救出すればいい。

その後は……一旦森にでも隠れてから考えよう、町に留まるのは危険すぎる」

「……それにしても、気になるわ。

セイレムを狂気に陥れた元凶はあくまでマスターだけで、団員である私達に関しては操られて利用されていただけだと、実質的な無罪判決が出るだなんて。

一座ごと嫌疑をかけるのはたやすかった筈だし、全員纏めて吊ってしまえば、それが一番楽だったでしょうに」

「詮索不要、今この時に意味は無し。

油断、軽視、大いに結構、おかげで僕らはマスターを救える。

アビー泣いてた、マスターのこと心配してた。

必ず助ける、また会わせてあげる、約束した」

「……そうね、今は前向きに考えましょう。

幸いにも、マスターの傍にはサンソンがついてくれているし」

「どんな状況になっても柔軟に動けるように、自分だけ敢えて向こう側につくって
いうあいつの判断は、今思えば正解だったな」

森に潜みながら法に抗ったロビンフッドと、自身が悩み苦しもうとも法を遵守することを貫いたサンソンの相性は決して良くはないが、人理を守る為に集った立香

のサーヴァントとして、確かに互いを認め合っている。

サンソンならば、不自由な状況でも立香の為に最善を尽くしてくれると……それが叶わなかったとしても、自分達が駆けつけるまでは持ち堪えてくれる筈だと。

たまに一人で思い悩んでしまう程に、責任感が強く真面目な処刑人のことを誰もが信じていたからこそ、立香の首が縄の輪にかけられようとしている今この時も、最低限の冷静さを保つことが出来ていたのだけれど。

突如始まった、誰もが予想していなかった絞首台の異変が、彼らにギリギリの冷静さを保たせていた最後の砦を突き崩した。

「……あれ、何か様子がおかしいぞ。

縄が、首から外されて……」

「もしかして、処刑は中止？」

それならそれで、何よりなんだけど」

「……待て、おい待て。

サンソン、あの馬鹿、何をやってやがる!!」

「センパイ!?」

「閣下、お待ち下さい」

手触りの良さなど欠片も考慮せず、ただひたすら頑丈に結われた縄の輪が頭をくぐり、頬に掠めた荒い感触にゾツと背筋が粟立ち、心臓がこのまま潰れるかのような思いを味わった、その瞬間。

よく知る者の声でかけられた制止の言葉を、立香は助けだと心から信じていたし、彼を疑うという発想自体がそもそも存在しなかった。

だからこそ、次に続いた言葉の意味を理解し、それが紛れもなく彼の口から出た発言だと受け入れることは、すぐには出来なくて。

「どのような思惑があったのだとしても、彼には確かに、長い間世話になったのです。」

だからどうか、最後は自分で……彼の刑は、僕の手で執り行わせては頂けないでしょうか」

「……………えっ、サンソン？」

本当に思わずといった様子で零れた声は、掠れた声で力なく呼んだ彼の名は、その場にいた誰にも聞き留められることは無く。

立香の意志など関係ない、彼がどう足掻こうとも変えられることなど何も無いと言わんばかりに、彼の目の前で、彼の意図を全く介することの無いまま、彼が迎える最期の形を決める為のやり取りは粛々と続けられていった。

「刑が確かに執行された筈の者達が魔物となって墓地から蘇り、まるで道連れを増やそうとしているかのように、親しい隣人だった者達を襲っているという事態は、閣下もご存じでしょう。」

僕は彼を、そのような浅ましく無残な姿で蘇らせたくはない……罪を雪いだ後には、静かに眠ってもらいたいのです」

「だからと言ってどうするつもりだ。」

今までに蘇ってしまった者達も、その時々で出来る限りの対処は行なっていた。

その上で、魔物と化すのを食い止めることは出来なかったのだ。

なぜ貴様は、自分が執り行いさえすればそれが可能だと言い切れる」

「絞首ではなく、断頭によって執行します。

人間だろうが魔物だろうが、首を落とされれば死ぬのが道理……最初から首を失った身で、魔物と化すことは不可能と考えていいでしょう」

「……出来るのか？」

「一座に加わる前の僕は、そのやり方を主とする処刑人でした」

「……良からう、好きにするがいい。

こやつを捕え、刑の執行にまで無事に漕ぎ付けられたのには、貴様の貢献が大きかったのは確かだからな。

刑自体が間違はなく執り行われるのなら、その程度の便宜を図ることに、特に支障はあるまい」

「……ありがとうございます」

緊張が解けてホッとしたような声、その主のブーツが粗末な板張りに立てる音

が、視界の外からゆっくりと近づいてくる。

下を向いたまま呆然と目を見開いた立香の内心は何故か、驚きも怒りも絶望も通り越してしまった先の、嵐が過ぎ去った後の海のような不思議な落ち着きが満ちていた。

自分を捕えるのに貢献したとはどういうことだとか、あの不可解な証拠や証言の出どころはお前だったのかとか。

聞きたいこと、問い質してやりたいことが山ほどある。

マッシュや他のサーヴァント達を無罪にしたのは、逃がす為でも、ここぞというタイミングで立香を救わせるためでもなく、共に処刑しようとすれば今この時に間違はなく、サーヴァントとしての能力を躊躇うことなく解放して暴れ出していた筈だからだと……彼らの守りが離れたこの機に、自分を確実に処刑する為だったということ、今になって察してしまった。

信じていたのにと嘆き、裏切ったと怒り、お前のせいでと憎んだとしても、それは人として当然の、正当な心の動きだろうとは思っている

それを形にする前に、当人に向かって吐き出してしまいう前に。

立香はどうしても、ひとつだけ確認したかった。

実際にはほんの数秒だった筈なのに、今の立香にとっては永遠にも思えた程の長い間を経て、俯いたままの立香の視界に黒いブーツの爪先が入り込む。

少し癖を伴いながら跳ねている黒い旋毛の上から、恐る恐る覗き込んでいると思われる人影と……こんな目に遭わせたのはお前だろうと、確かな事実を以って詰ることすら躊躇われてしまいそうな程に、今も味わい続けている痛みと苦しみに耐えているように掠れていて。

それでいながら、後悔や躊躇いの代わりに、決意と覚悟の力強さを伴った声が降ってきた。

「……………申し訳ありません、マスター。」

ですがこれは、此度の事件を解決する為に、どうしても必要なことなのです。

どんな叱責も懲罰も、全てが終わった後で、甘んじて受けると約束します。

だから今は……………どうか、僕を信じて下さい」

この状況で、今までの経緯を考慮した上で、あまりにも無茶なことを言っていると、サンソン自身も思っているのだろう。

それでも……自分はどんなことになるうとも、立香や人理の為ならばと覚悟を決めてしまう、とても真面目で、責任感が強くて、自分の信念と在り方を曲げられない頑固者。

そんな、自分がよく知っているいつも通りのサンソンが、継るような声にも、ゆっくりと上げた視界に映った表情の中にも、間違いなく存在していた。

「……ねえサンソン、その言葉を誰に誓える？」

「マリアに、麗しき我らが王妃殿下に」

「……そっか、分かった」

「……………マスター？」

「信じるよサンソン、マリーに誓ったお前を」

ショックのあまりに崩れ落ち、絶望のままに項垂れるのではなく。

自らの意志で堂々と膝をつき、そのうなじを差し出した立香の姿を前に、サンソンはまるで誇り高い殉教者を前にしたかのような、胸と瞳が熱くなる感覚を味わった。

最高の技と敬意を以って、ほんの一瞬の痛みも苦しみも味わわせることなくその首を断つべく、処刑人の剣を構え、心身を研ぎ澄まさせるサンソン。

そんな彼と、彼によってもう間もなくもたらされるであろう一瞬の前に、抑えきれない恐怖による体の震えと滴る冷や汗を懸命に堪えようとしている立香の耳に、野次馬の群れを半ば吹っ飛ばす勢いで掻き分けながら懸命にこの場へと駆けつけようとしている、仲間達の声が届いてきた。

「おいこらサンソン、てめえ一体どういうつもりだ!!」

「サンソンさん、どうして……お願いです、やめて下さい!!」

センパイ、立って、逃げて下さい!!

どうして動いてくれないんですか……センパイ、センパイ!!」

「止めるー、何が何でも今この場で助け出せ!!」

私の仮死薬はあくまで、体の生体反応を一時的に限界ギリギリまで低下させるだけのものだから、首を吊るだけならまだしもぶった切られたら意味が無いんだ!! マスターの首には出来る限りの強化を施してあるから、一回か二回くらいなら耐えられるだろうけれど、それでも続いたら持たない!!」

キルケーのその言葉は、自信は、神秘に満ちた古代ギリシャで大魔女と名を馳せていた彼女の実力に相応しい、至極真つ当なものだった。

その首に向けて振り下ろされた刃が、その主がごく有り触れたものであったならば、彼女の宣言通り、施された強化は刃を見事跳ね返していたことだろう。

しかし、今のこの状況においては……大魔女によって行使されながらも、特別な思い入れも無い数多の技のひとつでしかないものと、『首を断つ』という一点における技と功績によってその名と存在を人理に刻んだ、稀代の処刑人の渾身の一刀とでは、その差はあまりにも歴然であった。

『ラモール・エスボワール
死は明日への希望なり』

サンソンの処刑人としての逸話の中に、処刑されるような罪を犯した覚えは無いと、跪き頭を垂れながら赦しを求める謂れは無いと、刑を執行するならばこのまま行えと、胸を張って堂々と立ちながら言い切った將軍の首を見事一刀にて断ち切り、その技があまりにも冴えていた為に、將軍は自身の首が既に断たれたことにも気付かぬまま一向に行なわれない刑の執行を促し、サンソンに薦められて身を揺らしたことでただ乗っていただけの首が落ち、將軍はようやく己の死を自覚出来たというものがある。

それは流石に誇張だったとしても、そんな話が生まれてしまう程に、死の瞬間に余計な苦痛を与えない為、その首と共に罪を断つ為に洗練され続けた刃は、その役目を過たず果たした。

覚悟し、それでも恐れながら迎えたその瞬間に、ほんの僅かな痛みも苦しみも、立香が味わうことはなく。

苦痛どころか、何の感覚も前触れも無いままその首が落ち、体を伴っていれば決してこうはならないであろう不自然な回り方をする視界の中で、『あつ、今俺死ん

だ……』という、まるで他人事のような自覚を得たのみ。

現実味をこれっぽっちも得られずにいるまま、くるくると回る視界の中で立香は、歓声を上げる市民達と、彼らの群れを必死に掻き分け、その顔を絶望に染めながら手を伸ばす、マシユや仲間達の姿と……そんな人々に、何食わぬ顔で紛れている『悪魔』を見た。

教えられた訳でも、名乗られた訳でもなく、立香にはそうとしか思えなかった。大きな黄色い両目は爛々と輝き、紫のハートを思わせる顔の輪郭は黄色い棘で縁取られ、真っ赤なラインが目の周りと口にあたるであろう部分を毒々しく彩っている。

あんなにもあからさまな存在を、今この時までなぜ自分は気付けなかったのか、なぜ皆は気付かないのか。

最後の思考をそんな疑問で埋める立香の、瞬く間に暗く狭くなっていく最後の視界の中で、『悪魔』は両手で掴める程の大きさの青い塊を取り出し、口元へと持っていく。

……死の間際に、五感の中で最後の最後まで残るのは、聴覚なのだという。

ブレーカーが落ちるかのように、ブツンと切れる直前の最後の意識の中で、不思議な笛の音色と巨大な翼が羽ばたく音を聞いたような気がした。

僅かな抵抗すら許されないまま闇に堕ち、二度と覚めることは無いと思われた立香の意識は、全身を包む柔らかな温かさ、思わず顔を背けてしまう程の眩しさの中で覚醒した。

「……………えっ、何で。」

俺は、確か……………死……………」

自身の心を守る為、冷静かつ正常な思考力と判断力を最低限保つ為に、認識のピントを敢えてずらし、物事をまともな感覚で受け止めて考えることが出来ないようになっていた精神が、日常の光景と空気の中で通常通りの仕様を徐々に取り戻していく。

絞首台の床を踏みしめた感触、そこから見えた光景、交わされたやり取り、見事落とされて転がった首と回る世界。

それらを改めて明確に思い出し、あれは夢ではなく現実だったのだと、自分は確かに一度死んだのだということを、正常な精神状態で正しく認識してしまった立香は、魂から込み上げる衝動のままに、遅れた断末魔を思わせる絶叫を迸らせながら素朴なベッドから転げ落ちた。

家を丸ごと揺らしたかのような悲鳴は、穏やかな朝の時間をそれぞれ過ごしていた仲間達に余さず届いたらしく。

見知った顔が、誰も彼も慌てた様子で、僅かな時間差を挟みながら集まってきた。

「どうした、敵襲か!？」

「…………ち、違う、何でもない。」

ただ、変な…………怖い、夢を……………」

「はあっ、夢だあ？」

何だそりゃ、全く人騒がせな…………なんて、軽口を叩いてる場合じゃねえな。

顔色が悪いなんてもんじゃないやねえ、どんな酷い夢を見たんだよ」

飄々とした態度で、不真面目そうな言動で、だけど本当は仲間達のことを常に真剣に考えてくれているロビンフッド。

「休息、推奨。

無理は禁物」

強さと純粹さを併せ持ち、セイレムの狂気の中でも、真つすぐな誠実さを貫き通してくれていた哪吒。

「大丈夫ですかセンパイ、タンコブなどは出来てはいませんか!？」

絶望と憔悴に満ちた表情で、懸命に手を伸ばす最後の姿が、瞳と脳裏に焼き付いているマッシュ。

……そして。

「朝食はちゃんと取っておいて、後で温め直して差し上げますから。起きてくるのは、調子が良くなってからで大丈夫ですからねえ」

年嵩の女性らしい柔らかな笑みを浮かべる、黒人の召使ティテュバ。

魔女裁判の狂気の連鎖、その最初の一人が彼女であったことを、自分は既に知っている。

「朝食でもしかして、あの手抜k……シンプルなおーツの粥のことかしら」

時にサーヴァントとして、時に師として。

人理修復の旅路の初期からこの身を助けてきてくれた、コルキスの王女メディア。態度と言動の違和感から、時折皆を困惑させた彼女の正体が、メディアの血縁であり姉弟子にもあたる魔女キルケーであったことも、既に知っている。

「私の分はやっぱり無いのね、お腹が空いたわ……」

狂気の町に在ることは間違っていると思ってしまう程に、優しく純粹で、周りの者達の身を常に案じ続けてくれていた、少女アビゲイル。

彼女が空腹に嘆いていたのは、夜の森で秘密の遊びに興じ、獣に襲われた彼女達を助けた翌日。

夜遊びの罰として、食事を抜かれていた時のことだったと記憶している。

……確かそれは、自分達がこのセイレムにて滞在と調査を開始した、その初日のことではなかったか。

だとしたら、マタ・ハリが現れる様子が一向に見受けられない理由も分かる。

その日の彼女は朝早くから、情報収集の為に町を見て回っていた筈だから。

訳が分からない……自分はまだ、性質の悪い夢の中にでもいるのだろうか。

(……いや。

もしかしたら、本当は、最初から全部……………)

混乱と焦燥のあまりに、それこそ性質の悪い思考のループに嵌まりかけてしまっていた立香の傍らに、そっと膝をついた者がいた。

瞳孔が開きかけてしまっている瞳に移ったのは、黒いコートに、色素の薄い髪と瞳。

処刑人ではなく、医者として、サーヴァントとしてのサンソンが、疑いようなない気遣いをその目と仕草に込めながらそっと伸ばしてきた手が、立香の喉に触れる。固く荒い縄の感触と、異様な回り方をする視界を思い出した立香は、ヒュッと甲高い音と共に息を止めながら竦み上がってしまった。

自身の接触をきっかけに恐慌に陥ってしまった立香に、しかしサンソンは、敢えてその行動を続けた。

そこが折れても断たれてもないことを、彼がきちんと生きているのだということ、人肌越しの優しい感触と熱で、実感で以って伝えていく。

「大丈夫ですよマスター、あなたはちゃんとここに居ます」

「……………サン、ソン」

「……本当に。」

よく、頑張りましたね」

胸の奥から込み上げるもので、声と瞳が震えている。

申し訳なさそうな、痛ましげな、それでいて誇らしそうな。

サンソンの奇妙な様子を前に、ストンと落ちてきて嵌まり込んだかのような感覚と共に、立香は確信した。

目の前にいる彼は、自分の首を断ち切った『あの』サンソンであると。

立香が『気付いた』ことを察したらしいサンソンは、彼の手を取り、未だ僅かに震えている足で立ち上がるのを手助けしながら、自身の診察を見守っていた仲間達へと声をかけた。

「特に怪我を負った訳では無さそうだけれど、少し気分を変えた方が良さそうだ。ちよっと散歩に出てくるよ、僕が護衛を務める。」

「……いいですね、マスター」

「……………うん。」

よろしく、サンソン」

「それだけ顔色が悪けりゃあ、まあ妥当な話だな」

「お願いします、サンソンさん。」

センパイ、ゆっくりしてきて下さいね」

少しずつ現状を受け入れながらも、未だ半ば呆けてしまっている立香を手助けしながら、彼の体に障らないよう、皆に不審がられないようにゆっくりと、それでも出来る限りの速足でその場を後にするサンソン。

そんな彼がすれ違いざまに、密かに声をかけた者がいた。

「戻るのには、少し時間がかかるかもしれない。」

不審がられるようだったら、何とかフォローしておいてくれ」

「はぁ、いい、お任せあれ。」

今回のご奉仕に関しては、流石に特別価格を適応させていただきます。

どうぞ心置きなく、ゆっくりしてきて下さいねえ」

素朴な使用人だった筈のティテュバの口から飛び出した、多分な色気を含んだ可愛らしい声色と不可解な発言に呆け気味だった意識を揺さぶられ、内心で『はあっ!?』と叫びながら振り返った、立香の目に映ったのは。

濃い肌の色はそのままに、豊満な肢体を大胆に露出した衣装が非常に魅力的な、極上の手触りを想像させる豊かな髪から獣の耳を覗かせた女性が、立香が自身に驚愕の眼差しを向けていることに気づいたのか、心底愉快そうに笑っていた。

「えっ、ちょ、ティテュバさ……ねえサンソン、一体何がどうなって」

「全て話します、ちゃんと説明します。」

だから今は、どうか黙って付いて来て下さい」

死んだと思えば生きていて……処刑台にいたかと思えば、まだ狂気の日々が始まる前の穏やかな朝の中にいて。

そんな混乱と動揺から、サンソンの励ましのおかげで多少持ち直した筈だった立

香は、サンソンの案内で目的地らしい場所を目指し、勤勉な人々の営みによって既に賑わっていた町並みを横切って進む道中で、せっかく復活しかけたその精神を再び突き崩される羽目となった。

情報収集の途中だったところに思いがけず鉢合わせたマタ・ハリも、恐らく今頃は拠点に戻り、立香の調子が悪いらしいという一同の認識に更なる補完を加えていることだろう。

どこにも寄らず、マタ・ハリと話した時以外は一度も立ち止まりすらしないまま、一気に町並みを突っ切って。

四方全てを木々に囲まれ、自分達以外の人影が見受けられなかったところで、立香はようやく強張ってしまっていた肩の力を抜き、それまでに窒息していなかったのがおかしいと思えるような勢いで息を吐いた。

「……ねえサンソン、一体何がどうなってんの。

もう訳が分からない……狂っているのはこの世界、それとも俺自身が」
「自信を持って下さい、今のあなたは最も……いや、違う。」

このセイレムを訪れて以来、初めて、間違いなく正気です。

……ああ、来ましたよ」

どうやら、目的は『場所』ではなく『人』だったらしい。

サンソンに促されて上げた視界の中に、頭上の枝を鳴らし、数枚の木の葉を散らしながら……性質の悪い悪夢として早々に忘れてしまいたい忌まわしい記憶の中で、見かけたのはたった一瞬のことだった筈なのに、今もこの瞼に鮮烈に焼き付いている『悪魔』の顔が降ってきた。

……喉の奥から飛び出しかけた悲鳴は、その途中で呑み込まれた。

恐ろしく不気味な顔ではなく、それを備えた存在そのものに対して、恐怖ではなく安堵が、疑問ではなく納得が。

『彼』がいないまま、『彼』という存在を忘れたまま、あの地獄に立ち向かった自分達への驚愕と称賛が湧いてくる。

……ああそうだ、その通りだ。

どうして自分達は今の今まで忘れていた、この事態に対する違和感を抱けないま

ま過ごすことが出来てしまったのだろう。

セイレムへと送られた選抜部隊には、今までのように、いつものように、その存在だけで何よりも頼もしく思える彼だって加わっていたのに。

悪魔を連想させるような不気味な仮面がゆっくりと外され、その下から、思わず泣きたくなる程に懐かしく思えてしまう、金の髪と碧い瞳が現れた。

「リンク!!」

「ごめんな立香、酷い思いをさせて。

よくここまで来てくれた、本当によく頑張ったよ」

「お前、今まで何を……いや違う。」

どうして今まで俺達は、お前がいなかったことを変に思えなかったんだ!?

何かどころじゃない、ここではもう何もかもがおかしい!!

さっき見てきた町の様子は……俺は正気だっていうサンソンの言葉が正しいのなら、あの光景は」

「あれこそが、何の誤魔化しも勘違いもない、この世界の真の有様だ」

リンクの言葉を、音ではなく意味で理解した次の瞬間、腹の底から質量を伴いながら込み上げてきた不快感を、立香は堪えることが出来なかった。

リンクもサンソンも、そうしてぶちまけてしまった行為と代物を忌避するような人ではなく。

汚れた口元を躊躇うことなく拭い、純粹にその身と心を案じてくれている二人の様子に、少しずつだとしても確かに、立香の心は平静さを取り戻していった。

どんなに信じがたかったとしても、真実をそうと受け入れられるだけの心の余裕を、立香はようやく得ることが出来た。

「……………処刑された人達が、夜な夜なグルルになって蘇っていたのは、何かしらの術とか呪いとかの影響があったからじゃなくて。

ただ単に……役割を変えた、それだけのことだったんだな。

ここは魔神柱が造った巨大な舞台だって、俺達はその上に立つ役者だって……シナリオからなるべく離れないように、それでいながら肝心な時には逆らえるよう

にって、皆と話し合っていたのに。

まさかここまで、認識や感覚までどっぷりと舞台に染められていたなんて、思ってもみなかった」

眩く温かい朝日の中で、和やかに談笑し、精を込めて働き、さも当然のように町並みを行き交っていたグループ達と……何の疑問も、違和感も抱くことなく、『見知らぬ美女に声をかけられて舞い上がる若者』という役割をこなすグループと語り合いながら、情報収集に勤しんでいたマタ・ハリ。

『〇〇役』というフィルターが標準装備されていたと思われる少し前までの自分なら、いつも通りか、もしくは微笑ましいと認識していたであろう光景が、ありのままを認識出来るようになった今の自分にとっては、目の当たりにさせられた狂気以外の何ものでもなかった。

「……………俺が一人だけ、『舞台』と『役割』から抜け出せたのは、やっぱり死んだから？」

「正確には、『藤丸立香』はグルと化す余地もなく確かに死んだと、この舞台から永遠に退場したと、お前自身も含めた誰もが認識したからだな。

……一步間違えれば体は無事でも精神が崩壊しかねなかった、乱暴極まりない手ではあったけれど。

それでも、『マスター』であるお前に関しては大前提で、どうしても舞台から引き摺り下ろす必要があった。

それをサンソンに強いたのは俺だ、文句も怒りも後でいくらでも受け付ける。

……だから今は、この狂った舞台を終わらせる、その為に頑張ってはもらえないか？」

全ての非と責任は自分にある……そう言わんばかりのリンクの発言が腹立たしかった、この上ないと思う程に癪に障った。

それは、自分が受けた仕打ち、味わった苦しみに対してではなくて。

「……なあ、リンク。

お前、さも自分が悪いって、俺ばかり大変な思いをしたって、そんな風に聞こえそうない方をしてるけど。

今のこの時に辿り着くまでに……俺達が舞台に完全に囚われて、『役割』の中で踊らされている間に。

お前は一体、何回やり直したんだ？」

「……………」

「途中からは、サンソンや、多分ティテュバさんも加わったんだろうけど。

……それまでどのくらい、一人だけで頑張ったんだ？」

「……………」

「変に深いところまで追及したりはしない、お前が嫌ならもう聞かない。

だからお前も、それに関してはもう言うな。

これからはまた、一緒に頑張って……皆揃って、カルデアに帰ろう」

青と蒼の二対の瞳が真っ直ぐに向かい合い、決意と共に頷き合う。

後のカルデアにて『禁忌降臨庭園』と呼称されることとなる、亜種特異点『セイ

レム』。

その真の攻略が、今まさに始まった瞬間であつた。

SAN値チェックを免れる訳でも、強靱な精神力を持っている訳でもなく、判定のタイミングのみを遅らせ、重要だったり治療が出来なかったりするような場面においての発狂を回避することが出来るという特殊スキル持ちの立香君でした。

宝具『ムジユラの仮面』の効力は、本家ではなくブレワイにおけるものを意識しました。

使用中において、装備者は魔物達から同類と見なされ、怪しまれることなく紛れ込むことが可能となります。

セイレムの住人は皆、『住人役』を演じているグル達であり、立香達も役者として舞台に組み込まれてしまっていた為に、この効果の適応対象となっていました。

舞台裏

「ああ、知ってるよ」

「…っ、だったら」

「でも教えない」

「何で!？」

自分達の気付かないところで、既に何度もセイレムでの日々を繰り返してきたというリンクならば、この特異点を作り上げた魔神柱の居所とその目的を既に突き止めているのではないか。

堪えきれずに形にされた期待と願いは、叶うと同時に跳ね除けられた。

いつもの立香ならば、リンクが敢え無く却下した理由も、それが悪手以外の何でもないこともすぐに気付けたのだろうけれど。

何度か限界を超え、辛うじて持ち直したばかりの精神状態で、目の前にぶら下げられた安樂的な選択肢に、反射的に飛びついてしまいたくなるのは無理もないことで。

いつまた、些細なきっかけで瞳孔を回しかねない立香の現状を考慮し、正面から真っ直ぐに向き合いながら、ゆっくりと口を開いた。

「魔神柱が想定したシナリオから、大きく外れてはいけない……お前達が気付いていた大前提は、舞台から降りて『役割』から離れた身でさえも蔑ろには出来ない。この世界そのものが、その為だけに造られ、維持されているものなんだからな。その上で、無理なく答えて欲しいんだけど。

誰が魔神柱、黒幕なのかを知った上で、当の本人を前にしながら、何食わぬ顔でいつも通りに過ごせるか？」

「……………」

「人間とは比べ物にならない視野と視点を備えた、ン千年を生きてきた魔神を相手に、気付いてなんかいませんよ！何も知りませんよ！という体で誤魔化し切れるか？」

「……………だいたい自信ない、かな」

「正直で宜しい。」

魔神柱を追い詰められる機会があるのは最終日だけ、それ以前に余計なリスクを負う必要は無い。

だから俺は、魔神柱の正体や目的に関しては、サンソンに対しても教えていないんだ」

「そうなの!？」

「ええ、まあ……真面目で誠実なのは僕の美德ではあるけれど、機密を胸に秘めるのには向かないと言われてしまいました」

「……………まあ確かに。」

サンソンの場合、秘密があること自体は隠しきれなくて、無理して誤魔化そうと

はしないで事情があるんですって素直に明言して、不審がられながらも構わずに貫き通しそうな気がする」

「……………」

「……サンソン。」

もしかしてお前、『役割』から外れた時は実際にそんな感じだった？」

「マスター達が懸命に伸ばす手を振り払いながら、納得させるどころかろくな説明も出来ないまま、半ば自死のようにこの身を吊るすのが、僕には精一杯でした。」

……あの時、あの状況にあったのがロビンフッドだったら、きっと上手くやった。マスター達に、あんな顔をさせたりはしなかったのでしょうね」

何やら事情があるらしい仲間を救えず、何の力にもなれないまま、目の前で見す見す死なせてしまったという絶望を、この身は確かに味わったことがあるのだと。サンソンの痛ましがな表情を前に察した立香は、彼の為にも自分達の為にも、その事実が『無かったこと』になって良かったと心から思った。

「……ロビン、そうだロビンなら。」

俺達で無理でも、あいつなら絶対に、魔神柱相手でも気付いていることを覚らせたりしないで上手く立ち回れる。

何とかあいつもこっち側に連れてきて、色々とサポートしてもらえれば」

今思えば本当に必要なことで、リンク達だって出来る限りの配慮をしてくれていたことも分かるのだけれど。

ここで死ぬのかと、信頼していたサーヴァントに裏切られて嵌められたのかと、本気で絶望したあの瞬間を仲間達にも味わわせてしまうことを、震える拳を握り締めながら一生懸命に覚悟しようとした立香の呟きは、それを敢えて遮るように口を開いたリンクによって妨げられた。

「頑張って考えているところ悪いんだけど、それは多分無理だよ」

「どうして!？」

「……じゃあ聞くけど。」

諜報活動に特化し、仲間の分まで疑うことを自分の役目と考えている、ロビンフッドやマタ・ハリさん。

立ちは大なる困難を、前提として策ではなく物理で突破しようとする、生粋の武人気質な哪吒。

魔女の性分として、元々信じるよりも先に疑う人で、下手なことをしようものなら築き始めたばかりの信頼関係が一瞬で瓦解しかねないキルケーさん。

……この面子に、あなた達は魔神柱が造った舞台上で『役割』に囚われていますと、そこから抜け出すには一度公の場で大々的に死ぬ必要がありますときちんと説明したとして、素直に受け入れてくれると思うか？」

「……………うん、無理だね」

「俺がそう言うのなら、それが必要なことならばって。

すぐに信じて受け入れてくれたサンソンの方が、人として正しい危機感や判断力を持っていたかと言われると、ちょっと疑わしくなるんだよな。

……まあ、おかげで色々動きやすくなったし、助けられもしたわけだけど」
「他の皆にはちょっと通じそうにないな。」

それが本当だって知っていても、字面だけだと性質の悪い狂信者の戯言にしか見えない」

立香やサンソンの誠実な人柄が裏目に出たと、騙されるなり操られるなりしてしまつたと勘繰り、完全な善意もしくは正しい判断力で以って、自分達を嵌めようとする悪意の出処を探ろうとするだろう。

そんなものは何処にも無いのだと知らぬまま、もしくは信じぬままに。

「更に言えば、キルケーさんの存在は別の意味でも厄介だ。

あの人の仮死薬がある以上は、裁判で死刑判決が出るように工作するだけじゃ目標の達成が出来ない。

周りだけでなく、自分も含めて『死んだ』って思わせなきゃいけないんだからな。それを防ぐには、どうにかして仮死薬の服用を妨げるか」

「マスターの時のように、僕が直接首を断つかでしょう。

……しかし、あれが上手くいったのは、あの状況で抵抗する手段や能力がマス

ターに無かったから。

マスターが僕を信じて、黙ってその首を委ねてくれたからで」

「納得出来ないまま、どうにかして逃げる気満々のままであの状況になったのが、立香ではなくサーヴァントの誰かだったら。

普通の人間を装うことを即座にやめて、サンソンの一刀目を何とか防ぐかわすか耐えるかして、助けに入るのが間に合った他の皆と合流して、その場から逃げ切っていただろうな」

これらの事実とは、責めるようなことでは無い。

あらゆる危険や可能性を考慮してサポートに回ってくれることも、強力な魔法薬を惜しみなく提供してくれることも、頼もしくはあれど困るなんてことは断じて無い。

正常が異常と化し、異常が正常と化してしまう、このセイレムの現状こそが間違っているのだ。

「デミ・サーヴァントとしての戦闘力を失っているマシュなら、お前と同じ手が通じるかもしれないけれど」

「却下だ」

「わかってるよ、だからそんな目で見るなってば。」

……人理修復の旅路を越えて、色々と強かな面を見せるようになった今でも、あいつの性根は純粹すぎる。

自身の死を望む市民からの狂気を一身にぶつけられ、更には信じていた仲間裏切られて殺されるっていう絶望が、いつまでも残る深い傷になりかねない。

そして、必要なことだったと受け入れて許した筈なのに、実際にはいつまでも恐れ続けてしまっている自分こそを誰よりも責めるんだ」

「……そんなことはさせない、絶対に」

「うん、俺もそう思う。」

だからもう、『役割』から逃れた仲間を増やそうとはしない。

全体的な判断の最終決定権を持っているお前がちゃんとこちら側にいるんだから、方針や選択を不自然じゃない形で誘導していくことは、決して難しくは無い。

だからこのまま、セイレムの狂気を今回で終わらせるつもりで、本格的に動いていきたいと思っている」

「…………お前の言いたいことは分かった、そうした方がいいって納得も出来た。

だけどやっぱり、何か他に、もっと出来ることは…………」

「お前、何をそんなに…………ああ、そっか。

今のお前にとっては、『前回』のあれが正史なんだな。

あれはお前を…………こう言っちゃ何だけど嵌める為、何とか絞首台まで誘導する為に仕組んだ結果のことだから。

…………そもそも、俺が時を戻したせいで無かったことになっていただけで、変な横やりさえ入らなければ、お前達は毎回ちゃんと魔神柱の正体にまで辿り着けていたんだ」

「マジで!？」

「ああ…………だから焦らないで、いつものように、目の前で起こることのひとつひとつに真摯に、真剣に対応していけばそれでいい。

…………それで大丈夫だから」

『前回』あんな最後になったのは、立香達の対応や行動に問題があったからではない。

一生懸命にそう伝えてくるリンクの様子に、自身の体と表情が強張っていること、あの瞬間の恐怖と絶望を未だ引き摺りまくっていることを自覚した立香は、努めて肩の力を抜きながら大きく息を吐き出した。

「ありがとうなリンク、もう大丈夫。

……ある程度話は出来たし、皆いい加減に心配しそうだし、朝食もまだ食べてないし。

流石に、そろそろ帰らなきゃとは思っただけど」

「まだ何か気になる事でも？」

「……ちよっとまだ、あの町に戻れるだけの勇氣と、何事もないかのように振る舞える自信が湧いてこない。

『役割』のフィルターが外れて、いわゆる『モブ』や『その他大勢』的な町の人達

が皆、元のグールの姿で見えるようになってちやってるから」

「そういえばそうだったな。」

はい、じゃあこれ」

「ぶっほあ!？」

ゲホッ、ゲホッ……何この煙!!」

リンクが徐に取り出し、指で弾いた小さな宝石のようなものが、立香の鼻先で破裂した。

途端に噴き出た煙が、突然のことに驚いて大きく吸ってしまった空気と共に、立香の全身に巡り渡っていく。

咽ながらも何とか言葉にした疑問に返ってきた答えは、またしても想定外のものだった。

『役割』からは外れたままフィルターだけをかけ直す魔術、シバさんが特別に調整してくれたやつ。

本質を知っていたとしても、見た目を誤魔化せば心境的には随分と変わるだろ」

「……もしかして、ティテュバさんのこと？」

あの人、やっぱりサーヴァントだったんだ……」

「キルケーさんとは別の方向で、優秀なキャスターだよ。

……俺からあの人に関する話を話すのは、とりあえずはこの辺りにしておく。
例え何度目になろうとも、マスターとの『初めまして』はちゃんとやりたいって
言ってたからな」

「……そっか、分かった」

彼女の中には、マスターとサーヴァントとしての関係や共に戦った記憶が確かに
あるのに、今の自分にとっての彼女はまだ、召使のティテュバでしかない。

自身に従う大勢のサーヴァント達の誰をも誇りに思い、真摯に向き合うことを努
めている立香にとって、そのどうしようもない事実はあまりにも歯痒いものだった。
……のだけれど。

「あの人に関しては、そんなに気にしなくていい……むしろ、すぐに割り切って切り替えた方がいいと思うぞ」

「彼女の前で下手に気に病む素振りを見せようものなら、例えマスターであろうとも容赦なく慰謝料を請求してくるでしょうからね」

「……あの人、そういう人なの？」

「リンクさん……勇者様を相手に、遠慮なく全力でやってのけたという前例があります」

「うわあ」

何やら疲れた様子で項垂れるリンクと、深く深く頷いたサンソンを前に、本当に思わず零してしまった一言には、何とも表現し難い様々なものが込められていたのであった。

開演前

今後の方針を話し合い、この舞台を演じ切る為の助言をリンクから貰った立香は、後ろ髪を引かれる思いをしながらも帰路を急いだ。

この舞台上にそもそも『役割』を用意されなかった、もしくは何らかの理由や要素によって逃れられたが故に、ひたすら舞台裏で孤独な戦いを続けた彼を、また一人で置いて行ってしまうことに対しては本当に気が引けたのだけだ。

当の本人が『気にするな』と笑って背を押してくれたことに加えて、何よりも時間惜しかった。

セイレムを攻略する為の『策』の一環としてとあることを思いつき、それを実行

に移す為には、今すぐに全員で行動に出る必要があったからだ。

息を切らせながら大急ぎで帰ってきた立香とサンソンを、驚いて軽く目を見開いた仲間達と、柔らかな笑みを浮かべたティテュバが迎えた。

そうして、立香とサンソンを始めとした遅れた朝食を取る者達を交えながら、今後の方針に關しての作戦會議が始まった。

とは言っても、この地を訪れてからまだ一晩しか経っていない現段階では、話し合えることも限られている。

カルデアと連絡が取れないことや、何らかの影響を受けて疑似的な受肉を果たした為にサーヴァント達が弱体化していることなど。

幾つかの現状を確認し、それらに關する各々の見解を交わし合う中で、共にカルデアを發った筈の『彼』がこの場に居ないという異変について誰も追及しない、どころか誰も気が付かないという最大の異常と違和感を前に込み上げかけたものを、立香は溜め息と共に飲み込んだ。

『カルデアのマスターとサーヴァント』としての作戦會議を早々に終わらせた一行は、続いてもうひとつの重大な案件、『旅の芝居一座』として如何にして振る舞う

かという点に関しての話し合いを始めた。

質素で清廉な毎日を送っているセイレムの人々に、束の間の夢と非日常をお届けする。

そういう名目でこの地への自然な潜入に成功し、町の名士であるカーター氏の下に身を置いて以上の、実際に公演をやらない訳にはいかないし。

それがあまりにも酷い代物であったならば、町の人達に不審がられて行動や情報収集の妨げとなり、特異点修復を成し遂げる為の行程が滞りかねない。

だからこそ、候補の脚本はアンデルセンとシェイクスピアというカルデアの二大作家が本気のものを用意したし、『前回』の自分達も本気で演じた。

……本気だったのだ、あの時の自分達なりに。

今になってみれば、それが魔神柱の造った舞台の上で雁字搦めに縛られながら、精一杯の足掻きであったことが分かる。

あの時自分達は、町の人達が敬虔なキリスト教徒であることを考慮し、演目として聖書的一幕を選択した。

今回も、演目を何にするかの話し合いはその方向で動いていて、このまま行けば

問題なくそれで決まるだろう。

その選択自体は決して間違いではないし、実際の公演も中々の仕上がりを見せるのだということを、今の自分は知っている。

大成功だと、声と手を上げて喜ぶまではいかなくても、何とか失敗は免れたと、ホッと胸を撫で下ろすにはそれで十分。

しかし立香は、それではいけないと思っていた。

自分達はこの狂気を何とか乗り切るのではなく、乗り越え、解決しなければなら
ないのだから。

その為に出来ること、『前回』では考えられなかった新たな可能性への分岐、その一つ目が今ここにあった。

「シバの女王の旅路からの、ソロモン王との問答……うん、いいと思う」

「センパイがそう仰るのならば、演目に関してはこれで」

「だけどさ。」

……俺はやっぱり、こっちの方がいいと思うな」

マシユの発言を少し強めに遮りながら、演目のリストへと向けて伸ばされた立香の指先。

それが示したものに目をやり、その存在をようやく認識出来た一同は、あっと声を上げると同時に笑みと高揚をその顔に浮かべた。

「ああ、成る程……あからさまに辛気臭い連中に下手な言いがかりをつけられないようにと、責められる余地の無いようなお堅い演目ばかりに目が行っちゃってたっけど」

「この選択肢は確かにアリね、『これ』に文句を言えるような奴が居るのならばむしろお目にかかりたいわ」

「僕、それがいい！」

「観客達の見る目が厳しくなりそうなのが少し不安ではあるけれど、一度考えだしてしまったら、もうこれしか無いわね」

「私も賛成です、是非ともやってみたいです！」

そもその話として、『前回』においては話題にすら上がらなかった演目リストの一端、立香が示した新たな可能性こそが、カルデアを発つ以前に想定されていた当初の予定においては大本命であり、聖書的一幕を含めたその他の全てが、まず無いだろうとは思われながらも念の為に用意された予備の選択肢だった。

かの人の活躍、冒険、物語には、国も時代も、宗教すらも越えてあらゆる人々が魅了されてきた。

それは紛れもない事実であり、見知らぬ土地で、見知らぬ人々を相手の公演を繰り返すことになる旅の一座にとっては、真の意味で妥当かつ最善の演目となるのだ。ごく個人的な都合でしかない文句を正論で捻じ伏せられ、悶える彼を横目に笑いながら皆で脚本の内容を確認したことを、今の自分にははっきりと思い出せるのに。すぐ目の前に確かにあった、自分達が何度目を通していった紙に間違いなく記されていたものに、示されるまで気が付かなかった。

演目に関しては普通に気付いて受け入れたのに、そこから簡単に連想できる筈の存在に関しては、やはり思い至る様子が窺えない。

『舞台』に囚われて、正常な認識力と判断力を失っているのは彼らの方の筈なのに……あまりにもいつも通り過ぎる仲間達の様子を前に、もしかしたらやはりおかしいのは自分の方なのではないかと時折考えてしまい、粟立つ背筋の気持ち悪さを懸命に堪えながら。

『マスター』かつ『座長』として口にした、皆の望みに応える形での最終決定を受けて、仲間達が上げた歓声が華やかに室内を彩った。

……のは、ほんの一瞬のこと。

深く大きく息を吸った、何かしらの覚悟を決めようとしているかのような仕草を挟みながら続けられた立香の提案が、あまりにも無茶なものだったからだ。

「一緒に読み合わせした皆知っているように、この演目はアンデルセンとシェイクスピアが短く調整したもので、登場人物も少なくなっている。

……だけど俺は、敢えてこれを詳細に、原典に近い形でやってみようと思うんだ」
「なっ……おいおいマスター、いきなり何を言い出してんだ。

作家連中が敢えてシナリオを短くしたのも、登場人物を減らしたのも、演劇経験

が乏しい俺達でも何とか劇を形にする為だっつーのに」

「ただ舞台に立って、台詞を読めばいいという話では無いんだぞ？」

登場人物を一人、場面をひとつ増やすだけで、どれだけの事前準備が追加で必要だと思っているんだい。

伸びた分のシナリオを無理に時間内に詰め込もうとすれば、舞台全体のクオリティが下がることも目に見えてるし」

「……あ、あの、メディアさん？」

何か、口調がおかしいような……」

「おっほほほ、何のことかしら気のせいでしょう!!

と、とにかく……舞台を少しでも良いものになりたいという気持ちは、分からなくもないけれど。

現実を考慮出来ない理想論なんかには、到底付き合えないわ」

「理想論なんかじゃない、策と手はちゃんとある」

「……へえ、面白いじゃない。

この大魔女を納得させられる考えがあるというのなら、是非とも話してご覧な

さいな」

「期待には応えてみせますよ。」

使えるものは何であろうとことん使う……それが魔術師というものだって、あなたに教えてくれましたからね」

呆れたり悩んだりしながらも導き続けてくれた師匠の姉弟子へと、立香が胸を張りながら言い切ってみせたのと、ティテュバが不意に発した盛大なクシャミに驚いて跳び上がったアビゲイルが、彼女が持っていた水桶を引っかけてささやかな惨状を作り上げてしまったのは、殆ど同じ頃合いのことであった。

セイレムの町における主要な施設のひとつである公会堂を、かつて無いような賑わいが満ちている。

それもその筈……人々が今夜この場に集ったのは、7日に一度の安息日に静かな祈りを捧げる為ではなく、昨晚にこの地を訪れたばかりだという旅の一座の公演を見る為なのだから。

「お芝居なんて久々ねえ……」

「まったくの時間の無駄だ、こんな夜にランプの油すら勿体ない!!」

「……そう思うんなら、その無駄なもんを見に、何でわざわざ足を運んだりするんだかねえ」

「ロビン、思っても言わない」

「へいへい、でも大丈夫だと思いますよ。」

連中ざわついてるし、こっちでもこんだけガチャガチャやってりゃあ、この程度の囁き声なんて万に一つも届きませんって」

「かもしれないけど、念の為に気を付けて」

「はいよー」

「でも良かったです、楽しみにして下さっている方もいるみたいで」
「……うん、そうだね」

公演を純粋に楽しみに来てくれたらしい女性も、不可解な八つ当たりをする男性も、その正体はそれぞれの『役割』を演じているグルに過ぎない。

その事実を知っている立香からすれば、純粹に頑張ってくれているサーヴァント達や、喜んでいるマシユに対する申し訳なさは半端なものではなかったし。

魔術によって普通の人々に見えているだけで、公会堂いっぱい集まっているあの人は実は……と、ちょっと気を抜けば考えてはいけないことを考えてしまいそうな自分を懸命に律し、目の前の作業に集中することで観客席側に視線をやらないようにと努め続けた。

この場に集まった人々の騒めきには、非日常を間近にした高揚だけではなく、かなりの割合で困惑が込められているだろう。

彼らが想定していた『演劇』、彼らの中にある『常識』には、舞台上にある空間の大部分を使用しながら張られた白幕や、自分達が運び込んでいる謎の板切れの山が登場する余地なんて、欠片も存在していない筈だから。

「……天井の両端から、縄で吊るして張ってあるのか。

よくもまあ手間をかけたものだ」

「連中は一体何を考えているんだろう、あれじゃあ演技が出来る場所なんてどこに

も無いじゃないの」

驚きや呆れ、期待や落胆。

方向性の違う様々な言葉や感情が入り乱れる公会堂、今は即席の観客席となっている場所に、待ち望んでいた顔がようやく表れたことを、マシユの上擦った声が教えてくれた。

「あっ……センパイ、アビーさんとティテュバさんがいらっしやいました！」

その言葉を受けて思わず、なるべく見ないようにしていた客席側へと顔を向けた立香の目に、ティテュバに優しく手を引かれながら現れた、『来られた』という歓びと『来てしまった』という僅かな背徳感に頬を高揚させるアビゲイルの姿が映った。

慣れ親しんだ公会堂が空気も様相も一変していること、楽しみにしていた公演がもう間もなく始まるのだということに、本当に楽しそうにしていたアビゲイルだっ

たけれど、その笑顔は不意に曇ってしまう。

周囲の人達が垣間見せた、『黒人の召使風情が』というあからさまな空気と表情、僅かに眩かれただけの筈なのに異様に大きく聞こえた言葉を受けて怯んだティテュバは、お嬢様をご案内しただけでございます、身の程は心得ておりますと四方に頭を下げ、悲しげに俯くアビゲイルの手を最後にギュッと握ると、早足でその場を後にした。

いくらアビゲイルが、主従としてではなく個人としてティテュバを信頼していうとも、両親亡き後に仕えてくれた彼女を家族のように思っているとも、他の人々にとって彼女はただの召使。

それが紛れもない現実であることを、アビゲイルはよく分かったのだけれど。何とも言えない遣る瀬無さがこみ上げて、握った拳を震わせながら瞳を潤ませてしまっているアビゲイルの姿を前に、立香は決意を新たにしていた。

この地に溶け込む為、情報収集やその他の活動を行っても出来る限り自然に思われるようになる為に、真剣に公演を成功させようとしているマッシュ達には申し訳ないのだけれど。

今の立香には、『その他大勢』からの評価や好感などは、それほど重要なものではなくっていた。

表面上は生き生きと振る舞っている彼らが、実際にはただひたすらに『役割』に准じるグールでしかなく、『セイレム』という舞台上で違和感なく振る舞えるようにする為に気を配りはしても、個人としての好感や信頼を得る為に腐心する意味はあまり無いという事実に加えて。

魔神柱に異変を覚られないよう、この特異点の意図や真実を敢えて秘めることにしたリンクが、ほんの少しだけ口にくれた助言があったから。

『アビゲイルとラヴィニアを守れ、特に危ないのはラヴィニアだ。

余程上手くやらないと……周りが守るだけでなく、本人の気持ちが大きく揺らぐような何かが無い限り、まず間違いない彼女が死ぬ。

そしてそれは、そのままアビゲイルの破滅にまで繋がってしまうんだ』

変化を、前進を、望むと共に恐れてしまい、暗闇の中で立ち止まったままの少女達。

妥当かつ最善の選択だからではなく、自分の本当の想いを見失ってしまっている少女達に、恐怖を乗り越え、信じたものを貫く『勇氣』というものを見せてあげたいから。

それこそが、わざわざ仲間達を戸惑わせ、『前回』には無かった余計な手間を負ってまで、立香がああ演目を強く推した本当の理由だった。

……そして、そんな少女達の片割れは。

(……凄い。

本当に誰も私を見ない、私に気がつかない。

ウェイトリートの娘がこんな大勢の人前に現れようものなら、本当ならとくに騒がれていてもおかしくないのに。

あの『悪魔』は本物だった……この変なお面は、本当に不思議な力を持っていた

んだわ)

ラヴィニアは今、何の心変わりか、あれだけ忌避していた人混みに……旅の一座の公演が間近に迫った、公会堂の中にいた。

剥き出しの岩盤に、目と口にあたる穴を適当に開けただけとしか思えない不気味な面で、その顔と存在を隠しながら。

その『悪魔』がラヴィニアの前に姿を現したのは、まだ日も高かった頃。

店では結局売ってもらえなかった油を、『間違えて買ってしまったから引き取って貰えると嬉しい』というあからさまな体裁と、『公演を行なうからは是非見に来て』という誘いを経て、旅の一座の者だという男女から半ば押しつけられた帰り道のことだった。

それを『悪魔』だと思ったのは、違ったとしても普通の存在ではないと確信したのは、あからさまに異様な風体をしているその者を『おかしい』と思い、咄嗟に警戒したのが自分だけだったから。

町の鼻つまみ者である自分を、遠巻きにしながら嫌悪を露わにしていた者達の誰

もが、突然変な声を上げて竦み上がった自分に対して一層顔を顰めながらも、自分なんかよりもずっと異様である筈の存在に対しては、全く気付いた様子を見せなかったのだから。

ラヴィニアが咄嗟に逃げたのは、人の多い町の中心地ではなく、自宅がある森へと向かう道だった。

自分を嫌っている上に、悪魔を認識出来ずにいる連中に対して当てにならない助けを求めるよりは、何とか家まで逃げ切って効果のある術や道具を探した方が、まだ可能性があると思ったからだ。

しかし『悪魔』は、ラヴィニアが思っていたより、望んでいたよりもずっと速くて。

必死になって逃げたその身は、家が見えてくるよりも前に、周囲に人氣が全く無い森の中で追いつかれ、ついには捕らえられてしまった。

爛々と光る黄色い目と、存在そのものが違うとしか思えないような圧倒的な威圧感を前に、死を覚悟したラヴィニア。

そんな時に彼女が思い出したのは、あまりの眩さに憧れると共に劣等感を抱き、

彼女の為を思って遠ざけながらも会いたいと望むことをやめられなかった、掛け替えのない親友のことだった。

（ごめんなさい、アビゲイル。

こんなところで、こんな形で死ぬのなら、最後にちゃんと話しておけば良かった……）

ギュッと固く瞑った目尻に涙を滲ませ、強張った全身を震わせ……しかしラヴィニアを捕まえた『悪魔』は、一向にその命を刈り取ろうとする素振りを見せない。代わりに聞こえてきたのは、想像していたよりもずっと穏やかで優しい、年若い少年のような声だった。

「そう怯えるな、殺す気は無い。

むしろ俺は、お前を……お前達を、この閉ざされたセイレムから解放してやろうと思っている」

「ここではない遠いところへ、アビゲイルと共に行きたくはないか？」

死を間際にした絶望と達観の中で、自身の本心を思い知った今のラヴィニアにとって、それは正しく『悪魔の誘惑』であった。

『悪魔と表すの一言だけど、実際には色々あるんだよ。

それぞれの都合だとか、優先順位だとか、仲がいいとか悪いとか。

そして今の俺には、人間を苦しめたり墮落させたりするよりも、とある悪魔の……このセイレムに身を隠し、この地を狂気に堕とそうとしている奴の計画を台無しにしてやることの方が、遥かに重要なんだ。

そいつの計画が上手くいってしまうと、俺と俺の仲間達にとってはとんでもなくまずいことになるんでね』

『奴は本格的に動き出そうとしている、ほんの数日の間にセイレムは狂気の町と化すだろう。』

町の連中ではそれを止められないし、そもそも止めようとする事が出来ない……彼らはあくまで、この町、この世界を構成する要素でしかないから。

舞台の上で台本に抗い、既に定まった筈の運命を変えることが出来るのは、外から紛れ込んだ異邦人だけだ』

『お前も既に接触している、例の旅の一座……その動向や方針を、お前には出来る限り探ってもらいたい。』

……ああ、勿論、頼むだけで何の力も貸さないなんてことはしないよ。

このお面は、見た目こそ不気味だけれど、その辺の道端に転がる石ころが誰の気にも止まらないように、身につけた者を周囲から認識されないようにするという効果がある。

これを今回の騒動が解決するまで貸してやる、好きな時に好きなように使って構わない。

まずは今夜、町の公会堂で一座が公演を行なうから、それを使って潜り込んでき
てくれ。

そのついでに芝居を楽しんでくれればいい、特別席を用意しておこう。

……頼んだぞ、ラヴィニア。

全てが上手くいった暁には、必ず約束を守る』

家に伝わっているものよりも、遥かに強力な神秘を体感することに少なからず高揚し、忌まわしいウェイトリーの存在に気付けずにいる人々の滑稽さに、少しだけいい気味と思いつながら。

変わらない毎日にうんざりし、非日常を求め続けていた彼女のことだから、間違はなくこの場に来ている筈だと信じて、最近はどう頑張っても遠目に窺うことしか出来なかった親友の姿を探した。

思った通り、さほど時間をかけることなく、背に長く伸びた綺麗な金髪を見つけることが出来ただけだ。

（『特別席』……あいつ、確かにそう言っていたわ。

それって、まさか……………)

見つけたアビゲイルは、舞台の動きを余さず見守ることが出来そうな、特等席と言っている場所に座っていた。

その丁度隣の席が、それ以外の周りが全て埋まっていて、遅れてやってきた者が知り合いに声をかけながら席を探しているような状況で、不自然に一人分だけ空いている。

……実のところ、その席に認識阻害の魔術を施したのは悪魔ではなく、召使らしく頭を下げながらも、内心ではべーっと舌を出していたティテユバだったのだけだ。

それがラヴィニアの為に用意されたものだという事実には、これっぽっちも変わりはない。

恐る恐る、ゆっくりと、アビゲイルの隣へと腰を下ろすラヴィニア。

本当に久々に親友の横顔を間近にして、胸に込み上げてくる熱い何かを、ラヴィニアは確かに感じていた。

「……アビゲイル」

「ラヴィニア？」

思わず零れてしまった眩きは、周囲の喧騒にあっさりと紛れてしまうような、本当に些細なものだったのに。

それ以前に、悪魔から借りたお面をつけている以上は、声どころか存在そのものが隠されている筈なのに。

俯いていた顔をハッと上げ、しきりに辺りを見回し始めたアビゲイルから、顔を背け、身を縮ませ、両手で押さえたお面の奥に荒い息を閉じ込めるラヴィニア。

……しかし彼女は、決して、その場から逃げ出すことだけはしなかった。

「……そんな訳ないわよね。

もしあの子が来ていたら、私が気付く前に他の誰かが見つけて、変な騒ぎになっている筈だもの。

……いけないわアビゲイル、ラヴィニアと一緒に劇を見たかったなんて考えてはだめ。

ラヴィニアに嫌な思いをさせて、団長さん達の公演に迷惑をかけてまで我が儘を通したいと思うのは、悪い子の考えよ」

（アビゲイル……!!）

私いるわ、ちゃんとここに……あなたに会いに来たのよ!!）

心の底からの叫びは、ぎゅうつと嚙まれた口に阻まれ、敢え無く飲み込まれてしまった。

ラヴィニアはもう諦めるしかなかった、認めてしまうしかなかった。

悪魔と出会い、本当は何を企んでいるかも分からないかの者の先兵とされてしまった……悪魔の配下、真の魔女と化してしまったことは、自分にとっては不幸なことではなく、幸運以外の何ものでもなかったと。

会いたいという本心を堪えられなくなったきっかけも、実際に行動に出る為の手段も、あれが無ければ決して得ることは出来なかったのだから。

……しかし、まだ駄目だった。

声を出して彼女を呼び、手を伸ばして彼女に触れる、その為の一步を踏み出せるだけの『勇氣』がまだ足りない。

二人の少女の瞳から、大きな雫が滴り落ちる……と思われた、その時だった。

「ご招待にお応え下さった紳士淑女の皆様方、大変長らくお待たせ致しました。今宵は、我ら立香一座の特別公演にお付き合いただき、感謝の言葉もございません」

舞台袖に現れ、公会堂の巨大な空間の全てに朗と響く声で開演の挨拶を行なったのは、肌を大胆に露出した派手な装いで道行く人に声をかける様子が多くの市民に見受けられていた、男性達がすれ違いざまに思わず振り返ってしまう程に美しい女性だった。

太陽のように眩く輝くその瞳に、男も女も、大人も子供も、悲しみと悔しさに心を乱していた二人の少女も、例外なく惹き付けられる。

居合わせた全ての者の注目が集まり、ざわめきが収まった瞬間を逃さずに、ニッコリと微笑んだマタ・ハリは口上の続きを語り出した。

「我々が演じますのは、遙か太古の偉大なる黄金王をも魅せられた、緑の服を纏った少年の物語。

何人もの王が素晴らしき国を興し、神の子がお戻りになるよりも昔から伝えられてきた、最も古き物語。

これは、『勇気ある者』の物語」

「『ゼルダの伝説』……時の勇者の末裔の第一章『ムジュラの仮面』、繰り返される二日間的一幕でございます」

一度目の公演

マタ・ハリが開演の挨拶を終えるのを見計らったロビンフッドの手が、どこを伝って伸びているのかもわからない紐を引いた。

それと同時に公会堂内の灯りが一斉に消え、一瞬パニックに陥りかけた観客達は必然的に、意識と視線を唯一残されていた光源へと、舞台上に張られた巨大な白布へと集中させる。

裏側から煌々と照らされ、まるで自ら光を放っているかのようにさえ見えるそこには、灯りがある間は気付けずにいた人影が立っていた。

観客達のざわめきが収まらないのは、急に灯りを消された驚きを引きずっている

からただけではなく、その異様な『人影』に対して戸惑っているからでもある。

「……あれって。

もしかして、お人形？」

あまりの驚きを心の中で収めきれずに、思わずポロリと零してしまったアビゲイルの一言が、正しくその通り。

後頭部に垂れ下がったとんがり帽子と長い耳、手には剣を携えた影の特徴は、アビゲイルも友達も皆知っている、伝説の勇者様のものに他ならないのだけれど。

二つか三つ重ねれば全体と同じになってしまうくらいに頭が大きくて、手や足は短くて、そもそもそれ自体の大きさがアビゲイルの小さな腕に抱き込めてしまえそうなくらいで。

そんな、後の世の言葉を使用するのなら味の味のある具合にデフォルメされた輪郭の影が、持ち手らしい細く長い影の先を、白布の下側1／3程を占めている巨大な影の中に隠しながら、ゆらゆらと左右に揺れていた。

観客達の戸惑いと収まりきらないざわめきを他所に、何事もないかのように堂々としたマタ・ハリのナレーションが、公会堂内の暗闇に響く。

『時のオカリナ』の物語にて、未来の世界で魔王ガノンドロフを倒し、元の時代へと帰ってきた『時の勇者』リンクは、ゼルダ姫に別れを告げて新たな旅に出ました。

時をも越えてしまう大変な旅と戦いの間、ずっと傍にいてくれた大切な友達……妖精ナビィを捜す為に」

その言葉と共に、少年の小柄な影の傍らに、もっと小さな影が現れた。

球のような丸い体に、虫のような四枚の羽を生やし、大きく動かされる細長い影に合わせて少年の周りをひらひらと動き回っていたそれは、不意に彼のもとを離れ、何処とも知れず飛んでいってしまった。

微動だにしくなってしまった影は、ずっと一緒だと信じていた友達が急にいなくなってしまう少年が、呆然と立ち尽くしてしまっているさまを思わせる。

少年はどれだけ驚き、そして寂しく悲しかったことか。

他人事とは思えなかったアビゲイルは、自身の胸に鋭い痛みが走ったのを感じた。しかしそれは、ほんの一瞬のことだった。

彩りは白と黒の二色のみ、役者は表情や仕草の変化が人と比べると圧倒的に乏しい人形という、発想と工夫に驚かされはしたもの、慣れてしまえば子供騙しの単調なもののように思えてしまう舞台に突如現れた驚きの変化が、アビゲイルの中にあつた憂いを瞬く間に吹き飛ばしてしまったから。

少年の影と、彼の傍らに現れた馬の影を覆いつくそうとするかのような勢いで、瞬く間に乱立した巨木の影。

瞬きの間に、殺風景だった白黒の舞台は、深い森の奥へと変わってしまった。

（凄い……団長さん達ったら、いつの間にあんな仕掛けを用意していたのかしら!!）

次は何を見せてくれるのか、どうやって驚かせてくれるのか。

楽しみで仕方がないアビゲイルは、まだ冒頭もいいところだというのに、すっかり舞台に魅せられている。

そんなアビゲイルの表情をこっそりと盗み見た立香は、自身の思惑が上手くいった喜びに拳を握り、噛み締めきれなかったその口からは僅かな声が零れ出た。

（人によっては子供向けなんて思うかもしれないし、実際幼稚園とか小学校の発表会なんかでよくやってる奴だけど。

それそのものは立派な表現の一環なんだから、こうやって工夫しながらガチでやってみれば、それなりのものが出来るんだ）

立香が最初に考えたのは、彼自身も幼いころに学校の授業の一環で制作・披露したことがある、『ペープサート』という技法だった。

絵を描いた紙、もしくは切り貼り折りして作った紙人形に持ち手をつけ、揺らしたり回したり、絵柄を変えた表裏をひっくり返したりしながら演じる、いわゆる『紙人形劇』のことである。

これならば、人の役者が衣装や小物を変えて無理に演じ分けるよりも、より本格的に登場人物を増やすことが出来る。

そこまで考えたところで、上演まで一日も無いという猶予の無さが、思考の進みに歯止めをかけた。

たとえ十分な時間があつたとしても、舞台で観客を本格的に魅せられるような人形を作るのは、仕事や趣味で常日頃から親しんでいるような者でもなければ難しい。なので立香は、ペープサートはあくまで手法に留め、表現としては別のものを用いることにした。

それもまた、幼稚園や小学校でお馴染みの『影画』である。

影として映し出すことが前提ならば、人形は輪郭さえあればいい。

生憎と紙は貴重品だったので、板切れや何か使えそうなものをかき集め、色も塗っていないければ顔も作っていないガラクタ同然の人形を、それでも形だけは何とかなったものを、必要な分だけ用意することが出来た。

更に言えばこの技法なら、背景や演出に特別な効果を加えることも出来る。

今行なわれた、巨大な木々の影を一瞬で映してみせたのもそのひとつ。

あれはそのサイズの書き割りをわざわざ用意したのではなく、それ自体はもっと小さなものを光源に近い位置に差し込んだことで、スクリーンとの間に存在していた距離が影を大きくさせたのだ。

そして今、白布を張った即席のスクリーンには、登場人物ではなく背景の影を動かすことで、深い森の中を馬に乗った少年が進むシーンが演出されている。

しかし、現実的によくよく考えてみれば、いくら影画が工夫次第で様々な表現が可能で技法だとしても、規模が小さな立香一座で、役者を兼ねながらそういうところにも余さず気を配るのは流石に難しい筈。

そんな疑問の答えは、スクリーンの下側を埋める大きな影の正体、人形の繰り手が潜む為のスペースとして設置された板張りの裏に身を隠しながら、人形を操ることに集中している団員達の背後で、こちらはこちらで背景の演出とその他の雑事に勤しんでいる、愛らしい獣のような姿をした精霊達であった。

立香はそれを、『物語を紡ぐ』という一点においては他に並ぶ者の居ない新顔のキャスターが紡いだキャラクター達であり、戦闘は無理でも劇の裏方くらいならば十分可能だと餞別に渡してくれたものだとして説明して、皆はそれで納得したのだけ

ど。

唯一サンソンだけは、精霊達の主があゝの死に対して常に怯えている美女ではなく、改めてサーヴァント契約を結んだ早々に頼りにされまくって、『特別ボーナス請求させて下さあゝい！』と泣き言を上げていた女王であることを知っていた。

兎にも角にも、『使えるものは何であろうとことん使う』という宣言の通り、手段も人手も出来る限りのことと物を費やしながら、どうにか上演まで漕ぎ着けることが出来た。

サンソン曰く、舞台の演目が変わったのは、方針の最終決定権を持っている自分がこちら側になった今回が初めてのことらしい。

この分岐が何を変えるのか、何が変わるのかは、まだ分からない。

今はただ、この劇を少しでも良いものにするだけで考えようと、立香は改めて意識を切り替えた。

「愛馬エポナと共に、山を越え、川を渡り……ある時勇者リンクは、何百何千年の時を生きてきたとも知れない、巨木の森の中を進んでいました。

そんなリンクの様子を、少し離れたところの物陰から窺う者達があります。

それは、リンクの友達であるナビィと同じ、小さな丸い体に羽を持った二体の妖精でした」

不穏な気配を感じたのか、エポナの歩みを止めさせ、辺りの様子を窺いだしたりリンク。

二体の妖精はそんな彼の視線が逸れた隙をつき、無防備だったエポナの鼻面に、いきなりの体当たりを食らわせた。

嘶きと共に前脚を跳ね上げさせた愛馬の背から、少年の影が敢え無く転がり落ちる。

地面に落ちたまま動かなくなってしまったリンクと、その周囲を飛ぶ妖精達の下に、不気味な仮面を身につけた何者かが甲高い笑い声を上げながら現れた。

「『ヒヒッ、おまえたち上手くやったな！

なにかいいモノ持ってそうか？』」

「彼の名はスタルキッド、悪戯好きな森の小鬼です。

妖精達はそんな彼の友達で、チャットとトレイルといいました。

彼らは、この森を通りかかった者を襲っては、持ち物の中でも特に大切そうなものを奪って困らせるといふ、性質の悪い悪戯を繰り返していたのです」

ナレーターを務めるマタ・ハリの少々呆れた声色にも構うことなく、リンクの荷

物を探ったスタルキッドは、特に大切にしまい込まれていたものを見つけ出した。期待以上のお宝を見つけて上機嫌な笑い声をあげるスタルキッドに、妖精の片割れが恐る恐る声をかける。

『き、キレイなおカリナ……ねえスタルキッド、ボクにもさわらせて』

『トレイル、お前はダメ、危ない！』

落としてケガでもしたらどうする！』

『で、でもねえさん、ボクもさわりたい……』

気が弱いながらも一生懸命に主張する弟と、少々過保護なことを言う姉のチャット、そんな姉弟のやり取りにも構わず戦利品を手には笑い続けるスタルキッド。

それぞれ夢中になっていた彼らは、自分達のせいで落馬した少年が目覚まし、呻き声をあげながら身を起こしたことにすぐには気がつかなかった。

ほんの僅かな時間とはいえ気を失ってしまったっていたリンクは、目が覚めるや否や飛び込んできた光景に目を剥いた。

スタルキッドが彼から奪ったのは、ゼルダ姫から別れ際に託された、時をも操る力を持ったハイラル王国の秘宝。

かつての戦いでも幾度となく助けられた『時のオカリナ』が、怪しい者達の手中にあるという非常事態が起こってしまったている。

鋭い目つきで見据えてくるリンクの存在に数秒遅れて気付き、竦み上がる妖精達と、オカリナを慌てて後ろ手に隠すスタルキッド。

ここで大人しく返していたのならば、その後の騒動の全ては起こらなかったのかもしれないけれど。

……生憎と、そんなことにはならなかった。

スタルキッドはオカリナを返すどころか、先程いきなり驚かされた衝撃を未だ引き摺ってしまっていたエポナの背に一息で飛び乗り、本格的にパニックに陥った彼女ごと一目散に走り出してしまったのだから。

咄嗟にしがみついたリンクを半ば引き摺り、振り回しながら走る彼らの背後で、森の木々の影が凄まじい勢いで通り過ぎていく。

映像を利用した演出によって作り出された効果は、実際に馬が全力で駆けている

かのようなスピード感と迫力を、人が普通に演じるのでは到底出せないものを見事に作り出していた。

アクション映画を見ているような心地で息を呑んでいた、アビゲイルとラヴィニアの前で、ついに振り落とされてしまったリンクがの体が痛々しく地を転がる。

しかし彼は、大切な愛馬と姫から託されたオカリナを取り戻す為、ほんの一瞬たりとも止まることなく走り出し、スタルキッド達を追って深い森の更に奥深くへと入り込み……自身の体よりもずっと大きな木のうろに飛び込んだ次の瞬間、真下に広がっていた穴の底へと真っ逆さまに落ちていった。

「『なんだあのバカ馬は、ぜんぜん言うことを聞かないなあ。

あんなの乗ってても仕方がないから捨てといてやったよ、ヒヒッ。

……なんだ、その顔は。

せっかく遊んでやろうと思ったのに……今のオイラに勝てると思っているのか、バカなやつめ！』」

誇り高くて、人見知りが激しくて、自分が認めた者以外を乗せることを嫌がるエポナを、無理に乗り回しておきながら。

スタルキッドの言い草に心底腹を立て、その怒りを躊躇うことなく表したリンクは、しかし次の瞬間、異様な力の存在を感じて背筋を竦み上がった。

スタルキッドは悪気はなくとも性質が悪く、本人はあくまで遊びのつもりで、森に迷い込んだ人間を更に迷わせて翻弄するなどの、された方からすれば冗談になら

ないようなことをするけれど。

こんなおぞましい力を揮えるような、そんな強大で恐ろしい存在では、到底なかった筈なのに。

巨大な両目を光らせる、不気味な仮面をカタカタと鳴らしながら、スタルキッドはその『力』をリンクへと向けて容赦なく放った。

それはもしかしたら、実際にはほんの一瞬のことだったのかもしれない。

永遠にも感じられたかつて無い程の恐怖の時間、『悪夢』と称するに相応しいような光景を潜り抜けたリンクは、呆然としながら水鏡を覗き込み、その中に……慣れ親しんだ自分のものとは似ても似つかない、植物の根や幹のような体を持った『デクナッツ』という種族の姿を見た。

「『さっきのことは謝る、だから一緒に連れて行って！

キミだって、スタルキッドのことは知りたい筈。

わたし、アイツの行きそうな場所に、心当たりがある。

お願い……弟、トレイル、一人にさせておくの心配』」

呪いによって変化させられた体で、尚も諦めずにスタルキッドを追いかけるリンクを足止めしようとした結果、友である筈の存在を顧みようとしなかったスタルキッドに置いて行かれてしまった、妖精姉弟の姉チャット。

こんな目に遭うきっかけを作った、当の本人の筈なのに。

その勝手な言い草に対して自分は怒ってもいい筈、提案なんか跳ね除けてもいい

筈だと、リンクは思っていたのだけれど。

勢いで押し切られ、呆れて溜め息をつきながらも、最終的にリンクは彼女の同行を受け入れた。

居場所の心当たりとやらに、案内をさせる為ではなく。

スタルキッドと共に性質の悪い悪戯をしたとしても、弟の身を一心に案じる優しさを持った……親友ナビィによく似た妖精を嫌いになること、拒み切ることは難しかったから。

動かし方、扱い方の段階からよく分からないデクナツツの体を何とか駆使し、チャットに案内されながらスタルキッドを追ってひたすらに進んだリンクは、世界そのものが変わってしまったかのような異様な光景と感覚を経て、明らかな人工の施設内へと辿り着いた。

石造りの床には苔が、壁には蔦が大量に這っていて、造られてから相当な時間が経っている場所であることが窺える。

水路を流れる水が回す巨大な水車、その真横を通るスロープを登り切った先に見える大扉。

それを何とか開けようと、元から小柄だったのにそれ以上に小さくなってしまった体で手と爪先を伸ばそうとした、その時だった。

「『大変な目にありましたねえ……』」

胡散臭いこと極まりない声を突如背後からかけられて、チャットと共に軽く跳び上がってしまったのは。

『幸せのお面屋』を名乗ったそいつは、正しくお面を張り付けたかのような笑みを浮かべる、仕草から言動まで何もかもが胡散臭い男だった。

大切なお面を盗まれて困っていたところにリンクの姿を見かけ、ここまで後をつ

けてきたという言い分からして既におかしい。

今の今までそんな気配は無かったし……ここまでの道のりは、一介の行商人が思いつきで付いて来られるようなものでは到底なかったのだから。

しかし、男が次に口にした言葉は、途方に暮れてしまっていた今のリンクにとつては、紛れもない光明だった。

「『実はワタクシ、アナタを元の姿に戻す方法を知っているのです。

アナタが盗まれた大切なもの、それさえあれば元の姿に戻してあげますよ。

その代わり……ついでにあの小鬼から、ワタクシの大切な仮面を取り返してもらえませんか？』」

お面屋が現れて以来、チャットの様子があからさまにおかしくなったことには、一応気付いていたのだけれど。

敢えて何も言わないまま、リンクはお面屋との約束を取り付けた。

大扉を開けた先に広がっていたのは、昇り始めたばかりの朝日に照らされる町並みだった。

自分達が通り抜けてきた場所が、その町の中央に位置する巨大な時計塔の機関部であったという事実を噛みしめる間もなく、リンクとチャットは大急ぎで駆け出した。

不気味なお面屋から、この地に滞在が可能なのはたったの三日間だという、見知

らぬ地を慣れない姿で訪れる羽目になった身には少々厳しい時間制限をかけられてしまったからである。

チャットの言う心当たりとは、スタルキッドの居場所や行き先を正確に把握しているという訳ではなく、悪戯者のスタルキッドの頭が上がない数少ない存在、チャットやトレイルの上位存在にあたる『大妖精』の下を訪ねて情報を得るということだった。

しかし、そう提案をしたチャット自身が、町のどこかにはある筈だという大妖精の泉の正確な場所を知らなくて。

ならばと情報収集をしようとしたのだけれど、生憎と今のリンクはデクナッツ。人間以外の様々な種族も含めて、各地から大勢の人が集まってくる恒例のカーニバルの開催を間近に控えているのと、デクナッツという種族の特徴で商人として各地を訪れる者が多いという理由から、異種族だからと変に怪しまれるような事態には幸いにもならなかったのだけれど。

むしろ、親の仕事についてきたら逸れてしまった迷子のデクナッツと思われる、保護しようとしてくれた親切な人達の下から逃げ出す羽目になり。

そうして、限られた三日間の貴重な一日目は、慣れない町の中を慣れない体で、ひたすら走り回って終わってしまったのだった。

しかしそれは、全くの無駄足とはならなかった。

今居るこの町、『クロックタウン』の全体像と道筋に関して、ある程度把握出来たのと。

スタルキッドに……その人に対してだけは頭が上がりなかった筈、性質の悪い悪戯をするのが精々の小鬼でしかなかった筈の者によって粉々に砕かれてしまった、大妖精の一部を見つけることが出来たから。

二日目……流石にまずいと、今のスタルキッドは何かがおかしいと、本格的に危機感を覚え始めたチャットと共に、リンクは昨日に続いてクロックタウンの町並みを駆けていた。

しかしそれは、昨日のような当てもなく逃げ惑うものではなく、確かな目的を見据えてのもの。

その場で漂うことしか出来ない程に、小さく弱々しい姿と化してしまっていた大妖精。

彼女を連れて、町の北側に位置する郊外の泉へと急いだリンクとチャットは、飛び散ってしまった欠片の全てを揃えて無事に元の姿と力を取り戻すことが出来た大妖精から、スタルキッドを捜す為の助言を貰った。

町の外の小高い丘に建っている天文観測所、そこに居る者ならばスタルキッドの居場所を知っている筈、と。

すぐさま向かおうとしたのだけれど、町の四方に配置された門番は皆善良かつ真面目な人達で、人間だろうが異種族だろうが関係なく、身を守るすべを持たない子供を一人で町の外に出す訳にはいかないと、断固として立ちをはだかられてしまった。そんな状況を打破するきっかけとなったのは、町の子供達だった。

天文観測所をアジトにして遊んでいる彼らは、門を使わない秘密の通路の存在を知っていたのだ。

町中を使い、ほぼ丸一日を費やして盛大に行われた鬼ごっことかくれんぼの末に、満場一致でリンクのことを認めた彼らは、地下通路を通る為の暗号を快く教えてくれた。

これでスタルキッドを捜せる、ぐずぐずしないで早く行こうと急かすチャットの声は、途中から認識出来なかった。

大切な愛馬の行方は未だ知れず、この体と状況では捜しにも行けず。

オカリナだって、あのスタルキッドのことだから、既に興味を無くして捨ててしまっているもおかしくはない。

今の今まで溜まり続けていた心労に、二日間に渡りほぼ走りっぱなしだった疲労

までもが重なった体が、ついに限界を訴えた。

クロックタウンでの二日目は、ゆっくりと暗転する意識と視界の中で、意味はわからなくても酷く焦っていることだけは伝わるチャットの声と共に終わりを迎えたのだった。

ゆっくりと開かれた視界と、なかなかハッキリしてくれない意識の中で、三日目

の太陽が既に大分傾いてしまっていることに気付いたリンクは、次の瞬間に大慌てで飛び起きた。

戸惑いながら、まだ時間があると、もう少し休んでもいいのではないかと言ってくれるチャットの気持ちは、それ自体は本当にありがたかったのだけれど。

万が一にでも間に合わなければ大変なことになると、この身が元に戻らなくなる程度のことで済まなくなると。

幼いながらも勇者として、激戦を越えてきた経験と勘が、うるさい程に告げていた。

水路も兼ねていた地下通路を走り抜けて辿り着いた先、天体観測所には、そのの主らしき老人がいて、空も大地もどこまでも見渡すことが出来そうな巨大な望遠鏡が据えられていた。

老人に頼んで望遠鏡を使わせてもらい、クロックタウンを隅から隅まで見渡したリンクは、ついに見つけ出した。

町の中心にある巨大な時計塔、自分達が最初に現れたその場所の頂上で、天を見上げ、何やら招こうとしているかのような異様な動きを繰り返すスタルキッドを。

すぐさまここから駆け出し、彼の下へと向かおうとしたその身と思考は、スタルキッドが見上げる空へと向けてふと望遠鏡を動かし、その先にあるものを見つけたことで凍り付いた。

いくら必死だったとはいえ、目の前の問題を片付けることに夢中になってたとはいえ、あんなものが頭上に迫っていることに、どうして今の今まで気付けなかったのか。

クロックタウンを丸ごと呑み込み、押し潰すことが出来てしまいそうな巨大な岩の塊が……本来ならば遥か空の上にある筈の月が、怒りの形相に歪んだ人の顔にも見える表層を露わにしながら、手を伸ばせば届きそうだと錯覚しそうな程に大きく、近くなっていた。

気のせいだと、あり得ないと、そんな願望を抱く余地も無いまま、リンクは確信を抱いてしまった。

あれは間違いなく落ちてくると……そうなった暁には、真下にあるクロックタウンだけでなく、町を中心とした一帯が消滅してしまうと。

それを為そうとしているのは、スタルキッドなのだ。

一年の間に一回、カーニバル前日の夜のみを開くという扉を潜り、リンクとチャットはスタルキッドの下へと急いだ。

どんな理由、どんな思惑があろうとも、もはや悪戯では決して済まされないことを、彼は行なおうとしてしまっている。

何があっても止めなければと、そんな一心で辿り着いた時計塔の最上部。

見上げた夜空、毎夜見慣れた黒ではなく毒々しい赤で染まるそれを、埋め尽くさんばかりに迫る月の真下。

迫る終焉を、もはや気のせいだなんて思い込めない圧力と地鳴りの中で……スタルキッドは、捨ててはいなかったらしい時のオカリナを片手で遊びながら、リンクだけでなく友達である筈のチャットにまで、おぞましい仮面越しの冷たい眼差しをぶつける。

そんな彼の背後から、スタルキッドのもう一体の友達、妖精姉弟の弟トレイルが飛び出した。

「『ねえさん……っ!!』」

「『トレイル……良かった、無事だった。』」

スタルキッド、もういい加減にしないか!!

その仮面を持ち主に返せ、それを手に入れてからお前はおかしくなった!!

おい、スタルキッド、聞いているのか!?!」

怒っているからだけでなく、心配しているからでもあるチャットの言葉に、スタルキッドは一切の反応を示さない。

代わりに声を上げたのは、おかしくなってしまったスタルキッドとこの状況が怖くてたまらない筈なのに、精一杯の勇気を振り絞ったトレイルだった。

『沼、山、海、谷にいる四人の人達……早く、ここに連れてきて!!』

『よけいなこと言うな、バカ妖精!!』

『ああっ、弟に何てことを!!』

スタルキッド、貴様それでも友達か!!』

それまで、何を言われても何も返そうとしなかったスタルキッドがいきなり激昂し、振り上げたその手のひらが、トレイルの小さな体を張り飛ばした。

大切な弟を痛めつけられて激昂し、それでも友情の存在を訴えたチャットにとって、スタルキッドは本当に大切な友達だったのだろうけれど。

「『……まあいいさ。」

いまさらアイツらが来ても、オイラに敵うわけないさ……ヒヒッ』

残念ながら、今のスタルキッドにはそうではなかったらしい。

リンクも、チャットもトレイルも、誰一人として顧みようとしないまま、頭上に迫る月を見上げるスタルキッド。

その体……否、仮面から、リンクを呪いでデクナッツにした時のものと同じ、禍々しい魔力が迸った。

「『止められるものなら、止めてみる!!』」

上空から降り注ぐ圧力が更に増し、地が揺れる轟音が激しくなった。

仮面の魔力に呼び寄せられていた月が、ついに自ら落下を始めてしまったのだ。猶予はもはや、ほんの数分すらも残されてはいなかった。

もうお終いだと、今更出来ることは何も無いと……羽ばたく気力すらも失いかけ

てしまっていたチャットの隣で、リンクはまだ諦めていなかった。

この三日間の奮闘の中で使い方を覚えた、デクナッツという種族が持つ能力のひとつを、魔力を消費して作り出す泡を、月を招くことに集中しているスタルキッドの無防備な背中へと向けて吹き出す。

油断していたところに想定外の衝撃を食らったスタルキッドは、その手で玩んでいたものを、時のオカリナを取り落としてしまった。

すかさず飛びついたリンクの手の中へと無事に収まった、ようやく取り戻すことが出来た、ゼルダ姫との大切な思い出の品。

その瞬間、リンクの脳裏には、ゼルダ姫が別れ際に奏でくれた旋律が蘇っていた。

『時の勇者』と称される彼の力を、真の意味で発揮する為の曲を。

「『何を思い出に耽っている!!

しっかりしろ、この状況でオカリナなんて取り戻したって何の役にも立たない!!

ああ、神様、時の女神様……誰でもいい、お願いだから時間を止めて!!」

チャットの叫びは、追い詰められた絶望の中で思わず口走っただけのもので。

時が止まるなんてことが本当に起こるだなんて、実際にはこれっぽちも思っていないかったのだろうけれど。

その言葉は間違いなく、どうすればこの状況を打破出来るか、掴み損ねたものを取り戻せるかの手掛かりとなった。

デクナッツの体では、オカリナを構え、吹くことは出来ない……だけど。

オカリナを取り戻し、旋律を思い出した今の自分ならば絶対に奏でられる筈だという確信が、デクナッツという種族が固有に所持しているラップとなって展開した。色々な理由で言葉を失ってしまったているチャットには構わず、楽器と音色は違えども慣れた様子で奏でた旋律が、終末を迎えた世界に響き渡る。

視界どころか、世界そのものが瞬く間に白く転じ、何処まで続いているのかもしれないその空間を、果てしなく落ちていくような不思議で不安定な感覚を経た先で。リンクとチャットは、覚えのある光景の中の、覚えのある場所に……まだ町に人がいて、賑やかだった頃のクロックタウンに、自分達がこの地を訪れた三日前の朝

に降り立っていた。

時を遡るといふ、妖精の身でさえ到底信じられないような奇跡の体験に呆然としながらも、懸命に己を取り戻したチャットは、『オカリナを取り戻した暁には元の姿に戻る方法を教える』と言っていたお面屋のことを思い出した。

急いで会いに行ったお面屋は、リンクがオカリナを取り戻していることを知る

と、彼がスタルキッドからかけられた呪いを解く方法を約束通り教えてくれた。

何でも、リンクはただ単に姿を変える呪いをかけられたのではなく、無念の死を迎えたデクナッツの魂を取り憑かされてしまったのだそう。

お面屋から教えられるままに奏でた『いやしの歌』は、死んでも死にきれない未練と哀しみに囚われていたデクナッツの魂を癒し、残された魔力は仮面となって零れ落ちて。

足元に転がったそれを思わず目線で追いかけたリンクは、人の足がそこにあることに気づき、慌てて全身を見回した。

元通りの、見慣れたハイリア人の姿を無事に取り戻したことをようやく認識出来たりリンクは、大きく肩を落としながら心からの安堵の息を吐き出した。

この三日間で、既に随分とリンクに絆されていたチャットは、そのことを純粋に喜んでくれたのだけ。

残念ながら、安堵と喜びの時間はそう長くは続かなかった。

自分はちゃんと約束を果たしたのだから、あなた達も……と言って、例の仮面を求めて手を差し出してきたお面屋に、二人揃って固まってしまったから。

「『何てことをしてくれたんだ!!

このままあの仮面を野放しにしていたら、大変なことになる!!』」

笑顔を豹変させながら詰め寄ってきたお面屋に対して、約束をすっぱかしてしまつて申し訳ないと思う気持ちは確かに、多少はあったのだけれど。

これで終わらせてしまわない為、希望と可能性を繋ぐ為に、戻ってくることに必死だったあの状況では無理もないだろうと、弁解をしたのが本音であった。しかしそんな不満は、半ば恐慌状態に陥ってしまったお面屋が話を進めることに、少しずつ萎んでいつてしまった。

彼が口にした『仮面』の真実は、正しくとんでもないものだったのだから。

『ムジュラの仮面』とは、かぶった者に邪悪な魔力を与える呪いの仮面。

それによって引き起こされる災いを恐れ、遙か太古に封印されたと伝えられている、恐ろしい伝説の仮面。

スタルキッドが、ほんの悪戯のつもりでお面屋から盗み、軽い気持ちで身につけてしまったあれがその『ムジュラの仮面』だと、手に取った瞬間のおぞましさを忘れられないお面屋は確信していた。

そしてリンクとチャットは、彼のそれを杞憂だと、考えすぎだと笑うことは出来なかった。

ムジュラの仮面が呼び寄せた『災い』……世界が終焉を迎えかけた恐ろしい光景を、伝説が事実であったことを、彼らはその目で見てきたのだから。

どうかムジュラの仮面を取り戻してほしいと、あなたならば必ず出来ると。

必死に頼み込んでくるお面屋に、リンクはすぐさま頷いた。

例え、誰に何も言われなかったとしても、自分自身の意志で動くつもりでいた。

お面屋の言う通り……大人の体が、魔王を倒した神剣マスターソードが無いとしても。

『時の勇者』であることだけは決して変わらない自分になれば、それが出来る筈だ
と思ったから。

「こうして、『時の勇者』リンクの新たな戦いが始まりました。

この後、彼と妖精チャットは妖精トレイルの助言を思い出し、クロックタウンの四方に存在する、『沼』『山』『海』『谷』での冒険を繰り広げていくことになります。

……その物語は、またいずれ。

今宵の公演は、ここまでとさせて頂きます。

お集まりの皆様、本日はどうもありがとうございました」

今度は一体、どんな仕掛けを使ったのか……一斉に消えた時と同じように、一斉に灯って公会堂内を照らし出した灯りの中で。

マタ・ハリが最後の挨拶を行ない、白布の裏で影を操っていた団員達が、表に出てきて礼をしても。

最初に始めた誰かに続いた観客一同の拍手が公会堂内を埋め尽くしても、アビゲイルはまだ、現実へと戻ってくる事が出来ずにいた。

それ程までに素晴らしかった、正しく非日常の大冒険だった。

呆然と開いた口が塞がらないまま、瞳だけがキラキラと輝いているアビゲイルの様子に気づいた立香が、不意に両手を上げて人々の注目を集めながら声を張り上げた。

『時の勇者』の冒険、『ムジュラの仮面』の物語は、まだ始まったばかり。

次の公演が叶うのならば、我々はまた、彼の話を紡がせていただく所存です。

ご期待とご声援を、皆様どうぞよろしくお願いいたします」

その言葉に続いた盛大な拍手に、今度はアビゲイルも加わった。

自分が手を叩く音が、他の全員のそれを上回ればいいと、力と心を込めて懸命に打ち鳴らした。

彼女は気付いていなかったけれど……彼女の傍らには、柄ではないと躊躇いながらも、今の自分は気付かれないのだからと開き直って、お面の下の頬に僅かな赤みを差しながら、たどたどしく拍手を打つ親友の姿だってあった。

一回目の公演が大好評だったおかげで、二回目の公演の開催がこの日のうちに決定し、歓喜と興奮のあまりに眠れない夜を過ごすこととなるアビゲイル。

『狂気』の日々は、今はまだ遠いところにあった。

実際に『ムジユラの仮面』の冒頭をプレイしながらの執筆でした。

以下、今回の公演における配役です。

時の勇者リンク

台詞、特定の配役に関しては無し。

マタ・ハリのナレーションや、周囲にいる他の人物の言動や反応によって描写が行われ、人形を動かすのはその都度、手の空いた者が順番で努めていた。

主人公に関しては、観客の感情移入や想像を促す為にも、敢えて詳細なキャラ付けは避けた方がいいという立香の考えと、実際に当人を知っている為に演技がし辛

いという団員達の都合が上手く噛み合ったのが理由。

妖精チャット

哪吒が担当。

本来のチャットはちよつときつめなツンデレなのだけれど、その性格や台詞の演技が哪吒にとっては、劇の出来に支障が出そうなレベルで難しかったので。

あまり無理をせず哪吒自身の素に寄せた結果、原典に比べて大分、素直に優しく真面目なチャットになった。

妖精トレイル

マッシュが担当。

普段は気弱だけれど、いざという時に声を上げられる確かな気概を持っているというイメージにピッタリだった為、予定されていたナレーターの役割をマタ・ハリと交代した。

もの凄く頑張った。

スタルキッド

ロビンフッドが担当。

元の声を忘れそうになる程に見事な声色で、呪いの仮面に操られた性質の悪い悪戯坊主、それも人間ではないという難しい役柄をこなしてみせた。

ちなみに、エポナ（馬）の鳴き真似を担当したのも彼で、流石の器用さには全員が改めて脱帽した。

お面屋

サンソンが担当。

かなり強烈なキャラクターなのでどう演じたものかと困っていたところ、『普段の振る舞いはマリーを相手に感極まっている感じ、豹変した時はそんな幸せ空間にいきなり割り込んできたアマデウスに対する第一声のような感じで』と言われて『解せぬ』となった。

大成功だった。

背景の切り替え、その他効果などの演出

メディア（キルケー）が精霊達を指揮。

人を騙し、惑わすことを得意とする魔女、しかも大魔女としての相応のプライドを持ち得ている身なだけあって、本職の映画監督もびっくりのセンスと拘りでもってこなしてみせた。

熱が入りすぎていたのを自覚して、後で少し恥ずかしくなったのだけれど、皆から口々に褒められて感心されたのが嬉しくて、次があつたらまた頑張ってみようと考えてる（チョロい）。

その他、町の人々など

各自で少しずつ担当。

人形劇がどんな感じのものなのかは、神トラ2の壁画をイメージしていただければと思います。

あの絵柄、味がある上に個々の特徴に関してはこちらと押さえていて、何気に好きなんですよね。

魔女狩り将軍

公演を心から楽しんだことによるアビゲイルの高揚は、残念ながら、たった一晩しか持たなかった。

アビゲイルを送ってすぐに公会堂を後にしたティテュバが、得体の知れない呪具を作ったという嫌疑をかけられて連行されてしまったという事実が、彼女の姿が窺えない朝食の席で明らかになってしまったからだ。

アビゲイルがそれを知ることになる時間が『前回』と比べてずれたのは、アビゲイルが折角楽しい思いをしているところに水を差すまいと気を使った、ティテュバことシバの女王が、公会堂の賑わいから離れたところで密かに捕まるようにと意図

したから。

そして、彼女がこのタイミングで捕らえられることを知っていた立香とサンソンが、黙ってそれを見過ごしたからである。

カーター家の召使ティテュバという縛りから解放され、キャスター・シバの女王としての自意識を取り戻している今の彼女ならば、『役柄』のみを殺して密かに逃げることは十分に可能だし。

表舞台からは早々に退場して、坂道を転がり落ちるように悪化することが分かり切っている今後の情勢に先駆けて、いざという時の為の備えを始めておいてもらいたいという思惑だった。

しかし、そういった後々のことを意識した上での考えは、これから起こることや、今起こっていることの裏事情を知る由もない仲間達には、到底明かすことの出来ないもので。

あからさまな理不尽を目の当たりにしたり、身近な人を傷つけられたりして黙ってはられない。

そんな『いつも通り』の自分を装うのならば、ティテュバの突然の逮捕に対して、

何も行動を起こさない訳にはいかない。

『前回』はティテュバのとの面会は結局叶わず、呪具とやらも見られず、演目を制限された上にメディアを人質に取られて、終いには公演の最中に刑を執行されてしまった。

初戦は正に完敗、踏んだり蹴ったりだったことを思い出し、演目の自由とメディアの身柄だけは何とか守ろうと若干及び腰な決意を固めながら、姿も気配も窺えない魔神柱以上に最悪の敵だった、『魔女狩り将軍』ことマシユー・ホプキンスとの面会に挑んだ立香は。

「立香よ、正式な興行の許可を与える。

芝居をせよ、今夜だ。

村人の心を動かす、本物の芝居をせよ。

貴様達が真正正銘の芝居職人であると、そう証明してみせるのだ。

もし、観客の心を動かせぬようなら……貴様達は身分を偽る賊の一昧として捕らえ、念入りに調べ上げさせてもらうことになる」

「……はい、わかりました」

「ならば行け、胡散臭い流れ者の分際でいつまでも居座るでない。

私は忙しいのだ、早々に失せよ」

「「……………へっ？」」

どこまでも頑ななホプキンスの態度にこめかみを引き攣らせるメディアと、一座に対するあんまりな言い草に眉を顰めるマシュの、怒りと悔しさを他所に。

自分よりも余程、ホプキンスという人物と間近に接し、彼の人となりを知る機会があったであろうサンソンと、間の抜けた声を重ねたのであった。

「どうした？」

「あ、あの……演目の指定とかは、しないんですか？」

「貴様達がどのような選択をするのかという点も含めて、全てが見定める対象だ。その労力をわざわざ排してやるような気遣いを、貴様達なんぞにくれてやる必要がどこにある」

「逃亡を防ぐために、人質を置いたりは……」

「馬鹿にしているのか、私は忙しいと言ったであろう。

余計な囚人の面倒を見てやる余裕など、欠片たりとてあるものか。

逃げたいのならば逃げるがいい、止めはせん。

貴様達が、公演を隠れ蓑にした悪逆の輩であることが早々に証明されるのならば、私としてはむしろ手間が省ける」

「なっ……私達は逃げません、立香一座のお芝居にかける想いは本物です!!

見ていて下さい、今夜もまた素晴らしい公演を行なってみせますから!!」

「ほら立香、サンソン、余計なことを言っている暇があるならさっさと戻るわよ!!
ティテュバの釈放はすぐに決まるわ、くれぐれも丁重に扱うことね!!」

激昂しながら捨て台詞を吐き、何故か呆然としてしまっている男達を引きずるマシユとメディアは、想像すらしていない。

立香とサンソンが、女性の細腕にすら抗えない、抗う気すら起こさない程に呆けてしまっている理由を。

自分達が、理不尽かつ横暴極まりないと思ったホプキンスの対応が、実は知って

いる者からすれば、驚きのあまりに一時思考を飛ばしてしまう程に甘いものだったことを。

地鳴りが聞こえそうな足取りでその場を後にしていった一同を、ホプキンスは無言で、護衛の兵士達はあからさまな不快感を懸命に堪えながら見送った。

「……何だ、あの無礼な連中は。」

閣下の温情をいいことに、よくもあそこまで厚顔になれるものだな」

「あんな連中との口約束など、守ってやる必要はありません」

「そうだな、考えておこう。」

……少し席を外してくれ、しばし集中する。

必要とあれば私の方から声をかける、それまで誰も部屋には近づくでないぞ」

眼光を一層鋭くしながらそう言ったホプキンスに、慌てて敬礼を行なった護衛達は、無礼にならない程度の速足で部屋を後にする。

一人になった部屋で、音も気配も十分に遠ざかったことを確認したホプキンス

は、肩を落としながら大きく息を吐いて。

自身の顔へゆっくりと手を伸ばし、何の躊躇いも支障もなく、それを外した。

「……俺に出来るのはここまでか。

あとはあいつらが、自分達の力で、名演を披露してくれることを信じよう」

とりあえずの肩の荷が下りたと一息つきながら、権力者のためのものであることが明らかな、立派な椅子の背もたれに体重を預けながら、鼻歌交じりに足を組んでいる。

その姿は、先程まで確かにそこに居た筈の冷徹な老人ではなく、緑の服を纏った少年のもので。

そんな彼の手の中には、不気味な程に精巧で生々しい仮面があつて。

実際に存在する顔をそのまま模ったかのようなその顔立ち、顰められたその表情は、ホプキンス判事のものと同様酷似していた。

『……この仕打ちを赦せとは言わない。

あなたの事情や心情を欠片も考慮していない、勝手に強引な振る舞いだということとは承知している……だけど』

『例えあなたの目的が、真の魔女裁判を行なうことだとしても。』

あなたの望みが、贖罪以外の何ものでもないのだとしても』

『あなたがこの地に招かれた理由、あなたに課せられた役割。』

あなたに出来るのは、この地の狂気を加速させることだけなんだ』

『あなたがそれを積極的に為そうとしている限り、事前に対処しないという選択肢は俺には無い』

『……マシユー・ホプキンス。』

あなたの行ないによって、多くの人が無実の罪で罰せられた。

それは紛れもない……どんなに償いたいと願ったとしても、決して覆せない事実だ』

『でも、そんなあなたの行ないによって、魔女や悪魔によって苦しめられる恐怖から解放され、平和に暮らせるという安心を得られた人々だって、確かに存在してい

た筈。

それもまた、覆してはいけない事実なんじゃないかな』

『あなたは確かに間違えた、だけど同時に正しくもあった。

全部をひっくりかえして、あなたという人を、あなたの人生を、俺は認めたいと思う』

『あなたの無念、あなたの贖罪を引き継ごう。

この町の狂気はこの町で終わらせる、俺と俺の仲間達が必ず成し遂げると約束する』

『後は俺達に任せて眠ってくれ、頑固で真面目な魔女狩り将軍』

優しく穏やかに響いた、剥き出しの魂を震わせるような笛の音色も。

倒れ伏していた人影が不自然に消えて、代わりに仮面が転がった異様な光景も。とある登場人物の演者が密かに入れ替わったことすらも、誰一人として気付くことの無いまま。

舞台は滞りなく、次の場面へと移り変わろうとしていた。

後悔を託すことが出来た人

「……ああ、安心した」

二度目の公演 前

立香一座の二度目の公演は、ホプキンスの声掛けもあって、結構な評判を得た初回以上の大盛況となった。

本来ならばアビゲイルも、前回の幕が下りた直後から楽しみにしていたこの時に、わくわくしながら臨んでいた筈だったのだけれど。

今この時も、暗く冷たい牢獄に囚われて苦しんでいるであろうティテュバのことを考えると、なかなか気持ちを切り替えられない。

しかしアビゲイルは、今にも込み上げそうな涙や不安を懸命に堪えながら、開幕の時を待っていた。

マッシュや哪吒は、劇が好評ならばティテュバを助けられると、そういう約束をしたのだと、だから元気を出してと励ましてくれたし。

立香だって、今回の公演はアビゲイルのために行なうと、嘘だと分かっている嬉しいことを言ってくれた。

そうして、アビゲイルが公演を楽しめる心の余裕を得る時を待っていたかのようなタイミングの良さで、前回と同じように、公会堂内の灯りが一斉に落ちた。

それはまるで、日常から非日常へと、世界そのものが一瞬で移り変わったかのよう。

「お集りの皆様方、大変長らくお待たせいたしました。

これより、我ら立香一座の新たな公演を始めさせていただきます」

病みつきになりそうな高揚を、今回もまた、密かに隣に座っていたラヴィニアと知らぬ間に共有しながら。

吸い寄せられるような魅力に溢れていたマタ・ハリのそれと比べて、穏やかで優

しい、そつと耳を傾けたくなるようなサンソンの声に招かれて、少女達は遙か昔の物語の中へと入り込んでいった。

「此度の演目は、前回の公演が終了した際に我らの座長がお約束していた通り、ゼルダの伝説『ムジュラの仮面』の続きを語らせていただきます。

スタルキッドと妖精達の悪戯に巻き込まれ、見知らぬ地『タルミナ』へと迷い込んでしまった勇者リンク。

彼は、ムジュラの仮面の呪いによって滅びの運命を定められてしまったタルミナと、その地に住まう人々を救うため、その方法を探すために、三日間という限られた時間を繰り返す果ての見えない戦いの中に身を投じました。

その奔走の中で彼は、悩んだり、苦しんだりしている人達のために力を貸すことにも、決して躊躇いはしませんでした。

これはそんな、幾度繰り返されたとも知れない三日間のうち的一幕……苦難を越えて、大切な約束を守り抜いた話です」

自分達以外の全てが、同じ時間に、同じやり取りを繰り返す三日間は、これで何度目になることか。

とつくの昔に数えるのをやめてしまった、ある時の一日目。

とある頼まれ事を引き受けたリンクは、トレイルの助言に沿った冒険を進めるのを一旦止めて、クロックタウンを回りながら聞き込みを行っていた。

そんな彼に、既に相方と言っていい存在と化していたチャットは、呆れた溜め息

をついている。

「『まったく……リンク、お前は人がいいにも程がある。

他人の依頼を、それもこちらの話もろくに聞かずに勝手に押しつけてきたものを、いくら困っていたとはいえ素直に引き受ける奴があるか。

……まあ、確かに。

恐らく本物はとくに町から逃げている、いくら待っても来やしない。

そんなものに縋りながら、息子のことを心配するしか出来ないというのは辛いだろうし、可哀想だとは思ったけれど』

リンクのことを、自分が手配した人探しの専門家だと勘違いして、戸惑うこちらをよそにさつさと話を進めてしまったのは、ここクロックタウンの町長夫人だった。何でも、結婚を間近に控えていた一人息子のカーフェイが、一か月ほど前から行方不明になってしまったのだという。

リンク以前にも、既に何人か人を雇って探したのだけれど、一向に見つかる気配

が無いのだとか。

クロックタウンは、その広さと町並みの立派さに見合わず、人の姿は閑散として
いる。

この町の普段の様子を知らないリンクとチャットは、てっきりそういうものだと思
っていたのだけだ。

今回ふと目についた町長の屋敷を訪ね、正式な避難勧告を出すべきだと訴える町
兵達と、本当に落ちるかどうかも分からない月なんかの為に大切なカーニバルの準
備を放り出すなんてあり得ないと意地を張る町衆達が、完全に板挟みにされている
町長を巻き込みながら怒鳴り合う場に鉢合わせてしまったことで、その考えは間
違っていたことを知った。

月が迫ってくるという明らかな異常事態に、本来ならばカーニバルを目当てに
ごった返している筈の観光客の足は遠のき、町民達の多くは勧告を受けるよりも先
に自主的な避難を開始している。

今この町に残っているのは、まだ逃げる準備が整っていなかったり、ギリギリま
でいつも通りの生活を送ろうと足掻いていたり、この町と運命を共にする覚悟を決

めてしまっていたりなどの、それぞれの理由や事情がある者ばかりなのだという。そして恐らく町長夫人の『事情』とは、公人としての務めがあること以上に、息子の行方が分からないこと。

このまま逃げてしまえば、二度と会えなくなるかという不安を抱いているのかもしれない。

例え第三者から見ればちっぽけなこと、その程度と思われるようなことだとしても、当人にとっては掛けがえのない『願い』があるのならば、自分はそれを叶えてあげたい。

そんな想いを新たにしながら、リンクは改めて、『カーフェイ』の手掛かりを求めて駆け出した。

昼時を多少過ぎた頃合いには、この町で生まれ育ち、『町長の一人息子』という肩書きもあるカーフェイに関する情報をそこそこ集めることが出来た。

どうやらカーフェイは、今更結婚が嫌になって逃げたのではと思われているらしい。

カーフェイの相手は一介の町娘で、資産や家柄に恵まれている訳でも、誰もが夢中になるような評判の美人という訳でもなく、道楽息子の気紛れに過ぎないのではないかという声は、前々から少なからずあったのだとか。

しかしリンクは、それが真実だとは思えなかった。

当人の人柄をきちんと知りもせず、噂を聞いただけで勝手に抱いた印象ではない。

カーフェイ自身の確かな目撃情報から得られた、彼が行方不明になる前の最後の様子が、結婚式で使用するための特別なお面を見せびらかしながら、集まった友人達を相手にのろけ話に花を咲かせる姿だったのだから。

そうやって盛り上がった店を後にして、屋敷に帰るまでのどこかで、彼の身に何かが起こったのだろう。

聞き込みはこの辺りにして、今度は彼自身の足取りを追ってみることにしたりんくは、その前に一旦休憩を取ることにした。

「『ああっ!!

あ、あの……あの、これは!?!』」

クロックタウンを中心に活動する際の拠点として重宝している、いつもの宿屋。今回もまた世話になろうと、その玄関のドアノブへと手を伸ばしたリンクは、僅かに開いたドアの隙間から突如聞こえてきた悲鳴じみた声に、慌てて中へと駆け込んだ。

既に見慣れた受付カウンターを挟みながら、見覚えのある二人が向き合っている。声の主は、今の一瞬で判断した通り、この宿の娘のアンジュだった。

いつも笑顔で受付業務をこなしている彼女を、あんな声を出すほどに驚かせた原因と思われるもの……見たところ何の変哲も無い便箋を、決まった道筋で町中を駆けまわっている姿を日々見かけている郵便屋が、何食わぬ顔で差し出している。

「『確かに渡しました』」

「『ま、待って下さい!!』」

「この手紙は、どこで!?!」

「『ポストです』」

「『そ、そうではなくて、どこのポストで?!? 教えて下さい!!』」

「『……知りません、知っていても秘密です』」

「『お願い、待って!!』」

カウンターという障害物に阻まれて、手を伸ばすのが精一杯なアンジュの制止を振り切り、啞然と立ち尽くしてしまっていたリンクの横を早足ですり抜けながら。便箋について何かを知っていたと思われる郵便屋は、さっさとその場を後にしてしまった。

俯き、肩を落としながら、リンクの存在にすら気付けない程に消沈してしまっているアンジュへと、恐る恐る声をかける。

「『ああ、お客さんですね。』

……すみません、変なところをお見せしてしまって』」

この宿はかなりの頻度で訪れているので、毎回『無かったこと』になってしまっているせいでアンジュにとっては初対面だとしても、リンクとチャットはそれなりの親しみを抱いている。

未だかつて見たことの無い表情を浮かべているアンジュを、今この瞬間に会ったばかりだからなんて理由で放っておくなんてことはとても出来なかったのと。

この宿に泊まっていたつかの夜に壁越しに聞いてしまった、あの時は何の話をしているのかさっぱり分からなかった、アンジュと彼女の母親のやり取りを思い出したリンクは、半ば確信を抱きながら問いかけた。

その手紙の差出人は、もしかして……と。

『あなたは、カーフェイさんを捜しているんですか!?!』

間髪入れずに返ってきた、その反応こそが答えだった。

身分も財産も持たない町娘の身で、町長の一人息子と結婚の約束をし、あっさりと心変わりをされて逃げられたと、口さがない者達によって話のタネにされてしまった。

噂の花嫁とは、宿屋の娘アンジュのことだったのだ。

二日目……と言うよりも、一日目の遅くと表した方が正しいような真夜中に。

しっかりと戸締りがされている宿の玄関を、二階のベランダから飛び降りることであっさりと突破したリンクは、人氣が失せた夜の町並みを、更に失せることになる郊外へと向けて駆けていた。

そんな行動を取るようになった理由は、つい先程引き受けたばかりの、アンジュからの頼まれ事。

宿屋の業務が終わり、他の皆が眠りについた頃合いを見計らったアンジュに真夜中の厨房へと呼び出されたリンクは、彼女から一枚の手紙を預かった。

それは、カーフェイからアンジュへと充てられた手紙に対する、アンジュからの返事。

大事なのは文面ではなく、その存在そのものだった。

クロックタウンの郵便屋は、毎日毎日決まった時間に、予定通りに町中のポストを回って手紙を回収し、その宛先が誰でもどこに居ようと必ず本人に届けるという、感心を通り越して呆れる程の、融通の利かない真面目さと頑固さで知られている。だからこそ昼間は、婚約者の行方を捜しているアンジュに対して、その婚約者から充てられた手紙に関することを、二人の事情は彼だって知っていた筈なのに、『禁止されているから』という理由で口を噤み切ってしまった。

その寸分違わぬ仕事っぷりを、今度は逆に利用してやろうというのだ。

カーフェイからの手紙をアンジュに届けたように、アンジュからの手紙をカーフェイに届ける……それを受け取る瞬間、彼は必ず姿を現す筈。

信じているというよりも、信じたいという想いを抱きながら、アンジュは手紙と共に、大切な言葉をリンクへと託した。

「『彼に伝えて下さい、アンジュは待っていますって。

そしてその時の、彼の様子を教えてください。

私には……怖くて、出来ないから……』」

手紙を差し出しながら震える手、強張ってしまっている体や表情の全てから、恐怖と不安が滲み出ている。

婚約者を信じ切れずにいることを、永遠を誓う筈だった愛を貫き通せないことを、弱いだの情けないだのと責めることは出来ない。

だって彼女はただの宿屋の娘、『勇者』でも『英雄』でもない。

婚約者が突然行方不明になって、その不安を慰めてもらうことも支えてもらうことも出来なかった。

そんな状況で今の今まで、周りの者が寄ってたかって折ろうとしてくる、『カーフェイを信じる』という想いを守りながら、一人で懸命に立ってきた。

その確かな『勇気』に応えたいと、リンクは心からそう思ったのだから。



二度目の公演 後

繰り返す三日間、その二日目、昼過ぎ。

決まり切った予定の通り、午後の配達を始めた郵便屋を、リンクは細心の注意を払いながら追いかける。

夜明け前に、人目を避けて郊外のポストへと投函した、アンジュの手紙以外に配達の予定は無いことは、既に確認済み。

つまり、彼が予定のルートを外れて向かう場所、会う人がいるとすれば、そこそがカーフェイに繋がる手がかりとなる。

それを見逃すまいと気合いを入れながら、数時間をかけて町中を一周する郵便屋

の走りについていったリンクは、ついにその瞬間を前にした。

町の南側の端、建物に囲まれた狭い小道を抜けた先にふと広がる、水路を挟んだ僅かな緑地。

そこに駆け込み、備え付けられていた鐘を郵便屋が鳴らした音に応えて現れ、彼が取り出した手紙を受け取ったのは……結婚式を控えた青年ではなく、その顔を黄色い動物のお面で隠した、リンクと同じ年頃だと思われる少年だった。

当のカーフェイ自身ではなかったのは残念だけれど、手掛かりを掴んだことには違いない。

少年が来た方向、水路脇の細い空間を通った先にあるドアの存在を確認したリンクは、気配を消したまま一息でその場を駆け抜け、水路を飛び越え、鍵のかかっていないドアの中へと入り込んだ。

ドアの向こうには狭い通路が続いていて、その先には部屋もあるらしい。

途中の物陰に身を隠し、戻ってきた少年が脇を通り過ぎてから少し待ち、気配が落ち着くの見計らったリンクは、意を決して足を踏み出した。

部屋と言うよりは倉庫と表した方が良さそうな狭い空間に、ベッドと机のみを詰め込み、人が暮らすための環境を辛うじて整えたように見える部屋。

先程の少年はそこで、届けられたばかりのアンジュの手紙を読んでいた。

突然現れたリンクに対してほんの一瞬驚きながらも、何かを察したらしい彼のくぐもった声が、お面越しに聞こえてくる。

「『……緑の帽子に、緑の服。

アンジュの手紙に、お前のことが書いてある。

カーフェイを捜しているらしいな。

……お前、秘密を守るか?』」

少しきつめの口調で、こちらを見定めようとしているかのように思える少年の様に戸惑いながらも、リンクはしっかりと頷いた。

「『アンジュはお前を信用した、僕も信用しよう』」

リンクが本気であることを信じてくれたらしい少年は、そう言って、顔のお面へと手を伸ばす。

ゆっくりと外されたその下から現れたのは、想定していたものよりは少し違うけれど、それでも十分に面影を感じられる顔だった。

『僕がカーフェイだ』

『なっ……そんな馬鹿な、わたし達が探しているカーフェイは大人だぞ。』

お前は、どこからどう見ても子供じゃないか』

変な冗談で手間を取らせるなど、そう怒りかけたチャットは、続いた言葉に心なしか小さくなってしまった。

『お面をかぶった変な小鬼に、こんな姿にさせられたのさ』

『……またあいつか、次から次へとロクでもないことを』

クロックタウン周辺の冒険を続ける中で、『ムジュラの仮面』の力を得たスタルキッドが為した悪事の後始末や、現在進行形で起こってしまっていた事件をどれだけ収めたことか。

彼のことを見捨ててはいないし、今でも友達だと思っている上に、彼が仮面に操られてしまう前は一緒になって悪戯をしていたチャットにしてみれば、少しを通り

越してかなり居た堪れなかった。

そんなチャットを背に庇いながら、そんな姿では母や婚約者に自分だと信じてもらえないと思ったのかと尋ねたリンクに、カーフェイは躊躇うことなく首を横に振った。

「『隠れているのは、この姿のせいじゃない。』

この姿にされた後、相談をしようと思って、北門近くの泉に住んでいる大妖精に会いに行ったんだけど。

……その時に、大切な『婚礼の面』を盗まれたんだ。

結婚を前に浮かれて、油断していた隙をつかれてしまった』

「『アンジュが心配してるのはわかっている……でも、今はまだ出ていけない。』

彼女に約束したんだ。

婚礼の面を持って、絶対迎えに行くって。

あれを取り戻してからでないと、合わせる顔が無い。

アンジュなら許してくれるとしても、僕自身が納得出来ない』

辛そうに、それでもしつかりとそう言い切ったカーフェイの気持ち、意地を張る理由が、リンクにはまだ分からない。

だけど、分かったこともあった。

カーフェイはアンジュと同じように、『大切な約束を守りたい』のだ。

「『ちょっと、そこを覗いてみてくれないか』」

カーフェイが示したのは、壁に掛けられていたお面だった。

その目の部分に開いていた穴を、言われた通り覗き込んだリンクは、その向こうに広がる光景が、見覚えのある場所を別の視点から見たものであることに気がついた。

『マニ屋』は夜中しか開いていない変わった店で、他の店には無いような珍品を取り扱っていて、持ち込まれたものは何であろうと値段をつけてくれるので、冒険の中で手に入れた諸々の品を引き取ってもらうために、リンクもよく訪れている。

この部屋はその店の、カウンターの裏側に位置していたのだ。

「盗んだ品を持ち込めるような店は、この町ではここくらいなんだ。

お面を盗んだあいつが、他にも泥棒を行なっているのならば、この店で待ち構えていれば必ず現れる筈」

「……まさかお前、一か月もずっと、ここでそいつが現れるのを待っていたのか？」

「『マニ屋の店主とは知り合いで、事情を話して協力してもらっているんだよ。郵便屋だってそうだ、秘密を守ってくれて本当に感謝している。』

……僕は必ず、アンジュのところに帰る。

どうか、彼女にそう伝えてくれ」

カーフェイの言葉に頷いたリンクは、アンジュが知リたがっていた彼の本心を示すもの、二人の約束の証として、彼が身につけていたペンダントを預かった。

「『こ、これは、カーフェイの!!

あ、ああ……ありがとうございます。

もう大丈夫です、私、待つことにします。

約束しましたから』」

リンクからペンダントを、カーフェイの誓いの証を受け取ったアンジュは、驚き、

涙を込み上げさせたその後、本当に美しい顔で笑ってくれて。

それを見届け、一日目の人探しと二日目の追跡で疲れた心身を宿で一晩休ませたリンクは、三日目の朝に改めてカーフェイの下へと向かった。

お面を取り戻すまで帰れないというカーフェイと、それを信じて待つというアンジュ。

二人の決意がどれだけ強く固いものだとしても、それを叶えるために残された時間は今日一日しか無いのだということを、彼は知ってしまったから。

今回の最終日は全て、彼らのために費やそうと決めていたのに。

訪れた例の小部屋には、カーフェイの姿は既に無く。

代わりに、彼の協力者だったというマニ屋の店主が、リンクのことを待っていた。

『緑の帽子、君がリンクだな。』

カーフェイからの言伝だ、この手紙を母親に届けてほしいだと。

……カーフェイなら、ゆうべ店に来た客の後を、血相を変えて追いかけていきやがった。

あいつは常連でな、どこの誰からかっばらってきたかもわからないようなものを度々持ち込んでくるケチなスリだよ。

行き先の心当たりって、そうだなあ……確かあいつは、谷の方の出身だったか？
」

店主が首をひねりながら口にしたその言葉に、リンクとチャットは背筋に冷たいものが走ったのを感じた。

『谷』とは恐らく、クロックタウンから東の方向に広がっている『イカーナ溪谷』のことだろう。

地形は険しく、蠢く魔物達は強く、かつてその地に栄えたという大国の亡者達が夜ごとに彷徨うという危険地帯。

そんな場所に、土地勘も戦闘の心得も無い、一介の町人でしかないカーフェイが一人で向かった。

その事実が意味することを考えてしまったリンク達は、カーフェイからの母宛ての手紙を、搜索の成果だという伝言付きで郵便屋に託すと、大急ぎでクロックタウ

ン東側の門から飛び出していった。

その走りが時折、世界そのものを揺るがすような地鳴りによって妨げられる。

ふと見上げた視界の多くは青空ではなく、禍々しい岩の塊によって埋められていて。

何度目かの最期の時が、またしてもこの世界に訪れようとしていた。

深い切込みのような大地を流れる川、それを遡りながら辿り着いた溪谷の行き止まりの辺り。

あちこち捜しまわった末に辿り着いたその場所で、リンクはようやくカーフェイを見つけることが出来た。

心配と、彼を捜して走り回ったことで乱れていた息を整え、無茶なことをするなと声を上げるよりも先に、彼が隠れていた物陰へと引っ張り込まれた。

「『しっ、静かに！』

……奴を見つけた。

あの岩の扉の向こうに、奴が盗んだものを隠している倉庫がある。

僕のお面も、きっとあの中だ』」

カーフェイに示されて振り向いた先の岸壁には、確かに、不自然な一枚岩が存在していた。

主が中にいる間は流石に危険だと思い、出かけるのを待ってから潜入を試みた

カーフェイの判断は、残念ながら間違っていた。

扉の仕掛けは複雑なもので、施した本人でなければとても開けられそうにない。だからカーフェイは、またしても待つことにした。

戻ってきた主によって扉が開かれるのを、次の潜入の機会を。

それが、困難な仕掛けを解けるような技術も、立ちはだかる敵や困難を捻じ伏せられるような力も無い、『勇者』でも『英雄』でもないカーフェイが、大切なものを諦めないために出来るただひとつの戦い方だった。

「『待つさ、いくらでも。』

アンジュと約束したんだ」

リンクは、男女の愛というものを知らないし、分らない。

まだ幼い少年であることに加えて、本来ならば最も身近な例となる筈の、『両親』というものを知らないからだ。

愛し合い、夫婦になる男女というものが、これまで目の当たりにしてきたカー

フエイとアンジュのように、ここまでお互いを信じあい、お互いのために頑張ることが出来る人達ならば。

まだ赤子だった自分を、最期の瞬間までその胸に抱き続けていたという母も、そんな彼女が愛したであろう父も、こんな風にお互いを想い合って。

それと同じくらいの気持ちで、自分のことも愛してくれていたのだろうか。

自分のことをハイリア人ではなくコキリ族だと、父と母ではなく大樹から生まれた子だと思いながら、幼い体を抱き締めてくれる人がいないのをおかしいことだなんてこれっぽっちも考えないまま、当たり前のように一人で生きてきた。

そんなリンクが、確かに存在していた筈の……自分をこの世に生み出して、その腕に抱き締めてくれた筈の人達のことをきちんと考えたのは、今この時が初めてのことだった。

カーフェイと共に物陰に身を隠し、少し惚けながら過ごした数時間後。

落ちた日の名残りすら消え、辺りに完全な夜が訪れた頃合いになって、ようやくその時が訪れた。

見た目だけならば一般人に思える男が仕掛けを動かし、巨大な一枚岩の扉を開けて中へと入っていくのを待ったカーフェイは、その姿と気配が遠のいたのと同時に駆け出した。

一瞬遅れてそれに続いたリンクが、カーフェイと共に目の当たりにしたのは、岸壁を装っていた扉とは裏腹に、きちんとした部屋として整えられていた内部……ではなく。

まるで戦利品を誇ろうとするかのように、透明なケースの中に仰々しく飾られていた、美しい金色のお面だった。

「『あつた、太陽のお面だ!!』」

この時カーフェイは、耐え忍びながら求め続けてきたものをようやく見つけられて安堵した彼は、最後の最後で気を抜いてしまった。

本当に思わず、衝動のままにお面を収めるケースへと駆け寄ったカーフェイの足元から、『カチリ』という不吉な音が鳴り。

途端に、赤い光が部屋中を毒々しく染め上げ、異常事態を告げる不快な音が響き出した。

「『しまった!?!』」

見つけたと、気付かれてしまったと、こちらとしても一瞬で悟らざるを得ない

ような状況に更なる追い打ちがかかり、お面を収めていたケースの底が、壁に開いた穴の先へと向けて動き出す。

穴の向こうには、お面が丁度収まるくらいの小さなものだと思われていたケースと、動く底板が長々と続いていて、次の部屋を丸ごと通り過ぎたその先には、回収用と思われる穴が開いているのが確認できた。

出入り口といい、よくもまあこんな大層な仕掛けをと、呆れた声を上げる間もなく。

奴の手に渡る前に取り戻さねばと、お面を追って駆け出したカーフェイは、侵入者を翻弄するための仕掛けがこれで全てではなかったことを思い知らされた。

カーフェイが作動させてしまった警報装置の作動スイッチ、そこから離れた途端に、彼が飛び込もうとしていた次の部屋へと続く扉が閉じてしまった。

「『踏んでる間だけ、ドアが開く仕組みなんだ…っ!!』」

何とも意地が悪い仕掛けである。

侵入者が仮に一人だけだったら、この時点で、お宝が運ばれていくのを黙って送る以外に出来ることは無い。

しかし今回、カーフェイには味方が、それもとびきり心強い者がいた。

「『行け、カーフェイ!!』」

何者かが仕掛けを作動させる音と、緑の少年に連れ添っている妖精の声が響いた次の瞬間に、カーフェイの行く手を塞いでいた扉が開いた。

殆ど反射的に飛び込んだ部屋は行き止まりで、例のケースの中をゆっくりと流れていく太陽のお面の存在が、すぐそこにある存在に手が伸ばせないという現状が、カーフェイをますます焦らせる。

「『落ち着け、落ち着け……次の部屋に進むための仕掛けが、必ずある筈』」

心臓が潰れそうな心地がするのを堪えながら室内を探したカーフェイは、予想通

りに仕掛けを見つけ、それを踏んだ。

再び『カチリ』と音が鳴り、新たな扉が開かれる。

それは、カーフェイを次の部屋へと進ませるためのものではなく、お面が流れるケースを挟んだ反対側にある、もうひとつの部屋へと入るための扉だった。

『カーフェイ、そこを動くな!!』

膝から崩れ落ちそうになったところを、心臓を貫かれたと思うような勢いで響いた妖精の声で制されたカーフェイは、緑の少年と妖精が、向こう側の部屋へと飛び込んできた瞬間を目の当たりにした。

一人ではないという安堵が、協力すれば何とか出来るのではないかという期待が、次の瞬間凍り付く。

向こう側の部屋に仕掛けられた罠が、二足歩行の狼や、伸びた茎の先に鋭い歯が覗く実を備えた植物といった魔物達が、彼らの領域へと踏み込んできた者へと向けて一斉にその牙を剥いたからだ。

リンクの身を案じ、逃げろと声を上げてくれるカーフェイの気持ちがありがたく思いつながら、リンクは内心で胸を撫で下ろしていた。

こちらに來たのが自分で良かった、カーフェイでなくて良かったと。

幼い背に負う剣の柄へと手を伸ばし、抜き放たれた刃がその勢いのままに二度三度と振るわれた次の瞬間には、部屋の魔物は一掃されていた。

あまりのことに呆然と立ち尽くしてしまったカーフェイは、自身の部屋の扉が開いた音によって正気を取り戻し、全速力でその向こう側へと飛び込んだ。

そこにあったのは行き止まりの小部屋で、壁にはケースの端の片方と、自分が入ってきた分も含めた二つの扉が、床には二つのスイッチがあり。

ケースの中の動く底板は、終着点に開いている穴へと向けてゆっくりと確実に、太陽のお面を流し続けている。

カーフェイが踏んだスイッチの片方は、お面を流す仕掛けを止めるのではなく、もう片方の扉を開いた。

しかし、その事がカーフェイを焦らせたり、嘆かせたりすることはもう無かった。その向こうから心強い味方が現れてくれることを、今のカーフェイは知っていた。

から。

相棒の妖精を伴いながら、扉が開くと同時に駆け込んできたリンクが、何の説明もされないままにもう片方のスイッチを作動させる。

それは今度こそ仕掛けを止めさせ、再び奪って逃げようとした泥棒ではなく、本来の持ち主であるカーフェイの手が、太陽のお面を万感の想いと共に掴み上げた。

「『やった、これでやっと……やっと、アンジュとの約束を』」

「『あ、あの……カーフェイ、それなんだが』」

「『まだ間に合う、急いで町に戻らなきゃ!!』」

「『ちよっ、待てカーフェイ!!』」

だめだ、行ってしまった……確かいつもなら、アンジュは既に今頃』」

自分達が知る『予定』では、アンジュは三日目の夕方には家族と共に町を離れて、ロマニー牧場への避難を済ませてしまっている。

いつかの夜に、リンクは宿の部屋の壁越しに、『約束がある』と、『手紙には必ず

帰ると書いてあった』と言って避難を躊躇うアンジュと、そんな彼女を説得する母親のやり取りを聞いたことがある。

あの時はさっぱりだったその意味が、母の熱意と思いやりになんて負けて避難してしまつたことを三日目のアンジュが後悔していた理由が、今は説明されなくても分かる。

本当なら明日、世界が滅びを迎えてしまう日、カーニバルが開催される筈だった日に。

古くからの風習に倣って、絆と誓いの証となるお面を奉納した二人は、世界一幸せな花婿と花嫁になる筈だったのだ。

胸の奥から込み上げてきたものに喉を塞がれ、熱いような苦しいような、何とも言えない気持ちに苛まれたリンクは、カーフェイに遅れて駆け出した。

向かったのはクロックタウンではなく、アンジュと彼女の家族の避難先であるロマニー牧場。

命と身の安全を優先して逃げたのは仕方がないことだ、それは責められない。ただどせめて、カーフェイは約束を守ろうとしたのだということ、そのために身

の危険も顧みずに頑張ったのだということだけは、アンジュに分かってもらいたかった。

そんなリンクの思いが、叶えられることはなかった。

必死の思いで辿り着いたロマニー牧場に、アンジュの姿は無かったのだから。

馬鹿な決断をした娘に、呆れているような、悲しんでいるような、安心したような、誇らしいような。

複雑な想いを馳せる母親の姿のみが、そこにはあった。

あと数時間もあれば日が昇り、新しい一日が訪れるであろう頃合いになって、リンクはようやくクロックタウンの、カーフェイを待つことを選んだアンジュがいる筈の宿へと帰りついた。

夜だからではなく、人がいなくなってしまうたせいで静まり返った町並みを、毒々しい赤い月光が染め上げている。

頭上から迫るものの圧力によって引き起こされる地鳴りは、もはや収まった瞬間を見つけることが難しいくらいの頻度になってしまった。

正しく終焉の時、『新しい明日』など来やしないのに。

絶望と疑いの中で何度も折れかけて、それでも必死に、『約束』を支えに互いを信じ抜いた二人は……用意されていた花嫁衣裳の前で、それぞれが用意していた対のお面を手にも、釣り合いが取れているとは思えない姿で、それでも固く抱き合っている。

それはとても、胸と瞳の奥から込み上げてくるものを堪えるのが大変なくらい

に、美しく尊い光景だった。

「『……よく、僕だってわかったね』」

「『当たり前でしょう。』

だって私、あなたに会ったことがあるわ。

遠い昔……そう、まだ小さかった頃。

私達は約束したわね、月と太陽のお面を』」

「『時のカーニバルの日に交わそうって。』

……結婚しようって』」

「『……嬉しかった』」

「『アンジュ、遅れてごめん』」

「『お帰りなさい。』

約束を守ってくれて、ありがとう』」

「『……僕の方こそ。』

ありがとう、待っていてくれて』」

互いの存在と言葉を交わし合い、ゆっくりとその身を離すカーフェイとアンジュ。そこでようやくリンクとチャットの存在に気づいた二人は、ほんの一瞬だけ驚いた後、優しい笑みを浮かべてくれた。

「『リンク……ありがとう、来てくれたんだね。』

僕達は、これから結婚式を挙げる』」

「『どうか、見届けて下さい』」

そう言った二人は、改めてお互いの顔と、それぞれが手にしていたお面を向き合
わせた。

「『約束のお面を交わそう』」

まるで誓いの口づけかのように、カーフェイの太陽のお面と、アンジュの月のお

面が重なり合う。

二つのお面を中心に、眩い光が迸った次の瞬間。

二人の手の中には、豪華な装飾が施されたお面ではなく、滑らかな純白の表面を薄っすらと輝く紋様で彩った、シンプルながらも美しいお面が収まっていた。

『誓いを交わし、僕らは夫婦となった』

『あなた達は証人よ、このお面を受け取って』

二人の絆と約束、困難を越えてお互いを信じ抜いたことの証と言っていい、大切なお面。

それを何も躊躇うことなく、心からの笑みと共に差し出してくる二人に、リンクの方が躊躇ってしまう。

こんなものを貰うわけにはいかないと、何とか断ろうと顔を上げ、二人の目を見たリンクは、その瞬間に気づいてしまった。

大事なものだからこそ、二人はそれを託そうとしているのだと。

共に逃げてもらうために……大切な約束を果たしたことの証を、最期の時に巻き込んでしまわないために。

夜明けは、月がクロックタウンを消滅させる瞬間までは、恐らくあと1時間ちよつとといったところ。

旅慣れているリンクはともかく、一介の町人の身では、今から逃げてもう間に合わないと思ったのだろう。

残念なことに、その考えは正しかった。

全てを承知の上、覚悟の上で、二人は今この時に、共に在ることを選んだのだ。

「『あなた達は逃げて下さい、私達はもう大丈夫です。

明日を、二人一緒に迎えられるんですもの』」

アンジュがそう言いながら浮かべた微笑みは、リンクを安心させるための嘘や強がりなどではなく、偽りの無い本心が現れたもので。

ほんの短い間でも、最期の瞬間まで、二人で夫婦として生きられることの幸せを、

心から囁み締めている笑顔で。

ふざけるなど、リンクは思った。

ようやく会えたばかりなのに。

あれだけ望んでいた約束を、やっと叶えられたのに。

二人で幸せになるのは、まだこれからのことなのに。

ずっとずっと、一緒に生きていける筈なのに。

二人の手から『めおとの面』を受け取り、優しい笑みと眼差しを背中に感じながら、リンクはまるで振り切るように駆け出した。

逃げるためではなく戻るため、更なる可能性を信じて進むため。

二人の未来を繋ぐため、まだ諦めないために。

今にも落ちてきそうな程に迫った月の下で、時のオカリナを構える。

既に指で覚えた旋律を奏でる口の中は、不自然な塩辛さで満ちていた。

「『また戻ってきたな、最初の朝に。

……リンク、元氣を出して。

スタルキッドを止めてムジュラの仮面を取り戻せば、もう月は落ちてこない。
カーフェイ達だって助けられる、だから頑張ろう』

チャットの励ましに小さく頷き、握った拳を震わせながらも懸命に顔を上げて、
また進むべく踏み出されたリンクの足は、一歩目で止まってしまった。

この時間、この場所には既に何度も立っていた筈なのに、今の今まで全く意識出

来ずにいた存在が、目に飛び込んできたことによる驚きによって。

「『カーフェイ……っ！』」

初めて会った時に目にした、黄色い動物を模したお面を身につけたカーフェイが、例の裏口へと続く路地の向こうから、丁度姿を現したところだった。

辺りを窺いながら恐る恐る歩を進めるカーフェイは、見覚えのある便箋を手にしていて。

アンジュを少しでも安心させるべく、意を決して手紙を出す……それがあの二人の、滅びに向かう三日間での最初の動きであったことを、今この時になって初めて知った。

目的を果たすや否や、暗い路地の向こうへと足早に去っていくカーフェイの後を、追いかけるつもりは無い。

彼の母の依頼を受けることも、カーフェイの想いを確かめたがっているアンジュに声をかけることも、彼女から託された手紙を投函してその後を追うことも、今回

はしない。

恐らくアンジュは、自分達が知るいつもの流れのように、家族と共に避難した先で、カーフェイとの約束を優先できなかったことを後悔するのだろうし。

カーフェイだって、泥棒のアジトを突き止めて潜り込むまでは出来たとしても、その先の仕掛けは彼一人では突破できない。

太陽のお面が持ち去られるのを見過ごすしか出来なかった彼は、アンジュとの約束を守れない絶望に打ちひしがれることになるのだろう。

それは想像ではなく、現実になるであろうという確かな事実で。

今こうして軽く考えただけで、胸が張り裂けそうなほどに辛いのだけれど。

リンクはそれを耐える、耐えて先に進んで見せる。

それこそが、カーフェイとアンジュを本当の意味で救うため、彼らの未来を繋ぐための、唯一の方法なのだから。

「『……よし。』

じゃあ、行こうか』

敢えて明るく振る舞ってくれるチャットに、感謝の気持ちを含めて笑い返す。
時の勇者リンクの旅路は、まだまだ果てが見えなかった。

溢れて止まらない涙に視界を妨げられ、その現状を不便だと思いながら。

アビゲイルはそれを拭うことよりも、最後の挨拶を行なうべく現れた一座の人達へと向けて、全力を込めてその手を打ち鳴らすことの方を優先した。

この物語に、なぜこんなにも心を揺るがされたのか。

アビゲイルは何となくだけれど、その理由を察していた。

きっと、この物語における勇者リンクは主役ではなく、あくまで手助けしてくれる存在だったから。

語られていたのは、カーフェイとアンジュの物語……勇者でも英雄でもない、運悪く大変な困難に見舞われてしまっただけの普通の人達が、一生懸命に勇気を出しながら、本当に大変な時だけ勇者様に助けてもらいながら、自分自身の力と想いによって、大切なものを守り抜いた話だったから。

これが勇者リンクだったら、『だって勇者様だから』『凄い力を持っている人なん

だから』と思い、その痛快な活躍を楽しむばかりで、『もし自分だったら』なんて考えたりはしないだろう。

カーフェイとアンジュだから……勇者リンクの手助けが無ければ、信じる気持ちを貫き切れなかったり、立ち塞がる困難を乗り越えられなかったりする人達だからこそ。

きっかけさえあれば、誰かに手伝ってもらえれば、その上で諦めることなく、勇気を出すことを忘れなければ。

自分だってきつと、彼らみたいに頑張ることが出来る。

そんな風に思わせてくれる、本当に素晴らしい公演だった。

(……………勇気を、出して)

勇者リンクが彼らを助けることが出来たのは、彼ら自身が既に勇気を出して、最初の一步を踏み出していたから。

逆に言えば、例え勇者であろうとも、自ら動こうとしない者を助けることは出来

ないということ。

舞台上で繰り広げられた物語と、そこに登場した人々に背中を押されたのは、アビゲイルだけではない。

ラヴィニアもまた、胸の深いところから込み上げてくるものに助けられながら、ずっと頑なだったその手を少しずつ、一生懸命に動かした。

誰もいない筈の方向から服の袖をかすかに引っ張られ、突然のことに思わず上がりにかけたアビゲイルの声は、別の驚きによって噤まれることとなる。

「……落ち着いて、アビ―。」

大丈夫、私よ」

「…っ!? ラ、ラヴィニ」

「名前を呼ばないで、こっちも見ないで。

じゃないと、おまじないが解けちゃうかもしれないわ」

「……おまじない？」

「そう、凄いでしょ。」

今の私、ちょっと分からなくなってるの。

お芝居、ずっと隣で、一緒に見てたわ。

……昨日のやつもね」

思いもよらない言葉を受けて、その瞳を一気に潤ませたアビゲイルの手を、何者かの見えない手が、同じ年頃の少女のものと思われる手が取る。

お芝居を見たことによる感動の涙に、歓喜の涙を続けて加えさせながら、アビゲイルはありったけの想いを込めてそれを握り返した。

「ねえ、ラヴィニア。

私やっぱり、全ての魔女や魔法が、悪いものだとは思わないわ。

正しい人が正しい心で、正しく扱いさえすれば、それはきっと素晴らしいもののなのよ。

今あなたと、こうやって手を繋げているようにね」

「それ、他の人に言ってはダメよ。

あなた自身が、魔女にされてしまいかねないわ」

「わかってる、あなたと私だけの秘密。」

……今のところは」

「アビー？」

「セイレムの外なら、広い世界でなら、私と同じように考えてくれる人がきつというる。」

私とラヴィニアが仲良くしていても、誰も文句を言わないし、悪いなんて思わないでいてくれる場所だって、きつとある。

私はいつか、それを探しに行ってみたいわ。

怖いけど、いけないことだとも思うけど………それをやってみたいというのが、私自身の確かな本心、叶えたい願いのなの。

今はまだ無理だとしても、いつか必ず『勇氣』を出すわ。

……その時には、ラヴィニア。

どうかあなたも、一緒に来てくれないかしら」

「……そう、ね。」

その時が来たら、二人で一緒に」

「ラヴィニア……ありがとう、約束よ」
「うん、約束」

以下、今回の配役です。

時の勇者リンク

前回と同じ。

妖精チャット

前回と同じく、哪吒が担当。

勇者の相棒ということで殆ど出ずっぱりなので、大変だったけれど頑張った。

カーフェイ

立香が担当。

一途で誠実な青年という役柄に、一座の中では最も適切だと団員一同から揃って推されて、座長だけいいのかと躊躇いながらも引き受けた。

それに続いた、アンジュ役を決める流れの中で一同の意図を察し、その顔を赤く染め上げることとなる。

アンジュ

マッシュが担当。

立香と二人で、恋人を通り越して婚約者の役を演じるということに戸惑いながらも、『ムジユラの仮面』屈指の人気エピソードを台無しにしないように頑張った。頑張った。

頑張るのはいいけれど、もうちょっと違うことを意識してもらいたかったなあというのが、さりげなくお節介を焼いたサーヴァント達の密かな本心だったという。

郵便屋・マニ屋の店主・お面を盗んだ泥棒といったその他男性役

ロビンフッドが担当。

どれも重要なキャラではあるけれど、登場シーンはそれぞれ限られているので、声色を駆使しながら見事に演じ分けた。

カーフェイの母、アンジュの母といったその他女性役

マタ・ハリが担当、このためにナレーションを交代した。

結婚する年頃の子供がいる女性、それも町の要人の奥方と宿屋の女将という、全く違う人物像をこなしてみせた。

ナレーション

サンソンが担当。

市民達の信頼と、劇団としての実績を得るべく手を尽くすことに意味が無いのを既に知っているの、往診に出たりはせず、普通に公演を手伝った。

背景の切り替え、その他効果などの演出

前回と同じく、メディア（キルケー）が精霊達を指揮。

ホプキンスの言動にムカついていたため、より一層気合いを入れて頑張った。

狂気の日々

一つの結び目、括られたのは黒人の奴隷女。

公演の成否によっては、彼女の身柄を解放する……そんな約束をあっさりと裏切られ、公演中に犠牲者を出してしまったという現実は、この町を蝕むものの恐ろしさを一座にまざまざと突き付けた

これを境に、セイレムの町は夜な夜な食屍鬼達の襲撃を受けるようになり、誰が正しいのかも誰を信じればいいのかも分からない狂気の日々が始まった。

『処刑された者は夜になると食屍鬼として蘇る』という法則を我が身で以って実証して、二度目の死を迎えたことで最後の役割を終えた『彼女』が表舞台から降り、

本格的なサポートを行なうための準備を始めたことを知っていたのは、ほんの僅かな者達のみであった。

二つの結び目、括られたのは魔術師の当主。

親友の手も跳ね除けてしまう程に、ラヴィニアの心が頑なになってしまった大きな理由が、家族が連行されて処刑されるまでを目の当たりにしてしまったことだと判断した立香は、彼女とアビゲイルを公演で足止めした。

彼女達が劇を途中で抜け出し、ウェイトリー家の者達が連行される場に居合わせる事となるきっかけは、サンソンの不在に気付いた二人がその行動を怪しんだことだから。

一座の全員で力を合わせた公演で、アビゲイルとラヴィニアを始めとした子供達を喜ばせ、その成果に満足していた一同が、楽しく華やかな歓声の裏で痛ましい事態が起こっていたことを知ったのは、全てが終わってからのこと。

食屍鬼の脅威から逃れようとする人々の悲鳴が、霧中を木霊する混沌の中で、かつて祖父であった食屍鬼と対峙し、途切れ途切れに自身の名を呼ぶ声に必死になって応えたラヴィニア。

怒りと悔しさに唇を噛みしめ、震える拳を握る彼女の射殺するような眼差しは、違うと分かっているながら家族を告発し、実の孫娘の前で今度は手ずから二度目の死を与えた、ランドルフ・カーターへと向けられている。

『姪の友人に危険が迫っていたから助けただけ』だと、涼しい顔であっさりと言つてのけた彼に、居合わせていた立香一座の者達が、世話になっていることは百も承知の上で疑念を募らせたのは無理もないことだった。

三つの結び目、括られたのは陽の目の女。

連夜の襲撃に疲弊し、心の余裕が無くなった人々が少しずつ恐慌に陥り出したことで、セイレムは本格的に狂気の町と化し始めていた。

この後どうなるか、何が起こるのかを予め知っていたおかげで比較的冷静さを保ち、逸る仲間達を宥めることだって出来た立香だったけれど。

先日のもあってカーターに不審を抱いていたマシュが、町の外に向かう彼へと動向を監視する思惑で付き添い、外との境目近くで行方知れずになった時には流石に血の気が失せた。

ロビンフッドと共に搜索した森の中で、謎の儀式の痕跡に紛れながら残されていた

たシバの女王のメッセージに気づけなければ、その後待ち受けていた山場に落ち着いて臨むことは難しかったかもしれない。

『余所者の集団』として丸ごと不審がられていた立香一座、中でも男女問わず目を奪われずにはいられないような美女であるマタ・ハリが、『魔女』を恐れる今のセイレムでこのような疑いを向けられるのは、ある意味で納得のいく話だった。

『淫らな体で誘惑された』と、『疑いようもない悪魔の所業だ』と、証言台の男は訴えてくるけれど、実際にはマタ・ハリの美しさに惹かれて言い寄ったのは男の方であり、当のマタ・ハリはそれを素気無く断ったのだということを、仲間達は知っている。

ふられて恥をかかされた腹いせだと、そちらの方が悪魔の如く非道な行ないだと訴えたとしても、同じ神の使途と信じている町の住人と、旅の一座の素性の知れない女とその仲間では、言葉の真実というものはたやすく霞んでしまう。

『一日に少なくとも一人、誰かがその首に縄をかけなければならぬ』。

その法則は立香も既に知っていた、キルケーの助けがあれば何とか乗り越えられることだって分かっていた、だけど。

張り上げた声も、伸ばした手も届かず、仲間がその身を捧げるのを見過ごすことしか出来ないのは、大丈夫だと分かっているも歯痒いし、何度経験しても慣れたくもないと立香は思った。

一座から、裁判によって罪人と判断され、刑を執行された者が出た。

理由や経過を考慮していない、ただそのひとつの事実で以って、それなりに受け入れられていたと思っていたセイレムの地で『信用できない余所者の異端者』となった立香達は、拠点としていたカーター家に火が放たれ、一部の住民が暴徒と化したその後の混乱に紛れ、キルケーの薬で仮死状態となっていたマタ・ハリを助け出した後に町外れの森に身を隠す。

そこで彼らは、前もって隠れ家を構築していたシバの女王と、彼女によって匿われていたマシュ。

そして、立香達と同じく罪人の身内ということで一層立場が悪くなり、同じように森に隠れていたラヴィニアと合流した。

四つの結び目、括られたのは無辜の民達。

食屍鬼が人々を襲う混乱に乗じて盗みを行ったり、前々から恨みを抱いていた

者を襲ったという言い分の真偽は、一人でも多くの住人を救うべく混乱の真っ只中で戦っていたカルデア一同ですら判別しきれない。

ひたすらに隠れ、もしくは逃げ回りながら、やっとの思いで幾度目かの惨劇の夜を乗り越えた住人達は尚更、次は我が身かもしれないという理不尽な恐怖を突き付けられた。

セイレムはもはや、怪しまれるのは余所者だからだとか、慎ましく清廉でありさえすれば大丈夫だとか、理性的な判断や価値観が尊ばれる場所ではなくなっていた。このタイミングにおける『いつも』との大きな変化は、アビゲイルと共にラヴィニアが一同の保護下に入っていたことだった。

それによってアビゲイルは、ラヴィニアを探しに町へと赴こうとはせず、ラヴィニアやシバの女王、町では死んだことになっているマタ・ハリと共に、森の奥の隠れ家で大人しく皆を待つことを選んだし。

ウェイトリー家の悲願ではなく友人を優先すると決めていたラヴィニアもまた、事を動かすために魔導書を携えて出頭し、共犯としてアビゲイルを告発することも無かった。

一見良いものと思えたその変化は、思いもよらない者の、思いもよらない行動を促した。

可愛く不憫な姪を想うあまりに口を噤んでしまっていたが、このような事態になつてしまつては、もう隠してはいられない。

沈痛な面持ちで瞼を伏せながら、魔術を行使したのは自身の姪アビゲイルであると断腸の思いで告発するカーターを驚愕の眼差しで見つめていた人々が、徐々に不穏な気配を纏い始める。

魔女を探せ、魔女を殺せと口々に叫ぶ人々を、法を無視する野蛮な振る舞いは許さないとホプキンスの一喝が黙らせた。

しかし、彼はあくまで無秩序を許さなかっただけであり、少女を庇ったわけでは断じて無い。

アビゲイルの出頭を求めることを公言し、新たな裁判を執り行うことを告げられた人々が、秩序の中の狂気に沸く。

アビゲイルが、自身の姪が町の人々によって逃げ場を奪われていく光景を前に、カーターは薄ら寒い笑みを浮かべていた。

五つの結び目、括られたのは魔女狩り將軍。

両親亡き後に新たな家族として慕い、信じていた筈の叔父が自身を魔女として告発し、町はすっかり魔女狩りの様相を見せていることを知ったアビゲイルは、その場で意識を失って倒れてしまうほどのショックを受けた。

特異点を作り出した魔神柱の正体、その最重要候補にランドルフ・カーターを据えたカルデア一同は、彼との接触を試みることを決める。

その為の作戦会議に集中し、一人で寝かせていたアビゲイルから目と意識を離れたほんの僅かな間に、彼女の姿は森の中の隠れ家から消え失せてしまっていた。

意識が一旦途切れても、なお苛まれていた恐怖と不安のあまりに衝動的に動き出してしまったアビゲイルが向かったのは、ラヴィニアと二人で細やかな儀式に興じた秘密の場所。

手間をかけて整えられた場所で、生け贄の血を捧げ、謎の呪文を唱えるという一連の流れは、本物の魔女から言わせればそれっぽいだけで特に何の効果もないお遊びに過ぎず。

込められていたものも更なる狂気などではなく、この状況で自分に出来ることを

必死になって考えた少女の、元の平和な日々が戻ることを一心に願う純粋な祈りだったのだけれど。

捜索中に発見したここを儀式の場と見定め、魔女が現れるのを待ち構えていた者達からすれば、目の前でそれらしいものが行われたという見せかけの事実だけで十分だった。

恐怖のあまりに涙目になって震える少女が、弱者を装って逃れようとしている魔女にしか思えなくなっている人々は、連行する際に抵抗されないようにと、恐ろしい魔女を少しでも弱らせようという思惑で武器を持った手を振りかぶり……ループの認識と記憶があったおかげでいち早くこの場所を思いつき、全力で駆けつけたサンソンによって防がれた。

ラヴィニアに案内された仲間達が追いつくまで時間を稼ぎ、更にはアビゲイル達を逃がすための殿を務め、『ちゃんと追いつきますから』と笑いながら言ったサンソン。

そんな彼との約束が、果たされることは無かった。

情報を得るべく町に潜んでいたロビンフッドが耳にしたのは、ホプキンス判事が

処刑用の荒縄で首を絞められて死んだことと、魔女を逃がした罪で連行され、直々に尋問を行なおうとした彼と二人きりになっていたサンソンがその下手人とされたこと。

被告人にはほんの一言の弁解も、仲間どころか公平な立場の第三者を呼んで弁護も頼むことも許されない、怒号と罵声が飛び交うばかりの形にすらなっていない裁判を経て、彼の絞首刑が決まったこと。

あまりにも不可解で強引すぎる一連の流れに、アビゲイルが襲われ、サンソンが捕らえられたあの場に居合わせていたランドルフ・カーターが……姪を助けるどころか、もはやその身を案じる素振りすら見せようとしていなかった男が関わっていると、考えない方が難しかった。

六つの結び目、括られたのはパリの処刑人。

頑固爺を一人殺すのに縄なんて面倒なものをあいつが使うか、一発で首を叩く切って終わりだ!!

……と、苛立ち混じりに声を荒げるロビンフッドに頷きながら、一同はサンソンの救出作戦を決行に移した。

魔神柱が動き出しているとしたら、森の隠れ家は安全な場所とは決して言い切れないと、いつそのこと共に連れて行った方が皆で守ることが出来て安全だからと、アビゲイルとラヴィニアの二人を伴いながら、隠れ家を守るために残ったシバの女王以外の全員で向かった丘の処刑台。

人の死を待ちわびる昏い歓喜に、強引に割って入ろうとした彼らの試みは、突如現れて一同の前に立ちはだかった者の存在によって妨げられた。

正に『悪魔』を思わせるような、不気味な仮面で顔を隠した謎の少年の登場という想定外の事態に、呆気に取られる一同……その中に二人ほど、別の理由で驚いていた者がいたことに、他の者達は気付かない。

感情を読み取れない無機質な声で、ここを通すわけにはいかないと、あれは彼が為すべき務めであり必要なことなんだと語る少年を、一同は仲間の救出を邪魔しようとする敵と見なした。

弱体化しているとはいえ、ただの人間とは比べ物にならない程度には強いサーヴァントを、それも複数を相手にたった一人で均衡を保つ少年に、こんな奴が魔神柱の下にいたのかと慄くカルデア一同。

焦る彼らの前で、ついにその時が訪れてしまった。

首を括った荒縄で吊られ、集まった住民達の歓声の中で、力の抜けた体を虚空に揺らすサンソン。

そんな彼の姿を前に真っ先に動いたのは、仲間を助けられなかった衝撃と絶望のあまりに立ち尽くしてしまっていた一同ではなく、今の今まで剣を交えていた相手に一瞬も躊躇うことなく背を向けて走り出した少年の方だった。

人混みを掻き分けるを通り越して弾き飛ばすような勢いで駆け、瞬く間に処刑台にまで迫った少年は、高々と跳び上がりながら振るった一刀でサンソンを吊るす荒縄を断ち切り、脱力している分それなりに重かった筈の彼の体を軽々と受け止めかつ担ぎ上げ、何処とも知れず走り去っていった。

仲間の救出を邪魔したどころか、遺体までも奪っていった彼の後を、すぐにも追いたかったのだけれど。

魂を苛まれるような狂気の日々の中で、事あるごとに氣遣ってくれた優しい人が、目の前で殺された……軽率な振る舞いに走った自分を庇い、身代わりとして捕まってしまったせいで。

その事実には、ギリギリまで擦り減ってしまっていたアビゲイルの精神は、もはや耐えられなかった。

「……………イグナ……………イグナ、トゥフルトゥクンガ」

「あびー？」

「大変ですセンパイ、アビーさんの様子が……………っ!!」

「我が手に、白銀の鍵あり……………」

「ダメよアビー、どうしてあなたがそれを!？」

あなたに教えた『降臨の儀』は、偽の魔導書に記した真似事の筈なのに!!」

「虚無より顕れ、その指先で触れ賜う」

「わが父なる神よ。

薔薇の眠りを超え、いざ窮極の門へと至らん」

セイレムの住人達の、魔女に連なる者の最期を見届けたことへの歓声が、新たな……真の魔女の誕生と降臨によって、恐怖と悲鳴に塗り潰される。

そして再び、最後の結び目の時が訪れた。

開廷

魔女と化したアビゲイルが暴走し、立香達によって鎮められたその翌日。

アビゲイルと、公衆の面前で人ならざる力を行使したという現行犯で捕らえられた、立香とキルケーの罪を明らかにするための法廷が、良くも悪くも馴染みの場所となった公会堂にて開かれた。

彼らを取り巻く世界は既に、『普通』を装う素振りすら窺えない。

騒めく傍聴席は腐敗臭を撒き散らす食屍鬼の群れによって埋められていて、その中には、生ける屍と同席しなければならぬ状況が早く終わってほしいような、仲間が無実の罪で糾弾される忌まわしい時がいつまでも来ないでほしいような、

複雑な思いを抱くカルデア一同の姿もあった。

「妖気、妖気……妖気蔓延、跳梁跋扈！」

「これはもう変装の必要は無さそうね、誰一人こちらを気にしてないし。

……うつ、あれは!？」

蔓延する化け物の気配に戦闘態勢を取らずにはいられない哪吒の隣で、彼女とは別の視点と認識から周囲の様子を伺っていたマタ・ハリが見つけてしまったものの、稀代のスパイとして大国を翻弄した彼女が思わず本気で言葉を失ってしまったものは、自分と同じタイミングで処刑された筈の者達の顔ぶれ。

彼女が驚いているのは、死者が蘇っているという今更の出来事に対してではなかった。

今までの日々の中で把握したこの世界における法則のひとつに、刑を執行された者は食屍鬼として蘇るが、その状態でもう一度倒せば二度目の復活は無いというものがあった。

それをあっさりと覆し、心を鬼にして確かに切り捨てた筈の者達が目の前に堂々と存在しているという現状に、自分達が今までに見聞きしてきた全てを疑いたくなる気持ちが進み上げてくる。

色々と吐き出してしまいたい気持ちと衝動を堪えながら、これからもっと大変なものに立ち向かわなければならぬ立香達の力になるべく、懸命に気持ちを奮立たせるカルデア一同。

そんな彼らが身をもつて作った壁の真ん中に、古ぼけて今にも崩れてしまいそうな本を抱え、強張った体を小刻みに震わせるラヴィニアがいた。

「ラヴィニアさん、大丈夫ですか？」

「……ええ、私なら大丈夫、大丈夫よ。」

アビー、必ず助けるから……そうしたら約束通り、一緒に外の世界へ」

恐怖に震えて唇を噛みしめながらも、親友を助けたいという一心で顔を上げ続けるラヴィニア。

永遠にすら思えるような一分一秒を耐え抜いたその先で、ついにその時が訪れた。見るからに憔悴し、カーターに手を引かれながら震えた足取りで現れたアビゲイルと、武装した兵士達によって両側を押さえられながらも、自らの足で歩き堂々と入廷を果たした立香とキルケー。

セイレムを蝕む狂気の日々を締めくくる、最後の魔女裁判が始まった。

そうして行なわれたものは正しく茶番、最初から決まり切っていた結末へと至るためのお芝居と称して良いものだった。

異端の力を揮おうともその心根は正しく、怖れられると分かっているがら守るために戦った者達が、馬鹿げた罪状によって貶められていく。

その痛ましさに耐えられなかったのは、予想した上で覚悟していた立香やキルケー達ではなく、正しい者の正しい行ないはどんなものであれ報われる筈と信じていた、信じたいと願っていたアビゲイルだった。

「もうやめて、もうたくさんだわ!!

私のために、誰かのために、誤解されることも恐れずに立ち上がった座長さん達

に何の罪があるというの!!

咎められなければならない誰かがいるのなら……それは私よ、私が魔女なのよ

!!

皆さんだってもう見たでしょう、魔女となった私を!!

こ、この私が魔女で、無辜の人々に濡れ衣を着せて……」

「いや、それでは困るのだ。」

そこに歴然とした動機が無ければならない、それでは我が目的は達せられない。

真の贖罪を、私は求める」

「……カーター伯父様？」

「皆も見たであろう、この者達作り上げた舞台を。」

巧妙な芝居職人は、見た者を惑わすだけの視覚的トリックを施す技を持ち得ていると聞いたことがあったが、それは確かに実証された。

あれだけのことが為せるのなら、その技術は当然、他者を貶めることにも使える筈だ」

「伯父様、私を魔女だと告発したのはあなたではないですか!!」

「それは誤解というものだ、アビゲイル。」

年頃の娘が嘘と妄想の中で遊ぶのはよくあることだが、お前は特にその傾向が強い。

故にお前は、まんまとあの者達に利用されてしまった。

私が暴きたかったのはお前ではなく、その裏に隠れていた者達だったのだよ」

「そ、そんな……」

「まともに聞くんじゃないぞアビゲイル、そいつはお前を利用するつもりだからな」

「黙れ魔女め、これ以上姪を誑かすな!!」

……傍聴席の皆にも願おう。

しばしこの法廷の進行を、私に任せてはいただけないだろうか？」

瞳を赤く輝かせながらのカーターの言葉に、傍聴席の食屍鬼達が沸き立った。

途端に一変した公会堂内の空気と、瞳から意思の光が失せて呆然と立ち尽くしてしまっているアビゲイルの様子を前に、魔女キルケーの脳裏に閃光が走る。

「……成る程、これはそういう儀式か。

裁判という確かな形式を経て加速した狂気を、形を得た罪状を、全てその子に負わせるつもりだね。

それも、その子自身がそれらの罪を自分のものだ、自分が償うべきものだ、と認識してしまうよう仕向けた上で」

「仕向けたつもりは無い。

これより詳らかにするものは全て、紛れもなく、アビゲイル・ウィリアムズが犯した罪だ。

その記録を、順に新たにしていこう」

「ま、待って……待ちなさい!!

私も証言をするわ!!」

壁となってくれていた仲間達の輪から立ち上がり、ひしめく食屍鬼達の注目を一心に浴びて震えながら、それでも自分を見据える眼差しだけは決して揺らごうとしないラヴィニアの姿に、ランドルフ・カーターこと魔神ラウムの、大魔女キルケー

の輕蔑の意が多大に込められた言葉にさえ揺らがなかった笑みが僅かに強張る。

そのままおぼつかない足取りで歩み出し、少しずつながらも確実に法廷の場へと近づいていくラヴィニアを、町中で忌避していた筈のウェイトリー家の少女を、咎める者や妨げる者は現れない。

死者だけでなく、僅かに残って紛れている生者までもが、その歩みを黙って見据えている。

まるで、『憐れな小娘に手を差し伸べてやろう』と上から目線の慈悲を抱いた、魔神の意図に従うかのように。

それを察したラヴィニアは、怒りと屈辱に込み上げるものをグツと堪え、乾いた喉に走る若干の痛みを押し通して語り始めた。

「ひ、人は、何も無いのに魔女とはならない。

人を誑かし、異端の力と技を授けた、悪魔の存在が必要不可欠な筈よ。

あのホプキンス、幾度となく魔女を裁いてきた専門家だって、魔女だけでなくその裏に悪魔が存在していることを何度も指摘していたわ。

そして私は、それが事実であることを知っている……私達ウェイトリ―は、その悪魔の手駒だったの」

「……成る程。

分かったよラヴィニア・ウェイトリ―、君の告発……いや、告解を聞き入れよう。わざわざこのような場で、悪魔と関わりのある身であったことを明らかにする意味を、もしや分からないなどとは言わないだろうね」

「ええ、そうね。

私も魔女よ、アビゲイルと同じく異端の力に手を染めた者」

「あ、ああ……駄目よラヴィニア。

あなたまでこちらに来ては駄目、逃げて……っ！」

呆けてしまっていたアビゲイルの瞳にほんの僅かな意思の光が戻り、自由に出来る思考の全てで親友の身を案じる。

そんなアビゲイルの気持ち치가ラヴィニアには嬉しかった、それ以上のものを返したいと思った。

例えば、この関係の始まりが悪魔によって意図されたもので、二人の間にある思い出の大部分が、閉ざされた歪な世界の中で作られ、捻じ曲げられたものだったとしても。

二人で過ごした秘密の時間と紡いできた絆は、紛れもない本物だったから。

「新たな証拠品を……ウェイトリー家に伝わる、秘伝の魔導書を提出するわ。

我が家が代々追求してきた存在、今のアビゲイルに力を与えている御方に関することが、記されているものよ」

「ほう、それは興味深い。

裁判を円滑に進めるものならば、喜んで歓迎しよう。

残念ながら縛り首を免れるまではいかないだろうが、この本の内容の貢献具合によつては、せめて苦しまないようにと配慮する余地は十分にあり得るだろう」

「え、ええ、それは……何ともお優しいことね!!」

「ううっ、があっ……!!?」

「正体を現しなさい、悪魔!!」

魔導書を受け取ろうと、手を伸ばせば届く位置にまで歩み寄ってきたカーターに、ラヴィニアは抱えた魔導書の陰に隠していた小袋を掴んで投げつけた。

残念ながら、咄嗟に庇った腕に妨げられて、狙った顔面に叩きつけることは出来なかったけれど。

開いた口から衝撃によって迸り、カーターの体に降り注いだ粉の効力は、特定の相手に対してならばそれで十分に発揮できるものだった。

「霊体を物質化するイブン・グハジの粉末よ、誰の死体から作ったのか知りたい!？」
「ぐ、ぎ……があ、ガアアア!!」

お、おのれ、ウェイトリイイッ!!」

悶絶するランドルフ・カーターの顔が、見知った名士ではなく、目を赤く爛々と光らせるカラスのものに変わった。

本性を隠すことが出来なくなった魔神のカギ爪のような手が、枝のように細く折

れそうなラヴィニアの体を掴まえて締め上げる。

慌てて駆けつけようとしたマッシュ達の動きは、人の肉を求める本能を露わにしながら立ちはだかった食屍鬼の群れによって妨げられた。

「おのれ化生ども、退け!!」

「ラヴィニアさん!!」

法と秩序の最後の砦であった筈の法廷が……それを装いながら、実際には静かな狂気によって満たされていた場が、戦闘の喧騒に染まるのは一瞬だった。

どさくさに紛れて被告人席から逃げ出したキルケーと、彼女によって助け出された立香の手が、魔神ラウムによる干渉と想定を超えた事態の連続によるショックが合わさって、体も心もピクリとも動けなくなってしまったアビゲイルへと向けて伸ばされる。

それを妨げようとした魔神ラウムの意図はとある干渉によって邪魔され、思考と行動がほんの一瞬停止した隙にアビゲイルを確保してしまった苛立ちが、その状

況を作り出した元凶へと向かう。

強大な魔神に捕らえられて締め上げられているという、人間からすれば命の危険を身に沁みて味わっている筈の状況で。

少女の小さな手に握れるだけの小さなナイフを、人外の存在の腕に突き立てながら引き攣った笑みを零しているラヴィニアの姿は、魔神の目から見ても遂に狂ってしまったのかと思えてしまう程に異様なものだった。

「ひっ…ひへっ、くひひひっ……」

「……………ラ、ラヴィニア、お前は」

絞められた骨と肉が軋む感触と、肺から絞り出されて意図せず出したものではないような呻き声に、激昂に任せて彼女の体を千切りかけていた魔神ラウムは懸命に己を鎮めさせた。

数千年もの長い間、より高度な視点と機能であらゆるものを観測してきた魔神柱には、自分達が知り得ないものはこの世には無いという自負があったから。

そんな魔神が、数千年をかけて積み上げてきた絶対の価値観をひっくり返してく
るようなものを目の当たりにさせられて、追求せずにはいられなかったから。

「何故だらヴィニア、何故お前はこのような行動に出た。

私を恐れていた、私と相對した時は常にその身を恐怖に震わせていた……今この
時においても、変わることをない怖れを抱き続けているお前が!!」

「強靱な精神を持っていた訳でも、力や才能に恵まれていた訳でもない!!

ただのか弱い人間であった筈のお前に何故、勝ち目のない相手に対して齒向かう
ような英雄じみた真似が出来たのだ!!」

人理焼却及び修正の行程とカルデアとの攻防を経て、心身共に酷く弱く、同族内
で傷つけ合わずにはいられない本能を持っていて、始まる前からやり直してやらな

い限り救いようが無い哀れな存在だと思っていた人間の中には、ごく稀に他の大勢を救うことが出来る程に強靱な個体が現れることもあるのだと、魔神達は価値観と認識に多少の修正を余儀なくされた。

それでも、それはその者達が素質を持った特別な個体だったというだけで、他の大多数の人間達がどうしようもない程に愚かで弱い、高次の者が救ってやらなければならぬ哀れな存在だという認識はそのままだった。

そして、今日の前にいる少女は、ラヴィニアは、そんな魔神の認識を今一度揺るがしてみせた。

サーヴァントの誰かだったら、あの場で無防備に近寄らせるようなことは流石になかった。

ラヴィニアだったから、魔術師の家系に生まれたというだけの少女だったから、アビゲイルのような特別な素質を持たない哀れな一人の人間に過ぎなかったからこそ。

自分は憐れみを持って、せめてもの救いをもって、彼女に手を差し伸べてやったのに。

油断していたどころか脅威になり得るとは思っていなかった、ただの人間が魔神に歯向かう事態なんて欠片も想定していなかったからこそ、ラヴィニアの不意打ちは成功したし、鼠の牙にも劣るような一太刀は、計画の要たるアビゲイルを一瞬とはいえ忘れてしまう程の衝撃を魔神に与えた。

その気になれば一瞬で捻り潰せる存在を、いつそのこと今すぐそうしてしまいたいという本心を懸命に堪えながら、自分の何百分の一しか生きていない少女に対して追求の声を張り上げる魔神。

そんな彼へとラヴィニアは、血が滴る口の端を三日月のように吊り上げ、呼吸をするだけで痛みが走る喉と肺を懸命に動かしながら、そんな状態でなければ高笑いを上げていたであろう気持ちをそのまま言葉へと変えた。

「大切な何か、誰かのためになら……どんなに辛く苦しくても、どんなに怖くても、勝ち目なんか無いって分かっていても、それを持ち越えて頑張れる。

本当は誰だって持っているのに、見つけるのはとても難しく、気付けないまま終わる人だって少なくなくて……だけど一度掴むことができれば、震える足を踏み

出させてくれる。

それが『勇氣』……弱いからこそ、恐怖というものを知っているからこそ、いざという時に奮い立てる強さってものが人にはあるのよ」

力も知恵も、最初から持ち得て生まれた魔神にとって、『弱い』とは『何も出来ない』ということだった。

理不尽や困難に対して、ただ苦しみ嘆くことしか出来ない人間達が憐れで、とても見ていられなくて、それが出来る力を持つ者としてどうにかして救おうとした。何千年の時を、目立つ悲劇や惨劇ばかりに目を止め、ひたすらに憐れみ続けて過ごしてきてしまったせいで、彼らは気付けなかったのだろう。

人間という存在が本当に、困難の前に蹲って嘆くことしか出来ないような、彼らが思っていたように弱くて憐れなだけの存在でしかなかったのなら、その歴史は人理焼却を可能とするほどの熱量を生み出すことはなかった筈だと。

『英雄』とは、特別な素質と可能性を生まれ持った特異個体ではなく、人という種の誰もがその身に秘めていた可能性を、何らかのきっかけや巡り合わせによって発

露した者。

今まで抱いてきたものを根底から覆してくるそんな新説を、目の前の具体例によって突き付けられ、言葉を失った魔神の胸中は計り知れない。

言葉でも行動でも、何らかの形でそれを表すよりも前に、魔神が見せた決定的な隙を逃さず降ってきた巨大な刃が、ラヴィニアを捕らえる魔神の腕を斬り落としたのだから。

床に叩きつけられる寸前で受け止められたラヴィニアだけでなく、いつ魔神に殺されてもおかしくない状況にある彼女を一刻も早く助けるべく、食屍鬼の群れと必死の戦闘を繰り広げていたカルデアの一同もまた、突如現れた男の存在をすぐさま受け止めることが出来なかった。

優しく微笑むその顔は、必死に伸ばした手が間に合わずに掴めなかった筈の、目の前で永遠に失われてしまった筈の仲間のものであったから。

「……サン、ソン？」

「すみませんでした、助けに入るのが遅れてしまって。」

よく頑張りましたね、ラヴィニア」

「……………ああ、そっか。」

あの悪魔、あなたとも繋がっていたのね」

その言葉を受けたサンソンは、ただ無言で笑い返しただけだったけれど、ラヴィニアにとってはそれで十分だった。

斬り落とされた腕の断面を押さえて悶える魔神と、呆けてしまっていたカルデア一同の耳に、錆びた金具が軋む独特な、セイレムで過ごした限られた日々の中で何度も聞いた覚えのある音が聞こえてきた。

それは、公会堂入り口の大きな両開きの扉が開かれる音。

反射的に振り返った一同の目に映った、向こう側から現れた者達の姿が、只でさえ混乱状態にあった一同の思考力を更に吹っ飛ばした。

二つあった人影の片方は、役柄に染まり過ぎていた身で舞台に戻ってしまうのはまずいという理由で、この場への同行が叶わなかったシバの女王。

もう片方は、サンソンと同じように既にこの舞台から退場した筈の、仮に無事

だったとしてもこんな形で現れるなんてことは到底在り得ない筈の者だった。

「マシュー・ホプキンス、なぜお前が!？」

『なぜ』とは異なることを、法廷に判事が現れることの何がおかしい」

自身が刑を執行した筈の女奴隷を、その役割を果たしていた者を付き添わせながら、腐敗臭を纏う死者がひしめく狂気と異端の法廷に、秩序を司る者として堂々と踏み入っていくホプキンス。

叶うことの無い贖罪を求めて手を伸ばした、愚かで憐れな、都合が悪くなればどうにでも始末してしまえる駒でしかなかった筈の男の鋭く冷たい眼差しが、魔神を貫き竦ませた。

「最高判事たる私が不在の間に、勝手に開かれた法廷が正式なものとは認められない。
い。

ただ今より開廷する……追及するのは、ここセイレムを魔物が跋扈する狂気の地

へと変貌させた者の正体と、その目的。

被告人は、ランドルフ・カーターこと魔神ラウム」

「なっ…!?!」

「法と秩序など名ばかりの茶番劇は終わりだ、これより執り行うは真の魔女裁判。貴様の思惑、貴様の罪……貴様がこの地で為そうとした全てを、今この場で明らかにする」

ほんの少し前までは歯牙にもかけなかった筈のホプキンスの言葉に、何故か異様な迫力と危機感を感じた魔神は、なりふり構わずその場からの離脱を試み……いつの間にか展開されていた、異常な程の拘束力を持った結界によってその思惑を拒まれた。

「はい、ダメですよ。」

かけられた容疑が晴れない以上は、被疑者は決してこの場からは逃げられません。『法廷』というごく限られた空間において、判事様の言葉は王や神以上に絶対なもの

のです。

分かってますよねえ、だって……『裁判劇』なんて特殊な結界を作り出し、いように使って自分以外の全てを翻弄していたのは、あなたなのですから」

「ホプキンス判事は殺された、セイレムを守るために殉じたのだ!!」

衛兵、勇敢なる市民達よ、判事を騙る悪魔をこの地より追い出せ!!

殺してでも排除しろ!!」

「立香、邪魔をさせるな!!」

「了解、周りは任せろ!!」

「ちよっ……待て待てマスター、一体何がどうなってるんだ。

あの判事が生きてたとして、何であの野郎の言う通りなんかに……」

「混乱するのも訳分かんないのも分かるけど、詳しいことは後で話すから、とにかく今は切り替える!!」

食屍鬼達を、あの場に近づけさせないで!!」

マスターとして堂々と指示を出した立香に応え、戸惑いながらも意識を切り替え

たサーヴァント達が、法廷の中心へと向けて一斉に群がり始めた食屍鬼達の前に立ちはだかる。

血肉を求め、本能のままに暴れまわる魔物が取り巻く中央に、ぽっかりと開いた異様な空間の中で。

歴史に悪名を刻んだ、多くの人々を震え上がらせた魔女狩り將軍の本領が、真の悪魔を相手に発揮されようとしていた。

サンソンが無事だった理由

シバの女王がキルケーと交渉して分けてもらっていた仮死薬を、ホプキンス（リンク）を通して予め渡しておいたから。

以下、きちんと書いたのですが、いざ全体に組み込もうとするとテンポが悪く

なってしまったので丸ごと削ったシーンです。

アビゲイルの暴走を仲間達と共に食い止めた立香は、異端の力を使用した現行犯としてアビゲイルやキルケーと共に捕らえられ、翌日の開廷に備えて牢に閉じ込められた。

そんな彼の下に、ランドルフ・カーターが訪れた。

正体が魔神柱であることを、もはや隠そうとも、繕おうともしないまま。

「驚いた様子は無いか、それもそうだな。

君達は随分と早い段階から、私のことを疑っていたようだからね。

だからこそ私も、君達に正体が露見することを恐れることなく、多少強引な手段を取る事が出来た」

「……俺達を殺す気か？」

「まさか、私は君に礼を言いに来たのだ。

姪を鎮めてくれて感謝するよ、あの子が力を揮うにはまだ早かったからね」

「アビゲイルに何をするつもり……いや。

あの子に一体何をしたんだ」

「勘違いはしないでくれ、私はあの子を救いたいのだ。

心の底から、救済しようとしている」

「アビゲイルが、助けてほしいって言ったのか」

「あの子は常に、それを願いつづけている」

「……何も分かっていない。

あの子は力が欲しかったんじゃない、ただ自由になりたいだけだったのに」

「ああその通りだ、分かっているとも。

だから私は、あの子に力を与えられるように腐心した。

今のあの子は何よりも自由だ、望んだことをいくらでも叶えることができる。

世界が平和でありますように、人々に救いがありますようにと。

誰よりも純粹に、一心に願いつづけてきたあの子こそが、我々では成し得なかった

偉業を果たす。

人類の救済を、その大いなる『痛み』によって」

「痛みによる救済って……ちよっ、待て待て待てそれは無い!!

中二的発想をクソ真面目に抱き続けて、賛同者がいないのを間違っているからじゃなくて自分が特別な存在だからだっていう結論に至った上に修正される機会を逃し続けた結果、世界を救えるのは自分しかない、自分は世界を救わなければならない、世界を救うためには一度滅ぼさなければなんて独りよがりな責任感からの本末転倒な結論に至った孤独（笑）なラスボスの思考回路まんまだろーが!!

何で魔神柱の発想は、通る道が違っただけで最終的にそこに行き着くんだ!!

時間神殿では色々と余裕が無くて出来なかったけど、あの時も本当は突っ込みたくて堪らなかったんだからな!!」

「……………ミスター・立香、君は一体何を言っているのかね」

「ごめんマスター、今だけは私もその魔神に同意する」

「と、とにかく……君には期待しているよ、ミスター・立香。」

明日の法廷で魔女として裁かれることとなるアビゲイルを、君なら救ってくれるとね。

今まで誰一人、私自身でさえ、それを成し遂げることは出来なかった。

だから再び客人を……君を、カルデアを招いたのだ」

「……ん？」

待て、待てよカーター、なぜ過去形なんだ。

よもや、この数日間を幾たびも幾たびも繰り返して成果を得ようとしている、とでも？

チープだ、乱雑すぎる、まるで美学が無い!!」

「何故だね、かの勇者でさえ用いた手段ではないか」

「あれは迫る滅亡に抗うための足踏みだ、他に打つ手が無い状況での必死の足掻きだ!!」

何も知らない多くの人々を、無意味な苦痛の中で翻弄したお前のそれとは全くの別物だよ!!」

神代の大魔女キルケーが込み上げるがままに露わにする怒りを、魔神柱は歯牙にもかけず。

面会時間の終了という、至極現実的な理由で去っていく後ろ姿を齒噛みしながら

見送る事しか、今の彼らには出来なかった。

最終公演

「始めに、このセイレムで貴様が為した罪状を順に述べるとしよう。

まずひとつ……人類の救済を成し遂げるための新たな手段を模索するために、時間神殿での決戦から逃れて再起を図った貴様は、本格的な活動の場として、惨たらしい歴史と因縁が残るセイレムの地に目を付けた。

そこが既に、かつて起こった様々な悲劇や惨劇を過去のものとし、その流れとは何の関わりも無い多くの人々が、平和な今を暮らしている場所なのだということも構わずに。

加えて貴様は、セイレムの地と歴史を再現するための結界を構築するに至って、

それに吞まれた幾万もの人々を燃料として利用した。

……誰に求められた訳でも、誰に許可を得た訳でもない。

独りよがりな思惑が叶いさえすれば、何をどれだけ利用しても構わないと言わんばかり。

この傲慢極まりない思考と振る舞いは、正しく悪魔と呼ぶに相応しいものである
う」

自分なりの人類救済を目指した行動への散々な言われっぷりに、噛み締めた奥歯を鳴らしながらも、自らの心身に見えない枷が幾重にも巻かれ始めている現状を、魔神ラウムは冷静な思考で観測していた。

シバの女王も言っていた通り、『法廷』という特殊な場において、『判事』の言葉と判断は絶対のものとなる。

加えて、後世にまで伝わる二つ名となる程に数多の『魔女』とそれに連なる『悪魔』という概念を吊るし上げた『マシュー・ホプキンス』の言葉ともなれば、『魔女裁判』で『魔神』を裁くという現状においては、もはや『相性がいい』なんてレ

ベルで済ませていい話では無くなっていた。

時には無実の罪さえも造り上げてきた彼にとって、述べられた罪状が真実であるか否か、それを証明出来るかどうかなんて重要ではないし、気にすることでもないこの場、この状況で彼が語り、認めた罪状の全てが不可視の縄となり、彼が対象とした罪人を縛り上げていく。

このままでは、例えば魔神柱であろうと雁字搦めにされてしまう。

そう判断した魔神ラウムは、効率というものを最優先に考える魔神ならではの迅速な行動に移った。

「Cloak! Croak! Croaky!

認めてやろうホプキンス、確かに貴様は優れた判事だ!!

だがしかし、それはあくまでこの『裁判劇』の舞台上に限ってのこと!!

舞台の幕を一旦降ろす、そうすれば貴様の力は私には及ばない!!

今この時より、『八巡目のセイレム』を開始する!!」

予定では今回で計画を完遂させるつもりだったが、ここまで想定外の事態が重なり、修正が困難になってしまっただけはもはや仕方がない。

これ以上続けようものなら、領域を展開するための燃料となっていた、只でさえ限界に達していた今現在のセイレムの住人達は、一人残らず命を落とすであろうことを予想するのは容易かったけれど。

それは本当にただ思いついただけで、例えほんの一瞬だとしても、魔神ラウムを躊躇わせることは無かった。

この計画は、人類という種そのものを救うためのもの。

たかが町ひとつ、たかが数万人の住民と引き換えに、未来永劫に渡って幾億幾兆もの人々が救えるのならば代償としては安いものだ、単純な数の多少の問題でわざわざ考慮するようなことではないと。

『人間のため』だという絶対の自信と共に、魔神は心からそう思っていた。

耳障りな甲高い鳴き声と共に、カラスの頭を持った悪魔が、無数の目玉が連なる醜悪な柱という本性を現した。

それと同時に、蠢く死体の群れの中に僅かばかり点在していた生者達が、振り分

けられた『役柄』を放って素の自分に戻るかのように食屍鬼へと変じ、周囲で蠢く死体達に紛れて瞬く間に見分けがつかなくなっていく。

『舞台』の幕が一時下りたことで露わとなった、セイレムの真の有り様を目の当たりにさせられた一同は、長きに渡って思考の大部分を埋めていた靄が晴れ、同じように体の自由を奪っていた枷がようやく外れたかのような解放感と共に、数多の狂気に隠れて見えずにいたこの地の『真実』に辿り着いた。

「まさかこいつら……どいつもこいつも、村人全員が最初から食屍鬼だったのか!?

理不尽な裁判からの処刑も、毎晩の惨劇も、恐怖に駆られた住人達の暴走も、何もかも全てが台本に沿ったお芝居かよ!!」

「……そういうことだったのね、ぞっとしないわ。

『舞台』の流れに沿いながら、それでも『役柄』には染まり切らないようにと。

意識して気を付けていたつもりだったのに、それが本当に『つもり』でしかなかったなんて」

警戒や諜報の役割を担い、任務を遂行するため、仲間達を守るために意識や思考の大半を割いてきたロビンフッドやマタ・ハリにとっては、信じがたい上に腹立たしい事実であろう。

自分達がこの地に来てから行ってきたこと、気にかけてきたことの全てが、興行主である魔神の手のひらの上で行なわれていたことに過ぎなかったのだから。

しかし今、そういった状況の前提となっていたものの、『裁判劇』という世界観は崩れ去った。

『セイレムの地で起こっていることを解明し、特異点を消滅させるために乗り込んできたカルデアの者達』という役柄から解放され、元の力と認識を取り戻した一同にとって、ここから先はもはやお馴染みの魔神柱退治。

正直言ってもまだ事態の全てを把握しきった訳では無いが、魔神ラウムがこの期に及んで未だ諦めておらず、再起を図っての離脱を試みているということを理解出来ただけで、判断を下すには十分だった。

今までの攻防の中でかなりの数を倒した筈なのに、役柄を捨てて本性と本能を露

わにした者達がこの地で唯一の生きた肉を求めて町中から集まってきているらしく、公会堂に雪崩れ込んでくる食屍鬼の数は尽きる気配が窺えない。

この物量と屍ならではのしぶとさにいつまでも手間取っていては、今一度の繰り返しを行なおうとしている魔神ラウムの試みを成功させてしまう。

狂気の日々の中で擦り切れ続けた精神と、戦闘の連続で酷使されて既に限界が近くなっていた体に、これが最後だからと鞭を打つ。

そうして、何度目かの戦闘態勢を取ったカルデア一同と、腐って崩れかけた体を蠢かす食屍鬼達の頭上に突如、空気が切り裂かれる甲高い音と共に一筋の閃光が走った。

『ぐああああああっ!!!?!』

まるで人間が高圧電流を浴びたかのような衝撃が、人智の及ばない力と無限の再生力を持つ身である筈の魔神に、苦痛と困惑が入り混じった絶叫を迸らせる。

想定外の出来事に、現状を一瞬忘れて呆けてしまった一同は、必要が無ければあ

まり直視したいとは思わない魔神の体表に、深々と突き刺さる矢の存在に気がついた。

「……あれは、今の光はあの矢か？」

「何だアレは、一瞬ゼウスの雷霆かと思ったじゃないか!!」

アレを食らったのが魔神じゃなくもつと弱い何かだったら、今頃痺れるどころか跡形も無くなってるぞ!!」

「……………知っている。」

あの矢、あの光を、私達は知って……………」

自身の頭のすぐ上をとんでもないものが掠めていった衝撃で、半ば引っくり返った声を上げるキルケーをよそに、呆けた思考を懸命に巡らせるマシュ。

そうして彼女は、自分達が未だ、正常な記憶と認識の全てを取り戻せていた訳ではなかったことに気がついた。

デミ・サーヴァントの戦闘能力を失った身で、それでも何とか力になりたいと

思つて、今の自分でも出来ることを懸命に訴えた我が儘を、『また二人で頑張れるのが嬉しい』と笑いながら『彼』が率先して受け入れてくれたこと。

『彼』以外の全員が最善の選択だと確信する中で、恥ずかしさに悶えるさまを横目に笑いながら、『彼』の物語をまとめた脚本を皆で読み合わせたこと。

そうして、万全だった筈の準備を整えて特異点に乗り込んだ次の瞬間には、自分達の傍らどころか意識からも、『彼』の存在は跡形もなく消え去ってしまったこと。

認識が確かなものになっていくと同時に、徐々に込み上げた恐怖や不甲斐なさ、その存在を求める声と、『彼』の名前を意味する音となって迸った。

「リンクさんっ!!」

振り返った彼女の視界に飛び込んだのは、マッシュ・ホプキンス判事の巖のような颯め面ではなく、光そのもので形作ったかのような美しい弓と、それを構えながら凜と立つ金の髪と緑の衣の少年の姿。

マッシュを始めとした仲間達の目が自分を見て、声が自分を呼んだことに気づいた彼は、一瞬見開いた目を細めて安堵の吐息を深く深く吐き出した。

その時に彼が浮かべていた笑みが、見ていて悲しくなるような痛々しいものだったことに気づいた立香は、あの時笑って背中を押してくれた、今回も舞台裏での暗躍に徹してくれていた彼が、やはり辛かったし寂しかったのだということにも思い至ってしまう。

焦燥に駆られて思わず駆け出しかけた立香の足を止め、まだ何も終わっていない現状を思い出させたのは、居合わせた者達の鼓膜をぶち破りかねないような勢いで轟いた魔神ラウムの絶叫だった。

『ば、馬鹿な……勇者、勇者リンクがなぜセイレムに!?!』

「そこまで驚くか、まあそうだよな。」

『舞台劇』という形で成り立っていたこの世界においては、『役柄』を振り当てられないままその舞台から追い出されてしまった者は、誰に認識もされないし何に干渉することも出来ない、それこそ居ないも同然の存在になる。

そんな状態に追い込まれば、いくら『俺』でも手の出しようが無い筈だっ
思っただろ？

……ああ、その通りだ。

最初の頃は、自分でも嫌になるくらいに、本当に何も出来なかったよ。

お前としては、諦めて俺だけ先にカルデアへ帰っているか、誰も知らないところ
で力尽きて野垂れ死ぬかでもしていれば、それで万々歳だったんだろうけど」

「舐めるなよ魔神柱」

誰に聞かせるつもりでもない、自嘲じみた独り言のようだった呟きの矛先が、迸
る殺気と瞳孔が開いた剣圧のような眼差しと共に、魔神ラウムへと向けられる。

それは対象外かつ、自分達に向けられることは絶対にあり得ないと信じているカ
ルデア一同でさえ、余波だけで竦み上がらせてしまう程の威力を伴っていて。

苛烈で容赦の無い行動指針こそ備えているものの、基本的には穏やかで優しい筈の彼がここまで怒り狂っている理由が分からず、震えながらひたすら困惑するばかりのマッシュ達を他所に、立香には何となくだけれど察しがついていた。

リンクは度々、「自分は『英雄』ではなく『勇者』だ」と、まるで念を押すかのように口にはしている。

『勇氣』という弱さを前提とした強さを司る存在として、他の誰もが心と膝を折ってしまうような困難を前にしても挫けることなく立ち向かえたり、諦めないで乗り越えたりすることが出来るだけで、痛いことや辛いことは普通に嫌だったり、命と人生を犠牲にして功名を得るよりも家族や友人と一緒に平和に暮らす方が好ましかったりと、個人としてのの価値観や感性は極一般的なものなのだという意味が、その言葉には込められていた。

要するに彼は、『勇者』ではなく『リンク』という一人の個人として、心底からブチ切れているのだ。

仲間達に存在ごと忘れられた上に、能力や手段を著しく制限された絶望的などん詰まりと言っていいような状況と、狂気の日々の繰り返しの中で在るかもわからない

い打開策を探しながら独り奮闘するという、彼が『勇気ある者』でなければ途中で身も心も折れてしまっていたであろう苦行に、この身を追い込んだ魔神に対して。

「方法が分からない？」

「手段が無い？」

「力が足りない？」

「そういうのを全部ぶっ潰しながら、どうしようもないようなことをどうにかしながら、『俺達』は世界を救ってきたんだよ!!」

「もう一度言うぞ!!」

「『ハイラルの勇者』を……人間を舐めるな!!」

一身にぶつけられた魔神に対して、同情してしまいたくなるような咆哮を上げたリンクへと、上擦った声で命令を受けた食屍鬼達が山となって一斉に襲いかかった。リンクが多数相手の戦闘を得意としているのは知っているけれど、いくら何でもあの数では物量で圧し潰されかねない。

急いで助太刀に入ろうとした一同が、次の瞬間に目の当たりにしたのは、飛びかかった食屍鬼達どころか世界そのものを両断したかのような一閃だった。

体のどこかしらから真っ二つにされた大量の食屍鬼達が、床に落ちるよりも先に消滅したことで、瞬く間に開けた視界の先。

そこにいたのは金の髪と緑の衣の少年ではなく、銀の髪に銀の鎧を身につけ、燃え上がる憤怒を表したかのような紅い隈取で顔を彩った鬼だった。

時間差で押し寄せてきた食屍鬼の第二陣にも構わず、切っ先で天を貫くかのよう

に高々と掲げられた両手剣の刃が、眩い輝きを纏い出す。

「み、み、み、皆伏せてええええっ！ー！！」

まだ力を溜めている段階だというのに、現状で既に余波だけで吹っ飛ばされかねないほどの魔力が集中していることに逸早く気付いたキルケーが、ただの少女のような半泣きの悲鳴を轟かせた。

リンクという少年が良くも悪くも『やらかす』ということをし、既に信頼と言っているレベルで知っていたカルデア一同が、瞬間的にそれに応えて身を屈め守りに徹する。

『仲間を巻き込むかも』という最後の枷が外れたリンクは、押し寄せる食屍鬼と、その向こうに鎮座する肉の柱へと向けて、鬼神の力が込められた大剣を真っすぐに振り下ろした。

身を屈めて臉を固く閉じていたのにもかかわらず、『眩しい』と感じさせたほどの光が収まり、数秒の間を置いて徐々に顔を上げた一同の視界に入ったのは、元は

ひしめいていた食屍鬼がそこだけ消滅したらしい線状の空白地帯と。

その終点で、巨大な体の中心に走った境目から、体の両側が徐々にずれ始めている魔神柱の姿だった。

「……………ふう、スッキリした。

いくら『これ』が反則的なレベルで強力だとは言え、怒りを溜め込むのが前提条件じゃあ安定して使うのは難しいし、俺もあまりやりたくないな……………」

いつの間にか、見慣れた金髪と緑衣の姿に戻り、酷く疲れた様子で肩を落としていたリンク。

そんな彼の手には、先程の鬼神を思わせる銀髪の青年の仮面が収まっていたのだが、程無く光と化して消えてしまった。

「ごめん皆、俺もう疲れたからあと任せた……………」

「いやいや十分、今までほんっとお疲れ様!!」

今の攻防で食屍鬼は殆ど一掃されてるし、魔神柱もあの状態なら後はもうとどめを刺すだけ……って、え？」

理不尽な日々の中で溜めに溜めていた激情をここぞとばかりに解き放ち、魔神柱を縦に両断するという大戦果を挙げたりリンクを労った立香は、おかげで体力を温存出来た仲間達と共に決戦に移ろうとしていたのだけれど。

その意気込みは、今までの経験からまだやれる筈だと思っていた魔神が、二つに分かれてしまった体を復活させようとする気配も伺えないまま消滅を始めたことによつて、思いがけず水を差されてしまった。

『croak……croak………』

「……終わった、の？」

「魔力反応が著しく低下している、ここから盛り返すのは難しいと思っただろうね」

あれだけ苦勞させておきながら、こんなあっさりと……と、喜ばしく思いながらも釈然としないものを感じていた一同の前で、完全に塵と化して大氣に散った魔神柱。

異変に真っ先に気づいたのは、少し離れたところから広い視野でその状況を見ていたリンクだった。

「まだだ皆、頭の上!!」

「なっ…!?!」

「しまった!!」

目の前で起こっている消失にばかり気を取られ、塵が空中で集まり新たな形を成そうとしていることに気づくのが遅れた。

それは、魔神の化身と捉えるにはあまりにも弱々しい、一羽の瀕死のカラスであつた。

残されていた力の殆どを費やして立香達の目を誤魔化し、ほんの一時の猶予を得

た魔神ラウムが、最後の命を燃やしながら羽ばたく先には、サンソンによって戦場から遠ざけられていたアビゲイルとラヴィニアの姿が。

例え死にかけていようと、か弱い人間の体程度ならばたやすく貫けるであろう嘴が、立ち塞がるサンソンの背の向こうで互いを庇い合う少女達を狙っていた。

『アビ、ゲイル……アビィィゲイルウウ………っ!!』

「もしかして、アビゲイルを道連れにする気!？」

「望みが叶わないのならいっそのことってか!!」

「小癪な、往生際の悪い!!」

「ロビン、射て!!」

立香の命を受けて瞬間的に放たれたロビンフッドの矢が、背後から魔神を追いかける。

あとほんの一瞬で魔神に追いつき、貫く……と思われた矢が空中で粉碎されたのは、正しくその瞬間だった。

生々しい吸盤がびっしりと並び、何処からともなく虚空から現れた、巨大な蛸を思わせる触手によって。

慈悲無く叩き潰されて、血だまりの中でぐしゃぐしゃになった魔神ラウムの無残な姿が、轟音と共に振り下ろされたそれと、割れてヒビが入った公会堂の床の間に存在していた。

「お……おのれ魔神、図りましたね!？」

『アビゲイル……アビー、優しき我が姪……このラウムを、信じて、くれた。お前に力を、救いを……他の、何に代えても………』

「伯父様!!」

シバの女王が上げた悲鳴じみた声にも構わず、血を吐きながら途切れ途切れの声でアビゲイルの名を呼ぶ魔神ラウムが、二本目の触手によって今度こそ本当に肉塊と化する。

涙に濡れた声で、尚もそれを『伯父』と呼んだアビゲイルの様子からして、そこ

に彼女の本意が無いことは明らかだった。

「……………あ、あの野郎、一体何がしたかったんだ」

「自分の命と引き換えに、彼女の中の魔女を引き出したのです。

命の危険を前に露わとなった生存本能が、秘められていた力を無意識に行使する……目覚めるきっかけとしてはあり触れたものだけれど、故に効果は確かなものとなりますわ」

「アビー!!」

「だ、だめ……来ちゃだめ、ラヴィニア!!

誰か、ラヴィニアを連れて行って!!」

「あびー!!」

「アビーさん!!」

「お願い、誰も来ないで!!」

膝をついてへたり込み、頭を抱えながら、懸命に身を小さくさせるアビゲイル。

そんな彼女の体からは、サンソンが死んだと思われた、彼女が魔女として目覚めた時と同じ、得体の知れない禍々しい魔力が迸っていて。

周囲の虚空からは、何本もの巨大な触手が現れて、叩き潰す対象を探しているかのように蠢いている。

「やめて、やめて……私、何も壊したくない、何も傷つけないのに」

『魔女』という特異な存在としての本能、込み上げる破壊衝動と残虐性に、必死になって抗うアビゲイル。

そんな彼女の痛々しい姿を前に、愛用の杖の柄を音が鳴る程に握り締めながら、誇りと決意を新たにした者がいた。

概念のパワープレイからの、『こうなってはむしろ邪魔、捨てる！』『かかった

な！』のコンボは、書きながら「大奥だなこれ」と思いました。

今現在のリンク君のクラスは、仮面の力が使える『アルターエゴ』です。

この霊基を得て、『リンク』ではなく『誰か』として僅かながらでも劇に介入出来るようになってからは、活動がグッと楽になりました。

降臨

「止まらないのは当たり前、だって君は拒絶するばかりでそれを止めようとしていないのだから」

「力とは本質的に、制御されていなければ暴れるもの」

「今の君なら、この言葉の意味が感覚で理解出来る筈だ」

「そうだろうアビゲイル、最も新しき同胞よ」

腐肉の残骸が至る所に散らばり、腐臭の残滓が漂う中で、蹲りながら震える少女を核として現れながら、獲物を探して暴れ狂う何本もの巨大な触手。

そんな悪夢のような光景の中で、不自然に落ち着き払ったその声は、居合わせた者達の耳に過つことなく届いた。

幼い少女にも思える外見に似つかわしくなく、ちょっと手の込んだ玩具にすら見えてしまっていた杖は、歩みに合わせて揺れると共に輝きを纏い。

素で舞台衣装と思われていた鷹の翼は、威厳溢れるローブとなってその背を艶やかに彩っている。

当人が幾度となく名乗っていた肩書きを、紛れもない真実であることを分かっているながらも何となく笑って流してしまっていたその意味を、一同は改めて、息を呑むことすらも躊躇う程の重圧と共に思い知る。

神秘に満ちた古代のギリシャで、その当時でさえ『大魔女』と畏れられていた真価を現したキルケーが、『外なる神』の一端を前に堂々と対峙していた。

少しの間、暴れる触手と涙目の少女を見据えていたキルケーの眼差しが、もう一人の少女、サンソンの治療を受けて何とか身を起こせる程度には回復したラヴィニアへと向けられる。

「ラヴィニア、アビゲイルを助けたいかい？」

「……い、今更、何を言っているの。」

そんなの、助けたいに決まってるでしょう!!」

「だろうね、一応確認しただけだ。」

その為に取りれる手がある、君に出来ることがあると言ったらどうする？」

「わ、私は、何をすればいいの!？」

「落ち着きになって、話が早いのは助かるが急いても特にいいことは無いぞ。」

でもまあ、切羽詰まっているのは確かだし……ここは手短に、結論から言うとうしよう。

ウェイトリー家の秘術を使え、アビゲイルの身に『外なる神』の力を本格的に降ろすんだ」

笑いながらそう言い切ったキルケーに、ラヴィニアや仲間達は啞然と言葉を失い、ただでさえ青白くなっていたアビゲイルの顔色からはより一層血の氣が失せる。

彼女からすれば、崖っぷちギリギリで必死に堪えている状況で、慈悲なく背中を押されたような心地だろう。

しかし、そんな彼女の発言を受けた立香が取った行動は、その続きを促すことだった。

彼はもちろん、驚きのあまりに一瞬硬直してしまった一同でさえ、本当はちゃんと分かっていたから。

キルケーの実力が確かであることと、自身を残酷で非道な大魔女だと嘯く彼女の人柄が、良い意味で自称には程遠いものであることを。

「さっきも言ったけど、制御されていない力が止まらないのは自然の理。

力の種類によっては、私が横やりでどうにか出来たかもしれないけれど……生憎と『これ』に関しては性質が違いすぎる、理解が遠すぎる。

ならばここは、力を授かった本人が自力で何とかするのが、一番堅実で確実な手段だろう。

アビゲイルは研鑽と継承ではなく、完全な相性のみで力を得た特殊なタイプの魔女だから、その扱い方は教えられずとも感覚で理解出来る筈。

……尤もそれは、彼女がその力を、自分が魔女となることを、本心から納得して受け入れる必要があるけどね」

「し、しかしキルケーさん、アビーさんはそれを嫌がっている」

「分かってる、けどもう手遅れだ。

彼女はもう片足を突っ込むどころか、半身を浸らせてしまっている。

選べるのは、このまま無駄な抵抗を続けた果てに溺れ死ぬか、受け入れて泳ぎ方を覚えるかの二択のみ」

「そんな……」

「さあ、どうするアビゲイル。

決めるのは君だ、その選択は尊重するよ」

キルケーは確かに、この状況を乗り切るにはどうすればいいのかを明言した。しかしそれでも、アビゲイルの顔から絶望の色が消える気配は無い。

「だ、だめ……だめよキルケーさん、そんなの私出来ないわ!!」

今だって、何もかも壊してしまいたくなりそうなのを、一生懸命我慢してるのに……こんなのを全部受け入れてしまったら、私は私じゃ無くなっちゃう!!」
「だろうね……いくら相性が良いとはいえ、そもそもその力は人の身には余り過ぎる。」

今現在少なからず抑えられているだけでも、魔神が特別に見出すような素質が君にはあるってのが分かるよ。

だけど全く手が無い訳じゃない、強すぎて抑え切れないうのなら制御が効くレベルにまで弱らせてしまえばいい。

ただど今の状況ではそれが出来ない、弱らせる対象の存在が曖昧だからだ。

君の体を依り代に『外なる神』の力を実体化させた上で、それが君自身の意思でどうにか出来る程度に小さくなるまで、物理的に叩く。

自分でもちよつとどうかなと思ってしまうくらいには、力押しの強引なやり方になつてしまふけれど、それでもこれが現状で出来る限りの最善策。

……どうか決断してくれ、アビゲイル。

君が勇気を出してくれさえすれば、後は私達で何とかしてみせる。

いいだろうマスター、皆、出来るよね」

「応とも!!

任せろあびー、心配することは何も無い!!

信じて耐えてくれさえすれば、僕達は必ずお前を助ける!!」

「……………哪吒。

団長さん、マッシュさん、皆……」

キルケーの言葉に間髪入れず応えた哪吒や、声に出さずとも表情や仕草で続いくれた一座の者達の姿に、アビゲイルの視界が絶望とは違う涙で滲む。

そんな彼女の、勇気を出す為の最後の一手となつたのはやはり、親友の言葉だった。

「ねえアビゲイル、あなた前に言っていたでしょう？

全ての魔女や魔法が、悪いものだとは思わないって。

正しい人が正しい心で、正しく扱いさえすれば、それはきっと素晴らしいものだって。

私もそう思う、そして私は信じている。

あなたならきっと、どんなに恐ろしく強大な力でも、正しく使うことが出来るって」

「……ラヴィニア」

「……アビゲイル、お願い。

辛いのも怖いのも分かるけど……それでも頑張って、どうか諦めないで。私、あなたに居なくなっただけほしくない。

あなたと一緒に、広い世界を見に行きたい。

この約束を、諦めたくないの」

「……ねえラヴィニア、ひとつだけ聞かせて」

「な、なに？」

「……………私が『悪い子』になってしまっても、友達でいてくれる？」

「……馬鹿なことを言わないで。」

魔女になろうが、恐ろしい怪物になろうが、私にとってあなたはあなた。

私の、大切な親友よ」

疑う気持ちなど抱きようも無い程に、恐怖や不安を全力で一蹴してくれたラヴィニアに、胸の辺りで必死に抑えていた熱いものが堪え切れなくなって溢れ出す。

大切な人の為に、守りたい約束の為に……勇気を出して頑張った、頑張ることが出来たカーフェイやアンジュの気持ちだが、今のアビゲイルには心から理解出来た。

「ありがとう、ラヴィニア。

もう大丈夫よ、秘密の儀式で遊ぶなんていつものことだったわね。

……あの、座長さん達。

先に謝っておきます、ごめんなさい。

多分、きっと、私ってばもの凄く悪い子になってしまっ、たくさん暴れて、座長さん達に大変な迷惑をかけてしまうと思うのだけど。

それでも、どうか……どうか私を、助けて下さい」

涙声になりながらのその言葉に、大丈夫、任せてと言わんばかりの仕草や表情で応えてもらったアビゲイルは、安堵の息を吐きながら頷き、小さな両手を自身の胸元で組みながら静かに目を閉じた。

そんな彼女へと、未だ幼い身ながらもウェイトリー家の当主として、代々受け継がれてきた秘術を継承する者として我が身を奮い立たせたラヴィニアが対峙する。深呼吸を繰り返しながら古ぼけた魔導書を開いた彼女に、キルケーが先達として声をかけた。

「良ければ手伝おうか、それとも何か必要なものはあるかい？」

「ありがとう、でも要らないわ。」

アビゲイルに素質があることに加えて、あの魔神が散々に暗躍してくれていたお

かげで、降臨の環境はこの上ない程に整っている。

あとは私が、きちんとやれるかどうかだけ……」

本の表紙を支えるか細い手が、骨の鳴る音が聞こえるのではないかと思ってしまう程に震えていて、キルケーは今更ながら少し不安になってしまったのだけれど。自分を心から信じてくれているアビゲイルの姿を、改めて目に留めた途端に震えが落ち着いたことに気づいたキルケーは、自分が抱いたものは杞憂に過ぎなかったと思い直す。

そして、不意にその時が訪れた。

「いあ！ いあ！

いぐああ いいがい がい」

「んがい ん・やあ しよぐぐ ふたぐん！

いあ いあ い・はあ！」

「い・にやあ いい・にやあ んがあ！

んんがい わふるう ふたぐん！」

「よぐ・そとおす！ よぐ・そとおす！

いあ！ いあ！ よぐ・そとおす！」

「ウェイトリ―家代々の魔術師達よ、誇るがいい。」

ラヴィニアは……お前達の末裔は見事、一族の悲願を結実させたぞ」

神代の魔女キルケーの、状況が理解出来ない訳ではないけれど、それでも堪え切れなかったらしい心からの称賛が、痛々しい程に静まり返った公会堂内に響く。獲物を求めていた巨大な触手は、それまでの暴れっぷりが嘘のように大人しくなって、ひとところに纏まりながら鎮座しているのだけだ。

それが嵐の前の静けさであることは、誰もが言われずとも察していた。

自身の身長程はありそうな長柄、彼女にとっての魔法の杖は、無限の扉を開くための鍵。

つばが大きく広がり、先端が曲がった巨大なトンがり帽子は、『魔女』という存在に対して多くの者が抱くイメージとなるだろう。

しかし、目の前に居るのがそれらしい格好に興じているだけの少女ではなく、強大な力をその身に降ろした本物であることを、居合わせた一同は理性と本能の両方で理解している。

相応に血の気を帯びて健康的だった肌の色が、親友が憧れた綺麗な金髪が、死人

のそれであるかのように蒼白と化していたとしても。

目の前に居るのは、自分達が親しんできた少女その人で間違いない筈なのに。

宝石のように美しく、それでいて無機質で残酷な輝きを宿す赤い瞳と、額に開いた漆黒の鍵穴の向こうから覗く、深淵の炎を思わせるような淡い光が。

『あんなものはアビゲイルではない』『あんなものがアビゲイルである筈がない』と、思わず叫んでしまいたくなるような畏れと衝動を一同に抱かせていた。

「ふっ…ふふふっ……」

「……アビゲイル、さん？」

「マシュ、危ねえ!!」

無邪気な笑みを向けてきたアビゲイルに、思わず呼びかけてしまったマシュの体が、咄嗟に飛びかかってきたロビンフッドの手によって引っ張られ……次の瞬間、今の今までマシュが立っていたその場所は、真上の虚空から突如現れた触手によって叩き潰された。

惚ける間もなく振り返り、心身を瞬時に戦闘態勢へと移行させた一同の前で、アビゲイルは今も変わらず無邪気に笑っている。

笑いながら操る巨大な鍵が、彼女の周りにしもべのように控えている触手達の一挙一動を支配していた。

「我は門を識れり……汝、見ることに能わず。

いあ、いあ……ふっ、ふふふふっ」

「うっわ、お見事……受け入れた途端にあそこまで完璧に使いこなしてしまうとは、流石にちょっと予想以上」

「感心してる場合っすか、大魔女さんよ!!」

「分かってるよ、肝心なのはここからだ。

今のアビゲイルは、我が身に降りた力を御すことが出来ず、残虐性と破壊衝動に翻弄されてしまっている。

彼女の理性が蘇り、力の主導権を取り戻せるようになるまで『あれ』を弱らせるのが、此度の作戦の最終段階となるからね」

「……弱らせ切れなかった場合はどうなるかなんて、わざわざ考えるようなことじゃなさそうだな」

「そういうことだよコマドリ君、皆で死ぬか皆で助かるかの至極単純な話さ」

「ああクソっ、やるしかねえか」

言葉と態度ではうんざりしながらも、その目には確かな覚悟を宿しながら、愛用の弓を構えるロビンフッド。

哪吒にサンソン、マタ・ハリやシバの女王もそれに続き、極めつけに後ろの方から、頼もしいことこの上ない声が聞こえてきた。

「立香、皆、少しだけ時間を稼いで」

「リンク!?!」

「ちよっと考え、というより試してみたいことがあるんだけど、それには準備と調整が必要なんだ。

ただど上手くいけば、今のアビゲイルを相手に有利を取れる筈」

「……わかった。」

皆、そういうことだから頑張って!!」

詳細を説明するまでもなく、『リンクが言うことだから』と受け入れて指示を出してくれた立香と、素直にそれに応えて耐久戦に備えてくれたサーヴァント達の頼もしさに、ようやく取り戻せたものの大きさを再認識したリンクの顔に、泣く寸前にも思えるような笑みが浮かぶ。

途端に始まった戦闘の轟音を思考から遠ざけ、一人集中を始めた彼の手の甲で、聖三角が黄金の輝きを放ち始めていた。

終幕

一族で代々追求してきたというラヴィニアや、アビゲイルを通してその一端を降臨させようとしていた魔神ラウムが『外なる神』と呼称していた存在の詳細を、立香達は知らない。

何度か尋ねる機会があったのだけれど、その度に目をカッと見開いた凄い形相でこちらを睨みつけてきたラヴィニアの様子に、それ以上の追及が出来なかったのだ。しかしこうして、いざその力と相對する状況になってしまつては、そんなことを言つてはいられない。

一分一秒の鬨ぎ合いの中で生死を問われる戦闘中においては、『知っている』こ

とがその一瞬を乗り越えさせてくれる事態が多々あり得るのだから。

だからこそ立香は、ラヴィニアが拒むのが自分達のことを心配しているからだということを重々承知した上で、断固とした決意で以ってラヴィニアに問いかけた。ラヴィニアもまた立香の覚悟を受け止め、恐怖と畏れ多さに声を震わせながらも確実に、一族のみに伝えられていた秘密を語り始める。

『外なる神』とは、大いなる門と鍵の神であらせられる。

六つの扉は、上下、左右、前後の、あらゆる空間を意味している。

……彼の太いなる神は、決して光届かぬ、私達の宇宙の外側、窮極の門の彼方に鎮座なさっている。

それでいながら、あらゆる空間に隣り合い、全てと繋がっている。

全にして一、一にして全なる者……」

「要するに!？」

「あ、あの……えっと、要するに。

あの御方は、どんな場所にも一瞬で通じる扉と、それを操る鍵の神なの。

だから、その力を降ろしたアビゲイルにも、同じようなことが出来る筈だわ」
「……成る程、何も無いところからいきなり現れる触手はそういうことなのか」

厄介だと、立香は心底そう思った。

どんな存在であれ、何らかの行動を起こす際には前段階というものが存在する。アビゲイルの触手はそれを……相手の次の行動を予測し、自分はどうのように動くべきなのかを判断するための重要な判断基準となるものをすっ飛ばして、ほぼ一方的な攻撃を与えてくることが出来るのだ。

戦闘系サーヴァントの中でも特に秀でた者ならば、あり得ない位置からあり得ないタイミングで襲いかかってきた触手の挙動と気配を瞬時に見極め、もしくは心身に叩き込んだ戦闘の勘によって、反射的に対応することだって可能なかもしれないけれど。

今回選抜されたメンバーの中でそれが出来そうな者、諜報や捌め手ではなく純粹な戦闘に特化したサーヴァントは、古代中国にてその名と武勇を知らしめた哪吒太子のみであった。

此度の特異点攻略においては諜報活動が重要になると考えてそれに特化したメンバーを選んだこと、途中までは間違いなく正しかった判断が、最終局面になって裏目に出てしまった。

しかし、それを厄介だと思いはしても、だからと言って絶望して諦めるなんて発想は、立香は勿論誰の中にも存在しない。

魔力の変動を探知し、扉と触手が現れる位置とタイミングを僅かでも予測するべく、渾身の術式をリアルタイムで構築・展開するキルケーと、それを補助するシバの女王。

触手と真っ向から戦うことは出来なくても、それを操るアビゲイルになれば自身の力が及ぶはずだと、暴れ狂う触手の隙間を縫って陽の目を煌めかせるマタ・ハリ。キルケーが発信してくれる予測を生かしながら、魔術や宝具を全力で行使するために無防備となってしまうている支援組の女性陣を護衛しつつ、僅かな隙を逃さずにダメージを与えていくロビンフッドとサンソン。

戦闘能力を失っても、失われていなかった盾兵としての護りの経験と勘によって、ラヴィニアの安全確保に努めるマッシュ。

人理修復の旅の中で磨いてきた、マスターとして、指揮官としての知識と経験を絞り出しながら、サーヴァント達の思考や行動の隙を埋めるべく懸命に意識と視点を巡らせる立香。

後ろは大丈夫だという信頼に背を押されながら、上下左右前後の六方から自在に襲いかかってくる触手のみに集中して全力を揮う哪吒。

『神』という絶対の存在に、信仰を得て英霊となろうとも到底及ばない相手に対して抗うこと、あるかも分からない希望や可能性を懸命に模索する姿を、弱者の足掻きを、無駄な行ないと称する者は魔神以外にだっているだろう。

しかし、彼らは知っていた。

その身の程知らずな諦めの悪さこそが、弱くて愚かで憐れな人間という種族が、時代と世代を越えて懸命に繋いできた強さだったということ。

そして今もまた、長い人の歴史の中で何度目のこととなるとも知れない、弱者達の『無駄な足掻き』が結実した。

ロビンフッドとサンソンが、それぞれ別の触手に対応した隙に現れた三本目の触手が、仲間達が守ってくれていることを信じていたからこそ、宝具の発動に集中し

て無防備だったマタ・ハリを目掛けて振り下ろされる。

「しまった……っ!!」

「マタ・ハリ!!」

腕力ではなく美貌で、武器ではなく心を操る技によって、人理にその名を刻んだ者。

英霊だとしても戦闘に優れている訳では無いマタ・ハリは、ゆっくりと流れる世界の中で、頭上から迫ってくる巨大な触手を認識しても、そこから行動に移ることが出来ない。

残された僅かな猶予を、ただ立ち尽くすだけで終わらせてしまったマタ・ハリ。そんな彼女の美貌を砕こうとしていた触手は、ロビンフッドの矢やサンソンの剣ではなく、別の角度から叩き込まれた光によって吹っ飛ばされた。

それなりの大きさと質量があった筈の触手を、ただ吹っ飛ばすのではなくそのまま捕らえ、全く衰えることの無かった勢いのままに公会堂の壁へと叩きつけた光

は、その形を縦に長い長方形に展開させながら、逃れようともかく触手を強引に壁に押しつけていく。

確かに存在していた筈の質量が見るうちに減っていき、光と壁がぴったりと完全にくっついたその時、一同が目の当たりにしたものは、無数の吸盤が並んだ醜悪な触手がどこことなく味を感じられる程度にデフォルメされている、光の額縁に収められた一枚の絵画。

光が消えてもそれはそのまま、『絵画』ではなく『壁画』としてその場に残った。行程を目の当たりにしていなければ、独特な絵心を持った何者かによる悪戯描きかと思うだろう。

『そうではない』ということを知っていた一同は、それと同時にアレがただの絵ではなく、平面に塗り込められた触手そのものであるということを理解していた。

サーヴァント達どころか、アビゲイルの触手までもが戦いを一旦止めてしまった。いた、痛々しい沈黙の中で呆然と立ち尽くしていた立香が、正気を取り戻すと同時に振り向いた先。

そこにいたのは、緑の服と帽子ではなく、足首まで覆うような長い紫のローブを

纏い、どうやら『兎』を模したものだと思われる、ローブと同じ色の少々不気味なフードを顔が隠れるまですっぽりとかぶった謎の人影だった。

ローブとフードの主が、リンクが早々に見慣れた素顔を露わにしてくれなければ、次の瞬間には立香は本気で『誰っ!?!』と叫んでいたことであろう。

それ程までに異様だった……様々な装いと霊基を切り替えながら戦ってきた筈のリンクが、未だかつて見せたことの無い姿と存在感。

それが何を意味するものであるのかということに、意外なことに前々からの付き合いがあるカルデアのサーヴァント達ではなく、このセイレムで加わったキャスター達が真っ先に気がついた。

「ちょっと……待て待て、待てよ君。

もしかしくなくても勇者君だよ、カルデアの秘密兵器ってことでいいんだよ。境界広げてたからわかるんだけど、今の君の霊基って基本の七つのどれともちがう……」

「エクストラクラスというだけなら、いくつかの前例はありとお伺いしているので、

それ程問題では無いのですけど。

はつきり言わせてもらうと、今のリンクさんの気配は……………あ、あの、今のアビー様と同じものっぽく見えましてえええ」

「その通り、流星は凄腕のキャスター達。

この力はちよつと特殊過ぎて、今までの霊基の中では扱うのが難しかったんだけど。

『外なる神』、本来ならば交わることがなかった筈の場所からやってきた異質な存在……………ああ、やっぱり思った通りだ。

この霊基、このクラスでならば存分に、『彼』から託された力を揮うことが出来る」

名状し難い力と気配がもうひとつ、よりによって味方側に増えたという事実にと声を震えさせていた二人を他所に、蠢く触手の向こうで呆然と立ち尽くすアビゲイルへと笑いかける少年。

それは、形だけ見るならば優しいのに、何故か異様な圧力を感じるといふ不可思

議なもので。

大いなる力を得た筈の自分の背筋が、魂が、寒気と共に栗立つのを、アビゲイルは破壊衝動に支配された意識と思考の中で、生存本能と呼べるであろう部分で認識した。

「始めましてアビゲイル、俺はリンク。

今この時においては、『ラヴィオ』と呼んでくれても構わない」

リンクの言葉に睨み返したアビゲイルが、握り締める音が聞こえそうな程の力を手に込め、振り上げた二本の鍵の先端が虚空に消えた。

一瞬の時間差も無しに周囲から現れ、自身の中心を狙ってきた触手をたやすく跳んで躲したリンクの、カウンターで突き出した腕に嵌められていた腕輪が光り出す。その光は先程と同じように放たれ、捕らえた触手を新たな絵として床に塗り込めた。

「な、何で、どうして……？」

尚も鍵を操るアビゲイルの表情が苛立ちに歪み、彼女の動揺が現れているのか、周りの触手も狙いが定まらない不自然な暴れ方をし始める。

何が彼女を焦らせているのか、立香は少しだけ考えてから気がついた。

アビゲイルが操るのは、どのような場所にも瞬時に繋げることが出来る六つの扉と、それを介することで自在に繰り出される六つの触手。

その内のふたつ、アビゲイルの力の三分の一が、壁や床に塗り込められた状態のまま動けなくなっている。

「平面の中……異なる次元に入り込む、もしくは他者を封じ込める。

これは、ハイラルの者でありながらロウラルという異世界の力を得て、最終的には二つの世界を共に救った、『次元の勇者』の力ですね」

少し呆けたマシユの眩きが、少し離れたところで立ち尽くしていた立香の耳にも

届く。

それに続いて、動揺しているアビゲイルとの対比か、不気味な程に落ち着いた穏やかなものに思えるリンクの声も聞こえてきた。

「思った通り、俺のこの力は君にとっては天敵みたいだな。

君の扉は、どんなに遠いところにだって開くことが出来る……だけどそれは、あくまで『この世界』の中でのこと。

君のその力は異なる世界、異なる次元にまでは及ばない。

そして俺は、その次元こそを越えることが出来る。

例えば目の前にあったとしても、例えばその手で触れたとしても、宇宙の果てより遙かに遠い場所だ」

『神』と称されるような存在は、大抵がその膨大な力を適当に揮っていて、細かい制御や操作なんて考えてもいないことが多い。

難しく面倒なことを敢えて意識しなくても、単純な力押しだけで何もかもを成し

遂げてしまえるくらいの圧倒的な地力を備えているから。

限りあるリソースをやり繰りするとか、最小の消耗で最大限の成果を発揮出来るように工夫するとかは正しく、根本的なところで劣っている人間という存在ならではの発想なのだ。

そして今のアビゲイルは、そのどちらでもない中途半端な位置に立っている。

『外なる神』と呼ばれる存在の本体ならば、異なる次元の境目くらいはその気になればぶち破れるような、圧倒的な力を持っているのかもしれないけれど。

君には無理だアビゲイル、少なくとも『今』は」

今のアビゲイルは目覚めたばかりの魔女の本能のままに、与えられた力を辺り構わず揮っているだけ。

それは、人の目から見れば絶大な力であったとしても、源である『外なる神』と比べられるようなものではない。

『神』ではなく『人間』として研鑽を積み、力の使い方を更に覚えて研ぎ澄まして

いけば、『外なる神』でさえ及ばないような領域に力の一端を届かせることも出来るかもしれないけれど。

それは、あくまで『いつか』の話。

今この時のアビゲイルに、有り余る力を振り回すことしか出来ない新米魔女にとって、伝説の勇者はあまりにも強大過ぎる敵だった。

「う、ううっ……………うああああああっ!!」

怒り、苛立ち、恐れ…………あらゆる感情が積み重なった末に爆発したアビゲイルの、残った四本の触手が同時にリンクへと襲いかかる。

それを避け、どこか新たな足場にして跳び上がった虚空で体勢を立て直したりリンクの手が、二本の矢を番えた弓を引き絞る。

鈍く光る鍬を向けられて一瞬竦んだアビゲイルは、放たれたそれらが我が身とは遠く離れた見当違いの方向へと飛んでいったことに気付き、安堵から一転した嘲笑をリンクへと向ける。

しかし、そんな彼女の目に映ったリンクの態度や表情に、焦りや動揺などといった乱れは一切見受けられない。

ああ、彼は確かに『勇者様』なのだ……残虐性に支配されている今のアビゲイルでも、知識や理性ではなく感覚で思い知らざるを得ない程の、堂々とした姿でそこにいた。

「哪吒、上げろ!!」

「応っ!!」

そんなやり取りが間髪入れずに飛び交った一瞬の後、真下から突如我が身を襲った衝撃によって、アビゲイルの体は広く高い公会堂の空間の屋根近くまで吹っ飛ばされていた。

徐々に落下を始めると同時にゆっくりと回り始めた視界の中に、複数の敵に囲まれている状況で一人だけに注目するという、『戦闘』というものを少しでも齧っていれば絶対に見せないであろう隙を晒してしまっていたアビゲイルの懷に飛び込み、

彼女のことを想っているからこそ容赦なくその身を打ち上げた哪吒の姿が映った。あまりに突然のことに、体と共に吹っ飛んでしまっていた思考力がその存在を認識したことで戻り、同時に爆発した激情が落下中の虚空にも拘わらず魔女の鍵を揮わせる。

しかしその力の発動は、全く気を向けていなかった側面から放たれ、触手ではなく我が身を捕らえた光によって妨げられる。

真横に吹っ飛ばされたその身を受け止めたのは公会堂の固い壁ではなく、もっとも柔らかい何かだった。

「あれは、私達が公演に使用していたスクリーン!？」

公演を行なう為に、許可を貰って公共の場に臨時に取り付けたはいいのもの、その後回収するタイミングを完全に失ってしまった、天井高く巻き上げて隠すだけでそれ自体は置きっぱなしになってしまっていた巨大な白幕。

先程リンクが放った二本の矢で纏めていたロープを絶たれ、それ以上は何も手を

加えずとも重力によって自然と公演時のように張られたそれが、盛大に叩きつけられたアビゲイルの体を何故かたわむことも無いまま受け止めていた。

「一度何かに強く気を取られれば、そちらに集中して他を忘れてしまう。

やっぱり君はただの女の子で、魔女としても戦う者としても素人だな、アビゲイル。」

おかげで助かったよ、余計な手間や時間をかけずに済んだ」

「あっ、ぐ……あああああっ!!」

「もう少しだけ頑張ってくれ、怖いのも苦しいのもあと少しの辛抱だ」

アビゲイルの体を白幕に抑え込んでいた光が、少し前に彼女の触手に対してしたのと同じように、彼女自身を平面の中へと、隣り合っているのにどこまでも遠い異次元の世界へと塗り込めていく。

最後のとどめと言わんばかりの、居合わせた者達の視界を丸ごと焼き潰すような光が迸り……それが収まった後に、一同が目の当たりにしたものは。

自分達が作った影人形を思い出させるような頭身が低くなった姿で、自分達の公演の再現であるかのようにスクリーンに現れた、触手を纏わせた少女の姿だった。白黒ではなく確かな色を持っていたそれが映し出された影などではなく、紛れも無いアビゲイル自身であることを……彼女が白幕の中で微動だにしないのはただ単に出来ないからであり、『あの場所』ではその為の術を心得ていなければ自我を持った絵画となるしかないことを正確に理解してしまい、正気度が削れそうな心地を味わう立香達。

想定外のところで大ダメージを食らっている彼らへのフォローを今は置いといて、強く床を蹴ると同時に例の光を纏ったリンクの体が、アビゲイルに続いて白幕の空白部分に飛び込んだ。

平面の中の異次元で、アビゲイルと同じように三頭身くらいの、しかし巨大な触手を纏っている彼女と比べれば圧倒的に小さく弱々しいものに見える、長い耳を持った金髪の少年の絵が動き出す。

影人形を繰る演者ではなく、彼自身の確かな意思によって、美しい弓が構えられ、眩い輝きを放つ矢が引き絞られる。

恐ろしい魔女と化してしまった少女を、倒す為ではなく救う為に、光り輝く矢を放つ勇者。

巨大なスクリーンの中で繰り広げられるそれは、随分と長く続いてしまった狂気の舞台を爽快に締め括る為の、数多の犠牲と困難を乗り越えた果てに辿り着いた待望のクライマックスだった。

『コズミックホラー』繋がりでの『ムジュラの仮面』に加えて、『フォーリナークルス』繋がりでの『神トラ2』要素を入れました。

この展開に繋がりたいが為の影画劇でした、ここまで書いて良かった……。

執筆するにあたって調べたところ、本来のヨグ・ソトースの力は、過去でも未来でも異世界でもどんなところにだって扉を繋げる、というものらしいんですけど。この作品の中では少しだけ範囲を狭めて、かつアビゲイルは本体ではなくあくまで巫女（眷属）かつ目覚めたてなので、そこまで出来るような力はまだ持ってない

ということにしました。

『特定の条件の中で空間を自在に行き来する』という、一見同じようなタイプの能力を実際にぶつけ合わせた時の差異を書くのは、結構面白かったです。

カーテンコール

審判結神

A・D・1692年 禁忌降臨庭園セイレム

異端なるセイレム

乗り物を駆使しても最寄りの人里まで半日を要するような距離と、一年を通じてほぼ絶えることのない猛吹雪によって俗世から断絶された雪山の巨大施設、フィニス・カルデア。

ここに所属する多くのサーヴァント達が、人理を守るといふ務めと同時に生前では到底考えられなかったような第二の人生を謳歌していて、スタッフ達は密かにこの場所を『一種のヴァルハラもしくはアヴァロン』とも称している。

込み合う時間帯からずれているため閑散としている食堂で、処刑人の務めを負って生きていた生前では考えられないような行ないを……自分が口にするための食事を、アレンジを加えながら手ずから用意していたサンソンもまた、そんな中の一人だった。

「うゝむ、上出来だとは思うのだけれど……色々と手を加えたせいかちょっと大きな、食べにくくなってしまった」

「両手で掴んで、がぶりといきやあいいでしょーが」

「おや、ロビンフッド」

「厨房の主連中なら、時間が多少ズレていようが頼めば作ってくれただろうに」

「少し気分転換をしたくてね」

前触れなく現れるや否や、許可をもらうどころかそのための声掛けすらしないまま正面の席に腰を下ろしたロビンフッドを、「座る前に一声かけたらどうだ」と窘めるサンソン。

いつもなら反射的にムカツとして言い返していたであろうその言葉に対して、ロビンフッドは驚きのあまりに、啞然と目と口を開くのみで終わらせてしまった。

言葉そのものは変わっていなくても、そこに込められていたものが不躰者への糾弾ではなく、『君という奴はほんつと仕方がないなあ』という溜め息交じりの言葉が続けて聞こえてきそうな、親しみの裏返しと取っても間違っていないさそうな呆れと許容だったのだから。

「どうしたサンソン、ちょっと前……セイレムに行く前までは、もっとお固くてトゲトゲしてませんでしたっけ？」

「……まあ、色々あったからね」

「色々って、あの日々のどこにそんな余裕が……ああ、そっか。

そーいやあんだ、確か『繰り返していた』んだっけ」

カルデアへの帰還を果たしてから明かされた事実……食事の時間がずれてしまう程に、サンソンの報告が長引いていた理由を察したロビンフッドの顔色が僅かに曇った。

セイレムに赴いた部隊が、少なくとも肉体的には損傷無く帰還を果たしてから、既に数日が経っている。

首脳陣からすればすぐにでも話を聞きたかっただろうに、精神的な消耗を考慮して回復に当てるための数日の猶予を作ってくれたこと自体は、本当にありがたかったのだけれど。

あの狂った町で過ごした数日、起こった数々の出来事は、話すどころか思い出そうとするだけで気が滅入ったし。

それを更に何回分か追加して報告する羽目になったであろうサンソンには、珍しく心からの同情を抱いていた。

「僕はまだいい方ですよ、実際に繰り返しを行なったのは最後の方の数回のみ……」

リンクさんとシバの女王も一緒に、不安はあってもそれ以上に心強かったのですから。

……心配なのはリンクさんです。

彼は結局、同じ秘密を抱えた僕達を相手にでさえ、独りで戦っていた間の辛さを吐き出してはくれなかった」

「矛盾してるよなあ、あいつ。」

自分は英雄なんかじゃないって豪語する割に、その振る舞いは原初の大英雄と呼ばれるに相応しいものだと思えちまうんだが」

「彼自身は本当に、ただ単に、自分の手が届く範囲にあるものを守りたいと思っているだけなんですよ。」

……その手が、世界を丸ごと包み込める程に大きいものだから、色々と難しい話になっていくわけで。

加えて問題なのは、重荷を一人で抱え込んでしまうのが勇者としての責任や思いやりなどではなく、周りの心配を蔑ろにする身勝手な我が儘であることを、きちんと理解した上で押し通しているところでしょうね」

「悪癖なのは確かだが、そういうところに実際助けられているもんだから、下手に文句は言えねえんだよな。」

……マスターの思惑が、上手くいけばいいな。

そうすればあの突貫勇者様の足も、片方くらいは地につくだろ」

「ええ、その件に関しては僕も尽力する所存です。」

君だってそのつもりでしょう？」

「まあね」

ロビンフッドとサンソンがそうやって交わしていた、少し前まで何かとぶつかり合っていた二人とは思えないような穏やかなやり取りは、小柄な集団が食堂の隅の方で何やらコソコソとしているのに気づいたことで中断された。

「……ジャック・ザ・リッパーに、ナーサリー・ライムに、ポール・バナヤン。

あと、ちっこい方のオルタの嬢ちゃんもか。

チビ共で集まって、一体何を……って、あれ」

「……………アビゲイル、それにラヴィニア。
あの子達、本当に何をやっているんだ？」

二人に凝視されていることを知らずに、知っていたとしても構わずに、子供達の秘密作戦は着々と進行していく。

同胞達の注目を一身に浴びながら、小さな胸を張ったアビゲイルが気合いと共に突き出した両手が、腕で作った輪ほどの大きさに開かれた小さな扉を通じて何処かへと消える。

数秒の後に引っ張り出された彼女の手には、五段ほど重なった上にクリームとフルーツで贅沢に彩られた、豪華なパンケーキの大皿が収まっていた。

「やったわ、大成功!!」

「わーい、私パンケーキ大好き!!」

「アビゲイルすごーいっ!!」

「素晴らしいわ素晴らしいわ、お宝は私達で山分けね!!」

「……や、やっぱりダメですよ、おやつをつまみ食いどころかこれは完全に泥棒です」

「今更遅いわ、ここにいる全員が共犯よ」

衝撃的な光景を目の当たりにしてしまったことで、言葉が出ないロビンフッドとサンソン。

彼らの半ば止まっていた思考を揺り動かしたのは、額に青筋を浮かべながら厨房から飛び出してきたブーディカの怒号だった。

「こらー!!」

「わーっ、ブーディカ怒ってる!!」

「逃げろー!!」

「待ちなさい、この悪戯魔女め!!」

折角のもの凄い力を、ろくでもないことに使うんじゃない!!」

「ごめんなさいっ!!」

『きゃーっ！』と可愛らしい声を上げながら、頭の両側に角の幻覚が見えそうなブーディカから笑顔で逃げる少女達。

姦しくて恐れ知らずで、個人的な願望を叶えるための手段として異端の力を用いる、幼く無分別な少女ならではと言ってもいいであろう愚かな振る舞いは、セイラムの地で初めて会った時のことを思い出させたのだけれど。

弾けるような明るい笑顔は、夜の森で密かな儀式に興じ、親友と会うことすらままならない日々を憂いながらも、セイラムという地に縛られて歩み出せずにいた頃の彼女とは比べようも無かった。

「ふっふっふ、上手くやったじゃないか。

タイミングを計り損ねて気付かれてしまったのはマイナス点だけど、本人はそれも含めて楽しんでいるみたいだから良しとしよう」

「……アビゲイル達をけしかけたのは君か、キルケー」

「何を企んでるんっすか、大魔女さんよ」

大きな大きなため息をつきながら振り返った先では、セイレムの狂気を共に乗り越えた縁もあってカルデアのサーヴァントとして正式に契約を交わした、鷹の魔女キルケーが笑っていた。

「何だい『企んでる』って、心外だなあ。

今のアビゲイルは心身ともに立派な魔女なんだよ、そして魔女と言えば残酷で悪戯好きなものだとか相場は決まっている。

あの程度の可愛らしい悪巧みで発散してくれるのなら、それに越したことはないだろう？」

「……………まあ、確かに」

「下手に我慢させて、溜め込んだ結果爆発しようものならどんなことになるのか、俺達は散々に思い知ってますからねえ」

「でもまあ、そんなに心配する必要は無さそうだよ。

魔術に興じても咎められなくて、むしろ色んな人が積極的に教えてくれそうで、

良い子であると同時に悪にも懂れてるといふ本心を知った上で受け入れてくれる人達がいて。

あと何より……大好きな親友と、何の問題も無しにずっと一緒だ。

この恵まれた状況で、暴走に至ってしまう程にストレスを貯めるような事態にはまずならないだろ。

これから修行を積んでいけば、あの時揮っていた程度の力ならば、きちんと御せるようになる筈さ」

魔女と化したアビゲイルを鎮め、特異点を消滅させるための手順を無事に終えた後、自分達と一緒に来ないかと誘った立香にアビゲイルもラヴィニアも二つ返事で頷いた。

セイレムから出ていくことが二人の悲願だったことに加えて、魔神柱の儀式によってこの地に招かれた過去の者であり、今や外なる神の眷属と化してしまったアビゲイルと、親族を全員失った上に過去を上書きされ、かつての自分がどこでどうやって暮らしていたのかも分からなくなってしまっていたラヴィニアにとって、頼

りに出来る者は他に居なかったからだ。

だとしても、それは他に選択肢が無かったから、仕方がなかったからではなく、ずっと守ってきてくれた立香達と、彼らが所属するカルデアを信じてくれたからだという理由の方が大きいことは明らかだった。

『ランドルフ・カーター』らしき男性、落ち着いて見てみれば中身は魔神ラウムとは違うらしい人が物陰からそんなやり取りを見守っていて、安心したように笑いながら消えていったことに気づいていたのは、リンクやキャスター勢ぐらいだっただろう。

そうして、ひとつの特異点が解消されたと同時に、カルデアに幾つかの新たな面子が加わってから早数日。

少女達を誘ったこと、カルデアという場所とそこに集う仲間達を信じたことは間違いではなかったと思わせてくれる光景を前に、ホッと胸を撫で下ろしていた一同の下に、別の賑やかさがやってきた。

「ろびん、さんそん、きるけー!!」

「三人ともここに居たのね、一氣に見つかって良かったわ」

「美味しい儲け話がありますよお」

「おやマタ・ハリ、それに哪吒とシバの女王も」

「どうしたんだい、そんなに慌てて」

「それがね……」

「即時、集合、再結成!!」

立香一座の公演を、皆が楽しみにしている!!」

「……は？」

「つまり、そういうことなのよ」

マタ・ハリ曰く。

報告を早めに終えた後、スタッフやサーヴァント達との談笑の中で特異点のことが話題となり、『ゼルダの伝説』の影人形劇をやって中々の出来だったと口にしたところ、『自分達も見たい!!』という声が殺到したのだとか。

見るからにやる気満々でふんすつと気合いを入れている哪吒はもちろん、苦笑い

を浮かべながらも態度や発言に後ろ向きなものが見受けられないマタ・ハリや、耳をピコピコと動かしながら瞳を輝かせているシバの女王も、既に心は決まっているのだろう。

「……リンクの奴、確か今は報告中だったよな」

「ええ。」

内容が桁外れに多いことに加えて、駄目元でカウンセリングと並行しながら行なう予定となっていた筈なので、当分は出てこれられないでしょう」

「決まりだね、やろう！」

「新人として顔見せするのにも絶好の機会ですねえ、この機に新規顧客を増やさないと」

「演目は何にしましょうか」

「ますたーとましゅと、あびー達も呼んでくる!!」

こうして、自分の知らないうちに、自分の手が及ばないところとん拍子に

一座が再結成され、新たな面子を加えたり削ったりしながら公演を続けて。

カルデア内で度々行われている催し物の中でも高い人気を得ていくことを、いつもの如くは無茶ぶりを褒められつつも叱られながら、果ての见えない報告を行っていたリンクには想像すら出来なかったのであった。

セイレム、何とか完結しました。

クトゥルフ神話の要素を意識しつつ、ムジュラの仮面のループ要素を交えながら、元シナリオを私なりに再構成してみました。

全体の流れ自体はなるべく元シナリオに沿うこと、ラヴィニアとサンソンを死なせないこと、少女達の心がきちんと救われるような希望を感じられる展開にすること、それでいて試練や困難となるような山場はきちんとあってご都合主義に走らず物語としてきちんと面白いこと。

などなどを意識しながら書いてみましたが、如何だったでしょうか。

シナリオの特性上、他の話では書けないような残酷でグロイ描写が必要になるところもあったので、その辺りもここぞとばかりに頑張ってみました。

セイレムに関しては一区切りつきましたが、解決すべき特異点はまだまだたくさんありますので、これからも頑張って書いていきます。

引き続き、よろしくお願いいたします。

「お帰り、マスター。

セイレムの件は全てではないが聞いているよ、大変だったみたいだねえ」

「大変だったよ、頼むから思い出させないで……」

「……あの新宿を乗り越えた君を、そこまで消耗させるとは。

本当に大変だったみたいだね、お疲れ様。

今回の会議は延期して、少し休むかい？」

「いや大丈夫、もうあまり時間が無いし。

準備とか、作戦とか、細かいところまで少しでも詰めておきたいんだ。

……その辺り、頼りにしてるからね」

「勿論だとも、大船に乗ったつもりで構わない。

古今東西に名を馳せた、ありとあらゆる英霊達の中で、今のマスターの希望に私以上に応えられる者はいないと自負しているとも。

任せたまえ、一分の隙も無い真の完全犯罪というものをお見せしよう」

「……念のため言っておくけれど、別に俺は犯罪者になりたいわけじゃないんだからね。

俺の目的を叶えるためには、そうする必要はあるってだけなんだから」
「わかってるさ、その上で言っているのだよ。

数多の英雄達が、歴史にその名と存在を刻むに至った、常人では到底成し得ないような偉業……その多くが実は、当人にとってはただの手段や通過点に過ぎなかったというのは、決して珍しいことではない。

弓兵アーラシュが身が碎けるのも厭わずに流星の矢を放ったのは、大地を割りたかったからではなく、戦争を終わらせたかったから。

吸血鬼カーミラが少女達を殺したのは、血を飲み、浴びたかったからではなく、若さと美しさを得たかったからだ。

……そしてそれは、ある意味ではこの私自身にも覚えのあること。

君の大それた発想と決断を、私は心から尊び、そして後押しするよ。

人理修復という大偉業のおこぼれを頂こうと群がる、有象無象の魔術師どもを蹴散らし、君にカルデアの玉座を捧げると誓おうじゃないか」

「……分かってくれてるんだってことは分かったけど、その表現はやっぱり気になるなあ。

まあいいか、もうやるって決めたんだし。

俺の望みを叶えるには、力も人手も環境も、いくらあったって足りないかもしれないし、ないんだから」

「スタッフやサーヴァント達は諸手を上げて、引き続き君に協力するだろうし。

上手く事を運べば、外部の協力者を得ることも可能だろうネ。

……君が為そうとしているのはそれ程までの一大事業、全人類が抱き続けてきた夢と言っても過言ではない」

「この世界のどこかに在る筈の時の神殿を探し出し、勇者リンクをこの世に目覚めさせる」

「この夢物語が実現しそうだととして、実際に自分がそれに加われそうだととして、心が躍らない者はまず居ないと思って良からう」

「……………俺としては、本当に、ただ単に。」

約束を守りたい、守らなきゃってだけなんだけどな」

「大切な人達や、掛け替えのない場所を守りたいだけ。」

その一心で幾度となく世界を救ってしまった実例を、君はよく知っている筈だがネ」

「……あーもー、鬱々としてきたからこの話題は一旦やめ!!

もつと建設的な話をしよう、魔術協会の連中からカルデアを守るための具体的なプランはどんなものが上がってるの?」

「新しく来る所長とやらがどういいうタイプの人間かによって、まず幾つか変わってくるネ。

正式な権利を得てやってくる者を強引に排除してしまうというのは、それだけでリスクが大きい。

上手い具合に傀儡に出来れば理想なんだが、事と次第によっては魔術協会と交渉するための人質にするなり、密かに排除して身代わりを置くという手も……」

「こらこら教授、立香君に不穏なことを吹き込むんじゃない」

「……遅れてやって来ての第一声で随分だねえ。

彼の芯がこの程度で揺らいでしまうようなものではないってことくらい、私よりよほど付き合いの長い君の方がずっと理解しているだろうに」

「それとこれとは話が別、青少年の健全な精神を守ろうとすることに間違いは無いと主張するよ」

「あー言えばこー言う」

「天才だからね。」

さて……遅れてすまなかった、立香君。

ほかの皆ももうすぐ来るだろうから、そうしたら会議を始めよう。

どうか私達サーヴァントにも、君達の未来を繋ぐための手伝いをさせておくれ」

苦労はするけど後の展開で何とか補える拠点と設備はともかく、一度失ってしまつたら取り返しがつかない人員的な被害に関してはやはり食い止めたかったのだ、という展開なら迎撃準備をきちんと整えた上で二部序章の展開に入れるのかという辺りを考えてみました。

主人公が元の平凡な一般人に戻りたがっている、サーヴァント達も戻したがっている展開もあるでしょうが、こちらの立香君は既に心を決めています。

軽い気持ちときっかけで飛び込んでしまった魔術の世界で、仲間達と一緒に……いつか後悔するかもしれないけれど、少なくとも今は断固たる決意で。

『将来の夢と目標が具体的に定まったただけだよ、俺ぐらいの年のやつなら珍しくないだろ』と、何気ない様子で笑っています。

この先を書けるとしたら当分先のことで、辿り着けるかもわからないのですが……目標として、頑張っていきます。

邪竜百年戦争

森の中の出会い

古代から現代に至るまで、数千年に及び紡がれてきた人という種の歩みの全てが一瞬で焼き尽くされた、『人理焼却』という終末の惨劇と絶望。

そこから辛うじて生き延びた、夜空ではなく歴史を見守る天文台『人理継続保証機関フィニス・カルデア』。

人の世の、人理の最後の希望として、数多の犠牲と困難を乗り越えながら稼働を始めたカルデアが、本格的に取り組むこととなった第一の特異点修復。

数百年前のフランスの地へと、小さく可愛らしい予定外の人員を紛れ込ませながらも無事にレイシフトを成功させ、第一村人ならぬ第一フランス人にまずは友好的な接触を……と、手探りながらも懸命な第一歩が踏み出されてから僅か数分後。

「あそこだ、逃がすな!!」

「怪しい装いで武装した上に、明確な敵対行動まで取ってきた奴らだ!!」

此度の事態に無関係とは思えん、捕らえて尋問しろ!!」

人類最後の希望を託されたマスターとサーヴァントは、早速の窮地へと陥っていた。

「申し訳ありませんマスター、私の盾さばきが未熟なばかりに……っ！」

「そもそも、その特大鈍器で穩便に峰打ちつてのが無謀な話だから!!」

「フォーーウッ！」

接触到失敗し、巻き返せるかどうかが問われる二度目の行動で、説得でも逃げるでもなく実力行使で黙らせるといふ選択肢が真っ先に出てきた時点で、立香は自身の判断ミスと認識のズレを感じていた。

（マッシュだけじゃない、ドクターも相当の世間知らずだ……研究所以外の世界を、情報でしか知らないって奴かな）

一生懸命なのはわかる。「こうなった時はこうしよう」と、あらゆる状況に対応するために想定とシミュレーションを重ねているであろうことを想像できる。

それしか出来ない、それしか知らない、故に想定外で予想外の事態に弱いのだ。『敵意を持たずに笑顔で話しかける』という最大級の友好的アプローチが通用しな

い、どころか転じて窮地を招いてしまった。

そんな想定外の事態に対応しきれず、パニックに陥ってしまった末に、『実力行使』という最も単純かつわかりやすい対処法へと行きついてしまったのだろう。

マシユは当然、ロマニのことだって、自分とカルデアと人理の味方だと心から信じている。

しかし、事前知識も覚悟もないままこんな世界と事態に足を突っこむ羽目になってしまった、何から何まで解説と補助が必要なド素人の身からすれば。

専門分野においては頼りになる者達が、それ以外の大部分において、逆にこっちがサポートしなければならぬ者達でもあるのだと初っ端で思い知らされた事態は、中々にハードなものだった。

「あの、マスター……少し考えたのですが。

兵士の皆さんは悪い人達ではないみたいです、落ち着いて話し合えば誤解を解くことも出来るのではないのでしょうか」

「その発想が出来るなら、何で実力行使が先に出たのさ!!」

もう何人か殴り飛ばしちゃった後じゃあ今更だって、完全に敵視されてて聞く耳無いよ!!」

「す、すみません……っ!」

「次から気をつけようね!!」

「はい……」

あからさまに落ち込んでしまったマシュが、必死に走りながらも何とか付け加えた『次から』というフォローに気付いているかどうかは怪しいが、流石にこの場でこれ以上のサポートは難しい。

真面目で思い詰めるところのあるマシュを、あまり長いこと一人で落ち込ませてしまうと後が怖い。

マシュと改めてきちんと話す為にも、一刻も早くこの危機的状況を打破しなければ。

サーヴァントであるマシュに頼るだけでなく、拙い新米ながらもマスターとして、立香は必死に考えを巡らせた。

「ドクター、この近くで身を隠せそうなところはある!?」

《進行方向に森がある、木々に紛れれば追跡をかわせそうだよ!!》

「……森かあ」

《あ、あれ……どうしたの立香君、何か問題でも?》

「……何でもない、ありがとうドクター。」

マシュ、聞いてた通り!!

とりあえず今は、追っ手を振り切ることに集中しよう!!」

「はいマスター、マシュ・キリエイト了解しました!!」

ロマニの進言とサポートによって、森に逃げ込んだ立香とマシュだったが、状況は打開されるどころかむしろ悪化してしまっていた。

「もういいです、マスター……センパイ、私を置いてどうか逃げてください」

「まだ何も出来てないのに何言ってるの、諦めないで!!」

「ごめんなさい……私、センパイの力になるどころか、足手まといでしかない状況に

これ以上耐えられません」

《しっかりしてマッシュ、立香君の言う通りだ諦めないで!!

ああああどうしよう僕のせいだ、僕がよく考えないまま森に逃げようなんて言っ
たばかりに……》

「ダ・ヴィンチちゃんドクター任せた、この状況で二人同時にフォローするのは流
石にきつい!!」

《了解、まうかせて。

こちらは気にせず、立香君はとにかく自分達の安全確保に専念してほしい》

ロマニの半泣き声が通信から遠ざかるのを聞きながら、立香は、半ばへたり込ん
でしまっていたマッシュの手を引いて先を促す。

追っ手はまだ諦めていない：彼らが自分達を見失ってくれる、もしくは追跡を諦
めてくれる、そんな樂觀的な期待を立香は真っ先に思考から追い出していた。

森がどんなに深く暗かろうと、自分達がどんなに慎重に身を隠そうと。

マッシュの巨大な盾を無理やり通らせた跡を至る所に残してきてしまった以上、追

いつかれ、見つかってしまるのが時間の問題であることは容易に想像できた。

（こんなことなら、変に気を回さないで、あの時ちゃんと言っておいた方が良かった。）

そうすれば、もっと別の、ちゃんとした選択肢があったかもしれないのに……）

『森』と促された時点で、立香はこの状況をきちんと予想することが出来ていた。しかし、言えなかったのだ。

必死のサポートが的外れだったと、その要因が自身の装備にあると、突き付けられたロマニとマシユがどれだけ傷つき落ち込むことか。そう考えると、どうしても声が出なかった。

何とかしよう、何とか出来ればいいのだと一人で考えて、一人で決めて。

その結果がこれだ。想像よりもずっと激しく落ち込むマシユに、混乱するロマニ。根性論の精神論ではどうしようもない。正しく絶体絶命の危機に陥ってしまう最後の一手を、独りよがりの善意で押ししまったのは、他でもない自分自身なのだ。

事態を甘く見ていたのは、世間知らずなのは自分も同じだったと、今更悔やんだとしてどうしようもない。フォローするのも、謝るのも、改めてきちんと話し合うのも、全てはこの窮地を脱して生き延びてからだ。

人類最後の希望として、マスターとして……マッシュが慕ってくれる『センパイ』として、絶対に諦める訳にはいかない。マッシュの手を引きながら、弱々しく項垂れる盾の少女をその背に守りながら、立香は必死に目の前の藪を掻き分けていく。木々の枝葉に光が遮られ、薄暗かった視界が明るく開けたのは、本当に突然のことだった。

「……………あんだ、誰？」

「それ、こっちの台詞」

突然のことすぎて、不意に抱いた疑問がそのまま口に出てしまった。

そんな立香の間拔けな問いかけに、半ば呆れた声で、それでも律儀に返事をしたのは、フードを目深にかぶって鼻から下しか窺えない一人の少年だった。

少年の手には、枝に刺された焼き魚。どうやら食事を邪魔してしまったらしい、口調や僅かに窺える表情に若干の苛立ちが感じられたのはその為か。

森を横切る川べりの僅かに開けた空間、薪が半分炭となつて燻る焚き火とその周りに立てられた数本の串焼き魚。

地べたに腰かける少年の傍には荷物らしいものもあつて、彼の野営地に不躰にも飛び込んでしまったのだと気付いた立香とマシュは、数秒遅れで慌てだした。

「すみません、俺達ちょっと訳ありの通りすがりで!!」

「すぐに立ち去ります、お騒がせして本当に申し訳……っ、センパイ!!」

「げっ、もう追いついてきた……」

散々追いかけさせられた苛立ちが溜まつているのだろう、もはや怒号と言ってもおかしくない声が少しずつ大きくなってくる。

不安げに身を竦ませるマシュと、その肩を咄嗟に抱き寄せる立香。二人の耳に、何かが勢いよく崩される音が聞こえてきた。

同時に、咄嗟に振り返った二人が目にしたのは、フードの少年が急に焚き火を踏み潰し始めた異様な光景だった。

「……………あ、あの、何をして」

「そこから真っ直ぐ、これを蹴散らす勢いで走って。

炭の足跡をつけながら川の中へ…向こう岸へは渡らずに、下流から戻ってくるんだ」

少年の言葉に、マシュは首を傾げ、立香は雷に打たれたような衝撃にハッとしました。

「マシュ、こっちだ!!」

「センパイ!?!」

未だ事態を把握しきれていないマシュの手を、問答無用で引きながら立香は走った。

森の中を逃げる勢いのままに藪から飛び出し、野営地の主の存在にも気をかけることなく焚き火を蹴散らし、二人分の炭の足跡を残しながら川へと逃げ込んだ。後から追いついた者が、そんな一連の流れを思い描けるような痕跡が残される。

少年の言葉通り、向こう岸には渡らずに川の中ほどで方向を変えた二人は、野営地から少し離れた場所の岸から改めて藪の中に身を隠した。

最初から追っていたならばまだしも、想定外の痕跡をゼロから見つけたすなんてことは、森の専門家でもなければ難しい。

音を、気配を殺しながら、野営地の様子が窺える位置まで戻ってきた二人は、追手の兵士達と、何食わぬ顔で彼らに相對する少年のやり取りを目にした。

「奴らは向こう岸に逃げたんだな!？」

「間違いないよ、たった今この目で見たんだから」

「ありがとう、協力に感謝する」

「……あの連中、何をやったの?」

「それを聞き出すために追っているのだ。」

装い、挙動があらさまに不審だった上に、仲間が数人間答無用で倒されている。近頃の異様な事態に、無関係とは到底思えん」

拳を握り、齒を食いしばり、怒りや悔しさを露わにする兵士と、そんな彼を前にする少年に、こっそり様子を窺っていた立香とマシュは血の氣が引く思いを味わっていた。

自分達が追われていることを察して、咄嗟に助けてくれた彼が、兵士の話を聞いて方針を切り換えない保証は無いからだ。

しかし、そんな二人の心配をよそに少年は何も言うことはなく、追跡を続けるために川を越える兵士達の背を手を振りながら送った。

彼らの姿が、声が、藪の向こうに完全に消えた辺りでフウと肩の力を抜き、徐に焚き火の残骸を片付け始めた少年を前に、立香達はなかなか動き出すことが出来ない。

先にしびれを切らしたのは少年の方だった。大きなため息をつきながら、立香とマシュが隠れている藪へと向けて確信をもって振り返る。

「いつまで隠れてんのさ、もう行っちゃよ」

「……………は、はい。」

あの……………どうも、ありがとうございます」

「いや、ほんと…マジで助かった、ありがとう。」

……………でも、何で？」

「悪いことをしたとは思えない奴らが追われてる、だから助けた。」

そうしたら、追っている連中も悪人とは思えなかった。

何かの勘違いか、行き違いか、もしくは理由がある。そう考えた。

聞かせてくれたっていいだろう、こっちは巻き込まれたんだから」

焚き火を組み直し、薪を追加し、慣れた様子で火を点けた少年は、自身が座っていた反対側へと立香とマシュを促した。

終わったこと、落ち着いたこと、助かったことをようやく実感できた二人を疲れが一気に襲う。

特に、魔術もろくに使えないただの人間である立香は耐え切れず、思わず膝を折らせてしまう程だった。

「センパイ!!」

……ごめんなさい、私が不甲斐なかったばかりに」

「ほら」

俯くマシュへと渡された革袋、思わず受け取ったそのの中身が水であることを確認したマシュは、急いでそれを立香へと差し出す。

遠慮など考える余裕もないまま中身を飲み干す立香に、フードから覗く少年の口元が優しい笑みを浮かべる。

それは、未だに警戒と不安を完全には捨てきれずにいた立香とマシュが、彼なら大丈夫だと、この場所ならば安全だとうまく思えた、そんな力を持った微笑みだった。

「俺は、藤丸立香」

「マシュ・キリエライトと申します、こちらはフォウさん」

「フォウフォウ！」

「俺はリンク。」

立香、マシュ、フォウ、よろしくな」

契約成立

青白く無機質な人工の光に照らし出された、カルデアのオペレーションルーム。人理修復の旅路が本格的に始まり、声を出すのも憚られてしまう程の緊張感で満たされるこの部屋に、何の前触れも遠慮も無く堂々と入ってきた者がいた。

自動ドアが開く音に思わず振り返った赤い外套の男が、視界の端に長く背に伸びる蒼い髪とドルイドの杖を捉えた時点で、ため息と共に体勢を元に戻す。

「君か、ランサー」

「残念、今はキャスターだ。」

いい加減それで呼ぶのはやめてくれねえか、いつまで経っても未練が消えやしねえ。

「……次はランサーで呼べって、消え際にちゃんと伝えたってのに」

「不死身の槍兵ではなく、絶体絶命の窮地の中で導いてくれたドルイドこそが、彼らにとっての『クー・フリーン』だったのだろうか」

「……まあ、期待されてるからには応えるさ」

多大な犠牲を払いながら、立香とマッシュが燃え盛る冬木の街から帰還した。

その少し後に行われた儀式にて、冬木という土地の縁が結ばれたと思われる数人のサーヴァントが召喚された。

キャスターのクー・フリーン、同じくキャスターのメディア、ライダーのメドゥーサ、アサシンの佐々木小次郎。

そして、アーチャーのエミヤに、セイバーのアルトリア・オルタ。

召喚してしまった直後は阿鼻叫喚だった。

現状で敵対の意思は無いこと、むしろ人理修復に尽力する所存であることを（な

ぜかエミヤがアルトリアの分まで）誠心誠意主張することで、やっと落ち着いたのだった。

サーヴァントという最上クラスの使い魔が、魔術師としての感覚が薄い者からしても、歴史・伝説上の英雄がそこに居るといふ現状に、最初こそいちいち驚いたり戸惑ったりしていたカルデアスタッフ達だったが、今やすっかり慣れていた。

例え英雄であろうともいつまでも躊躇っていられる程の、折角の人員を遊ばせていられるような余裕が現状で皆無なのが理由だった。

全くの手つかずで新品状態だった、施設的に重要とはみなされなかった為に無傷で残っていた食堂の主に早々に収まり、味気ない保存食を何とかアレンジして栄養と食の楽しさを提供してくれるエミヤには、立香を含めたスタッフ総出でひれ伏したし。

クー・フリーンも、慣れないながらもキャスターとして、メディアと共に破壊されてしまったカルデア施設をひとつでも多く復旧させる為に尽力している。

ダ・ヴィンチという前例が既にあったことも幸いして、サーヴァント達はただの強力な使い魔ではなく、人理修復のために共に頑張る仲間という立ち位置をカルデ

アで築きつつあった。

だから、クー・フリーンが入ってきたことに気付いても、スタッフ達は構わず存在証明を続けたし。

皮肉屋を気取りながらも、実際はオカン気質であることがこの短期間で早々に知れ渡ったエミヤが、レイシフトに赴く二人をあっさりと見送った後に自身の城（キッチン）で散々ソワソワしてから結局様子を見に来た際も、誰もツツコミはしなかった。

そんなエミヤへのツツコミスルーは、実は現在進行形で行なわれていたりする。

《火で炙られた皮がパリッと香ばしくて、熱い脂が口いっぱいに広がって……ほんの少し塩を振って、火で焼いただけなのにこんなに美味しいなんて!!

これが焼き魚、これがレーションや栄養補助食品とは違う本物の野外料理!!》

《れーしょ…栄養補助って?》

《ま、マシユはいわゆる箱入り娘って奴で…つい最近まで、家の外に出たことが無かったんだ》

《訳ありって奴か、なら詳しくは聞かないでおくよ。

マシユ、お代わりはいる？》

《いただきます!!》

「…まともな食材さえあれば、マシユにもっと手の込んだ家庭の味を、もっと早く、もっとたくさん味わわせてやれたというのに。

召喚されて以来、私は一体何をしていたというのだ…っ!!」

「料理、時々掃除だな。

……お前、自分がアーチャーのサーヴァントだってことマジで忘れてねえか？」
「そもそも、まともな食材どころか、辛うじてアレンジを効かせられる保存食の類
いまでもが尽きかけているのだ!!

このままでは、缶詰めどころか固形の栄養補助食品で三食賄わなければならな
くなる……くっ、私に食材の投影が出来てさえいれば」

「聞いちゃいねえな」

周りが敢えてスルーしているのを察しながらも、馴染みの相手を見て見ぬ振り

出来ずに律儀に突っ込んだクー・フリーンだったが、一瞬で諦めて意識を切り換えた。

「ダ・ヴィンチ、今どうなってんだ？」

「修復を終えてある程度落ち着いた特異点からなら、食料その他の物資を調達できる可能性はあるよ。」

今はそれに期待するしかないね、エミヤには頑張ってもうしばらく持ち堪えてもらおう」

「…………いや、そうじゃなくて」

「わかってるよ、冗談が通じないなあ」

「冗談にしろとまでは言わねえさ。」

俺達サーヴァントはともかく、マスターやスタッフの連中、生身の人間達にとってはガチで切実な案件だからな」

「そーゆーこと、一応真面目に考えてはいるさ。」

で、現状だけどねえ…とりあえず、もう少し経てば落ち着いて色々と考えられる

ようになりそうってところかな」

レイシフト先の動向を窺うための大画面には、森の中で焚き火の傍に腰を下ろし、焼き魚や燻製肉、直火で炙った又は生の果物といったシンプルかつワイルドなメニューに舌鼓を打つ立香達の姿が映し出されている。

外の世界を知らないマシユはもちろん、エミヤの決死のアレンジを以ってしても、近頃は単調と言わざるを得なかったメニューに音を上げ始めていた立香もまた、久々の新鮮な材料を使用した食事に夢中になっていた。

スタッフ達からすれば酷い飯テロ案件になりそうな光景だったが、レイシフトを安定させなければならぬ責任感と、立香とマシユの嬉しそうな様子を目にしたこへの安堵感が、一同の冷静さを保たせている。

現状をひと通り確認したクー・フリーンは、最終的に当然行きつくべき所へ、唯一の見慣れない存在だった少年へと注目した。

「あの坊主は？」

「危ないところだった立香君達を助けてくれたのさ。

名前はね…何と驚き、『リンク』だそうだよ」

ダ・ヴィンチが、少しでも含みを持たせながら口にしたその名に、クー・フリーンは思わず息を吞んでしまった。

それ程の、あまりにも強すぎる力と意味を持った名前だった。

「…………人理焼却に対する世界のカウンターとして、特異点にはサーヴァントが召喚される可能性があるって言ってたな」

「私ももしやと思ったんだけど…残念ながらそれは無さそうだね、サーヴァント反応が測定されない。

長い歴史の中には、『彼』の名を我が子につけるような剛毅な親もいたということだろう」

「つけられた方は堪ったもんじゃねえだろ」

少年の今までの苦労を想像して多少同情したクー・フリーンをよそに、当の少年は、腹が膨れて落ち着いた立香達から話を伺い始めていた。

《フランスの異変を調査、解決しに来た…ねえ》

《所屬している組織の都合上、あまり詳しいことは言えないんだけど、混乱に乗じた変な企てとかは全く無いってことは断言できる。

事前情報を何も得られないまま来たばかりで、勘違いからいきなりあんなことになっちゃって。詳しいことは、まだ何もわかっていないんだ。

何でもいい…知ってること、分かっていること、教えてもらえないか？》

《教えてやってもいいんだけどさ…生憎と、俺も殆ど何も知らないんだ。

俺自身旅の身で、この国にだって来たばかりで。

ここが『フランス』という国だってこと自体、今聞いて初めて知ったくらいだからな》

《そうなのですか!?

こんな森の中で、特に不自由もなく慣れた様子で過ごされていたので、てっきり

地元の方だとばかり……》

《来たばかりで何も知らない、なのに人の居るところで情報を集めもせず、こんなところで一人サバイバル生活……なalink、もしかしてお前も何か訳あり？

》

情報源としての当てが外れて軽く肩をすくめたダ・ヴィンチをよそに、クー・フリーンは、僅かな情報と思考の余地から不審な点に気付いてみせた立香に思わず笑みを浮かべながら感心していた。

危機的状況、異常事態の中で焦り、混乱しながらも、思考のどこかで異様なまでの冷静さを保ち続ける。

そんなある意味での鈍感さ、マイペースぶりは、冬木の時に見せていたものと変わらない。

一步引いたところから状況を俯瞰し、どんな時でも客観的な見方と判断が出来る。指揮官、マスターに必要な素質の存在を、早いうちに確認できたのは僥倖だった。そんなクー・フリーンの視線の先、大画面の向こうでは、戸惑いながら首を傾げ

るリンクの様子が立香の指摘の正しさを証明していた。

《訳あり……なのかなあ、俺自身よくわからなくて。

俺だって最初は、何でもいいから情報収集をしようと思って街を探したんだ。

いくつか見つけて、色々と聞こうとしたんだけど、どの場所でも大して話を聞く前に問題が起こって…》

《問題…とは、具体的にどのような？》

《どこに行っても、なぜか異様に絡まれた。

性別も職業も立場もその時々でバラバラ、だから対処法の目処も立てられなくて。買利物もろくに出来なかったから、こうして自力で、狩りやら採集やらして、今後の旅支度を整えていたんだ》

《たくましい奴だな…》

《何が原因だったんでしょね》

呆れ半分感心半分の立香と、首を傾げながら真剣に考察するマシュ。

そんな時、二人の間を突如吹き抜けた風が、半ば燻っていた焚き火の灰を巻き上げた。

焚き火を挟んで二人の真正面に座っていたリンクはそれを頭から引っ被り、更には若干吸い込んでしまったらしく盛大に噎せ始めた。

《リンクさん、大丈夫ですか!?!》

《ほら、水でも飲…め……………》

慌てて声を上げたマシュと、先ほどは逆に革袋を差し出す立香。

二人のそんな挙動は、とあるものを目にしたことで思いがけず停止させられた。止まってしまったのは彼らだけではない、画面の向こうのオペレーションルームで見守っていた一同もまた例外なく。

《ケホッ…ありがと……………立香、マシュ、どうかした?》

《……………リンクさん。》

異様に絡まれた理由ですが、判明しました》

《つーかお前……そんな無自覚で、今までよく何事もなく無事だったな》

《何のこと？》

未だ収まらない苦しさに加え、訳がわからない余りに苛立ちすら覚え、若干眉間に皺を寄せたその表情さえ、芸術家が生涯を費やして完成させた傑作の如く。頭から被った灰を払うために外されたフードの下から現れたのは、思わずそんなことを考えてしまった自分を笑えない程に美しい美少年だった。

「……成る程な、親も大層な名前を付けるわけだ」

「惜しい、残念過ぎる!! こんな状況でなければ全身全霊をかけて絵のモデルになってもらったのに!!」

モナ・リザに次ぐ傑作が描けたかもしれないのに!! ……と騒ぐダ・ヴィンチと、未だ半ば呆けてしまっているスタッフ一同をよそに、画面の向こうの少年少女達は

何とかやり取りを先へと進めていた。

《リンク、取引をしよう。》

この国の現状を知りたい……もっと広く言えば、『情報が欲しい』という共通点が俺達にはある。

俺達はリンクが何故か絡まれまくっていた原因に気付いた、その対処法だって思いついている《

《その辺りを補助する代わりに、旅路に同行して色々と手助けしてほしい……ってところかな》

《正解：見てわかったと思うけど、俺達、野営や旅に関しては本で勉強しただけで実地では全然でき。》

手助けだけでなく、是非とも指導してもらいたいんだ《

《わかった、その話に乗ろう。》

助けてもらえるならありがたいし、そろそろ動き出そうかと丁度思ってたところだし。

あと何より、お前達と一緒にだと面白そうだ》

《ありがとうございますリンクさん、よろしくお願いします！》

《こちらこそ、改めてよろしくな。

それじゃあ、協力関係の締結を祝って、現時点で提供できる分の情報を出すとして
よう》

《えっ、情報あったの!?!》

《多少はあちこち回ったんだ、いくつかの街や砦の場所くらいは把握しているさ。

この森を出て少し行ったところにも、小さいものだけ砦がある。

今現在の戦況や情勢を知りたいなら、話を聞く対象は一般人よりも兵士の方だろう》

《成る程：それでは次の目的は、その砦で、今度こそ友好的にお話を伺うことですね》

《……あと、もうひとつ。

どう判断すれば、どう意味を捉えればいいのかわからなかった：お前達に伝えるべきか、今の今まで迷っていた情報がある》

《……聞かせてくれ》

《詳しく聞く前にその場を離れざるを得なくて、チラッとやり取りを耳にしたいだけの話なんだけど……何でも、国中が震え上がっているらしい。

『蘇った魔女が、国に、自分達に復讐する』ってな》

人理修復の旅路を辿る本編においては、特異点にてメインで活躍するサーヴァントは、マッシュとリンク以外はその特異点の物語中で登場する者だけという縛りをつけさせていただきます。

カルデアから自由に人員を動員できるとなると、選択肢や戦略の幅がありすぎてヌルゲーになってしまうので。

書く側としては、ある程度制限があった方がやりやすかったりするんです。

あと実際、立香のスペックからしても、カルデアからサーヴァントを自由に呼びまくるなんて荒業は到底出来ませんから。

レイシフト時に連れていけるのは、立香自身のスペックで契約と顕現を維持でき

る者だけ…要はカルデアを介さず個人で契約したサーヴァント、つまりマッシュとリンク。

それ以外の皆は、サークル設置が完了してカルデアからのバックアップを受けられるようになってから、一時的な召喚で力を借りるくらいにしておこうと考えています。

だとしたら、カルデアで所属のサーヴァントを召喚する意味は何なのか…という話になってしまいますが。

スタッフが激減してしまったカルデアという組織自体の運用、立香やマッシュへの指導、幕間の物語やイベントに該当する微小特異点への対応など。

メインのもの以外にもこなすべき仕事は山のようにありますから、普段はそちらに従事してもらっていると考えています。

特異点で戦うだけが人理修復ではないということです、その辺りの日常やイベントのストーリーも今度追ってみたいです。

どんなサーヴァント達も普通に登場してくる、小ネタや幕間の時間軸に関しては、F G O ゲーム本編のそれと同様にスルーでお願いします。

束の間の平穩

「……なあ、ほんとにこれ外しちゃダメなのか？」

「ダメです、リンクさんは是非ともそのままでお過ごしください」

「……ほんとに、こんなことで解決するのか？」

「保証する」

「……………話を聞くのに被りものしたままって、失礼だと思うんだけどなあ」

（成る程、それで律儀に素顔を晒したのか）

（リンクさんの言うことは尤もだし、非も全く無いのですが。

……誰も何も悪くないのに事態が悪い方向へと進むこともあるのですね、勉強に

なりました)

フードの端を摘みながら、意に反する行ないをすることに少しだけ不満そうな様子ではあったが、客観的な立場から得られた助言を蔑ろにするつもりは無いらしい。

ギリギリの視界が確保できるだけの辺りまで、しっかりとフードを下ろしてくれたりリンクに、立香とマシュは、友好的な接触への第一関門が突破されたことを確認してホッと肩を落とした。

「さて……立香、マシュ、ここでちょっとした問題だ」

「問題？」

「俺達が今歩いているこの道から、どんな情報が得られるか言ってみよう」

「こ、この道からですか!？」

と言われても、私の目には、何の変哲もない道としか……」

「いきなり情報を出せってのはきついか。」

それじゃあ、何か氣になったこと、氣付いたことはないか？

他の場所の他の道と比べて、違ふところを指摘するのもいい」

他の場所の、他の道。そう言われて、マシュは一層黙り込んでしまった。

カルデアの施設と極寒の雪山、加えて炎に呑み込まれた冬木の街以外は、資料でしか世界を知らないマシュには酷な質問であったことをリンクは知らない。

悪気はない、誰も悪くないのに事態ばかりが悪くなる。またしても起こりかけた実例に、立香はフォローすべく慌てて割って入った。

「え、えっと……そういえば結構道幅があるな、三人で横並びになっても余裕で歩ける」

必死に回した思考の中で、取りあえず氣付いたことを口にしてはみたのだが、一瞬の後に『それが何だと言うのだ』と自分で自分に突っこんでいた。

苦笑いの裏で落ち込む立香だったが、そんな彼の内心をよそに、リンクが返したのは思いがけない言葉だった。

「立香、ひとつ言っておく。世の中に無駄な情報、余計な気付きなんてものはない。どんなもの、どんなことにだって、そうなった理由や原因があるんだ。

そこから情報を引き出せるかは人によるし、その情報を生かせるか、役立たせるかも人による。

最初から『馬鹿げている』と切って捨てることほど『馬鹿げている』ことは無い、少なくとも俺はそう思う。

細かいことや、当たり前すぎて見逃しがちなことに気付けるのは立派な能力だよ。それとマシュも……わからないことに罪悪感を覚える必要はない。悪いことなんかじゃないんだから。

知識や経験の量に優越感を抱き、周りを見下すような奴に、ある段階で『知ること』『学ぶこと』に満足してしまうような奴に先は無い。

マシュはただ、育った環境が悪かっただけ……あくまで想像だけど、訳ありっぽいから聞かないけど、それだけのことだろ。

大切なのはこれから。学ぶことの大切さと楽しさを知っているマシュなら、すぐ

に追いつき追い越すさ」

「……はい、ありがとうございます」

「ちなみに、立香が気付いた道幅の広さは、この道を使ってどれだけの量の荷物を運んでいるかに関わってくる。要は荷車を使ってるかどうかだな。

人の足で運べるだけの物資ではもたない、それだけの数の人とそれを賄う為の施設がこの道の先にあることの証だ」

「成る程…」

「更に別の点から、その人数や施設の規模がそれほど大きなものでは無いこともわかる。

その『別の点』とは果たして何なのか。はい、立香」

「わかんない、教えて」

「……少しは考えろよ」

「知らないことは悪いことじゃないって、言ったのはお前じゃん」

「学ぼうとすることが大切なんだとも言った気がするな……まあいいか、何かお前はそれで問題なさそうな気がするし。」

答えは道の舗装が中途半端なこと、この程度の固め具合じゃちょっと雨が降っただけですぐに泥濘になる。

その程度なら何とかなる程度の行き来しかない、もしくは道を整備する重要度が低い。どっちにしても、人の拠点としては小規模ってことだ」

「な、成る程……凄いですリンクさん、ほんの僅かなことから色んなことに気付けるんですね!!」

「経験と蓄積だよ、一度覚えさえすれば色んな場所や場面で使えるようになる。

色々と教えるって約束したからな、出来る限りのことはさせてもらうさ」

「はい、精一杯学ばせていただきます!!」

落ち込みから一転、キラキラと目を輝かせながらリンクの話に耳を傾けるマッシュに、そんな彼女を微笑まし気に見守る立香。

ここが人理崩壊を導く特異点のひとつであることや、この地で起きる異常のキーワードと思われる『魔女』の存在を、知っていても思い出すのが困難になってしまいう程に穏やかな時間が流れていた。

「いやーほんと、追われて森に逃げ込む羽目になった時はどうしようかと思ったけど。」

それでリンクに会えたんだから、プラマイで言えばこれはもう完全にプラスだな」
「これこそ『災い転じて福となす』です、誘導してくれたドクターに感謝ですね。

……………あれ、ドクター？」

《僕が何だって!?》

「うわっ!？」

「ド、ドクター!!」

突如大音量で響いてきた、今の今まで完全に忘れていた声とその主に、キョトンとしながら声の主を探して辺りを見回し始めたリンクに、立香とマシユはここからは窺えない通信先へと向けて慌てて静止の声を上げ…ようとしたのだが、間に合わなかった。

《立香君、マシュ、二人とも大丈夫!? あれからどうなったの!?

……………って、その君は誰?》

止める間もなく、通信どころか映像まで繋がれてしまった。

気のせいでは片づけられない決定的なものを目撃してしまったことに、立香とマシュはもう突っ込む気にもなれなかった。

溜め息をつきながら肩を落としていたのは、せっかく築けた現地民との友好関係に水を差すまいと、見守るのみに徹していた気遣いを一瞬で台無しにされたオペレーションルームの一同も同じく。

尤も、立香とマシュの身を本気で心配したからこそその暴走であったことは誰一人として疑わなかったし、呆れながらも失望まではされなかったのは、ロマニの日頃の行いによる人望の賜物ではあったが。

鼻が隠れるほどに深く下げていたフードを、影の中に瞳が窺える位置にまで上げてまでしながら、虚空に浮かぶロマニの冷や汗交じりで引きつった顔を凝視するリンク。

一瞬の思考を経て、立香は覚悟を決めた。誤魔化す覚悟ではなく、きちんと説明する覚悟を。

未だ短い付き合いではあるものの、リンクならばわかってくれるという信頼が既にあつたし。

何よりも立香自身が、彼に対して誠実でありたいと思っていたから。

「リンク、紹介するよ。」

その人はロマニ・アーキマン、俺達のドクターだ」

「味方なんだな？」

「保証する」

そう言われて吐いた息と共に、リンクの肩に、眼差しに籠っていた不自然な力が抜けたのがわかった。

立香の言葉と、彼の発言を受けて警戒を解いたリンクの様子に、見知らぬ少年が立香達が現地で得た仲間であることをロマニも察した。

所長代理として、彼らの上司として、保護者として、年長者として、あまり情けない姿ばかりは見せられない。

『今更だ』と言われそうな、殆ど確信と言える予感をひとまず隅に追いやって、新たな仲間であり、友人であると言える存在にきちんと向き合おうとしている立香の気持ちを尊重して、カルデアと自分達について話そうとしたロマニだったが、その決意は次の瞬間に霧散した。

緊張が解けて一旦綻んだ筈のリンクの表情が、今度は表情だけでなく身に纏う気配までもが、警戒を通り越した戦意・闘志とも言えるものを漲らせたのだから。

それを真正面から受けてしまったロマニが、通信の向こうでひっくり返ったのを察したが、今気にかけるべきはそちらではない。

声をかける間もなく、自分達が向かっていた先へ……彼が『砦がある』と言っていた道の先へと駆け出したリンクの後を、立香とマッシュは一拍遅れて追いかけた。

「リンク、どうしたんだ!？」

「人の悲鳴!! あと戦いの音だ、確かに聞こえた!!」

「……!! マスター、急ぎましょう!!」

その言葉に、決断に、何の躊躇いもなく頷く少年少女達。

だいの大人ですら背を向けてもおかしくない戦闘の真っ只中へと向けて、全速力で駆けるその様は、最新の英雄譚的一幕と呼ぶに相応しい光景だった。

VS
骸骨兵

喋りながらも順調な行程だったお蔭で、走り始めてそう時間を要することなく砦が見えてきた。

実際に一度目にした経験から、旅の知識を立香達に教えるための考察から、それ程大きなものではないと言っていたリンクの前情報通り。

小規模ながらもこの辺一帯を守ってきたのであろう砦は、自然に発生したものは到底思えない骸骨の化け物の襲撃を受けていた。

怪我を負った、満身創痍と言っておかしくない身で必死の抵抗を続ける兵士達の姿を目にした一同の心に、更なる戦意の炎が燃え上がる。

《魔力反応確認、骸骨兵だ!!

今度は思う存分暴れていいぞ、二人とも!!》

「はい、マスター指示を!!

木っ端微塵に蹴散らし……って、リンクさん!？」

「リンク!!」

立香とマシュを先導する形で走っていたリンクは、言葉にせずとも共有していた二人の予想に反して、駆ける足の勢いを欠片も緩めることの無いまま剣戟の真っ只中へと飛び込んでしまった。

冷静で、自分達よりもずっと旅慣れていて、こちらが敢えて何も言わずとも的確な判断を下してくれると思っていた彼が、まさかこんな勢い任せの暴挙に走るとは。リンクを助けるべく指示を出した立香と、それを受けて盾を振りかぶりながら彼を追って走り出したマシュだったが、その心意気は無駄となった。

既に足が崩れかけている兵士へと武器を振りかぶる、一体の骸骨兵。

その骨と魔力で構成されていた体躯が、突如バラバラになって崩れ落ちる。

全速力で駆けた勢いのままに、骸骨兵の無防備な背中へと飛びかかったリンクが、途中で抜き放った小刀を剥き出しの頭蓋骨へと叩き込んだのだ。

オペレーションルームから測定を行っていたダ・ヴィンチは、リンクが放った一撃が骸骨兵を構成していた魔力の核を破壊する一部始終を見届けた。

《ちよっ……待つて待つて待つて、これは一体どういうこと!?!》

《何を慌ててるんだいダ・ヴィンチ、あのナイフはそんなに凄いものだったのか!?!》

《逆だよ、神秘の類いは一切計測されていない!!》

何の変哲もない、旅の供とするには上等な程度のありふれた小刀だ!!

一切の神秘に助けられることなく、我が身ひとつで骸骨兵の核を碎いてみせたんだよ、彼は!!》

ロマニが、ダ・ヴィンチが通信の向こうで上げた悲鳴のような声を、立香とマ

シユは驚きのあまりに硬直してしまった思考の隅で聞いていた。

ほんの一瞬、たった一撃で、それなりに頑強である筈の骸骨兵を破壊してみせた少年を、その場に存在する骸骨兵全てが最優先の攻撃対象として認識する。

たった今切り結んでいた兵士を放つてまで向かってくる骸骨兵達に、リンクは慌てるでも嘆くでもなく、ただ静かに小刀を構え直す動作のみで応えた。

同時に、一斉に、たった一人へと向けて多方向から襲いかかる骸骨兵の群れ。

止まってしまっていた思考が否応も無く揺り動かされ、慌てて加勢に入ろうにも到底間に合わないことに気付いて自分を責めたマシユだったが、彼女が思い描いてしまった光景は現実とはならなかった。

骸骨兵の攻撃が向けられた先を軸に、鋭い一閃が円を描いた次の瞬間、全ての骸骨兵が吹っ飛ばされた。

あまりにも強烈すぎてスローモーションにすら感じられる光景の真ん中で、大技を放った余韻を体勢と纏う気配に残すリンク。その表情は、何故か納得できているさそうで。

何が足りないというのだ、襲いかかった骸骨兵の半数を今の一撃で破壊しておき

ながら。

(……………いや、まさか、半分『しか』倒せなかったのが不満なのか?)

そんな『戦士』の思考回路に辿り着いた立香は、ゾクツと背筋が粟立つ心地を味わっていた。

壊されずとも背骨が折られ、もはや立ち上がれず足掻くことしかできないものの頭を踏み碎き。

そのまま踏み込んだ勢いで、別のものの武器を振りかぶった腕の関節を一閃で断つ。

重さが急激に変化してバランスを、体勢を崩した隙を逃さずに、魔力の核と思われる頭を破壊する……そんな、彼の中で明確に思い描かれていたであろう工程が、頭蓋骨に半ばめり込んだだけの段階でへし折れてしまった小刀によって霧散する。

チツと舌を鳴らしながら、それでもリンクは諦めずにもう一度腕を振りかぶり、翻した柄の部分でめり込んだ刃を改めて頭蓋骨の奥深くへと叩き込んだ。

刃先が届き、碎いた手応えを確かに感じた次の瞬間に、僅かな抵抗を経て骸骨兵が崩れ落ちた。

倒した数は、襲ってきた数にはまだ足りない。

それがわかっていたリンクは、へしゃげてしまってもはや殴る用途にも使えないであろう柄を放り投げ、倒した骸骨兵の一体の持ち物だった剣へと手を伸ばした。見るからに粗悪品な上に、手入れなどされようもなくあちこちが欠けている始末だが、それでも丸腰とは比べようもない。

殆ど飛び付いたと言っている勢いで柄を握り、追撃に備えて身を翻した。その先で、残した数びつたり分の分の骸骨兵が粉碎された残骸と共にマッシュが立っていた。立香と一緒に、見るからに『怒っています』と言わんばかりの表情と迫力で、こちらを睨み付けながら。

「なあリンク……俺達は何を言いたいのか、頭のいいお前ならわかるよな？」

「……………ごめん、さっぱり」

「一人で突っ込む奴がいるかよ、俺達と一緒にいたのに!!」

「リンクさんが思っていたよりずっと強かったのは見てわかりましたが、それとこれとは別問題です!!」

「ごめん、二人がいたの忘れてた」

「余計悪いわ(です)!!」

彼らの怒りが、一人で突っ走ったことへの心配と、頼って貰えなかった悲しさから来ていることを。

かつての癖を引きずって、『仲間』を忘れてしまった自分に非があることを的確に察してしまったリンクには、ひたすら謝る以外の選択肢が思い浮かべない。

混戦にいきなり乱入して、絶体絶命の危機を瞬く間に覆して、今は化け物の残骸の中で説教に夢中になっている。

そんな自分達が砦の兵士達に遠巻きにされていることに気付き、慌てて当初の目的に取り掛かることとなるのは、まだ少しだけ先のこと。

魔女の復讐

修羅の国 Ⅱ ハイリア

「助けてくれてありがとう、皆の全ての者を代表して礼を言うよ。

凄い強さだったなあ、その若さで旅をしているだけのことはある」

「それにしても驚いた、あんな化け物が人を襲っているなんて…」

「えっ、あのガイコツって珍しかったの？」

ここに來てから何回か襲われたから、てっきりこの国はそういう所なんだと思つてただけど…」

「そんなわけないです!!」

「お前はフランスをどんな修羅の国だと思つてたんだよ、つかそんな目に遭いなが

ら平然と森で野宿してたのか!!」

「今までよく生きてましたね…」

「さっきのあの強さがあるって考えれば、まだ納得できなくもないけれど…」

予想外の認識と爆弾発言に多少ぐだぐだしながら、それでも何とか果たした砦の者達との接触は、『危ういところを助けた』という何よりもの実績を以って非常に良好な形で行われた。

その結果、リンクから辛うじて得られた、ほんの僅かな情報を補完するに足るだけの十分なものを得ることが出来た。

立香やマシュが知る正史と、現状の間に幾つも存在する差異。

中でも最も大きなものは、リンクの口に使っていた『蘇った魔女』と、その正体とされている『聖女ジャンヌ・ダルク』というキーワード。

その名と大体の功績、魔女として火刑に処されたという最期くらいしか知らなかったという認識を補足するためのマシュの語りを、立香は、そもそも彼女の存在そのものを知らなかったというリンクと共に沈痛な面持ちで聞いていた。

「改めて聞くと、ほんと酷いなあ…」

「国としては、最小の犠牲で最も大きな利を成したという大義名分があるのかもしれないけれど。」

「…それでも、その人が確かに成し遂げた献身に、功績に、少しくらいは報いたって良かっただろうに」

「ほんと、復讐のために蘇ったって言われてもなっとムグッ!？」

立香が思わず零しかけた何気ない呟きは、無言でその口を塞いだリンクの手によって妨げられた。

一瞬だけ思考を『?』で埋めた後に、自分がとんでもない失言を吐きかけたことに気付いた立香は、リンクへの感謝と安堵の気持ちを以って口の中に残っていた言葉を呑み込む。

それを確認したリンクは、ハアとため息を付きながら立香の口を覆った手のひらを外した。

「……ありがとう、助かった」

「本心、本音がどうであれ、それを出していいかどうかくらい考えてから発言しろ」
「……………ごめん、気をつける」

『復讐したとしてもおかしくない』悲惨な事実があったことと、『だから復讐されても仕方ない』という理論は決して結びつかない：結びつけてはいけない。

現在進行形で、その当たり散らすような『復讐』に苦しめられている犠牲者を前に、間違っても口にしていいことではなかった。

折角築いた友好関係を、一発でぶち壊しかねない大失態を犯しかけたことに軽く落ち込む立香の肩を叩きながら、今度はリンクが兵士達へと向き合った。

「それで、その魔女の『復讐』っていうのは、具体的にどんなものなんですか？」

フードの影から、真剣な表情と鋭い眼光を僅かに覗かせながらのリンクの問いか

けに真っ先に反応したのは、兵士達ではなくマシュだった。

「先ほどの骸骨兵は違うのですか？」

「確かに、死を恐れず、そこそこ頑丈で、見た目的に恐ろしく気味が悪いという点で厄介ではあったけれど。国が滅びに瀕するような脅威と言えるような敵じゃあない。

アレが撃退された後も、皆さんは変わらず警戒している。空に対して怯えている。……いるんですね、空からやってくる別の脅威が」

推測ではなく、確信をもった問いかけを受けた兵士達がその肩を跳ねさせるのと、城壁の上から半ばやけくそのような声が降ってきたのは、ほとんど同時のことだった。

「来たぞ、迎え討て!!」

「ドラゴンが来たぞ、抵抗しなきゃ食われちまうぞ!!」

風を切る鋭い轟音が、魂に爪を立て揺さぶる耳障りな咆哮が空の彼方から降ってくる。

瞬く間に砦を満たした戦闘の喧騒にまみれながら、上空を振り仰いだ三人の視界に飛び込んだのは、伝説やお伽噺の存在でなければならない筈の怪物だった。

《君達の周囲に大型の生体反応!!

しかも、速い…っ!!》

「目視しました、あれはまさか…」

「ドラゴン!？」

「はい、あれはワイバーンと呼ばれる竜の亜種体です!!

間違っても、絶対に、十五世紀のフランスに存在していない生物ではありません!!

「

個体数はわずか10にも満たず。しかしその巨体、その攻撃性は、この砦を攻め

落とし人間を喰らいつくすのには十分。

あり得ない筈の存在を目の当たりにしてしまった驚きと、こちらを餌としか認識していない怪物の殺気にあてられたことで硬直してしまった立香とマシュ。

二人の視界を横切って、フードの少年が飛び出した。

「リンクさん!？」

「お前、また……!!」

彼の行動によって図らずも気を取り直し、続けて走り出しかけた立香とマシュだったが、そのまま最前線へと駆けていくと思われたリンクがその足を止めたことで、二人も思わずそれに続いた。

「……リンク、どうした？」

「マシュ、お前は上空の敵に対する攻撃手段を持っているか？」

「……………」

「責めている訳じゃない、正直に答えてくれ」

「跳躍すれば、出来ないことはありませんが……あの高さ、あの素早さを相手には、少々難しいものがあります」

マシユの本領はそもそも護りであり、攻撃に転じたとしても、その戦法は巨大な盾を用いた重厚な一撃を確実に叩き込むことが重視される。

攻撃が容易に届かない空、しかも早いと来れば、今回のワイバーンは正しく天敵と言えた。

つい先ほど、頼ってくれなかったことを怒ったのは自分の方なのに。

不甲斐なさとし訳なさに俯いてしまったマシユだったが、リンクが次に向けた言葉は、そんな彼女の落ち込みを一喝するものだった。

「俺は何とかしてあいつらを地に落とす、それだけに集中する。

だから、止めはマシユに任せた」

「え……？」

「任せていいな？」

「はっ…はい!!」

マシユ・キリエライト、作戦を了解しました!!」

「立香…何か文句、もしくは別案は？」

「無い、それで行こう!!」

「了解した」

静かに、それでいながら力強い声で応えたリンクは、戦場へと向けて今度こそ脇目も振らず駆け出した。

最初の標的は、地上近くに舞い降りながら兵士の一人に食らいつく寸前だった一頭。

先ほど拾ったままだった骸骨兵の剣を振りかぶり、所々で欠けた刃で斬りつけるのではなく、全力を以って投げつけた。

ある程度脆くなっていたとはいえ、刀身は立派な鉄の塊。

それが粉々になる勢いで、しかも見事な狙いで脳天に叩きつけられたとなれば、

いかに丈夫なワイバーンが目を回してしまったとしても何らおかしくはなかった。

「大丈夫か!？」

「は、はい……何とお礼を言えば」

「礼はいい、何ならその槍を渡してくれ。」

たった今壊してしまって、手ぶらなんだ」

「し……しかし、これを渡してしまったら私が戦えなく」

「その怪我でこれ以上の戦闘は無理だ、後は任せて物陰にでも隠れていてくれ。」

あいつらは必ず倒す、約束する」

その声に、その言葉に……脱げかけたフードの下から覗いた美しい碧玉の眼差しに、兵士は気付けば自身の槍を手渡していた。

槍と共に、怪我を負ってもなお戦おうとした兵士の心意気を確かに受け取り、頷き。

途端に、弾かれるような勢いで駆け出した少年の背に、先ほど目の当たりにした

美しい瞳に、兵士はとある存在を重ねて見ていた。

幼い頃に知り、今も変わらず憧れ、誰かを守りたいという想いを抱く原動力となった。

伝説の勇者その人を。

VS
翼竜

また一体、空中で体勢を崩したワイバーンが、轟音と土煙を上げながら地に落ちた。

これが人間や他の生き物だったら、この時点で死んでいたのだろうか。

生憎ながら、強靱な鱗と生命力を持つワイバーンはこの程度の衝撃ならばもろともせず、自身を地に落とした相手を引き裂いてやらんと再度翼を広げた。

その思惑は、苛立ちのあまりに視野と思考が狭まり、接近に気付けなかった少女による盾の一撃によって防がれる。

大きく息を荒げ、自身が止めを刺した何体目かのワイバーンを見下ろし…未だ拭

いきれない戦いへの恐怖を必死に呑み込みながら、マシュは頭上を仰ぎ見た。

「リンクさん……っ!!」

既に崩れかけた城壁の縁に立ち、数を減らされて怒り心頭と化したワイバーン達を相手に、決して逸品とは言えない一兵士の槍と弓のみで対峙する。

どこの英雄譚的一幕だと突っ込みたくなるような様を、たった今目の前で、恐ろしい竜の群れを相手に一步も引くことなく繰り広げ続ける少年の姿が見えた。

粗末な剣と引き換えにワイバーンを一体昏倒させるという快挙を成したリンクは、今度は槍を手にして、止めを刺さんとするマシュとすれ違う形で最前線へと飛

び込んだ。

骸骨兵相手に繰り広げた攻防から、てっきり彼は剣士だとばかり思っていたのだが。

腰を落としながら、両手でもって長柄を構えるその様は、どう見ても確かな修練を積んだ達人のもの。

実際、腹の奥から吐き出された一声と共に繰り出された突きは、ワイバーンの鱗を貫いてその下の肉を抉る見事なものだった。

堅い鱗の存在と、たかが人間相手という驕りで油断しまくっていたところに与えられた痛手は、ワイバーンに盛大な悲鳴を上げさせた。

骸骨兵の時と同じように、目の前の小柄な少年を十分な脅威と見なしたワイバーン達は、攻撃及び排除の対象を一点に集中させる。

普通の人間なら：訓練を積んだ立派な兵士でさえ、引き裂かれ、噛み砕かれ、一瞬でひき肉になってしまいそうな竜の群れの猛攻をリンクは凌いだ。時折返り討ちにもしてしまうような成果すらも上げながら。

リンクは攻撃が来る方向を限定し、少しでも効率的に戦うために、敢えて城壁を

すぐ後ろにする位置を保っていた。

明らかに戦い慣れた者の、多勢に無勢の危機的状況を生き抜くための大胆かつ適切な判断。

しかしそれは、別の見方、別の言い方をするならば、逃げ場のない追いつめられた状況ということにもなる。

爪も牙も決定打とまらない事態に苛立ったワイバーンの一頭が、胸を逸らしながら大きく息を吸い、独特の構えを見せ始めた。

《ワイバーンの肺と思われる器官に熱源集中、間違いないブレスが来るぞ!!
リンク君、避け……って避けられない、逃げられない!!
どうしようどうしよう、助けてマギ・マリーーっ!!》

半透明な『ドクター』の悲鳴のような声を意識の端で聞きながら、リンクはグッと地を踏みしめる両足に力を込めた。

次の瞬間、吐き出された灼熱のブレスが今の今までリンクが立っていた地点を焼

き、更にその次の瞬間、炎を吹く竜の頭が頭上から降ってきた刃で串刺しにされた。その身が消し炭と化す直前、凄まじい脚力で己の身長近くまで跳んだリンクは、その足で更に背後の城壁を蹴り、自身を狙ったワイバーンの頭上まで跳び上がり。槍の穂先を真下、ワイバーンの脳天へと向け、重力に全体重を上乗せさせながら貫いたのだ。

竜の頭を地面に縫い付けてようやく勢いを止めた槍は、散々酷使した末に止めの一撃を食らったことで折れてしまった。

待ち針代わりの穂先を残したまま、強引にへし折れたことで先端を歪な棘状とさせた長柄を、群れの一頭が無残な姿と化したことで硬直してしまっていたワイバーンの、一番手近なところにいたものへと向けて振りかぶった。

尖っただけの木片で傷つけられるほど、竜の鱗は柔くない。

そんなことリンクは百も承知、ならば『これ』でも十分痛手を与えられる箇所を的確に狙うのみ。

自分の体の頑丈さを恨めと言わんばかりの一撃は、衝撃のあまり見開かれていた目を容赦なく貫いた。

痛みと苦しみによるおぞましい絶叫が辺りに響く、しかしこの程度では所詮死ぬほど痛いだけで倒すことは出来ない。

それも勿論リンクは承知済み、今欲しいのはあくまで『隙』だった。

仲間が連続で、それも凄まじい痛手を食らう様を目の当たりにしたワイバーン達が堪らず硬直した隙に、リンクは彼らへと背を向けて目の前に聳える城壁へと跳び付いた。

はね返される、もしくは滑り落ちると思われたその身は、足場とも手がかりとも言いがたい城壁のヒビや僅かな出っ張りを巧みに掴みながら、一掴み、一蹴りごとにその身を大きく跳ね上げさせていく。

ほんの数秒でリンクは、砦の護りの要である筈の城壁をその身ひとつで攻略し、縁から身を乗り出させ、息を呑みながら眼下の戦闘に魅入っていた兵士達の目の前へと躍り出た。

衝撃のあまりに、のけ反るを通り越して腰を抜かしてしまった兵士達。

その原因は、普通ならば登れるようなものではない筈の城壁を越えて突如人が現れたから、だけではない。

激戦の最中にフードが脱げ、それを直す余裕も無いまま壁を登ってきた少年の顔があまりにも美しく。

その顔を土埃に汚し、宝石のような青い瞳を滾らせながら、凜と前を見据えるその姿が正しく。

生涯の内に、一度は誰もが多かれ少なかれ憧れる、皆が想像の中で思い描いていた伝説の勇者そのものと言える雄姿だったのだから。

「何か武器を、あと出来れば弓と矢も!!」

「はっ…はい!!」

「お使い下さい!!」

何故か必要以上に畏まる兵士達から、新たな槍と弓矢を受け取ったリンク…その背後、城壁の縁の向こうの虚空に、大きく口を開けたワイバーンが翼を広げて飛び出した。

咆哮、もしくはいきなりの炎でも吐こうとしたのか。

大きく息を吸ったその動作は、目的が何であれ果たされることは無かった。

受け取った流れでそのまま構え、振り返りながら引き絞り、対象を捉えたと同時に放たれた矢が、一瞬の照準とはとても思えない必中の狙いでワイバーンの口へと飛び込み、喉から生命維持に関わる脳幹にかけてを見事に貫通させたのだから。

「何てことだ、彼は弓まで使うのか!!」

「とんでもねえなあ、三騎士の役割を一人で果たしていやがる」

モニター越しに繰り広げられる光景に、流石に本来の弓兵としての自分を思い出さざるを得なかったエミヤと、自分があの場にいない悔しさと新たな勇士の存在を目にした歓喜が入り混じって、ランサーの時の彼を思わせる壮絶な笑みを浮かべるクー・フリーリン。

英霊を二人も驚かせるという偉業を知らないところで成しながら、リンクは歩も引かず、気後れすることなく、ワイバーンの群れと戦い続けた。

城壁に立つ彼を狙うために飛び上がったワイバーンを、リンクは強烈な槍の一突

き、正確な弓の一射にて遙か下の地面へと叩き落とす。

しかしそれは、受けた痛みと衝撃に思わず力が抜けてしまったことによる一時的なものであり、気を取り直して再度羽ばたけば戦線に復帰することは容易だった。叩き落としたところに止めを刺すという、役割分担さえ存在していなければ。

目の前で繰り広げられる、紛れもない英雄譚に魅せられながら：彼一人に戦闘による負担の殆どを負わせ、自分はまだお膳立てされた状況で最後の一撃を食らわせるばかりという現状に、何とも言えない申し訳なさや情けなさを感じずにはいられずにいる。

戦闘の真っ最中だというのに、そんな乱れまくりの心境で居たせいだろうか。

頭上からリンクが、背後から立香が叫んだ声に。

最後の一頭となったワイバーンが、何を思ったのか急に攻撃対象を切り換えたことに、マシュは一瞬気付くことが出来なかった。

「マシュ：マシュ、危ない!!」

「そっちに行っただぞ!!」

「え…っ？」

自分が呆けてしまっていたことに気付き、ようやく顔を上げたマシユの瞳に映ったのは、自分へと向けて炎が燦る喉を大きく開いたワイバーンの姿だった。

命の危機であることはわかつているのに、その認識がどこか遠い…盾を構えるべき手が、それが叶わないのならばせめて逃げるべき足が動かない。

ここではない、どこか遠い世界の出来事を俯瞰しているかのような心地のマシユの視界に、ワイバーンの炎を遮りながら一本の軍旗がはためいた。

『我が神は^{リユミノジテ・エテルネツル}ここにありて』!!』

真名開放と共にその真価を発揮した旗が、神々しい輝きを放ちながら灼熱の炎の一切を防ぎきる。

それを認識しながらワイバーンは、強引に押し切らんとより一層の力を自身の吐く息に込めた。

より強くなった炎が、継続使用の影響が若干弱くなってしまった旗の光を越えてその先の主を炙る。

未だ新しい死因の記憶に連なる苦痛に、表情を歪ませた彼女の崖っぷちでの奮闘は、遙か頭上から降ってきた槍の穂先がワイバーンの心臓を堅い鱗を物ともせず貫き、潰し。

更にはその体を、城壁を数秒で登り切る脚力に加えて、落下の重力によって嵩増しされた体重による勢いを、余すことなく上乘せさせた両足でもって踏み潰した止めの一撃でもって終了した。

「彼は確か、今の今まで城壁に……」

思わず振り仰いだ彼女の視界に入ったのは、少年がたった今まで、ワイバーンとの激闘を繰り返していた城壁の縁から身を乗り出しながら、口々に彼の身を案じる声を上げる兵士達の姿。

あの強靱なワイバーンの体を、大地に咲く真っ赤な大花と変える勢いで降ってき

た光景と併せて、女性の脳裏にとんでもない事実が思い浮かんだ。

「…………まさか、飛び降りたのですか？ あそこから？」

自身の体の頑丈さと、衝撃の全てをワイバーンという名のクッションで和らげる技術に自信があったとしても、ちょっとやそつとの度胸で出来るようなことではない。

見つけた…彼ならば、この人達ならば必ずや。

心の底から込み上げる確信、そして安堵と共に、旗を持った女性は口を開き…その最初の一声は、兵士達が上げた悲鳴とも言えるような叫びによって遮られた。

「あ、貴女は……いや、お前は!!」

「ジャンヌ・ダルク!!」

「魔女だ、魔女が現れたぞ!!」

背を向けて逃げる者、逃げることに出来ない者、震える手足で必死に武器を構える者。

ワイバーンが一掃された安堵と高揚が一瞬で、意図に反して霧散してしまった状況で女性性は、ジャンヌ・ダルクは、戸惑いと悲哀が入り混じった表情で立ち尽くしていた。

「うわあっ!!」

「だ、大丈夫ですか!？」

「ひいっ、来るなあっ!!」

必死で逃げた足がもつれ、派手に転んでしまったその身を案じて伸ばされた手が、今の彼にはこの身を引き裂かんとする魔女の鉤爪にしか見えない。

恐怖のあまり震える唇で、必死に助けを求める声なき声に、ジャンヌ・ダルクの足下に撃ち込まれてその動きを妨げた矢が応えた。

「きゃあっ…!!」

「ちよっ…リンク、何してんの!？」

あの人は、マシュを助けてくれたのに!!」

「リンクさん…私にも、あの方が悪い人だとはとても」

「二人とも、今は黙って…ジャンヌ・ダルク!!」

この場所は、ここの人達はあるたを求めている!!

あんたに出来ることは何も無い、早々に立ち去れ!!

用があるというなら出直して来い、俺が相手になってやる!!」

弓を限界まで引き絞り、鏃を容赦なく突き付けてくるリンクに、ジャンヌは悲壮な表情を浮かべながら踵を返す。

成す術もなく走り去っていく後ろ姿に、リンクは強張っていた全身の力を抜きながら弓を下ろし、兵士達は歓喜の雄叫びを轟かせ…立香とマシュは、どうにも納得しきれないという表情で口を噤んだ。

気を緩める間もなく、二転三転と大揺れが続いた砦の攻防戦は、これにてようやく

くの終結を迎えたのだった。

フォウ君の存在が消えてしまっていますが、立香の肩辺りにいると思って読んで下さい。

新たな旅仲間

物資も食料も厳しいものがあつただろうに、それでも数日旅するには十分なだけのものを持たせてくれて。

リンクに対しては、あの砦で最も質の良かった剣と弓を譲ってくれて。

何よりも、両腕から溢れて持ちきれないほどの笑顔と感謝で見送ってくれた。

……だというのに、立香とマシユの表情は暗い。

歩きながら溜め息までついてしまう二人に、砦から十分遠ざかったことを確認したりリンクが少し呆れた様子で声をかける。

「立香、マシュ…二人とも、さっきから何をそんなに落ち込んでるんだ」

「何をもって、お前…」

二人の脳裏に焼き付いて離れないのは、先ほど、目の前の少年その人に追い払われた女性の、哀しそうな表情とやけに小さく見えた後ろ姿。

特にマシュは、彼女に命を救われた当人であるだけに、気がかりで仕方がない様子だった。

「…先ほどの、ジャンヌ・ダルクさん。

あの方は本当に恐ろしい魔女だったのでしょうか、やはり私にはどうしても……」

「違うよマシュ、さっきのひと噂の魔女は別人だ。

少なくとも、俺はそう思ってる」

「俺『達』だよ立香、俺も一応確信してる。

何だ…さっきの態度から、マシュもわかっているとばかり思ってたんだけど」

「えっ……ええええっ!？」

「パツと見だけど、そんな印象は欠片も無かったし。

何より、自分が焼かれる苦痛に耐えてまでマシユを助けてくれたあの行いは、裏があつて出来るようなことじゃない。

初めて会った時の二人と一緒に、すれ違いや勘違い、もしくは何らかの事情持ちつてところだろうな」

「そ、そんな……でしたらなぜ、それを皆の皆さんに話そうとせずに、あの人を追い払ったりしたのですか!？」

「俺もあの時点ではマシユと同意見で、落ち着いて考えてからリンクの意図を察したんだけど……」

分からない、納得できないという様子で声を上げるマシユに、どう言ったものかと後ろ頭を掻き混ぜながら唸り声を上げた立香の肩を、リンクの手がポンと叩く。『任せろ』と言わんばかりの仕草と表情に、立香は汚れ役、嫌われ役を押しつけるかのような居心地の悪さを感じながら、それでも適任であることは確かだと納得して頷いた。

「生前のジャンヌ・ダルク、そして蘇った魔女を実際に見た人が、間違いなく同一人物だと証言しているんだ。

これを、何の準備も証拠も無しに覆すのは不可能に近い。

通りすがりの、現状を殆ど知らない旅人が、『見た感じ悪い人とは思えない』なんて何の根拠もない意見を述べたところで、まともに取り扱ってもらえる筈が無い」

「仮に、あの人と魔女が別人だという確かな証拠があったとして。

度重なる襲撃で心身ともに疲弊しきっていた兵士達に、恐怖や怒りを呑み込んで、それを受け入れる冷静さと心の余裕が残っていたとは思えない。

骸骨兵やワイバーンを退治し、砦を救ったという俺達の実績を押し出せば強引に認めさせることも出来たかもしれないけれど、その場合は折角築いた信頼と相殺だ。助けてくれた人達が実は魔女に利する存在だったなんて、持ち上げて叩き落とす行為以外の何ものでもない。

物資や食料はもちろん、こんな武器なんて融通してくれる訳が無いし。

あんな笑顔で、『頑張って生きて乗り越えてみせます』なんて言葉で送ってくれ

るなんてありえない」

「そして何より……それだけの労力、損失を払ってあの人の潔白を証明し、砦の人達に認めてもらえたとして、あの時点でどんな成果に結びついた？

精々が『命の恩人にお返しが出来た』という俺達の自己満足くらい、優先順位としては低すぎる。

大事な使命を負ってここに来たと、この国を救いに来たんだと言ってたな。

それを尊重して考え、動いたまで。

始まりが成り行きとはいえ、今は間違いなく仲間として、同じ目的をもって行動していると思っているから」

きちんと筋道と理論を立てて、自分が何を考え、何を思ってあんな行動を起こしたのかを、ひとつひとつ丁寧に言葉にしていくリンク。

納得出来ないところがあれば、幾らでも異議を申し立ててやろうと意気込んでいたマッシュは、沸騰していた自身の思考が落ち着くを通り越して落ち込んでいくのを感じていた。

矢を放ち、彼女を追ひ払ったあの行動ひとつ、あの僅かな時間にリンクがどれだけ多くの、どれだけ先のことを考えて行動していたのか、それがよく理解できてしまったから。

自分の頭の中は、助けられたことによる無意識の臍負が上乘せされた好印象と、そんな彼女に報いてあげられなかった罪悪感、あの後彼女はどうなったのかという心配ばかりで一杯になって。

自分達がやって来る、そのずっと前から魔女に苦しめられていた兵士達の気持ちや現状に対する心遣いなんて、忘れはしないまでも端っこの方に追いやられてしまっていたのだから。

「通りすがりざまに救い、良いことをした、やり切ったという満足感だけを胸にそのまま去っていく方は、ある意味で楽な仕事だ。

だけどその地の人達は、傷ついたもの、失われてしまったもの、変わらない現実と向き合いながら、どんなに辛く大変でもそこで生きていくしかないんだ。

助けに来てあげたんだから、そんな自分達の行動や考えは正しいんだから、黙っ

て大人しく助けられておけばいい。

そんなのはただの押し付けに過ぎない、無自覚なら尚更な」

「……………はい、申し訳ありませんでした」

「ちよっ…リンク、リンク、いきなり飛ばし過ぎ。

前もちよっと言ったけど、マシユは外の世界というものを殆ど情報でしか知らなくて、色々と経験を積んでる真っ最中なんだからもっとお手柔らかに……」

「そんな子をいきなり最前線に出すなんて……お前達の所属してる組織ってのは、
どんだけ人手不足なんだ？」

「……………（盛大に爆破されたなんて言えない）色々と事情があるんだよ」

「何にしても…経験不足だろうが、勉強中だろうが、それを押し出したとして敵は
手加減なんかしてくれないし、失敗や失態は許されない。

任務を達成し、その上で生きて帰りたいのなら、厳しかろうが辛かろうが頑張る
しかないんだ。

なあ、マシユ……お前は、その辺り全部覚悟した上でここに来たんだろ？」

リンクの問いかけに、マシユは無言で、それでも確かに頷いた。

マシユの大変な現状を嘆きながら、その上で彼女自身の意思を尊重し、目的を成し遂げることが出来るように、敢えて率直な物言いをしているリンクの思いやりを感じたから。

「リンクさん…ご指摘、ありがとうございました」

「……色々と言った後で何だけど。」

あまり背負うなよ、マシユ一人の肩に乗ってる重みじゃないんだから。

立香は言うまでもなく…『ドクター』だっけ、ちゃんと他にも仲間はあるんだろ？」

「そうですね、その通りです」

「わかってるなら大丈夫そうだな。」

それにしても……さっきのあの人、ジャンヌ・ダルクだっけ。

一体どこまで行ったんだろかなあ、そろそろ合流しても大丈夫そうなのに」

「へっ?」

「リンクさん、合流とは一体……」

「言ってただろ。俺、あの時。」

『用があるなら出直して来い、俺が相手になってやる』って」

「あれはそういう意味だったのですか!？」

「「え？」」

突如やり取りに割り込んできた自分達以外の声に、三人揃って思わず振り返った先の木の陰から、今の今まで話題にしていたジャンヌ・ダルクその人がほんのりと赤く染まった顔を覗かせていた。

「……………わかってなかったのに、よくまた接触してくる気になりましたね」

「私には、あなた方以外に頼りに出来そうな当てが無かったもので。」

誠心誠意、心を込めてお話しして、何とかわかってもらおうと思ってお待ちしておりました」

「すんごい前向き思考」

「それに助けられたな。

まあ何にしても、無事に合流出来て良かった」

「ごめんなさい、鈍くて……折角気を回して頂いたのに、危うく無駄になるところでした」

「兵士達に本意を悟られないよう、敢えて誤解されやすい言い回しをしましたからね。

伝わらなかった事態は考慮していましたよ、その時は今度はこっちから探すつもりでした。

……先ほどは、説明も無しに強引な手段に出てしまつて申し訳ありませんでした」
「いえいえ、むしろお礼を言わせてください。

兵士達の心の安寧を何よりも優先して下さったこと、本当に嬉しく思います。
改めて自己紹介を……私は、ジャンヌ・ダルク。

一応、ルーラーのサーヴァント……みたいです」

清楚で美しい顔立ちに、隠し切れない不安と悲壮を滲ませながら。

それでも、精一杯に微笑みながらの自己紹介を以って、ジャンヌ・ダルクが一同の旅路に加わった。

残念、脳筋聖女でした。

現状把握

「『サーヴァント』って、なに？」

今後の道行きを判断するのに十分なだけの情報を得られて、『もういいか』と立香とマシュが判断したことから、戦闘の途中から今に至るまで、咎められることなく外れっぱなしだったフードの中心。

それが僅かに傾きながら口にした、今更な、それでいて当然すぎる問いかけに、その辺りの知識があることを大前提で話していた一同は、背後に『ビキッ』という擬声語がつきそうな勢いで固まった。

『やべー……』という内心の声が聞こえそうな表情で顔を強張らせる立香とマッシュに、ジャンヌは恐る恐るといった様子で問いかける。

「あ、あの……そちらの方は、まさか」

「うん、違うんだ」

「そんな、あの強さで!？」

「私達も、信じがたい気持ちは未だにあるのですが。」

『サーヴァント反応が無い』と、はっきり言われてしまいましたから」

「……エクストラクラス・ルーラーのサーヴァントには、『真名看破』というスキルがあります。」

弱体化している身ゆえ、まともな機能をしておりませんが、それでもサーヴァントと普通の人を見分けるくらいは問題なく出来る筈なんです。

改めて、きちんと見てみましたが……どうやら、立香さん達のおっしゃっている通りのようですね」

「中世以降、近代に近くなってから、『英雄』たりえる方は僅かながら現れてい

たそうです。

リンクさんはきっと、そんな方々の中でもとびっきりの存在なんだろうというのが、ダ・ヴィンチちゃんの考察です」

自分には無い、何かしらの『共通認識』を以ってヒソヒソと話しあう三人を、リンクは少し離れたところから若干遠い目で見守っていた。

知らない単語が多いし、状況の多くを未だ把握しきれていないけれど、それでも察することが出来るものはそれなりにある。

彼らが驚いているのは、並外れた戦闘能力を発揮した自分が、それを元に想定していた何かしらの存在ではなかったこと。

そういう存在であるという、本来ならば一目瞭然で判断できる筈の証拠が現れなかったこと。

その理由に、リンクは確かな心当たりがあった。

（一応、念のため……程度の期待だったんだけど、予想以上に効いてたみたいだな）

助けを求め、自身を呼ぶ声に応えて目覚めた時。

この地に立った時、彼は何もわからなかった。

ここは何処なのか、ここで何が起きているのか、自分の身に何が起こったのか、自分は何をすべきなのか。

唯一察することが出来たのは、今の自分が、眠りにつく前のかつての『自分』とは何かが違うという不思議な感覚と確信のみ。

途方に暮れるような状況で少しでも上手く立ち回ろうと、『効けばありがたい』程度の軽い気持ちで。

むしろ今後の決意を新たにするという意味合いの方が強い状況で、彼は願いをかけたのだ。

『自分がただの人間とは違う存在であるらしいということが、誰にも気づかれないように』と。

利き手の甲の紋章に、膨大な無色の力の塊に。

（もう『願望機』ではなくなったみたいだから、本当に駄目元だったのに。

効果を明確にイメージした上で、確かな方向性を加えさえすれば、大抵のことは出来るみたいだな。

……十分願望機だろうが、むしろ枷が外れたみたいで逆に怖いぞコレ。

使い道は、なるべく限定させておこう）

力に溺れるほど弱くなく、勘違いして思い上がるような馬鹿でもない、

それ故に、自分が手にしているものの恐ろしさと、それをずっと所持・管理し続けなければならぬ重責を正確に察し、理解してしまったリンクは、顔から血の気が下がって背筋に怖気が走る心地を味わっていた。

手袋の下に紋章を無意識にさすりながら、リンクは更に考えを巡らせる。

今の自分はただの人間ではない『何か』と成っていること。

立香達はその『何か』の正体と扱い方を知っていること。

本来ならば持ち得ているべき『自覚』と『仕様書』が、自分の中には備わっていないらしいこと。

現状で確信まで持てる事柄を脳内に書き出しながら、リンクはとある重要な方向性を定めた。

（どうやら俺も『それ』みたいだっていうことは、もうしばらく伏せておこう。

立香達と、その背後の組織を信用してないわけじゃないけれど。

輪の一步外から見られるもの、出来ることっていうのは、色々と手探り状態の現状ではきつと大切だ。

……だとしても、今の俺相手にも教えられる分はきちんと教えてもらわないとな）
リンクのそんな思惑は、彼自身が特に動くことも無いままに叶えられることとなる。

立香とマシユ、リンク、ジャンヌという、三様の知識と認識を擦り合わせるための話し合いが、その日の野営地にて行われたからだ。

それも、最も発言と情報の提供を渋ると予想されていた、組織の一員たる立香達からの提案で。

「……何かしらの組織が裏にあるのなら、こういうのって普通嫌がるんじゃないのか？」

「ドクターが許可を下さいました、ならば私達にも異論はありません」

「むしろ、俺達の方から頼み込んで許してもらおうつもりだったからな。」

リンクには、ちゃんと説明しとかなきゃと思ってたんだ」

《現状でもの凄く助けてもらってるからね、守秘義務とかも今更だよ（人理が焼かれた現状では秘匿だのなんだのって騒ぐ連中もない訳だし、そもそもそんなこと言ってる場合じゃ無いし）》

「……………何か、俺の方が罪悪感湧いてきた」

《あつ……リンク君、何か事情があつて言えないことがあるのなら、僕達が言ったからって無理しなくてもいいからね。

君は立香君とマシュを本気で助けてくれた、それだけで信じるには十分さ》

「リンクさんが『言えない』のならば、何か意味や事情があるのだと推測します」
「本当に必要な時には、きちんと話してくれるだろ？」

あまり焦らず、その時を気長に待つさ」

「フォウフォウッ！」

「……ありがとう、甘えさせてもらうよ。」

そして約束する、時が来たらちゃんと全部話すってな」

膝の上にて、我が物顔で寛ぐフォウの背を撫でながらのリンクの言葉に、立香とマシユ、そして通信先のロマニは、満足そうな笑顔で頷いた。

三者三様、改めて背筋を正しつつの情報交換は、立香とマシユが所属する組織『カルデア』側の状況説明から始まった。

それは、知らなかった者達からすれば、あまりにも絶望的な事実だった。

「……………つまり、お前達は未来から来たと。

未来で、世界は既に滅んでいて……しかもその滅びは、過去まで遡って、人という存在全て、人という種が生きた歴史そのものを無かったことにするというもので。そして、その計画の『楔』と言えるものに対抗するために、この時代まで来た」

「そう認識していただければ、問題は無いかと思われます」

「ちなみに、『過去に行く』のは誰でもできる訳じゃないんだ。

それが、お前もさっき気にしていた、素人同然の俺達が実働部隊として最前線に
来なきゃならなかった理由」

「……他に、助けを求めることは出来ないのか？

それだけの事態なんだ、普段どんなしがらみがあったとしても関係ないだろうに」
《残念だけどね、焼却を免れたのは僕達だけなんだ。

カルデアの施設と、所属している僅かなスタッフ……それが、今の世界に残され
た全てなんだよ》

「何ということでしょう……」

（世界が燃え尽きたあのイメージ、数えきれないほどの人達が最後の瞬間に残した
願いの声。

あれは、そういうことだったのか……）

世界が既に滅んでしまっているという事実、僅かな希望を信じてそれに立ち向

かっているのだという立香達を取り巻く現状を慮った、リンクとジャンヌの表情が悲壮に歪む。

それが、立香には嬉しかった。

「ありがとな、リンク」

「何が」

「信じてくれて」

「……こんな性質の悪い嘘、お前達はつかないだろ？」

ともかく、改めてちゃんと言っておくぞ。

成り行きが始まって、いつまで続くのか分からない道連れだったけど。

これからは本格的に仲間入りさせてもらう、つか意地でも着いていくからな。

この旅の成否に人という種の命運がかかってるなんて言われて、黙って見過ごせるもんか」

「リンクさん……っ！」

《ありがとう、リンク君。

君がこれからも一緒に来てくれるとなれば、頼もしいことこの上ないよ！」
「俺としては、リンクはもう仲間だと思ってたから、今更って気もするけどな」

そうして笑いあった三人は、ジャンヌを交えて、砦で譲ってもらった木製の粗末なコップと革袋の水でささやかな乾杯を上げた。

『終わり』の続き

『人理焼却』という現状と、その認識を共通のものとさせた一行は、続いてジャンヌの話に耳を傾けることとなった。

サーヴァントとして現界したばかりであること、召喚に不備があったのか酷く弱体化していること、そんな状況でもフランスを救うために今一度戦う気概を持ち得ていること、などなど。

自身の現状について語る彼女の話は、必然的に、リンクが最も欲していた情報にも触れることとなった。

「偉業や伝説、功績を残したことで、その名と存在が何らかの形で後の世に伝えられ、人の無意識とある種の信仰の中にある存在として昇華されたものが『英霊』。

その英霊が、その為の術を心得た者：『魔術師』によって、いわゆる使い魔として呼び出されたものが『サーヴァント』。

……という認識で、間違いは無い？」

「聖杯戦争とか、クラスとか：詳しい話をするとなると、内容はもっと複雑になるのですが。」

現状では、それだけ覚えて頂ければ十分かと思われます」

「そっか、ありがとう」

（だとしたら、ひょっとしたら俺は『違う』のかなあ。

『俺達』が成し遂げてきたことは、英霊として認められるには十分。それくらいの自覚と矜持なら持っている。

でも、察するに英霊となる為の条件は、存在と活躍が後の世にきちんと伝えられ、普遍の認識を得ていることだ。

今の世は恐らく、何度も衰退しては興っていたハイリアの時代が本当に終わり、

文明が一旦途絶えた後に改めて生まれた次の時代。

そんな世界の人達が、あの伝説を知っている訳がないし……)

自身が抱いた認識が間違っていないことを確認したリンクは、それと同時に新たに生まれたズレをどう解釈して修正したものかと首を捻っていた。

その疑問は次の瞬間、全く思いもよらなかった形で晴らされることとなる。

「それにしても、先ほどは驚いてしまいました。

私ってばてつきり、リンクさんも同じサーヴァントだと……もしかしたら、あの伝説の勇者様その人なのではないかと、少し期待してしまっていたものですから」

「ジャンヌさんも、あの『伝説』をお読みになられていたのですか！」

「私自身は、生憎と文字が読めなかったのです。

でも、話を知っている大人や、たまに村を訪れる旅の語り手が、時折聞かせてくれたのです。

多くの例に漏れず、私もかの方に憧れた一人なのですよ」

《最古にして最高の勇者の物語と名高い『ゼルダの伝説』だね、僕も大好きさ!》

「……………へ?」

「ゼルダの伝説って、どんな話だったっけ」

「センパイ、知らないのですか!？」

「し、知らない訳じゃないよ…ちゃんと読んだことがないだけで」

「いけません、それはいけませんよ、勇者リンクの活躍を知らないなんて!!」

本気で呆氣にとられ、目を点にして間拔けな声を零してしまったリンクの奇妙な様子は、それ以上に派手だった立香とマシユのやり取りで完全に掻き消された。

《立香君、マシユの言うことは……ちょっと興奮しすぎだけど、でも尤もな話なんだよ。

人の歴史と共に伝わり、人の歩みと共に広まったと言っても過言ではないあの伝説は、多くの人や国、文化に多大なる影響を与えてきた。

歴史に名を残すような偉業を成した者は、皆多かれ少なかれ愛読していたとまで

言われているんだ。

字が読めなかったというジャンヌが、それでも知って懂れたという事実だけでも、多少は察することが出来るだろう？

サーヴァントに従え、指揮するべきマスターがそれを把握していないというのは、確かに不安要素ではある》

「それもそうか……わかった、無事に帰れたらちゃんと読んでみるよ」

「帰ってからでは遅いです!!」

これから先どんな英霊と相對することになるのかわからないのに、それではいけません!!

せめて最低限、重要な部分だけでも、この場でお話しさせて下さい!!」

「べ、別に、今ここでそこまでしなくても……」

「……………俺は聞きたい。」

お願いしていいかな、マシュ」

「はい、マシュ・キリエライトにお任せください!!」

「ちよっ…リンク、余計なことを」

《リンク君は、ゼルダの伝説に興味があるんだね。

それもそうか…君の名前は、明らかにかの勇者にあやかっ
てつけられたものだも
の》

（ある意味で正解）

「まさしく勇者様のようになられたリンクさんに、名付けられたご両親も喜ばしく
思っていることでしょう」

「は、はは……」

異様な居た堪れなさに、もういつそのこと全部明かしてしまっていたいいのではない
かとも思ったけれど、ここはグッと呑み込んでマシユの声に耳を傾ける。

渋っていた立香も覚悟を決めたようで…子供の頃のことを思い出したのか、少女
のように目を輝かせるジャンヌと共に、清聴する構えを取った。

「遙か、神代よりも前……今の私達へと続く歴史、文明が興るよりも、万年単位で
の昔のこと。」

善の女神ハイリアによって守られ、彼女の名を冠する地に興り、魔術も科学も今のものより遙かに発展していたという前史文明『ハイラル』が存在しました。

それこそが、物語の途中に存在する空白の部分を含めて、およそ数十万年に及ぶであろう伝説の舞台です」

「この地には、役目を終えた三人の創造神が、去り際に遺したという形ある祝福が存在しました。

それが、『黄金の聖三角』とも称されるトライフォースです。

力、知恵、勇気の三角によって構成されたそれは、全てを揃えた上で願いをかければ、どんなものでも叶えることが出来たという。

今でいう聖杯、『万能の願望機』の原初と言うべき存在なのです。

正しく、ハイリアの地とそこに生きる人々の希望と言えるものでしたが……そのトライフォースこそが、後に多くの争いを生み出してしまふのです」

「トライフォースは純粹な力の塊です、自ら使い手を選ぶことは出来ません。

力、知恵、そして勇氣……それぞれの司るものを、最も強く純粹に備えている者に宿るのです」

「とある時代、強大な力と野心を持った王が、トライフォースの力を手に入れようとした。」

しかし、彼が手にすることが出来たのは『力』のみ。

『知恵』は幼くとも聡明だったハイラル王家の姫君に、『勇氣』は彼女の願いを受けて王の野望を食い止めるべく奔走していた少年に。

王は残りの二画を奪い、トライフォースを願望機として完成させるべく、姫と少年を狙います。

しかし二人は決して諦めず、『知恵』と『勇氣』を司る者として戦いを続け、遂には恐ろしい魔物と化した王を封じること成功するのです。

これが、『力』の魔王ガノンドロフ、『知恵』の姫ゼルダ、『勇氣』の少年リンク、三人の長き因縁の始まりだったのです」

「長き因縁の始まりって……魔王倒されてるじゃん、終わったんじゃないの?」

「封印された魔王ガノンドロフは、この後何度も、様々な形で復活を果たしてしまいうのです。」

それだけ彼の野心……自らを封じた者達と女神ハイリアに対する怒り、恨みと言え

るものは強かったのでしょう。

その度に、その時代の勇者リンクとゼルダ姫が現れ、魔王へと立ち向かいました
が……それはまた、他の章の物語です。

全ての始まりとなる物語は『スカイウォードソードの章』ですが、今回は最も大きな転換期であり、伝説のメインとなる要素が本格的に登場してくる『時のオカリナの章』を、断片ながら語らせていただきました」
(思ったよりずっと細かく、ちゃんと伝わってる。

あの頃には周知されて無かった筈の裏事情までしっかりと……俺が眠った後、一体何があったんだ?)

封印後の自室が孫を惜しむ祖母(遠慮というものを一切持たない身内、加えて孫の生きた証を辿りたいという大義名分持ち)の手で念入りに搜索され、その結果発見された本一式が王国の誇る最年少戦術顧問の直筆の書として献上され、検められた中身が種族や生まれ育ちの境を越えて勇者を慕う者達に広く公開され、原本は国宝として手厚く保護された上に次の文明にまで伝わり、止めには何千年もかけて世

界中に広まるという。

わかる者からすれば最悪すぎて消滅したくなるコンボを見事に決めたことを、今のリンクは知りようもない。

目をキラキラと輝かせ、ググっと体と気持ちを前に押し出しながらの語りようは、マシュが心からあの『伝説』が好きなのだということを何よりも物語っていて。

いつの間にかリンクは、考えたところで答えなど出ようもない疑問を一旦横に置き、幼い子供が一生懸命に言葉を紡ぐ様を見守るような心地でマシュの語りを聞いていた。

しかしそれも、立香があるとある失言を口にしてしまうまでだったが。

「勇者リンクって何人もいたんだなあ。

もしかして、リンクはその勇者様の生まれ変わりだったたりして」

内心で『ギクウウウッ!!!』となっていたリンクをよそに、マシュは立香にいつもの彼女からは考えられないような乾いた眼差しを送り、ロマニは通信の向

こうでため息を付き、立香はなぜそんな反応が向けられるのかわからずに慌てていた。

「……マシユ、ドクター、俺なんか変なこと言った？」

《立香君、きみ、本当に読んでないんだね》

「センパイが今口にしたことは、ゼルダの伝説においてトップクラスに重要な件です。」

少しでも概要を理解していたのなら、そんな発言は絶対にありません。

何故なら……勇者リンクは、この世界のどこかで今も眠り続けているのですから」「………どうということ、何万年も前の話なんだよね？」

「その話をする前に、ひとつの大きな『大前提』についてお話しします。

勇者リンクに、ゼルダ姫……章を、時代を隔てて現れる二人は、多少の例外こそ存在してはいますが、広義的に言えば同一人物なのです。

先ほどセンパイも口にされた『生まれ変わり』ですね、『勇者の魂』を受け継いだ者こそがその時代の『勇者リンク』となったのです」

「……つまり、勇者様とお姫様は何度も何度も生まれ変わって、その度に変な冒険や戦いをしなきゃならなかったわけ？」

なるほど、それがトライフォースの因縁か。

きつつい話だなあ……苦勞してやっと終わった、やっと平和になったと思ったらそれを次の人生でもだなんて。

下手に覚えてたりしたらやってられないじゃん」

「……………」

「えっ……ちよっ、なに、どうしたのマシュ」

《立香君……君、知っててわざと言ってないだろうね。

正しく、君が今口にしたその懸念こそが、長き伝説に終止符を打ったのさ。

理由に関しては諸説あるけれど、とある時代に生まれた『リンク』は幼い頃から……もしかしたら、生まれた時からかもしれない。

自分が勇者の魂を持つ者であること、『リンク』として生まれた自分には世界の危機に立ち向かわなければならぬ運命があることを知っていた。

辛い戦いを乗り越えたとしても、平和を手に入れたとしても、それは終わりでは

ない。

いつかの時代で、その時に生まれた次の自分がまた戦う。

その事実を、何もかもが始まる前から知ってしまったていたんだ》

《……『勇者』をどこまでも英雄視する人達から怒られそうな、僕の印象、勝手な持論だけだね。

彼は決して、生まれつきの英雄なんかじゃなかった。

いずれ勇者となり、世界を救う……そんな運命を課せられてしまっただけの、普通の少年だった。

だからこそ、自分のような者を二度と生み出してはいけない、争いの運命を本当に終わらせなければならないと、彼は考えたんだと思う》

《『末代の勇者』と称される彼が、トライフォースにかけた最後の願いは、『自分達の運命を終わらせる』こと。

どんな時、どんな立場に生まれても、自身のことを二の次に大変な責務を果たしてきた姫には、ただの女の子としての幸せを。

力を重視するあまりに方法を誤り、最後には怨念の化け物にまで堕ちてしまった

けれど……『自身が治める砂漠の国の、過酷な環境を強いられる民を豊かにしたい』という願いを抱いた偉大な王でもあったガノンドロフには、今度はそれを真つ当な形で成し遂げられるように、と』

《運命の三角のうちの二画を解放した勇者は、幸せよりも争いを呼ぶことの方が多かった、人には余る代物だったトライフォースを、二度と人の手に渡ることの無いように封じた。

それを宿した自分ごと封印し、永遠の眠りについたんだ。

勇者として、人々の為を想った、正しく勇氣ある行動だと言われているけど。

……戦いと、それを強いられる運命そのものに、もううんざりしていたのかもね。いつかの時代、どこかの場所でまた生まれ変わり、また戦いに駆り出されるかもしれないと思うと、二度と覚めない眠りにつく方が魅力的だったのかもしれない』
「そんなことは無い」

今までずっと、静かに話を聞くだけだった者から急に発せられた強い否定の言葉に、ロマニは一瞬言葉を失ってから慌てだした。

あくまで持論ではあったけれど、自分が口にしていたことが、人によっては怒りかねないような極論でもあったことは自覚していたし。

それに何より……僅かに俯いて唇を噛みしめた彼の、リンクの顔が、今にも泣き出しそうに歪められていたから。

《ご……ごめんねリンク君、何が悪かったのかわからないけどとにかくごめん!!
君を怒らせる気はこれっぽっちも無かったんだ!!》

「怒ったわけじゃない」

《……じゃあ、悲しかったの?》

「……少し」

《うわあああごめん、ほんっとごめんなさい!》

「リンク、ドクターのアレは個人的な感想考察って奴だから!!

お前にとっての伝説や勇者を否定したわけじゃないから、気にすることは無いって!!」

「違う」

「リンクさん、違うとは一体？」

「……………ありがとう」

全くの予想も、脈絡もなかった感謝の言葉に、今の今までリンクを囲んで慌てまくっていた一同は一瞬で無言になってしまった。

居心地がいいのか悪いのか、それすらも判断しきれない沈黙の中で、ゆっくりと紡がれるリンクの声だけがやけに大きく響いていた。

「どうして俺なんだって、どうして俺が勇者なんだって、何度も何度も考えた。

本物の『リンク』じゃなくてごめんさいって……『リンク』だったらもっと上手く、もっとたくさんを救えたのかなあって思いながら、それでも一生懸命『リンク』になろうとした。

『リンク』としての俺を信じて、頼りにしてくれる皆が大切なのは本当だったから。応えたい、護りたいっていうのだけは、俺が唯一間違いないって言える、俺自身の気持ちだったから」

それは、『勇者』を背負わされてしまった少年の、あまりにも痛々しく哀しい告白だった。

名前をつけた両親や、彼の周りにいたであろう者達からすれば、彼をそんなにも追い詰めるつもりなんて欠片も無かっただろうに。

出会ってから未だ間もない自分達でさえ、『リンク』の名前でかの勇者ではなく、目の前の少年を思い描くようになっていたのに。

それよりもずっと長い時を、多くの出来事を彼と共にしたのであろう周りの者達が慕っていた、頼りにしていた『リンク』は、伝説の勇者などではなかったと確信を持つて言えるのに。

それを、当の本人だけが、今の今まで解らなかったなんて。

「だけど、今……俺はうんざりしてたのか、戦いたくなかったのかって考えたら。『そんなことは無い』ってハッキリと思った、ちゃんと思えたんだ。

俺は皆と一緒にちゃんと生きてた、あそこで暮らしてちゃんと楽しかった。

俺はリンクだって、これが俺の生き様だって、自信を持って、胸を張って良かったんだ。

……………馬鹿だなあ、今頃になって気付くなんて」

「そんなことを言わないでください、遅すぎることなんてありませんよ!!

今の事件が終わったら、旅をやめて、故郷に帰って、ご両親やご友人方ときちんとお話しすれば……………」

まるで自分自身が希望に縋るかのようなマシユの声に、表情も窺えないほどに俯いたリンクの頭が、ゆっくりと左右に振られた。

「もうどこにも無い……………もう、誰もいない」

意味を察してしまったマシユの喉がヒュッと鳴り、それ以降の言葉が出てくることはなかった。

「会いたい、帰りたい……また皆と一緒に生きたい、皆との時間を取り戻したい。分かった筈なのに、覚悟だってちゃんとした筈なのに。

何で、どうして……取り返しのがなくなっちゃった今になって、こんな」

リンクが生きた世は、神代を越えた数万年もの昔。

トライフォースを守るための、夢も見なかったほどの深い封印の眠りは、その膨大な時間の感覚を彼から奪い取っていた。

彼からすれば、眠りについたのは、ゼルダ達と別れを交わしたのは、彼女達と共に生きていたのは、ついこの間のことに思えるのだ。

もう会えない、もう帰れないという現実が今になって、とてつもない重量を伴ってのしかかってくる。

ズボンに深い皺を寄せ、それでもまだ押さえきれずに震えるリンクの手を、そつと優しく取る者がいた。

「……………ジャンヌ？」

「お願いします、リンクさん。

その嘆きを、その後悔を、どうか受け止めてあげてください。

だってそれは、あなたがかの人達を、かの人達との日々を心から愛していた証。愛していたからこそ、それに報いられなかったことが哀しく、悔しいのです。

あなたの愛した人達は、あなたが自分達に囚われ、未来を閉ざすことを望んでいましたか？」

「あり得ない」

否定の言葉は、考えるよりも先に飛び出していた。

全てを一人で背負うことにした決断を、そうするしかない現状を、当人を差し置いて嘆き、怒り、最後の最後まで必死になって反対していた彼女達が。

長年に渡って心を縛っていた枷から解放されたことを、本当の意味で生きていくことが出来るであろうこれからを、喜びこそすれ嫌がるだなんて。

ほんの僅かな可能性を考慮してしまうことすらも、彼女達への侮辱だと思った。その認識を新たにすると同時に、荒れ狂っていた内心が見る見るうちに静まり始

めたのを感じる。

過酷な現実を、弱く醜い自分を、受け入れた上で乗り越える。

それこそが『勇氣』であり、勇者たるリンクの、『俺』の真骨頂だった筈だ。

リンクの手と体の強張りが解けたことを、もう大丈夫だということを察したジャンヌが、後は彼一人で向き合わせてあげるためにゆっくりと離れていく。

（今だってもの凄く哀しいけれど、後悔なんて尽きないけれど……それでも俺は大丈夫。
丈夫。

ちゃんと笑って、ちゃんと楽しく生きていく。だから心配しないで）

そんな心の声が聞こえそうなリンクの表情は、止まらない涙を伝わせながらも本当に優しく、穏やかな微笑みで。

彼はたった今、大きな壁を乗り越えた。

それがひと目で分かる、まるで神聖な儀式かのように美しい光景を、一同は言葉なく見守る。

ホッとした様子の立香や、若干涙ぐんでいるマッシュ。

そんな二人から少し距離を置いたところで、ジャンヌはなぜか、憂いを帯びた表情を僅かに伏せさせていた。

第一特異点がまだ始まったばかりで、タイミングとしても中途半端ではありませんが。

次回からしばらくの間、外伝を投稿させていただきたいと思います。

ここまで書いた時点で、やはりきちんと詰めておいた方がいいなと考えて書き始めた末代の勇者の物語。

私なりの『ゼルダの伝説・最終章』が、当初の予定ではあらずじ程度で終わらせるつもりでいたのですが、予想外にネタが溢れてきてしまっただ。

いっそのことちゃんと書こうと思ひ、ここしばらくはその執筆に集中してしました。

それでもなるべくはダイジェストで展開して、本編ほどのボリュームにはしないように、なるべく早く戻ってこれるようにと思いつながら書いています。

『彼』はこの物語の果てにカルデアへとやって来たのだということを、改めて認識して頂ければと思います。

実は当作品には、本編では今後も絶対に出さないだろうし、本人がその事実を知ることすら恐らくは無いであろうと思われる、とある裏設定が存在しています。

今後読んでいくことに関しては何も影響は無いし、現状が色々とひっくり返ると思います。

それでも構わないし、文句も言わないという方は、以下の余白を反転（スマホの方はメモ帳にコピー）してみてください。

実は彼は

な
の
で
す。

惨劇の街

今は一人でいたいであろうリンクをそっとおいてあげながら、少し離れた所で『魔女』と呼ばれているもう一人のジャンヌについての情報と見識を交換し合った三人は、それを次の日、次の町へと向かう道中でリンクとも共有した。

あれだけの混乱と嘆きをたった一晩で、見た目だけでも落ち着かせて、目の前の問題に冷静に対処を続けるリンクが、頼りになると同時に心配にもなってしまう。

（……リンクさん、本当はまだ辛いんでしょうね）

（でも今は、リンクを頼りにするしかない。）

俺は碌なことが出来ない素人魔術師だし、マシュも戦闘にはまだ躊躇いがあるし、ジャンヌは弱体化しているらしい上に魔女云々で精神的に迷いがあるし。

冗談でなく、この一行のまともりは、この作戦が成功するかどうかはリンクにかかっている)

他に出来る者がいなかった。

本当にそれだけの理由で人理修復に臨むことになってしまった自分達が、最初に会えたのがリンクだったことが、本当に幸運だったと思えてしまう。

その幸運が『リンクにとっては』どうだったのかを、断言しきれないのが辛いところだが。

見守っているだけではいけない、恐れているばかりではいけないと、立香とマシュは気持ちを新たにする。

それを実践しなければならぬ機会は、すぐに訪れた。

オルレアン近郊で詳細な情報を得ようという目的で目指していた次の町、ラ・シャリテに近づいたところでナビゲーターのロマニがサーヴァント反応を計測し、その

方向に、町が戦火に燃える光景を目の当たりにしてしまったから。

全力で駆けつけたものの既に遅く、町は既に住民全ての命が奪われ、建物の残骸が残るのみとなってしまうていた。

痛ましいリビングデッドを、少し前まで人だったものを貪るワイバーンを。

自身の身に纏わりつくものを、心の淀みを振り払うかのように掃討したジャンヌ

が、肩で荒い息を吐きながら立ち尽くす。

剣を鞘にしまい、惨状に落ち込むマッシュと彼女を励ます立香が合流してくるのを横目で確認したリンクは、そんなジャンヌへと声をかけた。

「ジャンヌ、大丈夫か？」

「……これをやったのは、恐らく『私』なのでしょうね」

「状況からして、そう考えるのが自然だろう」

「リンクさん、まだそうと決まった訳では……っ！」

「ありがとうマッシュさん、でもいいのです。」

私にはわかります、リンクさんの言う通りだという確信があります」

「しかし、ジャンヌさん……」

「……マッシュ、お前は本当にそう思っているのか？」

「え？」

「この光景が魔女のジャンヌの仕業とは違うかもしれないって、これまでに集めた情報や立てた方針を丸ごとひっくり返すようなことを、本当の本気で思っていたの

か？」

「そ、それは……」

「一時の気休め、誤魔化しで問題を先延ばしするよりも、早いうちに現実を見据えて、覚悟を決めた方がいい場合だってある。

マシュの気配りが悪いとは言わない。ジャンヌを氣遣ってそんなことを言った気持ちそのものは決して悪いものじゃない。

ただ単に、この状況には合わなかったただけだ。

これからの経験で、その辺りを判断できるようになればいい。

それとジャンヌ、あんたの発言にもひとつ訂正を入れておく。

例えば大元が同一だったとしても、別れた時点でそれは既に別物。

同じだと思わない、思いたくもないのなら『私』なんて呼び方をする必要は無いし、別人がやったことに自分を重ねて責任を感じることもなんて無いんだからな」

「……………はい、ありがとうございます」

『惨劇は魔女のジャンヌの仕業』という現実には、『別れた時点で別人なのだからジャ

ンヌが責任を感じる筋合いは無い』という新たな現実を重ねることで、自身の気休めよりもよほど確実にジャンヌを励ましてみせた。

単に理屈を述べるだけでなく、それを早速実証してみせたリンクに、マシュは落ち込んでいたことも忘れて感心した。

短絡的に甘やかすことではなく、冷静に現実を見据えて明らかにすることの方が時に救いとなるのだと、またひとつ世界を知ったデミ・サーヴァント。

彼女の前でリンクは更に、大胆に『現実』へと踏み込んでいった。

「この状況で、少しきつい問いかけになりそうだけど……それでも、必要だと思ったから敢えて聞く。

欠片でいい、ほんの僅かな心当たりでいい。

あり得る一面を抽出し、そのみでもって一己の存在として確立させるのがサーヴァントなのだとしたら、可能性があるだけで十分だ。

ジャンヌ……あんたの中に、これだけのことを為してしまうような怒り、憎しみの種は存在するのか？」

彼女と魔女は別人だと断言し、励ましたその口で以って、あまりにも残酷な可能性について問いかけるリンクに。

ジャンヌは僅かに伏せた顔で、ゆっくりと首を横に振る仕草で以って答えた。

「いいえ、ありません。

憎んでなど、恨んでなど、本当に無い筈なのに。

どれ程人を憎めばこんなことが出来てしまえるのかと、心から疑問に思っているのに。

それでも魔女は確かに存在し、人々を苦しめている。

一体、どうしてこんなことに……」

「……あのさ、ジャンヌ。

実行に移すのは問題だけど、怒ったり、憎んだりすること自体は、そんなに悪いことじゃないと思うんだ。

特にジャンヌは、酷い裏切りに遭った訳だし……聖女と名高いジャンヌの中にそ

んな気持ちがあったって、おかしくなんかないよ」

「違うのです、立香さん。」

私は聖女などではありませんし、意地や見栄を張ってもいません。

本当に……私は、憎悪など抱いてはいないのです。

……その筈なのです」

ジャンヌを励まそうとした立香だったけれど、思うようにいかなかった上に、どうやら更なる苦悶を煽ってしまったらしい。

一旦話を終わらせて落ち着かせようとしたのと、通信の向こうでロマニが焦りに上擦った声を上げたのは、ほぼ同じタイミングのことだった。

幾つものサーヴァント反応が反転し、凄い速さでこの場所へと向かっているという状況が伝えられ、撤退を促す焦りながらも懸命な管制室の判断と指示に、現場の声は逆らった。

「逃げません、せめて真意を問ひ質さなければ……っ！」

「ジャンヌに同感、当人から聞き出せる情報に勝るものは無い」

《リンク君、君まで!!》

「情報が少なすぎて、動くに動けないのが紛れもない現状なんだ。

ここは、多少無茶してでも踏み込まないと」

《ああ、もう間に合わない…っ!!》

「マッシュ、立香を守れ!!」

その言葉に咄嗟に反応し、立香の正面で盾を構えたマッシュと、悲痛な表情で前を見据えるジャンヌ、冷静に剣を抜いて構えたリンク。

彼らの目の前に、飛竜の背に乗って現れた、五人の人影が降り立った。

二人のジャンヌ

それは、現実感を見失うような光景だった。

怪物と堕ちても尚失われない高貴な振る舞いと、もはやその存在に染みてしまった血の匂いを併せ持つ男女。

男性とも女性とも判別し難い麗しい容姿に、細剣を携えた騎士。

祭事服に魅力的な肢体を包んだ、杖を携える聖女。

そして、狂気に瞳を濁らせた彼ら彼女らを従える、剣と旗を携えた黒の少女。彼女こそが、現状を異様なものへと変えていた。

あちらは銀と黒、こちらは金と白。

色白を通り越して病的にすら思えてしまいそうな程に薄い色の肌や、掲げる旗の紋章の違いなど、細かい差異を見つけることは容易かったけれど。

顔立ちや体つき、それが『その人』だと一目で認識させる大きな要素が合致する。説明のし辛いその感覚こそが、同じ顔で向かい合う二人の少女が、元は同じ一人であったことを否応もなく納得させた。

この状況が夢でも幻でも錯覚でもなく、二人の同一人物が目の前に、確かに共に存在しているのだということを、実感として認識できる時はすぐに訪れた。

茫然と立ち尽くすままの白いジャンヌを、冷たく見据えていた黒いジャンヌの口元が徐々に歪み、三日月のような薄ら寒い笑みを形作ったから。

「……なんて、こと。」

まさか、まさかこんなことが起こるなんて。

ねえお願い、誰か私の頭に水をかけてちょうだい。

まずいの、やばいの、本気でおかしくなりそうなの。

だってそれくらいしないと、あんまりにも滑稽で笑い死んでしまいそう!!」

「あなたは……あなたは、誰ですか!？」

慈愛の笑みを侮蔑の嘲笑へと変えて、もう一人の自分の矮小さを、あんな小娘に
縋らなければならなかったフランスという国の無様さを、ひたすらに噛み続ける。
そんな彼女の姿を前にジャンヌは思わず、分かつていた筈なのに、覚悟していた
筈なのに、耐え切れずにそんな声を上げてしまった。

あれが自分だなんて、あれが自分のどこかにあったものかもしれないだなんて、
どうしても思えなかったから。

そんな、冷静さを失いかけてしまっていたジャンヌを制し、代わりに前へと出た
者がいた。

「リンクさん……」

「下がついて、ジャンヌ」

傷つき、憔悴する聖女を庇い、強大な敵と相対する美しい少年騎士。

意図して作り出したかのように、あまりにも絵になりすぎるその光景は、狂ったサーヴァント達の琴線をも刺激した。

騎士や聖女は無意識に感嘆の吐息を零し、吸血鬼達は極上の獲物の予感に喉を鳴らした。

急な昂りを堪える配下達とは逆に、折角楽しく嘲笑っていたところで一気に調子を落とされた黒いジャンヌが、腹立たしげに舌を打つ。

「はあっ、何それ？」

さっすがお綺麗な聖女様は違いますねえ、何も言わずに守ってくれる騎士様が黙っているだけで寄って来るだなんて」

「どいて下さいリンクさん、これは私の問題です!!」

「当事者だからだめなんだ、冷静な判断と対応がどうしても出来なくなる。

言いたいように言わせておけばいい、何でもいいから蔑みたいだけなんだから」

ガン無視で、しかもごく自然な流れで『その程度』扱いされた黒いジャンヌの額

に盛大な青筋が浮かんだのに、マシユの盾の裏から必死になって状況を覗き見ていた立香は気付いてしまった。

ギリッと噛み締めた歯を鳴らし、旗の柄を握る手をそのままへし折りかねないような勢いで震わせながら、それだけで殺せてしまいそうな眼差しで睨み付けてくる黒いジャンヌ。

そんな彼女に、内心でどう思っているのかはともかく、思わず視線を向けたり熱のこもった殺気に狼狽えてしまうような真似は一切窺わせない。

例え見せかけだとしても無関心を貫いてみせるその様は、思わず自殺志願者かと疑ってしまう程に、効率的かつ的確に魔女の精神を煽り立てていた。

「では改めて……初めまして、ジャンヌ・ダルク。

俺のことは、リンクと呼んでくれ」

「リンク……あの大層な伝説の、お偉い勇者サマの名前ね。

そんなものをわざわざ名乗るだなんて、自分の顔と実力によほどの自信があるのか、それともただ単に馬鹿なのか。

その余裕そうな表情が、心の底から腹立たしいわ」

「だったら聞かせてくれないか？」

あんたは一体どんな理由で、何のために、こんな趣味の悪い憂さ晴らしに興じているのか」

「憂さっ……私の復讐が憂さ晴らしですって!？」

「それ以外の何だと言うんだ？」

悪意を以って裏切った者、貶めた者……明確な対象にのみ、その憎しみを向けて終わらせたならばまだしも。

関係も面識もない人達にまで無差別に、感情に任せて当たり散らしている時点で、あんたの復讐に正当性は無い。

規模が大きすぎて大層なことに見えているだけの、ただの子供の八つ当たりだよ」
「貴様 あっ!!」

元より堪える気の無かった黒いジャンヌの激情が、最後の一押しをされたことで爆発した。

膨大な魔力を炎として無差別にまき散らし、遠いカルデアのオペレーションルームにまで被害を及ぼさせながら、衝動のままに声を張り上げる。

「バーサーク・ランサー、バーサーク・アサシン、そいつを片づけなさい!!

残り滓の聖女などいつでも始末できる、まずはその不愉快極まりないエセ勇者を惨たらしく消し去るのです!!」

「よろしい。」

例え名ばかりであろうとも勇者を狩るとは、怪物冥利に尽きるというもの」

「私は基本、男は眼中にないのだけれど……まあいいわ、あれだけ美しい若者は処女であろうとそうはいない。」

この際男だろうと構わない、肉を裂いて血を浴びると致しましょう」

《ヤバイヤバイ本気で怒らせた、何か凄そうなサーヴァントを二体もけしかけられた!!

リンク君、冷静になれないって理由でジャンヌを引かせた君が何をやってるの!?

》

「俺は冷静だし、ちゃんと狙い通りだよ。

敵の強さ、戦い方、正体……それらを最も正確に、的確に調べる方法は、実際に戦ってみるのが一番だからな。

少なくとも今この場で、造りだけはジャンヌに似ているあの顔に、最低でも一発は叩き込んでやる」

一見落ち着いているかのように思えながらも、異様な迫力が込められているその声に。

自身を獲物として品定めする二人のサーヴァントをよそに、黒いジャンヌのみを真っ直ぐに見据える眼差しに込められた、静かに滾る激情に。

どんな惨状を前にしても冷静に、落ち着いて自分達を先導してくれていたかのように見えていた彼が、実は密かに怒っていたのだということに、立香達はようやく気がついた。

VS
ヴラド三世

立香やロマニ達の危惧と、あからさまに高揚していた戦闘前の様子とは裏腹に、二体のサーヴァントは個別の戦いを挑んできた。

余裕の表れか、ただ単に遊んでいるだけか、自分達に連携など不可能だということとを自覚した上での戦術の一環なのか。

何にしてもそれは、カルデア側にとっての好機だった。

「リンクさん、私も……！」

「マッシュ、お前は動くな!!」

駆けつけようとしたその足を一喝で止められ、足手まといと思われているのかと
考えて頭の中が白くなってしまったマシュだったが、リンクの言葉には続きが
あった。

「目の前の敵を倒すことだけに囚われるな、盾兵としての戦い方を意識しろ!!
その速さと引き換えにした重厚さは腰を据えて守り、待ち構え、持ち堪える為の
ものだ!!」

「仲間に助言をしながらとは……随分と余裕だな、勇者よ」

「ぐっ……!」

「リンクさん!!」

見せてしまった僅かな隙を逃さず、繰り出された槍がリンクの身を掠める。

仕留めるのではなく、蹴り、甚振り、少しでも長く痛めつけることを目的として
いる。

じわりじわりと侵食してくるかのような攻撃に、堪らず膝をついてしまったその

瞬間を好機とみなしたその穂先が、例え直撃を受けたとしてもすぐには死ねない個所を目がけて放たれ……頑強な金属音と共に弾かれた。

体勢が崩された上に、予想外の抵抗を受けたことに對する驚愕でほんの一瞬思考が止まってしまったランサーを、渾身の刃が切りつける。

肩口から体の前面を盛大に袈裟切りにしたというのに、僅かに血が噴くくらいの傷しかつけられなかったことに、不満気に舌を鳴らすリンク。

自分が大変なことを成したとは到底思えていないその様子を前にした、彼以外の全員が、啞然と言葉を失っていた。

「リ、リンクさん……」

「見てたろ、マシュ。」

お前のそれほど立派でなくても、使い方次第で、戦況をいくらでも動かせる力が盾にはあるんだ」

そう言いながら振り返ったリンクが見せた、剣を持つのは反対側の腕には、たっ

た一瞬の攻防でどれだけ凄まじい衝撃が加わったのかを一目で物語る、金属板が大きく歪んで二度と使い物にはなりそうにない、何の変哲もないただの一般兵の盾が備え付けられていた。

今や残骸と化してしまった町を懸命に守ろうとした、名も知れぬ兵士の持ち物だったであろう。

それでただ身を守るのではなく、放たれる攻撃を待ち構え、受け止める瞬間に突き出すことで跳ね返し、攻勢に転ずる絶好の機会を生み出した。

一連の流れは正しく、リンクが先程マシュに助言していた、盾を用いた戦い方の実践そのもの。

甚振るために敢えて手を抜いていたとは言え、それでもよりによって自分との攻防の中で、仲間に戦い方の手本を披露するような余裕を見せつけられた。

プライドを盛大に傷つけられ、凄まじい表情で歯噛みするランサーに、アサシンの嘲笑が追い打ちをかける。

『『悪魔』^{ドラクル}と恐れられた吸血鬼ともあろうものが、随分と情けないこと。

お遊びにも程がありましたよ」

「黙れ、人前で我が真名を口にするな。」

あの小僧といい貴様といい、実に不愉快極まりない」

「良いではありませんか。」

我ら反英雄はその名を知らしめ、人を恐れ慄かせてこそ本分でしょうに」

「怯え、惑う様を楽しむがあまりに手を抜き、逃げ延びてしまった者の手で破滅させられたのは貴様の方だろうに。」

エリザベート・バートリー……否、カーミラ。

無残にして、何とも滑稽な最期だったな」

「……無粋な方ね、これだから根が武人な殿方は。」

吸血鬼に堕ちていながら、高潔な精神に縋るなんて」

本気で殺し合いを始めかねない程の殺気を纏いながら睨み合う二人の怪物が交わすやり取りに、最後の大戦果を以ってひしゃげてしまった盾を捨て、改めて剣を構え直したリンクが、声だけのロマニへと問いかける。

「ドクター、今のやり取りからあいつらの正体はわかる？」

《男の方はヴラド三世、通称『串刺し公』!!

圧倒的な戦力差で以って攻め入ってきた敵国の兵士達へと、捕虜の串刺し死体を地を埋め尽くす地獄のような光景を見せつけることで戦意を喪失させ、それによって国を守りつつも、あまりにも凄まじい逸話によって悪魔と恐れられた救国の英雄!!

女の方はエリザベート・バートリー、ヴラド三世の発言を考慮するならばその真名はカーミラ、通称は『血の伯爵夫人』!!

老いによって美貌が衰えるのを恐れた彼女は少女の血に若返りの効力があると信じ、自身の領地に住まう少女達を数百人に渡って拷問、搾り取った血を浴びたと伝えられている!!

人の生き血を求める恐ろしい怪物、吸血鬼……二人とも、そのイメージ像の原点となった怪物達だ!!》

「……成る程、凄まじい奴らだな」

《わかってくれたのかい、なら一刻も早く撤退の用意を》

「ありがとうドクター、おかげで戦いの方針を定められた」

《まだわかってなかった、僕ちゃんと説明したよねえ!？」

骸骨兵や飛竜を圧倒した君が強いのはもうわかっている、だけどサーヴァントを相手にするのは流石に無茶だよ!!

さっきの攻撃だっと思いつきり入ったのに大した痛手にはなっていなかった、むしろ怒らせただけだったじゃないか!!》

「現状で倒しきれるとは俺も思っていないし、その気もない。

これはあくまで威力偵察……そのついでに、高く伸びた鼻っ柱を根元からへし折って、一発ぎゃふんと言わせてやりたいだけだ」

《お願いだよリンク君怒りを収めて、どうか冷静になって!!》

「何度も言ってる、俺は冷静だよ」

リンクはそう言って笑いながら、独特の荒い金属音を立てながら放たれてきた鎖を剣で打ち払う。

その動きに、想定よりも早く限界が訪れた。

引き攣り、引っ張られる感覚を感じて振り返ってみれば、完全に払い切ったばかり思っていた鎖が、剣を握る自身の利き腕をガッチリと絡めている光景を目にしていた。

「捕らえたわ……お生憎ねえ、勇者様。

拷問器具の扱いと、心地よい悲鳴を奏でさせることに関しては、私の右に出る者はいないと自負しているの。

せいぜい絶望を謳ってちょうだい、その嘆きと血を余さず糧としてあげる」

仮面越しの瞳を妖しく光らせながら、サーヴァントと、化け物となったことで身につけた臂力で以って獲物を捕まえた鎖を一気に引く。

リンクはそれに逆らわず、むしろ自ら乗る形で地を蹴った。

思惑通りならば、寸分違わず飛び込んでいたであろう地点に宝具を展開させていたカーミラは、自身の想定を超えた速さで、宝具を越えて我が身へと迫らんとする

勢いで飛んでくるリンクに驚き。

ほんの僅か、彼に対しては決して許してはいけなかった一瞬を、硬直したまま迎えてしまった。

VS
カーミラ

マシユの盾の裏側から、画面の向こうのオペレーションルームから。

とある共通の知識を有しながら戦況を見守っていた立香とエミヤは、その光景を、その時を知らない者達を相手に後にこう説明していた。

「あれは正しくライダーキックだった」と。

見事な体幹とバランス感覚で以って、空中で体を捻りつつ体勢を整えたリンクは、真っ直ぐ突き出した片足に落下の勢いを上乗せさせた全体重を込め、狙い通りの場所へと見事にぶちかました。

カーミラの、少女を殺して血を浴びてでも美貌を保ちたいと願った女吸血鬼の素

顔へと、仮面を粉碎させてもなお衰えることのなかった威力と勢いをそのままに。靴の裏を味わわされながら吹っ飛び、瓦礫の山へと轟音と共に頭から突っ込んだカーミラと。

突撃の勢いを全て彼女の顔面に注ぎ込むことで、自身は危なげなく、何食わぬ顔で綺麗にあっさりと着地を決めたリンク。

始めに想定したものはあまりにもかけ離れすぎている形の激戦に、光景に、居合わせた者達は敵味方の区別も誰一人の例外もなく、呆氣に取られて立ち尽くす羽目になった。

何とも言えない沈黙が、瓦礫が崩れる音と、その中から身を起こしてきたカーミラの動きによって遮られる。

美しさを誇る女性が、よりにもよって顔を蹴り飛ばされたなどと……とんでもない屈辱を味わわされた彼女が怒り狂うことを、形振り構わない攻撃をしかけてくることを想定して戦闘態勢を取ったマッシュとジャンヌだったが、その気概は直後にへし折られた。

「う、ううっ……ひぐっ、うう、えう……………」

粉碎した仮面の下から現れた、平常ならば女吸血鬼の代名詞たるに相応しい冷徹な美貌を湛えていた筈の顔が、腫が、痛みと恐怖と屈辱に混乱しながら、若干歪んで血を滴らせてしまっている鼻を懸命に押さえながら、蹂躪された少女のように弱々しくしゃくりあげていたのだから。

「嘘よ、嘘、ありえない……何てことをするの。この私の、伯爵夫人たる私の、やりにもよって顔をこんなグギャッ!？」

《リンク君……っ!!?!?》

敵どころか味方にすらどん引かれてしまっていることを、気付いていない筈が無いのにそれでも構わず、リンクはカーミラの鼻筋へと追撃の爪先をめり込ませた。手の甲だけでは守り切れず、完全に潰されてしまった鼻から滝のような血が滴り落ちる。

自慢の顔立ちを構成するパーツを笑顔で、一切の躊躇いもなく粉碎してのけた。勇者と同じ名を持つている筈の目の前の少年が、カーミラには吸血鬼すら目じやない化け物に見えていた。

「ひいひい……っ!!」

「やっぱり、思った通りだ。」

あんたは弱い者、逃げる者、抵抗できない者を痛めつけたことはあっても、自分が痛めつけられたことは無いし、直接的かつ原始的な暴力に対する精神的な耐性や心構えを欠片も持ち合わせていない」

《そ、そうか……カーミラと共に少女達を拷問、虐殺していた配下の者達は尽くが残酷な刑に処されたけど、主犯格である筈のカーミラはそれを免れている!!
貴族だったから、紛れもない高貴な女性だったから、誰も彼女を傷つけられなかった!!

死刑判決だって直接ではなく、出入り口も窓も潰した居城の自室に死ぬまで閉じ込められるという形で執行された!!

リンク君の言う通り……彼女は確かに吸血鬼という怪物ではあるけれど、その根底は伯爵夫人!!

強者が弱者を一方的に蹂躪、搾取するだけのものとは違う、高貴な存在への敬意やら遠慮やらが時に消え失せ、時に泥沼の乱戦とも化すような実戦に、彼女は基本向いていないんだ!!》

「俺も聞いたことがある、Sは自分が痛めつけられる側になると打たれ弱いガラスの剣だって!!」

「……………センパイ、そのような偏った知識を一体どこで得られたのですか？

個人の趣味嗜好は、基本尊重すべきだと認識しておりますが、それは流石にどうかと……」

「いやいやいや違うよ、そんな変なものじゃないから!!

マンガ読んだだけだから、だからマシユそんな目で見るのやめて!」

《と、とにかく……これはもしかしたら、本当に行けるかもしれない!!》

「しかしドクター、王であると共に武人でもあるヴラド三世相手にはその理屈は通じません！」

状況を観るには早すぎると思われるかと！」

「……………マシュ、あそこ、あれ見て」

「……………」

「串刺し公が絶句しています!？」

《彼は確かに戦場を知る武人だけど、それ以前に、女性を尊ぶ意識を嗜みとして身につけている王侯貴族だからね。

殺すことに躊躇いは無いだろうけど、顔は傷つけないとか、遺体を辱しめないとか、そういう高潔さと敬意は持ち得ていると思う。

そういう人にとって、高貴な女性を、それも完全に戦意を喪失して泣きじゃくっている女性を、それでも構わずに叩きのめす行為や光景は、理解の範疇外だったとしてもおかしくないものだと思うよ》

屈辱の撤退

彼女にとって暴力とは、蹂躪とは、拷問とは、美しく洗練されたものだった。

痛めつけ、苦しませ、それでも殺しはしないギリギリの境界を突き詰めて設計開発された拷問器具ほど、美しさと機能性を兼ねそなえた芸術品は無いと思っていた。

暴力とはそういった道具を用いて行われるものだという認識があったし、芸術品を用いるからにはそれに相応しい美しさがあって然るべきという拘りさえあった。

そういった矜持に、拘りに掠りもしない、道具という人の叡智の結晶を一切使わない原初の武器が、野蛮極まりない拳や足の一撃がその身に叩き込まれる度に、カーミラの化け物としての自負にヒビが入り、脆く崩れ落ちていく。

霊核を捉える技を心得ていない生身での攻撃は、サーヴァントであるカーミラにとっては本来ならば大した効果を発揮するようなものではなかった筈であり、リンクもそれは十分に承知している。

彼が攻撃しているのは、カーミラの体ではなく心の方だった。

二度と齒向かわないように、二度と人を傷つけようなどと思わないように、自身に相對しただけでその芯がボッキリと折れてしまうように。

何度も何度も、念には念を入れて、体や心どころか魂の奥深くにまで叩き込み、刻み込もうとしているかのような情け容赦のない猛攻を。

只でさえ薄かったのに更に血の氣が失せてしまった顔色で、常に我が身を焼いていた筈の復讐の熱を一時とは言え忘れさせるような怖氣を背筋に走らせながら、黒いジャンヌがドン引き状態で見っていた。

「……………違う、絶対に違う。」

あいつは断じて、勇者サマなんかじゃないわ」

「ええ、その通りね。」

明らかな弱点や弱者を敢えて、泣こうが喚こうがとことん狙い、無慈悲に叩きのめすことで相手側の戦意をどん底まで喪失させる。

圧倒的な戦力差をも覆す可能性を秘めながら、繰り出す方にとっても精神的にきついという理由で使いこなせる者が少ない、この私でさえよほどの相手でなければ使用を躊躇ってしまう。

そんな、『52の喧嘩殺法』の中でも特に容赦なく、特に実践的なそれを、あんなにも自然な流れで使いこなしてしまうだなんて。

お綺麗なシャバ僧かと思っただらとんでもない、大したタマじゃないの」
「バーサーク・ライダー、あなたはあなたで何を言っているのですか!？」

くそ真面目な表情でとんでもない発言を口にした聖女に、狂化させたせいだとは思いつつも我慢できずに盛大にツッコんでしまった黒いジャンヌは、その為思わず逸らしてしまった顔を、本当ならばもうこれ以上見たくない惨劇の舞台へと、嫌々ながらも戻し。

その視線が、いつの間にか自身へと向けられていた青い瞳の眼差しとバツチリ

合ってしまったことで、全身が竦み上がってしまった。

体中を、特に自慢の顔を重点的にボコボコにされ、高貴な女性として、化け物としての自負とプライドを根底からへし折られ。

もはや戦うどころか立ち上がる気力すら失せてしまい、蹲ったまま力なくしゃくり上げることしか出来なくなってしまったカーミラは、もはや彼の眼中には無い。ここまで来れば、ここまでされれば嫌でも、馬鹿でもわかる。

彼は怒っている、怒り狂っている、自分が作り上げた惨劇に対して……自分に対して。

（あいつは……あのエセ勇者は、さっき何て言っていた!?)

『少なくとも今この場で、造りだけはジャンヌに似ているあの顔に、最低でも一発は叩き込んでやる』

確かに美しい造りをしていると、素直に認めるしかなかったカーミラの顔へと情け容赦なくぶちかまし、その整った鼻筋を潰した渾身の一発を正確に思い出してしまった黒いジャンヌの喉の奥から、絞り出すような悲鳴が零れた。

ライダーの言葉通り、無慈悲な蹂躪を前に完全に戦意が喪失してしまっている黒いジャンヌへと助け船を出したのは、麗しいセイバーだった。

「カーミラだけでなく、ヴラド三世までもが戦意を喪失し、戦線が崩壊しています。ここは一旦退却し、改めて体勢を整えるべきだと思うのですが、いかがでしょう」
「そっ……そうね、その通りです!!」

これは戦略的撤退というやつよ、みっともなく恐れたり後れを取った訳では断じて無いんだから!!

そのエセ勇者、覚えていなさい!!

あんたは殺す……絶対に、無残に、そこで突っ立ったまま結局何も出来なかった聖女様と一緒に、跡形もなく燃やしてやるんだから!!」

本人がそうと自覚しているかどうかはわからないものの、明らかに敗者の捨て台詞としか思えない言葉を残しながら。

呼び出した飛竜で吸血鬼二人を回収した黒いジャンヌは、ライダーやセイバーと共に自身も騎乗して、あっという間にその場から逃げ去ってしまった。

彼女達が現れた当初の予想を、絶望をひっくり返し、魔女とそれに従えられたサーヴァント達を搦め手から攻めることで見事追い返してしまったリンクの下へと、驚愕と興奮に息を荒げる立香達が駆け寄ってくる。

成し遂げてしまった快挙をよそに、彼自身は不満と物足りなさに声を荒げていた。

「ああっ、逃げられた!! まだ殴ってなかった、まだ鼻っ柱潰してなかったのに!! 物理的に!!」

《いや、もう勘弁してあげてよ!!》

「……まあいいか、関心の矛先を変えさせることには成功したみたいだし。

見たところ、一度にひとつのことしか考えられないし、それに集中している間は

他のことに気が及ばない直情型だ。

あれだけ怖がらせてやれば、しばらくは町や村を襲うことはそっちのけになるだろう」

「リンク……お前、本当にちゃんと冷静だったんだな」

「当たり前だろ、何度も言ってたじゃないか」

「いくら恐ろしい吸血鬼だからって、泣いて怯えている女性を相手にあそこまで問答無用で殴れる奴の自称冷静を、素直に信じられるかよ……」

「力不足は事実、圧倒的不利が現実。」

そんな状況を覆すにはどうすればいいかを考えて、一番効果的だと思ったのを実行に移したただけなんだけどなあ」

「余計怖いし、性質が悪いわ」

「そりゃどうも」

立香がリンクを責め、リンクもそれに反論をしているのかと思って焦ったマッシュとジャンヌは、顔を見合わせて気の置けない応酬を続ける二人が、楽しげに笑って

いることに気付いて肩を落とした。

無事に……と言えるかどうかは分からないものの危機を脱し、和み始めた空気の中に、突如朗らかな笑い声と軽快に手を叩く音が響き出した。

一同が咄嗟に警戒し、武器を手にとって振り返った先には、立ち振る舞いに決して見逃せない高貴さを纏わせ、それ以上に魅力的な笑みを零しながらはしゃぐ女性と、愉しくて堪らないという雰囲気で陽気に笑いながら、気に入った演目に喝采を送るかのよう拍手を続ける男性が立っていた。

「いやあ面白かった、実に最高だった。

格好よく割って入るタイミングを図っていたマリアには気の毒だけど、わざわざ骨を折らずに済んだし、僕にとっては上々な展開だったね」

「確かに、正義の味方の名乗りが出来なかったのは残念だけれど。

一人の勇氣ある少年が、絶望的な状況を見事乗り越えてみせた光景は、本当に素晴らしいものでした。

まるであの『伝説』に語られる戦いが、すぐ目の前で繰り広げられていたかのよ

う！

恋のときめきとは違う、熱く軽快な胸の高鳴り……これが痛快というもののなのね、堪らないわ！」

「……あんた達は、サーヴァント？」

「私達の味方と考えても、よろしいのですか？」

「ええ、勿論よ！」

自己紹介をさせて頂くわね……私はマリー、フランス王妃マリー・アントワネット」

「ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトだ。

一説によれば、どうやら偉大なる音楽魔術の使い手としても名が残っているみたいだけど……残念ながらこの僕は、ただの天才音楽家にすぎない。

サーヴァントとしての戦闘能力に関しては、あまり期待しないでもらえるとありがたいね」

人理修復のための第一段階、フランスを救うための旅路に、新たな仲間が加わっ

た瞬間だった。

「ヤバイ……あのエセ勇者、あいつはヤバすぎる。

この際聖処女は後回しです、あんな奴はいつでも潰せる。

何とかして、一刻も早く、早々に、あいつを始末してしまわないと。

とりあえずは純粋な戦力の増強、帰還して新たなサーヴァントを追加召喚しましょう。

他に出来ることと言えば……」

「ならば私が出ます、彼らの現在地や動向を突き止めて来ましょう。

動きを把握しておけば、何が起ころうとも迅速に、的確な対応を取ることが出来るのでは？」

「……それもそうね。

では行きなさい、バーサーク・ライダー。

あなたの『馬』ならば、いかに得体の知れない奴であろうとも後れを取ることは無いでしょう」

「承知しました」

おまけ

第一特異点修復完了後、カルデアの召喚室にて。

「あら、これも運命というやつかしら。

サーヴァント・アサシン、カーミラと呼びなさいいやあああああああああ
あっ!!!?」

「あっ……」

その後カルデアでは、勇者を恐れて逃げ回る女吸血鬼という至極当たり前な光景と、泣いて恐がる女吸血鬼に誠心誠意、平身低頭で謝る勇者という異様極まりない光景が、しばらくの間見受けられたという。

立香の懸念

どうにか危機を乗り越え、道連れが増えた一行は、霊脈を発見したというカルデアからのオペレーションを頼りに、ラ・シャリテから幾分か離れた場所にある森の中を探索した。

そうして発見した霊脈は、光に寄せられる虫の如くに集まった魔物達で既に占拠されていて。

王妃だというのにやる気満々なマリーを宥め、非戦闘員だと言い切って任せる気満々のアマデウスに軽く溜め息を吐きながら、剣を抜いて率先して飛び出したリンクに、立香とロマニは揃って肩を落としていた。

《サーヴァントが増えて、これようやく、戦闘面を殆ど任せきりになってしまっていたリンク君を休ませてあげられると思ったんだけど……》

「まさか二人とも非戦闘タイプだったとは……アマデウスはともかくマリーはやる気あるみたいだけど、王妃様を前線に出し続ける訳にはいかないって当のリンクが断固拒否してたし」

《どうも彼は、宮仕え、もしくは高貴な人の側付きだった経験がありそうだね。マリー様を王妃と知って、咄嗟に膝を折ったあの動作は、とても手慣れたものだったよ》

「と言うことはリンクは、家族や友人だけでなく、仕えていた家や主人も失くしてしまったことに……」

《立香君、彼のプライベートに踏み込むのはやめよう。

向こうだって色々を知りたいことはあるだろうに、それでもこちらの都合を氣遣って、敢えて聞かないでくれているんだから》

「……そうですね」

「立香、ドクター、掃討完了！」

これからどうすればいい!？」

《ありがとうリンク君、あとはマッシュと僕達に任せてもらえれば大丈夫!》

そうして無事にサークル設置は完了し、所属のサーヴァントの一時召還を始めとした、カルデアからのサポートを受けられる体制が整った。

これがそんなに重要な工程だったのなら、次からは真っ先にやっておいた方がいいと思うというリンクの冷静なツツコミに、一同は苦笑いで頷いた。

実際に、リンクの助けがなければ切り抜けられなかった、もしくは手こずったり何らかの被害が出ていたことが否めない状況を経てきた彼らには、人材に恵まれることの重要さが既に身に染みている。

今はまだ人理修復の素人集団でしかないカルデアに『今後』を意識させるための発言は、同時に、とある重大な事実に対しても考えさせられるものだった。

(『次』、か……)

あまりにも馴染み、そしてあまりにも頼りになりすぎているせいで、つい忘れがちになってしまっているけれど。

リンクはサーヴァントでもカルデアのスタッフでもなく、このフランスでたまにまた出会った現地の協力者なのだ。

作戦が終了した後で共に帰ることは出来ないし、レイシフトでやってきたこの地からスカウトして連れて行くことだって出来やしない。

彼との旅路に『次』は無い、それを考えると気持ち落ち込むのを立香は自覚していた。

（流石に、そろそろ潮時なのかもしれない）

協力してくれることはありがたいし、意地でも付いていくと言ってくれた彼の気持ちだって、本当に嬉しかった。

彼のおかげで、味方のサーヴァントが増え、カルデアからのサポートを受けられ

るようになるまでを乗りきることが出来た。

こうして体制が整ってきているからには、幾ら本人が了承してくれているとはいえ彼に頼り切る状況が続いてしまっていること、彼が居なければ動けなくなってしまうような現状を、見直してみるべきだという考えが立香の中で強くなってきている。

これから先は、サーヴァントと交戦する機会だって増えていくことだろう。

リンクがヴラド三世やカーミラとやりあえたのは、彼の強さが腕っぷしだけのもではなかったから、人とサーヴァントの間にある戦力差を戦術で以って覆して見せたからだ。

戦術や駆け引きが通じない、圧倒的な力で叩き潰して来るような相手が、今後現れてしまったら。

そんな時になってもまだ、彼が戦闘要員の筆頭として最前線に詰めているような状態が続いていたら。

（どこかで機会を見て、手遅れになる前に、ちゃんと別れるべきだよな……）

立香が密かに、至極一般的な感覚を持つ者として苦悩していることに、気付く者はいなかった。

音楽魔術

完成したサークルを囲んで落ち着いた一行は、和やかな雰囲気、自己紹介からの交流を始めていた。

「それでは、改めまして……私はマシュ・キリエライト。

デミ・サーヴァントで、真名はわかっておりません。

こちらは立香、私のマスターに当たります」

「よろしく、二人とも」

「ええ、こちらこそよろしくね。」

アマデウスも怠けていてはダメよ、ちゃんと頼りにしているのだから」

「わかっているよ、念を押すなあマリアは」

《それにしても驚いたなあ、まさかかのヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトがサーヴァントとして現界しているなんて。

表の世界では天才音楽家として名を馳せていた彼が、実は優れた音楽魔術の使い手だったことは、魔術世界では有名な話なんだよ》

「うそっ、モーツァルトって魔術師だったの!？」

「あー……いや、それに關してなんだけどね。

今ここにいる僕は、『魔術師』ではなくあくまで『音楽家』として現界している。だから、期待されているほどのことは出来そうにないというか……そもそも、僕は自分から魔術師なんて名乗ったことも無ければ、魔術師になったつもりも無いんだよね。

ただ単に、音楽の魔術が持つ力というものに興味を持って軽い気持ちで手を出してみたなら、そっちでも僕は天才だったというだけの話で」

《ええっ、それで当時の名門魔術師達を圧倒しちゃったわけ!？」

面目丸潰れもいいところだよ、魔術師こそが真の意味で音楽に通じているって自負している人は多いのに……ああ成る程、だからか」

「そういうこと。」

全くの門外漢に庭を荒らされるよりは、同胞の一人ということにしてしまった方が、プライド的にまだマシだったんだろう」

《それじゃあ、君の死因は実は病氣なんかじゃなく、魔術勝負に負けて呪い殺されたからだって説は……》

「普通に病気で死んだよ、そういう勝負は一切受けないようにしていたし」

《な、何てことだ……魔術界隈の歴史ロマンのひとつが無残に消えた》

「というか、そもそも僕、魔術師っていう人種自体があまり好きじゃなかったからね。」

彼らの言い分なんて、僕から言わせれば的外れもいいところさ。

音楽というのは降りてくるものだ。

より高みに至ろうとするならば必要なものは才能と感性、何よりも他を顧みない一途さだよ。

それのみを焦がれて、脇目も振らずに追いかけないと、良い音を捉えることなんて出来やしないのに。

それを欠片も理解しようとせず、あくまで根源とやらに至るための『手段』として、天上の音楽へと理屈と計算で辿り着こうだなんて……愚の骨頂もいいところさ。

音楽魔術に関しては、僕が天才だったというよりは、周りが愚物すぎただけと断言させてもらう」

《うわあ、言うなあ……彼ほどの天才音楽家がここまで言い切るからには、紛れもない事実なんだろうけど。

世の魔術師達が聞いたら何て思うことか、音楽魔術を代々追及している名門は多いってのに……》

「ねえマシユ、魔術師ってみんな音楽が好きなの？」

「好きというよりは、当たり前前の教養という感じですね。

かの時計塔でも『音楽科』は一大派閥のひとつで、専門としている人は多いです。例えば専門外であったとしても、魔術師ならば、何らかの音楽を嗜んでいて然るべ

きという古くからの認識があります。

実際私も、楽譜を読んで、簡単な演奏が出来る程度には心得ていますし」

《遙か古代ハイリアの時代から続く、由緒正しき魔術系統のひとつなんだよ。記録に残っている最古の使い手は、何たってあの勇者リンクだからね》

「うっ…ゲホッ、ゲホッ!!」

「うわっ、いきなりどうした!？」

「み、水が変なところに入った……」

《大丈夫かいリンク君、気をつけてね!》

(誰のせいだと……)

《えっと、どこまで話したかな……そうそう、勇者リンクが原初の音楽魔術の使い手だったってこと。

彼が聖なる楽器を用いて奏でたという音楽は、ほんの僅かな短い旋律だけで、天候を変えたり、時すらも操ってしまうような凄まじい効力を発揮させたと『伝説』では伝えられている。

それを目指して、もしくはあやかって、音楽に秘められた可能性を追究する魔術

師は、いつの時代にもたくさんいたものさ」

「へーえ……じゃあもしかして、あの有名な音楽家が実は魔術師だった、なんてことは結構あるの？」

「残念ながら、そんな例外は恐らく僕くらいだと思うよ。」

魔術は秘匿するものだと思うっている魔術師連中は、折角作り上げた曲や楽器を人前で披露なんてせずに、ただの研究材料として自分達だけで消費していたり。

酷いものと、一度も演奏しないまま後生大事にしまいこんだりしていたからね」
「……………一般人の感覚から言わせると、それ、音楽の意味あんのって思っちゃうんだけど」

「そんな単純かつ当たり前のことに、ずうっと気がつかないなんて。」

ほんと、魔術師連中ってどうしようもないよねえ」

自身を魔術師では無いと断言しながらも、魔術の歴史には間違いなくその使い手として名を刻んだ者であり、疑いようもない天才でもある彼の辛辣な言い分に何事かを返せる魔術師は、生憎とその場には存在しなかった。

この世界におけるアマデウスの☆は3です。

『魔術効果のある音楽を紡いだり演奏したりする音楽家』ではなく、『魔術の媒介として音楽を使用する魔術師』としての自分を受け入れて現界が叶うことがあれば、4もしくは5にもなり得るでしょうが。

音楽家としての自分を何よりも誇りに思っている彼のことですから、よほどのことが無い限り、そういう意味でのアマデウスの本気を見ることはないと思われます。

暗中の聖女

王妃と聖女、歴史の転換期を迎えたフランスに人生を翻弄された二人の女性が、時代を越えた友好を育み。

通常の聖杯戦争の装いと比較して、あまりにもかけ離れている現状への見解を話し合い。

マリィやアマデウスのように、竜の魔女陣営への対抗策として召喚されたと推測されるサーヴァントが、他にも存在している可能性を導き出し。

立香が言及した純粋な戦闘要員が不足している現状を考慮し、戦力の増強を目的に味方となってくれるサーヴァントを探すことを今後の第一目的と定めた、その日

の夜。

誰が意図した訳でもなく、ごく自然に、偶然に、仄かな焚き火を囲むひと時を共にすることとなった三人がいた。

「ねえねえ騎士さま、リンクさん。

あなたも私達と一緒に、女子会トークをしませんこと？」

「申し訳ありませんが妃殿下、俺は『女子』ではありませんので」

「全く問題ありませんわ。

貴方の美しさは、社交界の淑女ですら素直に負けを認めてしまいそうな程ですもの。

少なくとも私は、貴方が私達の会話に加わって下さると言うのなら、大喜びで歓迎いたします」

「勘弁して下さい……」

こうしてリンクは、僅かな抵抗も虚しく、結局は王妃と聖女の輪の中に引っ張り込まれることとなったのであった。

面子に違和感を抱いていたのは当然の本人だけで、傍から見れば違和感どころか存分に目の保養だったことは言うまでもない。

「ええっ!!」

リンクさんってば、15歳でしたの!？」

「（封印された時の年齢でいいのなら）そうですよ、そんなに意外ですか？

見た目は、年相応だと思うんですけど……」

「確かに、外見だけで判断するのなら、何もおかしいことはないのですが。

その歳であの強さを身につけられたなんて……才能があっただけでなく、大変な努力も為されたのですね。

15歳といえ、私は結婚こそしたものの、立場としてはまだまだ気楽なものでしたのに」

「私なんて、畑を駆け巡って遊んでいましたよ……」

「貴方をそこまで頑張らせたものが一体何であったのか、教えて頂くことは出来ませんか？」

マリーのそんな問いかけに、リンクは一瞬目を丸くし、遠い何かに想いを馳せるような表情を浮かべた後。

愛おしそうな、寂しそうな、不思議な笑みを浮かべながら口を開いた。

「掛けがえのない出会いがあったんです、その人が俺を求めてくれた。

あなたの力が必要だと言ってくれた、俺に出来ることがあると思わせてくれた。その人のために、出来る限りのことをしたいと思った……だから、頑張ることが出来たんです」

「……リンクさんにとって、何よりも大切な方でしたのね」

笑いながら、静かに頷くことで応えたリンクに、マリーとジャンヌは微笑ましいような痛ましいような、何とも言えない複雑な心境を味わっていた。

彼が、内心を発露したその場に居合わせていたジャンヌだけでなく、マリーもまた、帰る故郷や迎えてくれる人の全てを失くし、独りで放浪しているのだというリンクの現状を知っていた。

知らないまま、無遠慮な発言をしてリンクを傷つけてしまうようなことにならないようにと、立香やマッシュが密かに気を使ったからだ。

そして恐らくリンク自身も、立香達が、マリーやアマデウスに自身の事情を話したことに気付いている。

気にしたような素振りを全く窺わせないのは、仲間内の協調を崩さない為に必要なことだったと判断したためか、自分のことを思いやったが故のことであることを信じていたためか、もしくはその両方か。

どんなことが起こっても、何を突き付けられても決して揺るがず、胸を張って凛と前を見据えながら、人理修復の旅路を支えるリンク。

そんな彼の姿は、自分自身を信じることにすら危うくなってしまう現在のジャンヌにとっては、目が潰れると思うってしまう程に眩かった。

召喚時の不備によって本来あるべき能力が制限され、大切な国と人々を蹂躪され、更にはそれが自身の別側面の仕業であるとされ。

理不尽な裁判からの火刑まで味わわれた生前でさえ、ここまででは無かったと思ってしまう程に、今のジャンヌは精神的に追い詰められていた。

具体的に言うならば、ふと胸中に浮かんでしまった疑問を、いつもの自分だったら気にすることでは無いと一笑に伏していたはずのことを、我慢できずに口に出してしまう程に。

「……………ひとつだけ、尋ねさせて下さい。

リンクさんは、彼女を…………あの竜の魔女を、どう思いましたか？」

「ジャンヌ？」

「受けた仕打ちに対して怒ったり、憎んだりすること自体は悪いことでは無いと、立香さん達はそう言って下さいました。

私を励まそうとして下さったのだということは、ちゃんとわかっています。

それでも、だとしたら…………何を思い出しても、記憶や心の中のどこを探しても、そういった激情の類いを、本当に、欠片も見つけだすことが出来ない私は、やはり歪な存在なのではないかと。

怒り、憎むことが、人としての正常な在り様だと言うのなら…………あの時彼女が言っていたように、死の間際に全てを呪った彼女こそが本物の『ジャンヌ』で、今

ここにいる私こそが、在り得ないことはないほんの僅かな可能性の方だったのではないかと。

……そんなことを、考えずにはいられないのです」

一度出し始めた言葉は、もはや止まらなかった。

聞いていたリンクとマリーも、懺悔のようにも思ってしまうその言葉を、やめさせようとは思わなかった。

「あの時の……もうお会いできないというご家族やご友人を想い、嘆かれるリンクさんの姿を前にした時に、私は氣付いてしまったのです。

お転婆な私を愛してくれた両親や窘めてくれた兄達、懐かしい友人達、素朴ながらも幸せだった愛しい故郷で過ごす日々。

それらを全て置いてきてしまった、もう二度と取り戻すことは叶わないというのに。

裏切られ、火刑に処されたことへの憎しみだけでなく……その事を惜しみ、嘆く

気持ちまでもが、私の中には存在しない。

……………どうか教えて、答えてください。

嘆き、後悔することが、愛していたことの証ならば……それすら出来ない、持ち得て当たり前だと皆が口にする想いを持たない私は、一体何なのですか？」

胸の奥から込み上げるものに震え、上擦りながら、懸命に吐き出されたその声は。堪え切れずに零れ落ち、頬を伝って落ちた涙は。

救国の聖処女などではなく、暗闇の中で不安に怯えながら立ち尽くす少女の、ただのジャンヌ・ダルクとしての、今の今まで必死になって堪えてきた想いの発露だった。

『そんなことを気にするな』と、『お前が本物のジャンヌ・ダルクに決まっている』だなどと。

そんな口先だけ、耳に心地よいだけのその場しのぎの言葉などはもはや通用しないことを、リンクとマリーは何を示されずとも察していた。

何を言うべきなのか、何と言ってあげればいいのか。

『それは違う』という紛れもない本心を、彼女の心に過たず届かせるためにはどんな言葉を用いれば良いのか。

いくら考えても答えが見つからず、困り果ててしまった様子のマリーをよそに、リンクは一步を踏み出した。

小刻みに震えて、あまりにも弱々しいジャンヌの手をそつと取る。

他でもない彼女自身が、あの時自分にそうしてくれたように。

「ジャンヌ……話をする前に、お前の考えをひとつだけ訂正しておく。

俺は確かに、もうあの場所に帰れないこと、もう皆に会えないことを嘆いたし……皆ともっと話しておけば良かった、もっと向き合っておけば良かったと、後悔だっ
てしたけれど。

そんな結果に繋がってしまった道を選ばなければ良かった、行動をしなければ良かったとは、少しも思っていないんだ」

「……………リンクさん？」

「落ち着いて、ゆっくりと考えてみてくれ。」

ただの村娘だったというジャンヌがフランスのために立ち上がったのは、多くの兵を導きながら戦ったのは、一体どうしてだったのか」

「それは、主の啓示を受けたから……」

「確かに、きっかけはそうだったかもしれない。

よく思い出してほしい……きっかけを得て立ち上がった、お前の背を押したものは何だった？」

「……………私は、主の、フランスのために。」

だけど、本当は……私が本当に守りたかったもの、旗を掲げた理由は……………」

自身の手をそっと、優しく取るリンクの手を握り返す力を、自身の思考が進むごとに、少しずつ強くしていくジャンヌ。

辛抱強くそれに向き合い、彼女が答えを得る瞬間をリンクは待っていたのだけだ。ど。

そんな大切な時間は不意に、不躰に破られることとなってしまった。

「リンクさん、ジャンヌ、氣付いていますか？」

「……はい、すぐそこまで来ています」

三者三様に揺らいでいた心がスツと風ぎ、眼差しが、思考が研ぎ澄まされた、その時だった。

野营地周辺の見回りに赴いていたマシュとフォウが、敵襲の報せと共に駆け戻ってきたのは。

「ああもう、何て間の悪い……っ！」

「ともあれ、今は切り換えないと」

「ジャンヌ！」

「はい……？」

「後でもう一度、ちゃんと話すからな！」

「………ええ、よろしくお願いします」

答えはまだ出せていないし、状況は何も変わっていないのだけれど。
あんなにも真剣に、真摯に向かい合ってくれる人が、自分の傍にはちゃんといてくれている。

その事を実感して少しだけ安心した、幾分か気持ちを楽にすることが出来たジャンヌの顔には、本当に僅かながらも、確かな笑顔が取り戻されていた。

聖女の試練

「こんにちは、皆様。

寂しい夜ね」

先行部隊として襲いかかってきた骸骨兵とワイバーン達を、もはや雑魚と言わんばかりに速攻で片づけた、その直後。

骨の残骸と鱗付きの亡骸を踏み分けるように、清らかな祭事服を死の名残で汚すことも厭わずに現れたのは、竜の魔女の傍らに立つ姿を覚えている女性サーヴァントだった。

穏やかな声、優しい笑顔、しかし瞳には隠せぬ狂気。

咄嗟に、一同をその背に守れる位置に立って剣を構えたリンクの姿に、その歪な笑みはますます深く、満足げなものとなった。

「嬉しい誤算だったわ。

あなたのような、色々な意味で強い人が、そちら側に付いてくれていたなんて」
「……どうやらあんたにとって、魔女の配下として人々を脅かしている現状は、好ましいものではないらしいな」

「当たり前です、私は聖女ですよ。

そうあらんと懸命に己を戒めていたのに、こちらの世界では壊れた聖女の使いっ走り。

一国を滅ぼすためなんかに召喚した挙句に、狂化なんてふざけたものまで付属させてくるなんて。

おかげで理性が消し飛んで狂暴化しているわ、今も衝動を抑えるのに割と必死です」

「つまり、暴れまわるのを我慢している今のうちに、さっさと止めを刺してくれど？」

「リンクさん、その言い様は……!?!」

魔女の配下と化している現状は、フランスの国土と国民の蹂躪は本意では無いという彼女の言い分に、味方が増えることを密かに期待していたマシュは、その穏便かつ前向きな選択肢を端っから考えていない様子のリンクに、思わず声を上げてしまった。

その驚愕には、助けられるかもしれないものをその方法を探さないまま、探そうなどと考えもしないままに、あっさりと切り捨てられてしまった彼女を、思いやる気持ちもあったのだけれど。

そんなマシュの気遣いは、無意味なものとなってしまった。

満足げに、安心したように、狂化の及んでいない真の笑みを浮かべた、当の本人によって。

「ガチで覚悟決まってるわね、話が早くて助かるわ」

「あ、あなたは……本当に、それでいいんですか？」

「ありがとう盾のお嬢さん、あなたは優しい子ね。」

でもいいのよ、それが一番妥当で確実な選択。

気を張ってなきゃ、あなた達を後ろから攻撃するサーヴァントが、味方になれる筈もないでしょう？

私自身も、そんなことはしたくないわ。

……優しい良い子だからこそ、これだけは覚えておきなさい。

明らかな不安要素を、獅子身中の虫を、何の対策も無いまま一時の甘さと希望的観測だけで引き入れるのは、断じて優しさなんかじゃない。

何かを切り捨てることで傷ついてしまう、自分自身の心を守りたいがために、自分も仲間も危険に晒す……愚かで甘っちょろい行いだってことをね」

優しくも厳しい言葉をマシユへとぶつけた聖女は、それによって昂った心のままに、空気を裂く強烈な唸り音を上げながら十字の杖を振りかぶった。

「先ほどの発言に、少しだけ訂正を加えます。

生憎ながら、このまま黙って、無抵抗でただ倒されるつもりはありません。

あなた達の前に立ちはだかるのは竜の魔女、究極の竜種に騎乗する災厄の結晶。

私如きを乗り越えられなければ、彼女を打ち倒せる筈が無い」

最初から心を決めているリンクに、哀しげに眉を顰めながらもしっかりと前を向くマリーと、面倒臭げにため息を付きながら指揮棒を手にしたアマデウス。

そして、若干引けた腰と青白い顔色で、それでも気丈に少女達を励ます立香と、彼の献身によって何とか腹を括ることが出来たマッシュとジャンヌ。

一同の、体と心の準備が整ったことを見定めた聖女は、狂った殺意ではなく断固とした決意で以って声を張り上げた。

「私を倒しなさい!!

躊躇なく、この胸に刃を突き立てなさい!!

これは試練と心得よ、我が屍を乗り越えられるか見極めます!!

我が真名はマルタ!!

さあ出番よ、大鉄甲竜タラスク!!」

自身の真名を明かし、宝具たる騎獣を呼んで掲げた彼女の杖が、膨大な魔力の放出によって輝きだす。

『マルタ』とは何者で、『タラスク』とは何なのか。

リンクと立香が、胸中で同時に抱いたその疑問は、わざわざ口に出して問うまでもなく答えられた。

《マルタ……聖女マルタか!?

気をつける皆、彼女はかつて竜種を祈りだけで屈服させた聖女だ!!

その彼女がサーヴァントと言うことは、つまり……》

光の中から現れたのは主を遙かに上回る巨体、美しい聖女が従えるにはあまりに

も武骨な怪物だった。

獅子の顔と、鉄の鎧よりもよほど頑強そうな甲羅を身につけた、凶悪な亀の化身を思わせるそれは、しかし決して亀などではない。

《彼女は、ドラゴン・ライダーだ!!》

人々を苦しめる数多の怪物の中でも、最も高名で、最も強く恐ろしいとされているもの。

竜の一種を従えて現れた彼女は、乗り越えるべき試練は、あまりにも強大な姿で立ちはだかっていた。

総力戦開始

戦闘開始の明確な合図が出るよりも、二つの金属がぶつかり合う轟音が響く方が先だった。

カウントダウンだの、名乗りを上げてからの正々堂々だのというものは、それが必要かつ重要な時もあることを否定はしないけれど、今この時においては全くの無意味。

先手必勝、これで決まれば御の字と言わんばかりに容赦なく切りかかったリンクの剣を、マルタは、そう来ることは分かっていたと言わんばかりの表情で受け止めた。

両者の武器を構成する金属のみならず、骨や筋肉の軋む音までもが聞こえて来そうだった。鏢迫り合いの均衡は、狂化属性の付与により素の筋力が大幅に増加されていたマルタが、聖女にあるまじき気合いの雄叫びと共に杖を振りぬいたことで崩れた。

敢え無く吹っ飛ばされた体勢を空中で整え、何とか着地を決めることが出来たりリンクを、今度はタラスクが吐いた炎が襲う。

瞬時に飛びのいてその範囲から逃れたリンクは、そのまま下がるのではなく、むしろ向かっていくために地を蹴った。

予想外の真正面からの突撃に流石の竜も面食らったのか、咄嗟に吐き出した炎に先程のような勢いは無く。

顔を隠すフードの役割も果たしていたマントの肩口を掴み、眼前に迫った炎を一息で払いのけながら突っ込み、怪物の凶悪な面相へと向けて剣を振り上げる。

正しく、神話の英雄譚の一幕かのような光景だった。

英雄の手に握られていたのが、伝説の聖剣などではなく有り触れた兵士の剣に過ぎなくて、甲羅を避けてもなお強靱だった皮に敢え無く弾き返されてしまうまでは。

決定打が無い状況でこれ以上粘るのは流石に悪手と思ったのか、残念そうに舌を打ちながらも素直に一旦戻ってきたリンクを、ロマニの驚愕のあまりに裏返った素っ頓狂な声が出迎えた。

《い、い……今惜しかった、武器が通じてさえいれば痛手を与えられていた!!
リンク君、何で君の活躍が後世に残されていないの!?

もしかして全部『勇者リンク』の伝説と混同された、もしくは勇者をモデルにした創作とでも思われた!?

だとしたら酷いなあ!!》

「今はそんな話はどうでもいい、守れマッシュ!!」

「はいっ!!」

リンクから頼まれた、頼りにされたことが嬉しくて。

マッシュは腹の底からの返事と共に、渾身の力で盾を地へと突き立てた。

先程リンクを襲ったものよりも、量も熱も遥かに上回る爆炎がそれを襲い、盾の

後ろに守られた僅かな空間のみを残し、辺り一帯を焼き払い始める。

誰よりも間近で炎に相対し、膨大な熱に全身を炙られる苦痛に苛まれながらも、盾を支えるマシュの四肢は揺らがない。

先に耐えられなくなりそうなのは、盾に、マシュの背に守られる者の方だった。

「立香さん、しっかりなさって！」

「サーヴァントの身でさえこの熱はきついんだ、生身の人間がそうそう耐えられるものじゃない。」

早いところ何とかしないと……」

焦り、歯噛みする皆の声と、立香の苦しそうな呻き声を聞いたマシュは、身の内から爆発するような想いと魔力の熱を、感じると同時に解き放った。

「真名、偽装登録……宝具、展開します!!

仮想宝具『疑似展開／ロード・カルデア人理の礎』!!」

マシユの声が轟き、魔力が解放されると同時に。

彼女の盾に守られていた一同は、強固な城壁が高く厚く聳え立つイメージの場景と、盾に守られた場所ではなく、自分達の身そのものに強力な守りの加護がかけられたことを感じ取った。

「マスター、大丈夫ですか!？」

「ありがとうマシユ、おかげで大分楽になった」

「凄いな、これが宝具か……」

《よくやったマシユ、だけど宝具の効果はあまり長くもつものじゃない!!
守りの加護が効いている間に、何らかの対策を立てないと!!》

焦りと憔悴に掠れたロマニの声をBGMに、短い時間ながらも確保された確かな安全地帯で、顔と目を僅かに伏せて意識を集中させたリンクの思考が巡る。

反撃の第一陣は、タラスクの炎が勢いを弱めるまでを見事耐え抜いた盾の後ろか

ら、硝子の馬に乗って飛び出した王妃と聖女だった。

「タラスク、行きなさい!!」

「何のっ、身軽さでその亀さんには負けませんわよ!!」

マルタの指示に応えて炎を吐き、腕や尾を振るうタラスクの攻撃は、美しさと頑強さを引き換えにした硝子の馬を一撃で粉碎し、その背に乗る少女達を葬ることが出来る力をも備えたもの。

しかしそれは、『当たり前さえすれば』の話だった。

主のごとく美しく可憐な馬は、同じく主のごとくの軽やかさで、竜の猛攻をかわし続ける。

マルタとタラスクの意識が、眩い光を撒きながら跳ねる硝子の馬へと集中し、ほんの僅かな隙が生まれた……その時だった。

「でやあああああっ!!」

「即興だけど自信作だぜ、ありがたく拝聴しな!!」

盾という名の特大鈍器が、タラスクの脳天に一切の容赦なく振り下ろされ。

アマデウスが指揮する楽団が奏でる高尚な不協和音が、凄まじい衝撃を受けたことで流石に遠くなったタラスクの意識に、刻み込まれるような不快感で以って追撃をもたらしたのは。

「タラスク!?!」

「お生憎さまよ、聖女さん!!」

「あなたのお相手はこちらです!!」

一蹴りでマルタの頭上を越えるほどに高く跳んだ硝子の馬が、その瞬間に落としていった人影が振り下ろした長柄が、轟音を伴いながら二度目の鏑迫り合いを始める。

一連の流れを見届けた立香は、ロマニと共に歓声を上げた。

「やった、上手くいった!!」

《マルタとタラスクを引き離れたぞ、あとは各個撃破するだけだ!!》

『馬を失った乗り手も、乗り手を失った馬も、その真の力を発揮することは出来ない。
い。

結託して戦わせない、何とかして引き離す。

基本の作戦はこれで行こう』

二人の脳裏に、マシユの宝具によって守られていた短い時間で、全員の力を合わせた作戦を見事考え出してみせたリンクの声が蘇っていた。

VS
マルタ&タラスク

『妃殿下……貴方の馬には、タラスクを倒す攻撃力は無くても、タラスクの攻撃を避け切る身軽さと素早さがあります。』

硝子製の、否応もなく目を引く美しさというのも更にいい。気を引くのに最適ですからね。

避けるだけ、逃げるだけで構いません、思いっきり飛んで跳ねて意識の隙を作って下さい。

あと、その際にはジャンヌも連れて行って下さい。

マルタを相手にするには、得物の相性の問題でジャンヌが最適でしょうから』

『賜りましたわ、責任重大ですね。』

……その大役を無事にこなす為に、私、どうしても解消しておきたい気がかりがありますの』

『何なりと』

『妃殿下なんて仰々しい呼び方は嫌だわ、口調ももっと砕けた感じになさって』

『今言うことですか!？』

『今でないと说不ないわ、これが最後になるかもしれないのですもの!』

『……あーもうわかりました、後でいくらでも名前で呼ぶし口調も砕けさせますからとにかく今は行って下さい!!』

『約束しましたからね。』

さあジャンヌ、二人で華麗に踊りましょう!!』

金属が凄まじい力と勢いでぶつかり合う轟音を辺りに響かせながら、二本の鈍器が幾度となくぶつかり合う。

片方は兵士を鼓舞する旗、もう片方は神に祈りを捧げるための杖であり、鈍器などでは断じて無いと、人によっては断固として主張するのだろうか。

刃は無く、硬さと重さに任せて、相手を倒すために全力で振り回されているそれらは、少なくとも今この場においては鈍器以外の何ものでも無かった。

「…っ、リンクさんが、私が適任だと仰られていた理由が分かりました。

確かにこの威力と重さでは、鋭い代わりに脆い刃では、すぐに押し負けてしまう。でも、私の旗ならば…っ!!」

杖よりも長い上に、大きく重い立派な布が予測しきれないタイミングではためき、ジャンヌ自身ですら把握出来ない不確定要素として攻めと守りをサポートする。

タラスクから離されたことで騎兵としての強みを失った上に、白兵戦で競り負けようとしている現状に、マルタの顔が悔しげに顰められる。

手の中の杖を殊更に、必要以上に強く握りしめるその様子は、断固として手放すまいとしているかのようなものだった。

『本当に、対象はあの亀竜だけでいいのかい？』

狙うなら主人であるマルタの方が、もしくは同時に効くようにすればいいんじゃないかと、僕は思うんだけどね』

『狂化されている人に精神攻撃が効くとは思えない、狙うとしたら狂化した主人に付き合っているだけと思われるタラスクの方だ。

それと……不特定多数に聞かせることを意識して普通に作った曲と、ただ一人の為だけに作られた特別な曲。

特定の誰かにより効く曲はどちらだと思う？』

『考えるまでもないな。

成る程、これが音楽家と戦士の思考と感覚の違いか。

わかったよ、状況に余裕は無いけれど……その分、気合いを込めて音を紡ぐとしてよう』

タラスクの精神をかき回す。

ただその為だけに作られた、天才モーツァルト渾身の一曲は、恐ろしい鉄甲竜を悶え苦しませるだけの威力を以って奏でられていた。

「いくら気合いを入れて作ったとはいえ、まさかここまで効くとはねえ!!
ヤバいぞ僕、天才すぎる!!」

上擦った声は、思わず零れる笑みは、自身の作品と才能に酔っているためではない。

声に出して自分自身を励まさない、笑いでもしないと、無理にでも奮い立たないとやっていられないのだ。

自身を狂い殺さんばかりの不快感で苛む者の正体に気付き、敵意と殺意を一身に向けてくるタラスクが怖くて堪らなくて。

だからと言って逃げることは出来ない、その為に曲を止めでもすれば瞬く間に飛びかかって来るだろうから。

「ああもうっ、とんだ貧乏くじを引かせやがって!!」

悪態をつき、大分自棄になりながらも、自身が果たす役割の重要性を理解していたアマデウスは、懸命に指揮棒を振り続ける。

その崖っぷちの献身に、ついに限界が訪れた。

苦しいほどの不快感を堪えながら、適当な見当のみで放ったタラスクの炎が、タラスクにとっては運よく、アマデウスにとっては運悪く、ドンピシャの位置を捉えたのだ。

「うわあっ!?!」

真正面から炎を食らってまで演奏を続けることは流石に出来なくて、咄嗟に炎を避けたアマデウスだったけれど。

それは演奏が途切れてしまうことと、アマデウスへの怒りとヘイトを溜めに溜め

たタラスクが解放されてしまうことを意味していた。

亀どころか怒り狂ったサイのように息を荒げるタラスクが、炎で焼いてしまうなど生ぬるい、この身で轢き潰してやると言わんばかりの勢いで、ただ一人の怒りの対象を目掛けて回転しながら突撃する。

長時間の精神攻撃を食らった上に、怒り狂って正常な判断力と思考力を失ってしまっていたタラスクは、気付けなかった。

彼とアマデウスの間に割って入った者がいたことに、全力で激突をかましてしまいうその瞬間まで。

『巨大なハンマーとか鈍器の類いがあれば、俺もタラスクとやり合えたんだけど……残念ながら手持ちの武器は剣だけだ、矢も通じそうにない。

だからマシユ、今回の主戦力はお前に任せた。

俺は、いざという時のサポートに回るよ。

だからって前に行こうとしたら駄目だ、盾兵はあくまでドンと待ち構えるものだ

からな』

『し、しかし……前に出ないまま攻撃だなんて、一体どうすれば』

『……なあ、マッシュ。』

強い力と弱い力でぶつかり合ったら、競り負けるのはどっちだ？』

『……それは、弱い方、ですよ』

『当然の話だな。』

それじゃあ、人間が頑丈な壁に全力で体当たりをかましたとして、痛手を負うのはどっちだ？』

『それは、ぶつかった人の方が………あっ！』

『イメージできたな。』

そう、積極的に向かっていく方が常に強い方だとは限らない』

『感謝しますリンクさん、マッシュ・キリエライト行ってきます!!』

「やりましたマスター、リンクさん!!」

ようやく、自分でも納得できるほどの戦果を出せた。

皆のために貢献できたと思えた、盾兵としての本領を掴むことができた。

歓喜と興奮のあまりに上ずった声を上げながらも、盾を構える手と地を踏みしめる足に込められた力は欠片も揺るがず、敵を見据えるその目が逸らされることもない。

そんなマシユの目線の先で、正常な判断力を失ったまま、怒りに身を任せてしまったまま、壁に突っこんだ人間ならぬ城壁に突っこんだ大型トラックと化してしまったタラスクは、自爆して負った全身至る所の傷から血を噴きながら、あまりの激痛に悶え苦しんでいた。

重傷を負わせた上に、隙だらけの今ならば止めを刺せる。

そう判断して動き出そうとしたマシユだったけれど、それは一步步み出た途端に全身に走った痛みによって阻まれた。

信念と覚悟によって最終的に競り勝ちをはしたけれど、地にめり込んだ足が更に深く押し込まれた跡を残しながらも堪え切ったけれど。

タラスク竜の突撃を真正面から受け止めたその威力は、衝撃は、マシユの体に決

して少なくはないダメージを負わせるものだった。

「そ、そんな…あと少しなのに………」

「いやいやマシュ殿、そう嘆かれることはない。

貴殿は立派に役目を果たされた、あとは拙者に任されよ」

堪えられず膝をつき、悔しさと情けなさに拳を握ったマシュの俯いた視界に着物の裾が翻り、聞き覚えのある男性の心強い声がその耳に届いた。

ハッと顔を上げたマシュの目に飛び込んだのは、召喚されてからこの特異点の修復が始まるまでの間に、本を読むことでしか知る手段の無かった日本の風情や雅を教えてくれた、一人の侍の凛と立つ背中。

「小次郎さん!!」

『さつき、マシュが用意して設置したサークルのおかげで、本部から助けを呼べる

んだろ?』

『そうだけど、今の俺のスペックだと一度に一人だけ……しかも、あまり長い時間呼び続けることはまだ出来なくて。』

この状況の場合、誰を呼ぶのが正解なのか……』

『……足りないのは広範囲に渡って殲滅できる火力ではなく、ひとつの強大な敵を打ち破れる一点集中の突貫力。』

僅かな弱点、急所を狙って必殺の一撃を叩き込める、そんな人に心当たりは?』

『……ああ、いる』

『じゃあその人だ、集中して戦況を見守っている。』

呼んだ後保ち続けられないのなら、その力が必要になるその瞬間を逃さずに呼ぶしかないからな。』

……何を気にしてるんだよ、今この場でそれが出来なかったのは仕方がないだろ?』

今後の課題って奴だ、少しずつ覚えて身につけていけばいいさ』

「小次郎、宝具展開!!」

「了解した、主殿。」

秘剣……『燕返し』

『物干し竿』の異名を持つ長剣を以って、宙を飛ぶ燕を切る為だけに多重世界にまで及ぶ魔剣と化した秘技を放つ。

鎧をも断つという達人の一閃を同時に三つ、碎けた甲羅の隙間を寸分違わぬ確な狙いで以って放たれたタラスクは、あんな状態の主を一人遣してしまうことへの悔しさか、遣る瀬無さか、何とも悲しげな咆哮を上げながら崩れ落ちた。

「ふむ、あれが西洋の竜……どらごん、その一種とやらか。」

中々に斬り応えのある相手であった。

窮地の援軍に拙者を選んでいただけたこと、感謝するぞ主殿……っと、大丈夫か？」

「大丈夫じゃない、キツイ……」

《今の立香君に、特異点でサーヴァントを継続して保たせることはまだ重労働なんだ!!

佐々木君、終わったんなら早く帰って来てあげて!!》

「承知した。」

それでは主殿、マッシュ殿、この剣が必要とあらばまたいつでも呼んでくれ。

主殿達がいしふとに赴かれている間は、基本ずっと待機室に詰めておるつもりなのでな」

「……………うん。」

ありがとう、またね小次郎」

真っ青な顔色で、苦しそうな荒い息で。

それでも懸命に笑顔を作り、自身を見送ろうとする立香の姿に、小次郎は満足げな笑みを浮かべながら金の粒子と化していった。

『活動報告』にて重要なお知らせがあります、ご一読下さい。

新たな道標

「タラスク!？」

「隙あります!!」

騎獣の敗北に衝撃を受け、意識が逸れたその一瞬を逃さずに、ジャンヌはマルタの懐目がけて強烈な一撃を繰り出した。

咄嗟の反応で受け止めはしたものの、全く力が入れられてなかった杖を絡め取り、弾き飛ばす。

敢え無く手放され、そう簡単には拾えない位置まで飛んでいってしまった杖に、

内心で拳を握ったジャンヌだったけれど。

武器を奪い、攻撃手段を失わせることは、通常の戦いならば確かに有効な戦法だったのだけれど。

残念ながら、生憎ながら、目の前の彼女は例外だった。

杖を失った拳を、未だ持っていたのなら潰していたのではと思わせるほどの勢いで握りしめ、杖よりも堅く速い凶器と化したそれを、開ききった瞳孔で振り抜いた。

それが嫌な音を立てながらめり込んだのは、状況自体があまりにも想定外だったことと、繰り出された拳のあまりの速さに、一切の反応が叶わなかったジャンヌの腹部。

呼吸を強引に止められ、一瞬で白んだ意識の端で、ジャンヌは自身の名を呼ぶマリーの悲鳴のような声を聞いた。

「武器を奪うという狙いそのものは、決して悪くはなかったんだけど。

……やったわね。やってくれちゃったわね、アンタ。

悪いけど私はもう止まらない、どうにか足掻いてこの拳を止めて見せなさ」

別人のようにドスが効いたマルタの言葉は、最後まで形となることなく止められた。た。

胸の辺りの、息を吐いて声を発するための器官が、何の前触れも無く潰されたことによって物理的に。

突如背後からその身を襲った衝撃に驚き、自身の血に濡れながら胸元から突き出した刃に納得したことによって、精神的に。

「……………ああ、しくったなあ。

最も気にかけておかなければならなかった人の存在を、いつの間にか忘れてしまっていた。

それだけ皆が頑張っていたつてもあるけれど、何よりも悪かったのはトチ狂っていた私の方ね」

「……謝りはしないし、悪いとも思っていない」

「当然よ、刺される瞬間まで気付けない見事な気配遮断だったわ。

清濁を併せのんで、目的の為にいい意味で手段を選ばずにいられるあなたと仲間達になれば、この後を安心して任せられる」

刃が引き抜かれ、堰を失った血が傷と口から溢れ出す。

意識が飛ぶような苦しみと、心からの安堵と満足感を抱きながらマルタが振り返った先にいたのは。

夜の森に容易く溶け込むと思われる暗色の布を頭から被り、ON・OFFの効くアサシンクラスの気配遮断ではなく、紛れもない彼自身の技量で以って息と気配を殺し、枝葉の中に溶け込み。

仲間の真の窮地まで、自身が振るう刃が真に必要なその瞬間まで、最後の切り札としてその身を隠しきったリンクだった。

『向こうで用意できるものに限りですけど、カルデアから多少の物資を送っていた

だけのようですよ』

『リンク、何か欲しいものはあるか？』

『……濃い茶色か緑色、もしくは両方の色が混ざった布。

全身を包めるくらいがいい』

『……………何に使うつもり？』

サークル設置が完了した昼間の内に頼み、夜になってから届けられた迷彩装備。それをこんなにもいきなり使うことになるとは、リンクも流石に思っていなかった。

細かい嫌な音を立てながら、手にした剣の刃に走ったヒビが広がり。

数秒後に敢え無く柄のみとなってしまったそれを、砦の者達に申し訳ないとは思いながらも、最早いつものことだと早々に切り替える。

目の前で、自身の血に塗れた祭事服で、聖女のような笑みを浮かべるマルタは、既に体の端の方から粒子となって消え始めていた。

未だ苦しげに咳をしているジャンヌと、そんな彼女に肩を貸しながら氣遣うマリ、少し離れた所からはタラスクの消滅を見届けた立香達も駆けつけてきて。

誰一人欠けずに乗り越えることが出来た一同で揃って、消滅間近のマルタと向き合った。

「……ありがとう、聖女マルタ。

あなたの試練のおかげで、エーテルの体を貫く感覚とコツを得られた。

次に奴らと戦う時は、前よりもずっと上手くやれるはずだ」

「頼もしいわね、あの恐ろしい筈の彼女が哀れに思えてしまう程に。

ただどまだ駄目よ、あなた達ではまだ足りない。

竜の魔女が操る竜に、あなた達は絶対勝てない」

紛れもない竜種であるタラスクを従え、それを自分達が打ち破るところを目の当たりにしていた筈なのに、マルタは『足りない』と断言する。

それが意味するものを考え、背筋に冷たいものを走らせた立香達へと、聖女マル

タの導きは続いた。

「リヨンに行きなさい、かつてリヨンと呼ばれた都市に。

竜を倒すのは聖女ではない、姫でもない。

その役割を負う者は、古来から『竜殺し』と相場が決まっているわ。

最善なのは、竜どころか魔物・怪物の退治で名を馳せる英雄の源流たる、勇者様が剣を振るわれることなのだろうけれど。

……流石に、そんな過ぎた幸運を期待するわけにはいかないわ」

その言葉を聞いたリンクの表情が、居た堪れなさか申し訳なさで盛大に引きつったのだけれど、マルタの命を賭した献身に心を奪われていた一同が気付くことはなかった。

「タラスク、ごめん。

次は、もうちょっとともに召喚されたいものね」

彼自身は正気だったのに、狂った自分に付き合わせてしまった申し訳なさ感謝が込められた言葉を最後に、ライダー・マルタは完全に消滅した。

「……聖女マルタ。

狂化に侵されながらも抗い、私達に道を示して下さいったこと、心より感謝いたします」

「並の英霊ならば、話すことすら不可能だった筈。

彼女とは、もっと違う形でお会いしたかったです」

「ええ……とても穏やかで、同時に激しい人でした。

彼女が命を賭けて託して下さいったものを、私達は引き継がなければならないわ。リヨンという町に向かうこと、竜殺しのサーヴァントを探すこと、それが彼女が示してくれた次の目的。

とは言っても、今真っ先にやらなければならないことは他にあります。

私の宝具には回復の効果もあるの、継続して発動させるわ。

だから皆、今日の所はお休みなさい。

疲れて傷ついた体を癒して、また明日、元気になったら出発しましょう」

「妃殿下の心遣いに甘えた方がいいよ、精神的にも肉体的にも全員相当な痛手を受けているし」

「まあっ、まあまあリンクさん！」

「なっ……何ですか、いきなり」

「呼び方、それと口調も！」

無事に終わったら、改めてくれると約束したのではなくて!？」

「……………そんなこと言いましたっけ、あの時のことは状況のせいか記憶が曖昧で」

「あの様子だと絶対覚えてるな」

《だよね。

えーっと、ちょっと待って。

映像記録を遡れば、あの発言も記録されてる筈……あったあった、再生するよ》

《『あーもうわかりました、後でいくらでも名前で呼ぶし口調も砕けさせますからとにかく今は行って下さい!!』》

「ちょっとドクター!？」

《これぞ決定的な証拠って奴だね》

「ほらほらリンクさん、約束は叶えるものですわ!」

「勘弁して下さい……」

夜が明ければ、竜殺しを探す旅路が始まる。

その前に僅かな間だけ許された、激戦を終えた一行が心身を休ませられる限られた時間は、楽しげな笑い声と共に過ぎていくのだった。

竜殺しの英雄

聖女マルタによって竜殺しのサーヴァントを探す道行きを示された一行は、かつてのリヨンを守っていた剣士の情報を比較的近隣の町で得た上で、今や怪物の巣と化してしまっていた廃墟を探索した。

黒いジャンヌが従えるサーヴァント達の襲撃が予想されていたものの、幸いにもそれはただの懸念で済んで。

既に見慣れてしまった骸骨兵や飛竜の襲撃や、ジャンヌの生前の知己を含めたフランス兵達との決して友好的とはいかなかった接触など。

何事もなく万事順調にとは、流石にいなかったけれど。

瓦礫の中で動けずにいたところを発見した、もう一人の新たな……呪いに蝕まれ、生きているのがやっとの状態なので、現状では半人分かもしれないが。

それでも確かに増えた味方、竜殺しの英雄の代名詞とも名高いジークフリートと共に、戦線の後退と共に打ち捨てられた砦を一晚の安息の地として身を落ち着かせていた。

「ジークフリートさんにかけられた呪いを解くために、明日からは手分けして聖人探しですね」

「それにしてもなあ……折角見つけた頼りの『竜殺し』が、まさか呪いでろくに動けないだなんて」

「……すまない、戦力どころか足手まといになってしまった」

ただでさえ力の入らない体で、更に俯きながら弱々しい声を発したのは、倒した竜の加護によって守られた強靱な体躯と成し遂げた偉業に反して、卑屈とも言えてしまう程に謙虚で自虐的な人柄だった英雄ジークフリート。

本気で落ち込んでしまっている様子の彼に、立香は慌ててフォローを入れた。

「いやいや、別に責めてる訳じゃないって!!

……ただやっぱり、戦闘向きの人が増えてくれることには期待してたからさ」

《そっか、リンク君がようやく楽になれると思ってたんだね》

「リンク……ああ、あの少年か。」

あの若さで、末恐ろしくなる程に素晴らしい戦士だった。

かの勇者と同じ名を頂いて全く見劣りがしない、それどころか相應しいとすら思ってしまう程に」

《ほえ、英雄ジークフリートから見てもそう思うんだ……》

「故に惜しい……俺が彼の戦闘を目の当たりにしたのはまだほんの幾度かではあるが、それでも彼の内心の不満や苛立ちを察するには十分だった。

武器の扱いにその都度気を使い、いつ使い物にならなくなるやもしれない懸念を常に抱えたままでは、十全の力を発揮するにはほど遠いだろう」

「……確かにリンクさんの場合は、彼の腕前に耐えきれぬ武器が無いというのが、

唯一かつ最大の問題事項のように思われます」

《それなりの逸品を手に入れられる機会が、どこかであるといいんだけどね》

「つーか、今までのアレでまだ本気を出せていなかったっていう事実が、俺にとつては一番の衝撃なんだけど……」

一同の脳裏には、呪いで動けないジークフリートという荷物を抱えながらの撤退戦を要となって支え抜いた、小柄で細身な少年のあまりにも大きな後ろ姿が鮮明に思い浮かんでいた。

話題になっている当人の姿は、今この場には無かった。

火事場泥棒のようで気が引けるけれど、それでも必要なことだからと割り切つて、砦内を探索しに向かったためだ。

彼が求めているのは、この地で殉死した者が遺した所持品や、撤退する際に持ち出せなかった値打ちものといった類いの金品ではない。

刃が大きく欠けた剣を、柄が今にもへし折れそうな槍を。

かつての持ち主が国を、人々を守る為に懸命に戦った証が刻まれた武器を、リヨ

ンの跡地でジークフリートを探す際にも、彼は小まめに見つけては回収していた。その全てを撤退戦で使い果たしてしまったため、大したものが残されているとはとても思えないこの砦跡地でも、剣のひとつ、矢の一本でも見つければ上々な、普通に考えれば非効率極まりない探索を余儀なくされてしまっている。

ジャンヌやマリーはその手伝いに。

アマデウスは夜の散歩にでも行ったのか、気付けば姿を消していた。

「……何か、凄く静かだね」

「リンクさんは、少しでも時間があれば色々なことを教えてくれましたし。

無邪気に笑うマリーさんと、楽しそうに話すアマデウスさんが加わってからは、もうずっと賑やかでしたからね」

「……………気の利いたことも言えない、無口で無粋な男で済まない」

「何でだよ、だから誰も責めてないって！」

「むしろそれ以前の問題です、体が辛いジークフリートさんに無理に喋らせるつもりはありません」

人（魔術師）によっては、使い魔以前に使い潰せる兵器扱いすることも辞さないサーヴァントを。

半死半生の身を限界まで酷使されることすら考慮して覚悟していたジークフリートを、目の前の少年と少女は、替えの利かない仲間の一人として心から案じている。数秒呆けた後に優しい笑みを浮かべたジークフリートは、無粋な男を自称しているとは思えないほどに気の利いた言葉を口にした。

「ならば、俺が喋れない分も聞かせてはくれないか？

お前達が今まで、何を見て、何を聞いて、どんな冒険をしてきたのか」

自身の言葉に笑いながら頷き、目を輝かせた二人が語るこれまでの旅路。

最初に出会って以来ずっと力になってくれた少年のことに比重を置いたその内容に、呪いに苛まれる苦痛が僅かに和らぐかのような心地を感じながら、ジークフリートは静かに耳を傾けた。

（そうか……俺がこの地に呼ばれ、今日この時まで耐え抜いた理由は、この子達
力となるためだったのだな。

竜を繰る聖女よ、導きを感謝する）

彼らが望むのならば、彼らの力となるためならば。

例え聖人が見つからず、この身を蝕む呪いが解かれずとも、耐えがたい苦痛と我
が身の消滅を課せられたとしても、全力で剣を振るうことを心に決める。

竜殺しの英雄ジークフリートの我が身を賭した誓いは、誰に聞かれるでもなく、
彼自身の胸の内のみで紡がれた。

オルレアンの聖女

「リンクさん、私……以前話したあの件について、お答えすることが出来そうです」

砦の探索が一通り終わり、立香達の元に戻る前に一旦休むことにした頃合いで、不意にジャンヌが口を開いた。

怪物に襲われて破棄された砦の縁に腰かけながら、満天の星空を振り仰ぐという、浪漫なんだか無粋なんだか判断し難い微妙な状況で。

悩みも苦しみも、全てを吹っ切ったかのような笑顔でそう言ったジャンヌに、リンクは微笑みながらその先を促した。

「ジークフリートさんを連れてリヨンから撤退する際に、フランス兵を襲う飛竜達と交戦しましたよね」

「ああ……ジャンヌは兵士達を守ろうと一生懸命だったのに、当の彼らは、ジャンヌを魔女の方だと思い込んでの恨み節で。」

ジャンヌがまた落ち込んでるんじゃないかって、立香達が心配していたな」
「……あの時、私は嬉しかったのです」

自分の発言が、あの状況でそう感じたことが異様であることくらい。

立香やマシュ達に聞かれていたら、心労が重なったせいでおかしくなってしまうたのではないかと心配をかけさせてしまっていたことくらい、ジャンヌにはわかっていた。

実際に、同席していたマリーは、驚いて目を剥いてしまっていたことだし。
だからこそ嬉しかった。

今のたった一言で、ジャンヌが何を感じ、そして思ったのかを察したリンクが、

その『普通』からずれた感性と価値観を笑って受け入れてくれたことが。

「彼らには魔女を、私を恐れ打ちひしがれるのではなく……憎み、その激情を糧に立ち上がる気力があった。

ならばいいかなと、私を憎むことで彼らが生きてくれるのなら構わないと、そう思って安心しました。

……そして気付きました。

生前の私もそう思った、だからこそ恨まなかったのです」

ただの田舎娘だったジャンヌ・ダルクが立ち上がったのは何故だったのか、一体何がしたかったのか。

そんなリンクの問いかけに、今ならばこう答えよう。

神の声を聞き、その託宣を成し遂げた聖女となりたかった訳ではない。

救国の英雄としての、富や名声が欲しかった訳でもない。

自分は、ただ救いたかった。

フランスに、生まれ育った故郷に、愛する人々に、平和をもたらしなかった。あまりにも長く続き過ぎてしまったせいで、人々の中で当たり前になってしまっていた戦争を終わらせたかったのだと。

神のお告げは、常々抱いていたその想いに自信を与え、成し遂げる決意を抱くためのきっかけに過ぎなかった。

「刑に処される私に、主が救いの手を差し伸べて下さらなかったのは当然ですね。だって私は、主のお告げを信じて、主のために戦った訳ではなかったのですから。私の全てはフランスの、民の……それらを救いたいと願う、私自身のために捧げられました。」

……主を冒瀆する、罰当たりな魔女という人々の言い分は、ある意味正しかったみたいです」

「ジャンヌ、それは……」

「心配しないでマリー、自虐している訳ではありません。」

むしろスッキリしています、『ああ、そうだったんだ』って。

そもそも常日頃から、私は聖女なんかではないとは思っていましたからね」

火刑に処された最期を悔やまなかったのは、フランスに平和をもたらすという、生涯の目的を既に成し遂げていたから。

裏切られたことを恨まなかったのは、賞賛や褒賞が欲しくて戦っていた訳ではなかったから。

故郷に、家族の元に帰れないことを嘆かなかったのは、自分自身の譲れない望みのために全てを賭すことを、二度と戻れない覚悟を既に決めていたから。

裏切られ、報いられず、罵声の中で炎に消えた……『恨んでいない方がおかしい』と誰もが口にするような無残な最期に、自分は本当に満足していたのだ。

願ったことを願った通りに成し遂げていたから、何よりも欲しかったものを手に入っていたから。

これが『ジャンヌ・ダルク』の生き様だと、私は誰も何も恨んでなどいないと。今の自分は、胸を張って、心からそう言える。

……だけど、だとしたら。

「あの魔女の私は、一体どういことなのでしょう。

彼女に相まみえた時、私は、『あれは私ではない』と強く思いました。

あの時は、私の中に憎しみや復讐心などというものがあつたことを認めたくない一心で、必死に否定しているのだと思つたのですけれど。

今の私は違います。

彼女を『違う』と思つたのは、認めたくなかつたからではなく、本当に覚えが無かつたからだということ。

私の最期に、彼女という存在を生み出してしまふような憎しみなど欠片も無かつたことを、自信と誇りを以って確信している。

……だけど実際に彼女は存在し、憎悪の炎でフランスを焼いている」

「……あの時私は、アマデウスと一緒に隠れて様子を見ていただけで、魔女さんと直接相對した訳では無かつただけ。

リンクさんが仰つていた『八つ当たり』という表現に、酷く納得したのを覚えていますわ。

自分でもどうしようもない、お腹の底から湧き上がるかのような熱い衝動を、目につくものに辺り構わずぶつけてしまっているかのよう。

……………ああ、わかりました。

そうよ子供、彼女は癩癩持ちの子供だわ。

フランスの国という遊び場を、竜という玩具を与えられて、ここではこうやって、これはこう使って遊ぶものよと教えられて、その通りにしているだけの子供なのです」

マリーが絶対の自信を持って断言したその考察は、『誰も何も憎んでいない』というジャンヌの発言並みに、理解し難く突拍子もないものの筈だったのだけど。

リンクとジャンヌがその生涯で知り得なかったものの、『親』としての経験と知見を有した上でのマリーの言葉は、存外の説得力を持って受け入れられた。

「復讐に堕ちたジャンヌ・ダルクが自然に生まれることはあり得ない、だけど現実には彼女は存在している。

ということとは、何者かの不自然かつ意図的な干渉が、彼女を作り出したと考えた方が自然だろう。

……つまりその何者かが、彼女を作り出し復讐を教えた『親』こそが、真の黒幕だ」

「一体、誰がなぜ、どうやってそんなことを……」

「現状でいくら考えを巡らせても、それはただの憶測に過ぎませんわ。

実際私も、彼女が子供だという持論には自信を持っていますけれど、根拠は勘に過ぎませんもの。

証拠を示せと言われれば、確かなものは何も無くて困ってしまいます」

「……今のところはここまでか。

ここから先を考える為には、何か別の、新しい情報が必要になる。

このまま決戦の準備が整っていけば、向こうと接触する機会は必ず出てくる筈。その時にまた、今度はもっと思い切って深いところまで突っ込んでみよう。ジャンヌ、次は庇わなくても大丈夫だよな？」

「はい、ありがとうございます」

「リンクさん、少し宜しくて？」

「どうか致しましたか？」

「ああもうっ、リンクさんったら！」

「何ですかいきなり!？」

「口調、改めて下さるのではなくて!？」

「……………あー。」

申し訳ありません、努力するのでもう少し猶予を頂けますか？」

「約束ですからね」

そう言いながら形作られた、光のように眩く、花のように愛らしいマリーの微笑みを受けて。

内心の奮闘も虚しく遂に陥落したリンクは、彼女の名を呼んで碎けた口調で接するために、彼女の望みを叶えるために、ポーズだけでなく本気で頑張ることを大きなため息と共に決めたのだった。

「愛され王妃様、恐るべし……」

「ですね」

項垂れながら思わず呟いたリンクと、それに苦笑いで返したジャンヌは、敢えて何も言わずともお互いの心境を察していた。

音楽家の慧眼

考察に区切りをつけ、そろそろ立香達の所に戻ろうとしたジャンヌとマリーを、少しだけやり残していたことがあると言って、リンクは一足先に送り出した。

去り際に手を振った彼女達の姿が建物の陰に消えた後、念のため少しだけ待ってから。

彼女達が去っていった方向とは反対側の、別の物陰へと、確信を以って声をかけた。

「ジャンヌもマリーももう行った。」

話があるなら聞くよ、アマデウス」

「おやおや、ばれてたか。」

一応念のために、音楽とは人に聞かせてこそという持論を一時曲げてまで、隠蔽効果のある曲を奏でていたんだけどね」

「効果が発揮され過ぎていたのが問題だったなあ。」

風が通る気配に、土や草の匂い……あって当然のものまでもが無い、そこだけ切り取ったかのような異様な空白は、十分過ぎるほどの違和感だった。

最初は敵襲かとも思ったけれど、絶好の機会を何度も見逃していたし。

仲間内の誰かだとしたら、そういったことが出来そうなのはお前くらいだろう」

「……成る程、そういうことに気付くかい。」

流石は『君』だね」

その言葉に、笑顔に謎の含みを感じて軽く目を見張ったリンクの様子に、アマデウスは益々笑みを深める。

彼の脳裏に鮮明に焼きついたのは、今現在ありありと蘇っているのは、今日の撤

退戦的一幕。

当たり前だった筈の命と毎日を理不尽に奪われたことへの嘆きと未練から、生前の装いを纏ったまま、彼らの生前を鮮明に想像させる生々しきで『生ける屍』へと転じてしまった、かつての町民達に取り囲まれて。

強引に突破することを誰もが躊躇い、想定外の危機に陥ってしまった時の事だった。

普段はクズだの人でなしだのと散々な言われようをされ、自分でも自覚して納得してはいるけれど。

大切な彼女を含めた女性陣に、こういうことを背負わせるのを躊躇う程度の男氣くらいは、生憎と持ち合わせていて。

色々な覚悟を決めて指揮棒を取ったアマデウスの想定外は、咄嗟に動いた自分に、思いもよらず追隨した者がいたことだった。

いきなり動きを止め、一人、また一人と崩れ落ちていった屍達を。

一部の者には、彼らの魂がこの世への未練から解き放たれて、無事に天へと昇ったことすら察せられた光景を。

一同はアマデウスが奏でた曲が導いたものと判断し、流石は稀代の音楽魔術師と、いざという時頼りになる人でなしだと、褒めているんだかけなしているんだか分からない文句で称え、アマデウスもあの場では素直にそれを受け入れたのだけれど。アマデウスは……アマデウスだからこそ気付いていた。

本当の力を持つ曲は、自身が渾身の指揮で以て奏でたそれではなく。

死してなお囚われたままの者達を前に、痛ましげに目を伏せた少年が、僅かに開けた口から祈るように紡いだ。

迷える魂を癒す優しさに満ちながら、その者の生が終わりを迎えてしまったことを哀しみ、悼んでもいるかのような切なさや僅かな恐ろしさをも感じさせる、ささやかな旋律の方であったことを。

気付かれていたとは思っていなかったらしく、珍しく本気で顔を引きつらせている様子のリンクに、アマデウスはフンッと軽く鼻を鳴らした。

アマデウスが奏でた曲も鎮魂と昇天を促すものであり、効果もそれなりにきちん
とあるものだったので、紛れさせてしまえば分らないと思ったのかもしれないけれど。

「生憎だったね……僕は英霊としてはあまり上等ではないし、自分でもそれは自覚しているけれど。」

それと同時に、『音楽』という一分野に関しては、例え相手が偉大なる大英雄であらうとも決して引けを取らないという自負がある。

その僕が断言しよう。

あれは、数多の魔術師達が生涯をかけて追い求めてきた原初の音楽魔術、その一節だ。

それを知り、使いこなすことが出来るのは、たった一人だけの筈のものだ。
だよねえ、リンク………伝説の勇者様」

判断には自信があった、答えは確信していた。

それでもアマデウスは、してやったりの笑みが呆けた間抜け面へと変わるのを、多くの人々を感動させてきた自分の心が柄にもなく本気で揺り動かされてしまうのを、堪えることは出来なかった。

立香達はなぜ気付かないのかと、自分はなぜ気付かなかったのかと。

何らかの隠蔽効果が働いていたことを察した上で、それでも心から疑問に思った。だって、目の前にいる彼はこんなにもあからさまに、分かりやすすぎる程に『彼』ではないか。

形を取った光のような髪も、極上の宝石を思わせる瞳も、うら若き乙女達までもが憧れたという顔立ちも……女神の庇護を受けた民の証であるという、尖った大きな耳も。

最大の特徴たる緑衣を纏っていないし、愛用の聖剣も携えていなかったものの、それでも十分過ぎるくらいに。

彼を形作る全てが、伝説に語られ、後の世の多くの者達が思い描いてきた、勇者像のそのもので。

夢見心地で呆けてしまっていたアマデウスは、大きなため息をつきながら肩を落としたリンクの様子に、内心では慌てて、表向きは懸命に平常を保ちながら、急いで気を取り直した。

「参ったなあ、まさかそんなきつかけでバレるとは……ああいや、アマデウスを見

くびった俺が悪いか。

別に、悪気があつて隠していた訳じゃないんだ。

立香達には、頃合いを見計らつてちゃんと話すから、もうしばらく黙っていてくれないか？」

「それは、構わないけれど……でもどうして、隠したりなんかしたんだい？

確かに、基本的にサーヴァントは真名を秘匿するものだ。

手の内を秘めたり、弱点を悟られないようにする為のことだけど、大勢のサーヴァントが入り乱れて現界している状況では、あまり意味が無くなっているし。

むしろ君の場合は、積極的にその名と存在を押し出した方が、色々と上手く働きそうな気がするんだけど」

「ああ、実は……」

そうして、少し途方に暮れた様子のリンクが話し出したのは、アマデウスが想像すら出来なかった現状だった。

召喚時に何かしらの不備があつた場合、記憶や能力に欠損や弱体化が見受けられ

る場合があることは、ジャンヌの実例から既に周知されていた事実だったけれど。記憶の欠損どころか、本人にサーヴァントとしての自覚がまるで無く、自分がそうだということを認識したのも、立香達とのやり取りの中で自分自身を客観的に判断した上でのことで。

能力の弱体化どころか、サーヴァントとしての力の使い方を一切把握出来ていなくて、宝具もスキルも使用どころか概要すら掴めていないという状況は、リンクでなければとくに潰れてしまっていたとしてもおかしくない程に過酷なものだった。

「退魔の聖剣は？」

「何度か探したけどどこにも無いし、試してみたけど出てこなかった」

「……例のオカリナは？」

「それも同じく。」

便利な道具とか、能力とかは他にも色々とあって、サーヴァントとなったからには宝具やらスキルやらで何かしら使える筈なんだけど、今のところはさっぱり。

音楽は何とか使えたみたいだけれど、あれもきちんと発動する確信があった訳じゃなくて、むしろ駄目元だったからなあ……」

「うわあ、それは流石に……って、ちょっと待って。

サーヴァントとしての能力が一切使えないという割には、骸骨兵や飛竜、更には敵対サーヴァントやタラスクなんてとんでもない奴相手にまで、その辺で拾ったような武器だけでやりあっていたあれは何？」

「あれくらいなら、サーヴァント云々以前に元から出来ていたけど」

「……………あ、そう。

うんわかった。君は魔術師や英雄どころか、サーヴァントとしての一般常識ですらも、まともに当て嵌めて考えてはいけない奴だ」

「その言葉に込められたものが、いい意味であることを期待するよ」

「その辺りはもちろん。

……だけど真面目な話、これから一体どうするつもりだい？

いくら君が勇者で、半端なく優れた戦士だったとしても。

愛用の武器や便利な能力が使えない現状で、少し本気を出せばたちまち使い物に

ならなくなるような武器だけを何とかやりくりしながら戦っていくのは、相当な無茶だと思うんだけど」

「確かに、そろそろ限界だとは感じてた。

多分、問題は俺が力の出し方や使い方を把握出来ていないことで、その辺りを掴めさえすれば、もっと色々と出来るようになるんだと思う。

……俺の現状に近いのは、召喚時に不備がありつつも自覚はちゃんとあるジャンヌよりも、むしろ後付けで力を得ることになったマッシュの方だ。

実際マッシュも、最初は力の使い方がよく分からなくて戸惑っていたらしいから、その時の対処法が参考になるかもしれない。

明日、雑談中にそっちの話題に持って行って、何とか聞き出してみることにする」
「ちょっと待って。

その役目、良ければ僕に任せては貰えないかい？」

「アマデウスに？」

「ただの女の子だったマッシュが、急にサーヴァントの力を身につけて、そのまま戦場に放り出された時の話だろ？」

話したり、思い出したりすることを嫌がられた場合、君は無理強い出来るかい？
君は必要・最適と判断すれば、非道も躊躇わないらしいけど。

それはあくまで他人や大局のためで、それが自分自身の個人的な都合のみに留まる話ならば、むしろ何とかして自分だけで片づけようとする……そんな面倒臭い性質の持ち主で。

周りから散々に叱られ、窘められてきたと予想するけれど、如何かな」

明確な返事は無く、それでも思わず泳いだ目と苦笑いだけで十分答えを察するこ
とが出来たアマデウスは、愉しげな笑みを零しながら話を続けた。

「その点、僕ならば問題ない。

無粋だろうがプライベートだろうが、『興味がある』の一言でとことん突っこ
んで見せようじゃないか」

「……確かに、それが最適か。

悪いなアマデウス、憎まれ役を引き受けさせることになるかもしれない」

「なあに、今更さ。」

人間のクズ扱いは慣れているし、自覚だっているからね。

君は僕達のやり取りに、少し離れた所から何気なく聞き耳を立てていればいい」
「ありがとう、助かる」

「どういたしまして。」

いやあ光栄だねえ、伝説の勇者リンクの旅路の手助けが出来るだなんて！」

「あまり揶揄わないでくれよ、そういうのは慣れていないんだ」

「揶揄うなんてとんでもない、紛れもない本心さ！」

「……………ああ、本当に」

「あっ、リンクさんが帰ってきました」

「アマデウスもよ、散歩中にどこかで鉢合わせでもしたのかしら。

……あら、アマデウスったら」

「マリーさん、アマデウスさんがどうかしましたか？」

「何か良いことでもあったのかしら、パーティ前日の子供のように浮かれているわ」

「……私には、いつものアマデウスさんのように見えるのですけど」

「私にはわかるの。」

あの笑顔は作り物ではない、心からの本物よ。

ふふっ……今の彼が楽譜に向かったら、どんな名曲が紡がれるのかしら。
今日はもう遅いし、また今度、おねだりして一曲奏でもらいましょう」

「バーサーク・ライダー……聖女マルタにはまんまと自害をさせてしまった上に、戦力強化に集中している間に、ジークフリートとの合流まで許してしまったわ。

ヴラド三世はともかく、カーミラの方は露骨にやる気が無いし……ああもうっ、
どいつもこいつも腹が立つ!!

何もかもあのエセ勇者のせいだわ、あいつが現れるまでは順調だったのに!!」

「おお、何と痛ましい……ジャンヌよ、どうかお気を静めて下さいませ」

「黙れジル、アンタはあいつのヤバさを知らないからそんなことが言えるのよ!!」

「その通りでございます。」

私が存じ上げているのは、他の何にも勝るたったひとつの事実のみ。

貴女の憎しみ、貴女の復讐は正しきものであり、それ故に、貴女が敗れることなどはありません。

狂化に抗い、いつ明確な反抗を示してもおかしくはなかった者が、身中の不穏分子が我らが手を下すまでもなく排除されたことを喜びはしても、惜しみ、悔やむことはありますまい。

貴女が新たに召喚なされた者を含めた、あれとは違い素直に狂化を受け入れたサーヴァント達と……『竜の魔女』たる貴女に最も相応しきしもべ、かの邪竜の存在があれば、何を案じ、憂うことがありましようか」

「……ええそうですね、その通りです。」

ジル……あなたの言葉は、いつも私に道を示してくれる」

「私はただ、貴女の心を惑わす憂いを取り除いているだけ。」

全てを選び、決断しているのは、貴女自身の迷いなき心であります。

貴女が成したいと思ったこと、それこそが正しいのです」

「……ファヴニールを出します。

私をコケにしたあいつを、小手先の技や策なんて何の意味も成さない、圧倒的な力で叩き潰してやる。

自慢の強さが通じない屈辱と、私に齒向かったことへの後悔の中で、滓も残さず燃やし尽くしてやる。

余計なことをしたせいで、自分を守ったりしたせいで無残な最期を迎えさせてしまったと。

大層な仲間を得て調子に乗っている聖女様を、絶望のどん底に叩き落してやるわ」
「どうぞ、ご随意に」

スキル・宝具共に使用不可、通常攻撃のみ可能という密かな縛りプレイを強要されていたリンク君でした。

ストックが切れてしまいましたので少し更新に間が開きそうです、ご容赦ください

束の間の一人旅

カルデア一行の、一晚の休息と友好の場となった朽ちかけの砦。

彼らが既に発ち、再び人氣が絶えた筈のその地に、密かに戻ってきた人影があった。

出発間際に、マシュが念入りに消火確認をしていた焚き火を再び起こして、その傍に腰を下ろす。

一息ついた口から、天才音楽家の地獄耳に聞かれることを考慮して、今まで出せなかった言葉が零れた。

「……皆ごめんな、勝手なことをして。

でも俺は、これが必要なことだと思うから」

届かない謝罪の言葉を、自己満足であることをわかっているながらも堪えられなかったリンクの脳裏には、今朝からの皆とのやり取りが蘇っていた。

秘密のやり取りを交わした翌朝、聖人探しを始める前の最後のひと時の中で、アマデウスは早速リンクとの約束を実行に移してくれた。

お喋り好きで、気紛れで、好奇心が旺盛で、いい意味でも悪い意味でもデリカシーが無くて。

そんなアマデウスが、『前から興味があった』という理由で突拍子もない話題を振ったとしても、驚きはしても疑問に思った者はいなかった。

幸いにもそれは当人にとって、語ることを躊躇うような話では無かったのだけだ。

アマデウスの表情を引き攣らせたのは、聞き出すこと自体はあっさりとうまく行った、その話題の中身の方だった。

「……………魔物を敢えておびき寄せて、精魂が尽きるまで戦ったって？」

「はい…………ご指導下さった、クー・フリーンさん曰く。」

宝具とは英霊そのものなのだから、サーヴァントとして戦えている時点で、宝具は普通に使える筈だと。

そして、こうも仰っていました。

宝具とは英霊の本能であり、下手に理性や理屈で考えてしまうと発動しにくいと」
「それで、本能在剥き出しにならざるを得ない状況を作ったと。」

何だいそれは、指導した奴はどれだけ脳筋だったんだよ。

でも…………まあ確かに、英霊としての能力が『本能』だというのならば、そういう力押しが正解ってのは事実なんだろうな」

息を吸うように、心臓が鼓動を打つように。

それそのものが『生きる』ということであるかのように、当たり前前に音楽を紡いできたアマデウスには、そういう説明のし辛い感覚というものに多少の理解と覚え

があった。

しかし、本人が日々公言しているようにアマデウスは本来荒事には向いていない、と言うより縁遠い存在である。

理解できないと、辟易した気持ちを遠慮なく溜め息として吐き出しながら、視線だけでさり気なく振り返ったその先に。

『成る程』と知っていることを表情だけで十分察せられる程に、人目が無ければポンと手でも打っていたであろうことが容易に想像できる程に。

全力で納得している勇者の姿を見つけてしまい、大きな大きな二度目の溜め息がその口から零れ出た。

「思いついたわ、私！

今こそくじ引きをしましょう！」

聖人探しの本格的な道行きは、愛され王妃様のそんな可愛らしい我がままから始まった。

「……はい？」

「こういう時はくじ引きよね！」

アマデウス、作ってちょうだい！」

「くじを引きたいだけだろ、君は。」

……まあいいか。

わかったよ、それでグループ分けしよう。

マスター、マシユ、何か材料になりそうなものはあるかい？」

「メモ帳と鉛筆で宜しければ、持参しています」

《立香君、マシユ、そんなことで決めちゃって本当にいいの？

マリー様のお断りを断り辛いのはわかるけど、本当に大切なことはビシッと

言う方がいいよ》

「ありがとうドクター、心配してくれて。」

……でもさ、正直言って。

この面子を振り分けるのに頭を捻っても、そうそう変わりはないと思うんだ」

《……まあ確かに、守り重視とサポート型に偏っているのは否めない》

「だったらいいそのこと、運を天に任せてしまってもいいんじゃないかな。思い切った願掛けが、いい流れを招いてくれるかもしれないし」

そう言って笑う立香の言葉を背中越しに聞きながら、くじの作成を手伝っていたリンクは、心の中でそっと呟いた。

運命とは委ね、待つものではない……掴み、変えるものだ。

しるしを書く前の白紙のメモ帳を一枚、そっと手のひらに忍ばせながら。

密かな企てが実行に移されたのは、そのすぐ後のこと。

○×で二つに分ける筈だった、実際に彼以外はきちんと分かれた中でリンクは一人、どちらとも異なる白紙のくじを手には苦笑いを浮かべていた。

「このパターンは考えていなかった」

「も、申し訳ありません……全てのくじに、きちんとしるしを書いたと思ったのですが」

《マシュのミスとは限らないよ、くじは皆で作ってたんだし。

それよりどうするんだい、このくじ引きは願掛けも兼ねていたんだろ？

結果が思わしく無かったからってやり直すのは、逆に縁起が悪そうな気がする」

「でも、これだと要するに、リンクを一人で行動させるってことに……」

「心配いらないよ立香、俺なら大丈夫」

「お前の強さなら、確かにそうかもしれないけれど……」

友人を普通に、当たり前前に心配したいだけなのにそれが儘ならず、唸りながら苦悩する立香。

そんな彼を横目に、リンクは密かに、きちんとしるしが書かれた本物のくじを小さく丸めて、口の中へと放り込んで喉を鳴らせた。

そして笑いながら、何食わぬ顔で、未だ唸り声を上げている立香を説き伏せにかかる。

今まで積み重ねて来た確かな実績が功を奏し、一時の単独行動を認めさせることに成功した。

あまり無理をするなど、何かあったらすぐにどちらかの組に合流しろと。

周りがついリンクの側に立って宥めにかかってしまう程に、何度も何度も念を押していた。

言い表しようのない嫌な予感に苛まれていた、立香の勘を軽視してしまったことを。

一同が心底後悔するのは、暫し先のこととなる。

「じゃあねアマデウス、行ってくるわ。

帰ったら久しぶりに、貴方のピアノを聞かせてちょうだい」

変わらない花の微笑みとささやかな約束に、別れの覚悟を潜ませていたマリィ。

「美しいものしか愛せないんじゃないよ。

人間は、美しいものだって愛せるって話だよ」

クズだの、人でなしだのと悪びれなく自称するその口で、確かな美と愛の形を語ったアマデウス。

「聖人が見つかって、ジークフリートの呪いが解けたら……改めて、きちんと話したいことがあるんだ」

苦しそうな、痛ましそうな表情で、何かしらの強い決意が込められた言葉を口に

した立香。

「それではリンクさん、また後ほど」

また会えると、これで最後などにはならないと、心から信じて笑っていたマシユ。

別れ際に交わしたやり取りのひとつひとつを思い返しながら、リンクは一人、その時を待っていた。



連なる悔恨

リンクを除いて二手に分かれた一行は、カルデアから示されるサーヴァント反応の探知情報を頼りに、各々が町を目指した。

そうして得た収穫は、アマデウスの耳と神経に多大なる負担を伴ったサーヴァントの少女二人との遭遇と、かつてのジークフリートと同じように町の防衛に携わっていたという、求めた聖人のサーヴァントとの合流だった。

「ああ、散々だった……頭の中に、まだあの不協和音が響いてまわっている気がする」

《お疲れさまアマデウス、頑張ったみたいね》

「頑張った、本当に頑張ったよ。」

ねえマリア、後で僕の伴奏に合わせて歌ってはくれないかい？

相当に良いものを聞かなければ、あのハチャメチャな音の余韻を消すのは無理そうなんだ」

《ええ、構わないわ。

ピアノを聞かせてもらう約束、果たしてもらうことが出来そうね》

「……そうだね、僕も楽しみだよ」

「初めましてゲオルギウスさん、通信機越しで失礼します。

私は、カルデアのマッシュ・キリエライトと申します。

仲間入りの要請にご承諾をいただき、本当にありがとうございます」

《こちらこそ、お声がけに感謝します。

私の力が必要と仰られるのなら、誠心誠意努めさせていただきますましよ》

「ちょっとー、私達はいつまで放っておかれるわけ!？」

「こちらのトカゲはともかく、私を無視するというのはあんまりです」

「何ですってこのヘビ!!」

「やめてくれ、これ以上騒音をまき散らされたら冗談でなく死ぬ!!」

通信機を通じて互いの成果を分かち合った一同は、これがただの通過点であることを理解しながらも、一先ずは肩の力を抜いて笑い合っていた。

一人を除いて。

(おかしい…おかしい………何もかも上手くいっているのに、皆みたいに喜んでいる筈なのに。

どうして俺は、こんなにも不安で堪らないんだ？

どうして……何か大切なことを見逃してしまった、そんな気がしてならないんだ？)

「センパイ、どうかなさいましたか？」

「……ちょっと小イヌ、あんた大丈夫？」

顔色が真っ青じゃないの」

まだ真名を聞けていない、気が強くて我が儘そうながらも、こうして心配してくれるからには根はいい子なのだろうと思われるサーヴァントの少女が、俯きながら震える立香の顔を覗き込み、見たものと抱いた印象をそのまま言葉にする。

それによって、立香の様子がおかしいことによりやく気付いた一同は、それまでのほのぼのとしたやり取りを一瞬で切り上げて集まってきた。

立香の根拠など何も言えない曖昧な不安を、否定せず、笑いもせず、真剣に受け止めてくれようとしているその様子に、立香は目の奥が熱くなってくるのを感じていた。

言えば良かった、言って良かったのだ。

特に何の問題も見受けられない中で勝手に不安になっているだけだと、順調な行程や皆の喜びに水を差してはいけなйдなどと、変な気を使ったりせずに。

一人で抱えてしまっていたことを、皆を信頼しきれずにいたことを心の中で謝りながら、立香はようやく呑み込み続けていた言葉を口に出ることが出来た。

「何か大変なことが起こっていて、それを見過ごしてしまっている気がする……で
すか？」

《曖昧だなあ……いや、だからって立香君の不安を否定するつもりは無いんだけ
ど。

もう少し、何か具体的なことは言えないかい？》

「その具体的な何かが言えないから悩んでたんだってば……」

「……………まさか」

「アマデウスさん、何か心当たりがあるのですか？」

「ねえ、マリア。

今朝の『ピアノを聞かせてほしい』というのは、君なりの別れの言葉だと思っ
ただけだけど、間違いないかい？」

《ええ、そうよ。

だって私は、あなたのピアノを結局一度も聞けなかったのですもの》

「何でそんな、別れの言葉なんかを口にする必要があったんだい？」

《……魔女さんの妨害が、今度こそきつとある筈だと思ったから。

そうなたら私は、フランスの王妃として、民を守るために身を賭すべきだと思ったから。

……………立香さんの言う通りよ、これはおかしい。

ジークフリートさんとの合流が見逃されたのはまだわかります、呪いが解けない限り彼はとても戦力には出来ない。

だからこそ、彼の呪いを解くことが出来る聖人との合流は、何が何でも防がなければと考えるべきなのに!!

魔女さんや、彼女のサーヴァント達の妨害が全く無いなんておかしいわ!!

何てことなの…………何の問題も無く順調だなんて、喜んでいる場合ではこれっぽっちも無かった!!》

「ああクソッ、やられた!!

どうしてこの考えにもっと早く至れなかったんだ、あいつが一人で背負う性質だったのはわかっていただろうが!!」

「アマデウス、一体どういことなんだ!？」

「リンクだよ!!

あの馬鹿、僕達を動きやすくさせるために自分を囷にしゃがった!!」

「まさか、ありえませんか!!」

リンクさんが単独行動をすることになったのは、くじでたまたまそうなったからですよ!？」

「その準備をあいっは手伝っていた、仕込みようはいくらでもある!!」

「そんな……!」

血を吐くようなアマデウスの叫びによって、浮かれ気分の全てが吹っ飛んだ。背筋どころか魂が凍るかのような悪寒と共に、『それだ』という確信が立香の中にあつた空白に呆気なく嵌まり込む。

『そう心配するなって、俺なら大丈夫だから。

立香、マシュ、また後でな』

そう言って笑いながら手を振り、一人背中を向けて歩いて行ったあの時の彼は、一体どんな気持ちでいたのだろうか。

「リンク!!」

説得されてはいけなかった、自分自身の嫌な予感を信じてもっと素直に心配すれば良かった。

後悔と自責に苛まれながらの、マスターとしてではなく友人の身を案じる一人の少年としての悲痛な立香の叫びが、英霊達の心を締め付けた。

勇気ある者

仲間達から離れ、この砦に一人戻ってきてから、どれだけの時間が経ったことだろうか。

組み直した焚き火は既に灰と化していて、僅かな燻りもいつ消えてもおかしくはない。

静かに目を瞑り、眠っているようにも見えたリンクの無防備な背中へと、背後の暗闇から音も無く、刃物の如く鋭く伸びた赤く禍々しい爪が向けられる。

心臓を狙ってまっすぐに放たれたそれを、リンクは振り返ることすらしないまま、鞘入りの剣で打ち払った。

「……っ!？」

「来たな」

リンクがそれを『敵襲』だと判断したのは、集中し、意識を研ぎ澄ませていた中で不自然に近づいてきたものを咄嗟に払いのけた後、つまりは攻撃を防いだ後のことだった。

振り返った視線の先、仮面の異形が瞬く間に消えていった闇へと向けて剣を構えるリンクの背へと、一撃目とは異なる得物が振り下ろされた。

瞬時に反応し、飛びのいたリンクの視界に過ぎたのは、漆黒の甲冑に全身を覆った騎士の姿。

声にならない雄叫びを上げながら、理性の感じられない振る舞いに見合わない繊細な技術で以って振るわれる刃から、リンクは砦の城壁へと飛び付くことで逃れた。激戦で受けた痛手を補修もされないまま放置されて至る所が崩れている、故に手がかりや足場に困ることの無い城壁を、瞬く間と言ってもいいほどの速さと軽快

さで登り切ったリンク。

突然の強襲から逃げた筈のその場所で、眼前に広がっていたのは青空などではなかった。

退路どころか、視界全てを埋めながら立ち塞がる影は、ワイバーンなど所詮下等種であったのだという事実を、その存在のみで突き付けてくる漆黒の巨竜。

その背には、愚か者を嘲り、見下す瞳と表情でこちらを見る、竜の魔女の姿があった。

進む先を塞がれたリンクの右に、覚えのある顔が、男性とも女性とも判断しかねる美貌の剣士が立ち塞がる。

それを認識し、咄嗟に振り返った左側には、苦々しげに表情を顰めるヴラド三世が。

背後では、自分達の強襲から逃れたリンクを追ってきた、仮面の青年と黒甲冑の騎士が退路を断つ。

邪竜ファヴニールとサーヴァント達による包囲網の完成を見届けた黒いジャンヌは、恐怖と警戒が反転した歓喜と侮蔑が込み上げるのを感じていた。

「いいわ、何て素晴らしい光景。

ご気分はいかがかしら、勇者サマ。

強さにうぬぼれて、自分ならば大丈夫だと思いついて、仲間から一人離れてしまったのは、全てあなたの自業自得。

その末に矚り殺しにされる無念を、屈辱を、高らかに謡ってはいただけませんか
と？」

この竜の魔女を恐れなかった者を、その時の自分を縊り殺したくなる程の屈辱を与えてくれた者を、それ以上の屈辱と絶望を与えながら叩き潰す。

そんな高揚に浸りながら、絶体絶命の少年に更なる追い打ちをかけていた黒いジャンヌだったが、その喜びは決して長続きはしなかった。

「……………何よ、その顔は。

あんた正気なの、この状況わかってんの!？」

巨大な邪竜とそれを手足の如く操る竜の魔女、更には複数のサーヴァントに、たった一人で囲まれて。

只人ならばそれだけで全ての望みを失い、崩れ落ちていたとしても全くおかしくはない状況で、それでもリンクは笑っていた。

堂々と背を伸ばしながら、目の前に広がる絶望の光景をも目を逸らすことなく真っ直ぐに見据える、正しく『英雄』のような有り様で。

「それやめなさいよ……諦めなさいよ、絶望しなさいよ!!

何なのよこれ、どうして私の方が追い詰められた気分になってるの!!」

上機嫌に水どころか氷を入れられ、一転した不快感の中で張り上げた黒いジャンヌの怒声が、炎を交えながらまき散らされる。

思い通りにならないことに苛立ち、癩癩のままに喚き散らすその様は確かに、マリーが気付いて指摘したような幼い子供のそれだった。

「絶望しない理由、か。」

それは当然、思った通り、狙い通りに上手くいったからだろうな」

「……何を言っているの？」

「戦力強化を整えたお前が真っ先に潰しにかかるのは、俺の方だと思っていたよ。竜の魔女の誇りにヒビを入れた俺を排除し、自負を取り戻さなければ、お前は先に進めない。」

竜殺しを、ジークフリートを万全にさせてしまうことの脅威を正確に把握していたとしても、譲ることの出来ない優先事項だ。

そしてお前は、現実にもうやって、俺一人のために戦力を集中させてきた。

今から分散させたとしても、立香達が、ジークフリートの呪いを解ける聖人や、他の味方になってくれるサーヴァント達を見つけたすのには間に合わないだろう」
「あんたまさか、自分から囹になったってわけ!？」

リンクの言葉と笑顔の意味を、現状を察した瞬間に、黒いジャンヌの怒りと苛立

ちはかつてない規模で爆発した。

自分の考えや行動が見抜かれていた、嵌められた、利用された。

そんな、屈辱を晴らすどころか追い打ちにしかないような事実、打ちのめされたのは確かだけども。

黒いジャンヌの真の起爆剤は、そことは違うところにあった。

「献身？ 自己犠牲？ 仲間のためなら自分がどうなろうと構わない？

馬つつ鹿じゃないの!？」

あの聖女サマの末路を、身を呈して尽くしても裏切られるだけだっことを知った上で、どうしてそんなことが出来るのよ!!」

「大切だからだよ、身を賭しても構わないと思えるほどに。

お前の親は、お前に憎しみと復讐を刻み込んだ奴は、そういうものを教えてはくれなかったのか？」

「黙れ黙れ黙れ!!

もういい、もうアンタの顔なんか見たくない、声も聞きたくない!!

お望み通り、その下らない自己犠牲の献身とやらを、無様に成し遂げさせてやろうじゃない!!

そいつをぶち殺しなさい、バーサーク・サーヴァントども!!」

黒いジャンヌの言葉を受けて真っ先に飛び出したのは、顔の半分を仮面で覆い、ナイフよりも鋭い両の手の爪を振りかざす狂気のサーヴァント、ファントム・オブ・ジ・オペラだった。

リンクがカーミラを相手に容赦なく繰り広げた、凄惨な光景の印象が脳裏に根強く焼きついていたセイバーとヴラド三世は、ほんの一瞬抱いた躊躇いが明確な出遅れとなった。

ファントムと同じくリンクを知らず、同じ狂気を抱いていた筈の黒騎士……ランロットまでもがその足を止めてしまったのは、狂っていたからこそ、かえって騎士としての本能が研ぎ澄まされていたのだろうか。

人類史に名と存在を刻んだ怪物であり、多くの命を奪った殺人鬼でありながらも、歴戦を経た戦士ではなかったファントムは、目の前の少年の脅威を察することが出

来ないまま、命じられるがままに単独で飛びかかり……その先に、一同は見た。

繰り出された爪を剣の腹を用いて、力ではなく技でいなし、『がら空きになった』のではなく、『がら空きにした』懐へと流れるように飛び込んだ歴戦の技を。

同年代の者と比べても小柄で、華奢な方である筈の体に一瞬で漲り、筋肉と骨を軋ませ、踏み込んだ先の石煉瓦にヒビを走らせた力強さを。

物語の登場人物という元から希薄な存在で、戦闘に優れた逸話があった訳ではなく、決して高位ではなかったけれど。

それでも確かにサーヴァントであった者の、エーテル体の仮初めの命が、ほんの一瞬、ほんの一撃で碎かれた光景が。

居合わせた者達の瞳と意識に、決して忘れられないであろう鮮明さで以って刻み込まれた。

「さっきの発言、ひとつだけ訂正させてもらう」

既に半分ほど光と化して消滅してしまっていたファントムの体を、その核を貫い

た剣を、まるで血でも払うかのように振るい、残っていたエーテルの残骸を散らして。

振り返ったリンクの、熱いようにも冷たいようにも思える瞳に見据えられながら、得体の知れない恐怖と悪寒に竦み上がりながら。

それでも必死に、懸命に、目だけは逸らすまいと努めていた黒いジャンヌに、リンクは情けも容赦も一切無しに宣言した。

「下らない献身だの、自己犠牲だのと、まるで俺が死を覚悟しているようなことを言っていたけれど。

生憎ながら、俺にそんな気は一切無い」

黒いジャンヌの敵意と警戒をその身に集めた時から、この展開を考慮していた。襲撃を警戒しながら、ようやく合流できたジークフリートが呪いに苛まれていて、新たな戦力を得る為にはもう一人サーヴァントを探さなければならないことが判明して。

次の妨害は流石に免れないと思い、囃作戦の実行を決意した。

昨夜の探索で、鞘付きのそこそこ良質な剣を見つけられていなくても。

精魂尽きて、本能が剥き出しになるまで戦うことが、サーヴァントとしての力を目覚めさせるコツだと判明していなくても。

自分は決行を躊躇っていなかっただろうし、生きてまた、立香やマッシュ達に会うことをこれっぽっちも諦めてはいなかったと断言できる。

自分の決意がどうであれ、剣は多少質が良いとはいってもサーヴァント相手の連戦に耐え抜くのは厳しいし、戦いの中で何かしらの力を得られなければ、そこで終わりとなるのが現実なのも重々承知している。

わかっていながらリンクは躊躇わない、何故ならば諦めていないから。

この状況で、あのメンバーの中で、囃の役割を果たしながら生き延びてみせることが出来るとしたら、それは自分くらいだと思っていたからだ。

ここで負ければ命が無いだなんて、世界が終わってしまうだなんて、そんなものは。

「いつものことだ。

それに……勝手に真似をして心配かけたことを、立香達にちゃんと謝らないといけないからな」

多くの人々を、時代を、世界を、幾度となく救ってきた矜持と自信を、密かに胸に抱きながら。

剣を構えて凜と立つ少年剣士に、英雄達は狂った思考で、それでも否定できない程に鮮明に、『勇者』の姿を重ねていた。

VS
ランスロット（狂）

フランス全土を震撼させる竜の魔女が、人理に名だたる英雄達が、たった一人の少年を相手に気圧されている。

そんな空気を読まず、読めず、獣の咆哮のような雄叫びを上げながら飛び出したのは、正しく理性なき獣と化しているランスロットだった。

得体の知れないとはいえ少年一人を相手に戸惑っていたことを、狂戦士に後れを取ってしまったことを舌を鳴らして恥じながら、黒騎士に続いて駆け出す二人のサーヴァント。

ランスロットの猛攻を後ずさりしつつ捌きながら、その動向を横目で確認したり

ンクの動きが、とある地点で急に止まった。

足がもつれでもしたのか、それとも何か他の不具合でも生じたのか。

何であろうと好機を逃がす選択肢は無いと、即座に飛びかかったランスロット。

その得物が振るわれた先から、その視界からリンクの姿が一瞬で掻き消え、驚き足を止める間もなかった次の瞬間、兜で覆われた後頭部を真上から叩きつける衝撃が襲った。

第三者視点からやり取りを見ていた一同の目に、その身が貫かれていてもおかしくはないギリギリのところまで引きつけた攻撃を、背後や真横に飛びのくのではなく真上に跳躍することで避け、虚空で体を縦に回転させた勢いをそっくりそのままランスロットの頭に踵で食らわせた一連の攻防と。

只でさえ形振り構わなかった突撃にそれまで上乘せされた勢いで以って、城砦の床石に叩きつけられたランスロットが、轟音と土煙を伴いながらぶち破った階下へと消えていった光景が飛び込んだ。

「狂化したサーヴァント相手よ、どんな馬鹿力なの!？」

「違う、あそこだけ煉瓦が脆くなっていたんだ!!」

「だとしても、狂化で得た臂力と優れた騎士の技を併せ持っていたあの黒騎士を翻弄し、床が崩れる勢いで蹴り落とした小僧が『在り得ない』ことには変わるまい」

彼はただの少年と侮っていい相手ではないと、規格外の存在と前提して考えるべきとすでに何度も思い知り、心がけてもいるのに。

何度目かの驚愕を英雄達に味わせたリンクが、生まれた隙を逃さずに身を翻して駆けたのは、その先には空が広がるのみとなっている城壁の縁。

一瞬も躊躇うことなく虚空へと身を投げた少年に慌てて駆け寄り、彼が飛び降りたその地点から身を乗り出したセイバーが見たのは、真下に生えていた木の枝を数本犠牲にすることで無事に、一歩間違えれば死んでいてもおかしくはなかった危険な着地をあっさりと遂げていた彼の姿だった。

「地の利を把握している……追い詰めたところか、彼が有利に戦える場所にまんまと誘き寄せられていたのは我々の方だったか」

「バーサーク・ランサー、バーサーク・セイバー……ああもうまどろっこしい、ヴラド三世にシュヴァリエ・デオン!!

そんなところで突っ立って何をやっているの、追って囲んでさっさと潰してしまいなさいよ!!」

「生憎だが、それには応えられぬ。

怪物と堕ち、狂気にすら苛まれた余ではあるが。

碌な戦いが出来ないことが分かり切っている戦場に構わず身を投じるほど、底抜けの愚か者には成りきれておらん」

忌々し気に吐き捨てるヴラド三世の苛立ちの向けどころは、英霊としての矜持を全く折りにかかってくる少年か、それともろくに状況を把握できていないまま無茶ぶりをしてくる竜の魔女か。

彼らの眼下では、思惑通り戦場を整えたリンクと、落とされた階下の壁をぶち破る、最短の距離と時間で戦線に復帰したランスロットの戦闘が仕切り直されていた。それだけならば、戦線に加わって数の利で以って容赦なく押し潰してしまうこと

に、一切の躊躇いも無かったのだけけれど。

現状が、リンクが意図して整えた戦場が、その思惑を心情ではなく実利によって妨げていた。

リンクが敵勢を誘導したのは砦の分厚い壁に囲まれた小さな中庭、ほんの僅かな限られた空間。

覗き込んだまま動こうとしないサーヴァント達に苛立っていた黒いジャンヌでさえ、自身の目でそれを確認した途端に否応もなく納得するしかなかった。

そもそも、大勢で囲んで数で以って圧倒するという戦法は、各々の動きを妨げないだけの広さがあって初めて生かせるものなのだ。

建造物内の区画とその狭さを利用して個々の戦いしか出来ない状況に持ち込まれた上に、相手が味方の存在や共闘の利など考えもしない狂戦士で、只でさえ限られた広さの中を所狭しと暴れまわっているとなれば、味方の攻勢に巻き込まれることが目に見えている戦場にわざわざ飛び込む選択肢などある筈もなかった。

砦を崩して強引に広さを確保するという手も、ファヴニールを使えば出来なくもないけれど。

戦闘と防衛のために建造された砦は、破棄されて崩れかけているとはいっても一般的な家屋に比べれば遥かに頑丈に築かれていて、いくら邪竜とは言っても一瞬で更地に来るような代物ではなかった。

数の有利も、満を持して投入した筈の邪竜も、その力を発揮するどころかろくに活用できない状況にされてしまったことを。

圧倒的な力で叩き潰してしまえばいいと、潰してしまえると思って疑わずにいた小賢しい『策』にまたしても嵌められてしまったことを。

自身が思いついていたことを、流石に認めるしかなかった黒いジャンヌの噛みしめる歯が、尋常ではない音を鳴らす。

それでもまだ彼女の矜持は折れてはいなかった、まだ樂觀していた。

「ランスロットによって弱らされた頃合いを見計らって、ファヴニールで砦を潰します。

いくらあいつが化け物じみているとは言っても、生身の人間が瓦礫の山に押し潰されて生き延びられる筈が無い」

「宜しいのですか、ランスロットを巻き込みかねませんよ」

「この際構いません。」

ランスロットの戦闘力は確かに惜しいけれど、それであいつを確実に始末できるのなら悔いは無いわ」

ランスロットならば、少年を十分に追い詰められる筈だと思っていた。

せっかく導入したファヴニールを土木作業に終始させるのは悔しかったけれど、それを呑み込んで堅実な方針を実行に移しさえすれば、少年の始末は十分可能だと思っていた。

彼の強さと厄介さを認めて観念し、プライドと油断を捨てて形振り構わなくなりさえすれば倒せると。

邪竜やサーヴァント達が本当の本気になりさえすれば敵ではないと、所詮は一人の少年に過ぎないと、黒いジャンヌはまだ思っていた。

そう上手くいくものかと、彼女の思惑に反して内心で密かに舌を鳴らしていたのは、ヴラド三世だった。

ランスロットの猛攻を懸命に捌き続けている少年の姿を崖っぷちでの善戦と捉え、彼の心身が限界を迎えるのはそう遠くはないと黒いジャンヌは考えているらしいが、彼は違った。

色眼鏡を捨てて、狂化されてもお失われてはいない武人としてのまっさらな目と心で、目の前で繰り広げられる戦闘を改めてよく見てみれば、自分と戦っていた時の彼がその真価を全く発揮していなかった事実がよく分かる。

彼の精神は、激戦の真っ只中で集中して研ぎ澄まされてはいるものの追い詰められてはいない、切羽詰まった焦りや焦燥は感じられない。

名のある聖剣や神剣と呼ぶにはほど遠い剣を巧みに繰りながら、ほんの僅かな接触のみで攻撃の方向を巧みにずらし、最小限の消耗のみでランスロットの攻撃を捌いてみせている彼の余力は、傍目で見た印象から想像したものよりも遥かに余裕を持って保たれている筈。

決して少なくはない割合で『そんな馬鹿な』とは思いながらも、考え過ぎの想い過ぎだと完全に断ずることがどうしても出来なかった予測が裏付けられたのは、そのすぐ後のことだった。

「成る程、わかった」

狂戦士の形振り構わない猛攻を捌き続けて、とっくに精魂が尽きていてもおかしくはなかった筈の少年があっさりと言い放った言葉の意味を、黒いジャンヌ達が理解するよりも先に。

ランスロットが攻勢に回り、少年は耐え忍ぶことに終始していたかのように見えていた、それまでの戦闘の様相が一変した。

「あんたの動きはその場、その瞬間での『最適解』なんだ。

それがわかってさえいれば、対処法はいくらでもある」

生まれた隙や気付いた好機を見逃さずに、最も効果的な攻撃を、最も効果的な形で食らわせる。

繰り出される攻撃の危険性を瞬時に判断、選別し、受ける痛手が最も少なくなる

形で対処する。

そんな基本を、心身に沁みつくまでとことん突き詰めた『正攻法』を、理性や常識に囚われない獣の本能で揮うことが、狂戦士ランスロットの強さの正体であった。しかし彼は、莫大な戦闘力と引き換えに人の理性を捨てたが故に、戦いの行く末を大きく左右する重大な要素のひとつを捨ててしまっていた。

今だってそう……彼はただ、強烈な勢いと殺気を込めながら放たれた攻撃を、それが向けられた箇所も含めて考慮した本能が、危険と判断して最優先で反応した。そんな、至極いつも通りの行動を取っただけ。

だというのに、竜の魔女達の目には、鎧の足の継ぎ目を切り裂かれ、そこから血を撒きながら堪らず身をよろめかせてしまった、ランスロットの在り得ない姿が飛び込んだ。

「本気の殺気と全力を込めて、あからさまな急所を狙われたものと、まともに受けても命に係わるような傷を負う訳じゃないところへとついでに放たれたものでは、同じ攻撃でも対処の優先度が異なるのは当然だ。

だけど……元のとほ言わぬ、ほんの欠片でも構わぬからあんに理性が残ってれば。

感覚と本能のみで動いてなんていなければ、こんな判断ミスはありえなかつただろうな」

そう言つて苦笑したリンクの利き手には、必殺の一撃として放たれながらもランスロットの瞬時の反応によつて防がれ、滑らかな断面を披露してしまつてゐる……半分ほどの長さになつてしまつた、そこで拾つた枝が握られていた。

普通に食らつていたとしても、鎧に阻まれて先が潰れるのみで終わつていた筈のそれを、込められた本物の勢いと殺氣のみに反応して最優先で防いでしまつた。

それによつて、意識こそ片手間ながらも、狙いとしては間違ひなく本命だつたもう一方の攻撃を防ぐことが出来なかつた。

これこそが、戦闘の最中でリンクが気付いたランスロットの弱点。

理性を捨てて本能の獣と化してしまつた今の彼には、ある意味で正当に、馬鹿正直に、目の前で行なわれていることのひとつひとつに、その時点で得られる感覚重

視の情報のみを基準に、その瞬間における『最適』な判断を下すしかない。

行動の裏を読み合い、刹那のやり取りの中で騙し合う、今この時ではなく数瞬の先を睨み合う戦闘の『駆け引き』というものが一切出来なくなっているのだ。

しかしそれは本来ならば、例えば気付いたとしてもそう問題とされるようなことではない筈だった。

正攻法とは基本をとことん突き詰めたものの、故に大抵の敵に対して通じる上に、明確かつ致命的な弱点というものが存在しない。

それを、底上げされた力と最上の騎士の技で以って、最適解で揮い続けることが出来るという圧倒的な利点は、意思疎通や複雑な命令が出来ないなどの数多ある欠点の全てを十分補って余りあるものだった。

咄嗟の捌め手に弱いと今更判明したところで、暴走気味に暴れまわっている狂戦士を相手にフェイントをしかけようなどと考えられる者が、それを実行した上で成功させられる者が果たしてどれだけいることだろうか。

ちよっとやそっとの半端な策を巡らせようと、それを全て正面から叩き潰す圧倒的な殲滅力こそが、狂戦士というクラスの最大の特徴であり利点なのだから。

それを可能としてしまえる程の戦士が現れてしまったことこそが、ランスロットにとってはあまりにも不運な巡り合わせだった。

浅かったとは言えども足を切られ、痛みによる阻害ではなく純粋な性能の低下によって機動力が僅かに衰えた隙を見逃さず、リンクはそれまでの防戦が嘘だったかのような猛攻に反転した。

敢えて動きを鈍らせ、守りが薄い個所を作り、狙い通りの攻撃を誘い。

力や意識の大半を囷の攻撃に込めて警戒と反応を促し、そうして生まれた隙を逃さず。

鎧の継ぎ目を裂ける程度の、最低限の力が込められた本命で以って、少しずつでも確実な手傷を蓄積させていった。

平常時でも無茶ぶり扱いをされそうな繊細な技術と判断を、ほんの一瞬でも遅れれば、たった一度でも間違えれば死ぬという極限の状況で求められて。

回りすぎた思考が焼き切れそうになる程の、限界まで研ぎ澄ませた集中力の中で、リンクはついに求めたものを掴んだ。

隙を作り、わざと誘った攻撃をギリギリのところでかわしたその瞬間に、この場

が深い水底に変わってしまったかのよう。

あれだけ早い上に力強かったランスロットの動きが、膨大な水の重さに妨げられてしまっているかのように遅くなり、その一挙一動が容易く見て取れる。

時間の流れが可視化した世界に飛び込んだかのようなそれは、激戦の只中によって研ぎ澄まされた極限の集中力と、それによって得られる膨大な情報を瞬時に処理出来る思考力、更には瞬間的とはいえ数倍の出力を可能とし、かつ耐えられるだけの身体能力が実現させた、偽りの時間操作とも言えるものだった。

時間の流れが遅くなった中で、自分だけが変わらず動ける……そんな錯覚の世界で、リンクは誘いも陽動も無く、真正面から全力で踏み込んだ。

最初から最後まで、全てを余さず見ていた筈の黒いジャンヌ達さえ、何があったのか、何が起こったのかを、正確に理解しきることは出来なかった。

何度目か、繰り出された攻撃をまたしても紙一重でかわしたリンクが強烈な一步を踏み出した、その次の瞬間には。

内側で盛大に噴いたらしい血をあちこちの隙間から滴らせながら、漆黒の甲冑を纏った体が崩れ落ちたのだから。

消滅していない以上まだ生きてはいるのだらうけれど、鎧越しでも十分に把握できる程の傷の深さは、それが時間の問題だということを明確に物語っている。

優れた武勇の逸話を持ち、狂化されたが故に遊びも手加減もなく……自分を本気で殺そうとした、戦闘特化のサーヴァントを相手の死闘を、少年は生きて戦い抜いた。

武器の強さに頼った訳でも、特別な加護に守られた訳でもない、正真正銘の彼自身の技と力で以って。

体が小刻みに震えるのを止められない黒いジャンヌは、自分が今恐れを抱いているのか、それともはや突き抜けて感動を覚えているのかすらも解らなくなっていた。

あの少年は、未だ必死の抵抗を続ける一部のフランス軍や、今この時にも戦力を整えつつあるサーヴァント達の対抗勢力をも上回る脅威だと。

どんな犠牲を払ってでも、今この場で確実に始末をつけるべきだという考えを狂った思考の中で共有させたヴラド三世とデオンが、戦闘の果てにファヴニールによって諸とも葬られることも覚悟の上で、少年が立つ眼下の戦場へと参るべく、城

壁の縁に足をかけた……その時だった。

今この場での登場を誰一人として予測していなかった者が、城壁の一角に突如躍り上がり、そこに自身の旗を翻させたのは。

「リンクさん、ご無事ですか!？」

フランス王家の輝かしさを思わせるガラスの馬に跨り、仲間の身を一心に案じながら、ここまで懸命に駆けてきたことを伺わせる必死の表情と荒い息は、これぞ正しく救国の聖女と謳うべき美しさで。

好意でも、悪意でも、その有り様に一時目を奪われてしまった一同は、気付かなかった。

「A……Aa……………ARTHUR……………R……………」

決定的な深手を負い、このまま消滅するのみの筈だったランスロットの。

獣のように吠えるばかりだった口が言葉を紡ぎ、力の込められた指先が土を抉り、兜の奥の瞳に再度の光が灯ったことに。

反転攻勢

「昨夜の砦跡だ!!

彼ならばあそこに地の利がある上に、人氣が遠のいていて誰かを巻き込む危険性も少ない!!

……すまない、これは俺の失態だ。

素人同然であったり、本来ならば非戦闘員の筈であったりする者が大半を占めている中で、仲間を失わせないまま勝利を得るためにはどうするべきかと、彼はそんなことを考えたのだろう。

戦場を知る者として俺はそれに気付けた筈だった、むしろ気付くべきだった。

呪いに苛まれて本調子ではなかったなどと、そんなことは言い訳にもならない。

……………本当に、すまない」

『責任を取って死ぬ』と言われれば、即座に腹を切りそうにすら思わせてしまう程の表情を浮かべていたジークフリートの姿は、かえって立香に冷静さを取り戻させた。

「……ジークフリートの謝罪を受ける、多分それは自虐じゃなくて事実だから。

その分はこれからの頑張りで取り戻してもらおう、だからそういつまでも落ち込むな!!

呪いが解けて万全になったら、それまで動けなかったのは休憩だったと思うくらいに、失敗が帳消しどころか手柄がガツンと上乗せされるくらいに頑張ってもらおうかな!!」

「リンクが自分を囷に敵を引きつけたのは事実だろうけど、でも俺は、あいつがそれで死ぬつもりだったとは思えない!!」

仲間のために自分を犠牲にするだなんて、最期を美しく飾ろうだなんて、あいつはそんな綺麗で後ろ向きな覚悟を決めるような奴じゃない!!

色々な意味で手段を選ばなくて、どんなに絶望的に思えるような状況でも諦めずに、立ちはだかる困難を全部ぶっ潰してみせるような気持ちのいい強引さで!!

どこに行けばいいのかも、何をすればいいのかも分からなかった俺達を、ここまで連れて来てくれたのがあいつだから!!」

「ジャンヌ、マリー、ゲオルギウスさん!!」

急いで合流して下さい、戦力を整えた上でリンクの助太刀に向かいます!!

あいつはまだ生きている、今も生き延びようとしている!!

だから、一刻も早く助けに行かないと!!」

必死に吐き出したその言葉に込められていたのは、確信ではなく不安だった。

確かに信じている友人の強さと実績を反芻し、『だから大丈夫だ』と自分自身に言い聞かせることで崩れそうな膝を保ちながら、懸命に前を見据えている。

そんな立香の姿は、清濁を併せて多くのものを見て来たであろう英雄達からしても、十分すぎる程に眩く尊いと思えるほどのものだった。

立香の言葉と想いに応え、動き出そうとしたサーヴァント達だったけれど、事はそう単純にはいかなかった。

一同が気付いた頃合いを見計らったかのように現れ、行く先に立ち塞がった者達がいたから。

「あいつとまた顔を合わせなければならぬ事態をやっとの思いで回避してみれば、その先であれに負けず劣らず不愉快な存在と鉢合わせるだなんて……何なのよこの特異点は、私何か悪いことでもしたかしら!？」

「あっ…アンタは、カーミラ!!」

「ようやくお目見えできたね懐かしき御方、白雪の如き白きうなじの君よ。

僕とあなたは、やはり特別な縁で結ばれている。

だってそうだろう……処刑人として同じ人を二度も殺すだなんて、これが運命以外の何だと言うんだ」

「……あなたの顔は忘れたことがないわ、気怠い職人さん。

でも、ごめんなさい。

私は今とても急いでいて、あなたとお喋りをしている時間は無いの。

大切なお友達を助けに行かなければならないの、そこを退いてはいただけないかしら？」

「残念だがそれは出来ない、竜の魔女が僕らを送り込んだのは君達の足止めをする為なのだから。

心配することはないよ、友人とはまたすぐに会える。

亡骸を見せてくれる程度の気遣いならば竜の魔女も持ち得ているだろうさ、どの程度綺麗に残っているのかまでは生憎と保証しきれないけどね」

そうして、二つの望まない戦闘が始まってしまった。

無慈悲に過ぎ行く時間に、身を焼かれているかのような焦燥によって余裕が失われてしまっているせいで、本来の実力が発揮出来ない。

そんな、向こう側の目的が完璧に果たされてしまっている状況を、打破すべく行動に出た者達がいた。

「ジャンヌ、提案があります。

私の馬をお貸しします、だからあなたは一足先にリンクさんの下へとお向かいになって。

強い護りの力を持つあなたとリンクさんならば、他の皆が駆けつけるまで、竜の魔女達を相手に持ち堪えることも出来る筈」

「何を言っているのですかマリー、戦闘では宝具頼りのところが大きいあなたが肝

心のそれを手放すだなんて!!

殿ならば私が努めます、リンクさんの下へはあなたが向かってください!!」

「ダメよ、あなたも本当はわかっているのでしょうか？」

彼は……サンソンは私を決して逃がさないわ、望み通りこの首を落とすその時まで。

それは逆に言えば、私さえ逃がさなければ、足止めを突破する者がいたとしても彼はそれを見逃すでしょう。

ジャンヌ、私の大切なお友達、あなたを信じているわ。

だからお願い……リンクさんを、私達の大切なお友達を、どうか助けに行ってください」

「ああもうっ、どいつもこいつも馬鹿ばかり!!

友達がピンチなんですよ!?

それをわかっていながら何をモタモタしているわけ、おかげで頭が痛いったら無

いわ!!

そもそも最初から、アタシとこいつの因縁に横やりを入れられている時点で気に食わなかったのよ!!」

「横やりとは何のことですか、ランサーさん!？」

カーミラと敵対したのは、私達の方が先で……」

「察しが悪いわねえ、仕方ないから教えてあげるわ!!

アタシの真名はエリザベート、鮮血魔嬢エリザベート・バートリー、いずれ血の伯爵夫人へと至る者!!

あまりにも愚かな、大嫌いな未来の自分を殺せる、今のアタシはそんな最大のチャンスの前にしているの!!

それをこれ以上邪魔するようならアンタ達の方から殺すわよ、いいからさっさと行きなさい!!」

その心意気を汲んだ上で、その者達をただの捨て駒とはさせない為に動いた者達

もいた。

「案ぜられることありません聖女殿、妃殿下は私がお守りします。

守護を司る者、聖ゲオルギウスの名にかけて、必ずや。

そして、万事上手くいった暁には、くだんの友人をご紹介しますか。

かの人を想うあなた達の様子を見ているだけでわかります、とても素晴らしい方なのでしょ

う」……ええ、それはもう。

ありがとうございます、聖ゲオルギウス様」

「ああもう最悪だよ、何でこの僕がよりにもよって騒音発生器のサポートなんてしなきゃいけないんだ!!」

「トップアイドルに対して何なのよその言い草は、別に頼んでないわよ!!」

と言うか本当に訳が分からないわ、何でアンタ残ったりしたわけ!？」

「昨夜過ごした砦と言っても君はその場所を知らないだろう、一人残していったら後で合流出来ないじゃないか」

「……………何よそれ、馬鹿じゃないの？」

アタシはカーミラと同じ反英雄、倒されるべき怪物よ。

アタシ知らないわよ、勝手にそんな真似をしたせいで、アンタがマスターに見限られたって!!」

「そのマスターの意向を汲んだ結果がコレなんだよ。

なかなか踏み出せずにいた理由が、君を一人で置いていくのを躊躇っていたからだってことに気付いてなかったの？」

後でちゃんと話してみなよ、反英雄だの怪物だのって真面目に難しく考えていたのが馬鹿らしくなるからさ」

そんな流れを経て、友人に託された宝具に跨り、偉大な先人に背を押されながら駆けつけたジャンヌは、徒歩な上に本調子にはほど遠いジークフリートを同行させている立香達の組よりも先に、目的の砦近くへと辿り着いた。

道中のジャンヌには、少し離れたところで一旦足を止め、立香達と合流するのを待って戦力と態勢を整えた上で動くことを、堅実な選択肢として視野に入れていたのだけだ。

そんな悠長な考えは、遠目にもわかってしまう程の異変を目の当たりにした瞬間に吹っ飛んだ。

ワイバーンや骸骨兵などはその尾を振るだけで潰せてしまえそうな漆黒の邪竜が、砦の一角にその巨軀を乗り上げさせている光景に加えて、未だ遠い故にかすかながらも、凄まじい戦闘の音までもが聞こえている。

「リンクさん!!」

邪竜がこの状況を静観している違和感を無意識にすっ飛ばして、戦闘音が聞こえるからには彼はまだ無事なのだという喜ばしい事実のみを受け止めて、ジャンヌは残り僅かな行程を全力で駆けた。

宝具の馬だからこそその早駆けと跳躍で砦の一角へと一息で躍り上がったジャンヌ

は、状況を把握すると同時に如何様にも動けるよう、宝具たる旗を振りかざしながら声を張り上げた……その次の瞬間。

見開かれたジャンヌの視界は、見知らぬ漆黒の鎧騎士が獣の咆哮を上げながら襲いかかってきた、そんな想定外の光景で埋め尽くされていた。

「ジャンヌ、逃げろ!!」

聞こえてきたリンクの声は予想以上に元気そうで、間に合ったと、無事で良かったとホッとして。

眼前に迫った黒騎士の体が鎧越しでも分かるほどの血に塗れていることに気がつき、一人でサーヴァントを相手に戦った上に、これ程の痛手までも与えていたのかと驚き、彼はやはり凄い人だと再認識して。

何故か異様な速さで回るだけでなく、冷静な上にずれている己の思考回路に、時間が遅くなっているかのような謎の感覚に疑問を抱き、そして気付いた。

これは、死という絶対の危機に瀕した生命が、その間際でどうにか活路を見出そ

うとしている、そんな生存本能が生み出したほんの僅かな最後の猶予だと。

この感覚を、命の危機を何度も乗り越えてきたような戦士ならば、この長いよう
で実際にはほんの一瞬でしかない猶予を生かし、回避なり反撃なりに転じてみせた
のだろうけれど。

旗持ちであり、指揮官であり、多くの兵を鼓舞して勝利へと導いたカリスマの持
ち主ではあっても、歴戦をその身で乗り越えてきた戦士ではなかったジャンヌに
は、それはあまりにも酷な話というものだった。

ジャンヌを守り、その力となるという命を主から下された硝子の馬が咄嗟に割つ
て入りはしたものの、美しくはあっても頑強だとは決して言えないその身では、最
後の命を燃やしながらの騎士の攻撃を防ぐことは出来なくて。

硬質な音を響かせ、光を反射して煌く大小の破片を散らせながら、殆ど衰えるこ
とのなかった黒騎士の攻撃は、防ぐことも避けることも出来なかったジャンヌの体
にもろに叩き込まれた。

一瞬で霞み、遠のいた感覚と意識の中に、辛うじて飛び込んでくるものがあつた。
死に体の攻撃では致命傷までは至らせられず、ならば止めの追撃をと得物を振り

上げた黒騎士の兜とその下の首が、光の一閃が世界を裂いた後に、体から離れて零れ落ちた光景が。

エーテルの光と化して瞬く間に消滅した甲冑の向こうで、剣を振り切った体勢のまま息を荒げていたリンクの姿と、その手に握られていた剣の、薄っすらと青く輝く美しい刀身が。

何の前触れも無く轟いた邪竜の咆哮が、頑強な砦が瞬く間に崩壊していく轟音と衝撃が、自分達を目がけて食らいついてくる杭のような牙が並ぶ口が、そんな状況で逃げることも避けることも出来ない自分へと懸命に手を伸ばすリンクの姿が。

ジャンヌが最後の意識の中で見て、聞いて、そして覚えていた全てだった。

竜の奮闘

『ますたあ、このまま真っ直ぐで宜しいのですか？』

「うん、大丈夫!!」

ありがとう清姫、君がいてくれて本当に助かったよ!!

無理させてごめんね、俺が出来ることなら後で何でもお礼をするから!!」

『お礼なんていりませんわ……私はますたあのお役に立って、ますたあに喜んで頂けるだけで十分に幸せですもの。』

で、でも、その上で敢えてご褒美を頂けるのならば……あの、添い寝などをお願いできれば、もう思い残すことはないのですけれど』

「そ、添い寝って……女の子相手にそれは流石に………今の姿でも良ければ、それなら何とか」

《良くないよ、むしろ大問題だよ、傍から見れば捕食寸前シーン以外の何ものでもないからね!》

僕嫌だからね、立香君がいつ絞め殺されるかそれとも頭から丸呑みにされるか分からない不安に苛まれながら眠れない夜を過ごすのは!!」

『失礼な、私が大切なますたあを食い殺すような騷のなっていない龍に見えるのですか?』

《愛する人を、裏切られた怒りと憎しみのままに焼き殺したのが君の逸話じゃないか!!》

「落ち着いてよドクター、それは相手の男が清姫の真剣な気持ちを適当にあしらったからだろ?」

清姫が怒るのは当然だと思うんだ……まあ、その末に殺しちゃったってのは確かに怖いけど。

素の清姫は間違いなく良い子だし、良い人だけど怖いってのは他のサーヴァント達にもよくあることだし。

嘘をつかないで誠実につてのが清姫がマスターに求めるもので、それに応える限り力を貸してくれると言うのならば、俺はそれを信じようと思う」

『ああ、ますたあ……嬉しいです、私嬉しい。』

この姿を目の当たりにして逃げるところか、頼りにして下さって、信じるとまで言って下さるだなんて。

清はどこまでも、いつまでもお供をいたしますわ……っ！』

「ちよっ…清姫、嬉しいのはわかったからそう無暗にくねらないで!!」

「蛇の体の上でバランスを取るのは結構難しいんです!!」

『あらごめんなさい、私ってばつい気が昂って。』

掴みどころが無くて申し訳ありませんが、頑張ってしがみついて下さいな』

かつて愛する人を焼き殺した忌々しい大蛇の姿で、それでも清姫の心はかつてない程に満ち足りていた。

回避できなかった戦闘の中で昂り、火を吐く大蛇へと轉身して敵を一掃した清姫に、一瞬唖然と立ち尽くした立香は、誰一人として予想しなかった言葉を開口一番で吐き出した。

『ごめん清姫、乗せて!!』

女の子相手に失礼だとは思いうんだけど、緊急事態なんだ!!』

敵を一瞬で消し炭にした大蛇をそれでも『女の子』と言い切って、『竜』を相手に条件反射で警戒したジークフリートを『味方だから!』と落ち着かせて。

本でしか見たことがなかった蛇の現物、それも超特大サイズをいきなり前にしたことと硬直してしまったマシュを、ペットショップの触れ合いコーナーで触ったことがある、ひんやりスベスベして気持ちよかった、顔だって結構可愛いと、実体験を用いながら一生懸命に宥めて。

成り行きでしかなかった同行で、冷たい表情と態度を取っていた清姫の瞳と表情が一転して愛と喜びの炎で滾り出すさまは、普通に見ているだけで気づけるほどに解りやすいものだった。

そうして、切羽詰まっているが故に何の嘘も飾りもない、誠実な本心を真正面からぶつけることで信頼を……通り越した熱く重すぎる熱情を得ることに成功した立

香は、新たな仲間の献身的な協力によって、大柄な負傷者を抱えている状況にもかかわらず、スタートダッシュの遅れを十分挽回できるほどの速さで行程を縮めることに成功していた。

この調子ならば、マリーから宝具を借りて先行したジャンヌに追いつけるかもしれない。

半々の期待と焦燥に駆られつつも、清姫が精一杯に急いでくれていることを理解して、叫びたい気持ちを呑み込みながら。

懸命に急いだ立香達の目に飛び込んだのは、自分達が間に合わなかったことを突きつけられる絶望的な光景だった。

長い首と尾を振り回し、鋭い牙が並んだ口から魂ごと竦ませるような咆哮を上げているのは、名高き邪竜ファヴニール。

忘れようにも忘れられない怨敵の姿を目にしたジークフリートが、思わず身を起こしながらその名を叫んだ。

たった一晚ではあったけれど、仲間達と過ごす心穏やかな時間を守ってくれた岩が、土煙を漂わせながら無残な残骸と化している。

竜の巨大な四肢が踏み締めているそこに、その瓦礫の下に仲間達が今もいるのではないかという不吉な想像を、立香達はその脳裏に過ぎらせてしまった。

「リンク、ジャンヌ!!」

「邪悪なる竜は失墜し、世界は今落陽に至る」

四肢が割かれるような苦痛に構わず、剣を抜いたジークフリートの口から宝具発動の詠唱が紡がれ始める。

呪いに苛まれる体を压した彼の気概を察した清姫は、それに応え、十分急いでいた体に更なる鞭を打った。

少しでも距離を詰め、少しでも多くの痛手を敵に与えられるようにという献身に氣付いたジークフリートは、彼女を一時でも竜種と恐れて疑ってしまったことを悔いて詫びながら、今の体で出せるだけの力を込めて竜殺しの剣を振り下ろした。

「撃ち落とす、『幻想大剣・天魔失墜』!!」

振り抜いた剣から放たれた閃光の軌道は確かにファヴニールを捉えていたのだが、放つ地点がやはり遠すぎたのか、迫る危険を察知して飛び立ったファヴニールの尾の先を掠めるに留まってしまった。

「ジークフリート!？」

「俺に構うな、行け!!」

今の一発で力を使い果たし、体勢を崩したジークフリートへと咄嗟に手を伸ばそうとした立香だったけれど、道連れを増やしかねない危険な気遣いは当の本人によって拒まれた。

高速で走っている乗り物から生身で放り出されるという、本来ならば立派な大事故である筈の事態を看過してしまいがちながら、彼は強い護りの力を持っているのだから大丈夫だと自分自身に言い聞かせながら、立香は必死に前のみを見据える。

ジークフリートの攻撃を受けて空へと逃れたファヴニールが降りてきて、再びの

戦闘となる可能性も考えた立香達の危惧は、ファヴニールが予想に反してあっさりと飛び去って行ってしまったことで杞憂に終わった。

その背に数人分の人影が見えた気もしたけれど、今はそれを気にかけている場合ではない。

ようやく辿り着いた砦跡、今や本当にその言葉通りの場所となってしまうた瓦礫の山へと、ほんの僅かな希望の光を懸命に握りしめながら踏み入った。

「リンクさん、ジャンヌさん!!」

「いるんなら返事をしてくれ!!」

声が返ってくることを、見つかることを望みながら、それと同じくらい、見つからなければいいとも思っていた。

あんな恐ろしくて巨大な竜に襲われた場所になんて居ないでほしいと、どこか安全なところに避難してくれていれようと。

全くの相反する想いを、どちらも同じくらいに強く抱くという奇妙で不可解な感

覺を味わいながら、必死に声を張り上げる。

その真剣な気持ちに応えるかのように、研ぎ澄ませていた立香達の意識と耳に、少し離れたところの瓦礫が不自然に崩れる音が聞こえてきた。

急いで駆け寄ったその場所に、立香達は希望と絶望の光景を見た。

「……………立香さん、マッシュさんも？」

「ジャンヌさん、良かった……………っ!!」

「あなたがジャンヌですか。

運の良い方ですね、大きな瓦礫が支えとなって出来た空間にすっぽりと入り込んでいたおかげで、大した怪我も無さそうで。

それはそうと、確か仲間はまだもう一方いらっしやったのでは？」

「そっ……………そうです、リンクさんはどこですか!？」

黒い甲冑のサーヴァントが、ファヴニールが突然襲いかかってきたんです!!

リンクさんは、私を守ろうとして……………」

ぼやけていた意識がハッキリすると同時に声を上げたジャンヌは、気づいてしまった。

立香達が沈痛な表情を浮かべている理由に、自分の手が無意識に握りしめていたものの正体に。

リンクが初対面の時から身に着けていた外套……特に何の変哲もなく、時にフーアの役割も果たしていたそれが、半分ほどの大きさになってそこにあった。

歪な切れ目が、鋭く巨大な牙に噛み千切られたもののように見えてしまったのは気のせいなどではないと。

悲しみも絶望も突き抜けたことでかえって落ち着いてしまった思考が、残酷なほどの冷静さで告げていた。

「お帰りなさいませ、ジャンヌ。」

首尾は如何ほど……その様子では、わざわざ尋ねるまでもありませんでしたな」
「ええそうよ、私の復讐を愚弄した愚か者をファヴニールの餌にしてやりました。
終わってみれば何とも呆気なかったわ、私ってばどうしてあんな奴を気にかけた
りしたのかしら。」

……………ええそうよ、あんなものはただの気の迷い。

竜の魔女が、この私が、たった一人の子供に怯えさせられるだなんてあり得ないんだから」

「ジャンヌよ、如何なされました？」

「いいえ、何でもありません……そうよ何でもないの、あいつはもういないんだから気にすることなんてないの。」

早々に忘れなさい、気持ちを切り替えるのよジャンヌ・ダルク。

……………フランス中のワイバーンを集めます、あの目障りな聖女一行をさっさと片付けて殲滅の遅れを取り戻すわ。

それとジル、あなたの海魔を100匹くらい召喚して寄こしてくれませんか？」

「構いませんが、何に使われるのですか？」

「ファヴニールが一向に落ち着かないの、もうこの際だから適当なところで暴れさせてやろうと思ひまして。」

……一人食べただけであそこまで興奮するなんて、よほど血に飢えていたのね。少し温存させすぎたかしら」

とある理由から、人生経験と認識の蓄積が極端に少ない黒いジャンヌは、分からなかったし思いもよらなかった。

生物を最も凶暴にさせる、形振り構わなく暴れさせるのは、破壊欲でも加虐心でもなく、自らの生存を脅かすものを間近にしてしまった恐怖だということ。

瞳に、脳裏に焼き付いて離れない青い刀身の幻影を振り払うかのように暴れるファヴニールの牙は、未だ誰の血にも濡れていなかった。

立香の蛇に関する所感は私自身のものです、爬虫類可愛い。

「やべえ、何か食われたと思われてる……体内ダンジョン期待されてる、どうしよう」

……と少し悩みましたが、コメントを参考にはしてもそれで作品をブレさせてはいけないと思ひまして、元々のプロットで行きました。

今後とも、期待の全てを掬い、応えていくことは多分出来ないと思いますので、読者の皆様はどうかご了承ください。

コメントそのものに関して、いつも楽しみにさせていただいています。

決戦前夜の語らい

その後立香達は、遅れて合流してきたマリー達とも力を合わせて、ギリギリまで周辺の搜索を続けたのだけだ。

それも、日暮れを見計らって切り上げさせられた。

まだ全部を探し切った訳ではないと、必死になって追い縋ろうとする立香とマシューを、ロマニは有無を言わず一蹴した。

いつも優しく穏やかな彼が、あり得ないような厳しさを発揮することができたのは、それが立香達の為だったから。

見つからないままならば希望が持てる……実は自分達が辿り着く前に逃げてい

て、どこかで無事ではいるのではないかと思うことだってできるから。

事態を楽観することができなかったロマンは、希望の可能性を消さないことを、立香達の心を少しでも慰められる余地を残すことを選択した。

《……………ごめんね、リンク君》

君を想っていた立香達の気持ちは本物だと、それを諦めさせたのは自分だと、恨むのならばどうか自分だけにして欲しいと。

許してもらうためではなかった謝罪の言葉は、あまりにも虚しく消えていった。

ジークフリートの解呪が無事に行われ、仲間が増えたことで戦力が整い、オルレアンこと竜の魔女の本拠地への進撃を決めた夜。

昨日共にいた人が、今日も当たり前にいる筈だった人の姿が無いという現実が、古参組の者達を落ち込ませている。

その一人だったマシュが、少しでも気持ちを落ち着かせようと、人気の多い野営地を離れて少し歩いた先。

森から抜けた開けた場所にて、彼女は思わぬ人の姿を見つけた。

「アマデウスさん？」

「マッシュじゃないか、君も夜の散歩かい？」

「はい……少し、一人になろうと思ひまして」

「相当参っているみたいだなあ、マリアもだよ。」

結局一度も名前で呼んでもらえなかったって、もう自分は誰かと約束なんてしないほうがいいんじゃないかって。

……馬鹿じゃないかって言ってやったよ、最初から叶える気もない約束なんて誰がするもんか。

大切な約束だからこそ守ろうと頑張って、だからこそ、それが叶えられなかった時に辛くなるんだってのに。

それをまるで、呪いでもかけているかのように言うなんて……約束を守ろうと努力した人や、その想いに対してあまりにも失礼すぎる」

一見厳しく、突き放しているかのようなその物言いは、アマデウス自身の想いも込められた、分かり辛い思いやりに満ちたもので。

それを感じ取ったマシュが、気落ちしていたことをほんの一瞬だとしても忘れて笑みを浮かべてくれたことに、アマデウスは密かに安堵した。

（この調子なら、明日は問題ないかな）

立香やジャンヌ達は、恐らく大丈夫。

今夜一晚は落ち込むとしても、決戦の朝を迎える頃には、避けることも目を逸らすことも出来ない現状へと立ち向かう為に、自分達をここまで導いてくれた人の行いを決して無駄にしない為に、前を見据えて立ち上がるようになっていくだろう。

やかましくて、少しずれていて、それでも元氣付きたいという気持ちには紛れもない本物だったエリザベートと清姫の、ゲオルギウスのさりげないフォローを受けながら一生懸命に皆を励まそうとしていた姿と心意気が、アイドル活動というよりは

漫才のようだった陽気で笑えるやり取りが、野営地を抜け出してきた時点で既にあの程度の効果を發揮していたようだし。

塞ぎ込むあまりに、周りでそんな賑やかなやり取りが繰り広げられていたことにも気づいていなさそうな、例え一時だとしても切り替えることが下手そうなマッシュだけが心配だったのだけれど。

それも大丈夫そうだということを確認できたアマデウスは、不安要素の最後のひとつが解消したことにほっと胸を撫で下ろす。

そう、『最後のひとつ』……皆の落ち込みが杞憂であることを、アマデウスは確かな証拠もないままに、それでも一点の疑いもなく確信していた。

だからこそ抱いていた、後悔や自責の念に代わる不満や苛立ちを、少しの間だったけれど偽りない問答を語り合ったマッシュが野営地の方へと戻っていった頃を見計らって、昨日の夜の意趣返しも込めて、少し離れたところの物陰へと遠慮なくぶつけてやった。

「さてと……そこに隠れてる奴、何か言いたいことはあるかい？

許す気も納得する気も無いけれど、とりあえず聞くだけはしてやるよ」

「……何も言わずに勝手な行動をしたのは確かに悪かったよ、ちゃんと合流して謝るつもりだった。」

囃の方はともかく、身を隠すことになったのは俺だって不可抗力だったんだからな？」

「不可抗力って、どんな想定外があれば君ほどの実力者がそんなことに……………」

「……アマデウス、どうかした？」

「あ、いや……………どうやら無事に能力を開放できたみたいだね、何よりだよ」

「まだまだ万全には程遠いけどな。」

それでも、竜の魔女やその配下達を相手に、問題なく戦うことくらいは出来ると思う」

「だとしたら、皆を悲しませるのを承知の上で、敢えて身を隠さなければならなかった理由ってのは一体何なんだい」

「いくら俺でも、目の前に居ない敵は倒せないってことだよ」

「……………あゝ、つまり？」

君の正体と、君が健在だということが相手方にバレると、尻尾を巻いて逃げられると？」

「魔女は気合いとプライドで踏ん張るかもしれないけれど、竜の方は間違いないだろうな。」

ああいった邪気の塊から生じたような存在に対して、俺の剣は天敵もいいところだ。

それをいきなり目の前に突きつけられて、初めてかもしれない本当の命の危機を感じたことで恐慌状態に陥って……そこで対象を排除する方向に動いたのは、それまでのあいつが圧倒的な強者の側で、そういう時にどうすることが最善なのかを知らなかったから。

だけど、今のあいつは既に学んでいる。

敵わないと思う時には逃げればいいんだという、命あるものにとっての当たり前生存戦略を。

機動力に関しては、向こうの方が圧倒的に上なんだ。

そんなことになったら戦況は一気に泥沼化して、収められるまでに時間がかかり、それまで余計な犠牲者が出続けることになる。

それをさせない為には、俺はもういないと思わせて油断を誘った上で、一気に攻め切るしかない」

「……何か、君を助ける為に急いで駆けつけようとした行いが、色々と裏目に出たような感じがする。

もしかして僕達は、余計なことをしてしまったのかな」

「まさか、そんなことは絶対に無い！」

俺の力を開放するには、自分自身を追い込むだけでは無理だった。

俺の為に駆け付けてくれたジャンヌを守らなければと、本当の本気で必死になった気持ちで、最後の決定的な一押しになったんだから。

砦の倒壊に巻き込まれながら、気を失って逃げることも自衛することも出来ないジャンヌを庇いながらの戦いは、いくら俺でも無茶だったよ。

立香達が間に合って、ジークフリートが蝕まれた体を押して剣を揮って、竜を追いかけてくれたおかげで本当に助かったんだ。

あれが無かったら、俺かジャンヌか、少なくともどちらかは無傷では済まなかった。

決戦の日を、例え別行動だとしても、誰一人として欠けることなく万全の状態を迎えることが出来たのは、全員が全力で頑張ったおかげだと俺は思う」

「……………ありがとう、他でもない君にそう言ってもらえるとホッとする。

さっきの発言を少し訂正しよう、許す気は相変わらず無いけれど納得はできた。後で全員から盛大に怒られること、味方がいなかったとしても甘んじて受け入れること。

この二つの条件と引き換えに、君の単独行動には目を瞑ってやるよ」

「その辺りは大丈夫、既に覚悟はしてあるから。

……………そろそろ行くよ、アマデウスもいい加減に戻らなきゃいけない頃合いだろうし」

「ああ、ちょっと待って！

……………ほらこれ、持っていきな」

「……………オカリナ？」

「音楽魔術が使えたのは確認済みなんだろう？」

ささやかな餞別って奴だよ、僕の私物ということで何かしらの補正が期待できるかもしれないし」

「ささやかになって……細工は上品で繊細だし、手入れも丁寧にされているみたいだし。」

もしかしくなくてもこれは、アマデウスにとって大切なものなんじゃないのか？」

「まあね、ぶっちゃけ僕の音楽の原点」

「そんな大事なものをポンと渡すな、これから戦いに行くってのに困る!!」

「だからだよ。」

皆と一緒にいる僕のところにちゃんと戻ってきて、ちゃんとそれを返すこと。

いいね、約束だ」

「……………ああ、約束する」

「行ってらっしゃい、武運を祈っているよ」

「お互いにね」

そう言って笑った次の瞬間には、迷いも未練も躊躇いもなく、あっさりと踵を返して去っていく。

その姿は既によく知っている彼のものの筈なのに、感じ入るのを、心を揺さぶられるのをとめられない。

そんな緑衣の後ろ姿を、アマデウスは言葉も無いまま、見えなくなるまで送り続けた。

狩人と獲物

戦力と心の準備が整い、満を持してオルレアン進攻を開始した立香達を選んだ作戦は、戦力を集中させた上での真正面からの中央突破だった。

最終決戦に備えて、フランス中に散らせていたワイバーンの全てを呼び寄せた黒いジャンヌの思惑は、その決断によって勢いを削がれることとなる。

倒した傍から、次から次へと新手が補充されるという状況は確かに厳しいものの、竜殺しの英雄たるジークフリート迄もが加わったサーヴァントの集団を相手に、ワイバーンの群れなどはもはや敵ではない。

敵を倒すのではなく障害物を排除すると表現した方が正しい勢いで、竜の屍の山

を築きながら先を急いでいた一行の前に突如現れた森が、ワイバーンの群れよりも余程効果的にその歩みを止めさせた。

「この森には見覚えがあります、ここを越えさえすればオルレアンはもうすぐそこです」

「ジャンヌ、この森がどれくらい広がったのかはわかる？」

「決して小さいとは言えない森だったと思います、迂回しようとすればそれなりに時間がかかってしまうでしょう」

《ならばいつそのこと突っ切ろう、ワイバーンが集まりきってしまう前に一気にケリをつけた方がいいからね。

木の枝が邪魔をしてワイバーン達の襲撃が少しは落ち着くかもしれないし、これは結構いい案かもしれない》

「ちよっと待って、それはダメだ。

多少時間がかかったとしても迂回した方がいい、待ち伏せされている」

自身の発言を遮りながらの、明らかな確信が込められていたアマデウスの強い声に、一瞬呆けたロマニは慌てて測定器の数値を確認し始めた。

素っ頓狂な声が上がったのは、そのすぐ後のこと。

《うわほんとだ、森の奥にサーヴァント反応を確認!!

辛うじてそうだと判断できる程度に微弱なものだけど、これは相手が弱いからではなく、単に距離が離れているからだろう!!

アマデウス、どうしてわかったんだい!?!》

「僕の耳がいいのはもうわかってのことだろう?」

《限度ってものがあるよ、一体何が聞こえたってのさ!!》

「今はそんなことを追及している場合じゃないだろ、聞こえたものは聞こえたんだ。どうするマスター、ワイバーンに襲われつつ時間をかけながら森を迂回するか、サーヴァント戦を覚悟して森を突っ切るか。

決めるのは君だよ」

「……迂回しよう、この面子ならばワイバーンはもはや脅威じゃない。

下手にサーヴァントを相手にして、それが想定外の強敵だったらそっちの方がよほど大変だ」

「堅実かつ賢明だね、悪くない。

そのサーヴァントが竜の魔女によって召喚されたものならば、彼女を倒すことで自然と消滅するだろうし。

ここは放置して問題なし、先を急ぐとしよう」

決戦前の余計な戦闘を回避するという見事な戦果を挙げたアマデウスは、仲間達の驚嘆の眼差しを受けながら、内心でこっそり誰とも知れぬ敵サーヴァントに対して同情していた。

魔力反応の測定器でギリギリ測れるかどうかの距離を置いた生体音を聞き取れる、そんな正しく化け物じみた耳は流石に持っている。

彼が聞き取ったのは、『音』ではなく『音楽』だった。

木々の枝葉の向こうから微かに聞こえてきた旋律を、音楽家としても、個人としても、聞き逃すことは出来なかった。

『彼』が曲を奏でているということの意味を考え、咄嗟に口にした可能性がたまたま的を射ていた。

真実は、ただそれだけのこと。

陰ながら露払いに務めているらしい彼を邪魔するまいと、さりげなく迂回を推奨したアマデウスの気遣いは、選択肢への影響という点ではあまり意味が無かったものの、実は時間の短縮という面で多大な貢献を果たしていた。

サーヴァント戦を覚悟して森を突っ切る選択をしていたとしても、途中で謎の霧に巻かれて方向感覚を失い、元の場所に戻ってきてしまうということを繰り返して、時間だけを無駄にした末に、結局は迂回することを選ばされていた筈だから。

微弱なサーヴァント反応の発生地、森の深部では、獣の耳と尾を携え、俊足を誇る狩人の女性が憔悴していた。

「一体何なんだ……何が起きているというんだ、この森は!？」

召喚主である魔女の命で待ち伏せと奇襲の為に身を潜めるまでは、ここは確かに

普通の森だった。

気温に寒暖差があった訳でもないのに急激に発生し、異様な濃度で立ち込め始めた霧に嫌な予感を感じて、完全に巻かれる前に振り切ってしまうと、自慢の俊足で駆け出した頃には既に手遅れ。

霧の結界は純粋な視界どころか、方向感覚やあらゆる認識そのものまで狂わせていたらしい。

言いようのない恐怖と不安を必死に押しとどめながら、この場から脱することが叶いさえすれば壊れても構わないかのような勢いで両足を酷使しながら、ただひたすらに直進していた筈の眼前に見覚えのある枝ぶりの木が現れる。

薄々予想してはいたことを事実として突きつけられ、消耗していた心身に止めの追い打ちをかけられた彼女は、思わずその場で膝を折ってしまった。

まるで、この森そのものに『迷い』という概念が施されてしまったかのよう。

何処からか聞こえてきて、霧の中で響き合っているかのように思える謎の音色が、人や状況によっては思わず踊り出したくもなりそうな陽気で軽快な旋律が、今の彼女にとってはひたすらに忌々しく、そして恐ろしかった。

「くそっ……何者だ、霧の結界を築くとはさてはキャスター枠のサーヴァントだな
!?

臆病で卑怯な魔術師め、隠れていないで出てこい!!」

この現象を作り出した敵は必ず近くにいます、成すすべもなく膝をついたこの身を
嗤いながら見ている、魔術師とは大概がそういう連中だ。

そう考えた彼女は、頭に血が上った勢いのままに弓を取りながら立ち上がり……
どこからともなく放たれた強弓が、無防備に晒された一瞬を逃すことなくその霊核
を貫いた。

自らの胸に深々と突き刺さった矢に、命中するその瞬間まで気づけなかった見事
な一射に。

徐々に薄れゆく意識の中で、女狩人が自嘲の笑みを浮かべる。

「……………ああそうか、そういうことか。

狂化とは恐ろしいものだ……他でもないこの私が、狩人の技と魔術師の卑怯な罠を見誤るなんて。

狩人として討たれるのではなく、獲物として狩られる無様な最期も、今の私にはお似合いだ」

獲物を心身共に追い込み、消耗した末に隙を晒す決定的な瞬間を待ち構える。

極限状態でも気を抜かず、隙を作らず、逃げ切るもしくは反撃に転じる好機を辛抱強く伺い続ける。

それが狩る者と狩られる者の命をかけた闘ぎ合いであることを、神話に名高き名狩人であるアタランテは、よく知っていた筈なのに。

追い詰められた状況で我慢できず、冷静になれず、後先考えない行動に移ってしまった自分は、さぞかし楽な獲物だったことだろう。

あんな素晴らしい矢を放てる者、恐らくは狩りの心得を持っているであろう者に、あの醜態が狩人アタランテの姿だと認識されてしまうことが、堪らなく無念で恥ずかしい。

あり得ない奇跡かもしれないけれど、いつかどこかの地で、再び相まみえることがあるのならば。

「この無様、この屈辱……必ずや返上して見せようぞ」

最後の力を振り絞って射線の先へと振り返ったアタランテの目に、その身が粒子と化して消え去る前のほんの一瞬ではあったけれど、それでも確かに焼き付いた。霧と枝葉に紛れながら弓を構える、緑衣をまとった少年の姿が。

後の世の認識と信仰補正が加わったことで、例の森のテーマ曲的な彼女の歌に『迷い』の概念を付与する効果が発生しました。

『森』というフィールド条件が必須ですが、結構汎用性があるのではと思います。

ニコ動で動画巡りをしていたら、リンクと立香の今後の関係性のイメージにピッタリな曲を見つけました。

初音ミクの『ピエロ』です、再生数100万越えの人気動画で探しやすいと思うのでぜひ聞いてみて下さい。

視点が二つありますが、二人の立ち位置はどちらでもアリです。

お互いに気づき、理解し、支え合える関係だということ。

あと、失った大切な人を悼むというシンブルかつ普遍的なテーマから色々な人や関係性に該当しそうではありますが、米津玄師さんの名曲『Lemon』が、リンクを失った直後のゼルダのイメージにドはまりしています。

Youtubeで聴けますので、時間があればそちらも是非。

VS
サンソン&デオン

森を迂回することで時間こそ多少かけてしまったものの、ワイバーン以外の脅威が現れることはなく。

戦力の殆どを維持したまま、遙か彼方にオルレアンを確認できる地点まで辿り着くことが出来た、そんな時の事だった。

この数日、通信越しながらもずっと一行に付き添っていた、旅路を共にしてきたと言っても過言ではないロマニが上げた声が、最後の堰を切ったのは。

《極大の生命反応を確認、オルレアンからファヴニールが発射したらしい!!

竜の魔女を始めとした敵対サーヴァント達の出撃も予想される、つまりいいよ決戦だ!!

頼むぞ、人理の行く末は君達に託した!!》

「ありがとうドクター、管制室の皆、そのまま最後までサポートよろしくね!!」

オルレアンを発った巨竜と魔女達は、多くの困難を越えてここまで辿り着いた一行がほんの僅かな感傷に浸ることすら許すことなく、瞬く間にその眼前へと降り立った。

鏡写しのような同じ顔が、正反対の表情を浮かべながら相対するという、いつかをそのまま思い出させるかのような光景。

それが、今回は逆の形で繰り広げられていた。

「前と違って随分と余裕が無さそうですね、竜の魔女。

リンクさんはそんなにも強く、恐ろしかったですか？

竜種に従える自分が負けること、劣ることは絶対に無い、そんな自信を揺るがさ

れるほどに」

「黙りなさい、生憎と私には下らないやり取りを交わしている暇なんて無いのよ。あんた達を今すぐにでも消し炭にして、蹂躪計画の遅れを早々に取り戻さなければならぬのだから」

「それもリンクさんのおかげですね、彼が身を張ってあなたの敵意と注目を集めてくれたから。」

ゲオルギウス様が教えて下さいました……とある日から、ワイバーンが町を襲う頻度と勢いがあからさまに落ちて、おかげで町民の避難が当初の予想よりもずっと早く進んだと。

彼が要請を受けてすぐにこちらへ合流することが出来たのはそのおかげです、恐らくは同じようなことがフランスのあちこちで起こっていたのでしょうね」

「……………ええ、そうね。」

あいつは強かった、確かに脅威だった、その点においては潔く認めてあげましょう。

だけどそれが何だというの、あいつはもういない。

あいつは最後の最後で間違えた、命をかけて守った相手がジャンヌの残り滓だなんて」

「……あなたの言う通り。

死の間際に全てを憎んだあなたこそが真のジャンヌ・ダルクで、全てを受け入れた私の方が残骸だったとして。

それでも構わないと、もう気にしないと、今の私は思っているんですよ」

満面の、輝かんばかりの笑みを浮かべながらそう言い切ったジャンヌに、黒いジャンヌはもはや言葉も無い。

今になって考えてみれば、本物か偽物かということに誰よりも拘っていたのは彼女だったのではないかと思いつながら、ジャンヌは自身が辿り着いた真理を語った。

「私は、リンクさんを信じています……彼の選択と決断は、時に周りを置いていってしまうことは確かにあったけれど、それでも常に最善だった。

彼が守ってくれた私には、本物だろうと偽物だろうと、自信を持って胸を張って

いいだけの価値がある筈だと信じます。

彼は決して間違つてなどいなかったのだということを、今ここで証明してみせましょう」

「……………抜かすじゃないの。

言うこと為すことの悉くが、反吐が出るほどにお綺麗な聖女様が。

私の中に、あんたという可能性がほんの僅かでも存在しているかもしれないと、考えるだけで虫唾が走るわ!!

残り滓でも燃え滓でも生ぬるい、存在そのものを完全に無に帰してやる!!」

魔女の怒りと、それに呼応した魔力が獄炎となって爆発したのを皮切りに、ファヴニールと彼女のサーヴァント達が一斉に戦闘態勢へと移行する。

それだけで殺されてしまいそうな戦意と殺気を前に、思わず下がりがけた足を信念と気合いで持ち堪えさせたマシュが声を張り上げた。

「皆さん、ここから先は打ち合わせ通りに!!

私はマスターの守りに専念しつつ、状況を見計らって宝具を展開します!!
後ろを気にすることはありません、心おきなく戦闘に集中して下さい!!」

恐怖や気後れを飲み込みながら、自分がやらなければ、自分が戦わなければと無暗に気負っていたのは、今はもう過去のこと。

逸るままに飛び出すのではなく、覚悟を決めて腰を据えることの大切さを。

敵を倒すのではなく味方を守ることを尊ぶ自身の有り様を、押し殺すのではなく生かす戦い方を、時間をかけて教えてくれた人がいたから。

彼が矛と、自分が盾となって立香を支えていくことが出来たのなら、それはもしかしたら最強の布陣なのではないかと。

実現出来る筈もないのに考えていた、今となっては遙か遠い夢物語と成り果ててしまったことを密かに噛み締め、飲み込みながら、懸命に前を見据えるマッシュ。

今この時を生きている未熟な英雄に、最も若い後輩に、英霊達も負けじと続いた。

戦闘が本格的に始まる前から、彼の目に映っていたのは彼女だけだった。

今度こそ、渾身の一刀を以ってその白い首を断たんと飛び出した彼、処刑人サン

ソンの前に、刃ではなく指揮棒を構える音楽家が立ち塞がる。

「おっと、そうはさせないよ」

「アマデウス……そこをどけ、貴様如きに用は無い」

「一点の迷いもなく同感だね。」

僕だって、君のような陰気な男相手に費やす時間で、少しでも楽譜に向かえれば
どれだけ良いかと思うさ。

だけど今回は仕方ない、潔く我慢する。

君のような処刑フェチの変態を、マリアに近づけさせてなるものか。

その為にならば僕は、『音楽家』ではなく『魔術師』として、一時この指揮棒を
振るってみせよう」

「好きにしろ、その指先から斬り落とす。」

そもそも僕はね、アマデウス……ずつと前から、死を音楽などという娯楽に落と
す、君の鎮魂歌レクイエムが嫌いで嫌いで仕方がなかった」

それは半分本気で、半分は虚偽の発言だった。

死者を悼む為の純粋な鎮魂歌に対しては、下らない娯楽だなどと一蹴したりせず、サンソンも普通に敬意を表している。

気に食わないのは、人は汚いものと公言し、痛みだろうと哀しみだろうと何の躊躇いもなく自身の音楽の糧にしてしまう、アマデウスという男の方。

音楽を、自身の根幹とも言えるものを全力で否定されたアマデウスが、怒るまではいかないとしても多少は不快な思いをすることを期待して、サンソンはその言葉を口にしたのだけれど。

一瞬だけ呆けたアマデウスが、次の瞬間に浮かべた心底嬉しそうな満面の笑みに、サンソンは言いようのない気持ち悪さを感じて思わず一歩下がってしまった。

「へーえそう、君は僕の鎮魂歌レクイエムがそんなに嫌いだったのか……それはいい、存外の朗報だ。

この僕が、天才アマデウスがただ一人の為に特別に曲を作ることを光栄とは思わず、むしろ腹立たしく感じると言うのならば。

喜ばせてやるのが癪だなんて気兼ねする必要はない、遠慮なく存分に聞かせてやるとしよう。

処刑人シャルルⅡアンリ・サンソンただ一人の為だけに作り上げた、取って置き
の鎮魂歌^{レクイエム}をね!!」

「抜かせ、処刑人の刃を相手にたかが音楽で何が出来る!!」

マリーの為に研ぎ澄ませてきた刃が汚れてしまいそうな気はしたものの、目の前の男にこれ以上喋らせることが耐えられずに振りかぶった剣が、目には見えな
い音の衝撃によって弾かれる。

ろくでなしの人でなしと蔑み、頭に血が上っていたあまりに失念していた。

目の前の彼が紛れもない天才音楽家であり、それと同時にその界限では名の知れた魔術師でもあったのだということを、知識としてはちゃんと知っていた筈なのに。
彼が奏でる音楽は『たかが』と侮っていいものではなかったことを、思い出して
ももはや遅い。

アマデウスの楽団は、既に演奏準備を終えて展開されていて……その指揮棒が振

られたと同時に、戦いは決してしまった。

力の抜けた手から武器を取り落とし、見開いた焦点の合わない目を震わせ、ただ茫然と立ち尽くすばかりのサンソンに、アマデウスは声をかける。

「鎮魂歌^{レクイエム}を聞かせてやる……そんな僕の言葉を君は、ただ単に『倒してやる』っていう意気込みだけで受け取ったみたいだけど。

わざわざ倒す必要なんて別に無かったんだよ、一体君は自分を何だと思っていたんだい。

確かに一度死んだ者、魔女の手によって蘇った者、生前の後悔に縛られた者、その妄念を晴らす為に生者を脅かす者。

……どう見ても、どう考えても、性質の悪い亡霊や怨霊の類じゃないか。

この僕が作り、奏でる鎮魂歌^{レクイエム}が、効果を発揮しない訳が無いだろう」

とは言うものの、いくらアマデウスが天才だとしても、意識も存在も曖昧な霊体ではなく、エーテルで構成された肉体で以って今現在確かに存在しているサーヴァ

ントを相手に、明確な効果を發揮できる鎮魂歌レクイエムを作ることなどは出来なかった。亡者達を生と現世への未練から瞬く間に解き放った、遙か古の力持つ旋律をその耳と意識に焼き付けさせるまでは。

例えそれが原初の音楽魔術だとしても、数ある音楽魔術の使い手達ならば迷うことなく飛びついていたのであろう代物だとしても、既存の曲を引用、もしくはアレンジしただけで我が物にしたかのように振舞うだなどと、アマデウスの音楽家としての誇りが許さない。

だからアマデウスはゼロから紡ぎ上げることにした、耳に焼き付けた旋律とその時の衝撃をただ参考にするのみに留めて。

不特定多数よりも特定の個人を対象にした方がより効果を發揮する、その言葉を今一度意識しながら密かに作っていたものが、最終決戦を迎えたこの時に一曲だけ間に合ったのだ。

「いやあ、時間があまり無いのもあってギリギリだった……とは言っても、例え十分な余裕があろうと、これだけの曲をまた作れる気はしないけどね。

今回のことで改めて思い知った、僕はやっぱり心の底からの人でなしだと。

何せ人の気持ちに対して共感が出来ない、故に慰められない。

大切な人を失った痛みや哀しみだろうと、珍しい体験をしたと、これは次の曲に生かせそうだなと、結局はそんな考えに至ってしまう」

「僕にとっての鎮魂歌^{レクイエム}ってのは、死者のためではなく、生者のための曲だ。

この世への未練から解き放たれ、かの者は安らかに天へと昇ったと、残された者達を安心させる。

もう泣かなくていい、もう気持ちを切り替えて笑っていいんだと、大切なものを失った悲しみという重荷を、そっと下ろさせてあげる曲。

死にゆく者こそを憂いていた君にとっては、それが死者を軽んじる不謹慎な曲に聞こえたとしても無理はない。

むしろ、よく本質を捉えていたと思うよ。

故にこれは、魂を慰める曲ではない……サンソンというクソ真面目な根暗男の妄念を、その根底となった後悔を、掘り起こしてやる曲だ」

「君は本当は、マリアを殺したかった訳じゃないんだろう？」

役目に、負った責任に逆らえず、殺してしまった彼女に……彼女だけじゃない、あの混沌の革命によって罪なき首を断たれた多くの者に謝りたかった、そして許してもらいたかったただけなんだろう？

それを、あの時よりもっと綺麗に、気持ちよく殺すことでアピールしようという発想に至ったあたりは、本当に陰気で根っからの処刑人だと呆れるしかないけどね。

……なぜ、共感というものを持ち得ていない人でなしに、そんなことがわかるかって？

分かるよ、僕はお前と同じさ。

同じ女性を想い、負い目を抱き、花の笑顔を賜りたいと願った者同士なんだから」
聞こえていないことを承知の上で、自分自身に言い聞かせるように淡々と語り続けるアマデウスの前で、立っていることすらついにできなくなったサンソンがその場に力なく膝をつく。

止まらない涙を零しながら虚空を見つめ、届かない手を伸ばすその姿は、まるで

慈悲を請う罪人のよう。

その手を取ってもらえたのか、微笑みかけてもらえたのか、優しい言葉をかけてもらえたのか。

泣きながら笑った彼の目には誰が見えているのかを、それが神などではないことを、アマデウスはよく知っていた。

「マリー、ありがとう……君のその言葉だけで、僕はもう」

白昼夢の中で彼女に触れたのであろう指先から、徐々に光と化していく。

罪を赦されて天へと昇っていくかのような美しいその光景に、アマデウスは少しだけ後悔した。

幻とはいえ彼女ときちんと会わせてやってしまったこと、叶わなかった筈の願いを叶えさせてしまったことが、ただひたすらに面白くない。

サンソンの前に現れた彼女は、彼女が見せたであろう表情や口にしたであろう言葉は、彼の妄念を晴らすための捏造などではない。

アマデウスはただ、余計な誇張も解釈も加えることなく、『彼女』という至高のテーマをあるがままに表現しただけ。

サンソンが彼が望む赦しを、花の微笑みを与えられたと言うのならば。

それは彼が、変に遠まわりでズレた真似をすることなく普通に謝ってさえいれば、彼女もまた普通に笑って赦したのだと、ただそれだけのことなのだ。

「やれやれ、残念だけどこれはお蔵入りだな……いくら自信作ではあっても、本当の意味で主題を理解し、心の底から感動できるのが根暗男一人だなんて、より多くの者の心を動かしてこそその曲としては落第もいいところだ。

個人的な心残りは晴れただろう、ならば次は人理を守るために来るといい。

あのマスターなら、例え陰気な処刑人だろうと心から受け入れて、共に歩んでくれる筈だからさ」

そう言って笑いながら、サンソンの消滅を最後まで見届けるアマデウス。

そんな二人を少し離れたところから、彼らの女神が本当に嬉しそうな、優しい笑

みを浮かべながら見守っていた。

「あちらはもう終わったみたいね。

ありがとうアマデウス、彼を救ってあげるやり方を選んでくれて。

……私達もそろそろ終わりにしましょう、麗しきシュヴァリエ・デオン。

あなたのそんな姿を見続けることは、とても辛いわ」

哀しげな表情を浮かべたマリーが振り返った先には、粗く息を吐きながら膝をつく騎士の姿があった。

「何故だ、ありえない……いくら同じサーヴァントとはいえ、騎士たる私が妃殿下に後れを取るだなんて」

「確かに私は、サーヴァントとなった今も戦いは得意ではないけれど。

……気づいていないの？

あなたを傷つけているのは、他でもないあなた自身よ」

「何を馬鹿なことを、うぐっ!？」

軋む体に鞭打ち、無防備なマリーへと向けて細剣を振るわんとしたその体が、内側から走った激痛によって崩れ落ちた。

霊基が軋み、ひび割れる音すら聞こえてきそうなその様子に、マリーはますます痛ましそうに目を細める。

「魔女さんの狂化は付け加えられるものであって、その人を根底から作り変えてしまふようなものではないみたい。

あなたの中には今も変わらず、フランス王家に忠誠を誓った、誇り高き守護騎士が存在している。

あなたが私を傷つけられないのは、ある意味で当然だわ。

だって私は王妃マリー・アントワネット、王家の輝きをこの身ひとつで象徴する者。

私を害するということは、フランス王家を害するということだもの。

忠義か我が身かで、迷うことなく忠義を選ぶ。

あなたはそういう人よ、その胸に『フランス^{ヴィヴ・ラ・フランス}万歳』を抱き続けた白百合の騎士。

あなたの命をかけた忠義を、その美しい戦いぶりを。

私は王妃として心から讃え、誇りに思います」

その言葉が、微笑みが、最後の一手となった。

一瞬で致命的なヒビが走った霊基に、ついに消滅を始めた我が身にもはや観念して、狂気に吞まれつも確かに残っていた本当の自分が、王妃を守るために我が身を傷つけていたのだということを事実として受け入れてみれば。

見ないふり、気づかないふりをしているだけだった安堵や歓喜が、何よりも守るべきものを害しかけた怖れや悔しさが、その胸を満たすのに要した時間はほんの一瞬间のことだった。

「……妃殿下、あなたに謝罪を。」

たかが一介の騎士を相手に、貴き御身に余計な手間を負わせてしまいました」

「気になさることはありませんわ、忠臣の働きに応えることは王家の務めのひとつです。

どうしても気負ってしまうというのならば……あなたが自身の意思で決めた時で構いません、どうか立香さん達の力になってあげて。

王家の守護者たるあなたならば必ずや、彼らの辛い旅路の助けとなることでしょうから」

「……………お言葉、賜りました」

最後の最後で、自分自身と誇りを取り戻すことが出来た白百合の騎士。

その美しい微笑みを、マリーは王妃としての誇りと感謝を以って、最後までその目に焼きつけ続けた。

インド異聞帯を攻略してどうしてもカルナが欲しくなり、ピックアップを回した

ところ……すり抜けでアルジュナ（弓）が来ました、どういうこと。

（狂）の方まで来たので、「これはカルナも呼べということか!？」と思って腰を据えてガチャを回したのですが。

……敢え無く爆散しました。

アルジュナ（狂）が宝具2になって、アシュヴァッターマンもアスクレピオスも宝具5になろうが、本命（カルナ）が来なかった以上は心情的には爆死は爆死。

アルジュナ達が来てくれたこと自体は、間違いなく嬉しかったんですけどね。

水着イベどころか、今年中の課金はちよっと自重します。

……ジナコさんにカルナを会わせてあげたかったなあ、折角引けたのに。

VS
カーミラ（再）

柄頭にマイクが備え付けられた独特な槍と、鎖を付随させた武骨な杖が、重厚な金属音を立てながら何度も何度もぶつかり合う。

音だけならば、屈強な戦士達のぶつかり合いを連想させるであろうそれは、実際には華奢な体躯の少女と妙齡の女性によって繰り広げられているもの。

ただでさえ普通ならばあり得ないその戦いが、更なるあり得ない奇跡によって成り立ったものであることを、立香達は知っていた。

望まない成長と末路を迎えてしまった未来を嫌悪する過去と、ありもしない希望と可能性を願う過去の甘さに虫唾を走らせる未来との、『自分自身』を否定する戦

い。

最悪でも相討ちに持ち込む、責任をもって片を付けるからと真剣に頼み込み、誰にも邪魔されない一騎打ちを実現させたエリザベートは、手は出さなくとも見守ることは譲らなかつた立香とマシユの無言の声援を受けながら、懸命に槍を振るい続けていた。

「このっ、この、この、このおっ!!」

「鬱陶しい…ですわね、この、私!!」

「それはこっちの台詞よ、どうしてアンタなんかサーヴァントに!!」

「…何を言うかと思えば。」

私からすれば、未熟な小娘だった頃の私が、単独でサーヴァントとして成り立っていることの方がよほどあり得ないわ。

だってそうでしょう、サーヴァントとはその者の全盛期の姿と精神が反映されるもの。

『血の伯爵夫人』、誰もが怖れ敬ったその名と逸話を人理に刻み、恐怖を食らい、反

英霊となったのはこの私。

エリザベート・バートリーの少女時代がどんなお花畑の小娘だったかなんて、一体誰が気にかけるというの。

何の偶然、何の因果で零れ出た存在なのかは知らないけれど……もういい加減に消えなさい、見ているだけで腹立たしいのよ!!」

折角の少女だというのに血を浴びる気にも飲む気にもなれない、故に加減する意味も理由もない渾身の攻撃が、その瘦身を叩き潰さんと放たれる。

それを必死に、やっとの思いで捌いたエリザベートが、肩を激しく上下させる荒い息を吐きながら負けじと上げた顔を前にしたカーミラは、それまでの嫌悪や苛立ちを押し殺してしまうほどの、得体の知れない困惑を覚えずにはいられなかった。『認めてたまるか』『諦めてたまるか』という声が聞こえてきそうなその顔、その瞳には、困難や絶望に立ち向かう『英雄』のような力強い輝きが満ちていたのだから。

「……全盛期の姿と精神ですって？

馬鹿馬鹿しい、下らなすぎて笑う気にもなれないわ。

確かに、『エリザベート・バートリー』を構成する逸話の大部分、アンタの言うところの『全盛期』って奴が大人になってからのもので、それを体現しているのがアンタの方だってことは事実だけど。

生前の『私』は、それが自分の完成系だなんて認められなかった……どこかで何かを間違えずにいられば、もっと別の可能性、もっと別の人生があった筈だって、希望を抱かずにはいられなかった。

そんな想い、願いの形が、きつとアタシなのよ」

「何を馬鹿なことを!!」

「いい加減に観念しなさい、癪だけどアタシはアンタなのよ!?

『エリザベート・バートリー』には、自分が悪いことをしている自覚や悪気が無かったってことくらい、ちゃんとわかってるんだから!!」

カルデアのマスターと盾のサーヴァント、そして声だけの優男が上げた驚愕の声

を意識の端で辛うじて聞きながら、カーミラは言葉なく立ち尽くしていた。

怒ったのでも、呆れたのでもなく……必死に見ないふり、気づかないふりをしていた本心を、他でもない自分自身に暴かれてしまった衝撃によって。

「貴族は居るだけで特別だって、領民は貴族のために在るんだって、子供の頃から当たり前で教えられたわ。

だからアタシは、領主にとって領民は所有物であって好きなようにしていいんだと、それは世界の常識なんだと。

領地の顔たる夫人の美しさのためにそれらを消費することは正義、と言うよりは義務なのだと普通に思った。

だから驚いたわ……事が公になった途端に、アタシと一緒に楽しんでいた筈の、アタシを褒めて肯定する言葉以外を吐いた覚えのない家臣達が、本当はずっと怖ろしかったって、言うことを聞かなければ殺されていたって、それはもう見事に手のひらを返してきて。

アタシは怒った、そして絶望した、『悪いことをしていると思っていたならどう

してそれを教えてくれなかったの』って!!

確かに血は好きだし、悲鳴は心地よかったし、娘達を痛めつけることを楽しんではいたけれど……それが悪いことなら、やってはいけないことなら、我慢して諦める程度の分別はちゃんとあったのに!!」

「黙れ……もういい、黙れ!!」

そんな感傷は今更だわ、もはや私は身も心も怪物に成り果てた!!」

「そんなものはアタシも同じよ、『エリザベート・バートリー』である以上この宿業からは逃れられない!!

だけどアタシは分かった上で諦められない、夢見がちでお花畑な小娘だから!! 散々だった人生が終わって、本当に怪物と化してしまった今からでも夢は叶うと、新しい自分になれる筈だと信じてる!!

だってアタシは、『エリザベート・バートリー』の希望なんだから!!」

動揺のあまりに体が震え、もはやまともな攻撃を放てなくなっていたカーミラに、エリザベートはここぞとばかりの猛攻に出た。

変に拘っていられる状況ではないと思ったカーミラは、今まで敢えて使わずにいた宝具『幻想の鉄処女』フアンタズム・メイデンを展開させた。

自身の代名詞とも言える程に有名な拷問具は、その腕に抱かせた存在から強制的に血と魔力を搾り取ってカーミラの糧へと変える。

それが『お花畑な自分』だろうと、後で精神的にも肉体的にも凭れることになるうがもはや構うものかと、巨大な鉄の塊を放った。

あの質量は槍では防げない、故に避けようとするだろうと考えたカーミラは、それを見越して先手を打つべく身構える。

その判断は一瞬後、避けるどころか守ろうとする素振りすら見せないエリザベートの姿によって覆された。

槍の上下をくるりとひっくり返したエリザベートは、備え付けられていたマイクへと向けて深く深く息を吸い、その肺に渦巻く魔力の奔流を竜の咆哮へと変えて解き放つ。

間近まで迫っていた鉄の処女を呆気なく吹っ飛ばしたほどの音の衝撃は、少し離れたところにはいたカーミラをも容赦なく襲い……避けようも守りようもない『音』

による攻撃によって盛大に体勢を崩したその胸へと、槍の穂先が深々とめり込んだ。

「……何て出鱈目な奴なのかしら。」

未来が過去を否定するのではなく、過去が未来を否定するなんて」

「それは違うわよ。」

『人間』としてのアタシは確かにアンタの過去だけど、『英霊』としてのアタシはアンタの未来。

アンタという行く末を、自分自身のどうしようもない性癖を知って、諦めて、受け入れて。

それでもまだ変えられる筈だと、変われる筈だと、そんな希望を捨てきれなかったのがアタシなんだから」

「……………呆れて、怒ることも出来ないくらいのお花畑っぷりね。」

でも、だからこそ……鬱陶しいくらいに眩しい。

希望なんて、可能性なんて、私のような末路にはもう……………」

自身を最盛期だと、完成系だと謳っていたカーミラが、今わの際に思わず零してしまった本心が、エリザベートの胸に無視できない痛みを走らせた。

「……さようなら、アタシの未来。

今更なのはわかってる、本当の意味で叶うことなんて決して無いんだってことも……だけどアタシは何度でも誓うし、何度でも唄うわ。

アタシはアンタには絶対にならない、今からでも色んなアタシになれるんだって希望を絶対に無くさないって」

『だから安心なさい』と……そんな声が続けて聞こえてきそうな自信に満ちた笑顔で、胸を張りながら堂々と立つエリザベートの姿は、紛れもない英雄の輝きを放っていた。

そして後々、宣言通りに様々な可能性を体現して無駄に増殖するようになるエリ

ちゃんに、安心どころかストレス性の吐血癖を患うことになるカーミラさんなのでした。

『伝説』の再臨

「これこそがアスカロンの真実!! 汝は竜、罪ありき!!

『力屠^{アス}る祝福^{カロン}の剣』!!」

狂戦士の少女が辺り構わず放った炎が視界を覆い、思わず足を止めてしまったほんの一瞬の隙を逃さず。

もう一人の竜殺しである、ゲオルギウスの渾身の宝具がヴラド三世へと叩き込まれた。

「ぐっ、おのれ……っ！」

「仕留めきれなんだか」

「逃しません!!」

自身が負った痛手と、戦いながらも小まめに把握するよう努めていた戦況の大きな変化が、護国の英雄に退避を選択させた……その、少し前のことだった。

竜殺しジークフリートと聖女ジャンヌ・ダルクの二人が、邪竜ファヴニールとその繰り手たる魔女との間に存在していた均衡を、僅かながらに揺り動かしたのは。またともに食らえば骨すら残らないファヴニールの炎を耐え抜いたジャンヌと、彼女が耐えてくれることを信じて攻撃のみに専念したジークフリートの剣が、ファヴニールの体に僅かな、しかし確実な一撃を食らわせた。

「やりました!!」

「浮かれてるんじゃないわよ、こんなものは掠り傷だわ!!」

「だが、例え掠り傷だとしても、この剣は確かに届いた。」

ファヴニールとは力及ばない絶望などでは断じてない、それを証明できたことは十分な成果だ」

「攻撃が通じただけで満足するなんて……名高き英雄ジークフリートが、まさかそんなみみっちい奴だったなんてね。

どうしてこんな男が邪竜討伐を成し遂げられたのでしょうか、よほど運が良かったのかしら？」

「……運が良かったのは当時ではなく、今この時の方だ。

ファヴニールを倒したあの時のことは、正直言ってもよく覚えていないし、よく勝てたものだと思っっている。

戦える者が俺しかいなかったから、誰にも後を任せられなかったから、命をかけて我武者羅に剣を振るったまでのことだった。

だが、今回はそうではない……俺は俺一人だけで、何が何でもファヴニールを倒し切らなければいけない訳ではない」

手傷を負ったヴラド三世が、追撃するゲオルギウスと清姫を伴いながら竜の魔女

陣営に撤退してきたのは、ジークフリートが笑いながらそう言い切った直後のことだった。

「ヴラド三世、あんた馬鹿じゃないの!?

敵を引き連れてきてどうするの、倒してもいないのに戻ってくるんじゃないわよ!!」

「黙れ、仔細も把握しないまま感情のままに叫ぶな。

状況をよく見ろ、個々の戦いはもはや決した」

ヴラド三世に促されて辺りを見回した、ジークフリートとジャンヌを相手にすることに集中していたせいで視界と認識を無意識に狭めてしまっていた黒いジャンヌは、それによってようやく気付けた。

拮抗していた戦況は自分達のものだけで、展開させたバーサーク・サーヴァント達は既に各個撃破されてしまっていたことに。

自身の敵を倒した者達が集結し始めていて、最後の戦線が均衡を崩すのも間もな

いであろうということに。

「そ、そんな……」

「わかったか。」

勝ち筋が未だ存在するならば、ファヴニールを軸に残った戦力を集中させる以外には無い」

串刺し死体の丘を築き、血に飢えた怪物として歴史に語られようと国を守り抜いた英雄から、もはや後が無いという現状を断言された黒いジャンヌの噛み締めた奥歯が、そのまま砕けかねないような音を立てる。

既に一杯一杯だった黒いジャンヌの精神に、更なる一手が加えられたのはこの直後のことだった。

凄まじい爆発音の連続が空気と地を揺らしたその直後に、眼下の獲物へと襲いかかる隙を伺っていたワイバーン達が地へ落ちる。

思わず振り返った一同の、ジャンヌの目に飛び込んだのは、彼女の在りし日を思

い起こさせるような光景だった。

「撃て、ここがフランスを守れるかどうかの瀬戸際だ!!

全砲弾を撃って撃って撃ちまくれ!!

恐れるな、嘆くな、退くな!!

人間であるならば、ここでその命を捨てろ!!

もう一度言う、恐れることは決してない!!

何故なら、我らには聖女がっている!!」

「ジル……!!」

「兵士の皆さん、フランスとジャンヌさんの為に来てくれたんですね!!」

「……そうだよな。

追い詰められて冷静じゃなかっただけで、落ち着いてちゃんと考えられさえすれば、こうなるのが当然なんだ。

一緒に戦った兵士達こそが、ジャンヌが心からフランスの国と人々を想っていたことを、邪悪な魔女なんかじゃないってことを、誰よりも知っていた筈なんだから」

今一度聖女の旗の下に集い、祖国を守るべくひとつになったフランス軍の雄姿が、それに感動した立香達が思わず零してしまった眩きが、黒いジャンヌの頭の中で辛うじて繋がっていた『緒』を盛大にぶっ千切らせた。

「兵士どもを殺せファヴニール、一人残らず焼き尽くしなさい!!」

「なっ…!?!」

「しまった!!」

「ジャンヌ・ダルク^わ・ダルク^たを見捨てた奴らが、魔女だの何だのと罵りながら憂さを晴らしていたような連中が、今更助太刀ですって……反吐が出るわ!!

あんた達みたいなのが一番腹立たしいのよ、偽善者どもが!!」

「ジル、皆、逃げて!!」

戦略においては素人だった上に、状況的にも精神的にも追い詰められて自棄になっていた黒いジャンヌが取った行動は、彼女自身の溜まりに溜まった鬱憤を晴ら

すただけのもの。

この後の展開をどう動かすのか、どう生かすのかといった、現状で最も優先すべきであることを全く考慮していなかったそれは、だからこそ一同の裏をかいた。

広く展開されていたフランス兵達をまとめて呑み込まんと全力で放たれた邪竜の炎が、兵士達の視界を真っ赤に染め上げる。

『これは駄目だ』と察するために、彼らが要した時間はほんの一瞬だった。

恐怖も絶望も突き抜けて、ただ目を見開き、立ち尽くしたまま『その時』を待つことしか出来なかった兵士達と、そんな彼らを次の瞬間には消滅させていたであろう劫火。

その間に、高らかな蹄音と共に飛び込んできた者がいた。

立香達がそれを知ったのは、ファヴニールの炎がフランス兵達を焼く『筈』だった瞬間が過ぎ去った後のこと。

彼らの目に映ったのは、炎と兵士達の間を遮りながら突如現れた謎の光。

彼らの耳が聞いたのは、測定器の針を一瞬で振り切り切らせるほどの膨大な魔力と、未知のサーヴァント反応の観測を伝える裏返ったロマニの声。

魔力によって作られた光ではなく、魔力そのものの放出だった輝きによって防がれ、誰一人として焼くことが出来ないまま掻き消えた炎の先に、彼らはようやくその姿を見ることが出来た。

光を放っているかのような白い尾とたてがみが明るく栗色の体軀に映える、美しく立派な馬の背に跨って。

剣をかざすでも、盾を構えるでもなく、ただ左手を高々と掲げるその身が纏っているのは、深い森の瑞々しい木々を思わせるような緑衣。

金の髪、青い瞳、美しい相貌、尖った大きな耳。

古くからの伝説に語られ、芸術の題材にされることも多いその姿を前に、『まさか』と、『そんな馬鹿な』と思いながらも堪え切れず、最初に口に出してしまった者が一体誰だったのか。

そんなものは、大した問題ではなかった。

一石が投じられた次の瞬間には、高揚は既に広まりきってしまったのだから。

「まさか、そんな訳が……だけど、あの姿は」

「……勇者様？」

「間違いない、勇者様だ!!」

「勇者リンク様だ!!」

「封印から目覚めて、フランスを助けに来てくださったんだ!!」

「竜も魔女も恐れることはない、俺達には聖女様と勇者様がついているぞ!!」

竜の咆哮にも負けない歓声と雄叫びが迸る、未だかつてない程の希望が兵士達の胸に満ちていた。

遙か太古の先史時代に於いて、多くの冒険を成し遂げ、多くの怪物を倒し、崩壊の危機に瀕した世界を幾度も救った、あらゆる英雄や冒険譚の祖と言うべき伝説の勇者。

そんな大それた存在の登場は、絶体絶命の危機に彼ほどの人が駆けつけてくれたのだという夢物語のような現状は、人理修復という難題に挑み始めたばかりの自分達の方がよほど、堪えきれない感動と迸るままの喝采によって、盛大に歓迎すべきことの筈なのではないかと思うのに。

夢物語どころかこれは正しく夢なのではないかと、酷く回りの遅い思考でそんなことを考えていた、目の前の光景を認識して受け入れることがなかなか出来ずにいた立香達の耳に。

彼らとは逆に混乱が動の方向へと働いたらしいロマニの、予想外の急展開に振り回され過ぎて、もはや一杯一杯で、通信の向こうで泣きじゃくっているのではと思えてしまう程の聲が飛び込んできた。

《伝説の勇者リンクの登場、おかしくない、ああそうさ何もおかしいことはない

!!

『人理焼却』という崖っぷちに追い込まれた世界が彼に助けを求めたとして、幾度となく世界を、人々を救ってきた彼がそれに応えてくれたとして、何の疑問や不審があるって言うんだ!!

新規のサーヴァント反応の発生源は彼で間違いない、一瞬で魔力測定の記事をぶっ千切ったこれは観測済みのサーヴァントデータと比較するまでもなく断トツでトップランク、七つのクラスのどれにも当てはまらないパターンはもしやジャンヌ

と同じエクストラクラスって奴なのかな!?

目視で得られる情報から考えても、状況証拠でも、計測データでも、導き出される全ての結果が、彼が紛れもないその人であることを示しているのに……あれは、あそこにいるのは、彼はやっぱり、もしかして、いやもしかしなくても!?

「……………リンク」

喉まで込み上げてきたものがついに零れてしまった、疑問ではなく確信が込められていた立香の呟きこそが、一同が抱く困惑と混乱の答え。

旅の始まりからずっと一緒に歩んできた、つい先日まで共に戦い共に笑い合っていた、優れた戦士であると同時に何の変哲もない少年でもあった、力及ばず失われてしまったとばかり思っていた大切な仲間が。

その全身で、存在そのもので、『伝説』を体現しながらそこに居た。

邪悪の失墜

衝撃を受けて固まっていたカルデア一同の意識に、切り裂かれたと錯覚するような勢いで響いたのは、正しく空気を切り裂きながら鳴った二つの甲高い風切り音。

その正体が必殺の威力と必中の狙いで放たれた矢であったことに気付いたのは、その鏃が邪竜の両の目を潰し、衝撃に上擦った長い喉が『恐怖』と『苦痛』を源とする咆哮を迸らせた後だった。

「ジークフリート、翼だ!!」

矢の主が、リンクが鎧を鳴らしながら叫んだその一声を以って、思いがけず停滞してしまっていた状況が一気に動き出す。

彼の名が自身を呼び、明確な狙いを示したとほぼ同時に、考える間もなく殆ど反射で振るったバルムリンクが、広がりかけていたファヴニールの翼の片方を一刀で以って切り落とした。

またしても轟いた邪竜の絶叫、それに重なりながら重厚な金属がぶつかり合う轟音が響く。

勇者リンクの登場という衝撃に驚きはすれど吞まれず、竜殺しジークフリートが邪竜ファヴニールを追い詰めるという英雄譚の輝かしい一幕に紛れながら。

マスター殺しからの形勢逆転を狙ったヴラドの槍に、マスターを護る盾兵として、大切な人の力になりたいと願う少女としての、マシユの意地と誇りが追いついた音だった。

「う、ぐ……うああああああっ！！！！」

あらゆる攻撃に耐え、防ぐことを想定された大質量が、足を地面にめり込ませながら渾身の力で突き出されたそれが、頑強さを比較しようもない穂先を跳ね返す。マシュが護り、作り出してくれたほんの僅かな猶予の中で、立香は先ほどのリンクと同じように紋章が刻まれた手を高々と掲げた。

「令呪を使用する!!

ジークフリート、全力の宝具でファヴニールを倒せ!!」

マスターである魔術師よりも遥かに強く、人間性が破綻していることも考慮されるサーヴァントを制御し、最悪処分するための絶対命令権。

『令呪』についてそう説明された際に、『ならば大丈夫』と安心するどころか、『これ何とかして取れない?』と心底嫌そうな様子でとんでもないことを言いだした立香が、スタッフもサーヴァントも絶句させた時の事を、令呪の輝きを前にした口マニは思い出していた。

『痛みで学習させたり、上下関係をハッキリさせなきゃ命が危ない猛獣とか相手なら、そういうのも仕方ないとは思うけど……言葉と意思がちゃんと通じる人を相手に、話をする前からいきなり殺害機能込みの首輪ってどうなのさ。』

俺だったら嫌だよ、命握られた状態で信頼し合うとか背中預け合うとか絶対にムリ。

自分でそう思うことを、誰かに対してやりたくない。

対猛獣仕様の扱いが正解な人だって勿論いるんだろうし、必要な時にはやらなきゃなとは思うけど、それを大前提にはしたくない』

『し、しかし……召喚されるサーヴァントの中には、私のような怪物が含まれる可能性も十分にありますので』

『怪物だとしてもメドゥーサさんは話の通じる常識人じゃん、石になるっていう目は封じてくれてるし血を吸うのも我慢してくれてるし。』

刃物持ってる人が全員人殺しにはならないの、料理するか人を刺すかはその人個人の問題なの。

分かり合える怪物と分かり合えない人間だったら、俺は怪物の方がいい』

信頼しているからこそ命を預けられるんだとか、令呪には命令権以外にも瞬間的なブースターとしての使い方もあるんだとか。

令呪を介して命を握られている筈のサーヴァント達から、令呪を所有及び使用することに躊躇う必要はないと指導される立香の姿を前に。

魔術のいろはも知らない一般人、ただの数合わせだった筈の48番目のマスターは、実は大変な逸材だったのかもしれないという認識を、ロマニを始めとするスタッフ一同は少しずつ抱き始めていた。

そして今、彼らの前には、その時抱いた想いが正しかったことを証明する光景が広がっている。

令呪という膨大な魔力の塊を、自身の意思や行動を束縛する枷ではなく、その実力を限界を超えて発揮するための純粋なエネルギーとして受け取ったジークフリートの体に、かつてないと思わせるほどの力が漲る。

その要因が体に満ちる魔力だけではないと、むしろ精神的な充足や高揚の方が割

合としては大きいであろうことを、ジークフリートは自覚していた。

「ファヴニールよ……先程俺は、俺一人だけでお前を倒す必要は無いと口にしたが。撤回しよう、『竜殺し』の偉業は誰であろうと譲れない。

マスター達の重荷となるばかりだった、不甲斐ない姿を払拭せずにおれようか。これが俺だと、これこそが竜殺しと謳われたジークフリートの真価だと……貴方がその身と引き換えに繋げられた世界に続いた、貴方の後進の姿であると。

偉大なる先達を前に胸を張れずして、誰が『英雄』を名乗れようか!!」

飛び立つための翼と、周囲を把握するための視力を奪われた状況で。

徐々に近づく『天敵』の気配に、存在を得てから初めて、本当の意味で感じているのであろう『死の恐怖』に慄きながら、形振り構わず暴れ狂うことしか出来ずにいるファヴニールの姿に、憐れみを感じなくもないのだけれど。

だからと言って惑いはしない、何故ならば自分は竜を殺す英雄。

自分という存在と、成し遂げたことへの揺るぎない誇りを以って、ジークフリー

トは光を放つ刀身を振り抜いた。

「『幻想大剣^パ・天魔失墜^{ルムク}』!!」

放たれた魔力の輝きと地を割る轟音が、ファヴニールの断末魔の代わりとなった。漆黒の巨体を丸ごと呑み込むほどに膨大だったそれが落ち着いた後には、邪竜の名残は鱗の小さな欠片すらも窺えず。

流石は『竜殺し』と、これぞ大英雄ジークフリートの真価と称えられるべき大戦果を。

ただ一人、絶望の光景として見ていた者がいた。

「馬鹿な……あり得ない、ファヴニールが」

膝を震わせ、旗を握る手に余計な力が入るのを止められない黒いジャンヌは、もはや強がることが、現実から目を背けることが出来なくなりつつあった。

狂化させたサーヴァント達がいる、邪竜ファヴニールと数えきれない程の竜の群れがいる。

だから自分は大丈夫だと、負けることなんて在り得ないと……自分で自分に言い聞かせながら、そんな内心の奮闘に気づかない振りをしながら、必死になって立っていたというのに。

追い詰められた状況での最後の抵抗か、それとも逃避か。

立ち尽くしたまま半分飛んでしまっていた黒いジャンヌの意識が、その足元に打ち込まれた矢によって叩き起こされた。

「きゃあっ!？」

胸倉を、または髪を掴まれて引きずり起こされたかのような衝撃と共に覚醒し、殆ど条件反射で矢が飛んできた方向へと振り向いた黒いジャンヌは、見なければ良かったと、あのまま現実から逃避していたかったと、心の底から思った。

自分の計画を悉く台無しにしてくれた、あり得ない屈辱を味わわせてくれた、二

度と会いたくなかった……二度と会わなくていい筈だと思いたかった、必死にそう思おうとしていた、自分にとつては恐怖と絶望の体現以外の何ものでも無い、エセどころか真正正銘の勇者だった奴が。

伝説にも語られていた愛馬に跨り、ほんの少し前まで十分に開いていた筈の距離を瞬く間に詰めながら、真っ直ぐにこちらを見据える碧玉の眼差しが、先ほど放たれた鏃以上の鋭さで我が身を貫いたのだから。

撃たれたと感じた……実体のないその一射によって、この身と心を保っていた大切な何かが、最後の柱が砕かれたと、黒いジャンヌは確かに認識してしまった。

涙目で身を翻し、歳よりも幼い少女のような悲鳴を上げ、何者かの名を呼んで助けを求めながら、独りオルレアンへと逃げ帰っていく竜の魔女。

その背に尚も迫ろうとしていたリンクと、その愛馬エポナの早駆けが、真横から彼らを襲った槍の穂先によって阻まれる。

馬ごと転倒してもおかしくはなかった一撃を鞍から飛び降りることかわしたリンクは、着地の瞬間を狙った二撃目にも見事に反応し、青白く輝く聖剣の刀身で以って受けとめてみせた。

「逃げたのかと思えば、主の戦いを邪魔しないように離れただけか……良い馬だ、流石は勇者の愛馬と言えよう」

「三度目だなヴラド三世、いい加減にケリをつけようか。」

……一応、念のため聞くけれど、観念して通してくれる気は？」

「在り得ぬ」

ほんの一瞬も迷うことなく、堂々と胸を張りながらそう言い切ったヴラドに、尋ねた当人であるリンクは『だろうな』と内心で苦笑した。

崖っぷちに迫り詰められた状況で最後の意地を張れないような奴が、英雄として歴史に名を刻める筈が無い。

退魔の聖剣を携えた勇者と、そうと認識した上で相対しながら。

カルデアのマスターと、彼が従える多くのサーヴァント達が、この身を遠巻きに囲んでいることを認識しながら。

ファヴニールの統率を失って混乱状態に陥っているワイバーン達を、フランス軍

の放つ砲弾が片っ端から撃ち落す光景を目の当たりにしながら。

いくら名高き『悪魔』^{ドラキュラ}であろうとも流石に無茶、無謀でしかない状況で、それでも最後までサーヴァントとしての務めを果たそうとするその様は、所詮は怪物と、最終的には英雄に倒される宿命を持つ者と軽んじていいようなものでは断じてなかった。

退魔の聖剣を、怪物であるヴラドに対して絶対的な特攻を持っている筈のそれを、今にでも戦闘が始まりそうなこの状況で、何故かリンクは鞘に納めた。

訝しげに眉を顰めたヴラドは、細めたその瞳を次の瞬間には見開かせることとなった。

腰元に下げられていた石板にリンクの指が触れたと同時に、その壁面から帯状の青い光が迸り、掴んだリンクの手の中で瞬く間に一本の槍を形作ったのだから。

「余を、この串刺し公を相手に聖剣を用いず、よりにもよって槍で挑むと？

……甘く見られたものだ、その余裕を後悔させてくれるわ!!」

頑強な金属製の穂先がふたつ、並外れた剛力で振るわれたそれらがぶつかり合った鐘のような轟音が、一同の鼓膜を盛大に打ち震わせた。

数秒続いた拮抗が、リンクが長柄を構える手首を返し、ヴラドの槍に込められた力の方向をほんの僅かずらしてみせたことで崩れる。

辛うじて開かれた隙間に、鋭い穂先が頬を掠めるのも構わず飛び込んだリンクは、長柄の弱点である懐からの決定打を狙い、真下から振り上げられたブーツの爪先によってそれを阻まれた。

まともに食らえば顎どころか頭蓋まで碎けていたであろう強烈な一撃は、咄嗟に足を止めて後方宙返りで飛びのいた判断によって、そんな『もしも』を明確に想像させるだけの凄まじい唸り音を立てるに留まった。

距離を取ったことで一旦仕切り直すのかと思われた周囲の予想は、両者共が次の瞬間には地を蹴ったことでの的外れれた。

多くの怪物を退治した逸話を持つ勇者と、今の世において恐ろしい怪物の代名詞と言っても過言ではない吸血鬼が刃を交わし合うという、ある意味での夢の対決。その闘ぎあいの中である違和感を抱いたヴラドは、戦いが続く中で気のせいどこ

ろかますます強くなるそれを、幾度目かの剣戟を経た後に堪らず吐き出した。

「貴様……一体、余に何をした!？」

「何のこと？」

「惚けるな!!」

今の余は明らかに能力が落ちている、力も速さもまるで足りぬ!!

貴様以外の誰が、そのようなことを出来ると言うのだ!!」

激昂のままに振るった穂先が難なく受け止められ、ヴラドの表情が更なる苛立ちに顰められる。

吸血鬼とは不死身と怪力を謳う怪物であり、それを体現するヴラドもまた、サーヴァントの中でも特に秀でた筋力を備えていた。

いくら勇者とはいえ、吸血鬼たる自分が、体格があからさまに違う少年を相手に、正面からの純粋なぶつかり合いでここまで拮抗するなど本来ならばあり得ない筈なのだ。

ヴラドが既に確信を抱いていることを察したリンクは、フツと笑みを浮かべながら口を開いた。

「絶対こうなるっていう自信があつた訳じゃないし、意図して狙っていた訳でもない……ただ、もしかしたらという予想はあつた。

貴方は圧倒的な戦力差がある他国からの侵攻に抗うために、捕らえた敵兵の串刺し死体を野に晒した。

かの国の王は残虐非道な怪物であると知らしめ、恐怖で以って敵の歩みを止めさせるために。

『恐れられる』ことこそが、真の怪物と化した貴方の力の源泉。

だとしたら……その逸話を知りながら、貴方と相対しながら、それでも貴方を恐れることのなかった者との戦闘において、貴方は果たして怪物としての強さを保っているのか」

「……………何だと？」

予想も、想像も、考慮することすらも無かったであろう言葉を聞いて、呆然と立ち尽くすヴラド三世。

リンクは笑いながら、優しい声で、ある意味で冷酷に、彼という存在に止めを刺す力を持った言葉を口にした。

「ヴラド三世……俺は、貴方が恐くない。

俺は、貴方を相手に退魔の剣を用いる気にはなれない。

俺には、貴方が血も涙もない怪物だとは思えない」

「貴方が為したこと、貴方が作り上げた光景は確かに恐ろしい。

だけど俺は、どんな手を使ってでも、後の世で怪物と恐れられようとも国を護りたいと願ったことが、その想いが、間違っていたとは思わない」

「……俺は、貴方を倒す。

だけどそれは、俺が勇者だからでも、貴方が怪物だからでも、ましてや悪だからでもない。

立ちはだかる貴方が、越えなければならない難関だからだ」

そう断言したリンクの姿が、呆けてしまっていた視界の中で掻き消えた。

戦いの最中にとんでもない隙を晒してしまった自分自身に、内心で罵倒の限りを尽くしたヴラドは、地面に靴がめり込んだ跡がくつきりと残るほどの凄まじい脚力で、ほんの数歩、ほんの一瞬でこの身の懷まで肉薄したリンクの槍が、その穂先が、自身の心臓を次の瞬間にも貫こうとしていることに、酷くゆっくりと流れる世界の中で気がついた。

視界の端にほんの僅か過ぎたのは、自分達の戦いを固唾を呑みながら見守っている、カルデアのマスターの無防備な姿。

この身が貫かれることはもはや変えられない……ならばせめて最後に、最初から最後まで散々に振り回してくれた勇者の鼻を明かしてやってもいいのではないかと。

彼らのマスターを道連れにしてやればいいのではないかと、血に飢えた怪物が何を躊躇うことがあると。

そんな『怪物』の思考回路が、ヴラドの中で回っていたのだけだ。

それをかき消し、押し潰す勢いで、眩し過ぎて泣きたくなくなるほどの輝きを放ちながら、何度も何度も繰り返し聞こえる声があった。

『立ちはだかる貴方が、越えなければならない難関だからだ』

『国を護りたいと願ったことが、その想いが、間違っていたとは思わない』

『俺は、貴方が恐くない』

カッと目を見開き、停滞した世界から強引にその身と意識を覚醒させたヴラドは、その胸を今にも貫こうとしていた穂先を認識した上で、敢えてその足を踏み出した。

「なっ…!？」

自らその胸に呑み込ませることとなった刃が、それによって貫かれた霊核が、胸の奥から込み上げて喉を塞ぐ血が……それらに連なる痛みや苦しみの全てが、目を

見開いて驚く勇者の表情によって帳消しとなる。

血が溢れる口元に背筋が凍るような笑みを浮かべ、青白い肌に真っ赤な血化粧を施し、白く長い髪を振り乱した、正しく『吸血鬼』の呼び名に相応しい姿で。

死に際の、だからこそかつて無い程の力が込められた一撃が、認識と予測の外から勇者を襲った。

「……………どうだ勇者よ、前言を撤回するのならば今の内だぞ」

「……………お言葉に甘えて、少しだけ。」

驚きました、凄く恐かった。

お見事でした、ヴラド公」

少し血の気が引いた顔色で、引きつった口元で。

使わない筈だった退魔の剣を抜かされてしまった勇者の表情は、随分と悔しそうなもので。

最後の力を振り絞った一撃を敢え無く防がれてしまったにも関わらず、不思議と

満たされている自分自身を、ヴラドは自覚していた。

「…………いや、未だ解せぬことがひとつだけある。

いくら勇者の言葉に感化されたとはいえ、あの状況で『武人』としての有り様を選ぶことは、狂化を施されている以上は何があっても不可能だった筈だ。

聖人よ、これは貴様の宝具によるものか？」

思いがけず話を振られながら、それでも惑うことなく笑ってみせたのは、先だってヴラドと相対していたゲオルギウスだった。

「私の宝具には、付属的な効果ではありますが、対象に問答無用で『竜』の属性と与える力があります。

貴殿がかつて『竜』^{ドラクル}と謳われた気高き武人であり、逸話によって『悪魔』^{ドラキュラ}と堕とされた者であるというのならば。

私の宝具によって『竜』と属性付けることにより、貴殿の武人としての側面を強

調させ、狂化に干渉させることが出来るのではないかと、駄目元でそんな想定をしていたことは確かです。

面白い発想でしょう、マスターのもですよ」

「ほう、それは……確かに興味深い」

消えかけた体に残されていた、もはや槍を振るうには至らない最後の力で動かし、視界に、一人の少年が映り込む。

誰が何と言おうとも、吸血鬼であることは決して変わることのないこの身を、そういうものだと思え入れた上で、真っ直ぐに見据えてくる眼差し。

それに似たものを、ほんのつい先程、目の当たりにした覚えがあった。

「この戦場の只中でなお、己を見失わぬ男よ。

縁があるのなら、次こそは余を召喚するがいい。

であればその時こそ、我が槍の神髄を見せてやろう。

護国の槍……民を護る武器は、さぞ貴様の手に映えるであろう」

言うだけ言ったことに自分だけで満足して、そのまま消えていくだけの筈だったのに。

笑いながら頷いた少年の姿を最後の意識に焼きつけたヴラドは、吸血鬼の末路とは到底思えないほどの穏やかさで、美しい黄金の粒子と化していった。

《ヴラド三世の消滅を確認、確認された竜の魔女陣営のサーヴァントはこれで全部だ!!

最終決戦で戦力の投入を渋るとは思えないし、敵の戦力は大方削れたと思っていいんじゃないかな!!

今度こそ本当の本当に最後だよ、退却した竜の魔女を追ってオルレアンへ」
「待ってドクター、余裕があるのなら……少しだけでいい、時間が欲しい。

……最後になる前に、色々と、きちんと話しておきたいんだ」

通信の向こうで興奮していたロマニは、若干俯きながらの立香の言葉にほんの少

し息を呑み、僅かな間を置いた後でそれを許可する言葉をくれた。

誰と、何を話したいのかなんて、この状況で察せられない者はいない。

本当はあの時、あの時点でそうしたかったことを、状況が許してくれなかった。一生懸命に気持ちを切り替えて、受けた衝撃と抱いた疑問を一時忘れて、目の前のことに力を尽くした。

それが落ち着いて、もう大丈夫だと、ようやく話せると思えた今になって、あの時押し込めたものが改めて、じわじわと焼けつくような熱さを伴いながら込み上げてきている。

そんな自分の内心を向こうも察して、そして受けとめようとしてくれているのだろう。

笑顔で手を振りながら別れたのが最後だった、あの時は黙って見送るしかなかった背中の主が、本の表紙や挿絵で見た覚えのある衣装を、これこそが彼の本当の有り様なのだと思うせる自然な風格で纏いながらそこに居る。

「……………リンク」

「ごめんな立香、少し……いや、だいたい遅れた」

少し距離を置きながら向かい合う、伝説の勇者と人類最後のマスターを。

ほんの少し前まで、共に仲良く笑い合っていた少年達を、そんな彼らを微笑ましく思っていた全ての者達が固唾を呑みながら見守っていた。

出会っていた運命

語り合うのには遠すぎる、不自然な距離を保ったまま向き合っていた二人の少年。躊躇っていた一步を先に踏み出したのは、立香の方だった。

ゆっくりと、しかし確実に歩み寄っていくその様を、誰もが黙って見守ることしか出来ない。

フランスの特異点修復が始まってからという短い間で、多くの者が見守る中で、二人はまるで昔からの関係があったかのように仲良くなっていった。

立香にとってのリンクは、人理焼却という崖っぷちの異常事態で、思いがけず知り合えた気の置けない同年代で。

サーヴァントが増えた後も、先頭に立って活躍を続けていた彼を心から頼りにし

て。

尚且つ、彼一人に頼ってばかりではいけないと自身と現状を戒める程に、彼という個人を思いやってもいた。

そういった想いを形作っていた大前提が、一気に覆された。

リンクは英雄の素養を持った一般人どころか、当人がいることを知りもしないまま、何度も話題に出てきた伝説の勇者その人だった。

ずっと助けてくれた彼を、慣れない自分達を導き続けてくれた彼を信じている。何かしらの理由や思惑があったのだろうと、何の疑いもなく思えるほどの関係を重ねてきた自信がある。

だけどそれは、リンクを『勇者』として、『サーヴァント』として認識し、その考えや行動を受けとめた場合でのこと。

どんな力を発揮しようと、どんな一面を見せようと、リンクのことを一人の『友人』として尊び続けてきた立香がこの状況で何を思い、考えているのか。

今になって思えばリンクにとっても、自分をただの少年として何の身構えもなく接してくれる立香との関係は、得難く尊いものだったのだろう。

「何すんだ馬鹿!!」

「だって、前までは普通に短かったし」

「隠蔽かけてたんだよ、つかそこから疑ってたのか!？」

「お前のことだから、仮装して演出くらいはやりそうだと思って……」

「だからってこの確かめ方はあんまりだろ!!」

赤くなってしまった耳を取り返して押さえつつ、一步下がって涙目になりながら抗議の声を張り上げるリンクと、淡々と惚けた反応をするばかりの立香。

一同が先程とは違う意味で何も言えなくなっていた、そんな状況を変化させたのは、またしても立香だった。

前触れなく異様な勢いと迫力で伸ばされた手が、それまでも惚け具合からの差異と、リンク自身の精神状態の乱れもあって、伝説の勇者の側頭部を掴まえるという快拳を為す。

もはや慣れてしまった、切られたり焼かれたりするものとは違う種の痛みを、たった今味わったばかりのそれを連想させる体勢に思わず身を竦ませたリンクは、自身

を正面から見据える立香のひたすらに真っ直ぐな眼差しに毒気を抜かれ、ただ静かにそれを受け入れることしか出来なくなっていた。

「リンク、なんだよな。」

俺達がフランスに来てから、ずっと一緒だった」

「……そうだよ」

「実はサーヴァントで、名前が一緒どころか本当に伝説の勇者様で……」

「……黙っていたのは悪かった。」

俺なりの理由や事情はあったけれど、それでもお前が怒るのは無理もないと」

「そんなことはどうでもいい」

「……………えっ？」

微妙にずれた対応をしていたのは、どこことなく呆けていたように感じられたのは、現状を未だ本当の意味で受け入れ切れていなかったからなのだろう。

目に映る光景に、耳に聞こえる声に、手から伝わる感触に、彼が確かにそこに居

るのだという事実を、実感を伴いながら受け入れ始めた立香。

それに伴う昂りを、胸の内に収めきれなくなった想いを表すことを、彼は決して躊躇わなかった。

「リンク、無事で良かった」

その言葉、その笑顔、その涙を見た者達は、自分達が抱いた懸念が全くの的外れであったことを、今までの旅路の中で『平凡な一般人』から随分と格上げした認識があった『藤丸立香』の更なる真価を突きつけられた。

当人が言っていたように、伝説の勇者だったことも、サーヴァントだったことも、立香にとってはどうでも良かった。

彼は本当に、ただ純粹に、心から……実は勇者でありサーヴァントであった『だけ』の友人が、失われてしまったと思われていた彼が生きていたことに、帰って来てくれたことに安堵し、そして喜んでいた。

その事実が胸に沁み、思わず目頭を熱くしてしまう程の温かさが込み上げるのと

同時に、リンクは、自身の胸の内がその温もりを押し潰す程の罪悪感で重くなっているのを感じていた。

勝手な行動をして心配をかけた自覚はあった、怒られる覚悟は既に出来ていたけれど、それでも彼は後悔はしていなかった。

また同じようなことが起これば、行動しなければならなくなったら、自分はまた懲りずに一人で飛び出すのだろうと今でも思っている。

ずっとずっと昔から、どんな時代やどんな場所においても変わることなく、『自分達』の戦いはそういうものだったからだ。

一人なのは当たり前で、どうにかするのも当たり前で、生きて帰るのも当たり前で。

そんな孤独な戦いを強いられているのが他の誰かだったら、とんでもないと激昂してすぐさま助けに入るだろうと思えるのに。

自分が誰かを案じるように、誰かも自分を案じてくれるのだと、誰かが傷つき苦しむ姿を見て悲しむように、自分のそんな姿を見て悲しむ人もいるのだと。

自分でも知らないうちに、いつの間にかどこかに置いてきてしまっていた、本当

に当たり前のことを。

リンクは今この時になって、頭ではなく心で以って、ようやく思い出すことが出来た。

「……………立香。」

勝手なことをして、心配かけて、本当にごめんな」

「二度とすんなよ」

「ちゃんと相談してからにする」

「お、いこら、すんなつつてんだよ」

「状況によってはそういう訳にはいかな、いいだだだだっ！」

「努力しようとする姿勢くらいは見せろ馬鹿勇者」

「ゆーひゃの前に馬鹿をつけるな、一応誇りはあるんだからな!？」

「返事は？」

「……………頑張ります」

「うん、頑張れ。」

……お帰り、リンク」

「……ただいま、立香。

ありがとう」

涙が伝った跡を共に頬に残した少年達が、その背に負った『世界』の重みを知る二人が、満面の笑みを交わし合う。

伝説の新たな一幕かのようににも思えるようなその姿は、見守っていた者達に不思議な感動と安堵の気持ちを抱かせた。

何故か泣きたくなるような、この二人が出会えて良かったと心から思えるような、そんな光景だった。

最後の進撃

「良かったねえ、膝詰めで懇々と怒られ続ける羽目にならなくて」

「……そうでもない、下手な説教よりも余程効いた」

「それはご愁傷様。

これを機に自分の悪癖をしつかりと意識して、直すように努めることを勧めるよ」

「……………ちょっと待て。

アマデウス、お前何でそっちに居んの？」

「だって僕、リンクのこと知ってたし」

「少し前にバレた」

「はああああああっ!!!!?」

アマデウスがさらっと口にした爆弾発言が、一同を夢見心地から叩き起こした少し後。

異なる形で美しい二頭の馬が、その背に乗せた者達と共に、彼方のオルレアンへと向けて駆けていく後ろ姿を、万が一の時の後詰めを任されながら、自分達の出番が来ることは無いだろうと半ば確信しているサーヴァント達が見送っていた。

その内の一人であるアマデウスの手が、つい先程返してもらったばかりのオカリナを玩んでいる。

特に意識しなくても、頭の中で自然と繰り返されるその際のやり取りが、彼の顔に子供のような無邪気な笑みを浮かばせていた。

『ねえ、リンク……あの時君は、僕の言葉を冗談だと思ったみたいだね。

僕は本当に嬉しかった、君の力になれて本当に光栄だったよ。

子供の頃から、君と、君の物語の大ファンだった』

『…………えっ？』

『縁があればまた会おう。』

その際には是非とも、共に曲を奏でようじゃないか』

照れて赤くなった顔で、それでも嬉しそうに笑いながら頷いてくれたその姿が、その事実が、アマデウスの中で宝石のように輝いている。

「…………ずっと大切にしてくれていたのね。」

そのオカリナ、子供の頃に私がプレゼントしたものでしょう？」

「一番の思い出の品だったよ、今回の件で更に大切な宝物となった」

アマデウスにとって自分そのものと言っているいい音楽、その最も古い記憶は、勇者を真似てオカリナを吹いているところだった。

曲を奏でることによって様々な奇跡を起こす姿への憧れが、音楽魔術に手を出したきっかけであり、魔術師連中からのちょっかいに辟易しながらもめげずに追及を

続けた熱意の源だった。

その果てにあったものが今回の出会いと旅路だったとするならば、決して万事が順調ではなく、人としての真っ当な寿命を生きたとは到底言えない生涯までもが輝かしく思えてくる。

同じような想いが、他のサーヴァント達の中にも生じていた。

『妃でn、いや違う』

『リンクさん？』

『……………マリー』

『…っ!!』

『また会おう、その時は自慢だっというお茶会に誘ってくれ。』

マリーが愛するフランスの素晴らしさを、何も知らない俺に是非とも教えて欲しい』

『ええ、ええ、お約束するわ。』

ジャンヌも一緒に、また女子会をしましょう！』

『お・茶・会』

ひとつの約束を果たすと共に、新たな未来の約束を交わしたマリィ。

『勇者殿……いや、貴殿にはあまり畏まらない方が良さそうだ。

リンク、貴方と会えて良かった。

短い間ではあったけれど、仲間として旅路を共に出来たことを誇りに思う』

『俺も同じだよ、ジークフリート。

あんたのような人達が、俺が眠った後の世界をちゃんと守ってくれていたんだってわかって、とても嬉しかった』

輝く財宝も、王や姫の賛美も、この一言には敵うまいと心から感じたジークフリート。

加入時期の都合で直接の関わりを持たず、当たり障りのない挨拶しか交わせなかった者達は、満足そうに微笑む彼らへと少しだけ羨ましそうな眼差しを向けてい

た。

「彼らの旅路はこれからも続く。

少しでも縁があるとするならば、また馳せ参じると致しましょう」

「縁とは待つものではなく結ぶものですわ。

すぐにでも駆けつけます、何処までもお供すると誓ったのですから」

「……アタシは、ちよつと時間を置きたいかな。

勇者リンク、か……何も知らない、まだ何もしていない頃のアタシだったら、純粋に憧れることが出来たんだろうけれど。

もう少し自分に自信を持てたら、アタシ頑張ったって思えたら……その時には」

そうやって見送られながら、フランスを蝕む特異点の真の黒幕の下へと向かうのは、立香、マシユ、リンク、そしてジャンヌの、今回の旅路の初期メンバーと言えるであろう四人。

『王家の輝きは不滅なのです』と笑いながら、一度砕かれてしまったものを再度顕

現させてくれた、マリーがマスターと友人達への最後の餞別として託してくれた硝子の馬に跨っているのは、マッシュとジャンヌという女性同士の組み合わせだった。男女二人ずつなのだから、女性をサポートする為にも男女の組み合わせの方がいいのではないかと選択と状況に対して一人異を唱え、考慮するまでもなく却下され、二人乗りの後ろ側で未だに気にしている様子の立香は、知らないだけに理解していない。

組み合わせの問題ではなく、リンクと二人乗りが出来るのが現状で立香だけだったのだということを。

他を圧倒する名馬でありながら、その誇り高さ故にそうそう人を寄せ付けさせなかったと伝えられているエポナが、その背に主以外を乗せて駆けることを許容している光景が、『伝説』の既読者達をどれだけ驚かせているのかということ。

とは言われても、いきなり鼻先を摺り寄せられた初対面に加えて、寄せ付けないどころか自ら手助けしてまで乗せてくれたという現状を前に、実感が湧かなかったとしても無理はなかった。

「俺、この子に好かれるようなこと、何かしたっけな……」

そう呟きながら、心底不思議そうに首を傾げる立香だったけれど、それを聞きながら苦笑するリンクには少しだけ心当たりがあった。

エポナはきつと嬉しかった、そして安心したのだろう。

ハイラルの面影など何ひとつとして残っていない遠い未来に、一人放り出されてしまった主に、寄り添ってくれる誰かがいたことが。

（エポナにまで心配をかけてたんだな……）

紛れもなく勇者の愛馬である彼女は、『自分』の旅路にはいなかった。

だから、試しに呼んで来てくれた時には驚いたし、この体が彼女の乗り方とその際の感覚を覚えていることに気付いた時には何事かと思った。

例え『リンク』だとしても初対面の筈の自分に、その限られた信愛を惜しみなく向けてくれた時の、胸の奥から込み上げた懐かしさと嬉しさは紛れもない本物だっ

た。

そんな馬鹿なことがと思わなくもないけれど、確証もない状況で根拠は殆ど勘だけのだけだ。

彼女と共に旅をした者達も含めた、全ての『リンク』がここに居るのだということ、リンクは胸元をそっと押さえながら密かに確信していた。

その事実が何を意味しているのか、遙かな時を越えた先で一体自分はどんな存在になってしまったのか、落ち着いて色々と考えてみたかったのだけれど。

決戦を控えているという状況が、それを許してはくれなかった。

《皆気をつけて、未知の魔力反応の出現を確認した!!

ワイバーンとも骸骨兵とも違う、新たな敵性存在と想て……って何だあれ、気持ち悪っ!!》

「巨大なタコ、それともヒトデ!？」

海産物を思わせる大小様々な、グロテスクと称して良いであろう異様な風体の軟

体生物がオルレアンの城門から溢れ出てくる光景に、生理的な嫌悪感から竦み上がった者は多かった。

見た目の気持ち悪さ、どんな攻撃をしてくるかわからない得体の知れなさに加えて、視界全てを埋め尽くそうとしているかのように後から後から湧き出てくる純粋な数の暴力が、既に心を決めていた筈の一同を躊躇させた……のだけれど。

慄き、恐れたとしても、それで諦める者、足を止める者はいなかった。

どんな困難をも乗り越える『勇氣』、それを誰よりも体現する者が居ることを、ずっと共に居てくれていたのだということを、皆は既に知っているから。

《すまないリンク君、何とかしてくれ!!》

「了解、ドクター。」

その判断は正しいよ、任せてもらえるのならむしろありがたい」

的確な指示も助言もなく、丸投げされたと言っているだろうロマニの懇願を、本来ならば酷い無茶ぶりである筈のそれを、笑いながらあっさりと受け入れたリンク。

その姿と声が持つ力は、誰が相手でも何が起こっても大丈夫だと問答無用で思わせてくれる頼もしさは、既に周知されていた実力に素性が明らかになったことが加わって、ただ目の当たりにしただけの者達に感動と高揚を味わわせるほどのものとなっていた。

「……っておい待て、お前一体何するつもり!？」

「落ちないように、頑張ってしがみついてろ。」

そうすればエポナは自分で走る、下手に乗りこなそうなんて考えるなよ」

「ちよっ、リンク!!」

愛馬を全力で駆けさせたまま、鐙から外した両足を鞍の上で揃えたリンクの姿に、立香が思わず脳裏に過ぎらせた嫌な予感、次の瞬間現実の光景となった。

彼が腰から下げていた石板、その壁面から迸る青い光と共に鞍を蹴って飛び降りたリンクの、猛スピードで通り過ぎていく地面にそのまま叩きつけられていてもおかしくなかった体が、青い光によって受け止められた。

正確には、青い光が結集し、形作ったものによって。

前後に二輪を備えた機械仕掛けの馬、生物由来とは思えない動力の存在を伺わせる爆音の嘶き。

それは、ほんの少し前まで紛うことなき一般人だった立香にとって、魔術だの竜だのよりは余程馴染み深いものだった。

「マジか、それってもしかしくなくてもバイク!？」

《勇者リンクのもうひとつの愛馬、古代文明の叡智の結晶、最古の二輪駆動ことマスターバイクか!!

わざわざ乗り換えたってことは、まさか……》

「突っ込んで道を開く、立香達はそのまま続け!!」

言うや否やエンジンを吹かせ、先行したリンクの手が青い光を掴んだ。

それがまたしても何かしらを形作るであろうこと、状況からして武器の類であることまでは予想した一同だったが、その後で度肝を抜かされた。

リンクの手の中に顕現したのは、体格と腕力に優れた巨漢の戦士が、両の腕を用いることでようやく振るうことが叶いそうな両刃の大剣。

それを小柄な体で、一見しただけならば華奢に思ってしまったような細腕で、バイクの操縦もしなければならぬために必然的に片腕で。

大気が唸る凄まじい音を立てながら軽々と担ぎ上げたリンクは、全開に吹かせたエンジンで後続をぶっ千切り、タコともヒトデとも言いかねないおぞましい海魔の群れへと突っ込んでいった……次の瞬間、鋭さで裂くのではなく重さを伴った純粹な威力で叩っ切られた大小様々な触手と肉片が、盛大に宙へと飛び散った。

猛スピードを出していたバイクがいきなり急ブレーキをかければどうなるか、興味はあっても免許を持っていない立香や、バイクの現物を見ること自体が初めてのマッシュでさえ容易に想像がつく。

慣性の物理法則でそのまま吹っ飛ぶか、盛大に転倒してもおかしくはなかったそれを、リンクはまるで自身の手足であるかのように制してみせた。

後輪に釣られて浮き上がりかけた前輪を押さえつけ、前方に向かってそのまま一回転しそうだった勢いを力ずくで横向きのものに変える。

地を咬んだ前輪の一点を軸に、地面に対してほぼ平行に回転した車体は、乗り手が携えていた大剣に巨大な刃の弧を描かせた。

剣をただ振り回すだけでなく、通常だったただの転倒事故になりそうな角度や勢いでタイヤを滑らせながら、まるで実戦ではなく何かのショーのような華麗さと縦横無尽さで愛車を操りながら、時に振り上げたタイヤそのもので轢き潰すような荒々しさをも容赦なく見せながら、海魔の群れを切り開いていくリンク。

数秒の後には数の勢いに負けて潰されてしまうであろうその僅かな空間へと、躊躇うことなく飛び込んだエポナとその首元に必死でしがみついた立香に、硝子の馬に乗ったマッシュとジャンヌも続いた。

「ひいいいいっ、後ろもう埋まってる!!」

リンク、これ大丈夫なのか!？」

「少し強引なのは確かだけど、それでもこれが最短かつ最善だ!!」

恐らくこの魔物は、大元をどうにかしない限り際限なく湧いて出る類のものだと思おう!!」

「ホラー映画やゲームの定番だな、雑魚敵にある程度群がられることや多少のダメージを覚悟で強行突破しなきゃいけない奴だな、わかる!!」

わかるけど、実体験する羽目になんてなりたくなかった!!」

「センパイの例え話がわかりませんが、そういうことならば了解です!!」

「私達の方でも出来る限り後続を断ちます、突っ切りましょう!!」

「女の子達（馬含む）が頼もしい!!」

蠢く海魔で半ば塞がってしまった城門を強行突破した一同の前に広がったのは、人を含めたまともな生物が生きていた痕跡などとはとうに消え失せ、怪物が蠢くおぞましい魔都と化したオルレアン。

かつての美しい街並みを想い、住民を悼むことすらも出来ない現状を惜しみながら、それでも決して足だけは止めることのないまま、一同は王城を目指す。

立ち塞がった海魔ごと城の大扉をぶち抜き、飛び散った際には鮮やかな赤だったのであろう、どす黒い飛沫の跡がそこら中にこびり付いている床や廊下に、タイヤや蹄が傷を上書きさせることも厭わず。

一氣に駆け抜け、辿り着いた玉座の間にて一同はようやく、この特異点を築き上げた主と相対した。

暴かれる真実

おぞましい魔物が溢れる城内を強行突破した先に、一同はオルレアンに足を踏み入れてから初めて、二人分のまともな人の姿を見た。

片方は、既に覚えのある竜の魔女。

虚勢の全てが剥がれ落ちて、震えながら怯える様はどうしてもただの少女にしか見えなくて。

今までの彼女の所業を、人々が味わわされた苦しみを忘れた訳では断じてないのに、それでも哀れに思えてしまう程だった。

もう片方は、先程まで派手に蹴散らしてきた海魔を連想させる奇抜なローブに身

を包み、遠くから一見ただけで怖気が走るような謎の本を手にした大男。

先程自らが口にした『大元』について察したリンクは、石板から迸る光ではなくその背に負う聖剣の柄へと手を伸ばしながら歩み出し、その挙動に背筋を竦ませた黒いジャンヌが衝動のままに叫んだ。

「来なさいサーヴァント、そいつらを殺せ!!」

膨大な魔力反応と共に、いくつもの形と質量を持った影が実体化した。

想定していなかった新たな敵戦力、それもこちらを囲むほどの数がいきなり現れたことに、それがとある記憶の中にあるものと酷似していたことに、驚いたマッシュが声を上げる。

「これは、冬木の街にいたものと同じ……それもこんなに!？」

「『闇』……いや、というよりこれは『影』だな。」

召喚の手順を簡略化して、サーヴァントの力的一端だけを影法師として呼んだの

か」

「こちらには聖杯があるのよ、この程度ならばいくらでも量産できるわ!!」

『サーヴァント』とは言うものの確かな意思や人格の存在は感じられず、かと言って、肌を感じる威圧感とはかが影と樂觀視できるものではなく。

損傷を気にせず、ただひたすらに投入すればいいだけの単純な『戦力』と考えるならば、この上ない程に適していた。

追い詰められた状況で、質が保てないのならばせめて量を揃えようと懸命に行動した結果、図らずも辿り着いた正解だった。

残念ながら、相手が悪すぎた。

青く輝く刀身が唸りを上げながら大きく鋭い弧を描いた、ただそれだけで影の殆どが掻き消された現実、ただでさえ引きつっていた黒いジャンヌの喉が笛のような甲高い音を立てる。

「いくらでも、ねえ。」

面白い、聖杯の限界とやらを一度確かめておこうか」

「こ、んの……化け物!!」

「否定はしないよ」

「待って、リンクさん。」

「お願いです、彼女と一度話させてください」

背後から声をかけられて立ち止まり、頷いてから横へと逸れたリンク。

その向こう側から現れたジャンヌに、まるで彼女が怯えていた自分に助け舟を出したかのような状況に込み上げる屈辱と、真の思惑がどうであろうとも実際に安堵してしまったことへの情けなさに、ギリツと齒を噛み締めた黒いジャンヌの目尻に薄っすらと涙が滲む。

その姿を前にしたジャンヌが感じたのは、ただひたすらに純粹な哀れみだった。

「……何なのよ、その顔は。」

流石ねえ、聖女様……国を蹂躪して滅ぼそうとした魔女でさえ、追い詰められて

いれば慈愛の対象になると言うの?」

「……あなたの所業は確かに罪深い、それは事実です。

しかし、私があなたに対して哀れみを感じているのは、その報いを受けたことではなく、あなたという存在そのものに対して。

ひとつだけ聞かせて下さい、黒い私……あなたは、家族のことを覚えていますか?
?」

「……………えっ?」

本当に、思いもよらない問いかけだったのだろう。

竜の魔女としての虚勢も、怯えも一時忘れてしまった様子で声を零した彼女の表情は、今までで一番ジャンヌに似ていたそれは、幼い子供のようにも見えた。

「私は覚えています……戦場の記憶がどれほど強烈であろうとも、ただの田舎娘として家族と共に過ごした日々の方が、私の中にはずっと鮮やかに残っている。

むしろその思い出こそが、私が私でいる為の、最も大切な宝物。

大切な人達に、戦争の無い平和な日々を過ごして欲しい……それこそが、私が旗を掲げた本当の理由であり、支えてくれた柱だったのですから。

あなたが私の闇の側面だとしたら、尚更のこと、幼い日々の記憶は輝かしいものの筈。

未練があったからこそ嘆き、愛されることを知っていたからこそ裏切りを許せず、故郷に帰るといふ幸福を奪われたことに憤怒したのでしょうか？」

「……………」

「やはり、記憶は無いのですね」

予想は当たっていたというのに、それを投げ掛けた当人であるジャンヌの表情は暗い。

初めて対峙した頃の、もしくはもう少しだけ意地を張れるだけの心の支えが黒いジャンヌに残っていれば、自身を哀れんでいることが一目でわかるジャンヌの様子に怒りを募らせ、対抗もしていたのだろうけれど。

完膚なきまでに心を折られていたところに、自分自身の存在意義までもが揺らが

されてしまった彼女には、もはやそんな余裕は欠片すら無くなっていた。

追い詰められた精神状態で、だからこそ研ぎ澄まされたのかもしれない思考力の中で、黒いジャンヌは気づいてしまった。

自分を『ジャンヌ・ダルク』と定義していた記憶の数々が、旗を掲げながら兵士を鼓舞する、穏やかな微笑みを浮かべながら火中に消えていく聖処女の有り様が。その視点が『自分自身のもの』ではなく、『彼女を見る他者のもの』であったことに。

「違う、これは私じゃない……あそこで戦っていたのは、あの時焼かれたのは私じゃない。」

ジル、これは一体どういうこと!?

あなたが私をジャンヌだと、本物だと言ったから、私はそれを疑わなかったのに!!」

正真正銘、間違はなく彼女自身のものと言える、最も信頼していた者に裏切られ

たことによる怒りと嘆き。

それによって、すぐそこにいる怖ろしい敵から目を離してしまうことへの恐れと不安を一瞬吹っ飛ばし、衝動のままに振り返った黒いジャンヌは、そのままぶつけようとした怒号を呼吸そのものと共に飲み込む羽目になった。

「……………ジル？」

「お劳しやジャンヌ・ダルク、あのような戯れ言に耳を傾けてしまわれるなどと。お疲れになられているのですね、無理もない。

案ずることはありません、あとはこのジル・ド・レエが万事滞りなく済ませましよう」

一般的な感覚から見て、彼の様相が、ねっとりとしたような笑みが恐ろしく思われることはわかっていた。

それでも、彼女にとってそれは信じられる、安心できるものの筈だった。

しかし今はその笑顔が、一見優しく気遣ってくれるその言葉に含まれているもの

が、自身へと向けて伸ばされるその手が、恐ろしくて堪らない。

凍り付いてしまった思考が回らず、体も動かず、そのまま彼の思惑を受け入れてしまひそうだった黒いジャンヌの体が、何者かの力強い手によって突如掴まえられ、たった一度の跳躍でその場から一気に飛びのいた。

数秒呆けた先で、突き抜けて逆に冷静になってしまった意識の中で、彼女は気がついた。

最も困難な敵であった筈の勇者によって、最も信頼していた筈のジル・ド・レエの手から助け出されてしまったことに。

力なくへたり込んだまま言葉が出ない黒いジャンヌの前で、魚のような目を剥きながら激昂するジル・ド・レエと、どこまでも冷静なリンクが対峙していた。

「汚い手をジャンヌから離せ、この匹夫めがあ!!」

「……予想外だな。」

目的を果たすための駒とか、自己満足のための人形とかじゃなく、ちゃんと大切に思っていたのか」

「何を戯けたことを、私がジャンヌの為を思わなかったことなど一時としてありはしないというのに!!」

「だとしたら、今やろうとしたことはどういうつもりだったんだ」

「盗人猛々しいとは正にこのこと、ジャンヌを追い詰めたのはあなた達でしょう!! 私はまだ、彼女を一時休ませて差し上げようとしただけのこと!!」

あなた達を排した後に改めて呼びし、思うがままにフランスを滅ぼしていただくのです!!

忌々しい勇者のことも、恐れを抱き心を折ってしまわれたことも全て忘れて、今度こそ、完全無欠の竜の魔女として!!」

「ジル、やはり……この特異点の真の黒幕は、『あり得ない筈の私』を作り出したのは、あなただったのですね」

理不尽な裁判により魔女とされた聖女と、大量殺人鬼へと堕ちたかつての元帥。

同胞として共に戦い、時期こそ違ったものの、共に火中へと消える最期を迎えた二人が、それぞれの譲れないもののために相対する。

その光景を黒いジャンヌは、勇者によって捕らわれながら、決して苦痛を感じさせない力加減に、まるで守られているかのようなふざけた錯覚を感じながら、ただ見ていることしか出来なかった。

前回更新した時に、アンケートにご協力いただきましてありがとうございます。
それを受けて書いたネタを『活動報告』に上げておきましたので、宜しければご覧になってみて下さい。

狂人の言祝ぎ

「竜の魔女……彼女が私の闇の側面ではない以上、誰かしらの、何かしらの意図によって作り上げられた存在と結論せざるを得ません。

あなたは聖杯に願ったのですね、あなたの理想の『ジャンヌ・ダルク』を」

ジャンヌの確信を持った問いかけに、ジル・ド・レエは肯定で以って返した。

ジャンヌ・ダルクの復活を、彼女が受けた仕打ちへの復讐を為してくれることを願い、それを聖杯に拒絶されたことで、自身の『理想』を体現する新たなジャンヌ・ダルクを創造したのだと。

もう既にわかっていた、それこそが事実として殆ど確信していたというのに。
それを彼自身の確かな意思と声で認められたことによって、黒いジャンヌの体と心に、どす黒い重みがのしかかる。

（願った理想……聖女サマが言っていたように、偽物なのは私の方だった。

与えられたものを馬鹿正直に受け入れて、教えられた通りにフランスを蹂躪して、望まれた通りに怒って憎んで。

何でもない筈の時も、熱くて、悔しくて、苦しくて。

死んでサーヴァントになった後でも忘れられない、それ程の仕打ちを刻み込んだ連中に、あんた達のせいで私はこんなに辛いんだって、思い知らせてやりたくて堪らなかったのに。

人にも、国にも、土地にも、滓すら無くなるまで思い知らせることが出来たら……その時はきつと解放されるって、楽になれるって思っていたのに。

それが全て……私の存在も、記憶も、想いも、願いも、何もかもが作り物で、与えられたもので、自分だけのものなんて何も無くて。

ジルの願いを叶える為だけの、ただひたすらに、永遠に憎しみ続ける為だけの、苦しみ続けるだけの存在だと言うのなら）

「……………私は、一体何なの？」

思わずポツリと零してしまった一言が、意識してしまった現実と本心が、黒いジャンヌの心に巨大な楔となってヒビを入れる。

自分という存在が、あまりにも愚かで、馬鹿馬鹿しくて仕方がなかった。

恥ずかしさと自己嫌悪で死ぬるのならばいつそ今すぐ殺してほしい、自分という半端で醜な紛い物を跡形もなく消してほしいとさえ思っていた。

俯いたまま、怒るでも悲しむでもない無表情の頬に涙を伝わらせるばかりの、正しく人形のようになってしまっていた黒いジャンヌは、気づかなかった。

力なく放り出されていた自身の手を、誰かの手がいつの間にか取っていたことに。励まそうと、慰めようとしているかのようだったそれが、徐々に不穏な気配を滲ませながら震えだし……しかし尚も、握る力は優しかったことに。

「ジル、あなたの気持ちはよくわかりました。

為すべきことを為せたからと、目の前の運命を黙って、一人だけ満足して受け入れてしまった私には、その末路を目にした者達の哀しみが想像できていなかった。残して逝ってしまったこと、あなた達が愛し尊んでくれたこの身を大切にできなかったこと、後の人生を誤る程に嘆かせてしまったこと自体は、私の罪として素直に受け入れ、謝罪します。

……だからもう何も言わないで、あなたの言葉は今の彼女にとってあまりにも酷です」

黒い自分の様子がおかしいことに気付き、何とかこのやり取りを終わらせようとするジャンヌの思惑をよそに。

精神汚染スキルの存在によって、元々情緒が酷く不安定であることに加えて、完全に頭に血を上らせてしまっているジル・ド・レエの口は止まらない。

「……やはりあなたはお優しい、正しく聖処女の呼び名に相應しいお方。

しかしジャンヌ、その優しさ故にあなたはひとつ忘れておりますぞ。

例えあなたが祖国を憎まずとも……私は、この国を憎んだのだ!!

全てを裏切ったこの国を、滅ぼそうと誓ったのだ!!」

「ジル……!!」

「あなたは赦すだろう、しかし私は赦さない!!

神とて、王とて、国家とて」

「もう黙れ」

「は？　ぎやあああああっ……!!」

ジル・ド・レエの怒号にかき消されてもおかしくない程の、本当に静かな、なのに異様な重さと迫力を伴っていた一声が、居合わせた者達の意識を支配したのはほんの一瞬……の、筈だった。

その刹那の中で青い刀身が二度翻り、一度目でジル・ド・レエの腕を切り飛ばし、二度目でその手が持っていた禍々しい邪本を、退魔の聖剣の力を以って『切る』を通り越して塵へと変えた。

一連の流れを捉えられず、ジル・ド・レエの絶叫によって強制的に目の前の光景を突きつけられた一同は、時間の流れを切り貼りして中途をすっ飛ばされてもしたかのような異様な感覚を味わわされた。

「リンクさん!？」

「悪い、ジャンヌ……自分絡みの因縁を、自分で晴らしたいっていう気持ちはあるんだけど。」

それでもここは譲ってくれ、こいつは絶対に許せない」

頼んでいながらも有無を言わせない口調で、激昂のあまりに開いた瞳孔で、滾る激情をあくまで冷静な思考で御しながら。

振りかぶった拳を、一見華奢なように見えながら超重量武器を軽々と振り回す臂

力に溢れているそれを、リンクは一切の容赦なく、片腕を落とされた激痛に悶えるジル・ド・レエの顔面へと叩き込んだ。

ジル・ド・レエは晩年悪魔信仰や黒魔術を行なっていたという逸話はあれど、正當な魔術師という訳ではなく、キャスター枠の英霊としての適性も、魔物を召喚できる魔導書を所持していることによって辛うじて保たれているものである。

その肝心の魔導書を、宝具を破壊されてしまった時点で、彼は脅威と言える存在ではなくなった。

それでもリンクの猛攻は止まらなかった、ジル・ド・レエという個人の抵抗の余地をとことん奪いにかかる。

拳の一発で床へとめり込まされた彼の顔、その頬を僅かに、を通り越してかなり深く挟る位置に、聖剣の刀身を突き立てる。

リンクがほんの少しその気になりさえすれば、女神によって作り出され、数多の魔物を屠ってきたその刀身は、今この時点において既にジル・ド・レエの傷口を焼いている聖なる刃は、神を呪って魔と堕ちた彼を一刀で以って切り捨てるのだらう。腕を切り飛ばされ、宝具を破壊され、冗談でなくサーヴァントの身でさえ死にか

ねなかった拳を叩き込まれ、止めに神剣の輝きを突きつけられ。

ここまでされれば、いくら精神汚染スキル持ちとはいえ、その激情を一旦静めざるを得なかったのだろう。

いつも自分の前で見せていたような穏やかさを、強引に取り戻させられたジル・ド・レエと、それを認めて、強張った表情の目元だけをほんの僅か和らげたリンク。そんな二人の姿を、生気の失せた痛々しい無表情ではなく、予想外過ぎる展開を見せる現状への驚きと混乱に、ただの少女のようなあどけない呆け顔を浮かべながら。

彼が飛び出していく直前、握っていた手の代わりに渡してくれたものを、退魔の聖剣の鞘を無意識に握りしめながら、黒いジャンヌが見つめていた。

リンクの優しさと人柄は十分承知している、それなのに誰も声を掛けられない。それ程の威圧感を無言で放ち続けた彼が、不意に口を開き、この状況に見合っているとは思えない謎の叙述を語り始めたのは、浅くなってしまうていた一同の呼吸が戻り始めた頃合いのことだった。

「季節は、多分春……風が暖かくて、花か何かの心地よい香りがして、チラチラと動く木漏れ日の光が眩しくて目を覚ました」

「……………何の話です？」

思わず本気で尋ねてしまったジル・ド・レエの困惑をよそに、リンクはどこか遠いところを見るような眼差しを浮かべながら、構うことなくそのまま続けた。

「状況がわからなくてぐずり出した、腕の中の小さな赤ちゃんに、金の髪の毛の綺麗な女の人が語り掛けるんだ。

どうしたのって、大丈夫だよって、何も怖くないよって。

笑顔はとても優しく、抱きしめる腕は温かくて……子供の名前を呼ぶ声には、確かな愛が込められていたのに。

子供にはそれがわからなかった、ただひたすらに混乱していた。

『あなたは誰なの』って、『どうして自分をそんな風に呼ぶの』って。

……『《リンク》は勇者の名前でしよう』って」

ただでさえ半ば飛び出していたジル・ド・レエの目が、更に大きく見開かれた。それは彼だけでなく、居合わせていた全員が同じように。

語られる光景が誰の視点のもので、何を意味しているのかを察してしまったから。

「恐怖と混乱で、まだ上手く回らなかった頭の中をぐちゃぐちゃにしながら、一生懸命落ち着かせようとしてくれる母さんの声も聞こえないままに、ただひたすらに泣き続けた。

……………それが俺の、最初の記憶だ」

どこか虚ろなリンクの表情と瞳の前に、立香達は何日か前のある夜のことを、その時に交わしたやり取りのことを思い出し、そして気づいてしまった。

彼が『リンクと名付けられた少年』ではなく、『真正正銘の勇者リンク』だったとするならば、あの時の彼の言葉や嘆き、流した涙の意味が全く違ってくることに。末代の勇者が、今この時も封印の眠りにについている最後のリンクが、何度も何度

も生まれ変わりながら世界を救ってきた『勇者の魂』の記憶、もしくは知識を幼少の頃から得ていたというのは、数多ある『ゼルダの伝説』の考察の中でも特に代表的な定説のひとつだった。

『そうでなければあらゆることに説明がつかないから』という、至極分かりやすい理由によって裏付けされるその説を、今の今まで当たり前に、そういうものだと思っていたのに。

当人の口で以って改めて語られたそれは、そんな認識でいた自分達を詰ってやりたくなるほどに残酷なものだった。

まだ幼い、まだ何も知らない赤ん坊や子供の頃に、自分のものではない膨大な記憶や経験を横から与えられれば、何年もかけてゆっくりと形成されていく筈だったその子の自我は、一体どうなってしまうのか。

後付けの膨大な記憶と経験が認識の大半を埋める中で、どこまでが確かな自分だと、自信を持って判断することが出来るのだろうか。

「成長して、状況をある程度把握できるようになってからも……『リンク』と、紛

れもない自分自身のものである筈の名前を呼ばれるたびに、違和感を抱かずにはいられなかった。

『俺はリンクの偽物だ』って、『自分がここに居るのは何かの間違いなんだ』って思いながら、血の繋がった家族相手にですら馴染めなくて。

……そんな不気味な子供を、それでも心から愛してくれた母さんが死んだ時でさえ、俺はそれを現実と思えなかった。

親の死を悲しむことさえできない俺は何なんだろう、俺みたいな歪な存在がどうしてここにいるんだろうって、一人でずっと考えていたよ」

親を親と思えない、自分を自分と思えない。

自分という存在が、他の誰でもない揺るぎない己（個）が、今この世界で生きているのだと思えない……それは、あまりにも。

「酷過ぎます……っ!!」

受け入れながら、乗り越えながら、必死に生きてきたのであろうリンクに対して、何も知らないままそんなことを口にしてしまうのは、もしかしたら侮辱なのではないかとも思ったのだけれど。

それでもマシユは、込み上げてくるものを堪えることができなかった。

数多の困難が立ち塞がり、最後にはその身と命の全てを賭した献身が要求される、逸れることも脇目すらも許されなかった一本の道を、生まれながらに強制されたと言っても過言ではないリンクの、マシユが今この時まで生きてきた年月よりも短かった生涯。

それはただ一人の、誰でもない自分としての命と人生を、先の見えないその道を希望と共に歩み始めたばかりのマシユにとって、あまりにも痛々しくて、涙と共に想いを溢れさせずにはいられないものだった。

「今思えば、女神ハイリアの采配だったんだろうな。

末期を迎えたハイラルをきちんと終わらせるために、決して間違えられない難しい状況の中で……最初から何もかも知ってさえいれば、『リンク』ならきつと上手

くやる筈だって。

最後の難しい決断だって、誰に強要されずとも自分自身の意思で選べる筈だって、考えたんだろうなと思う」

『神に信頼されていた』と表現すれば綺麗なものに聞こえるかもしれないそれは、その一言、その一文で以って全てを負わされてしまった者からすれば、ただ一人犠牲を強いられたとしか思えないだろう。

神の思惑によって人生を、運命を歪められ、最期までそれに殉じてしまったという点が琴線に触れたらしいジル・ド・レエもまた、そんな彼の生涯を憐れみ、それを彼へと強いた女神に対して強い怒りを抱いた。

「なぜ逃げなかった、なぜ抗わなかった!!

あなたといいジャンヌといい、そんな残酷極まりない神の思惑などに、なぜ大人しく従ったのです!!

何と痛ましい、何と嘆かわしい、傲慢と冷酷こそがやはり神の本質なのだ!!」

「……ジル・ド・レエ。

お前は、俺の境遇を憐れだと、残酷だと思うのか？」

「当然でしょう!!」

どんな理由や思惑があろうとも、自分勝手な独断で無垢な魂を翻弄することが許される筈が無い!!」

「……………そうか。

そう思えるのなら、紛れもないお前自身の意思で以ってその言葉を口にできるのならば」

「黒い方のジャンヌに謝れ。

自分がどれだけ酷いことを彼女にしたのかを自覚して、心の底から頭を下げる」

再びの、しかし先程のものとは違う類の沈黙が辺りを包んだ。

リンクが口にした言葉の内容を咀嚼し、それが意味するものを少しずつ受け入れるごとに、一同の胸に熱いような苦しいような、堪らないものが込み上げてくる。かつてない程の勢いで怒ったのは、自分自身の辛い記憶に触れたからではなかったのか。

語っていた時のリンクは本当に苦しそうだった、それが彼にとって心に深く刻まれた傷であることは間違いないかった。

トラウマと言っているいいものを掘り起こされながら、それでも自分のためではなく、同じ痛みと苦しみを抱かされた誰かのために怒るのか。

床石にヒビを入れながら立てられていた聖剣の刃が、自身の動きを妨げていたも

のが外されたことで、呆けてしまっていたジル・ド・レエがゆっくりと身を起こす。そうして振り返った先に、痛ましい表情を浮かべながら、力なく座り込んでしまったままの黒いジャンヌの姿を見つけた彼は、見開いた両目から嗚咽と共に涙を流し始めた。

「ジャンヌ……おお、私のジャンヌ・ダルクよ。

申し訳ありません、私は……私は決して、そのようなつもりでは………」

「……………ジル。

あなたにとって私は、聖女サマの身代わりだったんじゃないの？

『ジャンヌ・ダルクに復讐を果たしてほしい』という、あなた自身の願いを叶えるためだけの存在じゃなかったの？」

「まさか、そのようなことは断じてありません!!

私の願いのために作り出したあなたを、願いに応えて私の下に来て下さったあなたを、私は幸せにしたかった!!

正当な復讐をその手で成し遂げてもらうことこそが、『ジャンヌ・ダルク』の真

の救いに、真の幸せに繋がると、私は心からそう信じていたのです!!」

必死に訴えるジル・ド・レエの姿に、言葉に、偽りや誤魔化しは見受けられなかった。

彼の想いを、彼に愛されていたことを……自分は確かに望まれて生まれたのだということを、ようやく信じることができた黒いジャンヌの両目から、嘆きと絶望ではなく喜びと安堵の涙が溢れ出す。

震えるその唇から、誰に与えられたものでも、誰に強制されたものでもない、彼女自身が抱いた願いと想いが紡がれ始めた。

「ジル、あなたに言われた通り……教えられた通り、私はフランスを滅ぼそうとしたわ。

でもそれは、決して楽しかったからじゃない。

復讐をすれば、憎いのが、辛いのが、苦しいのが、ほんの少し楽になれたからなの。

何もかも燃えて無くなるまで、とことん復讐してやれば、常に苛まれるこの痛みと熱さから、本当の意味で解放される筈だって信じていたからなの」

「……そんな日が来ることは無いんだって、いくら復讐してもこの苦しみは決して晴れないんだって、そもそもこの想いや記憶自体が与えられた他人のものなんだって。

全部わかった上で、それでもまだ八つ当たりをする気には、私はなれない」

『ジャンヌ・ダルクの復讐』を望んだ、あなたの願いに見合わない存在になってしまった私は、もしかしたら聖杯に消されてしまうのかもしれないけれど。

何も知らずに、何も疑わずに、言われるがままに復讐に走る『次』の私が、また作られるのかもしれないけれど。

……『今』の私がそんな風に思っていたこと、それだけはどうか忘れないで」

胸の内を全て吐き出し、代わりに大きく息を吸いこんだ黒いジャンヌは、満足していた。

人や動物どころか虫にも満たない、本当に僅かな一時だったけれど、自分自身の

命を生きたと、自分だけの想いを尊ぶことができたと思っていた。

意図を以って作り出され、何も知ることができないまま消えてもおかしくなかった自分には、それだけでも十分すぎると……これで満足しろと、足掻いても辛く惨めになるだけだと。

暴れ出しそうな本心、本音を懸命に押さえようとする黒いジャンヌに、ジル・ド・レエは悲しげに、痛ましげに眉を顰めて。

次の瞬間、おぞましいものだった筈のその顔に、本当に優しそうな笑みを浮かべた。

「願いましよう……ジャンヌよ、どうか、あなたの真の心のままに」

「ジル……？」

「地獄に堕ちるのは、私だけで………」

「ジルっ!!」

今の今まで握り締めていたものを放り投げ、駆け寄りながら伸ばされた黒いジャ

ンヌの手が届くよりも先に、光の粒子と化して消えていったジル・ド・レエ。

彼の最後の微笑みは、大切なものを奪われた怒りや悲しみに暮れる狂人ではなく、娘の幸福を願う父親を思わせるものだった。

黒いジャンヌが、ジル・ド・レエへと駆け寄ろうとする際に思わず放った聖剣の鞘を、その持ち主の手が拾い上げ、手慣れた様子で身につける。

独特の音を立てながら、背負われたそれに青い刀身が収められたことによって、一同はようやく、想定よりもずっと穏やかだった形で以って、最終決戦が終わりを迎えたことを認識した。

初めから世界を救おうとしたのではなく、ごく身近な大切な人を、ささやかな幸せを守ろうと頑張った結果世界を救った、もしくはそれを為すためには世界を救う必要があった。

『リンク』とは、そういう英雄だというイメージがあります。

ジャンヌ・オルタに鞘を預けたのは、ジル・ド・レエを斬るかどうか、許すかどうかの判断を彼女に委ねるという意味合いがありました。

『Sound Horizon』の楽曲で『11文字の伝言』というのがありまして、歌自体は結構前から知っていたのですが。

最近になって改めて聞いてみたら、リンクのお母さんの心境にピッタリで驚きました。

コンセプト自体が『母から子への想い』なので、色々な関係に当てはまりそうな楽曲ではあるんですけどね。

YouTubeにもあるみたいなので、知らない人は是非聞いてみて下さい。

上記の歌がピッタリだと思った要素のひとつに、歌詞に含まれていたとある単語があります。

任天堂の公式で『リンク』という名前のネタ元で、英語では『Link』となります。

作品内でも要所で使うようにしているので、気づいた際には改めて、込めたものを感じていただければと思います。

黒き聖女の生誕日

特異点を作り出し、フランスの地を怖ろしい竜が飛びまわる異端の戦場へと変えていた黒幕が消え去ったことで、未だ先の見えない旅路の第一歩となる戦いは、カルデアの勝利という形で無事に達成された。

歓声を上げ、隣の者と手を取り合いながら、皆でその瞬間を喜び合う想像を、誰もが密かに抱いていたのだけれど。

退魔の聖剣を鞘に収めたその時、その体勢から動こうとしないリンクの後ろ姿が、彼に何と声をかければいいのか分からないことが、一同の行動を躊躇わせる。

その空気を構うことなく壊したのは、意外な人物だった。

『親』と呼んでいいであろう存在との別れに、愛の籠もった祝福の言葉を贈られた黒いジャンヌ。

俯いた顔を上げ、目元を拳で乱暴に拭い、僅かに赤く染まった目尻を釣り上げた彼女は、立香達が止める間もなくリンクの下へと早足で歩み寄り、その勢いのままに彼の腕を引いて強引に振り返らせた。

その瞬間にヒュッと喉が鳴ったのは、出そうとした声を思わず、逆に呑み込んでしまったからだろう。

いきなり腕を取られたことに対して驚いてはいるものの、彼の顔からは既に、あの時確かに見せていた痛みや苦しみは消え失せてしまっていた。

「……………どうしてよ。」

あんたは、誰にも助けてもらえなかったんでしょ？

ずっとずっと、何年も、自分以外の誰かのために戦い続けた人生の終わりまで、あの苦しみを一人で抱え続けたんでしょ？

なのはどうして、そんな、何事もなかったような顔が出来るの」

自分が出生の事実を知り、それに絶望していたのは、ジル・ド・レエの本心を知ることが出来るまでの、時間にすればほんの僅かな間だけのことだった。

ただそれだけで、あんなにも不安で、怖くて、目の前が真っ白になるような、底なしの闇に独り落ちていくかのような気持ちにさせられたのに。

彼のことだからそんな内心を誰にも言わず、誰にも悟らせず、自分自身の意思で抱え続けたのだろう。

誰も彼のために怒らなかつたし、彼のために悲しまなかつた。

そもそも知らなかつた以上、そんな考えは見当違いの八つ当たりに過ぎないのかもしれない……だとしても。

彼が自分にしてくれたことを、誰も彼にしてあげなかつた。

その事実が、何故かひたすらに悔しかった。

力を込め過ぎて震えだす拳が、きちんと拭った筈なのに再び滲みだした視界が、その向こう側で嬉しそうに笑うリンクが、どれもこれも腹立たしくて堪らなかつた。

「何事もなかった……そんな訳がないことは、自分が一番よく知っている。

あの頃は本当に辛かったし、今でも思い出すとかなりきつい。

ただ単に、『大変だったけどまあいいか』って、『諦めずに生きて良かったなあ』って、そう思えるようになっただけのことだよ。

何とか乗り越えた先で、たくさん大切な人に会えて、その人達とかけがえのない日々を過ごすことが出来たから」

「色々と迷ったり強いられたりしたことは確かだけど、それでも俺はちゃんと、あれが俺の人生だったんだって思ってる。

他の選択肢が無かったただけだって、そう思いたいだけだって、言われても否定はできないけれど。

それでも立ち止まることはできた、横道に逸れようと足掻くことだってできた、最悪の場合だけど死んで自由になるっていう選択肢だってあった。

既に決められた道を、それしかない道運命を……『進む』ことを決めたのは、他でもない、自分自身の意思だった」

「嘆くのはいい、憐れむのもいい。

実際自分でも悲惨だと思うし、『あの時ああしておけば良かった』と、後悔することなんて山積みだ。

だけど同じ後悔でも、『あんなことしなければ良かった』と思うようなことは、俺の中には欠片も……覚えている限りでは無いんだよ。

抗えない運命の中で、最初から最後まで全部決められていたと、言われてもおかしくないような不自由さの中で。

それでも俺は自分で選んだ、自分で決めた。

これこそが俺の人生だって、例え強がりと思われようとも、実際強がりでしかなかったとしても、胸を張ってそう言いたいから」

「いいことだって、あの頃大変な思いをしておいて良かったって思うことだって、沢山あった。

……例えば、今この時。

辛いだけだった筈の記憶に意味を持たせてくれて、そのおかげで誰かを助けられたんだって、思わせてくれてありがとう。

俺のために怒ってくれた、俺のために悲しんでくれた、君に会えて良かったよ」

そう言ったリンクが、笑いながら伸ばした指に頬を拭われたことで、黒いジャンヌはようやく、自身の涙に気がついた。

自覚してしまつてはもう駄目だった。

胸の奥から込み上げてきた熱いものが、喉を震わせ、嗚咽を零し、両の目を通して溢れ出す。

自分のだと思つていたものの全てが勘違いで、何もかもを失くして空っぽになつてしまつた自分に初めて与えられたもの、本当の意味で自分だけのもの。

それが、『彼が自分のために怒ってくれた』という事実であることが、なぜこんなにも胸を熱くさせるのか。

今も変わらず胸の内で滾っている憎しみの炎、それを霞ませかねないと思うほどののに、その熱を不快だと思わないのは何故なのか。

生まれたてで、蹂躪以外の人生経験など殆ど皆無で、頼りにできるのは与えられたものの上に酷く偏っている他人の記憶しかなくて。

この気持ちを正しく解せるだけの知識と経験が、それを的確に余さず伝えられる

だけの言葉が今の自分に備わっていないことが、何故こんなにも齒痒いのか。

それら全て、何もかもが、今の彼女にはわからない。

そんな混乱の中で黒いジャンヌは、少なくともこれは確かだと思えるものを、混沌と渦巻く想いの中から何とか掴み上げたものを、懸命に言葉へと変えた。

「わ、私は……私は絶対に認めない。

あんたのそれが『勇氣』だなんて、そんな高尚で立派な精神だなんて認めない。
あんたはやっぱりエセ勇者よ。

だってただのやせ我慢じゃない、自分自身に言い聞かせて無理やり納得させているだけじゃないの。

あんたはもっと我が儘になればよかった、我慢した分甘やかしてもらえばよかった、助けた分助けられればよかった。

もっと弱くてよかった、愚痴でも何でも吐けばよかった、それを受け止めてくれる『大切な人達』がちゃんといったって言うのなら。

……何認めてんのよ、ほんと馬鹿じゃないの!?

こっちはあんたの自慢の人生とやらを全否定してるってのに、どうして笑ってるのよ!!」

例え罵声や罵倒の形を取ってしようが、そこに込められたものが真っ直ぐな思いやりならば嬉しいのだということが、今の彼女にはまだわからない。

教えられていなかっただけで、知ったり学んだりする機会がなかっただけで、誰かを思いやれる気持ちとちゃんと持ち得ていた、根は本当に純粋な少女だった……とは言っても、間違いなく敵対していた存在である彼女にあっさりと声をかける、肝の据わった者がいた。

「ねえ、黒い方のジャンヌ。」

君さえ良ければだけどさ、カルデアに来ない?」

「へっ……はああああああっ!!!?」

何馬鹿なこと言ってるのよ、私はあんた達の敵だったのよ!!」

「気にすることはないって、そんなの定番だから」

「何の!？」

「……冗談に聞こえかねないような話は、とりあえず一旦置いて。」

真面目に誘うよ、黒いジャンヌ……このまま消えるの、悔しくない？」

「……!!」

「ジル・ド・レエが、最後に願ってくれたように。」

ジャンヌの偽物でも、他の誰でもない君自身の人生を、もっと生きてみたいって思わない?」

「……………思わない訳がないじゃない。」

だけどそんなことは無理よ、いくら願ったって私がまともなサーヴァントとは違うっていう事実は変わらないわ。

還る座が存在しない以上、私の記録は残らない……私という存在は、もう此れつきりよ」

「それは、ちょっと違うんじゃないかな。」

君がジャンヌ・ダルクの暗黒面だって聞いた時に、それを疑うことなく納得したのはどうしてだったと思う?」

「…………あれだけの仕打ちを受けておきながら、怒ることも恨むこともなかった奴がいたなんて、まともな思考では考えられなかったからでしょう？」

「その通り……だから俺は、どっちが本物でどっちが偽物とかじゃなく、俺達とずっと一緒だった聖女のジャンヌも、敵対した魔女の君も、どっちも紛れもない『ジャンヌ・ダルク』だって思ってた。

そして、そんな俺の考えが『普通』のものならば、同じように『堕ちた聖女』の概念や可能性を想像した人は、多分沢山いるんじゃないかな」

「……馬鹿馬鹿しい、あり得ないでしょうそんなこと」

「実際あるんだって、『ドリ〇ターズ』とか『グラン〇ルーファンタジー』とかで結構人気キャラだよ？」

「マジで!？」

「立香さん、それは本当ですか!？」

驚愕のあまりに、軽くキャラ崩壊をしながら目を剥いてしまっていた黒いジャンヌは、その声が二つ重なって響いたことに荒ぶりがけた思考を一瞬で静止させ、も

う片方が聞こえてきた方向へと向けてゆっくりと振り返る。

その先に予想通りの光景を、目と口を開きながら酷く驚いた様子のジャンヌの姿を見てしまった黒いジャンヌの口元が、何度か見た覚えのある邪悪そのものな笑みを浮かべた。

「へえー、そうなの……生憎だったわねえ、聖女サマ。

あんたが如何にお綺麗であろうとも、後の世の人達はそれを信じていなかったそうよ。

この疑いようもない現実を、一体どう受け止められるおつもりかしら？」

「どうだなんて、こんな、こんな………こんな素晴らしく、喜ばしいことが他にありませんか!!」

ああ主よ、幾重にも感謝いたします!!」

「何でよ!!?」

腹と心の底から吐き出された渾身の突っ込み、その後が続けなかった何かしらの

言葉は、体を急に引かれ、何やら柔らかいものに顔から飛び込んだことによって妨げられた。

数秒遅れて抱きしめられたことに気付き、カッとなってその腕を振り払うよりも、記憶に無い『家族』の温かさとはこのようなものかと思わせるような優しい声が、耳に届く方が先だった。

「だってそうでしょう、もう一人の私。

あなたという存在は此れつきりなどではなかった、この世界に確かに受け入れられていた。

あなたの還る場所は、人々の愛と信仰の中に確かに存在していたのです」

「……聖女サマの思考回路は訳が分からないわ。

『堕ちた聖女』という概念のどこに、愛なんてお綺麗なものが存在していると言うの」

「あなたがそれを言いますか。

美しく真面なものだとはとても言えない形の愛を、一身に与えられていたあなた

が」

ほんの少し呆れ、窘めるような口調でそう言われた黒いジャンヌの脳裏に、鮮明な人影が浮かび上がった。

彼の所業、その存在はあまりにも邪悪だった……誰に聞いてもそう返されるだろうし、他でもない自分自身だって属性としてそう認識している。

だけど、そんな彼が自分にだけは間違いなく優しかったことを、形こそ歪んではいたけれど心から愛してくれたことを、今の自分は疑いようもなく信じている。

優しく、美しく、温かく、分かりやすくもないけれど、それでも確かに『愛』と言えるものがある。

そんなひとつの真実を、黒いジャンヌは与えられた記憶ではなく、自分自身が得た経験と認識によって手に入れた。

「人々の信仰と認識の中に、受け皿となり得る概念が確かに存在するのならば。存在と逸話を積むことでそれを強化すれば、あなたという不安定な存在を確固た

るものにできるかもしれません。

……だからここは、どうか立香さんの提案を受け入れて。

生きたいと願うあなた自身と、あなたに幸せになってほしいと願ったジルのために」

自身の腕の中で黙り込んでしまった鏡写しの存在を、ジャンヌはそっと胸元から離し、息を呑む立香と向き合わせた。

長い長い沈黙が始まる。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……………カルデアって、相当な人手不足なのね。

紛れもない人理の敵だった私にまで、スカウトをかけずにはいられないくらいに」
「確かに人員はサーヴァント含めてもカツカツだけど、君を誘いたかったのはそれが理由ってわけじゃ……………」

真意を誤解されては堪らないと、慌てて弁明しようとした立香の声は、彼から見てジャンヌを挟んだ向こう側で笑いながら、口元に人差し指を当てていたリンクの挙動によって止められた。

その意味、理由を察した立香が、その顔に満面の笑みを浮かべることとなるのは、そのすぐ後のこととなる。

『竜の魔女』たるこの私の力が必要だと、そこまでして望むと言うのならば。

その……………応えてやるのも、吝かではありませんけれど」

「……………ああそうだ、助けてほしい。

俺達に、カルデアに、人理に、どうか君の力を貸してくれ」

努めて邪惡そうな表情を作りながら、満足げに鼻を鳴らしてみせた彼女は、想像すらしていないのだろう。

誘われて嬉しかったけれど、応えたかったのが本心だけど、それをあからさまに喜んでみせるのは癪だし、軽く意趣返しをしてやりたいという子供じみた内心が、ものの見事に見抜かれてしまっていたことを。

満足げに胸を張った彼女の姿が、見た目よりもずっと幼いものに見えて仕方がなくて、込み上げるものを必死に堪えた者は多かった。

「そこまで言うのなら仕方がないわ。

この私が、魔女たるジャンヌ・ダルクが、不甲斐ないカルデアの為に力を貸してあげるとしましょう」

望んだ言葉をようやく得られて、殆ど反射で固く拳を握り、それを突き上げながら歓声を上げ……かけた立香の挙動が、中途半端なところで凍り付いた。

仲間となることを、カルデアへと共に帰ることを承諾してくれた筈の彼女の体が、端から光の粒子となって徐々に消滅していつているのだから。

「じゃ、ジャンヌ、どうして!!」

何が起こってんの、俺何か間違えた!？」

「落ち着きなさい、予定調和よ。」

あんた、私が聖杯から作られた存在だってこと忘れてないでしょうね」

「それとこの状況に何の関係が!？」

「……センパイ。」

大変な事態の連続だったので無理ありませんが、忘れてしまっているようなので今一度説明をします。

特異点を修正するためには、それを作り上げた黒幕を倒すだけでなく、発生の原因である聖杯を回収する必要があるのです。

今回の場合、黒幕はジル・ド・レエ……そして、回収すべき聖杯とは恐らく、黒いジャンヌさん自身のこと」

「つまり、聖杯を手に入れて人理修復の工程を先に進めるためには、どうしても私は一度消滅しなければならぬのよ」

「……クー・フリーンやエミヤ達は、冬木の記憶を持ったまま来てくれたけど、それは本当ならあり得ない筈のことだって言っていた。

カルデアに戻ってから改めて呼んだとして、今ここにいる君自身が、君のまま来てくれるって可能性はどれくらい？」

「さあね、私には分からないわ」

「……………ごめん。」

俺、そんなつもりじゃ」

「謝らなくていいわよ、あんたに器用な真似はできないってもうわかっているんだから。」

言っておくけどね……僅かな奇跡に期待してもいいんじゃないかって、駄目だったとしてもそれはそれでまあいいかって、思わせてくれたのはあんたなのよ？

……胸を張りなさい、この私のマスターでしょう」

グツと言葉を詰まらせ、両目を溢れる一步手前まで滲ませながらも懸命に拭い、精一杯に笑ってみせてくれた立香に、黒いジャンヌもまた、感謝の気持ちを込めた精一杯に素直な笑みで応える。

既に半分以上が消えてしまった体で、これが最後と思って動かした視線の先に、切なさや希望が半々になっているような顔を揃って浮かべている者達の中でただ一人、心配することなんて何もないと言わんばかりに笑っている奴を見つけた。

「またな、魔女のジャンヌ」

「……ええ。」

またね、エセ勇者様」

その言葉と笑顔を最後に、完全に消滅した黒いジャンヌ。

彼女が今の今まで立っていたところに、甲高く硬質な金属音を立てながら落下した『聖杯』を、無言で歩み寄ったマシユの手がしっかりと掴み上げた。

予想外に長くなってしまったので、区切りのあるところで一旦分けました。
今年の夏イベが始まるまでに、何とか第一特異点を終わらせたいと思います。

天文台に集う

定礎復元

A・D・1431年 邪竜百年戦争オルレアン

救国の聖処女

「お帰り、マシユ、立香君！

お疲れさま！

初のグラントオーダーは、君達のおかげで無事遂行された！」

眩い光の渦を越える……そんな、そろそろ馴染んできたと言っても良いであろうレイシフトの感覚を経ながら、何とか無事に、カルデアへの帰還を遂げた二人と一匹。

彼らが立ち向かい、乗り越えてきた困難の全てを見守っていた者達に、拍手と歓声によって迎えられたことで、彼らはようやく『帰ってこられた』ことを認識した。無機質な人工物ばかりで、土も緑もあり無くて、建物の外は絶えることのない猛吹雪で、その向こうは何もかもが焼き尽くされてしまった後の世界で。

人員と設備の殆どを失いながらも、残された者達の力によって辛うじて稼働を続けているここは、文字通り人理の最後の砦で。

人が生きる環境としては、例え竜や怪物が闊歩していたとしても、フランスの方がずっと恵まれていたのだろうけれど。

それでもここが、壊滅寸前まで追い詰められた状況で懸命に抗う、仲間達が待ってくれているカルデアこそが帰る場所なのだと。

立香達は、胸に込み上げる熱いものと共に、改めて実感していた。

「ドクター、みんな、ありがとう。」

マシュと、フオウも一緒に、ちゃんと帰ってきたよ」

「うん、本当によくやってくれた。」

補給物資も乏しい、人員もない。

そして実験段階のレイシフトという最悪の状況で、君達はこれ以上ない成果を出してくれた」

「……いいえ、ドクター・ロマン。」

それは決して、『私達』だけで成し遂げたものではありません。

彼がいなければ……最初にあの人と出会い、その協力を得られたという望外の幸運が無ければ、今回のオーダーは果たしてどうなっていたことか」

「そうだねえ、そんな『もしも』を想像すらしたくないレベルで色々と助けられ……

……」

「ドクター、どうかしましたか？」

「あ、いや……今更かもしれないんだけどさ。」

リンク君って、名前だけじゃなくて本当に伝説の勇者様だったんだなって思っ

たら、緊張というか興奮というか、何か色々と込み上げてきて」

「ほんとと今更だよ、今までずっと何だと思ってたわけ!？」

「頭ではちゃんとわかってたんだよ!!」

ただずっと、計測とか存在証明とか、サポートするのに必死で、そのことについて落ち着いて考える余裕が無くて……ああどうしよう、本格的にドキドキしてきた!!

凄いなあ……僕たちは知らないうちに、『伝説』の続きを目の当たりにしていたんだ」

大きく息を吐きながら、感慨深げに呟かれたロマニの言葉は、居合わせていた全ての者の代弁だった。

彼の生き様や旅路はあらゆる冒険譚の原典であり、彼という存在はあらゆる英雄の祖である。

彼に憧れ、彼のようになりたいと、彼のように生きたいと志し、その果てに英雄となって世界や歴史を大きく動かした者が、果たしてどれだけいたことか。

「勇者リンクは……いや。」

リンク君は、誰よりも強く、どんな時も冷静で、頭の回転が速くて、敵と認識した相手には容赦なくて、怒らせると怖くて、すぐ単独行動に出る悪い癖があつて。勇者様ってこんな人なのかなって、想像していた通りにカッコよくて……想像していたよりも、ずっとずっと優しかった。

正しく『勇者』と呼ぶに相応しい人だったよ、これからの旅路も共にしてもらえたならどれだけ心強かったことか」

通信越しとはいえずっと見守り続けた旅路を、その中で共に笑っていた彼の姿を思い出したロマニの口元が、優しい笑みを形作る。

そんな彼へと、大変な任務を無事に成し遂げたばかりだというのに、何故か不安げな表情を浮かべたままだったマシュが恐る恐る声をかけた。

「ドクター、ひとつだけ宜しいですか」

「構わないよ、どうしたんだい？」

「自分では、どうも判断をつけ辛くて……忌憚の無い、正直な見解を所望します。

……最後の瞬間、ドクターから見て私は、リンクさんの教えを生かすことが出来ていましたか？」

「……遠慮なく、正直に言わせてもらうのなら、答えはノーだね。

努力していたことは認めるけどさ」

自身の望み通りに、彼が目にした事実を正直に口にしてくれたロマニの言葉に、マシュは力なく肩を落として項垂れた。

『辛い別れの時こそ笑顔で』……それが、道中に様々な旅の心得や知識を教えてくれたリンクの最後の言葉であり、今のマシュの心残りだった。

自信を持って言い切ったリンクと、賛同して頷くジャンヌ、二人が別れ際に見せてくれた笑顔は本当に美しかった。

自分も彼らのように笑えたらと、笑いたいと思った、その気持ちは紛れもない本物だったのに。

それが叶わなかった理由にマシュは気付いていた、ちゃんと自覚していた。

今のマシュには彼の言葉の意味がわからなかった、どうしても共感出来なかったから。

別れとは悲しいもの、寂しいもの、避けられるならば避けるべきものの筈ではないかと思ひながら、内心で首を傾げずにはいらなかったから。

「いちいち悲しんだり惜しんだりするなと……あれは、そういう意味だったのでしょうか」

「……マシュ、それは違うよ。」

リンク君は別れを軽んじていた訳じゃない、むしろその逆。

彼が言いたかったのは、悲しくて、寂しくて堪らないからこそ、一生懸命に笑うんだってことだと思う。

だって、悲しいのは会えて嬉しかったから、寂しいのは一緒に過ごした時間が楽しかったからこそだろう？

彼はただ、それを最後の最後まで大切にしていたんだよ」

ロマニの言葉に後頭部を殴られたかのような衝撃を受け、啞然と目と口を開けたマシュは、次の瞬間打ちのめされた。

自分も会えて嬉しかった、共に過ごすことが出来て本当に楽しかったのに。

そんな気持ちの表し方を折角教えてくれたのに気づくことが出来ず、曲解した挙句に伝え損ねてしまったことが、今になって残念で、悔しくて堪らない。

このまま膝から崩れてしまいそうな勢いで落ち込むマシュに、慌てたロマニがフォローする言葉を思いつくよりも、ひとまずの答えを得た彼女が顔を上げることの方が早かった。

「私、まだまだわからないことばかりです。

アマデウスさんが言っていた『何かを好きになる義務』も、『別れの時にこそ笑う』というリンクさんの教えも。

私よりも遥かに多くを見て、多くを知って、経験してきた彼らが辿り着いた答えなのだからきっと正しいのだと、頭では考えられるのに。

今までに得てきたほんの僅かな経験と偏った価値観では、今はまだ、それらの言葉を受けとめきれない。

……だけど私は、今はそれでいいんじゃないかなと思うのです。

生きるということは、自分だけの答えを見つけるということなのですから」

「多くのことを見て、知って、経験しながら、『あの言葉はこういうことだったんだ』って、自分なりの答え合わせを続けた先で。

『これが自分の人生だ』と言うことが出来たなら、それはきっと素晴らしいことなのです。

……例えばそれが、周りから見るとどんなに憐れで、痛々しいものだったとしても。『自分で決めたんだ』と胸を張って笑える、そんな生き方をしていきたいと思うのです」

それは、ほんの少し前にマシユの心に刻まれたばかりの、最も色鮮やかな憧れだった。

そして今のロマニには、そう言って笑うマシユの姿こそが、何よりも美しく尊い

輝きに思えていた。

「……………そうだね、僕もそう思う。」

いい出会い、いい経験をしてきたね、マシュ

「はいっ！」

「フォウッ！」

「あはははっ、フォウも頑張れってさ」

「ありがとうございますフォウさん、是非とも見守っていて下さいね」

そんなやり取りを続けていたマシュ達を、立香やダ・ヴィンチ、スタッフ一同の
声と呼ぶ。

計測したデータの分析やら何やらと山積みの事後処理を取りあえず横に置いて、
取って置きの保存食を解禁して、オーダー達成祝いに精一杯のご馳走を用意してく
れているというエミヤの下に皆で向かおうとした……………今はただ喜び合おうとした一
同の耳に、浮かれ気分を一瞬で吹き飛ばす耳障りな警告音が鳴り響いた。

一瞬で仕事モードを取り戻し、手近なモニターに張り付いて状況確認をし始めた一同の目に、とある異常事態の発生を示す情報が飛び込んでくる。

「そんなまさか、召喚用のサークルが勝手に動き出してる!？」

「何かを呼ぼうとしている……いや、何かが来ようとしているのかな、これは」

カルデアの最重要施設の一角である、サーヴァントの召喚施設。

ここ数日、誰も触るところか近づいてすらいらない筈のその魔法陣が、独りでに稼働を始めたという異常事態に、多くの者が息を呑んだ。

重要施設に何らかの不具合が生じたか、未だ全容を掴み切れていない敵がそこを介して侵攻しようとしているのか。

様々な悪い予想を脳裏に巡らせ、対応策を必死に考える一同の中にただ一人、全く別の可能性に辿り着いた者がいた。

「……………まさか」

「あつ、センパイ!？」

「待って立香君、この状況でどこに行くんだ!!」

マシユやロマニの止める声が聞こえていない筈なのに、その意味が理解できない訳でもない筈なのに。

それらを振り切つて駆け出した立香に続いて、ある者は彼を止めようと、ある者は彼にそんな突飛な行動を取らせた『何か』を見届けようとその背を追う。

問題なく利用できる、もしくは復旧に成功した区画が未だ少なく、本来の全容とは比べられない程に細やかなものとなつてしまっているカルデア施設内を確かな目的地を見据えて走つた立香は、程なくその場所へと辿り着いた。

肩で息をする立香の目に映るのは、素人魔術師である自分ですら肌に来るものを感じ取れてしまうほどの、膨大な魔力を湛えながら輝く魔方陣。

『危ない』『近づいては駄目』などと彼の身を案じる声が、後ろから幾つも聞こえてきたのだけれど、立香は構うことなく手を伸ばした。

恐ろしくはなかった、不安もなかった、何故なら既に知っていたから。

邪竜の炎から人々を守り抜いた、その美しい黄金の輝きを。

「素に銀と鉄、礎に石と契約の大公……」

少し恥ずかしく思うと同時に、それ以上に厨二心を擦られながらマスターの嗜みとして覚えた、それでも所々うろ覚えな召喚の呪文を必死に思い出しながら、一句一句慎重に唱えていった。

伸ばした手に刻まれた令呪の魔力と呼応し、詠唱が進むにつれて本格的に回り出した魔方陣の輝きは、既に直視が叶わないほどのものになっている。

それでも負けじと、懸命に詠唱を続けた立香の口が、ついに最後の一節までを紡ぎ切った。

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ!!」

「ああ、やっと道が繋がった。

ありがとな立香、お前の方からも手を伸ばしてくれて助かったよ。

……………何だその顔は。

まさか本気で、俺との付き合いがあれっきりだなんて思ってたんじゃないだろうな」

「少し前にちゃんと言っただろ？」

『本格的に仲間入りさせてもらう、意地でもついていく』って。

そのつもりでいたのが本当に俺だけだったとしたら、流石に酷いと思うんだけど。……でもまあ、こうしてちゃんと合流出たんだから、それに関してはもういいか。

折角だし、きちんと名乗りを上げさせてもらおう」

「俺はリンク、ハイラルの勇者リンクだ。

本当なら、俺の力が必要になるような事態なんて……世界の危機なんて、起こらないのが一番良かったんだけど。

現実としてこんなことになって、それでも諦められなかった人達の願いが届き、応えた以上は見過ごせるものか。

例えハイラルが遠い過去の遺物となっても、俺の為すべきことは変わらない。

今一度、世界を救ってみせよう」

「立香、マシユ、これからもよろしくな」

スクリーン越しではなく、すぐ目の前に勇者リンクが存在しているという事実を処理しきれず、呆然と立ち尽くすカルデア一同。

そんな彼らの目に、渾身のタツクルという形で表れた立香とマシユの感激を、不意打ちもあって受けとめきれずに頭から盛大に転倒して、伝説の勇者が召喚早々に目を回すという色々な意味で衝撃的な展開と映像が飛び込むことになるのは、もう間もなくのこと。

多少縮まらなくはあったけれど、それでもこれが紛れもなく。

人類最後のマスターと、最強の矛と盾として彼を助けたサーヴァント達の……世界の命運を負った三人の少年少女達の、本格的な人理修復の旅路の始まりだった。

キャンペーン期間中の育成にも力を入れたい中で、それでも夏イベ開始前に区切りをつけたいという気持ちから、何とか仕上げました。

第一特異点修復完了です、ここまでお付き合いいただきありがとうございました。夏イベ期間中はそちらに集中させていただいて、途中カルデアにおける日常の小話を幾つか書いて、その後で第二特異点に突入するつもりです。

先はまだまだ果て無いですが、何とか頑張って続けていきます。

これから、彼らの旅路を応援して下さい。

連載の初期からとある点について気をつけていて、コメントでもその旨を心配されたことがあります。

サーヴァントを始めとする本編の登場キャラをリンク（オリ主）の踏み台にするのではないか、リンクを相対的に格好よく見せるために敢えて扱いを悪くするのではないか、『さすがは伝説の勇者だ俺達には逆立ちしても敵わねえぜ！』みたいなスタンスにさせやしないか、ということですよ。

私自身が、オリ主の為に原作キャラが踏み台になる展開が凄く駄目なので、展開の都合上『扱いが悪い』と思われることはあったとしても、あくまで彼らの魅力と活躍を、偉大な英雄達なのだというを描けるように、心を配ってきました。

そういうつもりで書いているのだということは、今までの展開で示すことが出来ていたと思います。

これから出会うことになる多くの英雄達の活躍を書けるのが、今から楽しみです。前もって綿密にプロットを立てるのではなく、執筆と同時進行で展開を考える、

ぶっちゃけ行き当たりばったりなノリで物語を構成しているので、いざ書いてみれば自分でも驚きの展開になっていることが多くて面白いです。

例えば終盤の流れに関してなのですが、シャドウ・サーヴァントを回転斬りで一掃した辺りでは、ジャンヌ・オルタを助ける流れは一切考えていませんでした。

そこから終わりまでの展開を思いついたのも、その回の投稿を終えた後の話です。『終わり方どうしようかな、オルタとジルの始末をどんな形でつけようかな』……: と思いながら、玉座の間の扉をぶち破らせてました。

流れのまま、思いつくまま、リンク達が動くままに文章を綴った結果、自分でも本当に驚くほどいい結末を紡ぐことが出来て、やはり執筆は面白いと改めて実感したものです。

今後の展開に関してもこんな感じになると思うので、今後どんな感じで物語が進んでいくのかは、現時点では全く何も言えません。

使ってみたいネタは所々とあるのですが、物語の流れに乗った結果、上手く嵌らなくなってお蔵入りになる可能性は大いにありますし。

こんな行き当たりばったりな作品ではありますが、趣味に合うようでしたら、こ

れからも楽しんでいただければと思います。

ちなみにこの世界におけるサブカルチャーに関しては、Fate関連のシリーズ以外は普通にあるんじゃないかな、と思っていただけていいと思います。

任天堂が社の総力を挙げて作り上げた、『ゼルダの伝説』のシリーズなんかも存在しているかも？

少し前に『活動報告』で書いたインド兄弟のネタ、結構好評で良かったので、本格的に『この世界観における彼ら』ということで採用したいと思います。

加筆修正した上で、後日マテリアルの一環としてきちんと投稿したいです。

アンケートに投票して下さった方、目を通して下さった方、コメントを下さった方、本当にありがとうございます。

ゼルダの影響を受けたサーヴァント達のネタは、他にも少しずつですが考えています。

きちんと詰めた上で、いつか本編に反映させてみたいですね。

……ちょっとだけ考えているのは、『弱い自分』『悪い自分』を受け入れて共生することこそが真の『勇氣』であり、人間の在るべき姿なのではないかと考えて、自

分の中にそういう要素が見当たらない。自分は人間として歪かつ異様なのではないかと悩んだ挙句に悪性を具現化させる薬に手を出し、自身の悪を司る人格との歩み寄りを向こう側にドン引きされながらもめげずに志す密かな狂人ジキルとか。

カルデアの日常 1

天文台の食堂物語

「ただの一時凌ぎになるかもしれないけれど、食材に関してはどうにか出来ると思う」

リンクがそんなことを言いだしたのは、彼が本当の意味でカルデアの一員となった後。

人間もサーヴァントも関係なくカルデアに所属する全員が、容易く数え切ることが出来る程度の人数が集まって、食堂の主たるエミヤが保存食に懸命なアレンジを

加えた細やかなご馳走を皆で囲んで、グラントオーダーの達成祝いにリンクの歓迎式という意味合いも加わったひと時を、楽しく過ごした翌朝のことだった。

エミヤの持て成しとカルデア一同の歓迎こそ、素直に受け止めて喜んではいたものの、察してしまった食事情に関しては流石に思うところがあつたのだろう。

明らかな問題点、改善点を見出した上で放っておける性質ではなかった彼は、責任者や首脳陣に声をかけて、臆することなく自身の考えを口にした。

思いもよらないことを告げられて呆氣にとられたロマニをよそに、興味津々に目を輝かせたのは、リンクが自信を持って言い切ったその『手段』に対して興味を抱いたダ・ヴィンチだった。

「で、具体的にどうするつもりなんだい？

協力が必要なら出来る限りのことはするよ、美味しいものの誘惑にはサーヴァントになったとしても抗い難いものさ」

「これを使う」

「そ、それはまさか……!?」

あからさまに声を上げたロマニほどではなかったとしても、ダ・ヴィンチも確かに驚いて軽く目を剥いた。

リンクが手に取ったものは、彼が腰元に下げていた手のひらサイズよりも少々大きな、一見しただけならばただの石板にしか見えないであろう代物。

しかし、フランスの特異点にて使用される光景を直接目の当たりにした上に、『伝説』を隅から隅まで既読の彼らからすれば、それが何であるのかを予想することは容易かった。

「シーカーストーン……超技術を以って古代文明を発展させたシーカー族が、その叡智を結集させたという代物だね。

強力な魔術を即時発動させる媒介となったり、道具や武器を情報化した上で収納したりといった様々な機能で、勇者の旅路を手助けしたとされているよ」

「その通りなんだけど……ほんと皆、何でそんなに詳しく知ってるわけ？

……それに関しては今はいいか、話を戻そう。

問題なく使えるかどうか、色々と仕様確認をされていて気がついたんだけど、宝具になったことで機能が更に増えていたみたいなんだ。

前は収納したものをそのまま取り出すだけだったのが、それに加えて、一度入れたものの情報を記録して、魔力リソースと引き換えではあるけれどそれを生成することが出来るようになってる」

「凄いなそれ!!」

「そ、その魔力リソースって、何か専用の特別なものじゃないと駄目だったりするのかい!？」

「ものによって効率の良し悪しはあるけれど、それでも基本は何でもいいみたい。中に取り込んだものを必要に応じて魔力に変換して、蓄積したりリソースを別のものの生成に消費する。」

「……商品の売り買いでイメージしてもらうのがわかりやすいかな、売値が安いものでもたくさん売れば高価なものを買えるってこと」

「それで、今現在で作れるものは何!？」

「俺がハイラルにいた頃に手に入れて、この中にしまったことがあるものは大体行

けそうだ。

食材関係も結構な種類が揃ってる、リソース用の魔力さえ融通してもらえれば昼食には間に合わせられるよ」

「ダ・ヴィンチ、そっちに回してもいいと思えるものを片っ端から持って来て!!」

立香やマシュ達の食事シーンを前にしても、果たすべき役目への責任感や育ち盛りの少年達がきちんと食事を取れていることへの安堵の方が上回ったことで我慢出ていたものが、確かな打開策を目の前に出されたことで一気に崩壊した。

指示されるや否や自身の工房へとすっ飛んでいったダ・ヴィンチに、道中鉢合わせして事情を聞いた者達がそれを更に拡散させて、最終的にはカルデア中の者達が話を聞きつけ、待っている時間も惜しいと言わんばかりに時間外れの食堂へと集まってきた。

揃いも揃って目を爛々と輝かせながら、異様な迫力を醸し出してくる一同に若干気圧されて引きながらも、皆それだけ限界なのだと、そんな状況で頑張っていたのだということ改めて認識し、その気持ちを壁面を滑る指の速さへと反映させる。

そうして、当初の思惑通りに魔力リソースから目的の素材を生成することに成功したリンクだったが、ここで想定外の問題が発覚した。

食堂に並べられている長机のひとつを占領して、野菜や果物、魚などといった新鮮な食材が広げられている。

リンクにとってそれは、常日頃から当たり前に食卓に並んでいたものであり、何の変哲もない日常の光景以外の何ものでもなかったのだが、自分以外の全員が揃って顔を引きつらせているという現実が、その認識が甘いものだったという事実を突きつけてくる。

「……………うん、まあ、思い出してみれば確かに、『ハイラルで手に入れたことがあるもの』って言っていたよ。」

こういうことになるのは、最初から分かり切っていた筈なんだよね」

「凄いです……長い歴史の中で、多くの人々が探し求めたハイラルのものがこんなにも」

「今の果物とか野菜に似てるっぽいのもあるけれど、でもやっぱりよく見れば全然

違うし。

DNA鑑定とかしたら凄いことになりそう……………え、マジで、これ食うの？

素人の一般人からしても、それってヤバくない？って思うんだけど？」

「いやいやいやそんな気にならなうて、普通に店で買って普通に食べてたやつだから！」

「それは十分わかるんだけど、ハイラルの時代のものってだけで僕達にとっては特別なんだよ…………」

「ン万年前の人達が食べてたもの、その時代に生息してたものってことになるからな…………」

「一般人にとっても魔術師にとっても垂涎の品だね、この山の中のたったひとつを手に入れるために金や宝石を積む奴が果たしてどれだけいることか」

リンクが必死にフォローを入れようと、立香達の顔色が戻る気配は伺えない。

このままでは埒が明かないと判断した彼は、苛立ち交じりで少し強めの口調となってしまうている声を上げた。

「あーもう面倒くさい、さっきまであれだけ必死になってた癖に何を躊躇っているんだか!!

とにかく一度食べてみる、そうすればそんな気にすることないってのがわかるから!!

エミヤ、何でもいいから作ってみて!!」

「えっ……………あ、いや、私としてもそうしたいのは山々なのだが。

如何せん見るのも初めての食材ばかりでは、いくら私とてどう扱ってやれば良いものか」

「……………あーそっか、その問題は無視できないな。

じゃあ今日のところは俺が主に作るから、エミヤは手伝ってほしい。
食材の種類とか特徴とか、下処理の仕方とか教えながらやるからさ」

「「「「「「「「えっ……………」」」」」」」」

「……………何だよ、揃いも揃ってその反応は。

それでも料理は結構得意なんだぞ、旅先では概ね自炊だったし、食べたい時はよ

く自分で作ってたし」

勇者リンクが小柄な体に見合わない健啖家で、よく周囲に手料理を振舞っていたという話は、逸話として確かに伝わっている。

一同が思わず声を上げてしまった理由はそこではない。

その旨を正確に指摘される前に、反応が悪かったことで逆にやる気を刺激されたらしいリンクは、狼狽えるエミヤの袖を引いて、山積みの食材を一旦回収したシーカーストーンと共に、さっさとキッチンへと向かってしまった。

「……………すごい字面だねえ、ハイラルの食材を使用して作った勇者リンクの手料理だよ？」

全部終わった後で魔術協会とかに知られようものなら、お偉いさん方白目剥いて引っくり返るんじゃないかなあ」

「やめてくれ、リアルに想像出来過ぎて今からお腹が痛くなりそう」

ダ・ヴィンチの言葉に思わず胃の辺りを押さえてしまったのは、ロマーニだけではなかった。

表向きはどうあれ、内心では対面する度に未だ密かに緊張していた勇者リンクに前触れなく腕を引かれてしまったエミヤは、例え相手が勇者であろうと、料理という特殊な分野においては遜色なく接することが出来る筈だと、内心で懸命に己を奮い立たせた。

しかしそれも、現代の感覚や認識では到底計り知れないハイラルの常識を突きつけられることで、敢え無く揺るがされてしまう。

「……リンク、一体何をしているのかね」

「使いやすいように、まず食材を分けてるんだけど」

「脈絡なくごちゃ混ぜになっているようにしか見えないのだが」

使いやすく分けると聞いてエミヤが思い浮かべるのは、果物は果物、野菜は野菜、魚は魚といった括りで纏めるといったものだった。

しかし、リンクが彼の基準で分けたい目の前のそれからは、その纏まりを築くための基準というものが一切読み取れない。

リンクはその指摘がある程度予想していたらしく、特に気を悪くすることも無いまま、エミヤの疑問に答え始めた。

「こっちがツルギダケ、ツルギソウ、ツルギバナナとかの『ツルギ』系の食材で、料理に一時的な筋力増強効果を持たせることが出来る。

隣がヨロイダイ、ヨロイカボチャ、ヨロイダケといった『ヨロイ』系で、こちらも一時的だけど打たれ強くなれる。

こっちのマックストリュフやマックスラディッシュとかの『マックス』系は、怪我や体力の急速回復効果があるから多めに用意したかったんだけど、生成に必要な魔力量が相応に多くてあまり作れなかったんだよな。

『ゴーゴー』や『シノビ』の効果は便利だけど、カルデアにいる間はあまり使えないから今回はちょっと少なめで」

「待て待て待て待てちょっと待て頼む後生だから待ってくれ!!」

取り繕える余裕などありはしなかった。

美しい顔と宝石の瞳に、ドン引かれるのにも構わず詰め寄った。

『魔術使い』としての自分が、全力で奇声を上げていた。

「これらの食材には、其の物に魔術的な効果があるのか!？」

「…………ごめんエミヤ、ちょっと聞かせてもらっていい？」

俺の頃は、目当ての効果をつけた料理を事前に食べることで能力に補正をかけるってのは普通にやっていたことなんだけど、今この時代においてはどうなってるの？」

「…………ごく一般的な料理に対して求められるのは、単純にエネルギーや栄養の補給、更には味を楽しむことのみだ。」

魔術師ならば、食事を通して何かしらの魔術効果を発揮させる研究をしている者も、中にはいるかもしれないが…………幾つもの行程が必要で手間がかかる上に、効果を得られるのがそれを食べた者だけというのは、普通に考えて非効率極まりないか

らな。

まともな成果を出している者は、恐らくいないだろう」

「……………そっかー。」

事前に気づいて良かった、効果付きの奴を普通に出してたら後で大騒ぎになってただろうな」

「私としても、念のため聞かせてもらいたいのだが…………これらの食材は、特殊な工程を経て栽培された、生産法や入手経路が極限られている特別なものというわけではないのだな？」

「野菜は普通の農家で普通に作ってたものだし、キノコや野草の類も、採れる場所で探せば普通に見つかる山菜だよ」

「ハイラルは魔境か…っ!？」

「魔境って、俺の故郷なんだけど…………」

思考を一瞬で埋めた紛れもない本音を、殆どその場の勢いで吐き出してしまったエミヤは、それに続いた苦笑交じりの呟きに顔から血の気が一気に引く思いを味わ

わされ、皮肉屋を取り繕う余裕も無いまま慌てて頭を下げ、笑いながらあっさりと許された。

「気にしないでいいよ。」

実際にここまで大きな違いが出ているようなら、そう思うのは無理もないし。

……………ああ、でもなあ」

本当に、遠いところまで来ちゃったんだなあ。

……そんな、何気ないものでありながら酷く寂しげな呟きが、先程のものよりも鋭く、そして鮮明に、エミヤの心に突き刺さった。

尊敬と畏怖から来る緊張こそ未だに抜け切れてはいないものの、あの旅路の多くを見守っていたエミヤは既に、勇者リンクが立香やマシュよりも年下の少年であるという事実を正しい意味で受け止めている。

そんな子が、慣れ親しんだ故郷、時代、世界から独り置いていかれ、その事実を改めて突きつけられたことに、ショックを受けないわけがない。

気づかず止まってしまっていた息を大きく吸い、また吐き出したエミヤは、彼ら子供で自分は大人なのだと、自分自身に努めて言い聞かせながらゆっくりと口を開いた。

「リンク……私に、君の故郷の味を教えてはくれないかね。

君が望んだ時、意識せずとも欲した時に、当たり前に応えられるようになりたいのだよ」

その言葉を受けて一瞬呆気にとられたリンクは、次の瞬間、本当に嬉しそうな、エミヤが思わず見蕩れてしまう程に綺麗な笑みを浮かべながら頷いた。

そこから先の流れは、始まりで多少もたついたことが嘘だったかのように、順調かつ和やかな雰囲気が進められた。

煮込み料理の鍋をかき混ぜながら、気分が乗ってきたのか微かに鼻唄を奏でたりリンクに、彼が優れた音楽の才を持っていることを知っていたエミヤは、密かな役得と思いながらもそれ以上無暗に声をかけたりはせず、そっと自身の作業に戻っ

ただのだけれど。

この場にもしアマデウスがいたならば、皆に先駆けて目を剥いていたであろう事実に、生憎と彼は気付くことが出来なかった。

色々な意味で気後れをしていた一同がその気概を保っていたのは、温かい湯気と美味しそうな匂いを立ち昇らせる現物が、目の前にズラリと並べられるまでのことだった。

一人一人の注文を受けるのではなく、色々な料理をとにかく作って、好きなものを各自選んで食べてもらうという簡易的なバイキング形式の食事は、先日の祝勝会及び歓迎会よりもずっと豪華で、賑やかで、笑顔が溢れるものとなっていた。

その状況を不満に思える者がいるとすれば、限られた食料物資を必死にやり繰りして、何とか祝いの席と言えるものを整えた苦勞を、一瞬で上書きされてしまったエミヤくらいだっただろう。

しかしそのエミヤこそが、皆が自身の作った料理を、妥協を積み重ねた間に合わせではなく本当の自信作だと言えるものを食べながら笑っている光景を、誰よりも満足そうに見つめていた。

「美味しいです、これがエミヤさんの本気の料理なんですね!!」

「流石だねえ、初見のものばかりの食材をよくぞここまで使いこなしたものだ」

「恥ずかしながら、下処理はほぼリンクに丸投げしてしまったよ。」

それでも、流れの中できちんと教わったし、実際扱ってみれば現代の食材とあまり違いはなかったから、次からは私だけで問題なく調理出来るだろう。

今後の食事には、是非とも期待してくれたまえ」

「結局、ハイラルの食材を今後とも扱っていくのは決定事項なんだね……」

「割り切ろうドクター、美味しいものを毎日食べられるってことが一番大事なんだから」

「紛れもなく同感だね、お代わりをもらおうよ!」

遠慮も戸惑いも既に口だけで、ハイラル100%の料理に誰もが全力で舌鼓を打つ光景を前に、ハイラル産食材の秘密を明らかにする日は近そうだと、エミヤは内心で密かに呟いた。

食材の効果は別種のを混せて調理することで相殺されるらしく、通常ならば失敗扱いらしいそれを、今回に限っては敢えて狙った。

その合間を縫ってリンクは、驚愕を通り越した先でそれ以上の興味が湧いたらしいエミヤの為に、効果がきちんと発揮される組み合わせで簡単な料理を作り、賄い扱いで振る舞ってくれた。

防御力が増すというヨロイソウとヨロイダケの組み合わせで作られた炒め物は、山菜とキノコの風味を余すことなく生かした絶品だった上に、食べた時点で実感出来る程の効果が即座に現れた。

これを日々の仕事や任務の中に、当たり前前の要素として組み込むことが出来たならば、誰もが大いに助けられることだろうという確信が既にある。

その時が一刻も早く訪れることを願いながらも、今この時のカルデアでその認識を共有しているのが自分とリンクだけなのだという密かな優越感が、皆に悪いと思いながらも心地よかった。

このまま最後まで、穏やかかつ和やかに終わると誰もが思っていた状況に、誰もが全く予想しえなかった爆弾が急遽投げ込まれることとなるのは、このすぐ後のこ

となる。

「シチューが凄い美味しいよ、マシユも食べてみて！」

「はいセンパイ、いただきます。」

……本当に美味しい、野菜にしっかり味が沁みています」

「それは、確かりンクが………ちょっと待て。」

マスター、ひと口頂いても？」

急に様子が変わったことに、首を傾げながらも頷いた立香の厚意に甘えて、エミヤは彼が持っていた器に匙を入れた。

具材の芯まで染みている熱さに少しだけ妨げられながらも、ゆっくりと味わいながら咀嚼を続けたその表情が、ますます訝しげなものとなる。

「おかしい、これは美味すぎる……圧力鍋を使った訳でもないのに、芯までしっかりと解れている。」

これだけの味をただ煮込むだけで出すためには、少なくとも数時間は要する筈なのだが……」

そんなに長い時間を調理に費やしてはいなかったことは、共に作業していた自分が一番良く知っている。

僅かな、それでいて深刻な疑問に答えたのは、すぐ近くで健啖家の逸話に相応しい食べっぷりを見せていた当の本人だった。

「ああ、そのシチューね。

美味しく仕上げられるのに時間がかかりそうだったから、少しズルして『時の重ね歌』で鍋だけ時間経過を早めてみたんだけど」

上手くいってた？

……という発言の終わり部分は、居合わせていた全員が口の中のものを一斉に吹き出した轟音によって、敢え無く掻き消されてしまったのだった。

「……………えっ、ちょ、なになに、皆どうしたの!？」

「あ、あのねリンク君……時間操作なんて超々高レベルの魔術の行使を、文字通り鼻嗅感覚であっさりと、それもシチューの煮込み時間短縮なんてものに気軽に使われたらね、全世界津々浦々古今東西の魔術師達の立場ってものがね……………」

本人に悪気や落ち度は全く無いとはいえ、この調子で無自覚なままハイラルのノリで動かれては周りの心臓が幾つあっても足りない、現代の常識や魔術の基本認識に関する講座が開かれることとなるのは……思いがけない大ダメージを食らって沈んだ一同が再起動を果たすために必要な、多少の時間を経た後のこと。

今のリンクは、一瞬で死屍累々となってしまった食堂で啞然と目を点にしながら、一人立ち尽くすのみであった。

撃墜された者達が何とか復活を果たし、世間に疎いマッシュや新米魔術師の立香も加わった一般常識及び魔術に対する基本的な講座が行われ、カルデアに平穩が戻ってきた頃。

ようやくと本格的な稼働が始まった食堂の一角に、軽率な振る舞いを反省するリンクの姿があった。

「皆を驚かせたことに對しては、確かに反省したけれど……折角の能力を生かせないのは勿体ないし、やっぱり違うと思うなあ」

「お前、実は全っ然懲りてないだろ」

「でも確かに、あれだけ凄い力なのですから、何かに役立ててみたいですね」

反省しつつも不満を露わにふて腐れるリンクと、それを苦笑いで慰める立香とマシュ。

そんな彼らの前に、フルーツをふんだんに使用した小ぶりのホールケーキが、三人分の取り皿とティーセットと共に突如差し入れられた。

驚いて振り向いた先にいたのは、執事然とした笑みと振る舞いが異様に板についている食堂の主だった。

「エミヤ、これってもしかしてハイラルのフルーツを使ってる!？」

「試作品だよ、今後の参考として感想を頂きたいのだが如何かね」

「はい、いただきます！」

「凄いな、エミヤってケーキまで作れるんだ！」

甘味を前に目を輝かせる三人の姿に微笑ましそうに笑いながら、エミヤは慣れた様子でケーキを三等分に分ける。

絶妙な抽出具合を見計らったお茶と共に、それらを遠慮なく堪能し始めた彼らに……と言うよりリンクに、エミヤは意を決して話を切り出した。

「実は、リンク……そのケーキと引き換えにという訳ではないのだが、君に是非とも頼みたいことがある」

フォークを咥えながら軽く目を瞬いたリンクと、必然的に共に聞くことになった立香達が耳にしたのは、つい先日の騒動を丸ごと引っ繰り返すような突拍子もない

『頼みごと』だった。

嘩然と目と口を丸くさせたままのリンクとマシユをよそに、一足先に己を取り戻した立香が思わずといった様子で声を張り上げる。

「ちょっと……待って待って、エミヤってば何言ってるの！」

その発想がとんでもないってことくらい、素人魔術師の俺にだってわかるんだけど!？」

「当然だ、十分すぎる程に自覚しているとも……こんな発想を実行どころか、抱いてしまった時点で、まともな魔術師ならば私の正気を疑うことだろう。

だが私は考えてしまった、そんな『もしも』を想像してしまった、その先で得られるであろうものを明確に思い描いてしまったのだ!!

マスター、君も日本人ならばわかるだろう!？」

「……ああ分かるよ、ぶっちゃけ凄く分かる、だけどやっぱりそれは流石に」

「もう一度、今度はハッキリと言うぞ!!

マスター、君は、味噌汁を飲みたくはないか!?!？」

「飲みだいっ！……！」

血を吐き、血の涙を流していないのが不思議に思えるほどの迫力と痛々しきでその言葉を吐き出し、同じ焦燥を纏うエミヤと固く固く手を取り合う、自分達のマスターの異様な姿を前に、リンクとマシュはただひたすらに呆然としていた。

こうしてカルデアには、立香とエミヤの今にも燃え上りそうな程に熱のこもった主張と、勢いに負けて全面的な協力を約束したリンク、同じくごり押しされて半ば強引に許可をもぎ取られたロマニという経緯を経て、ごく一般的な魔術師が知れば間違はなく白目を剥いて泡を吹いた挙句に引っ繰り返るであろう代物が、文字通りの『魔法の熟成室』が誕生した。

「これがっ、マスターとエミヤさんがあれ程にまで熱望されたお味噌汁……っ！」

「成る程な、確かに美味しい癖になりそう」

「うおおおお日本人で良かったあああああっ!!」

「自家製チーズにハム、拘りの漬け物……ふ、ふ、ふふふふふ。」

人理が焼き尽くされようとしている瀬戸際で、よもやこんなにも心が躍ることになろうとは!!」

「……………いや、流石にこれはやりすぎだろ。

美味いもんを食いてえってのはわかるけどな、そこまでなりふり構わず拘るような代物でもねえだろうが」

「……………慣れてきた頃合いを見計らって、酒の醸造にも挑んでみようと思っていたのだが。

成功したとしても君は要らないのだな、ケルトの大英雄がまさかそこまで己を律するとは思わなんだ」

「全面的に俺が間違ってたわ、メシの美味さは大事!!」

このような流れを経て、カルデアという組織の運用を続けるにあたって最も重要かつ深刻な問題のひとつだった食事情は、ひとまずの改善を迎えたのであった。

ダ・ヴィンチの勇者論

その日、名目として設定されていたのは、『シミュレーターの更なる機能向上に向けての問題点並びに改善点を調査及び把握することを目的とした稼働テスト』だった。

弾き出される結果と、その経過を記したデータさえきちんと形にされて、後で確認することさえ出来れば問題ない筈……更に言えば、そういった技術的なものに関わっていない面子に至っては、その旨を把握する以前に気にかかる必要すらも無かったものなのに。

その日特に予定が無かった者、予定を急いで終わらせたもしくは切り上げてきた

者達が、人間のスタッフだけでなくサーヴァント達まで含めて、一人、また一人とおペレーションルームの大画面の前に集まってくる。

そのことに対して、ロマネもダ・ヴィンチも苦笑するばかりで特に驚くことはなかったし、それどころかこの状況を殆ど確信していた。

そうして、結局はカルデア所属の全員が集まってしまった中で、シミュレーションは予定通りに始められた。

「全工程、準備完了だ」

「よし、それじゃあ……行くよリンク君、頑張て！」

大画面の中で一人頷いた勇者の姿を、多くの眼差しが一心に、色々な意味で固唾を呑みながら見守っていた。

その旨を最初に切り出し、希望したのは、他でもないリンク自身だった。

自分が、現状でどの程度のことが出るのかを確かめておきたい、とのこと。
何の裏も含みもなく、『どこまで』ではなく『どの程度』とあっさり言い切った

少年に密かな戦慄を覚えながら、ロマニはその提案に対して迷うことなく頷いた。間違いなく、何の疑いもなく、現時点におけるカルデアの最高戦力と称していいであろう彼の力量を正確に把握しておくことは、カルデア側としても非常に重要なことだったからだ。

その話は瞬く間にカルデア中に知れ渡り、稼働テストというよりは一大イベント的なノリで、期待と興奮の中で始められたそれは……数千年に及んできた人類史の中で、ただひたすらに募り続けて、もはや天高く聳えてしまっていた筈の期待と憧れのハードルを、それでも容易く飛び越えて余りあるほどのものだった。

「ああ悔しい、歯痒い、どうして今の私が手にしているのが絵筆ではないのだろう
!!

シミュレーションの最中だからだね、データを余すことなく記録するためには機材から離れるわけにはいかないからだね、分かっているよ!!

だけど気持ちばかりはどうしようもないのさ、多少愚痴る程度は許してくれたまえ!!」

心からの無念を口にしながらも、ダ・ヴィンチの目は、まるで初めて憧れというものを知った子供かのように光り輝いていた。

この後に待っている全ての作業と工程が無事に終わり次第、自身の工房（アトリエ）へと飛んで帰り、長い歴史の中で数えきれないほど取り扱われてきて、多くの傑作を生みだしてきた『勇者リンクの戦闘シーン』という題材に、更なる傑作を連ねさせるに違いない。

皆の期待に応えてやろう、むしろ超えてやろう、驚かせてやろう。

そんな気概やプレッシャーなど、彼は欠片も感じていなかっただろうに。

『特別』なことなど何もなく……ほんの少しスイッチを切り替えた、ただそれだけで、少年は歴戦を経た戦士となった。

戦闘用シミュレーターに元から用意されていたものに加えて、炎上する冬木の街で立香達が散々に囲まれたスケルトンや竜牙兵に、フランスの空を飛び交いながら人を襲い続けたワイバーンなど、新たに設定されたエネミー達が大量に、瞬く間に現れ、たった一人を取り囲む。

真っ先に飛びかかったその第一陣が、溜めた力を一気に解放した刃の回転によって一掃されたのを皮切りに始まった戦闘において、数の差などもはや問題にはならなかった。

華奢で小柄な、一見しただけならば到底強そうだとは思えないような美しい少年が、圧倒的な数の暴力にも怯まず、それどころか物ともせずに対戦……それだけで十分すぎる程に痛快で勇ましい、正しく英雄的な大活躍なのに。

スタツフどころか、サーヴァント達をも驚かせた勇者の真価は、そこから更に一歩踏み込んだところにあった。

これで何度目か、リンクの振るっていた剣がとあるエネミーの首を断ったのと同じ時に碎け散り、破片が地に落ちるよりも先に跡形もなく消滅する。

その光景に誰一人として、リンクだけでなくモニターの向こうで見守っていた者達も驚くことはない、これは今回のシミュレートにおける『仕様』であった。

武器を失った瞬間を隙と判断したのか、設定された攻撃パターンのままに上空から食らいついてきたワイバーンの横っ面を固い鱗に守られていることにも構わず粉碎し、牙を散らせるに留まらず本体まで吹っ飛ばしたほどの衝撃が襲った。

ワイバーンの頭を採掘される鉾脈の如くぶっ潰した大槌は、直前まで使用していた剣とは間合いも重さも扱い方も、何もかもが全く異なっているというのに。

このシミュレーションの中で既に何度も繰り返されてきた展開に、一瞬の躊躇いや反応の遅れが全て致命的となる状況に、リンクは悉く対応してみせた。

戦闘の真っ只中で、全くの前振りなしに武器の急な持ち替えを強制されるといふ、並の勇士や英雄ならば対応しきれずに死因となりかねない無茶ぶりをされているにも拘らず、そのことに対する不満も不自由さも、リンクの様子や表情からは全く感じられない。

それもその筈……変更のタイミングをランダムではなく『エネミーを一定数倒したごと』に設定しようとか、次にどんな武器が来るのかくらいは事前に告知しようとか、せめて変更予定の武器種を登録されている全種対応にするのはやめてもう少し絞ろうとかいうロマニの提案を全て却下し、戸惑う職員達に『無茶ぶり』を押し通したのは、他でもないリンク本人だったのだから。

何かが起こるタイミングや、それが具体的にどんなものなのか事前に判明することなど、『実戦』ではまず在り得ないのだからと言い切って。

「……彼に現代のキッチンの使い方を教えた際にも、似たようなことがあったのを思い出したよ。」

間違はなく初見である筈のもの、故に戸惑ったとしても無理のないようなものでも、彼には一回教えただけ、もしくはただ見せただけで十分なのだ」

『これ便利だなー』と感心しながら、まだ一度も使ったことが無い筈、使い方どころか用途すらまだ具体的には教えられていない筈、エミヤが使うところをただ一度見ていただけの筈のオーブンを迷うことなく、正しい方法と認識で扱い出したリンクに、エミヤは思わず自身の手を止めてそちらを凝視してしまいう程に驚いた。

その眼差しと、彼が何に対して驚いたのかにまで気付いたらしいリンクは、笑いながら、本当に何気ないといった様子で、固まりかけていたエミヤの思考に止めをさすひと言を口にした。

「こういうことが出来ないとあつという間に終わっていたのが、『俺達』の旅路だっ

たからなあ」

教わっていない、練習していない、やったことがない……そんな言い訳は、死んでしまった後では口にすることさえ出来ない。

手に入れた道具、身につけたもしくは与えられた能力を、とりあえず『これはこういうもののなのだ』とだけ受け止めて、理論や理屈などは二の次で使いこなすしかなかった。

生きるために、勝つために、その場でその瞬間に、とにかく出来るようにするしかなかった。

真つ当な師は己の弟子に、あんな無理、無茶、非効率の塊と称するべき戦い方を決して教えないだろうし、勝手に懂れた弟子が自主的に練習でもしようものなら、どんな方面でも中途半端でしかない器用貧乏の量産を食い止めるために、ぶん殴ってでもやめさせることだろう。

未来の理想像を、確かな目標を定めながら目指したのではなく、ただひたすらに今現在の困難を乗り越えるために、実戦の中で必要に駆られたことによって、磨か

れていった技と戦法。

それを一度の人生で終わらせず、世界を救う旅と戦いを何度も何度も繰り返しながら、代々の勇者達が自身の『魂』に意図せず累積させてきたものが、歴代の中でただ一人、全てを知りながら受け継いだ末代の彼の下で結実した。

何もかもを受け入れ、その上で何ものにも変じてみせる……時代と世代を越えて、聳える程に積み重ねた経験と勘が実現させた、臨機応変の究極系。

ある種の『武芸の極致』が、ひとつの到達点が、目の前に確かに存在していた。

そうして、リンクの実力を疑いようもなく知らしめながら、一切の問題も滞りもなく、素晴らしい結果を叩き出しながら終了したシミュレーション結果には、居合わせた誰もがこの上ない程に満足していたのだが。

「全っ然ダメだ、こんなんじゃ先が思いやられる！」

だからこそ、シミュレーターから帰還するなり、皆が用意していた労いや賞賛の言葉を受けるよりも先に、苦々しげな様子でそう言い切ったリンクに、誰もが驚い

て目を剥いた。

シミュレーション終了後の聞き取りを行うべく予め用意されていた席に、彼と向かい合って座ったダ・ヴィンチの瞳が、興味と疑惑が入り混じった怪しい光を放ち始める。

「何を以って『ダメ』だと思ったのか、それを聞かせてはくれないかい？」

「……いくつかあるけれど。」

まずは何よりも、俺自身の力不足」

「あれで足りないって言うのかい!？」

「全然だよ……本当なら俺は、もっともっと色々なことが出来る筈なのに」

悔しそうに呟きながら、徐にリンクが手のひらを返したその瞬間、何もない虚空に突如炎が発生した。

小さいながらも力強く渦巻きながら、リンクが広げた手のひらから少し上に収まっていた火球が、彼がその手を一振りしただけであっさりと消えてしまった光景

は、凄まじい神秘を宿していたそれが完全に彼の制御下にあったことを物語っている。

咄嗟に身を隠した物陰から恐る恐る顔を出したロマニが、まさかという表情で呟いた。

「リ、リンク君……それはもしかして、『ディンの炎』？」

「その通り。ハイラルにおける創世の三神が一柱、『力』の女神ディンの炎で、あの時代の大妖精様から授かった力だ。

本当なら、さっきのシミュレーションみたいな大勢の敵に囲まれた状況で、それを全部まとめ一掃する程度のことは出来る筈なのに……やろうとしたのに無理だった。

この程度の火球を出すのが精々なら、単純に武器を振るった方が、よほど早いし確実だから」

「……………まさか、君という奴は。

あの状況でただ戦うだけでなく、色々と試していたのかい？」

「……………??

今更何を驚いてるのさ、それをやる為のシミュレーションじゃなかったっけ」

首を傾げながら、心底疑問に思いつながら、あつさりと言つてのけたリンクに、柄にもなく背筋に冷たいものが走るのを感じたダ・ヴィンチだったけれど、辛うじて笑顔だけは保ちきった。

それと同時に、シミュレーション終了後の彼が、自身の戦果にこれっぽっちも満足していなかった理由を察して納得する。

彼自身は色々と試みていたというのに、それを傍から見ている自分達が何ひとつ気付かなかった、疑問に思わなかったということは、その目論見は悉く失敗していたということなのだから。

「そっか、そういえば……武器を振るう姿ばかりを見ていたせいで半ば忘れかけていたけれど、君の逸話や能力には、キャスター枠の適性に相応しいものも多く存在していたね」

「しかしリンクさん、それは仕方がないことなのではないでしょうか？

キヤスター枠での現界を果たした為に、代名詞的な武器である筈のゲイ・ボルクを所持できなかったクー・フーリンさんのように、クラスの制限に阻まれて英雄としての真価を発揮しきれない例はありますし」

「マシユの言うことは尤もなんだけど、彼の場合は少し状況が違うみたいなんだね。」

マシユ、それに立香君……君達は、リンク君のクラスが何なのかを把握しているかい？」

「リンクのクラスって、そういえばまだちゃんと聞いてなかった気がする。」

何かすっごい剣を持ってたし、セイバーじゃないの？」

「いいえセンパイ、確か以前ドクターが……リンクさんは7つのクラスのどれにも当て嵌まらない、未確認のエクストラクラスだと言っていたのを覚えています」
「流石は最古の大英雄、勇者リンクだと称するべき事実だね。」

人も集まっているし丁度いい、推測でしかない部分はまだ多いけれど、その旨についての見解を多少明らかにしておこうか」

得意顔でメガネをかけながら、目線のやり取りでロマニの許可を得たダ・ヴィンチは、自ら万能と自負する叡智が導いた推測や、辿り着いた答えの数々をゆっくりと口に始めた。

「リンク君、改めて確認をさせてもらうけれど……使える筈の能力が使えない、使えたとしても酷く弱体化しているという事実に対して、君は悩み、焦っていたね。しかしそれは、本来ならばおかしいことなんだ。

クラスの様組とはただ単に能力を制限するだけのものではなく、属性や精神性を含めて、英雄のひとつの側面のみを限定的に抽出するものだからね。

一旦枠に収まった以上は、外側に置いてきてしまったものには余程のことがない限り手は届かないし、サーヴァント達は本能で以ってそれを理解している。

クー・フリーンも、自身の真価である槍が使えないことを惜しんではいるけれど、別に執着はしていないだろう？」

「セイバーならば剣だけ、アーチャーならば弓だけ、キャスターならば魔ほ……魔術だけ。

……もどかしいなあ、どれを制限されても上手く立ち回りが出来なくなる自信がある」

「君の物語を知る誰もがそう思うだろうね。」

勇者リンクという存在の真価は、彼がその能力を余すことなく扱えてこそそのものだ。

故に私は、人々のそんな信仰じみた認識こそが、勇者たる君を当て嵌める為だけの、特別なエクストラクラスを作り出したと考えている。

その特性はズバリ、『勇者としての能力をその気になれば全て使える』ことだ。かつて扱えていた筈の力ではなく、自分の中に今現在確かに存在している筈の力を上手く揮えないことに、君は正しく焦っていたのだろう」

「……………はっ。」

あまりに突拍子もないことを言われたせいで、一瞬思考が止まってしまった。

待って待ってダ・ヴィンチ、君の言い分はおかしい！

『全ての能力を使える』ことがリンク君のクラスの特性だと君は言うけれど、だとしたら、それが出来ていない現状は一体何だと言うんだ！」

『使えない』の意味が違うんだよ、それは恐らくただ単に出力の限界の問題さ。

リンク君が備えている元々の力が10000だとして、サーヴァントの身で揮える力の限界が100だとしたら、いくらクラス特性が『全てを扱える』ことだとしても、物理的に制限されざるを得ないだろう？

クラスの枠組に囚われることなく全ての能力を扱えるけれど、代わりに、その真価を発揮することが出来ない。

それが君のクラス……仮称してエクストラクラス『勇者（ブレイヴ）』と、一先ずながら定義づけよう。

接尾辞の『er』（～する者）をつけずに、真の意味での体現者こそ彼だろうという事実への敬意を込めて、敢えての原形にさせてもらったよ」

キラリとメガネを光らせながら、自信満々に言い切ったダ・ヴィンチの言葉が、内容の突拍子のなさにも関わらず、居合わせた者達の心と思考に自然と染み込んでいく。

その理由が、彼（彼女）が口にした推測が実際に正しいものであったからだとい

うことは、誰もが自然と察していた。

目と口を開けながら数秒呆けた後に、大きな大きなため息をつきながら椅子の背凭れに体重を預けたリンクへと、得意げな笑みを深くしたダ・ヴィンチが声をかける。

「納得したかい？」

「まあね、おかげで無暗やたらと足掻く気は失せた。

要はどうにかして出力を増やすか、100の容量を有効活用するしかないわけだ。ちゃんと理由があつて、その解決法もハッキリしているなら、あとは何とかしてみせるさ」

「切り替えが早い上に前向きだねえ……うんうん、それはとても大切なことだよ。その旨は私も協力させて貰いたい、その為に、是非とも聞かせてもらいたいことがある。

君は自分という存在に関する何らかの推測を、幾つか君の内だけで留めているね。例えば……君が一体、『どの』リンクなのかという辺りとかさ」

ダ・ヴィンチの言葉の意味に気付けたのは、それを受けて彼（彼女）を見る表情を軽く顰めさせた、リンク本人だけだった。

理解出来ていない周りの者達への解説も込めて、ダ・ヴィンチは語り出す。

『勇者リンク』は伝説の最後にて自らを封印し、永き眠りについた……その事実によって彼は、ハイラルの時代から幾万の時を経た現代において、未だ生きているとも解釈できる。

そんな彼が、新たな世界の危機に駆けつけてくれたとなれば、既に自身の冒険と戦いを終わらせた伝説の只中の誰かではなく、今この時まで眠り続けていた最後のリンクだと考えるのが通常の流れだろう。

皆も、私もそう思った、そしてそれは恐らく正しい……しかし、だとすれば不自然なことが幾つかある。

例えば先程の『ディンの炎』、あれを扱えたリンクは『君』ではなかっただろう？」

「オルレアンの際に姿を見せていた、愛馬エポナだってそうだ。

エポナは勇者の頼れる相棒として有名だけれど、全てのリンクが彼女と旅路を共にしていた訳ではない。

彼女を知らないリンクの中には、マスターバイクを主な旅の供としていた『君』も含まれている。

それらの疑問に対する答えとして、独自の見解が既にあるというのならば、聞かせてはもらえないかな」

ダ・ヴィンチの言葉に少しでも息を呑んだりリンクは、乱れてしまった呼吸を整え、自身の胸元にそっと手を置きながら、話を続けた。

「……今の俺は、本当の意味で、『リンク』という存在そのものになっているんだと思う。

意識や自覚は、伝説を終わらせた『俺』自身のもので間違いないけれど……代々のリンク達が使用していた、俺としては知識として知っただけな筈の能力を普

通に使えるし、体だってちゃんと覚えているし。

リンク達の記憶や思い出が、感情移入を通り越して懐かしくて堪らないし……それを『俺のもの』だと思ふことに、違和感も罪悪感も無い。

表に出てきていないだけ、全部預けた上で任せてくれるだけで、多分『全員』がここにいる」

「……成る程、ある種の複合体として成り立っている訳か。

当人の望む望まざるに関わらず色々と混ざり合ったり、付け加えられたりした結果、生前の有り様とはかけ離れた姿や能力でサーヴァントが現界する例は、決して珍しいものではない。

他でもない私自身が、その括りに入れられるであろう一人だしね。

使えない筈の能力を使えたことへの疑問の答えは、それで間違いないだろう。

ありがとうリンク君、大いに参考になったよ」

生涯最高傑作の美貌に渾身の笑みを浮かべながら、その気になればどこまでも掘り下げることが出来たであろう話をあっさりと終わらせてしまったダ・ヴィンチ

に、リンクは驚いて目を瞬かせた。

そんなリンクへとダ・ヴィンチは、彼ならばそれだけで察してくれるという信頼と確信を以って、パチリと音が鳴りそうなウイंकを送る。

多感な幼少期に、神の横やりによって自己の認識というものをぐちゃぐちゃにされ、そのトラウマを今も確かに引きずりながら、今度は本当に、自分のようで自分ではない者達が混ぜ合わさった存在になってしまったという現状に、ショックを受けていない筈がない。

その事実を確認出来ただけで十分なのだと、不躰な好奇心から根掘り葉掘り引っぱり返すような真似をする気はないという意図を、ダ・ヴィンチの思惑通り察してくれたらしいリンクの表情が、分かりやすい安堵の気持ちを表した。

後は、立香やマシユ、ロマニ達と普通に日々を過ごしていく中で、その不安や恐れを少しずつ昇華していつてくれることだろう。

ダ・ヴィンチは、カルデアの仲間達のことを信じていた。

そうして、リンク個人に対する聞き取りを終えたと判断し、続いてシミュレーションそのものの話に移ろうとしたダ・ヴィンチの思惑は、リンクが思いがけず話

を続けたことによって遮られた。

「ダ・ヴィンチちゃん……俺自身のことについて、もうひとつ、誰にも言っていないことがあったことがある」

「……無理しないでいいよ。」

君のことを信じている私達からすれば、君が力を揮うにあたって支障や懸念が無いのだということを確認出来さえすれば、それでいいんだから」

「無理なんかじゃない、むしろ聞いておいてほしいんだ」

「………わかった、聞かせておくれ」

その言葉を受けて、笑って頷いたリンクが語り出したのは、彼にとって極めて個人的な、カルデアのサーヴァントとして今後活躍していくにあたって、黙っていても何の問題もなかった筈のことだった。

だけどそれは、彼をただの戦力ではなく、大事な仲間の一人なのだと認識している者達からすれば、とても大きく重要な意味があつて。

彼がそれをわざわざ明らかにしてくれた、その事実を噛みしめていた一同の重々しい様子に、自分で振っておきながら居た堪れなくなってしまうたらしいリンクは、慌てて話題を切り替えようとした。

それが、今の今まで思いもよらなかった、更なる驚愕の事実を明らかにしてしまうということにも気づかずに。

「あ……あのさあダ・ヴィンチちゃん、もうひとついいかな」

「構わないよ、何だい？」

「前から気になって、機会があったら聞いてみようと思ってたことなんだけど。

……何で皆、ハイラルのことや『俺達』のことに、そんなに詳しいわけ？」

「……………はい？」

「何でそこで、『この子は一体何を聞いているのかな？』みたいな感じに心底首を傾げるのさ!!」

だってそうじゃないか、リンクの活躍は歴代のどれもこれも表向きにはなっていないものばかりで、俺がいた頃のハイラルにさえ広まってなんかいなかったのに

!!

それが何万年も経った後の次の時代でこんなにも大々的に周知されていたら、一体何があったんだって思うだろ!!」

「……………リンク君、君ってばもしかして忘れてるのかい?」

「何を?」

「勇者リンク達の活躍を描いた『ゼルダの伝説』を、人生のほぼ全てを費やして書いていたのは君だろう?」

封印後に発見されたその一式がハイラル全土に広まり、君達の活躍は誰もが知ることとなった。

かの勇者の功績を無に帰してはいけなないと、ゼルダ姫を始めとした人々が、姫自らが執筆した最後の勇者の物語を加えて完結した『ゼルダの伝説』を後の世に向けて遺し、それが無事に今現在にまで伝わったという経緯がある……ん、だけど……………」

他の特別な意図など何もなく、ただ単純に誰もが周知の事実だけを口にしたただけだということを実感していたダ・ヴィンチはその上で、『何か間違えたのか』と自

分自身を疑った上に狼狽えてしまった。

凍りついたかのように動きを止め、十数秒の沈黙の果てに赤だったり青だったり
と見るからにヤバイ顔色の変化を見せ始めたリンクに、異様な空気の中で同じく固
まってしまっていたロマニが慌てて声をかけたのだけけれど。

「リ、リンクくん」

「アレかーーーーーっっ！！！！！」

残念ながら、今の彼からは既に、誰かの言葉を落ち着いて聞き入れられる心の余
裕なんてものは消え失せていた。

「ヤバい片づけてなかった完っ全に忘れてたえっ何アレ見つかったの誰がつて婆
ちゃんしかいないし結構凄い量と重さになってたけど腰大丈夫だった婆ちゃんいや
いや違うそうじゃない今は婆ちゃんの腰関係ない凄く大事だけど関係ないヤバイヤ
バイ俺何書いたアレに一体何書いたまずい細かいところ覚えてないっーか色々なと

ころですっごい感情移入してた覚えがあるいや待ていや待ておかしいいくら何でもここまで恥ずかしいのはおかしいくら感情移入してたってあれは俺じゃない他のリンク達のあああああそうだった今は皆いるんだった待って待ってごめんなさいお願いだから落ち着いて悪気はなかったんです自分自身の気持ちに区切りとけじめをつけたかっただけで誰に見せる気もなかったんですっーか何してんのゼルダイや分かるよ気持ちは分かるよ俺のことを伝えようとしてくれたんだよねうんそれは分かるよありがとう凄い嬉しいんだけど第三者視点で書かれた自分の物語が広められるってのはやられた方からすればすっごい恥ずかしいってことにまず気付いてほしかったし他の話にしたって見せられるほどの気持ちの整理まだついてなかったからついたとしても知り合いが精々だからなのにハイラル中どころか何万年後の世界にまでってえええええええっ！！！！！！！」

血の気が完全に失せた顔で、凄まじい肺活量で以ってノンブレスでそこまで叫び抜いたリンク。

『勇氣ある者』の代名詞であり、強靱な意思と心の持ち主であるはずの彼の、何か

芯的なものがポツキリと折れた音が、居合わせていた全員の耳に確かに聞こえた気がした。

「……………それで、リンク君の様子は？」

何か進展はあった？」

「少しだけ……言葉でのやり取りはまだ叶いませんでした、ドアを僅かに開けて、エミヤさんからの差し入れを受け取ってもらうことは出来ました。

その際に、フォウさんに潜入してもらうことにも成功しましたので、今のところは甘いものとモフモフのセラピー効果に期待しましょう。

それにしても……リンクさんはなぜ、ご自身の活躍が後の世に伝えられていることに對して、あんなにもショックを受けられたのでしょうか。

嘘をついている訳でもなく、評価だって正当なものなのですから、自信を持って誇りに思っている筈なのに」

「……あゝ、そうだなあ。

ちょっと想像してみて……いいか、マッシュは日記をつけている」

「日記、ですか？

現実の私とは相違している習慣ではありますが……センパイがそう仰るのなら、頑張ってシミュレートしてみせます！」

「うんうん、その調子。」

その日記にマシュは、日々起こったこと、考えたこと、感じたことを素直に、正直に、何の嘘もつくことなく書いているんだ。

そこにあるのはもはや日記というよりは、マシュという女の子の心そのものと言っている。

何も悪いものじゃないし、悪いことじゃない……むしろ人が見れば、マシュっていう女の子は何て綺麗な心の持ち主なんだと思うだろう」

「……………は、はい。」

少し、どこかとてもなく恥ずかしくて照れ臭いのですが、頑張って想像を続けます」

「……………それをね、たまたま、何の悪気もなく部屋に入ったドクターが見つけたちゃってね。」

『これは素晴らしい、マシュがこんなにも素敵な女の子だってことを皆にも教えて

あげよう!』って、スタッフの皆に片っ端から見せて回ったりしたら」

「死んで下さいドクター!!」

「僕何もしてないよ!!」

酷いなあ立香君、変な例え話に巻き込まないでくれ!!」

「ごめん、後で饅頭奢るから。」

でもまあ、マシュもわかっただろ？

何も悪いことはない、むしろ良いものだろうと、恥ずかしいものは恥ずかしいんだよ」

「……………はい、本当によくわかりました。」

これはもう、下手に外から働きかけるよりは、リンクさん自身が自然に落ち着くのを待った方が良さそうですね」

「どれだけ時間がかかるかだけが心配だな」

「紛れもない勇者であり、優れた戦士であると証明してみせたかと思えば、一転してただの少年のような振る舞いや打たれ弱さを見せてくるこのアンバランスさ。

立香君やマシュもそうだけど……『うちの子達』は本当に、色々な意味で目が離

せないねえ」

しみじみと、感慨深げにそう呟いたダ・ヴィンチは、リンクの動転によって状況が引っくり返る前に、彼が口にしたことを思い出していた。

同じ言葉、同じ事実を噛みしめている大人達は、自分以外にも大勢いることだろう。

彼が恐る恐る、意を決して明かした事実とは、彼自身に未だ以って、サーヴァントとしての自覚や意識が無いことだった。

ダ・ヴィンチ自身が推測として口にしていたように、焼却された世界のどこかで未だ封印の眠りにについている彼は、実際には生きている。

人理焼却の余波を受けてほんの僅か封印が綻び、浮上した意識に届いた、人々の助けを求める声に応えて懸命に手を伸ばした彼に、世界の抑止力はそれを成し遂げる為の手段として、抜け道的に彼をサーヴァントの枠組に当て嵌めた。

彼は自分自身を、『封印の眠りの中から抜け出した意識が、それだけで動き出した夢のようなもの』と表していた。

座から降りてきたコピーではなく、紛れもない自分自身なのだと。

他のサーヴァント達が、死後に奇跡的に叶ったオマケの時間のようなもののだと称している今この時が、死んでサーヴァントとなった自覚が無い自分には、大切な仲間達と別れて封印の眠りについたあの時の、終わってしまった筈の人生の続きを歩んでいるようにしか思えないのだと。

そのつもりでいていいか、と……いつまで続くかわからないけれど、その時が来るまで、この場所でまた生きてもいいか、と。

不安そうに瞳を揺らしながら、何の変哲もないただの少年のような弱々しきで尋ねられた一同が、返す答えなど決まり切っていた。

「あのまま誰にも言うことなく……危ないところで『サーヴァントなのだから』と言いついて、『生きたい』という本心を押し殺して、特攻自爆なんてさせる羽目にならなくて本当に良かった。

勇者として、その命と人生を世界に捧げてしまった彼が、自分の望みと幸せを尊重して口に出来るようになったことは、大きな進歩と考えていいだろう。

リンク君、立香君にマシュも……自分達が子供であること、頼ってほしいと願う大人が周りにちゃんといふことを、どうか忘れないでくれたまえ。

君達に頼るしかないのだという現実が、既に堪らない程に悔しいんだからさ……」

「ダ・ヴィンチちゃん、何か仰いましたか？」

「いや、何にも？」

リンク君のあの可愛らしい慌てっぷりを思い出していたから、もしかしたらそれが漏れてたかなあ」

「忘れてやってよ!!」

ほんつとしようがないなあ、ダ・ヴィンチちゃんは!!」

立香に突っ込まれながら、マシュに呆れられながら笑うダ・ヴィンチは、既に何の変哲もないいつもの彼（彼女）だった。

何とか気持ちに区切りをつけたらしいリンクが、ずっと慰めてくれたフォウと共に、皆の下に恐る恐る顔を出してきたのは、この翌日の朝食の席のこと。

自身の物語に関する話題を振られるたびに、恥ずかしさと居た堪れなさのあまり

に過剰反応を起こすリンクの姿に一同が慣れ、騒動どころかカルデアにおける様式美の一環と化していくのは、結構早い段階でのこととなる。

ブラックカルデア改善計画

「皆さん、お食事を続けながらで構いませんのでご清聴下さい。

ただ今より、前もってお知らせさせて頂いた予定通りに、第一回カルデア運営会議を始めさせて頂きます。

ファシリテーター（司会進行役）は、誠に僭越ながらこの私、マシュ・キリエイトが務めさせて頂きます」

時間を見計らって聞こえてきたマシュの声に、雑談と食事に興じていた者達がその口と手を一旦止めて振り向いた。

一般的な企業や集団ならば、こんなタイミングで全体会議を行おうものならば様々などころや人々から苦情が出るのだろうが、生憎ここは、人理存亡の最後の砦であるフィニス・カルデア。

会議に出席したいのは山々なのだけれど、様々な予定や都合が立て込んでいて摺り合わせるのが難しいというスタッフ達の要望や事情を加味した上で、ならば皆が同じような時間に、高確率で集まることになる場所で、その場所に求められる元々の用事に付随する形で行ってしまおうという『議長』の柔軟な発言に、皆が乗った結果がこの光景だった。

「そつ、それでは議長、よろしくお願いします」

大任を担うこととなり、少しだけ緊張しているらしいマシユの声に応えたのは、いつもより早めに夕食を終えて、準備を万端に整えていた勇者様。

比較的新参者であり、外見ではなく実年齢で紛れもない少年である筈の彼が、ロマニやダ・ヴィンチという大人の責任者達を差し置いてその位置に立つことを、不

満や不安に思う者は誰一人としていなかった。

彼が何者であったのかを、ハイラル王国においてどのような務めを果たしていたのかを、誰もが知っていたから。

一人の例外を除いて。

「凄いなあ、リンクの奴……人前で注目浴びるのに慣れてる感じで、堂々として、何か偉い人みたい」

「みたいじゃなくて、彼は実際に偉い人だったんだよ。

魔物の脅威に常に晒されていたハイラル王国において、兵士達の指揮と指導を行う戦術顧問、国の防衛を担うべき要職に抜擢されていたのだからね」

「え……ええええっ!？」

国の要職についてたって、あいつが封印されたのって15才じゃなかった!？」

誕生日の手前ギリギリだったとしても若すぎだろ、一体幾つの時の話なわけ!!」

「田舎で暮らしたあの少年だった彼が、姫を魔物から救い、魔物の特徴と対抗策を綴った本を独学で執筆した実績を認められて、城に召し抱えられたのが12歳。

その後たった一年で功績を重ね、要職を担うことになったのが13歳という若さ……間違いなく、王国史上最年少だ。

『ゼルダの伝説』をちゃんと読みなよ、自分のサーヴァントについて色々とおくのはマスターの務めだからね?」

「最初から少しずつだけ読んでるよ、絵本じゃなくて分厚い原本の方をちゃんと量が多すぎて、あいつの時代の話にまで行くのに時間がかかっているだけだってば」

「いや読まないでいいから、必要なこととか知りたいこととかあればその都度俺が教えるから。」

まあいいか、とにかく始めよう。

今回の議題は、現時点のカルデアにおいてどんな問題点・改善点が存在するのかを改めて確認し合い、その具体的な解決策について話し合うこと。

どんな小さな不満でも構わない、遠慮なく発言してほしい。

……と、普通なら言うところなんだろうけれど」

「えっ、リンクさん?」

打ち合わせの時には無かった台詞と流れに、いつもの彼ならば決して浮かべないような悪役じみた含み笑いに、マシュを含めた一同が、ザワリと空気を揺らめかせた次の瞬間。

それらを纏めて吹っ飛ばす勢いのある爆弾を、リンクは一瞬たりとも躊躇うことなく放り投げた。

「事後報告で申し訳ないけれど、発言内容については既に集め終えている。

フオウ、おいで！」

「フオウフオウッ！」

自身の肩の上に一足で飛び乗ったフオウのふわふわの頭を撫でながら、リンクは長い毛と衣裳で隠されたその首元にもう片方の手を伸ばし、何やら小さな機械的なものを取り出した……その瞬間、ダ・ヴィンチが『げっ』と言わんばかりに表情を引きつらせたことを、ロマニは見逃さなかった。

「……おい、ダ・ヴィンチ。」

君は一体、リンク君に頼まれて何を作ったんだい？」

「超小型、及び高性能のボイスレコーダーさ。」

物資不足が嵩んでいるこの状況で、あれだけのものを作れるとは流石は私だね☆」

「流石は私、じゃない!!」

自分のやりたいことがやればいいタイプの天才はこれだから厄介なんだ、頭が
いいんだから行動した結果どうなるのかくらいちゃんと考えてほしいよ!!

あれがボイスレコーダーで、フォウにくつつけてたってことは、つまり……」

「お察しの通り。」

ここ何日か、フォウにはいつもの通り、何食わぬ顔でカルデア中を歩き回って
らった……これを動かさっぱなしにしながらね」

小悪魔の笑みを浮かべながら片目を瞑ったリンクに、その場にいた者達の多くが
絶叫を上げた。

激務のさなかにふと気が抜けて、疲れもあって普段ならば到底出せないような本音や愚痴的なものを零してしまったタイミングで、視界の端に白いモフモフが横切ったのが気のせいではなかったことと、それが意味するものに気付いてしまったから。

「佐々木、アレを回収してきなさい!!」

いくら相手が勇者リンクとはいえ、刺し違える覚悟で挑めばそれくらいは出来るでしょう!!」

「そのあからさまな反応から察するに、至極しようもないことを聞かれましたようだな。」

強者との死合いの末に散るのは確かに本望ではあるのだが、そのような情けない理由でというのは御免被るよ」

「メディアさん、それと今過剰反応した人達には悪いんだけど、既に中身は確認してあるから」

「嘘でしょ!？」

だったら何で今、その白毛玉からわざわざ出したのよ!!」

「演出」

輝かし過ぎて、むしろ憎たらしくなる程の笑顔であっさりと言い切ったリンクに、敢え無く撃沈してしまった神代の大魔女を、情けないと笑える者はいなかった。身の程を知ることなく下手に突っ込んだりすれば、自分も同じような末路を迎えるのだということを自然と察してしまえたから。

「……そういえば、彼の逸話にあったねえ。

前もって色々と仕掛けやら根回しやらを整えておき、相手が取るであろう行動や発言をも推測して加味した上で、場の空気や流れを自分の手元に持ってくるのが得意だったって。

彼自身が国や民のために第一に考える善人だから良かったものの、同じような手腕を下手な野心家や独裁者が持っていたら、間違いなく碌なことにはならないよ」「正しく今現在、碌なことになっていないしね……」

「失礼だな！」

俺だって、この会議が真つ当に進められる状況にあったなら、こんな強引な手段には出なかったよ！」

「……どうということ。」

何か、僕達が気づけていない懸念事項でもあったというのかい？」

「それだ、自覚していないのが一番性質が悪い。」

俺が普通に、困っていること、辛いと思っていることを教えてくれと言ったとして、それを素直に、『この程度何てことない』とか『わざわざ言うようなことじゃない』と自己判断せずに口にしてくれた人が、果たしてどれだけいたことか。

だよね……睡眠や休憩の時間を削りに削った上に、それを栄養剤の過剰摂取で誤魔化してまで、何でもない振りをしているドクター・ロマン」

「……っ！」

「例えば体は誤魔化せたとしても、俺の目は無理だよ」

真剣な表情と静かな声色で、リンクが再び投げ込んだ爆弾は、居合わせた者達に

ゆっくりと静かな衝撃を与えていった。

明らかにになったその事実には、本当の意味で心から驚いていたのは、一生懸命に守られていた立香とマシュくらい。

その他の、大多数の者達は、驚きこそしたもののすぐに受け入れたり、通り越して納得してしまうような者ばかりで。

人員や設備の物理的な不足という現実的な問題を補うための、スタッフ一人一人の過剰労働がまかり通っている上に、人類という種の歴史が続くかどうかの瀬戸際なのだからと、一番大変な思いをしている子供達の負担を少しでも軽くしてあげなければと思うばかりに、それらを口にするどころか、問題だと認識することすら密かに、無意識に禁忌とされてしまっていた。

今は辛うじて保たれていたとしても、このまま何も変わることなく続けられていけば、絶対にどこかで破綻してしまう。

そんな不安定極まりない土台の上に成り立っているのが、今のカルデアだった。

「……僕達のことを気遣ってくれた君の気持ちは、本当に嬉しいよ。

だけどねリンク君……例え無茶だとしても今くらいのことをやらないと、現実的に、カルデアが立ち行かなくなってしまうんだ」

「確かにそれは受け入れるしかない現状だよ、潔く認める。

だけど、『だから仕方ない』と諦めて……『問題なんかじゃない』と、『自分なら大丈夫だ』と開き直って、壊れるまで無理を続けるのは絶対に違う。

改善すべき問題点なんだってことをちゃんと認めて、辛いつてことを共有して、助け合いながら、少しずつでも何とかしていくべきなんだ。

分かっているけど難しいと、仕事の方を今すぐ楽には出来ないって言うなら、せめて……『栄養バランスが大事なのは分かるけど、それでも一度くらいはお饅頭でお腹いっぱいになりたい』っていう願いくらいはたまに叶えて、元気を補充したっていいじゃないか」

「うわーっ、思ったより碌でもない眩きを聞かれてた!!

お願いだから忘れてリンク君、気が緩んだ瞬間に思わずポロっと零れただけの戯言だから!!」

「お腹いっぱい、食べたくないの?」

「そりゃ食べたいよ、大好物だもの!!

だけどこんな切羽詰まった状況で、そんな下らない願いごとに時間や労力を割いてなんていられないよ」

「下らない願いなんて無い、願いに優劣なんて無い。

他人がそれを自分の価値観で蔑んではいけないし、自分自身で貶めるなんてそれ以上に以ての外だ。

それがドクターの願いなら、それを叶えることでドクターが幸せになれるなら……俺は叶えてあげたい、ドクターに少しでも元気になってもらいたい」

………嗚呼、この子はその想いを積み重ねた末に世界を救い、独り眠りについたのか。

碧玉の瞳に真っ直ぐに見据えられながら、その向こうに何処までも純粹な輝きを見つけながら抱いたそんな認識は、恐らくは彼という存在の本質を捉えたもので。切なさ、遣る瀬無さに堪らなくなってしまうロマニは、しかし次の瞬間、頭から引っ繰り返るのを寸でのところで持ち堪えたことで、自身にそこその反射神

経が備わっていたことに、思いがけず気付くこととなった。

「だから俺は、メディアさんが俺をモデルにした人形を作りたいとか、着せ替えしたいとか言うのも別に構わないし、身体情報のデータが欲しいなら協力するよ」

「マジで!! いいのっ!？」

「施設の復旧作業とか、魔術関係のアドバイスとか、いつも頑張ってくれてるしね」

「よっしゃあああああっ!!」

力とやる気がこの上なく漲ってきたわ、日々の潤いというものはやっぱり大切ね!!」

「あと、そのついでで構わないんだけど、ひとつお願いしていいかな」

「……内容によるわね、何がお望みなのか？」

「面子の詳細までは、音声の質が悪くてちょっと把握しきれなかったんだけど……何人かが集まって、俺が本気で女装しているところを是非とも見てみたい、疲れなんか絶対に吹っ飛ぶって、熱く語り合っているやり取りの記録があって。」

俺としてはその効果に正直疑問なんだけど、やる分には別に構わないし、それで

元気になってくれるんなら嬉しいから、メディアさんさえ良ければ衣裳を作って貰えないかなと」

「全力を尽くさせてもらいましょうか!!」

「待て待て待て待てそれは流石に聞き捨てならない、いくら何でも自分自身を安売りしちゃだめ!!」

「つか誰だ、そんな会話を恥ずかしげなくしていたのは!!」

「あつ、特定出来た一人はダ・ヴィンチちゃんだったよ」

「レオナルドオオオッ!!!!」

「純粋に美を追求するだけの健全な集まりさ、遵守すべきNoタッチのボーダーはちゃんと心得ているよ!？」

「言い逃れを聞く気は毛頭ない、いいから他のメンバーについて洗いざらい吐け!!」

「我が身可愛さに同士を売るなど出来るものか!!」

「すまない諸君……せめて君達だけでも、リンク君の艶姿をその目と脳裏に焼きつけてくれたまえ!!」

「ドクター、ダ・ヴィンチちゃん!!

皆さんも落ち着いて下さい、一応ですけど会議中です!!」

当初の目的をすっかり忘れてしまったらしい一同が、混沌と化した騒ぎを繰り広げる中で……リンクが浮かべていた確信犯の笑みに気付くことが出来たのは、肩の上のフォウだけだった。

「いやーそれにしても、まんまと一本取られてしまった。

まさか彼の本命が、私達が騒ぎの中で疲れ果てて思考力が緩んだ隙に、別口でまとめておいたメインの案件を、きちんと全体会議を経て承認されたものだという大義名分までつけた上で通してしまうことだったとは」

「申請書類には確かに僕のサインがされているのに、全く覚えていないのが怖いよ……」

「これが彼自身の勝手な私欲と都合にまみれたものならば、手続き自体が正式なものを経ていようと文句を言ったり、何とか覆そうとする者も出たのかもしれないけれど」

「……内容自体は隅から隅まで、僕達の負担をどうすれば減らせるか、どう工夫すれば無茶な仕事ぶりを控えてくれるのかを、一生懸命突き詰めたようなものだったからねえ」

『はい、じゃあ一通り読み上げます。』

まずひとつ、朝昼晩の食事は、きちんと時間を取って食堂で食べることに』

『食堂でって……サンドイッチとかの軽食を、仕事場に持ち込むのもダメなの？』
『ダメです。』

その辺りを義務付けることで、仕事モード入りっぱなしだったスイッチを適度に、明確に切り替えさせるという意味合いと狙いがあります』

『どうしても手が離せない時があると思うんだけど……』

『その辺りある程度仕方ないのはわかっています、時間まで厳守しろとは言いません。』

多少前後にずれても構わないから、とにかくきちんと、三度の食事と休憩を取っ

て下さい。

食堂に名簿を置いて、食べ終わったら自分の名前のところにチェックを入れてもらう形で、その旨をきちんと管理させてもらうので、不摂生を重ねている人はすぐにわかります。

本当に忙しい時とか、大事な時なら多少は目も瞑るけれど、あまり酷いようなら指導対象にしますからそのつもりで』

「他にも色々……『常に仕事中的のようであまり休まらなくなる上に、折角の自由時間や休憩時間を切り上げてまで仕事に戻りかねないから、プライベートの時間にまで制服を着っぱなしにするのは禁止』とかいうのもあったね。

で、どんな気持ちだい？ その決まりごとを守る以前の問題で、そもそも私服というものを持っていなくて、なけなしの白衣（仕事着）を着回していただけだった。

……それ以外にも、リンク君が提示した改善案の悉くに抵触してしまっていた、要注意対象筆頭のロマニ君」

「分かっているのに聞かないでくれ、思い出したくもない。

……あんな言葉、もう二度と聞きたくないし、もう二度と言わせたくもないよ」

『前線で、フランスの地で……怪物やサーヴァント達を相手に戦うのは、確かに大変でした。

だけど私達は、リンクさんやジャンヌさん達、そして他でもないドクター達に助けてもらいながら、最初のオーダーを成し遂げたんです。

大変だったけれど、それと同時に、嬉しいことや楽しいことだって沢山あったんです。

私は、それを悪いことだったとは思わないし……皆さんが同じように、この大変な状況の中で、僅かに残った嬉しさや楽しさを見つかけようとするのが、悪いだなんて絶対に思いません』

『一生懸命に助けてくれた、俺達を少しでも楽にしようと頑張ってくれたドクター達が、誰にも助けを求めることなく無理をしていたら、自分達は楽をしてはいけな

いなんて思っていたら、その方がずっと嫌だよ。

俺達を、無理をする理由になんてしないで……俺達がそれを望んでいるって、喜ぶだなんて思わないで』

立香とマッシュが……自分達が何としても繋げたいと願っている人理の、未来の象徴と言わねば子供達が、心の底から悲しくて悔しそうな声と表情で言ったそんな言葉が、ロマニを始めとしたスタッフ一同の胸に、見えない風穴をぶち抜いた。

少しでも休んでしまえば、気を抜いてしまえば、自身の楽しみのためなんかに貴重な時間を費やしてしまえば、それが巡り巡って……自分のせいで、人理の崩壊が確定してしまうのではないか。

そんな不安が、多かれ少なかれ誰の中にも存在していたことに、一同はようやく気が付けた。

自身の体に鞭打って、無茶を押し通すことで、少しでも安心できた。

これだけ頑張っているのだから大丈夫だと、これだけ頑張っても無理だったなら

ばそれはもう仕方がないことだと。

そんな後ろ向きな、いざその時が来てしまった際に潔く諦めるための心の準備をしているかのような、方向違いの努力を違和感なく押し通すために、『立香やマシユのため』というお綺麗な理由を掲げ上げる。

彼らを助けたい、出来る限りのサポートをしたいという、これっぽっちも嘘が無い純粹な想いの裏に、そんな歪んだ思惑があったことを誰一人として、当人達から指摘されるまで気付かなかった。

気付いてしまったリンクは、それを見過ごせなかったのだ。

膨らみ続けていた風船に盛大に針を叩き込んで、それが破裂した結果巻き起こった混乱に乗じる……を通り越して利用するほどの度胸と強かさで以って、彼が計画を強行してくれなければ、無意識の内に凝り固まってしまっていたスタッフ達の思考回路を改善させるのには、もっと長い時間と手間がかかったことだろう。

『そもその話になるけどね、個人がちよっと休憩を取っただけ、ちよっと自分の楽しみを優先しただけ、ちよっと失敗しただけですぐに、挽回しようと頑張る余地

もなく終わってしまうような世界だなんて、言っちゃ悪いけどもう手遅れだよ。

そんなことは無いのなら、まだまだ大丈夫だって言うのなら、もっと信じよう。

世界は、人の歴史は、数えきれないほどの人達が長い時間をかけて、命と想いを繋げてきた軌跡は、簡単に焼き尽くせるほどに弱くないって。

俺は信じてる……最後の瞬間まで決して諦めずに、奇跡を信じた人達の声が、伸ばした手こそが、俺をここに呼んでくれたんだから』

その言葉に全力で頷いた立香とマシュが、明らかに根を詰めすぎな者や、見てわかる程に疲れている者を積極的に、半ば引きずるような勢いで食堂まで連行してくる光景が、今や新たな日常になろうとしている。

前は酷く張り詰めていたと、随分と穏やかになったと明確に感じられるほどに変化した空気の中で、また一人引っ張ってきた立香とマシュの、元気な声を聞きながら。

健康面を考えれば明らかに良くはないけれど、それでもたまにはいいだろうと言って笑いながら、エミヤが用意してくれた山盛りの饅頭を遠慮なく口いっぱい

頬張りながら。

「こんな状況でも、幸せだなあって……僕も、僕でも、思っているのかなあ」

立香達が聞いていたならば、『当たり前だ』と言って怒りだしそうなことを、本当に何気なく呟いたロマニ。

その表情は、今にも蕩けそうな、情けない顔だと笑われそうな、本当に幸せそうな笑顔だった。

そんな彼の下に、リンクが環境改善を更に進めるための新たな提案を持ち込んでくるのは、それがまた別の騒動のきっかけとなるのは、まだもう少しだけ先のこととなる。

「ドクターの、お腹いっぱいのお饅頭の願いは、エミヤが叶えてくれた。」

メディアさんには人形作りの許可を出したし、ダ・ヴィンチちゃん達のは衣裳待ちだし……現状で何とか出来るのは、これが限界か」

故郷の料理を食べたい。

外で思いつき走り回りたい。

家族や友人に会いたい。

そういった、本当ならとても細やかなものの筈の、願うまでもなく叶えられる筈のことこそが。

今のこの状況においては、到底手が届かない夢物語だった。

「絶対に忘れない、絶対に叶えてみせる。

どれだけの時間が、どんな手間がかかったとしても、必ず。

……だから、今はせめて」

自身の手の甲を押し頂きながら、リンクが人知れず祈りを捧げた、その日の夜。

例外なく誰もが、とても幸せな夢を見たという。

立香の試練 前日譚

リンクが懸命に推し進めた就労及び生活環境の改善策が馴染んできたことで、身共に多少の余裕が出てきたカルデアに幾つか、新たな日常の一部として加わったものがあつた。

最近になって復旧が叶った魔術訓練用の施設にて、ケルトの大英雄クー・フーリンと、神代ギリシャの大魔女メディアという豪華すぎる顔ぶれの教えを受けながら必死に魔術の特訓を続ける立香へと、呆れ半分の冷たい眼差しを送る『彼女』もそのひとつ。

「あんた、本当に魔術師としてはへっぽこなのね。

サーヴァントの霊基を、カルデアからのサポート無しではまともに保つことすら出来ない身で、よくもまあ私の竜達を退けたものだわ。

マジな話、勇者サマがいなければどうするつもりだったの？」

「そこ突っ込まないでくれる？」

俺もカルデアも、色々に見通しが甘かったのは自覚してるからさ……」

『プライベートでの制服着用は禁止』という決まりごとに加えて、サーヴァントの通常の衣装も戦闘装束という意味で仕事着だと判断されたのだけれど、彼女の場合はまだ私服と言えるものが一着も無いので、とりあえず武器と黒い甲冑だけは外した姿で。

自身のマスターである筈の少年に、言いたい放題の不遜な態度を貫いているのは、先日の召喚においてカルデアに新たに加わったサーヴァント。

かつて『竜の魔女』と名乗り、区別のために『黒いジャンヌ』とも称されていた……先だって召喚されていたアルトリア・オルタの例にちなんで、正式に『ジャ

ンヌ・ダルク・オルタ』と名称された少女がそこにいた。

召喚されたのは彼女だけでなく、フランスの特異点で縁を結んだサーヴァント達が、敵味方を問わずに応えてくれた。

ジャンヌを始めとする、あの時仲間として共に戦ってくれた者達は、記憶と想いを明確に連続させながら来てくれたし。

敵だった者達も、別れ際の不安を他所に、記憶も想いも人格もきちんと『彼女』のまま応えてくれたジャンヌ・オルタを筆頭に、当人にとって相当に強烈だったらしい体験や想いに関しては『何となく』という程度ではあるけれど確かに認識していて、彼らもまた、あの時の続きとしてここにいるのだということを一同に確信させた。

本来ならばあり得ない筈の、『サーヴァントの記憶と想いが次回の召喚にまで引き継がれる』という奇跡的な現象の連続に、人理が不安定なことで起こっている影響もしくは現象の一環等々と、真剣に考察する者もいたのだけれど。

大切な仲間にあたえたこと、これからはずっと共に頑張っていけるのだということに対する立香達の喜びようを前に、『悪いことではないしまあいいか』という

ことで一旦落ち着いた。

歴史に名を刻んだ偉人・英雄である彼らを、戦力としてよりもむしろ、日々の労働に対する純粋な人手として期待していることに気後れするスタッフ一同を他所に、サーヴァント達の大部分は快くそれに応えてくれた。

疲れている者、根を詰めすぎな者を強引にでも休ませるという大切な役目を、立香とマッシュから引き継いだマリーは、断る気そのものを失せさせる微笑みを躊躇うことなく披露しながら、侍従として付き従うデオンとその時々で招いたゲストと共に、王妃のお茶会を日々開催しているし。

『戦わなくていいのならばむしろありがたい』『音楽を奏でることならばいくらでも』と笑って胸を張ったアマデウスは、どうしても急いで詰めなければならない現場では集中力が向上する曲を、休みたいのに気持ちが高ぶってしまう人の側ではリラックス効果のある曲をといった感じで、その時に最も求められる曲、最も気持ちよく聞いてもらえる曲を、気分屋な彼の気が向くままにカルデア中で奏でて回っている。

他にも、戦闘特化のサーヴァントとしての膂力を活かして、荷物運びや瓦礫の排

除等の力仕事でフォークリフト並みに活躍してくれているジークフリートとか。

家族や弟分達の面倒をよく見ていたからと笑いながら、大人数分の洗濯や掃除などの地味に大変かつ大切な役目を任されてくれたマルタとか。

生前の職務経験を生かして、医務室のシフトに加わってロマニの負担を一気に減らしてくれたサンソンとか。

その辺りまでは普通に予想が出来ただけけれど、サーヴァントの中には、全く思ひもよらない方面で力を発揮した者もいた。

ありとあらゆるものが不足しているこのカルデアでは、どんな能力、どんな技術だろうと尊重する。

どうやって生かすか、そもそも生かせるのかどうかは聞いてから判断する。

出来ることや得意なこと、今は出来なくても興味があること、やってみたいことを遠慮なく、片っ端から教えて欲しいというリンクの言葉は、何の裏も含みもなく、真剣に発せられたものだったのだけど。

それを受けて徐に手を上げながら、編み物や刺繍といった裁縫全般を個人的に興味として、服や小物が必要ならば要望を貰えれば作れると言い切ったヴラド

三世に、思わずアヒルが鳴くような間抜けな声を上げてしまった勇者を、誰も笑える者はいなかった……と言うより、その場に居合わせた全員が同じ反応をしていた。

そうして、国を守りながらも怪物と恐れられた王は、需要の山を受けて早急に立ち上げた自身の工房にて、瓦礫の山の中から発掘に成功した服や布の辛うじて使える部分のみを巧みに生かし、スタッフやサーヴァント達の新たな普段使いとして再利用する工程に取り掛かっている。

物作りを行なう際に最も重要な素材の確保がままならない、酷く不自由な筈の状況で、それでも何故かもの凄く充実している様子のヴラドを、『あれは多分縛りプレイを楽しんでるな』と評したのは誰だったか。

兎にも角にも、ヴラドのような反英霊粹のサーヴァント……戦闘やその付随的な行為以外に役立つことは出来ないのではと、下手に日常を強要しようものなら反乱でも起こすのではないかと危惧されていた存在でさえ、人間じみた生活を積極的に楽しむ余地や素養があったのだという事実は、とっくの昔にサーヴァントを使い魔やら兵器やらとは見なせなくなっていたスタッフ一同に、新たな驚きを与えていた。そんな一連の流れを思い出していたジャンヌ・オルタが、肩を大きく上下させな

がら荒い息を吐く立香の耳に届くような、これ見よがしのため息をつく。

「半壊状態の施設と、生き残った僅かなスタッフが最後の砦となっている現状では、戦力ではなく純粋な人手としてサーヴァントを呼ぶっていう、まともな魔術師が聞いたら憤死しそうな選択も、まあ無理もないとは思うけれど。

……かつてマスターでもあった身として言わせてもらえば、サーヴァント達が日常生活やそれに伴う雑務を楽しんでいるのと、あんた個人の力不足で折角のサーヴァント達を死蔵しているのでは、同じようで全く違うからね」

「わかってるよ……俺だって、人理を守るために折角来てくれた皆の力を、肝心の特異点で生かすことが出来ないのがすごい悔しい。

……リンクやマッシュに、負担をかけっぱなしにする訳にだっていかないんだ」

今この時に生きている人間を素にした、デミ・サーヴァントであるマッシュは、エーテル体によって体を構成している他のサーヴァント達と違って自身の確かな体を持っているので、その身の特異点で維持するために立香の魔力に依存する必要がな

い。

更に言えばリンクも……彼は本体こそ世界のどこかにあるものの、そこから抜けた精神を内包する仮初めの肉体はエーテル由来のもので、他のサーヴァント達と同様に、現界及びその維持に関しては相応の魔力を必要としている。

しかし彼の場合は、自身の利き手の甲に原初の願望器たる『黄金の聖三角』^{トライフォース}を備えている。

オルレアンでの彼が、サーヴァントとしての自覚も無いまま立香達と合流するまでの数日を普通に過ごし、戦闘や単独行動を繰り返しても特に不都合を感じなかったのは、無限の魔力供給源と表現しても構わないような聖三角の存在によって結果的に発動していた、『単独行動EX』という超規格外スキルの賜物だった。

魔力供給の必要がないマッシュと、魔力切れの心配がないリンクの二人が、今後の特異点修復において必須メンバーとして同行していくことは、当人達を含めた話し合いの上で既に決定している。

あの二人ならば何も言わずとも、何があろうとも、人理やカルデアの、そして自分のために、その時々で出来る最高や最善を突き詰めながら、一生懸命に頑張っ

くれるだろうという信頼が既にある。

だからこそ立香は、そんな彼らの献身に、魔力の供給源として大人しく守られていればいいという、マスターとしての最低限の務めすら碌に果たせていない現状に、いつまでも甘え続けてはいられなかった。

疲れを覚えている体に反して、彼の心は未だやる気に満ちている……のだが。

マスター兼弟子の気概だけでなく、現実も見据える冷静さと聡明さを持ち得ていた師匠達は、折角の彼の気持ちに水を差すことを承知の上で、敢えての言葉をかけた。

「やる気があるのは結構だがな、生憎と今日はここまでだ。

食堂へ行って、アーチャーに何か適当に出してもらえ」

「えっ……ちょっと待ってクー・フリーン、メディアさんも！

もう少し頑張らせてよ、俺ならまだ大丈夫だって！

最初予定していたところまでが無理だったとしても、せめて何かしらの成果くらい出しな」

てしまった。

気概だけでは覆せない現実を突きつけられて撃沈した立香と、そんな彼にどう声をかければいいのかわからずに途方に暮れる師匠達、そしてたまに野次を飛ばしながら何故かずっとこの場に居続けていたジャンヌ・オルタの下に、終了時間を見計らっていたらしいリンクが顔を出してきた。

「立香、そろそろ訓練終わった頃だと……ってオルタ、こんなところに居たのか。ジャンヌがさっきから探してたよ」

「放っておきなさい」

「あなた、特に用も無いのにこんなところで何をしているのかと思えば、姉妹喧嘩だったわけ？」

「誰が妹よ、元になったってだけで姉でも何でもないわ！」

「だとしても、白い方の嬢ちゃん是完全にそのつもりらしいけどな」

「五月蠅いわね、その話題はもうやめなさい!!」

それよりリンク、あんた一応、剣や弓だけでなく魔術だって得意な勇者サマで

しょう？

予定時間一杯に頑張つて、それでも何の進歩もなかったへっぽこ魔術師こと我らがマスターに、何かアドバイスとかしてあげたら？」

「……俺個人としては、それくらい別に構わないんだけど。

誰かが既に指導しているところに、横から口出しするのは不味いんじゃないかなあ」

「俺達なら別に構わねえよ。

むしろ指導する側としても、どうしたもんかと行き詰っていたくらいだしな」

「それ以前の問題として、神秘の塊どころか、世界そのものが神秘だったかのような世界で、優れた魔術師としても活躍していたあなたの直々の指導に、口を挟める術師なんていないわよ」

自分のためにも周りのためにも、その辺りをちゃんと自覚しなさい……と、口調と表情で分かり辛く助言してくれたメディアに、苦笑いで軽く頭を掻いたりリンクは、どんな指導を受けてどんな特訓をしたのかを立香に問いかけ、立香も一生懸命

に思い出しながらそれに応えた。

ダ・ヴィンチを筆頭としたカルデア技術班の、渾身の自信作である服型魔術礼装は、『既定かつ単純なものに限り、かつ連発が効かないという不便さこそあるものの、魔術が簡単に行使出来るようになる』という、『魔術は秘匿するもの』『神秘の安売りや拡散など以ての外』という界限の大前提に真っ向から逆らった代物だった。目当ての魔術効果を意識し、一小節ワンカウントの呪文を鍵とするだけで即座に発動出来るというそれ自体は、製作者達に最大の禁忌に挑んだ甲斐を感じさせる程に見事なものだったのだけど。

その成果を誰よりも期待していた肝心の立香が、初っ端から躓いてしまった上にその理由が未だ判明出来ていないという現状に、誰よりも打ちのめされていた。それを打破出来る可能性の中でも、特に大きなもののひとつとして期待されたりシクは、立香やクー・フリーン達から特訓内容についての詳細な説明をされた後に、何やら首を捻りながら唸り声を上げ始めた。

何かに気付いた上で、それを口にすることを躊躇っているのが丸わかりすぎるその様子に、気にすることは無いから続けろと周りが促した結果、彼の口からは予想

外の一言が零れ出た。

「メディアさん達の認識と教え方って……何か遠回りと言うか、分かり辛いと言うか、もっと簡潔なやり方があるんじゃないかって思えるんだよな」

「わっ、私の指導が分かり辛いですって!？」

「待って待って、まだ話の途中だからそんなショックを受けないで!!」

俺が言いたいのは、魔術を研鑽すべき学問、もしくは突き詰めていくべき技術として認識しているメディアさん達と、理論や理屈は今のところ置いといてとにかく魔術を使いたい立香、更にはそんな立香の意図を酌んで作られた魔術礼装とでは、認識や扱い方の差異があまりにも大きいんじゃないかってこと!!

そうだなあ、例えば話をするならば……なあ立香、お前って支給品のタブレットを普段からよく使ってるよな」

「えっ……まあ、うん。」

メモしたり連絡取ったりとか、色々と便利だし」

そういう類のものの、一度覚えれば手放せなくなる便利さと楽しさを既に知り、由緒正しい魔術師は触るどころか存在すらも忌避していると知って慄いた覚えがある立香は、技術関係以外のスタッフや新顔のサーヴァント達に教えてあげることが出来る程には、現代の一般的な若者らしく電子機器というものに慣れ親しんでいた。

そして実のところ、リンクは神秘が溢れる遙か古代の民でありながら、現代における最新の科学やその更にある先にある代物を彷彿とさせる、シーカー族の超技術に慣れ親しんでいた者でもあった。

魔術と科学……相容れない対極である筈のそれらを共に尊び、共に深く理解しているという、何とも稀有な存在であって。

「そういった機能を使う際に、立香はただ、画面上にある目当てのボタンを押すだけだろ？」

起動を促すための信号がどんなものなのかとか、どういう回路が組まれていてそれがどんな動き方をしているのかとか、その結果を画面に反映させるためにどんな

処理が働いているのかとか、その都度でいちいち気にしているか？」

「メディアさん達が普段使っている魔術ってのは、そういうのを全部しつかりと意識して、隅から隅まで理解して……電子機器ならば機械や回路が代用してくれる筈の工程を全て、自分自身の体と思考力で賄った上で、行使及び発動させているものだから。」

魔術を発動させるための理論やら工程やらを、今回に関しては全部省いて結果だけを求めて良かった筈のそれを、いつものようにきちんと理解させようとしたのが裏目に出て、頭の中とか全体の流れとかが、色々とごちゃごちゃになったのが悪かったんだと思う」

「要するに、難しく考えすぎていたんだよ。」

理論と理屈とかは一旦忘れて、この服を着れば魔術が使えるようになるという『事実』だけを受け止めて、目当ての効果を意識した上で……タブレットのアプリボタンを押すように、呪文を唱えるというスイッチを入れさえすれば、この場合はそれでいいんだ」

そんな彼が、魔術と科学の概念と認識を敢えてごっちゃにした上で口にした解説と解説は、立体パズルのピースが綺麗に噛み合ったかのように、謎の心地良ささえも感じさせながら、魔術というものを今の今までどうも理解しきれずにいた立香の認識の中に、綺麗にガッチリと嵌まり込んだ。

立香の握った拳が、手のひらに打ち付けられた間抜けな音が響くのは、この後随分と長く続いた沈黙の中でのこと。

更にその後、リンクの言葉を、頭ではなく心と感覚で確かに理解した上で発動させた『ガンド』が、立香にとって生まれて初めての魔術が、用意されていた的に見事命中した。

「魔術師には昔も今も、ハイラルという地と時代を、尽きない魔力に満ち溢れた魔術の楽園だと考える連中は多いけれど……それは幻想ね、現実にはむしろ全くの逆だわ。

勇者リンクが魔術と科学をゴっちゃにして考えている、便利で役立ちさえすれば成り立ちや動力がどちらであろうと構わないと本気で思っている時点で、神秘も秘匿もへったくれもないわよ。

魔術師であるだけ、魔術を使えるだけで自分を特別だと思っている連中が仮にハイラルへと行こうものなら、ただそれだけで、何の変哲もない平凡な一般人と化してしまった自分とその現実に、一時たりとも耐えられないでしょうね」

「……………メディアさん、もしかして機嫌悪い？」

「当たり前でしょう、魔術師としての矜持と常識を盛大に揺るがされたばかりなのよこっちは!!」

草を刈ったり壺の中を探ったりするだけで出てくる妖精って何なのよ、そんな虫獲り感覚で幻想種を探すな見つけるな!!

しかも瓶詰めって、ああもう頭が痛いわ……………」

「……………あの、何かごめんなさい」

「謝らないでいいわよ、むしろ謝らないで、自分勝手な八つ当たりだってことは自覚してるから」

「お茶のお代わりは如何かね、茶菓子も良ければ追加するが？」

「ありがとう、いただくわ。」

……………まあ何にしても、マスターが魔術師として一步を踏み出せたことは、素直に

喜ぶべきことね」

「ここまで長かったよ……だけどまだ、出来ることがひとつ増えただけで、根本的な問題は何も解決してないんだよな」

「そう急ぐ必要はない。」

今はただ、確かな成果を挙げられたことを喜んでいればいいさ」

「……ありがとう、エミヤ。」

お茶とお菓子のお代わり、俺にもちょうだい」

「承知した。」

君の方はどうするかね、夕食に差し支えない程度ならば軽食も用意するが？」

「おう頼むわ、中身に関しては任せる」

骨折り損のくたびれ儲けだけではどうにか回避出来て一息ついた師弟組に、殆ど勢いで引っ張り込まれたリンクを加えた一服の時間が、食堂の片隅でゆっくりと過ぎていく。

しかしそれは、またしてもリンクが無意識かつ無自覚かつ悪気無しで爆弾を投下

するまでの、今やカルデアのお約束と化してきてしまったそれが行なわれるまでの、ほんの僅かな間だけのことだった。

「それにしても、当人のやる気がしつかりとある上で、これだけ頑張ってもなかなか上達しないなんて。

もっと根本的な部分に、対処すべき問題点がある気がするんだけど」
「それに関しては仕方がないのよ。

一般家庭出身で、何の研鑽も施していないマスターの魔術回路は、最低限の魔力を辛うじて通せる程度の量と質しか備えていないのだから。

電力を魔力に変換し、マスターを補助するカルデアの仕組みが無かったならば、サーヴァントのマスターになんて到底なれないわ。

レイシフト適性100%なんて、別方面において冗談のような素質を備えていなければ、それをたまたまカルデアに見出されなければ。

マスター候補の一人としてここに招かれるどころか、その身に眠っていた魔術の素質に気付くことすらも、生涯無かったでしょうね」

「……ごめんメディアさん、魔術回路って何？」

「そこから説明が必要だったの!？」

目を剥き、飲みかけのお茶を若干吹き出しかけ、呆れながらもメディアは、魔術師にとって本当に最低限の一般常識であり、わざわざ話すまでも無かった筈のことについての説明を始めてくれた。

曰く、『魔術回路』とは、魔術師の身に備わっている特別な内蔵器官であり、これの有無こそが一般人と魔術師を区別する境であること。

文字通り魔力を循環させるための回路であり、これをより多く、より高品質で備えているかどうかは、その者が扱う魔術の効果や威力も比例すること。

後天的に鍛えることが出来ず、生まれた時点で備えていた素質の優劣で、その後の魔術師人生の全てが決まると言っても過言ではないこと。

数と質の増減に親の素質や遺伝が大きく関係するため、より優れた成果、より優れた血を次代へと繋げていくことに、多くの魔術師達が執心していること。

「優れた力や素質を持ち、相性のいい血筋を結びながら代を重ねることに、子の魔術回路はより洗練されたものとなっていくわ。

魔術師にとって、老害の思い上がりなどではなく本当の意味で、古さとはイコールで強さなのよ。

代々受け継がれてきたものが何も無く、本人がいきなり魔術師になってしまったマスターの、当人のやる気や努力ではどうしようもない領域の話なの」

「……成る程なあ、そもそもに肝心の容量が不足しているっていう問題があったのか」

疑問に思っていた点、そこを何とかすれば色々と上手くいくのではないかと思っていた点に、そんな期待を裏切る形できちんと答えを返されてしまって、心底残念そうに項垂れるリンク。

大前提をきちんと知っていた筈の自分達ですら、いくら頑張っても本当の意味では報われないマスターの現状には、随分と思うところがあったのに。

それを今の今まで知らずに、きっかけさえあればどうにか出来る筈と信じ続けて

いたであろうリンクが、受けてしまったショックはどれ程のものか。

少年の内心を想い、年長者として少しだけ感傷的になってしまったクー・フーリンとメディアは、しかし次の瞬間、思考力を吹っ飛ばす威力を備えていた眩きを耳にした。

「後から鍛えられない、初期の仕様のみでずっとっていうのはきついなあ。

今の時代にも、『器』みたいなのがあれば良かったのに」

「……………ん？」

「えっ？」

「ちょっと……待て待て待ちなさい勇者リンク!!

今のセリフは一体どういうこと!!」

「い、今のって何が？」

「魔術回路の、魔力の容量不足を何とか出来る方法があつたとしても、言っているように聞こえたのよ!!」

「……………ああそうだ、そういえば。

リンク達の旅路を描写することを重視していたあの『本』では、基本的な能力の向上に関係したアレについては、敢えて書く機会が無かったんだっけ」

明確に描写されていなかっただけで、まだ色々とんでもない要素がああ『伝説』には秘められているのかもしれないという新たな事実には、居合わせた誰もが大変な衝撃を受けたのだけれど。

それが新たな、それ以上の衝撃によって塗り替えられたのは、そのすぐ後のことだった。

「強大な魔物を倒した後とか、遺跡や神殿を探索していた時とか、女神ハイリアの加護のひとつの形としてとか……色々な流れや機会の中で、命の容量を増やせる『器』を手に入れることが出来たんだ。

『俺達』の旅路は基本一人で、同行者がいたとしても戦闘には向かなかったりしたから、普通だったら死んでいたような痛手を耐えて回復に繋がられるようになったのは、本当に大きかったんだよな」

「命の容量を増やせる器ですって!？」

「ふ、普通なら死んでたような痛手って……………」

「最終的にはどのリンクも、多少の崖から落ちたくらいじゃ死ななくなってたな。それを見越して、敢えて飛び降りることもあったけど…………死なないだけで痛くない訳じゃないから、それは普通に嫌だったから、あくまで最後の手段だった」

「最後の手段にするなよ、痛いのが嫌ならやめろよ!!」

お前のソレ、辛い思いをするのが自分だけだったら別に構わないところ、普通に悪い癖だからな!？」

「落ち着けマスター。」

お前の言うことは正しいが、今はそこを問い質す時じゃねえよ。

どうだメディア、やれそうか？」

「私を誰だと思っているの、コルキスの王女にしてヘカテーの巫女メディアよ。

遙かにしえの時代に、とうに失われてしまった奇跡であろうとも…………その存在を知り、その恩恵を身を以って得た者が目の前にいるからには、どうとでもして見せるわ。」

問題は魔力リソースね……ものを作るにしても、儀式の基盤を整えるにしても、莫大なものが要になるのは目に見えているし。

何もかも予想がつかなくて、最低限の目算すらも立てられない現状では、カルデアに融通してもらおうわけにもいかないし」

「なあゝに、それこそ気にする必要はねえよ。」

ついこの間来たじゃねえか……勇者リンクのため、かの『伝説』の一端を蘇らせるためならば、あの大層な宝物庫を躊躇うことなく引っ繰り返しそんな奴が」

「……ああ、そういうええそうだった。」

ねえ、リンク……人理のため、カルデアのため、大切な友人でもあるマスターのために、喜んで全面協力してくれるわよね？」

ねつとりと絡みついてくるかのような、異様な恐怖と迫力を感じさせるようなメディアの声と纏う空気に、リンクはただ、黙って首を縦に振るのみであった。

末代の彼は歴代のリンク達を内包し、その想いを同調させているため、過去のリンクの記憶や経験を、自分自身のものであるかのように語ることがあります。

たまに意識してしまつてゾツとなりますが、そう思うことが完全に自然な流れと化しているので最中に気付くことは稀で、一応は割り切つて受け入れているので、あまり深刻に引きずることはありません。

当作品において英雄王は、最高峰の英雄であり、人類史の残酷な裁定者でありといった肝心なところは、勿論変わらないのですが。

必要に応じてそういうモードにスイッチを切り替える時以外は、カニファンやたいコロといったギャグ時空の彼を思わせるような、かなり愉快で凄く残念な、しかしその実力は確かでやる時は本当にちゃんとやるので、『またあの王様か』と呆れられつつも何気に一目置かれているという感じの人として、扱っていつてみたいと思います。

執筆を続けるために、Fate原典の細かい世界設定なども、改めて調べて回っ

ているのですが。

その中の、『魔法の種類と魔法使い』という項目で、ひとつもの凄く気になるものを見つけてしまいました。

内容も使い手も伝わっていないのに、『確かにそれはある』とだけ語られている、幻の『第四魔法』。

曰く、『繋ぐ四つは姿を隠した』とのこと。

繋ぐ、姿を隠した……キーワード二つが、見事に彼に合致する。

更に言えば、時間を進めたり遅らせたりするのに関しては魔術なのですが、戻すことに関しては魔法なんだそうです。

……彼戻せますよね、むしろ代表的な能力ですよ。

扱い切れそうにないので、今のところは『そういうこと』にするつもりはありませんが、妄想自体はすごく楽しかったです。

立香の試練 事前準備

順調にとは言えなかったものの、立香が無事に魔術礼装の起動、及び初の魔術行使に成功した時から、あつという間に数日が経過して。

カルデアを保つための最低限の業務以外の、人もサーヴァントも関係なく多くの人員と労力が費やされた成果の到達点……見覚えのある青い光がそこかしこに灯り、古いようにも新しいようにも思える、どこか神秘的な雰囲気を漂わせる広大な建造物の中に、立香は一人降り立っていた。

オルレアンでの旅路やサーヴァント達を相手にしての人付き合いで、一般人らしからぬ度胸を見せつけてきた立香でさえ、緊張のあまりに喉を鳴らしてしまってい

る様子がモニター越しに窺える。

今から大変な難題に挑まなければならない彼を氣遣う気持ちは、居合わせた誰もが当然に持ち合わせていたのだけれど。

それがまだ始まる前の、ほんの僅かな間だけでいいからと内心で密かに弁解しながら、込み上げる高揚に心を委ねていたのもまた、居合わせた全員が同じくであった。

何故なら、立香が今現在立っている場所は、モニター越しに一同が目の当たりにしているのは、現代に蘇ったハイラルの一端なのだから。

「これが、『試練の祠』の内部……」

「超技術の担い手たるシーカー族が、後の世の勇者のために築き上げた訓練施設。幾人か存在する『リンク』の一人、『息吹の勇者』と称される少年が、100年の眠りを経て衰えてしまった体を鍛え直すために挑んだと伝えられているものだね。

いやはや何ともこれは、リンク君が魔術と科学を混同するのも無理はない。

彼らの超技術が、果たしてどちらに由来するのかという点は、古くからの論点の

ひとつだった。

まさかこの天才が直接目の当たりにしてさえ、明確な判断を下すことが出来ないとは……やはり魔術と科学のどちらかではなく、どちらともを高次的に突き詰めて融合させた末の」

《ちよっとちよっとダ・ヴィンチちゃん、興奮するのはいいけど長い!!

しっかりしてよ、サポート無しなんて無茶ぶりはお願いだからやめて!?!》

「何を情けないことを言うか、かつて勇者はたった一人でその試練に挑んだというのに」

《何言ってるの王様、『俺達』と立香では出来ることが違うんだからそれこそ無茶ぶりだって》

「……それもそうであった。

そんな分かり切ったことを失念してしまうとは、我としたことが柄にもなく浮かれていたようだ。

赦せリツカよ、だがこれは私の貴様に対する期待の表れであると心得ておくがよい。

あくまで雑種の中で比較した上でのことではあるが、貴様は私の小間使いとしては中々に見所がある故な」

スポンサー権限を最大限に駆使して確保した、モニター前の絶好の位置に据え置いた玉座に腰かけて踏ん返りながら、機嫌の良さを隠そうともせずに高笑いを上げる英雄王ギルガメッシュ。

そんな彼と、冬木という地で腐れ縁を結んだ何人かのサーヴァント達が、相変わらずすぎるその様子を前に腹の底からの溜め息をついていた。

「すみません、一体何があったのですか？

確かあの金ピカ、マスターとなった人間をただそれだけで認めるような類いの輩ではなかった……むしろ、より一層厳しい目で見える方だったと思うのですが」

必要な用事や最低限の仕事をこなす時以外は基本自室に籠もりっきりのため、カルデア内での出来事に対して多少疎い自覚があるメドゥーサの問いに返ってきたの

は、自分達のマスターとなった少年の、ある意味でとてつもなく肝の据わった性分を物語るような顛末だった。

それはつい先日、召喚早々に憧れの勇者を前にしたことで柄にもなく頭が茹で上がったギルガメッシュが、自身の至宝たる本を取り出しながら感動と高揚を露わにして、やらかしの象徴を改めて前にしてしまったリンクが、再びの絶叫を轟かせた時のこと。

共にサーヴァントとして最高峰である二人の実力とか、だというのに口論の理由が極めて私的なものでしかないとか、色々な意味で手出しが出来ない（したくない）中に果敢にも割って入った少年の後ろ姿が、その場に居合わせた者達にはやけに大きく、輝かしいものに見えたという。

「……………本の今現在の所有者が英雄王なのはずっと昔からの事実だからと、今更原本をどうこうしても意味は無いからと、勇者リンクを説得した上で二人の間を仲立ちした？」

それはつまり、あの気紛れな英雄王の機嫌を取るとか、恩を売るとかそういう……………」

「あの子がそういう打算が出来るような、その上で行動に移れるようなマスターならば、私ももう少し気楽でいられたのでしょうけれど。」

残念ながら違うわ、あの時のマスターは『やかましいし周りも迷惑してるから、落としどころをつけてさっさと終わらせてくれ』としか考えていなかったわよ」

メディアはそう言って呆れるものの、実際に立香が打算した上で動いていたならば、ギルガメッシュはその内心を即座に見抜き、短絡的なご機嫌取りが効く程度の存在だと見なされたことに苛立ち、その手段として勇者を利用されたことに怒っていただろうと、エミヤとクー・フリーンは考えていた。

立香にそんな思惑は欠片も無かったこと、リンクとの友人関係が本物であること、マスターとしてではなく彼個人としての純粋な善意があったことを、こちらも即座に見抜いたからこそ、ギルガメッシュは彼をその行く末を見定めることに多少の価値がある者と、一応のマスターとして認めている。

全く意図することなく、本当に自然かつ天然に、英雄王ギルガメッシュに対する最適解を突っ走って走ってみせた立香が、魔術とか神秘とかとは一切関係ないところでも

はや只の一般人ではないことや、極めて優秀なマスターとしての素質があることは、未だ自分を平凡と信じて疑っていない当人以外の誰もが、既に確信していたことだった。

更に言えば、リンクとギルガメッシュを仲立ちしたあの時の立香の行動は、誰もが全く予想することのなかった経緯で以って、彼自身を助けることに繋がった。

落ちていて、改めてギルガメッシュから、『ゼルダの伝説』の原本を発見した経緯と、それを後の世に伝えることにした理由を聞いたリンクは、あの時遺してしまつたゼルダや仲間達が最後まで自身のことを想ってくれていたことを知り、それを引き継いでくれたギルガメッシュに、個人的な恥ずかしさは一旦度外視した上で心から感謝した。

原本のサインにだって、筆者が自分の作品にその証として署名をするだけだと、何も特別なことではないのだからと、引きつる口元を一生懸命に誤魔化しながら応じたのだけだ。

この時、リンクとギルガメッシュは、頭と察しがいさの二人ともが、何故か気付けなかった。

断絶してしまっていた歴史と伝承の全体像を世界でただ一人正確に認識し、それを確かな形と連続性を与えた上で後の世に残した『末代の勇者』が、ある意味では『ゼルダの伝説』という壮大な叙事詩の作者であったことを。

そんな彼が、『単独の膨大な世界観を後の世に刻んだ原典』が自身の著作であることを認め、その意志と所有権の証を自身の手で、誤魔化しようのない署名という形で記しでもしたらどうなるかということを。

結論から言えば、新たな宝具が誕生した。

至宝が更なる輝きを得たことに狂喜するギルガメッシュ、大爆笑のダ・ヴィンチ、鼻と口から魂を飛ばすロマニと、そんな彼にひたすら頭を下げて謝り続けるリンクという混沌の中で。

シンプルに『ゼルダの伝説』レジェンド・オブ・ゼルダと名付けられた宝具の効果は、何人か確認されている作家や芸術家のサーヴァントのそれと同じように、作品の世界観を一時的に再現することが出来るというものだった。

その世界観があまりにも膨大かつ特殊なせいで、魔力の消耗が激し過ぎる上にコストロールが非常に難しいという難題へと、総力を挙げて挑んだカルデア。

そうして辿り着いた成果こそが、今現在立香が立っている場所、モニターの向こうに広がる神秘的な光景なのである。

《これから、本格的に試練に挑む訳だけど……その前に、一度おさらいをしておこうか》

リンクの声が肉声ではなくスピーカー越しで聞こえてくるのは、立香のようにシミュレーターの向こう側にいるからではなく、今の彼は本当の意味で、スピーカーを声帯代わりにして喋っているから。

無数のコードやパイプが伸びる、武骨な金属製の椅子に全体重を預け、広大で美しい世界を見下ろしながら立つ少年の後ろ姿が表紙に描かれている、『ブレス・オブ・ザ・ワイルド』と題名が綴られている本を膝の上で広げるリンクの意識は、今現在そこには無かった。

シミュレーターの機能と、レイシフトを行う際の技術と理論を応用させながら、宝具の使用及び展開をサポートしようとしたカルデアの思惑は、9割方上手くいっ

たところで頓挫した。

固有結界と称しても良さそうな程に、高度で繊細な仮想空間を長時間に渡って構築させるには、あと一手が足りなかったのだ。

ダ・ヴィンチを筆頭とする優秀なカルデアスタッフならば、時間と資金さえあればいずれ解決出来るものなのかもしれないけれど、生憎と今はそんな余裕はどこにも無い。

そんな時に、宝具の展開のみに集中して貰っていたリンクから、そこから更に一歩進むどころか奈落へと向けて飛び込むかのような提案をされて、一同は『その手があったか』と喜ぶ以前に『正気か!?!』と目を剥いた。

『あの世界』を唯一、知識だけでなく体感でも知っている者を、魔力だけでなくその存在そのものを柱として、管理者として投入すれば、仮想空間は確かに比べようもなく安定することだろう。

目の前にある実利より、リンクの心身の方を優先して案じてくれることを嬉しく思いながら、リンクはそれが最善だと説得した。

抵抗も虚しく押し切られてしまったこと、リンクに大きな負担をかけてしまうこ

とを、自分達の力不足として悔やんでいたスタッフ達だけだ。

その後、リンクが笑いながら、『気にしないでいいよ、許可が出なくても勝手にやってたから』と言い切ったことに加えて、その顛末を後から知った立香が、半ば死んだ目で『独断で強行する前にちゃんと言うようになっただけまだマシかな……』と呟いたことで、今後は正していくべき真の問題点は別のところにあったことを認識したのだった。

兎にも角にも重要なのは、そういった様々な騒動や問題を乗り越えてきた先で、全ての準備がようやく整ったこと。

リンクに促され、彼から預かったものを『おさらい』のために手に取った立香。この場所、その光景に対する懐かしさが、今は形の無い胸の奥から込み上げてくるのを、『息吹の勇者』のものであるうそれを先代への敬意と共に噛み締めながら、リンクは自身の頼れる旅の供でもあった石板についての確認を今一度始めた。

《機能の種類と使い方は、ちゃんと頭に入ってる？》

《……多分大丈夫、だと思ふ》

《あまり気負うなって。

少しくらい忘れてても、必要な時に思い出せば問題ないんだから》

その言葉が、見えなくても笑っていることが分かる口調が、強張っていた体と心をどれだけ楽にしてくれたことか。

震えていた拳を握り、もう一度だけ喉を鳴らしてから顔を上げた立香の、青い瞳に確かな覚悟が宿っていたことを確認したリンクは、今度こそその背を押した。

《シーカーストーンの機能は自由に使え、中に入っている道具も必要と思えば好きにしている。

一度に一人ずつだけれどサーヴァントの存在も選択肢に入れていい、そこから呼ぶ分には負担はかからない。

ただし、それはあくまでお前自身が行動するための『手段』としてだ。

助言を出したり、自分の意思で勝手に動いたりはしない、1から10までマスターとしての的確に指示を出すこと。

何をしていたいい、どんな工程を経てもいい……お前が為すべきことはただひとつ、目の前の謎や仕掛けを解いて最奥を目指す。

それじゃあ頑張れ、祠の試練開始だ》

リンクの合図と共に、石とも金属とも取れる不思議な建材で築かれ、青い光で照らされる空間の中を駆け出した立香。

かつての勇者と同じようなその背中、その姿を、かつてとは違って多くの者達が固唾を呑みながら見守っていることが、立香が決して一人ではないことが、リンクは無性に嬉しかった。

今月から職場が引っ越して、環境の変化に加えて通勤時間が往復で一時間伸びてしまったことで、このところ疲れ気味です。

執筆及び投稿スピードが少し遅れるかもしれませんが、自分でも楽しんでいるこ

とだし、感想を頂けるのも凄く嬉しいので、なるべく頑張っています。

立香の試練 本番

この日予定されていた試練は8つ、そして立香はその半分を何とか終わらせた。彼が最初にこなした4つの試練は、100年の眠りを経て目覚めた『息吹の勇者』が、かつて仕えたハイラル王の魂に導かれながら挑んだものだという。

それは実際に挑んだ立香からしてみれば、試練と言うよりは、いつかの時代の勇者が彼のために用意された力を受け取るための、その使い方を実践するための練習施設と称した方が正しく思えるようなもので。

リンク自身も実際にそのつもりで、慣らしという意味合いも込めて、最初の試練にそれらを選んだようだった。

体育の授業で扱ったことのある、バスケットやサッカーのボールを彷彿とさせるようなサイズと重さの上に、意図して起動させない限りは投げようが蹴飛ばそうが何の問題もない安全性にも関わらず、いざ起爆すれば積み重なった岩の塊を崩壊させる威力の爆発を起こす、丸型と四角型の二種類が存在する『リモコンバクダン』。

水面を利用して氷柱（作成した水面に固定されてなぜか溶けない、滑らない、沈まない、数量制限を超えるか同系統の力で干渉しない限り壊れないなどの、水分子を温度以外の何かしらの要素で特別に結晶化させていると考えた方が納得できる謎の代物）を造り、水面を駆ける足場や敵の攻撃を防ぐ盾とすることが出来る『アイスメーカー』。

例えるならば超強力な電磁石。どれだけ巨大で重いものであろうとも、それが金属製でさえあるならばボタンひとつで軽々と持ち上げ、ぶん回し、使用者がその気になりさえすればかなり精密な操作も可能になる『マグネキャッチ』。

重力に引かれての落下などの自然なものや、機械やカラクリの稼働といった人為的なもので、あらゆる物理法則に干渉してそれを一時的に停止させ、その最中に加えられた衝撃を溜め込みつつ時間切れと共に解放させることも出来る『ビタロツ

ク』。

登場したのは『伝説』も終盤に差し掛かってからで、実際にそれらを使用して冒険をしたのは『息吹』と『末代』の二人だけではあるけれど。

文章で語られるだけでも伝わる凄まじさや、使用者の発想と工夫次第でどんなことでも出来そうな汎用性に加えて、そんな面白い力を駆使しながら難関を乗り越えていくさまが痛快で堪らないという理由から、数多ある『伝説』の要素の中でも評価と人気が特に高いもののひとつである、シーカーストーンの内蔵機能。

かつて『息吹の勇者』が試行錯誤を繰り返しながら使い方を覚えたのであろうそれを、立香もまた、詰まった時に少しでもだけアドバイスを貰いはしたものの同じように使用しながら試練に臨んだ。

行く手を阻む障害物を、『リモコンバクダン』で吹っ飛ばしながら進む。簡単に言えばただそれだけだった筈の試練は、爆弾を自らの意思と手によって爆発させるということへの忌避感と恐怖をなかなか拭えずにいた立香が、一度発破することによって距離と時間を必要以上に取ってしまったため、内容を把握していたリンクの事前の想定よりもずっと時間をかけてしまった。

高所へと上るために『アイスメーカー』で氷の足場を作った際には、ほぼ平らな壁面に挑むには握力と腕力と脚力が足りなかったという根本的な理由で氷柱を登れず、目の前ではなく足元に発生させるよう設定を変える方法を改めて教わるという情けないことになってしまつて。

『マグネキャッチ』で巨大な金属の塊を宙高く持ち上げ、それを目的の場所へと持っていくのに四苦八苦していたら、自身の頭の上でうっかり解除してしまつて危うく超重量に潰されかけ、その後完全にビビってしまったせいで『リモコンバクダン』の時に以上に時間をかける羽目になつて。

坂道を転がる巨大な石球を『ビタロック』で止めている間に、その途中にある横道まで急ぐ必要があつた試練では、効果が出ている時間内で急勾配を上りきることが一度では出来ず、何度か繰り返し返してようやく成功した際には肺と気管が立てる音がもの凄いいことになつてしまつていた。

一番初めの練習用である筈の、数多ある試練の中でも簡単な方である筈のものをやつとの思いでクリアする度に、オペレーションルームから送られてくる温かな拍手と歓声を、醜態を晒した自覚があるので苦笑いと複雑な気分で、それでもありが

たく受け止めながら。

ようやく辿り着いた予定の折り返し地点で、既に音を上げ始めている体を懸命に叱咤しながら、立香は自身の友とはまた別の『リンク』に……『息吹の勇者』について考えていた。

膨大な『ゼルダの伝説』を時系列に沿って読み始めたばかりの立香には、彼の旅路を描いたものであるという『ブレス・オブ・ザ・ワイルドの章』は、最後から二番目だというそれは遙か彼方にあるもので。

それ故に、全体の多少のあらずじや、彼の旅路がどのように始まるものであるのかを、マッシュやロマニ、更にはある意味で当人であるリンクから多少聞いたくらいでしか把握出来ていない。

だとしても、彼が辿った冒険と旅路の一端に掠り、その過酷さをほんの僅かでも実感した身からすれば、思いを馳せるには十分だった。

ハイラル王国の、由緒正しき騎士の家の嫡男という、歴代の中でも珍しく地位と立場のある身として生まれ育った『リンク』。

恵まれた環境と教えの下で、その類稀なる素質を幼い頃から発揮してきた彼は、

王国最年少の天才剣士としてその時代のゼルダ姫の護衛に、国を守る『英傑』という存在に拔擢され……復活した厄災ガノンの侵攻からゼルダ姫を守って懸命に戦い、その末に果てたという。

国の滅びがもはや免れない中で、未来へと託す最後の希望として回生の眠りについた彼は、100年後の世界で目を覚ました。

自分が誰なのか、なぜ眠りについていたのか、自分は何をしなければいけなかったのか、何もかもを全て忘れて。

そんな状況で彼は、ほんの一時たりとも立ち止まることなく歩み出した。

目の前にあるもの、目の前で起こることのひとつひとつを真摯に受け止め、懸命にこなしながら、かつての自分を少しずつ取り戻し、または新たな自分を築き上げていった。

空っぽになってしまった自分に、最初に語りかけてくれた人……その人が誰なのかを、その人と過ごした時間と思い出を忘れてしまったとしても、本当に大切な存在だったのだということだけは、記憶ではなく魂で覚えていた人を助け出すために。まだ本格的に旅立ってすらいらないのに、立香はこの時点で白旗を上げてしまった。

目覚めたばかりで色々と言が分からなかったであろう彼が、そんな状態で一人挑んだ試練を、多くの仲間達に見守られながら、励まされながら、やっとの思いで成し遂げてきた今となっては、その想いは余計に顕著なものとなっている。

誰よりも『勇気ある者』と称される少年達が示し続けてきた、どんな困難が立ちまじかろうとも、決して諦めることなく乗り越えてみせる心の強さ。

同じものが欲しいとは、自分にも同じことが出来るとは、立香は思わないし思えない。

彼はただ……歴代の中でも、特に孤独な旅路を送ったのであろう『息吹の勇者』に、一声かけてあげられれば良かったのにと思っていた。

『応援している』とか、『大丈夫だよ』とか、『分かっているよ』とか。

どんなものでもいいから、『独りなんかじゃないんだよ』と伝えることが出来る言葉。

乗り越えられるだけ、諦めずに頑張ることが出来るだけで不安や辛苦を感じない訳ではない、『勇者』という名の兵器や人形などでは決してなかった彼が、彼らが、勇気を出すための手助けが出来れば良かったのにと。

今更の話だとか、無意味な感傷だとか、分かっているながらも思わずにはいられなかった。

《……つか君、立香君！

ねえ大丈夫、僕の声ちゃんと聞こえてる!?》

「……ごめんどクター、ちょっと考え事してた。

十分休んだし、もう行くよ」

《……あまり無理をしないで。

予定していた8つというのはあくまで出来ればの話だって、大変なら途中で止めても構わないって、リンク君も言っていたんだから》

「うん、分かっている……俺は、本当に大丈夫だから。

行かせて、ドクター」

絶対に全て成し遂げてみせると、自分は既にそう決めているのだと、モニターとスピーカーを経ながらも真っ直ぐに伝えてくる瞳と声を前に。

ロマニが出来たのは、ただ立香の望み通りに、試練を続けるという指示を出すことだけだった。

そうして始まった、『祠の試練』の後半戦。

リンクが意図して再現した前半の4つの試練は、挑戦者に『基本』を実践させる為の、取り繕わずに言えば簡単である筈のもので。

それを立香が、何とか、必死に、やっとの思いで成し遂げていく様子を見守ってきた……今まではあくまで前座で、本番はこれからだということを正しく認識していた一同は、この時点で既に寿命が縮むかのような思いを味わっていた。

『『勇者』の訓練用として造られた施設なんだから、そもそもの話、ほぼ一般人の立香君が挑むって時点で十分無謀な話なんだよねえ……』

《大丈夫だよ、試練の中でもなるべく簡単なものが出てくるように意識してるから》

「簡単な試練なんてものがあんの？」

《立香次第かな》

「……それは、一体どういう意味m」

「ロマニ、始まるよ」

リンクへの問いかけを、ダ・ヴィンチの声と状況によって遮られたロマニは、慌てて視線をモニターへと戻し、立香がこれから挑むことになる新たな試練の形を目にした。

まず最初に目に入ったのは、どんな仕組みなのか、揺らめく水面の上に何の支えも無いまま静止する巨大な立方体だった。

6つある壁面のうち、3つには大きな燭台が据えられ、その内のひとつには炎が赤々と燃え上っている。

燭台は、立方体を挟むように両脇に建てられていた壁にも据えられていて、その数は合わせて5つ。

虚空に浮かぶ立方体がもうひとつあったことと、その壁面のうちの3つに据え付けられていた赤い水晶のようなものが、それぞれ向きが違う矢印を備えていることに気付いた立香が、その内のひとつを徐に、シーカーストーンから取り出した棒

で叩いてみた。

途端に青くなつた変化に合わせて、その矢印が示す方向へと、水面上の立方体が回転する。

火のついた燭台の位置が移り、壁に据えられていたものと向き合つたことでその火が移つた光景を前に、見守っていた者達も試練のクリア条件に気がついた。

「成る程……上手い具合に仕掛けを動かして、全ての燭台に火をつければいい訳か」
「身体能力や判断力だけでなく、思考力や発想力を問うような形の試練もあるんですね」

「だけどこれ、結構難しそうだよ。」

順番を少しでも間違えれば、下の水に浸かったり、立方体の壁面のひとつから出ている噴水を浴びたりして、折角付けた火が消えてしまうじゃないか」

「この天才の頭脳は、既に答えを導き出しているのだけれど……立香君はどうかなあ、彼ってこういうの得意だったっけ」

幾つかの不安げな眼差しが向けられる先で、モニターの中の立香は、確認のために一度動かしたきりの仕掛けを前に、未だに頭を捻り続けていた。

まさか解き方が、クリア条件が分からないのかと、流石にそこまでではないと思いたいと。

一同のそんな不安な内心を知らないまま、しばし唸り声を上げていた立香が、意を決して口にした問いかけの意味を、即座に察することが出来た者は少なかった。

《なあ、リンク……あれって、ただ単に火をつけさえすればいいんだよな？》

《（あつ、これは気付いたかな）そうだよ、いいから好きにやってみろ》

《……清姫、ちょっと手伝って！》

立香がその名を呼ぶのとほぼ同時に、光の粒子が集まりながら徐々にその身を構成させていく独特の現象を経て、頼りにしてもらえたことへの歓喜に頬を赤らめ、瞳を輝かせながら、龍の化身たる少女がその場に降り立った。

仕掛けを動かして答えを導き出す、ただそれだけの筈の試練でなぜサーヴァント

を呼んだのか、彼女に一体何をさせるつもりなのか。

薄っすら勘付いた者と、全く分からなかった者が入り混じりながら騒めくものにも構わずに、立香はマスターとして、自身のサーヴァントへと指示を出した。

《ちょっとアレに火をつけてくれる？》

《お安い御用ですわ》

「えっ……センパイ、清姫さん、ちょっと待って下さ」

マシユの制止の声は間に合わず、清姫の口から吐息代わりに吹き出された炎が、扇子の一振りで幾つもの火球となる。

それが、クリア条件を満たす為の残り3つの燭台へと向けて飛んでいき、先のものと合わせて5つの炎が灯ったと同時に、次の部屋へと進む扉が開く音が、試練が達成されたことを告げる音が聞こえてきた。

今までで最も早く、最も簡単に、これで本当にいいのかと不安になってしまいうレベルであっさりと終わってしまった試練と、得意げな笑みで拳を握ってみせた立香

に、慌てる者や感心する者でオペレーションルームはちょっとした騒ぎになっていた。

「あらら、クリアしちゃったよ」

「いいんですかリンクさん、大切な試練をあんな形で終わらせてしまっ

《マシュは駄目だと思うの？》

否定、もしくはそれに近いような言葉が返ってくるとは全く思っていなかったマシュは、立香の反則的な行為（マシュはそう思った）を暗に肯定しているリンクの様子に、思わず言葉を失ってしまった。

混乱のあまりに思考と動きが固まってしまったマシュへと、苦笑しながらフォローを入れたのは、彼女や立香の先生役がすっかり板についたクー・フリーンだった。

「なあマシュ、落ち着いてちゃんと思いついてみろや。」

今回の試練を達成する条件は、一体何だった？」

「それは、5つの燭台全てに火をつけること……ああっ!!」

「そう、別に『仕掛けを解け』とは言ってねえ。

マッシュが考えていたように順当に仕掛けに挑もうが、立香が気づいたように直接狙っちゃおうが、とにかく火さえつけければ良かったんだ。

……だけどまあ、あれだけ大層な仕掛けをこれ見よがしに用意されちゃあ、『これを解かなければならない』『それこそが試練だ』と思い込んでしまうのも無理はない。それに気づけるか、もっと楽で確実な抜け道を探せるか、その為の手段を実行に移せるかといった辺りまで、全部含めて試練ということになるんだろうなあ」

立香こそが試練の意図を正しく理解していたことに気付かずに、的外れな疑念を抱いてしまった恥ずかしさから真っ赤になって俯いているマッシュの頭を、陽気で豪快な笑い声の主の手がかき混ぜる。

少しだけ乱暴で、とても優しくかった手の温かさに励まされたマッシュはゆっくりと顔を上げ、その先のモニターに、自力で越えられたことで自信がついたのか、勇ん

で次の試練へと向かう立香の姿と笑顔を見た。

その後の試練は、前半戦のぐだぐだが嘘のように順調に進んだ。

首を回しながら見渡すような広大な空間で、風を受ける向きの違う風車と、方向を変えられる送風機が入り混じりながら列を為していた試練では、全ての風車を一斉に回せる送風機の向きを探せばいいことにすぐさま気が付いて。

実働要員としてジークフリートに来てもらい、自身は高いところから指示を出すという、マスターとサーヴァントの在り方として相応しいかつ堅実な選択によって、多少の試行錯誤こそあったものの最後まで特に問題なく進められた。

足場が途切れて、壁を伝い落ちる水に行く手を遮られてしまった際も、溜まった水面だけでなく滝状になって落ちる水流からも氷柱を造れることに自力で気付き、先へと進むことが出来た。

先程、その氷柱を自力で登れなかったことを忘れていなかったらしい立香の、無理をせずに手を貸してもらったことにした選択を。

呆れ顔で伸ばされたジャンヌ・オルタの手に引っ張り上げて貰っている、『ありがとー』と言っているのが聞こえてきそうな笑顔を、サーヴァント達はモニター越

しで、感心しながら見守っていた。

「マスターの役目は、サーヴァントを上手く使うこと……それをあの子はちゃんと、良い意味で分かっているわね。

変に自尊心が高い奴は、身の程を知らずに、サーヴァントを相手に張り合ったりすることもあるから……」

「強力な使い魔を意のままに出来る万能感に思い上がって、下らないことから大変な無茶ぶりに至るまで、サーヴァントを無暗やたらとこき使う者もいます。

その点彼は、自分一人では出来ないこと、大変なことを、あくまで手伝ってもらうという形を貫いて……その在り様に、好感を抱くサーヴァントは多いでしょう」

都合のいい使い魔や強力な兵器としてではなく、個として尊重してくれた上で必要な時には頼りにしてくれて、力を正しく発揮させてくれる。

立香がそんなマスターであることを素直に喜んでいるメディアやメドゥーサを

よそこに、エミヤやクー・フリーンは感心しつつも、ほんの少し不満そうな様子でもあった。

「自分自身が今出来ることを正確に把握して、無理をしたり意地を張ったりせず、に最適な判断を下すことは、『マスター』としては確かに大事なことはあるんだが……立香個人の話として考えれば少し堅実すぎるっつーか、良くも悪くも身の程を知りすぎているっつーか。

特訓の時に見せるような威勢や根性を、男の意地とか譲れねえ何かとかを、実践でも押し出してみてもいいような気がするんだよなあ」

「押し出し過ぎて、サーヴァントを差し置いて最前線に生身で飛び出すなどということにならないのならば、私もその点に関しては同感だ。

すぐ隣に勇者リンクという最高峰の手本が居るのだから、彼の『勇氣』を自分出来る範囲で参考にしても良いのではとおm」

「何も知らない雑種どもが、好き勝手にほざいておるわ」

思考と発言を遮りながら聞こえてきた癪に障る発言に、その対象とされたエミヤとクー・フーリンが、共にこめかみに青筋を浮かべながら振り返ってみれば。

案の定そこには、近未来的かつ無機質なオペレーションルームには不釣り合いすぎる玉座で踏ん返り返る、黄金の古代王ことギルガメッシュの姿があった。

「……でかい口を叩くじゃねえか、俺達がマスターの何を知らないって？」

「それを我が知っていたとして、わざわざ教えてやる必要がどこにある」

額の辺りをブチッと鳴らしながら『アンサズ』のルーンを空中に描き出したクー・フーリンと、『気持ちちはわかるが落ち着け！』と彼を羽交い絞めにするエミヤを、視線ですら構おうともしないギルガメッシュ。

そんな彼の脳裏には、自身がここに召喚された直後の、此度のマスターを見極めてやろうとした時の、自分達以外は誰も知らないやり取りが蘇っていた。

『世界を救う勇者とか、偉業を為す英雄とかに俺自身がなれるとは思えませんし、なりたいたとも思いません。』

俺みたいな凡人がマスターでごめんなさいってつい謝りたくなるような人達が、俺が一生頑張ったって足元にも及べないような人達が、もう力になってくれているから。

サーヴァント達は本当に凄い人達ばかりで、皆が俺の自慢で……だから俺は、英霊になって良かったって、生前に頑張って良かったって、皆に思ってもらいたいです。

あなたが大変な思いをして英雄になって、サーヴァントとして今ここにいてくれるおかげで、俺は助かったんだって。

俺が今ここにいられるのは、あなたが歩んだ人生のおかげだって』

『戦ってくれてありがとう、乗り越えてくれてありがとう、俺のところに来てくれ

てありがとうと、笑いながら言える。

サーヴァント達の生きざまは間違っていなかったと、その身で以って証明してやれるマスターになりたい。

色々な理由から自分の命を軽く思っただけで、いざという時はあっさりの特攻かけて自爆しそうなサーヴァント達が、あのマスターを遺していけないと、生きて帰らなきゃと思ってくれるような……崖っぷちに向けて常に一歩踏み出しているような《英雄》達を、《人》の世界に繋いで引き戻す、鎖のような存在になれたらいいなと思うんです』

『自衛手段を持たないのは危険だって、ちゃんと分かっていますよ。

でも俺はそれでいいんです、弱いままがいいって……英雄としてじゃなく、理不尽に未来を奪われた何十億の一般人代表として、人理焼却に挑むって決めたんです。それが俺の、マスターとしての理想……どんなに大変で無謀だとしても、それを諦めないことが俺の覚悟。

その道を選んだことが、俺の勇気です』

『……誰にも言ってませんよ、今王様に話したのが初めてです。

何故ってそりゃあ、変なこと考えてる自覚は一応あって、怒られたり悲しまれたりするのが目に見えてるんで。

王様に話したのは、正直に答えないとマスターだろうがガチで殺されかねなかったのと……厳しくて怖いけれど、目の前にあるものを真剣に見極めようとしてくれるこの人なら、俺の勇気を否定したり、やめさせようとは思しないで、《精々頑張れ》って笑い飛ばしてくれそうだなって思ったから』

「何が堅実か……自身の平凡さを、決して英雄とは至れぬ身であろうことを過たず自覚した上で、あんな身の程知らずにも程がある発言が出来る者はそうそうおらぬわ」

あの時、立香の予想通りに盛大に笑い出し、『いくら何でもそれは酷いんじゃないですか!』と突っ込ませる勢いで腹を抱えながらのたうち回ったギルガメッシュ。神威に溢れたその赤い瞳を、何が不機嫌の引き金になるかわからない彼の顔を、真正面から覗き込む気概がある者がいたならば、間違いなく自身の目と正気を疑っていたであろう程に。

モニターとその向こうに広がる光景を見る王の眼差しには、その成長を、行く末を見届けてやろうと、至る先が楽しみだと、言わずとも語っているような柔らかな光が存在していた。

そんな彼らに見守られながら、開始時に立てられていた予定の最後のひとつ、8つ目の試練が始まった。

後半が順調だったため、立香の消耗は途中で一同が心配していた程ではなく、最後の試練の決行を躊躇わせるものは何も無かった。

自身の体が青い光と化して移動する、既に何回か味わっているというのに一向に慣れない不思議な感覚を経た立香が降り立ったのは、サーヴァントが全力で走り回れるくらいの広さと高さを備えた大部屋だった。

試練の祠の内部が異様な広さを備えていることは既に把握されていて、広大な空間を丸ごと使って行われる形式だったものだって、これが初めてという訳ではなかったのだけれど。

立香が思わず首を傾げたのは、その理由となった違和感は、試練の内容らしき仕掛けや行く先を拒む障害物といった類いのものが、見通しがいい筈の室内のどこにも見受けられないことだった。

「なあリンク、見た感じ何も無いんだけどどういいうこと」

《あゝっ》

「……………あの、リンクさん？

何ですか、『あつやべえ』みたいな感じに聞こえた今の声は」

《ごめん立香、後でいくらでも怒られるから今は逃げて!!

それ普通に戦う奴だ!!》

「はああああああっ!!!?!」

マジ声の絶叫を迸らせた立香の耳に、空間の奥の方から、何かしらの仕掛けが稼働する音が聞こえてきた。

そこに大きく深い縦穴が開いていたことに、立香が気づいた時には既に、穴の底から舞台の奈落のようにせり上がってきた床が乗せていたものを、彼は目にしてしまっていた。

無機質かつ人工的な外見は、人の手によって、自然界には存在しない物質を用いて造られたことをあからさまに感じさせるもの。

節を連ねて湾曲しながらやけに滑らかに動く足や、位置や動きからあからさまに目をおわせるパーツの存在が、それがまるで生き物であるかのように思わせるのに、足は3つで目はひとつという生物にはあるまじき異様さが、目の前の存在が生きてはいないという事実を改めて、更に生々しく突き付けてくる。

某SF超大作に出てくるビームサーベルのような武器を掲げながら、生々し過ぎて気持ち悪い一つ目をギョロリと向けながら、地を這う蜘蛛のような動きでこちらへと向けて近づいてくるそれは、古代の超文明が作り上げた戦闘用ロボットと称していいものだった。

「何あれ何あれ何あれめっちゃキモイんだけど!!?」

《シーカー族特製の戦闘訓練用小型ガーディアンだ、キモイ言うなわかるけど!!
余計なことは考えなくていいから、とりあえず今は逃げろ!!

それはあくまで試練だから逃げようと思えば逃げられるし、深追いだってしてこない!!》

《リンク君の言うとおりだよ立香君、無理しないで戻ってきて!!

これが試練で良かった……レイシフト先で本当に、立香君一人だけで敵と鉢合わせしていたら大変なところだったよ》

リンク達の言葉に否は無く、自身も逃げる気満々だった立香は、ロマニが安堵と共に思わず吐き出した言葉を耳にした途端に、身を翻して走り出しかけていた思考を止めてしまった。

ロマニの考えは少し違うのではないかと、これはむしろ別の意味で『良かった』なのではないかと思った。

ロマニの言う通り、同じような事態が起こる可能性は確かにあって、今回のように自力で逃げられるような状況だとは限らない。

英雄としてではなくただの人として戦い抜こうと、それを選んだせいでどんな苦難を強いられたとしても決して諦めないと決めた以上は、恐ろしくても立ち向かい、勝てずとも生き延びることをどんな時も、例え試練（練習）でも忘れてはいけないのではないのかと。

浮かんだ疑念を一瞬で覚悟へと変え、胸に刻み込んだ立香は、オペレーションルームの皆が自身の名を呼ぶ焦り声を聞きながら、それでも立ち止まり振り返った。その目に飛び込んだ光景は決めていた筈の覚悟を上回るもので、自身が躊躇っている間にも変わらず迫っていたガーディアンが、視界の殆どを埋めながら武器を振り上げていた。

込み上げた恐怖心と後悔をそれ以上の勇氣で制しながら、一瞬反射的に逃げ出しかけた足を踏ん張らせながら腕を上げ、無機質故に気味悪くこちらを見据えてくる単眼へと伸ばした指先を突きつけた。

「『ガンド』!!」

至近距離から放たれた呪いの一射は、ガーディアン弱点であった眼を正確に打ち抜き、からくり仕掛けの体躯に作動不良を引き起こさせた。

僅かながら、それでも確かに確保された絶好の機会で、『英雄』ならば更なる攻勢に打って出るだろうし、『人』ならばこれ幸いにと逃げるだろう。

しかし立香は、『英雄』でも『人』でもなく『マスター』だった彼は、そのどちらも選ばなかった。

制しようとは努めながらも、完全には押さえきれなかった恐怖で茹った思考を懸命に働かせながら、必要な言葉を張り上げた。

「誰か来て!!」

『誰か』って誰だと、切羽詰まっていたとしてももう少し言いようがあるだろうと、あれでは呼ばれる方も困ると。

後で自分でも突っ込むことになるような、無茶であんまりな言葉に、間髪入れずに応えてくれた者がいた。

何も無かった筈の頭上から突如降ってきて、着地よりも先にその手の剣を振りかぶり、関節部から火花を散らすガーディアンの頑強な体軀を追い打ちをかけて叩き切った『彼』の後ろ姿に、立香は思わず状況を忘れて目を瞬かせてしまった。

たった今間違はなく自分を助けてくれた、何の恐れも疑いもなく見せてくれる無防備な後ろ姿が、見覚えの無いものだったからだ。

正確に言えば、似たようなものならば知っていた。

友人のものと比べて色合いが少し落ち着いている服、後頭部に長く垂れ下がる同じ色の帽子、そこから覗く金の髪と長い耳。

友人とよく似た後ろ姿の『彼』は、友人とは違い、その剣を右手に携えていた。その場に力なくへたり込みながら、ゆっくりと振り返る『彼』の姿を見続けることしか、今の立香には出来なかった。

「大丈夫？」

友人と同じ、宝石のような青い瞳と美しい相貌の少年がかけてくれた優しい言葉に、ただひたすらに頷くことでしか答えられない。

ニツコリと笑いながら手を振った彼の体が、その指先からゆっくりと青い光と化して消え始めた光景を前に、立香はようやく、胸のところでつかえていた言葉を発することが出来た。

「リンク、ありがとう!!」

「……どういたしまして。」

こちらこそありがとう、これからも『末代』を……『俺達』をよろしくね」

一瞬哑然としてから発せられた、本当に嬉しそうな言葉と笑顔が。

オペレーションルームの一同が過ぎた驚愕に、声を上げる間もなく石化してしまった姿が。

静まり返った中で一人玉座から立ち上がって、歓喜と興奮のままに騒いでいるギ

ルガメッシュという混沌の光景が、祠の試練の締め括りとなったのであった。

「リ〜〜ク〜〜っ!!」

始める前に、今の俺でもその気になればクリア出来るような、比較的簡単な奴しか出さないって、お前確かに言ってたよな!？」

「簡単な奴だったんだよ、だってあれ一番弱い『序位』のガーディアンだったし!!」

「お前の基準で簡単でも俺にとっては命がけなの!!」

そこるところ頼むから、ほんととマジで反省して!!」

「してますしひえましゅ、いひゃいひひゃいごめんなさい!!」

「…………おーい立香君、気持ち分かるけどその辺で。」

私達はもう慣れてきちゃったから構わないけれど、君が今やっていることは、大概の人にとっては白目を剥いて引っくり返るような暴挙だってことだけは、どうか忘れずに覚えておいてくれたまえ」

ダ・ヴィンチが止めに入ってくれたおかげで、額に青筋を浮かべる立香の手から両頬を取り返すことが出来た、赤くなってしまったそこを涙目で押さえるリンクへ

と、周囲の無言の圧力に屈したロマニが意を決して声をかけた。

「あ……あのー、リンク君。」

さっき出てきた『彼』は、もしかして……」

「俺の一代前の先輩だよ、『息吹の勇者』」

「やっぱり!？」

「あの切羽詰まった状況で、『誰か来て』なんて曖昧な指示を出してしまった立香に、誰も来れない、もしくは来れたとしても時間がかかる可能性を考えて、咄嗟に出て来てくれたんだと思う。」

あれは『リンク』達の記憶を元に作られた仮想世界で、更にあそこは『彼』の領域だったから、瞬間的に駆けつけることが出来たんだ」

「……また、会えるかな」

咄嗟にはなくちゃんとお礼をしたいのだと、もっと言いたいことがあるのだと。その表情で訴えてくる立香に、リンクは申し訳なさそうに、しかしはつきりと首

を横に振る動作で答えた。

「悪いけどそれは期待しないで……基本は俺に全て預けて、任せてくれている先輩方が表に出てくる、出なきゃいけないようなことになったとしたら。

多分それは、俺が何かしらの大きな失敗をして、それをどうにか補填しなきゃならないような時だから」

「……………結構ありそうだって思うのは気のせい？」

「ハッキリ言うな、怒るぞ。」

……何か俺ばかりうっかりしてるって思われてそうだけど、先輩方だって大概だからな。

歴代の各々方は大抵が、『息吹の勇者』だって変なところでしょうもない失敗してるから!!」

「はいはいどーどー、落ち着いてリンク君。

今はそういう話をしている時ではないと、君ならばわかるだろう？

立香君は予定されていた試練を何とか全て終わらせたけれど、これから一体どう

すればいいんだい？

試練を経たことで、彼には既に新たな力が宿っているのか……それとも、ここから更に別の一手が必要なのか」

ダ・ヴィンチの言葉に気を取り直したリンクは、大きく深呼吸をして気持ちを落ち着かせると、空気が変わったことを察知して息を呑む立香へと向けて利き手を伸ばし、その甲に刻まれたトライフォースの紋章を輝かせた。

それに引き寄せられるかのように、大きく広げた翼のような印が内包された紫色の球が8つ、立香の胸元から現れた。

「それは……」

「試練を成し遂げたことの証明、『克服の証』だ。

『息吹の勇者』はこれを集めて、その上で像を通して女神ハイリアに祈ること、彼女から新たな加護を得た。

……まあこれに関しては、俺がたった今、トライフォースの力で造ったものだけ

ど」

「その為の核となったのは、マスターが皆の目の前で、確かに試練を成し遂げたという『事実』よ。

勇者と同じ試練を越え、それを当の勇者自身によって認められる。

魔術儀式のひとつの形としては、上等なものではなくて？」

「それを、ここから更にもうひと段階……」

トライフォースの底なしの魔力を、自身の中にいる『息吹の勇者』の記憶と経験、更にはメディアが作成・調整してくれた形式と手順に沿って廻すことで、新たな形として紡ぎ上げていく。

工房も魔方阵も無く、一人の少年の手の中で、彼の記憶と意思のみを頼りに行使される大魔術に誰もが目を奪われた、実際にはほんの僅かなものだった時間を経た先で。

繊細な装飾が施された赤と緑の美しい『器』を、軽く掲げたリンクの手のひらから少し上の虚空に浮かぶそれらを、一同は前にしていた。

「……………それが、命の『器』」

「赤い方がな、緑の方は精神力の上限を増やしてくれる」

そう言って笑ったリンクは、二つの器を……一般の魔術師が知れば目の色を変えて、何と引き換えにしても手に入れようとするだろう魔力と神秘の結晶を、欠片も躊躇うことなく立香へと向けて押し出した。

それと同時に、器は幾つもの帯状の光と化し、立香の胸へと吸い込まれていった。目の前であっさりと行われ、あっという間に終わってしまった、内容も結果もとんでもないものである筈の魔術儀式に、見守っていた一同も当事者の片割れである筈の立香も、現実をすぐには受けとめきれずに立ち尽くすことしか出来ない。

そんな彼らに先を促したのは、儀式の構成に関わっていたことで、既に耐性を得ていたメディアだった。

「何をぼさっとしているの、そんなことをしていられる場合ではないわよ。」

マスター、自分で何か分かることや感じるものはある？」

「いや、特に何も……」

「まあ無理もないわね、極めて感覚的なことだもの。」

徹底的に身体検査をするわよ、手伝ってちょうだいダ・ヴィンチ!!」

「了解したよ、いやゝあ腕が鳴るねえ!!」

「ちよ、ちよっと待って二人とも、何か目とか迫力とかが怖いのは俺の気のせい!」

「当たり前でしょう、こう言っては何だけど今のあなたは最高のサンプルよ!」

古代ハイリア時代の神秘を直接宿した身を前にして、魔術師として高揚せずにいられるのですか!!

麻酔無しで解剖したりホルマリン漬けなんて非道な真似はせずに、あくまで健康診断で収まる範囲の方法で調べてあげるから安心なさい!!」

「出来ませんよ!!

ちよっ、誰か助けてええええっ!!」

普段は淑女として封印している、しかしサーヴァントであるからには最低限だと

してもそれなりである筈の臂力を最大に駆使して立香を引っ張っていくメディアと、一足遅れながらも気を取り直し、その後に慌てて続いていくスタッフ一同。

彼らの奮闘と、ほぼ生贄状態だった立香の献身（犠牲）によって、最低限魔力を通せる程度でしかなかった筈の魔術回路が確かに増加・強化していたことが確認され、魔術師にとっての常識が覆されたことと、今後の人理修復における展望が一気に開けたことにカルデア中が沸き立った。

その気になればまだ試練を続けることが出来るとリンクが断言し、それを受けた立香も引き続きやる気を見せたことで、スタッフ一同も今後行われるであろう第二弾や第三弾の試練を見越して、全体の予定を調整していくこととなる。

それらの一連の展開を最初から最後まで全て、特等席から余さず見据え続けた、珍しく上機嫌が続くギルガメッシュの笑い声が事あるごとに響いてくるのを、立香は他の皆と同様に少しだけ鬱陶しく思いながら、しかしそれ以上に安心していった。どんな無茶で無謀な決断や選択でも、笑いはすれど否定はせず、折れそうになったり諦めかけたりした時は、冗談でなく死にかねないような勢いで尻を蹴飛ばしてくる。

そんな彼に見られていると、見てくれていると思えば、これからも頑張っていけ
そうな気がしたから。

試練は今もお、どんな時でも続けられているのだということ、立香はちゃんと
分かっていた。

『ハートの器』はコストを、『がんばりの器』はAPを、それぞれ上限を増やすもの
と考えています。

明確な描写はしなないと思われませんが、今後定期的に試練は行われ、サーヴァント
の数が増えたり、立香自身がマスターとして成長したことで難しい試練にも挑める
ようになって、少しずつマスターレベルが上がっていくと想定して下さい。

『バトル・イン・ニューヨーク』でボックスガチャをぶん回しています、目指せ2
00箱です。

ダウンロードでプレイできるようになった『神々のトライフォース』はまだ途中

ですし、『夢をみる島』もまだ買えていませんし、それ以前に購入済みの『MHW』もストーリーをクリア出来ていませんし（カリピストやってます）、仕事もそうですが色々と忙しく日々を過ごしています。

神トラはプレイしてみても驚きました……ゼルダシリーズとしても、スーファミのソフトとしても初期のもののお筈なのに、少しずつ謎を解いていくあの独特の面白さや、今のゼルダにも通じるシステムやアイテムが既に確立されていました。

直接の続編という『夢をみる島』も楽しみです、ポケモンが発売される前にはクリアしたいです。

執筆ももちろん頑張りますので、楽しみにしていて下さい。

そろそろ幕間を終わらせて、第二特異点に向かわせたいと思います。

日常の終わり

「……………なあ、リンク。

お前が今の時代について勉強を始めたのは、あの時カルデアに来てからだよな。それまではずーっと眠ってたから、ぶっちゃけ何も知らなかったんだよな」

「そうだけど？」

「じゃあ何で、この短期間で俺より世界史出来るようになってるんだよ。

得意とまではいなくても、平均点はちゃんと取ってた俺の義務教育は何だったんだ」

「本を読んだり、新しいことを覚えたりするのが純粹に好きだし、楽しいからだよ。

ハイラルにいた頃だって、城の図書室で朝から晩まで過ごすこともあったし。

だけど出来るって言ったって、世界中の歴史や伝説の中のほんの一部の話で、全体的に見ればお前の方がまだまだずっと知ってるじゃないか」

「すぐに追い越されるのが目に見えてるから愚痴ってんの。

お前みたいに、新しい何かを覚えることそのものを楽しめる性分なら、勉強ももっと捗るんだろうけどなあ……」

「多分だけど、自分にとってそれが必要だと、大切だと強く実感出来るものに対してでないと、本気になれない性質なんだろう。

ただ単に本を読んで情報を詰め込むよりも、血と心の通った話を知り合いから直接聞く方が、お前の場合は合っているような気がする」

「……………そっか、そうだ、当時を知っている人達がいるんだから直接聞けば良かったんだ。

でも、いいのかなあ……皆それぞれ忙しいのに、俺の個人的な勉強につき合わせてちゃって」

「英雄についてちゃんと知っておくのは、マスターの大事な役目のひとつ……だろ

？」

「リンクさんの言う通りですよ、センパイ。

サーヴァントの皆さんに順番に時間を作って頂けるよう、後でドクター達にも話を通しておきましょう」

「カルデアという組織と施設を存続させ、人理修復を進めるにあたっての重要な施設や設備の復旧は、粗方終えたと思って良さそうだな」

「はい……これでもう、水や電気の供給が滞って職員の命が危険に晒されたり、突然の強襲に対抗出来ないというような事態になることは免れました」

「それ自体は、本当に喜ばしいことなのだが……すまない、実は作業中から気になっていたことがある。」

参考として予め渡されていたカルデア内部の見取り図と、実際の構造に多少の差異が見受けられる部分があったのだが、あれは一体どういうことだったんだ？」

「あゝ、それは……ここカルデアは造りや設備こそ機械的ですが、実際は秘匿主義の権化たる魔術師が、設計・建造した施設ですからね。

秘密の部屋や通路が密かに造られていた可能性は否めませんし、下っ端の一般職員相手に配布されていた地図が正しいという確証がそもそもありません。

……好待遇を受けていた魔術師が密かに築いていた工房とか、溜め込んでいた素材や礼装なんかが、もしかしたら無傷で残っているかも？」

「おいおいおい何だ、思いがけず宝探しじみた展開になってきやがったじゃねえか!!

復旧作業はこのまま続けようぜ、カルデアが広くなって使える部屋が増えることに文句を言う奴なんかいねえだろ!!」

「クー・フリーン殿、それは……何とも心躍る話だ、俺にも是非加わらせてくれ!!」
「話が分かるなジークフリート、お前はもっと真面目でお堅い優等生タイプかと思ってたわ!!」

「……………どんな場所でも、いつの時代でも、男の生態は似たようなものね。

やるのは構わないけれど、ちゃんとマスターにも声をかけてからにしないよ。
あの子も絶対、そういうものに目が無いから」

「おや……珍しい、今日は招待から逃げなかったのかね」

「逃げたわよ、捕まったのよ、強引に連れて来られたのよ文句ある!？」

喜んで誘いを受けるような奴は他にもたくさんいるでしょうに、聖女サマといい
王妃サマといい、どうしてわざわざ私に拘るのよ!!」

（怪我をさせることを辞さずに、強引に抵抗する選択肢もあるのにやらないことと
か。

嫌がって逃げても、いざ捕まれば文句は言いつつ観念することとか。

そんな歪んだ素直さが可愛いと、王妃も聖女様も思っておられるのだと……言わない方がいいですね)

(それが賢明だな。)

茶も菓子も、足りなくなったらいつでも声をかけてくれたまえ)

(ええ、そうさせて頂きます。)

いつもありがとうございます、エミヤ殿)

「ねえねえ、ジャンヌ。」

せっかくオルタがお茶会に来てくれたのですから、前々から気になっていたあの件について、思いきって尋ねてはみませんか?」

「いいですね、マリーに賛成です!」

「……何よ、あの件って」

「リンクさんとは召喚以来どうですか、ちゃんとお話は出来てます?」

「ブハッ!?!?」

「あまり上手くいっていないようなら仰ってね、二人を一緒にお茶会にお招きするくらいなら出来ましてよ」

「ゲホッ……ちょっと待って、待ちなさい。

あんた達、一体何を言ってる」

「何も言わなくていいですよオルタ、私達はちゃんと分かっています。

リンクさんの中には決して忘れられないお姫様がいるとしても、私はあなたを応援するし、いつだってあなたの味方です。

だって、あなたのお姉ちゃんですからね」

「聞けやっ!!」

「たわけが、この程度の企画書に我が資金を出すとも思ったか!!

もっと論理的かつ効率的な案を提示することが出来れば考えてやる、疾く失せよ

!!」

「はいっ、申し訳ありませんでした!!

王の貴重なお時間を賜りましたことに感謝いたします、出直して参ります!!」

（あちゃ、駄目か……立香君やマリー様達の目を盗んで、休憩時間を削ってまで纏めたのが裏目に出たかな）

（だとしても、王様が条件を出した上で『考えてやる』とまで言ってくれたんだから、まだ色々甘いだけで別に悪くはないんだろ。

気付いてほしいところは勿論、気付いてほしくなかったところや、自分では把握しきれていなかったことにまでしっかり気付いて、上手く出来ればちゃんと評価してくれる人だからな）

「念のため釘を刺しておくが、再考は予定されていた休みをしっかりと取ってからにするのだぞ。

勇者がわざわざ、お前達のために頭を捻ってまで纏めた決まりごとを二度も無下にするようななら、我の寛大さも二度は持たぬからな」

「……………はい」

（そっちも気付かれてたか……）

他にも、現状ではどう鼻屑目に考えても戦闘以外の生かしどころを一切見出せずにいる、仮面の怪人と黒騎士を壁役として酷使しながら、自身の喉を潤す為にはなく、カルデアで使用する魔力リソースの足しとする為に、エネミーの血と魔力を延々と絞りつつ溜め込んでいく魔眼の蛇怪と血の伯爵夫人とか。

《メドゥーサさん、カーミラさん、ファントムもランスロットもお疲れ様です。
今日の分のノルマは今ので終わりました、もう帰ってきていいですよ》
「……ここはマスターの坊やだけではなく、周りの人間達まで甘いからね。」

怪物の吸血能力を、恐れるどころか頼りにして……ましてや、ああして劳いの言葉までかけるなんて」

「ここはそういう所だと、割り切った方が早いし楽ですよ。

……良ければこの後、食堂までご一緒しませんか？」

「あら、お誘いなんて珍しいこと。

構わないわよ、どうせ足を運ぶつもりだったし」

「搾り取った魔力を提供した後は、一気にお腹が空くんですよね」

「あそこの料理、悔しいけど美味しいのよね……食べ過ぎないように気をつけないと」

サーヴァントを含めたスタッフ一同に普段使い用として配布予定の服を、提示されたデザイン案の酷さに考案者の正気を疑いながら、それでも何とか試作品の完成まで漕ぎつけた串刺し公とか。

「……………本当にこれで良いのか？」

「完璧だよヴラド三世、君の腕前を半ば疑った私をどうか赦してくれたまえ。

目に痛々しい原色、胸元にてこれでもかと自己主張する『Buster』『Ar

ts『Quick』の意味不明な一枚絵。

これを英霊達に配布するのが楽しみだよ、多種多様な表情と反応に加えて着て見せても貰えたら言うことは無しさ」

「言っておくが、余は着ぬからな。

……『天才』というのは、『変人』の別称のように思えてきたぞ」

「それは当然というものだね、普通とかけ離れているからこそその天才なのだから」

医務室で人を殺すのではなく生かすために働く処刑人と、今現在必要とされる場が特に無くて暇だからと、からかって時間を潰す為だけに、わざわざ彼を訪ねていく音楽家とか。

サーヴァントとしてではなく、記録係としてカメラとペンとメモ帳を携えながらスタッフ達に交じっている姿が、既に違和感が無くなっている守護聖人とか。

召喚に応じたことと、今もカルデアのどこかにいることは確かなのに、馴染むどころか一向に姿を現そうとしないことに対して、様々な思惑が向けられている反転の騎士王とか。

様々な場所で、様々な人や英霊達が、それぞれの様々な日常を過ごしていた中で、それを瞬く間に破壊し、世界の現状を、カルデアの果たすべき務めを思い出させる威力を持ったロマニの声が、カルデア中に一斉に響き渡った。

《立香君、マシユ、リンク君、あとダ・ヴィンチ……ああもうまどろっこしい!!
スタッフもサーヴァントも、手が空いている者や余裕がある者は片っ端から、今
すぐにオペレーションルームへ集まってくれ!!

新たな特異点の詳細な観測に成功した、緊急ミーティングを執り行う!!》

二度目のグランドオーダーが、もう間もなく始まろうとしていた。

永続狂気帝国

薔薇との邂逅

二つ目の特異点として観測されたのは、現代から約2000年前のヨーロッパ。その当時において、世界でも屈指の広大な国土と華々しい繁栄を築いた、人類史にその名と存在を燦然と刻む『古代ローマ帝国』だった。

カルデア内の全回線を使用したロマニの放送をきっかけに、カルデア全体が非常態勢に移行してから、丸一日の準備時間が過ぎた先で。

立香とマッシュにとっては何度目かの、リンクにとっては初めての……光の渦の中

を高速で抜けていく光景と感覚を経た先で彼らが降り立ったのは、鮮やかな緑がどこまでも広がり、心地よい風がどこまでも吹いているかのような、美しい丘陵地帯だった。

この景色を、ピクニックやハイキングに最適と思われるなだらかな起伏を堪能するのもしそこに、緑の大地に土色の足跡を刻むような勢いで駆ける三人。

その進行方向からは、美しい景色を楽しむ余裕もない彼らの様子以上に、この場とこの光景に相応しくない、敵意を抱き合った多くの人の手によって生み出される金属製の多重音が聞こえてきていた。

この時代の首都ローマ付近で、本格的な戦闘があったなんて話や記録は一切残っていない。

先程ロマニが教えてくれた、決して揺るがぬ筈の歴史的事実が、彼らの脳内に何度も響いている。

これが今回の特異点における歴史の異常だとしても、フランスでワイバーンなんでものが湧いた前例から、何が起こるか、何が起きているのかが全く読めない。だとしても、この地に訪れたばかりで本当に何も分からない現状では、直接現場

に赴き、何が起っているのかをこの目で確かめることでしか、先に進むことは出来ない。

一瞬込み上げかけた恐怖と不安を、それ以上の覚悟と決意で制しながら駆ける少年達。

その足が、小高い丘を越えたと同時に大きく広がった視界に、誰もが予想した……僅かな者からすれば、その予想がほんの少しだけ悪い方向へと外れてしまった光景が、『戦争』と称してもおかしくはない程の大規模戦闘が繰り広げられていた。

「……まずいなあ、これがこの特異点の異常だとしたら少し厄介だぞ」

《えっ……リ、リンク君、まずいって何が!?!》

リンクが思わず、舌打ち交じりで零した呟きに、最もマイクに近かったロマニの困惑だけでなく、その向こう側のオペレーションルーム全体のざわつきまでもが伝わってきた。

サーヴァントとしての能力を扱い切れていなかった上に、武器の確保と扱いに苦

心していた状況でさえ、どのような強敵が相手でも決して臆することなく相対していたリンクがいきなり弱音を吐くほどに、この特異点は過酷なものなのか。

そんな驚愕と衝撃を通信の向こうから、更には隣から向けられているのを感じたリンクは、今はただ、静かに首を横に振る仕草のみで答えた。

「それに関しては後で、落ち着いてからちゃんと説明する。

今はとりあえず、正しい歴史ではあり得ない筈の戦いを、何とかして収めないと」
「そ、そうですね……今為すべきことを考えましょう」

リンクに促されて何とか気を持ち直し、情報収集のために改めて、眼下の戦場へと目と意識を向ける。

今この場で考えるべき、決めるべきなのは、『戦い合っている二つの勢力のどちらにつくか』だ。

構わず乱入して、どちらにもつかない第三勢力となる道もあるけれど、味方となってくれるかもしれない者まで敵に回しかねないそれは、特異点の情報が全く得

られていない現状では悪手でしかない。

どちらが正しい歴史に沿う存在なのか、どんな信条で戦っているのか。

それを見極めようと、少しでも判断材料を得ようと、戦場全体に目と意識を巡らせるロマニとマシュを他所に、即決の声を上げたのは立香だった。

「あっちだ、数が少ない方。」

女の人が殆ど一人で頑張っている、あっちの方を助けよう！」

「……立香は、どうしてそう思ったんだ？

マシュもドクターも、それを判断するための根拠を、まだ見つけられていないらしいのに」

「あの人達が背中を向けている方向に、さっきドクターが教えてくれた首都がある。町に攻め込もうとしている人達よりも、守ろうとしている人達の力にならなきゃって、俺は思う」

若い女の人が危険な目に遭っているからとか、少ない人数で頑張っているからと

か。

戦場を知らない一般庶民ならではの、そんな感情論100%の意見を少しだけ心配したリンクは、ロマニが出てくれた情報をきちんと加味した上で、上から目線の憐れみではなく、自分達の国を守ろうとしている人達の想いと行いを尊重した、感情論だとしてもきちんと芯の通ったものを真っ直ぐに口にした立香に、一瞬呆気に取られた後で吹き出した。

青臭いことを恥ずかしげもなく口にした自覚と認識があったらしく、頬と目尻を赤くしながら睨みつけてきた立香の背を軽く叩いて誤魔化しながら、リンクは話の続きを促した。

「女の人達は町を不当に占拠した側で、向こうはそれを奪還しようとしているのかもしれないけれど、だとしたらどうする？」

「……………今の俺、いや俺達には、それを判断する方法がない。

だからリンク、お前の強さを見込んでちょっと無茶ぶりさせてくれ」

その『無茶ぶり』は、戦場を知らない素人だとしてもそれがとんでもないことだと一発で察することが出来るような、思いついたとしても実際に口にすることは躊躇ってしまうような、本当に出鱈目なものだったのだけけれど。

ほんの一瞬たりとも躊躇うことなく頷いたリンクの笑顔に、彼が抱いた懸念の影は見受けられなくなっていた。

その瞬間『彼女』は、自身がまるで、幼い頃に夢中になった『伝説』の登場人物になったかのような心地を味わった。

首都が封鎖されているせいで、圧倒的な数の差を前に援軍を望めず……かと言って、突破されてしまえば首都を襲われることが分かり切っている状況で、図らずも最後の砦となってしまうている自分達に、退くなどという選択肢は在り得ず。

『異変』が起こって以来何故か扱えるようになった異様な力を、既に精魂が尽きかけてしまっている兵士達を背に、深紅を纏った艶やかな少女は懸命に揮い続けた。守らなければならない筈の存在に守られてしまっている現状への怒りと悔しさ

に、兵士達が齒を食い縛り、握った拳を震わせているのは分かっている。

本来あるべき形をぶち壊してまで、何よりも貴きこの身を危険に晒してまで保っている拮抗が、そう長くは持たないであろうことも分かっている。

しかし諦めるわけにはいかなかった、力及ばなかったと認めることだけは絶対に出来なかった。

何故ならそれは……『皇帝』たる自身の敗北は、そっくりそのまま『ローマ』という偉大なる帝国の敗北なのだということを、彼女はまるで本能であるかのように、正しく認識していたのだから。

しかし、誇り高き魂は未だ凜と立っていても、体に蓄積した消耗は現実であり、いつまでも誤魔化すことは出来ない。

頭の芯に突如響いた痛みに思考が一瞬妨げられ、ほんの僅か足がもつれた瞬間を見逃さず、今の今まで大剣を勇ましく振るい続けていたとは到底思えないような少女の華奢な体躯へと、幾つもの槍や剣が容赦なく放たれる。

兵士達の悲鳴のような声が聞こえた、込み上げた怒りと悔しさが持病の頭痛以上にこの身を苛む。

せめて最後まで帝位というものを示してやろうと、握り潰される薔薇の如く華やかかつ艶やかに散ってやろうと、大剣の柄を握り締めた……その腕が、その身が、乱暴と称しても構わないような強引さで引っ張られた。

見開かれた瞳に最初に映ったのは、自身に向けて放たれた幾つもの鋭い刃を一度に受け止め、それでいながら微動だにすることの無かった巨大な盾と、それを振るえるとは到底思えない細腕の、『鎧』と呼ぶにはあまりにも頼りなさすぎる武装を纏った華奢な少女の後ろ姿。

横目でほんの一瞬捉えたのは、自身を後方へと半ば投げ飛ばした腕の持ち主の、頭から深く被った外套の下から僅かに覗いた、無粋な覆いの下にはとんでもない美が隠されていることをそれだけで確信させるような、金の髪と青い瞳。

刃からは逃がされたとはいえ、急に崩された体勢を咄嗟に立て直せるような余裕は、今の彼女には無く。

そのまま地面を滑ることを覚悟した彼女を、腕だけでなく全身を用いて、躊躇うことなく下敷きになってまで受け止めてくれた者がいた。

「ぐっ……！」

「き、貴様達は……」

「突然現れて怪しいのは分かっています、危ないところだったとはいえいきなり乱暴な真似をしてほんっとごめんなさい!!」

俺達のことに関しては、あとでちゃんと説明しますから……行けリンク、マシユは誰も何も通すな!!」

「了解（です）!!」

黒い髪と青い瞳の、遠い異国の民と思われる少年の声に応えて、外套の少年は突然の乱入に戸惑う敵陣へと一人駆け出し、盾の少女は自身の巨大な得物を、黒髪の少年と真紅の少女を背に守る位置に突き立てた。

「待てっ!!」

外套がはためく後ろ姿に向けて思わず声を上げたのは、彼らを怪しんでいたから

ではなく、その身を案じたからだだった。

例えあの少年が外見にそぐわない実力者だったとしても、圧倒的な数の差を前に戦い続けることがどれだけ過酷なのか、今の今までその身で以って味わっていた彼女にはよく分かっていたから。

しかし彼は止まらない、自身へと向けて一斉に突き出される櫛の歯のような刃へと怯むことなく立ち向かい……地が震えたと錯覚するような勢いと力強さで踏み込み、溜め込んだ全身の力を一気に解き放った片手剣の一閃で以って、それら全てを粉々に砕いてしまった。

ほんの一瞬、小柄な少年が放ったたった一撃で柄だけと化してしまった自身の得物に、目の前の現実を受け止められずに、啞然と立ち尽くす兵士達。

その内の一人の頭を足場に宙高く跳び上がり、敵陣と一人相對するどころかその真っ只中へと降り立った少年は、こう考えていた。

周りを全て囲まれてしまっているのではなく、周りを全てぶっ飛ばせばいいのだと。

愉しげな口元を外套の影から覗かせながら、少年が放った弧の一閃によって、複

数の兵士達が一斉に宙を舞う。

圧倒的な戦いを前に言葉を失ってしまった真紅の少女は、目の前で行われている、先程までとは違う意味で一方的な戦闘の違和感に程なく気がついた。

新たな血が流れていないし、倒れている者もないのだ。

残骸と化した得物を手に呆然としてしまっている者や、即死の威力を持った攻撃が眼前を掠めていったことを一足遅れて認識して、腰が引けてしまっている者など。それらの光景が意味しているものは、あの外套の少年は相手の武器を破壊すること、これ以上戦いを続けられなくさせるといふ戦法を敢えて取っていること……兵士達を未だ一人も殺していないし、これから殺さずに済ませるつもりでいること。

圧倒的な数の有利をたやすく覆し、その上で生殺与奪の権利までもその手に握るほどの、考えるのも馬鹿らしくなるほどの圧倒的な力を、あの小柄な少年が身につけているという信じがたい事実だった。

『犠牲を出さないまま、何とか戦えなくさせる、もしくは戦う気を失くさせてほしい。』

……例えば、武器だけ全部使い物にならなくさせるとかさ』

庶民ならではの無知と偽善故にではなく、自身が求める理想の意味と難しさを十分理解した上で、負わなければならない責任の重さに握った拳を震わせながら。

それでもマスターとして、きちんと言い切った立香の覚悟に応えるべく、理不尽な自然災害の如く暴れまわるリンク。

そんな彼をまともに相手取るのは無謀だと察した、暴風域から比較的遠いところに居たために冷静な思考力を保っていた一部の兵士達は、最も重要な相手のみを狙うという賢明な判断を下した。

ついさっきまで、大多数を相手に単独で渡り合っていた彼女も並外れて強いことは知っているけれど、足元が不安定になるほどに消耗していたし、何よりもあれと戦うよりは遥かにマシだったから。

真紅の少女、大帝国ローマの大黒柱は黒い髪をした異国の少年の背に庇われ、更にその二人を、冗談のように巨大な盾を構えた少女が守っている。

あの細腕で、持っていていられるだけで充分凄い大盾を構えていては、敵の動向に素早く対応することなどは到底出来まい。

そう判断した兵士達は盾の少女を敢えて無視して、その先の目標を狙うべく駆け出し、少女の脇を駆け抜けようとしたその瞬間に、大質量の直撃を食らって吹っ飛んだ。

不動のものだと思われていた大盾が軽々と振るわれ、それを行なったのが少女の細腕だという事実が信じられない、たった今間違はなくこの目にしたというのに。たった一度の偶然、火事場の馬鹿力に違いないと、二度三度と続くことはあり得まいと気を取り直し、先程よりもずっと距離を置きながら抜けようとした兵士達に、少女の盾はまたしても追いついた。

振り抜いた盾の鏡面によって、武装してそれなりに重さが増していた筈の人間が盛大に宙へと舞った光景が、居合わせた兵士達の背筋に氷を入れられたかのような寒気を感じさせる。

得物を振るうどころか引きずられそうな少女と、その細腕が携える、大きいとは言っても個人単位を守ることが精々である筈の盾が、兵士達には目の前に聳える巨大な城塞のように見えていた。

「ちよっ……マシュ、あれ大丈夫!？」

ちゃんと生きてる!？」

「ご安心下さい、ちゃんと峰打ちです!!」

マルタさんから、重量系の武器を使用する際の手加減の仕方を、念には念を入れてご指導いただきました!!」

「よりによってあの人か、一生懸命隠してるだけで本性はめっちゃ脳筋かつ武闘派の!!」

思わず口走ってしまった言葉が当の本人に聞かれていて、『マスターとは一度話し合いの必要がありそうね』と呟きながら、拳を鳴らした聖女の薄ら寒い笑顔に運悪く居合わせてしまった者達から、幸運と冥福を祈られたことも知らないまま。

黒髪の少年が見守り続けた戦況が、ある瞬間から一気に崩れ始めた。

嵐と城塞に挟まれ、戦うための手段も奪われて為す術もない状況で、いつまでも気概を持たせられる者はそうはいない。

状況を正確に判断することや、諦めることが早かった者から順に、戦線から離脱していく者の数が時間の経過によって少しずつ増えていき、最初は恥じるようだったそれも徐々に露骨なものになってきて。

逃げる者がいること、逃げてもいいのだということに、未だ懸命に戦い続けている者達が気付き、その気概を一斉にへし折られたと同時に、彼らの意思と思考は撤退へと向けて一気に反転した。

関の声ではなく悲鳴を上げながら逃げていく兵士達に、ほんの一瞬とはいえ確かに抱かされた死の恐怖と覚悟があつという間に覆されてしまったことに、深紅の少女はしばし呆然としてしまっていたのだけけれど。

同じ年頃の、普通の少女ならばこのままへたり込み、誰かから声を掛けられるまで延々と呆け続けてしまいそうな衝撃から、彼女はほんの数秒で立ち直った。

短い間だったとはいえ、気が抜けてしまったこと自体を恥ずかしく思いながら、

それでも懸命に持ち直して。

誰よりも美しく、誰よりも我が侘で、誰よりも愛されるべき自身の、『薔薇とは斯くあるべし』という自意識のままに、胸と声を張った。

「剣を収めよ、勝負あった!!」

貴公達、もしや首都からの援軍か？」

「すっかり首都は封鎖されていると思ったが……まあ良い、褒めてつかわずぞ。

例え元は敵方の者であっても構わぬ、余は寛大ゆえに過去の過ちぐらい水に流す。そして、それ以上に今の戦いぶり、評価するぞ」

「この勝利は余とお前達のもの、たっぷりと報奨を与えよう。

あっ……いや、すまぬ、つい勢いで約束してしまった。

報奨はしばし待つがよい、今はこの通り剣しか持っておらぬ故な」

「全ては首都ローマへ戻ってからのこと、では遠慮なくついてくるが良い!!」

同行を許可してもらおうべくきちんと交渉をしようとしていた一同は、交渉どころ

か自己紹介すらしていない状況で、トントン拍子どころではなく進んでしまった展開に半ば呆氣に取られながら、殆ど押し切られるままに頷いてしまった。

つい先程までたった一人で奮戦し、一時は命の危機にも晒されていたというのに。こちらに口を挟ませない程の堂々とした喋りっぷりと、自信に満ち溢れた明るい笑顔は、傲慢で自分勝手と称しても間違っではないなさそうな少女の内面を物語ると同時に、決して憎めない、どころか惹かれることをやめられないような。

その自信と勢いに負けてしまったことを『まあいいか』と思ってしまうような、咲き誇る薔薇のような魅力に満ち溢れていた。

VS
カリギュラ

思いがけない援軍によって敵軍が退けられ、危機を脱したことに歓声を上げる兵士達と、そんな彼らを時折窘めながらも、実は最も浮かれている真紅の少女。

戦いは終わったと誰もが肩の力を抜いて、新たに加わった心強い仲間達と共に、首都への帰路についていた。

「身を呈してまで余の玉体を守った気概、華奢な少女が身の丈ほどの得物を振り回すという倒錯的な美、そしてかの勇者を彷彿とさせるような一騎当千の少年剣士。うむ、うむ……良い、実に良いぞ、余は貴様達を気に入った。」

余と轡を並べて戦うことを特別に許そう、至上の光榮に浴するが良い!!」

「つて、何で引つ張るんですか!!」

「共に戦うことを許すと言ったであらう、ならばそのような無粋な外套は余の前ではいらぬ!!」

その下に大層な美を隠していることくらい、余の審美眼はバツチリ見抜いておるぞ!!

良いではないか良いではないか、ばさーっと豪快に取っ払ってしまえ!!」

「離して下さいーっ!!」

リンクの顔を隠している外套を、満面の笑みを浮かべながら強引に引つ張る真紅の少女と、悪意や悪気など欠片も無い女の子を相手に実力行使に出る訳にはいかず、フードの部分を押さえる両手と踏ん張った両足のみで抵抗を続けるリンク。

自分が無体なことをしている相手が、一体誰なのか。

知る由もないのだから仕方がないのだけれど、全て承知の上で見守っている側からすれば、自分に非が無いことは分かり切っている筈なのに何故か謝りたくなって

くる。

オペレーションルームの一同がそんな心臓に悪い思いをしながら、立香やマシユは割って入ることが出来ずに苦笑いを浮かべながら。

それでも微笑ましげに見守っていた光景が一変したのは、本当に突然のことだった。

纏う空気をいきなり張り詰めさせて、来た方向を振り返りながら再び剣を抜いたリンクと、一拍遅れながらもそれに続いて警戒態勢を取ることが出来た立香とマシユの反応に、ついていけた者は周りにはいなかった。

《リンク君どうして……ってサーヴァント反応だ、凄い速さで近づいてきている!! 機械が測定するより早く気付くなんて、感心するべきか呆れるべきか……》
「驚いている時間があるなら、その間に何か情報を!!」

《クラスがバーサーカーなのは確かだけど……ダメだ、それ以外の解析結果を出すには時間が無い!!

もう、すぐそこまで……来たっ!!》

ロマニが半ば裏返った声を上げるのとほぼ同時に、強襲に備えて固まっていた一同から少しだけ離れた所の地面が、ミサイルが着弾したかのような轟音と衝撃を伴いながら弾けた。

兵士の殆どが耐えきれずに倒れてしまった程の揺れを、盾を支えにしながら踏ん張ったマシュの助けを借りながら、立香は真紅の少女へと手を伸ばした。

そんな仲間達を視界の端に捉えながら、揺れなど起こっていないかのように一人平然と立ち、今は土煙に覆われて何も窺えない爆心地を一切の油断なく見据え続けたリンク。

ゆっくりと晴れていくその視界に最初に映ったのは、鮮やかな『真紅』と『黄金』の意匠だった。

それはロマニが先程口にしていたように、古代ローマで特に好まれた色彩であり……交戦し、撃退した敵の部隊もまた、同じものを掲げていたのを覚えている。黄金の鎧に真紅のマントを纏った身を、クレーター状に凹んだ大地の真ん中からゆっくりと起こした男性は、『バーサーカー』だという唯一の前情報を裏付けると

のを、狂気に染まった瞳をこちらへと向けてきた。

雲ひとつない真つ暗な夜空にただひとつ、煌々と輝いている月のようなそれを目の当たりにしてしまった立香は、同じものを見てしまったマッシュや兵士達と同じように、魂までもが竦み上がるかのような心地を味わっていた。

しかしそれと同時に、心と意識の一部に保たれていた至極冷静な部分が、狂気を覗いてしまったというのに、その影響がこの程度なのは何故かということを考える。

その答えはすぐに出た、『直接』には見ていないからだ。

自分達が目の当たりにしたのはあくまで、狂気の光の余波に過ぎない。

バーサーカーの男は、理性とまともな思考力が失せた瞳と口元に微かな、怖気の走るような笑みを浮かべながら……自身がその狂気の眼差しを向ける唯一の相手へと、垣間見てしまった深淵に目を見開いて立ち竦んでしまっている真紅の少女へと、徐に手を伸ばした。

「リンク!!」

硬直し、軋みを上げていた体を強引に動かし、呼吸が浅くなってしまっていた少女の紅い袖を引いて自身の陰に庇いながら、その目元を覆いながら。

唾も飲めない程に乾いてしまっていた、一言発しただけで血を吐きそうな痛みが走った喉で、それでも構わず自身の名を叫んだ立香の気概に、リンクは行動で応えた。

此度の特異点において初めてとなるサーヴァントとの接触で、少しでも情報を得られればと考えていたのだけれど、それはもう諦めた。

どう見てもまともな意思疎通は不可能なタイプのバーサーカーな上に、宝具なのかスキルなのかは分からないけれど、自身の狂気を周囲にまで振り撒かれては堪ったものではないからだ。

弓を構え、矢を番い、弦を引く。

そんな一連の流れを一瞬で行ない、まともに食らえば眉間に刺さるところか首から上が吹き飛ぶような一射を放とうとしたリンクは、正確無比の筈だったその指先を、思いがけず滑らせることとなった。

「伯父上……っ！」

「えっ？」

自身の頬を掠めながら飛んでいき、背後の地面に深々と突き刺さった矢に、自身がたった今死にかけてという事実には、男は一切の関心を抱かない。

先程も、今も、男の瞳と意識はただ一人、自身を『伯父』と呼んだ真紅の少女にだけ向けられていた。

「あ、あのサー……じゃない、あの人が君の伯父さん!？」

「……………いや。」

いいや違う、伯父上は確かに亡くなられた。

あれは断じて伯父上などではない、如何なる理由かさ迷い出でて連合に与する愚か者だ!!」

気丈に振る舞ってはいるものの、僅かに震える声と体、そして発言は、立香の問

いが的を射ていることを示している。

ロマニを始めとするオペレーシヨンルームの一同は、驚きながらも納得していた。サーヴァントとはかつて偉業を為した英雄の影法師であり、そしてここは、特異点と化して人理焼却の要となる程に、広大な人類史の中でも特に重要とされる場所と時代。

英霊の縁者がまだこの地に生きていること、これ以上ない程に強い繋がりを辿ったサーヴァントが召喚されることは、決して在り得ないことではなかった。

その可能性を受け入れた一同の脳裏に新たな、こちらは出来れば外れてほしい類いの、嫌な可能性が過ぎる。

その旨を立香達に伝えるよりも先に、狂気をまき散らしつつも自身は異様な静けさを保っていたバーサーカーが遂に動き出した。

「我が、愛しき、妹の子、よ。

余の、振る舞い、は、運命、で、ある」

「……伯父上」

「捧げよ、その、命。」

捧げよ、その、体」

「伯父上、あなたは何処まで……!!」

「汝、の、美しき、全てを」

「捧げよ!!」

咆哮を上げながら、自身の唯一の標的たる真紅の少女へと、彼女を守ろうとしている立香や兵士達を諸共に巻き込む勢いで飛び掛かったバーサーカー。

咄嗟に構えたマシユの大盾がそれを阻むよりも、彼を真横から襲った衝撃がその軌道に強引に変化を与え、あらぬ方向へと吹っ飛ばす方が早かった。

「……ヤバいな、少し痺れた」

「リンクさん!!」

「あいつの相手は俺がする、俺が殿を務める!!」

だからマシユは、立香達を守りながら首都へ急げ!!」

「そんなっ!？」

「お前、またそんなことを!!」

たった一度の使用で盛大に凹んで使い物にならなくなってしまった、あの一瞬でそれ程の衝撃を与えつつ何とか耐えた盾を取り換えながら、何事もなかったかのようになり立ち上がって再び襲いかかってきたバーサーカーを迎え撃ちながら、いつもの無茶な発言を口にしたリンク。

立香達はそれに表情を顰めたのだけれど、続いた言葉に対しては、何も言い返すことが出来なかった。

「守らなければならない対象が大勢いる状況で、周りを巻き込むことを躊躇わないバーサーカーを相手にするのはきついんだ!!」

十分足止めが出来れば俺もすぐに後を追う、無理はしないって約束するから!!」
《立香君、マシユ、気持ちは分かるけど今はリンク君の言う通りに!!》

恐らく……いや、間違いなくそのパーサーカーは、強力な『知名度補正』を得ている筈!!

リンク君には万全の状態になってもらった方がいい、一対一で心おきなく戦えるようにしてあげて!!》

『知名度補正』とは『英霊召喚』という儀式における仕様のひとつであり、英霊が召喚された地にその者の存在や活躍を知る人が多ければ多いほど、基本的な能力が上昇するというものである。

英霊は人の信仰と認識によってその存在を成り立たせているのだから、それ自体は当然と言えるものなのだけれど。

あんなにも若い少女が『伯父』と呼んでいるからには、過去の偉人ではなく同じ世を生きた者の一人として、彼の存在と生前の功績を知る者は彼女以外にも大勢いる筈。

それはそっくりそのまま『知名度補正』となり、只でさえなるべく相手にしたくないパーサーカーが、更なる強化を得てより一層の怪物と化しているという厄介な

事実を物語っていた。

リンクとロマニの言葉を受け、頭では理解しながら、それでも本心ではまだ躊躇いながら。

無理はしないでと、待っているからと、声を上げ続けた仲間達の姿が十分小さくなった頃合いで、リンクはようやく、目の前の男に対して全神経を集中することが出来るようになった。

「アアアアアアアッ……!!」

真紅の少女の姿が見えなくなった途端に、標的を失って戦意を喪失するどころか、より一層獣じみた咆哮を上げながら猛攻を仕掛けてきたバーサーカーの様子に。自身は密かに抱いた印象が正しかったことを、リンクは確信していた。

「やっぱりあなたは……狂気と、サーヴァントと化した身の不自由さの中で、それでも必死に抗っているのか」

「捧げよ、捧げよ、捧げよ!!

その身、その命、その魂を全て、我がローマに捧げよおおおっ……!!」

「ぐっ……!!」

一瞬で肉薄し、振りかぶられた拳を前に、咄嗟に盾を構えて防御体勢を取り、聖剣を添えて支えにした上に、それでも守り切れないという咄嗟の判断に従って、与えられる衝撃に合わせて飛び退きもしたのだけれど。

それでも完全には耐えることが出来なかった。二枚目の盾を砕いた上に聖剣にまでヒビを入れた程の剛腕を前に、碌な準備が出来ていない状況でこのまま彼を相手にし続けることは悪手だと、これ以上の消耗は後に響くと判断したリンクは、戦闘の継続ではなく撤退を視野に入れて動き始めた。

シーカーストーンの壁面から取り出したのは、三枚目の盾でも、鞘に収めてしばらく休ませることにした聖剣の代わりとなる武器でもなく、握った拳ほどの大きさをした黄色いゼリー状の物体と、薄い青色の鍔を備えた矢だった。

リンクが何かしらを企み、その為の準備をしていることになど構わず、それまで

と変わらずにただひたすら力づくで飛びかかってきたバーサーカーの拳が、今の今までリンクが立っていた地面を盛大に割る。

その衝撃は、リンクがその場から飛び退く間際に落としていった黄色い物体にまで伝わり、膨張したそれは一瞬の間を置いて、溜め込んでいた属性付きの魔力を、聞く者の魂に爪を立てるような轟音と共に迸らせた。

「——アッ！——！」

絶叫は声とはならなかった、多少は上げていたのかもしれないけれど掻き消された。

強烈な電撃は、サーヴァントとなったことで普通の人間とは比較出来ないほどに丈夫になった筈の体であろうとも構わず、その端から端までを一瞬で貫き、その狂った意識と思考による制御を、一時的にとはいえ確かに奪った。

余韻を全身に走らせながら、小刻みに震えながら立ち尽くすバーサーカーを、魔力が昂るキーンと甲高い音を立てながら番えられた鍔が狙う。

今度は過たず、真っ直ぐに目標を捉えた鏃は、肉を貫くのではなくその全身を一瞬で凍り付かせた。

普通の人間ならば致命傷だろうが、かつて自分や先輩達が戦った魔物や、魔力や属性を持った攻撃に対して耐性があるサーヴァントが相手では、余程相性が良くない限りは、氷の戒めが解けるまでの時間稼ぎが精々となる。

これで倒せるとは思わないけれど、それでも出来る限りの痛手を与えられればと、失った魔力の回復に費やす時間を少しでも伸ばせればと。

凍り付いた体を砕くのに適した大槌を取り出し、振りかぶったリンクの目の前で、立香が他のサーヴァントを呼ぶ時と同じような、全身が光と化すという過程を経ながら、バーサーカーの姿が消えていった。

「……………退いたか。」

凍っていたせいで自分ではそういう判断は出来なかっただろうし、例え意識があってもあまり複雑なことは考えられないバーサーカーだし。

オルレアンの時のオルタのような、敵陣営の『マスター』にあたる誰かが、呼び

戻したと考えていいだろうな」

思いがけず得られた幾つかの情報共有するため、今も心配しているであろう仲間達の下に約束通り追いつくため。

懐かしく好ましい旋律に呼ばれて駆けつけてくれた、頼りになる美しい相棒に跨りながら駆ける緑の丘に、いつも通りの穏やかな風が吹いていた。

「おおっ、無事だったか!!

あの伯父上を相手に、余を含めた兵達を逃がすための殿を務め、自身も生きて戻るとは……よくやった、実に見事な働きであった。

そなたを信じて後を任せ、余の警護を担い切った二名も合わせて、改めて褒めてつかわす!!」

「……そういえば、そなた達の氏素性を、まだ尋ねていなかったな。

一刻も早く名乗りを上げ、それを余の玉音にて賜りたいと思うのは無理もないが、生憎と物事には正しい順番というものがある。

まずは余の名乗りを聞くがよい……そうとも、余こそ」

「真のローマを守護する者、正しくローマそのものである者。

必ずや帝国を再建してみせる……そう、神々、神祖、自身、そして民に誓った者

!!

「余こそ、ローマ帝国第五代皇帝、ネロ・クラウディウスである!!」

小柄な筈なのに、やけに大きくも見える体の背を伸ばしながら、凜と胸を張りながら。

満面の笑みと、溢れんばかりの自信と誇りを以って口にしたその名は、史上稀にみる暴君としてローマ帝国を翻弄し、その末に孤独で無残な最期を迎えたとされている皇帝の……後の世には、『男性』として伝わっている筈の人のものだった。

何日か前の『活動報告』に書いたのですが、ご覧になられていない方も多いと思いますので、改めてこちらでも書かせて頂きます。

ツイッターを始めました、プレイしているゲームや執筆の進捗、好きなものを勧めたり浮かんだ小ネタをメモ代わりに書いていくつもりです。

宜しければフォローしてください、反応を頂けると嬉しいです。

<https://twitter.com/CHIKA45872039>

首都の繁栄

「見るがよい、しかして感動に打ち震えるのだ!!

これが余の都、童女でさえ讃える華の帝政である!!」

誇らしげに胸を張るネロの言葉は、一片の偽りもなく真実であった。

多くの人が行き交う大通りの両脇には隙間なく店が並び、生活必需品から嗜好品まで、あらゆる商品が山となって積みまれている。

そこかしこで交わされる笑顔や、行き交う楽しいお喋りなどの、目や耳に飛び込んでくる全てが、2000年後の未来まで伝えられている古代ローマ帝国の繁栄

そのものであった。

立香やマシュが、内心ではしたくない行為だとは思いつつ、それでも目を輝かせながら周囲を見回すことをやめられないのは、古代の歴史ロマンに直に触れているから……だけではない。

燃え盛る炎の中に辛うじて残った都市の残骸でも、竜の群れに襲われた後の廃墟でもなく。

活気に満ち溢れた都市を訪れることが出来たのは、立香にとっては久し振りで、マシュにとっては初めてだったからだ。

人々が生きて、元気に暮らしている光景の前に、目頭が熱くなるほどに感動していた二人ほどあからさまではないとしても。

未だ目深に被ったままのフードの下で、リンクも仲間達と同じく町の賑わいに目を奪われていることを察したネロは、只でさえ自信満々だった笑顔を一層、周囲に花が舞っていないのがおかしく思えるような勢いで開かせた。

「この繁栄を前にして心動かぬ者はいない、やはり当然のことであるな」

「……そうですね、ハイラル城下の賑わいを思わせる光景です」

「なっ、何と!？」

ローマの町並みを前に、即座に思い起こすのがかの伝説の王国とは……分かっておるではないか!!

さてはそなた、『リンク』と名乗るだけのことはあって、あの『伝説』に相当入れ込んでいる者であろう!!

良からう、存分に堪能するがいい!!

これが、これこそが、遙か伝説の世に栄えたハイラル王国の再来と謳われし、世界最高の都市ローマである!!」

その言葉を受けてリンクが浮かべた笑顔は、どう反応すればいいのか困った先の苦笑いだったのだけれど。

嫌悪感や本当の意味での困惑はそこには無く、嬉しさや気恥ずかしさといった前向きで温かな気持ちの存在だけを、詳細は分からずとも喜んでいるのは確かだということを経験したネロはますます上機嫌になり、込み上げる気持ちに促されるまま

に、手近な露天の品物へと手を伸ばした。

「店主、この林檎をいただくぞ？」

「ああつ、皇帝陛下!!」

どうぞお持ち下さい、陛下とローマに栄光あれ!!」

「そう畏まらずともよいぞ、店主。

うむ、うむ……これは美味しい林檎だな」

「ちよっ、お金も払わずにいいんですか!？」

「何を言うか、余はローマ皇帝ネロ・クラウディウスであるぞ。

ローマのものは全て余のもの、故にこれも当然に余のものである。

遠慮することはない、そら、お前達にもひとつやろう」

「いえ、私はお気持ちだけありがたく……」

「いただきます」

「リンクさん!？」

「マシュ、ここはお言葉に甘えよう」

「センパイまで!!」

『無銭飲食』というパワーワードがどうしても引かかってしまうマシュに敢えて構わず、投げられた林檎を遠慮なく、自分達の方だけでなくマシュの分まで受け取った立香とリンク。

彼らの手を介してしまえば流石に断り切れず、艶々と輝く林檎を手には途方に暮れるマシュの様子に、困らせてしまったことへの罪悪感と可愛い後輩への愛おしさが入り混じる不思議な感覚を覚えながら、立香は自身の林檎へと豪快に齧りついた。

「……これはっ、本当に美味しい!!」

「うむうむ、やはり戦場帰りには甘いものに限るな。」

負った傷はさすがに癒えぬが、それでもやる気だけは回復する」

「えっ?」

「ん、どうした?」

「いやいやいや、何でもアリマセン……」

急に口調と様子がおかしくなったリンクに、『ああ、ハイラルの林檎は傷まで治せるんだな』と、立香達はもはや説明されるまでもなく察した。

それに加えてマシユは、ネロは先の戦いで奮闘した自分達を気遣ってくれたのだということと、立香とリンクはその気持ちに気付いて、厚意をありがたく受け取ったのだということに思い至る。

最初に遠慮した上に、今もどこことなく林檎を持て余しているらしいマシユの様子に気付いたネロが、町へと帰還して以来、初めてその笑顔を曇らせた。

「マシユ、そなた……」

「す、すみませんネロ皇帝陛下、私は」

「皆まで言うな、こればかりは気が付けなかった余が悪かった。

そなたは、実に慎み深いのだな」

「……………はい？」

「よくよく考えれば当たり前のことであった……年頃のうら若き娘が、道を歩きな

がら林檎を丸ごと齧るだなどと。

いや、余もな……余も、いつもならきちんとしているのだぞ？

しかし今は、ローマの良いところをそなた達に出来るだけたくさん知ってもらいたくて、つい自慢したくて……」

興奮のあまりに暴走気味だった自身の振る舞いが、今更恥ずかしくなってきたのか。

マシュが遠慮した理由が的外れだなどとは考えもしないまま、頬を紅潮させながら懸命に弁解するネロの姿を前に、立香達は自身の胸の奥から、何とも言えない気持ちが入み上げてくるのを感じていた。

それは、目の前で真っ赤になりながら恥ずかしがる、自分にとって何よりも大切なものを自慢したいという想いを堪えきれなかった少女に対する、抱きしめて頭を撫でてやりたい思いを堪えなければならないような愛おしさだったり。

ローマという国と町、そしてそこで生きる人々を心から愛し、それら全てを背負う身であることを心から誇りに思っている皇帝陛下に対する、純粋な尊敬の念だっ

たり。

多勢に無勢の状況で、それでも決して諦めずに戦い続けていた兵士達や、大切な商品を笑顔で快く渡してくれた店主の気持ちをも、皇帝ネロが人々からいかに愛されているのかを。

ただの情報として、そういうものとして知るだけでなく、自分自身の心で以って、本当の意味で理解出来たような気がした。

自身が温かい目で見られてしまっていることに気付いたネロは、只でさえ赤くなっていた顔をまるで茹で上がってしまったかのようにカァーッと染め上げ、慌てた様子で話題を切り替えた。

「そつ、そういうえば、館へと戻る前に今一度、そなた達の話を聞いておかねばと思っておったのだった。

確か、余を助けに来たと……今現在、我がローマを苛んでいるものは、何者かの陰謀であるとのことであつたな。

何とも聞き捨てならない話よ、詳しく申すがよい」

話しているうちに気持ちに『少女』から『皇帝』へと切り替えたらしく、真剣な眼差しと鋭い口調でこちらを問い質してくるネロに、立香達もまた真剣な様子で答えた。

自分達は『カルデア』という組織の先遣かつ実働部隊の筆頭であり、ここから遠く離れたところにある本拠地には、まだ他にも幾分か仲間達がいること。

組織を裏切り、人命も含めた多くの被害を出した男の目的を調べ、その企みを阻止するために旅をしていて、その末にローマへと辿り着いたこと。

全てを正直に話すことは流石に出来ないけれど、それでもなるべく事実に基づいたことを、カルデアからの通信越しにロマニにも加わってもらいながら説明した。

「成る程……つまりそなた達の仇敵こそが、我がローマに仇なす首魁である」と

《まだ確定ではありませんが、その可能性は大いにあります。

世界の中心にして世界そのものの、有史における最大の帝国にして都の名でもあるローマ。

その首都がこんな時期に脅かされているだなんて尋常なことではない、聖杯の影響が絡んでいると思つて間違いないだろう。

大帝国ローマが早々にその歴史を終えてしまえば、人理へと及ぶであろう影響は計り知れない。

後世の人類史に多大な影響を与えた帝国、その崩壊を防ぐことが、特異点の修正となる筈》

「……………ん、んん？」

すまぬ、よく分からぬ……………もちつと、余に分かる範囲で話すがよい」

「すみません、理屈っぽい人なので……………」

「要するに、『聖杯』っていうとんでもない力を持った魔術の品があつて、奴らはその力を使って、陛下のローマに攻め込んできているかもしれないんです」

「……………成る程。」

聖なる杯が、余のローマをか」

「突拍子もない話で、いきなり聞かされても戸惑うかもしれませんが、これは紛れもない事実です。」

あなたの伯父上に不本意なローマ侵攻を強要しているのも、聖杯の力によるもの
と思われます」

「なっ……聞き捨てならぬ!!」

カリギュラ帝が、伯父上が、不逞の輩に操られていると言うのか!？」

掴みかからんばかりの勢いで問い質してきたネロに対してリンクは、『カリギュ
ラ』という狂戦士との戦いの中で抱いた印象や気付いたことを、偽ることなく正直
に話した。

「最大の標的である筈のローマ皇帝を前にしながら、狂気に苛まれていながら、あ
の人が本格的に暴れ出すまでには結構な猶予がありました。

殆ど消え失せているような理性と自我の欠片で、一生懸命に我慢してたんですよ。
本来のあの人にとってあなたは、本当に大切な、可愛い姪御だったんでしょ。
その証拠にあの人は、あなたの姿が見えなくなった、相手が俺だけになった途端
に、豹変したかのように暴れ出しましたから」

「……………伯父上」

迷い出たと、愚かな裏切り者だと嘯いてはいたものの、近しかった血縁者と相対しなければならなかったことは、やはり本心では辛かったのだろう。

自身と現実を誤魔化しながら偽りの覚悟で立つよりも、全てを受け入れた上で立ち向かう方が彼女には相応しいと、それが出来るだけの強さがある筈だと。

そう信じて、敢えて辛い現実と向き合わせたリンクの想いに、ネロは決意の籠もった眼差しを返すことで応えた。

「すまぬ、余の方から振っておいて何なのだが、今はここまでだ。

歩きながら片手間で続けて良いような話ではない、落ち着いてから改めて時間と場所を作るとしよう」

「ありがとうございます」

「構わぬ、礼を言うべきなのは恐らく余の方だ。

そなた達がローマを訪れてくれたこと、そなた達に出会えたこと……これぞ正し

く僥倖、神祖の導きに他はあるまい」

そう言いながらネロが浮かべた華の微笑みに釣られて笑ったマシュは、自身の手の中に今も収まっている林檎をしばし見つめ、覚悟と気合いを入れながら、一生懸命に開けた小さな口で精一杯に齧りついた。

途端に口いっぱいに広がった果汁の甘さと、こんな町角で、歩きながら丸の果物をそのまま齧るといふ行儀の悪さに対する何とも言えない背徳感が、どうにも癖になってしまいくらいだった。

そんなマシュの様子に思わず笑みを零しながら、自分達も残りを平らげにかかった立香とネロにリンクも続いて、未だ綺麗なままだった林檎に向けて口を開けたのだけだ。

「……ちょっと試してみようかな」

「リンク？」

噛りつく寸前で林檎を引っ込め、片手で掴んだそれを僅かに掲げながら何やら集中し始めたリンクに、嫌な予感を感じた立香が咄嗟に声をかけたのだけれど。

残念ながら、躊躇い気味に発せられたその声に込められた力は弱く、『発動』を食い止めるには至らなかった。

リンクの拳の内側に突如発生した炎、完璧な制御下で渦卷いたそれがあっさりと消えてしまうまでの時間は、突然のことに目を剥いた立香達が無意識に呼吸を止めてしまっていたのは、実際にはほんの数秒のこと。

その僅かな時間で、芯まで見事にホッカホカに焼き上がって甘く美味しそうな香りと湯気を立てる林檎に、リンクは至極満足そうな様子で齧りついた。

「やった上手くいった、やっぱり林檎は焼いた方が美味しいな。

威力が出せないのは仕方ないとして、逆に細かい操作で応用を利かせればそれはそれで色々と役に……………立香、マシュ、ネロ陛下までどうしたの？」

「……………姿の見えない魔術師よ、確か名はロマニとかいったな。

そなたは先程、自分のことは立香達三人の、魔術の師のようなものと思ってくれ

と言っていたが」

《彼は免許皆伝ですっ！！！！》

あの威力を、あの精密な制御で、何の前準備も複雑な工程も要らずに即発動させた手腕と比べられるなど、冗談ではないと言わんばかりの絶叫が響く。

そんな中で、出来る限り声を押し殺しながらも張り上げるといいう、器用な真似を繰り広げる者達もいた。

「リンクさん、一般の人がこんな大勢いるところで、そんなあっさりと魔術を使つては駄目です!!」

講座で習ったじゃないですか、『神秘の秘匿』は今の世では必要なことだって!!」
「えっ……ちょっと火をつけたただけなんだけど、これも神秘になるの?」

「そこからか、根本的なところから盛大にずれてたか!!」

少し長引きそうだったやり取りは、暴漢の集団が突如現れ、店や市民を襲い始め

たという騒動によって遮られた。

皇帝ネロと共にそれを瞬く間に鎮圧した、歴戦の戦士にも引けを取らない活躍ぶりを見せた若者達の存在は、ローマの危機に馳せ参じた新たな希望の一灯として、ローマ市民の間に瞬く間に広まっていくこととなる。

不穏な始まり

多少の観光と遊行を経て、ネロの館ことローマ帝国の王宮へと辿り着いたカルデア一行は、そこで一旦ネロと別れた。

先行した兵士達に伝令を任せておいたので、既に謁見の準備が整えられ、重鎮達も集まっている筈。

自身の命の恩人にして、ローマの危機に駆けつけてくれた頼もしい助っ人達であると皆の前で紹介し、公の場で厚遇を約束してくれるとのことだった。

「では、また後でな。」

……そなた達は何も案ずることはない、余を信じて堂々としておれ」

『ネロ』という個人としてではなく、『皇帝』として帝国の客人を迎えるために、立香達と別れて玉座の間へと向かうネロ。

少しだけ曇ったその笑顔、その口調に込められていた含みに気付くことが出来たのは、ハイラルの王宮で過ごした経験から、こういう空気にある程度は慣れていたリンクのみだった。

兵士の案内で辿り着いた、玉座の間へと続く大扉。

その向こうから僅かに感じる空気の質を察し、嫌な予感が当たってしまったことを確信したリンクは、人生で初めてとなる『謁見』を前にガチガチに緊張してしまっている立香とマッシュへと、とても真剣で重要な話なのだということがそれだけで伝わるように、努めて低く押し殺した声を発した。

「……なあ、二人とも。

『あれくらいどうってことない』とか、『当たり前のことをしただけ』とか。

そんな謙遜を口にするつもりだったのなら、今この場で全部忘れるんだ」

「リンク？」

「リンクさん、何を……」

「何も言わなくていい、話すのは俺がやるからその代わり堂々としている。

『自分達は皇帝陛下の命を救ったんだ』と、『自分達がいなければローマは終わっていたんだ』と……『大帝国ローマを救えるのは自分達だけだ』と、自信満々に胸を張れ」

頭の上で『？』を飛ばしてしまっている二人が、リンクの言葉を噛み砕き、その意味を理解して、覚悟を決められるだけの時間は無かった。

その存在だけで部屋の主の威厳を示しているかのような、大きく重たい両開きの扉が、耳障りな程に重厚な音を立てながら開いていく。

その瞬間立香とマシュは、リンクの言葉の意味を否応もなく、実感で以って思い知らされた。

扉からまっすぐ歩いた先にある、周りと比べて数段高くなっている位置。

この場、この国で最も貴い者のみが在ることを許される場所で、ネロが自分達を待っていた。

真上からではなく全方向から押し潰されそうな、肺の動きさえ妨げられるような重い空気は、彼女が発しているものではない。

ならば何処から、誰から……考えるまでもなく分かり切っていた。

玉座へと続く道の両脇に立っている、ローマ帝国の重鎮と思われる者達が揃いも揃って、不審を露わにこちらを見据えていたのだから。

思わず息を吞む、後ずさるなどのあからさまな動揺を表に出さずに済んだのは、リンクが前もってかけておいた言葉が、瞬間的にストッパーとして働いてくれたから。

しかしそれはあくまで表向き、崖っぷちで辛うじて踏みとどまっただけ。

こんなにも大勢の、見知らぬ者からの負の感情を、顔を合わせた途端に遠慮なくぶつけられることなど、立香もマシュも経験どころか想定したことすらなかった。何とか背を伸ばし、胸を張って前を見据えてはいるものの、それは実のところ、最初に辛うじて取ることが出来た体勢のまま固まってしまっているに過ぎない。

先程リンクが言っていたように、ローマの救世主として堂々と歩を進め、ネロとの謁見と重鎮達への顔見せを済ませ、特異点修復に向けての工程を進めなければならない。

……分かれているのに、いつものようにこの足を前に出せばいいだけのことなのに。

重く淀んだ空気の中で、足どころか体全体や、呼吸すらも半ば止まってしまった立香達の耳に、離れたところにいるネロには届かないであろう声が聞こえてきた。

「皇帝陛下にも困ったものだ、また妙な連中を連れてきて……」

「だとしても前はまだマシだった、戦場に出しさえすればそれなりに使えたのだからな。」

それが此度はどうだ……戦場どころかどこに出しても使えるとは思えない、どここの馬の骨とも知れない小僧や小娘ではないか」

「全く以って嘆かわしい、この非常時においても我が俣を押さえられぬとは。」

神祖に何と申し開きをすべきか、こんなことでローマは一体どうなってしまうのだ」

悪意と疑心にまみれた声によって、じわじわと侵食されるかのような感覚を抱いていたその耳が、心が、この重苦しさの中でも構わずによく通って聞こえてきた明るい声によって揺り動かされたのは、実際にはほんの僅かな間だったのに、体感的にはとんでもなく長い時間を過ごしてしまったかのように思えた時のことだった。

「よくぞ参った、我がローマに來たりし希望の星達よ!!」

余の美しさに見蕩れるのも、謁見の幸甚に浸るのも大変に結構なことではあるが、生憎と今は時間が惜しい!!

余が許す、傍まで参るがいい!!」

ネロが直々に声をかける前に、声を上げて指摘や非難をするきっかけとなりそうな、あからさまな失態や不敬な態度を見つけることが出来なかった一同は、皇帝の

言葉や意図を遮ってまで釘をさす気にはならなかったらしく、今この場に関しては大人しく口を噤む。

……彼らがあとほんの数秒、気を緩ませることなく保たせていれば、この後の展開を事前に察して防ぐことが出来たのだろうか。

それは不可能だっただろう、その瞬間が来るまで誰一人として予想出来なかった。『彼』はただ単に、頭から深く被っていた外套を、公の場では無礼にしかならないそれをごく当たり前の礼儀として外し、その下の素顔を顕わにしたらただけだったのだから。

その目が、心が、この場で絶対だった筈の存在をほんの一時とはいえ忘れ、別の輝きに魅入ってしまったことを、立香やマシュ、重鎮達だけでなく、自身の領域を侵されてしまった筈のネロまでもが自覚した。

『彼』が伝説に記されるほどに、名高い美姫がそうと語った程に美しい人であることは、否定しようがない事実として既に知っていた筈だった。

しかしこれは『違う』と思った……素で十分すぎる程に美しい者が、表情を、仕草を意図して洗練させれば、これ程のものになるのかと。

レイシフトを行なって以来ずっと外套を被っていた為に、今の今まで立香達ですら気付いていなかったのだが、彼の両耳には大粒の宝石をあしらった美しいピアスが揺れていた。

オルレアンの時と同じく、『彼を勇者リンクと知っている、もしくは確信を持って看破しない限りはそうと気付けない』という隠蔽を施しているので、見るからに形が異なる上に目を引く装飾まで施してしまっている、立香達には問題なくいつも通りに見えている長い耳は、彼らの目には何の変哲もない丸く短いものに映っていることだろう。

だとしても、ピアスに使用されている宝石が極上の本物であることは、目が肥えている者達ならば気付けるだろうし。

顔の両脇にそんな大層なものを揺らしておきながら一切負けていない、どころか宝石以上の輝きで以って、装飾品本来の用途に完全に徹しさせてしまっている相貌もまた、余すことなく目の当たりにしている筈。

歴戦を経てきたことで必然的に据わった肝と、若い身ながら重鎮の一人として王宮勤めをした経験を發揮したリンクの立ち振る舞いは、あからさまに侮られていた

ところからの巻き返しの衝撃もあって、ただそれだけで見事に場の空気を掌握していた。

自分達にとってあんなにも重かった第一歩を、針の筵が敷き詰められているようだった玉座への道のりを、まるでレッドカーペットを歩くかのように堂々と踏み出したリンク。

その後に続いた立香とマシュは、リンクが一瞬歩みを遅らせた間に追いついて、優も劣もなく三人で共に並んで、ネロの待つ玉座へと進んでいった。

二人の内に巢食っていた躊躇いや戸惑いは、いつの間にか跡形もなくなっていた。彼らがどんな意図を持ってこちらを牽制してきたのか、何を危惧しているのか、詳しいことはまだ何もわからないけれど。

構うことはない、自分達には『勇者』がついてくれているのだからと、心からそう思うことが出来たから。

焦って早足になることも、気後れして歩みを鈍らせることもなく、皇帝陛下の命を救った者としての自信に満ちた歩調と表情で堂々と花道を進んだ三人は、程なくネロの下へと辿り着いた。

「……………た、多少の予想はしていた。

相当なものであるとは思っていたのだが、まさかこれ程とは。

何という麗しさ、かの伝説の勇者のようではないか……」

頬から目元にかけてを上気させながら、なかなか皇帝モードに戻れずにいるネロの様子に、重鎮達が醸し出す空気が一気に重く刺々しいものへと変わる。

立香とマシュはその理由をすぐに察した、今回は分かりやすかった。

服装こそ、旅と戦闘に耐えられるように丈夫さと利便性重視のものではあるけれど、庶民ならば触れることすら躊躇いそうな装飾品をあっさりと普段使いにして、立ち振る舞いが見るからに洗練されている上に、更にはあの美貌と来れば。

どこぞの王子かご落胤かと、彼らの頭の中では様々な可能性が、考え過ぎだとは思えないほどの説得力を伴いながら渦巻いていることだろう。

そしてその『もしかして』は、皇帝の前だということで一応は自重していた彼らに、その堰を破らせてしまうだけの力をも備えていた。

彼らを客将として迎え入れ、しかも一人には総督の位と兵の指揮権を、王宮内においては個室までも与えて厚遇するという爆弾発言に、重鎮一同がどよめきの声を上げる。

美しいものが好きで、美少年や美少女は特に大好きだという皇帝の嗜好に対する懸念が、『色事に目と頭を狂わされた者は何をするか分からない』という多くの前例が語る事実と共に、一同の脳裏に沸き起こっていた。

「い、いけませんぞ陛下!!」

どこの誰とも知れない小僧どもをいきなり、無暗に優遇などされては、今まで順当に功績を重ねてきた者達の立つ瀬がありません!!」

「そうですとも、そもそも我らは偉大なるローマ帝国の民!!」

国を守るために余所者の助けを借りるなどと、偉大なる先達にどんな顔で申し開きをせよと言うのですか!!」

「よく考えてみれば、陛下の危機に都合よく駆け付けるといいうのがまずおかしいではないか!!」

さては貴様ら、陛下に取り入って帝国を内側から破壊せしめんとする連合の徒だな!？」

「何と卑劣な!!」

「今この場で叩っ切ってしまえ!!」

彼らに対する皇帝の信頼を削ぎ、その参入を何とか阻止しようと、誰かが適当に口にした根も葉もない、しかし強引に押し通せばどうにかなってしまいそうな言い分に対して、次から次へと誰も彼もが追隨していく。

頭に血が上り、自身の既得権益を守ることだけしか考えられなくなっている彼らは、その言い分をそっくりそのまま、立香達に救われ、立香達を信じることにした自身に対しての侮辱と受け取ったネロが、音が鳴りそうな程に拳を握り締め、瞳孔の開いた目と噛み締める唇を震わせていることに気付かない。

先程とは違う意味で切羽詰まった、このまま私刑が始まってしまいそうな程に不穏な空気を割りながら、突如響いた声があった。

「……………みっともないなあ」

聞き覚えの無い少年の声での呟きに、重鎮達はてっきり、発生元をあの金髪の少年だと思って振り向いたのだけだ。

その先に思いがけず、不快感を顕わにしながら立っていたのは、黒い髪と青い瞳の、ローマ近辺の民族には見かけない顔立ちをした異国の少年だった。

『何も言わなくていい』と予め告げられていたことを思い出し、発言元に目線で確認を取った立香は、『構わない、むしろやれ』と言わんばかりの表情で頷かれたことに背中を押され、自身の胸中で渦巻いていたものをぶちまけた。

「俺はローマを、『世界一の大帝国』だって聞いていたんだ。

なのに来てみてガッカリだよ……世界そのものと言っていいくらいの繁栄を築いた、偉大なるローマ帝国を仕切る人達が。

『得体の知れない余所者だから』なんて理由で、人を根も葉もないでっち上げで侮辱するだなんて」

学校での授業だったか、TVのドキュメンタリー番組だったかは忘れたけれど、古代ローマ帝国がなぜ偉大な発展を遂げることが出来たのかを、立香は聞いた覚えがあった。

それは民族や信仰、文化など、様々な分野に対して発揮された『寛容性』だったという。

多くの国を併合し、多くの移民を受け入れることで領土を増していったローマは、新しく受け入れた地と人々に対してローマ帝国のやり方や考えを押し付けるのではなく、良いと思ったものは『それもローマである』として積極的に受け入れた、柔軟かつ誠実な多様性で以って繁栄していった。

この地に訪れて初めて出会った、敵対者であろうとも降伏するならば赦し、見知らぬ者の突拍子もない話であろうと耳を傾け、全身全霊でローマを誇っていたネロが、それを我が身で体現していたというのに。

ネロのため、ローマのためを思っているのだと嘯いて、しかし実際には自分のことしか考えていない。

そんな形ばかりの忠臣にネロが辱められることが、立香には我慢ならなかった。

「世界とはローマだ、だからお前もローマだって言い切る心の広さくらい、見せてくれたっていいんじゃないの？」

「なっ……この、無礼者が!!」

「殺せ、殺してしまえ!!」

一層荒ぶった空気と飛び交う怒号の中で、しかし立香は恐ろしくはなかった。

自らは何もしないまま声だけ荒げ、誰かが動いて、自身に益をもたらしてくれるのを待つだけしか出来ない連中の、勢いだけで何の力も持たない脅し文句など、ワイバーンやファヴニールと相対してその咆哮を浴びた時と比べれば、痼癪を起こした子供の泣き声に聞こえた。

そんな立香の様子に密かに感心していたリンクは、横目でそつとネロの様子を窺い、瞳孔の開きと赤を通り越して青白くなった顔色こそ戻ったものの、表情は未だ硬く強張り、目の前の騒動をなかなか収めようとしないう彼女に対して、内心で首を

傾げた。

（何がきっかけだったのかはサッパリだけど、絡んできたのは向こうだし、それに對して反論した立香の言い分も、ローマ側に配慮したものだ。

むしろあそこで何かしら言い返さないと、俺達もネロ陛下を軽んじるのを良しとする側に回ってしまっていた。

俺達の対応に問題は無し、この件で罰せられるとしたらあちら側のほうだけど……皇帝という存在が絶対である筈のこの国で、ああもあからさまに陛下の意思と決断を無碍にしてしまった以上は、対外的な名聞を守るためにも相当に重い罰を下さなければならなくなる。

……躊躇っている理由はその辺りかな？）

ネロはまだ若い皇帝であるだけに、実務や実績で及ばないところを補ってもらっているなど、不忠な家臣だとしても即座に切り捨てることが出来ない理由があるのかもしれない。

だとしたらここは何とかして折り合いをつけるべきだと、目の前の騒動を取りあえずこの場合は、解決を後回しにするだけでも構わないから収めようときっかけを探し始めたリンクの耳に、そのきっかけとなり得る情報が謁見の間の外から飛び込んできた。

「恐れながら、皇帝陛下に申し上げます!!

首都外壁の東門前にて、連合の中規模部隊が襲来!!

先刻の遠征軍の残党と思われます、我が方の東門守備隊では抑えきれず……っ!!

┌

郊外においての交戦ではなく、外壁とはいえ首都への直接の攻撃が行われているという事実に対して、口だけでは偉そうなことを高々と唱えていた者達が、その身を強張らせたその瞬間。

咄嗟に縮こまり、慄いた彼らに反して、その瞳に熱とやる気を籠もらせ、歩み出ながら声を上げた者がいた。

「ネロ陛下、此度の件を私達にお任せ下さい。

得体の知れない余所者だという彼らの言い分、どれだけのことが出来るのか分からないという不審を、この戦いで晴らして御覧に入れましょう」

思考にある程度の意識を割いていた分、ほんの一瞬反応が遅れたリンクに先んじたのは、何を言いたいのかを既に決めて、それを口に出せるタイミングだけをただ一心に計っていたマシュだった。

他の二人に了承を得ていなかったことに発言してしまった後で気付き、目線だけで恐る恐る振り返ったマシュは、自身の発言に異論はなく、むしろ同じようにやる気を漲らせている様子の二人を視界に捉え、更なる自信に胸を張りながら改めて前を見据えた。

そんな彼らに異を唱える者はいない、『ならばお前が行け』と言われてしまえば困るからだろう。

何の利権にも絡むことが出来ないまま戦場で果てるならばよし、思いがけず使

ものになるのならそれはそれでよし。

そんな下種な打算が多く、思考の中で回っているのを察しながら、それでも発言と決意を揺るがすことのない三人に対して、ネロが告げた言葉は簡潔だった。

「頼んだぞ、立香、リンク、マシユ。」

先刻の手腕を、もう一度見せてもらおうではないか。

宴の用意を整えて、帰りを楽しみに待っているからな!!」

防衛戦の合間にて

王宮を後にする間に、ネロの遣いが渡してくれた参戦を許可する勅命書を手に東門の防衛戦へと加わったのは、まだ日も高い頃合いだったのに。

攻め込まれては耐え、戦線が保てないほどの損害を与えて一時撤退させることを、繰り返すこと数回。

太陽が完全に姿を隠し、人工的な灯りの数や質が限られるこの時代故の真の暗闇が世界の大半を覆う中で、それでもまだ戦いは続いていた。

辺りを一望できる東門の城壁、何か変化が起こった時に真っ先に気付くことが出来るその最上部に陣取っているカルデア一同からは、その気になればまたすぐにで

も攻め込むことが出来るような絶好の位置に展開されている、多くの篝火を煌々と焚いてその辺一体を昼間のように照らしている敵陣の様子が一目で窺える。

吹き曝しの城壁で、無いよりはマシな程度の薄い布を全身に巻き付けて、夜の寒さと乾いた風の中で見張り役を務めながら、立香は舌打ち交じりに呟いた。

「あーもー嫌だなあ、これ見よがしに自分達の存在をアピールしてプレッシャーかけてきて……」

《こうしていざそういう状況になってみると、攻める方より守る方が遥かに大変だって言われるのがよく分かるね。

何せ向こうは自分達の都合のいいタイミングで動けるけど、こっちはいつ来るかわからない状況でずっと気を張り詰めながら、それに合わせて対応しなきゃならないんだから》

「でもそれは、頼りになる皆のサポートが無ければの話だよね？」

口の端を僅かに上げて、少し含みを持たせながら立香の言葉を受けて、通信の向

このロマニが自慢げに胸を張った気配が窺える。

夜間の見張り役を自ら買って出て、守るべき町と民を背にしながらの戦闘の連続に、心身ともに疲れ切っていた兵士達を休ませてあげる選択肢を選ぶことが出来たのは、彼らの手助けを当てにしていたからこそだった。

《目視できる程度の位置にある、人の大まかな動きの流れを観測するくらいなら、カルデアの技術にかかればどうってことないからね。

向こうが動き始めたらずぐに知らせるから、立香君は楽にしてて。

あの二人も、そろそろ帰ってくるだろうし……》

「センパイ、ドクター、お待たせしました！」

「後でネロ陛下に確認した方が良さそうだけど、それでも、この特異点で何が起きているのかを判断できる程度の話は聞いてきたよ」

《噂をすればだね》

最前線で敵の大半を食い止める活躍をぶっ通しで続けた上に、まだ余裕があるか

らと見張り役まで買って出てくれた少年少女達への、せめてもの心遣いであろう。
三人で食べるには十分すぎるほどの食料や、夜の寒さと吹き曝しの風に耐えるには十分そうな分厚い布などを抱えたリンクとマッシュが、城壁にかけられた梯子を登りながら帰ってきた。

決して高級な茶葉ではなく、いつもエミヤが気をつけているようなお湯の温度や蒸らしなどは一切気にせず、ただ単にお湯で適当に抽出しただけのお茶だったけれど。

火傷しないように息を吹きながら少しずつ飲んだ、腹の中から温まりそうなそれは、状況の特異さによる補正効果もあって本当に美味しかった。

見張り役をオペレーターの観測に任せた立香達は、差し入れの食糧で腹ごしらえをしつつ、リンクとマッシュが兵士達から聞いてきた情報の確認と吟味を始めた。

《『連合ローマ帝国』、か》

「やっぱり、在り得ない存在？」

《断言するよ、そもそもこの時代のローマが分裂の危機に瀕していることがおか

しい。

大帝国ローマの衰退と終わりはまだずっと先の話、それも他国の侵略によってではなく、人や仕組みなどの内部が長い年月を経るうちに徐々に腐敗したことによって至ったものだ》

「ただ一人の筈の『皇帝』を複数が名乗り、それらの連合によって築かれたもうひとつの『ローマ』によって、本来ならばひとつの大帝国である筈の領土が二分されている。」

その『皇帝』とは、召喚されたサーヴァントと考えて良いのでしょうか」

《バーサーカー・カリギュラの例もあるしね、彼以外にもローマに縁深いサーヴァントが複数召喚されているのかもしれない。

……それが全員、カリギュラのように強力な『知名度補正』を得ているかもしれないと考えると、ちょっと頭が痛くなってくるな。

敢えて狙ったものとしたら、今回の『マスター』は相当に頭が切れる厄介な》
「それはどうかな」

《……リンク君、何か見解があるのかい？》

「補正を得たバーサーカーは確かに強かったけど、俺から言わせれば策どころか、人選に至るまであれは失敗だ。」

あの人は、カリギュラは、心からネロ陛下を愛していた……後先考えない暴れっぷりが短所であると同時に最大の利点でもある筈のバーサーカーが、無い筈の理性を絞り出してまで、『ローマを襲え』『皇帝ネロを殺せ』というマスターの命令にギリギリで抗う程に。

知名度補正は得られないとしても、ただの人を殺すには十分すぎるほどの力があって、何を命じようとも一切躊躇うことなく実行するだろう者と。

知名度補正を得て盛大にパワーアップしていても、最も重要な命令に対して歯向かい、予定や想定を盛大に狂わせる危険性がある者と。

選ぶべき、使うべきなのは、ドクターならどっちだと思う？」

《……成る程ね、リンク君の言う通り。

真っ当な指揮官なら、能力で多少劣っていたとしても扱いやすい方、不確定要素の少ない方を選ぶに決まってる。

だというのに、敢えてその選択をした敵の思惑は一体何なんだ？》

「考えられる可能性はいくつか。

まずひとつ、『知名度補正』で基礎能力が上がることにしか、ただ単に考えが及ばなかった馬鹿。

ふたつ、適当に召喚したら土地と人の縁でカリギュラが来て、結果的にそういう状況になっただけの偶然。

みつつ、命令に齒向かう危険性よりも能力向上の利点の方を優先した、多少の問題は力で押し切れば問題ないという脳筋思考。

そしてよつつ、これだった場合は本当に嫌なだけど……問題点があること、非効率であることは承知もしくは気付いた上で、愛する血縁者や故郷を害することを強いられるサーヴァントや、親しかった知人や尊敬する先人に脅かされるローマの人々が嘆き苦しむさまを、嗤いながら楽しむためとか」

「……敵のマスターがレフ教授の可能性が、一気に高まった気がします」

《だね》

「あいつならやりかねない」

「……………どんだけ外道なんだ、そのレフ・ライノールとかいう奴は」

《それに関しては、またいずれちゃんど……ま、まあとにかく、現状の把握は粗方済んで、今後の方針も定まったんじゃないかな。

難しいことは何もない、フランスの時と同じように敵対サーヴァントとマスターを倒して、在り得ない戦争を終わらせれば全て解決》

「それもどうか」

《……リンク君、もういいから。

上司とか指揮官とか気にしないで、僕にいちいち許可を取らないでいいから、君が最初から全部話しちゃって。

よくよく考えてみれば、何でハイラル王国戦術顧問の君がいる状況で、医療部門の僕が参謀じみたことをする必要があるんだ》

「……じゃあ、お言葉に甘えて。

話を始める前にひとつ頼みがあるんだけど、ちょっとヴラドを呼んでくれないかな」

《余がどうした、勇者よ》

「そこにいたんだ、なら丁度良かった。

皆に分かりやすく説明するために、護国の英雄として名高いヴラドの話も聞いた
いんだけど。

……お前だったらこの状況で、本当の意味で国を護ることが出来ると思う？」

《無理だな》

《えっ……ええええっ!!》

そんな、君ほどの人があっさりと言い切るくらいに、今のローマは酷い状況なわけ!?》

《状況が『酷い』と言うよりは『違う』のだ、勇者がなぜ『本当の意味で』と前置きしたと思っている。

余の国を脅かした、余が串刺しにしたのは、唾棄すべき他国の侵略者どもだ。故にこそ余は、紛れもない非道を行ない、この世の地獄を作り出し、後の世にその名と存在を怪物として刻みながらも、自身が魔物に堕ちようと国を護ろうとした、ある種の英雄であると認められているのだ。

聞くとところによれば、マスター達が収めねばならぬ此度の戦は外からの侵略ではなく、発端こそ闖入者からの介入であったとしても、それによって誑かされた者達

による大規模な内乱であろう。

敵対するようになったとはいえ、かつては紛れもなく自身の民であった者達を串刺しにして野に晒そうものなら、それはなりふり構わず国を護るための苦肉の策ではなく、内側に対する粛清となってしまう。

『余に逆らう者は、例えかつての余の民であろうともこうなるのだ』……という風にな。

そうしてローマという国の『形』を護ったとして、あの華やかな紅の娘は変わらず民に愛され、自身の治世を保つことが出来ると思うか？』

「……………そうか。」

護らなきゃいけないのは、今現在の『ネロ陛下の治世』であって、ローマの国と土地が無事なだけじゃ駄目なんだ」

「……………すみません、センパイ。」

それは一体、何が違うのですか？

ローマを護ることは、イコールでネロ陛下の国を護ることだと、私はそのまま認識していたのですが」

「そうだなあ……さっきの、ネロ陛下の傍にいた人達のこと、マシュはどう思った？」

「……あまり、他人のことを悪く言いたくはないのですが。」

ローマの危機に対して必死に抗おうとしているネロ陛下に対してあんな、不忠と言っていいような態度を取るのはどうかと、問題なのではないかと思っていました」

「そうだな、そう思うマシュの気持ちはわかる。」

「ただ俺には、あの人達の気持ちだって少しは分かるんだ」

「せ、センパイ!？」

「国の重鎮でありながらネロ陛下を軽んじて、ローマの品位と評判を落とす真似をしたことに対しては、イラっとして啖呵を切ったりもしたけれど。」

国が、自分達がこれからどうなるか分からない状況で、不安のあまりに疑り深くなったりヒステリック気味だったり、多少周りを害してでも自分を守ろうと必死になってもおかしくはないし、そこは咎めるようなことじゃないと思う。

あの人達は、根っからの善人ではなかったけれど悪人でもない、言うなれば『普通の人』だよ。

こんなことになったりしなければ……正しい歴史の中の、本来のローマでだったら、ネロ陛下がもうどうにもならない程に間違えない、彼女に仕えることで十分な見返りが発生する限り、心からの『忠義』は無くても普通に『仕事』として、傍で働いてくれた人達だったような気がするんだ」

「本来ならばあり得ない筈の異様な事態というのは、状況や環境だけでなく、人の心境や振る舞いにまで影響を及ぼしてくる。

『戦争』なんてものは、中でも特にあからさまだ。

自分の命や財産が脅かされる危険や恐怖をつきつけられて、それらを知らなかった時と、平和だった時と同じ心境や価値観を保てる人はそうはいない。

今はまだ、ローマが如何に危機的状况に陥っているのかを、日々実感しているであろう上層部に不安と不信が広まっている程度で済んでいるけれど、それが兵や民にまで及ぶのは時間の問題。

そして、人々の積もり積もった不満とストレスの最終的な向けどころは一体どこ、『誰』になると思う？」

「……………まさか、そんな。

だってネロ陛下はあんなにも一生懸命に頑張って、兵士や町の人達から、あんなにも愛されていたのに」

《マシュよ、貴様は本当に善良かつ純粋であるな。

最も重い責任を負っている、いざという時に我が身が破滅しようともそれを果たすからこそ、最も傲慢に振舞うことができる……それが、国を統べる『王』というものなのだ

あの娘の統治を直に見ていないゆえ、実際の能力の有無に関しては何とも言えぬが、国の繁栄を象徴するかのような華やかな言動と立ち振る舞いによって人心を集め、民に愛されることによって国を纏めるという手法を重視していることは伺えた。平和な時勢であれば問題なく、むしろ国や町の発展をより一層促すのであろうが……命や財産を脅かされた、心身ともに切羽詰まった状況で、あの素なのか、それとも敢えて空気を読んでいないのか分からぬような振る舞いを続けられては。

最初こそ励まされはしても、次第に腹立たしく思えてくるようになるであらうな。戦後にそれを巻き返し、離れてしまった人心を今一度取り戻す、我が身を犠牲にする以外の方法で民を納得させられるだけの現実的な手腕が、果たしてあの娘にあ

るかどうか……」

「皇帝陛下があれだけ若くて元気で、しかも本来だったら平和で、彼女の統治に何の問題もなかった筈の時期なんだから、後継者の準備が済んでいるとも進められているとも思えない。」

只でさえ異様な内乱で疲弊した上に、想定外の代替わり、もしくはまともな統治者の不在による混乱が長引けば、ローマ帝国は確実に、本来在り得た筈の繁栄を失ってしまう。

例え目の前の敵を倒して、戦争は終わらせたとしても……それは十分に、偉大なる大帝国ローマの喪失という、人理に影響を及ぼす程の異常事態になり得るんじゃないかな」

《……ああ、そうだね、その通りだ。

つまり、今までの話を纏めると……ただ単に、敵の兵やサーヴァントを倒して、戦争を終わらせればいいだけの話じゃなくて。

後々にネロ陛下の評判を落としたり、陛下の責任問題になったりしないように、例え相手が形振り構わずどんな手を使ってこようと、こちらは綺麗で真っ当な、

または陛下の評判に貢献できるような痛快な戦い方を貫くしかなくて。

僕達がこの特異点を去った後も、本来在るべきだったネロ陛下の治世がきちんと続くように、彼女がこれからもローマの華として人々に愛され続けるように、出来る限りの手を打っていかねばならないんだ》

「な、成る程、それは………要するに、どうやってですか？」

《僕もわかんない、これ本当にどうすればいいの!?

敵を物理的に倒せる力の有無よりも、政治的な思考や駆け引きができるかを問われる話じゃないか!!》

「今この状況になってから考えてみると、フランスの時はまだ簡単だったんだな。竜や魔女っていう分かりやすい、外から来た敵を倒せばいいだけの話で、その為に必要なのは対抗勢力を集めることだけだったんだから」

《ね、ねえヴラド三世、救国の英雄、何か案とか策はない!?》

《なぜそれをよりによって余に尋ねる、その件に関してはつい先程話したばかりであろうが。

今の余ができるやり方では、国土と自陣営の民の命は確かに守れようが、代わり

に王への支持と期待は失墜するぞ》

《ちよつとギルガメッシュ王、王の中の王を自称するくらいなら何か思いつかないかな!!》

《生憎だが我は、我自身の統治において民の機嫌や人気を取ろうとしたこと、考えたことなどは一切無い。

王を敬い、王の言葉に従ってこそ民であろうが、それが出来ぬ者など一思いに切り捨ててしまえ》

《駄目だこれは、聞く相手を間違えた!!

もっと他に、きちんと頼りになる人は……そうだ、一番肝心な人を忘れてた!!
リンク君、伝説の勇者様、君の物語はこの時代のローマにおいても絶大な人気を得ていた筈!!

君が正体を明かして、その上でネロ陛下を支持すると公言すれば、陛下の評判も鰻登r》

「いやゝ、そう簡単にいくかなあ……」

《今度は立香君か、一体どうして!?!》

「作戦自体はアリだと思うんだけど、その場合、色々と根回ししたり状況を整えたりして上手く物事を運ばないと、リンク個人の人氣が更に上がるだけで、それが『ネロ陛下のおかげ』と思ってもらうまではいかないと思う。」

むしろ逆に、『ネロ陛下があまりにも不甲斐なかったから見かねた勇者様が手を差し伸べてくれたんだ』とか思われでもしたら、評判が上がるどころか致命傷だろ」

「成る程……ネロ陛下の人徳が勇者様をも動かしたのだと、人々にそう受け止めて貰うためには、陛下自身の人氣と評判がその時点でそれなりに高くなければいけないですね」

「そうそう、あるんだよね……条件は正しかったのに好感度が足りなかったせいで、イベントが発生しないもしくは失敗するパターン」

「センパイ、何の話をされているんですか？」

「……………ごめん、忘れて。」

と、とにかく、リンクが正体を明かすのは、他に色々と頑張った先での最後の一回押しにすべきだと思う。

となると、リンクの正体を取りあえず最初のうちは隠して、様子を見ることにし

た判断は正しかったな」

「この場で全ての方針と作戦を決めるには、情報や判断材料があまりにも少なすぎる。

とりあえず今のところは、目の前の問題を片づけていこう。

市街地を背にしながらの防衛戦があまり長引くようでは、そこに住んでいる人達の不安は募るばかり……そしてそれは、ネロ陛下への不満へと直結する。

さっきも話したように、次の襲撃が来るタイミングでこの戦いを終わらせ」

《敵陣、動き始めました!!》

皆が話している間も敵陣営の観測に集中していたオペレーターの一人が、変化が起これると同時に張り上げた声が、皆のやり取りを遮りながら響いた。

途端に気持ちを切り替え、城壁の向こうの篝火で照らされた一帯を見据えた一同の目には、明確な異変らしきものは未だ見受けられない。

それでも、カルデアの計測結果と、それを告げたオペレーターの言葉を疑うことのなかった立香達は、一斉に行動を開始した。

予め決められていた流れに従い、立香が打ち鳴らした非常事態を報せる鐘の音に合わせて、城壁の下方で休憩しつつ待機していた兵士達が動き出した気配が伝わってくる。

目視での判断よりもずっと早く気付くことができたおかげで、これから押し寄せてくるであろう敵を、準備を万端に済ませて待ち構えることができそうだった。

その戦線に加わるために、愛用の大盾を手取るマシュ。

しかしリンクは、先の戦いまでマシュと共に最前線で活躍していた筈の彼はそれにくく気配を伺わせず、城壁の縁ギリギリに立って、夜の闇に包まれた眼下の光景を見下ろしていた。

「それじゃあマシュ、俺が抜けた分大変だとは思うけど……打ち合わせ通りに、頼んだよ」

「大丈夫です、マシュ・キリエライトにお任せ下さい。

心配はいりません、リンクさんが目的を達成するまで耐えればいいだけのことなのですから」

「……ああ、俺もだ。」

マッシュが護ってくれているからこそ、安心して自分の役目に集中できる」

そう言って笑ったリンクは、城壁の先にある虚空へと向けて、まるでそこに地面があるかのようにあっさりと足を踏み出した。

途端に重力に引かれて落下し、立香達の視界から一瞬で消えたリンクは、その身が地に叩きつけられるほんの一瞬前に身を翻し、城壁の一部を掴まえることでその勢いを殺してみせた。

間髪入れずにその手を離し、両膝で再度勢いを殺しながら着地を決めるや否や、夜の闇に紛れながら駆け出したリンク。

ふとあることを思いついたその唇から、誰に聞かせる気もない呟きが零れた。

「……この闇の、『影』の中でなら行けるかな」

存在するという知識と、使える筈だという感覚のみがあった能力を意識し、精神

を集中させた次の瞬間。

宵闇の中で辛うじて『人』だと認識できていたリンクの影は、四つ足で地を奔る獣のものへと変わり、二本足よりもより速く、そして静かに、夜襲によって人氣が少なくなった敵陣営へと向けて駆けていった。

ご覧になって下さっている皆さんのご意見を頂きたいことがあります、『活動報告』にてその旨を書きました。

宜しければ、是非目を通していただければと思います。

勇者の暗躍

ローマ市街地の東門への夜襲部隊を送り出すために、つい先程まで夜中とは思えないような喧騒に満ちていた、今はだいぶ落ち着いていた筈の連合ローマ帝国の野営地の一角が、何故か再び慌ただしくなっていた。

外側の見張りと警戒に当たっていた数人が集まり、松明の炎とそれに伴う明かりを大きく動かしつつ、酷く焦りながら辺りを警戒している様子に、異常を聞きつけて駆けつけた者達は何事かと問いかける。

敵からの奇襲か、それとも斥候の類が近づいていたのかという危惧に対して返ってきた答えは、ある意味でそれよりもずっと危険で厄介なものだった。

「狼だって!？」

「間違いない、明かりの中にほんの一瞬だったけれど確かに見たんだ!!」

「あれはでかいぞ、襲われでもしたらひとたまりもない!!」

「人と火をもっと集めろ、何とか追い払うんだ!!」

そんな騒ぎの気配を敏感に感じとって、現場からは随分と離れた位置にありながら、そわそわと落ち着かなくなってしまうている者達がいた。

自由の身でさえあったならば、『群れ』という最大の利点を持たない一匹狼程度ならば逃げ切れる自信もあるのだが、生憎と人によって飼われているその身は縄で固く繋がれてしまっている。

大事な馬を狼に襲われては堪らないと思い、周囲の警戒に加わることにした世話役の行動は、彼なりに馬達のことを考えたものなのだろうが。

人から伝染した不安や緊張を、臆病で神経質な性質に酷く障ったそれを宥めても、うことができなかった馬達の場合は、何かしらのきっかけさえあればすぐにでも

爆発してしまいそうだった。

そうして遠くの騒ぎに気を取られてしまっていた馬達は、見張りの隙を見て暗闇の中を駆けたり、藪に身を隠したりしながら、もうすぐそこまで迫っていた見知らぬ者の存在に気付けなかった。

……とは言っても、それは仕方がない、無理もないと言えることだっただろう。

実戦で磨かれた隠形の技を駆使した上に、『しのび葉』を飲んでささやかな生体音まで消していた彼の気配は、その姿を実際に目の当たりにでもない限り、真後ろに迫られても気付けないと思われるほどに完璧に隠されてしまっていたのだから。マッシュやロマニ達が知れば、『気配遮断』のスキルの賜物ではないという事実を目を剥くであろうものを惜しみなく駆使しながら、忙しなく動かされる明かりや人の目を掻い潜ってここまで辿り着いたリンクは、自身の存在に気付いていない上に、遠くの騒ぎに気を取られて無防備な姿を晒してしまっている馬へと向けて、手の中に隠すことができるような大きさのナイフを藪の中から音もなく滑らせた。

その刃は馬の皮膚や腱ではなく、その身を繋いでいた綱に半分ほどの切り込みを入れる。

夜の闇と、遠巻きに淡く揺らめく炎のみが僅かな光源になっているという状況の中で、馬の巨体を変わず留めているように見えるそれは、一目で気付くことはあまりにも難しい些細な変化だった。

（変身の仕様が、太陽どころか光に照らされた時点でもう駄目なのが想定外だったけど……結果的にいい具合に陽動になったし、まあいいか。

上手い使い方や活かし方は、また改めてゆっくり考えよう）

頭の中ではそんなことを考えながら、慎重に、かつ手早く全ての馬の綱を切ったリンクは、最初から最後までその存在と行動を一切悟らせないまま、足早にその場を後にした。

その足が次に向かうのは、陣地の外ではなくその反対側。

夜襲部隊が発ち、外に向けての警戒に追加の人員が回ったことで多少手薄になっているとはいえ、それでも多くの人影が忙しく動いていることが見受けられる中央部へと、大胆に潜り込んでいった。

『伝説』を読み込んでいる者ならば当然知っている事実として、敵の本拠地や巢窟に単独で乗り込むことも多かった『勇者リンク』には、潜入や暗躍の優れた実力と実績がある。

辛うじて立てる程度の足場しかない断崖絶壁の途中で、雨が止むのを何時間も待ったり、魔物の巣に夜襲をかけて、気付かせることも起こすこともないまま一掃したり。

そんな経験が幾つもあるリンク自身には、このまま適当なところに身を隠し、行き交う人々のやり取りに耳を傾けて情報収集をするという選択肢もあったのだけだ。

短い間に度重なった戦闘に酷く消耗している兵士達と、リンクが抜けた穴に加えてそんな彼らのフォローにも努めているだろうマシユのことを考えると、あまり時間をかけてはいられなかった。

（先のことを見越すのは大切だけど、今はそれ以上に、戦闘を一刻も早く終わらせることを優先しないと）

敵を倒す、もしくは殺すことと、戦闘に勝つことや終わらせることは、決してイコールでは結ばれない。

守るべき町と民を背にした戦闘に余裕のない兵士達が、ただひたすらに目の前の敵を倒そうとしている状況で、リンクと彼の教えを受けたマッシュだけは、明確にその意図を持って戦っていた。

怪我はさせても殺さないこと、戦えなくなった仲間を助けようとする、もしくは連れて逃げようとする行為を邪魔しないこと。

それらは甘さや優しさ、ましてや戦いを前にして覚悟を決められない弱さなどでは決してなく、相手が本拠地を離れて遠く遠征を果たしてきた、物資や人手の補充が簡単には利かない身であることを考慮した上での立派な戦術だった。

殺してしまえば、その分の人手や戦力は確実に減少するけれど、その割合は確定分で打ち止めになってしまう。

しかしあくまで怪我人に留めれば、救出のために他者の時間と人手が必要となるし、治療しようとするれば物資だって消費しなければならない。

死んでいればその分は浮くはずだった食料なども、例えその人が既に戦力にはならなくなっていたとしても、変わらず減り続けることとなる。

一思いに殺してしまうよりも、多くを生かして帰した方が、却って相手側の足止めと消耗を促すことができるのだ。

……だというのに、相当与えた筈の消耗を欠片も窺わせない勢いで何度も攻め込んできて、早々に終わらせる筈だった戦闘がこんな時間にまで長引いてしまった。リンクはその理由を、自陣營の足手まとい、かつ余計な消耗を促すのみの存在となるようにお膳立てをされてしまった兵士達を、その思惑に気付いて『処理』できてしまえるような冷酷で的確な判断を下せる者が、敵の指揮官クラスにいるからではないかと思っていたのだけれど。

今の彼の前には、『もしそうだとしたら厄介だな』と考えていた想定を、あっさり裏切る光景が広がっていた。

「あーくそっ、まさかあんな子供にやられるなんて……」

「そう悔しがるなって、子供だろうとあの戦いっぷりはただ者じゃなかったぞ。

とりあえず今のところは、無理しないでゆっくり休んでろ」

野営地の中でもかなり多くの面積が割かれていると思われる救護所にて、負傷した兵士達は手厚い治療を受けているし、それに当たっている者達の表情や様子からも不満の色は窺えない。

騎馬隊が加わっている訳でもないのに、あれだけ質のいい馬を多数連れてきていた事実から想定していた『嫌な可能性』がますます強まるのを、リンクはこめかみに薄っすらと伝う汗の感触と共に感じていた。

「これは、余計厄介なことになったな……」

一人の優れた指揮官がいた方がまだマシだった、そんな現実を前に少しだけ舌を打ったリンクは、目的のものを探して更に奥へと入り込んでいく。

小石を目的の方向の反対側へと軽く投げ、その音と存在に見張りの視線が思わずそちらを向いた隙に、音もなく一気に駆け抜けた。

その先にリンクは、ようやく最終目標となるものを見つけることができた。

「……………まずいなこれは、予想以上だ」

リンクの目の前にあったのは、数度の戦闘によって既に相当消費されていた筈の、それでも今後2〜3日は今まで通りの戦闘と陣地の展開を続けられそうな程の、武器防具や食料といった遠征物資の山だった。

相手側の勢いが衰えないことを不審に思い、今日中に何としてもケリをつけることにした自身の決断を、それを後押ししてくれた皆を褒め称えたい気持ちにくるくる。

目の前の光景とそれらの事実、リンクの頭の中で情報や思考を促すための要素として巡り、ひとつの結論へと至らせた。

『『マスター』はともかく、連合の『皇帝』は……少なくともその纏め役である何者かは、『物』よりも『人』こそを重んじる立派な為政者と考えて良さそうだな』

ネロと彼女が治めるローマに反目し、連合側についた者達は、決して恐れや欲に血迷った訳ではないのだろう。

彼らは彼らなりに考えて、連合とそれを束ねる皇帝達にこそ真のローマを見出し、結果としてそちら側についただけなのだ。

ネロや自分達が想定していたよりも、ずっと多くの民によって連合が支持されていることを、遠征部隊を余裕を持って支えられる程の物資の量と、それを滞りなく輸送できるだけの手厚い支援が施されている様子から想定することができた。

「いつそのこと連合が、力や恐怖で民に無理やり言うことを聞かせるとかの悪役的な振る舞いをしていたのなら、『苦しめられる民を救うネロ陛下』という形に持つていくこともできたんだろうけど。

これは俺達が頑張るだけでなく、ネロ陛下にも皇帝としての威厳をちゃんと示してもらわないと駄目だなあ。

……難しいけど、まあ何とかやるしかないか」

頭では今後のことを考えながらも、リンクの体は今この時のために決して惑うことなく動き、順調に『準備』を続けていた。

積上げられた物資の山に登り、中央の辺りの荷を少しだけ動かして、両手で作った円ほどの大きさの僅かな隙間を作り出す。

そこにリンクは、上向きにかざした手のひらに突如現れた青い球体を入れて、続けて先日のカリギュラ戦でも使用したゼリー状の物体を、今回は赤い色をしたものを、数個纏めて放り込んだ。

少しだけ考えてもう二個ほど追加したリンクは、その隙間を念のために、適当な荷物で塞ぐと同時に踵を返した。

見張りの目と注意を今一度誤魔化し、さっきの場所に駆け込む前に身を落ち着けた地点にまで戻ったリンクには、このまま誰にも気付かれないうまま脱出することは勿論可能だったのだけど。

夜の闇と周囲の空気にその気配を完全に溶け込ませていたリンクは、その隠形の技を意図して緩め、気を張っている者ならば気付くことができる程度の違和感を敢

えて生み出した。

途端に向けられた松明の明かりの中に照らし出されたリンクは、侵入者の存在を辺り一帯に伝えようとする叫び声を背に、一目散に駆け出した。

何かを踏んだり蹴散らしたりしながら、脱げた外套の下にあった宵闇の中で自ら光っているかのような髪を晒しながら、まるで自分自身の存在を主張しているかのようなさまで逃げるリンクを、辛うじてあそこまで潜り込むことができた斥候が土壇場でしくじり、周りに気を配る余裕など無い状態で泡を食って逃げているものと、彼を追う敵兵達は考えている。

彼が既に目的を果たし、これはいわば彼の個人的な思惑によって為されているだけのオマケなのだということは、想像すらしていないだろう。

いつの間にか中枢近くまで潜り込んでいた、何を見て何を聞いているかも分からないような者をこのまま帰すわけにはいかないと考えた者以外に、派手な逃走劇が立てる盛大な音や、ほんの僅か視界に映ればそのまま追いかけずにはいられないような金色に引かれた者達も次から次へと加わって、追手の数は瞬く間に増えていく。四方八方から伸ばされる手や飛び交う怒号の中を、目の前に立ちはだかった者の

頭を踏み越えたり、逆に股の下を抜けたりといったアクロバティックな動きで翻弄し、つつ切り抜けていったリンクは、自分が仕掛けを施した位置から既に十分離れ、近くにいたであろう人達を皆上手く引き付けられたことを、もうそろそろ巻き込まずに済むであろうことを確認すると、腰に下げられて揺れるシーカーストーンへと手を伸ばした。

『起爆』の瞬間は、遠く離れた東門で防衛戦に徹していたマッシュからも確認できた。先程話し合いを行なった城壁の縁から、眼下で戦うマッシュと敵陣に一人乗り込んだリンクの二人ともを案じ、応援していた立香からは、綺麗な球状の青い衝撃が、初めに敵の野営地の一角にて迸り、一拍置いて同じところから幾つもの爆炎が、夜空を照らし出す勢いと威力で沸き上がった光景の一部始終が見えていた。

遠巻きに目の当たりにしただけの者達でさえ、戦闘中であることを一瞬忘れて敵味方共に立ち尽くしてしまった程の光景は、現地においては比べようもない大混乱を引き起こしていた。

炎に巻かれた中心部が遠征を支えていた物資の保管所であったことに加えて、あの爆発でパニックに陥った馬達が、十分頑丈だった筈の縄を引き千切って野营地の外にまで逃げ出すような暴走を始めてしまったからだ。

火を消せと、馬を捕まえろと、怪我人の避難をさせろと、あの子供を逃がすなど。様々な声と思惑が飛び交う現場に、その元凶の姿は既に無く。

あれだけ探しても見つからなかった狼が、野营地の明かりから十分離れたところに再び現れて東門へと向けて駆け出したことに、気付くことができた者はいなかった。

拠点を襲った異常事態に予定半ばで撤収した夜襲部隊は、頼りの物資の殆どが焼失している上に、輸送手段である馬の多くを失い、これ以上遠征を続けられない現実を目の当たりにし、次の朝には野营地を引き払って丸ごと撤収していった。

それらを成し遂げたのは、服だけでなく綺麗な髪や顔までを土埃で汚して帰って

きた、歳と見た目にそぐわない戦いっぷりで連合の兵士達を圧倒した少年であると。東門の防衛戦に加わっていた兵士達の興奮気味の語りによって、華奢な体で大盾を振り回す少女の活躍と共に、今後数日で町中に広まっていくこととなる。

「大義である、そなた達の活躍によってローマの町と民は守られた!!

酒場や通りでは、その場に居合わせた兵達が即興の吟遊詩人となって最新の英雄譚を語り、それによって励まされ、奮起した市民達によって、町はより一層の華やかさと活気に満ちておる!!

ああそれと、そなた達の進言通りに付近を搜索してみたところ、連合軍が回収し損ねたらしい馬を何頭も捕まえることができた。

丈夫で体格もよく、軍馬としての調教もしっかりと施された馬を手に入れられることは滅多に無いのだ。

そなた達からの献上品として、ありがたく頂戴しておくぞ。

やはり余の目は正しかった……もう誰にも文句は言わせぬ、そなた達は紛れもなくローマの救世主である!!

此度の宴はそなた達のために開かれたもの、存分に至福の時を過ごすが良い!!」

そんな声を上げるネロの心からの笑顔は本当に美しく、このために頑張ったと、頑張った良かったと、素直に思えるようなものだったのだけれど。

残念ながら今のカルデア一同には、その笑顔は殆ど認識できていなかったし、折角のお褒めの言葉も殆ど聞こえていなかった。

血の気が下がって青くなつた顔を横並びに三つ揃えた彼らは、これ程までの危機的状况はかつてあつただろうか、果たしてこれから起こり得るだろうか、半ば本気で考えてしまっている。

ネロが完全な善意と厚意で、気合いを入れて宴の準備を整えた成果が、多種多様な食材と調理法によって用意された大量の食事が、三人の目の前に山となって聳えていた。

「……………そ、そういうどこかで、何かのネタで聞いたような覚えがある。

古代ローマは食べ物が豊かで、食事は生きるためじゃなくて殆ど娯楽扱いだったって」

「一説によれば、古代ローマの貴族達は宴の席にて、お腹がいっぱいになったら孔雀の羽で喉の奥を刺激して嘔吐を促し、胃を空にしてからまた食べるということを繰り返したとか……」

マシュが具体的な話をしてしまったことで想像力を掻き立てられ、更には端の方にきちんと用意されていた孔雀の羽を見つけた三人は、顔の血圧がますます下がっていくのを感じ取ってしまっていた。

「む、無理……それが歴とした古代ローマの文化だったとしても、バイキングではきちんと食べられるだけ皿に取りなさいと、取った分は責任を取って食べ切りなさいと教えられて、その通りだと思いつながら今まで生きてきた俺に、そんな食べ方をするのは絶対に無理」

食べたものではなく血を吐きそうな形相で呟かれた立香の言葉は、思い起こす状況に多少の差異はあれど、リンクとマシュにとっても共感できるものだった。

「…………仕方ない、俺が頑張る」

「待てリンク、お前の食いっぷりが凄いのは知ってるけどこれは流石に…っ!!」

「分かってる、美味しく食べられる限界というものは俺にだってちゃんとある。

だけど、お前やマシュにできるような無茶じゃないし……俺達に喜んでもらおうと一生懸命に準備をしてくれたネロ陛下を、また悲しませたくはないし」

その言葉、その気持ちもまた、立香とマシュにはよく分かった。

しかしだからと言って、リンク一人に重責を負わせて、それで万事解決と言うような気にもなれない。

本当にどうしたものかとかつてない勢いで悩み、頭を抱える三人の耳に、通信越しの声が聞こえてきた。

《ふう、やれやれ……まさかこんな早くに、例のものを使う機会が来ようとは》
「エミヤ？」

《リンク、君達がレイシフトに赴く前に渡しておいたものがあるだろう。

出すといい、必ず君達を助けてくれる》

「渡しておいたものって……もしかして、これのこと？」

エミヤの要領を得ない言葉に対して首を傾げながら、それでも言われた通りにシーカーストーンから取り出したものを目にした立香が、雷に打たれたかのような衝撃を受けて目を剥いた。

「でかした、さすがはエミヤ!!」

首を傾げていたリンクから、殆ど引っ手繰るような勢いで『それ』を受け取った立香はとても手慣れた様子で扱い始め、その光景はリンクの脳裏にも鋭いものを走らせた。

「成る程、これはそういうものなのか……っ！」

「汁物は残念だけど諦めよう、零れて大惨事になる可能性が高い。

原則として入れるのはひとつにつき一種類まで、言うまでもないことだけど味が混ざるから。」

入れすぎると蓋を閉めた時に潰れるから気をつけて、かといってあまりスカスカでも中で崩れちゃうから、こうやっていい感じに隙間を詰めて……」

「センパイ、何かもの凄く慣れてますね！」

「庶民だからね！」

でもこの量だと、今度は痛む前にちゃんと食べ切れるかどうかが問題に……」

「大丈夫、シーカーストーンの中に入れていた間は鮮度はちゃんと保たれるから」

「よし完璧!!」

「何かよく分かんが、随分と盛り上がっておるな!!

うむうむ、楽しんでもらえて余は嬉しい!!」

「……………ふっ。

マスター達の窮地を見事救ってしまった慧眼が、我ながら怖ろs」

「勇者に何をやらせておるかこの阿呆^{フエイカー}贋作者が!!」

見ていて腹立たしくなるような痛々しさと格好つけていたエミヤの脳天へと、ピコハンとハリセンを渾身の勢いで射出したギルガメッシュの行動と発言に、伝説の勇者が仲間達と共に、エミヤが投影したと思われるタッパーの山にひたすら料理を詰め込み続けるという脱力の光景を目の当たりにさせられた一同は、珍しく賛同し

た
の
で
あ
っ
た。
。

作戦会議

首都東門の防衛戦と、その後思いがけなく遭遇した危機を何とか乗り越え、ようやく王宮に落ち着いたカルデア一同は、息をつくのもそこそこに次の行動へと移った。

ネロに一時首都を離れる許可を得た上で彼らが向かったのは、彼女に仕えていた前任の魔術師もよく足を運んでいたという、首都近郊で最も良質な霊脈の存在が観測されたエトナ火山。

ローマの町並みと人の気配が十分遠ざかるまで歩いた一同は、周辺の観測結果を確認したロマニから許可が出たと同時に、人目が無くなるまではと自重していたも

のを解禁した。

そして今、エトナ火山へと向かうための最短の道のである荒野には、この時代にそぐわない爆音が轟いていた。

リンクの小柄な体で乗りこなせるほどの大きさで、現代の同じような乗り物に見えそ似通っているながら、古代の謎の超技術によって造られたという事実を窺わせるパワーと頑丈さを発揮してみせているのは、先輩方から受け継いだものではなく、ハイラルにいた頃からの歴としたリンクの愛車であるマスターバイク。

それに横付けで牽引されているのは、二人乗りを想定して大きめに設計されながら、その上で少しでも軽く小さくしようとした作者の拘りとほんの僅かな悪戯心によって、乗る際にはどうしても体が密着してしまうような形になったサイドカーだった。

その仕様を現物と共に目の当たりにした当初こそ、首まで真っ赤にして言葉を失うという初心な反応を楽しませてくれた上に、『効率を突き詰めた結果こうなっただけなんだから、忙しい中で一生懸命造ってくれたんだから恥ずかしいなんて言うていられない』と健気な発言をして、なけなしの罪悪感が揺り動かされるような気

持ちにまでさせてくれた二人は今、少年が少女を膝の上に座らせた上で背中から抱き込んでいると言っても過言ではない密着具合で、風とスピードを全身で感じながら幼い子供のような歓声を上げている。

あの可愛らしい初々しさが長続きしなかったことに對する無念と、二人の感性が未だお子ちゃま寄りであることに對する呆れ、そしてそれ以上の微笑ましさを感じながら、ダ・ヴィンチは技術顧問としての役割をこなすことに努めた。

《立香君、マッシュ、調子はどうだい？

変な音とか、軋みとか、何か気になる異常とかは無いかな》

「問題なし、乗り心地も最高!!」

「流石はダ・ヴィンチちゃんですね!!」

《ふふつ、この天才に出来ないことは無いのさ……と、言いたかったんだけどね。全く……そのサイズでモンスター級の出力を可能としているエンジンとか、現代に存在する合金のどれをも上回る強度と水に浮く軽さを両立させている素材とか。いくら私とはいえ、この短時間でそれらの超技術の解明及び再現に至るのは流石

に不可能だったよ。

という訳でリンク君、サイドカーの装着時にはくれぐれも安全運転を心がけてくれたまえ。

この間のような無茶な曲芸じみた操縦を、実行まではいかずとも試みでもしようものなら、強度の違いがあからさまな接続部分から盛大にぶっ壊れることは請け合いだからね》

「そんなに何度も念を押さなくても大丈夫、やらないって!!

……あー、でも、急な敵が現れた時に、マスターバイクの機動力を咄嗟に生かせないのは少し厄介だなあ」

「だったらさあ、非常時にボタンひとつでサイドカーを切り離せるようにしとくってのはどう?」

《ああ、それいいねえ、面白いよ。

その上でサイドカー単独で簡単な操縦ができるようにしておいて、その場から離れられる程度の機動力を持たせておけば、十分に実用の余地はありそうだ》

「やった、凄いワクワクする!!

非常時に使うための隠しギミックとか、やっぱり浪漫だよなあ!!」

賑やかで、特に戦闘もなく順調だった行程は、目的地である霊脈に光に寄ってくる虫の如く群がっていた無数の亡霊型エネミーの存在によって、最後の最後で尻すぼみとなってしまったのだけだ。

それらを排除して霊脈を確保すること自体は特に苦もなく終わり、カルデアのスタッフ達がマッシュの大盾を媒介に、サークルを設置・起動させる工程を終わらせるのを待つ間の時間を使って、今後の方針を決めるための作戦会議が始まった。

時代と空間の隔たりを越え、一見して分かるものよりも遥かに多くの顔触れが、それぞれの生きた時代で名と存在を知らしめた英雄達までもが加わっている中で、それら全員から認められた上で自然とその中心に、会議の進行と纏め役を務める位置に収まったリンクの姿があった。

「まず初めに、ひとつ明確にしておく。

俺達が定めるべき今後の方針、その大まかな括りは『ネロ陛下の評判を上げる』と、『逆に『評判を下げない』の二つになる。

連合のサーヴァントを倒し、戦いを終わらせ、敵側のマスターから聖杯を回収することに關しては、言うまでもない当たり前のこととして今のところは置いておく」

《どちらでも難しいことだけど、『下げない』というのは『上げる』よりは分かりやすいね。

上層部がネロ陛下を軽んじ始めてしまっていたのは残念だけど、幸いにも兵や民からの評判と人気は未だ絶大だった。

これを保ち続けることができれば、方針のもう片方も多少は楽になるだろう》

「分かりやすいのは確かだけど、これもまた難しそうだなあ。

前にヴラドも言っていたけれど、平和な時なら愛され要素になるだろうネロ陛下の無邪気さも、余裕が無い状況だと逆に腹が立つてのも分かるし」

「でも、だからと言って……あの笑顔と華やかさを、ローマの人々が確かに愛したネロ陛下の魅力を捨てさせてしまうのは、そうまでして戦争に向き合わせてしまうのは絶対に違うし、やってはいけないことだと思います。

その先にはもう、私達を守るべき『ネロ陛下のローマ』は無くなってしまってい

る筈ですから」

《あくまで、ネロ陛下は陛下のままですってというのが重要なんだよね》

「だけどそれをいくら頑張ったとしても、できるのはあくまで現状維持。

何かしらの失敗を挽回しきれなかったとか、連合側が想定外の策を打ってきたとかのちよつとしたことで、取り返しがつかなくなる程に事態が悪化する可能性は十分にある。

やっぱりここは後々のことを考えて、ネロ陛下の地盤を強化しておく、もとい陛下の支持と人気を上げておく為の作戦を練っておいた方がいいだろうな」

その作戦の具体例を考え始めた辺りでやり取りは中断し、誰もが揃って黙り込んでしまった。

言葉を発することをやめた分、上乘せされた思考力が各々の頭の中で巡っているのはわかるけれど、浮かんだ妙案を口にできる者が現れる気配は一向に窺えない。それは不甲斐ないことだったけれど、それと同時に、どうしようもなく仕方がないことでもあった。

頼れるスタッフ達は皆、初のレイシフトという記念すべき瞬間に、重要な位置や施設からは遠く離れたところに配属されるような下っ端の魔術師や、科学技術を導入するために仕方なく迎えられ、厚遇とはとても言えないような扱いを受けていた技術者など、生粋の魔術師特有のどす黒い精神性や駆け引きに関わらなかったおかげで、人間としての善性を失わずに済んだような人達だし。

サーヴァント達だって、平穏とは程遠い激動の時代や人生を送った、治めるのではなく逆に引つ掻き回すような生き方を貫いたからこそ、後の世に名と功績を刻んだような人ばかりなのだ。

自身の思うがままに生きた結果、誰かからは身を捧げても構わない程に愛されたり、誰かからは殺したい程に憎まれたりした彼らには、考え方や好みがそれぞれ違う大勢の、出来ることならば全ての人々から支持を受け、愛されるためにはどうすればいいかなんてそう簡単には思いつかないだろう。

『『愛され』』といえど、マリアだけ……君の場合はむしろ、混乱を収めきれずに槍玉に挙げられた方だからねえ』

《ええそうね、今回に関してはちょっと発言を自重いたしますわ。

あの大輪の薔薇のように麗しい陛下が、私のように処刑台に散ってしまったては申し訳がありませんもの。

……ああでも、万が一の場合を考えて。

最後まで麗しく微笑むための気構えを、同じく国の華であった者として、経験者としてお教えしておいた方がいいのかしら？》

《自重するならそういった、ギリギリどころか完全にアウトな発言自体を自重しなさいよ!!

サンソンどころか、全く関係ない筈のスタッフ達にまで被弾しているじゃないの!!

《おゝい竜の魔女さん、それともオルタと呼んだほうがいいかい？

君ねえ、周りから微笑ましく見られるのが嫌なら、マリアの天然100%な言動に条件反射でツッコミを入れるのを何とかした方がいいよ。

悪ぶっている君の性根がこの上なく素直で真面目なんだってことを、スピーカーで叫んで回っているようなものだからね》

《やかましいわ、余計なお世話よ!!》

《こらオルタ、あなたが困っていることに關して、わざわざアドバイスをしてくれたアマデウスさんに向かつて何という言い草ですか》

《あんたもいい加減に姉面をやめなさい、このバーサーカー聖女!!

私がカルデアに来たのはリンクやマスターの力になるためで、天然どものツッコミ役になるためじゃないのよ!!》

《……っ!!

オルタ、あなたという子は本当にっ!!》

《ちよっ、抱き着くな馬鹿!!》

《ちよっとちよっとそこの二人、会議が脱線してるから姉妹喧嘩は向こうでやっておくれ。

とは言うものの……そもそも話が横に逸れたのは、いくら考えても名案が浮かんでこなかったからなんだよねえ》

「……………ダメだー、やっぱり何も浮かばない!!

ねえ王様、簡単なでも分かり辛いのもいいから何かヒントくれなかな!!」

個人名を示したものではなかったその単語が、誰を示しているものなのかに關しては、彼らが普段交わしているやり取りを知っている一同の中に惑う者はいなかった。

彼らが抱いた躊躇いと疑問は、それとは別のところから生じたもの。

立香が言う『王様』も……ギルガメッシュ自身も同じことを考えたらしく、自身のマスターからの問いかけに対するものとは到底思えないような笑みを浮かべながら返した。

《リックカよ、我はその問いに關しては既に明確な答えを返した筈だが？

よもやそれを忘れ、王の中の王である我を無暗に煩わせたというのならば、その無礼はもはや刎頸に値しようぞ》

底冷えするようなその声は、それを直接向けられた訳ではない、運悪く居合わせってしまっただけの者達にも怖氣を味わせた。

強くて恐ろしくて残酷な人なのはわかっていても、それと同時に、普段はそれをつい忘れさせるくらいに残念で愉快な人なのに……時折こうやって、彼が『英雄王ギルガメッシュ』であることの意味と事実を、前触れなく突き付けてくるのが本当に性質が悪い。

カルデアのオペレーションルームを一瞬で凍り付かせた怒気を、余波ではなくまともにぶつけられてしまった立香は、反射的に竦み上がってしまった体と思考で、それでも懸命に自身の発言の意図を、前のやり取りを忘れてギルガメッシュに二度手間を負わせた訳ではないのだということを語り出した。

「いっ……いやいやいや違います、忘れてないしちゃんと別の意味がありました!!
あの時王様は、『民のご機嫌とりなんてやったことも考えたこともない』って感じのことを言っていましたよね!!

それはつまり、別の取り方をすると敢えてやったり考えたりしなかっただけで、『どんなことが民のご機嫌取りになるのか』ということ自体はちゃんと分かっているじゃないですか!?

ドンピシャで答えを教えてくださいとまでは言いませんが、話を先に進めるためのきっかけとして、ほんの少しヒントを貰えればと思います!!」

カルデアのオペレーションルームと、殺風景なエトナ火山の一角に再びの、ギルガメッシュの怒気に当てられた際のものとは全く違う類の沈黙が満ちる。

決して痛々しい、もしくは寒々しいものではなかったけれど、誰かが何かをしななければこのまま延々と続いてしまいそうだったそれを遮ったのは、心なしか若干震えているように思えるギルガメッシュの声だった。

《……………仮に、貴様の想定通りであったとして。

我がそれを、わざわざ我個人の手間と時間を費やしてまで教えてやる必要がどこにある?》

「リンク自らが、『ゼルダの伝説』の本には書かれていなかった裏話を語ってくれる機会はどうですか?」

《よかろう、乗った!!》

「ちょっ、おいこら立香!!

その類いの話をされるのを俺が嫌がっていることを、分かっているながら何を勝手に!!」

「ごめんリンク、俺には王様を納得させられるような手札が他に無い!!」

「……………あーもう仕方ない、貸しひとつだからな!!」

まるでグーとチョキとパー、もしくは蛇と蛙と蛞蝓のような関係性とやり取りを、立香とリンクを交えながら繰り広げたギルガメッシュは、周囲を全て凍り付かせそうな怒気から一転した気持ち悪い程の上機嫌を窺わせながら、彼自身が統治において生かすことは全く無かったという『王』としての知識と見解の一端を語り始めた。

《王として、ひとつ断言しておこう。

物事の裏や真実をあまり深く考えず、すぐ目の前の分かりやすい利やあからさまな上手い話にあっさりと飛びつく……………浅はかで短慮、あまりにも愚かしい、それが

『一般市民』というものだとな』

「あゝ、何かそれ分かる……」

《立香君!?!》

王にとって庇護しなければいけない存在である筈の民を容赦なくこき下ろす、ギルガメッシュの言い分と考えに不快感と反抗を抱き、彼の言う『一般市民』の括りに入るであろう立香がどんな気持ちでそれを聞いていることかと心配した者達は、その当の立香がギルガメッシュの言い分に賛同する素振りを見せたことに目を剥いた。

彼らが上げた驚愕の声と、ギルガメッシュが流石の肺活量で響かせる大爆笑の中で、少しだけ戸惑いながらも立香は、自身がそう思った理由を口にした。

「ずっと先のことや現実を考えて、地味だったりお金がかかったとしても確かな仕事をこなす真面目で有能な人よりも、結果がすぐに出るとか派手だとか目に見えて分かりやすい活躍をしたり、人付き合いが上手かったりするだけの人のの方が好かれ

たり評価されるなんて話は、現代の日本でもよく聞いたよ。

……そっか、王様が『民のご機嫌取りはしない』って言ったのはそういう意味だったんだ。

一般市民だって、子供の進学とか老後のこととか考えて貯金とか資産運用とかしてるのに、もっと大きなお金や人を動かさなきゃいけない王様や政治家が、今この時だけ国民に喜ばれればいい、支持されればいいなんて政治をしてたら、100年どころか10年後には国が無くなってそう。

それだったらもういつそのこと、『難しいことを考えられないし理解もできないなら黙って王の言うことを聞いておけ』ってなるのは分かる気がする」

《その口を閉じよりツカ、民が王の真意を知ることの意味はない。

誰に理解されようと誤解されようと、王の行く道と為すことは変わらぬのだから
な》

「……はい。

出過ぎた真似をしました、すみません」

《赦す、我は寛大故にな。

……もう十分であろう、随分と口が滑ってしまった》

「はい王様、ご教授ありがとうございます」

《ちよっと待って、まだ話し始めたばかりだった気がするんだけど!?!》

戸惑い交じりで上擦ったロマニの声に対して立香が返したのは、自らが導き出した答えに対する自信に満ちた笑顔だった。

「大丈夫だよドクター、王様の言う通り今ので十分。

要するに今までの俺達は、平和を少しでも長続きさせなきゃとか、その為にどんな政策をすればいいのかとか、深く、そして難しく考えすぎていたんだ。

一般市民の人達を楽しませ、喜んでもらうには、もっと簡単に単純で分かりやすい話で良かったんだよ」

「それで、その具体案は浮かんでるのか?」

「もちろん!」

俺達のサポートは必須になるけれど、ネロ陛下は間違いなく大活躍、ローマ市民

達はそれに夢中になること請け合いだ。

名付けて……『水戸のご老公もしくは縮緬問屋のご隠居さま大作戦』!!」

握った拳を振り上げながら、青い瞳をきらきらと輝かせながら自信満々に宣言した作戦名が示すものを、即座に理解できた者は数えられる程度で。

尋ねたりリンクも含めて、殆どの者が頭の斜め上に『?』を浮かべている状況で、それでも僅かに存在していたその数人の中に、何故かギルガメッシュも含まれていたらしく。

今にも玉座から落ちて、腹を抱えながら転げまわりそんな笑い声が、高々といつまでも響いていた。

紅のアン王女

作戦を決め、サークルの設置も無事に終わらせたカルデア一同が、ローマへと帰還して数日後。

首都周辺を封鎖していた部隊が撤退し、新たな戦力も加わったことで発足した大規模な遠征計画の準備に、上層部や兵士達が揃って追われている状況で。

それら全ての最終的な意思と決断を担っている、休む間もなく忙しい状況にある筈の皇帝ネロの姿が、華やかかつ賑やかなローマ市街の一角にあった。

民と直に接することが多く、その顔や装いを広く知られているネロがそんなところに居ようものなら、いつもならばたちまち気付かれて人混みができるような事態

になつていたのだろうけれど。

自分は正確かにここに居るというのに、人々の目線や意識を集められないことに一番驚き、新鮮な気持ちに味わわされていたのは当の本人だった。

「……凄いな、本当に誰も余に気付けぬのか」

「メディアさ……カルデアの中でも、そういうものの製作が特に上手い人の自信作ですからね」

「うむうむ、単なる装飾品と見ても十分に美しく繊細な造りが気に入った。

『カルデア』からの心を尽くした献上の品、確かに頂戴したぞ。

……それではこれからどこに行こうか、少しでも効率的に動かねば。

何しろ休みは今日だけだからな、明日からはまたガリア遠征に向けて計画を詰めていかねばならぬ」

相当気に入ったのか、胸元を彩るブローチ型の、メディアが得意の道具作成スキルで作成した隠蔽効果付きの魔術礼装を指先でなぞりながらそう言ったネロは、彼

女自身がこの日を本当に楽しみにしていたことを伺わせるような笑みを浮かべている。

目尻から頬にかけてをほんのりと赤く染め、いつもの華やかなものとは違うはにかむような笑い方をする彼女に、自身の頬や頭までもが赤く熱くなってくるのを、立香は見えないながらも自覚していた。

「どうしたその顔は、今更照れておるのか？」

余の命を救った報奨として、宝や地位や名誉ではなく、余と過ごす個人的な一日が欲しいと言ったのはそなたであろうに」

「ああああああっ!!」

やめて下さい、追い打ちかけないで!!」

自身の発言が、事情を知らないどころか知っている者が聞いてもデートのお誘いでしかなかったことに口にしてから気付いてしまい、今の今まで必死に堪えていた恥ずかしさと居た堪れなさをつつかれてしまった立香が絶叫と共に蹲る。

その反応もそうだけれど、今のネロは何よりも、突然の奇声に驚いて振り返った人達の目には今の自分達がお忍びの皇帝と従者ではなく、何の変哲もない少年と少女がじゃれ合っているようにしか見えないという事実が堪らなく愉快だった。

「いつまでそうしているのだ、時間が無いと言っておろうが。」

ほら行くぞ、余のおススメの店を回る感じで良いな」

「ああ、それは勿論陛下にお任せします」

「いかんいかん、何をやっておるのだ貴様は」

「えっ、何がです？」

「余らは今お忍びなのだぞ、言葉遣いを直さねば気付かれてしまうかもしれないではないか。」

マッシュやリンクを相手にしているように話すといい、余が赦す」

「……………そう、だね

こんな感じでいいかな、ネロ」

「うむ、完璧だな。」

では行くぞリツカ、まずは腹ごしらえで英気を養うのだ！」

「ちよっ、分かったからいきなり引つ張らないで！」

急にバランスを崩されて一瞬足がもつれながらも何とか体勢を整えて、自身の手を引く歩みの速さに苦笑しながら追いつく立香と、皇帝陛下であると気づいていない筈なのにも関わらず、すれ違う人が思わず振り返ってしまうような、彼女自身の素の魅力に溢れた華の笑顔を振り撒くネロ。

そんな微笑ましい二人の、片方は知らなかったし、片方はすっかり忘れていた。自分達の発言や行動は、少し離れた所の物陰や、時間と空間を隔てた先のカルデアのオペレーションルームから、余さず見守られていたことを。

「……ドクター、ダ・ヴィンチちゃん、ここからは俺の現場判断で動く。」

最終的には例の流れに持っていくようにするけど、それまでは少しでも、ネロ陛下に休日を楽しんでもらいたいからな」

《こっちは構わないよ。

どんな想定外の事態が起こっても、リンク君なら咄嗟に対応出来るだろうしね」
「女性のエスコートまで出来るなんて、流石はセンパイですね！」

《うーん……私としてはそこで、マシユには感心するのではなく、焼きもちを焼いてもらいたかったところなんだけど。

気持ちが無いわけではなさそうだけど、この間のサイドカーでの件といい、まだまだ前途多難かなあ》

《……………あっ!!》

《うわっ、びっくりした!!

どうしたの、いきなり声を上げて!!》

《さっきから、何か既視感がすると思ったら。

シチュエーションや展開は微妙に違うけれど、これぞ正しく『ローマの休日』!!》
オペレーターの一人が思わずといった様子で叫んだ内容に、居合わせた者達が思わず共有してしまった数秒の沈黙の後、驚嘆の声と手のひらに拳を軽く打った音が人数分重なった。

少し短かったのですが、更新の間が開いてしまっていたので早めにあげました。
ポケモンをプレイする合間で、また少し時間がかかりそうですが、こちらも楽しいので頑張っています。

伝説が蘇る時

色々忙しい中で辛うじて確保した束の間の休日は、ネロが店先の商品をいつもの癖で会計前に手に取った上に、財布を忘れていたせいで泥棒と疑われかけ、涙目の彼女を背に庇う立香が慌てて支払いを済ませるというちょっとしたトラブルから始まってしまった。

しかし、そうやって醜態を晒した上にまたもや助けられてしまったということがかえって吹っ切れるきっかけになったらしい。

折角の外出なのに、これでは食事も買い物も出来ないと落ち込んでしまっていたネロは、『自分の方から誘ったんだから、全部払うから気にしないで』と笑いなが

ら言った立香に素直に甘えて、曇ってしまった瞳と笑顔を再び輝かせ、苦笑する立香の手を引きながら改めて露店巡りを楽しんでいた。

立香の異様な気前の良さをおかしいと思えないまま、そうやって休日を満喫していた二人の耳に、人込みと喧騒の向こう側から思いがけず聞き知った声が飛んできた。

「おい、やめろ！」

「何をしているのですか！」

「……あの声は、リンクとマシュ？」

「行くぞリッカ、どうやら只事ではなさそうだ」

言うや否や殆ど条件反射のように駆け出したネロに続き、共に掻き分けた人込みの最前列で目の当たりにしたのは、肌のあちこちを擦りむいた見るからに痛々しい様子で石畳に倒れた女性と、その傍らに膝をつく男性。

そして、啞然として口が開きっぱなしになっている彼らを背に庇うマシュと、彼

女達を含めた周囲にいる全ての者の視線と注目を一身に集めている、自分より遥かに優れた体格の男の丸太のような腕を、片手で軽々と締め上げるリンクの姿だった。更に言えば彼の足元には、自分達が声を聞いて駆けつけてくるまでのほんの僅かな時間で伸されてしまったらしい、明らかに柄が悪そうな数人の男達が呻き声を上げながら転がっていた。

立香とは別行動で買い出しを行っていたというリンク達が、思いがけない合流に氣を取られたほんの一瞬の隙に悪漢達を逃がしてしまった後。

助けた男女からの、是非ともお礼がしたいと、宜しければお友達も一緒にという誘いを快く受けた一同は、そこから程近いところにあった劇場へと案内され、彼らが所属する劇団の名を知ったネロは思わずといった様子で声を上げた。

何でも、劇団としての規模こそ小さいながらも、だからこそ団員達の信頼と結束は固く、少数精鋭の強みでもって数々の名演をこなしてきた実績があるそうだ。

拘りの劇場を自ら設計し、出演すらも果たす程に歌や演劇を好んでいるというネロは、皇帝相手ということで無暗に畏まっていけない、素のままの劇団員達と話せるというこの上ない機会に高揚していたのだけだ。

その喜びは、皇帝の耳にまで届くほどの評判を得ていたとは思えないほどに寂れている劇場、纏う雰囲気や表情からすっかり覇気が失せてしまっている団員達などの、あまりにも不穏な要素の数々によって敢え無く萎れてしまった。

「……一体何があったというのだ。

構うことはない、胸の淀みを吐き出すつもりで余に話してみよ」

魔術礼装の効果はあくまで『皇帝ネロの正体に気付けなくする』というだけのもので、相対するだけで自然と心を許してしまうような彼女自身の魅力は欠片も損なわれていない。

仲間を助けてもらった、演劇が好きで自分達のことも知っていたなどの好意的な印象もあって早々に警戒を解いた団員達は、彼らを苛む理不尽な仕打ちについて話してくれた。

「実は少し前に、資金と立場のある方から、色々と支援をするから自分の専

属の劇団にならないかと誘われまして……公演に感銘を受けたとか、応援をしたいとかいうことでしたら、私達も考えたとは思いますが。

感銘どころか公演を観たことは一度も無く、ただ単に評判がいいものを所有したくなっただけの話で、『金を出してやるのだからありがたく思え』『こんなありがたい話をまさか断るまい』と言わんばかりの態度で、明らかにこちらを見下げていて。その上、自分の所有物を好きにして何が悪いという考えが見え透いていて、公演内容や演出にまで口出しされるのが目に見えていたので、団の総意で断ったんです」

「そうしたらそのすぐ後から、公演を告知する掲示を剥がされたり、劇場を汚されたり、悪意ある噂を流されたりといった、あからさまな嫌がらせが始まったのです。実力でここまでやってきたのだという矜持と、馴染みの方々の応援を支えに何とか頑張ってきましたが。

まさか、団員の身が直接危険に晒されるなんて……いくら何でも、そこまでしてくるだなんて」

「……実は私達は、嫌がらせなどには屈しないと、これからも良い公演を続けていくという意思を示すために企画された特別公演で、共に主役を務めることになって

いました」

「その特別公演とは、いつ行われるものなのだ？」

「……今日です」

「今日お!？」

「出来るのですか、怪我をされているのに!？」

「出演自体は、無理をすれば……しかしお客さんが、自分自身が満足出来るような演技はとても無理です。」

劇団の意思と決意を示すための特別な公演だからって、演目も敢えて難しく特別なものにして、皆で一生懸命に頑張って、何とか上演可能なまでに仕上げたのに……」

「一生懸命に奮い立っていた皆も、流石に堪えてしまったようです」

「……あの、まさか、公演を中止されるおつもりなのですか？」

「主役級の二人が共にこの有り様では、仕方ありません」

「そんな、どうして！」

理想通りとは、完璧とはいかないとしてもいいじゃないですか！

お客さん達も、皆さんの公演を楽しみにされていますよー!」

「だからこそです、自分達ですら満足出来ないようなものをお見せするわけにはいきません。」

……何より私達自身が、そんな適当な真似であの演目を半端なものにしたくはない。

いつかはやってみたかったけれど、皆の理想があまりに高かったために簡単には手が出せず……こんな事態になってようやく、皆で奮い立とうと、あの方の『勇氣』を公演を通じてお借りしようと、そんな思いで上演を決めたというのに」

「……………あゝ、すみません。」

その、『予定されていた演目』というのは、一体何なのですか?」

『ゼルダの伝説』ですけれど」

「逃がすなマッシュ!!」

「はいセンパイ!!」

「ぐえ……!!」

「ちよっ、何をやっているんですか!?!」

「首、首が締まっていますよ!!」

話の途中で何故か急に踵を返した外套の少年は、彼がそんな行動に出ることを見透かしていたかのような反応を見せた少年と少女によって翻った外套の端を掴まれ、紐が結ばれた首元に走り出しかけていた勢いも含めた全体重がかかってしまっていた。

人としては当たり前な咄嗟の判断で、締まる首元へと伸ばされた劇団の女性の手が結び目を解き、それと同時に弾かれたように舞い上がった外套の下から転がり出た光の髪が、居合わせていた全員の目に眩く焼き付いた。

ここにいる全員が、幼い頃から、とある太古の伝説を諳んじられる程に読み込んできた。

目の前にいる彼が、その物語の中から抜け出した存在という訳ではないという、確かである筈の事実が信じられない。

それ程までに彼は完璧だった、心の中で思い描いていた理想像の具現化だった。首が締まった苦しみが未だ尾を引いているらしく、へたり込んだまま咳き込む外

套の……改め、伝説の勇者その人と言われても納得してしまいそうな程に美しい、金の髪と碧い瞳の少年。

彼の仲間である黒い髪と青い瞳の少年が、自分達以外の誰もが言葉を失って立ち尽くしてしまっている微妙な空気に負けず、今にも声を上げて、腹を抱えて笑い出したいのを懸命に堪えているような奇妙な表情で、努めて押さえているような声を出した。

「『勇者リンク』役の代わり……出来るよな、リンク」

「ゲホッ……ちょ、待て、お前それ本気で言って」

「『リンク』だって!？」

まさかその少年は、見た目だけではなく名前まで、あの勇者様と同じなのか!!」
「リンクさんは凄いですよ！」

見た目がお綺麗だけでなく、剣や弓などの戦闘の達人でもあって、正しく伝説の『勇者リンク』その人と称しても構わない程なのです!」

「待ってマッシュ、お前までその流れに乗るのやめて……」

「そ、そういえば……あまりにも衝撃的過ぎて言うのを忘れていたけれど、絡まっていた私達を助けてくれた時に、自分よりもずっと体格のいい大人達をあっという間に倒してしまっていたわ。」

今思えばあれば、大人どころか怖ろしい魔物を相手に、たった一人で立ち向かった勇者様のようなだった」

『ゼルダの伝説』のどの章、その場面を演じることになったとしても大丈夫!!
何たってこいつは、『自分が書いた』くらいの勢いで『伝説』の内容を知ってますからね!!

だよな、リンク!!」

「ですよね、リンクさん!!」

「お願いですほんと待ってほんとと勘弁して下さい!!」

「大人しく諦めるのだリンクよ、もはやそれ以外に手は無いことをそなたも分かっていますよ。」

余も力を貸すぞ、公演というものの力を……劇場とは不可侵の聖域なのだということ、無粋な連中に知らしめてやらねばな!!」

行く道に差し込んだ光明に、再び灯った希望の光に照らされながら、思いがけず加わった新しい仲間達を交えた一同が、立ち塞がる困難を乗り越えるべく握った拳を掲げながら歓声を上げる。

その中心の、特別公演の主役となる筈の少年だけがただ一人、両手と両膝をつきながら打ちひしがれていた事実からは、誰もが努めて意識と視線を逸らしていた。

リンクがやったのは、困っている人達とネロが違和感なく接触できるように場と時間を軽く調整しただけで、ネロが積極的に彼らの話を聞こうとしたことまで含めて、後の展開は全て想定外です。

以下、オマケです。

どこかで入れようとしたけれど上手いタイミングがありませんでした。

「……どうした立香、何か顔がこわいだだだだ!？」

「この勇者様が、またやりやがったな!？」

「またって何のことだよ!!」

「これ、今朝ネロと出かける前にお前から渡されたこの財布!!」

支払いの段階になって初めてこの中身を見た時、俺がどんな気持ちになったと思ってるんだ!!」

「……え、もしかして足りなかった?」

「なわけないだろ、逆だ逆!!」

こっちはお小遣いの一万円を新札で渡されるだけでちよつとテンション上がるよ
うな小市民なんだぞ、袋いっぱい詰まった金貨なんて『わーお金持ちだー』なん
て喜ぶ前にショックで心臓が止まるわ!!

こんだけの大金を用意しておいて何で『足りない』なんて発想になる、何を買う
ことを想定してたんだ!？」

「……………家?」

「買うか馬鹿、どんなシチュエーションでそんなことになるんだよ!!」

「成り行きで」

「もしかしてこれも常識なのか、だとしたらほんとどんだけだハイラル!!」

魔物を倒したり獣を狩ったり、溶岩の大河のすぐ傍で採掘に勤しんだり、競技やゲームに参加して賞金を得たりと、旅の道中では様々な形で収入を得ていた上に、思いがけないところで盛大に出費する機会も多かったために、大金を持ち歩いて平然としている感性を総じて身につけてしまっていた『リンク達』なのでした。

立香の叫びは、ハイラルの一般の人々が聞けば『断じてそんなことはない』と必死に首を横に振るのですが、残念ながら今の彼がそれを知ることとは出来ません。

上演前の舞台袖にて

人のごった返す市場の一角で、通りすがりの男女に絡んだ数名の破落戸が、華奢な少年と少女によって敢え無く撃退されてしまったという驚きの光景と事実が、人々の間でちょっとした話題になった日の夜。

下手をすれば客が離れかねなかったその事件を、逆に宣伝に利用する強かさを土壇場で発揮した団員達の奮闘によって、宵闇に染まる観客席は満員御礼の賑わいを見せている。

開演直前の独特の空気を楽しむ人々の様子を、本番では役者が出入りすることとなる舞台の袖から、ほんの少しだけ身を覗かせながら見る眼差しがあった。

「端から端まで満員だ、宣伝に出た人達頑張ったんだなあ」

「……」

「立香君のアドバイスのおかげよ。」

役者が自分の役に徹しながら宣伝することで、舞台の雰囲気を感じてもらって注目と関心を集めるだなんて、よく思いついたわね」

「……」

「正確には、俺が自分で考えたことじゃないんですけどね。」

俺の故郷に、演劇の天才が仲間やライバルと共に数々の名演を繰り広げるっていう有名な物語があって、その中の一幕なんです」

「……」

「舞台や役者の活躍を描いた物語なんてものがあるの？」

「……」

「少し昔の作品ですけどごく面白いですよ、主人公の天才っぷりに『恐ろしい子っ！』なんて白目を剥きながら慄く描写がネタとしても鉄板で……」

「……………」

「……………マシュ？」

「ひゃいっ！！？」

「大丈夫、ちゃんと息出来てる？」

「だだだ大丈夫れしゅ、何の問題もありまひえん!!」

「……マシュは可愛い後輩で、何事にも誠実で一生懸命なのも分かっているんで、こういうことを言うのは気が引けるんですけど。」

こんな調子なのに舞台に出したりして、本当に大丈夫ですか？」

立香の切実な問いに思わずといった様子で笑みを零したのは、こんなことになって悔しくない筈がないのに、それでも大事な劇団と共に頑張る皆のためにと早々に気持ちを切り替えて、今回に関しては大人しく裏方に回ることにした、リンクとマシュが助けた二人の片割れの女性だった。

「大丈夫よ、その辺りはちゃんと承知の上で考えているから。」

人の心配ばかりしていいの、舞台に出るのは立香君もでしょう」

「……隣でこれだけ緊張されると、逆に気が楽になっちゃいました」

そう言って苦笑いを浮かべた立香は、見た目こそ頑強そうながらも実際には動きやすさを考えて作られている、舞台衣装としての鎧を身につけている。

その隣で全身をガチガチに固めてしまっているのは、衣装こそ平凡な村娘を思わせるものでありながら、その役柄は『魔王復活の儀式の生贄として捧げられる娘』という、登場シーンこそ短いながらも中々に重要なものを任されてしまったマッシュだった。

彼女の登場は物語の冒頭で、開演まではもう間もなくだというのに、落ち着くどころか緊張を募らせている様子のマッシュに、立香の心配と不安もまた募る一方で、そんな立香の耳に、最後の準備に奔走していた団員達の喧騒が不意に途絶え、一瞬の間の後に沸き起こった感嘆の声が聞こえてきた。

思わず振り返ったその目に映ったのは、カルデアでは見る機会が結構あったのに、この特異点に来てからはすっかりご無沙汰となってしまうていた緑色だった。

「……………凄いわ、想像以上よ。」

一瞬、本当に、伝説の勇者様が目の前に現れたんじゃないかって思っちゃった」

「……………なあリンク。」

その服ってもしかして、劇団の方で用意した衣装じゃなくて」

「俺のいつもの仕事着だよ、どうせ同じような格好になるんなら動く際に違和感が無い方でいいだろ」

まだ少しだけ拗ねた様子のリンクが口にしたことは確かにその通りで、用意されていた衣装と比べて差異が見受けられる部分も、サイズの違いを調整する際に少し変えたと説明されれば納得出来る程度のものでしかない……………のだけれど。

過酷な旅や戦闘を想定した生地や造りは、明るいところでよく見れば舞台衣装とは明らかに違うことが見てわかるだろうし。

公演中にそんな細かいところまではまず見られないとしても、伝説の勇者その人が、伝説そのままの姿でそこに居るのだという事実を把握しながら、『本物みたい

だ』と感動する人々の様子を目の当たりにしている身からすれば、何気に胃が痛くなってきたような状況だった。

ため息をつきながらも気持ち切り替えた立香は、団員達が感嘆の声を思わず零したもうひとつの理由に、本物の勇者の緑衣にも気後れすることなくそのすぐ隣に立っていた、今日の演目のもう一人の主役へと改めて向き直った。

「……凄い綺麗だよ、お姫様の衣裳本当に似合ってる」

立香の心からの言葉に対して笑顔ではなく、唇を尖らせて僅かに頬を膨らませる可愛らしい仕草で返したその人は、綺麗に編み込まれていた長い金の髪を背に靡かせ、金の装飾と聖三角の意匠が施された清楚なドレスを纏っている。

それは、名のある英雄に献身を誓わせる程に気高く美しい『姫』や、その叡智によって悩む者や迷う者に道を示す『賢者』といった存在の祖。

『伝説の勇者』と対を為す、『知恵の姫君』こと『ゼルダ』が……その舞台衣装を身に纏ったネロがそこに居た。

「遅い、余の艶姿を見ると同時に褒めぬとは何事か……と、言いたいところではあるのだが。」

今回ばかりは致し方ない、勇者の緑衣を纏ったリンクの姿には余も見惚れてしまった故な。

その遅れは、名演をこなすことによって取り戻すとしよう」

演者としての純粋な実力ならば、常日頃から練習を続けて、場数もこなしている本職の女優の方が、数歩先を行っているのだろうか。

高貴な者として生まれ育ち、皇帝にまで至った身としての誇りと責任……一般人では耐え切れずに潰れてしまいそうなそれを、全て負った上で凛と背を伸ばすネロの在り様そのものが、技術の不足を補って余りある輝きを見せている。

太古の伝説が蘇ったかのような二人を、このままずっと見ていたかったのが一同の本音だったのだけれど、現状はそれを許すものではなかった。

代役であることと、共に主役級であるが故に舞台上では最も多く密接に関わるこ

とを想定し、上演開始のギリギリまで打ち合わせを行なう腹積もりでいた。

そんな二人が満を持して姿を見せたということは、つまりはそういうことだからだ。

「いよいよ上演であるな、余としたことがドキドキしてきたぞ」

「それじゃあ立香、また後で。」

……覚悟してろよ」

「お手柔らかにお願いします。」

……マシュ、ほらマシュ、しっかりして。

始まったらすぐ出番だよ」

「ひゃい、がんばりましゅ。」

センパイから教わったおまじない、手のひらに『人』の字を三回書いて……」

「……………（それは『入る』だということは、今は言わないで置いてあげよう）」

こうして、上手くいっているのかいないのかがいまいち判断し辛い『水戸黄門作

戦』の一環、『ゼルダの伝説』全19章的一幕である『神々のトライフォース』が開演したのであった。

少し前の『活動報告』にて、『作品タイトルを変更しようと思っているのだけけど、どういふのがいいと思いますか?』という類いのことを書きました。

その結果、多くの方が書き込んで下さったタイトル案を、どれも楽しく読ませて頂きました。

『これいいな』と思えるものが多くあったのですが、中でも特に嬉しかったのは、幾つかあった『今のままでいいと思う』というご意見でした。

変更を考えたきっかけが、『タイトルが作品の実質と合っていないので紛らわしい』というご指摘を受けて、『変えた方がいいのかな』と思ったことでしたから。多くの案をいただいた上で恐縮なのですが、その結果思ったことが『今のままでいいならいいか』だったので、タイトルはこのままで行くことにします。

ご意見を下さった多くの方、本当にありがとうございました。

勇者の名演

登場する場所や出番のタイミングの問題から、リンクやネロだけでなくマシュとも別れ、一人で舞台の様子を見守っていた立香の耳に、舞台の端に立つ語り手の、マイクを使用していないとは思えないほどに朗々とした声が聞こえてくる。

劇場全体に響き渡るそれに紛れながら、マナー違反であることは重々承知した上で、目には見えない隣人へと立香は密かに問いかけた。

「ねえドクター、『神々のトライフォース』ってどんな話なの？」

《今からやるんだから見ていればいいじゃないか、何でこのタイミングでわざわざ

ざ聞くんたい》

「客席から観客として普通に見るんならそうするけど、リンクにぶっ飛ばされるだけの脇役とはいえ、これから俺も出るんだから。」

多分俺だけだよ、劇場の関係者側で全体のストーリーを把握出来ないの」

《……まあ確かに、立香君の言い分も尤もだね。

分かった、劇の内容に補完する形で話していこう。

これは『時のオカリナの章』で、過去と未来を行き来する冒険を経たことで、その時間軸における3つの分岐点がハイラルの地に生まれ、それぞれが独自の歴史として流れるようになった後。

『神々のトライフォース』はその内のひとつ……強大な力で『時の勇者』を打ち破りながらも、その後を引き継いだ7人の賢者によって封印された魔王ガノンドロフと、魔王復活の脅威に晒される時代に再び生まれた勇者リンクとの戦いの因縁が、幾度も繰り返されていく中での話だ》

『トライフォース』と、それが眠る聖地が存在していた。

遥か古の地に存在したハイラル王国には、触れた者の願いを叶える黄金の秘宝

しかしある時、聖地は『ガノンドロフ』という盗賊の王によって攻め入られ、トライフォースを手に入れた彼は『魔王ガノン』と化し、悪しき力によってハイラル全土の支配を目論んだ。

そんな彼の野望を食い止めたのは、かつての聖地ごと魔王ガノンを封じるべく行動に出た7人の賢者達であり、彼らが封印を完成させることが出来たのは、『ナイトの一族』の身を賭した奮闘の賜物であった。

激戦の果てに滅亡寸前にまで至ってしまった『ナイトの一族』を始め、多くの犠牲を強いられた『封印戦争』が遙か昔の物語となり、『魔王』への恐怖よりも『黄金の秘宝』を求める欲望の方が人々の間で高まり、封印された聖地を探し求めて旅に出たまま帰らない者達の存在が、王国で問題になっていた頃のこと。

『アグニム』を名乗る謎の司祭が、突如ハイラル城を訪れた。

強大な魔術を操る彼の手によって、ハイラル王は謀殺され、兵士達は彼の忠実な手足となり、ハイラルの城と国は瞬く間に魔の者の手に落ちてしまった。

王家の権限と兵士達を使ってアグニムが行なったのは、かつて魔王を聖地に封じた7人の賢者達の血筋を探すこと。

そうして見つけ出され、城へと連れて来られた娘達は、一人ずつ魔王復活の儀式の生贄として捧げられていった。

……今も、また一人。

城の地下牢と想定され、演出によって実際にそんな雰囲気満ちている舞台上に、力なく座り込んでいる少女が二人。

同じ舞台衣装でも明らかに布から違うと分かるドレスの娘と、丈夫さや利便性の方を重視したと思われる素朴なワンピースの娘。

舞台袖から現れた鎧姿の兵士達が歩み寄ったのは、ワンピースの娘ことマシユの方だった。

座り込んだまま微動だにしなかった……というより出来なかったマシユの肩が、牢の鍵が外される金属音と共に盛大に跳ね上がり、必死で落ち着こうとしているかのような荒い息遣いと共に振り返った彼女の顔色は真っ青で、目尻には涙すら滲んでいた。

「『出る娘、アグニム様がお待ちである』」

『あ、あな、あなたたち……王家につかえる兵士が、こんな真似、を、して、許されるとでも思っているのですか』

賢者の末裔たる娘として、凜と背を伸ばしながら言い放ってやるのがマシュの理想だったのだろうが。

全身をガクガクと震わせ、途切れ途切れのセリフを紡ぐのが精一杯なその姿の前に、立香は劇団の者達がマシュを推した理由を察して感嘆の声を漏らしていた。

「あっ、成る程。

緊張のあまりにガチガチになっているところが上手い具合に、生贄にされかけている女の子が恐怖で恐れ戦いているところに見える」

《マシュ自身は何とかまともに演じようとしているのが、一生懸命に虚勢を張っているところにも見えて尚更だね。

これは見事な采配だ、マシュは可哀想だったけれど》

儀式の生贄として捧げられるために、立香とは反対側の舞台袖へと連れていかれたマシュが、そちら側にいた劇団員達から暖かく迎えられ、強引に連れていった当人である兵士達によって俯く頭を撫でられている光景が見える。

後で自分も声をかけよう、頑張った後輩を褒めてあげようと思いつながらも、今の立香の主な意識と視線は、舞台上に残ったもう一人の少女にあった。

『賢者の末裔の娘』を演じた少女の、まるでこの後本当に生贄に捧げられるかのような名演によって、開演直後の浮かれ気分を霧散させられた観客達の注目が、未だ俯いて表情が窺えない彼女へと一身に向けられている。

素人目にも分かるほどに、とても難しい場面だった。

父を殺され、信じていた兵士達が敵となり、国と城を奪われて王家の誇りを踏み躪られた。

城の地下深くの牢に閉じ込められ、自身と同じく賢者の末裔である娘達が、生贄とされる為に連れていかれる光景をすぐ傍で目の当たりにさせられ、自分も間もなくそれに加わることとなる。

しかも彼女は知っているのだ、儀式の成就是太古の魔王の復活を意味しているこ

とを。

これを、『絶望』以外の何と呼ぶべきか。

果たしてあの少女は、そんな状況にある者をどう表現してみせるのか。

固唾を呑みながら見守る観客達の前で少女が、『ゼルダ姫』が、俯いていた顔をゆっくりと上げる。

観客席へと向けられたその表情は、瞳は、まだ諦めていなかった。

辛い現状に打ちのめされてはいても、その心と魂は、まだ折れてはいなかった。

(……今余には分かるぞ、ゼルダ姫。

どんなに絶望的な状況であろうとも、最期の瞬間まで諦めることは許されぬ。

それが国を統べる者の務めであり、責任であり、誇りであるとな)

追い詰められた状況で、ただ一心に祈りを捧げるという行為は、大抵の場合はただの現実逃避にしかなり得ないだろう。

しかし、賢者の末裔であり、『知恵』のトライフォースの適合者であり、女神ハ

イリアの転生体であるゼルダ姫の場合は違った。

彼女の、それが届くことを心から信じた祈りには、確かな力があつた。

「『助けて、助けて下さい。』

私は、城の地下牢に捕らえられています。

私の名前はゼルダ……6人の生贄が捧げられ、私が最後の一人。

城にやってきた司祭アグニムは、生贄を使い、7賢者の封印を再び開こうとしています。

私は、お城の地下牢の中……助けて………。」

独りきりの地下牢で、誰に聞かれることもなく紡がれた祈りの言葉は、自身の力と運命を未だ知らないまま、自宅のベッドで眠りについていた少年の下へと届くこととなる。

場面と状況の転換の為に一旦消され、再び灯された明かりの中に『彼』の姿が浮かび上がった瞬間に、客席全体がどよめいたのを立香は確かに認識した。

あれだけ嫌がっていたのに、今だってもの凄く嫌な筈なのに、色々と諦めた上でスイッチを切り替えた彼は見事に、舞台上でかつての『自分』に成り切っている。不思議な夢によって眠りを妨げられ、寝ぼけ眼で身を起こした彼は、自分と同じく変な時間に目を覚ましていた者の存在に気付いて、半端だった意識を一気に覚醒させた。

『リンク、起きてしまったのか』

『……叔父さん、どうしたの？』

こんな夜中に剣なんか持って……外も、凄雨なのに』

『……お前が心配することは無い。

わしはちょっと出かけてくる、朝までには戻るからな。

……絶対に、家の外に出てはいかんぞ』

『あつ、叔父さん!?!』

リンクが『叔父』と呼んだ男性は、強い口調とは裏腹の優しい手つきで彼の頭を

撫でると、何事かを尋ねたがっているリンクの手と眼差しを振り切るように出かけてしまった。

リンクにとってただ一人の肉親であり、家族である叔父が、剣の達人だということとは知っている。

頭の中の冷静な部分と叔父への信頼が、彼の言う通りにすべきだと、大人しく帰りを待っているべきだと告げている……のだけれど。

先ほど見たばかりの不思議な夢が、助けを求める少女の声が、それに応えなければという自分自身の魂から込み上げる衝動が、早く早くと急ぎ立ててくる。

気づけばリンクは、種火が無くても自身の魔力の消費によって火を灯せるという不思議なカンテラのみを引っ掴み、叔父の後を追って、降り頻る雨の中へと駆け出していった。

騒めく木々の枝葉と大粒の雨によって霞みながらも、夜の闇の中にその雄大な影をしっかりと浮かび上がらせている、彼方のハイラル城へと向けて。

「さ、《立香君、もうすぐ出番だよ》」

ゴクリと喉を鳴らせる立香の視界、袖口から見守る舞台上では、『神々のトライフォース』冒頭における名シーンのひとつが繰り広げられている。

ハイラル城に辿り着いたはいいものの、閉ざされた門と厳重な警戒に行く手を阻まれてしまったリンクは、ゼルダ姫の導きによって隠された地下通路を発見し、そこから城内への侵入を試みた。

……その途中で、見つけてしまったのだ。

自分と同じく姫の救出を試みたものの力が及ばず、深手を負って倒れてしまった叔父の姿を。

最後の力を振り絞った叔父から、『巻き込みたくなかった』という家族としての思いやりと、『ゼルダ姫をお救いするのだ』という遺言を、形見の品となってしまう武具と共に受け取ったリンクは、家族の死を悼むどころか別れを惜しむことすら出来ない状況から、振り切るように走り出した。

ただ漠然と、『謎の声の少女を助けなければ』という衝動に突き動かされていた、今この瞬間までは何の特別も変哲も無かった少年が、大切な家族を奪われたことに

よって王国と人々の平和を蝕むものの存在を知り、こんな辛く悲しいことはこれ以上は御免だと、守るために立ち向かわなければと、『勇氣ある者』としての最初の輝きを發揮した瞬間であった。

先程ロマニにも話していたように、自分が只の観客だったならば、席に座って見ている者達に交じりながら、目の前で繰り広げられていく伝説の物語にこのまま見入っていたのだらうけれど。

そうはいかないことをきちんと理解していた立香は、小道具である槍を握り締め、自分と同じく兵士の舞台衣装を纏った者達が近づいてくるのを認識しながら、最後の覚悟を決めた。

地下牢、リンクの家、地下通路と移り変わり、今はハイラル城内を想定している舞台に立つリンクの前に、侵入者の存在に気付いた兵士達が現れる。

その最前列、勇者リンクの真ん前に、ど素人である筈の立香が堂々と陣取っているという謎の状況を作り出したのは、上演前に色々と調整していた中でのとある出来事がきっかけだった。

『ゼルダの伝説』を公演するにあたって決して外すことが出来ない場面や描写とい

うものが、暗黙のお約束として幾つか存在しているという。

その内のひとつが『勇者リンクの戦闘シーン』であり、現代で言うところのアクション的な演技や演出の実績があまり無かったこの劇団が、『ゼルダの伝説』の公演になかなか踏み切れずにいた一番の理由だったそうだ。

兵士としての実戦経験があった団員に教えを請いながら、皆で練習を行なったというそれはあくまで、お約束をこなしたと何とか認められるだろうという程度のものであって。

舞台と演技に関しては門外漢だとしても、戦闘や武器の扱いは世界どころか史上最高レベルであり、その日初めてちゃんとした武器を手にしたような新兵達の相手も仕事の一環だったリンクとしては、口を出さずにはいられなかったようだった。魔物を倒したり、実際の戦場で戦えるまではいかなくても、舞台上で観客達を驚かせられる程度には形になるように指導しようとしたリンクは、ここが自分が戦術顧問として働いていたハイラルではないこと、相手の人達が自分の正体を知らないことによる不自由と弊害を、次の瞬間には思い知ることとなった。

『理論を詰めるよりは、実践の中で体で覚えた方が早くて確實そうなので。

ちよつと殺す気……まではいなくても、本気でぶつ飛ばすつもりで、思いつき
りかかってきてもらえませんか？

時間も無いし、全員一斉にお願いします』

『なっ……馬鹿なことを言うんじゃない、怪我をしたらどうするんだ!!』

『ちゃんと捌くから大丈夫ですよ』

『……君が強いことと、うちの連中を助けてくれたことは確かに聞いているが。

だとしても、大勢を一人で、一度に纏めて相手にするなんて無茶だろう』

『……ああ、怪我をするのは俺の方だって思われてるんですね。

うゝん、参ったなあ……』

冗談や出まかせ、大言壮語などではなく本気で問題ないのだけれど、自分の正体を秘めたまま、その辺りをどう説明すれば納得してもらえるのかが分からない。

これは変に言葉を尽くすよりも一度見てもらった方が早いと、この事態を打開するための答えを経験則から導き出したリンクは、今この場にいる中で自分の正体と

実力を唯一正確に把握している者へと声をかけた。

『なあ立香、本当に大丈夫だってことをお前なら分かってるだろ？』

ちよつと見本としてかかってきてくれ、動きは派手でも怪我はしないように上手くやるから』

『……………この機に乗じてさっきの仕返しとかは』

『しないから早く』

『笑顔が怖いんですけど!?!』

そうして、促されるままに適当な小道具の武器で襲いかかった結果、団員達の固定観念を我が身と共に宙高く盛大に吹っ飛ばした立香は、あの見事な飛びっぷりを舞台上で見せないのは勿体ないという団員達の推しによって、『勇者リンクに真っ先に挑んで盛大に返り討ちにされる兵士』という、ある意味での大役を担う羽目になったのであった。

『いや、何でだよ!!』

敵役のやられっぷりが主人公の格好良さを際立たせるのは分かるけど、それ別に素人の俺がわざわざやらなくてもよくないか!?’

『……いや、それが、お前じゃないと駄目なんだよ』

『だから何で!!』

『………あれだけ見事に吹っ飛びながら、怪我也痛みもなく無事で済んだのは、お前が俺のことを心から信じてくれて、下手に逃げたり構えたりしなかったおかげで、動きや力の流れが全部完璧に俺の想定通りになったからだから』

『………』

『他の人だと、絶対にこうはいかない』

『………あ、そう。』

『そういう理由なら、仕方ない、かな』

そんな流れで舞台に立った立香は、舞台袖にそのまま飛び込むほどの見事な吹っ飛び様をもって最大の見せ場から退場までを一気にこなし、勇者リンクの初陣の相手という重要な役柄を立派に成し遂げて。

それを機に、目の前の少年を全力で排除すべき難敵と認識した兵士達と、勇者の魂に加えてとある血筋を受け継ぐ者としての力の片鱗を開花させたリンクとの、本格的な戦闘シーンが始まった。

非常に短い間、しかもそのことを知らないとは言え、勇者リンク直々の指導を受けた彼らの動きは格段に良くなっており、このまま教えを忘れることなく修練を積み、新たな強みのひとつとなって劇団を一層盛り立てていくことだろう。

劇団の仲間達にそんな希望を、観客達には思わず歓声を上げるような高揚を与え、立ち塞がる兵士達を退かせながら城の大広間を突破したリンクは、玉座の間へと続く絢爛な大扉ではなく、ぽっかりと空ろな口を開けているかのような地下への階段へと飛び込んだ。

遙か昔、実際には孤独なものだったであろう戦いと道のりを、今は手に汗を握り、固唾を呑む多くの者達に見守られながら進んだ先、遙か地下深くの暗く冷たい地下牢にて、ようやく対面を果たしたリンクとゼルダ。

初めて会った筈なのになぜか懐かしく、祈りの声が彼に届いたのは、顔も名前も知らない少女を助けなければと思ったのは運命だったのだと、そう感じたのは当然

のこと。

なぜならこれは二人にとって、幾度目かの出会いであり、そして再会なのだから。

《……………うん、うん。

どの章、どんな媒体であっても、勇者リンクとゼルダ姫の出会いのシーンはやっぱり格別だねえ》

「ねえドクター、この後はどうなるの？

俺の出番とはもう関係なかったし、皆忙しそうだったしで、聞きそびれちゃったんだよね」

《劇団独自の演出が無ければ、地下水路を利用した非常用の抜け道の存在をゼルダ姫から教えてもらい、そこを利用して城を脱出することになる。

そして、信頼のおける人にゼルダ姫を匿ってもらった勇者リンクは、神官アグニムの魔王復活の野望を阻止して王国の平和を取り戻す為に、ハイラル中を冒険することになるのさ》

「……俺は、演劇のノウハウやお約束に関しては本当に素人だから、何とも判断し

辛いんだけど。

勇者様とお姫様が最初の語らいをしている、見るからに大事なシーンで、世界観ぶち壊しの連中がいきなり乱入してくるっていうのは、演出としてアリだと思う？

「

《僕だって専門ではないけれど、そんなのは言語道断だってことくらいは分かるよ!?!》

「だ、だよね。

それじゃあ、目の前のこれは一体……」

「センパイ、ドクター、大変です!!

人手と意識が上演に集中して、セキュリティが甘くなった隙をつかれました!!

あの人達、先だって私とリンクさんが撃退した筈の、劇団に対して嫌がらせと妨害工作を行っていた人達です!!」

「なっ……ええええっ!!!?!」

「考えが甘かったわ、まさか本番の舞台まで壊そうとしてくるだなんて……。

どうしましょう、リンク君達とお客さんが危ない!!」

先程の兵士達が手にしていたものとは刃の輝きが明らかに違う武器を携え、劇の展開と空気をぶち壊しながら、舞台上へと乱入してきた破落戸達。

それと同じような連中によって劇場の出入り口を塞がれ、武器を直接突きつけられながら脅されたことで、当初こそ立香のように半ば現実逃避をしながら演出を疑っていた観客達は、本物の非常事態に巻き込まれたのだということをようやく認識した。

太古の伝説の世界から現実へと、受け入れがたい類いの非日常へと一気に引き戻されて、恐怖と緊張のあまりに声も出せないまま震えることしか出来ない観客達。舞台からは余さず一望出来るその光景を、破落戸の纏め役らしき男は満足そうに見渡すと、いよいよお楽しみの本番だと言わんばかりの笑みを浮かべながら振り返った。

破落戸達の嫌らしい目線を一身に向けられていたのは、勇者様とお姫様の、立派な舞台衣装を纏った少年と少女。

『ゼルダの伝説』という特別な演目の舞台を壊され、例え役者だとしても、勇者り

ンクとゼルダ姫の情けない姿を多くの人に目撃されてしまえば、しぶとく抵抗を続けてきた劇団とはいえ流石に再起は不可能であろう。

勇者役の少年がほんの数時間前の因縁の相手だと気づき、あの時返り討ちに遭ったのは少年が強かったからではなく、自分達が油断していたからだと疑われないまま、個人的な恨みもついでに晴らしてやろうと意気込む彼らでは、気付くことが出来なかった。

少年と少女の強張った表情と、力が込められて震える拳の源は、恐怖や絶望などではなかったことに。

『神々のトライフォース』は、ニンテンドースイッチOnlineのスーファミ版でプレイ可能です。

ゼルダシリーズ、及びスーファミソフトの中でも初期の作品だとは思えないくらいにクオリティが高く、今プレイしても本当に面白かったので、スイッチを持って

いる方で機会があれば是非ともプレイしてみてください。

これにて一件落着

「『お前達、アグニム様に雇われた者だな!!

増援とはありがたい、子供とは思えないような強さの持ち主で手こずっていたのだ!!』」

「……はっ？」

「『娘を取り返せ、大事な生贄だぞ!!』」

騒然としていた劇場中に突如響いた、破落戸達が乱入してきた時とは180度違う意味で場の空気をぶち壊す発言に、その場に居合わせていた全員が、一瞬頭の中

を空白にしてしまった。

声の出所へと思わず向けた視界に飛び込んできたのは、城の兵士役としての鎧いしやうを身につけた、黒い髪と青い瞳の異国の少年。

観客も破落戸も、劇場の者達でさえ察しきれずに呆けてしまっていた、彼の行動と発言の意図と意味に気付いて間髪入れずに追隨した者が、舞台上に二人ほど存在していた。

『『アグニム……兵士達を操り人形としただけでは飽き足らず、由緒正しきハイラルの王城に、あのような者達を踏み入らせるだなんて』』

『『誰であろうと関係ない、命を軽んじるような奴らに姫を渡すものか!!』』

息を呑みながら、思わずといった様子で口元に手を伸ばした姫と、数の暴力を前にしながら一時たりとも怯むことなく、勇ましい宣言と共に改めて剣を構えた勇者。流石にここまでされれば、彼らの思惑を察するには十分だった。

公演の成否どころか、自分達の命までもが危険に晒されている筈のこの状況で、

尚も彼らは舞台を続けようとしているのだ。

諦めずに頑張りさえすればどうにかなる、どうにか出来る……『その程度』の障害に過ぎないと思われていることを認識した破落戸達の頭に、瞬間的に血が上がった。緑の衣と、トライフォースの紋章が刻まれたドレスを身に纏ったことで、自分達が本当に伝説の勇者と姫になったつもりでいるのだろうか。

そんな苛立ちと激昂のままに、自分達でも認めざるを得ない程に外見だけは完璧に勇者となっていた少年へと向けて、破落戸達を纏めていた男は重々しく武骨な鈍器を思いっきり振りかぶった。

「ガキ共が、調子に乗りやがって!!

てめえが勇者サマだっつーんなら、望み通り全力でぶっ潰してやr」

攻撃的で野蛮な発言は、最後まで紡がれることは無かった。

次の瞬間には自身の頭をかち割りそんな攻撃を前にしても怯むことなく、冷静な思考と判断力で以ってそれをかわした少年が、大きく身を振りながらカウンターで

繰り出した靴底が破落戸の顔の真ん中に減り込み、彼より遥かに大きく重い筈の体を敢え無く吹っ飛ばす。

彼が実は公演に協力する立場の者だった、そんな絶対にありえない筈のことが現実味を帯びそうな事態に呆気にとられた一同は、次の瞬間、これは演劇ではなく現実なのだと思えるしかない光景を前に肝と背筋を竦み上がらせた。

勇者役の少年に吹っ飛ばされた衝撃で、破落戸の手から離れて宙を舞った武器は、体格と筋力に恵まれたその男が、自身の力を周囲に見せつけるという意味合いも込めて愛用していたもので。

巨大さに見合う重さと威力を恐れと共に知っていた、そのまま落ちて轟音と共に舞台を揺らすと思われていたそれを直前に掴まえ、床ではなく空気を鳴らす盛大な唸りと共に肩へと担ぎ上げてみせた者がいたのだから。

華奢な体躯の美しい少年が、下手をすれば自分の体重よりも勝りそうな重量武器を、その細腕で軽々と振り回す。

確かに目の前で繰り広げられている筈なのに、だからこそまるで夢物語かのような、本当に『伝説』の世界に来てしまったかのような光景は、一度は強引に『現実』

へと引き戻されてしまった観客達を、一時の夢の世界へと再び誘うには十分な力を持っていた。

舞台の床を割りそうな勢いで踏み込み、実際に踏み抜きそうな勢いで力と体重を込めた足を軸に、女性と見紛うほどの美しさを損なうどころかむしろ映えさせるような、腹の底から吐き出す猛々しい雄叫びと共に振り抜いた武器によって、既に腰が引けてしまっていた破落戸達が数人まとめて宙高く吹っ飛ぶ。

今までの流れが演出の一環などではないこと、乱入してきた破落戸達が本物のならず者であったことなど、実際には全てをきちんと承知の上で、それでも敢えて浸った夢の中で一同は、勇者リンクの痛快な活躍を讃える盛大な歓声を劇場中に轟かせた。

しかしその高揚は、決して長続き出来るものではなかった。

破落戸達は、演目をメチャクチャにする以外でも劇場の信用を失墜させる方法を考えて、観客席にまでかなりの人員を配置させていたのだから。

舞台上の演出を疑わせる見事な勢いで、仲間達がぶっ飛ばされた光景を前に一時呆けてしまっているものの、程なく気を取り直して、舞台上の勇者ではなく手近

な観客へと向けてその手の得物を振り上げることは容易く予想が出来た。

「リンクさん、これを!!」

団員達と、わが身に迫る危機を一足先に意識した一部の観客達の思考を割りながら、先程までの震えような嘘のようなマシユの声が力強く響いた。

デミ・サーヴァントとしての臂力で、舞台上の虚空に大きく弧を描きながら投げられたものが、スツと掲げたリンクの手まで、まるで全てが最初から想定されていた演出だったかのような見事な狙いで届けられる。

演目で使用する小道具として用意され、待っていた出演を想定を遙かに上回る形とタイミングで果たしたそれは、劇団の拘りで実際に放つことが出来る程度には作りこまれていた弓矢だった。

ほんの一瞬の見事な手際で矢筒を身につけ、軽く引いた弦の具合を体で確かめたリンクは、その場で構えるか、それとも観客席へと駆け出すかと思われた予想のどれをも裏切った。

身を翻し、向かう先など無い筈の壁へと向けて、自身こそが放たれた矢であるかのような勢いで駆け出し、その勢いを全く緩めることのないまま床の延長で壁を蹴ったリンクは、その身を後ろではなく上へと向けて跳ね上げた。

ほぼ平面であるはずの壁に存在していた僅かな隆起を巧みに捉まえ、ほんの数歩で頭上高く文字通り駆け上がったリンクは、両足を使用した最後のひと蹴りで身を翻した虚空にて、あくまで舞台の小道具である弓を壊さないギリギリのところを見極めた絶妙な力加減で引き絞る。

次の瞬間、その場に居合わせていた全ての者が、今の世に蘇った『伝説』の真の一端を目の当たりにした。

勇者リンクが弓の達人でもあることを物語る逸話のひとつとして、高所からの落下中という、踏ん張りが利かずにろくな力が込められない筈の困難な状況、地に降りるまでのほんの僅かな猶予の中で、位置の離れた複数の的を瞬間的に射抜いてみせたというものがある。

そんな、弓を扱う者はもちろん素人でさえ十分に察せられる程の、実際に出来る者がいるとは今の今まで到底思えなかった伝説の中の達人技が、目の前で確かに再

演された。

劇団に対する人質であり、此度の事態の目撃者兼証言者となるであろう観客達を一人たりとも逃がさない為に、破落戸達は、的は、観客席に広く散開していた。

その全てをリンクは、床に着地するまでの瞬きの間に、大して力が込められない小道具の弓矢であるのを良いことに、急所の眉間を容赦なく撃ち抜いて一発で昏倒させてやったのだ。

観客席のそこかしこで力なく倒れ伏した破落戸達と、数メートル落下した分の着地を難なく決めたリンクの姿を呆然としたまま認識し、数拍分の間を置いた後に、観客席だけでなく舞台袖からも、爆発したような歓声が沸き起こった。

ふうと軽く息をつき、歓声に応えようとしたリンクの動きは、途中で妨げられた。視界の端で動くものを捉えたリンクは瞬時に反応し、一瞬で矢を番えて引き絞った弓を、不穏な動きを見せた影へと向けて構えたのだけれど。

悪かったのは位置か、それとも間か……対象を捉えたと同時に放たれてもおかしくはなかった矢は、その寸前でぴたりと静止した。

鼻と口から血を垂らし、目を血走らせ、息を荒く吐きながら、怒りと屈辱を糧に

遠のきかけていた意識を何とか繋いだ破落戸の男。

少女の細い手足や首程度ならば軽くへし折ることが出来そうなその両腕が、ゼルダ姫の衣装を纏ったネロを捕まえ、リンクに対して見せつけるかのように、自身の身を守る盾とするかのように、その華奢な体を押し出していたのだから。

（しまった、演目の一環だつてことを意識して手加減しすぎた）

歓声から一転した悲鳴を集中した意識の端で捉えながら、自身の認識と行動の甘さに内心で舌を鳴らしたリンクだつたけれど。

その後悔は、躊躇いは一瞬だつた、傍から見ていた者ではその存在に気づけなかった程に。

こいつの命が惜しければ……そんな類の言葉を吐こうとしたのか、荒い息を零しながら動きかけた男の口は、明確な言葉を紡ぐ前に、その眉間を撃ち抜いて舌どころか思考を止めた鏃によって塞がれた。

万が一にも逃がすまいと込められていた腕の力は、意識が飛んでもすぐには抜け

なくて。

倒れ伏す巨体にそのまま引きずられ、危うく下敷きにすらされかねなかった少女は、彼女の体をしつこく捕らえ続けていた太く巨大な腕を振り払い、逆に掴まえて引き寄せた、破落戸のものとは違う意味で力強く優しい手の持ち主によって助けられた。

危うく姫を害するところだった悪漢の、倒れ伏した巨体の傍らで、助けた勇者と助けられた姫が相對するという、意図しないまま作り上げられた名場面を見守る多くの者達の前で。

興奮に若干息を荒げ、頬を赤らめていた少女は、先程は位置の関係でリンクにかえていかなかったであろう表情を惜しみなく披露しながら、万感の想いを込めた言葉を口にした。

「『信じていました』」

構わず撃つてくれることを、その矢が自分を傷つけないことを、必ず助けてくれ

ることを。

それは『ゼルダ』という役柄としてだけでなく、『ネロ』という一人の少女としても『リンク』のことを信じ抜いた、二人分の想いが込められた言葉だった。

その時人々は、太古の伝説に語られる原初の姫君の姿を、確かにそこに見た。

「……………よし。」

このまま流れに乗って、追っ手を振り切った勇者リンクとゼルダ姫が、ハイラル城からの脱出に成功した節目で舞台を終わらせるぞ。

団員達を集めてくれ、あの二人に戻ってきてもらう前に手早く打ち合わせておう」

「ええっ、終わらせてしまいませんか!?

せっかくセンパイが機転を利かせて、リンクさんとネロさんも頑張ったのに……」
「惜しむ気持ちはわからんでもないが、たまたま運良く被害が出なかっただけで、お客さん達の前で大変な不祥事を起こしてしまったことに違いはないからなあ。

劇団としての誠意を示すためにも、今はこの場を収めることを優先した方がいい」

壮年の劇団長が神妙な面持ちで口にしたのは紛れもない正論で、何も言えないまま俯いてしまったマシュだったけれど。

少し傾いた頭を優しく撫でてくれた大きく温かい手と、苦笑交じりで呟かれた本音が、沈んでしまっていたマシュの心を瞬く間に浮かび上がらせた。

「いや、正直に言うとな……あの二人が魅せてくれたアレを超える山場が、今の俺達に作れるとは思えんのだ」

「……っ!!」

「騒動を収めてケジメをつける為ではなく、この舞台を最高のものにする為に、ここで終わらせるべきだと思っている。

分かってくれるか？」

「は、はいっ!!」

マシュの笑顔と返事に満足げに頷いた団長は、舞台上の二人へと手招きで合図を

送り、リンクとネロは自分達が未だ『役』として舞台に立っていることを考慮し、ほんの一瞬視線をそちらに向ける仕草のみで応えた。

更なる追っ手が現れる前に、一刻も早くハイラル城から逃れるべく少女の手を引く勇者リンクと、迷うことなくそれに続いたゼルダ姫に、想定外のトラブルをも生かした大活躍を披露した主役二人の退場を察した観客達が、盛大な拍手と歓声で彼らを送る。

演目も劇団もこれで終わりかと思われた程の、只中に放り出されたのが『彼ら』でなければ切り抜けることは不可能だったであろう騒動を乗り越えた先で辿り着いた万感のクライマックスは、『舞台』への敬意というものが一切感じられない無粋極まりない叫び声によって、ほんの一瞬でぶち壊されてしまった。

「何なのだこの茶番は、この醜態は!!」

演技だの舞台だのにうつつを抜かすような馬鹿げた連中を相手に、貴様らは一体何をしている!!」

「ああっ、この間の失礼な人!!」

「殆ど確信してはいたけれど、やっぱりあの野郎の差し金だったか!!」

やけに身なりと恰幅のいい男が、観客席へと乗り込んでくるや否や何を憚ることもなく口にした不穏な発言に、この劇団が近頃酷い嫌がらせを受けているという噂を知っていた観客達がざわつき始める。

身勝手な虚栄心と逆恨みによって劇団を追いつめた『元凶』に対しては、立香達も当然に腹を立てていたし、相対することがあれば自分の行いを後悔させてやろうとも思っていたのだけれど。

実際にそういう状況になった今現在、彼らの心境は事前の想定から遠く離れたところにあった。

『元凶』の姿を目の当たりにし、それが何者なのかを正確に認識したネロが、『ゼルド姫』という役柄から素の彼女自身へと戻り、花のような笑顔がトレードマークである筈のその顔がスンッと無に帰したのに気づいてしまったことによって。

「やかましいわ、愚民共が!!」

私は元老院の一員だぞ、気に食わぬ者をこのローマから排除することなどは容易いのだ!!」

「げ、元老院だって!？」

「そんな人が、私達の劇団を潰そうとしていただなんて……」

「あゝ、やっぱり……何かどこかで見かけた顔だと思ったら、最初の謁見の席で、俺達に思いつき難癖をつけていた内の一人だ」

《国が危機に瀕している状況で、よそ者に対して排他的だったり疑り深くなったりするのは無理もないという立香君のフォローは、あの人個人に関してはいらなかったみたいだね》

敵の予想以上の大きさを突き付けられて愕然とする劇団員達と、そんな彼らからは調子と熱が大分ずれたやり取りを行う立香達。

それら全てを認識の外に追い出し、少しでも気を抜けば爆発しそうな激情をやったの思いで堪えたネロは、今一度『ゼルダ姫』の役柄を身にまとった。

「『大臣、あなたまでアグニムに操られて……。

気をしっかり持つのです、あなたは私達と共にこのハイラルをまもる』」

「黙れ、忌々しい!!

舞台などという下らないものを私にまで押しつける気か、場の空気を読むことすら出来ぬ小娘が!!」

「……………演出の一環、舞台上の戯れ。

あくまでそういうことにしてやろうとした余の心配りを、思い直す為の最後の機会を、貴様は要らぬと抜かすのだな」

ネロの……未だ若い身であれど、大帝国ローマを負う者として申し分ない覚悟と誇りを抱く少女の『緒』が盛大に千切れた音が、立香達には聞こえた気がした。『ゼルダ姫』の衣装に着替えてからも、ぱつと見では見えない位置につけていた魔術礼装のブローチを少々乱暴な手つきで外し、リンクが掴まえてくれるであろうことを辛うじて残っていた冷静さの中で何とか考慮して、彼が立っていた辺りを見計らって後ろ手に放り投げる。

自分が信じた通り、彼がそれをきちんと受け取ったことを確かめるだけの間も無く、身も心も完全に『ゼルダ姫』から『ローマ皇帝』へと切り替えたネロは、舞台より高い位置にある観客席の通路から自身を見下してくる男を、立ち位置など些細な問題だと言わんばかりに堂々と背を伸ばして胸を張りながら睨みつけた。

「……何だ、その目は。」

無礼な奴め、この私を一体誰だと」

「戯け者が、余の顔を見忘れたか!!」

「何を馬鹿げ、た……………」

権力というものを知らない小娘の戯言と、鼻で笑おうとした男の言葉は半ばで途切れ、その顔から見る見るうちに失せていく血の氣と共に、尻すぼみとなって消えていく。

脂汗を噴きながら震える口から、嘲りの言葉の代わりに絞りだされた声は、実際の声量だけでは説明しきれないような不思議な威力を伴いながら、劇場中に響き

渡った。

「そんな……こ、皇帝陛下!？」

「如何にも!!」

余はローマ帝国第五代皇帝、ネロ・クラウディウスである!!」

『黄門様じゃなくて上様になっちゃった!!』という立香の謎の発言は、観客席と舞台裏から、劇場を震わせる程の勢いで発せられた驚愕の騒めきによって掻き消され、それもまた、威圧することですらなく、『余さず聞き届けなければ』と自然に思わせる力を持った声によって鎮められた。

『皇帝』としての力ある言葉が、『ゼルダの伝説』の名台詞にも負けない威力と迫力を伴いながら、劇場の空気と人々の心に朗々と響いていく。

「何の非も咎もなく、曲げられぬ誇りと信条を尊びながら懸命に己が務めを果たしていただだけの者達を、自身に従わなかったから、気に食わないからなどという身勝

手な理由で苦しめた振る舞い……己が権力を無暗に誇示し、それを以って他者を虐げ、排除することを辞さない浅慮な言動と共に、確かに見届けた。

権力とは、特権ではなく責任である。

強い力を持つ者は、他者どころか時に我が身をも破滅させかねないそれを、益も損も全て承知と覚悟の上で、心して揮わねばならぬのだ。

それを理解出来ていない貴様に、ローマ帝国元老院の議員という重責は任せられぬ!!

詳しい沙汰は追って言い渡す、今は大人しく己が館にて蟄居に努めるが良い!!」

舞台上の演目ではなく、此度の騒動全体を締めくくる為のクライマックスを、ゼルド姫ではなく彼女自身として堂々と演じ上げるネロ。

あれが我らの皇帝なのだと、我らローマの民の麗しき華なのだと。

居合わせた人々が胸を張りながらそう誇りたくなる程に、伝説の姫君であろうとも負けやしないと心から思わせる程に。

ローマの華としての笑顔を一時封じ、民に畏れられることを辞さない覚悟で皇帝

としての威厳を全力で体现する今の彼女は、本当に美しかった。

立香がよく知るお約束の本来の流れならば、自身の悪事を曝け出されて追い詰められた悪党が自棄を起こし、最後のひと暴れを起こすところなのだろうが。

彼の手駒である破落戸達は一人残らずリンクによって伸されていて、例え今すぐ目を覚ましたとしても、大層な痛手を負った体は当分は使いものにならないだろうし。

絶対の力と妄信していた地位と権力が完全な上位互換の存在によって覆され、自分では全くそうと思っていなかった行いを悪事として糾弾される事態など、対策どころか想像すらしていなかった彼に、選ぶことが出来る選択肢は限られていた。

「ああっ、逃げた!!」

「待たぬか貴様!!」

「えっ、ちょ、陛下!」

「ネロさん、待って下さい!!」

不摂生を重ねて弛んだ体軀からは想像しがたい俊敏さで踵を返し、館で謹慎どころかこのまま劇場を越えてローマからも逃げ出しそうな勢いで駆け出した男の背中を、リンクやマシュの静止を振り切ったネロが追いかける。

ドレスの裾を翻す後ろ姿を呆然と見送ってしまった三人が目にしたのは、部下の醜態とその被害を直接目の当たりにさせられたローマ皇帝として、劇場と舞台を愛する個人として、様々な怒りを込めた鉄槌を強烈な飛び蹴りという形で逃げる背中へと叩き込み、大勢の観衆の目の前でもものの見事に、自身の手で痛快に悪党を懲らしめてみせたネロの雄姿であった。

「……ま、まあ、予定通りネロの大活躍をローマの人達に見てもらえた訳だし、物凄く盛り上がってるし、作戦としては大成功かな」

「……………」

《ちょっ……どうしたのリンク君、何か固まっちゃってるけど大丈夫!?》

「リンクさん、まさか……ゼルダ姫の衣装を纏い、姫を演じていた延長で、そのイメージを壊すような振る舞いをされてしまったことにショックを受けて」

「い、いや………ショックというか、驚いた。

逸るままに駆け出していった陛下の姿が、ほんの一瞬だけだったけれどゼルダと重なって見えて」

「《え っ!?》」

「お姫様って本当にあんな感じだったの!」

「一国の姫ということで公の場では頑張って自制していたけれど、素の彼女自身はもの凄く行動的で、肝の据わった頑固者だったよ」

美しく、誇り高く、章によっては『賢者』の一人に名を連ねることもある、『知恵』のトライフォースの適合者に相応しい聡明さと思慮深さの持ち主で。

世界中の人々が抱いているであろうそんなイメージを、盛大に揺るがすような一面の存在を、誰よりも彼女のことを知っているであろう人の口から語られてしまったカルデア一同の衝撃は、伝説のお姫様ではなく彼らの麗しき皇帝陛下とその活躍に歓声を送るローマ市民達と、いつもより一層輝かしく思える笑顔でそれに応えるネロによって、敢え無く埋もれてしまったのであった。

こうして、たった一日の休みの中で繰り広げられたものだとはい底思えないような濃い展開を経ながら何とか解決した騒動は、ローマの町と人々に幾つかの後日談を残した。

元老院の一人が私利私欲のままに起こした不祥事、ローマの罪なき民がそれによって苦しめられたのだという事実を、皇帝として彼らをまとめ切れていなかった自身の至らなさを受け止めたネロが一念発起し、その想いと覚悟を改めて表明したことで、ローマを襲った未曾有の危機の中で皇帝としての手腕を疑われ、失いかけてしまっていた元老院の者達からの忠誠と信用を今一度、例え一時の様子見だとしても繋ぎ止めることが出来たとか。

立香が雑談の中で口にしていた『劇中劇』という概念を人伝に耳にした例の劇団の団長が、『必ず評判になる』という興行者かつ経営者としての打算と、助けてもらったことへの感謝と応援の気持ちを自分達にしか出来ない形で示したいという思いから、『お忍びのネロ皇帝が信頼する仲間達と共に民衆を苦しめる悪を成敗する』というオリジナルの演目の第一弾、例の騒動を丸ごと雛型にしたものを早々に完成させ、劇場はかつて無いような大賑わいを見せているとか（それを聞いた立香が、

『今度は遠山の金さん!?』と叫んでいたとのこと。

大規模な行軍を間近に控えていた上に、全く想定していなかった騒動の後始末まで加わってしまった激務ははつきり言って、見かねて手伝いに加わった立香達も含めて地獄のような工程だったけれど。

その中で積もり積もった気苦労は、皇帝自らが率いながらの出立を集まった町の人々によって盛大に見送られ、その為の絶好の位置を派手な衣装を纏った見覚えのある集団が陣取っていることに気付いた段階で、全て綺麗に吹っ飛んでしまった。こうして、連合との戦いの行方を左右し、ローマ帝国の進退に関わると言っても過言ではないガリアへの大遠征が、ローマの民達の期待と歓声の中で華々しく始まったのであった。

時代劇の名シリーズのひとつ『遠山の金さん』の始まりは、実際に存在した名奉行の遠山様に助けられたとある劇場（劇団）が、そのことに対するお礼として彼を

主役にした演目を作成・公演したことだったそうです。

お奉行自ら町人を装って潜入捜査をしていたとか、桜の彫り物とそれを見せつけながらの啖呵とかは流石に、後付けのヒーロー要素みたいですけど。

『神トラ』のリンクには、『時』とか『息吹』とかの二つ名がきちんとついてはいないみたいなんですよね。

他の方からも案を貰い、展開に区切りがつくまでには決めようと思いながら少し考えてみたのですが、『これだ！』と来るものがちよっと思いつきませんでした。引き続き考えて、どこかのタイミングで披露してみたいと思います。

困難を砕く

ガリアを拠点に、広範囲に展開される連合軍。

それに対抗し、叶うのならばガリアそのものを奪還することを目標としていながら、何者かの見事な采配によって完璧に統率されている軍を切り崩せるだけの決定打が無く、戦線は長い間硬直状態を保ってしまっている。

そんな現状を動かすかもしれない情報が、皇帝ネロ自らが大規模な遠征部隊を率いて合流するという先触れがローマ軍の陣地へと伝えられ、そこから更に数日が経ち。

途中で幾度か連合軍からの奇襲を受けながらも、頼れる仲間と忠実な兵士達の活

躍によって大きな損傷を免れたネロと遠征部隊は、戦力の大部分を保ったままガリア近郊の野営地へと無事に到着した。

「皇帝ネロ・クラウディウスである、これより謹聴を許す！」

ガリア遠征軍に参加した兵士の皆、余と余の民、そして余のローマの為に尽力ご苦労！

是よりは余も遠征軍の力となろう、一騎当千の将もここに在る！」

数日かけた長旅の、実際には相当溜まっているであろう疲れを伺わせることなく堂々と演説を行なってみせたネロに、元々この地に滞在していた者達と、今回共にやってきた者達が混じりあいながら歓声を上げている。

今は自分達が前に出ていい時ではないと判断したカルデア一同は、そんな状況を少し離れたところから、未だ皇帝モードを解けないネロに悪いとは思いながらも、先んじて一息つきながら見守っていた。

「あいたたた、体中が普段使わないようなところまで痛い……馬に乗るのって見るだけなら優雅だけど、実際やるとメチャクチャきついんだな」

「あまり慣れてない身で、いきなり数日乗りっぱなしだったんだから無理もない。しばらくは部隊を丸ごと休ませることになるだろうし、お前もその間に調子を戻しとけ」

「エポナには悪いけど、当分馬は勘弁だよ。」

こんなことなら、潔く歩いた方がマシだったかも……」

《随分な言い草だなあ、稀代の名馬エポナに乗せてもらっておいて。

歴史上、どれだけ多くの英雄や権力者が、今の立香君の状況を夢見たと思っているんだい》

「仕方ないじゃん、辛いものは辛いんだから」

「立香の言う通りだな。」

確かにエポナは俺にとっては最高の馬だけど、人間の言うことを良く聞くとか、誰でも乗りやすいとかいう意味での名馬ではなかったし。

俺以外の誰かが乗るのを許して、その人があまり馬に慣れていないのをちゃんと

承知した上で、なるべく静かに歩くように気にかけていただけていただけでも大したものだったよ」

「……………あ、あの、リンクさん」

「ん……………どうしたマシュ、やっぱり疲れた？」

「あ、いえ、大丈夫です。」

長旅で少し消耗しているのは確かですが、特に大きな問題はありません。

ただ、気になることが……………」

語尾を濁したマシュの不安げな様子、その理由に立香達はすぐに気がついた。

皇帝ネロと、彼女に直々に率いられた部隊の合流を喜んで歓迎した兵士達の態度と表情が、なぜか自分達に対しては不審そう、かつ不満げな、歓迎されているとは到底言い難いようなものに思えてしまうのだ。

今のところは何となくそんな感じがするというだけのことで、初対面の兵士達にいきなり悪感情を抱かれる理由や原因もさっぱり思いつかないので、事が大きくなるのを覚悟でネロに相談することも憚られてしまう。

どう判断し、どう行動するべきかを迷っている間に、演説を無事に終えたネロが戻ってきた。

豊満で魅力的な肢体と炎のような赤い髪を持った、見知らぬ美女を伴いながら。穏やかで優しい、母や姉を思わせるようなその笑顔に、なぜか冷たい含みを感じたリンクの眼差しが若干鋭くなったことに、気づいた者はいなかった。

《あれ、この反応は……》

「立香、リンク、マシュ、待たせたな。

紹介しよう、將軍としてガリア遠征軍の指揮を任せていたブーディカだ」

「遠路はるばるようこそ。

初めまして、あんた達が噂の客将だね」

「……ブーディカ、さん？」

「そうブーディカ、ブリタニアの元女王ってヤツ。

もっと詳しい話をしたいのは山々なんだけど、遠征軍を指揮する身として、皇帝陛下と話したいことがあってさ。

少しの間だけでいいから、待っていても構わないかい？」

「むっ、そうなのか？」

皆の者、済まぬが……」

「いいですよ、仕事なら仕方ないですし」

「悪いね、じゃあまた後で」

一旦和らいだ皇帝モードを再び取り戻し、真剣な表情を浮かべながら『ブーディカ』と名乗った女性と共に去っていくネロの背中を見送った立香達は、彼女達の姿が完全に見えなくなったところで顔を見合わせ、各々が抱いた印象に対する答え合わせを始めた。

「あの気配……今の人は、サーヴァントですよね」

《マシユの勘は正解だよ、こちらでもサーヴァント反応を測定した。

クラスはライダー、真名はネロ陛下の紹介と本人の自己申告からして、ブリタニアの勝利の女王『ブーディカ』で間違いないだろう。

今まで接触する機会が無かっただけで、味方となり得る逸れサーヴァントがこの特異点にもきちんと召喚されていたわけだ。

それが、既に味方についてくれていたというのは朗報だね》

「し、しかしドクター……女王ブーディカとネロさんは、確か」

《……そうだね。

後継者となれるのは男児のみというローマの法を押しつけ、夫亡き後のブリタニアをブーディカとその娘達が女王として治めることを認めず、彼女に反乱軍を率いらせてしまったきっかけは、ネロ陛下の統治下にあったローマだ。

後世の研究では、それはあくまでブリタニアに派遣された者が独断で行なったことであり、ネロ陛下の意志ではなかったという説もあるんだけど。

酷い目に遭わされた本人からすれば、そんなフォローは知ったこっちゃないだろうし。

……ほんと、何で協力してくれているんだろう》

（さっきの変な感じは、その辺りの葛藤や、未だ割り切れていない気持ちなんかが現れたってことか？

でもだとしたら、それを陛下ではなく俺達の方に向けていた理由が分からない）理由は微妙に違うものの、解釈と対応を間違えれば状況を悪化させるかもしれない気がかりを解消すべく、それぞれが思考を巡らせる一同。

その背後にゆっくりと歩み寄る、幾つもの不穏な影が存在していた。

ブーディカの私室と執務室を兼ねているらしい、兵士達のものよりも少しだけ大きく上等なテントに案内されたネロは、促されるままに腰を下ろすと同時に口を開いた。

「さて、と……話とは何だ、ブーディカよ。

わざわざ場を整えたくらいだ、さぞかし重要な件なのだろう」

「うん、まあね。

大事な話なんだけど、その前に」

「……？」

「久しぶりに顔を見て驚いたよ。

表情も顔色も随分とスッキリしている、どうやら調子が戻ったみたいだね」

ブーディカの言葉を受けたネロは、そんなことを言われるなど思ってもみななかったと言わんばかりに目を瞬かせ、しかしその次の瞬間、彼女に対して色々複雑な感情と事情を抱いているブーディカでさえ認めざるを得ないほどの、美しい笑みをその顔に浮かべた。

「そうだな……思いがけず大層な気分転換が出来たし、余の手腕を今一度見つめ直すきっかけもあった。

そして何より、今の余には『希望』がある。

不安を押し殺し、無理に自分を奮い立てずとも、また心から笑うことが出来るようになった。

それは間違いなく、あやつらのおかげであろうな」

「……ふーん、そっか」

「どうしたのだブーディカ、先程からいっち歯切れが悪いぞ。

言いたいことを遠まわしに匂わせるだけなんて、お前らしくもない。

皇帝として余が許す、ずばり直球で物申さぬか」

「……うん、じゃあ言わせてもらう。」

今の台詞と表情からして、あの子達があんたにとって、本当に大事な存在なのが分かった。

それでも、あんたほどの立場で公私混同は問題だし……ほんの僅かなきっかけで戦線の拮抗が崩れかねない現状で、皇帝自ら兵士達の士気と風紀を乱すような真似はちょっと慎んでくれないかなあ」

「……………は？」

「新しい愛じ……お気に入りなんでしょ、専らの噂だよ」

「はあああああああっ!!!？」

なっ……ななななな、何を言うか戯けもnあ痛たっ!？」

「ちよっ、大丈夫!？」

林檎の如く真っ赤に染め上げた顔で奇声を上げ、椅子を蹴倒しながら立ち上がっ

た挙句に足を取られ、盛大な音を立てながら頭からすっ転んでしまったネロを、まさかそこまで驚かれるとは思っていなかったブーディカが慌てて助け起こす。

改めて椅子に座らせ、水を飲ませて一息つかせても、ネロの上氣した頬と息が落ち着く気配は伺えなかった。

ため息交じりにその背をさするブーディカの口が、この数日、遠征軍の兵士達の心を乱しまくった『噂』の詳細を語りだす。

「あんた達が来るってことを伝えに來た先触れが、その際についてに話してくれたのさ。

三人の新しい客将がローマに加わって、皇帝ネロは王宮内に私室を与え、個人的な時間を共に過ごし、私的な場では名を呼ぶことを許す程にその者達を氣に入っていて……そしてそれは、見目麗しい少年少女達だってね」

「……………間違っていない、間違っていないのだが」

その言い方では、そう思われるのも無理はない……と、自身の手で顔を覆いなが

らガツクリと肩を落とすネロ。

含みや悪気は全く無く、完全に無自覚だったのだということをそんな態度から察したブーディカは、一挙一動に責任が伴う皇帝としてはそれはそれで問題だと、この何日かでもはや数え切れなくなってしまうため息を再び吐き出した。

「本来の自分を取り戻させてくれたあの子達に、大変な時こそ傍にいてもらいたかったってのは分かるけど。」

その程度の気持ちで連れてきていいほど、戦場は甘い場所じゃないからね。

悪いことは言わない……あの子達のこと genuinely 大切に、今からでもいいからローマに帰らせな」

「……………ん？」

待て、ちょっと待て、ブーディカ。

そなた、何かとんでもない勘違いをしてはおらぬか？

先触れによこした者は、あやつらのことをどのように話しておったのだ」

「我が身を城壁と化して、数多の兵を守り抜いた盾の娘。」

元老院の老獺どもを相手に一步も引かず、ローマの在るべき姿を堂々と語ってみせた異境の少年。

仕舞いには、かの伝説の勇者の再来とまで……箔付けしたかったとしてもちよつとやりすぎ、これじゃ逆効果だよ」

「……成る程なあ。

あつ……まずい、何か久しぶりに頭が痛くなってきたぞ」

頭を抱えながら思わず天を仰いだネロと、彼女が見せる予想外の反応に首を傾げるブーディカに、テントの外から突如声かけられた。

切羽詰まったその様子に、色々な意味で困惑していた二人の意識が一気に引き締められる。

「こっ……皇帝陛下、ブーディカ様!!

お話し中のところ申し訳ありません、ご報告させていただきたいことがあります

!!
」

「許す、申すがいい」

「じ、実は……たまたま皇帝陛下の寵を得られたというだけの、名ばかりの將に従うのは御免だと口にしていた一部の兵士達が、とうとう」

「行動に出てしまったのか!？」

しまった、恐れていたことが……だとしても、何でこんな早々に」

疑問を口にしたブーディカは、ほぼ同時にその答えに辿り着いてしまった。

実を言うと、ブーディカを含めた多くの者達が、噂に対しては半信半疑だった……現物を目の当たりにするまでは。

無骨さと女性らしさを兼ね備えた甲冑を纏う少女と、多民族国家である筈のローマでさえお目にかかれないような、遙か遠い異国の民と思われる少年。

それだけでも十分に目を引き、皇帝陛下に気に入られるだけのことはあると思えたであろう存在が、三人目に気づいた瞬間に全て吹っ飛んだ。

『勇者リンクの再来』、そんな前情報を素直に受け止められた者はいなかった。

いくら何でもそれは言い過ぎだろうと、呆れながら斜に構えていた者達は、自信

に溢れた笑みを浮かべたネロ皇帝の隣に、当たり前のように立っていたその姿を目にした瞬間に、ストーンと嵌まり込んだような感覚と共に納得してしまった。

『成る程、これはそう称するしかなかったな』と。

『多少の職権乱用をしてでも、あの少年を傍に置いておきたかったネロ陛下の気持ちもわかるな』と。

恐らくはくだんの者達も同じように感じ、それまで抱いていた不満や苛立ちを覆すような思いを抱かされたことに対して怒り、苛立ち、ついには背中を押されてしまったのだろう。

その可能性にもっと早く気付かなかった、自分までもが冷静さを失ってしまったことによりやく思い至ったブーディカが、舌打ちと共に立ち上がる。

兵士達の気持ちも分からないでもないが、自分が指揮している部隊で不祥事を起こされるのは御免だし、何よりもあの子達のことの心配だった。

逸る気持ちを抑えながら、自分よりもよほど彼らの身を案じているであろうネロと共に、急いでその場に向かおうとした……のだが。

「構わぬ、放っておけ」

「……………は？」

「いちいち言葉で説明するのは面倒だし、それで納得してもらえとも限らんからな。」

むしろ良い機会だ……疑いような無い程に、噂の真偽とやらを体で思い知ってもらうでしょう」

遠征部隊との合流を済ませたばかりだというのに、いきなり疲れ果ててしまったと言わんばかりの表情で大きなため息をつき、椅子の背もたれに体重を預けるネロ。戸惑い、立ち尽くすブーディカ達にフォローを入れられるだけの心の余裕は、残念ながら今の彼女の中には存在していなかった。

そしてその頃。

遠征軍の兵士達から、存在の珍しさと顔の良さで得た皇帝の寵を笠に着ただけのお飾り將軍と思われて。

お前達なんか認めないという意思を示すのは最初が肝心だと、恐れをなしてどこ

へなりとも逃げてしまえばいいという思惑で、多少どころでなく痛い目に遭わせることも辞さない気概と害意を隠そうともしない兵士達から、凄まれてしまったカルデア一同はと言えば。

「どうした、もう終わりか!!」

来ないのならば、俺達の下につくことを受け入れたと見なすぞ!!

それが嫌ならばどんどん来い、気が済んで納得いくまで付き合ってやる!!」

「いいぞリンク、目指せステゴロ100人抜きだ!!」

「リンクさん、頑張ってください!!」

人の群れによって急遽作られた円状の舞台で、立香やマッシュといった仲間達、更にはローマからの同行組で彼らのことを正しく知っていた兵士達からの歓声と、目の前で繰り広げられている光景を未だ認められない遠征組の者達からの罵声を浴びながら。

武器を失ってしまった、もしくは使えない際の戦闘スタイルにも幅を持たせてお

きたいからと教わっていた拳を、通信越しに見守る凄女が輝かんばかりの笑顔で頷く程の威力と技で、自分達がこれからも進んでいく為に揮うリンクの姿はさながら、枷に繋がれながらも誇り高く戦った剣闘士の如くであった。

灯りたての勇氣

『逃げたければ逃げろ』と口では言っておきながら、既に人海戦術で周りを囲み、逃げ道を塞ぎ、たったひとつの選択肢しか選べなくさせた騙し討ちに対しても、多少の罪悪感を抱いていたのかもしれない。

遠目で見ただけでも怯まされた程の美貌と、間近にしたことでより一層実感してしまった体の細さを前に、思い知らせるとしてもなるべく優しくとか、思い上がりをして反省して泣いて詫びさえすればそれ以上の追い打ちはかけまいとか。

彼らなりに抱いていたそんな氣遣いは、何やら嫌らしい笑みを浮かべながらの少年へと歩み寄り、その耳元で何事かを囁いた者が、空気の唸る音と共に繰り出さ

れた拳をその土手っ腹に深々と減り込ませ、ほんの僅かな呻き声を上げる間もなく沈められた衝撃的な光景によって根元からへし折られた。

（音声が届いていたらしい管制室から、ダ・ヴィンチや某魚料理の美味しそうな名前のスタッフを始めとする数人が張り上げた歓声と罵声に、何を言われたのかと当人に尋ねようとした立香とマシュの開きかけた口は、こめかみと握った拳に青筋を浮かべていたリンクの輝かしすぎる笑顔を前にそっと閉じられた。）

「逃げるよマシュ!!」

「待って下さい、リンクさんがまだ」

「いいの、リンクなら大丈夫!!」

と言うより、さっさと離れないとむしろ邪魔になる!!」

若いどころか、幼くして『戦術顧問』という重役を担うこととなった『末代の勇者』が、こういう状況に覚えと経験があることは容易に想像がついた。

荒くれや脳筋の集まりに対処することなんて、日々の業務の一環で、慣れっこか

つお手のものだっただろうし。

ローマの闘技場と言うよりは、西部劇の酒場と表した方が正しそうな大乱闘の真っ只中から脱出を図る立香とマシユの背後では、数人の兵士が既に地に伏せていた。

相手が一人だからこちらも一人で、素手だからこちらも素手で。

そんな騎士道精神^{ゆう}は、開幕と同時に選択肢に上がるまでもなく消え失せた。

掴んで力を籠めるだけで折れてしまいそうな体軀に侮り、鍛え上げられた腕力に任せて捻り潰そうとした者達は、それ以上の、物理法則に抗っているとは思えないような怪力によって真正面から叩きのめされた。

ならばと数に任せ、四方八方から囲むように一斉に襲いかかった者達は、躊躇いも戸惑いも一切無い、一対多数の戦いに慣れているとしか思えない動きに翻弄され、半分以上が同士討ちの自滅によって潰された。

思考を完全に沸騰させた者達が容赦なく振り上げた剣や槍は、質より量を重視した大量生産品よりも余程の業物だった生の拳に競り負け、大小様々な木屑や鉄屑となつてばら撒かれた。

子犬と思い込んで手を伸ばした首根っこが、犬どころか歴戦を経た狼のものであったことに、食い千切られてから気付いたところでもはや遅かった。

すぐには動けない、しかし最低限の意識までは奪わない、そんな絶妙かつ容赦のない力加減によって叩きのめされた兵士達が死屍累々と倒れ伏す真ん中で、怪我どころか息の乱れすら無いままに堂々と立ちながら。

皇帝陛下の意向と判断を曲解しただけならばまだしも、自分達の勝手な価値観と判断が正しいと妄信して、私情を優先して軍の規律を乱すような輩が、陛下が信を置いてガリア奪還という重要任務を任せるような者達だとは思わなかったと、少年は呆れたため息をつきながら言っていた。

噂に対して半信半疑だった者達にですら、揃いも揃って『無理もない』と思わせたのが自身の美貌なのだと、考えることも気付くことも全く無かった少年の無自覚な言い草は、それによって背を押された自覚があつた者達にとってはあまりにも残酷なもので（気付いた立香は『あちゃ……』と手のひらで額を押さえていた）。

彼の言い分は正しくて、生まれ持った顔に罪は無く……明確な要因に突き動かされたのだとしても、一番悪いのはそこで堪えられずに実際に行動に出てしまった方なのだと、頭の中の冷静な部分ではきちんと分かっているのだけだ。

挑発する意図は確かにあったものの、予想を遥かに超えて反骨心を漲らせ始めたローマ兵達に内心で首を傾げながら、それでも想定通りだと口の端を吊り上げる笑みを浮かべたリンクは、握った拳を今一度構えながら宣言した。

俺達に従うのが嫌だと、不満だと言うのならばかかって来いと。

最後の一人が観念するまで、何人でも相手してやると。

燻ぶるを通り越して今にも燃え上がりそうだった種火は、その言葉を受けて一気に爆発した。

あの少年が、噂を聞いた自分達が最初に想像していたような、美貌だけで皇帝に取り入ったお飾りの将などではないということは、既に痛いほど知っている。だとしても、何の躊躇いもなく『最後の一人まで』と断言してみせたことまでは、

黙って見過ごすことが出来なかった。

理性と損得を完全に度外視した兵士達の、認めたくない、受け入れたくない、受け入れざるを得ないとしてもせめて納得したいという我が儘に、リンクは真っ向から誠実に、辛抱強く向き合い続けた。

最初こそただひたすらに、勢いと激情に任せていた兵士達も、時間が経ち、挑んだのと同じ数だけ返り討ちにされて徐々に頭が冷える毎に、意地や反骨心とは別のものが、この胸に叩き込まれていくのを感じていた。

あの噂が、箔付けの為の誇張や創作などではなかったとしたら、彼が本当に得意としているのは、剣や弓などの武具を使用した戦い方の筈。

それを敢えて拳に拘っている理由は、今こうして相対している自分達こそがよく分かる。

未だ彼に対して不満を燻ぶらせ、当の本人がいいと言っているのだからと、このどさくさに紛れてとまで思っているような数十人の、下手をすれば数百人もの兵士達を。

たった一人で、己が肉体と拳という原初の武装で、小賢しい策の存在を疑ったり、

一時の幸運にたまたま助けられただけと嘯くことなど出来やしない、それが彼自身の確かな実力なのだと認めるしかない状況で、完膚なきまでに打ち負かしでもしたら。

そんなことが本当に出来ると、出来たのだとしたら。

それこそ正しく、『勇者リンク』の英雄譚のようではないか。

この胸の内に徐々に湧き上がる熱が、あくまで遠い伝説の中の存在だった筈の人の目の当たりにしてしまった感動だということを、彼の下で彼と共に戦うことを想像して滾りそうになる自分がいることを、認めるしかなくなってしまうのではないか。

冗談じゃないと……幼い頃に夢中になった物語の主人公そのものな人が目の前に現れて、伝説そのままのような大活躍を見せたからと、共に戦えるかもしれないのだと、瞳を輝かせて喜ぶような純粋な心なんてものは、遙か昔の子供時代と共に過ぎ去ったと。

意地を張り、尚もリンクに挑み続ける兵士達は、自分達の挙動と、それを見守る

者達の表情に変化が表れ始めていることに、今はまだ気付けずにいた。

武器の柄ではなく、自身の拳を固く握って。

弱者を一方的に叩きのめして強者の優越感に浸る為ではなく、弱者として圧倒的な強者に挑む為の、手段の一環として数に頼りながら。

無残に叩きのめされたとしても、敵わないということが骨身に沁みていたとしても……その心がまだ行けると、まだ行きたいと叫んでいる限り、震える手足に鞭打ちながら、もう一度今一度と立ち上がり続ける。

少し強い風に吹かれただけでも消えてしまいそうな程に儚く、弱々しく、小さなものではあったけれど。

誰の心にも灯り得る、辛く恐ろしい困難に立ち向かう為の、『勇氣』の輝きがそこにあった。

半々だった歓声と罵声は、いつの間にか歓声一色となっていた。

声援はリンクだけでなく、きちんと治療をすれば後を引くことは無い程度に適度

にボコボコにされながら、尚も諦めずに挑み続ける兵士達にも、等しく向けられるようになっていた。

意地と誇りをぶつけ合う戦士達の闘志と、観客達の声援と歓声が入り混じること
で生み出された独特の熱狂。

それは正しく、古代ローマ帝国とそこから連なる歴史に、その名と存在を燦然と
刻んだ闘技場『コロセウム』を、同じように満たしていたであろうもの。

それに気づかない筈がない、気づいて放っておける訳がない……良い意味でも悪い意味でも、あまりにも縁深すぎる者が居るのだという可能性に思い至らなかったのは、無理もないことだった。

《えっ、何コレ……嘘だろ、サーヴァント反応だ!!

もの凄い勢いで近づいてくる、と言うより飛んできている!!

リンク君、避けて!!》

悲鳴のようなロマニの声を、戦闘の真っ只中の集中状態で聞いたリンクが咄嗟に

取った行動は、今の今まで拳を交わし合っていた、突然の状況の変化に自分と違って頭の中を真っ白にしてしまった者達を、苦痛の尾を引かせない程度の力加減の中心で思いつき蹴り飛ばすことだった。

今の今まで拳のみの縛りを入れていた筈の者に、問答無用でいきなり足を繰り出されたことへの文句と不満は、彼がそうしてくれなければ今頃この身は爆散していたであろう現実を前に瞬く間に消え失せた。

他者を救う為に自身の避難を遅らせ、周囲の者達の心胆を寒からしめたリンクは、若干せき込みながらも何とか、立ち込める土煙を割って皆の前に無事な姿を現した。

あの場にいたのが彼でなければ、戦い合っていた両者の片方は確実に、下手をすれば両方とも、あの衝撃に巻き込まれて命を落としていたに違いない。

「……一体誰だ、こんな無茶な真似をしたのは」

直前のロマニの言葉と、以前カリギュラが同じような登場の仕方をしたことも

あつて、リンクはこの爆撃の弾頭がサーヴァントその人であることを確信していた。敵ならば倒す、味方だとしても少々きつめに灸を据える。

そんなことを考えながら、今は見えない着弾点を睨み続けるリンク。

徐々に晴れていく土煙の向こうに現れた人影、それは。

「おお偉大なる反逆者よ、圧政に抗いし希望の勇士よ!!

交わす刃にて語り合おうぞ、我が愛で汝を抱擁せん!!」

……………その男は、マッスル筋肉だった。

VS スパルタクス

「あ、あれは……」

「スパルタクス將軍!!」

突然の事態に何事かと騒いでいた兵士達が、徐々に晴れる土煙の中から現れた、筋肉の塊のような巨漢の存在に気付くと同時に思わず上げた声に、ロマニが追随する。

《なっ……スパルタクス、しかも『將軍』だって!?

奴隸を率いてローマの支配に抵抗した反逆の英雄じゃないか、それがどうしてローマの側についているんだ!!》

ロマニの疑問に対して反応したり、答えたりする余裕は、今のリンクには無かった。

よく誤解されがちな上に、彼のことをよく知っている筈の者達ですらたまに忘れてしまうのだが、リンクは自分は『勇者』ではあっても『英雄』ではないと思っている。

人によっては、何が違うのかと首を傾げてしまいそうな程に微妙なことではあるのだが、当人にとっては重要なことだった。

『勇者』とは『勇氣ある者』のことであり、立ち塞がる困難に恐れ慄きながら、それでも譲れない大切なものを守る為に、手足の震えを堪えて歩み出せる者のことである。

意味も無く痛い思いをするのは嫌だし、友人や家族を蔑ろにしてまで富や栄光を得たいとは思わないし、戦う機会の無い平和な世に生き辛さを感じるどころかむしろ

ろ全力で謳歌したい方だし。

どうしても必要とあらば、それら全てを耐え、全てを投げ打ってでも戦ってみせるけれど、それでも。

身につけた力や技が強すぎて、出来ることが多すぎて、『自分の手が届く範囲』が広すぎて……結果として『英雄』的な活躍や振る舞いを見せてしまっているだけで、彼自身の性根は本当に、どこにでも居るようなありふれた少年のものなのだ。……要するに、兵士達が『スパルタクス』と呼んだ大男が、目の前の相手を殺すことも辞さない闘志と共に浮かべている朗らかな満面の笑みに、異様極まりないアンバランスさに、人としての普通の感性を持っていたリンクは内心で思いつきり、今すぐにでも背を向けて逃げ出してしまいたいくらいにドン引いていた。

（俺個人としては、意味の無い戦いを避ける為に身を隠したり、一旦逃げて仕切り直したりするのも立派な戦術だと思ってるんだけど……これから指揮下に入れる予定の、まだ信頼関係を築けていない人達の前でそれをやるのは、流石にまずいよなあ）

少々後ろ向きで戸惑い気味な彼の内心は、腰を深く落としながら地に両足を強く咬ませ、鋭い眼差しで相手を見据え、感覚を広げ、どんな動きをされても即座に対応出来るように最大限の警戒態勢を取っている、正しく『勇者』と呼ぶに相応しいような勇ましい姿からは、到底窺い知ることが出来ないだろう。

頭の中のスイッチを切り替えると同時に、戦闘の妨げとなってしまうような雑念と、その源である素の自分を切り離して、心の片隅に一旦隔離してしまう技術と覚悟を、リンクは歴戦の中で身につけていた。

それはもはや癖や条件反射のレベルで、わざわざ意識するまでもない程に自然な流れの中で行なわれるもので、傍目から気付けるようなことではない。

……筈、だったのだけれど。

「リンク、落ち着いて!!」

俺が個人的に思ってることだけど、バーサーカーな人を相手に『おかしい』『ヤバイ』なんていちいち思ってたらキリが無いから!!

この人の場合はそれで普通なんだって、ぶっちゃけ『そういう生態なんだ』くらいに思っておいた方が、気も対処するのも楽だから!!」

「……センパイ、まさか、清姫さんともそういうスタンスでお付き合いを？」

「……家族だから、仲間だから、差別なんてしないで一緒に暮らそうなんて言って、恒温動物にとっては気持ちいい感じに冷房が効いている部屋に放しっぱなしにするのと。」

温度管理がきちんと出来るヒーター付きのケージに入れて、様子だけは小まめに窺いながら、お互いにストレスを抱くことのない程よい距離感で付き合うのと。

爬虫類にとって本当に良い環境、誠意のある対応するのは、どっちだと思う？」

「……それは、確かに、そうなのですが」

《そこで躊躇なく爬虫類で例える辺り、立香君も大概だよね》

《ああ、ますたあ……そんなにも私のことを考えて、気を配って下さっているだなんて!!》

《しかもその対応で正解っぽいし……》

「……………ぷっ、ククッ」

《って、こんなコントやっていいような場合じゃなかった!!

変なこと言って横やり入れてゴメンねリンク君、集中切れちゃった!?》

「ああいや、大丈夫、あまり気にしないで。

……立香、ありがとうな」

恐らく彼は、リンクが密かに抱いていた動揺そのものに気がついた訳ではない。
『勇者』だけれど『英雄』ではない……その言葉の意味を、頭ではなく感覚で正しく理解して。

見かけは完璧に取り繕っているけど、実際は相当に、彼だって自分達と同じように、驚いて戸惑っている筈だからと。

ごく自然に、何の躊躇いもなく、こちらを氣遣って励ますための言葉をかけてくれたことが、当たり前のように『勇者』ではなく『リンク』として見てくれたことが、本当に嬉しかった。

その顔にはいつの間にか、素の彼自身の、スパルタクスにも負けないような笑みが浮かんでいた。

お互いに隠す気のない闘志を、笑いながらぶつけ合う二人。

いつ破裂してもおかしくない程に張りつめていた、異様な硬直状態を先に打破したのは、いつにも増して気持ち悪い程の上機嫌で笑い続けるスパルタクス……ではなく、何の奇も銜いもなく、真正面から飛びかかったリンクだった。

彼は、最高の効率と最低の消耗で勝利を得る為の道筋を考える策士であり、それを大勢の仲間達に浸透させた上で指揮することにも長けた軍師であると同時に、彼と魂を同じくする代々の『リンク』達の大概がそうであったように、『初見でまだ何もわからない敵に対しては、様子見の為にもとにかく一旦斬ってみる』という脳筋思考の持ち主でもある。

この一撃に対してスパルタクスがどう反応するのかを見極める為、一応味方らしい彼をいきなり倒してしまわない為に、サーヴァントならば十分反応が可能な程度の速さと威力で、兵士達からすればどこから出したのかわからないであろう剣を振り下ろした。

ぶ厚い筋肉が切り裂かれ、鮮血が舞った次の瞬間……リンクの小柄な体は、刀身を砕きながら振るわれた剛腕によって、宙高く吹っ飛ばされていた。

「リンク!？」

「リンクさん!!」

「大丈夫だ!!」

一瞬で顔色を真っ青にした立香とマシュの危惧は、彼らの声に咄嗟に返事が出来る程の余裕を保ちながら虚空で体勢を整えたリンクが、猫のような見事な着地を決めてみせたことで杞憂となった。

ほっと胸を撫で下ろしたマシュは、しかし次の瞬間、リンクの右腕で殆ど砕け散っていた、自分のそれとは比べようもない程に小さく薄い盾の存在に気づいて目を剥いた。

スパルタクスが、食らった刃のカウンターとして繰り出したあの一撃と同じものを、盾兵として防ぎ切る自信はある。

しかしそれはあくまで、準備万端で待ち構えていた場合でのこと。

殆ど反射的に繰り出された攻撃に対して咄嗟に対応してみせた上に、ただ単に衝

撃を受け止めるだけでなく、我が身にまで届かないように盾の部分のみで散らしてみせた熟練の技は、デミ・サーヴァントとしての能力の一部しか扱いきれず、未だ振り回されることも多い今のマシュには程遠い領域である。

『勇者リンク』は、剣や弓や魔術だけでなく、盾の扱いにおいても達人だった。

それは、『ゼルダの伝説』の本を読んでいるだけでは分からなかった、本人の活躍を目の当たりにするようになってようやく知ることが出来た事実。

それに対してマシュは、喜びや感動だけでなく、今までに感じたことのないような奇妙で得体の知れない、辛うじて『不快』に属するものだけでは判断出来る感情が生じていることに気づいた。

立香や当のリンクに相談すれば、『マシュは悔しいんだね』と、『一番の得意分野で負けたくないんだな』と、彼女の情緒が順調に育っていることを喜びながら笑って教えてくれるであろうことに、今のマシュは自力では辿り着けない。

仮に辿り着けたとしても、今の彼女ではまだ、『多くの戦いの中で研鑽を積んできたであろうリンクさんと、サーヴァントとしての真名を知らずに宝具の真名開帳すら未だ出来ない自分を比べて、あまつさえ悔しいとまで思ってしまうなんてどん

だけ……』と恥ずかしさのあまり塞ぎ込んでしまいそうなので、逆にこれで良かったかもしれないのだが。

密かに悩むマシュをよそにリンクは、右腕に辛うじて残っていた盾の残骸を外し、あれだけの血を噴いておきながら既に傷が塞がっているスバルタクスの体を見て、切りかかった時の感触と反応を思い出し、ひとつ頷きながら呟いた。

「成る程、わかった」

《何が!?

今の一瞬のやり取りで、一体何が分かったと言うの!!》

「それを今から確かめる」

《少しでいいから説明して、何も分からないまま見てるこっちは心臓に悪いんだってば!!》

「……それじゃあドクター、あと立香とマシュにも課題だ。

『スバルタクス』がどんなサーヴァントなのか、どんな風に戦ってどうやって倒せばいいのか、少し考えてみてくれ」

「ええっ!？」

「上手い具合に思いついたら、それで正解かどうか実践してやるから」

「待てこら、いきなり無茶ぶり過ぎるだろ!!」

「気張れよ、マスター」

そう言って、少し悪戯な表情と横目で笑いながら、新たな剣を抜いて駆け出していったリンクを再び呼び止めることは、立香には出来なかった。

リンクが、戦士としてだけではなく策士としても優れている伝説の勇者が、自分を『マスター』と呼び、意思と決定を委ねてくれた事実が、彼の中で突如重たく伸びしかかってくる。

「……そうだ、俺は『マスター』なんだ。

最前線で戦うリンクに、指揮官の務めまでいつまでも負わせっぱなしにするんじゃないくて、俺も少しは考えて判断出来るようにならないと」

それは、『そう在るべき』という義務感によって課せられた責任ではなく、彼自身が『そう在りたい』『そう成りたい』と願っていたことだった。

願うだけでなかなか実践出来ていなかった自分に、リンクがようやく、多少の負担を覚悟してまでその機会を作ってくれたのだと、気付いた以上は投げられない。彼があそこまで言ったということは、勉強も経験もまだまだ不足している自分でも、何かに気付き、何かが出来る余地が、現状にはあるということなのだろうから。

（リンクがスパルタクスと接触したのはたった一回、ほんの一瞬……思い出せ、あの瞬間に一体何が起こっていた。

リンクは何をおかしいと思った、何に対して違和感を覚えたんだ？）

頭から煙が噴くのではと錯覚しそうな勢いで必死に思考を巡らせる立香の前では、リンクとスパルタクスの激闘が、恐々としながら見守る兵士達が思わず目を覆いたくなる程の、とんでもない迫力で以って繰り広げられている。

しかしそれは、途切れることのない剣戟が響き、血や肉片が飛び交うといった類

いのものではなかった。

リンクがスパルタクスに対して武器を振るい、彼に傷を負わせたのは最初の一撃のみ。

今の彼は、スパルタクスの攻撃対象から外れないように適度に挑発して引きつけながら、一撃でも当たれば致命傷となりかねない猛攻を避け、捌き、即席の闘技場という限られた空間の中で、ただひたすらに逃げ続けている。

それを情けないだの、臆病だのと言って嗤えるような者は、誰一人として存在しなかった。

彼がどれだけ無茶なことを成しているのかを、もしあそこにいたのが自分だったら、とつくの昔に肉塊となって血飛沫を撒き散らしているであろうことを、誰もがたやすく想像出来たから。

リンクならばまだいける、まだ大丈夫だと心から信じながらも、立香の焦燥は募るばかりだった。

『答えを思いついたら実践して確かめてやる』と、リンクは言っていた。

ならば早いところ答えを出してリンクに指示を出さないと、彼はいつまでもあの

まま、闘牛の赤い布状態から抜け出せない。

いくら考えても答えが見つからない、状況を打破出来る気がしない……そんな崖っぷちギリギリな心境だった立香の脳裏を、同じように追い詰められた崖っぷちから幾度となく生還を果たしてみせた者達の、お馴染みのフレーズが横切った。

「……………発想を、逆転させる。

スパルタクスは、リンクの攻撃を避けられなかったんじゃないかって、避けなかった？

敢えて、わざわざ食らった？

だとすればもしかしたら、リンクが自分から攻撃しないで避けまくってるだけなのも、別に俺の答えと指示を待っているだけな理由じゃなくて……………」

「……セ、センパイ？」

「リンク!!」

そいつを傷つけたり、痛めつけたりはしないまま、動きだけ封じてくれ!!」

「お見事、正解だ!!」

立香の答えに満足げな笑みを浮かべたリンクは、何度目か、自身へと向けて筋肉の弾頭の如く突撃してくるスパルタクスへと向けて、どこから取り出した弓を構え、青い鏃の矢を番えて引き絞った。

冬の朝のように冷たく張りつめた空気が、耳鳴りのように甲高く鳴った音が、轟音と静寂の境目となった。

突撃の真っ只中だった勢いはすぐには治まらず、顔面から地に突つ伏すという少々間拔けな姿となつてしまつた氷像は、地面に数メートルの跡を残し、リンクの足元近くにまで達したところでようやく止まつた。

スパルタクスが、連合軍の兵士達を圧倒し続けた將軍が、その強さを頼りにすると同時に恐れてきた男が倒された……それも、仲間の言葉をきっかけに攻勢に転じてからの、たった一度の攻撃で。

声どころか、うかつに音を立てることすら躊躇われてしまうような驚愕と緊張感を、『青スーツトンガリ頭のイチャモン弁護士さんありがとおーーーーっ!!』という、訳が分からない上に間の抜けた絶叫が程よく緩和している中で。

リンクの実力を、『伝説の勇者の再来』とまで謳われているという事実を疑うような者は、もはや誰一人としていなくなっていた。

蛮勇にあらず

ネロとブーディカの部隊が、ガリア遠征の野営地にて合流を果たしてから数日が経った。

情報の食い違いと勘違いによって燻ぶってしまった火種と、それが引き起こしてしまった盛大な爆発の後始末が少々長引いてしまったものの、部隊全体の意欲と気力はかつてない程の高まりを見せている。

長く続いてしまった戦いも次で最後だと、勝利とガリアの地の奪還は成ると。

そう心から信じる者達が、明日か明後日かと迫っている決戦の最終準備に迫われている中に、彼らにそう思わせる原動力となった当地人の姿が見受けられない。

そしてそれは、今この時に限ったことではなかった。

「リンクったら、また一人で飛び出してっちゃったわけ!!」

「すいません、一応声はかけたのですが……」

「あいつに本気を出されたら、俺達じゃ止められないからなあ……」

《一人の方が色々動きやすいっていう彼の言い分も、悔しいけど事実だからね》
「ああもうっ、ほんと仕方のない子なんだから!!」

腰に手を添え、只でさえ豊満な胸をより一層張りながら怒りと不満を露わにするのは、実力とはかく内面的には紛れもなく普通の、至極善良な少年少女だったクルデア組に、当初抱いていた不審を他所にあっという間に絆されてしまったブーディカだった。

実際に娘がいたからか、それとも彼女自身の元々の性質がそうだったのか。

過酷な状況で懸命に頑張る子供達を放っておけず、余計なお世話かもしれないと少しだけ危惧しながら、それでも我慢できずに『母』や『姉』などの年上の女性と

しての愛を示すブーディカが、リンクの単独行動に対して不満を抱きつつも本気で止めない……止められないのには理由がある。

立香が言ったように、実力的な意味で不可能もしくは困難であることと、それが彼自身が今後戦っていく為に必要なこと。

そして、そんな彼の行動が、部隊全体に大変な利をもたらしているからだ。

「リンクの宝具、シーカーストーンの機能のひとつ……マスターや自分自身の魔力のみに頼らず、様々な素材をリソースに変換して武器や道具を生成出来るって聞いた時は、何そのチートって思ったんだけど」

《美味いだけの話っていうのは、そうそう無いんだよね。

道具どころか、相応に頑丈である筈の武具までも盛大に使い潰す彼の戦闘スタイルを最大限に生かすためには、大量の素材及びリソースと、それを用意する為の事前準備がどうしても必要になる。

その手間を考えると、普通に魔力を消費して戦った方がよほど楽な気がするよ。リンク君が、戦闘だけでなく狩りや採集の達人でもあって本当に良かった》

「……………本当に、凄かったですね」

マシュが少し遠い目をしながら思い出しているのは、ここ数日の間に目の当たりにした光景の数々。

自分達を率いるに値する将だと認められ、諸手を挙げて部隊に受け入れられたというのに、早々に勝手な単独行動に出たリンクをビシッと叱ってやらねばと、意気込みつつその帰りを待ち構えていたブーディカは、彼女の怒りを想定していたらしいリンクの『手土産』を前に開いた口が塞がらなくなってしまった。

その日の彼の獲物は、立派な角を持った鹿や、それらを共に狙っていたらしく、鉢合わせてしまった上に襲いかかってきたところを返り討ちにしたという狼。

更には、丸々と太った鳥や兎、毛皮が見るからに上等な狐などが、山となって積み上げられて。

それらは全て、毛皮などの食用以外で役立てられる部位を傷つけない為に目を射抜くことで仕留められていて、量だけでなく質で考えても大変な成果だった。

（辺り一帯狩り尽くしてしまったのではという危惧は、出来ないことは無かったけ

ど流石に自重したという発言によって色々な意味で上書きされた。）

その後もリンクは、野営地を一人で飛び出す度に、大変な成果を伴いながら帰ってきた。

部隊に随行している医者から、周辺で採取可能な薬草の種類と見分け方を教えてもらい、少し前から無くなりかけているのに、周辺の状況が危険すぎて探しに行けなくて困っているというのでに愚痴られた数時間後には、袋どころか籠をいっぱいにしてきたとか。

薪の量が心もとないと何処からか聞きつければ、巨大な斧を担ぎながら向かった森で大木が倒れる轟音を何度も響かせ、大量の薪束と、何故かついでに仕留めたという熊を担いで戻ってきて出迎えたマッシュに悲鳴を上げさせたとか。

『勇者』って、『狩人』や『木こり』の別称だったの？

そんな疑問とツツコミを、この数日で立香はいくつ呑み込んだことか。

リンクが一人で出かけたがる理由が、戦う為の準備をしたいからだということを知っていた立香達は、あまり無理をしないでと、自分の都合を優先していいと、きちんと言ったのだけだ。

『大丈夫、俺が使う分はちゃんと取ってあるから。

アレはあくまでそのついで、俺が必要だと思ったことをやってるだけだから気にしないで』

笑いながら言い切られてしまえば、それ以上突っ込んだ話を続けることは、今の立香達には出来なかった。

あくまで状況の問題であって、彼が自分達を信頼していない訳ではないということを信じてはいるけれど……それでも、頼ってもらえないことが悲しくて、頼りに思える程の力が今の自分達には無いという事実が悔しくて。

そんな子供達の複雑そうな表情を前に、肩を落としながら大きなため息をつくブーディカ。

立香やマシュが今はまだ気づいていない、リンクが単独行動を取る理由のもうひとつに、彼女は何となく心当たりがあった。

ブーディカは、まだ体が成長しきってすらいらないような少年に無理を強いること

を個人としては嫌がついていても、それを上回る程に彼の力が有用だと、必要だと判断したのならば、きちんと割り切れるだけの覚悟を持ってここに立っている。

正式な任務としての体裁を整えて後を押し、いざという時にこちらで責任を負えるようにしておいた方が、結果的に彼を手助け出来るのだということも分かっている。

しかしリンクは、きちんと話しさえすればブーディカは許してくれるだろうことを認識した上で、敢えてそれを良しとはしない。

単独行動はあくまでリンクの独断に過ぎず、全ては自己責任だというスタンスを崩そうとしない。

責任者として大規模な部隊を束ね、決戦を前にして色々と立て込んでいる彼女やネロに、これ以上の負担を負わせることを忌避している。

その判断が自身の実力を見誤った自惚れから来るもので、部隊の安全や今後の勝利を脅かしかねないような愚行ならば、叱ってやめさせるのは簡単だったのだけだ。

彼が自身の能力を最大限に生かすには本当にそれが最善なのだと、自分に出来る

ことをごく自然かつ客観的に見極めた上での判断であり行動なのだと、今後のことを本気で考えるのなら彼を止めてはいけないのだということを、ブーディカは、『勝利の女王』としての冷静かつ合理的な思考で見抜いてしまっていた。

何かを得て、余裕があるのなら躊躇うことなく皆と分け合い、時には最初から誰かの為に奔走しながら、何かしらの不都合が起こってしまった時の損と後始末は自分一人で負う。

そんな無茶と不平等を『何てことない』と許容し、周囲の心配と反対をそれ自体は本当にありがたく思いつつもはね付け、勝手な我が儘であることを承知の上で押し通すことが出来る程の、それを示したのがリンクでなければ傲慢だと思ふ程の自信と実力が、彼には疑いようも無く備わっている。

「……間違いなく助けられている上に、彼を窘められる言葉や方法が全く浮かばない身で、こんなことを言うのは何だけど。」

ほんっとあの子どうにか出来ないかなあ、心を置き去りにして力や責任感だけ早々に大人になっちゃった子なんて見ている方が辛いよ」

「我が反逆の同胞よ、その悩みを自身の不徳と恥じることはない。

何しろかの者は、恐ろしく忌まわしき魔王の圧政を幾度となく打倒した、偉大なる反逆の勇士である。

常識や定石に逆らうことなどは、もはや呼吸に等しいのであろうよ」

「……あははっ、何それ。

スパルタクスってばもしかして、あたしを励ましてくれてるの？

その気持ちは嬉しいんだけど……あんたやっぱり、リンクのことを伝説の勇者様本人だと思い込んでるね？

まあ仕方ないか、あの見た目と強さだし」

「……やっぱりスパルタクスさんには、リンクさんの隠蔽が効いていないみたいですね」

「アマデウスも見破ってたし、その人なりの理由と基準を軸に確信を抱けば無効化出来るみたいだってリンク自身も考察してたし、それ自体は別におかしくはないんだけど」

《彼が普段から支離滅裂な発言を繰り返しているバーサーカーで良かったね、お

かげで欠片も疑われていないみたいだ。

何があても隠し通すつもりは無いけれど、別に今わざわざ言うようなことでもないし、ここはとぼけさせてもらおう》

「よし決めた、うじうじ悩んでいるなんてあたしらしくもない。

どんなに実力があつて、どんな凄い成果を出したとしても、仲間に心配をかけるのを当たり前にしていい訳がないでしょ！

これからはちゃんと叱るからね、手始めに今日の夕飯のお代わりは二杯までにしよう」

「ブーディカさん、それあいつにとっては何気にきついやつ！」

「美味しい美味しいって、ブーディカさんのご飯はいつも五杯はお代わりしてましたからね」

『酷いなあ』と口では言いながらも、楽しげに笑う二人の様子からは、それを止めさせようとする意図は見受けられない。

心から感謝している、間違いないく頼りにしている、それでも。

自分達は怒っているのだと、許していないのだと……彼一人に頑張らせてしまうことを、彼は強いことから大丈夫と開き直って、仕方ないと諦めるつもりは毛頭無いのだと。

伝え続けることだけは決してやめないと、そう心に決めていた。

そしてその頃、仲間達の間でそんなやり取りが繰り返されていたとは露知らず、今日も元気に素材回収ツアーに勤しんでいた勇者様はと言えば。

「食料や薬草、鉱石なんかの自然の恵みに頼るだけじゃ、やっぱり効率が悪いし……
と言うより、日帰り出来るような範囲でこれ以上狩りを続けたら、今後の再生に影響を及ぼしそうだし。」

武具の類いは生成するとリソースの消費がでかいから、出来ることなら現物を回収したいところだし。

……となるとやっぱり、あそこに行くしかないよなあ」

『うーんっ』と背を伸ばし、軽く音を立てながら首を回し、手のひらに拳を打ち付

けて気合いを入れる彼の目には、かつては人の喧騒で満ちた立派な都市だったのであるうに、今は武具を纏った兵士達の前線基地と化している建造物の群れが映っている。

それは、ネロ達が『ガリア』と呼んでいた都市の名残……此度の遠征の最終目標であり、『連合』を統べる皇帝の何れかが、サーヴァントの存在が想定されている場所であった。

ちよつと忍び込んで、ばれない程度にあれこれと頂戴して、あと時間に余裕があれば今後の為にも色々と仕込んでこよう。

無理をしないし、何かあったらすぐに逃げるから大丈夫だと……本当にその程度の軽い気持ちで、これから敵の本拠地に乗りこむつもりでいる彼には、今はまだ分からない。

大変なことだとは本気で思っていたが故に、ふとしたタイミングであっさりと口を滑らせてしまったその事実が皆を本気で怒らせ、お代わりどころか夕食そのものを取り上げられる羽目になることを。



幻の少年

かつてはローマ帝国の主要都市のひとつであり、今は連合ローマ帝国の軍が展開されているガリアの町。

それをぐるりと囲む城壁の上から、周囲を余さず見渡さなければならぬ筈の兵士達の視線と注目が、城門付近の喧騒へと向けられていた。

人や荷車が列を成し、入城の許可が下りるのを順番に待っている様子が窺える。検査に追加の人員を割かれ、物資の流れが多少滞ったとしても、この工程を一切の妥協無く行うべきというのが、この部隊を指揮する『皇帝』その人の采配だった。

「随分と警戒が厳しくなってるな」

「次の戦いが近づいてるんだ、無理もないだろ。」

斥候も帰ってきていないらしいし、そんな状況でこっちの情報だけ取られでもしたら堪ったもんじゃないからな」

過剰にも思える程の警戒態勢と、それを決行した者達の心境に理解と共感を示しながらも、彼ら自身の意識や心境はそこまで張りつめてはいなかった。

高い城壁からはとても広い範囲を見渡すことが出来るから、ちょっと目と注意が逸れても敵の接近に気付くには十分間に合うから、この高い壁を誰にも気付かせることなく越えて不意を打つなんて到底無理な話だから。

そんな、抱いてしまうのも仕方がないような安心と油断の隙について、真昼だというのにホラー映画のワンシーンを思わせるような異様な迫力と勢いで、城壁の向こうから現れた手があった。

丁度そちらに背を向けた状態で、未だ談笑に興じていたが故に、それに気づけなかった兵士達はある意味で運が良かったと言えるだろう。

見つからなければそれでよし、見つかったとしても速攻で意識を刈るから結局は問題なし。

そんな、本当に忍ぶ気があるのか問い詰めたくなるような脳筋思考で以って、侵入者はその場所に踏み込んでいたのだから。

城壁を構築する石材をそのまま砕き割りそうな力強さで掴み、その身を一気に乗り上げさせた彼は、誰の目にも耳にも気づかれていない、実力行使の必要がまだ無いことを一瞬で確認し、町並みへと続く向こう側の虚空へと一息で駆けた勢いでそのまま飛び込んだ。

これ以上の怠慢は流石にまずいと、警備と警戒に戻ろうと振り返った兵士達の前には既に、何の変哲もないいつも通りの光景が広がっていた。

そうして、侵入が物理的に困難な場所であったが故に油断してしまった兵士達の隙をつき、困難だとしても不可能ではないのだと証明しながら、第一関門を力づくで突破したリンクは、一旦人気のないところに身を隠す……なんてことはしなかった。

嚴重な警戒と検問は確かに、内部の秘密と安全を守る為には必要不可欠なのだけ

れど、それを徹底することとあるデメリットが生じてしまう側面もある。

ここは守られていると、大丈夫だという信頼と安心が高まる程にどうしても、『中に入れた者、中に居る者は、きちんと証明された味方である』と無意識に思い込んでしまうのだ。

この状況では、下手に視線を避けたり身を隠そうとする素振りを見せた方が逆に目立ち、怪しまれていただろう。

外套を頭から深くかぶり、変なトラブルの元となりかねないことを一応は自覚した顔を隠し、その風体のせいであまり人目を引きながらも、数々の危機を乗り越えてきた経験から来る豪胆な精神と心臓で以って、多くの人と喧騒が行き交う大通りを堂々と闊歩するリンクを侵入者と疑うことが出来る者は、誰一人として存在しなかった。

「物資の搬入はあらかた終わったな」

「ああ……ただ念には念だ、追加分の申請をすぐに出しておこう。」

裏の取れていない、あくまで噂の話だけれど、帝国側に新たな将が加わったらし

いからな。

次の戦いは相当な激戦になると見ていいだろう、準備しておくに越したことは無い」

「……………（既にこれだけの物資を投入しておきながら、まだ追加する余裕があるのか。）

テントを広げて並べただけの野営地に、備えも決して豊かとは言えない状況で、今までよく戦線を維持したものだ……ブーディカさん達、本当に頑張ってたんだな。この状況で長期戦にもつれ込んでもこっちが消耗するだけだ、次の戦いで何が何でも決着をつけないと）」

さりげなく繰り広げられている重要なやり取りに、通り過ぎざまに耳を傾けて情報を得ながら、外套の下に隠れたリンクの目はとあるものを探して動いている。

そうして、ふとした瞬間に希望に沿うものを見つけたリンクは、口元に僅かな笑みを浮かべ、息を荒げながら大きく上下する背中へと声をかけた。

「あの、すみません」

「何だ、今は忙しいんだが」

「分かってます、大変そうなので手伝って来いと言われてまして。えっと、この荷物ですな」

「ちよっ……待て待て坊主、そんな細い体で無理すん」

「よいしょっと」

「嘘だろ、マジか!？」

「これ、どこに運べばいいですか？」

「あ、ああ……それじゃあ、そっちの奥に重ねておいてくれ」

「はい、分かりました」

「悪いな、正直言っただけだったわ」

「いえいえ、仕事ですから」

ああそれと、実は俺、さっきここに着いたばかりで、建物場所とか覚えきれてなくて。

こっちが終わったら、次は武器庫の方に来てくれて言われてるんですけど……

この通りをあっちの方に向かって、突き当たったら右で良かったですか？」

「逆だ逆、誰にどんな教わり方をしたんだ!？」

危なっかしい奴だなあ……仕方ない、適当に地図を書いておいてやるよ。

それを全部運び終わった後で渡してやるから、頑張ってくれ」

「ありがとうございます。」

……あの、出来ればその地図に、覚えておいた方がいい重要な場所についても書いておいてもらいたいんですけど」

「ああ、構わないよ」

その後、荷物の山を早々に片付け、簡単ながらも丁寧に書かれた地図を受け取り、お礼を言いながら雑踏の向こうへと消えていった彼を……深くかぶった外套のせいで殆ど様相が窺えなかったにも拘らず、何故か惹き付けられて仕方がなかった少年を見かけることは二度と無かったという。

最初にわざと間違いを提示して、それを訂正させることでより正確な情報を得ることは、ホームズの情報収集テクニクです。

リンクはそれを知りませんが、執筆のネタとして参考にしてみました。

VS カエサル

大都市ガリアの中枢、以前はこの町を治める統治者の住居兼仕事場として用いられていた館。

今では町全体が前線基地としての役割が強くなり、権力者の館としての華やかな空気や装いがすっかり失せてしまっていたその場所に一個所だけ、かつて以上の絢爛な光景が繰り広げられているところが存在していた。

ローマ人が好む黄金を使用して作られた豪華な大皿が幾つも並び、その全てに、今にも縁から零れんばかりの料理が盛られている。

軽く見積もっても7、8人は満足に食べられるであろうその料理の山に、深紅

の袖口を伴った手が伸ばされた。

ローマ貴族の食事の作法に則って、指先が汚れるのも構わずに素手で掴み、ふくよかな頬を更に膨らませながら豪快に咀嚼するさまは、時代と場所が違えば下品だと眉を顰められかねないようなものだったのだけれど。

彼の場合は許されてしまうのではないか、むしろ周りの方が何を言われずとも彼に追隨してしまうのではないか……見る者にそう思わせてしまう程の気品と自信が、彼の指先から目線に至るまでの一挙一動に存在していた。

少し頬がこければ極上の美男子となるであろうに、理想像とは逆にボールの如く膨らんでしまっている顔と、女性をその腕に抱き込むのを試みた段階で邪魔するであろう腹という有り様は、痩せていた頃の彼を知る者が見れば、ショックのあまりにひっくり返ってしまうかもしれない。

にも拘わらず、一人では到底食べきれそうにないような料理の山に、我慢や節制なんてものは単語すら知らないとしても言わんばかりに、口の中が空いている時間が一切無いような勢いで次から次へと手を伸ばし続ける彼の内心は、何とも表現しがたい虚無によって満ちていた。

今飲み込んだものは、果たして辛かったのか、それとも甘かったのか、美味しかったのか、不味かったのか。

それを意識し、思い出すよりも先に、次の料理が口の中に詰め込まれ、味を感じる間もなく喉へと押し込まれた。

今日だけで既に何度も何度も、数えるのがとうの昔に馬鹿らしくなってしまった程に幾度となく繰り返し返されてきたそれが、この後更にどれだけ続けられることとなるのか、自分ですらも予想がつかない。

自分が今行なっているこれが、『食』というものに対する冒涇だということは分かっている。

誰かがこのような真似をして、それを目の当たりにすれば『何と勿体ないことを』と怒っていきそうだと、自分で思ってしまう程に。

食事という行為と、それに伴うひと時を、本来の自分はとても大切に、そして楽しみにしていた筈だった。

（内政に忙殺され、ストレス由来の過食に走っていた時期を『全盛期』とするのな

らば、クラスが『セイバー』というのはおかしくはないか？

ならばいっそのこと、遠征の地で『彼女』と逢瀬を交わした時の私の方が……いや待て。

それはそれで、激務のあまりにやつれていた頃の筈だから、大して変わらぬか。そもその話……暴食がやめられぬのは、顕現した時期の影響だけが原因ではないからな)

そんなことを考えながら、心の中だけでため息をつきながらも、料理を運ぶ手と咀嚼する口は一向に止まる気配がない。

口の中が一杯になり、歯が咀嚼し、柔らかくなった塊が喉元を通過する。

それら一連の行為と感覚こそが、心の中に溜まり、思考を滲ませる暗い淀みを少しずつ、腹の奥底へと落としていってくれる。

そんな、よくよく考えれば一時凌ぎの誤魔化しでしかないような、新たに得るものや生み出すものが何も無い不毛な行為が、今の彼には必要だった。

料理人達に早めに声をかけ、追加の料理を準備しておいてもらった方がいいかも

しれない。

いくら飲み込んでもなかなか減ってくれない淀みにうんざりしつつ、次の一口を得るべく手を伸ばした……そんな彼の背中に、抜き身の切っ先がそと突き付けられた。

「……っ!？」

「騒ぐなよ將軍、兵士達が異変に気付いて駆けつけるよりも俺の剣の方が早い」

自身が指示した警戒態勢によって守られた町の、中でも最も嚴重な警備が施されている中枢部に座している身で、安心を通り越した油断を抱いていなかったと言え
ば嘘になる。

しかし、暗殺や間諜といったものの恐ろしさを忘れたことはないし、それらに対する備えを怠ったことはないし、加えて今の自分はサーヴァントなのだ。

陣地を構築出来るキャスターや、気配に聡いアサシンとまではいなくても、身体能力や五感といった素の力で、ただの人間とは比べようもないものがこの身には

備わっている。

その筈なのに、避けることも、逃げることも出来ない状態に陥ってしまうその瞬間まで、彼という存在に一切気付くことが出来なかった。

音も気配も皆無だった……自分が生きた時代に彼のような暗殺者がいたならば、歴史は随分と変わっていたことだろう。

そんなことを考えながら開かれた彼の口は、この状況に相応しいとはとても思えない、突拍子もない発言を紡ぎ出した。

「……君は、食べることは好きかね？」

「……………へ？」

「腹が空いてはいないかな」

「はあっ？」

ゆっくりと振り返った瞳に映ったのは、目深にかぶった外套の隙間から僅かに覗く、美貌の暗殺者の呆けた間抜け顔。

自身が成し遂げた成果に満足した將軍カエサルは、ふふんっと得意げに鼻を鳴らせた。

「君の狙いが私の暗殺であつたのなら、気付かれることなく背後に迫つた時点で済ませてしまえば良かったのだ。

それをせずに、わざわざ声をかけて牽制するという手間をかけたのは、そうすることを得られる別の何かがあつたのだろう。

君は私と余人を交えずに話をしたかつた、何かしらの情報を得たかつた……違ふかね」

「その通りなんだけど……だからって、無防備な背中に剣を突き付けて脅した奴を、いきなり食事にだなんて普通誘わないだろ」

「その台詞を、そっくりそのまま返させてもらおう。

この状況で、誘われたからと受ける奴は普通居ないと、私ですら思うのだが」

「じゃあ何だ。

料理を摘まみながら穩便に腹の内を探り合うんじゃない、背中に剣を突き付けられたあの状況のままで強引に色々と吐かされるのが、將軍閣下のお好みだったか？

「人を妙な感性の持ち主かのように言わないで貰おうか。

全く……私が言うのも何ではあるが、よくもまあ舌が回る奴だ」

振りではなく、心からの呆れと驚きを表しながら。

料理の山を挟んで向かい合う暗殺者の少年を、カエサルは改めてその目と意識に留めた。

敵地のご真ん中にたった一人という状況で、敵将に勧められた料理をあつさりと言口にしてみせた豪胆さは、それが既に当の敵将自らによって、毒や害の無い普通の料理であることが証明されていたが故か。

それとも、彼自身が元から備えていた性質か。

恐らくは後者であろうと、カエサルは確かめるまでもなく確信していた。

この町が今、どれだけ嚴重な警戒態勢にあるのかをよく知っている。何しろ自分が指示を出したのだから。

それをあつさりと潜り抜け、兵士達を騒がせることの無いまま中枢部まで辿り着

き、將軍の命に刃を突き付けてみせた彼の實力は、もはや疑いようもない。

取り払った外套の下から現れた素顔までもが、多くの美女と浮名を流した自分ですら、悔しいと思う間も無いまま素直に認めざるを得ない程の、そう感じる者に年も性別も問わないであろう美しさで。

サーヴァントでも、連合ローマ帝国の皇帝としてでもない、一人の野心家としての心が久々に沸き立つのを、カエサルは感じていた。

「それで、君は私に何を聞きたかったのだ？」

「単刀直入だな、もっと粘るかと思つてたけど……まあいいか、手間が省けるならそれはそれで何よりだし」

「君の剣はあの時、確かに私の命を捉えていた。

その刃を引いてくれたことへの礼として、無条件でひとつだけ、どんな問いにも答えてやろう」

「随分と破格じゃないか、何が狙いだ」

「人聞きが悪いな、命を救ってくれた礼だと言っているであらうに。」

さてどうする、やはり我ら連合の機密事項について尋ねてみるか？」

「止めておくよ、それが事実だと確かめる方法が俺には無いから。」

仮にその情報が嘘だった場合、それを元に動いた結果、取り返しのつかない事態になりかねないじゃないか」

「ふむ、慎重だな。」

まあ確かに、情報操作が戦術として有効であることは、君ならば容易く思いつくであろう」

「でも折角だから、帝国とか連合とかとは関係のない、個人的なことについて聞かせてもらってもいい？」

「ああ、構わないとも」

「ありがとう、それじゃあ遠慮なく」

その瞬間、話しながらも料理に手を伸ばすことはやめず、自分と違って本当に美味しそうな、幸せそうな、年相応の笑みを時折浮かべていた少年の、表情と纏う空気が一変した。

想定に沿わないどころか覆す状況に、ほんの一瞬呆けてしまったカエサルが自身を取り戻して反撃を試みるよりも先に、少年は、『カエサル』という男の根幹に切り込む言葉の刃を繰り出した。

「ガイウス・ユリウス・カエサル、人理にその名と業績を刻んだ偉大な人よ、教えてくれ。

あなたが今そこに居るのは、令呪とマスターに逆らえないから？

……それとも、あなた自身の意思でか？」

数々の戦場で華々しい勝利を収め、権謀術数を駆使して政治の場でも戦い抜いた自らの力を正しく認識し、決して驕りではない正当な自信を持っていた彼は、今の時まで、場を掌握し、話の向かう先を決める権限を持っているのは自分だと思っていた。

実力と気概は確かでも、未だ若く、豊かな情緒とお人好しな性根を抑えきれずにいる少年を、得意の口車で転がしてやる自信があった。

彼が危惧していた通り、『答えてやるとは言ったが、それが正しいものだと言保証した覚えも、その旨を明記した書類も無い』といった感じの、素直で誠実な者が聞けば『詐欺師』と罵られそうな屁理屈で、こちら側の大事な情報は上手く隠したまま、少年が知る限りの帝国の情報を引き出してやる気が満々だった。

それら全ての思惑がそれこそ驕りであり思い上がりであつたと、目の前の人にはいつもの口だけではなく本当に誠実に向き合わなければならないと。

胸の奥底からゆっくりと滲み出てくる、焦がされそうな程に熱いのに決して不快ではないこの心地はまるで、多くの女性と浮名を流すことを楽しんでいた自身が、『彼女』と出会い、本当の愛というものを知ったあの時のよう。

腹の底から声を上げてしまいたい気持ちを必死に堪えながら、カエサルはゆっくりと口を開いた。

「例え令呪によって行動の自由を奪われていたとしても、他の者を扇動し、自身を殺すように仕向けるのは、私にとっては大して難しいことではない」

「本当に不本意ならとくに自害していたし、自分にはそれが出来たか？」

『我らがマスター』は、サーヴァント達の魔術師たる自身に逆らえない使い魔だの以前に、どうも『人』という種そのものを見下していたように思える。

……だが約束は守ると言った、その言葉だけは確かだと思った。

故に私は、人理が完全に崩壊するまでの僅かな猶予の中で、ごく個人的なものでしかない最後の願いを叶える為に、私自身の確かな意思で、人理の敵となることを選んだのだよ」

「……そっか、分かった」

「……怒らないのかね。」

私は、私個人の小さな願いと世界とを天秤にかけて、自らの我が儘を選んだ罪深き男なのだが」

「怒るわけではない。」

だってそれは、他人から見れば小さいのかもしれないその『願い』が、あなたにとっては世界そのものと並べられるくらいに大きく、大切なものだったただけの話だから」

あらゆる『願い』は尊ばれるべきものだと、建前や口先だけの綺麗ごとではなく、本気で口に行っているらしい少年の微笑みに、カエサル密かな緊張が若干解けた……のは、ほんの一瞬だけのこと。

優しく懐深いのも、容赦なく辛辣なもの、どちらもが紛れもない彼の本質であり、何故か破綻することなく両立させているのだと知ってしまったカエサルの、首から背筋に渡って若干の鳥肌が走った。

「でも良かった……これでもし、『逆らえなかった』とか『仕方がなかった』とかの小物臭いことを今更言ってきたら、ガリアでの戦いにこの場でケリをつけていたところだった」

「……戦場という危機的状況の中で心身が擦り減っている時に、覚悟の無い、心の弱い者と対峙することは、人によつては後々にまで悪影響を及ぼしかねないからか？」

「良い子なのは間違いないけれど、純粹すぎて良くも悪くも影響を受けやすい奴が、こっちにはいるんだよなあ。」

……にしても、そういうことにすぐさま気が付いてくれるってのは、やっぱりいいな。

騙す、欺く、裏をかく、そういった方面で策を巡らすことが悪いとは思わない。だというのに、出来る人や得意な人が少なくて、陣営全体では苦手分野になってしまっているのが現状なんだ。

あなたさえ良ければ、この戦いが終わった後で、是非ともこっちに加わってもらいたいところなんだけど」

「何を甘いことを言っているのかね。

連合の皇帝として、帝国に甚大な被害を与え続けてきた私を受け入れる余地など、政策としても心情としてもあり得ないだろうに」

『『帝国』にじゃないよ、俺達『カルデア』にだ』

「……………そうか、君は、『カルデア』のサーヴァントだったのか。

焼き尽くされた世界に辛うじて残り、今もなお、人理焼却そのものに対して抗い続けている者達。

ならば尚更のことだ、そこに私が加わる訳にはいかない。

……人の世が滅ぼされたと知った時に、戦おう、抗おうなどとは考えず、残された時間で自らの願いを叶えることのみに腐心した。

そんな私が混ざり込んだとして、組織全体の足並みを乱してしまうのが落ちだろう」

「……………あなたは、諦めてしまったのか？」

「情けないと詰るなら構わない、何が將軍カエサルだと呆れるも良からう。

だが私は……………これから滅びてしまうのではなく、既に滅びてしまった後の世界で、賽はとうに投げられ、出目は定まってしまった、もはや何もかもが取り返しのつかなくなろうとしているこの状況で。

常勝の將軍ではなく、ローマ帝国の執政官でもなく、ただ一人の男として心から悔い、そして願ったのだ。

生前とは逆の選択を……………公ではなく私を、国や世界ではなく愛する者達を選ぶたい、今一度会って謝りたいと。

その想いと決意は、こうして君と相對し、偽りのない言葉を口にした今もなお、欠片も揺らいではない」

その言葉は真実だった。

彼の表情を、目に宿る決意の輝きを前にした上で、それを疑うことはもはや冒瀆である、少年は思った。

そして同時に確信してしまった、言葉では彼の決意を動かすことは出来ない。しかし彼は知ってもいた、こういう時は行動あるのみだということを。

「なあ將軍、勝負をしないか？」

今この場で、最低限の道具のみで出来る簡単なものなら、内容はそちらで決めていい。

あなたが勝てば、間近に迫っている次の戦において、俺は手出しをしないと約束しよう」

「……ふむ、一考の余地があるな。

それで、仮に君が勝ったとして、君は私に何を求めるつもりでいるのだ？」
「具体的な行動は、特に何も。」

ただ、今一度……人という種の強さを、可能性を、未来への希望というものを、信じてみてはもらえないだろうか」

「……………」

「頭と察しが良く、それ故に、現状を残酷な程に正しく認識してしまったあなたに、こんなことを頼むのは酷なのかもしれないけれど」

「構わぬ、私が勝てばいいだけの話だ。

実際には叶わずとも、試みることだけはしてやろうとは思う。

それで構わないか？」

「十分だ、ありがとう」

「肝心の勝負の内容なのだが……うむ、やはりこれかな」

頷きながらカエサルは、二つのサイコロをどこから取り出した。

見るからに上等な品でありながら、よく使いこまれて年季が入っているそれは、カエサル自身の個人的な愛用の品なのだろう。

「同時に振り、出目が高かった方の勝ちだ」

「いいね、分かりやすい。」

……ところでそのサイコロ、あなたの私物だよな」

「そう来ると思っていたよ、好きに確認したまえ」

二つともを放り、危なげなく受け止めた少年が仕掛けの有無を念入りに確認するさまを前にするカエサルの表情に、妙な変化は見受けられない。

何かに気づかれてしまうかもしれないという不安は無かった。

なぜならあれらは本当に、何の変哲もない普通のサイコロなのだから。

「……何も無さそうだな」

「満足したかね、ならば片方だけこちらに返してくれたまえ」

ほんの一瞬の間を挟んで、皿と料理の上を飛んで帰ってきたそれを、カエサルは受け止めきれずに落としてしまった。

少し慌てた素振りを装いながら、出っ張った腹が邪魔だったことには一切の偽りなく。

時間をかけて拾い上げられたそれが、すり替えられたものだということに気付ける者は、自身が確認した後に仕掛けを施されるという発想に至る事が出来る者はそうはいない。

外見こそ先述のものと何ら変わらないように見えるそれは、実際には小さな鉄が仕込まれ、重さの偏りによって特定の目が出やすくなるように仕組まれているものだった。

（騙し、欺き、裏をかく……必要とあればその辺りを躊躇わないことを、彼は評価していたようだからな。

実行したとして、それが卑怯だとはならんだろう）

「ではいくぞ」

「ああ、せーの」

勝利の確信をいつも通りの表情の下に隠しながら、少年の合図に合わせて弾かれた二つのサイコロが、回転しながら虚空に舞う。

重力に引かれて落ち始めるまではほんの一瞬、決着がつくまでは2〜3秒。

固い床にサイコロが落ち、勢いのままに数回転がった音が、その瞬間が訪れた合図となった……のだけれど。

その音がカエサルには聞こえなかった、出目を確認する気すらも起こらなかった。本心を隠して笑うことが、心得を通り越して半ば癖になっていた彼にとっては珍しく、心の底からの驚愕が、素直な表情となって表れている。

彼の目には、重力に逆らって虚空に浮かぶサイコロと、その向こう側で不敵に笑う少年と、その手に握られた謎の石板が映っていた。

「あなたの目は出なかった、俺の勝ちでいいな。

……將軍、これが俺のやり方だ。

既に振られた賽ならば、目を出す前に掴まえてしまえばいい。

例え出目が決まっていたって、粉々に碎いて無かったことにだってしてやるさ。性分なんだ、諦められない……どれだけの時間をかけて、どんな手を使っても、俺は必ず、皆で生きる未来を掴み取ってみせる。

カエサル、どうかあなたにもそれを手伝ってほしい」

半ば呆けてしまっていた意識が、その言葉によって揺り動かされて戻ってきた。鮮明になった思考と視界で、カエサルは見て、そして気付いてしまった。

謎の石板、恐らくは彼の宝具だろうものを手にした左手の甲に、見覚えのある紋章が刻まれていることを。

彼の活躍に、彼の物語に自身を重ね、何処とも知れぬ遠い地を駆ける自身の姿を夢想した、幼い頃の憧れを思い出した。

「き、君……いや、あなたは、よもや」

「閣下、緊急事態です!!」

お食事中に申し訳ありません、失礼致します!!」

「まっ、待て」

相当急ぎ、慌てていたのだろう。

カエサルの許しを得ることなく、彼の制止も聞くことなく部屋へと飛び込んできた兵士が、予定外の客人の姿を目にすることは無かった。

石板に添えていた指を動かすや否や、その身を青い光と化して消えていった少年を見送ることが出来たのは、カエサルただ一人であった。

「……………」

「閣下、どうかなさいましたか？」

「いや、何でもない。」

それで、緊急事態とはどういうことだ？」

「じ、実は……毎日の定期確認が行われた際に発覚したのですが、武具や食料などの物資の数が、記録されていたものよりも遥かに少ないことが発覚しまして。」

数え間違いや、些細なミスによるものとは到底思えないとのことだ。

あり得ないとは思いますが、一応は侵入者の存在を疑い、閣下のご判断と指示を頂きに参った次第であります」

「成程……その判断は正しい、正しいのだが。」

……彼の仕業で間違いないであろうな、果たしてどれ程の被害が出ていることか」

「閣下、どうかなさいましたか。」

今、何と？」

「何でもない、気にするな。」

曖昧な想定ではなく、何の物資がどれだけ足りなくなっているのかを明確に把握した上で、その数字を私の下に持ってきてくれたまえ。

詳しいことは、その情報を基に考える。

城門の検問は引き続き実施せよ、加えて今後は出る者の確認も怠らぬように。

城壁の警備も徹底するように努めさせるのだ、ほんの一瞬の油断すらも許してはならん」

「はっ、承知いたしました！」

「……とは言ったものの、今から囲い込む手筈を整えたとして、彼は既にガリアを脱出している可能性の方が遥かに高いのだがな」

肩を落としながら大きなため息をつくカエサルは、自身の統治下にまんまと入り

込まれ、その上出し抜かれたことへの怒りと悔しさに染まってもおかしくはない顔色は、謎の解放感に満ちていた。

してやられたことをこんなにも痛快に、楽しく思ってしまったのはいつ以来か……もしかしたら、生前ですら無かったことかもしれない。

一人で抱え込んでいた重荷を、個人の望みの為に人という種を裏切ってしまった罪悪感を、負うことを選んだ覚悟は確かだったものの間違いなく辛かったそれを。彼自身にその気などは無かったであろうに、全て綺麗に持っていくてくれた。

彼と、彼が認めたであろうマスターの世界を救う為の旅路を、傍で手助けすることが出来たなら……そんなことを妄想し、夢見る少年のように昂る自分がいることを、カエサルは認めざるを得ない。

そんなことを考えながら、半ば惰性で料理を摘み、口にしたいいつもの動きは、いつもとは違うものをカエサルにもたらしした。

「……………ああ、美味い」

美味しい料理が好きで、その時を誰かと共に楽しむのが好きで。

彼と次に会った時は、今度は最初からちゃんと誘って、大勢で笑いながら過ごしてみたいと思った。

そうして、久々に食の楽しみを堪能していたカエサルが、情け容赦ない強奪っぶりの詳細な報告を受けてもはや笑うしかなくなってしまふのは、まだ少しだけ先のこととなる。

VS
ゴーレム

誰一人として味方がいない状況で散々に怒られ、楽しみにしていた食事まで抜きにされて、流石に反省しながらも一仕事終えてきた後の空きっ腹に耐え切れず、かと言って皆の怒りと心配を思えば備蓄の食料に手を出す気にはなれず。

焚火の燃え残りの炭を齧って空腹を紛らわせる、危機的状况に慣れ過ぎて最終手段のハードルが地に減り込んでしまっているリンクの姿に、一同がかえって盛大な精神的ダメージを被ってしまった夜が明けて。

自陣營の戦闘準備が整い、兵士達が十分に英気を養ったとほぼ同時に、連合側が想定外の物資不足に陥り、一度でも崩れれば態勢を立て直すのが難しくなった現状

を共に好機と判断したネロとブーディカによって、急遽戦線が開かれた。

本拠地を荒らされたことによる混乱が収まりきっていない上に、万全の準備を整えることが出来なかった連合軍の士気は見るからに低く。

このまま勢いで押し切れるのではないかと、帝国側の多くの者が少なからずそう思った戦況に、予想外の混乱が沸き起こった。

闘志に満ちた雄叫びではなく、恐怖による悲鳴を上げながら逃げ回る兵士達を、頑強な岩の肌を纏った巨大な腕が、一度でも食らえば骨を粉碎されそうな唸りを伴いながら追い回す。

自然発生したものとは到底思えない異形の存在を前に、ひっくり返ったロマニの声が戦場に響いた。

《馬鹿な、ゴーレムだって!?

あんなものを造れる魔術師なりサーヴァントなりが、連合にはいるのか!!》

「……あれは流石に、兵士達には荷が重いな」

悲鳴じみたロマニの叫びにも狼狽えることなく、逃げる兵士達の流れに逆らいながら、矢のように駆け出した者がいた。

瞬く間に我が身へと迫る少年の存在を認識したゴーレムが、明確な敵と見定めた彼へと向けて固く握った拳を振るう。

たやすく地を割る程の攻撃をあっさりとかわしたリンクは、その拳と腕を足場に跳び上がり、岩を固めて造ったかのようなゴーレムの体の中でも比較的脆いと考えられる箇所、岩の継ぎ目にあたる部分へと剣を突き立てた。

『ガキンツ』と硬質な音を立てた一撃は、刃で岩を割るという快拳を成し遂げたものの、ゴーレムの駆動を妨げるまでは至らず。

不快なものを振り払うかのようなゴーレムの身動きから、仲間達が思わずといった様子で上げた悲鳴を意識の隅で聞きながら跳んで逃れたリンクは、空中で身を捻った次の瞬間には、ゴーレムの体に突き刺さった状態で残した剣の代わりとなる新たな武器を手に行っていた。

柄がリンクの身長近くありそうな大槌を、落下の勢いも上乘せさせた威力で振りかぶり、渾身の力と必中の狙いで以って叩きつける。

突き立てられただけでは継ぎ目の表層を割るのが精一杯だった刀身は、巨大な楔となつて打ち込まれたことでゴーレムの体を芯まで貫き、魔術による起動に耐えられなくなった体はそれによつて一気に崩壊した。

「すげえ、一発で決めた!!」

「リンクさん、流石です!!」

数多の魔物と戦つた知識と経験を持ち、それを改めて本として纏めた上に指導も出来る程の応用力を備えたリンクにとって、初見のエネミーの特徴と効率的な戦い方を瞬時に見極め、実践してみせるというのはそう難しいことではない。

しかしそんな彼でも、余裕を保てなくなるような事態というものは存在していた。

「なに、ゴーレムが破壊されただど？」

……来たか、彼だな。

最重要命令だ、今報告された地点に全てのゴーレムを向かわせろ」

《……待つて待つて、何だこの反応は!!

皆気をつけて、さっきのゴーレムと同じエネミー反応が一带から集まり始めてる

!!
《》

「ええっ!？」

「どういふことですか、ドクター!!」

《分らない、倒したゴーレムに何か仕掛けでもされてたのかな!!
《》

(……成る程な。

分かったよカエサル、その考えに乗ろう)

「立香、マシユ。

ここは俺に任せて、ネロ陛下と一緒に先に行ってくれ」

「なっ……え、リンクさん!」

「今実際に戦ってみた感じからして、俺にとってゴーレムは特に強い敵というわけではないし、対処自体は十分可能だけど、それでも数で来られたら流石に手間取る。」

だったらここは手分けした方がいい、ゴーレムは俺が引き受けた。

その間に、お前達は『皇帝』の方を片付けるんだ」

リンクの言うことは尤もだった。

下手な者が口にすれば死亡フラグでしかないセリフも、彼の場合は普通に堅実な

提案として受け止められた。

大局を見据えた上での、戦略的な観点からしても妥当であると判断したブーディカも、歓喜と興奮のあまりに今にも駆け出しそうなスパルタクスを制しながら、リンクの発言に追随した。

「いいから行きなよ、今こうしている時間が既に惜しい!!」

リンクがゴーレムの相手を一手に担ってくれると言うのなら、露払いはあたしとスパルタクスで引き受けた!!」

「はははははっ!!」

反逆の勇士と女王は私に味方した、すなわち今こそ勝利は果たされる!!」

「そっちゃんなくてこっち、ああもうスパルタクスったら!!」

「……うむ。

頼んだぞブーディカ、色んな意味でな。

そしてリンク、そなたも吉報を楽しみにしておれ。

ゆくぞマシュ、立香、偽なる『皇帝』に占領されたガリアを今こそ取り戻す!!」

気合いと決意が込められたネロの言葉に、立香とマシュは、怯み躊躇ってしまつた自分がいたことに気が付いた。

ここから先の戦場に、一般の兵士やエネミーの類いではなくサーヴァントと相対するであろう状況に、リンクは……素人同然のへっぽこ魔術師と、宝具の真の力を扱えない半人前のデミ・サーヴァントを常に助けてきた、伝説の勇者は居てくれな
い。

その事実は確かに、二人の心を冷たい恐怖と不安で苛んだのだけだ。

「……行くぞ、マシュ!!」

「はいマスター、オーダー了解しました!!」

「立香、マシュ、任せたぞ!!」

人理は、未来はちゃんと繋がってるんだってことを、皇帝に証明してやってくれ
!!」

恐れを抱いてしまった自分を自覚したその上で、二人は懸命に前へと歩み出る。そうして、ネロと共に駆けていった背を見送ったリンクに、心配や不安は無かった。

並び立つ比較対象が悪いだけで、彼らはちゃんと学んできたし、ちゃんと成長してきたことを、先達として守り導きつつ、友として支えてもきた彼はよく知っている。

立香達ならば必ずや、名将カエサルを前に怯みはしても退きはせず、彼が望むものを示してくれる筈。

リンクはその確信と信頼を胸に、土煙を上げ、帝国も連合も問わず人の群れを割りながら現れた、視界を全て埋め尽くすようなゴーレムの群れに一人堂々と対峙した。

ガリア戦終幕

「……ようやく来たか、待ちくたびれたぞ

しかし、だ……どうやら、私が退屈をするだけの価値はあったらしい」

ロマニが伝えてくれるサーヴァント反応の測定を頼りに、戦いの喧騒の中を駆け抜けた立香達を待っていたのは、月桂樹の冠をかぶったふくよかな剣士だった。

少々予想外すぎるその姿を前に、務めと状況を一瞬忘れて呆けてしまった彼らに、連合の『皇帝』は少々呆れた様子で口を開く。

「我らの愛しきローマを継ぐ者……そして人類最後のマスター、その背に人理の全てを負った少年よ、名前は何と言ったかな。

……………沈黙するな、戦場であつても雄弁たれ。

それとも、名乗りもせずに私と刃を交えるか。

それが当代のローマ皇帝の在りようか？

さあ語れ、貴様らは誰だ。この私に剣を執らせる貴様らの名は」

表情も声の調子も、それ自体は静かで穏やかなものだったのに。

逆らう気そのものを根底から失せさせるような……それどころか、彼の発言は全て正しく、彼の言う通りにすれば何もかもが上手くいくのだと、盲目的に信じ込ませてしまうような。

気づいてしまえば畏れを抱かずにはいられない、異様な力を持った声と言葉を紡ぐ男に、立香は自身の背筋に冷たいものが走るのを感じていた。

恐らくはマシュも、ネロも、同じようなものを抱かされたのだろう。

ゴクリと喉を鳴らし、か細い息を零しかけた唇を噛みしめ、震える手足を叱咤し、

今にも逸らしてしまいそうな眼差しを懸命に前へと向ける。

そんな少年少女達の必死な姿を、ある意味で眩くて堪らない光景を前に、カエサルは心中で密かに笑みを零した。

「ネロ……ローマ帝国第五代皇帝、ネロ・クラウディウスこそが余の名である。

僭称皇帝、貴様を討つ者だ!!」

「カルデアのマスター、藤丸立香!!」

「マッシュ・キリエライト、マスター立香のサーヴァントです!!」

彼らが最初に気圧されてしまったことに関しては、特にマイナスとは捉えていない。

カエサルが本当の本気になれば、自分自身の意思から来るものであると錯覚させたまま思考と行動を誘導するという、恐れを抱き警戒する以前の問題となることだって出来るだろう。

最優と謳われるセイバーのクラスでの召喚を心から疑問に思ってしまう程に、自

身の最も優れた武器は剣ではなく弁舌だということを、彼は自負している。

それを、様子見故に多少手加減されていたとはいえ、真正面から受けながら耐えてみせた上に負けじと声を張り上げてきた彼らの姿は、好ましいと思うには十分だった。

「良い名乗りだ、そうでなくては面白くもない。

その美しさはローマに相応しい、世界の至宝たる麗しき第五代皇帝……そして、天文台よりの使者達よ。

ここまで来られた褒美だ、我が黄金剣『クロケア・モース黄の死』を味わえ」

本来ならば戦闘向きな人ではないことが明らかな体型と、恐ろしい程によく回ってこちらの思考をかき乱してくる弁舌のキレ具合からして、彼が自ら剣を抜いて戦闘に移行するのは最終手段であり、あの言葉でもっと攻めてくる筈だと考えていた立香は、その予想を裏切り、男がいきなり問答無用で剣を抜いてきたことに驚いて目を剥いた。

内心の動揺をあからさまに表してしまっている立香に対して、男はまるで、咎め叱咤しているかのように声を上げる。

「さあ此処へと進め、既に賽は投げられているぞ!!」

翻された黄金の刀身が、陽光を受けて眩く輝く。

時と場合によっては見惚れてもいたであろうその美しさは、今この時においては、激戦の始まりを告げる合図だった。

一般人に辛うじて毛が生えただけの素人魔術師、数合わせの補欠に過ぎなかった
48 人目のマスター。

彼を慕うサーヴァント達も、彼を信じるスタッフ達も、立香本人ですら潔く認める
しかないその事実、正しく、そして良い意味で、彼に身の程というものを弁え
させていた。

「マッシュ、右斜め後ろ!!」

かけられた言葉の意味を認識すると同時に振るわれた盾の鏡面が、黄金剣の強烈な一撃を受け止める。

ネロを守り、彼女が攻撃する隙を作ることに集中していたマッシュは、自分自身に対する守りが無意識に疎かになってしまっていた。

そこを的確につかれた一撃は、離れたところから戦況を見守っていた立香が教えにくければ、防ぐことは敵わなかっただろう。

マスターらしく事細かに指示を出して戦況を動かそうとか、サーヴァントを手足の如く扱ってみせようとか。

本来の『聖杯戦争』に参加するような一流の魔術師なら当然に考えそうなことを、立香は人理修復を始めた初期の段階で切って捨てた。

曰く、『ターン制の、入力が済むまで攻撃しないで待つてくれるタイプの戦闘だって、ちょっと選択ミスしただけで総崩れになることが普通にあり得るのに。現実のリアルタイムで、決断するまでの猶予が下手すれば数秒も無いような状況で、何をしてくるか全く読めない初見の敵を相手に、そういう勉強とか訓練とか一切したこ

とない素人だけでもしたらワンチャンあるんじゃないかって、期待すること自体が既におこがましいと思う』とのことで（発言の意味を理解出来た者はほんの少数であった）。

色々な意味でド素人な自分が、下手な見栄とか責任感に駆られて自己満足の口出しをしても、大惨事を起こす結果しか想像出来ない。

ならばいっそのこと、少し離れたところから冷静な視点で全体を俯瞰することに集中しようとした、立香の堅実な考えは、それなりの成果を出していた。

戦闘の真っ只中に身を置き、目の前の駆け引きに集中するネロとマシュでは気づけない隙を指摘して、動きと認識を補完させる立香の声は、マシュの守りをより一層強固で万全なものにして。

どんな攻撃からも守られているという信頼と安心感は、舞い散る薔薇の花びらのようなネロの剣舞をより一層美しく苛烈なものとした。

立香はよく気付き、マシュはよく守り、そしてネロはよく攻めている。

……それでも、恐ろしいことに。

傍から見る者達だって及第点をくれるであろう、自分達はよく頑張っていると胸

を張って言えるだけの猛攻をたった一人で捌きながら、ふくよかなセイバーは未だ余裕を保っていた。

「……ふうむ、予想以上だ。

貴様ら、なかなか強いではないか。

まあ、そもその話として、名将たる私を一兵卒として戦わせるという運用自体が、最適なものとは言えぬのだが」

「こんなに強烈な剣を振るっておいで、どの口で……」

「嫌味にしか聞こえぬな!!」

《くそっ……持ち堪えてはいるけれど攻め切れない、決め手が足りないんだ!!》

（誰か呼ぶか？

……いいや駄目だ、まだだ、それで終わらせられなかったら次は無い。

あとは止めを刺すだけとは言わない……せめて、ほんの少しだけでも、こっちが優勢になってからでないと)

絶対に間違えられない、間違えてしまったらもう後は無いという切羽詰まった緊張感から、事態を動かす可能性を持った一手を放つことを躊躇ってしまう立香。その迷いは、相手に先手を取ることを許してしまった。

「まだだ……その程度ではまだ、貴様らの行く先に、私の願いを託す訳にはいかぬ」
「こ、この気配は……気をつけて下さい、マスター!!」

《魔力が上昇している!?

いや、自ら抑えていたものを開放しているのか!!

「どうやら相手は本気になったらしい、というか本気ではなかったのか今まで!!」
「ヤバい、ミスった……!!」

自分は最後の手段を温存しておきながら、向こうは既に全力を出しているだなんて、そんな希望的観測をなぜ疑うことなく抱いてしまったのか。

慌てている場合ではないと、どうにかして取り戻さなければと奮い立とうとするごとに、逸る心が冷静な思考を妨げる。

血の氣が一気に足元まで落ちるかのような、全身から冷たい汗が噴くような、喉が塞がって声どころか呼吸そのものが阻まれてしまっているかのような。

ロマニの慌てた声が自身を呼んでいる、それだけは辛うじて認識出来た程度に白んでしまっていた立香の意識に、ただひとつ、鮮明に飛び込んだきたものがあつた。

「…………マ、マシュ」

「センパイ、大丈夫ですか!？」

「あの位置と体勢から、まさか間に合うとは……やるではないか、デミ・サーヴァントの娘よ。」

貌も魂も、もちろん体も、実に美しい。

ああ、良いな、こんな状況でなければひとつ本気で口説いていたところだ」

ほんの一瞬、意識が遠くなっていたその間に、立香の周りの様子は一変していた。見せてしまったあからさまな隙を逃さず、マスター狙いを図ったのであろう黄金剣の一閃が、本当にギリギリのタイミングで飛び込んだのであろうマシュの盾に

よって辛うじて受け止められている。

心底樂しそうに笑いながらも、剣に込められている力が緩む気配は一切無く、背後にいる筈の彼の様子を窺うことすらままならない状況で、それでもマシユは懸命に声を張り上げた。

「マ、マスター……大丈夫です、落ち着いて、時間は稼ぎますからゆっくり考えて下さい!!」

絶対に間違えられないのも、責任重大なものも分かっています!!

だけど、その重荷を、マスター一人に背負わせる気はありません!!

だって私は、体だけでなく心も守ると誓った、あなたの盾ですから!!」

目の前に立つ背中中は、自分よりもずっと小さく華奢な筈なのに、守ってあげたいと思う気持ちは変わらないのに。

それと同時に、頼もしくて、誇らしくて堪らない。

これが自分の後輩だと、頼れる仲間がどんなに増えても変わらない、人理修復の

旅路を共に歩み出した一番最初のサーヴァントだと、鼻と喉の奥から込み上げてくるものと共に実感する。

大きく息を吐き、胸中に渦巻いていたものを全て吐き出した立香は、黄金ではなく赤い光で手の甲の三画を輝かせながら、召喚の可能性に備えて待機してくれている者達の中の一人の名を呼んだ。

「来てくれ、ジャンヌ・オルタ!!」

その声を上げたと同時に立香は、オルレアンでのタラスク戦で小次郎を呼んだ時と同じ、生命力が根こそぎ吸い取られようとしているかのような凄まじい虚脱感に苛まれ……あの時のように耐えられず膝をついてしまう前に、一步踏み出した彼自身の足で体勢を保つことに成功した。

苦勞して試練を乗り越えた成果はちゃんとあったのだと、遅ればせながらようやく我が身で以って実感出来た立香は、倒れはしなかったまでも決して辛い訳ではない体に鞭打ち、息を荒げながら顔を上げる。

そこには、フランスの特異点では恐怖の象徴であつた筈の竜の魔女の、体の端にまだほんの少し金の粒子を纏わせた、頼もしい後ろ姿があつた。

自身の後ろに立つ立香の辛そうな様子を、肩越しに振り返りながら窺つたジャンヌ・オルタが、苦々し気な表情で舌を鳴らす。

「……あまり長引かせると、マスターの身が持ちそうにないわね。

マッシュ、皇帝サマ、一気に攻め切るわよ!!」

「はい、オルタさん!!」

「……随分と派手で珍妙な登場をしたので、多少度肝を抜かれたが。

味方なのだな、ならば良し!!

漆黒の戦乙女よ、このネロと轡を並べることを許そうぞ!!」

ジャンヌ・オルタが腰の剣を抜くと同時に解き放たれた、地獄の劫火のような熱と質量を伴った魔力が自分達の身の内にまで熱い昂りを生み出し、そこから新たな力が込み上げてくるのをマッシュとネロは感じた。

多くの竜を支配し、統率することを可能とした『竜の魔女』としてのスキルは、竜の属性を持つ者だけでなく、共に戦う仲間達の能力を向上させるという効果も現れるようになっていた。

『裁定者^{ルーラー}』という、彼女を創ったジル・ド・レエが設定したであろうクラスが、怒りと憎しみの炎を操るジャンヌ・オルタの性質に合っていなかったのか、オルレアンでの彼女は折角の炎を単に撒き散らすくらいにしか扱えず、技術としての戦闘ははつきり言ってお粗末なものだった。

しかし、カルデアの召喚システムによって今度は正式に、怨讐の炎を心置きなく揮うことを決して妨げない『復讐者^{アヴェンジャー}』のサーヴァントとして召喚され……更には根が素直な上に真面目な努力家で、自身がサーヴァントどころか人としても幼く未熟であることを痛いほどに自覚し、それでも自分に未来を示してくれた人達の為に頑張りたいと願う気持ちから、教授してくれる一部の者以外には極秘（という名の周知の事実）で特訓を行い、立香が雑談の一環として時折話題にしていた現代日本のサブカルチャーの影響をそこそ受けながら、持ち腐れだった膨大な魔力の制御と扱い方を身につけた。

その結果彼女は、広範囲を焼くのではなく一点を貫くことに特化した戦闘系サーヴァントとして、未だ成長の伸びしろを残している身でありながら、カルデアの主力組の一人に名を連ねていた。

純粹に数が増えた上に、強力なバフがかけられたことで先程までとは比べようも無いほどに激しくなった少女達の猛攻を前に、流石のカエサルも拮抗を保ちきれない。

そうなった要因には、ただ単に戦力のバランスが崩れたことだけでなく、カエサルがせめて表には出すまい、悟られまいと必死になって努めた驚愕と動揺があった。何故なら、『マスター』により呼び出されて新たに戦線へ加わった少女が揮う力、煽られただけで骨まで焼けてしまいそうな灼熱の炎は、形と力を持った怒りと憎しみに他ならなかったのだから。

これだけ強力な怨念を能力として扱えるということは、彼女が生前に受けた仕打ちはそのもう悲惨なものだった筈。

それが『炎』という強烈な形を取ったということは、もしかしたら彼女は最期の時に、生きたまま焼かれてしまったのかもしれない。

サーヴァントとしての在り方と能力は、その者自身の生前の生き様に加えて、『あの人はこういう人だったに違いない』という人々の強い認識によって形作られる。『あれだけの仕打ちを受けた者が恨みを抱かない筈がない、憎しみの炎を滾らせない訳がない』。

彼女は最初、間違いない……そんな概念を負いながら、それを体現するに相応しだけの苛烈な有り様で、現界を果たしていた筈なのに。

今日の前にいる少女は、自分達を指揮する為に無理をするマスターの身を案じ、仲間達と助け合いながら、彼女の芯を構成するものであるが故に消えることや和らぐことは決してあり得ない復讐の炎を、人理焼却に抗うカルデアのサーヴァントとして、人の未来を諦めない為の力として揮っている。

それは正しく、『過去』と『未練』しか持ちえない筈のサーヴァントが、その身で体現する『未来』と『希望』の形だった。

『人理は、未来はちゃんと繋がってるんだってことを、皇帝に証明してやってくれ!!』

（咄嗟に思い出した、あの別れ際の言葉が参考になったけど……やっぱりまだまだ、あいつから独り立ちするのには時間がかかりそうだな）

例えその場にいなかったとしても、その言葉や存在だけで十分に助けとなってくれる。

そんな彼のことを、朦朧とし始めた意識の中で思い出しながら、立香は震える手

で取りだした小瓶の中身を一気に呷った。

「オルタ、宝具展開!!」

「なっ……ちよっと、あんた正気!？」

今までの戦闘で既に魔力はギリギリの筈よ、それで宝具まで使ったら冗談でなく干乾び」

「いいから早く、見栄とかやせ我慢とかじゃなくて本当に大丈夫だから!!」

激戦の最中だというのに、思わず振り返ってしまったオルタが目にしたのは、様子も顔色も予想外に元気そうな立香の姿。

軽く目を見開きながらの一瞬の逡巡の後に、立香に続いて覚悟を決めたジャンヌ・オルタは渾身の詠唱を張り上げた。

「これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮!!」

『ラ・グロンド・メンド・デュ・ヘイン 吼え立てよ、我が憤怒』!!」

折角回復させた魔力を一瞬でごっそりと持っていかれ、頭から倒れかけた体を朦朧とした意識の中で必死に、何とか保たせた立香は。

ジャンヌ・オルタが繰り出した宝具の炎の向こう側で、それまでずっと貼り付けたような表情を絶やさずにいたセイバーが、心からの笑みを浮かべたのを見た気がした。

「魔力を回復出来る薬を一人でさっさと作って、それをあっさりと人に渡してしまっただなんて。

リンクって本当に多才ね、あいつに出来ないことってあるのかしら。

……まああいつの場合は、大変な旅路の中で、何もかも自分でやらなきゃいけな

い状況が多かったのが理由だろうけど」

《でも立香君、そんな凄いものを予め貰っていたのなら、もっと早くに使っても良かったんじゃないか？

リンク君自身が必要なものは決して出し惜しみしない性質だし、無くなったらまたすぐに作ってくれたと思うんだけど》

「……………じ、実は。」

あいつが、大鍋に大量の虫を入れて煮込んでるところを見ちゃって……………」

「……………」

《……………》

「……………で、でも、貰った薬がそれだとは限らないんじゃない」

「出来上がった奴を、その場で小瓶に入れて渡してくれたんだ」

「……………」

《……………》

「……………ナイス勇氣」

「ありがとう」

形ある島

軍の最高指揮官を討ち取るという大戦果を上げたネロ達を、相当暴れまわった筈なのにまだまだ元気そうなスパルタクス、戦闘とは別の理由で疲れてしまっているブーディカ、壊れた武器とゴーレムの残骸の山の上で一息ついていたりリンクが迎え、その光景を前にした帝国軍の兵士達が上げた歓声が、此度の戦いの締め括りとなった。

連合の兵士達に関しては出来る限り露払いと時間稼ぎに努め、指揮官狙いの一点に力を注いだため、軍全体としての力は未だ保たれていて、それを制圧するのはまたひと手間だと考えられていたのだけけれど。

どうやらカエサルは前もって兵士達を説得していたらしく、ガリアの町は籠城からの抵抗を試みることも無いまま早々に開放された。

大人しく投降することを選んだ者達も、連合軍の別部隊に合流する為に去っていった者達も、どちらも選べずにそつと姿を消した者達も。

選択肢として提示されながらも最終的には自分で決めたと思っている道が、どれを進んでも帝国軍とネロ、加えて彼女達に協力しているカルデアに、激情に任せた短絡的な手出しをさせないという結果に繋がっているのだということには、恐らく気づいていないだろう。

ガリアの再統治は予定よりもずっと早く終わり、遠征部隊の指揮官に次いでガリア総督の任を負ってくれたブーディカに後を託した一同は、盛大な見送りを受けながらガリアの地を離れた。

『……………見事だ。』

第五代皇帝、そして天文台よりの使者達よ。

未来への希望、人理の可能性は、確かに此処にあった。

私は来た、私は見た……ならば此度は、また次があることを信じて去るとしよう
『……あの、あなたさえ良ければ聞かせてくれませんか？』

ローマのことも、ネロのことも、そんなに嫌っては……いやむしろ、とても大切に思ってたのだのに。

一体どうして、ローマの敵なんかに……』

『なに、至極簡単な話だ。』

この私……ガイウス・ユリウス・カエサルとて、万能の願望機への誘惑に抗えぬ、ありふれた男の一人に過ぎなかったというだけのこと』

『なっ……馬鹿な、カエサルだと!？』

初代皇帝以前の支配者、偉大なる終身独裁官の名をなぜ貴様が!!』

『そう驚くな、既にカリギュラに遭遇した貴様ならば分かっているだろう。』

本物だ、私も奴も。

それが我が連合帝国の、宮廷魔術師の力なのだよ』

『宮廷魔術師！』

その人物の名を、教えていただけますか!?!』

『それは出来んな。』

互いに尊重し合うような良好な関係とは決して言えなかったが、一応はマスターとサーヴァントであつたのだ』

『……………そう、ですか』

『そんな風に言われたら、マシュにはもう、それ以上突っ込むことは出来ないな。……だけどマシュ、よく考えてみて。』

例えば名前は言えないとしても、連合の宮廷魔術師が『マスター』であることと、その人のところに聖杯があることは、ちゃんと教えてくれたよ』

『あっ！』

『やれやれ、今のは確かにあからさまだったが。』

だとしても、遠回しな表現を使用している以上は、気付いたとしても明確な指摘

は避けるのが粹というものであろうに。

……いや、どうやら、そんな駆け引きを楽しめるような時間は無いようだ。

当代の正しき皇帝よ、最後にひとつ予言じみた忠告をしてやろう。

連合首都で貴様の訪れを待つ『あの御方』、その名と姿を目にしたその時、ローマの至宝たる麗しきその顔を、貴様は絶望で彩るであらうとな』

『……下らない、それで脅しているつもりか』

『此度ばかりは素直にそのまま聞いてくれ、忠告だと言ったではないか。』

この試練を乗り越えられるかどうか、在るべきローマを在るべき形で残せるかどうかの分岐となる。

如何に堕ちようともし美しいであろうその姿を、見届けられぬのは残念ではあるが……まあ、貴様達ならば大丈夫であらう。

……勇者殿に、あなたと話せて良かったと伝えておいてくれ』

「なあ、リンク。

ガリアの町に忍び込んだ時に、カエサルと一体何を話したんだ？」

「悪いけどそれは秘密。

帝国も連合も関係ない、ただの『カエサル』としての、ごく個人的な話だったし」

「……あなたと話せて良かった、ありがとうって。

伝えてくれて頼まれたよ、勇者様にさ」

「やっぱり気付かれてたか、わざわざありがとうな」

「……………動じないなあ、お前!!

敵の將軍とこっそり接触していたことを指摘されるとか、実は色々とバレていたとか、俺的には結構な驚かしポイントだったのに!!」

「何か狙ってるなうってのが前もってわかると、話題の予想と心の準備が出来るんだよな」

「あーもう悔しい、機会があったら自分が主導権を握る話し方とか機転の利かせ方

とか教わってやる!!」

「こらそこ、何を二人だけで盛り上がっているのだ!?

楽しそうではないか、ずるいではないか、余も混ぜよ!!」

エポナの背の上で繰り広げた、そんな賑やかなやり取りから始まったローマへの帰路は、極めて順調なものだった。

道中何度か耳にした噂話に対する密かな引っ掛かりと、その内容の重要性について考え続けて、何日か経った辺りでついに堪えられなくなったネロが、予定外の寄り道を決めたこと以外は。

何が起こるか全く読めない以上は、少数精鋭を徹底すべきだというリンクの進言を受け入れたネロは、部隊に一日の休養を与え、自分とカルデアの三人のみで船を出した。

『古い神』が居ると噂の、地中海に浮かぶとある小島を目指して。

そうして、公園の手漕ぎボートの利用時間よりは長く、しかしディナーコース付きの遊覧クルーズよりは短かった、ささやかな航海を経て目的の小島に辿り着いた

海岸で、一同は想定外の、しかしある意味では妥当な理由での足止めを食らった。

船体と乗組員を盛大かつ豪快に振り回し、しかし沈没や転落などの取り返しのつかない事態だけはギリギリのところまで踏みとどまるという、ある意味で凄技と言えるであろう操舵テクニックを駆使して地中海の荒波を越えたネロは、その迫力満点な船旅がよほど楽しかったらしく、上気した頬で目をきらきらと輝かせながら、身の内から溢れる興奮を決して堪えることなく表している。

そんな彼女の傍で護衛を務めつつ相槌を打っているのは、デミ・サーヴァントとしての身体能力強化に三半規管も含まれていたおかげで、若干顔色が悪くなりつつもしっかりとした重心で立つことが出来ているマシユ。

問題なのは、青を通り越した白い顔色で波打ち際に膝をつき、苦笑いのリンクに背中をさすってもらいながら、脳髄からかき回されているような不快感と、胃ごと吐き出したくなるような嘔吐感に苦しみ続けている立香だった。

「うう……ぐ、おえっ………」

「少しは良くなったか？」

「まだ、全然ダメ……」

「……薬でも飲むか？」

今なら奮発して、マックストカゲを使った強力な奴を」

「やめて、もう吐くもの無いんだってば!!」

「……………それじゃあ、何か食べる？」

体力が随分と消耗してそうだし、ガッツリと串焼き肉とか」

「うっ、ぐえ……………」

「ど、どうした立香!!」

「そ、想像したら、胃腸に止めが……………」

「何で!？」

《ちよつとマシュー、リンク君と役割交代してあげて!!

彼自身に悪気は1ミリも無い、むしろ善意しか無いけれど、当人の体と感覚が
強靱すぎるせいで立香君がついていけない!!》

「…………いや、ドクター。」

悪いけど、その提案には従えない」

《えっ…》

「リンク……？」

困惑していた表情と素振りを一瞬で引き締め、剣を抜きながら歩み出たリンクの様子に思わず声を零した立香とロマニは、彼がそんな行動を取った理由にすぐさま気がついた。

音も無く、気配も無く、いつの間にか現れていた人影があったのだから。

「……幼気な少女を相手にいきなり刃を向けるだなんて、礼儀知らずなこと」

「だっ、誰!？」

気だるげなため息をついたのは、頭の両側で括った紫の髪を長く靡かせ、繊細なレース細工のような衣装と装飾に身を包んだ、美しい少女だった。

しかし立香もリンクも、彼女の見た目がいかにも無力そうな少女だからとて、そ

れだけの理由で警戒を解く気にはなれなかった。

自分達を見るその眼差しには、無垢な少女の好奇心や恐れなどといったものは欠片も無く、獲物を品定めする蛇のような、冷たく残忍な光が宿っていたのだから。

「ドクター、彼女はサーヴァントか？」

《……いいや、違う、確かにサーヴァントではあるのだけれど。

正常なそれとは些か違う……これは、何だ？》

「ええそうよ、普通のサーヴァントではないもの。

私は女神、名はステンノ。

御機嫌よう、勇者の皆さま。

当代に於ける私のささやかな仮住まい、『形ある島』へようこそ」

ひらひらと靡くドレスの裾を摘まみ、僅かに膝を曲げ、しかし頭は下げずに、あくまで堂々と前を見据えながら。

勇者の助けを待つ姫ではなく、勇者の来訪を許す女主人として立香達を迎えた少

女……女神ステンの微笑みは、恐ろしい程の美しさだった。

姉妹の再会

『古き神が現れた』……それが、ローマへの帰路の途中で、一同が幾度となく耳にした噂話だった。

神秘が限りなく薄れてしまっている現代よりはマシだとしても、この時代のローマでさえ、神というものは既に過去の遺物となりかけている。

噂を聞き逃せなかったネロも、神の存在を真に受けたと言うよりは、『神』を名乗る程の力と影響力を持つ者を万が一にも連合に与させないため、可能性がゼロではないという事実に刺激された彼女自身の好奇心を満たすために、事の真偽を確かめることを決めた。

この島を訪れたのはあくまで、神が現れるなどあり得ないのだということを、噂はただの噂なのだというのを確かめ、気持ちを切り替えるためだった……その筈なのに。

《数値で計測できるほどの神性……彼女は間違いなく神、いいや女神なんだ!!可能性としてゼロではないとは確かに言っただけで、それでも本当に、神霊がサーヴァントとして現界するような事態が起こるなんて!!

サーヴァントという枠組に収まっている以上は、権能も相応にダウンサイジングされている筈だけど、だとしてもその力は測り知れないぞ!!》

何処からか聞こえてくる驚愕に上ずった声、砂浜に呆然とへたり込んだまま立ち上がれずにいる黒髪の少年、異変に気付いて駆けつけたものの同じく惚けてしまっている少女達。

『神』という絶対の存在として畏れを抱かれるのも、愛され守られるための美貌に見惚れられるのも、ステノノからしてみれば至極当然のこと。

だからこそ彼女は、気にかける意味や理由が特に無い、当たり前前の反応を見せる数人を差し置いて、ただ一人の異常が目にと留まった。

畏れ敬うでも、その美しさに心を奪われるでもなく。

神に愛でられるに余りある美貌を、絶対の存在に鼻肩される要素と機会を投げ打ち、冷たい警戒心を抱き続けている少年の眼差しと在り方が、彼女には理解し難かった。

「ふふ、あらあら。」

どんなに立派な勇者の到来かと思ったのだけれど。

片方は無粋なサーヴァント、片方は人間だけれど見るからに弱者そのもの。

残念だわ、期待外れね」

「得体の知れない相手の接近に対して警戒するのは、当然のことだと思うんだけど？」

「あら、まあ……戦う力を持たない少女を、あなたは恐れるというの？
とんだ臆病者ね、期待外れだわ」

「臆病で結構、油断したせいで取り返しをつかない事態になるなんてことは御免だ。それとあんた、ステンノだっけ？

戦う力が無いってのは、確かにその通りみたいだけれど。

強さっていうのは純粋な腕っぷしだけで決まるものじゃないことを、俺は知っているんだ」

人間以外にも、生態や価値観からして全く異なる多くの幻想種や亜人種が共存していたハイラルで、『神』と称しても間違っていないような力を持った存在とも幾度となく遭遇してきたリンクには、『神』とはその人にしか出来ない特別な力と役割を担った者や、ひとつのそういう種族なのだという認識が強い。

かつて出会った者達に対して抱いている敬意も、彼らが自らを信仰する者達を守り導いていた事実があったり、リンク自身が色々と助けられてきたからで。

今のところ、警戒を解いて親しみを持てる要素を欠片も見出せずにいる、腕っぷし以外の何らかの形でこちらを害する手段を持っていると思われる少女を、『神だから』という理由で無条件に畏れ敬う気にはリンクは到底なれなかったし、その精

神力も呆気なく気圧されてしまうような軟なものではなかった。

ステンノからしても、自分が自分として存在を得た瞬間から常識としていた、神が神であるだけで特別、敬われて当然という価値観をあっさりと覆ってきたリンクとの対峙に、かつてないような不快感を味わっていた。

ギリシャの神々は確かに、英雄を見出し、その活躍を後押しすることを好んでやるけれど、それは自身の影響下で行なわれている場合でのことであり、英雄はあくまで神威や神罰の代行者でなければならぬ。

その大前提にそぐわないどころか、自分達を害するのなら敵対することも辞さない欠片も取り繕うことなく表してくる少年は、ステンノを含めたギリシャの古き神々からすれば、今この場で雷に打たれたり、獣に変えられる呪いを受けたとしても、神を軽んじた者への当然の神罰と嗤われるのが妥当な存在だった。

リンクの態度が悪いのは、神としてではなくサーヴァントとしてのステンノの能力が分からないのと、彼女自身の印象が悪いからであって、他の誰かが同じような態度を取ったのならそちらも同じように警戒を抱いていたのであろうが、『神なのに敬わない』という根底部分の一点が癪に障っているステンノからすれば知った

ことではない。

悪いのは他人の意志や人生を自分勝手に振り回した神ではなく、それについて来られなかった、もしくは不興を買ってしまった人間の方……それが、『神』の思考回路であった。

「神秘が薄れた悪影響かしら、時代が変わればとんだ罰当たりが生まれるものね。不信心者に、神罰の恐ろしさというものを身を以って味わわせてやるのも、私としては吝かではないのだけれど」

「そんなことをしたら、俺はあんたを本気で敵と見なすぞ」

「うふふっ、まあ怖い。」

そんな強気の発言が、心を壊してしまった後も出来るかしら？」

「やってみろ、何であろうと俺には効かない」

「……ふ、ふふっ、よくまあ吼えること」

お互いを見据える眼差しと表情、纏う空気が、一步も引く気のないやり取りを交

わずごとに、鋭く冷たく研ぎ澄まされていく。

『古き神』の一柱として、神威が絶対の力を持っていた頃を生きたステンノと、数多の導きや祝福を得ながらも、あくまで人として自分自身の意志で戦い抜いたリンクの相性が最悪であったことに、そういう状況に陥ってから気付いても既に手遅れだった。

「セ……センパイ、どうでしょう」

「ヤバい、そんな光景は流石に見たくないぞ……」

鮮やかに想像出来てしまう惨劇に、それが現実となってしまう可能性が決して少なくはないことに慄き、焦りながら事態の收拾を図ろうとするも、具体案が浮かばずに手を拱くことしか出来ないカルデア一同。

向こうはまだ話が分かりそうだと、殊勝なことだと、不穏な笑みの下で少しだけ機嫌を直していたステンノは、想像すらしていなかった。

彼らが案じていたのは、女神の不興を買ったリンクではなくて。

基本的に優しくて穏やかだけれど、敵と見なした相手にはスイッチが入ったかのように一切の容赦がなくなり、有効もしくは的確と判断すればどのような手段や戦法も躊躇わなくなる、そんなリンクの疑心と警戒を順調に煽り立ててしまっているステンノの方であったことを。

紛れもない神であることとか、小柄で美しい少女の見た目とか、普通の人間ならば十分に思考と行動のストッパーとなってくれるであろう要素がリンクの場合にはあまり意味がないことを、立香達は既に強烈な前例で以って思い知っていた。

運悪く、何故かこのタイミングでオペレーションルームに居合わせてしまったらしい、座の本体にまで刻まれた心的外傷^{トラウマ}への直撃を食らって昏倒した『彼女』を数人がかりで介抱していると思われるやり取りが、ロマニの通信越しに僅かに聞こえてくる。

これ以上状況を悪化させるのはどうか勘弁してほしいと、正しく神に祈りを捧げるような心地だった立香とマシュの願いは、残念ながら届かなかった。

どんなに神威で脅しても、蔑みの言葉を口にしても、リンクの芯が一向に揺るがないことに焦れたステンノが、ギリギリのところ堪えていたリンクの堰を切らせ

る決定打となる言葉を、あっさりと口にしてしまったことによって。

「全く、私も焼きが回ったものね。

こんな道理を知らない愚か者を、ほんの一時でも『もしかしたら』と考えてしま
うだなんて。

『勇氣ある者』の肩書はあなたには似つかわしくないわ、早々に去りなさい」

その言葉を受けて、驚くでも嘆くでも怒るでもなく、スンッと表情を無にしたリ
ンク。

そんな彼と現場で居合わせてしまった立香達と、偉大なる先達として彼を尊敬し
ている英霊達の怒りと苛立ちの余波を浴びてしまったオペレーター達、より酷い状
況にあったのは果たしてどちらか。

ステンノは事実を知らないし、意趣返しのもりだった発言には、多分な棘を意
図して込めていたのだろうけれど。

その言葉を『彼』に対して使うことだけは、言い訳の仕様もない過ちであった。

全ての英雄の原典であり、聖三角の一角を司る者その人であったリンクが駄目ならば、後の世の誰一人として、その称号を戴くことは出来なくなってしまうのだから。

マスターとして、友として、果たして自分はどうするべきなのか、何が出来るのか。

判断を下すためにも、この嫌な空気を動かすためにも、何でもいいから反応を見せてもらいたいところなのに、生憎と当の本人は未だ無言で立ち尽くしたまま。

パニック寸前まで困り果ててしまっていた立香の耳に、思いもよらない人からの声が聞こえてきた。

《マスター、マスター、聞こえていますか!?》

「メドゥーサさん？」

《お願いします、今すぐ私をそちらに呼んで下さい!!

魔力の供給は現界が可能なだけの最低限のもので構いません、マスターにご迷惑や負担はおかけしませんから!!》

蛇の髪と石化の瞳を持つことで有名な、ギリシャ神話の怪物メドゥーサ。

現代においても広く知られている能力の恐ろしさはさておき、個人としての人柄はどちらかというと常識人寄りで、親密な人付き合いをあまり好まず、最低限の役割をこなす以外では一人で自室に籠もっていることが多い彼女の、こんなにも焦った様子を見るのは初めてだった。

勢いに負けたのが半分、ここまで言うからには何かしらの考えがあるのだろうという希望半分で、立香は令呪を輝かせた。

そうして、古き世界の神が住まう島に、古き世界の怪物は降り立った。

ステンノを背に、リンクと向き合い……古代ギリシャ出身の、しかも怪物と化してしまう前は紛れもない女神であった筈の彼女が一体どこで覚えたのか、思わず感嘆してしまいたくなる程に綺麗かつ完璧なD.O.G.E.Z.Aスタイルで。

先程までとは、重みと方向性が全く違う沈黙が、改めて周囲を満たす。

この状況で最も困惑していたのは、顔見知りの美女からいきなり、訳も分からなのまま平伏されて目が点になっているリンクだということは、わざわざ考えるまで

もないことであつた。

「……………へっ？」

えっ、ちよっ、何この状況」

「こ……この度は、姉がとんでもない失礼を。

本当に、申し訳ありませんでした!!」

「待って待って、『あね』ってもしかして姉？

メドゥーサさんのお姉さんなの!？」

「そ、そうなんだ……メドゥーサさんが『ゴルゴーン三姉妹』の末っ子ってことは知ってたけれど、お姉さん達の名前までは把握してなかった」

「姉の不始末は我が身で以って償わせていただきます、首がお望みとあればどうぞ随意に!!」

「いやいや要りませんよ!!」

「武具の飾りや、魔除けとして定評があります!!」

「だから要りませんって、話を聞いて!!」

「で、ですから、どうか……顔を潰すカッコ物理だけはお許し下さい、姉の唯一の取り柄を奪うのはやめて下さい!!」

「メドゥーサさん俺のこと何だと思ってるの!？」

「抱いて当然の懸念だと思いますが……」

「妹の嫌がる顔を見るのが好きと公言したり、日常的に顎でこき使ってくるような、邪神呼ばわりされても否定は出来ない人ですが!!」

それでも、私にとっては大切なお姉様なのです!!」

「……メドゥーサ」

「ひっ!!」

「……………う、上姉様？」

「顔だけが唯一の取り柄だとか、邪神呼ばわりされても否定は出来ないとか。言いたい放題言ってくれたわね、メドゥーサ駄妹の分際で。」

久しぶりに会ったのだし、少しは優しくしてやろうかしらなんて思っていたのだけれど。

……余計な気遣いだったようで安心したわ」

「お、おま、お待ち下さい上姉様!!

どうか話を聞いて、私は上姉様をお助けs」

「問答無用よ」

「ひいやああああああっ!!!」

シリアスだった筈の空気はもはやぐっだぐだであった、粒子が観測されたとしてもおかしくはない程に。

こうして、姉想いで健気な妹の献身によって、あわや一触即発かと危惧された状況は何とか有耶無耶になった……と、ホッと胸を撫で下ろした一同だったのだが。渦中の人の胸中には、今回の件でもった種火が今も確かに燦ぶっていて、それがそう遠くない内に本格的に燃え上がる事態となることを、誰一人として予想していなかった。

勇者の試練

「妹がお世話になっている方達だとは露知らず、失礼いたしました。

お詫びとお礼を兼ねて、貴方達には女神の祝福をあげましょう。

海岸沿いを歩いていくと洞窟への入り口が見つかるわ、その一番奥に宝物を用意してあるの。

この時代には、本来存在しないとおき……こんなご褒美は滅多にしないのだけれど、特別に差し上げますわ」

そう言って微笑んだステンの言葉を受けて、示された洞窟へと向かおうとした

一同の歩みは、踏み出す前に止められた。

立香には、丁度いい機会に、少しずつの消耗で長い時間を保たせる形の召喚にも慣れておいた方がいいと。

メドゥーサには、折角久しぶりに姉と会えたのだから、共にゆっくり過ごせばいいと。

マシュには、現界が可能なだけの魔力しか供給されていなくて戦闘行為に移れないメドゥーサと、そもそも戦えないというステンの護衛を務めてもらいたいと。ネロには、守り役のマシュが居ないという状況が不安だから、いっそのこと共に待っていてほしいと。

一人一人にそれらしい理由付けをしながら、要は『自分一人で行かせてほしい』と告げているリンクに、一同は不安と懸念を募らせた。

すぐ単独行動に出るのはリンクの悪い癖だけれど、怒られると分かっているが、それでも必要なことだからと割り切ってもいる彼は、いつもならば許可なんて取らずに勝手に動き出してしまふ筈なのに。

状況は不自然極まりないのに、笑顔も振る舞いもいつもと全く変わらないように

思えてしまうリンクの様子が、一同にはかえって異様なもの到了。

荒れ狂う内心を懸命に抑え、表向きを取り繕った結果のよう。

そのまま押し負けて、流されてしまってもおかしくはなかった圧力に、立香は背筋とこめかみに冷や汗を流しながらも懸命に抗った。

そうして今、最後まで心配そうにしていた女性陣から見送られた二人は、鎖のうに連なる足跡をふたつ並べながら、潮騒の響く波打ち際を歩いている。

どうにも様子がおかしい彼を一人には出来ない、『サーヴァントと距離を置いても現界を保たせる練習だ』と言い切って強引に同行を承諾させたこと自体に関しでは、少しも後悔してはいないのだけれど。

自身の2、3歩分ほど前を無言で歩いているリンクに、何と声をかけるべきか、どんな話題を振るべきかを悩んでいる間に、目的地らしい洞窟の入り口が進行方向の先に見えてきた。

そのことに気づいてふと注意を逸らした、ほんの一瞬油断した立香の思考に、突如乾いた破裂音が響いた。

背筋が跳ねる程に驚きながら音の出所へと振り向いてみれば、そこにあったの

は、自身の頬を両手で挟んだリンクの姿。

結構な力を込めたらしく、手の下の肌は見ていて痛々しい程に赤くなっていて、宝石のような碧い瞳は涙で滲んでいる。

そうして、ほんの一瞬だけ俯いた顔を上げて笑ったリンクは、既にいつも通りの彼だった。

「……………よしっ」

「リンク？」

「ごめんな立香、俺の様子おかしかっただろ？」

「……………なあ、リンク」

「余計な心配かけたけど、でももう大丈夫だから」

「リンク、誤魔化すな!!」

「……………」

思わずといった様子で逸らした目線は、そのまま押し通すには無理があったこと

をリンク自身が確かに自覚し、その上で、このまま有耶無耶にしてくれるのを期待していたことの表れに他ならない。

本来ならば立香だって、無暗に事を荒立たせるのは避けたいところだし、リンクが本当に何でもなかったのならば、望み通り誤魔化されてやつても良かったのだけれど。

周りに異変を悟らせてしまっていた、取り繕えていなかった、あからさまに引き摺る程のショックを受けていたという事実を前に、このまま折り合いをつけてしまうという選択肢はあり得なかった。

「一人だけで抱えて、誰にも知られないまま呑み込んで終わりだなんて。

……そういうの、もうやめてくれよ。

お前が色々溜め込んでいたこと、それが辛かったこと、皆ちゃんと知ってるから」

「……………ありがとう。

気になったことがあったらちゃんと話した方がいいって、受け止めてくれるっ

て、もう分かっていた筈なんだけど。

やっぱりちよっと心配だったんだ、あまりぶっちゃけたら引かれたりガッカリされたりするんじゃないかって。

……一応俺、勇者な訳だし」

『一応』じゃなくて、お前は世界中から認められている真正正銘の勇者だろ。

……もしかしてお前、気にしてたのはステノの発言そのものじゃなくて、それに対して腹を立てた自分の方だったのか？

勇者としてもっと余裕を持つべきだったのとか、対応の仕方間違えたとか、そういういった感じで」

特に深く考えたりはせずに、ふと思いついたことをそのまま口にしただけだった筈の発言は、把握しきれずにいた状況の空白部分に思いがけず綺麗に嵌まり込んだ。『誰かの為』にならば、長い時間や困難な試練を経て身につけてきた強大な力や技を幾らでも揮ってみせるけれど、それが『自分の為』となると途端に躊躇ってしまう。

『勇者』という偶像に対する勝手なイメージではなく、友人として確かに目の当たりにしてきた個の性分として、『リンク』という少年はそういう人だった。

自分が抱いた推測が正しかったとしたら、この機会に思い直さなければと立香は思った。

自分が成し遂げてきたことに対して、正当な評価や見返りを求めるのは当然だし、不当に貶められて腹を立てるのもまた当然なのだから。

リンクはもっと自分で自分を正しく評価するべきだと、トライフォース万能の願望器は『勇者』を続ける為の枷などではなく世界を救った報酬だと……個人的なことに使ったとして文句を言うような者はいないし、仮にいたとしても黙らせると。

伝えようとした立香の意気込みは、途中で妨げられた。

立香の言葉を受けたリンクが、薄っすらとした笑みに困惑や躊躇いを滲ませながら、自身の考えの全てが正しい訳ではなかったことを示す事実を口にしたことで。

「……………そう、だな。」

『勇氣ある者』として似つかわしくなくって言われてムカツときたし、イラツとも

なった。

そう簡単には氣付かれないように隠蔽かけてるし、教えてもないんだから仕方ない筈なのに……それでも思ってしまった、『知らないくせに』って。

『何を馬鹿なことを』って、『俺で駄目なら他の誰が相応しいんだ』って、心の中で声を上げていた」

「……そんな風に思うのは、絶対に、悪いことなんかじゃない。

だってお前は、ちゃんと知れば誰だって凄いと認めるしかないようなことを、たくさん成し遂げてきたんだろ？」

「……ありがとう。

そう言ってもらえるのは本当に、素直に嬉しい。

だけどさ、立香、お前の予想は少しだけ間違ってる。

俺にとって本当に衝撃的だったのは、ステンの発言そのものじゃなくて、それを受けて不満を抱いた俺自身……貶められたと感じ、怒りを覚えたという事実そのものなんだ。

ハイラルにいた頃の俺は、その称号が自分を意味するものであることを受け入

れ、自ら名乗るようになり、周りからそう呼ばれて応えるようになってからも……時の神殿で瞼を閉じた最後の時まで。

『勇者』であることと、それに伴う責任と運命を、ずっと嫌がっていた筈だったんだから」

いつか必ず將軍になるって、また俺の隣に立つって言ってくれたバドの就任式は、俺が仕切る筈だった。

そういう年になったからってだけの、区切りとしての成人じゃなくて、ちゃんと育って大人になった俺を、ばあちゃんに見てもらいたかった。

陛下やインパは、私的な場ではちょっと心配になるくらいに俺に甘くて、上司や同僚というよりはむしろ姉とか父親みたいで。

つい口を滑らせた後、そう思ってくれて構わないって返されたのを、その時は適当に流したんだけど……本当は嬉しかったんだ、冗談だとしてもちゃんとお礼を言っておけば良かった。

……ゼルダと、ずっと一緒にいたかった。

二人で並んで、同じものを見て、同じものを聞きながら、共にハイラルを守って

いきたかった。

守りたかった約束や、叶えたかった未来は、まだまだ沢山あったけれど。

マスターソードを抜いて、『勇者』であることを受け入れた瞬間に、全部諦めた。
……何故って、だって俺は知っていたから。

『厄災』がどれだけ強大で恐ろしい敵なのか、『黄金の聖三角』にまつわる因縁がどれだけ過酷なものなのか。

ハイラルの長い歴史の中で、何人もの『勇者』とその仲間達が、幾度となく抗ってきたけれど……何も失わないまま、誰も傷つかないまま終わらせられたことは、ただの一度も無かったことを。

皆が、かつての『賢者』や『英傑』達と同じようなことになるかもしれないって、想像するだけで目の前が暗くなった。

そんな不安を抱きながら日々を過ごすことが耐えられなくて、俺は『リンク』の名前と姿と力、あと記憶を持っているだけのただのハイリア人だって、勇者の運命とは関係ないって、一生懸命に思い込もうとしたけれど……うん、無理があるよな、俺もそう思う。

そして、そんな誤魔化しがついに利かなくなって、『勇者』であることを受け入れるしかなくなった俺は、さっき話したような約束とか夢とか、『勇者』としての戦いを妨げるような、心残りになりそうなものの全てを捨てた……いや違うな、閉じ込めて蓋をした。

自分が頑張りさえすれば皆を助けられるなら、俺が傷つきさえすれば皆が無事でいられるなら構わないって、皆の未来を守るなら俺の未来はいらないって、そう思ったことに嘘は無かった筈なのに。

夢や約束、それらを諦められない『本心』を閉じ込めた容れ物の蓋は、ちょっとしたきっかけですぐ開きそうになって、押さえるのが本当に大変で。

決して無茶なことを願っていた訳じゃないのに……俺が『リンク』でさえ、『勇者』でさえなければちゃんと叶えられてた筈なのにとって、思わずにはいられなくて。結局俺にとって、最後の最後まで、『勇者』は重荷だった。

すぐ近くで水が滴り落ちる音と、肌が粟立つような冷氣と湿気を感じて顔を上げた立香は、いつの間にか自分達が、目的の洞窟内に入り込んでいたことにより、気が付いた。

話の方に集中していたとはいえ、いくら何でも周りが見えてなさ過ぎだと自分で自分に呆れながら、無理もなかったと思う部分も少なからず存在している。

ロマニを含めた、オペレータールームからの声はいつの間にか聞こえなくなっていて、今までのやり取りをどれだけの人が聞いていたのかは分からないけれど。

自分も含めた全員が、同じような表情を浮かべ、同じような想いを胸中で渦巻かせているのだろうということを、想像するのは容易かった。

「……………重荷だったって、辛かったって、言うならさ」

「うん」

「……………どうしてお前、笑ってるんだ」

「……………そうして繋げた先に、立香達が命がけで守りたいと願うような歴史と未来が、ちゃんと続いていてくれたから。」

たくさんのものを置いてきてしまったけれど、それに負けなくらいにたくさん
のものが、俺を待っていてくれたから。

……頑張って良かった、勇者になって良かったって。

『俺達』の旅路を『勇氣あるもの』だったと認め、讀えてくれた皆が、お前達が、俺にそう思わせてくれた。

俺はリンク、俺は勇者だと、胸を張って誇れるようにしてくれたんだよ」

その言葉と笑みを受けて、一気に滲んでしまった視界の中で、尚もリンクは続けた。

それまでの重苦しい空気を敢えて壊そうとしているかのような、殊更に陽気な声色と振る舞いで。

「まあ俺も、自分の心境がそんな風になんて変わってるってことを自覚したのは、本当についさっきなんだけどな」

「ステンノに『勇者として相応しくない』って言われて、腹を立てたことで？」

「……前までの俺だったら、そこで怒るところか、むしろ納得していたかもしれないからなあ。

彼女自身は本気で俺のことを馬鹿にしたかったんだろぅけれど、俺が『勇者』で

あるという事実と実績は、そんな言葉をかけられた程度で揺らぐようなことじゃないし。

結果的にきっかけをくれたこと自体には、怒るところか感謝してるから、お前が心配してるようなことにはならないよ」

「……………そっか、良かった。

でも、だったらどうして、あんなあからさまに不穏な振る舞いをしたんだ」

余計な心配をかけさせやがって……と、据わった目で暗に責めてくる立香に、リンクは申し訳なさそうな苦笑いを浮かべながら返した。

「単に取り繕えるだけの余裕が無かったんだよ、その瞬間まで想像もしていなかった心境をいきなり自覚させられたんだから。

下手に行動を起こしたりしなければ、落ち着くまで誤魔化せたかもしれないけれど。

……今を逃したら、同じような好機が次にいつ来るか、分からなかったからなあ」

「好機って?」

「……ステンノに『勇者らしくない』って言われて、怒って、自分の変化を自覚して。」

その後でさ、ふと思ったんだよ。

『そういえば、確かに俺は目覚めてからこの方、勇者として本気で戦ったことがまだ無かったな』って」

「……………はい?」

その発言が事実であると、少なくとも当人は本気で口にはしていると、理解して受け入れるまでには数秒を要した。

これまでにリンクが幾度となく見せてきた戦いを、彼が『勇者』であることを証明してきた筈の光景を、脳内で巡らせながら唾然としてしまっている立香をよそに、リンクもまた同じものを思い描きながら、立香とは異なる印象を語っていく。

「いや……と言うより、『本気で戦える、もしくは戦う必要がある状況が無かった』

と言った方が正しいな。

オルレアンの時は、サーヴァントの体の使い方を把握するのが遅れて宝具やスキルの類いが使えず、武器の調達にも手間取って、余計な苦勞をしていたし。

ローマに来てからは、人間相手の戦いばかりで基本的に要手加減だった上に、ただ単に相手を物理的に倒せばいい訳じゃない形の、駆け引きや工作の方が重要になる展開も多かったし。

『俺達』の冒険、旅路が偉業とされ、『俺達』が『勇気ある者』と称される理由の中でも、特に大きなもののひとつ。

ほんの一瞬、たった一回でも間違えてしまえば命取りになるような、強大な怪物との戦いを、サーヴァントの身を得てこの時代で目覚めた今の俺は、まだ為していないんだ」

「……それは、機会が無かったんだし、仕方ないんじゃないか？」

「ああ、そうだな。

仕方なかったし、そんな事態にならなかったことは、組織としては紛れもなく幸運だった。

だからこれは、あくまで俺の個人的な事情で、我が儘だ。

特異点という閉じられた世界の、『神の住む島』という人の認知から離れた領域の、洞窟という更なる密閉空間の、『女神の試練』という特殊な条件までもが付加された場所。

こんな好条件が重ねて整っている状況は、逃すにはかなり惜しかった。

手順と感覚に覚えもあることだし、今この場でだったら、『記憶と経験を基にした再現』はそう大変なことじゃないと思う」

「……………えっ、待て、ちょっと待て。」

お前、何をやるって？」

嫌な予感に表情を引き攣らせた立香の、少し上擦りながら震えていた問いかけに、リンクは言葉ではなく、自身の左手の甲をそつと翻す動作で応えた。

立香が目にしたのは、自身の手の甲に刻まれている紅い三画とは似て非なる、黄金の三角。

最も古く、最も強い力を持つとされる原初の『願望器』であり、『最後の願い』の

受諾と成就によってその側面が失われた今も尚、大抵の願いならば物量のごり押しで叶えられるとされている無限の魔力の源。

それが、赦されている筈なのに滅多に使おうとしない主の、本当に珍しい願いを受けて、眩い輝きを放ち始めていた。

「ごめんな、立香……こうすると決めていたからには、お前の同行は、何が何でも断っておくのが正解だったんだろうけど。

俺自身に余裕があまり無かったのと、お前が心配してくれているのが嬉しくて、つい押し切れなかった。

でも大丈夫、参考にするのは『俺達』の戦いの記憶と経験だから、当時その場になかったお前が狙われることは無い筈。

……でも、まあ、流れ弾にだけは気を付けてくれ」

そう言って、少し申し訳なさそうに笑ったリンクの足元の、見るからに頑丈だった剥き出しの岩盤に、突如巨大なヒビが走る。

あつという間に枝分かれし、蜘蛛の巣の如く広がった亀裂は、その辺り一帯を呑み込みながら瞬く間に崩壊した。

上げていたかもしれない立香の悲鳴や怒号は、その轟音によって完全に掻き消され、誰の耳にも届くことはなかった。

第一階層

硬い岩盤を突き抜けたその下には、明らかにあり得ないものが広がっていた。

一応人の手が加えられていると思われるその場所を認識した立香が、ふと思い出したのは、日本の防災対策が優れていることの一例や映画や特撮の撮影場所として時折話題になる、首都圏近辺に存在している巨大な地下空洞施設。

あれから巨大な柱が取り除かれているような、ただひたすら馬鹿でかく造り上げた空間……立香は身一つで、その天井を突き破った穴から放り出されていた。

怒号と共に出し切った空気を今一度肺に満たし、今度は悲鳴として出しかけたそれが、急に締まった首元で堰き止められた。

落下中だったことも合わせてガチで首吊り状態になりかねなかったそれは、鎖が鳴る独特の音を立てながら立香の襟元を掴まえた『もの』が、彼を持ち主の下へと引き寄せるまでの時間がほんの一瞬だったことで事なきを得た。

「ゲホッ、グッ…うええ……」

「ごめん、咄嗟のことで変なところ掴んじゃった」

「……大丈夫、ありがとな」

「このまま降りる、手を離すなよ」

鎖付きの先端が爪のように開閉出来るようになっていて、装着を射出して立香を掴まえ、引き寄せた彼を背負い、その身が安定したのを見計らってから、現代のハンドグライダーにも似ている小型の飛行用装備を展開させる。

それらの行程をリンクは、立香と同じように何の前触れも無く虚空に投げ出されながら、その身が地に叩きつけられるまでのほんの僅かな猶予の中でやり遂げてみせた。

管制室から見守っていた者達が、驚愕と悲鳴を歓声と拍手に一変させるのには十分な光景だった。

かつて勇者の翼としてハイラルの空を飛んでいたパラセールは、想定外である筈の二人分の体重にも立派に耐え、二人の足を無事に地へと降ろした。

体と足場が安定し、ようやく人心地がついたところで立香が改めて、余裕を取り戻した冷静な思考力で以って辺りを見回した。

『ローメイ島の地下だな』と呟いたリンクの声が聞こえたけれど、『ゼルダの伝説』を読み込んだ訳ではない立香には、それだけでは詳しい判断は出来ない。

立香が気になったのは、縦にも横にもだだっ広い部屋の所々に、人造のものらしき謎の残骸が鎮座していることだった。

魔物どころか、自分達以外の生き物が存在する気配が欠片も伺えないことに、張りつめていた緊張が僅かに緩んで息をついた……その時だった。

ギョロリと動いた（ように見えた）幾つもの光る目が、無機質な眼差しをこちらへと向けたのは。

「ひっ…!？」

「だよな、こいつらが出てくると思ったよ」

引き攣った声を零しながら竦み上がった立香を他所に、『やれやれ』とでも言いたそうなため息をつきながら、目の前で起こることをどこまでも自然に受け入れるリンク。

『ピピピピ』という不穏な機械音と共に発生した、幾つもの赤い線状の光が彼の体にぶつかり、赤い点を浮かび上がらせる。

その光景が、現代の若者として映画やゲームに親しんできた立香には覚えがあった。

『照準』……その単語が脳裏を過ぎり、衝動的に声を上げるよりも先に、リンクは駆け出していた。

踏み込みで石畳を割るほどの脚力を最大限に駆使して、あっという間に立香から離れていくリンクの走りに、赤い光は間髪を入れずに追隨していく。

音の間隔は徐々に短くなり、細かい音の集合ではなくひとつの大きな音となった

その時、赤い光の数と同じだけの、白く輝く熱線が放たれた。

瞳を焼く閃光が走ったと認識してから、着弾点に爆炎が上がるまでの間はほんの一瞬。

心臓が握り潰されるような思いは、炎と煙を割りながら何事も無いかのように飛び出したリンクの姿によって和らぎ、次の瞬間、照準の光が再び微調整を始めたことで再燃する。

しかし、強靱な脚力と無尽蔵にも思えるスタミナで駆け回るリンクが、熱線の爆撃を無事に切り抜ける光景が二度三度と続けば、自然と冷えてきた頭が、それが幸運の賜物などではないことに気づく。

「……照準が定まってから実際にビームが発射されるまでに、ほんの一瞬だけラグがあるんだ。

だから、照準に背を向けて距離を置こうとするんじゃない、立ち止まらないで横切るように走り続ければ、間一髪でビームを避けられるんだ」

立香を巻き込まないように距離を取り、尚且つ、反撃に転じるための好位置を探して走り続けたリンクは、ついにそれを見つけた。

立香が始め謎の残骸と判断したもの、実際にはまだ生きていた、不気味な赤い輝きを放ちながら標的を捉え続ける戦闘用ガーディアン。

その一体の、照準器とビームの発射口を兼ね備えている目のような部分、今まさに何発目かのビームを放とうとしているところへと向けて、リンクはシーカーストーンと同じ青い光を放つ鑢を番う。

狙った個所を過たず射抜いたそれは、たった一撃でガーディアンの中枢まで食い込み、強靱な体躯を内部から膨張させた。

一瞬後には爆発するであろうその身をリンクは駆け上がり、天辺を蹴った瞬間に沸き起こった爆風すらも利用して飛び上がった。

自然に発生したものではない風を、小さな翼で見事に捉えたパラセールによって広大な空間の天井近くまで舞い上がったリンクを、ガーディアンの爆発に紛れて一瞬見失ってしまった彼を、仲間が破壊されたことに揺らぐような心を持たない機械仕掛けの眼差しが追う。

しかし、それによって狙うべき的が定まったのは、ガーディアン達ではなくリンクの方だった。

自分以外の時間の流れが遅くなったと、そんな錯覚を抱く程の極限の集中状態。そんな一変した世界の中でリンクは、自身へと向けられる幾つもの赤い照準の数と同じだけ、数秒後には閃光が放たれるであろう軌道を逆になぞりながら、対ガーディアンに特化した取って置きの鎌を打ち込んだ。

第三者視点から見ていた者達の目と脳裏には、不安定な空中で弓を構えたリンクが、その身が落下を始めるまでのほんの一瞬の間に放った複数の矢が、同じ数的を過たず射抜いてみせた驚愕の光景が焼き付いていたことだろう。

再びパラセールに掴まったリンクがゆっくりと降りてきて、その両足でしっかりと床を踏みしめたその時には、ガーディアン達がほぼ同時に爆発した衝撃と轟音は既に収まり始めていた。

「……り、リンク」

「待て立香、まだだ」

凄まじい攻防の前に、殆ど止まってしまっていた呼吸と筋肉の動きをゆっくりと再開し始めた立香の体が、思わぬ制止を受けてまたしても硬直する。

未だ戦闘態勢を解いていないリンクが、その鋭い眼差しを向けていたのは、先程破壊したガーディアン達よりも一際大きな塊。

あの激しい攻防の中でも反応を示さなかった、なので立香は本当に壊れているのだと思っていたそれが、全身に赤い光を走らせ、機械仕掛けの駆動音を立てながら動き始めた。

砲身のような体を回転させるだけでなく、白い節を連ねた何本もの足を備えているその姿に、立香は見覚えがあった。

『訓練用小型』と頭についていたあれと比べたら縦にも横にも遥かに大きく、命を感じない巨大な体軀の前に感じる恐怖や圧力は、もはや比べものにならないけれど。

世界を滅ぼす厄災ガノンに対抗するため、勇者と姫の戦いを後押しするためにシーカー族の超技術によって造られながら、ガノンの怨念に憑りつかれて血も涙も心も無い殺戮装置と化してしまった、古代のガーディアン。

気色悪い程に自在かつなめらかに動く足で、目標に照準を合わせるのに絶好の位置を取り、またしてもその目から機械音と共に赤い光線を放ち出したガーディアンを前に、立香が慌てた声を張り上げる。

「早く、またビームが来る前にさっきの凄い矢を使って!!」

「いや、あれ製造コストが結構厳しくて、出来る限り使いたくない奴なんだよ。

さっきのは、複数で一斉に狙われている状況だったからこそその大盤振る舞いだっただけで」

「この状況で何言っ t」

「だから、相手が一体だけならこれで十分」

「リンク!?!」

立香が素っ頓狂な声を上げた理由が、オペレータールームから同様に固唾を呑みながら見守っていた、目の前に広がる光景に対して全く同じ気持ちを抱いた一同にはよく分かった。

こちらが近づけば同じだけ離れ、狙撃に最適な位置と距離を取り続けるガーディアンにそれでも攻撃を加えるべく、武器を抜いて走り出すでも。

ガーディアンを一撃で破壊する力を持っていることが既に証明されている、特製の矢を番えながら弓を引くでもなく。

リンクが構えたのは、マシユのそれとは違って武器の使用と両立させられる扱いやすさを重視した、片腕に備え付けるタイプの小型の盾だったのだから。

盾の鏡面は赤い照準を確かに受け止めてはいるけれど、そのまま直撃を食らえば耐えるどころか持ち手もろとも吹っ飛ばされてしまうことを、マシユの盾でも連続で放たれれば動けなくなりそうな威力を目の当たりにした一同が想像するのは容易い。

右往左往する思考が収まり、誰かが何事かを口にするよりも、ガーディアンが照準を合わせ切る方が早かった。

白く輝く熱線が放たれ、爆炎と共に標的を吹っ飛ばしたと思われた次の瞬間、想定とは違うところで起こった爆発の轟音が、どこか遠いところで聞こえた気がした。目の前で起こった光景の意味を理解し、受け入れるまでに時間がかかった。

流石の思考回路で他の皆よりも一足早く復活した、ダ・ヴィンチの素っ頓狂な声が辺りに響く。

《盾でビームを受け止めるところか跳ね返しただって!?

質量や重量を持たない光線であることを考慮すれば、理論的には確かに不可能ではないけれど、コンマ一秒でもタイミングを間違えれば消し炭だ!!

しかも彼、それを守るためじゃなく攻撃手段として使ったよね!!

どんな技量と度胸があれば、あんなぶっ飛んだ発想を実行に移して、しかも成功させられるって言うんだい!!》

リンクが、マシュとは違う形での盾の達人であることは、幾つもの実例と共に既に周知されている。

今の光景は、その認識に更なる答えと確信を与えるものだった。

マシュのそれが『守る盾』ならば、リンクのそれは『攻める盾』。

使用する盾の大きさや用途ではなく、扱う者の意識や発想そのものが全く違うの

だ。

『盾を構える』という守りの動作を行ない、両足から楔でも打っているかのような勢いで床を踏みしめながら、リンクは今この時も間違いない攻めている。

ガーディアン、生き物の目を模したようにも見えるあの部分は、恐ろしい熱線を繰り出す場所であると同時に繊細な急所でもあるのだろう。

放たれた時と全く同じ軌道を、逆になぞる形でものの見事に跳ね返された熱線はその急所を直撃し、それが生き物だったならば間違いなく怯んで隙を見せていたと思われるだけの痛手を与えていた。

しかし、痛みを感じず、怯むような心も無いガーディアンに、そのような想定外の動きを起こすような余地は存在しない。

彼らに出来るのは、殲滅すべき対象を見つけたら、それが探知出来る範囲内に存在する限りひたすらに光線を撃ち続ける、ただそれのみ。

そうして放った攻撃が効かなかったどころか、そっくりそのまま跳ね返されて自身のダメージに変えられてしまったことを考慮し、行動パターンに自ら修正を加えるような柔軟性は、厄災ガノンを取り巻く数の脅威となるべく造られたガーディア

ンは持ち得ていない。

懲りないのではなく、懲りることも出来ないまま、盾を構えるリンクへと向けて熱線を放ち続けたガーディアンは、三度目の跳ね返しを目に食らって異様な音と火花を全身に走らせた数秒後に、轟音と共に爆発四散した。

一度ならば偶然と思えたこと、どんなに信じがたいことも、連続すれば意図して行なわれたことだと認めるしかない。

ふうと息をつき、戦闘態勢を解いたリンクの眼前の床に、青い光の魔法陣のようなものが浮かび上がる。

それが次の階層に移動するためのものであること、この階層における戦闘をクリアしたことを、立香は反射的に理解した。

「よし……なあ、立香。」

あまり消耗も無いし、すぐに行きたいんだけど、お前は大丈夫？」

「え、あ、まあ……俺が戦ってたわけじゃないし、お前がいいなら俺はついていくだけだけど」

「ありがとう、じゃあ急ごうか」

「……それはいいけど。」

一体どういう経緯や発想があったら、盾をあんな使い方しようなんて思いつくの？」

「敵の攻撃を防ぐだけじゃなく、上手く合わせて体勢を崩して、攻撃する機会を作ったりするのは歴代の皆がやっていたことだけだ。」

それを特に突き詰めて洗練させたのは、『息吹の勇者』だ。

彼が一度死んで、復活するには100年の眠りと記憶の全てが引き換えだったことは、もう知ってるだろう。

さっきのガーディアンが、その原因だったんだよ。

容赦なく熱線を浴びせてくる無数のガーディアンを相手に、ゼルダ姫を守って逃げながらの戦いは、稀代の天才剣士でも流石にきつかったんだ。

二度と斃れてしまわないために……今度こそ生きて、今度こそ本当にゼルダ姫を助けるために。

硬い装甲と、一発でも当たれば消し飛ばされるような攻撃手段を併せ持つガー

ディアンを、装備や選択肢が限られている状況で、それでも確実に倒すにはどうすればいいのかを考えて。

やっとの思いで身につけた技だよ、何度も何度も死ぬような思いをしなげらね」

その言葉に、ガーディアン達が慈悲も容赦も無く熱線を放つ先程の光景と、いつかの試練で目の当たりにした少年の笑みを重ねさせた立香は、思わず口元を手で覆ってしまった。

かつて自分を殺した相手と、再び相まみえる……その記憶、その恐怖をも、彼は忘れることが出来ていたのだろうか。

仮に覚えていたとしたら、そうでなかったとしてもいつかのタイミングで思い出してしまったら。

そこから先はもう、立香には想像するしかなかった。

勇者リンクが身につけた数多の絶技は、『出来るようになりたい』ではなく、『出来るようになるしかなかった』から磨かれたもの。

その事実に想いを馳せ、何とも言えない心地になりながら、立香はリンクに続い

て青い光の陣の中へと踏み込んだ。

何の支障も、気がかりも無く、代々の勇者達の戦いをなぞっていく試練を始めたリンクとそれに付き添う立香は、これっぽっちも気付いていない上に予想も想像もしていなかった。

「きゃああああああっ！……！」

「ぎにゃああああああっ！……！」

「何なのよあのガイコツ、間違はなくバラバラにしてやったのに自分で頭を拾って復活するって何なのよ!!」

バカバカバカ、こっち来ないでえええっ!!」

「何かしらの呪いだとしたら性質が悪いにも程があるワン、キャットが一体何をしたとおっしゃる!!」

さては極悪非道な本体のヤロウが碌でもない理由で買った恨みを適当な尻尾に流したか、ざけんなテメーぶっ殺すぞ!!」

ステンノの仕込みの一環として洞窟に潜んでいた二人の少女達が、トライフォー
スによる空間の造り替えに知らず知らず巻き込まれてしまったことを。
リンク達と運よく遭遇して合流出来るまで、彼女達が持ち堪えられるか。
今のところそれは全て、彼女達自身の根性と頑張り次第であった。

ブレワイの剣の試練をイメージしてみました、極位どころか中位で手間取ってま
す。

第二階層

「何だこりゃ、スライム!？」

「何だそりゃ、これは『チュチュ』だよ。」

強いかわいさで言えば弱いけど、厄介な連中なんだよな」

色とりどりかつ大小様々な不定形の塊が、前の部屋ほどではないにしても、それなりに広い空間のあちこちで積み重なりつつ蠢いている。

それだけならば、立香も声を上げてドン引きするだけで済んだのだろうけれど。紛れもない魔物であるそれらは、獲物の存在を感じ取ると同時に確かな目標を定

めて一斉に動き始め、その目標のすぐ隣に立っていた立香は必然的に、触るところか近づくことすら躊躇うような謎の物体が迫ってくるという光景を目の当たりにしてしまつて。

生命を脅かされる恐怖ではなく、生理的嫌悪感を催してくるタイプの敵に対しては未だ慣れておらず。

当然の本能に従つて踵を返しかけたその襟首を、殆ど同時に伸ばされた手が掴まえた。

今回のこの状況、この敵に対しては、避難させるのではなくすぐ傍に置いた方がむしろ安全と判断したからだ。

「伏せてろ!!」

リンクが簡潔に指示を出すのと、それを受けた立香が両腕で頭を庇いながらその場に蹲るのとは、時間差は殆ど存在しなかった。

リンクの言葉、判断に間違いは無いと心から信じていることを、何よりも明確に

証明してくれている光景を前に、確かにそれに応えなければと、新たな決意と力が湧いてくる。

具体的に言えば、構えた両手のひらの間で渦巻く炎となって。

以前、『この程度が精々』と使い手自身の口で称され、ほんの数秒で芯までホッカホカの焼きリングを作るといふ何気に難しく精密な技として披露されたこともある火球は、小手先の技術なんてクソくらえと言わんばかりの圧倒的な力で以ってリンクの手のひらから迸り、彼を中心とした巨大な炎の半球を造り上げた。

四方を囲まれて逃げ場の無い獲物へと向けて、一斉に飛びかかったところだった第一陣がそれに飲み込まれ、多量の水分で構成されていた体が弾けるを通り越して一瞬で蒸発する。

その中にはかなりの割合で『属性持ち』も混じっていたらしく、内包されていた赤や白や黄色の魔力が核の破裂に伴いながら迸った。

炎が燃える音、冷気が張り詰める音、電気が走る音。

三者三様に恐ろしく不快な音が、命の危険を彷彿とさせる威力を伴いながら、それらを肌で直接感じ取れるくらいの距離で次から次へと連鎖的に起こっては消えて

いく。

蹲るを通り越して、額を地に減り込ませるような勢いで完全に伏せた状態になって、頭を底いつつ耳を塞ぎながらその状況を必死にやり過ごして。

収まったのを見計らってから恐る恐る顔を上げた立香が目にしたのは、山積みになりながら自分達を囲んでいた筈の魔物達が滓も残さず一掃され、まっさらになった地面の所々に、炎や氷や電気の僅かな名残のみが辛うじて見受けられる光景だった。

「……………うん。」

『力の女神』の炎は、やっぱりこれくらいでないと」

「……………なあ、リンク。」

サーヴァントという身でのスペックの限界の問題で、能力には出力制限がかかってたんじゃなかったっけ？」

「『今この場』でなら大丈夫、そういう風に設定した。」

前回シミュレーターでやった時は出来なかった分を、やっぱりちゃんと確認して

おきたかったし。

……いずれ、何らかの手段や形で制限を取っ払って、最低でも緩めて、普段から本気を出せるようにするつもりでいるからな」

「うわー頼もしい、頼もしすぎてちょっと怖い……」

「頼りないよりはマシだろ？」

気が置けない仲だからこそ、紛れもない本音が込められた軽口を交わし合っていた二人の笑い声が徐々に力を失い、その表情が強張っていく。

『前回』と比べての違和感を抱いたのは、ほぼ二人同時でのことだった。

「おかしいな、次に行くための魔法陣が出てこない」

「ということは、まだ……」

同じことを考えた二人が思わず顔を見合わせたのと、彼らが立っていた地面が突如緑の粘液と化してその足首までを呑み込んだのとは、ほぼ同時に起こった出来事

だった。

「なっ、何だこれ!？」

「立香、掴まれ!!」

そうして伸ばした右手を痛いほどの力で掴まれたリンクの、翻した左手から沸き起こった緑色の魔力が二人の体を包み込む。

風に卷かれたその姿が一瞬で掻き消えたのと、少し離れたところの確かな地面を二人分の足が踏みしめたのちに、時間差は全くと言っていいほど存在しなかった。

「い、今のは……?」

『『勇気』を司る女神、フロルの風だ。』

この程度の短い距離なら、一瞬で移動や離脱ができる」

「……お前が凄腕の魔術師でもあるって、ドクターやダ・ヴィンチちゃんが散々言ってたのを改めて実感したよ」

「そりやどうも。

感心してもらえるのはありがたいけど……まずは、こいつを片付けないとな」

少々引き攣った声と表情で振り返った二人の目線は、首を何段階か上向きにする必要があるような、随分と高い位置へと向けられている。

リンク達を危うく飲み込みかけながら盛り上がった粘体は、遙か頭上高くまで聳えるような塊となって自立し、それが生き物であることを辛うじて証明している巨大な目が、無感情にこちらを見下ろしていた。

「こんなのもいたなんて、ほんとハイラルってどんだけ……」

「あ、いや……こいつに関しては、こっちが小さくなってたから、普通のチュチュが巨大な敵に見えたってだけの話だった筈なんだけど。

まさか本当にこのサイズで現れるなんて……でもまあ、『俺達』自身の記憶と感覚を頼りに再現してるわけだから、あり得ないことではないか」

苦笑いを浮かべながら、少々鈍くなってしまっている思考を懸命に回すリンクへと這いよる巨大チュチュの歩みは、動作の緩慢さを一足の大きさが上回って中々に速い。

上手く隙を見て脇を抜けようとした試みは、巨大チュチュが歩みを早めるどころか、その粘液で形作られた巨体のどこにそんな器用さがあったのだと問い質したくなるような勢いで跳び上がり、地と空気を揺らす轟音と共に降ってくる衝撃的な光景によって叩き潰される。

圧倒的な重量と質量によって危うく圧し潰されるところだった、ほんの一瞬先の嫌すぎる未来予想図は、リンクが再び『フロルの風』を使用してくれたおかげで叶わずに済んだ。

しかしホッとしたのも束の間、轟音と衝撃と共に地面を盛大に凹ませた巨体の魔物は、閉ざされた空間の中でほんの僅か移動しただけの獲物をすぐさま見つけ出してしまふ。

今すぐ全速力で逃げ出してしまいたい本能を、ここが一番の安全地帯だからと叫ぶ理性で以って懸命に抑える立香は、考えてはいるものの困ってはいないリンクへ

と少々上擦った声で問いかけた。

「リンク、どうするつもりなんだ？」

「うーん……幾つか手は浮かんだし、倒すのだって別に難しくはないけれど。

ここは敢えて縛りを入れて、先輩に倣ってみようか」

そう言って笑ったリンクの、軽く広げた手の中で渦巻いた青い光が瞬く間に収束し、形作ったもの。

それは、白地に青い模様が施された胴体に、両手で掴むのに丁度よさそうな取っ手がつき、口元には角のような二本の突起がついている、小さな子供でも抱えて持ち上げられそうな大きさの壺だった。

一見何の変哲も無い壺にしか見えないけれど、リンクがこの状況で取り出したものが、本当にただの壺である筈がない。

抱いた時点で既に確信を抱いていたそんな予想は、両足を強く踏ん張りながら構えた壺の口の辺りが高速で回転し、容量を無視しながら凄まじい勢いで空気を吸い

込み始めた光景によって答え合わせをされた。

壺の性能に問題がないことを確認したリンクは、ニイッと口の端を吊り上げる笑みを浮かべながら、吸引を続ける壺の口を巨大チュチュの足元へと向ける。

多量の水分で構成された柔らかく脆い体は、その猛烈な勢いにほんの一瞬たりとも耐えられず、徐々に砕けながら黒く開いた穴の向こう側へと吸い込まれていった。膨大な体積は少しずつながらも確実に減っていき、巨大な頭部を支えるためのバランスがあらさまに崩れていく。

その巨体が右に左にと傾き始め、獲物を追い詰めるための動きが今にも倒れようとしている我が身を保たせるための動きに変わったのを見計らったリンクの手が、鞘から剣を抜き放った。

「すぐに終わらせる、ちょっとだけ待っていてくれ」

代々の『リンク達』が、大変な偉業や冒険を成し遂げることが出来た理由は、大きく分けて二つある。

ひとつは彼らに、どんなに強大で恐ろしい敵をも打ち倒すことが出来るほどの、優れた戦士としての素質があったこと。

そしてもうひとつは、問題を真正面から正攻法で解決することに決して拘らず、その時その状況においての本当の最善と最適を考えて、的確に実行に移すことが出来る器用さと応用力をも備えていたこと。

特に後者の素質は、平和に暮らしていた少年が必要に駆られて冒険を始めたばかりの、まだまだ勇者として拙い身で、それでも敵を倒して進まなければならないという困難を幾度となく乗り越えさせた。

空気を吸い込みかつ吐き出すという、至極単純で戦闘に役立つ訳でもない力しか持っていなかった魔法の壺を上手く使って、大人でも尻込みしてしまうことを責められないような大物を幼い身で見事倒してみせた、『創剣の勇者』もその一人。

かつて自分の運命を戦い抜き、自分の守るべきものを守り抜き、今はこの身の内側から力を貸してくれている先輩方への敬意を新たにしながら振り抜いた一閃が、盛大に横倒しになったことで露わとなった巨大チュチュの核を見事に両断した。

「ぎい
いやあ
あもう
いやあ
あああ
あああ
ああ
あっ
!!!!
」

「落ち着くのだドラ娘、腐ってもアイドル志望が上げていい悲鳴ではなくなってるぞ!!

プロ根性を捻り出すのなら今ぞ、音響兵器でガラスのコップを割るが如く甲高い悲鳴を響かせるのだ!!

ほらリテイク、さんにーいちハイッ!!」

「出来るかバカ、状況に合った発言が出来ないのならいつそのこと黙ってなさいバーサーカーネコこのボケェッ!!」

「ああ、これはいかん……ただでさえ精神的に参っているところに、生理的嫌悪感が加わって本格的にキャラが崩壊しているワン」

「ほんっと何なのよあの虫……虫よね。」

一つ目ででかくて丸っこくてトゲトゲしてたけど、ウニとかクリの化け物じゃなくて、虫で合ってるわよね。

って、虫だろうがウニだろうがクリだろうがどうでもいいわよ!!

わさわさと大量に湧いてくるわ、寄ってたかって纏わりついてくるわ、もう最低

最悪ほんっと気持ち悪い!!

見てよこの鳥肌、アイドルが玉のお肌で魅せられないだなんて死活問題だわ!!」
「あれだけ盛大に全身纏わりつかれておきながら、それだけ元気に声を張り上げられるということは、毒を持つてはいなかったと考えると良からうな。

不幸中の幸いというやつか」

「も、もう居ないわよね……」

「見える範囲に居た分は間違いなく、お主の見事なドラゴン・シャウトでカスも残さず消滅したぞ。

今のうちにさっさとこの場から離れるのだ、でかいのに来られたらキヤットもさすがに野生を忘れて尾を丸め込んでしまう自信があるワン」

「……………ねえ、『でかいの』って何のこと？」

「キヤットが思うにあのトゲトゲは、虫は虫でも『幼虫』の類いであろう。

ならばそれを生んだ親、もしくは『成虫』が近くにいると考えるのは、野生の勘を持つ者として当然の……………」

「……………」

「……………」

「ねえアンタ、『フラグ』って知ってる？」

「済まなかった、キャットの過ちを全面的に認めるのだ」

「すう……………」

「ぎいいいやああああ蛾の化け物おおおおおおおおっ！……！」

「落ちてけドラ娘、こういう類の奴は翅を落としてしまえば動けなくなるというお約束がある……………ありゃ？」

「普通に走って襲ってくるじゃないのよおっ！……！」

バカバカバカ、こっちの方がずっと気持ち悪いわっ！……！」

ぎゃああああまた毛虫出たあああああっ！……！」

「もうほんとと何なのだこいつらは、こんな性質の悪い化け物どもがあのに性悪女神

に用意できて堪るか!!」

女神の試練……その最後の関門となるために、洞窟の最奥部に潜んでいた二人がカルデア組との合流を果たせるのは、まだもう少しばかり先のこと。

第三階層

「あっ」

「うわっ!？」

リンク、いきなり何すrぎゃあああいきゃあああきいやああああああっ!!!!

「

最終的には女性のそれを思わせる程に、段階を踏みながら徐々に甲高くなっていったそれは順番に、『前触れなく突き飛ばされて驚いた声』『いきなり降ってきて自分達が今の今まで立っていたところを叩き潰した巨大な手を前に飛び出た絶叫』

『リンクの剣で切り払われたそれが分裂して数体の通常サイズの手になり、それらが猛スピードで辺りを這いずり回り始めた光景のおぞましさに竦み上がった悲鳴』
『その内の一体、腰を抜かしてしまった自身のすぐ目の前に迫ってきていたものが、青白い刀身によって一息に地へと縫い付けられ、悶え苦しんでいるかのように蠢きながら消滅していくという衝撃の光景を視界いっぱいに見撃してしまったことによる金切声』であった。

「リンクううううっ！！！！」

「悪いけど少し待っててくれ、話があるならちゃんと聞くから。」

『これ』は少し厄介なんだよ、小さいやつを一匹でも逃がしたらそこからすぐに復活するからな」

「ゴキブリ退治するのと同じような感覚で魔物を語らないでお願いだから!!

世界どこるか史上トップクラスの専門家なお前と違って、俺はほんっとついこの間まで魔術や魔物どこるかクマとかライオンとかの猛獣とも縁遠い一般市民だったの!!

だからって開き直る気は無いし、頑張って慣れたり学んでいくつもりだってあるけれど、お願いだからもうちょっと手加減して!!」

「頭の上から降ってくる影の存在に気を付けていれば、対応はそんなに難しくない奴なんだけど……」

「倒しやすいかどうかだけで判断するのやめて、手首が単独で動き回るってだけで生理的にきつついんだって!!」

魔物だったのが一目瞭然なかいやつの方がむしろいい、小さいのはリアルすぎる!!」

アレならまだ、同じサイズの蜘蛛にでも出てこられた方がマシだわ!!」

「あっ」

「今度はなひぎゃああああああっ!?!?」

気づくと同時に自然な動作で構えた弓と矢によって撃ち抜かれ、立香のすぐ傍に重い音を立てながら落ちてきたのは、人間など簡単に捕食されてしまいそうな、人の髑髏を思わせる不気味な外殻を備えた巨大な蜘蛛だった。

それが、次から次へと放たれる矢と同じ数だけ周囲に降ってきて、節のある長い足を痙攣させながら消滅していくというどぎつい光景を前に、立香はただ、蹲って頭と顔を底いながら女性ののような悲鳴を上げ続けることしか出来ない。

「今度はスタルチュラか、上から奇襲をかけてくる類いのやつで分類されたかな」
「倒すなどと言わないから、襲われる前にやつつけてくれることに関しては本当にありがたいし頼りにしてるから!!」

一言声をかけてからにして、心の準備をさせて、頼むから!!」
「……お前さっき、蜘蛛ならいいって」

「手首よりは『マシ』なだけ、当たり前前に人間を襲いそうな巨大蜘蛛なんてホラーやパニック系の映画やゲーム以外で会いたくない!!」

「つか魔物じゃなくても、人の手と同じサイズの蜘蛛って要はタランチュラだし普通に怖い!!」

「ご、ごめん……ちゃんと気をつけようとは思ってるんだけど、その瞬間になるとどうしてもすっぽ抜けて………」

「……リンク？」

「避ける立香!!」

三度目、またしても声を出すより先に飛びかかってきたリンクによって、諸とも盛大に飛びのかされた立香だったけれど、文句を言う気にはならなかった。

自分達が立っていた『場所』どころか、『範囲』を丸ごと叩き潰すような巨大な影が現れたことには、学び始めたばかりの彼でも流石に気付けた。

重力に任せて落ちてきた勢いに自身の力を加え、硬い岩盤で形成された床を轟音と地響きと共に叩き割ったのは、人一人どころか数人纏めて驚掴みにして握り潰してしまえそうな巨大な手のひら。

騎士が身につける手甲の如く、固い鋼鉄によってその全体が覆われ、甲の部分からはぎょろりと不気味に蠢く黄色い目玉がこちらを見据えていた。

「……………さっきのスライムといい、この手の化け物といい。

ハイラルの魔物って、どいつもこいつも、何でこんな無駄にでかいわけ？」

「強力な魔物は基本的にでかいってのは確かにそうだけど、本当に巨大なやつと比べたらこれはまだ小さいほうだぞ」

「マジで!?!」

「それに関して聞きたいなら後で詳しく話すから、今は待っていてくれ。」

こいつの場合はさっきとは逆に、傍にいと危ない」

言うや否やリンクは、呆然と立ち尽くしてしまっていた立香をその場に残して走り出し、巨大な手は重力の戒めに逆らいながらそれを追い始めた。

時に手のひらで、時に拳で、頑強さと剛力を備えた手の魔物はリンクの足跡を紙一重のところで叩き割り、それなりに頑丈そうに見えた床石を手形状に崩落させていく。

ハラハラしながら、それでもリンクならばと信じて見守っていた立香は、逃げ道となる足場を失い、壁際に追い詰められてしまうという予想に反した展開を前に目を剥いた。

武器を構えるでも、逃げるための隙を伺うでもなく、壁にピッタリと背をつけて、

目の前の標的を一息に殴り潰さんとばかりに硬く握られた巨大な拳を見据えるリンク。

何とか避けてくれる、もしくは反撃してくれると、立香は懸命に信じていたのだけれど。

次の瞬間彼が目にしたのは、強烈な唸りを上げながら放たれた鋼鉄の拳が、リンクが背をつけていたところの壁に轟音と共に叩き込まれた光景だった。

「リンクー！ーっ！！？」

衝動的に、思わず走り出した立香の動きを止めたのは、その場にひっくり返って目を回すという手の魔物の間の抜けた姿だった。

自ら突っ込んでおきながらその反動に耐え切れないなんて、ぶつかった壁が予想以上に頑丈だったか、あるいは……壁より手前で衝撃の全てを受ける筈だった対象が、ブレーキをかける間も無かった直前でそれをかわしたか。

たった今間違はなく潰された、カートゥーンアニメのキャラクターのように平面

にでもならなければ逃れられないような攻撃を受けた筈の場所から、何の怪我も無ければ消耗した様子も見受けられないリンクが飛び出し、巨大な手の甲でグルグルと瞳孔を回している目玉へと向けて、マスターソードの青白い刀身を振りかぶった。

少し短いのですが、前回の更新から間が開いてしまったため一旦投稿します。
次回はもっと早めに、量も出せるように頑張ります。

第四階層

自身の体が青い光と化すという、レイシフトともまた違う不安定な移動を経た立香は、形を取り戻した足が地についてふうと息をついた次の瞬間、その身を安定させるどころか飲み込んできた足場によって盛大にその身を滑らせた。

「ぶひゃっ!!

何だこりや……砂あ!?

「立香!!」

突然のことにパニックに陥り、砂の海で半ば溺れる立香の耳に、リンクの慌てた声が辛うじて届く。

次の瞬間、暴れるせいでますます砂に呑み込まれてしまっていた立香の体は、真下から突如現れた固い足場によって流砂からの脱出を果たしていた。

「大丈夫か!？」

「な、何とか……」

口の奥にまで入り込んでいた砂を吐き出し、阻まれていた間の分も懸命に呼吸を繰り返す立香が見たのは、伝説の大魔術師が愛用していそうな立派な杖を振りかざすリンクの姿だった。

ホッと息をついていた彼は、何かに気づいたのか一変させた鋭い眼差しを周囲に向けて、杖の柄を握る手に音が聞こえそうな程の力を込め、辺り一帯を薙ぎ払おうとするかのように空気の唸る轟音を立てながら振るった。

その魔力によって現れるを通り越して突き上げた砂の塊に、砂中をまるで水中か

のように泳ぎながら獲物の隙を伺っていたところを宙高く吹っ飛ばされた虫型の魔物達は、再び砂に潜るどころか地に落ちるよりも先に消し炭と化した。

徐に構えた手で、パチンと指を鳴らす……そんな細やかであり触れた合図によって、轟音と共に降り注いだ雷に一匹残らず貫かれて。

「魔法があるとやっぱり楽だな、どうにかして普段から使えるようになりたいけど……」

一区切りがついて緩みかけた思考が、突如発生し、徐々に強くなっていく振動によって再び引き締められる。

振動が周囲のどこかではなく自身の下から迫ってきていることに気づいたリンクは、強靱な脚力を駆使してその場から一息に飛び退いた。

今の今まで彼が立っていた地点を割り、水飛沫の如く砂を噴き上げながら現れた巨体に、リンクは覚えがあった。

過去の勇者達から受け継いだものではなく、自分自身の経験から得た知識の中で。

「モルドラジークだ!!

懐かしいなあ、ハイラルとゲルド合同の討伐訓練を指揮したこともあったっけ……」
「あの怪物を見て最初に出てくる言葉がそれ!？」

《立香君、ツッコめる余裕があるなら自分の安全確保を優先して!!

リンク君、どうするつもりだい!？」

『伝説』の中で確か君は、砂上の獲物を音と振動で感知するモルドラジークに対して、岩山に登ることで対処していたけれど……》

見回して把握できる範囲に、モルドラジークの探知をかわせそうな高台は見受けられない。

『伝説』の内容を、リンクの活躍の一端を知る者だからこその心配を口にするロマニに、リンクは何の不安も感じられない笑みと声で応えた。

「最適な方法が取れない程度で手も足も出なくなるようじゃ、『勇者』なんて出来

やしないよ」

そう言って駆け出したリンクの、広大な砂地では至極些細なものである筈の足音を、モルドラジークは逃さなかった。

一瞬で定めた目標へと向けて潜航を始めたモルドラジークを認識するや否や、今度はリンクが行動に移る。

立ち止まり、今一度振りかぶった杖の先を、自身の足元へと叩きつけた。

柄を握り締める力の強さと集中して張りつめた表情から、相当な力を費やしながら術を行使しているのが分かるけれど、それに見合う程の変化の表れが一向に見受けられない。

そうこうしている内に、モルドラジークは砂の下に完全に消えてしまう程に深く潜り、人間をも一飲みにしてしまえる巨大な口を開けながら真下から食らいつくると、見守っている誰もが身構えたその瞬間。

彼らが目の当たりにしたのは、モルドラジークの巨体が砂山を突き破りながら現れるところではなく……轟音を立てながら盛り上がった砂山と、柔らかく柔軟な

『砂』には生じることが無い筈の巨大なヒビ割れと、それをぶち抜きながら現れたモルドラジークの鳴き声とは言い難い絶叫を上げながら悶え苦しむ姿だった。

リンクが一体何をしたのか、立香が察するのは早かった。

「……砂を固める力を持ったあの杖で、足元の砂を岩みたいにしたのか。

そこに、頭から全力で突っ込んで……」

ほんの一瞬振るっただけで、人一人を乗せるには十分な足場を作ったり、砂中を泳ぐ魔物達を宙高く吹っ飛ばすことが出来るのだ。

あれだけの時間と力を込めていたのだから、もはや岩を通り越して鉄の塊と化していたのだと思いついた立香は、恐ろしい魔物を相手に心底同情してしまっていた。

しかし、優しい少年であると同時に切り替えの早い戦士であり、情け容赦なくそのような目に遭わせた当の本人であるリンクには、そんな手心を加えるような余地や甘さは一切無い。

真上に立っていた者を吹っ飛ばすには十分だった勢いを、その瞬間に自ら跳び上がることでかわした彼は、空中で身を翻しながら構えた武器を落下の勢いも込めながら振り下ろす。

砂上という特異な領域で、その地に特化している筈の魔物達を、知恵と力を駆使しながらたやすく狩ってみせる。

『不利』や『苦手』という概念を果たして持ち得ているのかと、そんな馬鹿なことを考えてしまいそうな勇者の戦いっぷりが、一同の脳裏に改めて焼き付けられた。

もっとこう……ダイジェストみたいな感じで簡潔に書いて、3から4階層分は纏めてしまおうと思っていたんですよ。

気がついたら長くなり、これだけで一話分にして良さそうな量になっていました。早いところ本編に戻りたいのは山々なのですが、リンク君の活躍や戦闘描写を蔑ろにはしたくありませんし。

後で後悔しないように、自分が満足できる文章を書くことを意識しながら、これからは頑張っていきます。

第五階層

その階層に降り立った立香をその瞬間に苛んだのは、今まで感じてきたような、直接的に命を脅かされることに対する分かりやすい危機感ではなく。

目には見えないし耳にも聞こえない、五感では感じられないのに『何か』がすぐ傍に存在していることだけは分かるという、得体が知れないからこそその恐怖と気持ち悪さで。

訳も分からないまま慄く立香に気づいたリンクは、思わずといった様子で感心した声を上げた。

「分かるのか、お前ってこういう類の気配に割と敏感なんだな」

「……………何がいるんだ？」

「知らない方がいいと思う」

疑問や反論を挟む余地が無い勢いでそう言い切ったリンクが、立香の返事を待たずに動き出す。

剣を抜くでも、魔術を使うために集中するでもなく、その場で獣のように四肢をついた彼は次の瞬間、本当に獣と化していた。

リンクは十代半ばの少年として見ると小柄な方だけれど、同サイズの肉食獣となれば、戦闘能力を持たない普通の人間からすれば立派な怪物だ。

正体はリンクだと、襲ってこないと分かっている、生き物としての当然の本能を刺激されて一瞬背筋を竦ませた立香に、狼と化したリンクは笑ったのだと察せられる僅かな唸り声を零しながら駆け出した。

そうして立香が目の当たりにしたのは、強靱な獣の四肢で地を蹴ったリンクが鋭い牙を剥きながら見えない『何か』へと飛びつき、虚空に浮いていたらしいそれを

引きずり落とし、地に押さえつけて動けなくなったその身を、唸り声を上げて首を激しく左右に振りながら食い千切るといふ、『相手が見えなくて良かった』と普通に思ってしまうような情け容赦ない狩りのシーンであった。

《狼に変身し、それによって得た獣の五感を更に研ぎ澄ますことによって、肉体を持たないゴースト型の魔物の姿すら鮮明に見極めることが出来る。

これは、『黄昏の勇者』が持ち得ていた力だね。

……僕の個人的な意見だけど、彼の一番凄いところは、『獣の姿に変えられてしまった』という呪いを、獣と化した身で出来ることを普通に『能力』として受け入れ、使いこなしてしまったことだと思う。

二度と人間に戻れないかもしれない、次は無いかもしれないという不安と恐れは、大切な人達を助けたいと願う彼の歩みを止めさせるには至らなかった。

神話や伝説の中で、どれだけ多くの者達が異形の呪いによって破滅したのかを考えれば、『黄昏の勇者』を苛んだ困難が如何に過酷なものだったのかを、それに立ち向かった彼の勇気を思わざるを得ないよ》

静かな声で解説交じりの語りを口にするロマニと、無言で見守る立香の前で、リンクの牙が何匹目かの見えない敵を噛み砕く。

それによって、こういう状況でなければ気のせいで済ませてしまいそうな程に臆気ながら、それでも確かに感じていた気配が完全に消え、無意識に込めてしまっていた肩の力を抜いたその瞬間、頭上高くに新たな異変が現れた。

モザイクのタイルが徐々に敷き詰められるように展開した黒を、無機質な赤い光が彩る。

赤と黒の渦を巻く穴、それを知る者からは『ポータル』と称される異界への門は、立香達がそれまで目の当たりにしてきたものとは雰囲気と質が明らかに違う、影が形を取ったかのような数体の異様の魔物を吐き出した。

《あれは、もしか『影の使者』か!?

これはまた、厄介なのが出てきたなあ!!》

「強いやつなの?」

《それなりに強いだろうけど、それでもリンク君なら大丈夫だと思う。》

僕が厄介って言ったのはね……『ゼルダの伝説』に記載されていた内容からすると、あいつらは一体でも残せば全体が復活するんだ。

だから出来るだけ纏めて倒さないと、いつまでも戦い続ける羽目になってしまうんだよ》

「何だそれ、面倒くさい!!」

『伝説』の中で、『リンク』はどうやってあいつらを倒したの!？」

《復活させる間もなく大技で一気に倒し切るか、もしくは、復活を妨げる特殊な結界を展開させながら戦うか。

負担が少なくて確実なのは後者の方だけれど、それが出来たのは『黄昏の勇者』ではなく『姫君』のほ……………》

立香の問いに答えようとしたロマニの声は、途中で途切れた。

立香もまた、それに対して文句は言えなかった。

『影の使者』の群れを前に、身を屈めながら唸り声を上げていたリンク……その強

張った背中に突如質量を持った影が降り注ぎ、小さな体に見合わない無骨な冠を身につけた魔物の姿を形作ったのだから。

驚いたのは立香達だけでなく、リンクはむしろ彼ら以上に驚いて、そこが定位置と言わんばかりに堂々と腰を下ろしている『彼女』へと向けて懸命に振り返ろうとしている。

狼の体の構造からして、ただ首を捻るだけで自身の背中を見ることは出来ず、逸るあまりにその場で回り出してしまったリンク。

ちよっと間抜けなそんな姿に、影の魔物は呆れた溜め息でもついているかのように肩を竦め、『ぺちんっ』と音が鳴りそうな仕草と勢いで、その小さな両手のひらをリンクの背中に二度三度と叩きつけた。

それだけで、『喝』には十分だった。

呆けてしまっていた表情と空気を一瞬で張りつめ、牙を剥いて奔り出したリンクの背中で横座りになりながら、魔物はその小さな体に収まるものとは到底思えないような膨大な力を行使する。

魔物を中心に円形に広がった、踏み込んだ者をそのまま呑み込んでしまいそうな

闇の結界。

全ての『影の使者』が、その範囲内に踏み込んでからのほんの数秒の間に、地に脚をつけることなく『影の使者』の体を足場に跳んだリンクの牙は、全ての喉元を食い千切っていた。

地に伏せたまま起き上がることなく、霧散しながら消えていく『影の使者』達。その名残が僅かに漂う、戦闘終了直後の独特の静けさの中で、言葉なく立ち尽くしている者達がいた。

いつの間にか人の姿に戻っていたリンクと、そんな彼と目線を合わせられる位置に小さな体を浮かせている魔物。

シャドウ・サーヴァントを思わせるような、影がそのまま質量を持ったかのようなその身からは、表情どころか顔の造形すら窺えない筈なのに。

体の割に大きな目を細め、口の両端を三日月のように吊り上げ、ニイツという音が聞こえそうな、意地悪そうな……胸の底から込み上げるものを堪えて引き攣った、必死の強がりで作り上げた不器用な笑顔が、立香には見えた気がした。

「ああ、そうだな」

「最後、『またな』って言ってたもんな」

「今この時だけの夢……俺の能力を再現するために、記憶と逸話から作り出された影法師だとしても」

「また会えて嬉しいよ」

「ありがとう、ミドナ」

そのやり取りを最後に、影の魔物はゆっくりと消えていった。

対峙する者がいなくなっても、その階層をクリアした証である次に進むための魔法陣が現れても、言葉なく立ち尽くしたままのリンクに、恐る恐る近づいてきた立香がそっと語りかける。

「リンク、大丈夫か？」

「……ああ立香、待たせてごめんな。

驚いた、宝具ってああいう形のものもあり得るんだ。

こういう状況でもなければ絶対に使えなかったし、少ない機会を逃したら存在自体にすら気付けなかったかもしれない」

特異点攻略を楽にするためだけでなく、自分自身の個人的な希望としても、この身で出来ることを追求していきたい。

改めてそんなことを考えていたリンクに、立香が続けて問いかけた。

「あ、あのさ、さっきのお前ってもしかして」

「ほんと色々とよく気付くなあ、個人の資質に加えてマスターだからかもしれないな。

基本的には俺に全部任せてくれるとしても、あの状況では流石に黙って見ていられなかったらしくてさ。

俺も空気を読んで、少しだけ下がっていたよ」

「やっぱり……表情とか雰囲気とか、何か違うと思った」

《……………えっ、それってつまり。

さっきのリンク君は、リンク君じゃなくて、『黄昏』の》

いや、『彼』だったとしても『リンク』君であることには違いなだけで……
と、ショックと混乱のあまりに、自分では秘めているつもりの内心を呟きまくる口
マニ。

そんな彼にリンクが返したのは、意味深な笑顔のみであった。

第……………

楕円状に繋がった長い洞窟の中を猛スピードで走りながら、後ろ足で岩を蹴り上げたり、雷や爆弾を落としたりといった強烈な手段で後続を振り切ろうとする巨大な人面牛と、愛車のエンジンを全力で吹かせ、段差を利用して飛んだり、岩盤が剥き出しでゴツゴツとした壁面を天井を越えて向こう側まで突っ切る勢いで駆け上がったたり、置いていったら危ないからと後ろに乗せた立香の自分より小さな背中に全力でしがみつきながらの絶叫をスルーしたりしながら、爆音轟く追走劇を繰り広げて。

薄っすらと霧が立ち込める不気味な場所で、薄暗い足元から突如現れ、枝のよう

に節くれ立った細い指で立香を背中から鷲掴み、臃げな風体からは到底考えられないような怪力でその身を持ち上げて振り回し始めた質量を持った影のような腕を、氷の矢を放つのとほぼ同時に振りかぶったハンマーの一撃で粉碎し、完全に腰を抜かしてしまった立香の正気度への追撃のように現れて取り囲んだ枯れ木のような木乃伊達の動きを、高々と響いたオカリナの音色で瞬く間に鎮めて。

お伽噺や絵本にたびたび登場し、主人公達を苦しめた巨人……正しくそれだと言わんばかりの一つ目の巨体、歩くだけで地面を揺らし大木のような腕を振りかぶる、一般人ならばそれだけで絶望するような光景を前にしながら冷静に矢を番え、必中の狙いで急所の目を射抜かれた巨人は地鳴りと共に尻もちをつき、怒濤の追撃をもろに受けて。

そんな感じで、リンクがトライフォースの力を使って自ら始めた試練は、すぐに助けてくれる、必ず守ってくれるとは信じていても流石に心労が重なっているらしい立香や、リンクと同じくらい立香のことも心配しているロマニ達に見守られながら順調に進められていった。

仲間達は、様々な能力や特性を持った怪物を相手に、いつ終わるとも知れない連

戦を続けるという豪傑な戦いぶりを、素直に称賛してくれたけれど。

弱点や突きどころを戦闘の真っ只中で探り、見極めた後は情け容赦なく全力でそこを叩くという戦法を代々に渡って得意としてきたリンクにとっては、かつて戦い、倒したことがある相手との再戦なんて、はつきり言って作業に等しくなってしまう。

リンクの目的は自分自身の限界に挑むことでも、戦いの中で生の実感を得ることでもなく、歴代の勇者達から受け継いだはいいものの、きちんとした形で扱う機会に恵まれなかった能力や勘の仕様確認をすること。

元から別に戦いそのものを好んでいる訳ではなく、必要に駆られなければ平和に暮らしたいと思っているリンクにとってはそれくらいの、生と死の境目での闘ぎ合いを楽しむような戦闘狂からすれば温すぎて発狂しそうな程度の難易度で十分だった。

ちなみに、それを『温い』と思うのはあくまでリンクの感覚であって、実際には戦闘特化型のサーヴァント達ですら中々のものだと思う程度にはきつい内容となっていることに、当の本人はこれっぽっちも気付いていない。

（能力の詳細を満足いくまで確かめた訳じゃないけれど、マッシュ達を随分と待たせてるし……想定以上に立香が危ない目に遭っていて、フォローしたとしても流石にそろそろ限界だろうし。

こんないい機会はそうそう無い筈だからちょっと惜しいけど、今回に関してはこの辺りにしておこうかな）

試練自体には集中して本気で臨みながらも、これはあくまで仕様確認だからと、後々にまで響かせるような無茶はしないようにと、冷静で堅実な思考を頭の隅に保ち続けて、当初の目標を達成出来ていなくてもまあ構わないかという余裕があって。この後の展開を呼び寄せてしまった大きな要因は、『ちゃんと気を付けているのだから大丈夫だ』と樂觀していた、想定外の要素が紛れ込んでいることなんて考えもしなかった、油断していたと言われても否定出来ないような心の緩みではないか。これから程無く、そんな自責の念に苛まれる事態が訪れることを、今のリンクは知りようも無かった。

「……ここには、変な魔物はいないみたい」

「不幸中の幸いであるな、少しばかり休むとしよう」

取り敢えずの安全を確認するや否や、ため息と共にその場に座り込んでしまった少女達の頭上から、彼女達の精神状態に見合わない柔らかな光が降り注いでいる。自分達がステンノに指示されて潜んでいたのは間違いなく、華やかな都から遠く離れた小さな孤島の、暗く冷たい洞窟の奥深くである筈なのに。

「森だの建物の中だの、脈絡もなく次から次へと……本当に、ここは一体何なのだ。何かしらの結果に囚われてしまったのだろうとは思うが、どうすれば抜け出せるのかどころか、何がきっかけでこんなことになってしまったのかすらサッパリ予想がつかぬ」

「見た感じ、随分と立派な大広間ね。」

これくらいの規模と豪華さがあればありったけの招待状をばら撒いて、もの凄く立派なライブ付きのパーティーが開けそう」

「立派なパーティー、要は肉と酒が飛び交う乱痴気騒ぎか。

……………いかん、いかんぞキャット、何故かは分からぬが思考と存在が魔性側に傾きかけている。

異様な状況下で疲労が重なっているせいであろうか、もちっと気合いを入れて理性を吹っ飛ばさねば」

「……アンタの様子や発言がおかしいのは最初からだけど、ますます意味が分からなくなってきたのは気のせいかしら？」

一息ついたことで少しでも余裕が戻ってきたのか、俯いてしまっていた顔を上げ、ゆっくりと辺りを見回し始めたエリザベートの視界一杯に、かつて一城の主であった自分ですら思わず感心してしまう程の、上にも横にも広がった絢爛な光景が飛び込んでくる。

物語の挿絵かのような繊細な意匠で造られた、巨大なステンドグラスを天窓代わりに色鮮やかな光を差し込む天井は、まるで数階分をぶち抜いた吹き抜けであるかのように高く。

広大な空間の中で使用されているもの、視界に映るものは家具から装飾から建材に至るまでの何もかもが、素材も加工に用いられた技術も最上級のものであることを、上流階級の暮らしの中で磨かれた審美眼が告げていた。

客を招くパーティー会場どころか、王が座す謁見の間と言われても納得してしまいそうだと思いながらゆっくりと視界を巡らせていたエリザベートは、正しく王の玉座を据えるに相応しそうな数段高くなっている場所の先、そこに座る者と同時に目に留まりそうな位置の壁に堂々と刻まれていた紋章を目の当たりにしたのと同時に、その動きと思考を停止させた。

エリザベートの様子がおかしいことに気づき、彼女の視線を辿って同じものを見たタマモ・キャットの口から、驚愕の声が飛び出す。

「三つ連なった正三角と、それを頂く翼を広げた鳥……あれはもしや、遙かいにしのハイラル王国の紋か？」

と言うことは、まさかここは………いやいや、そんな馬鹿な。

いくらキャットが本能で生きる野生のネコだとしても、そんな訳がないというこ

とくらいはちゃんと」

「いいえ、十分にあり得ることだわ。

だってアタシ、実際にこの目で……」

遙か昔に寿命を迎え、穏やかにかつ完全に幕を下ろした筈の古い時代の一端が、
今この世に再び蘇る。

その可能性が決してゼロではないことを、エリザベートは実体験によって知っていた。

「……正直言って信じがたい話ではあるのだが、ドラ娘が嘘を言っているようには
思えぬ。

キヤットはお前を信じるぞ、短い間とはいえ苦難を共に乗り越えてきた身でもあるしな。

しかしそうなる……やはりここはハイラルに関わる何か、もしくはどこかで。
あの珍妙な魔物どもは、ハイラル由来のものということになるのか」

「道理で、得体の知れない上に厄介な連中ばかりだった訳よ。

……………ちよつと待って、嫌なことを思いついてしまったわ。

ここがハイラルで、ハイラルの魔物達が現れる場所だって言うのなら……………」

『リンク』という少年は、元々はその多くが穏やかで平和な日々を暮らしていたし、戦いの技や心得をある程度嗜んでいた者達だって、個人のスリルや功名のために無暗な争いを求めるようなことは好まなかった。

危険な地にわざわざ赴こうだなんて考えてもみなかった少年が、『勇者』として目覚め、戦いに身を投じる決意を固めた時にはいつだって、世を乱す者の登場と暗躍が先んじていた。

……悪しき者の存在が勇者の登場を促すのならば、その逆も十分にあり得るのではないか。

実のところリンクは、無意識下でその可能性にちゃんと辿り着いていた。

試練の難易度を程々のものにしていたのは、過度に自分を追い込んだ結果、『勇者の危機』が『彼が存在する可能性』を高めることに繋がり、呼び水になりかねなかったから。

その懸念を立香達に教えないどころか、自分自身でも気付かないように思考に制限をかけていたのは、下手に危機感を高めるとかえって強く意識することになり、トライフォースという『彼』にとっても非常に相性のいい力によって構築した空間に変な干渉が及びかねないと考えたから。

個人としての経験と勘が、自分でも気づけないような深いところでほんの僅か思いついただけなのに。

それでも出来る限り、可能性すら潰そうとして自然と取った行動は、十分に念を入れたものだった。

この時エリザベートが想像したことだって、『伝説』を知る者ならばこの状況下でまず間違いないと考えるであろうことで、彼女自身に過ぎた非があったと判断することは難しい。

空間の改変に巻き込まれた者がいたこと、それが因縁深き『彼』とある意味で非常に近い存在であったこと、普通の者ならばまず思いつかない筈の『ハイラル』という可能性に至る事が出来る者であったこと。

様々な偶然が奇跡的に重なっていった流れの、何が悪かったと取えて具体的に言

うのならば、それは偏に『運』だろう。

「魔物達の親玉が……あの『魔王』が現れたって、ちっともおかしくな」

込み上げる恐怖と不安を自身の胸に留める息苦しさに耐え切れず、殆ど無意識のままに吐き出してしまっていた言葉が不意に途切れた。

エリザベート自身が止めようと思った訳でも、口を塞がれたり首を絞められたりといった形で物理的に妨げられた訳でも無いのに、舌が回らない……体が動かない、息が出来ない。

いつの間にやら背後に現れていたこの存在は、その気になれば自分の首を折るどころか頭を握り潰すことすらたやすいのだと、自分が今こうして生きているのは『彼』の些細な気紛れに過ぎないのだということが分かる。

掴まれるどころか触れられてすらいらないのに、力の質や存在の属性としては同類の筈だからこそ分かる圧倒的な差を突き付けられ、抗う気さえ起こらない。

獅子の牙に喉元を押さえられた仔猫とはこのようなものなのかと、思考の片隅の

嫌に冷静な部分で思った。

見開いたまま微動だに出来ない瞳に焼き付いた、尾を丸めて竦み上がり、顔面蒼白でガチガチと歯を鳴らすタマモ・キャットの姿と、自分のものではない力と意思によつて我が身が浸食されていく絶望を最後に、エリザベートの意識は暗転した。

何度目かの試練を無事に終わらせ、いつも通りに現れた青い光の転送装置を前にそろそろ帰ろうと言ったリンクの表情が、不意に凍り付く。

すぐ傍にいて、何気に観察眼に優れている立香は、愕然と目を見開くリンクの全身が総毛立っていることに気付き……自分やロマニ達が慌てふためくようなピンチの中でも、冷静に皆を手助けしてくれた彼が本気で怖いという事実と、それが意味するものを正確に察してしまった。

いきなり顔面蒼白になったリンクと、数秒遅れで同じような様子になった立香に、ロマニを始めとするオペレーショナルームの面々も異様なものを察して騒ぎ出す。そちらに気を使えるような余裕は、今のリンク達には無かった。

「……り、リンク」

「お前はここで待ってろ!!

後で必ず、ちゃんと迎えに来るから!!」

立香の眩きと恐る恐る伸ばされかけた手を遮りながら、転送装置に叩きつけた手の甲のトライフォースが輝き始める。

装置の仕組みや転送先の法則がどうなっているのかは分からないけれど、トライフォースの力を使えば無理やりにもそこに干渉し、次の行き先を指定することは十分に可能。

このまま飛ぼうとしたリンクの思惑は、聖三角が輝く手の甲に別の手が重なったことで妨げられた。

「なっ……立香、何してるんだこの馬鹿!!

離せ、転移に巻き込むだろ!!」

「そのつもりでやってるんだよ、分かってるくせに惚けんな!!

こっちは最初から、何があってもとことん付き合うつもりで来てる!!」

「それ自体は上等だと思いうし嬉しいけど、今は状況がちが……」

立香の手を振り払おうとしたリンクの思惑は、装置の青ともトライフォースの黄金とも違う、黒と赤が入り混じった禍々しい光が空間内に突如現れ、渦巻き、幾つもの質量を生み出し始めた光景によって妨げられる。

いつの間にやらリンクと立香は、顔まで覆う全身鎧を纏い、身の丈ほどの大剣を携えた禍々しい騎士達に取り囲まれていた。

「ファントム……いきなり容赦無しか、ン万年経っても相変わらずだなあの野郎!! この状況じゃあ置いていけない、安全を確保するために戦う時間すら惜しい!! 連れて行くぞ立香、覚悟を決めろ!!」

「だからしてるって!!」

「足りないっつってんの!!」

二人がそうやって声を張り上げるやり取りを繰り返していた間も、命と意思があ

る者とは思えない淡々とした無機質さで、鎧を鳴らしながら迫って来ていた甲冑の騎士達。

一斉に振り上げられた幾つもの剣が、リンクと立香の体を四方から貫く……と思われた瞬間、既のところでは転送装置を起動させていた二人の体は光と化し、刃をすり抜けて消えていった。

懐かしき強敵

装置を使用した移動に有する時間は、体感としてはほんの一瞬。

縦にも横にもだだっ広い上に薄暗く、全容を把握しきれない謎の空間の中でリンクは、着地に失敗して転んでしまった立香を庇いながら背中のマスターソードを抜き放ち、青白く輝く刀身を四方に翳しながら意識を研ぎ澄まさせる。

それに釣られて自身も緊張感を高めながらも、心身共に酷く消耗するその状態を長々と保っていられるような領域には程遠く、疲労感に負けて徐々に気持ちいを緩めてしまった末に、ふうと息を吐きながら肩の力を抜いた……そんな立香の眼前で剣戟の轟音が上がったのは、正しくその瞬間だった。

心臓が止まるどころか魂が消し飛ばされたかのような衝撃に、本気で一瞬意識を吹っ飛ばした立香は、何とか繋ぎ止めた思考が真っ先に捉えた光景を前に目を剥いて言葉を失った。

女神が手ずから造り上げた勇者のための神剣、マスターソードの青白い刀身と火花を散らしながら鏢迫り合っているのは、金属製の固く鋭い刃ではなく、肘まである手袋をつけただけの手のひらだったのだから。

肌から服まで同じ漆黒の輪郭で形作られている、質量を持った影のようなその姿は、何度か相対した覚えのあるシャドウ・サーヴァントに酷似してた。

その影の元となった人物が誰なのか、すぐに思い至ったらしいリンクの目が驚愕に見開かれる。

黒い輪郭しか無い姿でも分かる程に、長く大きな舌がペロリと虚空を舐めた。

「なっ、ギラヒ…っ!？」

ほんの僅かでも心が乱れた瞬間を逃さず、マスターソードと競り合っているのと

は違う方の手が握っていた刃が、金と緑の脳天を目掛けて振り下ろされた。

咄嗟に剣を押し込んだのと、苦痛があまり長引かない絶妙な力加減で立香を蹴り飛ばした勢いも込めて床を蹴ったリンクの体が、バク宙を繰り返しながら飛び退いていく。

その着地点を追跡し、数本のナイフが、ほんの一瞬でも退避が遅れれば悉く貫かれていたであろう絶妙な狙いで次から次へと突き刺さっていく。

少々乱暴な手段だったとはいえ、何とか戦場から離されて状況を俯瞰する立ち位置を得た立香は、影の男が指を鳴らすと同時に虚空にナイフが並び、手の一振りで放たれ、それが両方の手を同時かつ交互に使用することで隙無く続けられるさまを目の当たりにした。

このまま逃げ続けても埒が明かないと、リンクが状況を打破してくれることを願った立香の前で、次の瞬間何度目かの着地を決めた彼は飛び退くのではなく剣を振るい、その一閃は既に目の前にまで迫っていたナイフを見事に捉えて悉く打ち落とした……のではなく、全く同じ軌道を遡る形で持ち主目掛けて跳ね返した。

相手の攻撃をこちらの攻撃手段として逆に利用する戦法は、既に盾で目の当たり

にしていたものだったが、まさか剣でまで同じようなことをしてのけるとは。

目を剥く立香の前で、放ち続けることに集中していたらしい影の男は避けることも守ることも出来ないままナイフを食らい、体勢が若干崩れたのと同時に、影のようだったその輪郭までもが崩れていく。

反撃開始だとばかり思っていたのか、今にも床を蹴って飛び出しそうな状態で固まりながら目を丸くさせていたリンクは、しかし次の瞬間、瞬く間に戦闘態勢を取り直した。

霧散した影はそのまま消えたりはせず、数秒大きな渦を巻いた後に、別の形を形成し始めたのだから。

新たに生まれた影は小柄なものがふたつ……長く尖った鼻と箒に跨りながら宙に浮かぶ姿が特徴的で、形だけ見るならば全く違いが分からない。

甲高く皺枯れた高笑いが重なり、立香は影の主達が老婆であることを察した。

影の老婆達が、鏡写しのような同じ挙動、同じタイミングで箒を振りかぶったその瞬間に、始めて明確な差異が現れる。

ふたつの穂先に込められた魔力が、片方では骨まで焼くような炎を、もう片方で

は魂まで凍てつかせるような冷気を構成した。

《改良して限界値を増やした筈の計器があっさり振り切れたぞ、冗談みたいな魔力反応だ!!

これが魔王の育ての親、数百年を生きた双子の大魔女の力か!!》

繋ぎっぱなしの通信の向こうから聞こえてくる、異常事態の連続にひっくり返りっぱなしのロマニの声とオペレーションルームの喧騒をよそに、リンクは構えた弓に炎と氷の鏃をそれぞれ備えた二本の矢を番えた。

炎の矢は氷の魔力を高める方を、氷の矢は炎の魔力を高めるもう片方を確かに捉えたというのに。

サーヴァントにも通じる威力を持っていた筈の鏃の魔力は、老婆達のそれには到底敵わず、痛手を与えるよりも先に競り負けて霧散してしまった事実、苛立たしげに表情を顰めたリンクの舌が鳴った。

「ダメか……魔術の使い手という括りでは、この人達はハイラルの歴史の中でも随一なんだよな。」

他に思いつかないのがちょっと悔しいけど、やっぱりアレを使うしか……」

そう呟きながらシーカーストーンに手を伸ばし、何かしらを取り出そうとしたリンクの行動を、頭上高くからの攻撃が妨げた。

炎と氷の老婆達は剣の届かない空中を飛び回りながら魔力の収縮を続け、強敵を二人同時に相手取らなければならぬリンクの注意が回り切らない隙を狙いながら、双子ならではの息の合い方でそれを放ってくる。

これは一発でもまともに食らってしまえば終わりだと、人体なんて跡形も無くなってしまおうと、肌で分かる程の余波が十分に距離を取っている筈の自分の元まで届いてくるという事実に慄きながら、安全なところから見守る事しか出来ないという現実に歯噛みする立香。

自身のサーヴァント達を信じながら、この苦しみに耐え抜くことこそがマスターの務めなのだと思つて自身に懸命に言い聞かせる彼の前で、リンクはその信頼に応え

てみせた。

立香には分からなかった『好機』というものを見定めたらしいリンクは、炎の穂先を振りかぶる老婆に対して、その場で片膝をついて鏡のように輝く美しい盾を構えた。

特別なのは材質か、それとも製作に用いられた技術か。

人の体をたやすく消し去るような灼熱の炎を受け止めたそれは、持ち主の身を守るだけでなく、膨大な力の塊をそっくりそのまま跳ね返した。

確かな目標を見据えて、僅かな角度をつけられていた鏡面によって……炎を放った当人ではなく、その近くを飛んでいた氷の老婆へと。

小さな鏃に込められた程度のものならばまだしも、自身と同等の力を持つ者の魔力をもろにぶつけられては流石にひとたまりも無い。

空中で体勢を崩し、落下こそしなかったものの動かなくなった氷の老婆の攻撃が止んだ隙に、リンクは未だ健在の炎の老婆へと向けて跳び上がった。

上昇気流の発生と同時に風を開き、空中にいる相手の懐にまで一瞬で迫ったリンクが手にしていたのは、冷氣そのものを極限にまで圧縮することで造られたかのよ

うな、見ているだけで寒々しくなってきたような氷の杖。

それをリンクは、振りかざすことで魔力を放つのではなく炎の老婆へと直接叩き込み、ゼロ距離で粉碎させることによって内蔵されていたものを全て纏めて炸裂させた。

冷気だというのに、まるで山積みの火薬に引火したかのような衝撃が、中心地にした炎の老婆だけでなく近くにいた氷の老婆をも巻き込んで爆発する。

例の鏡の盾を用いて極寒地獄から身を守り、何とか着地を決めたリンクの頭上で、なかなか収まろうとしない冷気の魔力を割りながらふたつの影が吹き出し、再びひとつに纏まりながら渦を巻き始めた。

「嘘だろ、まだ来るのか!!」

《魔族長ギラヒムにツインローバのコタケとコウメ、共通点として考えられるのは側近格だということ……ならば次は僭王ザント、もしかしたらこの間劇をやったばかりの司祭アグニムって可能性も!?!》

「ちょっとドクター、何か声が上ずってるのは気のせい!?!」

《ごめんほんつとごめん、非常事態だってことは分かってるんだけど正直言って興奮してる!!》

「現場に居ないからって酷い、まあ気持ちは分からなくも無いけど!!」

自分が好きな伝説の登場人物がヴィランとはいえ現れているという状況に高揚するロマニと、現代日本の若者らしい程度にはサブカルチャーに親しんでいるだけあって、彼の心境に理解を示す立香。

強大な敵が相手であることは十分に分かっていたし、一人で頑張らなければならぬリンクのことも心配していたけれど、今まで積み重ねてきた実績と信頼に加えて、この状況でも順調に勝利を重ねてくれるリンクの姿に少しだけ安心したことによる心の余裕がそこにあった。

しかし彼らは次の瞬間、自分達が抱いていた『リンクならば』という想いが、そっくりそのまま反転する光景を目の当たりにしてしまう。

霧散した闇が次に取った形は、尖った兜でも、頭からかぶった司祭服でも、それ以外に思い描いていた何でも無く。

後頭部に垂れ下がる三角帽子、左手には剣、右手には盾。

自分達が最強だと信じる少年の影が敵となって立ちはだかるという、悪夢のような現実がそこにあった。

「……………こう来たか、容赦なく嫌な手を使ってくるのは相変わらずだな」

ため息をつきながら眼前にマスターソードをかざした、その瞬間、青白い刀身が轟音と共に影の刃を受け止めた。

華奢な少年の外見からは全く予想できない脚力でもって、ほんの一瞬で相手との間合いを無にしてしまう……何らかの術や魔力を行使した結果などではない、頑丈な石畳にさえヒビを走らせるような清々しいほどの力技は、リンク自身が何度も見せてきたのと同じもの。

剣を振り下ろした直後の無防備な脇腹を狙って放たれた、もろに食らえば背骨もへし折れるであろう蹴撃を無理に避けようとはせず、逆にその威力を利用して吹っ飛ばされることで瞬時に間合いを確保した判断力と技術もまた、歴戦を戦い抜いた

伝説の勇者のそれを彷彿とさせるものだった。

「まさかあいつ、ガチでリンクのコピー!?」

『《闇^{ダーク}のリンク》……伝説の中でも何度か登場しているけれど、その悉くで勇者を追い詰める強敵として描写されている』

「どんな敵も打倒してきた最強のヒーローの、最大の敵は自分だったなんて、展開としてはよくありそうなものだけど……実際にあって堪るかよ、自分越えなんてそう出来るようなもんじゃないだろうに!!」

立香が半ば自棄気味に叫んだことは正しくその通りで、歴代の勇者達が相對してきた『影』は単なる強敵というだけでなく、乗り越えることで自身を新たな領域へと押し上げてくれた試練でもあった。

しかし『本命』が控えている今のリンクは、『ならば良し』と思えるような気概や余裕は欠片も持ち得ていない。

（もしあいつが、歴代の戦いのどこかで現れたものの再現ではなく、『今の俺』の影だったら……）

歴代の勇者達から託され、自分でもまだ全容を把握し切れていない能力や道具の数々を、同じように扱えるのだとしたら。

恐ろしい想像をしてしまったリンクは、マスターソードの柄を掴む手のひらに滲む嫌な汗が滲むのを感じていた。

（戦いを長引かせる訳にはいかない、一気にカタをつけないと。

その為には………うん、まあ、仕方がないか）

リンクの頭の中で、彼にしか聞こえない冷たく無機質な音がしたのとほぼ同時に、彼の表情と雰囲気の微妙な変化を感じ取り、嫌な予感を抱いた立香。

彼が、表現や描写としてはよく目の当たりにした覚えがある、『心臓が凍るような思い』というものを我が身で味わったのは、その次の瞬間のことだった。

「……………あ、あ…………リン、ク」

肉を裂く鈍い音と共に飛び出した切っ先の縁から、鮮やかな赤がじわじわと緑を侵食している。

リンクがマスターソードの剣先を下げ、ほんの僅かな守りの隙を晒した一瞬の間に再び間合いを詰めた『影』の剣が、リンクの脇腹を深々と貫いていた。

そのまま手を返して振り上げるだけで、傷口はたやすく広がり、致命傷となるだろう。

しかし『影』はそれをしなかった、出来なかった。

強烈な一撃を繰り返すために大きく踏み込んだ足が、その瞬間を待ち構えていた靴底によって碎かれていた上に、闇の剣の柄を握る手を、更にその上からこのまま握り潰さんばかりに締め上げられていたから。

本領を発揮させてやるような余裕も、最後に一言くれてやるような慈悲も、自身と同じ姿形をした者を斬ることを躊躇うような情緒も無く。

捨て身の捕縛から逃れられずに機動力を失った『影』へと、ゼロ距離から振りかぶったマスターソードの青白い刀身が、その首を宙に飛ばした。

「……………うっ、ぐ」

「リンク!!」

「来るな、まだ終わっていない!!」

傷を塞いでいた刃が持ち主と共に消滅したことで、一気に広がった赤を押さえながら足元をよろめかせたリンクへと咄嗟に駆け寄りかけた立香が、腹に穴が開いているとは思えない迫力で発せられた怒号によってその場に縫い止められる。

彼の呼吸が酷く浅く、顔色も血を失った自分以上に真っ青であることに気づいたリンクの顔に、申し訳なさ感謝が入り混じったような不可思議な表情が浮かんだ。

「……………ありがとう。」

俺なら大丈夫だよ、前にも言っただろ?」

確かに……少し前、立香に『器』を持たせるために勇者の試練を再現した際に、リンク自身はそれを幾つ持っているのかと尋ねられ、『数えてないけど、多分10から15……多くても20くらいかな』と、『立香やマシユなら一発で致命傷になるような痛手も何回か耐えられる筈』と、何食わぬ顔であっさりと口にして、居合わせたスタッフやサーヴァント達を一人残らず絶句させていたのを覚えておくけれど。何を言えいいのか分らず、立ち尽くしたまま声も出ない立香に対して、かける言葉が見つからないのはリンクも同じで。

居た堪れない思いを振り切るように、急いで取り出した小瓶の赤い中身を一気に呷ると同時に、じわじわと続いていた出血が止まった。

改めて床を踏みしめ、ゆっくりと顔を上げて再び渦巻き始めた影を見据えるリンクの様子は、既にいつも通りの彼のものです。

事態をより良く動かすための天秤に、自身の命と苦痛をあっさりと乗せてしまった事実などは、欠片も見受けられなかった。

『あの程度の温い戦いを試練だなどとほざくとは……幾万年と惰眠を貪って、未だ

寝ぼけているのかと思ったが。

　　どうやら多少目は覚めたらしい、俺としては腑抜けたままの貴様を叩き潰してやっても一向に構わなかったのだがな』

何処とも知れない所から、突如何者かの声が聞こえてきた……ただそれだけのことの筈なのに。

フランスの地でファヴニールに睨まれた時を思い起こさせるような、とてつもない恐怖と怖気に襲われた立香は、全身の毛を逆立てながら竦み上がった。

震える足が膝から崩れそうになるのを必死に堪え、何とかその場に立ち続けた気概だけでも、十分に称賛に値するものだろう。

それとほぼ同時に、強敵に変じ続けた影が霧散し、周囲の認識を阻害していた闇も晴れていく。

そうして現れたのは、遙か頭上のステンドグラスから暖かい光が降り注ぎ、豪華な絨毯や装飾で彩られた美しい大広間。

そこで彼らは、周りよりも数段高く、神々しい紋章を背負う位置に据えられた絢爛な玉座と、その主に相對していた。

並外れた体格の持ち主が座することを想定していると思われる立派な玉座に、見ただけで蝕まれそうな禍々しい魔力を全身に纏わせ、不遜に足を組みながら堂々と腰を下ろしている……玉座の大きさに明らかに合わない華奢な体の、見覚えのある少女。

『久しいな、小僧。』

……ハイラルはとうに、真の意味で滅び去ったというのに。

まさか未だに……魂の髄まで女神に搾取された挙句に、永遠の封印という理不尽な仕打ちを強いられてなお、『勇者』などという下らない生き様にしがみついているとは。

どうやら貴様の愚かさ加減は、俺が思っていた以上に、魂にまで染みついた筋金入りだったらしい』

その口から、彼女自身の愛らしい声と重なりながら、それだけで押し潰されそうな異様な迫力を伴った、低く重々しい男の声が発せられた。

我が儘で、若干空氣が読めなくて、残虐な趣味嗜好を持っていたとしても、人柄としては明るくいい子だった彼女の面影や存在は、その嘲笑からは欠片も伺うことが出来ない。

押しつけられたものだった筈の生き方や責任を変えられない不器用な少年を嘲っているものと、考えるのが普通なのだろうけれど。

『普通』の象徴である筈の少年は、色々と吹っ飛んで逆に冷静になってしまった思考の中で、別の印象を抱いていた。

（呆れて、馬鹿にしてるっていうのは、確かにあるんだろうけれど。

でも、それだけじゃないような……もしかして、怒ってる？）

それは本当にふと思いついただけのことで、『誰に』とか『何に』などといった細かいところまでは、到底考えが及ばないけれど。

個人的には確信を抱きながら、それでも空氣を読んで……以前に、その場の迫力に吞まれて物理的に声が出せないせいで、発言を控えざるを得ない立香の前で、状

況はゆっくりと動き始めていた。

「……ああ、久しぶり。

また会いたくなんてなかったよ、ガノンドロフ。

勇者云々に関してはほっとけ、ちゃんと自覚した上で開き直ってるから」

遥か昔にこの世から消え去った、ハイラルの命運を翻弄し続けた黄金の聖三角。
その二角が再び、この世で相まみえた瞬間だった。

『力』と『勇気』

魔盜賊王ガノンドロフ、もしくは大魔王ガノン。

野心と力でその身を満たした砂漠の王は、謀略の果てに『力』の適合者として万能の願望器の一端を手に入れ、時には強大な魔王として、時には世界に滅びをもたらす怨念の化身として、代々の勇者達の前に現れた。

勇者リンクを祖とする数多の英雄達をその力で、時には存在そのものによって追い詰めた、ありとあらゆる悪や怪物という概念の祖。

《彼という存在が『悪』なのは間違いないけど、勇者リンクさえも苦しめた程の

圧倒的な力とカリスマ性を持ち、多くの家臣を従えた彼をリスペクトしていた者は、長い歴史の中で数え切れないくらいに存在していた。

有名などころでは、自分のことを『かの魔王の現し身であり、大帝国を築くことを勇者によって言祝がれた者』だって堂々と公言していた征服王なんかがそうだね。

……………うん、要するに。

頭に『反』がつくとしても、彼だって紛れも無い、人々の普遍の認識に深く深く刻まれた偉大な英雄なんだ。

どうしてもっと早く……リンク君が、『勇者リンク』が現れた時点で思いつけなかったんだろう。

『勇者』がいれば『魔王』だっている、そんなのは当たり前のことじゃないか』

通信越しに聞こえてくるその声は、『影』が立て続けに登場していた先程までとは打って変わった、ゆっくりと落ち着いた口調で紡がれている。

ロマニのいつもの捲し立てるような語り口調だけでなく、管制室の騒めきまでもが聞こえなくなっている理由が場の空気を読んだからではなく、世界を隔ててもな

お届いているらしい圧力に負けて強引に黙らされたからだということを、現物に生身で相對する立香は言われるまでも無く悟っていた。

勇者と魔王が睨み合う、歴戦の勇士でさえ慄いてもおかしくは無いような現場に居合わせながらも、震えて崩れかけている膝と遠のきそうな意識を何とか保ち続けているという、マスター相手にも厳しめなサーヴァント達でさえ素直に褒めてくれるような頑張りを続けている立香。

彼のそんな様子に気付いたガノンドロフの、エリザベートならば絶対にしないような嘲笑を向けられて背筋が竦み上がった立香は、ガノンドロフが徐に鳴らした指の音を合図に背後から襲いかかってきた存在に対して全く反応が出来なかった。

「立香!？」

問答無用で足を払われ、強引に体勢を変えさせられた立香の上向いた顔面ストレスを強烈な一閃が通り過ぎ、前髪の一房が宙に散った。

「このっ、離れろ!!」

不意打ちを防がれたのにも構わず、再び立香へと向けて鋭い爪を振り上げたそいつへと、立香を助けたのと同じ足で全力の蹴りを叩き込む。

盛大に吹っ飛ばされたそいつは、崩れた体勢を空中で器用に整え、少し離れた位置に両手両足を使って危なげなく、ネコのような着地を決めてみせた。

今だ射程圏内にいる襲撃者に対して警戒を続けながら、リンクは込み上げる激情のままに声を張り上げた。

「ガノンドロフ、どういうつもりだ!!」

『狙ってくれと言わんばかりの隙があれば、そこを突くのは当然ではないか?』

「無駄に魔力を垂れ流して、無差別に周囲を威圧しておきながらその言い草か!？」

俺が知るお前は、弱者が被る痛みに対して無頓着ではあっても、自分の力や存在を誇示するためにわざわざ弱い者苛めをするような矮小さとは無縁だった気がするんだけどな!!」

『……魔力に関しては俺も本意ではない。

この小娘は、器としての相性こそ中々のものであったが、俺の力の全てを収め切れるほどの容量は流石に持ち得ていなかった。

そんなことが可能なのは知恵の姫くらいであろうからな、それに対してとやかく言うつもりは無い。

だが、弱い者苛め呼ばわりに関しては心外だ。

遙か昔に死した、虚ろな英雄をこの世に留める……そのための要たるマスターを狙うのは、聖杯戦争における立派な定石ではなかったのか？』

「……!？」

『現状に関する情報は既に、聖杯とやらからこの小娘を通じて粗方手に入れてある。英霊、魔術師、サーヴァント……強大な力を持つ者を、わざわざ器に押し込んで制限を加えてまで使役しようとする術師どもの思い上がりは、腹立たしいことこの上ないが。

……この俺と渡り合ってきた貴様が、そのような不自由な状況に甘んじてまで優先する《マスター》がその程度の者だなどと、怒りを通り越して笑えてきたとして

もおかしくはなからうが』

徐々に力が籠もっていくガノンドロフの声に呼応するように、着地の体勢のまま陰の中で蹲っていた襲撃者がゆっくりと身を起こす。

それにより光に照らされて露わになった姿は、いわゆる『メイド服』を身にまとい、本物かどうか判断しづらい獣の手足と耳を持った少女だった。

肌は色白できめ細かく、一歩間違えると安っぽくなってしまいそうなフリルで覆われた肢体は豊満かつ魅力的で、顔の造形は美という概念を注ぎ込みながら意図して作り上げられたかのよう。

普通で普通に出会ったならば、思春期の少年として見惚れていてもおかしくはない美少女を前にしながら、立香は込み上げる寒気と薄気味悪さに背筋を震わせていた。

大きく立派な宝石で額を彩った彼女の無機質な瞳や、作り物のような美しさを通り越して完全に人形じみた表情に、彼女自身の自我というものが欠片も見受けられなかったから。

不気味さと嫌な予感に血の気が下がった思考に、調子を取り戻してきたらしい口マニの声が届く。

《リンク君、立香君、気を付けて!!

サーヴァント反応を観測した、これはバーサーカークラスだ!!》

「バーサーカーだとしても、あの様子は流石におかしい。

額の宝石……あれはまさか、ナボールがやられたのと同じ」

『余計なことを考えている場合か?』

二度目の指を鳴らす合図と同時に、バーサーカーの少女が獣の手に鋭い爪を光らせながら飛びかかる。

マスターソードを構えて身構えた途端に、その軌跡が自分に向かっていないことに気付いたリンクは、一瞬の判断ミスを取り戻す見事な反応速度でその動きに追いついてみせた。

「立香!!

狙いはお前だ、下がってろ!!」

「ひえええっ!?!」

刃と比べても遜色ない強度と獣の俊敏さで、縦横無尽に繰り出される爪の連撃を捌きながら、立香がこの場から離れるための時間を稼ぐ。

洗脳の術によって己としての思考を奪われ、ガノンドロフの命令に従うだけの人形と化している獣の少女の意識はただひたすらに、頑強すぎる壁に阻まれた向こう側の立香へと向けられていた。

立香が十分に距離を取り、多少暴れても巻き込まずに済むことを確認すると同時に、隙だらけの首へと向けて剣を振りかぶったリンク……そんな彼の耳に、戦闘の騒めきを割ってガノンドロフの声が届いた。

『その獣の娘が、俺の傀儡と化したのは何故だと思う？』

……俺に齒向かってきたからだ、器となった小娘を救おうとしてな』

「…っ!？」

『本能に従って生きる獣の身でありながらそれを堪えて、無謀にもこの俺に挑みかかってくるさまは、中々に見応えがあったぞ』

首を飛ばす寸前で止まったマスターソードの刀身が、獣の剛腕によって弾き返される。

そのまま飛び退くことで間髪入れずに放たれた二撃目から逃れ、息を荒げながら体勢を整えるリンクの頬には、少なくとも血を滴らせる傷口が走っていた。

『この程度の話聞かされただけで刃を鈍らせるとは、相も変わらず甘い奴め』

「……………ガノンドロフ、お前」

『純粹な腕力や破壊力のみならず……知略、謀略、自身の目的を果たすために使えるものや手段の全てと、それらを実行に移せる絶対の意思。』

それこそが《力》と云うものだ、何か文句や異論でも?』

「無いよ、癪だけだな!!」

ついでに思い出しとけ、その《力》を何度もぶち破ってきた《勇氣》があったんだってことを!!」

肉を目掛けて振り下ろされた五指の爪が、割って入った盾の鏡面に不快な金属音を立てながら減り込む。

そうして、盾一枚と引き換えに作り出したほんの一瞬の硬直の隙に獣の少女の懷へと飛び込んだリンクは、身を回転させた勢いを込めて剣を振りかぶり……鋭い刀身ではなく反対側の柄頭を、少女の額を彩る宝石へと目掛けて叩き込んだ。

一瞬で碎けて四散した宝石の欠片が、輝く飛沫となって戦場を彩る。

操り糸が切れたと同時に、頭から落ちかけた少女の身を庇いつつ、狂戦士である彼女が正氣に戻っても暴れ出さない保証が無いという事実を見定めて、取り出した縄で容赦なくその身を拘束する。

情け深さと冷酷、相反する二つの行ないを何の違和感もなく、飛び散った宝石の破片が全て床に落ち切るまでにこなしてみせた。

片腕を止めただけの段階で強引に踏み込み、続けて放たれたもう一方の爪により

切り裂かれたせいで噴水のように血を垂れ流す、自身の傷を後回しにして。

それは、自分が多少傷つこうとも、望まず戦わせられている少女を一刻も早く救うことを優先した……戦いに身を投じてでも構わないと思ったほどに大切なもの達だけでなく、次から次へと新しくその梓に加わっていった全てを守りたいと願い、成し遂げていった勇者の生き様そのものだった。

『……………本当に相変わらずだな、貴様は。』

叶えたい野望や、晴らしたい恨みがある訳でもなく……新たな自分になるたびに、果たすべき使命とやらを馬鹿正直に受け入れ続け。

ようやく得られた筈の安寧の眠りを妨げられて尚も、強いられるままに染まり切った生き方に囚われて』

『忌々しい』

『見苦しい』

『やはり殺すか』

オルレアンでのジャンヌ・オルタを思い起こさせるような、世界の隔たりを通り越して管制室にいる者達まで慄かせるほどの強大な魔力は、当人曰く、容量不足の器に収まり切らずに自然と零れ出ているだけのものに過ぎないと。

その言い分を、そのまま信じた者はいなかった……信じたくなかった、『いくら魔王とはいえ流石にそれは』と思いたかったのだ。

そしてその願望は、誤魔化しようのない現実を突き付けられたことで敢え無く霧散した。

竜の少女の華奢な体から迸る禍々しい魔力は、周囲を威圧するどころか、世界そのものを塗り潰さんとばかりに逆巻いて。

次の瞬間、四つに分かれて収縮したそれは、凶悪な怪物の姿を形作った。

非常に長く巨大な槍を持ったもの、周囲の景色を歪ませる灼熱の大剣を振りかぶ

るもの、片腕と一体化した巨大な砲台を構えるもの、他の三体よりも小柄な片手剣と盾を携えたもの。

獅子の鬣のようなざんばらの赤髪と無機質なひとつ眼を共通の特徴とする、息吹の勇者を筆頭に集められた英傑達すらも敵わなかった厄災の分身、火水風雷のカースガノン。

それらを従えながら、槍を手にゆっくりと立ち上がった竜の少女が嘲笑と共に振るった尾が、背後の玉座を粉碎させた。

「……立香、その子を通して出来る限り下がっている。

例え狂戦士だとしても、魔王に逆らってまでエリザベートを助けようとしたことはまず間違いない奴で、意思疎通だってそれなりに可能だろうし。

マスターだってことを押し出して説得すれば、ちゃんと味方になってくれる筈だ」

「ま……待て、待ってくれて、リンク。

いくらお前だって……あんなのを一人でだなんて、そんな無茶な」

「頼むから早く、お願いだから。」

ここから先はもう、お前に対して気を配りながら戦ったり、危なくなったら助けに入れるような余裕は多分無い」

「……………」

「大丈夫だって、心配するな。」

『俺達』はいつだって、どんな奴が相手だってちゃんと勝って、ハイラルの未来を繋いでみせたんだから」

そう言いながら肩越しに見せてくれた頼もしい笑顔が、立香には同時に、とても痛々しく哀しいものに見えて仕方がなかった。

四つの剣

力の魔王と、魔王が従える怪物達……恐ろしい脅威を相手に、堂々と対峙する勇気の少年。

長い歴史の中で、数え切れないほど多くの人々が胸を躍らせてきたであろう一幕を誰よりも間近で堪能しながら、立香の胸中には感動や高揚とは正反対の淀んだ不安が渦巻いていた。

宿敵との対決という状況で先を楽しみに出来るのは、不安に思う必要が無いから、『勇者が勝って世界に平和をもたらしてくれる』という結末を既に分かっているからだ。

しかし『これ』は、過ぎ去った伝説的一幕でも、紙の中の描写でもない……たつた今目の前で繰り広げられている、紛れもない現実。

それに加えて、更に不安の駄目押しとなり得る事実を、マシユやロマニから『伝説』に関することを少しずつ教えてもらっていた今の立香は知っていた。

『ゼルダの伝説』には、過去と未来を行き来して本来あった筈の歴史を変えた『時の勇者』の活躍を分岐点に、三つの異なる時間軸が存在している。

その内のひとつに、確かに存在しているのだ。

『勇者すらも倒し、その後辛うじて封印されながらも幾度となく復活を試みた魔王によって、ハイラルの平和が脅かされ続けた』という世界線が。

『反英雄』の祖とされているガノンドロフだけれど、彼自身は断じて、勇者を脅かしつつも最終的には敗れることを定められているわけではない。

宿命の戦いを幾度となく繰り広げてきたリンク自身が、誰よりもそれを理解していた。

あらゆる自重を取っ払い、その時の自分に出来る全てを賭してようやく、『勇気』は『力』を打倒し得るのだと。

他の状況、他の相手になれば躊躇うであろう選択肢に、リンクは迷うことなく手を伸ばした。

トライフォースが輝く左手が、一本の剣を振りかざす。

その刀身は、魔王に届く力を持った唯一の刃、勇者の代名詞たる神剣マスターソードのものではなかった。

だとしても、素人目にも明らかに神々しい輝きを宿す剣が、神剣もしくは聖剣の類いの中でも最上級に分類されるであろうことは一目瞭然で。

何をするつもりなのか分からず、呆けたまま見守る事しか出来ない立香達の前で、高々と掲げられた剣はトライフォースに程近い根元から眩い光を放ち始めた。聖なる力の輝きは、瞬く間に剣先にまで至りながら尚も止まらず。

刀身に収まり切らない程にまで高まった瞬間を見計らったリンクが、得意とする回転斬りの要領で大きく振り抜いたことをきっかけに本格的に迸った光が、ガノンドロフの魔力によって暗く淀んでいた大広間を真白に染め上げた。

「すいません、こんな事態になるのを止められなくて」

『別に気にすることはないよ、君の行動や対応に特にまずいものは無かったし……ガノンドロフ、あいつがメチャクチャなのが悪いんだ。』

あいつに対抗するためなら、俺も迷わずに同じ選択をしていたと思う』

『そうそう、それに……君も前に言ってたじゃん、何かしらやらかしてるのは僕達皆がそうだって』

『その話はやめよう、オレにも思い当たるところがあって少し辛い。』

今は集中して……あいつがとんでもない奴なんだってことを、オレ達は皆、身に沁みて知っている筈だろ』

「……ありがとう。」

よろしくお願いします、先輩方」

ほんの一瞬とはいえ、居合わせていた者達の視界を完全に奪った光が収まって。

一同が目の当たりにしたのは、緑の服に緑の帽子、光のような金の髪。

目立つ特徴の部分で酷似しているけれど、個々として見れば別人であるということが明らかな、自分達がよく知っている『リンク』を含めた、魔王を相手に臆することなく相対する四人の少年達だった。

同年代の中でも小柄に分類されるであろうリンクよりも更に小さな、10才前後の若い少年にしか見えないのに、その瞳からはそれ以上の年を重ねたような知性と貫禄が見える者。

先述の彼よりは少し年上らしいけれど、黒く大きな猫目と豊かに変わる表情に、年相応の少年らしさが窺える者。

マッシュを見下ろせそうな程には背が伸びて、少年の名残が未だ色濃い顔や体つきには、決して見過ごせない精悍さが見受けられる者も。

異形の怪物でも、怨讐の果てになり果てた厄災という概念でもなく……世界を滅ぼすのではなく手に入れようとした、誇り高き王としてのガノンドロフを知っている『リンク』達がそこに居た。

流石に想定外だったらしい光景を前に、らしくなく呆けてしまっていたガノンド

ロフが、数秒の間を置いて笑い出す。

それは、既に幾度か見せていた、高みから見下しながらの嘲笑ではなく。

腹の底から止めようもなく込み上げる高揚と興奮がそのまま飛び出したかのよう
な、王の器を感じさせる豪快さだった。

『やはり貴様はそうでなくては!!』

その叫びが合図だったかのように、とうに臨戦態勢に入っていたカースガノン達
が、各々の武器を一斉に振りかぶった。

フォーソード……それは、とある時代の勇者リンクが大変な冒険と戦いの末に完成させた、マスターソードにも匹敵する勇者の聖剣。

無数の魔物を封印し、強力な呪いをただの一振りで祓うことが出来たという聖なる刀身が持つ真価は、所有者と全く同じ姿と力を持った分身を造り出せることにあ
る。

『子供の目にしか見えない』という異種族との交流が叶うほどに、まだ幼い少年

だった『創剣の勇者』はそれによって、強大な力を持った魔神グフーを打ち倒してみせたのだ。

一度盛大に吹っ飛びながらも、どうにか再起動を果たした思考で語り出したロマ二曰く。

『伝説』の記述からするに、フォーソードによって造られる分身は本来ならば、本体の意思と動きに追従する形を持った影のようなものらしいのだけれど。

その気になればあらゆる無茶を押し通してしまえるトライフォースの存在と、一応はサーヴァントとして現界している今のリンクが個ではなく統括としての『勇者リンク』であるという事実、勇者がその力を存分に揮えるようにという意図で構築された環境といった、様々な要素が重なることによって齎された奇跡。

それが、目の前で繰り広げられている光景の答えになるのだということを、立香は察することが出来た。

片手剣と盾を携え、雷を纏いながら残像すら捉えられないような高速で動き回

り、蒼ではなく黒い瞳の『リンク』を攪乱する雷のカーサガノン。

目では到底追いきれない動きに翻弄されてしまっていた彼の背中に、完璧なタイミングで切りかかった筈の刃は、たった今まで確かにそこにあった筈の標的を捉えられずに空を切った。

頭上の気配と鎖が鳴る音に気付いて振り仰げば、フックショットを天井の照明を目掛けて伸ばし、迫る攻撃を一瞬でかわしてみせた少年が、砂時計の柄を持ったマスターソードによく似た剣を落下の勢いを込めながら振りかぶっていて……その剣先が『8』の形を描いた次の瞬間、雷のカーサガノンは全身に数多の斬撃を浴びていた。

最も速さに特化した存在である筈なのに、反応するどころか気付くことすら出来ないままに食らってしまった、『速さ』という概念を凌駕していたそれは、『時を止めた』と考えた方が腑に落ちる程のものだった。

落下していた筈なのにいつの間にか床に立ち、未だ体勢を立て直せずにいる怪物へとすかさず追撃を繰り出そうとした少年に、凄まじい勢いと質量で真横から迫るものがあった。

本体から鎖に至るまで、全てが極寒の水で構成された特大のモーニングスター。遠心力もあって凄まじい威力と化していたそれは、『風』の少年を吹っ飛ばすと思われた寸前に止まった。

牙を剥いた口から唸り声を零しながら、獣の四肢を踏ん張らせる狼……その背に跨る小さな魔物の髪が巨大な手に変じ、氷塊を見事受け止めていた。

狼が吼え、魔物の口が八重歯を剥く笑みを形作った次の瞬間、氷塊は先程以上の勢いで以って持ち主へと向けて投げ返された。

直撃を食らって吹っ飛ばされ、壁に減り込んだ水のカースガノンの頭上に、獣ではなく人の影が差す。

人の口から発せられた、獣のような雄叫びと共に振り下ろされた刃が、闇の魔力で構成された体を深々と切り裂いた。

『不甲斐ない、それでも我が分身か』

押し負けている情けないさまを前に、不快感を表しながら舌を鳴らしたガノンド

ロフ。

そのまま無造作に振り上げられた槍の穂先が、間近に迫っていた剣先を弾き返した。

そこでようやく振り返ったガノンドロフの目に映ったのは、隙と死角を完璧に捉えていた筈の攻撃をあっさりと防がれてしまった『時』の少年の悔しそうな顔で。心臓に余程の剛毛が生えていれば、『子供相手に大人げない』とツツコむことも出来そうなほど満足そうに嗤ったガノンドロフに、『時』の少年もまた、見た目相応の子供じみた地団駄を見せた。

『あーもうっ、何で今のを止めるかなあ!!』

『……あまり無様な真似を晒すな。』

後世において貴様は、俺を倒した勇者として信仰じみた崇拝を得ていたというのに』

『知らないよ、俺が生きた世界にはそんなの無かったし!!』

……何で大人しく眠っててくれないかなあ、せっかく『末代』が全部終わらせて

くれたのに。

俺は、ハイラルやゼルダ姫達を守るためにお前と戦わなきゃ、お前を倒さなきゃとは思ってたけど、戦いたいとか倒したいとか思ってたわけじゃなかったんだから』

『……俺の謀が原因で、育ての親である神木が枯れたのか？』

『お前はお前の譲れない願いを叶えようとして、その為にそれが必要なことだった。それは、俺も同じ……俺がお前と戦ったのは、豊かな国を築きたかったお前の願いを否定したからじゃなくて、ハイラルやゼルダ達を守りたいという俺自身の願いを叶えなかったから。』

その為に俺は、同時に叶えることは絶対に出来ないお前の願いを邪魔して……お前の親を殺したよ。

ゼルダ達が俺に希望を見出してくれたように、砂漠での過酷な生活に苦しんでいたゲルド族を始めとした家臣達にとっては、お前の霸道こそが希望だった筈』

『目をそらす気も誤魔化す気もない。』

俺とお前は、視点と立場が違うだけの似た者同士だ』

そう言って笑った『時』の少年は次の瞬間、間合いを一瞬で詰めると同時に情け容赦ない力を込めた刃を振り下ろし、ガノンドロフはそれを難なく受け止めた。

『……ちょっとくらい動揺してくれてもいいんじゃないの？』

『《似た者同士》と言ったのは貴様であろう』

『そうだけども!!』

例え作戦だろうと、お前は絶対に俺相手に本心なんて晒さないだろ!!』

『……本心か』

本当に思いがけず、ポツリと零れた呟きは、鏢迫り合いの金属音に掻き消されて向こうには届かなかったであろう。

至近距離で睨み合いながら陥った硬直状態は、頭上から振り下ろされた炎のカー

スガノンの大剣を避けつつ距離を取ったことで一旦仕切り直された。

そんな彼の頭上から、彼を含めた一同が『末代』と呼ぶ少年の申し訳なさそうな声が振ってくる。

「すいません、抑えきれなかった……っ！」

『二体同時はきついよね』

それが、『だから構わないよ』という許しではなく単に事実を口にしただけであり、『だとしてもやるしかない』という現実を共有していることを誤ることなく認識しながら。

リンクは名誉挽回とばかりに、複数の爆弾矢を同時に番えた強弓を引き絞り、床に巨大な亀裂を走らせた大剣を改めて振りかぶる炎のカースガノンへと向けて放った。

一人で、それも弓を使用するものとは到底思い難いような同時かつ連続の爆撃を食らい、流石に競り負けて後退した隙間を埋めるように、腕と一体化した巨大な

砲身を唸らせた風のカースガノンがその身を割り込ませる。

強力な矢を放った反動に崩れた体勢を、未だ直し切れていなかった瞬間を狙った砲撃は、何処からか飛んできて目元で破裂した衝撃と、全く同時に耳や眼どころか脳まで貫きかねないような勢いで炸裂した音と閃光によって妨げられた。

『時』の少年が、幼い子供の姿で持っているとどう臆肩しても玩具にしか思えないパチンコで放った絶妙な援護を横目に、リンクはマスターソードの剣先を天を衝くように突き上げた。

聖なる力に満たされて眩く輝きだした剣を手にも、割れた床の瓦礫を足場に跳び上がり、命の光を見いだせない無機質な単眼へと向けて突き立てる。

根元近くまで深々と減り込んだそれがとどめとなり、魔王の分身たる怪物はその身を構成していた闇の魔力を四散させながら消滅していった。

次いでもう一体……と思つて振り返った視界に映つたのは、風のカースガノンと同じようにその身を散らしていく火のカースガノンの、辛うじて残っていた残骸の一部。

それぞれで既に一体を撃破し、間髪入れずにこちらの助太刀へと駆けつけてくれ

た『風』と『黄昏』が、笑顔で手を振っていた。

その体の端から、徐々に光の粒子と化しながら。

『出来る限りのことをしようとは思ってたけど……』

『ごめん、もう限界みたい』

フォーソードの力で造り出せる分身は、本来ならば痛手を負うことで消滅してしまふし、さほど長いものではない時間制限だってある。

勇者の仮初めの器として、魔王を相手の激戦にここまで持っただけでも十分に大したものだった。

それを分かっていて、ガノンドロフの脅威を知っていたのと同時に、幕を閉じるという最も大変な役目を果たし切り、今もまた新たな戦いを続けている後輩のことを信じているからこそ、彼らの表情に悲壮なものは見受けられない。

それは、三人の後輩達がカースガノンを抑えている間に、ガノンドロフの相手を一人で担っていた『時』にとっても同じことで。

『後は任せたよ』

たった一言を残して消えていった、その名残を最後まで見届けることなく、リンクは再びガノンドロフへと向き合った。

消耗した様子がさほど窺えないガノンドロフは、その気になれば、先程のような怪物をまた生み出すことが出来るだろう。

しかしリンクには、彼にその選択肢は無いという確信があった。

ガノンドロフにとって、カースガノンやファントムガノンといった自身の魔力から造り出した魔物はあくまで、自身が干渉できる範囲を広げるための手足の延長や、様子見の前座に過ぎないからだ。

ガノンドロフの膨大な魔力は、配下を生み出すのではなく自らの戦いに用いてこそ真価を発揮するということを、彼らは正しく認識していた。

瞳孔が開き、戦意と殺意が露わになった凄まじい表情で嗤ったガノンドロフの周囲を、彼自身の渦々しい魔力が渦巻き、徐々にその質量を増していく。

数多の魔物と相対してきたこの身でさえ、肌が粟立つのを止められないほどに膨れ上がった魔力は、そのまま確かな形を成した。

赤い鬘と浅黒い肌という、エリザベートを器としている現状では見受けられない元の彼の面影を露わにしながら、遙か頭上から影を差す巨体は只でさえ巨軀であった元の体の更に数倍にもなっている。

巨大な牙に爛々と輝く目……二足歩行で両手に巨大な武器を携え、猪に似た顔をした怪物こそは正しく、魔王ガノンドロフが持つ有り様のひとつ。

魔獣ガノンの殺気と咆哮を全身に浴びながら、リンクは自身の思考が冷静を通り越して冷え込んでいくのを感じていた。

「……これは、ちょっとまずいなあ。

さつきよりよっぽどきつそうなのに、フォーソードを振るえるような余裕があるとは思えない」

フォーソードで分身を造るのには、力を込めて、剣を振るう、という二段階の行

程に集中する必要がある。

あからさまな隙と言っていいその瞬間を、完全な殲滅モードと化した今の彼が見過ごすとは到底思えなかった。

唾を飲み込みたいのに、口の中は渴き切っていて痛いくらい。

手や膝が震えそうになるのを堪えるのに、かなりの力を込めなければならなかった。

逃げ出してしまいたかった、恐ろしくて堪らないのが本心だった。

勇者と魔王の因縁だとか、トライフォースの宿命だとかは関係なく。

目の前にいるのは、今ここにいる『リンク』という少年、他の誰でもない自分自身にとっての、紛れも無い『死因』なのだから。

全身を切り裂かれ、または焼かれた苦痛の記憶と、大切な人達と生きる未来を諦めさせられた絶望が今一度、冷たい澱みとなって込み上げてくる。

「……………」

それをリンクは、大きく吸った息と共に呑み込んだ。

無理やり忘れたり、無かったことにしたわけではない。

ここで踏ん張らなければ、また同じことになる……大切な人達と歩む未来をまた失うぞ、と。

その事実だけで奮い立てる彼は、成し遂げてきた功績ではなく有り様で以って、紛れも無い『勇者』であった。

マスターソードを構えながら、少しも目を逸らすことなく真っ直ぐに相對してきたリンクへと、魔獣ガノンが咆哮で応える。

対魔王戦の第二幕は、荘厳な大広間を揺らす轟音と共に始まった。

合うと思ったのでタイトルこそ『四つの剣』ですが、実際には『ふしぎのぼうし』でしかフォーソードを扱ったことがなく、それ由来の解釈と描写しか出来ていません。

その辺りは、申し訳ありませんがご容赦ください。

魔獣形態のガノンドロフが猪なので、魔猪を始めとした猪型の魔物や神はこちらの世界観では魔王の化身に近いものだとして人々から認識され、原典よりもより恐ろしく強大な存在として概念レベルでランクアップしています。

幾度目かの決着

『ゼルダの伝説』という最古の英雄譚は、人によって見所が異なる。

勇者や姫の立ち位置に自身を投影させる者、妖精や異種族といった人以外の存在が当たり前に存在する古代の文明に想いを馳せる者、様々な道具や工夫を駆使してあらゆる困難を乗り越えていく冒険に胸を躍らせる者など。

しかし、そうやって異なった意見を持つ者達に対して『最大の見せ場とさえ言えば』と尋ねれば、同じ答えが返ってくることだろう。

なぜならば、勇者リンクが見て、聞いて、乗り越えてきたものの全ては、その時その場所に至るためのものだったのだから。

『ゼルダの伝説』が今の世に伝わってから、数え切れない程に多くの人々が固唾を呑みながら見守ってきた英雄譚のクライマックス。

それが今、再びこの世で繰り広げられていた。

丸太のように太く巨大な、下手な鎧よりもよほど頑丈そうな毛で覆われた獣の剛腕が、携えていた大剣を唸りと共に振り下ろす。

床板を割ったその一撃をギリギリのところでかわしたリンクは、ほんの一瞬の硬直を逃さずに大剣の柄を足場に跳び上がって、マスターソードを振りかぶり……ぶ厚い毛皮を裂く寸前で、割り込んできたもう一本の大剣によって防がれた。

これで決められるとは流石に思っていなかったけれど、それでも確かな隙をついたと思った攻撃を敢え無く防がれた悔しさに舌を鳴らす。

しかしその直後、腕の太さどころか体の大きさからして差がある相手と刃を合わせておきながら吹っ飛ばされず、どころか巧みに威力を逃して再び懷に飛び込んで見せた手腕は十分に、ガノンに対する意趣返しとなってみせた。

体格も力も比べ物にならない筈の相手と刃を交わしながら、決して競り負けることなく果敢に攻め続けるリンクと、体格の差と身軽さを利用して隙を作りつつ狙ってくる相手の攻撃を、巨体からは考えられないような俊敏さで悉く防いでみせるガノン。

どちらを称賛すべきなのかを本気で悩んでしまうような、ひとつひとつが十分に必殺となり得る攻撃を放ち、そして防ぎ合う攻防が続く。

そんな、ある意味で完成してしまっていた拮抗状態は、思いがけないタイミングで不意に崩れた。

激闘の余波が及んでいたらしい天井の瓦礫が両者の間に振ってきて、それから逃れるためにやむを得ず距離を取ったことによって。

「まずい……！」

遅れて降ってくる小さな瓦礫を浴びながらも、構うことなく再び間合いを詰めようとしたりリンクの思惑は、蝙蝠のような動きで羽ばたく炎によって妨げられた。

いつの間にか、本物の蝙蝠の群れを思わせる数で展開していたそれらが、先のものを避けて体勢が崩れた瞬間を狙って次から次へと襲いかかってくる。

幾つかを切り払って、何とか作り出した時間と空間の猶予を使って突撃を試みるも、その進行方向を塞ぎながら今度は巨大な槍が回転しながら飛んできた。

すんでのところで避けられ、そのままあらぬ方に向かうかと思われた槍は、物理法則ではあり得ない軌跡を描きながら主の手元へと戻っていった。

難なくそれを受け止めたガノンは、すかさず二撃目を放つべく槍に新たな魔力を込め始める。

その様子に、宿敵との戦いを真正面からの一騎打ちで決めようとするような感傷や、このまま反撃を許すことなく押し切ってしまう戦法に対する後ろめたさのようなものは一切見受けられない。

一発でも食らえば並の英雄ならば致命傷、リンクでも重傷は避けられないような

威力で、次から次へと放たれる攻撃をかわし続けながら。

これだからこいつは厄介なんだ……と、リンクは何度目かの舌打ちを鳴らした。

魔王ガノンドロフ、もしくは彼がトライフォースの力で転じた魔獣ガノンという存在に対して、『伝説』をあまり深く読み込んでいない者は、小細工を鼻で笑いながら、居並ぶ敵を真正面から圧倒的な力で蹂躪するさまをよく想像するのだけれど。実際そういったことが出来ないわけでは無いけれど、彼が司る『力』はそんな単純なものではないことを、リンクは誰よりも身に沁みていた。

仮にガノンドロフが、世界を破壊出来るほどの強大な力をただ振りかざすだけの単純な存在であったならば、勇者は彼を恐ろしい強敵として倒しはしても、長い時を経ながら幾度となくぶつかり合う魂の因縁を繋いだりはしなかっただろう。

どんな強者であっても、たった一瞬の油断、たった一度の間違いで命を落としかねない過酷な砂漠で生まれ育ったガノンドロフは、全てを支配し得る圧倒的な力こそを至上とすると同時に、策を練ることや機を窺うことの重要性を知っている。

伝説の中にて彼がその『力』を実際に揮うのは、物語の大詰めに差し掛かってから。

ありとあらゆる困難を打倒して、遂に自らの元にまで至ってみせた相手を前に重い腰を上げた時のことで、それまでは密かに張り巡らされていた策略の成果が勇者や人々を苦しめる。

異変の渦中にいた者であっても、それが誰の、どんな思惑によってもたらされたものであるのかを、その時はまだ知ることが出来ない。

多くの策を破り、思惑を邪魔し、事態の中枢に深く踏み込むことでようやく影の一端が見えてくる黒幕……それこそが魔王ガノンドロフ。

策を小細工と見下す脳筋を嵌めるのも、ちよっと考えが巡るだけで既に勝った気になる頭でっかちをちゃんと思惑ごと叩き潰すのも。

対象ごとに最適な『力』を使い分けているだけだと豪語出来る彼にとって、宿敵

と認める相手に対して勝つための最適解を取るのは当然の選択だった。

トライフォースの力によって魔王と化したガノンドロフを滅ぼせるのは、同じトライフォースを宿す勇者リンクを唯一の主とする、あらゆる魔を滅する力を持った神剣マスターソードのみ。

対してリンクは、神剣を扱えはしてもその身は柔な人のものでしかなく、魔王の頑強な体と強靱な生命力を相手の競り合いで先に消耗してしまうことは避けられない。

果敢に攻め込み、両者の力が拮抗を保っている間に、僅かな隙を逃さずに神剣の刃を叩き込むことが出来ればリンクの勝ち。

怒涛の攻めを防ぎ切り、消耗戦の果てに潰すことが出来ればガノンの勝ち。

お互いの勝利条件を把握し合っている中で、先んじて有利な状況を作ることに成功したのは、マスターソードが届かない間合いを確保して遠距離での攻防に持ち込むことが出来たガノンの方だった。

自分の手で直にとどめを刺さずに、消耗を促しながら判断ミスが重なるのを狙う戦法を地味だの臆病者の発想だのと蔑んで、武勇というものを見せてやると勇みながら近づいて来てくれるような奴が相手なら楽なのに……と。

そんな馬鹿げた判断をガノンは絶対にしないと分かっているが、それでもリンクは考えずにはいらなかった。

破壊の権化と言っても過言では無いような恐ろしい魔獣の姿で、『持久戦に徹して相手を消耗させる』という印象とは正反対の堅実な戦術を取った彼の守りは、身も心も堅く。

ひとつひとつに必殺の意図が込められた攻撃はその悉くが防がれて、好機思っ
て攻勢に転じてくれることを期待して敢えて隙を作っても、引っ掛かりそうな動き
どころか気配さえ見えない。

思いつく限りのあらゆる手段を試し、使える道具を片っ端から試してみても、一

向に突破口が開けず。

少しずつながらも確実に消耗している状況に、流石の彼も焦り始めていた。

（こんな時に、『彼女』がいてくれれば……）

自分達と同じくトライフォースの適合者として、現世に降りた女神の血を受け継ぐ巫女として。

強力な封印の力を持っていた『彼女』達の助力があったからこそ、勇者は魔王を打倒し続けることが出来たという事実がある。

そんな感傷じみた考えを、リンクは頭を振って追い出した。

二度と取り戻せない覚悟で、紛れも無い自分自身の意思で決めた上で置いてきたものだというのに、今更何を考えているのか。

自分は今もう一人なんだと、一人で頑張らなければならないのだと。

冷静を通り越して冷たい、ただ効率よく戦うだけの機械じみた思考回路に落ちていくリンク。

そんな彼の耳元で突如響いた声が、本格的に沈みかけていた彼の意識を引き戻した。

《リンク君!!》

「ひやっ!!」

ド、ドクター!？」

《良かった、やっとな繋がった!!》

遅くなってごめんね、ずっと頑張ってたんだけど魔力濃度のせいかなかなか上手くいかなくて!!

通信がいつまで持つか分からないから、手短に用件だけを伝えるよ!!

よく聞いて、実はね……》

そうして、ロマニの言葉を聞いたリンクの目は驚愕に導かれ……さらに次の瞬間、その顔には、まるで憑き物が落ちたかのような笑みが浮かんだ。

「ありがとうドクター、皆も」

《お礼なんかいよいよ、君達をサポートするのが僕らの役目なんだから!!》

「ああいや、そうじゃなくて……まあ、今はいいか。

続きは、あいつを倒してからだ」

自分一人で……なんて考えが全くの見当違いであり、思い上がりであったことを何とか思い出せたリンクの表情に、焦りや不安は既に無く。

トライフォースと同じ光を宿しながら虚空に現れ、ゆっくりと落ちてきた美しい弓を、天高く掲げた手でしっかりと受け止めた。

形を得た光のような不思議な材質に繊細な装飾が施された、まるで神が作り上げた芸術品かのような弓を手にしたリンクの姿に、ガノンの表情は獣の顔でもそうと分かる程に歪んだ。

トライフォースの力を宿した矢を放つことが出来る『光の弓矢』は、勇者リンクにとってはマスターソードにも匹敵する切り札であり、魔王ガノンにとっては嫌悪と恐れの対象となる。

あの弓の存在によって勝敗を左右された戦いが、果たして幾つあったことか。

じわじわと消耗を余儀なくされながらも機を窺っていたリンクが、この硬直状態を打破して一気に勝負を決めるつもりであることを察したガノンは、ほんの一発でも食らってはいけないあの矢を捌き切るためにより一層と集中力を研ぎ澄まさせる。

リンクはそんなガノンへと向けて、トライフォースが輝く手で、同じ光を宿す矢を弓に番えて引き絞り、真っ直ぐに放った。

並の魔物ならば一瞬で消滅するような力が宿った矢を次から次へと惜しみなく放つリンクと、存在としての相性からどうしても感じてしまう怖気に苛まれながらもその悉くを打ち払ってみせるガノンの、先に何かを少しでも間違えた方が終わりとなるギリギリの攻防が続く。

ほぼ同じタイミングで迫ってくる二本の矢を、両手に携える対の大剣で一本ずつ砕いたガノンの体と意識に僅かに生じた隙を狙ったタイミングで、三本目の矢が放たれた。

その一射は、見守っていた者達が瞬間的に『決まった』と思ってしまう程に完璧

だったのだけれど。

残念ながらそれは、ギリギリの状況の中でガノンが見せた、魔獣の巨体からは想像し難いほどの俊敏さによって敢え無くかわされてしまった。

肌と精神を一瞬粟立たせながらも、役目を果たせないまま遙か後方へと飛んでいってしまった矢のことを早々に忘れて、目の前の相手に改めて向き合った……そんなガノンの背中を、全く想定していなかった衝撃が貫いた。

ちよつとやそつとの攻撃では傷つくどころか痛みすら与えられない筈の、この身の自由を一瞬で奪ってみせたその一撃には、確かな覚えがあった。

（光の矢……馬鹿な、何故後ろから）

彼でなければ、痺れるどころではなかったであろう攻撃を受けた体を根性で動かし、全く意識していなかった遙か後方に視界を移していった。

少し時間を遡って、勇者と魔王の激闘が始まったばかりの頃。

『ねえ、ちょっといい？』

『いぎやああああっ！！？』

『そ、そんなに驚かなくても……』

何も出来ない現実を腹立たしく思いながらも、せめて最後まで見届けようと。

今すぐにでも逃げ出してしまいたい生存本能を必死になって堪えていた立香は、極限状態の中で前触れなく現れた存在にいきなり声をかけられて、縮み上がっていた心臓が爆発したような思いを味わっていた。

状況が悪いというのは勿論大きな理由だけれど、もつと普通の時に同じことをされていても、やはり悲鳴を上げてしまったかもしれない。

削り取った岩盤に、目と口にあたる穴を適当に開けただけにしか見えない不気味なお面を被っていたその様は、それそのものが十分に異様だったのだから。

お面の主は、緊張の糸をぶっ千切られて腰が抜けてしまった立香の様子に申し訳なさそうな苦笑いを零しながら、自身の顔を覆っていたそれをゆっくりと外した。その下から現れた顔と、その正体を察した立香の喉が大きく鳴り、息が止まる。

幼い少年の姿と、多くの出会いと経験を経た者の貫禄を併せ持つ彼は、ほんのついで先程まで魔王を相手の激戦を繰り広げていた、『時』の勇者その人だった。

『な、何で……他の人達と一緒に、もう消えたんじゃない』

『そう思わせるためにあの二人は、潔くさっさと消えたんだ。』

とは言っても、頑張ってるおかげでまだギリギリ残れているだけで、限界なのに変わりは無いから……急いで用事を終わらせるよ』

そう言って『時』は、立香達がよく知るリンクが双子の魔女との戦いの中で使っていたのを覚えていた鏡の盾を取り出し、立香へと向けて差し出した。

『どうか、俺達の後輩をよろしくね』

「やった……お、俺やった、成功した」

恐怖とプレッシャーのあまりに、歯が鳴る程に震える口からは荒い息を零し、瞳

孔が開き切った目の端には涙が滲んで、顔色は真っ白で。

意思に反して操られていたことによる消耗は激しかったらしく、未だ本調子には程遠そうな獣の少女に支えられながらという、男としてはかなり情けない姿で……それでも確かに、自分の足で、自分の腕で。

鏡の盾をしっかりと構えて果たすべき役割を果たし切った、ガノンドロフが足手まといと鼻で嗤った少年が、振り絞った勇氣と共に立っていた。

(……………見誤ったか。

たかがガキだと、所詮何も出来まいと思って泳がせてしまったのが、今思えばそもそもの過ちだったというのに。

やはり俺には、『勇氣ある者』を見定められる目は無いらしい)

『勇氣』によって全てを台無しにされて、次こそはその度に思う筈なのに。

やはり繰り返してしまう自分へと、心中で呆れた溜め息をつくガノンドロフ。

その視界一杯に、青白く輝く神劍の刀身と、その劍先を自身の眉間へと突き立て

んとするリンクの姿が映る。

憎らしい仇敵に向けるようなものとは、到底思えないような謎の笑みを浮かべていた彼の声が、不思議なほど鮮明に聞こえてきた。

「今の世界にだって、ハイラルに負けない風が吹いているよ」

『……………』

『ああ、
そのようだな』

触れただけで魔を滅する聖剣の刀身を、眉間に深々と突き刺した巨体が、形を持たない魔力と化しながら霧散していく。

つい先程まで響いていた激戦の轟音が夢だったかのように、耳鳴りが聞こえそう

な程に一転した静寂の中。

徐々に晴れていく視界の先に立香達は、たった今まで魔王が立っていたその場所に力なく倒れ伏す、フランスで共に戦ったサーヴァントの少女の姿を見つけた。

ボス戦が終了して、締め括りとなる展開がもう少しだけあるのですが、タイミングがいたので一旦ここで区切ります。

その辺はあまり長くはならないと思うので、出来る限り早めに上げるとして……とりあえずは26日を楽します、有給取りました！

待ってろライズ!!

伝説の戦いを目の当たりにした管制室（特にギルガメッシュ）の反応を多くの方が期待していたのですが、ここは敢えて『星の王子様の羊』理論でお願いします。童話『星の王子様』にて、不思議な少年に「羊の絵を描いて」と言われた『私（語

り手』は一応そのリクエストに応えてあげるのですが、確かな理想像があるらしい少年は、何枚書いても「〇〇が違う」「〇〇はこうだよ」と満足してくれません。辟易した『私』は、空気穴が開いた箱の絵を描いて「君の理想の羊がこの中に入っているよ」と一言。

ようやく満足した王子様は、喜んで箱（羊入り）の絵を受け取ったのでした。推しの活躍を目の当たりに出来たファンの熱狂ぶりというのを、書き切れるどころか想像出来る気すらしないので、皆さんの中で最高の盛り上がりっぷりを思い描いていただけとありがたいです。

.....

.....

.....

真の勝者

……あ、あれ？

アタシ、今、何をしていたのかしら。

……ダメだわ、思い出せないし考えられない。

頭の中がぼやけて……。

『ほう、目覚めたか。

俺の魔力に耐え切れず、自我が壊れてしまう可能性は大いにあったのだが』

だれ？

『今の貴様にそれを教えても意味はあるまい。

……だが、貴様にとって幸いなことに、今の俺は機嫌がいい。

功績に報いてやることも兼ねて、しばし無駄話に付き合ってやろう』

功績って、何のこと？

『混沌・悪の反英雄、だったか。

俺と同じ属性を持つ貴様が、今の世とハイラルが混ざり合うこの場で俺という存

在を意識したことが、縁を繋げるきっかけとなった。

最初こそ、器を得ねばならぬような曖昧なものになってしまったが。

既に錨は下りた、次があるのなら俺自身が現れることも可能であろう』

そうなの、よく分からないけど良かったじゃない。

『何のことだ』

何って……アンタもサーヴァントなら、叶えたい願があるんじゃないの？

『……昔ならば、不自由な使い魔の身に一時とはいえ甘んじ、愚かなマスターにこ

うべを垂れても、と思っていたのだろうか。

何をしてでも、どんな手を使ってでも手に入れたいと願ったものは、とうの昔に消えて無くなり。

我が身と引き換えに全てを終わらせた奴に対して、今更恨みを果たしたい訳でもなく。

例え可能だとしても、力と存在を制限された従者の身に甘んじてやる意味と利点
が、俺には見出せん』

なっ……ダメよ、そんな考え方じゃ!!

『……小娘、何が言いたい』

可能ならば誰だって、チャンスがあるのならばどんな時だって、夢に向かって手を伸ばす。

夢が叶わなかったとしても、また新しい夢を見つけて、何度だって頑張ってやればいい。

それが人ってものよ、少なくともアタシはそう思うわ。

『……………』

ちよつと、何を黙ってるの？

『小娘、貴様本当にサーヴァントか？

サーヴァントとは、叶わなかった生前の妄念にしがみつく亡霊である……俺はそういう認識を得ていたのだが』

基本的に間違っていないわね、多分アタシがレアなのよ。

どうしようもない罪を犯した女が、最期の瞬間に抱いた純粋な願い……どこかで間違えなければ、何か別の道を歩めていれば、こんな自分にだってもっと違う可能性があった筈だっていう希望。

その想いが形になったのがアタシ。

未来への希望と可能性を決して諦めない、サーヴァント界のトップアイドルよ!!

『
.....
ふつ、
ク
ク
ク
ツ
』

『ふはははははっ!!』

小娘、貴様の言う通りだ!!

ハイラルへの未練も、小僧どもへの恨みもとうに果てたが……魔盜賊王と恐れられたこの俺が、新たな願いを求めて何が悪い!!』

そうそう、その意気!

『おい、小娘』

エリザベートよ、アイドルに対して変な呼び方をするのはやめて。

『ではエリザベート、戯れに聞こう。』

何かひとつ願いが叶うとしたら、貴様は一体何を望む？』

……願い、ですって？

『そうだ、やはりアイドルとやらを極めるか？』

それは自分で頑張るわ、でないと意味が無いもの。

……そうね、敢えて夢物語を語るのなら。

領主として、もう一度頑張ってみたい。

『私』は、若さと美貌を保とうとして行なったことを、領地の顔たる婦人として当然の務めだと思っていたし……自分はよく統治していると、心から信じていた。

そうじゃなかったんだってことを知れた時には、もう何もかもが手遅れで。

だから『私』は思ってたの、もし機会をもらえるのなら今度こそ精一杯やろうって。

領民達を傷つけて恐れさせるんじゃないくて、誰もが参加できる楽しいお祭りを開催して、外からも色んな人達に遊びに来てもらって、皆で笑顔になれる素敵なお場所にしようって。

誰に聞いてもらっても出来ないまま、絶望と暗闇の中で消えた『私』の夢……それを叶えるために頑張りたい。

……な～んて、あくまで戯れよね。

『さて、それはどうかな』

えっ？

『せいぜい励むがいい。』

成功しようがしまいが、どちらにしてもそれなりに見物にはなりそうだ』

ちよっ、待ちなさ……っ！

「……ちな……さ、
い。
まっ……て……」

「エリちゃん!？」

「エリザベート!!」

「気をしっかり持つのだドラ娘、寝たら死ぬぞ!!」

「いや雪山じゃないから!!」

ゆっくりと開かれた、エリザベートのかすれた視界に飛び込んできたのは、心配そうな表情でこちらを見下ろしている、幾つかの見覚えのある顔だった。

「どうしたのよキャット、何か顔色悪いわね」

「お前が言うか!？」

野生の獣を本能に抗わせるだなんて、まったく罪な娘だワン……」

「無事でよかった、本当に……」

「……アンタ、もしかして子イヌ？」

何でこんなところに……って、え、あれ？」

短い間とはいえ、マスターとサーヴァントとして共に戦った少年と、その隣にいる金髪碧眼の少年の存在に気付いた途端、臍氣だったエリザベートの意識は一気に覚醒した。

金髪碧眼の少年……一応立ち位置としては仲間だったのだけれど、間が悪かったためにろくに接する機会が無く、ほぼ初対面同然と言っていい勇者リンク。

一向に力の入らない自身の体が、硬く冷たい床に寝転がされているのではなく、そんな彼の大きさと太さに見合わない力強さを秘めた腕によって優しく抱き起こされているのだということを認識した、エリザベートの顔と頭が瞬時に茹で上がった。

「な、なっ、なななな……なんで、こんな状況っ!？」

「気持ちとは分かるが落ち着け、ほら深呼吸」

「エリちゃん、何があったのか覚えてる？」

「何があった、って言われても……凄いショックを受けて、死ぬんじゃないかって思ったことは何となく覚えてるけど、それ以上はちょっと」

「……うん、そっか。

分らないならそれでいい、無理に思い出す必要は無いよ」

「……………」

「リンク、どうかした？」

「ガノンドロフの残滓が」

「残ってるの!？」

「あ、いや、大丈夫。

残ってたから警戒を続けてたんだけど、もう消えたみたいだ」

「……そっか、なら良かった」

（……………あいつはもう消えた、それは間違いない。

その筈なのに……この嫌な感じは、一体何なんだろう）

未だ自力では起き上がれずにいる、エリザベートの体を支える腕は微動だにさせないまま、周囲の警戒を続けるリンク。

そんな彼の死角……エリザベートを抱き起こしていることで、必然的に彼女に触

れている上に、ぱっと見では確認できない位置に回ってしまっている左手の甲。

そこに刻まれている聖三角の紋章が、リンクの意図したものではない光を放っていたことに、気付くことが出来た者はいなかった。

今、この段階においては。

大小様々なかぼちゃで彩られた愉快的な町の、ハチャメチャなお祭り騒ぎの夜空に、『あんの猪野郎おおおおお！……！』という勇者の怒号が轟くことになるのは、まだしばらく先のこと。

ガノンドロフ自身が、ライフフォースで願いを叶えようとしたら、その動きと思考にリンクは瞬時に気付いて防いでいたのでしょうか。

生憎と彼自身はライフフォースに近づいていなく、エリちゃんの体にライフフォースが接触しているタイミングを見計らって願いを口にするよう促しただけだった（エリちゃん自身に願いを叶えるつもりも自覚も無く、世間話をした程度の非常に

自然な動きだった)ので、ガノンドロフの魔力が全て消えるまで集中して警戒を続けていたリンクは気付かせませんでした。

以下、その後のこぼれ話。

リンク

トライフォースを見す見す使われてしまうという管理者としての大失態の責任を取るために、エリザベートもしくはハロウィン関係のトンちきイベントが発生するたびに、死んだ目になりながら率先して最前線に立ち続ける。

「最高の嫌がらせだよ、あの野郎……」

立香&マシュ

苦しむ時は一緒だよ、仲間だもの……。

ガノンドロフ

勇者が右往左往するさまと、ハロウィンイベントの混沌っぷりを肴に酒が美味い。

エリザベート

精神世界でのやり取りを何となく覚えていて、操られていた時のことは全く覚えていないので、ガノンドロフを畏れながらも、親戚のおじさまに対するような親しみを込めた接し方をする。

ガノンドロフ自身も、彼女のことは『おもしれー女』枠で割と気に入っていてそれなりに相手をするので、事情を知らない周りはひたすら怖いという。

捻じれた姉妹

「うゝむ……マシュよ、宮廷魔術師からの連絡は来たか？」

「すみません、まだです」

「何をやっておるのだ、いくら我慢強い余とて流石に飽きてきたぞ」

彼らが自分達と別行動を始めた時には、まだ日は十分に高かったというのに。

水平線を赤く彩る美しい夕日を前にしながら、今すぐにも砂浜を駆けまわって駄々を捏ね始めそうな少女皇帝の様子に、マシュは呆れると同時に共感していた。

「緊急事態が起こった、向こうの観測とフォローに集中したいからこちらから連絡するまで待っていてほしい……と言われてしまうと、待ちくたびれたという理由で声をかけるのは躊躇われますし」

「まあ、如何な想定外が起こったのだとしても、彼奴らのことだから手間取っているだけであろう」

「はい、私もそう思います」

伝説に語られるリンクの強さと、本当に大切な時には必ず発揮される立香の気概を知り、そして信じていたマシュとネロに悲壮感は見受けられず。

彼らの言う『緊急事態』が、自身が仕掛けた洞窟の魔物達と二人のサーヴァントだとばかり思っているステンノは、不満げに口を尖らせた。

「お姉さま……本当に、一生のお願いですから、マスター達がお戻りになった際に変ないちやもんをつけたりはしないで下さいね？」

マスター達ではなく、お姉さまのために言っていることなのです」

「彼らが何事もなく帰ってくるって、あなたもそう思っているの？」

「愛される偶像であるお姉さまが考えつき、用意できる範囲のことでは、かの方を煩わせるのが精々でしょう」

「……そう。」

大した人なのね、ギリシャの神々よりも古き世の……真の勇者様とやらは」

皮肉交じりにそう呟き、頬を膨らませながら拗ねるさまは、何かと弄られがちな身内からしてもあざといほどに可愛らしかったのだけだ。

そのようなものに惑わされて、手心を加えてくれるような相手ではないことを知っていたメドゥーサの焦燥は、姉が多少話を聞く姿勢を見せてくれるようになってくれた今もお、重ねて募るばかりであった。

「お姉さまの妹ではなく、マスターにお仕えするサーヴァントとしての私には、リンクさんが取った判断と行動が間違っていたとはとても言えません。」

リンクさんがお姉さまに反発されたのは、神が嫌いだからでも、少女の外見を侮

りお姉さまを軽んじたからでもなく、敵なのか味方なのかハッキリしない上に、どんな力を持っているのかもわからない相手に対して当然の警戒をしただけ。

それを解消するどころか、余計不安にさせるような言動を、お姉さまがそのまま続けたから。

あれをやっていたのが顔も名前も知らないどこぞの誰かだったら、万が一にでもこちらに飛び火してこないようにと、黙ってそのまま距離を置いていたところですが、でもお姉さまだったから、そういう訳にはいなくて……」

「それであなただけは、姉を守るためにその首を差し出したというの？」

メドウス

駄妹の分際で……そのまま叩っ切られてしまっていたら、どうするつもりだったのよ」

「……？」

いいえ、お姉さま……確かに私は、本気の誠意を示すために切られる覚悟で首を差し出しました。

だとしても、それで本当に切られるとは思っていませんでしたよ。

神だからとむやみに敬ったりしないように、怪物だからとむやみに虐げたりもしない。

そういう人達ですから……リンクさんも、マスターも」

そう言いながら妹が見せた笑顔は、二人の姉と同じような姿をしていた頃の、彼女がまだ胸を張って幸せだと言えていた頃のもののようで。

どこもかしこも、無駄に大きくなった今の姿……自分達以外に動くものの無い空っぽの島で、怪物退治の名声を求めて続々とやってくる勇者紛いの連中を片っ端から石に変えていた頃の彼女では、到底浮かべることの出来なかったもので。

守るために戦うことも、ずっと格上の神によって変質させられたその身を戻すことも……妹を笑わせられるようなことを、受動的に愛されるだけのこの身では何ひとつとしてあげられなかったというのに。

それがいつの間にか、自分の知らない者達によって、自分の知らないところで成されていた。

非常に面白くない現状を正しく認識したステンノの、只でさえ力が入っていた眉

間により一層の深いしわが寄る。

可愛らしさなど見出しようもない、舌打ちの幻聴が聞こえそうなほどに歪んだ表情に、姉の機嫌が一瞬で最底辺まで落ち込んだことを察したメドゥーサの喉が甲高くかすれた音を零した。

「ご、ごつ、ごめんなさいお姉さま、何かお姉さまの癪に障るようなことをしてしまいましたでしょうか!？」

「そうね、強いて言えばあなたの一挙一動全てが気に食わないわ」

「私の存在全否定ですか!？」

た、確かに私は、どこもかしこも大きい上にいかつくて、小さく愛らしいお姉さま達とは比べようもなく醜い女ではありますがあ痛たたたたた!!」

「その口を閉じなさい、この駄妹が。」

あなたを馬鹿にしているのは私と片割れだけなのだということを、まさか忘れていないでしょうね」

「分かった、分かってます思い出しました!!

だから髪はやめて下さい、引っ張らないで!!」

姉妹のじゃれ合いと称するにはいささかバイオレンスなやり取りに、少し前からこっそりと気にかけていた二人の少女達は、共に呆れた表情を浮かべていた。

その源にある認識に関しては、多少の差異があるらしいけれど。

「随分と拗らせた、何とも面倒くさい姉妹であるな」

「……わかりません。」

ステンノさんはどうして、自分のことを心から慕っているメドゥーサさんのことを、あんなにも無下にするのでしょうか」

「……マシュよ、そなた分からねのか？」

「えっ、何がですか？」

「あー……うん、まあ確かに。」

彼奴らの言動を額面通りに受け取るのならば、そういう印象になるであろうな」

「え、あの……ええ？」

すいません、私は一体何に気付いていないのでしょうか……」

「……そうさな、余が個人的に抱いた見解を軽く口にするくらいならば良からう。あの姉妹があのような捻くれた関係性にある原因は、妹を蔑ろにする姉にあるという考えを、そなたは持つておるようだが。」

実際にあのような態度を取っている以上は、まあ間違っではないであろうが……余はそれに加えて、妹の方にも十分な非があると思った」

捻くれて分かり辛いそれが、姉なりの精一杯の愛情表現なのだということに、姉の性分を十分に理解している筈の妹が全く気付いていなかったら。

『美しいお姉さまが醜い私を厭うのは当然のことです、妹として慕うことを許して下さるだけで幸せです』などというような、姉の本心に沿うどころか全力で否定している卑屈な発言と、それに伴なう行動を繰り返していたら。

姉が腹を立てるのも、苛立ち交じりに多少乱暴な手段でそれを咎めるのも、特におかしいことではないだろう。

（姉の方が勇気を出して、素直に『愛している』と伝えたとしても……姉の言動は歪んだ愛情表現ではなく、自分を厭うている故のものだと本気で思い込んでいる妹が、それをともに受け止めるのは難しいであろうな。

……いつもの余ならば、麗しき姉妹の望まぬすれ違いなど、到底放っておけぬところなのだが）

時間も労力も、ローマの地と民を守るためだけに費やすべき現状ではそうもいかない。

そんな現実を、傍からすれば個人の我がままで好き放題に動いているように見えて、実際にはローマ皇帝としての誇りと信念をきちんと己の中心に据えているネロは、誤ることなく認識していた。

遣る瀬無さと苛立ちに悶えるネロ、ネロの言葉の意味が全く分からずに困惑するマシユ、相変わらずのやり取りを続けるゴルゴン姉妹。

そんな、美しい女性達によって繰り広げられている混沌としていた状況に、不躰に現れて踏み入ってきた異物があった。

波打ち際の穏やかな水面を轟音と共に割り、多量の水飛沫を一同に降り注がせながら現れたのは、ネロとマシュにとっては見覚えのある男の姿だった。

「ネロオオオオオオッ！！！」

「なっ、伯父上!？」

「ネロさん、私の後ろに!!」

ドクター聞こえますか、こっちも緊急事態です!!」

バーサーカー・カリギュラの第一の標的であり、最も危険な状況にあると思われるネロを、共闘する相手ではなく警護対象と認識して瞬時に自身の盾に匿い、すぐさま救援要請を出したマシュの咄嗟の判断は、敵を倒す矛ではなく仲間を護る盾として正しいもので。

想定外だったのは、ようやく巡り合えた姉の身に迫った危機に、大人しく現界するだけの魔力しかもらっていない今の自分が戦えないのだということ忘れて、逸

るままに飛び出してしまった者の存在だった。

（あっ、しまった）

「なっ……こ、この駄妹!!」

「メドゥーサさん!」

相手の間合いに飛び込んでしまってから、力が出せないことに気付いたってのもはや遅い。

狂戦士の戦闘本能によって反射的に繰り出された拳が、岩ではなく美女の頭蓋を割らんと唸りを上げる。

ゆっくりと流れる世界の中で、メドゥーサの心は奇妙に凜いでいた。

どんなに現状が恵まれていようと、怪物として許されざる罪を犯したこの身が、ろくでもない末路を迎えることに変わりはないだろうと思っていたし。

今のマスターには、自分以外にも大勢の、きちんとした実力と忠誠心のあるサーヴァント達がついていることを思えば、残して逝ってしまうことへの不安や心残り

なども無かった。

（ああ、でもせめて……）

こんな愚かな妹だとしても、目の前で失えば流石に、少しは惜しんでくれるだろうか。

その程度の思い入れくらいは持ち得ていたと、期待させてはくれないだろうか。最期の瞬間を、焦燥に染まった姉の表情ではなく、自身を殴り殺さんとする狂戦士の姿を瞳に焼き付けながら迎えようとしていたメドゥーサだったが、ほぼ決まりかけていたその予定は寸前で覆された。

頭上の虚空に突如現れた青い光によって構築され、重力に引かれた全体重に自身の脚力を上乗せさせた強靱な両足が、すぐ目の前にまで迫っていた拳の本体を背中から踏み潰したことによって。

「えっ、な……り、リンクさん!？」

「キャット、二人を頼む!!」

「応とも!!」

同じタイミングで、同じ光によって現れていたらしい獣耳の見知らぬ少女が、見知ったマスターと竜の角と尾を持った見覚えのある少女を小脇に抱え、ついでにメドゥーサも回収しながら一足飛びで距離を取る。

上に乗ったままだった少年と辺りの砂を吹っ飛ばしながら、カリギュラがど派手にその身を起こしたのは、その次の瞬間のことだった。

「うおおおおおお!!」

「うわっしぶとい、結構力入れてたのに……」

「ネロオオオオオオオオオッ!!!!」

「させるか!!」

たった今、自身に盛大な痛手を与えたばかりの相手にさえ目もくれず。

与えられた命令と施された縛りのままに、愛しい姪を殺さんとしたカリギュラの動きと思惑は、その寸前に阻まれる。

青い刀身の軌跡によって宙に飛び、一瞬の間を経て砂浜に落ちた首に続いて、体の方も崩れ落ちた。

「ネロ……ネロ……我が、愛しき、姪よ。

おまえは、とて、も……うつくし、い。

月の女神、よりも……聖杯、の、輝き、よりも……」

知名度補正による強化の影響か、首だけでしぶとく残りながらうわ言を続けるカリギュラ。

リンクはそんな彼へと向けて、まず聞こえていないだろうと、自己満足に過ぎな

いだろうと思いながらも、優しい声色で語りかけた。

「大丈夫、安心して。」

あなたはもう、愛する人を襲わなくていいんですよ」

「……………かたじけない、ゆうしゃどの」

「…っ！」

確かな理性で、姪への狂愛でも自身を殺した者への恨みごとでもなく、止めてくれたことに對する感謝の言葉を残しながら消えていった皇帝へと、ほんの一瞬の黙祷を捧げて。

次に上げた視界に映ったのは、バイオレンスかつ一方的な、それでいて愛に溢れる姉妹喧嘩だった。

心做しか遠巻きに見守っている一同が、示し合わせも無しに浮かべているのと同じ苦笑いが、数秒遅れでリンクの顔にも表れる。

「この駄妹、駄妹、駄妹!!

あなたという子は本当に、いつもいつもそうやって…っ!!」

「あいたたた、痛い痛い!!

ごめんなさいお姉さま、何でこんな怒られてるのか分からないけれどとりあえず
ごめんなさい!!」

「理由が分かっていない謝罪に意味なんて無いのよ、このお馬鹿!!」

「落ち着いて下さいステンノさん、あとメドウスさんは是非とも反省して下さい
ね!!」

そこに居たのは、傲慢な神でも高飛車な偶像でもなく。

自分自身を軽んじている妹に対して憤り、そして心配している、ただの一人の姉
しかなかった。

メドゥーサさんが自分に自信を持たず、お姉さん達からの愛情をいまいち信じられずにいるのって、『小さく愛らしい少女』という美の価値観から一人だけ外れてしまったコンプレックスだけが原因ではないと思っています。

お姉さん達を信じていない、自分に自信が無いというよりも……お姉さん達は自分を愛していない、自分が愛されるもしくは愛されているなんてあり得ないと、一生懸命に思い込もうとしているのではないかなあと。

一人だけ育つても、恐ろしい怪物と化して数多の人間を殺しても、そんな自分の連座で幾度となく危険に晒されても。

変わらない態度で傍に居続けてくれた、大好きな優しいお姉さん達を、無残にも食い殺してしまったのは自分なのだと。

まともに考えてしまったら、到底耐えられないでしょうから。

あと、ステンノが『勇者』を望む、もしくは歓迎しているように見せかけておちよくるのは、怪物退治の偉業とイコールで結ばれるような連中から妹を守ろう、もしくは遠ざけようとする、彼女なりの工夫と奮闘なのではないかと思っています。

全軍集結

ローマ帝国第五代皇帝ネロ・クラウディウスが、人の世から離れた小島の浜辺で、ほんの一時ただの少女ネロとなって伯父の冥福を祈った時から、早くも数日が過ぎた。

勝利の凱旋とガリア奪還を祝う宴で盛大に盛り上がったローマの町は、その華やかさと賑わいを早々に一変させ、新たな戦支度の喧騒によって満ちていた。

大規模な遠征を終えたばかりで、スケジュールとしてはとんでもなく無理なものを強いられているというのに、人々は不平や不満を零すことなく懸命に仕事を進めている。

戦支度も進軍も、これが最後であるということが分かっているから。

『……妹を助けていただいたこと感謝しますわ、勇者様。

カルデアの方々も……使い潰しても構わない尖兵ではなく、きちんとした仲間としてあの子を受け入れて下さっているというのは、どうやら本当のようね。

神は残酷で気紛れなものではありますが、受けたものにはきちんと報い、これだと思つた者への助力を決して惜しまないこともまた、神の矜持というもの。

あなた方に、本物の女神の祝福を授けましょう。

連合帝国を統べる皇帝達が集う場所……連合首都の位置を、正確に教えてあげるわ。

そこから先はあなた方次第、精々頑張りなさい』

妹を助けてもらったお礼という思惑に嘘は無かつたけれど、つい性分で嘲笑交じ

りの上から目線になってしまった言い草に、心からの感謝を返されて目を丸くしたステンノ。

そんな彼女からの祝福という名の情報提供は、停滞していた戦況を動かした。連合との戦いが、その場限りの小競り合いや防衛ばかりになってしまっていたのは、こちらからの攻め手に欠けていたから。

最重要拠点の所在が把握できたのならば、現存している全勢力でもって一気に攻め切るという判断は、国力が残っているうちに一刻も早く戦争を終わらせたいと願うローマにとっては当然のものだった。

最低限の人員のみを残してこちらに合流してほしいという通達は、奪還したばかりのガリアを纏めているブーディカとスパルタクスへと既に送られている。

他にも幾つか存在していた部隊の全てに収集をかけ、全て集まり次第最後の戦いに打って出る……という予定に乱れが生じたのは、本当に突然のことだった。

「ドクター、立香達に繋いでくれる？」

《えっ？》

「報告したいことがあるんだ」

《なっ……ちょ、ちょっと待って。

立香君、マシユ、ネロ陛下、緊急事態だよ!!》

首都近郊の哨戒に出ていたリンクからの連絡を受けて、いきなり騒ぎ出したのは理由がある。

リンクは、少数の潜入部隊や魔物を見つけた程度のことならば、いちいち指示を仰いだりはせずにその場で対応し、後でまとめて報告だけしていた。

彼の現場判断に任せるのが、一番早くて確実だという確かな信頼があったから。そんな彼がわざわざ連絡を入れてきたのだ、どれだけのことが起こったのかと思ってしまうのも仕方ないことだろう。

ネロや立香達もそう思ったらしく、焦った様子の声がカルデアの管制室を経由しながら聞こえてくる。

準備が整ったのを見計らったリンクが告げた内容は、皆が予想した通り、正しく緊急事態と表すに相応しいものだった。

《数百人規模の連合兵と我が軍が交戦中だ?!

リンク、そなたは今どこに……そうか、ならば戦っているのはあの二人が指揮する部隊であろう。

彼奴らが赴いていた地からローマへと帰還するためには、余程のことが無い限り、その場所を通過することになる筈だからな》

「……つまり、きちんと地理を把握していれば、それを予測して待ち構えるのは十分に可能だったということか」

《いやいやいやそれ以前に、何でそんな大部隊がいきなり現れることができたんだ!?

戦準備を邪魔されないようにと、このところずっと、リンク君が見回りを続けてくれていた筈なのに!!》

「だよなあ……」

あれだけの規模の部隊を築くとなると、準備のための行動や時間がどうしても必

要になる。

勇者たるこの身や、最終決戦に向けて張りつめているローマの警戒網が、連合からの潜入部隊をあれだけの大人数が結集するまで見過ごし続けてしまったなどとは、驕りや自惚れではなく現実的にあり得ない……筈だった。

その『あり得ない』を実現させるための具体的な手段が、一同の脳裏に可能性として浮かび上がる。

それを確定させる具体的な計測結果が、管制室からもたらされた。

《皆聞いてくれ、サーヴァント反応が観測された。

それも大量にだ、リンク君が発見した数百人の連合兵は全員サーヴァントだよ!!

》

《なっ……まさか、そんなでたらめが在りえるの!?!》

《正確にはサーヴァントの一部、何らかの宝具によるものだろうね。

軍師や指揮官として名を馳せたり、個人ではなく集団や組織としての逸話を持つサーヴァントには、そういう前例もあるらしい》

《……成る程、信頼する仲間がいるってのも確かに強さだもんな》

《考察自体は大いに結構なのだが、今は後にせよ!!

その者らがサーヴァント……伯父上のような蘇りの強者達であるというのならば、兵達には荷が重すぎる!!

リンクよ、今すぐその戦いに加わってくれ!!

余達は救援部隊を結成して駆けつける、それまで持ち堪えるのだ!!》

「うーん……」

《……ど、どうした?》

《リンクさん?》

「いや、持ち堪えるのはいいんですけど」

「そのまま倒してしまっても、別に構いませんよね」

普通の人や並の英雄ならば、強がり、大言壮語、死亡フラグとなるようなセリフを、特に何の含みも無しに本心からあつさりと口にして。

居合わせていた者達を例外なく絶句させたリンクは、自分の所業に気付かないまま通信を切って手綱を引いた。

途端に急降下を始めた視界がほんの一瞬白く染まり、突き抜けた先に広がるのは、空の民のみが目にすることができる大パノラマ。

割合はその中のごく一部だというのに、それ以外の絶景を全て台無しにしてしまっている、遥か眼下の戦場へと向けて風を切る。

視界の端で、大きく美しい紅色の翼が羽ばたいた。

VS
スパルタ

敵の本拠地に攻め入るために、全勢力を集結させる。

待ちに待った報せを受けて、勇みながらローマへの帰路についていた兵士達の歩みは、あともう少しく王都が見えてくるところというところで強靱な壁に阻まれてしまっていた。

「■■■■■■ーーーーっ！！！」

これで何回目か、獣の雄叫びを上げながら一人飛び出していった巨漢の男……並

の軍団なら纏めて吹っ飛ばされていたであろう、中国史屈指の武人である呂布の突貫が、盾を構えながら腰を据えた横一列の陣形によって受け止められる。

足が地に減り込むほどに押し込まれながら、それでも耐え抜いた前衛の隙間を縫って繰り出された槍の穂先が呂布の巨体を捉え、その内の何本かは肉にまで届いてみせた。

「……っ！」

確かな技術と必殺の意図で以って放たれて命をかすめた鋭い穂先に、狂化したからこそ研ぎ澄まされていた生存本能が『このままではまずい』と、『一旦引いて立て直すべきだ』と、命の危険を示す警鐘となって告げてくる。

呂布は振り絞った理性と思考力でそれを押しとどめ、雄叫びと共にその場で踏ん張った。

自分がこうして、自身の武力と存在を示し続けて、敵軍の警戒の殆どをこの身に集めていることこそが、サーヴァントの集団とただの人間の軍団が辛うじてとはい

え戦況を拮抗させているという奇跡と言うしかない状況の要因であることを、『生きたい』という生物の欲求を上回る武人の勘で理解していたから。

肉と命を削りながら、数百の戦士達を相手に無謀な特攻を続ける呂布の姿に、いつもの飄々さをかなぐり捨てた荊軻が舌を鳴らす。

「忌々しい……どこで名を馳せた連中なのかは知れぬが、力任せに突っ込むしか出来ない今の呂布では相性が悪すぎる」

一度目では突撃を食らった前衛の殆どが吹っ飛び、流石は呂布だと、これならば突破するのにさほど時間はかかるまいと……そう思えたのはほんの一瞬。

強敵や被害を前に慄くどころか、崩れた陣形を瞬く間に整えてしまった一糸乱れぬ連携を前に、彼らは強敵であると気を引き締め直した。

その後彼らは、二度三度と続いた呂布の突貫を防ぎ切った……どころか、彼の攻撃を食らうごとにそれを学び、陣形に修正を加え、より一層の覚悟を以って腰を据える守りは格段に強固なものとなっていく。

そしてついには、吹っ飛ばされるところか耐え抜き、反撃に転じてみせるほどにまでなってしまった。

筋力と体力と根性に任せて押し切るだけの、単なる『脳筋』では行かない。状況を分析してそれを元に考察を行ない、導き出した結論を自身のみでなく全体での行動に反映出来る。

柱となって集団を支える優秀な指揮官の存在を、荊軻は確信していた。

「呂布が圧し負けることは戦線の崩壊を意味する、私達ならばまだどうにかなるかもしれないが兵達は確実に全滅だ。

そうなる前に、何か手を打たねば……」

嚴重な警戒態勢にある皇帝へと、如何にして自身の刃を届かせるか。

それをひたすら考え続けた日々のように、神経が焼き切れかねないような感覚と共に思考を巡らせる荊軻。

そんな彼女に答えるかのようなタイミングで、揃いの盾と槍を携えた屈強な戦士

達の中から、彼らが見せる守りの技を彷彿とさせるような、穏やかながらも力強い声が聞こえてきた。

「我らの技と筋肉も、あなた方の手札も出し切ったと見える。

計算を終え、答えを出すには十分でしょう。

あなた方二人の命と引き換えに、兵士達を見逃すと約束します」

「……その言葉が嘘ではないという根拠はあるのか？」

「情けをかけたという訳ではありません、我らの目的を果たすにはそれで十分なのです。

我らがマスターの命は、間もなく結集しようとしている帝国側の戦力を削ること」
「サーヴァントを討つことが出来れば、それは軍勢のひとつやふたつを落とすも同義。

更に言えば生き延びた兵士達も、自分達が絶対と信じた将の最期を目の当たりにさせられれば、決戦を前に昂っていた士気はガタ落ちで戦線に復帰できるかも危うい……と、なる訳だな」

「素晴らしい、計算が出来る方は話が早くて助かります。

その冷静かつ明晰な頭脳でもって、どうか正しいご判断を」

「……………」

戦場独特の金属音と飛び交う怒号の中、無言で立ち尽くす荊軻。

そんな彼女の様子に、声の主は最後の葛藤をしているのだと思って、急かそうとはせずに答えを待ったのだけれど。

彼が計算の末に導き出した答えを他所に、荊軻は決断という名の諦めではなく、唇の両端を吊り上げる侠客の笑みで返した。

「一方的に答えを強いるのは公平ではあるまい、こちらからもひとつ問わせてもらう。

どこぞの時代、どこぞの国で生き、そして死んだ武人の王よ……貴様を信じる家臣達や、貴様自身の誇りにかけて考えてみてくれ。

自分達の国が滅ぼされようとしている瀬戸際で、命に代えてでもという覚悟を

以って臨んだ戦いの中で……『将の首を差し出せば、ここにいる者達だけは見逃してやってもいい』などとのたまわれたら。

貴様は一体、どんな言葉を返すと思う？」

「……………」

「それはもちろん」

「『来たりて取れ』と」

敵軍の何処から、可視化すら出来そうなほどの闘志が湧き起こり、荊軻は瞬間的にその出処を探ろうとしたのだが……残念ながら、それは上手くいかなかった。実戦用の筋肉で鍛え上げられた体に、より一層の闘志を漲らせたのは相手方の戦士達全員がそうで、纏めて膨れ上がった膨大な気配の中で瞬く間に紛れてしまったから。

「……聡明な方よ。

あなたさえ宜しければ、先程の発言はどうかお忘れください。
我らはどうやら、知らぬ間に腑抜けてしまっていたようです。

守るものどころか、大義すらも無い戦いが不本意なのは仕方がない……ならばせめて、我らの誇りを貫きましょう。

感謝を込めて全力を尽くします、御覚悟を」

並の者ならば、そのまま物理的に押し潰されかねないような闘志を一身に浴びせかけられながら、楽しい酒の席にいるかのように笑う荊軻……しかしその本心は、背筋を冷や汗で濡らしながらの『やっべーやっちまった』であった。

しかし彼女は、まずい方向に舵を切ってしまったことを焦りはしても、込み上げる衝動のままに言いたいことを言ってやったこと自体に関しては、少しも後悔してはいなかった。

例え、それによって死への道を進んだとしても、自分自身の心のままに……最後の瞬間まで、かんらんかんらと笑いながら。

それこそが、彼女が愛し尊んだ、『侠客』の生き様というものだったから。

（だとしても、このまま黙って殺されてやるつもりは欠片も無いがな）

毒を焼き付けた必殺の短刀を抜き、身を屈めていつでも飛び出せる体勢を取った
荊軻の蛇のような眼差しが、集団を個として纏める頭脳の持ち主を探して辺りを睨
めつける。

荊軻のような暗殺者が不意に現れるのを警戒しているのか、王でありまとめ役で
ある自身もあくまで集団の一部と考えているのか、突出した気配や存在が現れる様
子は窺えない。

少なからず動揺を与えた、先程のあの瞬間が絶好の好機だったのだということを
改めて認識し、それを生かすことが出来なかった自身を内心で責めたが、もはや過
去のことと一瞬で割り切った。

（標的まであと十歩……どこか何処にいるかすら分からず、あの時の護衛どもと
は実力も忠誠心も比較にならんような戦士達によって、既にこちらは王を狙う刺客
であると認識されている。

……最悪だな、突破口が欠片も見いだせん）

改めて羅列するごとに、現状が極めて絶望的であることを改めて認識し、内心では言え思わず弱音が零れてしまう……のだけれど。

（だとしても、やるしかないか。

指揮を崩せば、呂布の攻撃が再び通じるようになるかもしれない。

均衡状態を少しでも長く保つことが出来れば、王都へと走らせた者達の救援要請が間に合うことだって、まだ十分に考えられる。

可能性を繋げるために、我が身を賭す価値はある……無謀な大物狙いは私の本領だ、成し遂げてみせるとも）

荊軻は、変わらず笑っていた。

後進のため、自身の信念のために全てを賭して戦えることが本望であると言わんばかりの、心からの笑顔で。

そしてそれは、彼女と相對する戦士達にとっても、国を、家族を、誇りを守るた

め、仲間達と共に笑いながら死地へと向かった、かつての自分達を彷彿とさせるものだった。

鉄壁の守りの隙間を抜くための機を窺う荊軻と、彼女がどんな動きをしても確実に対応すべく陣を詰める戦士達。

攻めと守りという違いはあれど、互いに相手の次の動きを見極めようとしていることから、下手に行動に出ることが出来ない膠着状態が展開される。

このまま我慢比べになるのかと脳裏に過ぎった予想は、頭上から突如降ってきた謎の気配によって覆された。

「なっ…!？」

人が空へと領域を広げたのは、薄れゆく神秘と反比例しながら科学が発展していったごく近代に至ってからのこと。

それよりも遙か過去の時代に生き、人を乗せて飛ぶような幻想種との縁がある訳でも無かった両者にとって、その奇襲は完全に想定外の出来事だった。

一同が反射的に見上げた視界に映ったのは、眩い太陽と重なり、逆光によって浮かび上がった、翼を広げた巨大な鳥の影。

由緒正しき紋章のようにも見えた、立派なその影の背に跨った小柄な人影の存在と、彼の手が弓を引き絞っていることにいち早く気付いた者が、自身の盾を頭上高く掲げて声を上げた。

『テルモジュライ・エノモタイア炎門の守護者』アアアっ……！』

たった三百人の精鋭で、敵軍二十万人の猛攻を三日に渡り耐え抜いた護国の伝説を象徴する盾に、放たれた鏃が着弾する。

瞬間的に沸き起こった爆炎と爆風は、自ら飛び込んできた『彼』を中心にした周囲を瞬く間に呑み込んだのだけけれど。

土煙が収まった後に現れたのは、あの爆発の破壊力を一手に食らい、無駄なく鍛え上げられた肉体の所々を焦がしながらも仲間への被害は少しも出さずに、強靱な盾として揺らぐことなく立ち続けた王の雄姿だった。

「……お見事」

思わず追撃を忘れてしまった少年が、愛鳥の背の上でポツリと呟いた称賛の言葉は、残念ながら当の本人には届かなかった。

遠くて届かなかったというだけの単純で仕方のない理由だけれど、仮にきちんと届く程度の近さで発せられていたとしても、彼がそれを認識することが出来たかどうかは分からない。

想定外の奇襲を受けて、守りの陣形がほんの僅か綻んだ瞬間を決して見逃さず……獲物を狙う豹の如く駆けてきた刺客の刃が、もうすぐそこにまで迫っていたから。

「ここより己の死は恐れず、生も求めず」

『ただ、あやめるのみ
不還ヒ首』

反射的に突き出した槍の穂先は、荊軻の脇腹を深く抉り……しかしそれでも、彼女の足は止まらなかった。

より一層の力を込めた、最後の一步で跳んだ勢いのままに繰り出した刃が、筋肉の鎧を貫いて肉にまで至る。

戦士でなければ生きられない国で、王として戦士達を束ねた身である彼が認めざるを得ないほどに、素晴らしい一刀であった。

よくよく見てみれば、彼女の体は自身の槍によるものだけでなく、浅いものや深いものを含めた幾つもの傷口によって血だらけで。

王の元に至らせまいと、陣が崩れたとしても立ちはだかった戦士達の間を傷つくことも厭わない覚悟で駆け抜けてきたさまが、まざまざと見えてくるような気がした。

「……お見事です。

我らを奮い立たせてくれた方に対して、情けないさまを晒してしまいましたね」「如何に守るかを考えていたお前達ではなく、如何に攻めるかを考えていた私の方に、偶然がより味方したというだけの話だ。

お前は素晴らしい王だったよ、その命を取れたことを心から誇らしく思う程に」「ふふっ、やはり暗殺者とは恐ろしい。

……私を殺した者の名が知りたい、教えて頂いても？」

「荊軻だ、冥途の土産にしてくれ。

それで、そう言うお前は？」

「……スパルタの、レオニダスと申します」

「良い戦いだったよレオニダス、次に会った時は月でも肴にして一杯やろう。もちろん、お前の仲間達も一緒にな」

「……………それは、なんとも、たのしそうですね」

自身の短刀が貫いたままの体が、金の粒子と化してゆっくりと消えていく。

それに追従するように、周囲に満ちていた人の気配も少しずつ減っていき…………レ

オニダスの完全な消滅を見届けた荊軻が顔を上げた時には、鍛え抜かれた肉体に槍と盾を備えた古代の戦士達は、既に一人残らず消え去っていた。

後に残っていたのは、全身至る所を串刺しにされて血まみれになりながらも、流石のタフさで戦い抜いてみせた呂布と、今の今まで戦っていた軍勢がいきなり消えてしまったことに狼狽えているローマ兵士達。

思ったよりも被害を抑えられたことにホッと笑みが浮かび、ふと思い立って見上げた視界に、王都がある方向へと向けて飛んでいく巨大な鳥と、その背に乗る小柄な人影を見た。

「私達が遠征に出ている間に、帝国陣営に加わった者か……誰かは知らぬが、いいタイミングで来てくれて助かった。

すぐに次の遠征が始まることになるだろうが、余裕がある時を見計らって何杯か奢ってやろう」

酒が飲めない奴だったらどうするんだとか、それお前が飲みたいだけだろうだと

か。

他の者が聞けば突っ込まれそうなことを考えながら、呆然と立ち尽くす兵士達に再び行軍の準備を取らせるべく声を上げる荊軻。

決して浅くはない痛手と消耗のせいではなかなか動き出せずにいた彼女達のもとに、王都からやってきた救援部隊が、遠目ながらも見覚えのある少年に先導されながら現れるのは、もう少しだけ後のこと。

「……なるほど、君はマスターなのか。

先だって援護してくれたのは君のサーヴァントだろう、おかげで助かったよ。私は荊軻でこっちは呂布という、後でまとめて礼をさせてくれ」

「りよ……呂布ってまさか、あの三国志の!!」

《ふふっ、彼くらい有名な英雄なら立香君も流石に知ってるんだね》

「■■■■っ!!」

「赤兎馬良い馬をやるって言われたからってあっさりと寝返った相手を、ハニートラップに引っかけたこれまたあっさりと殺しちゃったっていうあの呂布!!」

《何でそんな微妙なエピソードをピンポイントで覚えてるのさ!?!》

「い、印象的だったから……」

「……………」

「はっはっは、そう落ち込むな。」

偉業と共にやらかしまでもが後世に伝わってしまうのは名を遺した者の宿命というものだろう、私は全く気にしておらんぞ」

→ 周りにいる人が、見えていないどころか認識すらしていないのではと思わせるほどの酒乱っぷりが、『傍若無人』の元ネタとして後世に遺ってしまった人。

不死者の軍勢

「立香、マシユ、ネロ陛下!!」

俺が何とか道を開く、その隙に突破するんだ!!」

「なっ……馬鹿なことを言うな、いくら何でもあれを前に一人で置いていくなどと!!」

「迷っている暇はない、俺に構ってないで早く!!」

ブーディカさんを、今度こそ助けるんでしょう!？」

ネロが黙らされたのは、リンクが発した言葉に込められていた、満載の死亡フラ

グをも吹っ飛ばすほどの自信と勢いだけが理由ではなかった。

ローマを取り戻すための最後の侵攻の真っ只中という、公の務めと責任に私を捨てて全てを費やさなければならぬ筈の状況で、構うことなく真っ直ぐにぶつけられたそれは……ただのネロという個人としての、紛れもない本心だったから。

武装した戦象の背に跨る、巨大な騎獣の認識を狂わせそうになる程の巨漢の戦士と、彼を取り巻く無数の兵団。

圧倒的な数の差を前に一人堂々と立ち向かう少年の、小柄な筈なのにやけに大きく見える後ろ姿に、ネロは言葉を詰まらせた。

残された全勢力を集結させ、最終決戦のために連合の首都へと向けて順調な行軍を続けていた筈のローマ帝国軍の足並みが崩れたのは、本当に突然のことだった。当初こそ、首都への侵攻を阻もうとする連合軍や、敵対サーヴァントの襲撃を想定した警戒が絶えず行なわれていたのだけれど。

実際にやってくるのは、大軍勢の勢いを削れるとは到底思えないような、ごく少数の部隊による嫌がらせにもならないような奇襲ばかり。

これまでに行なわれてきた戦闘が実はかなりの効果が発揮されていて、連合側に

はまともな戦力はもはや残っていないのではというような考察が真剣に行われてしまふような状況で、兵士達の警戒心は段々と緩んでいった。

必要のない状況でむやみに警戒を続けるというのは余計な消耗が嵩むもの、適度に気を抜いて心身を回復させるのは非常に重要となる……しかしそれは、決して油断していいということではない。

そのことをきちんと熟知して、変わらず警戒を続けていた者達も少なからずいたのだけれど、それ以外の大多数が気を緩めてしまっていては、全体としては隙だらけとなってしまふ。

そうやって、長い時間をかけてゆっくりと築き上げられた下地の上で、名将の采配が満を持して振られた。

ここぞという瞬間のために温存されていた軍勢による多方面からの攻撃、それも類まれな名将の指揮を窺わせるような一糸乱れぬ連携によって微妙かつ絶妙な時間差をつけながら行われたそれは、気の緩みを衝かれたこともあって帝国軍を瞬く間に混乱に陥れた。

布陣を崩すための楔が最初に打たれたのは、呂布とスパルタクスのバーサーカー

組が配置されていた後方部。

狂化の悪影響で、状況を冷静かつ的確に見極める判断力というものが丸つきり欠如している彼らには、目の前の敵をただひたすらに殲滅することしか出来ない。

襲撃してきた連合の兵士達を敵と認識して、戦闘モードのスイッチが入ってしまったバーサーカー達は、ちよつとつittedただけですぐさま撤退していった彼らの後を追って陣形を崩壊させてしまった。

万全だった筈の布陣に開いた、ほんの僅かな隙間……そこを狙って飛び込んできたのは、立派な馬に跨りながら戦場の混沌を駆けるさまが不自然にも思えてしまうような、艶やかな赤毛を靡かせる紅顔の美少年だった。

「さすがは我が軍師、いくら人手不足だからってこの役目を僕にさせるとは!!」

心底愉快そうに笑いながら愛馬の手綱を繰り、逃げ惑う帝国軍を蹴散らしていた彼は、スパルタクスの制御役として彼が開けてしまった穴を埋めるべく駆けつけたブーディカに気付いた途端、その笑みを一層眩いものとして。

あまりにも想定外だった、敵サーヴァントとの突然の遭遇に目を剥いた彼女が気持ち切り替えて戦闘態勢を取るよりも先に、愛馬の蹄を容赦なくその身へと叩き込んだ。

「ブーディカ様!!」

「全軍撤退、目的は果たされた!!」

「まっ、待て!!」

力が抜けてしまったブーディカの体を愛馬の背に引き上げながら、今来たばかりの方向へと向けて手綱を動かした少年は、その小柄な体からは考えられないような威勢に溢れた声を戦場に響かせ、連合の兵士達はそれを合図にそれまでの激戦が嘘だったかのようにあっさりと背を見せて逃げていく。

あまりにも突然かつ連続すぎる状況の移り変わりについていけず、頭の中が真っ白になって立ち尽くしてしまっていた兵士達に喝を入れながら、ネロはブーディカを攫った少年の追走及び、スパルタクスと呂布の搜索と回収を指示した。

突然の奇襲から開かれた戦線や、バーサーカー組の離脱という非常事態に必死で対応しながら、ネロは十分に冷静かつ的確な判断と行動を取ることが出来たと言えるだろう。

事態を一変させる程の想定外は、そんな彼女の思考と理解が及ぶ範囲をあっさりと飛び越える形で現れた。

ロマニの驚愕のあまりに引っくり返った声が、間近に染まった異変の存在を一同に知らせる。

《新たなサーヴァント反応を確認、しかもこれは……新規の召喚、馬鹿なこのタイミングで!!!?》

だだっ広い荒野の真っ只中で、渦巻く魔力が眩い程の光を帯び、その中心に新たな形を成していく。

光と土煙が収まり、そこに現れた巨大な人影を認識したその瞬間、赤毛の少年の口の端から吐息が零れる。

沢山の喜びと、それに負けないくらいに沢山の遺憾の想いが、そこには込められていた。

「やはり来たか、我が未来の好敵手。

優れた個人ではなく、大勢の兵士が入り乱れる戦場で、更にはこの僕がいて……この状況で連鎖召喚が行なわれるとしたら、君以外の誰が現れると言うのだろう。……だれだごめんね、もう決めているんだ。

君との再戦はまた今度、今は他にもっとやりたいことがある」

「ウオオオオオオオッ!!!!!!」

「また会おうダレイオス、出来るだけ長く足止めを頼むよ!!」

「イスカンドルウウウッ!!!!!!」

振り下ろされた巨大な斧が巧みな手綱捌きによって避けられ、地に深々と埋まるような勢いで減り込む。

一瞥もくれることなく小さくなっていく、自身が知る宿敵のそれとは似ても似つ

かないほどに小柄な後ろ姿へと向けて、怒りとも憎しみともつかない狂戦士の咆哮が轟いた。

それは彼の満たされなかった闘志と欲求を辺り構わず解放させる鍵となり、彼の騎獣と思われる武装した戦象と、無数の屍兵を顕現させ……追走を阻む障害となつて、ネロ達の前に立ちはだかったのであった。

指揮官として名を残していたり、個人ではなく集団としての逸話を持つ者の中には、生前の部下や仲間を宝具として呼び出すことが出来るという話を、一同は既に知っていた。

そうして呼び出された者達はサーヴァントの力の一端であり、ただの人間の兵士では、到底立ち向かえるような相手ではないという事実と共に。

黒い肌を刺青で彩った大男……ペルシャの王ダレイオス三世が自身の軍団を展開させた時点で、ブルーディカと彼女を攫った少年の追走に軍を伴うという選択肢はネロの中から消え失せた。

かつてローマを苦しめたブルーディカの実力は疑いようのないもので、戦場の指揮官としても平時のまとめ役としても、この上ない程の貢献を重ねてくれたのだけ

ど。

將の一人を救うために、まず勝ち目のない無謀な戦いに軍を投じるべきかと言われれば、最も重要な決戦を控えた現状で選ぶことが出来るのは『否』の一択のみ。ブーディカのことは残念だけど諦めて、早急に兵士達をこの場から退避させ、進軍再開のために編成を整えるのが、皇帝としての正しい判断だと分かっている……分かっているのだけだ。

「ブーディカ、余は……余は………」

ネロが彼女を助けたいと思ったのは、『勝利の女王』と讃えられた実力の持ち主を惜しんだからだけではない。

夫を失ったブーディカと娘達の王位継承を認めず、彼女達に反乱を決意させてしまったことを、ネロは心から悔いている。

『自分は知らなかった』『派遣した者の勝手な独断だった』などというのは言い訳に過ぎないと思っている、全ての責任は任命する者を間違えた上に対応が遅れてし

まった皇帝にあると。

だからと言って、公にそれを認めて謝ることは出来ない。

ネロという個人がいかにも悔いていようと、ローマの皇帝として判断するならば、反乱を鎮めて国力を一層増やすことが出来たのは紛れもない成果、成功だったから。ブーディカと彼女の民達への謝罪も、潰されそうな罪悪感も一人で押し殺しながら、何食わぬ顔で皇帝として在り続けるしかなかったネロだったのだけれど。

思いがけない転機が、国の危機と共にやってきた。

何と、戦死したとばかり思っていたブーディカが、ローマという国ではなく多くの民のためだという面目で、怒りと憎しみを押し殺して駆けつけてくれたのだ。

どれ程の葛藤と苦悩があったことか……それを考えると目頭が熱くなり、手を取りながらありったけの感謝を伝えたくなったのだけれど、既のところでは押し殺した。憎いローマ皇帝からそのような振る舞いをされたって嬉しくないだろうし、せっかく堪えてくれている激情を逆撫でするだけだと思ったから。

彼女が何食わぬ顔で押し通すと言うのなら自分もそれに応えよう、自身とローマの正しさを疑わない無邪気で悪辣な皇帝であることを貫こう。

そして今度こそ、ブーディカの努力と献身に精一杯報いようと誓ったのに。

（余はまた、そなたを裏切らなければならぬのか？）

そうして、堪らず握り締めていた拳に更なる力が籠もり、血が滲んだのではない
かと思わせる程の痛みが走った……その時だった。

「立香、マシユ、ネロ陛下!!」

俺が何とか道を開く、その隙に突破するんだ!!」

不死者の軍勢を前にしても怯むことなく歩み出た少年の、力強い声が響いたのは。

「迷っている暇はない、俺に構ってないで早く!!」

ブーディカさんを、今度こそ助けるんでしょう!？」

リンクが何気なく、本当に何の裏もなく思ったままに勢いで口にした内容に、ネロは思わず息を呑んだ。

ブーディカに報いたいと思っていた本心など、口にしたところか匂わせた覚えすら無かったのに。

立香とマッシュも、ネロと同じように驚いて口を開けていたのだけれど、彼らの復活はネロよりも早かった。

「行きましょうネロさん!!」

敵軍を倒すのではなく、ブーディカさんを助けて戻ってくるだけなら、兵士の皆さんがいなくても……私達だけでもたぶん大丈夫です!!」

「道を開けてくれリンク、中央突破だ!!」

「了解!!」

「なっ、ちよっ……待て、待ってくれ、余は」

「おい、その馬鹿皇帝」

「なっ、荊軻……皇帝たる余を馬鹿とは何だ馬鹿とは!?!」

「馬鹿を馬鹿と言って何が悪い。

私は性分として、王らしい奴を見るとひとつ殺してやりたくなるのだが……悪いが今のお前には、これっぽっちも食指が動かん」

「……………」

「我がままで自分勝手、唯我独尊で猪突猛進、それが王というものじゃないのか？
……ああもう、自分で想像しただけで殺意がこみ上げてきた。

とにかく、明確なやりたいことがあって、周りもそれを助けると公言している状況で、何を躊躇うことがある。

さっさとして行ってこい、兵達とバーサーカーどもに関しては私が任されてやるから。
お前達が戻り次第、すぐに進軍を再開出来る程度にはしておこう」

「……すまぬな荊軻、ありがとう」

「ふふっ、この私が王に礼を言われるようなことになるとは」

皮肉そうに、それでも心底愉快そうに笑った荊軻に笑みを返したネロは、大きく息を吸った次の瞬間、荊軻が瞬間的に殺意を堪える羽目になった程の堂々とした振

る舞いと共に声を張り上げた。

「聞け、我がローマの精鋭達!!

余はこれより、少数精鋭によるブーディカ將軍の救出に赴く!!

そなたらは荊軻將軍の命に従いながら待機、余らが戻るまで傷と体力の回復に努めよ!!」

力強く返ってきた返事に満足そうに頷き、大きく息を吐きながら振り返った先でも、頼もしい顔ぶれがネロを待っていていた。

「……よし。

リンク、マシユ、行くぞ!!」

「はい、センパイ!!

お願いしますリンクさん、その後は私が!!」

「ああ任せた、一気に走れ!!」

好敵手に再戦の機会をふいにされ、パーサーカーであることも加わって一切の制御を加えられないまま爆発したダレイオス三世の激情が、不死者の軍団の波となっていた。またま近くに居ただけの者達へと襲いかかった。

その先頭集団が盛大に宙を舞い、それによって生まれた隙間に暴走列車のような勢いで突っ込んだ盾がそのまま、不死者の群れを押しつけながら爆走する。

ただひたすらに走り抜けることに集中していた、無防備な背中を狙おうとした思惑は、その悉くが、突破口を開くことから背後の守りに役割を変えたリンクによって防がれ。

四方八方の視界を埋める不死者の群れと、彼らの王の地獄の空気が唸る音のような咆哮に疎みながらも、決して止まらず走り続けた一同はついに、軍勢の中央突破に成功した。

「振り返るな、そのまま行け!!

俺はここでこいつらの相手をする、ブーディカさんを任せた!!」

「っ……ああ、頼んだ。

リンク、後でな!!」

「リンクさん、ご武運を!!」

彼自身もまた振り返ることなく、無言で上げた片手のみで激励に応える。

そんな一連の光景を、戦況を余すことなく見渡すことが出来る絶好の地点から、最初から最後まで見届けていた者がいた。

服装は、古代ローマに合わない現代風のスーツ……長く伸びた黒髪が風になびき、煙草を啜っていた口から息と共に細い煙が吐き出される。

「……ここまでは順調。

見ている、今度こそ……私は必ず、お前の願いを叶えてみせる」

他の誰に聞こえるでもなかった呟きは、他でもない男自身の胸に、深く深く突き刺さっていた。



VS
ダレイオス三世

ダレイオス三世の宝具、『不死の一万騎兵』。

アタナトイ・テン・サウザント

生者に対して無条件の恐怖を叩きつける骸骨や動く死体、それも圧倒的な数の暴力と来れば、個の戦いを挑もうなどという考えはイコールで死と繋がるのが普通。立香達も、それを為そうとしたのがリンク以外の誰かだったら、絶対に許さないか、もしくは永遠の別れを覚悟しただろうし。

荊軻に率いられたローマ兵士達が大人しく退避していったのも、リンク達はあるまでブーディカを追うために敵陣を突破するだけで、本気で戦おうとしているなどとは考えていなかったからだろう。

仲間を見捨てられないという善意ゆえにだとしても、余計な茶々を入れられないように。

勇者リンクだとは気づいていなくても、サーヴァントとして相当の実力者だということも察していたリンクが存分に真価を発揮して戦えるようにと、早々に離れてくれた荊軻の判断がありがたかった。

そもその話として、リンクにとって『数の差』というものは周りが想像するほどの脅威ではない。

彼らの戦いは、どの時代においても常に孤独なものだった。

新たな場所に進むのを手助けしてくれる協力者や、心身を休めるべく一時的に帰ってきた彼を快く迎えてくれる理解者はいたとしても、実際の戦場で、同等の力を持つ誰かと背中を預け合い、補い合いながら戦うという事態はまず無かった。自身を取り巻く世界の全てが敵となつて襲いかかってくるような状況で、暗闇の中を手で探るような冒険は毎度のことだったし。

玉座を乗っ取った魔王の信奉者によって国の反逆者と貶められ、手配書や善良な市民の目を逃れながら独り立ち回ったことだってある。

それら全てを乗り越えてきた事実と自信が芯となる、一万の兵が何だと言うのか。

「俺以外の全員をぶっ飛ばしてやればいい……ああそうだ、単純で分かりやすいことだろう」

頭の中のスイッチが切り替わる、意識と感覚が抜き身の刃のごとく研ぎ澄まされていく。

サーヴァントという不安定な存在として括られ、力の出力に大幅な制限を加えられた現状をいかに打破し、立ち回るか。

その具体案を試してみるのに、思いがけず訪れた絶好の機会だった。

手の甲の聖三角が光を放ち、確かな指向性を与えられた膨大な魔力が宿主の全身を包み込む。

厳しい戦闘と旅路を想定した実用性重視の服は、獣の骨や毛皮を用いて造られた野性味溢れる装束と、地肌を彩る紋様に。

日差しや寒暖から頭と顔を守ると同時に、彼の場合は余計な面倒事を避ける意味

合いも大きかったフード付きのマントは、異様な獣の頭蓋骨を丸ごと使用した、原始的な存在感を醸し出す兜に。

呂布やスパルタクスとは違って自身の軍を伴う形で現界していたためか、バーサーカーながらある程度の状況判断力が残っていたダレイオス三世の脳裏で、本来の警戒心が最大レベルの警鐘を鳴らした。

獣のような雄叫びによって、近くにいるものに衝動的に襲いかかるだけの無秩序な集団だった屍兵達が、個ではなく組織としての生前の連携を取り戻していく。

一万の軍勢を率いる王が、たった一人の少年に対して、生涯の好敵手に対するものと同等の危機感を抱く……彼に完全な正気があったら、『そんな馬鹿な』と瞬時に思い直されていたであろう異常事態に、ダレイオス三世は全力で相対した。

それは、理性と本能が絶妙な割合で噛み合った結果導き出された、奇跡的な正解だったのだけだ。

いつものリンクなら思わず零していたであろう、そのことに対する驚きや称賛を意味する具体的な言葉が、ダレイオス三世と彼の軍勢に対して向けられることは無かった。

「アアアアアアアアッ！！！」

獣の装束を纏い、涼やかな碧だった筈の瞳を滾る闘志でぎらつかせた彼の喉から、殲滅の宣言であるかのような咆哮が迸った。

次の瞬間、立香達と共に突破した時は比べ物にならないほど強固なものとなったダレイオス三世の軍勢が、ただ一人の少年へと向けて波となつて襲いかかり……その第一陣が、一瞬で視界から消え去る。

無骨な鎖に括られた巨大な鉄球で、最前列を一息に薙ぎ払ったリンクは、陣形の一部にぽっかりと開いた穴を目がけて飛び込んだ。

ただでさえ圧倒的な数の差がある上に、向こうは見かけの優勢に慢心することなく、十分すぎるほどの警戒心を抱きながら相對している。

いくら個の実力に自信があるとはいえ、そんな状況で真正面から飛び込んでいくなんて。

戦場の真っ只中に在っても、激昂に突き動かされた時でさえも、冷静さの土台を

保ち続けてきた彼を知る者が見れば目を疑うであろう、後先など何も考えていない力任せの暴挙。

理性と戦闘力を引き換えにしたような、何かと既視感を覚えるそのさまは、管制室の観測結果が合わさればより一層皆を驚かせていたことだろう。

現状では唯一、リンクでしかその存在を確認出来ない『ブレイヴ』の霊基パターンが、基本の7クラスのひとつであり、この特異点においても何度か確認されてきた『バーサーカー』のものへと変わっていたのだから。

『勇者リンク』としての様々な能力やアイテム、他の英霊ならひとつのクラスに括られた時点で諦めなければならないものを全て使えるけれど、それらの真価と言えるものを発揮することは出来ないというある意味での器用貧乏さが、検証を経て明

らかになったエクストラクラス『ブレイヴ』の特徴。

ならば仕方ないと諦めず、更に一步踏み込んだ先で、リンクは『ブレイヴ』の真価と言えるものを掴んでみせた。

他の英霊達と違って紛れもない『本人』である上に、歴代を含めた『勇者リンク』という存在と可能性の全てを内包している彼は、ある意味で動く英霊の座そのものと言ってもいい存在と化している。

座に在る本体から限られた側面や逸話の一部のみを抽出して特化させ、ひとつのクラスに収めさせるという通常のサーヴァント召喚における一連の流れに似たものを、概念の世界ではなくこの地上で、抑止力による干渉ではなく自らが意図するものとしてやり遂げた。

ロマニやメディア達が知ればまたしても発狂するであろう未来を、今のリンクは色々な意味で知る由もない。

バーサーカーというクラスの特徴に則り、『目の前の敵を殲滅する』というただひとつの目的以外の理性と思考力を、本来の戦闘力を発揮するための容量に置き換えていたから。

更に言えば、彼は同じバーサーカーでも技術と引き換えに地力を底上げた呂布やスパルタクスではなく、磨き上げた技術を本能に委ねることで更なる脅威に押し上げたランスロットにその有り様が近く、リンク自身もそれを予想していた。

勇者リンクの強さの根幹は、その時代の勇者として生まれ持った身体能力や才能ではなく、代々の彼らが自分達の意味で以って積み重ねた膨大な実践経験と試行錯誤だと。

自分達にとっての戦いの本能とは、相手の特徴やその場の状況を把握し、最善もしくは最適の手段を瞬時に導き出して実行に移すという基本を、どこまでも突き詰めることにあると自負していたから。

伝説の勇者が世界を救うための戦いの中で積み重ねてきた、あらゆる敵や状況に十分な応用を効かせられるほどの膨大な戦闘経験を基にした縦横無尽の戦法を、何かを間違えれば自分だけでなく大切な人達の命や世界そのものが終わるという、これ以上ない崖っぷちの状況で磨かれてきた闘争と生存の本能で振るう。

現状で叶うだけの厳戒な戦闘態勢を取っていたダレイオス三世は、それでもまだ足りないくらいの存在が相手であることなど知る由も無いまま、かつて無い程の脅

威と真正面からぶつかり合った。

ペルシアが誇る最強の部隊、レオニダスが率いたスパルタとも戦った『不死隊』^{アタナトイ}の名は本来ならば、ゾンビや吸血鬼といった『既に死んでいるためもう死なない』ということの意味する『不死者』ではなく、『戦いの中で欠員が出ても、次から次へと補充されるために攻勢が止まず、敵からすれば不死の軍団のように見えるから』という逸話を由来としている。

ダレイオス三世の宝具は、不死隊の実際の有り様に後世のイメージから不死者の概念が加わったことで、一万人も屍兵の軍団という形に落ち着いたものなのだろうけど。

サーヴァント、及びその力の一端となり、後付けの概念による強化も加わったこ

とで正真正銘の『不死隊』となった筈の彼らは思いがけず、生前と変わらない戦い方を余儀なくされていた。

轟音と共に落ちた雷とその余波を受け、炭と化してしまった兵士達の残骸を踏み越えながら、後続の部隊が一瞬の間も許すことなく現れる。

それもまた次の瞬間には、爆発によって吹っ飛んでいた。

倒しても倒しても圧倒的な物量で押し寄せ、ついには力尽き呑み込まれてしまう……そんな絶望の象徴である筈の不死隊の攻勢が、二度目の中央突破による最短距離で彼らの王を狙おうとしている勢いを辛うじて留めることしか出来ていなく、敵をこれ以上進ませないための壁の補充にしかなくなっていない

それは彼らが力不足なのではなく、むしろ不死隊だからこそ、ここまで持ち堪えられているのではという印象すら覚えてしまう。

それ程までに凄まじい、全てを理不尽に呑み込む嵐のような猛攻だった。

一見すると均衡状態が保たれているように思えるけれど、それは決していつまでも続くものではない。

このバランスは現状で辛うじて保たれているだけで、少しでも崩れれば吞まれて

しまうのは自分の方であると、タイムリミットはもうあと僅かしか残っていないと、ダレイオス三世は本能で理解していた。

『兵が尽きない不死身の軍勢』という概念で築かれている不死隊自体に切りが無かったとしても、その大本であるダレイオス三世の方には、魔力の消耗という意味での限界がある。

ただでさえ燃費が悪いバーサーカークラスである上に、縁を辿った連鎖召喚によるはぐれサーヴァントとして現界したことで、マスターと契約する機会が無いまま実戦に突入してしまった現状では、最初に持ち得ていた分の魔力しか使えない。

それを使い切ってしまうことと、現世からの退去がイコールであることを、サーヴァントは誰もが存在するための大前提として知っている。

新たなマスターを得て仕切り直すために一旦背を向けて逃げるか、この身が消滅するその時まで出来る限りの足掻きを続けるか。

「オオオオオオオオオッ！！！」

ダレイオス三世が選んだのは後者だった。

自身の軍勢をたった一人で、現在進行形で薙ぎ払い続けているあの少年が、何者なのかは分からないけれど。

みつともない姿を見せたくはないと、胸を張れる戦いぶりを最後まで知らしめた
いと。

胸の奥の熱いところから込み上げる衝動のままに、ダレイオス三世は最前線へと
躍り出た。

それは決して、理性と判断力を失ったバーサーカーの暴挙などではない。

残り少ない魔力を、兵士達を展開するためではなく自らが打って出るために用いた
方がまだ可能性がある、将としての正しい判断を下したから。

自身と本気で、最後まで相対するために狂化を乗り越えたその気概に、リンクは
真正面から受け止めることで応えた。

リンクと比べて、軽く数倍はありそうなダレイオス三世の巨体に見劣りしない二
本の大斧と、刀身だけで持ち主の背丈ほどの大きさがある巨大な両手剣の刃がぶつ
かり合った……その瞬間。

『かえらずのじん
石兵八陣』

「これぞ大軍師の究極陣地」

八本の石柱によって取り囲まれ、不思議な文様が刻まれた蓋を落とされたことによつて完全に閉じ込められた幻影と実感が、ダレイオス三世とリンクを襲う。

今の今まで、無数の屍兵達がひしめく異形の戦場と化していた荒野は、それまでの全てが夢であったかのように、いつも通りの静けさをあっさりと取り戻し……代わりに現れた、数多の巨石によつて築かれた迷宮のような陣が、何もかも夢などではないという事実を証明していた。

黒いスーツに長い黒髪を靡かせる男の口から、フウと吐き出された煙草の口が、音も無くゆっくりと立ち上る。

それはまるで、困難な仕事を無事にやり遂げた後の、安堵のため息のようだった。

VS
諸葛孔明(?)

『石兵八陣』……無数の巨石を配置することで築き上げられたそれは、地理把握・地形利用・情報処理・天候予測・人心掌握の五重操作から成る、『戦わずして勝つ』というひとつの理想を成し遂げた軍略の奥義。

伝説によると、敗走する劉備軍がこの陣に逃げ込むのを許してしまった陸遜軍は、『踏み入る者を決して逃がさない』と言わんばかりの異様な殺気を前に尻込みし、それ以上の追走を諦めて撤退したという。

類まれな知略で以って人類史に名を刻み、サーヴァントとしてこの地に降り立つこととなったその人の名は、三国志演義の天才軍師こと諸葛孔明……の、名と力

と存在を思いがけず負うことになった、とある一人のイギリス人。

通常ならばその宝具は、敵の能力を下けると同時にその行動を阻害させる結果や、仲間を護り外敵の接近を拒むための移動式魔術工房として簡易的に使用するのが、魔力の消費量や展開完了までの速さなど様々なものを考慮した上での最適解なのだけだ。

それを彼は、今回に関しては敢えて、必要なだけの魔力と準備時間を費やしなから、概念ではなく実際の陣そのものを顕現させていた。

「……偉大なるペルシアの王よ、申し訳ない。

だが赦せとは言わぬ、これは必要なことだった。

何しろ相手はあの勇者だからな……強敵との戦いに気を取られている瞬間でも狙わなければ、こうも上手く捕らえられた自信ははつきり言って無い。

……しかし、ここまで来れば流石にもう大丈夫だろう。

あとはこの陣を維持し、捕らえ続けることに専念す、れ……ば……」

火をつけたばかりの煙草が、男の口元からぼろりと零れ落ちる。

まだ殆ど吸っていなかったそれを勿体ないと思うどころか、落としてしまったこと自体にすら、彼は気付けていなかった。

陣の内部は、彼にとっての魔術工房や固有結界のようなもの。

ほんの僅かな沈黙の後に始まった怒涛の動きの全てを、彼は余さず認識していた。

（サーヴァントの気配がひとつ減った、真っ先にとどめを刺したか……いや、ダレイオス三世の魔力は既に尽きかけていた。

最後にぶつかり合ったあの一撃に全てを注いでいて、閉じ込められた次の瞬間には自然と消滅してしまったと考えるのが自然だろう。

……いやいや、そんなことはどうでもいい。

ダレイオス三世に求めていたのは、宝具が発動するまでの足止めと、展開の瞬間に隙を作らせるまで。

早々に退去することなど最初から織り込み済みだ、済んだことを考えている場合か!!）

混乱のあまりに、起こったことを最初から順番に、余計なことまで考え始めていた思考を舌打ちと共に落ち着かせる。

……と言っても、今の彼に出来ることはあまり無い。

軍師の役割は事前に場を整えること、いざ始まってしまえば後は結果が出るのを見守るのみ。

新たに取り出して啜えた煙草のフィルターを一度も吸うことなく噛み潰しながら、天才軍師のスペックを得た名教師は『次』に繋げるための考察を全力で続けた。

（心理的に惑わす類いの仕掛けは効果が薄いか、流石の精神力……いや違うな、あれは何であろうと突破すればいいと思っただけの脳筋思考だ!!

図太くて大雑把なのかと思えば、森を見つつ木の葉の変化にも気付ける注意深さが無いと分からないような、繊細な仕掛けや抜け道を見逃さないのは何なのだ……。

……なぜそこをそんなやり方で越えられる、迷い込んだ者を確実に仕留めることを想定している区画だぞ!!

○○○○ッ、この、○○○○ッ!!

これだから天才という奴は嫌なんだ、少しは常識というものを尊重せんか!!)

途中から、諸葛孔明ではなくガワの人物としての面が強く現れて、自身の頭の中だけとはいえいつもの授業風景のような汚いスラングを吐きながらのツツコミ地獄を形成していることに、当の本人は気付いていない。

そんな余裕は欠片も無かった……天才軍師の奥義たる陣が、少しずつながらも確実に蝕まれていく一部始終を、今の彼には黙って見ていることしか出来ないのだから。

『彼』はただ単に、脱出するために迷宮を攻略しているだけなのだろうけれど。

『踏み込んだ者を誰一人として逃がさない』という概念によって構成されている宝具にとっては、重要な柱となる部分を揺るがしてくる行為は立派な破壊活動に値する。

陣を構成している巨石ではなく、閉ざされていた空間そのものに走ったひびは、感覚を繋げていた術者にしか認知出来ない音と光景を伴いながら徐々に広がって

いて。

ふと訪れた一瞬の沈黙の後に、向こう側から凄まじい勢いで飛び出てきたものによって、ひびは穿たれた穴となった。

捨て身の勢いで異空間の壁をぶち破り、2、3度地を転がりながら受け身を取った少年が、砕けたガラスが四散するかのように消えていく結界の名残を背にゆっくりと顔を上げる。

またしても煙草を落としてしまったことにも気付けないまま、見開いた目に映るその姿は、並外れた強さを持っているだけの少年を装った旅装束でも、屍兵の軍団とぶつかり合っていた時の獣のような衣装でもなく。

緑の帽子に緑の衣……金色の前髪の間隙からは宝石のような碧が覗き、射抜かばかりの眼差しをこの身へと向けていて。

彼がその人なのだということは、前もってきちんと知っていた筈なのに。

伝説そのままの姿を目の当たりにして、それが紛れもない事実なのだということを知識ではなく実感で叩きつけられた衝撃は大きかったのだけだ。

それは、天才軍師のスペックを得た只人である男を上から叩き潰すのではなく、

竦みかけてしまっていた背を強く押し上げた。

『石兵八陣』!!
かえらずのじん

「…っ!？」

『はっ!』という間抜けな声が聞こえそうな勇者の表情が、どこからか降ってきた石の柱の幻影によって遮られる。

先程まで展開されていたものとは違って、殆ど瞬間的に構築された超簡易版と言っていいようなそれは、伝説の勇者をほんの数秒しか留めることが出来ずに砕け散った。

その結果だけを見れば、取って置きの策を敢え無く破られた軍師が、破れかぶれで最後の足掻きを行なったようにしか思えないかもしれないけれど。

ひとつめが破られてすぐにふたつめの手を考えられないような者が、天才軍師などと称されるわけがなかった。

……だとしても。

「『かえらずのじん石兵八陣』!!」

「なっ」

「『かえらずのじん石兵八陣』!!」

「ちよっ」

「『かえらずのじん石兵八陣』!!」

「待っ」

簡易版ゆえの構築から発動への手軽さを生かし、脱出したと同時に再び閉じ込めるといふ単純なことを、ただひたすらに繰り返す。

策も何も無い、それこそ脳筋戦法もいいところだろうと、傍から見れば突っ込まれそうなやり方だけれど。

彼はそれが最善であると心から思っていたし、現実としてそうだった。

（全力で捕らえ続けろ、出し惜しむな、直接の戦闘に持ち込まれようものならその時点で終わる !!

負けはしないが勝てもしない、現状を無意味に引き延ばすだけで後の無い愚策……

ああその通りだ、それがどうした !!

私はただ、自らが誓った役目を果たすのみ !!）

「『石兵八陣』かえらずのじん !!」

問。濁流によって行く先が遮られている。

答。氷の柱を造り、それを足場にして越える。

「『かえらずのじん石兵八陣』!!」

問。まるで窯の中にいるかのよう。

答。燃焼を防ぐ薬を使用する。

「『かえらずのじん石兵八陣』!!」

問。底無しの泥に足を取られる。

答。高速で走れるようになる靴をはいて一気に駆け抜ける。

必要な魔力や時間をギリギリまで絞りながらでは、本来の宝具が持ち得ているような、ありとあらゆる罠や仕掛けの概念を用意するのは無理だけれど。

陣の構築に役立てるために、天才軍師が前以って頭の中で無数に用意していた発想の中のたったひとつを付与するだけならば、十分に可能だった。

そして、勇者リンクがそれに対して攻略を試み続けるさまはまるで、教卓を挟みながら延々と繰り広げられる教師と生徒の問答のよう。

『この状況に如何にして対処するのか』という問いかけに対して、『こういう手段があるし自分はそれを実行に移せる』という答えで以って返す、武器や肉体ではなく概念によるぶつかり合い。

問。巨大な岩が落ちてくる。

答。岩が落下する時間を止めてその隙に突破する。

問。突然に足元が崩れた。

答。鉤つきの鎖を伸ばして縁に引っかける。

問。瞬く間に凍死するほどの寒さが襲う。

答。防寒性に優れた服を着る。

（何故に、どうやってそんな方法でと、文句を言いたくなるようなところは多々あるのだが……上手くいっている、勇者リンクの足止めに成功している!!

諸葛孔明の力を借りた上でのこととはいえ、他者を教え導くこと以外では、自身之力では大したことを為せて来られなかったこの私が!!

行けるぞ、この調子なら……今度こそ私は、あいつの願いを叶えr）

期待と高揚に息を荒げていた男の喉が突如、込み上げた質量と鉄の味によって塞がった。

反射的に口元を押さえながら、砕けかけた膝を必死に支えた男の前で、あらゆる者を逃がさない筈の結界が何十回目か砕け散る。

何度も何度も閉じ込められ続けた苛立ちが露わになっていた少年の表情が、指の間から滴る血に気付いた途端に別の意味で引きつり……その隙を、天才軍師は見逃さなかった。

『石兵八陣!!』
かえらずのじん

「…っ!!」

「ご心配いただき感謝する、おかげで失態を取り戻せた」

きちんと拭ったのに、また溢れてきた血で再び彩られた口元が不敵な笑みを形作る。

赤毛の王がもし見ていたならば、あの豪快な笑い声と共に心から讃えていたであろう、本当に見事な強がりだった。

（馬鹿か私は、肝心なところで狼狽えおって!!

簡易版とはいえこれだけの頻度で宝具を連発しているんだ、多少跳ね返ってくることくらい最初から想定していただろう!!

何も問題はない、このまま変わらず……なにっ!?)

すぐさま陣を脱出するであろう少年をまた捉えるべく、込み上げる苦しさと胸の

痛みを堪えながら魔力を練り出した男の目が見開く。

結界の中に閉じ込められた気配が、今までとは比べようもない程の強さと勢いで膨れ上がり、次の瞬間には弾け飛んでいた。

「か……『石兵八陣』!!」

あまりの脱出の速さに、術式の構築が簡易的なものでさえも間に合わず、僅かな猶予を許してしまった……あの勇者を相手に。

ほんの一瞬、たった一足で数メートルを詰められてしまった事実と、真っ直ぐな碧い瞳に射抜かれた衝撃が、真上から伸しかかる。

しかし、それで男が崩れ落ちることは無かった。

「『石兵八陣』!!」

「『石兵八陣』!!」

『石兵八陣』…っ!!」

「ぐっ、ゲホッ……『石兵八陣』!!」

痛みや苦しきなど、もはや通り越して麻痺していた。

宝具の展開を継続させるために、普通に使える分の魔力などつくに尽きていく……この地で霊基を保つための分を削ってそちらに回すことに、ほんの一瞬も躊躇わなかった。

もしこの身が元の人間のものだったならば、貧弱な魔術回路の酷使による末端からの体の壊死が、既に相当の進行を見せていたことだろう。

天才軍師のスペックよりも、ギリギリまで出力を保ち続けられるサーヴァントの体の頑丈さの方がありがたかったかもしれないと、妙に冴えた思考の中で思った。

（怯むな、躊躇うな、今の私は違う!!）

何も出来なかった……生かされることを受け入れるしかなかった、あの頃のボクとは違う!!

諦めたくないのなら諦めなくていい、今のボクは戦える!!）

「かえらずのじ……………」

今の今まで、己の命を削ることも厭わずに宝具を使い続けていた男が見せた突然

の硬直を、疑問には思っただけけれど。

それは彼の進行を止めるような雑念とはならず、好機とばかりに地を蹴った足が、宝具による拘束の合間に少しずつながらも確実に詰めていた距離の残りを一気にゼロにした。

体ごと飛びかかれたにも関わらず、地に押し倒された衝撃と、男の動きを妨げるために胸へと乗り上げてきた小柄な体の重みは、消耗しきったその身を労わっているかのように優しいもので。

「あの宝具を使う意味はもう無いぞ、あんた自身も巻き込まれる」

「……まさか、あなたという人は。」

何をあんなにも必死になっていたのかと思えば、私の無茶を止めようと？」

「……………」

「人が好いのだな、さすがは伝説の勇者殿。」

……どうせなら、大人しく結界に囚われ続けていてもらった方がよほど助かったのですが」

「それは無理だ、あんたを止めたいと思ったのは俺個人の勝手な欲求。

カルデアの一員、ネロ陛下率いるローマ帝国に組する者としての最低限のラインは、きちんと守らないといけないからな」

「……………人が好いという認識は撤回する。

お優しい人だということは確かだが、それと同時に酷くシビアナ人でもあるよう
だ」

「……………まあとにかく。

大人しくしていてくれるんなら、俺としてはこれ以上やりあうつもりは」

「お気遣い感謝する、だが不要だ。

私は既に、私の役目を果たし切った」

「えっ？」

男の目は既にだいぶ霞んでいて、殆ど何も見えなくなっていたけれど。

思いがけない発言に対して困惑する勇者の、金色と緑色を越えた先……………大きさは全く違うけれど、ほんの少しも変わっていない赤色だけは、決して見間違えることは

無
か
っ
た。
。

「……どうだ、これが、ボク^の力だ。

ボク^だって………やれば、できるだろう？」

「素晴らしいよ、何もかも僕が望んだとおりだ。
……ありがとう、我が軍師」

靈基を限界にまで削った体はとつくのとうに限界で、大変な苦しみに苛まれていた筈なのに。

深く刻まれていた眉間の皺を緩め、本当に嬉しそうで誇らしそうな、穏やかな表情で黄金の粒子と化していった男……諸葛孔明の疑似サーヴァントとしてこの地に降り立ち、時計塔ではロード・エルメロイ二世とも称される、ウェイバー・ベルベットという一人の男の名残を、リンクは言葉なく最後まで見送った。

そんな彼の背後から、隠す気のない足音を伴いながら、一人分の気配がゆっくりと歩み寄ってくる。

さつき聞こえた声と共に、その気配には覚えと心当たりがあった。

帝国軍に奇襲をしかけ、ブーディカを攫い、立香達によって追走されていった筈の、あの赤毛の少年。

状況を考えれば間違いなく敵対関係にある筈の者の接近に対して、リンクは身構えなかった。

気配の持ち主から、こちらへの害意を感じられなかったし……その気配そのものが、今すぐ消えてしまってもおかしくない程に、酷く弱々しいものだったから。

「初めまして勇者リンク、僕の名前はアレキサンダー。

ずっと君に会いたかった……君と話したいこと、君に伝えたいことがたくさんあったんだ」

心なしか呆然としながら、ゆっくりと振り返ったリンクの目に、自分よりも少し年下くらいの少年の姿が映る。

途端に目を見開き、本気で言葉を失った様子のリンクへと、アレキサンダーは人たらしの魅力を自覚した渾身の表情で笑い返した。

「……以上が、ネロ・クラウディウスの軍の概要だ。

詳細はレポート形式で纏めておいた、後で目を通しておけ」

「さすがの手際だね、後でどこか今この場で読ませてもらうよ。

ふむふむ……やっぱ狙いどころは、呂布とスパルタクスのバーサーカー組か」
「彼奴らは恐ろしい災害ではあるが、それは対処可能なものだ。

生前は個としての戦闘力だけでなく、将としての優れた思考力と判断力をも持ち得ていたのだろうか……狂戦士というクラスの枠に括られた今は、目の前の敵をただひたすらに排除するのみの自動機械でしかない。

策が上手く働けば、誘導することは容易だろう」

「僕は幸運だった、ってことかな。

ならこのまま活かすだけだ、僕はあの子の顔を見たい。

ネロ・クラウディウス、ローマ帝国第五代皇帝。

どういった王なのか……いや、どういう皇帝なのかと言ってあげるべきか」

「その望み、私が叶えよう。

もうひとつの願いと共に、必ず」

「……………」

「手を伸ばすことに何を躊躇っているのだ、お前らしくもない」

「……………」いいのかな。

だってこれは僕どころか、英霊として正しい形で現界を果たした『余』にとっても過ぎた想い……人理焼却なんて非常事態でもなければ、叶える機会すら訪れなかった筈の妄念なのに」

「構うことはあるまい。

発端はともかく、それを叶えたいと思ったこと自体は紛れもなく、お前自身の個人的なものなのだろう？」

「まあね、変に引き摺られたり影響されたりしたものなんかじゃないってのは自信

を持って断言出来るよ。

……ああそっか、下手に遠慮する方が間違ってるんだ。

尊重はすれども縛られはしないって、どんな風に生きていくのかは今の僕が決めるって。

一番最初に、そう誓ったんだった」

「ふっ、調子が戻ってきたようだな。

……だが、まあ、何というか」

「どうしたの？」

「……………逸話としても有名なあの発言は、本気だったし、本当だったんだな」

「当たり前じゃないか、君が知る『余』だって胸を張って豪語していたんじゃないかい？」

「事あるごとに、耳にタコが出来るかと思ったわ!!

当時の私は確かに未熟極まりなかったが、あれを素直に信じろというのは流石に無理があるだろう!!」

「別に構わないさ、生前の家臣達だって途中からほとんど聞き流していたし。

実際に自分がそうでなけりや、そんな、当人が勝手に主張しているだけで今更確
かめようがないようなこと、まともに聞いていた自信は僕にだって無いよ」

「……………お前という奴は」

いずれ霸王へと至る少年の朗らかな笑い声が、皺の寄った眉間を押さえながら俯
いた忠臣の頭痛を助長させながら、澄んだ青空に響き渡っていた。

道半ばの霸王

「……………あっ、いた!!」

「ブーディカさん、大丈夫ですか!?!」

「しっかりしろ、ブーディカ!!」

《……………大丈夫、どうやら眠らされているだけらしい。

もう少しすれば、何の問題も無く目を覚ますだろうね》

「そうですか、良かった」

「……………」

「センパイ?」

《どうしたんだい立香君、何か心配事でも?》

「心配というか、気になるというか……あの赤毛のライダー、アレキサンダーだっけ。」

あいつはどうして、気配遮断の結界を用意してまで、攫ったブルーディカさんを隠したりしたんだろう」

「なぜってそれは、折角の人質を簡単に取り戻されないために……」

「当人が真正面で堂々と待ち構えていた上に、人質の存在を押し出しての交渉や駆け引きなんかは無かったのに?」

《……そうだね、言われてみれば。

つまり彼は、立香君達……いや、ネロ陛下をここまで誘い出すただけに、軍を指揮してまでブルーディカを攫ったのか?》

「それだけなら隠す必要は無い、プラスで何か別の思惑がある気がする。

パツと思いつくのは……やっぱり時間稼ぎかな」

「じ、時間稼ぎ!?!」

「そう考えれば、色々と納得できる気がする」

「そんな、一体何をするつもりで……こうしてはいられません、急いであの人を探さない!!」

《大丈夫だよマシュ、その必要は無い》

「どうしてですか!？」

《ど、どうしてって……ちよつと落ち着いて、実際に彼と戦ったマシュの方が僕よりもずっと分かっていると思うよ。》

さっきの戦いで彼が負った傷は致命的なもので、今この場から逃げられたとしても、そう遠くないうちに消滅してしまうだろうって》

「あっ……」

「……そうだ、そういえば。」

あいつ、最後に一回だけ、ブーディカさんの存在を駆け引きに使ってたな」

『女王ブーディカはこの砦のどこかにいるよ、早く見つけた方がいいんじゃないかい』

「結果的にあいつを見逃すことになったのは、あの怪我なら放っておいても問題ないだろうって考えたのと……不穏なことを言われたせいで、ブーディカさんを急いで探さなきゃって思ったからだ」

《でも実際に見つけ出してみたら、彼女は単に眠らされていただけで……》

「最初から、ブーディカさんの存在を盾に逃げることを予定していた？」

「まさか、そんな……仮にそうだったとしても、それは失敗しています。」

致命傷を負ってしまった身では、逃げられたとしても意味はありません」

「だとしたら今度は、最後のあの表情が分からないんだよな」

人類史上最大の大帝国をいにしえの時代に築き上げ、その名と偉業を人類史に刻んだ征服王……の少年期、果て無き未来への夢と希望に瞳を輝かせていた頃。

最盛期の自分と区別して『アレキサンダー』と名乗っていた彼の、人理焼却という未曾有の危機に当代の皇帝として立ち向かうこととなったネロを見極めようとした時の堂々とした有り様は、いずれ霸王として立つことになる未来を彷彿とさせる立派なものだったのだけれど。

彼が最後に見せたものの意味だけがどうしても掴めなくて、首を傾げながら唸り声を上げ始めた立香の眉間に、思わず深いしわが寄る。

（命に関わる怪我を負うところまで含めて、何もかも予定通り……そんな感じの笑顔に思えた）

納得できる答えを何とか探そうとしていた彼の思考は、ブーディカの無事を確認したことで私から公へと一気に気持ちを切り替えたネロが発した帰還の指示により、途中で打ち切られることとなるのだった。

君の、いや……君達の伝説は僕が生きた時代でも人気があって、単純な楽しみとしても、様々なことを学ぶための教本としても、大勢の人に読み込まれていた。もちろん、僕もその一人。

……だけど、その内容に対して、まるで自分がかつて本当にその場にいたかのよ

うな既視感を覚えていたのは僕だけだった。

周りの皆は、そんなに好きなのかって、だとしても程があるだろうって笑っていて、僕自身も最初はそう思っていたんだけど。

ある時にふと気付いたんだ、僕の不思議な記憶は全部ある人の視点や立ち位置からのものだって。

物語に没頭するあまりの思い込みなんかではなく、本物の……『彼』の魂の名残なんだって。

その事実気付いた時、僕は真っ先に不思議に思った。

だって、君がかの王にかけた最後の願いは、『妄念に縛られた不毛な続きではない、別の新たな覇道を歩んでほしい』だっただろう？

『記憶』なんてものが残ってしまっていたらどうしても意識する、新鮮な気持ちになんてなれやしない。

それは君の真意に反することだし、数多の願いを叶えてきたトライフォースが、

選りによって『最後の願い』をしくじったとは考えにくい……ということとは。

トライフォースそのもの、そしてトライフォースによって願いを叶えるという行為に対して、強く適合していた誰かの希望が反映させられた結果だと考えるのが自然だ。

……でもそれは、決して願いそのものに対しての反抗ではなく、むしろその逆だと思う。

『彼』は自分自身というものを知り尽くしていた、断言出来るほどに信じていた。過去の失敗に対する反省というものを全く覚えていない状態で、野心や行動力だけをそのまま持ち越したりしたら、絶対にまた同じようなことをやらかすってさ。

……うん、そうだね。

あまり時間が無いし、もうはっきり言おう。

『彼』は覚えていたかった……不毛な砂漠にも豊かな国は造れる、集った家臣達と正しく力を合わせれば必ず成し遂げられるって、他でもない君が言ってくれたこと。

何が何でもしくじりたくなかったんだ。

自身の全てを賭した願いの成果を、それは確かに叶ったし間違ってもいなかったんだってことを、いつか目覚めるであろう君に見てもらいたかった。

……あのままずっと、何の戦いにも駆り出されることの無いまま静かに眠り続けていてくれれば、それに越したことは無いのだけれど。

君の性分からして、助けを求められたら飛び起きるだろうし、実際そうだっただろう。

まあ、これ全部僕の勝手な印象なんだけどね、証拠も信憑性もまるで無いやつ。

あっはははははっ！

ごめんごめん、でも結構自信があるよ。

だって僕は、『気をつけろ』ってわざわざ注意される必要があったくらいには、根本的なところで『彼』と同じ性質……今風に言えば『起源』の持ち主だったんだもの。

その時実際に何を思っていたのか、何を感じていたのか。

そういった想いや感情といったものが一切排除された、ただのリアルな情報源でしかなくなっている記憶からでも、『それがもし自分だったら』と考えることで、『彼』の本心に限りなく近いと思われるものに辿り着ける。

……ごめん、僕だけで長々と話し続けちゃって。

まだ夢のようだ、君とこうして過ごせる時を何度思い描いたか分からない。

ありがとう先生、君の働きは聖杯以上だったよ。

ローマ軍も、カルデアも、マスターすらも把握していないところで、勇者リンクと二人きりで話をしたいという無茶な願いを、こうして叶えてくれた。

代償が大きかったのは残念だけどね、まあ仕方がない。

これくらいやらないと駄目だったのも分かるし、最も体と命を張ってくれたのだから。

……ああ、もうそろそろ、本当に限界みたい。

最後にこれだけ言わせて、無理に返事をくれとは言わないから。

『彼』は君に対して本音なんか言えない、ハイラルの始まりから終わりまで続いた因縁の仲の意地があるからね。

英霊としての正しい有り様、未来の『余』だって同じこと。

既に霸王としての誇りと責任がある彼からすれば、君にかけるべき言葉は『家臣になれ』の一択だろう。

だけど僕はまだ道半ばで、君への尊敬と憧れを表すことを躊躇わない未熟者だから。

『彼』や『余』では絶対に口に出せないことを、素直に君に伝えられる。

どうか、僕と友達になってはくれないかな。

君と力を合わせられれば何だって出来る、何処へだって行けると思うんだ。

最後の力を込めてゆっくりと伸ばした手を取られ、そのままそっと握り返された少年の、彼自身の髪だけではない赤によって彩られた表情が驚きから喜びへと移り変わった。

地面に膝をつきながら抱き起こしていた、体の重さと共に消えていく黄金の粒子を、最後の一粒まで逃すまいと見送り続ける。

背後に見知った気配と声が現れたのは、視界と腕から、その光と重さが完全に消え去った直後のことだった。

「おおリンク、待たせてすまなかったな。

全く、決戦を前に思いがけない足止めを食らってしまった……」

「それにしても流石ですね、あんな大軍を相手に一人だったというのに大した怪我也無さそうで……リンクさん？」

「リンク、何かあった？」

「……………いや、何でもない」

ゆっくりと立ち上がりながら振り返った時には、彼の様子と表情はもういつも通りのもので。

目元にほんの僅かに残っていた拭われた跡と、声は出さないまま動いた唇が綴った言葉があったことに、気付くことが出来た者はいなかった。

|

静かな始まり

大帝国ローマの国土と勢力を二分する、連合ローマ帝国……その本拠地たる首都の、ネロのものにも引けを取らないような規模と絢爛さで聳える宮殿の最奥。

あらゆる人気を遠ざけて静まり返ったその場所に佇む、一人の偉丈夫の姿があった。

まるで、この世界に存在しているのは彼だけであるかのよう。

そんな錯覚を覚えさせる程に静かで、かつ荘厳な場に、何の躊躇いも無しにかすかな気配が踏み入ってきた。

自分のためだけに誂えられたこの場所に、何の前触れも許可も無しに現れる者な

ど、自身の影響力が隅々にまで及んでいるこの地においては絶対にいやしない。

その事實は、並の者相手ならば十分すぎる程に、声を上げて跳び上がりかねない程の驚愕を与えるに値したのだらうけれど。

閉じていた目を開き、気配の出所へと向けてゆっくりと振り返るだけだった男が纏う存在感は、姿形は紛れもない人であるというのに、まるで幾年月を生きたとも知れない大樹のようで。

自身と同じ魂と運命を持った者の、育ての親ともなった神木のことを思い出しながら少しだけ動揺した内心を表には出さずに、自身がここまでやって来た目的を果たすべく口を開いた。

そうして告げられた内容は、連合ローマ帝国首都、及びその王宮の警備という難関を突破し、連合を統べる最後の皇帝その人の命を奪う絶好の機会をふいにするにと、釣り合うようなものとは到底思えなくて。

軽く目を見開き、分かり辛いものの本気で驚いているらしい男の様子を前に、リンクの顔に満足げな笑みが浮かんだ。

多少の想定外を乗り越えながらの行軍の果てに、連合ローマ帝国の首都へと辿り

着いたローマ軍は、すぐさま軍事行動に移ることはせずに、連合軍に適度なプレッシャーを与えると同時に、向こうが何かしらの行動に出た際に迎え撃つための準備を整えることが出来る程度の距離を取った地点で一旦布陣を整えた。

あまり時間を置くと、厳しい行軍を経てきた兵士達を更に疲弊させてしまうし、防衛や籠城のための設備や準備をきちんと整えているであろう連合側を、より一層優位にさせてしまう危険性があるのだけだ。

それを敢えて行なったネロの思惑には、とある者達からの思いもよらない進言が関わっていた。

「……リンクは、上手くやってくれるであろうか」

「心配ありませんよネロさん、リンクさんならばきっと」

「そうだな、それに関しては案じておらぬ。」

あやつならば必ずや、連合首都の警戒網でさえも潜り抜けてみせることであろう」

「えっ……だとしたら、ネロさんは一体何を心配されて」

「決まっておろう、奴らが我らの提案を受けるか否かだ!!」

……此度の戦は、卑しくもローマ皇帝を僭称する者達が現れ、多くの民がそれに誑かされてしまったたことによって引き起こされたもの。

云わばローマの国民同士の、共にローマを愛しその更なる発展を望むが故の不毛な潰し合い……そう言われてしまうと否定は出来ぬ。

ローマをむやみに傷つけることは、余としても不本意極まりない。

だからこそ余は、そなた達が出した突拍子もない案に一考の価値があると思った」
「いや、まさか採用されるとは……」

「言い出しっぺが今更何を言っておる」

「念のためにとりあえずの駄目元だったんですよ、自分でもとんでもない発想をしてる自覚はありました。」

嚴重な警備を突破して向こうの皇帝に直で話を持っていき、失敗したとしても生きて帰ってくることが出来る優秀な人材がいたこと。

こちらを侮らせず、交渉や話し合いついていう選択肢を思い浮かべることもあり、そう程度の戦力がきちんと整っていて、いざという時に通常の戦闘を開始できる準備も万全であること。

……連合側の皇帝達の中で力関係が最も高い者、束ね役と思われる皇帝は、一時的な勝利よりも民の方を優先する、思慮深い名君的な人だろうって見解をリンクが出していたこと。

そういった条件が、色々と整っていたからこそ言えたんです。

『そもその話として、この戦いがどちらが真のローマ皇帝として相応しいのかを証明するために行なわれているものならば、兵士達が直接ぶつかり合う前に皇帝の格比べで決着をつけることを向こう側に提案してみませんか』なんて」

『……………せ、センパイ、それは』

『やれって言うならやるし、出来る自信だってあるけど…………』

『流石にぶっ飛びすぎなんじゃないかなあ』

『マシュもリンクもブーディカさんもそんな引かないで、思いついたことは何でもって言われたから言っただけなのに!!』

すいませんネロ陛下、さっさと忘れて真面目な話n』

『採用!!』

『……………はい?』

『余としたことが、なぜもつと早くそれを思いつかなかった……なるほど、皇帝としての格比べか。

ならば勝負は、このネロがローマ帝国の唯一正当な皇帝であるという事実によって既に決まっておるではないか!!

早急にその案を詰めよ、僭王どもに真のローマというものを知らしめてやるのだ
!!
』

といった流れを経て、リンクにメッセンジャーとして連合首都へと先んじて潜入してもらい、あちらの皇帝との接触と交渉が叶えばそれでよし、駄目だったならば当初の予定通りに戦線を開くという、単純ながらも今後の動向を大きく左右することになる非常に重要な作戦が練られ、現在進行形で進められている。

マスターとして少しずつ戦術の勉強を行なってはいるものの、それはあくまでサーヴァント達が進言することの意味を多少なりとも理解するためのもので、自身独自の判断や思考で戦況を自在に動かしてやろうなどとは考えておらず、出来るようになるのも今のところ思っていない。

そんな、ほぼド素人ではない自分のふと浮かんだ思い付きが採用され、対連合

の今後を決めようとしている訳の分からない現状に、胃の辺りが違和感を訴え始めているのを感じる。

そうして、ため息をつきながら項垂れていた立香の傍に、ふと寄り添ってきた気配があった。

「……ネロ陛下？」

「どうした、随分と具合が悪そうだが」

「それは、まあ……思いがけず、責任重大なことになってしまいましたし」

「……なぜそなたが責任を感じることがある？」

進言を採用したのは余だ、ならばそれ以降に生じる全ての責任は余にこそある。そなたはただ、ローマ帝国に利をもたらしうる提案をしたことへの、名誉と歓びに打ち震えていればそれで良い」

「……………いえ、そういう訳にはいきません。

採用したのは陛下だとしても、言い出したのは確かに俺です。

その事実を捻じ曲げて、自分だけ楽になるつもりはありません」

「何故だ、気にすることは無いとこの余が言っているというのに」

「性分です、そういうものなんです。

だからどうしようもありません」

「……………そ、そうか。

性分では仕方がないな、難儀な奴よのう。

ならばせめて、そなたにだけは余の真意を語ろう。

一見安易なものに思える手段に反射的に飛びついたのではなく、きちんとした思考があったのだと知れば、そなたの荷も少しは軽くなるであらうからな」

「……………し、真意？」

「うむ…………一応、改めて言っておくが。

余は先だって豪語したほどには、皇帝としての格比べで連合側に勝利することが当然だとは思っていない。

…………いや、最終的に勝つのはもちろん余であるがな、そう簡単なことではないという意味でだ。

今まで余の前に現れた皇帝達は、余の伯父上であるカリギュラ帝に、終身独裁官

として多くの功績を残したカエサル公……今が余の治世であるからこそ僭王となつてしまうものの、彼ら自身の世においては、偽りなく皇帝としてローマを治められていた方達。

偉大なる先達たる彼らと格を競わなければならないと思うと、正直言つて足が震えそうになる。

だからこそ、余は挑まねばならぬ。

此度の戦乱が起こつてしまつた原因は余にある……余の皇帝としての手腕に疑問と不審を覚えたからこそ、連合とそこに集つた過去の皇帝達に、多くの民がより良いローマを見出してしまった。

余はその失態を取り戻さなければならない、当世の正しきローマ皇帝として。

戦線を開くという形でしか、それを為すための方法を考えられず、多くの兵士達に更なる犠牲を強いることを良しとするしかなかった余に……そなたの言葉は、ローマの民をこれ以上を失わずに済む上に、他でもない余自身の力と頑張りによつて皇帝としての責務を果たすことが出来るやもしれぬ、新たな選択肢を示してくれ
た。

……ここまで言えば分かるな？

そなたは本当に、自身の言葉を誇りはすれども、悔やむ必要はこれっぽっちも無いのだ。

安心して胸を張るといい、そなたには余の最大の雄姿を特等席で見せてやることを約束しよう」

そう言いながら、ネロが立香へと向けた会心の笑みはとても美しくて……同時に、なぜかとても痛々しくて。

しかし立香は、そんな彼女へと向けて思わず伸ばしかけた手を、寸前のところで押しとどめた。

彼女の望みは、全てを負うことと引き換えに許される頂きに、胸を張って立ち続けること……辛いだろうと同情してもらうことや、慰められることでは決して無い。ならばせめて、気高き薔薇であろうと努め続ける少女の生き様を見届けようと、彼なりの覚悟を決めて顔を上げる。

リンクの帰還ではなく、連合側から送られてきた使者によって作戦が進行したこ

とを告げられるのは、
まだもう少しだけ先の
こと。

先達者の怒り

『安心して胸を張るといい、そなたには余の最大の雄姿を特等席で見せてやることを約束しよう』

表情が晴れる様子の無い立香へと豪語したことは、心の底からの本音だった。不安は無かったと言うと嘘になるけれど、それを吹き飛ばすためという気持ちも込めて、背筋を伸ばし胸を張った。

ローマ帝国の真なる皇帝として、世界で最も美しく気高い薔薇になろうと誓った……それなのに。

自身の魂を支える芯と言えるもの、その全てが、一時の夢であつたかのような儚さで散つていくのを感じる。

背筋が伸び、膝が崩れることなく保たれているのは、ただ単にその形で固まってしまうというだけのこと。

「……そうか、お前がネロか。

何と愛らしく、何と美しく、そして何と絢爛たることか。

その細腕でローマを支えてみせたのも、大いに頷ける。

さあおいで、愛しき子よ。^{ローマ}

今はただ語り合うのみ、お前の全てを私は許そう^{ローマ}」

その人に会うのも、その姿を見るのも、間違いなく初めてである筈なのに。

聳える大樹の如く堂々とした巨躯も……実の親に恵まれなかつたネロですら自然にそうだと理解出来る程の、無償の『親』の愛に満ちた優しい眼差しも。

敢えてそうだと告げられなくとも、彼を形作る要素の全てが、その人が何者なの

かを明確に告げていた。

「私^{ローマ}は、ローマだ」

そんな彼の傍らに立ちながら、自分と違って気後れなど微塵も感じていないと言わんばかりのいつも通りの様子で、彼と共に自分達を迎えたリンク。

かの勇者を引き合いにすることが相応しいような実力と活躍で、ローマの窮地を幾度となく乗り越えさせてくれた……彼を臣下とするに相応しい者とならなければいけないと、密かに奮起していた程の人が、連合側の皇帝と共に在る。

その光景が不快ではないと、むしろその人の傍の方がリンクにとっては相応しいのではないかと。

ごく自然にそう思ってしまったことに、今のネロは気付けなかった。

ローマ帝国を統べるに、真に相応しい皇帝は誰なのか。

それを武力ではなく格比べによって決めようという立香の発言は、最初こそ周囲を引かせたものの、作戦としてきちんと詰めていくうちに中々の名案なのではと思

われていった。

自国民同士で行なわれている戦いは、国力をむやみに減らすのみでメリットと言えるものは欠片も無い。

それを食い止められることに加えて、ネロがいかに優れた皇帝であるのかを実績で以ってアピールすることが出来るというのは、戦いに勝つだけでなく元の豊かなローマを取り戻さなければいけないことを考えると非常に大きな利点だった。

……しかし、連合側からの招待を受けて、こうして最深部まで踏み込んでしまった今になって、それは的外れな考えだったのではないかという疑念が滲み出てくる。驚愕に目を見開き、体の震えを抑えられずにいるネロの姿は、立香達が抱いた不安を払拭させてはくれなかった。

「あれは、あの方は……そんなことが、あって良いのか？

いや、いや、しかし……」

「どうしたんですかネロさん、しっかりして」

「あの人を知っているの？」

「……実際に相對したことは無い。

だが分かる、分かってしまう。

あの御方こそ……」

「そう、^{ローマ}私こそがローマ。

さあ来い、^{ローマ}私へと歸ってくるがいい、^{ローマ}愛し子よ。

^{ローマ}私こそが、連合帝国なるものの首魁である。

^{ローマ}お前も連なるがよい、無論^{ローマ}お前の兵や民達も。

^{ローマ}ローマの全てを^{ローマ}私は許そう、それが出来るのは^{ローマ}私一人だけなのだから」

その言葉と共に広げられた大きな腕は、実際の質量を越えて、彼の宣言通りに全てのローマを包み込んでしまえそうな包容力を湛えている。

彼が一步步み出た瞬間に、強張ってしまっていたネロの体は、音が聞こえそうな程に震え出して。

後ずさりそうになるのを堪えているのかと、瞬間的にそう思った立香は、自身の考えが間違っていたことにすぐさま気付いた。

彼女は確かに我慢しているけれど、それは恐怖やプレッシャーから逃げることではない。

歓びと安堵のあまりに駆け出したいのを、あの大きな腕に収まって全てを委ねてしまいたいのを、必死になって耐えているのだ。

あともう一步進まれてしまったら……もう少しまで実現していたであろう嫌な予感を遮ったのは、やや乱暴な勢いで男の前へと突き出された、鏢の部分に広がった翼の意匠が施された剣の柄だった。

「む？」

「話し合いと見極めは、正常な思考力と判断力がきちんと働いている状態のネロ陛下を相手に行なう。」

そういう約束だった筈、出会い頭でそれは違うんじゃないですか？」

「……確かに、今のは私が悪かった。」

愛しき末子ローマとのようなやくの対面に、少なからず昂ってしまっていたようだ」

「少し時間をもらいますよ」

「宜^{ロイマ}しい」

優しい笑みで頷いた男の元から、少し呆れた表情のリンクが早足で戻ってくる。包み込まれるようなプレッシャーから解放され、ついに膝を崩してしまったネロを咄嗟に支えた立香とマシュに、彼を笑って迎えられるような余裕は無かった。

「しっかりして下さい、ネロ陛下。」

想定外の事態だったのは残念だけれど、ここはあなたに踏ん張ってもらうしかないんです」

「り……リンクさん、あの方は一体」

「……ロムルス。」

尋ねた俺に、あの人はそう名乗っていたよ」

「……………そう、なのか、やはり」

「ネロ？」

「考えたくなかった……いや、気付かぬうちに考えないようにしていた。」

あの方だけは違うと信じたかった……あの方だけはあり得ないと、願望のみを頼りに思い込んでしまっていた。

……紛うことなきローマ建国王、神祖ロムルス。

余のローマも、余のものでは無かったかつてのローマも、全てあの方がいなければ存在し得なかったのだ」

「……………そ、それは」

ここにきてようやく、ネロが受けた衝撃の理由を察した立香は、彼女にかけるべき言葉を咄嗟に思い浮かべることが出来なかった。

何人もの偉大な人達によって守られてきた大切な国と歴史を、今この時代に受け継いだ者として守ろうと、今まで必死になって戦ってきたのに。

国を愛し、誇りに思う気持ち……その根底と言えるものを築いた偉大な先人こそが、国の未来を閉ざそうとしていた。

この事実が今の彼女をどれだけ打ちのめしているのかと思うと、下手なことは言えない。

心の中がぐちゃぐちゃになっているであろう現状では、何がきっかけで大きく舵を切ってしまうことになるのかが分からないから。

（もしこれが、戦場での思いがけない鉢合わせだったら……）

戦略的な判断と称してネロを撤退させ、落ち着かせてから仕切り直すことも出来たのだからけれど、きちんとした話し合いの場を設けてしまった今となってはもはや叶わない。

行なわれるのが格比べである以上は、ただ相對しただけのプレッシャーに耐え切れなかった時点で負けとなる。

そんな中で、リンクが時間を確保してくれたことは地獄に仏の気分だった……例えそれが、気休めが精々の儂いものだったとしても。

しかし状況は、ネロ達にほんの一時の深呼吸すらも許してはくれなかった。

間隔が長く、大した力も込められていない気だるげな拍手の音と、この上ない程の不快感を伴う笑い声が、静まり返っていた空気を震わせる。

「はっはっはっ、成る程成る程!!

茶番も突き抜ければ見ものになるといふのは本当らしいな、これは傑作だ!!」

「こ、この声は……っ!?」

「レフ・ライノール!!」

音と声の出所へと向けて咄嗟に振り返る。

その視界に映ったのは、あの地獄のような光景と記憶を思い出させる、緑のスーツとシルクハット……それを遮るように抜き放たれた、青白い輝きを放つ刀身。

自身へと向けて容赦なく突き付けられる切っ先に、ほんの一瞬前まで腹立たしい笑みを浮かべていたレフの顔が不快と嫌悪に醜く歪んだ。

「何だこのおぞましさは……さてはそいつ、聖剣だな？」

さっさとしまえ糞餓鬼が、ここがどこで今がどういふ状況だと思っていやがる。決戦を前にしなくてもいい話し合いを持ち出したのはそちら側、それを寛容にも

受けてやったのはこちら側。

招かれた先で馬鹿な真似をしでかした非は、果たしてどちらにあるのか……ここまで言えば流石に分かるよな、いくら貴様がどこの誰とも知れない木っ端英霊だとしても」

「……………」

「それでいい、話の分かる奴は助かる。」

是非ともその調子で、身の程を弁え続けてもらいたいものだ」

こちらへと向けて容赦なく聖剣を抜いた少年が、不快感と苛立ちを露わにしながらの雑な動作で、それでも確かに自身の言葉に従ったという事実に満足感がこみ上げる。

しかしそれは、自身が契約したサーヴァントである男が、つい先程まで浮かべていたものと一変した暗い眼差しを、選りによってマスターであるこの身へと向けているという状況を認識したことによってまたしても反転した。

「おいロムルス、その目は一体どういうつもりだ。

お前は確かに、ローマという限られた地域の限られた歴史においては、偉大な存在として敬われているらしいが。

今のお前はただの影法師、私という存在がいなければこの世に留まることすら出来ない従^{サブ}者に過ぎぬということを忘れるな。

……くっくくく、いざ口に出してみれば。

曲がりなりにも『神』とすら称された男が、何とも情けない在りさまではないか」

「なっ……き、貴様!!」

この無礼者、神祖ロムルスに対して何ということをし!!」

「ネロさん、だめです!!」

偉大なる建国王ロムルスと、それに連なるローマという国の全てを馬鹿にされたことに激昂して飛び出しかけたところを、マシュによって押さえられたネロ。

レフはそんな彼女に対して、先程リンクやロムルスに対して見せたような不快感ではなく、一見しただけならば人好きのする、彼の本性を知っていれば嫌な予感に

背筋を泡立たせるような笑みを返した。

「これは失礼しました、皇帝陛下。」

帝国を統べられるあなたが、ついに我が連合に与される時が来たという朗報に昂り、建前だとしても本音を偽ることが出来なくなっていたように

「なっ……き、きさ、どこまで無礼な」

「安心しろロムルス、貴様がやろうとしていることを邪魔するつもりは無い。

むしろ私は後押しをするために来たのだ、帝国が早々に陥落してくれると言うのならばこちらとしてもありがたいからな。

宮廷魔術師としての仕事だ、ありがたく受け取れ」

「そしてさっさと、その皇帝を自称する小娘に引導を渡してやるといい」

パチンと乾いた音を立てて、レフが指を鳴らしたその瞬間。

一同を見下ろせる少し高い位置の虚空に、光る窓がふたつ並んで開いた。

始めて目の当たりにするそれを、自身の中に在る選択肢から辛うじて『窓』だと認識したネロとは異なり、立香やマシユはそれが本当は何であるのかを正確に把握
していて。

レフが魔術によって作り上げたらしいふたつのスクリーンには、それぞれ全く違
う光景が映し出されていた。

ひとつは、どこぞの城下と思われる町並み。

人々は、込み上げる感動や恍惚に顔を上気させながらスクリーンを見上げ、その

場に膝をついてしまっている者も珍しくはない。

そしてもうひとつは、丈の短い草が風にそよぐ荒野。

町の人々と同じようにこちらを見上げている兵士達は、あちらとは違い何が起こっているのかを把握し切れていないらしく、呆然とした表情で立ち尽くしている。それらの光景が何を意味しているのかを、数秒の沈黙を経て察した立香の背筋に、氷の塊を放り込まれたような寒気が走った。

「ま、まさか……」

「ほう、気付いたようだな。」

だが万が一にも考え違いがあつては困る、私の方からも正しく説明しておくしよう。

それらは紛れもなく、こことは違う場所の今現在だ。

……そして向こうには同じように、今この場所の光景が映し出されている。

たった今繋げたことは違い、貴様らがこの場に現れてロムルスと相対したその瞬間からな。

しっかり音声付きだ、喜びたまえ抜かりは無いよ」

「あ、ああ………そんな、そんな、ということは」

「ネロさん!!」

「ネロ!!」

真なる皇帝は必ずや、偽りの皇帝を下してくれる……そう信じて、快く送り出してくれた兵士達に対して、僭主を前に無様にも膝を折る情けない姿と、彼への侮辱に対して心から憤る、連合に下ったと思われても仕方のない光景を見せつけてしまった。

その絶望は今度こそ、ネロを上から押し潰した。

立香とマシュに助け起こされていなければ、その場に倒れ伏して二度と起き上がれなかったかもしれない。

それ程までに打ちひしがれるネロに、愉快でたまらないと言わんばかりの馬鹿笑いが追い打ちをかける。

そしてそれは、あんなにも優しく穏やかだったロムルスが明確な怒りを露わにし

でもなお、収まることはなかった。

「レフ・ライノール!!」

「ああ、鬱陶しい……ロムルス、結局お前は、終ぞ私のことを『マスター』とは呼ばなかったな。

まあ構わんがね、サーヴァントはマスターに逆らえないという事実^に忠誠心の有無は関係ないのだから。

……では、我がサーヴァント・ロムルスよ、マスターとして命ずる。

ネロ・クラウディウスに連合への帰属と忠誠を誓わせろ、弱った心につけ込むのは得意だろう?」

「……………私の、子供ら^{ローマ}に対する愛を、貴様はそのように称するか」

「黙れ黙れ、お前のその訳の分からない言い回しに困惑させられるのはいい加減うんざりだ。

いいから早くしろ、そもそも私はそこまで間違ったことを言っているか?

愚か者を父や祖父というだけで敬い、たまたま長く続いただけのことを歴史や伝

続というラベルを貼ってまで守り続けようと苦心する。

それが人間にとっての善き価値観であるならば、実力も器も己よりずっと上回っている先達……それも、最も古く偉大と称されていた者の庇護下に入って、その言葉と選択に従ってさえいれば自身には何の憂いも無いという状況は、最善と称するべきものではないのかね」

「成る程、一番古い奴の言葉を尊重するのが正しいのか」

「だったら、それは俺だな」

ロムルスの威圧すら鼻で笑って流してみせたレフの笑みが、その一言で固まった。彼の胆力が優れていたのではなく、サーヴァントはマスターに歯向かえないという大前提に胡坐をかいていたからこそその余裕だったのか。

その要素は少なからずあるだろう、しかし立香達にはそれだけが理由だとは到底思えなかった。

疑いようもない味方で、本来の彼がとても優しい人だということを知っていて。辺りの空気を一瞬で支配したそれが、自分達に対して向けられることは絶対に無いと信じているのに。

余波の影響を受けただけで肺の動きが止まってしまったほどの、怒気と殺気の剣先に、レフ・ライノールはもろに貫かれたのだと。

いつの間にやら緑衣を纏い、一度は収めた神剣の刃を再度露わにして……形だけならば笑みとも取れそうな、口の両端を吊り上げて牙を剥く壮絶な表情と共に激昂を露わにする少年の姿が、居合わせた者達に自然とそう思わせた。

「黙って大人しくしている、レフ・ライノール。

次に余計な口や行動を挟んだら、その瞬間に問答無用で斬り捨てる」

遙か数万年前の、文化や常識どころか、世界を構築する概念そのものからして異なった世界で生きていた。

今に繋がる歴史の者であるというだけで既に及ばない、先史時代の英雄が発した言葉には、宮廷魔術師どころか皇帝にさえも有無を言わせないほどの迫力が込められていた。



真なる皇帝

緑衣を纏ったその姿を目の当たりにするのは、初めてではなかった。

例え舞台衣装だとしても、多くの者が氣後れするであろうそれをあっさりと着こなしてみせた姿が、驚きを通り越して納得すらしてしまった程に自然だったことも知っていた。

そしてそれは、今日の前で起こっていることに對しても同様で。

連合の宮廷魔術師の策によって、既に殆ど吹っ飛んでしまっていた思考に對して新たに与えられた衝撃は、荒れ狂っていた精神を逆に、振れ幅が大きすぎて壊れてしまったのではないかと心配させるほどの急転直下で落ち着かせた。

（ああ、余はなぜ気付けなかったのだろう）

実際に目の当たりにした例が、生前を知っている実の叔父や、その活躍や偉業が今も身近なところで語られていて、尊敬すると同時に身内に対するような親しみを持っていた者達だったからこそ、『過去の時代を生きた英雄がこの世に蘇る』という異様な現象が持つ真の可能性に至れなかった。

幼子としての記憶がある頃も、ローマの建国どころかその前身となる文明すらも生まれていない遥かにしえの時代も、『過去』という意味では同じ……だとしたら。

ローマの偉大な先人達が蘇ったように、彼らすらも憧れたであろう伝説の英雄が今一度この世に現れていたとしても、何らおかしいことでは無かったのに。

宮廷魔術師への牽制か、聖剣の刀身を露わにしたままの勇者が、放心状態でへたり込んでしまっているこの身へと向かってゆっくりと歩み寄ってくる。

……そうして、永遠にも思えるほどの時間を感じた先で伸ばされた手に、ネロは

応えることが出来なかった。

上手く思考が働かない、体が動かないというのも、大きな理由のうちだったけれど。

今の自分に、果たしてその手を取っていいのかという躊躇いが、最も重く彼女の心身を縛り上げている。

「ネロさん」

「ネロ、大丈夫。

一生懸命に頑張ってきたこと、ちゃんと傍で見てきたから。

ネロは立派な皇帝だって、俺達は分かっているから」

そんな彼女を、後ろから支える手と声があった。

人目があるところでは、皇帝と家臣という立ち位置を崩さないように気を付けていたけれど。

私的な場所や、自分達以外の誰にも悟られない心の中では、利害の一致を越えた

関係を築いてきた者達の温かく優しい気配に、思わず目頭が熱くなる。

そしてそれは、目の前に立つ人からも与えられた。

「ネロ陛下……俺は確かに『勇者』と呼ばれる存在で、それだけのことをやり遂げてきた自信だってあるけれど。

何もかも上手くいったりはしなかったし、どんな時も自信満々ではいられなかった。

失敗や後悔ばかりだったのを、色々な人に助けられたり支えたりしてもらった。『勇者』だってそうなのに、『皇帝』は完璧じゃなきゃいけないなんて、それこそおかしい話じゃないですか。

少しだけ頑張って、どうか勇気を出してください。

そうすれば俺達は、全力であなたを支えます」

そう言いながら、幼い頃に本を読みながら憧れた英雄ではなく、国の危機に立ち向かうこの身を支え続けてくれた家臣及び友人として、既に見慣れた表情で笑った

少年は、一度引いた手を再び差し出した。

それは、ネロが応えられなかった一度目の時と変わらない位置……握り返すためには、自分自身の確かな意思で立ち上がり手を伸ばさなければならぬ程の、微妙に遠い場所だった。

それが何を意味しているのかに気付いたネロは、それまで軽く開きっぱなしになってしまっていた唇をぎゅっと噛み締めて。

次の瞬間、今の今まで震えていたそれは力強い弧を描き、力なくへたり込んでいた両足は踵が鳴る力強い音と共に床を踏み締めた。

突然のことに驚き、反射的に引っ込めかけたリンクの手が、逆に掴まれて引き戻される。

伸ばされた手を前にしながら、敢えて自分一人の力で立ち上がり、対等な目線からその手を取ってみせたネロの姿に、一瞬呆けてしまったリンクの顔に心からの笑みが浮かんだ。

握った手の力は不自然に強張っているし、懸命に作った笑顔はまだちょっと不自然だし、足だってよく見なくても震えているけれど。

数えきれない程のことを、同じような強がりで乗り越えてきたリンクからすれば、その姿に勇気の輝きを見出すには十分だった。

「……………ありがとうリンク、立香とマシュも。

優れた皇帝は過去にも未来にも数いれど、最も臣下に恵まれた者が余であるということは間違いないな」

正直に言えば、庇護下にある者として神祖に縋ってしまいたいという本心は消えていないし、そんな気持ちでいる限りは、格比べで彼に敵う余地があるとは思えない。

だけど、ロムルスを偉大な神祖として敬愛しながらも、今この世においては間違った存在であることを認め、自身こそが正当な皇帝であると胸を張って相対することを、ネロはもはや躊躇わなかった。

自分でさえ信じれ切れなかったこの身を信じてくれた……ずっと見てきたから知っている、立派な皇帝だと言ってくれた人達がいる。

ならばもう、崩れそうな膝に鞭打つてでも、強がりながらやっどだとしても、実際に成るしかないではないか。

神祖の愛すらも跳ね除けながら一人咲き誇る、世界で最も気高く美しい、皇帝ネロ・クラウディウスという名の至高の薔薇に。

そうして歩み出たネロへとロムルスが向けた眼差しは、ただひたすら慈愛に満ちていた先程までのものとは一変していた。

しかしネロは、押し潰されそうな威圧感すらも感じるようなその姿からも、揺るぎのない神祖の愛を感じた。

庇護されるべき幼子ではなく、あくまで同じ皇帝として対等に向き合おうとしている自分を認め、受け止めようとしてくれている。

……立ち向かわなければならぬ理由が、またひとつ増えた。

覚悟を新たにしたネロの上体が、偉大な祖への臣従の証ではなく敬意の表れとしてほんの少しだけ、それでも確かに傾いた。

「お初にお目にかかります、我らがローマの偉大なる神祖ロムルス。

余はネロ・クラウディウス、ローマ帝国第五代皇帝を担う者。

より良きローマのために、どのような選択を下すべきなのか。

それを論じる場を用意して頂きましたこと、心より感謝致します」

「うむ、大義である。」

……あまり時間が無い、早急に本題へと入るとしよう。

我が子よ、聞かせておくれ。

お前は一体何を以って、真の皇帝というものを語るのか」

「……申し訳ないのだが、どうか、余が語るよりも先に聞かせて頂きたい。

神祖が、伯父上やカエサル公らと共に連合を築き、余の帝国を迎合せしめんとした真意は……より優れた皇帝によって治められることこそが、より良きローマの発展に繋がると考えたから。

その認識で宜しいのだろうか？」

ネロの問いかけに対してロムルスは、ゆっくりと頷くことで応えた。

それを受けたネロは、骨の軋む音が聞こえそうな程の力で拳を握り、俯きながら

唇を噛みしめて。

大きく吸った息を元にした言葉を、顔を上げると同時に高々と張り上げた。

「神祖ロムルスよ……先んじて余が送った言伝の内容を、幾らか訂正させていただく。」

より優れた皇帝、ローマという偉大な国を統べるにあたって真に相応しい者は、果たしてどちらか」

「そのような問答に意味など無い!!」

「ここで行なわれるものは、断じて格比べにあらず!!

正しき皇帝である余が、偽りの皇帝達を悉く打ち倒すのみである!!」

「ね、ネロさん!？」

《ちよつとちよつと何言ってるの!!》

今まで一生懸命に整えてきたものの、ここまでやって来た理由を根底からひっくり返してくるネロの暴論に、マシユとロマニが状況に合わない素っ頓狂な声を上げた。しかしどうした訳か、突拍子もないものだった筈のネロの言動に対して、あまり驚くことなく受け入れていた者達もいて。

一瞬目を見開きはしたものの、すぐに何かしらを納得した様子の立香と、吹き出すのを堪えたリンクの前で、ネロは凜と声を上げ続けた。

「余が正しくて、あなたが間違っている……そう判断する理由に、難しいことは何も無い。

ただ単に、余が今この時を生きている者で、あなた方が既に自身の命運を終えられた過去の者だから。

本来あるべき摂理を乱してはいけない、ただそれだけの至極単純なことである。神祖ロムルスがどれだけ偉大だとしても……当代の皇帝が、ローマ史に燦然と輝くような稀代の暴君であったとしても。

それを糾すため、今を良くするために努めるのは……苦労や責任を負うのは、今を生きる当人達であるべきなのです。

ローマの国と民のためという気持ちに偽りが無くても、それを受け入れるだけで様々な恩恵があるのだとしても。

ローマ帝国の正しき皇帝として……あなたを含めた父祖達から、ローマを託された身として。

余は断じて、あなたの愛に甘んじる訳にはいかぬのです」

無償の愛によって伸ばされた庇護の手を振り払い、ここから先を自らの力のみで歩んで見せると、それこそが正しき道だと豪語する。

自身の存在と行ないを、真っ向から否定されたと表しても間違っではない程の言動を前に、ロムルスは優しく微笑んでいた。

「……………そうか。

実に美しく……………そして強いな、我が愛しき末の子は」

大樹の幹のように太く立派な腕がゆっくりと動きだし、自身の背に負っていた長柄を掴む。

状況の異様な変化を感じ取っていない筈がないのに、まっすぐ前を見据えたまま、逃げようとも構えようともしないネロへと向けて。

両端に巨大な紅い房を備えた不思議な形状の槍が、真上から唸りを上げて振り下ろされた。

|

VS
ロムルス

唸りを上げながら振り下ろされた巨大な穂先が、寸前に割って入った金属の巨大な鏡面によって轟音と共に弾かれる。

それに次いで振り下ろされた青白い刀身によって、ロムルスは間合いを取ることが余儀なくされた。

体勢を整えた彼の瞳に映ったのは、先程までと変わらない凛とした姿と表情で立つネロと、そんな彼女をすぐ傍で支える珍しい黒髪の異国の少年、二人を背にしなからそれぞれの得物を構える矛と盾のサーヴァント達。

何とも頼もしいその姿に、状況の変化に合わせて引き締まっていたロムルスの口

元が再び緩む。

意識を完全に切り替えていたネロ達が、それに気づくことは無かったけれど。

《なっ……何で、どうして、話し合いをするんじゃないの!?!》

「今更何を言っておるのだ、宮廷魔術師よ。」

交渉は既に行なわれ、そして決裂した。

しかし余らはどちらも、一歩たりとして引く気は無い……ということとは」

「実力行使の段階に突入ってこと」

「その通り。」

……子よ、分かっておるな。
ローマ

理想を語るのは大切だが、同時にそれはあまりにも容易いこと」

「承知しております、神祖ロムルスよ。」

余の言葉、決意が描かれただけの夢物語などではないことを、必ずや証明してみせましょう」

「許すぞ、ネロ・クラウディウス。」

ローマ
私の愛を、
ローマ
お前の愛で
ローマ
見事蹂躪してみせよ」

「見るがいい」

「我が槍、すなわち」

ローマ
「私が
此処に
在るこ
とを!!」

朗々と響いた言葉と共に、赤い穂先が高々と掲げられる。

ただの宣言かと思われたそれは、想定外過ぎる事態の引き金となった。

民も文化も国土も、あらゆる『ローマ』を支えながら決して揺らぐことの無い強靱な根や幹と、全てを包み込む優しさと力強さを兼ね備えた枝葉……立香達が、今までに何度かロムルスに対して抱いていた、『膨大な時を経た大樹のよう』だというイメージ。

それが今、一同の前で現実のものと化していた。

「なっ、何だこりゃ!？」

「マスター、ネロさん、私の後ろに!!」

マッシュが守らなければならない範囲が少しでも小さくなるように、出来るだけ身

を縮めた二人を背にしながら振るわれた大盾が、すぐ目の前まで迫っていた攻撃を弾き返す。

巨大な金属の塊との競り合いに負けて粉碎したそれは、こちらを叩き潰さんとはかりに襲いかかってきた木の幹。

第一陣に過ぎなかったその残骸を吹っ飛ばしながら続いた波状攻撃に、マシユは懸命に対応し続けた。

《何がどうなっているんだ、玉座の間が森と化した!!》

それだけじゃない、木々がまるでこちらを呑み込まんとはかりに……何てことだ、周りが一瞬で敵だらけと化してしまったぞ!!》

「そ、そうか!!」

神祖が手にしているもの、あれは恐らくパラディウム!!

かの人の母が見た夢に登場し、ローマそのものを象徴する大樹と同一視される、ローマ建国の発端となった国生みの槍だ!!」

「それがあの人の宝具なのか、能力は恐らく木々を操ること……マシユ、危ない!!」

「きゃあっ!!」

《マシユっ!?!》

目の前に迫っていた幹を砕くべく得物を振り抜いた、その瞬間に生まれたほんの僅かな隙に死角から伸びてきた別の幹が、マシユの華奢な体を捕まえた。

彼女がデミ・サーヴァントでなかったら、人理修復の旅路が始まる前までのただの少女の体だったら。

一瞬で締め潰されていたであろう圧力に襲われて、肺から絞り出されたような呻き声を零したマシユの霞んだ視界に、何本もの青白い閃光が走る。

次の瞬間、虚空に持ち上げられていた彼女の体は解放され、真下で腕を伸ばしていた立香の身をクッションにしていた。

「きゃあああっ!?!」

ごめんなさいセンパイ、今後おやつは少し控えます!!」

「き、気にしないで……重かったのは鎧が原因だろうし、俺が自分の腕力を過信し

てたのも悪いから。

……それより、今は」

「そ、そうでした、リンクさん!!」

自身を捕らえていた幹を一瞬で切り刻み、助けてくれたのは誰だったのかを思い出したマシュが、近くに転がっていた盾を手慌てて戦闘体勢を取り直す。

そうして顔を上げると、視界の全てが爆炎によって埋め尽くされるのは、ほぼ同じタイミングでのことだった。

迫る幹ではなく、仲間が作り出した爆発から守るために構えられた盾の存在に気付き、ならば遠慮は要らないと開き直ったリンクの弓に、新たな爆弾矢が数本まとめて番えられる。

そうして、盾の向こう側で悲鳴が上がっているという事実を敢えてスルーしながら、爆撃を続けたリンクだったのだけけれど。

（駄目だ、こっちが削るより向こうが増える方がずっと早い……!!）

ローマそのものを象徴する大樹が、ローマという概念を最初に築き上げた者の手によって、ローマの大地に枝葉を広げる。

そんな強固すぎる概念へと対抗するのに、物理的な破壊力のみというのは、どんなに強大なものであっても決して吊り合わなかった。

爆炎によって一時的に削られながらも、次の瞬間にはそれを上回る勢いで押し寄せる木々によって、リンク達が居場所と出来る空間が狭められていく。

爆風に巻き込まれずに済む広さを下回り、爆弾矢の使用が不可能となってしまつてからは、もはやあつという間の出来事であつた。

「……………」

押し寄せる木々の隙間に辛うじて窺えていた姿が、ついに完全に覆い隠された。少年達を呑み込んだ幹の勢いは収まらず、更に太く大きくなっていく。

戦闘の轟音から一転して、耳鳴りがしそうな程の沈黙の中。

ロムルスは、かすかに聞こえてくる謎の音の存在に気付き、伏せていた目を見開いた。

上に下にと弾むように音が跳ね、時と場所が許せば人によっては釣られて踊り出したくなるであろう、今この状況には合わない陽気な旋律。

音は徐々に大きくなっているが、それは音量そのものが上がっているからではなく、音が広がるのを妨げているものが少しずつ剥がれていっているから。

ほんの僅かな間ですっかり様変わりしてしまった玉座の間、その一角を完全に押し潰したと思われた樹木の塊。

それがゆっくりと解けていった先に、ロムルスは、目と口を開きながら呆然と言葉を失うネロと、同じような表情をしているマスターの少年に盾の少女。

そして、そんな彼らを背にして立ちながら、空とも海とも違う美しい青で形作られた笛をくわえ、迷いの無い指の動きで不思議な音を紡ぐ勇者の姿を目の当たりにした。

辺り一帯に展開された木々が、彼を中心に少しずつ、自身の影響下から抜け出している……『ローマ』ではなくなっている。

そのことに気付いたロムルスは、新たな力と気合いが入った一声と同時に、より一層の力を宝具に込めた。

それと同時に、少しずつながらも何とか広がっていた新たな概念が、境目から軋む音と揺れが発している錯覚を居合わせている者達に感じさせながらの闘ぎ合いを始める。

先程までのものほどあからさまでは無かったとしても、競り負けて影響の及ぶ範囲を徐々に減らしてしまっているのは、明らかにカルデア側の方だった。

（『ローマ』という概念を操るロムルスに対抗するには、こちらに有利に働く別の概念で上書きしてやればいいって発想自体は、間違ってたなかったみたいだけど。

『サリアの歌』……迷いの属性の付与だけじゃあ、ここをローマとは違うどこか別の森だと定義づけるのには弱いかな）

何かもう一手が必要であると認識しながらも、曲を奏でるのを止めればその途端に『ローマ』に呑み込まれてしまうだろうことを考えると、迂闊に動くことが出来

ない。

曲を紡ぐことはやめないまま、内心で舌を鳴らしたその瞬間。

令呪が輝く赤い光が背後から迸り、それと同時に、その時まで間違いなく存在していなかった誰かの気配がひとつ増えたのを感じた。

視界の端に音も無くすつと現れたのは、鋭い剣先……ではなく、それ自体には何の破壊力も無い、繊細に揺れるだけの細い棒。

それが『彼』にとつては、奇跡の音色を無限に生み出す文字通りの魔法の杖なのだということ、世界中の者達が知っている。

多くの人に夢の世界を与え続ける音の魔術師、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは、派手に歪んで不満を露わにしたその口から、開口一番に容赦ない罵声を響かせた。

「ああもう、クソ野郎、何てことだ!!

僕は音楽家だって、後方支援がせいぜいの非戦闘員だって、何度も何度もいっそ曲にしたくなるような頻度で言ってるのに!!

特異点に、しかもあんなとんでもないサーヴァントと戦う最前線に引っ張り出すなんて酷いじゃないか、なあマスター!？」

「いやいやいや!!」

そんな文句を言うなら何で召喚待ち用の待機室にいるのさ、了承済みだって普通思うよ!？」

「あそこは今、マリアやジャンヌを始めとした普通に待っているのに飽きた連中が色々を持ち込んで、完全にレクリエーションルームと化してるんだよ!!」

サーヴァントだけでなくスタッフ達まで休憩目的で入り浸ってるんだ、居心地の良さについ長居していたらこのザマさ!!」

「俺なんも悪くないじゃん!!」

「……………うん、まあそうだね。」

仕方がない、こうして呼ばれたからには開き直って頑張るよ。

リンク、合わせるのは今の曲に対してでいいのかい!？」

「いいや、変える!!」

「了解!!」

簡潔なやり取りを交わしながら振った指揮棒が守りの曲を奏で、曲を切り替える瞬間にどうしても生まれてしまった隙をカバーする。

その頼もしさに感謝しながら、先程までは別の動きを見せ始めた指が、跳ねるような陽気なリズムから一変した、優雅に繰り返されるステップを思わせるたおやかなメロディーを奏で始めた。

最初こそ、リンクが吹くオカリナの素朴な音色のみだったのが、アマデウスが指揮するオーケストラの伴奏が加わったことによって、壮大な世界観を築き上げていく。

幼い子供の姿をした不思議な民が密かに暮らす、異界の森を越えた先。

人がむやみに立ち入ることを拒む古代の森と、その最奥にひっそりとたたずむ荘厳な神殿の幻影が、一同の脳裏に鮮やかに浮かび上がった。

『森のメヌエツ』……それはかつて、古き森の奥深くに存在する賢者の聖地へと、時の勇者を導いた曲。

この曲を奏でることによって、勇者リンクはその地に辿り着くことが出来ると言

うのならば。

逆説的に、勇者リンクによってこの曲が奏でられているということが、ここがかの地であることの証明となり得るのではないか。

その予想は、見事に的中していた。

オーケストラの演奏に合わせて爆発的に広がった『ハイラル』が、ロムルスの『ローマ』を一気に後退させる。

しかしそこは、ロムルスも流石というもの。

勇者リンクが自ら奏でた、この地の認識を上書きする力を持った曲……それも、稀代の音楽魔術師であるアマデウスの補助によって段違いに力を増していたものと、たった一人で、真っ向から闘ぎ合ってみせた。

私はローマ、私こそがローマであると、彼はこの短い時間の中で何度も言っていた。

それを疑いようもなく証明している光景を前に、誰もが思わず息を呑む。

「……………これが、ローマ」

立香は、以前自分が謁見の間で啖呵を切った時のことを思い出していた。

周辺諸国の民や文化を寛容に取り入れながら発展していったのが、ローマという一大文明であった筈なのに。

ローマの民ではないから、得体の知れない余所者だから。

そんなちっぽけな理由でこちらを認めまいとする者達に対して、『世界はローマだ、だからお前達もローマだ』と言い切る器のかさを見せてくれてもいいんじゃないかと、そんな類のことを言ってやった覚えがある。

反発心を上乘せしながらぶつけてやったその言い分が、実際にはとても難しいのだということとは分かっていた。

だからこそ、それを全力で体現してみせているロムルス雄大さに、敵ながら敬意を覚えずにはいられない。

彼を含めた誰もが、目の前の激闘に見入ってしまったっていた、そんな状況で。

ただ一人だけ、胸中に燦ぶるものを抱いていた者がいた。

(
.....
)

（何だ）

（一体何なのだ、この妙な不快感は）

（理屈は分かる……今彼らは、余らがいるこの場所を定義するものを競い合っている）

（神祖ロムルスが示すローマか、勇者リンクが証明するハイラルか）

(……いや、違う)

(それだ、そこから既に間違っているのだ!!)

(ここは既に神祖のローマではない、遙かにしえに終焉を迎えたハイラルでもない!!)

(ここは)

(ここは……)

「ここはっ
っ!!」

「余のっ
っ!!」

「黄金劇場である!!」

高らかと上がった声と同時に、世界は一瞬で塗り替えられた。

先程まで、リンクとロムルスの間で繰り広げられていたような、衝撃を伴いながらぶつかり合うようなものではない。

それこそが正しいのだと、真に在るべき姿なのだと、この世界そのものが喜んで受け入れたかのように。

悠久の歴史を思わせる大樹の森の代わりに現れた、繊細な彫刻と意匠によって彩られた黄金の劇場……ローマという国の華やかさを象徴するような、美しく絢爛なその舞台上に、一同はいつの間にか立っていた。

「なっ……こ、これは一体」

《固有結界……まさか、そんな馬鹿な!!》

心象風景を具現化させる魔術の極地のひとつだぞ、それをどうしてネロ陛下が!?

》

《……いや、在りえなくは無い。

そもそもおかしかったのだ……生者である彼女が何故、サーヴァントと肩を並べられる程の戦闘力を有していたのか。

人理焼却による何らかの影響か、この特異点において彼女の存在が重要なものだったからなのか、正確な理由に関しては定かではないが。

知名度や歴史に刻まれた実績からして、死後に英霊となってもおかしくはない彼女が、いずれ手にする可能性のある力の一端を揮えるようになっていたと考えれば》

《成る程、宝具か!!

……だとしてもとんでもないことに変わりはない、人の身でサーヴァントの宝具を扱うだなんて!!》

《それだけ、ローマを守るといふ彼女の決意が強固なものだろう……これも、在りえない話では無い》

そうしてエミヤが語った仮定には、ただの思い付きでは至れないような、謎の確信と説得力があつて。

信用できる情報源として、リンクが新たな行動に移るためのきっかけとなった。

「アマデウス、楽団を貸して」

「構わないけど、どうするつもりだい？」

「ネロ陛下が作り出した、彼女にとって有利に働くであろう世界を、より強く確実なものにする。」

「ここが『劇場』だと言うのなら、そのために必要なのは」

「ああ分かった、無理に考えるようなことじゃなかったね。」

建っているだけの劇場なんて、ただの豪華な建造物に過ぎない。

それを『劇場』と定義づけるもの、より一層輝かせるものとは……」

「優れた演目」

言葉と認識を合わせた二人が、顔を見合わせながら笑い合う。

武器を振るうことに長けた指先が繊細な動きで奏でる弦の音と、天才音楽家が振る指揮棒が、ゆっくりと静かに重なった。

黄金劇場

https://youtu.be/A132czbox4
 https://youtu.be/OWF1JQ3gfw

今回の話を読む際は、是非ともこれらの曲をBGMにしてみてください。
 全てをなぞったわけではありませんが、執筆の際の参考にしました。

『時の勇者』の二つ名の由来、ハイラル王家の秘宝である『時のオカリナ』が登場し、その音色を響かせただけでも、管制室のスタッフと最終決戦の始まりを聞きつけて集まってきた野次馬達を騒がせたのに。

彼が取り出したふたつめの楽器……意匠に鳥が用いられた、輝かんばかりに美しい黄金の豎琴。

その存在がもたらした驚きは、上がりかけた声を逆に呑み込ませた。

『伝説』の中には多くの特別な力を持った楽器が登場し、その音色が持つ不思議な力によって勇者の旅路を助けているが、中でも別格とされるものが幾つか存在している。

たった今リンクが手にしているもの、『女神のハープ』はその中のひとつ。

女神ハイリアがかつて実際に使用し、その音色で奏でられる様々な曲を鍵として、初代勇者こと『大空の勇者』を導き続けた古代の神器。

それを、これから奏でる予定の曲にはこれを使うのが一番だからというだけの理由で、あくまでただの楽器扱いで普通に手に取ったリンクに、自身が周囲に与えた衝撃の凄まじさなど知る由もない。

頭で意識するのではなく、感覚が促すままに動き出した指先が弦を弾き、鳴った音が音階を成し、黄金劇場の広大な空間に広がっていく。

事実として稀代の天才であり、見えるものや感じるものがあまりにも違うために他者を尊重するということを知らず、自身が作り出した曲こそが至上と疑わない。アマデウスのそんな姿しか知らない者は、自身の指揮、自身の楽団が他者の曲を

引き立てるためのサポート役となることを厭わず、それどころか大切な役目として真剣に努めている姿を前に、彼の正気を疑うかもしれない。

アマデウス自身も、キャラではないということとは自覚していたけれど。

そんなことを気にしてはいられない、その他大勢から向けられる雑音など鼻で笑って受け流せる……生前を含めてもかつて無いのではと思う程の自信と確信で以って、自らが天才であることを再認識していた。

勇者リンクと共に奏でること、伝説に記される神秘の音色をより一層輝かせることを可能とするこの身の手腕に、心の中で声を張り上げていた。

そんな彼が奏でる至上の伴奏に支えられながら、メインのハープが奏で続ける聖なる旋律。

ふとした瞬間から、そこにもうひとつの主旋律が加わった。

人工的に調整された弦や管ではなく、誰もが生まれ持つ『声』という楽器によって紡がれる音色。

本来ならばそれは、儀式の女神役を務める少女や、封印を解く鍵の一部を担う精霊によって唄われる筈のものなのだけだ。

声変わりを終えていない十代の少年、それも『伝説』にて自身の歌声で窮地を乗り越えた逸話がある者となれば、文句も違和感もある筈もなく。

気にするべきはむしろ、リンクがハープの旋律と重ねながら紡ぐそれが『歌』であり、『歌詞』が存在するということの方だった。

カルデアのスタッフの中には幾つかの異なる言語を理解出来る者が何人か存在しているし、サーヴァント達を含めれば、現代では失われてしまったものも含めて相当な数の言葉に対応できる。

しかし、リンクが紡ぐ言葉はそのどれにも当て嵌まらないものであることを、誰もが試すまでもなく確信していた。

そして同時に彼らは、現代の知識や技術では翻訳することの敵わない、遙か昔に継承が途絶えた筈の古代ハイリアの言語で紡がれる歌詞の意味を知っていた。

『大空の勇者』の旅路を導いた歌については、『伝説』にきちんと描写されていたのだから。

女神のしもべに導かれし若人
空と大地を結び光をもたらす若人
ふたつの大いなる羽を光の塔に導く
彼の者の前に道は開け
詩の響きを聞く

本の中で確かに記されていた歌詞が、本では想像するしかなかったメロディーに乗って、頭の中に蘇る。

それは、世界の平和と人の未来を繋ぐために、神の器と力を捨てることを決めた女神が、いつか必ず現れるであろう勇氣ある者のために遺した歌。

女神や世界なんて壮大なものではなく、幼馴染の少女を助けたいという細やかな願いのために立ち上がった少年が、大切な人ごと全てを救う勇者と成るための旅路を導いた『女神の詩』。

人より勇氣があっただけの少年と、女神の生まれ変わりであっただけの少女。

二人の過酷な旅路の始まりとなった歌の拍が、徐々に遅くなっていく。

音と音の間隔も開き始めて、聴者達に曲の終わりが近づいていることを匂わせている。

……しかし終わらない、何故ならばこれは勇者と巫女の目覚めの歌。

『伝説』は、まだ始まったばかりだから。

余韻を残しながら響いた最後の音が、完全に消え去ろうとしたその間際、弦に添うだけだった指に新たな力が込められた。

ハーブの音色と勇者の歌声という、穏やかで優美だった『女神の詩』と同じ要素によって紡がれていることを疑ってしまいそうになる程に、魂の底から震わされる荘厳な調べ。

『女神の詩』に込められていたのが、逃れられない運命に対峙する者達への導きと祝福ならば。

一同はこの曲に、全てを受け入れ、覚悟を決めて前を向く『勇気ある者』の後ろ姿……そして。

その向こう側、『彼』が真っ直ぐに見据えている眼差しの上に、誰がいるのかも何があるのかも、どんなことが起こるのかも知れない広大な世界を幻視した。

『伝説』の中では『勇者の詩』と題されるその曲が、どの部分に登場してどのような役割を果たしたもののかと問われれば、答えられる者は多いだろう。

創世の三女神が未来への希望として遺した『黄金の聖三角』、それを手にするに

値する真の勇者となるための最後の試練を開く鍵。

女神の最後の言葉を忘れなかった三体の竜神と、空に昇った人々をすぐ傍で見守ってきた精霊が、それぞれ密かに守り続けた四つの旋律を重ねることによってよく完成する、女神が遺した最後の旋律。

それには、『伝説』で語られているものだけに留まらない、とある秘密が存在していた。

魔物を蹴散らしながら進むハイラルの大地で、邪悪な魔力の立ち込める城内で、馬に乗って駆ける夜空の下で。

時には軽快に、時には荘厳に、時には穏やかに……自分の頭の中だけに聞こえてくる旋律があったことを、『リンク達』は誰に話したことも無かったし、例の本にだって書かれていない。

その正体が『勇者の詩』であり、初代である『大空の勇者』から受け継いだ魂の記憶の一部であったことを知った時は、『ああ、そうだったんだ』と普通に納得したけれど。

それと同時に、『違う』とも思った。

『勇者の詩』はあくまで、下地となった曲の名……勇者の旅路と共に在り、その歩みを支え続けてくれたこの曲を表す題名は他にある。

それは『末代』が同調するまでもない、『リンク達』全員の共通認識だった。

今の今まで奏者として弦を弾き続けていたリンクの手が、瞬きの間に別のものを取っていたことに、彼の演奏についていくために集中していたアマデウスは即座に気がついた。

中継ぎとして曲無しで歌いながら、横目でアマデウスの方を窺ってくるリンクの様子からは、『流石にそれは無理かな……』という類いの躊躇いが感じられるのだけれど。

アマデウスはそれに、気遣いも心配も無用だという気持ちを込めた笑みを返し、初見の曲を即興でサポートするという天才の所業を為し続けていた指揮棒をそっと下ろした。

指揮が止まった筈なのに、楽団の演奏は終わらない。

ほんの一瞬の、演奏が途切れるどころか違和感すら生じない程に自然だった流れの中で、伝説の『風のタクト』を振るリンクへと指揮権の譲渡が行なわれていた。託されたばかりの楽団の演奏が、徐々に小さくなっている指揮棒の振り幅に合わせて、よくよく耳を澄まさなければならぬ程に細やかなものと化していく。

余韻まで含めて、全ての音が一旦完全に途絶えた……その瞬間。

空気が唸る音が聞こえそうな勢いで、指揮棒を構えるリンクの腕が振り上げられた。

神聖さすらも感じさせる程に荘厳だった雰囲気を一発でぶち壊しながら、高々と鳴り響いた金管楽器のファンファーレは、新たな勇者の誕生と旅立ちを祝う序曲。それに続いた新たな旋律は、音の高さや基本的な造りこそ『勇者の詩』を軸にしていることが明らかなのだけれど、その雰囲気や曲調は一変していた。

『知恵』で切り開き、『力』で薙ぎ払い、『勇氣』で立ち向かう……ひたすらに痛快で、胸を熱く高鳴らせた勇者の旅路。

その全てがまざまざと蘇ってくるような、勇者リンクの冒険そのものだと表せそうなのこの曲の名はと問われれば、『リンク達』は笑いながらこう答えることだろう。『ゼルダの伝説』だと。

内装や造りは変わっていないという事実が信じがたい程に、至高の公演を内包しながら輝きを増していく黄金劇場。

その全てをスポットライトにしながら……演奏と劇場の存在感に負けないどころか、引き立て役にしてみせる程の堂々とした美しい振る舞いで背を伸ばし、凛と胸を張りながら。

深紅の大剣を手に、薔薇の皇帝がステージの中央へと歩み出た。

いにしえの伝説そのものを象徴する楽曲の公演も、それを受けて光り輝く劇場も、全ては今のこの時に至るため。

舞台の上という限られた時間と空間の中で、在るべき自分、自らが望み周りに望

ローマの帝位

まれる自分を演じ抜かんとする主役^{ネロ}の命を賭した煌めきを、目の当たりにした全て

の者の瞳と心に焼き付けるために。

『リンクの詩』ではなく『勇者の詩』、全ての『勇気ある者』のために奏でられる曲を背に、『伝説』に語られる一幕の如く天上へと向けて切っ先を突き上げながら。ネロ・クラウディウスという新たな『勇気ある者』の、最高の盛り上がりの中で公演を締めくくるための言葉が、威厳と迫力を伴いながら轟いた。

「我が才を見よ!!」

「万雷の喝采を聞け!!」

「しかして讀えよ、黄金の劇場を!!」

「『童女謳ラウス・セント・クラウディウスう華の帝政』!!」

華奢な足からは想像し難い程の勢いで跳び、薔薇の花びらのような炎を散らしながら我が身へと迫る刃の前に、ロムルスは微動だにしなかった。

避けること、守ること、迎え撃とうとすることすらも、彼はしなかった……出来なかった。

何故ならばここは劇場、舞台という名の聖域。

『演者』のみが自由に動くことを許される、王権や神威すらも及ばない特別な場所だから。

大切な公演を台無しにするような暴挙は、神祖と謳われる偉大なローマ皇帝にですら許されない。

ネロ自身、そして彼女の具現化された心象風景である黄金劇場の美しさ、そこで繰り広げられた一連の公演の素晴らしさに見惚れて、いつの間にか心から『観客』となっていたロムルスルールとマナーの心身は、その法則によって完全に縛り上げられていた。ネロの刃が我が身へと向けて振り下ろされた、その瞬間になってようやく、自身の現状を認識したロムルス。

彼ほどの人が本気を出して抗えば、ネロの攻撃を避けられる程度には、戒めを破れたのかもしれないけれど。

ロムルスはそうしなかった、そんな気にすらなかった。

ネロの雄姿を最も間近に、真正面から堪能できる特等席で、公演のクライマックスを堪能し続けた。

「……………」

「ローマである」

最後の瞬間に、確かに見えて、確かに聞こえた。

初代皇帝の威厳ではなく、ただひたすらに親の愛に満ちていた優しい笑みと声は、ネロの全てを認めてくれていた。

今回の執筆めっちゃ大変でした、曲を文章で表すのって難しい……。

『女神の詩』はスカイウォードソードのメインテーマに組み込まれていますが、実はこれ、逆再生することで『ゼルダの子守歌』になるギミックが組み込まれています。

原曲と合わせてURLを貼っておくので、是非一度聞いてみて下さい。

h t t p s : \ y o u t u . b e \ n o m q z L B f O J o

h t t p s : \ y o u t u . b e \ b S z J 7 z E n w k

悪魔の問い

広大な黄金劇場全体を、真白に染め上げた光。

それが落ち着き、一同が視力を取り戻し終えた頃には、あの美しい劇場とその舞台を彩っていた楽団は既に消え去っていた。

しかしそれは、先程まで起こっていたことがまるで夢だったかのように、何もかもが元通りという訳ではなく。

劇場は消えても、押し寄せる木々に対して抗った痕跡はそのままの、見る影もない程に荒れ果てた玉座の間で。

ネロとカルデア一同は、体の端から徐々に金の粒子と化しながら、満足そうな優

しい笑みを浮かべるロムルスと対峙していた。

「愛しきネロ、そしてカルデアの者達よ。

見事であつた、もはや憂いは微塵も無い。

永遠なりし、深紅と黄金の帝国。

その全てを……お前と、後に続く者達へと託す。

富めるも滅ぶも好きにするがいい。

ローマが歩む道行きの全てを、私は認め、そして愛そう」

「神祖ロムルス……」

「胸を張るがいい、麗しき薔薇の皇帝よ。

……民が見ているのだから」

「えっ？」

ロムルスの言葉に思わずはっと顔を上げた、ネロや立香達の目に映つたものは。激闘の中でいつの間にかその存在をすっかり忘れていた、この場を映すふたつの

モニターの向こうで、多くの人々が歓声を上げている姿だった。

向こう側の声までは、こちらには届いていないのだけれど。

ここまで率いてきた兵士達だけでなく、連合側の民までもが声を上げて讃える『皇帝』が誰なのかを、察することはたやすかった。

一度は折ってしまった膝で再び立ち上がり、神祖を前に堂々と胸を張り、今のローマを担う者として戦い抜いた彼女の誇り高い姿を、最も近くで見守り続けたのだから。

モニターに映らないところで、呆けてしまっていた表情を引き締め、目尻に滲んでいたものを拭い。

準備万端に整えた笑顔で立ち上がり手を振れば、聞こえない筈の歓声すら聞こえてきそうな程に、向こう側の盛り上がりはより一層激しいものとなる。

戦いの勝敗ではなく皇帝としての格と有り様で以って、『連合』側についた者達の心を、在るべきローマの形を見事取り戻してみせた。

輝かしく、そして誇らしい後ろ姿に目を細めながら、ゆっくりと消えていくロムルス。

ローマの偉大なる神祖が、最後の瞬間までその目に焼き付けていた光景を前に、立香達も感慨と余韻に浸っていた……のだけれど。

「……終わりましたね、ネロさんのおかげで」

《ああ、本当によく頑張ってくれた。

ローマはもう大丈夫だ、後は僕達が聖杯を回収して特異点が消えさえすれば……えっ、あれ、そういえば聖杯はどこに？》

「レフ教授もです、すっかり忘れてました!!」

「……ねえ、レフと聖杯もそうなんだけど」

「誰か、リンクがどこに行ったか知らない？」

このまま綺麗に締め括られると錯覚して、すっかり緩んでしまっていた空気と表情が、一瞬で引き締め直された。

「ふざけるな、馬鹿げてる……ああ忌々しい、こんなことがあって堪るか!!

藤丸立香、マシュ・キリエライト、そしてネロ・クラウディウス!!

こいつらが有象無象のサーヴァントどもをかき集めてきただけならば、我が王から力を賜った上に聖杯を手に行っている私の敵では無かった……なのに、ハイラルの勇者だといふ!!

そんなもの、想定しているわけが無いだろう!!」

誰も聞いていない罵声を容赦なく吐き捨てながら、人氣が無い宮殿内に早足で靴

音を響かせているのは、最後の皇帝の消滅に伴って瓦解した連合ローマの元宮廷魔術師。

今はただ、この場から一刻も早く離れることのみを考え、興奮と焦りのあまりに視野が極端に狭くなってしまっている彼は、背後に忍び寄る者の存在に気付かない。しかしそれは、仮に彼が十分に冷静であったとしても変わらなかっただろう。あらゆる英雄の祖であり、冒険譚の原典である彼の逸話には、最高ランクのアサシンクラスに値する程の潜入や隠密の実績までもがあるのだから。

「マスターでありながらサーヴァントを……名目だとしても宮廷魔術師でありながら皇帝を置いて、一人で戦いの場から逃げ出すなんて」

「っ!？」

「どこまでも裏切り者の半端者なんだな、お前は」

心中で収めきれなくなった澱みを吐き捨てるように、ため息交じりで呟かれたそれはあくまで、誰に聞かせるつもりもない独り言だったであろうに。

音も気配も無いまま、すぐ後ろから発せられたそれはレフの耳に確かに届き、背中から首筋にかけて怖気と共に鳥肌を走らせた。

反射的に振り向いた視界の先には、何の変哲も無い宮殿の廊下が広がるのみ。極まった緊張からの落差による混乱から、頭と体の働きが強張った……その瞬間。先程までの正面、今現在の背後から伸ばされた手によって襟首を掴まれ、その事実を認識する間も無いまま、柔道の一本背負いでも食らったかのように高々と宙を舞い。

時間的にも精神的にも、受け身を取れるような余裕など持ち合わせていない状況でぶん投げられたレフは、背中からもろに床へと叩きつけられた。

「がはっ…!？」

あまりの痛みと衝撃に肺の機能が止まり、視界と思考が白一色と化す。

何とかそれを落ち着かせ、辺りの状況を改めて認識することが出来るようになった頃には既に、喉元に突き付けられた切っ先によってレフの身の自由は奪われてい

た。

既に変質したこの身にとっては、間近に存在するだけで怖気が走る聖剣の青白い刀身……その柄を握る手の更に先。

捕らえた獲物をいかに捌くか、そんなことを算段しているかのような冷たい目でこちらを見下ろしてくる少年を、血が滲むような眼差しで懸命に睨み返した。

丈夫で動きやすいだけの、何の変哲も神秘も無い旅装束を纏い、厚手の外套を頭から深くかぶって様相を隠した、十代の少年であるということを考慮しても小柄な外見からは、名のある英雄ならば持ち得ているような威厳や存在感といったものは窺えず。

初心者マスターに相応しいどこぞの三流サーヴァントだと、顔（正体）を隠しているのも真名を知られることがデメリットにしかないからだ、初見で判断した少年。

それが今、伝説に語られる通りの緑衣を纏い、自身が従えたローマ皇帝達が畏怖してもおかしくないような風格と迫力をまといながら、金の髪で彩られた碧い瞳でこちらを見ていた

形を得た『伝説』そのものと表すに相應しい、本の挿絵からそのまま飛び出してきたかのような有り様。

それを前にレフは、視野が狭まるほどに荒れ狂っていた激情が、不思議と落ち着いていくのを感じていた。

レフの身に起こった変化に、緑衣の少年……リンクも気付いたのだろう。

少しでも怪しい素振りを見せれば、その瞬間に喉笛を貫くと言わんばかりに張りつめていた空気が、喋ることを許される程度には緩められた。

「話してもらおうか、レフ・ライノール。

お前の背後にいる『我が王』とやらと、お前達が企む『人理焼却』の詳細について」

「……ああ、分かった。

だが、その前に聞かせてほしいことがある。

どうにもならない性分という奴でね……知らないこと、知りたいと思ったことを、そのままにはしてはおけないんだ。

これをどうにかしない限り、気になってろくな話が出来やしない」

「……………分かった、少しだけなら」

刃を突き付けられ、他者に生死を握られた状況で、自分の立場が分かっているのかと問い質されてもおかしくはないレフの言葉に、リンクはため息交じりで応えてやることにした。

それはリンクが仏心を出したからではなく、高揚しているらしく瞳孔が若干開いているレフの、詭弁としか思えないような言葉が事実であるということを察したから。

現状で唯一の、黒幕へと繋がる手がかり……それを出来る限り慎重に辿ることにしたリンクの耳に、彼という存在の根底を問うような言葉が聞こえてきた。

「勇者リンク、お前はなぜここにいる。

どんな理由で以ってお前は、カルデアの召喚に応え、人理を守るために戦うと決めたのだ？

お前が守るべきハイラルは、既にどこにも無いというのに」

言われた者がどう考えるか……そんなことを欠片も考慮していない、ただひたすらに自身の疑問^{不快感}を解消することのみを考えて発せられた問いかけに、リンクはぽつと答えられなかった。

あまりにも当たり前のこと過ぎて、今の今まで改めて考えたことが無かった疑問を前に、言葉を失って立ち尽くしてしまっていて。

これでは満足しないだろうとは思いながらも、ふと頭に浮かんだ最も単純で分かりやすい答えを、とりあえず口にしてみることにした。

「助けを求める声が聞こえて、それに応えたいと思ったから。

それではおかしいのか？」

「おかしくはないし、嘘でもないのだろうが、それだけと言うのはやはり不自然だ。サーヴァント召喚とは、何かしらの願いを抱いた英霊にそれを叶えるための機会と引き換えに持ち掛ける契約であり、そもそもの話として何の願いも無い者が呼び

かけに応えることは無い。

その事実を念頭に置いた上で、今一度問おう。

故郷も無い、血筋も無い、義理も縁も無い。

今の人理の何にも、何処にも関係の無い部外者であるお前が、わざわざ苦労して戦ってやる理由とは何だ」

「……………」

「ここまで言われてまだ、『助けを求められたから』などといった、馬鹿げた答えしか返せないのだとしたら。

女神にとってお前は、さぞかし都合のいい『機構』だったことであろうな」

容赦の無い言葉を真正面から受けた少年の目が見開き、言葉が詰まり、体が強張った……その瞬間を逃さず、渾身の魔術を構築させる。

最初こそ、変質したこの身が得た性分のようなもので本能的に未知への答えを求めたけれど、それによって思いがけず動揺し始めた勇者の姿に、状況を打破する方向へと方針を切り替えた。

問いかけの内容も、それに対して抱いた印象も紛れもない本物であり、勇者自身もそれを察したのか、素振りではなく本気のショックを受けたように見受けられる。それを好機と思い、行動に出たレフだったのだが。

「ぐああああああっ!!?」

「甘く見られたもんだ……衝撃を受けたのは事実だけど、それでも、この程度の揺さぶりで決定的な油断なんてするもんか。

それにしても、マスターソードの刃を受けてこの反応……どうやらその体、人のものじゃなくなってるみたいだな」

普段の彼と比べてしまえば、それだけで心臓が止まる思いをしそうな程に冷たく淡々とした口調や振る舞いも、『王から賜った力』の一端を知られてしまった事実も、聖剣を突き立てられた肩口から蒸気を上げている今のレフに気かけられる余裕は無い。

逃亡の企みを、どんな効果を發揮するか分からない魔術の発動を確実に食い止め

るためとは言え、いきなり剣を突き立てた容赦の無さには、レフの的外れな発言に對する怒りもあった。

今更のことかもしれないけれど、それでもリンクは約束を守るため、先程の問いに答えるために口を開く。

「お前の言う通りだよ、人は大義だけじゃ動けない。

俺だって、『顔も名前も知らないどこかの誰かのため』なんて曖昧な理由では、命をかける気になんてなれない。

俺は……『俺達』はいつだって、身近な誰かや何かのため、個人としての勝手な理由のために戦ってきた。

世界が救われたのはあくまで、そのついでに過ぎないんだ」

「今の人理と俺は関係ない……そんなことはあり得ない。

繋がっているのは無くても出来るし、時には作るものなんだから。

ハイラルがもう無いのは事実だけど、今の俺にはちゃんと、『カルデア』っていう居場所とそこで出会った人達との繋がりがあある。

彼らが誇り、取り戻したいと願う、ハイラルとは違う新たな人の世を見てみたい。そんな個人的な願いを、世界を救うための理由にするのにはおかしいか？」

胸を張ってそう言い切り、一仕事終えた気分で、大きく息をついたりリンクだったのだけれど。

数秒の間を置いて聞こえてきた、隠す気の無い嘲りが込められた掠れた笑い声に、今度は脱力感から来るため息と共に肩を落とした。

こうなることを一応可能性として考えた上で、それでも出来る限りの誠意を以って、質問に対して正直かつ真剣に答えたというのに。

（いるんだよな……自分に理解出来ない価値観を持っている人を、『そういうものあるんだな』と認めるんじゃないくて、『何て馬鹿なんだ』っていう括りでしか考えられない奴）

受け流すつもりで心を無にしたリンクへと、勇者リンクと言う存在を完全に見極

めた（氣になった）レフは、口角が釣り上がって鋭い齒が覗く笑みを向けた。

「成る程、これが勇者か……女神も上手くやったものだ。

幾万年もの長きに渡って、彼女の時代が保たれ続けたことも頷ける。

世が厄災に見舞われるたびに、『自分で決めたことだから』などとのたまいながら戦う者が、勝手に現れてくれるのだからな」

「……女神ハイリテを悪く言うな。

彼女には確かに、色々と振り回されたし、物申してやりたいことだって山のようにあるけれど。

それでも、人を慈しみ、人の世を守りたいと心から願い、その為に力を尽くしていた優しい女神ひとだってことは確かなんだ。

文句はあっても嫌いじゃないし……様々な形で導きや加護をくれたことには、間違ひなく感謝している」

「強がりはやせ。

人を慈しみ、守ることに尽力する善の女神……その『人』の括りに自分は含まれ

ていなかったことに、気付いていない訳がないだろうに」

不快な発言を聞き流そうと、心の構えを緩めていたのが仇となった。

ほんの僅かだとしても、確かに目を見開いて息を呑んだりリンクの姿に、レフは満足げに嗤いながら追い打ちをかける。

「都合よく使われ、人生を狂わされておきながら、一方的に押しつけた女神を恨むでもなく、自分自身で考えて決めたことだなどと世迷い事を抜かして。

魂の髄までそのような存在として染まってしまったお前は、これからずっと、お前という存在があり続ける限り、その狂った『運命』からは逃れられないのだから。

勇者リンク、お前という奴は本当に……」

「いい加減にしろ、その口を閉じ」

「本当に、憐れな奴だな」

実力行使でレフの口を塞ぎかけたリンクは、力なくぽつりと呟かれた最後の言葉に、振りや見かけではなく本気で呆然としてしまった。

レフが口にしたその言葉が、嘲り、貶めるためではなく、心からそう思ったが故のものだったから。

立香やマシュといった仲間達が、リンクに課せられた運命の過酷さに心を痛めながらも、それを自分なりに受け止めながら前向きに歩んでいきたいという気持ち

尊重してもくれる人達だったから、このようなことは初めてだった。

上から目線の憐れみを与えられたことに、呆けてしまった数秒の間を置いて気付き……かつてない屈辱から思わず爆発しかけた怒りは、瞬間的に鎮火した。

レフの目の奥に見つけてしまった不気味な意思の光、己が正しいと信じて疑わない狂った信仰心。

死にかけた小動物を見つけ、無駄に苦しむのは可哀想だと思って止めを刺してやる……治してはやれないか、他に何か選択肢は無いかなどを確かめもせず。

それが出来る上に、許されもする立場に自分はいるのだと、こいつは心から思っている。

そうして、憐れな弱者を救ってやったという達成感と、自身が強者であることの万能感に、何の疑問も躊躇いも無く酔い耽るのだ。

ふと抱いた発想から、そんなところにまで考察を発展させてしまったリンクの背筋に、氷の塊を放り込まれたような寒気が走った。

生理的な嫌悪感に苛まれながらも、黒幕に続く手がかりを一時の勢いに吞まれて失ってしまう訳にはいかないと、レフの肩口に突き立てている剣に思いつきり力を

込めてしまいたい衝動と戦うリンク。

彼を探して宮殿内を駆けまわっていた立香達が、ついにこの場に辿り着いたのは、そんな最悪のタイミングでのことだった。

「リンク!!」

「リンクさん!!」

「お前、また勝手に一人で動いて!!」

「げっ、しまった……」

何も言わずに別行動に出たのは、逃げ出したレフを一刻も早く追わねばならなかったのと、尋問に実力行使を用いることになる可能性を考慮して、色々な意味で立香達に見せたくないと思ったからだった。

実際に、今現在リンクが作り出している光景は、レフ・ライノールを背中から床に転がし、その肩口を刀身によって床に縫い付けているといった中々に衝撃的なもので。

負い目から生まれた動揺は、それまで積み重なっていたものと合わさって、明らかな隙を作り出してしまった。

「う……ぐおおおおおっ!!」

「なっ!？」

「きゃああああっ!!」

立香とネロが息を呑んだ音と、マシュが上げた悲鳴が、男の野太い絶叫によって掻き消される。

広範囲に広がった血だまりと、その上に転がった腕一本と引き換えに、勇者リンクに捕まるという窮地から抜け出してみせたレフの口から、激痛を掻き消すほどの興奮によって引っくり返った笑い声が迸った。

「癪だが認めてやろう、貴様らは第一特異点^{フ ラ ン ス}だけでなく第二特異点^{ロ ー マ}の修復をも成し遂げたと。

だが勘違いするな、それはあくまで『勇者リンク』の存在を計算に入れ損ねていたというだけのこと!!

これまでに成し遂げてきたことの全ては、貴様らの実力などではなく、ただひたすらに運が良かったからだということを忘れるな!!

ここから先は、そう簡単には進ませない……それ以前に、このまま何事もなく第二特異点の修正を成し遂げさせて堪るものか!!」

《皆気を付けて、特大の魔力反応を確認!!

これは……このパターンは、もしや》

「聖杯です、目視で確認しました!!」

レフが残された腕で取り出した黄金の盃に、辺りの緊張感は一気に高まった。聖杯には既に、何らかの現象を引き起こすための意図^{ねがい}が込められていて、途中で妙な暴走を引き起こしてしまう危険性を考えると下手に手が出せない。

《何をするつもりだ、レフ・ライノール!!》

「皇帝どもが悉くしくじった場合は、私の手で全ての帳尻を合わせる必要がある。その為に用意しておいた切り札だよ、まさかこんな状況で使う羽目になるとは思わなかったがね」

《なっ、切り札だって!?

ローマの建国者であるロムルスを召喚しておきながら、この上で一体何を喚ぶと言うんだ!!》

「古代ローマそのものを生贄として、私はとあるサーヴァントの召喚に成功している。」

奴ならば勇者リンクとも渡り合える、そんな確信を抱ける程の大英雄だ」

「なっ!?

「穏やかな滅びなど生ぬるい、圧倒的な力で以って七つの定礎のひとつを完全に破壊してやろう!!

我らが王の、尊き御言葉のままに!!」

「来たれ、破壊の大英雄アルテラよ!!」

瞼を開けることが叶わない程の、眩い魔力の光と共に、黄金の盃が持ち主の願いに応える。

その輝きが収まり、一同が視界を取り戻した頃には。

白い髪と白い衣装、褐色の肌に赤い瞳の少女が、今の今まで誰もいなかった筈の場所に立っていた。

そこに居るだけで気圧されそうになる程の、凄まじい魔力と存在感を、折れそう

な程に華奢な体軀から容赦なく迸らせながら。

以下は、ある程度書いたところでそれ以上進まなくなり、お蔵入りとなった別展開バージョンです。

結構な量を書いたし、本採用となった展開では入れられなかった要素も入っているので、このスペースを利用して入れておきます。

戦いの喧騒が過ぎ去り、事態は穏やかな終結を迎える……僅かな違和感を無意識のうちにスルーして、そんなことを考えかけてしまってもおかしくない程にあから

さまだった『めでたしめでたし』の空気をぶち壊しながら、お呼びでない者の怒号が突如轟いた。

「何だ、一体何がどうなっているというのだ、この状況は!!」

《ああっ、レフ・ライノール!!》

「すっかり忘れてました……」

「それどころじゃなかったからな」

「サーヴァントにマスターが劣ると言うのか、魔術師としてもマスターとしても成り立ての三流風情が!!」

「……確かに俺は素人同然のへっぽこ魔術師だ、その辺りは事実として認める。

だけでも少なくとも『マスター』としては、サーヴァントとの信頼関係すら築けなかった上に、一番大事な最終決戦の場からサーヴァントだけ残して逃げ出したどうかの誰かよりはマシだと思ふな」

「貴様如きが私よりも優秀だと!」

「あんたがそうだなって言っていないんだけど……自覚はあったんだ、ふうん」

怒りと苛立ちにただでさえ引きつっていたレフの顔がより一層歪み、むやみに挑発するような発言を慌てて咎めるロマニの声も聞こえてくるけれど、後悔もやめるつもりも立香には無かった。

英霊達を単なる強力な使い魔ではなく、尊敬すべき先達であり、頼りになる仲間であると思っている立香にしてみれば、ほんの僅かな時間だけで十分すぎる程に垣間見えた、サーヴァントの人間性を考えずに使い潰そうとするレフのやり方は認められなかったし。

カルデアに来たばかり、人理修復の旅を始めたばかりの頃ならばいざしらず、幾つもの修羅場を括り抜けてきた今の立香にとって、レフ・ライノールは『あの状況やあの人に比べれば何てことないな』と思えてしまえるような存在になっていた。優位に立つための強がりではなく、本気で侮られていることを察したレフの頭の中で緒が切れる音が響き……ロマニの悲鳴じみた声をBGMに、なりふり構わず害してやろうとした試みが、両者の間を遮った剣と盾によって阻まれる。

何を指示されずとも、迫る危機から自然とマスターを守ったサーヴァント達。

両者の関係性を考慮すれば至極当然である筈の光景を前に、レフの舌が盛大な音を鳴らした。

「糞餓鬼が、サーヴァントがついているからと調子に乗りやがって……思い上がるんじゃないぞ、そういうみっともない姿を指して『虎の威を借る狐』というんだ」
「……あなたの認識は間違っています、レフ・ライノール。

強大な力を持った英霊の主として、彼らが誇るに値する者として堂々と胸を張る。そう努めることは、マスターとしての責務なのではないですか？」

「自分には出来なかったからって、的外れな駄目出しをするな。

ただ単に調子に乗っているのか、英雄を率いるに相応しい存在になろうと努めているのかなんてものは、ちょっと付き合えばすぐにわかる。

少なくとも俺は、マスターとサーヴァントとしての主従関係なんかが無くても……俺自身の意思で、立香のサーヴァントなんだって胸を張りながら、立香の力となつて戦いたいって思うよ」

「……ハイラルの勇者。」

世界の危機を幾度となく救った、『英雄』の祖と謳われる貴様がか？」
「悪かったな、どこの誰とも知れない木っ端英霊でなくて」

魔術師としてもマスターとしても、所持するサーヴァントの質でも優位であると疑っていなかった自分が、考えるままに口にしてしまった発言をそっくりそのまま返され、怒りと苛立ちではなく後悔と羞恥によって顔が引きつる。

成り行きで世界を救うことになってしまった数合わせのマスター、自身に力を貸している英霊の名も知らない中途半端なデミ・サーヴァント、か弱い人の身で無駄な足掻きを続ける少女皇帝。

その三人が合わさり、有象無象のサーヴァントをかき集めて対抗してきただけならば、『王』から力を授けられ、聖杯を手中に収めているレフにとっては大した脅威では無い筈だった。

狂化していてもなお抗ったカリギュラや、割り切ったように見せて本心では躊躇っていたカエサルらといった半端な皇帝達には本当の意味での期待はしていなかったし、最後の壁であるロムルスまでもがローマ可愛さにしくじったとしても、

自分が持つ力さえあれば最終的に全てを覆せると思っていた。

今の世とは比べものに出来ない程の神秘に満ちていた先史時代の大英雄、『勇者リンク』などという反則レベルの想定外さえ無ければ。

（怖気が走った訳だ、もしかしくなくてもあれば『伝説』に語られる退魔の剣……女神によって邪神への対抗手段として作り出され、勇者自身が試練を越えて鍛え上げた最古の神剣。

『我が王』から賜った力とはあまりにも相性が悪すぎる、何の策も無いまま正面からまともにやり合うのは無謀だ。

だがしかし、私にはまだ別の手段が……いいや駄目だ、安易に聖杯を使うのもまずい!!

奴が伝説に語られたとおりの存在であるならば、持っていても不思議ではない!! あらゆる無茶ぶりを実現し得るほどの、膨大な魔力の塊を称しただけのものとは違う……神の奇跡によって作り出された、真の願望器を!!)

抜き身の聖剣を突き付けてくる少年へと意識と警戒の大部分を割きながら、何とか確保していた僅かな思考力が、魔術によって作られたふたつの窓へと向けられる。ロムルスと相対したことで心が折れたネロの醜態を彼女の民へと見せつけ、皇帝としての権威を失墜させるための策の一環として、ロムルスにも教えることなく密かに繋げた通信用の魔術。

勇者リンクの登場という想定外の事態によって当初の目的が果たせるかどうか分からなくなり、始まってしまった戦闘の余波から逃げる際にきちんと消していった筈のそれが、今も確かに機能している。

自身の魔術に対して干渉するどころか、何の障害も無しに乗っ取ってしまうような荒業が、立香やマシュに出来る筈が無い。

カルデアからの干渉は観測や助言が精々であろうし、キャスタークラスのサーヴァントの存在も確認出来ない……ということとは。

「まさか貴様、使ったのか？」

聖なる盃に象徴される万能の願望器、その原初たる聖三角を……」

「用意した当人が捨てていったものを再利用しただけだ、もう要らないんだったら文句は無いだろ？」

使い込んだ手袋で覆われた、今は何の変哲も無い左手の甲を軽く掲げながらのリンクの言葉に、激情をギリギリのところまで辛うじて抑え込んでいたレフは堪らず爆発した。

「ふざけるな、そんな馬鹿げたことがあってたまるか!!」

全く以って理解出来ない……藤丸立香、マシュ・キリエライト、ロマニ・アーキマン!!

勇者リンクと黄金の聖三角……これほどの切り札を揃えておきながら、なぜ!!」

「なぜそれを、今の今まで使わなかった!!」

「最前線に勇者を逐次投入していれば、黄金の聖三角に連合側の兵力を減らせだの重要拠点を探し出せだのといった願いを叶えさせていけば、もっと早くに戦況は動いていただろうに!!

あからさまに手を抜きおって、貴様らは私を馬鹿にしているのか!!」

カルデア側の戦力を計り損ね、実際に侮ってしまったせいで最後の最後にひっくり返された苛立ちをそのままぶつけたレフは、噴火じみていた怒りに思いがけず水をかけられて立ち尽くす羽目になった。

『上手くいった』『まんまと引っかけりやがって』と言わんばかりのしたり顔でこちらを見ていた筈の立香やマッシュが、目と口をぱっかりと開いた間抜け顔で呆けていたのだから。

「……どうしてリンクを使わなかったんだ、なんて。

まさか言われるとは思わなかった、だって」

「リンクさんはどんな時も、どんな状況でも、誰よりも頑張って下さっていました。むしろ私達は、どうすればリンクさんが安心してくれるかと、ちゃんと休んでもらえるようになるにはどうしたらいいかと、そんなことをずっと考えていたのに」

《情けないし申し訳ないことだけど、『勇者リンク』の出し惜しみが出来るような余裕なんて、今のカルデアにはこれっぽっちも無いからね……》

「……連合の宮廷魔術師よ。」

神祖ロムルスに勝ると豪語する割に、貴様は何も分かっておらぬのだな」

何の意図も裏も無しに、本当に思わずポロリと零してしまっただけの立香達の本音に対して、本気で言葉を失ってしまっていたレフの様子に思うところがあつたのか、『カルデア側の事情』という認識の範囲外にいたネロまでもが堪らず割って入ってくる。

隠す気のない呆れと苛立ちが込められていたその声に、レフは一瞬で怒りを込み上げさせたのだけだ。

「なっ……小娘が、粹がるんじゃない!!

どうせ貴様だって、勇者の存在を伏せて無駄に争いを長引かせたカルデアに内心では不満を」

「感謝しておる。

余とローマのことを慮った、正しく冷静な判断に、心から」

「……………なん、だと？」

それもまた、自身が露わにした激情に対して欠片も引きずられる様子を見せなかったネロの、落ち着いた振る舞いと発言によって押さえ込まれた。

『『勇者リンク』である、最初に告げられていれば……ローマを守らねばならぬという重責に追われ、なりふり構わず救いの手を求めていたあの状況で、縋らずに堪えられたと言い切れる自信は無い。

もしそうなってしまっていたら……勇者の情けに縋っただけだと、為すべきことを何も為せなかったという無力感に苛まれ続け、皇帝としての誇りを胸に立つこと

は二度と出来なかった。

カエサル公や神祖ロムルスも、余を当代と認めて、ローマの未来を託してはくれなかったであろう。

それでは意味がない……『ローマ』という国と時代の形がほんの一時保たれようとも、そこから先へは繋がらない。

貴様の目には無駄な遠回りに見えた道のりが、土台から崩れかけてしまっていたローマが再び立ち直り、真の誇りを取り戻す為には必要だったのだ」

諭すようなネロの言葉を、レフは言葉なく立ち尽くしたまま聞いていた。

ショックを受けているらしいその様子を前にした立香達は、自身を信じていた者達を裏切り、人理焼却を企てるような者だとしても、流石に何かしら感じ入るものがあったのかと思ったのだけだ。

ほんの僅かな期待が混じっていたその予想は、すぐさま覆されることとなる。

レフが驚いていたのは何かを感じたからではなく、どうしようもない弱さや苦悩を越えて、皇帝として立派に在り続けてみせたネロの姿と言葉を前にしてもなお、

何ひとつ感じるものが無かったからなのだと。

ここまで書いたところで、ここから先の展開へと繋げることが出来ずに、別バージョンを一から書き直しました。

更新に間が開いてしまってすみません、次はもっと早く上げられるよう頑張ります。

神の鞭

《アルテラ……もしや、フン族のアッティラ大王か!?

『凶暴で強引な者』を示して『アッティラ』と称する、そんな認識を持つほどのトラウマをヨーロッパの人々に刻み込んだ戦闘王!!

財宝を得たい訳でも、恨みを晴らしたい訳でも無い……ただ単に攻め滅ぼしたいからだと思えないような容赦ない蹂躪に、ローマは散々に苦しめられたんだ!!

完全の後始末モードに入っていた筈の状況と心境を敢え無くぶち壊されたロマニ

が、引っくり返って悲鳴じみた声を上げる。

その反応が満足のいくものだったのか、完全に調子を取り戻したらしいレフの笑い、ロマニの声を掻き消す勢いで響いた。

「あはははっ !!

その通りだよ、ロマニ・アーキマン !!

墮落した人類に齎された神罰の化身と恐れられたこいつこそ、ローマ帝国を滅ぼす災厄となるに相応しい !!

さあ殺せ、破壊せよ、焼却せよ !!

その力で以って、特異点もろともローマを焼き尽くせ !!

このサーヴァントこそ究極の蹂躪者、アルテラは英霊ではあるがその力は」

「黙れ」

「え？」

新たな敵の登場によって張りつめていた空気、状況を知らない第三者でさえ癪に

障るであろう嗤い声、呆然とした表情のまま右と左に分かれた体。

七色に輝く光の、縦に走った一閃によって、様々なものが一瞬で断ち切られた。

《……な、何だ、レフ・ライノールの反応が消えている。

立香君、マシュ、リンク君、一体何が起こったんだ!?!》

「……………報告します、ドクター。」

レフ・ライノールは、彼は……召喚したサーヴァントに両断されました」

《両だ……って、ええっ!!

殺されたってのか、自分が呼び出したサーヴァントに!?!》

呆然と立ち尽くすマシュと、驚愕の声を上げるロマニをよそに。

立香は、衝撃的な光景を前に殆どが吹っ飛び、かえって冷静な部分のみが残ってしまった思考力で、前々から抱いていたとある懸念が現実のものとなったことを実感していた。

いつかこうなると思っていた、と。

（分かってなかったんだな。

サーヴァントがマスターに逆らわないのは、その人が個人的に律儀な性分だった
り、自分の願いを叶えたり他の目的を果たすために我慢しているからという部分が
大きくて。

サーヴァントはマスターに従うものだという大前提や令呪の戒めなんか、その気
になれば簡単にぶつちぎって、気に食わないマスターを排除することを躊躇わない
人だって、中にはいるんだってこと）

マスターというだけで尊重し、無条件で従ってくれる善性のサーヴァントのみと
接し続けていたら、自分もいつか思い上がっていたかもしれない。

名君と暴君の間を気分次第で行ったり来たりする厄介な黄金の王様が、その驕り
を芽の段階で叩き潰し、現在進行形で見定め続けてくれている現状は幸運なものな
んだと、立香は心からそう思った。

そもその話として、それを幸運だと思える性根から、既にレフとは違うのだと。

周りが知れば口々にそう言われそんなことを考えながら、立香の無意識は懸命に、狭まったせいで余計なことにしか気を回せずにいる思考回路の止まっている部分を揺り動かした。

今はこんなことを考えている場合じゃないと……とんでもない力を持ったサーヴァントが解き放たれてしまったのだという現状の危うさを、マスターとして正確に認識していたから。

食いしばった歯を軋ませる彼の目の前で、事態は更に悪い方向へと進もうとしていた。

「せ、聖杯がアルテラの手に……吸い込まれて、えっ。

……吸収、している？」

「リンク、やめさせろ!!」

「ああもうっ、仕方ないか!!」

レフが既に人では無くなっていたことを現状で唯一知っているリンクからすれ

ば、まだ警戒を続けていたかったのだけれど。

今この瞬間の対応に集中しなければまずいという現実を前に、他の皆がとうに忘れていた半分ずつの残骸を意識から止む無く排除した。

聖杯は既に、アルテラの手のひらに半分ほど取り込まれてしまっている。

あれではもはや、叩き落すことは叶わない。

ならば腕ごと断ち切るまでと、マスターソードを構えて跳んだリンクを、レフを両断したのと同じ七色の光が襲った。

咄嗟に防ぎ、体勢を整えて再び聖杯の奪取に挑もうとしたリンクだったが、その思惑は叶わなかった。

マスターソードによって弾かれた光の剣が、長くしなやかな軌道を描きながら、後方の立香達へと向けてその切っ先を伸ばしたから。

マシュがいるとは思ったのだけれど、立香だけでなくネロも守らなくてはいけない状況では、二人の位置関係と剣の軌道によっては対応しきれないかもしれない。

瞬間的に脳裏に過ぎった懸念事項は、リンクに攻めではなく守りを選ばせた。

その選択は正しくて、マシュの護りを巧みにすり抜けて立香達の身に迫ろうとし

ていた一閃を、ギリギリのところで跳ね除けることに成功したのだけれど。

その攻防に費やされてしまったほんの僅かな時間は、聖杯を奪うという当初の目的にとっては致命的なものだった。

《ああっ、聖杯が!!》

「……これは、ちよつとまずいな」

聖杯を……無尽蔵の魔力リソースを取り込んだアルテラの体が、聖杯そのものと化したと錯覚しそうな魔力の波動を迸らせる。

マスターという鎖から解放たれただけでなく、燃料の供給という面でも限界を無くした彼女を止められるものなど、もはや何も無かった。

「私は」

「フンヌの戦士である」

「そして、大王である」

「この西方世界を滅ぼす、破壊の大王」

「何か、嫌な感じが………何かが来る、余にもわかる!!」

《魔力反応増大!!

これは、宝具の………それも、対城宝具クラスの解放だ!!》

「マスター!!」

「宝具使用だ、急げ!!」

「お前達は言う」

「私は、神の懲罰なのだと」

「神の鞭、なのだと」

絶大な破壊力を伴いながら、このまま世界を呑み込んでしまうのではと思わせる程の勢いで七色の閃光が迸った。

石製の床に踵を減り込ませながら、その衝撃に真正面から耐えるマシュ。自らもその背に手を伸ばし、大した力添えには慣れないだろうことは分かっているが、ながらも懸命に支えるネロの口から、悲鳴にも似た声上がる。

「すまぬマシュ、何とか頑張ってくれ!!」

そなたに耐えてもらわねば、余らだけでなく民までもが……っ!!」

（そ、そうだ……この宮殿の周りには、一般の人達が住んでいる城下町が）

しかも方向によっては、町から少し離れたところで待機している兵士達をも巻き込まれかねない。

歯を食いしばり、全身の骨を軋ませながら踏ん張るマッシュを少しでも支えるべく、ネロに続いて手を伸ばした立香。

その脳裏に、突如ノイズのような違和感が走った。

『……………しを』

「えっ」

『……しを喚べ』

「誰？」

『はやく』

「……令呪が、光って」

『私を喚べ!!』

『マスター!!』

マシユの背中を支える筈だった、甲に赤く光る紋様を刻む手を握り締め、掲げる。その口が呼んだ名は、立香どころかカルデアの誰一人として、今この瞬間まで考えもしなかった人のものだった。

「卑王鉄槌」

「極光は反転する」

「光を吞め!!」

「『エクス
カリ
バー
・
モル
ガン約束された勝利の剣』
!!」

本来ならば真正面へと向けて放たれるのを、例外的に真上へと向けて打ち上げられたそれは、アルテラが発した宝具を巻き込んでその軌道を変えさせた。

閃光、そして轟音と共に、上半分が突如吹っ飛んだ連合ローマの宮殿。

目撃者となった民や兵士達は、そんなとんでもない光景を前に立ち尽くすか、もしくは腰を抜かしていた。

自分達がそれに巻き込まれていたかも知だなんて、そんな不吉であり得ないことはわざわざ考えないようにと、無意識のうちに努めながら。

騎士王の真実

一瞬で見る影も無くなってしまった宮殿……その残骸を退けながら、幾つかの人影が立ち上がる。

何とか無事だったことに胸を撫で下ろしながら、一息つきたいところなのだけだ。

黒い刀身の堕ちた聖剣を手に、変わらない冷たい眼差しでこちらを見据えるサーヴァントの存在が、もう大丈夫と気を抜くことを許してくれない。

《……皆が無事だったのは、本当に喜ばしいことだけだ。

反転の騎士王……召喚されて以来、ずっと姿を現すことの無かった彼女が、どうして今になって》

立香とマッシュが、マスターとデミ・サーヴァントとして最初に、否応も無く挑むこととなった冬木の特異点。

その最後の強敵として、越えるべき最初の難関として立ちはだかり、彼らに人理修復に挑むための覚悟を問うた者こそが、堕ちた騎士王ことアルトリア・オルタだった。

記録を持っているだけの別個体ではなく、特異点についての記憶と認識を明確に受け継いでいる状態の彼女が召喚されてしまった際の混乱は、未だ強烈な印象として当時居合わせた一同の脳裏に焼き付いている。

だとしても、『人理を守るために協力してもらいたい』という要請を基準として行われている、カルデア独自の召喚システムに応えてくれたからには仲間として共に頑張ろうと、何とか気持ちを切り替えようと努めたのだけだ。

最低限のやり取りのみで契約を結んだ後は、一度は敵対した身で召喚に応えたこ

とへの理由付けや弁明すらもエミヤに丸投げし、そのまま行方を晦ましてしまった彼女に対する疑心や懸念は、未だ消え去ってはいなかった。

第一特異点の修正完了以降は、ジャンヌ・オルタや彼女の配下だったサーヴァント達といった、敵対していたけれど今は明確に仲間として尽力してくれている者達の存在が、アルトリア・オルタの異質さをより一層際立たせていて。

そんな彼女が、何の前触れも無くいきなり、立香達の危機に駆けつけるという形で現れたという事実に対する、意味と迷惑を考えざるを得ない。

味方しかいない筈なのに、戦いがまだ続いているかのようにガチガチに強張ってしまっていた空気。

それを壊したのは、自分が為すべき役割を最も正確に、そして彼女が取った行動の意味を最も素直に受け止めた者だった。

「……アルトリア、でいいのかな。

声をかけてくれてありがとう、本当に助かった。

俺もまだまだだなあ……さっきアマデウスに来てもらったばかりだったせいか、

またサーヴァントを呼ぶって発想がすっぱ抜けてたよ」

「……………」

「や、やっぱり、最初から名前呼びは嫌だった？」

「いや、それは別に構わないのだが。」

……やはりお前は変な奴だな。

組織内の不安要素として疑心を抱くには十分な程に、疑わしく思えるような態度を取ってきた。

そんな私の急な心変わりに対して、管制室にいる連中のように警戒することの方が、反応としては妥当なものなのだが」

「警戒すること自体は大事だと思うし、ドクター達がそうしてくれるのは頼もしい。だけどそれはマスターがやることじゃない、俺の役目はサーヴァ^きン^みタ^たチを信じること。」

ドクターに聞いたことがある、カルデアの召喚システムは『人理修復に協力すること』を了承してくれたサーヴァントしか喚ばないって。

だから、君に何かしらの理由があって姿を見せないんだとしても、それがカルデ

アの邪魔をすることだとは思ってなかった。

……それに、急な心変わりなんかじゃない。

ずっと見守っていて、何かあったら駆けつけられるように気を張っていてくれたから、急な展開に対応しきれずにいる俺をサポートすることが出来たんだ」

そうだろ？……と言いながら笑う立香に、呆氣に取られた様子で口を半開きにするアルトリア・オルタ。

彼女が次の瞬間に浮かべた表情は、変わらない冷たさを保ちながらどこか温かさをも感じる、溶け始めた春先の雪のようだった。

「間に合わせのマスターと、指揮系統や戦力の大半を失った組織を、少し時間をかけて見極めようとした判断自体に後悔は無いが。

決断が遅すぎたという点においては、詫びておいた方がいいのかもしれないな」

「遅くなんかない、ちゃんと間に合ったよ」

「……そうか。」

既に多くのサーヴァントが集い、カルデアの再編が為されかけている現状では、今更なのかもしれないが。

それでも構わないのならば、改めて、今度は心からこの言葉を口にしよう。

クラスはセイバー、真名はアルトリア・オルタ。

問おう、貴様が私のマスターか？」

『従ってやる』と言わんばかりの威厳と迫力に満ちた、ちょっと異質な従者の誓い。それに対して、満面の笑みと共に伸ばされた手の甲には、主従ではなく信頼を示す繋がりとしての令呪が刻まれていた。

「あの騎士王を認めさせるなんて……凄いぞ、流石は立香君だ!!」

「それにしても、何を考えているのかと思えばガチでこちらを見定めに来ていたとはね。」

合格基準がどの程度のものだったのかは想像するしか無いけれど、お眼鏡に叶ったようでは何よりだ。

果たせなかった場合はどうなっていたか……なんて、もはや意味が無い上に怖い

ことを考えるのはやめておこう」

カルデア内部における、現状で最大の懸念事項が解決したと同時に、強大な戦力がまたひとつ加わったという事実が、安堵から来る軽口を交えながら共有される……のだけだ。

「……………」

そんな中でただ一人、赤い外套のアーチャーこと、カルデアにおいては食堂の主と称した方が馴染みのある存在であるエミヤだけが、誰と心情を共有するでもなく無言で立ち尽くしていた。

斜め上の虚空を通して、どことなく遠くを見ているような眼差しは、半分死んでいると称しても間違っていないのではと思わせる程に力の抜けたもので。

『ほわんほわんほわんえみえみ〜』という謎の擬音語と共に、彼の脳裏にある過去の場景が蘇った。

『んくっ、んくっ……………ぷはあっ。

けぷっ…………おい弓兵、盃が空だぞ!!

急いで持ってこい、摘みも忘れるな!!』

『承知した、コーラとポテトのお代わりだな。

だがこれで最後にしてくれ、いくらサーヴァントでもジャンクフードのドカ食いは健康に悪い』

『何を言うか、まだ十回だぞ!!』

『もう十回、だ。

普段節制した上でのたまの楽しみならはいざ知らず、毎晩のようにこんな。

掃除と仕込みに集中したいとは人払いの口実ではあったものの、時間があれば実際に済ませてしまいたいことなのだが……』

『やかましい、貴様の都合など知ったことか!!

いいからさっさと持ってこい、吞まずにはやっておれんのだ!!

……人理焼却の黒幕によって打ち込まれた、特異点という名の七つの楔。

その修正をひとつでも成し遂げることが出来れば、人理修復を進めるために必要

な最低限の基準はクリアしていると認め、姿を現すつもりでいた。

第一特異点から帰還する際には出迎えて、改めて契約の口上を述べてやる筈だった……なのにつ!!』

『……勇者リンク』

『予想できるかそんなもの!!』

どんな顔と態度で出ていけと言うのだ、そんなビッグネームの登場に沸き立っている場なんかにつ!!』

二番煎じの型落ちもいいところだろうが、例え反転した身だろうと守らなければならない威厳やプライドというものがあるのだ!!』

『そうして、もたもたしている間に仲間入りのタイミングを完全に逃してしまった鬱憤と遣る瀬無さを、夜ごとの自棄ジャンクで発散するさまに、威厳もプライドも無いと思うのだが……』

『やかましい!!』

よもや貴様、自分もこの事態の原因の一端を担っていることを忘れてはいないだろうな!!』

私がどのような心づもりでいるのかを唯一把握しておきながら、私の存在を完全に忘れて歓迎の宴など開きおって!!

出ていけなかった理由のダメ押しはお前のアレだぞ!?!』

『……………特製バーガーはいるかね?』

『誤魔化すな、だが貰う!!』

『……真面目な話になるが、これから一体どうするつもりだ?

何食わぬ顔で出て行って、そのまま自然に受け入れられるような段階は、既に通り越してしまっているのだが』

『分かっている、私とてただ無為に自棄食いをしているわけでは無い。

次の機会は、近々始まるであろう第二特異点の攻略……今度は、座して帰りを待つなんて悠長なことはいらない。

見ている、マスターや勇者達を危機から救う絶好のタイミングで駆けつけてやるからな!!』

（機を窺いすぎて、
またもや逃してしまったのかと思っ
ていたが……間に合ったよ
うで何よりだ）

予定外の強敵の登場なんて望むようなことでは無いのは分かっているのだが、彼女の立場と精神、及び食堂の安寧を考えると、密かに安堵せずにはいられない。

特異点の様子を見ることが出来る管制室のモニターには、見た目こそいつも通りの冷たさと余裕を保っているものの、内心は自分以上の安堵に満ちているであろうアルトリア・オルタが、立香だけでなくリンクやマシュとも話している様子が映し出されていた。

立香と同じく命の危機を味わわれたマシュも、直接の顔合わせはこれが初めてな上に好意的な話を一切聞いていなかったであろうリンクも、そんなことを感じさせない笑顔でアルトリア・オルタと接しながら感謝の言葉を口にしていく。

立香と並んで、実働部隊の筆頭としても、精神的な支柱としてもカルデアという組織を支えているあの二人が受け入れてくれたのなら、もう彼女は大丈夫だろう。そう思い、本当の意味で安心することが出来たエミヤは、胸の辺りでつかえてしまっていた息を吐きながら踵を返した。

そんな彼の様子に気付いたクー・フリーンが、首だけで軽く振り返りながら声を

かける。

「どこへ行くんだ、まだ終わってねえぞ」

「わかっている、だからこそ今のうちに始めておきたい」

「何をだ」

「打ち上げの準備さ、ものによっては仕込みに時間がかかるんでね」

不敵に笑いながらのエミヤの言葉に、一瞬呆然としてから吹き出したクー・フリーン。

彼を含めた何人かがメニューのリクエストを出してきて、苦笑と共に頷いた。

事態はまだ終わっていないし、最後の壁は呆れるほどに困難で、それなりに苦労はするだろうけれど。

全部乗り越えて、最後にはちゃんと帰ってくるのだということを、この場に居る誰もが信じている。

管制室を後にする間際、最後にふと振り返ったモニターには、城ひとつが吹っ飛

んだ惨状の現場に慌てて駆けつけてきたらしいブーディカと荊軻の姿が加わっていた。

少し前の感想で、『アルトリア・オルタが姿を見せないのってもしかして…』という内容のものを頂いていたのですが。

すみません、こんな理由でした（笑）。

これは、モードレッドのネタを書くずっと前から温めていたもので、どうしようかとちょっと思っていました……。

晩年のアルトリアは、完璧な王であろうとするあまりに自分の中のものを色々と殺し過ぎて、槍を持ち続けていたわけでもないのに半ば獅子王モードに入り込んでしまっていました。

モードレッドの最期の献身や、聖杯戦争で経験したあれこれのおかげで色々と

吹っ切れているので、今はちゃんと心身ともに立派な騎士王だった頃の自分を取り戻しています。

アーサー王の晩年は、確かに全体的な評価を下げる要因となっていました。が、それで全てが台無しにはなりません。

むしろ後世の人からすれば、当時の人達がアーサー王に裏切られたと思った理由が、『決して間違えない、人ならざる完璧な王様だと思っていたら、好き嫌いで物事を判断するただの人間だった』だということを知れば、『そんなの当たり前だろう、むしろアーサー王のことを何だと思ってたんだ……』と呆れたりもするでしょうし。

『長年に渡って、そんな無茶な偶像扱いを強いられていたのだとしたら、晩年になってぶち切れるのも無理ないな……』と考察して、評価を見直す人達が出てきた筈です。

当時の暴君が、冷静かつ客観的な判断が出来るようになった現代で再評価される、なんてことはよくあるのです。

歴史系ユーチューバーが『名君か暴君か、アーサー王の真実』なんてタイトルを

つけて、1時間くらいの動画でじっくりと語る対象とかになっているのではないのでしょうか。

VS
アルテラ

地平線に沈みかけた陽に照らされ、世界が赤く染まり出した夕暮れ時。

日本風に表すのならば黄昏時、もしくは逢魔が時。

朝でも夜でもない狭間の瞬間が作り出す、この世のものとは思えない程に非現実的な光景の中を歩く、一人の少女の姿があった。

道なき道をただ真っ直ぐに、この時代で最も栄えた文明を象徴する地へと向けて進み続ける少女。

白を纏った儂げな様相、名のある芸術家が魂を込めて描いた絵画のように美しいそれは、言うなれば退廃の美だった。

身の内に取り込んだ聖杯から溢れ出す膨大な魔力と、破壊という概念そのものを象徴する存在として喚ばれ、その役割を過たず果たさんとする彼女の有り様そのものに惹き付けられた数多の魔物を百鬼夜行の如く引き連れるそのさまは、世界の終わりを髣髴とさせるには十分なもので。

このまま何事もなければ、形を持った破滅はローマの王都を滅ぼし、ローマと名がつく土地の全て、ローマを象徴とする時代そのものを跡形も無く蹂躪したのだからうけれど。

生憎とそうはならなかった、崖っぷちで抗う者達は間に合った。

「……いた、いました!!」

サーヴァント・アルテラ、目視にて確認!!」

《良かった、間に合った!!

で、でも……アルテラだけでなく、聖杯の魔力に惹かれた魔物達までもがあんなに》

「今まで余らが蹴散らしてきたのは、まだ追いつけていない一部の連中ではかな

かったのか……」

「だとしてもこれ以上手間取ってはいけない、このまま予定通りに行く!!」

「はい、お任せ下さい!!」

「……リンク、せめて少しくらいスピードを落として」

「この勢いのまま突っ込みたいから悪いけど却下!!」

ダ・ヴィンチちゃんごめん、盛大にぶっ壊す!!」

《仕方ないね、この際だ!!

帰ったら色々と再調整して、離脱機能も付けるとしよう!!》

「マスター、ネロさん、こちらへ!!

行きます、3、2、1」

「ぎゃああああああっ!!!?」

カウントダウンに正確に合わせると、緊張や体のこわばりがその瞬間にピークになって失敗の原因になるかもしれないから、敢えて少しずらした方がいい。

そんなリンクのアドバイスに従って、『1』のタイミングで車体を蹴ったマシユ

の暴拳に、猛スピードで走るバイクから生身で飛び降りるという最悪な予定を前に爆発寸前だった立香の絶叫が轟き。

彼らがちょっと無理しながら乗っていたサイドカーはその次の瞬間に、加えられた圧力に耐え切れず本体から千切れて吹っ飛んだ。

この時代においては不自然極まりない内燃機関の爆音と、高度な加工を施されたタイヤが硬い大地に強靱な轍を刻む音。

そこに更に、人同士の確かな意図を持ったやり取りや、明らかに只事ではない悲鳴や破壊音までもが加われれば、異変が起こったことを察して確認のために足を止めたとしても不自然なことではない。

ゆっくりと振り返ったアルテラは、その瞬間に、破壊の機構に相応しい冷徹な思考をノイズどころではない衝撃によって盛大に揺り動かされる羽目となった。

自身と同じように、音の出処を確かめようとして足を止めた魔物の群れを盛大に吹っ飛ばしながら現れた、背に緑衣の少年を乗せた人造の馬が、内燃機関の嘶きと共に機械仕掛けの蹄をこの身へと向けて叩きつけんとしていたのだから。

咄嗟に光の剣を振るい、爆撃じみた強襲を跳ね除けようとしたアルテラだった

が、その試みは叶わなかった。

自身の真後ろで爆弾を起爆させ、その爆風を勢いに上乗せさせるという自爆戦法を迷わず実行に移した勇氣^{狂気}によって、迎撃のタイミングを狂わされてしまった為に、かなり離れている筈なのに、地面を通して盛大に伝わってきたミサイルが落ちたかのような振動と、一気に沸き起こって現場の状況の大部分を遮った巨大な土煙に、マシユの盾捌きによって何とか無事に着地することが出来た立香達の目と口が開きっぱなしになる。

爆心地にいる者の身を案じて声を上げるよりも、当の本人が土煙を割って飛び出して来る方が早かった。

《よ……良かった、無事だった》

「つかむしろ、あの状況で何で無事なんだって気もするんだけど」

「私達の目で確認出来なかっただけで、実際には爆発の瞬間にきちんとガードしていたのだと思われますが……盾の性能に頼らず、純粋な技術であれだけのことを成し遂げられてしまうと、専門とする身からすれば少し複雑な気分です」

「さすがは『勇者』というものだな」

誰もが承知済みの『事実』として、純粋な感心から自然と口にした筈のその言葉が、自身の中で不思議な重厚さと痛みを伴いながら響いた。

そのことに驚いたネロは、それと同時に、今までの自分が無自覚な夢見心地の中に在ったことに気付く。

そしてそれが、単なる気分の話では無いであろうという事実にも。

（夢……そうか、夢か。

余のローマを苛む凶事も、死者が蘇るという異様な現象も。

ブーディカに報いる機会を得たことも……心から信賴出来る家臣どもに恵まれ、その者達と心躍る一時を共に出来たことも。

その一人が何ということか、かの伝説の勇者であつたという驚愕の事実も。

全ては目覚めと共に跡形も無く消える、あり得ざる刹那の夢物語か）

『行け、この馬鹿皇帝!!』

いいから、あんたの世界ってのを守ってみせなよ!!』

荊軻と共に、アルテラを追う道行きに立ち塞がる巨大な魔物の群れを相手取ってくれた勝利の女王の一喝が、近頃はすっかりご無沙汰となっていた頭痛を伴いながら脳裏に響く。

死んだと思われていたものが実は生きていて、かつての遺恨を一時横に置いて、

民のために駆けつけてくれたのだと思っていた。

そう思い込んでいた……思っていたかった彼女が、実際には伯父達と同じような蘇りの死人であったのだということ、先程のあのやり取りが最期の別れであったことに、今のネロは気付いている。

（そうだ、もう夢を見てはいられない。

現実に戻る時が来たのだ）

衝動のままに吐き出してしまいたい声を嚙ませ、実際に震えて今にも折れてしまいそうな膝を保たせているのは、神祖に誓った皇帝としての矜持……そして。

掛け替えのない友人達の目に、自らの最も美しい姿を焼き付けておいてもらいたいと、一人の少女として願うが故に。

強く、そして気高く胸を張ったその姿のまま、彼らが居なくなっただ後も進み続けるために。

「第五代ローマ皇帝、ネロ・クラウディウスの名において申し入れる!!

勇者リンクよ、破壊の化身に示してやってくれ!!

ローマは永遠であると……人々^{われら}が受け継ぎ、繋げていく世界は、このようなところで終わりはしないと!!」

在るべき世を続けるため、夢の終わりを迎えるための一步を、自らの意思で勇気をもって踏み出したネロに、勇者は応えた。

エンジン全開で回るマスターバイクの前輪と、通常の長さに留めることで密度を増した光の剣が、轟音と共に鏖^{あつ}り合う。

舞い散る火花越しに、アルテラと間近で向き合ったリンクは、彼女自身の自我というものが感じられない虚ろな瞳に眉根を寄せた。

「私は、フンヌの戦士である。

そして、大王である。

この西方世界を滅ぼす、破壊の大王……」

「……ローマを滅ぼす破壊の化身。

あんたがそんな概念の象徴として徹するのは、喚んだレフの思惑が反映された結果なのか……それとも、生前から本当にそんな生き方をしていたのか。

聖杯を丸ごと取り込むなんて無茶をしたせいで、半ば暴走状態だっていう可能性もあるか。

……こう言っちゃ何だけど、馬鹿なことをしたなあ。

あんたにそんな在り方をさせた奴らも……ちょうど目の前に転がっていたからって、『願望器』なんてものに手を出して、振り回されているあんた自身も。

あんたはこんなにも強いのに、それをわざわざ弱くさせるだなんて」

リンクには、数多の戦いを乗り越えてきた先で得た、強さというものに対する独自の考えがあった。

ギリギリの崖っぷちに追い込まれた状況を覆す、そんな奇跡さえ時に起こしうる真の強さ……それは決して折れない意志の力、この戦いを乗り越えた先で叶えたい願いの有無であると。

故に、彼は自負していた。

今この時ただ強いだけの者に、自分は絶対に負けないと。

全身に力を漲らせる雄叫びと共に、踏み込みで石畳すら割ってのける強靱な脚力で蹴り落とされたマスターバイクが、轟音と共にアルテラの瘦身を土煙の中に沈めた。

聖杯によって強化された今の彼女にとってそれは、ほんの2〜3秒行動の自由を妨げられる程度のことではなかったのだけれど。

自身を押し潰したマスターバイクの車体を吹っ飛ばしながら身を起こしたアルテラは、その僅かな時間が致命的であったことを身をもって思い知らされた。

《リンク君の魔力反応が急激に上昇!!》

それだけじゃない、霊基パターンが変化して……この反応は、まさか、セイバークラス!?!》

ロマニが張り上げた、異変を告げる悲鳴じみた声は、アルテラには聞こえなかつ

た。

代わりに彼女は、視界が白むほどの眩さの向こうから発せられた声を、ただ一人耳にした他者となった。

「空を舞い」

「時を廻り」

「黄昏に染まろうとも」

「結ばれし剣は我が魂と共に」

《イエス、
マイマスタ》

光の源が、空へと向けて切っ先を高々と突き上げた青白い刀身であったことにアルテラが気付いたのは、それが我が身へと向けて振り下ろされた瞬間のことだった。

「……………そう、か。

世界には、私の剣でも破壊されないものがある……………か。
『神の鞭』と、呼ばれた……………私のこの、軍神^{マルス}の剣でも。

そうか、それは……………少し……………嬉しい、な」

「……ああ、成る程。

あんた自身が、願いを自覚していたのかどうかは分からないけれど。

それを叶えられて……可能性を示してやる事が出来て、良かったよ」

陶器の人形のようなだった頬をほんのりと赤く染めながら、目元と口元を柔らかく綻ばせた少女。

それは、破壊の機構としての彼女しか知らない者、彼女にそれ以外の生き方を教えなかったし許さなかった者達全てに見せつけてやりたいと、そう思う程に美しくて。

彼女に次があれば、破壊の概念などに負けない人の強さを目の当たりにできる機会に、もっと恵まれることが出来ますように。

そんな願いを抱きながら、歴史に名を刻んだ大王の最期を敬意を以って見届けたリンクの手が、金の盃を拾い上げる。

声を上げ、大きく手を振りながら駆け寄ってくる、まだ遠い仲間達にも見えるようにと掲げたそれが、太陽が沈み切った夜空の下で星の如く輝いた。

定礎復元

A・D・0060 永統狂気帝国セプテム

薔薇の皇帝

薔薇の花嫁

こうしてローマは、異境より訪れた魔術師達の活躍によって救われたのだ。

……分かっておる、これはあくまで余の夢物語。

ローマを二分するような内乱が起こったことも、過去の偉大な皇帝達が蘇ったことも、伽話に登場するような怪物達と相まみえたことも。

公的なものだけでなく、民が戯れに綴ったような細やかなものも含めたあらゆる記録や、当時のことを十分覚えていた筈の者達の記憶に、そのような事実は欠片も存在していない。

そしてそれは、夢の出来事を高らかに語る余自身にとっても同じこと。

余が認識しているのはあくまで、そのような者達が現れ、そのようなことが起

こったのだという大まかな流れだけで。

明確に思い描くことが出来るのは、優しい笑みを浮かべながら余を見る、青と蒼、そして紫の瞳と、最後に交わした言葉のみ。

恐らくだがそれらは、他の何を忘れたとしてもそれだけは覚えていたいと、その時の余が強く願ったものなのだろう。

……蒼い瞳の持ち主に関しては、何かもっと、特別枠で覚えていてもおかしくないような衝撃的な事実があった気もするのだが。

まあ、思い出せないものは仕方がないな。

……ああそうだ、案ずることは何も無い。

『約束する』

『ネロがネロとして、精一杯に生き抜いたその先で、必ずまた会えるから』

幾度も挫けそうになった余を、その度に立ち上がらせてくれたあの声は、今もちゃんと聞こえている。

また陽が沈む。

昼と夜が混ざり合った空……美しさと同時に、何故か恐ろしさや不安すらも感じさせる。

この不思議な光景を、いつかどこかで、特別な感慨と共に見た覚えがある。

……………そうだ、思い出した。

夢の出来事なんて曖昧なもので、幾らでも好きなように変えることが出来て。

そんなところで経験したことに、深く考える意味なんて無いのかもしれないけれど。

それでもあの時、余らは確かに。

同じ世界の、同じ空の下で、同じ星を共に見ていた。

.....。

この音、は。

馬の蹄……何者かが、近づいて。

……そうか、そういうことか。

余はネロ・クラウディウス、誉れ高きローマの第五代皇帝。

どんな形であろうと、精一杯の忠義を果たそうとした者に対して、たった一言の

劳いの言葉すらかけぬような不義理は、誇りにかけて許されぬ。

……………だが、まあ、そうだな。

随分と待たされてしまったのだ、ほんのちょっと文句を言うくらいは良いであろ
う。

「遅かったな。」

だが、大儀である」

ああ、美しい空だ。

ローマ皇帝、ネロ・クラウディウス。

歴史に詳しくなくても、多くの者がその名を知っているであろう稀代の暴君の最期は、自らの手で短剣を喉に突き刺しての自決。

三日後、駆けつけた兵士達の一人が、たった独りで野ざらしとなってしまうている皇帝を悼み、その亡骸に恐る恐る外套をかけたその瞬間。

死んだとばかり思われていた皇帝は、兵士への労いの言葉を口にして今度こそ息絶えた、逸話では語られている。

ネロ・クラウディウスを『暴君』と位置づける、数多の理由や逸話。

その中には、自分が気持ちいいだけの下手な歌を聞かせるために、市民を劇場に閉じ込めて逃がさなかったというような面白いものから、ローマの町を焼き尽くす大火の中を人々が逃げ回る地獄絵図を前に、楽しげに嗤いながら楽器を演奏していたという恐ろしいものまでもが存在している。

しかし、前者はともかく、後者の非道な振る舞いに関しては、後世における捏造

の可能性が高いことが明らかにになっている。

くだんの大火において、実際のネロは市民達の避難や消火活動を懸命に指揮し、その後の復興にも力を尽くしていたという。

ネロという人物がなぜ、そのような逸話を作られてしまう、そんなことを行ってもおかしくはないと思われる程に、恐ろしい暴君として扱われたか。

それに関しては、ネロがその治世においてキリスト教徒を迫害していたからだという説が大きい。

ネロの方針によって処刑されたキリスト教徒達の中には、イエス・キリストその人の直々の教えを受けた弟子までもが含まれている。

しかしそれは、当時の時世を考慮すると無理もないこともある。

後の世でこそ、王の選定を左右するほどの影響力を得ることとなるキリスト教も、その頃はまだ、人々をむやみに結集させて厄介ごとの火種を作る胡散臭い新興宗教だった。

唯一無二の神を頂き、皇帝の権威というものを失墜させかねない上に、爆発的に信徒を増やして日ごとに影響力を増していたキリスト教は、その頃のローマからす

れば酷い脅威に思えたことだろう。

今現在のローマを脅かす要素に対して、普通に対応した……ただそれだけだった筈のネロの行ないは、キリスト教が絶対的な力を持った後世において、許されざる悪逆となった。

もちろん、これはあくまで一説であり、ネロが実際に暴君であったということも普通にあり得る話である。

自身を皇帝とするために策略を練った上に、一挙一動を支配しようとした母に逆らって親殺しの大罪を負ったことや、芸術活動に興じて民を散々に振り回したことなどは、確かな事実なのだから。

しかし、事実を根拠として語るのならば、忘れてはいけないことがある。

当時の民が遺した記録や作成した美術品には、ネロ・クラウディウスを賛美するものが多数発見されていること。

ネロの死後、かの人の墓には市民からの花や供え物が絶えず、上層部もそれを咎めたりはしなかったこと。

ネロ・クラウディウスという人は、ローマの国や人々に、間違いなく愛されてい

た
と
い
う
こ
と
。

注入された魔力と専用の詠唱によって眩い輝きを放つ、サーヴァント召喚の魔法陣。

第二特異点という新たな山場を越え、今後に備えて新たな人員を招くために調整されたこの場に、つい先日帰ってきたばかりで激闘の疲れも癒えていないであろう三人は神妙な面持ちで臨んでいた。

彼らが期待しているものが何なのかを、『約束』が交わされるその瞬間を見守っていたスタッフ達は察している。

それが、奇跡を願うようなことであることも……当の本人達が、そのことをちゃんと分かっているが、それでもと希望を抱き続けていることも。

儀式がこのまま何事もなく進んでほしいような、現実を突きつけられてしまうのが恐ろしいような。

一同が抱く複雑な心境をよそに、魔力と輝きを順調に増していった魔法陣の中に、小柄な人影が現れた。

色は白だけれど、造りや質感は現代のライダースーツを思わせるような衣装に覆われた体は、華奢ながらも肉感的で、女性の魅力というものに溢れていて。

自分達がよく知る『彼女』とはかけ離れた色合いを前に、思わず肩を落とした一同は、次の瞬間に目を剥いた。

造りこそ戦闘を意識したような動きやすさを重視しながらも、色や装飾はまるで、花嫁が纏う純白のドレスのよう。

気高い薔薇を髣髴とさせる深紅とはまた違う形で、その身の美しさを最大限に生かしながら、静かに瞼を閉じた姿で現れた彼女は……正しく。

「ネロ……っ！」

思わず声を上げた立香は、その次の瞬間に、自らの手でその口を塞いでいた。

約束をしたし、叶うことを心から願ってはいたけれど。

サーヴァントではなく生者だった彼女の、何もかもが無かったこととなった特異点で得た記憶や思い出が残るわけが無いと、冷静な思考ではちゃんと分かっていたから。

初対面の女性、しかも気高い皇帝に対して、いきなり名前を呼び捨てしてしまうなんて。

第一印象を悪くするには十分すぎるミスをしてしまったと、自身の失態を内心で責めた……のだけだ。

ゆっくりと瞼を開けた彼女が、こちらの存在に気付いた瞬間に浮かべた表情に、そんな焦燥は吹っ飛んだ。

「……………ああ、駄目だ。

サーヴァントとして喚ばれたからには、高らかに口上を述べるべきなのに。

あの頃とは違う特別な装いで魅せるに相応しい、余の新たな美しさを、もっと見

てもらいたいのに。

また会えたら、まずどんな言葉をかけようか……そんなことを、何度も何度も考えて、シミュレーションは完璧だった筈なのに」

「……………ネロ」

「ああ、そうだ。

そんな顔で、そんな声であったな。

ずっと、ずっと……会いたかったぞ、我がマスター」

胸の奥から込み上げる熱いもので声は震えて、零れる涙に邪魔されながらも懸命に作った表情はぐちゃぐちゃで。

皇帝ネロ・クラウディウスの、苦しくなる程に美しい姿を前に、立香は堪らず駆けだしていた。

衝動のままに飛び出した立香とは逆に、その場に釘付けになったまま、声も出せずに大粒の涙を零すマシュ。

そんな彼女を傍で支えながら、肩の力を抜いて安堵の息を零すリンクと、呆然と

立ち尽くしながら見守ることしか出来ないスタッフ一同の目には。

魔法陣の光を受けて輝く純白の衣装を纏ったネロと、その華奢な体を広げた腕と胸の中に収めた立香の、男女の艶っぽさなど欠片も感じられない子供のような泣き声を重ね合う姿が、天上から注ぐ光の存在を思わせる程に、美しく神聖なものに見える。

その認識は間違っていない。

『奇跡』と称するに相応しいものを、彼らは目の当たりにしたのだから。

長かった……マテリアルを見て実際の流れに沿いながら、自分なりに書きたいシーンや展開を足していった結果、とんでもない長さになってしまいました。ちよっと反省して、次からはもっと簡潔に収められるよう頑張りたいです。でも何より、書きたいものをちゃんと、区切りがつくまで書き切れたことにホッとしました

お付き合いいただき、ありがとうございました。

これはあくまで個人的な考えであり、原典の彼女とは違う解釈かもしれませんが。私はネロ・クラウディウスという人を、色々なことを実際にはちゃんと分かっているながら、『薔薇の皇帝』というキャラ付けをした上で、敢えて突拍子もない振る舞いをしている人なのではないかなと思っています。

本編の中でもちよつと書いたように……演じてるんですね、自分自身が思い描く理想の自分というものを。

自分で決めたこと、自分で望んだことであり、貫き通すと決めたことを後悔してはいないけれど、それでもやっぱり辛くなる時はあって。

立香達にはそんな彼女の理解者になってももらいたい、「辛いならやめてもいいよ」と誑かすのではなく「君なら出来る、頑張れ」と背中を押す存在として。

そんなことを考えながら書いた、第二特異点の物語でした。

カルデアに召喚されたネロを、敢えてブライドにした理由ですが。

原作者の奈須きのこさん曰く、赤い衣装の通常バージョンのネロはEXTRAを経てその影響を受けていて、ブライドはそれが無いまっさらなネロなんだそうです。

なので、通常のネロともEXTRAを経たネロとも違う、特異点で起こったことをぼつちり覚えていて、マスターとの絆と思い入れも既にガン積みな本作の特別なネロを表現するために、真白から染めるという意味を込めてブライドにしました。これから先の展開にどう生かすか、どう工夫するかというところはまだ全然考えていませんが、何とか上手く使ってみます。

第一特異点の後のように、いくつかの日常編を加えた後で、第三特異点に突入します。

詳細はまだ考えていませんが、次も書き切れるように頑張るのでよろしくお願ひします。

……しかし、今はその前に。

レジェンドアルセウスを堪能するのが先ですね、発売前に何とか区切りをつけられるように頑張りました。

それではまた、次の作品でお会いしましょう。

カルデアの日常 2

ローマの名残り

第二特異点の修復完了後、殆ど休む間もなく行われたサーヴァント召喚がもたらした衝撃の影響も、2〜3日経てば落ち着いて。

ようやく日常が戻ってくるかと思われたカルデアの、広さを利用して多目的ルームを兼ねるようになっていた食堂に、第二特異点での日々を思い起こさせるような光景と賑わいが満ちていた。

「ヴラド、これ使える？」

「これは……良い布だ、普段使いとするには申し分ない。

かたじけない、おかげで助かった。

少ない材料を工夫して活かすのも個人的には面白いのだが、十分な仕事をこなすとなるとやはり限界があるからな」

「……あの有名なヴラド三世が、すっかり縫製部門に落ち着いてしまっている状況を、世間が知ったらどう思うんだろうなあ」

「まあまあドクター、人理が焼けている状態でも意味の無いことは置いといて。

ほら、これも買っておいたよ」

「種だ、しかもこんなに!!

ありがとうリンク君、これでようやく地下農園を本格的に稼働させられるよ!!

……都市の市場では扱ってなかったものだろうに。

あの忙しい状況で、郊外の農場にまでわざわざ足を運んでくれてたんだね」

「^{ローマ}農園の基本的な運営^{ローマ}に関しては、私に任せておくと良い。

ローマの民の暮らしを支えた作物だ、我が宝具にて肥やしたローマの土によく根付くことであろう」

「……………本当にいいのかな、ローマ帝国建国の祖に畑の管理なんかさせちゃって」
「気持ちとは分かりますが切り替えて下さい、でないとこれから先持たないと思います」

「リンクー、何かドクターの気が紛れそうなものって無い？」

「ちよっと待って、確か果物を何種類か仕入れていたと…………」

「あっ、それ興味があるな」

「私にも見せてくれ、新しいレシピを考えてみたい」

慣れた手つきでシーカーストーンの画面を動かすリンクと、新しい品を求めて集まる人々の周りでは、既に取り出された数多の品々がローマの市場を丸ごと持ってきたかのような光景を作り出している。

『外の世界』というものが一切消え失せている、本当の意味での閉鎖空間に突如現れた新鮮な賑やかさに、人間もサーヴァントも関係なく沸いていた。

「リンク、あんた……あれだけ毎日、戦いとその準備に追われていた状況で、よく買い物まで出来たわね」

「これから先も人員が増えていくことを考えると、シーカーストーンで精製する分だけで全部を賄うのは無理があるからな。

物資を仕入れられる機会があれば、多少無理してでも確保しておかないと」

「それは分かっているわよ、あんた一人で動き過ぎだって言っているの」

「ジャンヌ・オルタの言う通りであるぞ。

多少ならば公私混同をしても許されるほどの成果を、あの頃のそなた達は間違はなく上げていたのだ。

適当な者を使いに出すなり、宮殿まで商人を呼ぶなり、そういった便宜を図るのも吝かでは無かったのに」

「発想が無かった」

「同じくです」

「……ど庶民のマスターと、箱入り娘のマシュはともかく。

あんたはどうなの、大国の重鎮として部下を指揮した経験もある勇者サマ？」

「……大変なスケジュールで働いていたネロに、カルデアのことまで負わせるわけにはいかないって思って」

「だ、か、らっ!!」

働き過ぎなのはあんたも一緒でしょうが、余計なものや他人に任せていいもので背負いこんでるあたりよっぽど性質が悪いわよ!!」

「まあまあ、落ち着いて。」

君の言うことはもっともだけど、ずっとやってきたことをいきなり変えるのとはとても難しいんだ。

……とは言っても、積極的に改めていくべき悪癖であることに変わりはない。

ひとつ確認させてもらうよ、リンク君。

今ここに出しているのは君自身がローマの市場で仕入れた現物で、見たところそれなりに量もあるみたいだけど、消耗品である以上いつかは尽きる。

そうなった時、君はどのような形で対応しようと思っているんだい？」

「……特異点はまだ、一番大きくて致命的な穴を塞いだけの状態で、治し切れて

いない細かい傷が原因で生じた不具合に対処するために、小規模なレイシフトを今後行なっていくらしいから。

その時について素材集めをして、精製用のリソースにしようかと」

「はいアウト☆」

「痛だっ!？」

人類史上最高傑作の美貌を煌めかせる満面の笑顔と、青筋が浮かんだ指先で容赦なく放たれたデコピンが、リンクの額で軽快な音を立てた。

赤く染まったそこを涙目で押さえながら、不満を露わに辺りを見回したのだけども、目に入っただのは責めるようなジト目や呆れた溜め息ばかりで。

肩を落としながら項垂れるリンクへと、ダ・ヴィンチの優しい叱責が続く。

「リンク君……君がカルデアの一員として力を尽くしてくれること自体はありがたいし、実際にもの凄く助かっている。

だけど、シーカーストーンによる物資の変換と精製は本来ならば、カルデアでは

なく君個人の活動をサポートするためのものだ。

物資不足に喘いでいた当初こそ頼ってしまっただけ、人員が増えて施設の復旧も進み、組織としての盤石な体制を築くための基盤が整ってきたからには、カルデアは君への依存から脱却しなくてはならない。

物資の供給源としては、今後とも君に頼ることになるだろうけれど……そのために必要なリソースの用意くらいは、皆の力でやらせておくれ。

レイシフトで素材集めを行なうこと自体は構わない、だがそれは全て君自身のために使ってほしい。

『勇者リンク』が万全の状態で行ってくれることは、それだけで十分にありがたくて心強いものだからさ。

……本当だったらその準備でさえ、カルデアの全面的な支援によって賄われるべきなんだ。

それを君自身の自助努力に頼らなければならない現状が、本当に歯痒いよ」

「……ダ・ヴィンチちゃん」

「まあ、というわけだから。」

しばらくはゆっくりしてくれたまえ、意地と見栄を張りたがる大人げない大人の邪魔をするのは良くないよ？」

そう言って渾身の笑みを浮かべたダ・ヴィンチだったけれど、リンクの表情は浮かないままで。

それが、カルデアの物資を賄えるだけの膨大なリソースを用意するための、具体的な代替案をこの身が提示できずにいたからであることを、ダ・ヴィンチは誤ることなく察していた。

自分が動きさえすれば何とかなると思えば、リンクはそれを実行に移すことを躊躇わないし、むしろそれが出来ないと負い目に感じてしまう節が見受けられる。

彼の生い立ちや歩んだ人生を考えると無理もないことだけれど、大切な人達や世界のために自らの全てを燃やし尽くした勇者の性分は、彼と言う存在の深くにまで沁み込んでしまっているようだ。

この頑固者をその上で納得させるためには、彼が考える以上の『最善』を用意する必要があるだろう。

（さて、どうしたものか……発明や芸術に關しては万能の天才な私なのだけれど、如何にして効率よく利益を生み出すかを考えるのはちょっと分野違いなんだよね）

金を稼いだ経験と言えば、自身が作り出した芸術や発明を売却するか、天才が生み出すものに期待する支援者を募るかの二択のみ。

どちらも、前提として活発な経済活動が行なわれていることが必要となるもので、この閉鎖空間においてはあまり役には立たない。

（ギルガメッシュ王なら、スポンサーとして期待出来るかもだけど……現状ではちょっと難しいかな。

彼は一見派手な浪費家に見えるけれど、それは独自の判断基準や個人的な好みのままに動くさまがそう見えるだけで、実際には何らかの見込みがない限り決して財布の紐を緩めない堅実な投資家だ。

リンク君という個人ではなく、カルデアという組織に対する支援を求めるとなる

と、投資するに見合うだけの将来性があることをきちんと証明してみせる必要がある。

……何らかのプランを練ることはやっぱり必要だね、やるしかないか)

零しそうになったため息を噛み殺しながら、小柄なリンクと合わせていた視線を上げたダ・ヴィンチ。

その美しい瞳に、少し離れたところでエミヤと共に食の楽しさについて花を咲かせている、つい先日召喚されたばかりの膨やかな終身独裁官の姿が映った。

カルデア改善計画その2

「紳士淑女諸君、ご清聴頂きたい!!

この私、ガイウス・ユリウス・カエサルは、カルデアに経済改革をもたらすことをここに宣言する!!」

臨時のローマ市場が開かれ、カルデアに数多の物資が供給されてから数日後。

食事時の食堂を利用した、何度目かの全体会議の場にて、ローマどころか世界の歴史に名を刻んだ男が一同の注目を集めていた。

『いきなり何を言い出すのだ』『訳が分からない』と言わんばかりの表情や眼差し

を一身に浴びながらも、胸を張る彼の自信満々な表情には一点の曇りも無くて。

高々と掲げたその指先には、水晶のような青い結晶が輝いている。

一見すると宝石にも思えるそれが、人工的に作られた魔力の結晶であることに気付いた者は、魔術師やサーヴァントが大半を占めているカルデアにおいてはそれなりに存在していた。

「ダ・ヴィンチ氏を始めとした技術班が、これまでは蓄えるのみであつた魔力リソースを一定の形に精製する手法を確立させた。

正式名称として『QUANTUM PIECE（クオントムピース）』と名付けられてはいるのだが、少々長いので普段は『QP』という略称を使うとしよう。

そしてこれは、今後カルデア内で使用されていく独自の通貨単位ともなる。

これは魔力リソースの結晶であるが故に、勇者殿がシーカーストーンを用いて精製する物資の対価として、そのまま使用することが可能なのだ」

カエサルがそこまで話したタイミングで、彼を含めた上層部が、なぜ急に大々的

な変革に踏み切ったのかを殆どの者が察した。

リンクの宝具シーカーストーンは、登録されている物資を魔力リソースと引き換えに精製することが出来るという規格外の代物で、カルデアという閉鎖空間において現状唯一の、安定した物資の供給源となっていた。

規模の小さい組織をまかなうだけならばさほど問題は無かったのだが、復旧活動が順調に進んだことで使える施設や区画が増え、サーヴァント召喚という名の求人募集も都度行なっていくことが決まっているからには、より多くの魔力リソースと物資が必要になってくる。

何かが起これば、条件反射的に自ら動いてしまうリンクの性分を既に熟知していたカルデアの一同が、そんな彼を抑えるためのことなのだろうと考えるのは自然なことだった。

始まった頃とは打って変わって、真剣に話を聞き始めた一同の前で、カエサルのは舌は止まることなく動き続ける。

「私はカルデアに、需要と供給、更にはそれを繋ぐための流通という円環を作り出

していく所存だ。

そのためには、止まることなく回り続けられるだけの潤沢な貨幣……この場合は、QP こと魔力リソースが必要となるのだが。

次は、それを如何に得るのかについての話をしよう。

メディア女史、そしてカーミラ女史!!

今現在において、カルデアを動かしている魔力リソースがどこからどのようにして得られるものなのかを、改めてご教授願いたい!!」

「……面倒だけど、仕組みの構築に関わった者としての、果たすべき責任の一環ね。とは言っても、それ自体はともシンプルで分かりやすいものよ。

カルデアのシステムに存在していた戦闘シミュレーションの一角に、とある儀式の流れを組み込んだの。

『立ちほだかる番人を倒して隠された宝を手に入れる』という、この上なく分かりやすいものをね。

求めるものが何かしらの形を持った物資だったとしたら、もう少し複雑な手順や構築が必要だったでしょうけれど。

この場合は、生み出した魔力リソースをそのまま手に入れるだけだったから、登場するエネミーも必要な工程も至極単純なもので済んだのよ」

「そこから先は私が。」

メディアが今話した、魔力リソースを生み出すための特別な儀式が組み込まれた戦闘シミュレーション。

私は主にここで働いているの、魔力吸収のスキルを活かして得られるリソースを少しでも増やすためというのが理由ね。

……正直言って、効率としてはそんなにいいものではないわ。

ランスロットやファントム、最近加わったスパルタクスや呂布といった、重い狂化スキル持ち……単純に暴れさせるのが一番使えるような連中を駆使しても、カルデアの通常業務を賄える分を確保するのが現状では精一杯なのに。

あなたが言うところの需要と供給を満たすとなれば、それなりに潤沢な魔力リソースが必要となる筈。

ローマが誇る大英雄様は、その辺りをどのように考えておいでなのかしら？」
「心配ご無用、その件に関しては既に解決済みだ。」

ご紹介しよう、カルデアに大いなる祝福をもたらした女神ステンノを!!」

「え……ええ!？」

お姉さま、いつの間にニートを脱されてあいたたたたっ!!」

「あなたって子は、どうしてそうも反射的に姉を辱める言葉が出るのかしら？」

言っておくけれど、この私が人間のように汗水垂らして働くなんてことは人理が消滅しても起きなくてよ」

「では、『祝福』というのは一体……」

「くだんの戦闘シミュレーションが、関わりのある者達の間で『宝物庫』という通称が用いられていたことを利用した。

女神ステンノには、その宝物庫が自身のものであること、中には本物の神の宝が収められていること、試練を越えた者は女神の祝福が込められた宝が得られるのだということ、正式に認めて頂いたのだよ」

「それだけではちょっと弱いから、宝物庫に入る者を出迎える役目を担うこととなったわ。

訪れる者に女神らしい態度でちょっと声をかけて、あとは座ってお茶でも飲んで

いるだけでいいのだから、まあ悪い気はしないわね」

「そ、そんなっ…!!」

人の身では到底及ばないような意味と価値が、存在しているだけで生じるのが『神』であり、中でもステノはそれに極振りしていると言っても過言では無い女神である。

そんな彼女を活かす場として、正しく『そこに居るだけ』で構わない状況を構築したカエサルの手腕は、自身もかつて女神であったメデューサからしても申し分のないものだったのだけども。

「宝物庫でのシフトには私も加わっているんですよ、その度にお姉さまと顔を合わせなければならぬなんて絶対意地悪され痛い痛い痛いですごめんなさいお姉さま!!」

「……まあ、というわけで。」

女神の祝福を得たことで、宝物庫の効率とは以前とは比べものにならなくなってい

る。

これからは、より潤沢な魔力リソースがカルデアを潤していくことを保証しよう。だがしかし、それはカルデア全体にもたらされる利潤のほんの一部。

ここからは肝心な、需要と供給の話を始めるとしよう。

私はカルデアに、副業の概念というものを作り出したいと考えている。

例えば、エミヤ君。

君は食堂で普段の食事を提供する以外にも、出張サービスの的なものをたまに請け負っているらしいのだが、その際に報酬のようなものは貰っているかね？」

「いや、それも務めの一環だと思っていたのだが……まあ、そうだな。

別枠で食材を仕入れる必要があることや、その間食堂を空けねばならぬことを考えれば、最低限の経費くらいは貰っておくべきだったのかもしれない」

「それにプラスして十分な利益も必要だ、培った技術と費やした時間の安売りは認められんよ。

もっとも、最高の料理を提供するということが君にとって楽しみであり、個人としても十分に充実していると言うのなら、野暮な無理強いはいらないがね」

「カエサル公、宜しいかな」

「何だろうか、シュヴァリエ・デオン」

「エミヤ殿には、妃殿下のお茶会に必要なものをその都度用意して頂いている上に、時には給仕の役割も担って下さっていました。」

今後ともお願いしたいと思っていて、対価が必要とあらば支払う所存ではあるのですが……その、今まで必要では無かったので、私も妃殿下も少々持ち合わせというものが」

「問題ない、それに関しても考えてある。」

マリー・アントワネット妃殿下のお茶会というのは、仕事に根を詰めすぎな者を休ませたり、スタッフやサーヴァント同士の交流を促してカルデア全体の円滑な運用を支えるものとされているな。

ならばそれは立派な公務であり、菓子代や給仕の出張費用はカルデアの方で負担すべき必要経費だ。

どれだけ使ったのかを纏めて申請すればいい、宝物庫の強化はそれが出来るだけのリソースを確保するために行なわれたのだから」

「な、成る程……分かりました、ありがとうございます」

「おいこら、ちょっと待て」

「どうぞ、クー・フリーン殿」

「その赤い弓兵のように、金を稼げる技術や手段がある奴はともかく。

そういったことが出来ねえ、もしくは向かねえような奴は、素寒貧のまま質素に過ごせってのか？」

「もちろん、そんなことはあり得ないとも。」

先程話した宝物庫……今までは、明確に決められたスケジュールのもとでのみ稼働されていたそれを、申請に応じて開放することと相成った。

クー・フリーン殿が仰っていたように、純粹に稼ぐ手腕が無い者や、戦うことの方が得意だという者は、是非ともこれに挑んでくれたまえ。

個人でも、誰かと協力しても、代理を立てても。

最終的に魔力リソースが確保出来るのなら、どのような形でも一向に構わない。シミュレーターを動かすための必要経費、及びカルデアという組織に対する貢献の一環として、生み出したリソースの半分を提供してもらうことになるがね」

「半分もかよ、暴利貪り過ぎだろ!!

……と、言いたいところではあるが。

カルデアの運営や、基本的な生活に必要な部分に関しては経費のうちだとすれば、そう無茶な話でもねえのか?」

「その通り、貴殿らの手元に来たQPは全て貴殿らのもの。

欲しいものを手に入れるなり、魔力リソースとして消費するなり、好きに使えば良い。

しかし私はここで敢えて、余った利益の効率的な使い方についての提案をしよう。すなわち投資……いや待て待て諸君、まだ立たないでくれ、本当におかしな話では無いのだ。

使い慣れた言葉がつい出てきてしまったが、これはどちらかと言うと、カルデアという組織への『納税』に近い。

貴殿らが追加で納めたQPの量に対して、カルデア側は公共サービスの充実という形で応えよう。

それがどんな形で、どのような優先度で行なわれるかは、貢献度の割合によって

要望を伺うこととなる」

「……つまり、多くの魔力リソースを納めれば、個人の希望をカルデアが叶えてくれると？」

「あくまで公共サービスの一環としてだ、それが個人ではなく組織全体に恩恵をもたらすものであることが大前提となる」

「成る程、承知した」

「他に質問のある者は……大丈夫そうだな。」

今決めたことだけで、全てが問題なく回るようになるとは思っていない。

実際に行なう中で不備や改善点を見つけ、都度調整を加えながら、カルデアを維持するための大事な仕組みを徐々に完成させてゆく所存だ。

今回は以上、貴殿らの貴重な時間を頂けたことに感謝する」

万雷と言う程では無いけれど、自分へと向けて確かに発せられた拍手の雨に、胸を張って応えるカエサル。

こうして、今後の日々を大きく変えるであろう重大な発表の場となった全体会議

は、
とりあえず平穩に幕を下ろしたのであった。

そうして、新たな制度がカルデアに施行されてから数日後。

ごく僅かな人理の揺らぎが発生した報せを受けた立香達は、唯一の対応策であるレイシフトを行なうべく管制室へと集まった。

それ自体は元々予想されていたもので、観測された規模も小さく、落ち着いて取り組みさえすれば特に難しいことでは無いのだけだ。

立香達を戸惑わせたのは、当然果たすべきそれに追加された、とあるサブ任務の存在だった。

「それって、カエサルやエミヤ達がこの場にいることに何か関係があるの？」

「ああ、その通りだ」

「いやはや、全く……あの時、少々前のめりな様子を見せていたものだから、何かしら望みがあるのだろうかとは思っていたのだが。

まさか、こんな短い間に果たしてしまうとは思わなんだ」

「ここしばらくは、食堂の業務をブーディカさんやキャットに代わってもらいな

ら作った時間で、宝物庫に通いっぱなしだったからな。

女神ステンノの出迎えも、途中から殆どおざなりなものになっていたよ」

「それってもしかして、この間の会議でカエサルが話してた……」

「そう、追加の魔力リソースをカルデアに収めることで要望に応えるって約束してたアレさ。」

エミヤったら、そのために必要な条件をもう達成しちゃったんだよ」

「エミヤさん、凄いですっ…!!」

「……こう言っちゃなんだけど。」

エミヤって、料理を作ったり家事が出来たりするだけじゃなくて、サーヴァントとしてちゃんと戦えたんだ」

「ふふっ……どうやらマスター、君が私に対して抱いている認識には多大なる齟齬があるようだ。」

近いうちに、それを払拭させる機会を作りたいのだが……今この場でする話では無いな、本題に入ろう」

「何か、頼みたいことがあるんだよね。」

このタイミングでその話をするということは、これからレイシフトを行なうことに関係があるの？」

「ああ、その通りだ。」

本来こなすべき任務の合間、もしくは終わった後で構わないのだが、とある食材を探してきてもらいたい。

私が望む形で上手く持ち帰ることが出来れば、カルデアの食料事情に更なる一石を投じることが出来るだろう」

「その、望まれている食材とは？」

「卵だよ。」

人の手による飼育や育成が容易な家鶏、その有精卵をどうにかして手に入れてもらいたい」

「……っ！」

「そ、そうかつ……まだ育ち始めていない卵なら、シーカーストーンに入れて帰れるかも!!

上手く孵して、育てて、増やすことが出来れば、卵や鶏肉がこれから先ずっと確

保出来るようになる!!」

「かも、しれない。」

確信は無いが、試してみる価値はあるのではないかね」

「そうだね、やろう!!」

上手くいったら俺、久々に卵かけご飯が食べたい!!」

「せ、センパイがご所望の料理……私も興味があります、頑張ります!!」

「実働部隊の君達がやる気満々でいてくれるのは助かるよ、ありがとう。」

エミヤが納めてくれた魔力リソースを使って、孵卵器と飼育スペースの準備を進めておく。

微小特異点の修正に関してはさっさと終わらせて、鶏探しに専念しようじゃないか」

「いつも通りだ、頑張ろうな」

「頼りにしてますからね、リンクさん」

積み重ねてきた実績と信頼を元に、いつものようにリンクのことを頼りに思う一

同は、気付くことが出来なかった。

彼の顔色がかつてない程に青ざめ、表情は硬く引き攣っていたことに。

見えない刃

「……レイシフト、完了を確認しました。

目視での危険は見受けられませんが……ドクター、念のため周囲の観測をお願いします」

《もうやっているよ、こっちでも特に変なものは見受けられない。

今居る場所はとりあえず安全だと思って良さそうだ、このまま状況確認に移ろう》
「了解しました。

えっと、ここは確か……十五世紀のフランス、第一特異点に近い場所と時代です
ね」

《その通りだよ、第一特異点を修復した際の余波によって発生した微小特異点と推測されている》

「……と言うことは、フランスの時のように、竜とか骸骨兵とかが出てくる？」

《くるかもしれないし、こないかもしれない。》

この特異点はあくまで、人理に決定的な楔が打ち込まれたことと、それを取り除いたことによる余波なんだ。

人理という名の穏やかな水面に、特異点という名の石が投げ込まれたことで生じた波紋の部分に該当する、と言えば分かりやすいかな。

ただ単に広がるだけでなく、何かしらの障害物にぶつかって形や流れが変わることも十分に在りえる》

「なるほど、風が吹けば桶屋が儲かるってやつか」

「……センパイ、風が吹くこととオケヤが繁盛することに何か関係性があるのですか？」

「あー……日本に昔からある例え話のひとつでね。

ちよつとしたことが巡り巡って思いもよらない影響を及ぼすとか、何が原因でど

んなことが起こるか分からないとか、そういう意味なんだよ。

細かい説明をするとなんとなくと長くなるから、興味があつたらまた後で」

「分かりました、では後ほどお願いします」

《ふふつ……とにかく、この特異点の原因が何であり、修復するにはどうすればいいのかを、現状で判断することは出来ない。

まずは情報収集だね、誰か話を聞ける人が近くにいればいいんだけど》

「ちよつと探してくるよ。」

立香とマシユは、安全を確保しながら待っていてくれ」

二人が頷くのを確認したリンクは、Uの字の形をした陶器製の笛を取り出して咥え、高音から低音へと下がっていく素朴な音色の旋律を繰り返した。

そうして、自身を呼ぶ音色に応えて現れた愛馬に一息で跨り、仲間達に見送られながら周辺の探索へと向かってから、僅か数時間後。

それなりの規模の村を見つけ、仲間達をきちんとそこまで案内したいいつも通りの手際を悔やむ羽目になることを、リンクは知る由も無かった。

特異点の原因らしき『異変』に関する情報は、運よくすぐに手に入れることが出来て、その足で現場へと向かったまでは良かったのだけれど。

飼料や糞、更にはそれそのものが発する獣臭までもが混じる独特の臭いに、二十年にも満たない今までの人生で接する機会が無かった立香とマシュは、顰め面で鼻を押さえながら立ち尽くしてしまっていた。

後ろからは、この場所、そして彼らの主である女性の、肝っ玉母ちゃんと称するに相応しいような豪快な笑い声が聞こえてくる。

情けない有りさまを馬鹿にするのではなく、全てを許容してくれる大らかに満ちていたその声は、立香達の体の強張りを少なからず和らげてくれた。

「すいません、入れてほしいって無理を言ったのは俺達なのに……」

「そんなこと気にすんなって、あたしだって常日頃から臭い臭いって思ってたんだ。そこで踏ん張ってるだけ大したもんだよ、うちの子達なんか『手伝え』ってガツンと言ってやらないかぎり近づきやしないってのに。」

……そんなことよりあんた達、本当に任せていいんだね？」

「勿論です」

「お任せください、家畜泥棒は絶対に防いでみせます」

マシュがふんつと気合いを入れながら口にした『家畜泥棒』。

それこそが、この村を脅かす、特異点の原因と推測される異変だった。

第一特異点の原因であった、竜の群れやそれを従える魔女の登場と言ったものと比べると、非常にささやかで大したことのないものに思えてしまうのだけれど。

聞き込みの中で得た情報を纏めてみれば、そこから推測されたのは、これはまだ大変な事態の始まりに過ぎないのではないかという懸念であった。

《最初はほんの僅か、居なくなっていることがすぐには気付けない程度の数がいつの間にか消えていた。

それが少しずつ頻度が上がって、小屋ひとつを一度で空っぽにしてしまうような大胆な行動にも出るようになって……最近では、ついに目撃までされたという。

ほんの一瞬目の当たりにしただけでは、その全容を把握することが出来なかった

ほどの巨体を。

間違いない、そいつは成長している。

今までの被害が家畜で済んでいたのは、恐らくはそいつが元はただの動物で、人間に対して当然の恐怖や警戒心を抱いていたからだ。

だけどそいつは今、自分が人間を恐れる必要が無いほどに大きく、強くなっているのを自覚し始めている。

『人間』を獲物とみなすのに、そう時間はかからないと思っていいだろう』

「間に合ったって、思っているのかな」

『ああ、もちろん。』

家畜泥棒……特異点発生之余波を受けた動物が変質したと思われる魔物を退治すれば、微小特異点を消滅させられる筈。

加えて今回は報酬だって貰えるんだからね、気合い入れていこう！』

「……よしっ。

なあリンク、お前何か気付いたこと……って、え？」

「リンクさん、そんなところで何をしているのですか!？」

ロマニの言葉を受けて、頬を叩きながら込めた立香の気合いは、振り返った先に当然居ると思っていた人物の姿が、予想よりもずっと離れたところにあったという謎の現実によって霧散した。

四方八方から響く甲高い鳴き声に掻き消されないよう、一生懸命に声を上げるマシュに向こうも応えようとしているらしいのが仕草で分かるのだけれど、騒音の発生源に囲まれている立香達の耳にその声は微妙に届かない。

「一体どうしたんでしょうか……」

「さっきから、何か様子がおかしいよね」

「聞き込みの結果を纏めたところ、音も気配も無いままいつの間にかやられてるってのが、例の家畜泥棒の特徴だ」

「それと、行動パターンとして、一度襲ったところはその後何度か連続で襲われているのが分かりました。」

小屋が荒れたり、生き残った動物達が騒いだりしなかったために発覚が遅れて、

被害が拡大してしまっているそうです」

《恐らくその魔物は、アサシンクラスのサーヴァントが持つ気配遮断スキルのような能力を得ているのだろう。》

忍び込み、襲い、食べてしまうまでを、人間どころか居合わせた他の動物達にすら悟らせていないんだから》

「か、完全にパニックホラー映画の怪物……」

「そんなのが人を襲いでしたら大変ですよ!!」

「……狩りの最中でさえ存在を覚らせないような奴を、こちらから出向いて探しに行くってのは現実的な手じゃないな。」

同じところを何度か襲うっていうのがそいつの狩りのパターンなら、直近に襲われたところで待ち伏せするのがいいと思う」

「って、言い出したのはお前だろ？」

「あの臭いなので、小屋の中に入って一緒に、というのが厳しいのは分かりますが。せめてもう少し近くにいないと、いざという時に咄嗟に対処するのは難しいかと思われます」

「それはそうだし、分かってるんだけど。」

……襲われてた家畜が、まさかアレだなんて思わなかったから」

「リンクさん、今何と？」

「い、いや………あのさあ、ちょっと提案なんだけど。」

二人は予定通りここで待ち伏せして、その間俺は直接そいつを探しに……って駄目だ駄目だ、最初に言った通り相手の特性を考えると非効率すぎる!!」

「リ、リンクさん？」

「最終的に見つけられる自信はあるけど手間はかかる、その間にこっちが襲われる可能性は高い!!」

マッシュや立香じゃ能力で気配を消した奴に気付くのはまだ難しいし、俺も含めて全員で待ち伏せに徹するのが最善!!

分かってるんだけど……でも、だけど………やっぱり………」

「リンク、お前本当にどうした、大丈夫か？」

周りにいる者達をよそに、頭を抱えて自問自答しながら悶え始めてしまったリン

クに、恐る恐る声をかける立香。

視界の端から近づいてくる、両腕で抱えられる程度の大きさの生き物の存在には
気付いていたのだけれど、自分達が今いる場所を考慮すれば特におかしなものでは
無いし、この状況でわざわざ対応するようなものだとも思えなくて。

意図してスルーしたその選択の結果を、立香は直後目の当たりにした。

「ココッ」

『それ』を目にした立香が、まず最初に思い出したのは、驚いた猫が全身の毛を膨らませながら高々と跳び上がる面白動画的一幕だった。

声なき声を上げながら、何を考えているか分からない顔でこくりと首を傾げる小動物から一足飛びに距離を取った様子、血の気の失せた顔色や瞳孔が開いて引き攣った表情などを鑑みれば……それを見せたのが只の一般人だったならば、『なーんだそうだったのか』『早く言ってくれば良かったのに』などといったありふれた許容の言葉を、笑いながら口にするのは容易かっただろうに。

それが『その人』であつたというだけの事実が、本来ならばとても簡単なことである筈の、ありとあらゆることを躊躇わせる。

思いがけず生み出されてしまった、何とも言えない沈黙を破ったのは、先程も耳にした豪快な笑い声だった。

「あははははっ!!

あんた、一人だけ遠くで何をしてるのかと思ったら、そいつらが苦手だったのか

い!!」

「……………」

「さっさと言えばよかったのに、別に恥ずかしいことじゃないよ。

生まれた時からそいつらと付き合ってるうちのチビ達だってねえ、鳴き声とか羽の音とか、嘴とか爪とか、あらゆるものを怖がってビービー泣くんだから」

「……………」

「一番上のは、最近になって何とか普通に世話が出来るようになってきたけど、怖いのは相変わらずみたいで我慢しているのが見え見えなんだ。

今思えば、一生懸命平気な振りをしようとしている様子がさっきまでのあんたにそっくりだったよ。

「気付いてやれなくて悪かったねえ」

「……………」

「すいません、もうやめたげて頂いても宜しいですか!？」

悪気は全く無いが故に、伝説の勇者にその場で四肢をつかせるほどの壮絶な威力

を伴ってしまった言葉の刃を少しでも遮るべく、懸命に声を上げる立香マスターの健気な姿がそこにあった。

更新の間が開いてしまっすみません、エルデンリングやってました。

あまりにも評判が良かったもので、フロムソフト系のゲームに初めて手を出してみたのですが……面白いですね、慎重を乗り越したビビりのスタイルが故に亀の歩みですが頑張って冒険しています。

ある意味でのハイラル最強の生物について匂わせたところ、多数の反応を頂きました。

やはり皆さん、アレはトラウマのようですね（笑）。

FGOの夏イベでも定番の存在で、出てくるたびに毎年、「今年の夏もリンク君の平穩が消えた」と密かに思ったりしています。

勇者の天敵

「本当に良かったのか、お前も一緒に待ち伏せ組で」

「無理しないでもいいんですよ？」

「ありがとう、でも大丈夫。」

何度も言ったように、今回は待ちに徹するのが最善なんだから。

全部小屋に帰してもらったこの状態で、離れたところから見張るだけでいいんなら、何とか我慢出来る」

「『何とか』なんだ」

いつものように、森にいる獣達よりもずっと肥えた獲物を求めて人の領域へと踏

み入ったそいつは、不意に聞こえた声に歩みを止めた。

これがもう少しだけ前のことだったら、人間が間近にいて、しかも腹は十分に満たされているという状況で、無謀な狩りを強行するという選択肢は即座に切り捨てていたのだろうけれど。

野生動物としての警戒心が告げる無意識の聲が、既に殆ど聞こえなくなっていた。そいつは、ごく自然な流れで目標を切り替える。

そうして忍び寄った先で、目当てだった小屋から少し手前の藪に身を隠す人間達の姿を見つけた。

「一応さ、俺もちゃんと分かってはいるんだよ。

アレは本当なら、そんなに過剰反応するようなものじゃないって」
「そりゃあまあ、だからこそ隠そうとしてたんだろうし」

「正直な話、驚かなかったと言えば嘘になってしまいます。

あっ……いえ、すみません。

苦手なものがあるということ自体は、別に悪いことではなくてですね」

「いいよ別に、それが自然な反応なんだってことも分かってるから」

「……………すみません」

「いやいや、本当に気にしてないんだ。」

俺がアレを苦手な理由なんて、同じ体験でもしないと本当の意味では分からないだろうし、だからって皆もそうなればいいとは思わないし。

……………もしもの話として、実際に同じような目に遭ったら、二度と笑い話には出来なくなる確信もあるし」

「……………何があったんだ、本当に」

人間が話す言葉の意味までは分からないけれど、何となく気の抜けた雰囲気の際だらけの後ろ姿から感じ取った魔物は、辛うじて残っていた最後の警戒心を捨て去った。

自身が強大な存在へと変化していることを少しずつ自覚し、人間という存在が思っていたほど強くも恐ろしくも無いことに気付きかけていたタイミングで、それらの認識を裏付けるようなものを目にしたことは、きっかけとなるには十分だった

らしい。

これでそいつが普通の獣だったのなら、獲物が油断しているという絶好の機会を逃さずに、一息で襲いかかっていたのだらうけれど。

既に本格的な変異を迎えていたそいつの心境は、獣ではあり得ない方向へと傾き始めていた。

気付かれることも騒がれることも無い、簡単に済むのならそれによ越したことは無い筈の狩りに、『退屈』という余計なものを感じるようになっていたこと。

十分に腹が膨れている状況で、食べきれないのにも構わずに余計な狩りを繰り返して、命を奪うという行為そのものに対する異様な高揚感を覚え始めていたこと。

少しずつながらも確実に増していた魔性の存在としての性分、愉悦感を伴う残虐性が、今この瞬間に明確なものとした。

空腹を満たして生きるためではなく、愉しむために殺したい。

あつという間に終わらせてしまうのではなく、恐怖と絶望に満ちた悲鳴や表情を堪能したい。

人間達は、そんな歪んだ衝動に身も心も委ねる怪物がすぐ後ろに迫ってきている

ことにも気付かないまま、相変わらぬの気の抜けたやり取りが続いている。

「えっ……じゃあ、アレが駄目なのはお前個人の問題じゃないわけ？」

「むしろ俺は、先輩方のとばっちり。

『勇者リンク』とアレの間には変な因縁があるってことと、歴代の先輩方がどれだけ怖い目に遭わされたのかってことを知っていたせいで、実体験をすっ飛ばして最初から駄目だった。

その後も、関わらないように気を付けていたおかげで、俺自身の人生においては特に問題なく過ごせたのに……まさか、全部終わらせた後でン万年も経ってから、先輩方と恐怖体験の記憶を共有する羽目になるとは」

「……すみません、ちょっと考えたのですが。

リンクさんが苦手とされている鳥は、今の世でごく一般的な家畜として扱われているものとは、よく似た別種なのではないでしょうか」

「ああ、それは俺もあり得ると思う。

何たって、古代ハイリアと現代とでは、文明が一旦衰退した時期を挟んでン万年

以上も離れているんだから」

「亜人種や幻想種が当たり前のように存在し、今の世とは比べものにならない魔力と神秘に満ちていた世界に生息していた種です。

姿や生態が似通っていたとしても、本質としては違いがあると考えるのは、ごく自然なことではないかと」

「……………そうだなあ。

俺が知っているアレは、人一人ぶら下げながら多少滑空できる程度には力があつたけど、今の時代にいる奴らはどんな感じなの？」

「いやいやいや、何それ無理だって!!」

「ちゃんと確認して良かった、やっぱり別の何かでしたね……」

「そっかそっか、納得出来た。

ハイリアの時代に生息していたアレは、生物として普通に強かったんだ。

それこそ、下手に怒らせると勇者でも只では済まないくらいに」

「……つまり、今の世にいるあいつらは、俺が知っているのとは違う？

変に怖がらなくても大丈夫？」

「だと思えます」

「トラウマ級の苦手意識を、急に払拭するのは無理だろうけど。

頑張って少しずつ慣れてみるのもいいんじゃないかな、俺達も付き合うからさ」
「……そうだな、余裕のある時にちょっと試してみても」

最初の獲物として目星をつけていた、三人の中で最も小柄な少年が纏う空気を一変させながらナイフを構えた光景を前に、丁度襲いかかろうとしたところだった魔物は寸前で踏みとどまった。

自身の存在がばれたのかという懸念は、少年が注視するのがまるで違う方向であるという事実によって霧散する。

出鼻を挫かれてしまったことは残念だけれど、自分に関係の無いところで警戒心を募らせている状況は悪いものではない。

高まった緊張がふと緩んだ瞬間を襲われた獲物は、どんな表情を見せてくれるものなのだろう。

そんなことを考えながら、高揚感を懸命に堪える魔物の存在に気付いていない人

間達は、押し殺した声でのやり取りを続けていた。

「例の魔物？」

「まだ分からない……けど、その可能性は高い」

「動物達は、みんな小屋に戻してもらっていますし。」

全部終わるまで近づかないでほしいって、村の人達にも頼んでありますからね」

得体の知れない何者かが、藪を鳴らしながら進む先に家畜小屋があることを確認した少年は、手にしていたナイフを投げつけた。

牽制と威嚇を目的に、身を掠めるギリギリのところを狙ったそれは、上手い具合に対象を驚かせることが出来ただけだ。

羽毛の一部が削げた翼を盛大にばたつかせ、鼓膜を貫くような甲高い鳴き声を響かせながら半狂乱で飛び出してきた存在を認識した瞬間、その身と思考は二本目のナイフを構えたまま凍り付いた。

「え……あれ、何で？」

「全部小屋に戻して下さった筈では……」

それそのものではなく、それが今ここにいるという状況に対して戸惑う仲間達の声は、今の少年には聞こえていない。

羽根を飛び散らせながら高々と跳び上がったそれが地に下り、『ぐりん』という擬声語が聞こえそうな勢いで振り返った瞳がこちらを認識したことに気付いた彼の頭の中からは、つい先程交わしたばかりのやり取りは跡形もなく消え去っていた。

「リンク!!」

「リンクさん!？」

散々に怖がらせた末に、絶望で顔を染めた獲物をゆっくりと堪能する妄想に浸っていた魔物は、自分が潜んでいる方向へと向けて猛烈な勢いで駆けてくる者の存在を感じたことによって、状況の変化によりやく気がついた。

見つからないように身を伏せ、存在を隠すことに神経を使っている状態では、離れているところのことを把握するには音に頼るしかない。

だとしても、人間達が素っ頓狂な声を上げ、更にはそれを掻き消す勢いで鳴き声と羽音の多重奏が巻き起こっているという異様な状況は、異常事態が発生していると判断するには十分だった……のだけれど。

自らの力を自覚したばかりで異常な万能感に突き動かされていた、恐れるものは何も無いと本気で思い込むという作動不良を引き起こしていた思考回路は、現状を危機ではなく好機と見なした。

行く先に狩人が身を潜めているとも知らないまま、一目散に駆けてくる愚か者は前座に過ぎない。

仲間の無残な死にざまで以って、残された者達により大きな恐怖と絶望を与えるべく……人間の頭くらいなら、一瞬で噛み砕けるような牙が並んだ口を開けながら飛び出した魔物は、敢え無くそのまま踏み台にされた。

いきなり現れて牙を剥いた魔物の脳天を容赦なく踏み潰し、骨と肉を食い千切る筈だった口を地面との挟み撃ちで強引に閉じさせた少年に、その意図があったかど

ころか魔物の存在自体に気付いていたかどうかすら定かではない。

邪魔な障害物を咄嗟に乗り越えた……動揺した素振りを見せず、振り返るところか脇目すらも振らずに、ただひたすら駆けていく少年の後ろ姿は、今の行動には本当に単純な意味しか込められていなかったことを明確に物語っていて。

予定と想定のおそくを、本当に思いもよらない形で覆されたという異常事態を処理しきれず、真っ白になってしまった頭で呆然と身を起こした魔物の前に広がる光景は、ほんの一瞬の間に激変していた。

重なり合って恐怖と不安を煽り立てながら響く鳴き声と羽音、我が身へと向けて迫ってくる数多の爪と嘴。

それが、身の程というものを思い知り、改めて学び直す機会にすら恵まれなかった不運な獣が、最後の時に見聞きしたものだった。

「まさかあんなのがいたなんて……ありがとう、無理をさせたね」

「い、いえ……私達は、本当に特に何も」

「……あの、すみません。」

「一羽外に出てた奴がいたんですけど、あれは一体」

「ああごめんね、残っていたのかい。

いやあ、一応数えはしたんだけどさ……家畜泥棒の被害が本当にいつの間にか出るせいで、何羽やられて何羽残ってるのかがはっきりとは分からなくなってて」

「……なるほど。

牛や豚ならまだしも、小さい上に数が多いアレは尚更のことなんですネ」

「そうして、いつの間にか全部いなくなっていた、なんてことにならなくて済んで良かったよ。

ほらこれ、約束の報酬」

「あ、ありがとうございます！

いいんですか、こんなに頂いてしまって」

「構わないよ、何日かすればまた産むさ。

ちゃんと孵るやつだから、大事にしてやってくれよ」

「はい、もちろんです」

「……………ねえ、ダ・ヴィンチちゃん。

いいのかな、と言うより大丈夫なのかな、このまま帰って。

あいつらが原因で、別の特異点が発生したりとかしない?」

《私達もそう思っ、あらゆる解析を行なっただけだ。

……結論から言おう、異常らしいものは何ひとつとして確認出来なかった。

事実として、現状そいつらは本当に何の変哲も無いただの鳥。

よって、先ほどのあれはリンク君……特殊な条件が揃うことによって引き起こされたごく限定的な事象であり、関わりさえしなければ発生しないという推測が立てられる》

「つまり?」

《下手に長居した方がまずいことになる可能性が高いから、早いところ帰ってきなさい》

「了解しました、ですが……」

「……早く帰れるかなあ」

《こちらでも手伝うから頑張っ》

「こんなことになるなら、最初から探しに出た方が良かったかもしれない」

気配遮断スキルが厄介だっただけで、個としては油断しまくりの隙だらけで突くところがいくらでもあった魔物と、恐慌状態に陥ったまま逃げ出し、そのまま行方を晦ませてしまった伝説の勇者。

意図して隠れている状態なのを探すとして、より難しいのは果たしてどちらか……考えるまでもないことであった。

鬱蒼とした森の前に、卵でいっぱいになった籠を抱えながら途方に暮れる立香とマシユ。

彼らの背後には、つい先ほどの惨劇など無かったかのように、平然とした様子で地を啄む鶏達の姿があった。

その中の一羽が、ふと足元に近寄ってきていたことに気付いた二人の体が、反射的に跳び上がる。

その様子を笑うことが出来た者は、誰一人として存在しなかった。

そうして、微小特異点修正の任務を何とか無事に終わらせ、持ち帰った卵をス
タッフ達に託してから、しばしの時が過ぎた頃。

カルデアの何処かで世話をされているであろうもの達のことを努めて考えないよ

うにしながら、日々の通常業務をこなしていたリンクの下に、とある者から手合わせに付き合っしてほしいとの申し出が届いた。

新しく編み出した戦法を確かめてもらいたいという内容が気になったのと、丁度体を動かしたい気分だったことから二つ返事で引き受けた判断を、彼は直後に悔やむこととなる。

「……そんな、何で。」

オルタ、一体どうして……？」

「くっ、ふふふ……あはははははっ!!」

いかがかしら勇者サマ、我が竜達の勇ましさは!!」

「「「コケコッコーーッ!!」」」

「いやそれ竜じゃないだろ、むしろ竜なら良かったのに!!」

質問に答えて、何でオルタがそいつらを!？」

「ふっ、簡単なことよ。」

だって私、こいつらの飼育担当だもの」

「はあっ、何それ!？」

「立候補した理由、それだったんだね……」

「ここまで来るのに苦労したわ……殻が割れ始めてからは、もう片時も目を離せなくて。」

自力で生まれるのは最初の試練だって聞いたから、手伝ってやりたい気持ちを懸命に堪えて。

餌や水を変えて、温度にも気を付けて……よちよち歩きで私の後をついてきたこいつらに大人の羽が生えてきた時は、そんなに大きくなったんだって胸が熱くなつて。

……あっ、駄目だわ、思い出しただけで込み上げてきた」

「本当に付きっ切りだったんですね」

「道理で最近見かけないと思った」

「そうして積み重ねてきた努力と苦労の全てが、今この瞬間に報われるのよ!!」

「いや待て待て、頑張って世話してきたのは分かったけどそれでもおかしい!!」

オルタの『竜の魔女』スキルが効くのは竜属性を持つ奴に対してだけだし、そい

つらに竜との関係性は無いだろ!!」

「私もそう思って、何とか出来ないかと一生懸命に調べたし、色々試してみているの。」

そんな私に……魔女であるこの身からすれば皮肉な話だけど、天啓みたいなものが降ってきたのよ」

「『竜の魔女』という言葉の真の意味は、『竜を操る魔女』ではなく、『操るものが全て竜となる魔女』なのではないですか？」

「ってね」

「そんなこじつけ一体誰gってゲオルギウスさんんんっ！！！！」

「おや、なぜ私だと？」

「そんなイイ笑顔で親指立ててれば誰だって分かりますよ!!」

「と、に、か、く!!」

勇者リンク、新生竜の魔女とその眷属達が初陣を果たす相手としてこの上ないわ

!!

覚悟しなさい、第一特異点で散々に追い詰められた恨みを纏めて果たしてやるん

だから!!」

「根に持ってたの!？」

「当たり前でしょう、私は『復讐者』^{アヴエンジャー}よ!!」

「あの頃は『裁定者』^{ルーラー}だったじゃんか、それに紛れもない敵だったし!!」

「やかましい、同じくらい怖い思いをするだけでチャラにしてやるって言ってるんだから甘んじて受けなさい!!」

そら行け、嘴アタック!!」

「ぎゃああああああっ!!!!!!」

「……立香君、どうする？」

「うーん……いいや、好きにさせておこう。」

口ではああ言ってるけど、本気で嫌がっている相手を徹底的に追い詰めるようなことを、オルタがやるとは思えないし。

何かやらかしたら、天敵とも言えるような手段を使って叱りに来るような人がいるんだってことを骨身に沁みさせておくことは、リンクにとってもプラスになる気がする」

「ふふふっ、あらあら。

オルタったら、マスターから随分と信頼されていますのね」

「流石は私の妹です」

食堂の恒常メニューに、オムレツなどの卵をメインとするものが幾つか追加されることとなるのは、この騒動が起こってから更に数日後。

リンクの件は把握していても、卵の入手経路が確立した喜びの方が上回っていたらしいエミヤが、満足げな笑みと共にフライパンを振る様子が見受けられていたとのこと。

ジャンヌ・ダルク・オルタのスキルが強化されました。

竜の魔女
EX

味方全体の攻撃力をアップ&『竜』特性を持つ味方全体の攻撃力をアップ

←

竜の魔女SP

味方全体の攻撃力をアップ&味方全体に『竜』特性を付与+『竜』特性を持つ味方全体の攻撃力をアップ

いつの日か、ペンギン（と書いてリヴァイアサンと読む）を連れているプリマと使い魔対決を行なう時が来るかもしれません。

「私の竜は強いよ!!」

「何をっ、私のリヴァイアサンはそれに加えて優雅で華麗だわ!!」

「いいですね、大事なうちの子を自慢し合うなんて。

負けませんよ、私にだって可愛いリースXPとその家族達が……って、あれ。

何で逃げるんですか、別に食べたりしませんよー?」

カルデアの休日 前

予め決められていた設定通りに鳴り始めた、甲高い電子音。

若干の不快感を伴っていたそれは、ゆっくりと伸びてきた手によって止められ……生憎ながら手の主は、音が果たそうとしていた役目を無視して、柔らかな枕に再びその顔を埋めた。

始まりかけた途端に止まってしまった一日が再び動き出したのは、目覚ましとしての役割を果たすことが出来なかった時計が、30分ほど普通に数字を進めた頃のこと。

ノックどころか声をかけることもせずに、ズカズカという音が聞こえてきそうな

足取りで遠慮なく部屋に踏み入ってきたその人は、掛け布団をはぎ取ると同時にベッドの主の頭を容赦なくひっぱたくことで、その場の空気を強引に動かし始めた。

「うっ……」

「あんたねえ、起こされるまで起きないんなら目覚ましかける意味無いじゃないの」
「……おはよう。」

オルタに起こされるの、何か久しぶりだね」

「新入りのローテーションが一通り済んだタイミングで、たまたま私が通りがかっただけよ」

「……自分で起きるの苦手だから、誰かが起こしに来てくれること自体は本当にありがたいんだけどさ。」

どういう経緯があつて、俺を起こすのが新人サーヴァントがカルデアに馴染むための第一歩的な扱いをされるようになったわけ？」

「さあね、でも実際にいいきっかけになつてるのは確かよ。」

いかにもカルデアらしいじゃない、『勇者様を叩き起こしてこい』だなんてふざ

けたミッションは」

「……寝汚いところがあるのは認めるけど。

暴れたりとかはしないで起こされればちゃんと起きるんだから、それを難関扱いされるのはちょっと心外だなあ」

「はいはい。

もう行くわ、二度寝するんじゃないわよ」

大きなあくびをしながら身を起こしたリンクに、振り返ることなく背中越しに手を振ったジャンヌ・オルタは、部屋の外側に下げられていたプレートをひっくり返してから去っていく。

『就寝中』から『起床済』に変わった表記を始まりに、勇者リンクの一日は幕を開けた。

食堂は、カルデアで最も人の集まる場所と saying いい。

日に三度の食事時はもちろん、それ以外の時間でも、常に誰かしらの姿がある。最初の爆破から逃れて機能を保ち続けていた数少ない施設のひとつであり、自身

の立ち位置と役割を早々に確立させたエミヤによって当初からフル活用されていた流れを汲み、多くの施設と区画が復旧を果たした今もなお、スタッフやサーヴァント達がふとしたタイミングで足を向ける場となっているから。

そんな場所柄を生かして、新たに作られた仕組みが少し前から稼働していた。朝食を取るという用事を既に済ませた者達が、壁際に集まりながら騒めいている。彼らが見上げる先には、全体を把握するためには目線だけでなく首から動かさなければならぬような、巨大な一枚板……『掲示板』が備え付けられている。

しきりに動いていたかと思えば、ふとしたタイミングで止まりもする彼らの目線は、そのあちこちに貼りつけられている紙の内容を追っている。

それは、本日の日替わりメニューの通達であったり、宝物庫の稼働予定表であったり、それを汲んだ上での攻略のメンバー募集であったりと、いわゆる『カルデアからのお知らせ』や『バイト募集』の類いであった。

「済まぬが、これを頼む」

「宝物庫攻略へのご参加ですね。」

では、お伺いしますが……記載された要項をきちんとご理解いただけたことと、引き受けたお仕事に真摯にお勤めになられることを誓えますか？」

「うむ、問題ない」

「……はい確かに、嘘は無いみたいですね。」

どうぞ、頑張ってくださいませ」

「今宵は久々に月を見たいのでな、ちと気合いを入れて稼ぐとしよう」

「……立香の案を元に始めた仕組み、結構上手く回ってるみたいだな」

「QPと引き換えにシミュレーターを開放したのも、積極的に動くためのいいモチベーションになっているみたいだし。」

受付を清姫に担当してもらうのも……今のところ無いとは思うけど、冷やかし目的の排除や、リスク管理という面でいい具合に噛み合っているし」

「立香の奴……自分を『何の変哲もない一般市民だ』って豪語する割には、少し調整するだけで十分使い物になるような案をちよくちよく出してくるのは一体何なんだ？」

今回のこれも、漠然としたイメージじゃなくて、あいつの中では既にある程度の

形が出来ていたみたいだし」

「『酒場や食堂の掲示板でクエストを受注するのは定番だから』とか何とか言ってたけれど、どういうことなんだろうね」

立香がちょっと躊躇いながら口にしていたそれは、人によっては一発で理解出来る話ではあるのだが、古代人であるリンクと箱入りなロマニでは分からないのも仕方がない。

揃って首を傾げる彼らに声をかけたのは、受付に並んだ列を捌き終えて一息ついた清姫だった。

「リンクさん、ドクター、おはようございます」

「おはよう清姫、朝から大変だったね」

「いえいえ、この働きがカルデアの……ますたあのお役に立つのなら、これくらい何ともありませんわ」

「頼もしいよ、ありがとう」

「立香も喜んでる筈さ。」

……じゃあ俺も、そろそろ行こうかな」

マシュと並ぶメインサーヴァントの一人として、立香に同行することが最重要事項となっているリンクは、急なレイシフトにも対応することが出来るように特定の役割を負ってはいない。

なので彼は、カルデア内を巡回して手助けが必要そうなところにその時々で加勢するという、遊撃手のような役割を日々こなしていた。

この日もいつものように、その予定で動き出そうとしていたのだけにと。

同じタイミングで『あつ』と声を上げたロマニと清姫によって、歩み出しかけた足はその寸前で止められた。

「ごめんリンク君、伝えなきゃと思ってたのを忘れてた!!」

今までは君の優秀さに甘えて、突発的に発生した問題や現場の人手不足なんかを、その場その場で何とかしてもらってきちゃったけれど……」

「人員もそれなりに増えてきたし、いつまでもそのままではいけないということ。リンクさん一人に頼りきるのではなく、前もってある程度想定できることに對しては、この場で依頼を出すという形で対応することになったのです。

ご覧になって下さい、こちらのよう」

清姫に促されて、掲示板に貼られている依頼の内容を改めて確認してみれば、確かに。

マルタが主導している家事全般や、エミヤが食堂を切り盛りしながら行なっていた倉庫の在庫確認等の、今までリンクが必要に応じて手伝っていた諸々に対するヘルプ募集の依頼が貼り出され、きちんと受託もされていた。

「ということは、俺が手伝いに入らなきゃいけないような現場は今のところ無いんだ」

「本当にごめん、昨夜のうちに話そうと思ってたんだけど……」

「ああそっか、確かシミュレーターの調整中にトラブルが起こってたっけ。

それに対応している間にすっぱぬけちゃったんだね」

「人手不足ではなく、トラブルへと対応していただくのはこれまで通りで構いませ
んし、その分の報酬を後でお支払いできるような仕組みも整えているところですが」
「問題が起こることを望むつもりはないよ、何事も無ければそれが一番。」

……でもどうしよう、急に予定が真っ白になるとは」

「むしろ良い機会です、たまにはお休みを取られては？」

「そうだね、それがいいよ！」

何しろリンク君、特異点でのことも合わせて働きっぱなしでしょ？」

僕のことを言えないよと、少しだけ責めるような口調で言ったロマニに、リンク
は肩を竦めながら笑い返した。

「そうだね、今日は好きにさせてもらおう。」

でも、何か起こったら遠慮なく声をかけてね」

「うん、その時はよろしく」

「それでは、良い休日を」

快く送り出してくれる二人に、手を振り返ししながら食堂を後にしたリンクは、人が十分遠ざかったところで立ち止まって。

耳にした者がいれば、速攻で駆け寄って彼をベッドへと放り込んでいそうな発言を、何の躊躇いも無くあっさりと口にした。

「休みの日って、どう過ごせばいいんだっけ」

何よりも問題なのは、それが自嘲でも困惑でもなく、本当に純粋な疑問から発せられていたことだろう。

「……で、俺達のところに？」

「ちょっと意見を貰えればと思って」

「……………マスターとしても友達としても嬉しいよ、そうやって頼ってもらえたってことがさ」

言葉を失うマシユと、二人が愕然となった理由が分からずに首を傾げるリンクを認識しながら、大きなため息をつく立香。

ここは踏ん張りどころだと、ちょっと強めに頬を叩いて気合いを入れながら、擦り切れるばかりだった人生をやり直そうとしている勇者へと改めて向き直った。

（俺としては、おやつでも食べながら部屋でゆっくりするのも、立派な休日の過ごし方だと思うけれど。

今のこいつの場合は、多分それじゃ駄目なんだろうな）

それは『体の休め方』であって『心の休め方』ではないと、リンクが忘れてしまっているのは後者の方だと、サーヴァント達にも認められたマスターとしての勘が告げている。

しかし、カウンセリングなどの特別な勉強をしたわけではない立香には、こういう時にどんな言葉をかけ、どんな行動を促してやるのが正解なのかが分からない。

そもその話として、専門家ではないからとサーヴァントの悩みや問題の解決を他者に丸投げするという行為や考えは、マスターとして如何なものか。

無意識のうちに唸り声を上げて、リンクやマシュを心配させる程に考え込んでしまっていた立香は、ひとつ突き抜けたところであまりにも単純なひとつの答えに辿り着いた。

「ねえ、マシュ……ダ・ヴィンチちゃんに、俺とマシュの今日の予定を全部延期するって伝えたいんだけど、回線繋げてくれる？」

「えっ、センパイ？」

「今日は俺もマシュも休み。」

一緒に色んなことしよう、リンク」

思いもよらない言葉を受けて、見開いた目を瞬かせたリンク。

そのあどけない表情は、彼の強さと頼もしさを誰よりも間近にしてきた立香でさえ、彼はただの少年なのだと思わざるを得ないようなものだった。

事情を知るや否や快く頷いたダ・ヴィンチに、通信越しに背中を押された三人は程なく、波飛沫が打ち付ける岩場に立っていた。

もちろん、燃え尽きた世界と猛吹雪によって閉ざされた現状では、普通のやり方でカルデアを出てこのような場所に行ける筈がない。

戦闘用シミュレーターを応用することで作り上げられた、本物と見紛うばかりの仮想世界には、三人以外にとあるサーヴァントの姿があった。

「というわけで、よろしくクー・フリーリン!!」

「おう、マスター達がやりてえって言うんなら俺は別に構わねえぜ」

「あ、あの……マスター、それにクー・フリーリンさん。

何の説明もなしに連れてこられてしまいましたか、一体何を行なわれるつもりなのですか？」

「これだよ、これ」

年経た賢者のような風格を感じさせることが多いクー・フリーリンが、ニカッとい

う音が聞こえそうな少年じみた笑みを浮かべながら手に取ったものが何なのか、リンクは一目で気が付いた。

「釣り竿？」

「特に熱を入れているのは槍の俺だが、術いまの俺だって嫌いなわけじゃねえ。

赤い弓兵のことをちいとばかり見習って、趣味と実益を兼ねた上でカルデアに貢献する方法を考えてみてな。

『釣る』という一連の行動と試行錯誤を経て、魔力リソースを『魚』という形で実体化させるための術式を、かなり気合を入れて作ってみた。

シミュレーターを戦闘用以外にも開放しようって案は、それをきっかけに出たんだぜ」

「もしかして、食堂のメニューに魚料理の品目が増えたのは……」

「俺の成果だ、美味しいものをちょっと追加して食えるくらいの小遣いにはなってる。お前達も何か釣れたら食堂に持ち込んでみな、赤い弓兵の奴がきちんと目利きした上で引き取ってくれるから」

「……エミやってば、魚の目利きまで出来るんだ」

「エミヤさんが、一体どんな生涯を経て英霊となったのか、知れば知るほど分からなくなりますね」

「そんなの今考えることじゃねえだろ、折角だから楽しもうや。」

予備の竿があるから、遠慮せず持っていきな」

「ありがとうございます、釣りを体験するのは初めてです！」

「クー・フリーンって、本当に釣りが好きなんだね」

クー・フリーンの笑顔と浮かれた様子が、好きなものを布教する際のそれだということに気付いた立香が、堪えられずに笑みを零す。

いい空気に乗った流れで振り返った先では、クー・フリーンから釣り竿を受け取ったリンクがその状態のまま首を傾げていた。

「リンク、もしかしてお前も釣りしたことないの？」

「そう言うお前は？」

「無いよ、でも前から興味はあった」

「そっか……俺も、魚を獲ったことはあるんだけど、それを釣りという形ではやったことが無くて。」

直接水に入って掴んだり、爆弾を投げたり雷を落したりして纏めて獲った方が、よっぽど効率的だったからなあ」

「情緒の欠片もねえ!!」

「それ以前に、掴み獲りはともかく爆弾や電気は、現代においては犯罪行為だからもうやるなよ!」

「そこまで行くと、釣りじゃなくてもはや漁の域だな……ああいや、それ自体を否定する訳じゃねえが。」

今日は休みで、稼ぐためにじゃなくて遊びに来たんだろ？

だったら今は野暮な考えは捨てて、魚との真剣勝負を楽しんでいきな」

「……楽しむ、か。」

そうだな、ちょっとやってみよう」

「よっし、じゃあ頑張れ」

「えっ……あの、クー・フリーンさん。

いきなり竿だけ渡されても、一体どうすればいいのか……」

「餌をつける、投げる、かかったら引く。

基本はこれだけだ、あとは経験と試行錯誤だな」

「……つまり、ひたすら体で覚えろと」

「クー・フリーンさんが厳しいのは、戦闘に対してだけではなかったのですね……」

ため息をつきながらもクー・フリーンらしいと思った三人は、気付けば笑みを零していて。

その少し後、横並びになった三本分の釣り糸が、少々ぎこちない動きで水面へと向けて投げられた。

ぷかぷかと僅かな浮き沈みを繰り返す仕掛けの、ほんの僅かな変化も見逃すまいと全身を力ませる初心者トリオに、流石に思うところがあつたらしいクー・フリーンが苦笑いと共に声をかける。

「待ってるだけじゃ駄目だ、色々試したり工夫してみろ。

間違いでも見当違いでもいい、そのやり方じゃ駄目なんだってことが分かるだけでも立派な進歩だ。

俺が仕込んだ術式は、実際の力量と正しい釣り方が出来ているかどうかには比例して、釣れる魚もでかくなっていくように組んであるからな」

「な、なるほど……」

「つまり、諦めずに何度も続けることでスキルレベルが上がっていったって、同時に獲物もランクアップするってことか」

「……例えの意味がよく分からねえが、とりあえず頑張れ」

「よし、じゃあまずは餌でも変えてみて……ってリンク、お前の竿が」

「えっ、あれ、もしかして引いてる？」

「呆けてる場合か、さっさと竿を立てろ!!」

想定外の事態に思わず呆気に取られたものの、クー・フリーンの一喝をきっかけに状況の把握を一瞬で終えたリンクは、竿を握る両手と踏ん張る両足に力を込めた。

重量武器を軽々と振り回す腕力と、ごつごつとした岩場にも関わらずその身がっちりと安定させていた足腰によって、水面へと向けて大きくしなっていた竿は瞬く間に、反対方向へと向けて跳ね上がり……居合わせた全員の頭上に影を落とすほどの巨体が、まるでそこが水の延長であるかのように高々と舞うさまを、誰もが呆然とその瞳に焼き付けた。

「……………さ」

「鯨だ——っ！！？」

『JAWS』を思い出させる程に凶悪な面相をした巨大な鯨を前に、思わず声を上げはしたものの、そこはやはり歴戦のマスターとサーヴァント達というもの。

突発的な事態への対応スキルが上がりによっていた彼らの戦闘態勢は、鯨が地に落ちるよりも早く整えられた。

サーヴァントの方が強いと信じてはいるが、だからと言って生理的な恐怖感が完全には拭い切れる訳では無く。

瞬く間に仕留められて岩肌に横たわる、もう襲ってこないとうやく確信出来た巨体を前に、立香は腹の底からの溜め息をついた。

「び、びっくりした……」

「一体なぜ、急に鮫なんかが……」

「……なありンク。」

さっきお前、釣りは初心者だって言っていたが、あれは本当か？」

「どういうこと、クー・フリーン」

「さっきも言ったら、俺が組んだ術式は糸を垂らす奴の技術と経験に応じて大物を作り出すって。」

お前が実際には初心者どころか達人だったとしたら、さっきのあれも一応説明がつくんだが」

「……『俺』が初心者なのは間違いないけれど。」

俺の中にいる先輩方……『時』『風』『目覚め』『黄昏』辺りは結構好きでやりこんでたから、その辺りが出てきたのかも」

「……その『やりこんでた』ってのは、具体的にはどんなもなんだ？」

「通っていた釣り場の記録を悉く塗り替えたとか、伝説の大物を釣り上げたとか」

「それが纏めて出てきたってか!!」

そりゃ鮫も釣れるわ、むしろよく鮫で済んだな!!」

「ごめんなさい……」

「いやいや謝んな、大物が釣れるに越したことは無いと思って上限を設定していなかった俺も悪かった。」

……重ねて申し訳ねえんだが、釣りはまた次の機会にして貰えるか？

こんなにもあからさまな不備がある状態でマスター達に遊ばせる訳にはいかねえからな、手直しが終わったら真っ先に声をかけるからよ」

「分かった、残念だけど仕方ないね」

「次を楽しみにしています」

「おう、またな。」

……お前も、いつまでもそんな湿気たツラしてんじゃねえよ。

せっかくの休みなんだろう、気を取り直して楽しみな」

そう言って笑いながら俯いた金色のつむじをかき回す動作に、その相手が大先輩なのだという事実に対する気後れのようなものは一切感じられず。

伝説の勇者ではなく、やらかしてしまつて落ち込む少年として少しだけ乱暴に扱われたリンクの顔に、程なく笑みが戻ってきた。

カルデアの休日 後

「センパイ、この後のご予定は？」

「どうしょっか、釣りでだいぶ使うとばかり思ってたからなあ……」

意気込みを早々に挫かれてしまったことに肩を落しながら、どこまでも同じような光景が続くカルデアの廊下を歩き先が決まらないまま進む立香と、従者としてそんな彼に付き添うマッシュとリンク。

シミュレーターに入る前と比べてカルデア内の空気が変化していることに、三人組の中で諸々の経験と勘が単独で飛び抜けているリンクが気が付いた。

（ピリッと来るような感じはしないし、悪意は無いな……これは、何と言うか）

「お祭り騒ぎ？」

「へ？」

「リンクさん、今なんと……」

カルデアや立香達が危険に晒されている訳ではないことを正確に察し、そのせいでいまいちスイッチが入り切らず、明確な行動に移ることが出来ずにいたリンク。彼がそんなどっちつかずの状態にあったタイミングを見計らったかのように、カーブ状になっている廊下の向こう側から蹄音を伴いながら突如駆けてきた黒と赤の影が、呆然と立ち尽くしていた三人をすり抜けざまに搔っ攫っていった。

「きゃあっ!!」

「なっ、なな、いきなり何……って、お前は!!」

「アレキサンダー!？」

「やあマスター。」

リンクにマシュも、急にごめんね」

三人分の驚愕の声と眼差しを受けながら心底楽しそうに笑ったのは、道半ばの覇王アレキサンダー。

比較的小柄な少年少女達だとしても、四人もの人間を雑に乗せてなお力強い名馬ブケファラスの背に乗って堂々と駆けるそのさまは、遙か世界の果てを目指し続けたいずれの姿を彷彿とさせるもの……ではあるのだが。

「ヤバい、内臓シェイクされて……ガチで吐く……………」

「リンクさん、センパイの顔色が見るからに危険な水準です!!」

「止まれアレキサンダー、屋内で宝具^{うま}を走らせるなんて!!

何か用事があるのは分かった、きちんと聞くからとりあえず一旦落ち着かせろ!!

」

「本当に止まっているの？」

「はあっ!？」

「後ろ見て」

「後ろって……」

「まあジャンヌ、見て下さいな。」

あなたの言う通り、その子達が鳴く方を目指して来たらリンクさん達に会えましてわ」

「勘の鋭い良い子達です、あの子の育て方が良かったのでしょうね」

「勝手に借りてきてしまつて、後で怒られませんこと？」

「……一緒に謝ってくれます？」

「勿論ですわ。」

一緒に怒られて、その後は、皆で一緒に休日を楽しみましょう！」

「ありがとうマリー、皆もあと少しだけ頑張つて！」

「「コケコッコーッ!!」」

「止まっちゃだめ絶対だめ早く早くもつと早く全力で逃げてお願いしますっ!!!!」

「はいはい。」

ごめんねマスター、ブケファラスに蹴り落とされなくなかったら吐くのはもうちょっと我慢して」

「うっぶ……」

「頑張ってセンパイ、飲み込んで下さい!!」

美しいガラスの馬に乗った、朗らかに笑う少女達が、恐怖や吐き気を堪えて涙目になった少年達を乗せた黒い馬を、鶏の鳴き声をBGMに追いかける。

（音を排除した上で）少女達の方だけを見れば、恋人同士の浜辺での追いかっこを思わせるような微笑ましい光景にも思えるそれは、視点を少年達の方へと切り替えれば瞬く間に、悍ましい何かから懸命に逃れようとしているようにしか思えない恐怖映像のワンシーンへと一変して。

運悪く目撃してしまった者達を硬直させながら、カルデア内をしばし走り回った形を持った混沌は、鈍痛を訴える頭を押さえながらの天才軍師の介入によってひとまずの区切りを見せることとなる。

「お前という奴は、もう少し穩便に物事を動かせんのか!!」

「とは言うけどねえ、あの状況では何よりもまず行動に出るのが最善だったよ。

現に、マスター達を保護できたのは、本当にギリギリのタイミングだったじゃないか」

君だって分かっているだろう……と笑顔で念を押されてしまえば、眉間のしわを深くしながら煙草のフィルターを噛み潰すことしか出来ない。

諸葛孔明の力によって空間ごと遮断され、一時的な避難場所と化した小部屋で馴染みのやり取りを繰り返す二人へと、まだ少しだけ顔色が悪い立香が問いかけた。

「で、一体何があつて、『保護』なんて言葉を使わなきゃいけないような状況になつてんの？」

「……誰一人として悪気は無かったのが、本当に申し訳ないのだが」

「
……
なる
ほど。」

俺達が今日揃って休みを取ったことを、ドクターがうっかり口を滑らせた結果、一部のサーヴァント達の間で争奪戦が始まったと」

「マスター達により良い休日をとという気持ちに嘘は無いのだと思う、ただ暴走してしまっているだけで」

「一番性質が悪いパターンじゃん」

「……と、とにかく。」

君達の貴重な一日をむやみに潰してしまうことは、誰一人として本意ではない」
「なるべく早く収めてくるから、少しの間だけここで待っていてね。」

無事に休日が再開できた暁には……ご褒美にとは言わないけど、僕達と過ごす時間をもめにとってくれると嬉しいな」

「お前、それを狙ってこっち側に……まあいい。」

マッシュ嬢、済まないが貴女も一緒に来てはくれないか。

私欲のためにマスター達を独占していると取られないように、マスター側の立場で話せる者の協力が欲しいのだ」

思いがけず話を振られて一瞬硬直しながらも、マスターのためならばとすぐに氣を取り直したマシュと、猫のように襟首を掴まれて引きずられているのにも構わずに、笑顔で手を振り続けるアレキサンダー。

そんな彼らを引率しながら、ズカズカと音が聞こえそうな足取りで部屋を後にしていった孔明の背中には、何とも言えない苦労人の哀愁のようなものが漂っていた。

「……………」

「……………」

「……………ごめんな、何かぐだぐだになっちゃって」

「こんなことなら、有意義な休日をプロデュースとか無理に考えないで、普通に部屋でお菓子でも食べながら本読んでた方がよっぽど……」

「……気持ちだけで嬉しい、か」

「お前は本気でそう思ってるし、慰めや気休めのつもりでも無いんだろうけど」

「俺は……いや、俺達はみんな」

「お前がそういうセリフを、強がりじゃなくて本気で、どんな時や状況でも言えてしまえるようなところが、心配でたまらないんだよなあ」

「世界の危機こんな時でもなけりや、ずっと大人しく眠ってて」

「平和な眠ったままでいられば良かったって、今でも心から思ってる」

「そんなお前を、何とかしてこの世界に繋ぎ留めたいって」

「生きることを諦めたくないと思える理由になりたいって、誰もが必死なんだ」

「……………」

「どうして」

「困ることないじゃん」

「聞いたことがある……聖杯を手に入れたサーヴァントの中には、普通の人間になって、新しく生きることを願った例もあるって」

「一度、ちゃんと生きて死んだ人だって、そういうことを願って叶える権利はあるんだ」

「封印されてはいるけれど、事実としてまだ生きていて」

「背負わされた責任をきちんと果たし切って、真っ当な見返りすら貰っていなかったお前に、それが許されない筈がない」

「困るってのは、『全部終わったらまた眠らなきゃいけないんだから、変に未練を持たされると困る』って意味だろ？」

「いいんだよ、それで」

「死にたくないって」

「生きたいって思うのは当たり前だから」

「俺だってそうだから」

「その為に頑張ってるから」

「……………」

「なあ、ひとつ約束してもいいか」

「それを叶える為には死ねないって思えるような、そんな約束」

「……………」

「後始末まで含めて全部終わったらさ、俺達が救った世界を見に行こう」

「お前と、マシュと……出来ればドクターも一緒、あの人も相当な箱入りみたいだし」

「……………」

「ありがとう」

「約束な」

「そ、それでは僭越ながら、このマシユ・キリエライトが音頭を取らせていただき

共に豪快に挟んだそれは、料理名を知っていた立香だけでなく、現物を目にしたばかりのリンクでさえ無意識に唾を飲み込んでしまう程の、圧倒的な視覚と嗅覚の暴力だった。

「何これ、凄い美味しそう!!」

「ハンバーガー!!」

「キヤット達が腕にヨリヨリをかけた絶品のシャークバーガー、どうぞ召し上がれなのだ」

「……………ちょっと待って、『シャーク』ってもしかしてこれ」

「お察しの通り、君達が釣り上げた鮫のフライを挟んだバーガーだよ。

少しでも鮮度が落ちると、すぐにアンモニア臭がきつくなってしまうのが鮫の問題点なのだが、釣れたて直送と来れば腕が鳴るといふものだ」

「殆ど駄目元で持ち込んだんだが、まさかあんなのまで料理しちまうとは。

お前らの成果だからな、後でちゃんと代金受け取っとけよ。

……………あと、もうひとつ気になってることがあるんだが」

「いいか、よく聞け。

文明の破壊が貴様の、サーヴァントとなろうとも拭えない宿命であると言うのならば、私はそれを否定はせん。

だがしかし、今の貴様は紛れもなく、人理焼却に抗うことを……つまりは、人の築いた文明を護るための戦いに、カルデア所属のサーヴァントとして助力することを誓った身の上。

本能与理性の食い違いがどれほど苦しかろうとも、何とか折り合いをつけてやっていくしかない。

……そんな過酷な状況にある貴様に、ひとつ慈悲の教えをくれてやろう。

許容できない大多数ではなく、まあ良しと思える少数を見つけ、それを護ると思

えば良いのだ。

例えば、今我らの目の前にあるこれのような……繰り返せ、ハンバーガーは良い文明!!」

「もぐもぐ……うん、なるほど、理解した。

ハンバーガーは、良い文明だ」

「あいつ、あんなに面倒見が良かったっけか？」

「……反転しようとも、彼女が王であることに変わりはない。

馴染むつもりはあるのに、不器用なせいで中々それが出来ずにいる者を放っておけなかったのだろう（自分を見ているようで）」

「ふうん……まあいっか、カルデアの利になってるんならそれで。」

うしっ、それじゃあ俺も楽しむとするか」

「リンクさん、マスター、こちらで一緒にお茶を飲みませんか？」

「何を言う、マスター達は余のライブを特等席で堪能するのだ！」

「ちよっ……こらこら君達、リンク君達を独り占めしないっていう今回のパーティーの決まりを忘れたの!？」

「……ああ、そう言えばそうでしたわね。

それでは、皆でお茶を飲みましょう！」

「うむ、ドリンクサービス付きのライブというのもまた面白い！」

「彼女達の中に、自重するっていう選択肢や発想は無いのか。

……参ったなあ、後でリンク君に謝っておかないと。

ゆっくり休んでほしかったのに、まさかこんな騒がしいことになるなんて」

「大丈夫ですよ、ドクター。」

ほら見て下さい、リンクさんの顔を」

「……そうだね、楽しそうだ」

「だからと言って、個人情報をごぼろっと零してしまったドクターの失態は帳消しに

はなりませんけどね」

「……………はい、分かっております」

がつくりと肩を落としながら項垂れるロマニに、こちらも少しだけ肩を上下させながらため息をついたマシュだったが、それはすぐに優しく穏やかな笑みへと変わった。

自分以外にも何人もの人達が、同じものを見ながら、同じような表情を浮かべているのが分かる。

大勢の人達に囲まれながら、楽しそうに、幸せそうに笑う勇者リンク。

彼の孤独な眠りを嘆き、世界を救い続けた献身が報われることを願った全ての読者達が心から待ち望んでいた、夢物語のような光景がそこにあった。

人の世が燃え尽き、『時間』
という概念の意味が薄れてしまっ
た今もお、カル

デアは敢えて時計の針に合わせた日々を過ごしている。

その基準で言うところの夜深く、大多数の者が眠りにについているカルデアの一室に、紙の上をペンが走る細やかながらも心地よい音が響いていた。

昼間のパーティで気分転換が出来た為か久々に筆が乗っている、この調子ならば今日中に物語を締め括ることが可能だろう。

そうして、完成された曲のように流れていた音と動きが、ふと不自然なタイミン
グで途切れた。

一旦思考を切り替えて振り返った先には、部屋のドアを閉めた時には確かに居な
かったと断言できる、ふわふわの白い毛並みを持った小動物が一匹。

「フォウ、お前また来たのか」

「フォウフォウ！」

鳴きながら机の上へと飛び乗り、あっという間に四肢を畳んで落ち着いてしまっ
たことに苦笑しながら、リンクは執筆活動を再開させる。

ほんの少し集中を乱されたくらいでは止まらなかったペン先は、奇跡と称するに相応しい再会に至るまでを、小さな獣が見守る前で一息に書き切った。

分厚い紙の束の一番上にそれを乗せ、バラバラにならないよう気を付けながら引っ繰り返し、表紙代わりの厚紙に挟んで、タイトルを記すのに丁度いい位置に今一度ペンを走らせる。

『F a t e \ G r a n d O r d e r 永続狂気帝国セプテム 薔薇の皇帝』

修正された特異点、無かったことになった歴史の中でのみ綴られる筈だった最新の英雄譚が、ひとつの膨大な世界観をペンの力で築き上げた前例を既に持っている者の手によって、今ここに確かな形となった。

世界どころか、カルデア内部で公になるだけでとんでもない騒ぎを引き起こすであろう危険物を、前作と共に机の引き出しの奥深くへとしまい込む。

それは、彼にとつての執筆活動が頭の中を整理するためのごく個人的なことであり、『著書を誰かに見せる』という発想が無かったが故のほぼ無意識から来る行動だったのだが、それによって少なくとも今現在のカルデアの平穏は保たれた。

筆記用具をしまつて一息ついたリンクの手が、未だ座り込んだままのフォウの背中へと伸ばされ、ふわふわの毛並みを優しく撫でる。

彼がこうして、執筆活動を行なう自分の元を訪れるのは、どうしようもない不安に駆られて寄る辺を求めた時であるということにリンクは気付いていた。

「今日はどうした、パーティの時はあんなに楽しそうだったのに」

「……………」

「ああ……楽しかったからこそ、落ち着いてからかえって怖くなったパターンか。大丈夫だよ、お前が思っているようなことにはならない……って、言葉だけの気休めはいらないよな」

「安心しろ」

「万が一、お前の不安が現実になるようなことがあったら」

「その時は、俺がちゃんとお前を止めて^{殺して}やるから」

優しい手、優しい声、優しい眼差しとのギャップが凄まじすぎて、逆に怖気を覚えそうな言葉が、今のフォウには何よりも嬉しくて頼もしい。

美しい人々の美しい旅路を、最後まで見届けたいと願う幼い獣と、獣の本質を察しながらも受け入れ、いざという時には務めを果たす優しい覚悟を決めている勇者の時間は、誰に知られることもなく穏やかに過ぎていった。

第三の特異点観測の報がカルデアを揺るがすのは、この翌日のこととなる。

封鎖終局四海

天文台よりの船出

世界が滅びかけている瀬戸際だということは、誰もが勿論分かっている。

だとしても、時に穏やかで時に賑やかな、日常と言ってもいい日々を送っていたカルデアが非常事態に移行してから、慌ただしい数時間があっという間に過ぎた頃。最後の準備と休養を終わらせた、実動部隊筆頭の三人が揃ったところで、第三の作戦は本格的に動き始めた。

こういう状況に既に慣れ親しんでいるリンクはともかくとして、もはや素人とは

言い難い、決して悪いものではない程よい緊張をまとっている立香やマシュの成長ぶりに、大人達は頼もしいような痛ましいような何とも言えないものを感じて目を細める。

そんな、これからの作戦を万全に進行するためには不要な感傷を振り払ったロマニは、努めて真剣な表情を作りながら、これから挑むべき特異点についての詳細を語り始めた。

「単刀直入に言おう、今度の特異点は見渡す限りの大海原だ」

カルデアの管制室でそんなやり取りが交わされたのが、既に遠い過去のこととすら思える。

映画を始めとした様々な媒体によって描かれ、現代においては既に殆ど確立しているひな形……日に焼けた肌、潮風に晒されて傷んだ髪や服、銃やカトラスといった特徴的な武器を掲げる海の荒くれ達。

人が海という領域へと踏み入っていった時代の象徴、その一角を担う『海賊』によって、特異点に降り立って早々の立香とマッシュは取り囲まれてしまっていた。

手に手に武器を構えている海賊達と、銃口や切っ先が向けられる先で大人しく手を上げる少年少女。

この状況で分が悪いのはどちらかなどと、通常ならばわざわざ考えるまでもないことなのだろうけれど。

今この場において、その当たり前は逆転していた。

「う……動くなよ、頼むから動かないで下さいよ!!」

「ひいいっ、こっち見た!!」

「おい、姉御はまだなのか!？」

「……どうでしょう。」

早急に人と接触できたことは喜ばしいのですが、もしかしくても第一印象は最悪のようです。

敵意が無いことを分かって頂きたいのですが、この状況ではどうにも説得力が……
「だよなあ」

ため息をついて肩を落としながら徐に上げた視界に、空の青や木々の緑を遮って鮮やかな紅が翻る。

どうしたものかと途方に暮れている人間達をよそに、太く頑丈な嘴を苛立ちのまに打ち鳴らし、人の背丈よりも大きな翼を唸らせながら周囲への威嚇を繰り返す『鳥』の姿をどこか遠い眼差しで見つめる立香の脳裏には、レイシフト完了直後のトラブルが思い返されていた。

ロマニの事前の言葉通り、光の渦を抜けた立香達を迎えたのは、どこまでも広がる海の青。

世界を救うための歩みを進めんと、意気込んでやってきた者達の心を一時奪うに値する美しい光景……存在を確立させたのが雲と同じ高さの虚空で、一瞬の沈黙の後に重力に招かれるがままのフリーフォールを始めていなければ、それは現実のものとなっていたことだろう。

『ドクター説明を、この状況に納得できる弁明と現状の打破を求めます!!』

《何で、分かんない、どうしてだ、レイシフト先の座標の計算には念には念を入

れていた筈なのに!!

立香君、マシュ、リンク君、本当にごめん!!

君達の気が済むまでいくらでも謝るし、僕に出来ることなら何でもするから、どうか何とかしてくれ!!》

何の力も持たない、ただの懇願を口にするとしか出来ない無力感に血を吐くような思いを味わいながら、それでも必死になって叫んでいるロマニの声が、管制室の阿鼻叫喚をどこか遠い世界の出来事のようにも感じ、半ば死んだ目で無重力感を味わっていた立香の意識を揺り動かした。

少しずつ鮮明さを取り戻していく思考の隅で、笛のような甲高い音色が青空に響き渡るのを聞いた彼は次の瞬間、巨大なマジックハンドのような硬く節くれ立った何かによって胴体を鷲掴みにされ、内臓を吐き出しかねない衝撃を味わったことによって、半端なところにあった精神を一気に覚醒させられた。

盛大に咳き込みながら慌てて現状を確認した立香は、自身の胴体を掴まえているそれが、正しく巨大な鳥の脚であることに気付き。

ハッと上げた瞳に、緑衣の少年と驚きのあまりに言葉も無い盾の少女を乗せ、太陽を背にしながら広がる紅の大翼……人がかつて空の民であった時代に、最も近く掛け替えない隣人であったロフトバードの雄大な姿を、否応もなく焼き付けた。……しかし、助かったと一息つく余裕があったのはほんの数秒。

途端にバランスを崩しながらも、懸命に羽ばたいて何とか体勢を立て直そうとする愛鳥の様子に、振り落とされかけて悲鳴を上げたマシュを支えながら不安定な背中にしがみ付いたリンクの舌が鳴った。

『やっぱり、三人は流石に厳しいか』

元より彼らは、生涯に渡ってただ一人の主のみを乗せて飛ぶ存在であり、複数人を一度に纏めてというのはあらゆる面で想定していない。

遠い昔、大空を共に飛んだ相方の誇り高さを知っている……純朴で優しい少女だとしても、主以外の誰かを乗せている状況を不満に思っていることだって。

『二人を頼む』

その上で、リンクの判断は一瞬だった。

いつものように、それが最善だと判断したのと……相方は応えてくれると、そう心から信じていたから。

数秒の間を置いて返ってきた、『仕方ない』とでも言っているかのような力の抜けた鳴き声に、首のあたりを少し強めに叩くことで応える。

お馴染みの感触にほんの少しだけ機嫌を直してくれたらしいことを察しながら、嫌な予感を覚えて顔を引き攣らせている立香達へと改めて向き直った。

『……あ、あの、リンクさん？』

『なるべく急いで合流する。』

それまで身の安全の確保と、余裕があれば情報収集に努めておいてくれ』

『ちよっ、おま』

『じゃあ、また後で』

『こらー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

すぐ下に地面があるかのような気軽さで、紅色の羽毛に覆われた背中からあっさり飛び降りてしまったリンクのその後を、確認出来るだけの猶予すらも無く。

主に言われた仲間達の安全確保を最優先で果たすべく、世界最古の神鳥は全力でその場を飛び去っていった。

「リンクさん、あの後どうなったんでしょうね……」

「あいつのことだから無事なのは間違いないし、俺達の安全確保を優先してくれたのもありがたかったけれど。」

……俺達のことを託すだけじゃなくて、出来る範囲でなるべく言うことを聞くようにとか、一言かけてってくれたらありがたかったなあ。

話をしたいから一旦落ち着けて、さっきから何度も頼んでるのに聞いてくれない」

どうにか我慢してくれないか、折れてくれないかというアピールが込められた眩

きと眼差しに返ってきたのは、いかにも不満そうな低めの鳴き声と、未だ収まらない苛立ちの表れか、大きく鋭い爪でガリガリと土を削る豪快な音。

遠巻きにしている海賊達が、何度目か竦み上がった気配を感じながら、立香もまた何度目かのため息をついた。

「駄目だこりゃ……プライドが高いってのは勿論あるんだろうけど、それ以上に頭に血が昇ってるみたい」

「そもその話として、生涯に渡ってただ一人の主人のみを乗せて飛ぶ筈のロフトバードが、肝心の主人から離れてまで他者を優先しなければならなかった状況は、私達が思う以上にストレスだったと考えられます」

《只でさえ苛立っていたのに加えて、降りられる島を見つけてようやく人心地ついたと思った瞬間にアレじゃあ、プッチンとなるのも無理はないね。

……感情論で物事を言うのは、本当はあまり良くないことなんだろうけれど。僕も今回に関しては、彼もしくは彼女の怒りに賛同させてもらいたい。

こちらを認識したのとはほぼ同時に、話を試みる余地もなく、襲いかかってきたの

は向こうじゃないか!!

ロフトボードが即座に反応してくれなきゃどうなっていたとか、海賊達が受けたのは自業自得の返り討ちだったと保護者としては全力で主張する!!》

「ドクター、気持ちは嬉しいのですがどうか冷静になって下さい。

私達はまず、この特異点について少しでも情報を得なければなりませんのです」

「そうだそうだ、もっと言ってやれ嬢ちゃん!!」

「襲ったのだって悪気は無かったんだよ!!

髪も肌も服も小綺麗で、見るからに良いところ出身のガキども……坊ちゃん嬢ちゃん、今までに立ち寄ったこの島や港でも見た覚えのねえ珍しい鳥!!

こんなお宝を前に、真つ当な海賊が黙っていられるわけがねえんだって!!」

「本能ってやつだ、仕方がない!!

嬢ちゃんなら分かってくれるだろ、だからさっさとその鳥を大人しくさせろ!!」

「出血大サーブिसだ、真つ赤な羽根の10……20枚ほど貰えりゃあ、全部水に流して話だろうと何だろうとしてやるからよ!!」

「……………すみません、ドクター。」

あんなことを言った直後ですが、私も怒る側に回ってもよろしいですか？」
「落ち着いてマシュ、いや今のは俺もさすがにイラッと来たけど!!」

《どの口がってやつだね……》

今この場にリンクがいれば……もしくは立香がもっと冷静であれば、更にはこの状況を見守っている管制室にこういった類の連中に対する造詣が深い誰かがいれば。

こういう時はとにかく自分のペースと優位性を崩さないのが大事であると、気づきやアドバイスがあったかもしれない。

幸か不幸か、第一、第二の特異点においてカルデアは、現地人ともサーヴァントとも、真っ当な倫理観や共有出来る価値観を持つ人達との接触と付き合いが主で。マシュやロマンはもちろん、創作を通じて様々な可能性や価値観への懐深さを備えている立香も、いわゆる『悪党』という存在に対する扱いや接し方の実際の経験が乏しかった。

ロフトバードを恐れて最初こそ下手に出ていた海賊達は、立香とマシュが荒事に

対して積極的ではなく、ロフトバードもギリギリのところでは、彼らの言葉と事情を尊重して威嚇に留めているのだということに気付き、徐々に高圧的な態度を見せ始めている。

あまりにも調子と都合のいい様子に立香達の腹立たしさはより一層掻き立てられ、両者の間に漂う空気は、もはや一触即発と言っているものと化してしまっていた。

そんなところにやって来たのは、肩を落としてため息をつき、態度にも表情にもあからさまなやる気のなさを窺わせながら、泡を食った様子の海賊達に案内されて現れた一人の女性。

説明されただけでは分からなかった異様な状況を自らの目で確かめた彼女は、眉尻を跳ね上げ、舌を鳴らし……人ごみのいずこかへと適当に向けた銃口から、ほんの一瞬の躊躇いすらも無く、轟音と共に鉛玉を撃ち出した。

「おい、何か見つかったか!？」

「それらしいものは特に何も……」

「おかしいなあ、確かに何かが落ちてきたのに」

大海原のど真ん中、巨大帆船とは言わずともそれなりの大きさを持った船が、木の葉のようにぼつんと波間に揺れている。

波や風によって動かされてしまわないように船を留め、手分けしながら水面を必死に見渡すのは、異常事態とお宝が存在する可能性をイコールで結び付けた海賊達だった。

いつの間にか、どことも知れない謎の海域に迷い込んでしまい、僅かな噂や手掛かりを元に必死の航海を続けている真っ最中であつた筈だというのに、海賊の本能とは生存を求めるそれをも上回るものなのだろうか。

立香やロマニ辺りならばそんなことを眩きもしたのだろうか、生憎とここにいるのは命知らずの悪党や、必要とあればそちら側に足を踏み出してしまえるような者ばかり。

何の異変も見受けられず、ため息をつきながら身を起こした一人の海賊……その胸倉が突如伸びてきた手によって掴まれ、水面を覗き込んでいた時よりもずっと深い、咄嗟に船縁を掴んでいなければそのまま落ちていたであろう位置にまで引張

られた。

声を出す間もなかった海賊の額に、自身の腰布にも挟まれているのとはよく似たものが、怖気を誘発する硬質な感触と共にゼロ距離で押し付けられた。

服や髪から潮水を滴らせ、まともな足場や手掛かりなど無い筈の船の胴体に身ひとつでしがみつきながら、本職である筈の自分よりもよほど悪い笑顔で銃口を向けてくる少年の姿がそこにある。

「この船をもらうよ、悪いけれど拒否権は無しな」

あまりにも現実感が無さ過ぎる光景は、続けて発せられた言葉と共に、男の脳裏へと強引に刻み付けられた。

海賊女王

「さあ野郎ども、乾杯だ!!」

あたしらの航海と、新たなお宝に!!」

「『『かんぱ〜〜〜いっ!!』』』」

「アンタらも飲みな、遠慮はいらないよ」

「は、はあ……」

「……では、いただきます」

木を削っただけの粗い器の中で波打つ液体に、恐る恐る唇を近づける。

懸念していたアルコールではなく普通に水だったそれは、緊張と暑さから来る喉の渇きの自覚を促し、器を一気に傾けさせた。

人心地ついてほうと息をつく姿に、器を勧めた当の本人である女海賊が豪快な笑い声を上げる。

「いい飲みっぷりじゃないか、気に入った!!」

宴の高揚感に乗って促しはしたものの、頭の中に残してある一部の冷静な部分では、手下の海賊達曰く『良いところの坊ちゃん嬢ちゃん』、自分の目から見てもその認識で間違いないような者達の喉が、この状況でものを飲み込めるとは思っていないかった。

宴の肴として追加するには十分な好ましい想定外に、女海賊の機嫌はますます良くなっていく。

水を飲んでいる途中で背中を叩かれたせいで豪快に咽ている、上質な炭のような艶のある黒髪と彫りの浅い顔立ちが珍しい異国の少年を右隣に。

ふとした拍子に零れてしまいそうな程に豊満な胸元へと抱き寄せられて、顔を赤くしながらあわあわと困り果てている可愛らしい少女騎士を左隣に。

あからさまな不満を気配として纏わせながらも、今のところは大人しくその場に腰を下ろしている鳥の美しい紅色の羽毛を背に、遠慮なく体重を預けて。

船長特権として、新たに手に入れた宝を独占しながら全力で愛であることを躊躇わない豪快な女海賊の名を、立香達は既に聞いていた。

《フランシス・ドレイク、生きたままの世界一周を世界で初めて成し遂げた大海賊……人という種の段階をひとつ上のレベルへと押し上げた、疑いようもない人類史の英雄だ。

『ゼルダの伝説』に登場する、伝説の海賊王女テトラの再来とまで謳われていたのだから、当時の人達からしてもよほど魅力的な人だったのだらうとは予想していた」

「……俺も、ハリウッドで映画化されたの見たことある。

アカデミー取ったようなベテランの女優さんが演じてて、すごい綺麗だしカッコよかったのを覚えてる……けど」

内緒でやり取りを進めるべく、聞こえる対象を絞ったロマニの声に返しながらチ
ラリと向けた横目に、恥ずかしがって暴れるマシユをやんちゃな猫のように扱って
いる女性の太陽を思わせる笑顔が映った。

撮影に備えて完璧に作り上げられたものとはまた違う、魂を源に内側から発する
ものによって自ら輝いているかのような何とも言い難い魅力の持ち主を前に、『本
物』という言葉が持つ意味を否応もなく思い知る。

人の領域となり始めたばかりの頃の海で様々な偉業を成し、その名声を立香の時
代に至るまで絶えることなく轟かせ続けた『海賊女王』の横顔を、立香は不思議な
感動と共に見つめていた。

「サーヴァントじゃない……今この時を生きている本人、なんだよね」

《第二特異点におけるネロ陛下という前例があるから、驚きはすれどもあり得な
いことじゃない。

……出発前にも話したように、この特異点は大海原と点在する僅かな小島によっ

て構成されている特殊なもの。

海というものを知り尽くしている彼女の力を借りることが出来れば、この上なく頼もしいんだけど……》

語尾を濁したロマニに、立香も溜め息でしか返せなかった。

どのような形であれ状況が一旦落ち着き、冷静さを取り戻した今になって、これまでの旅路で得てきた経験がこの特異点においては通じないことを突きつけられている。

（第一特異点はフランス、第二特異点はローマ。

どちらとも確かな国とそこを故郷とする人達がいて、協力を募ること自体は簡単だし、そのための流れだって自然なものだった）

掛け替えない故国、もしくは大勢の無辜の民の暮らしを守る……真っ当な倫理観を持つ者たちが集い、協力して戦うための理由としてはそれで充分。

しかしここは誰のものでもない大海原、そしてここに生きるのは自由と財宝を求めて水平線へと漕ぎ出した海賊達。

情や義に訴えるのではなく、利や力を示すことで対等かそれ以上の関係を築かなければならなかった相手に対して、自分達が初手から間違えたことに遅ればせながら気付いてしまつて頂垂れるしかない。

現に、カルデアと特異点のことを説明して何とか交渉を行なおうとしているマシュは、そういう意味では全く相手にされていなかった。

「ぷはあつ、やっぱりラム酒は一息で飲み干すに限るねえ!!

……えっと、何の話をしたっけ？」

「何度も言わせないでください、世界の危機なのです!!

あなたほどの人ならば気づいている筈です、ここはあなた方が過ごしてきた海とは別のモノだということを!!」

「……そうだね、何となくおかしいとは思っていた。

で、あんたが言うには、この海の異常を正さなければ世界が丸ごと滅びちゃうっ

てんだね？」

「よ、ようやくここまで話が進みました……はい、そういうことなのです」

「なるほど、だとしたら急ぐ必要がありそうだ」

「では、ご協力いただけると」

「聞いたね野郎ども、食って飲んで騒げるのは今の内だ!!」

酔いが醒めたら次のお宝を求めて出港するよ、時間が無いのにやることは山積みで全く忙しいったらありゃしない!!」

楽しみで仕方がないと言わんばかりに、豪快に笑いながら響いたドレイクの一声に、海賊達の野太い歓声と酒が入った器をぶつけ合う多重音が追従する。

真剣な話し合いが始まるどころか、より一層羽目を外して盛り上がり始めてしまった海賊達に、マシユの口と目は開きっぱなしになっていた。

「えっ……ちょ、ま、ええっ!!」

お宝を求めて……どうしてそうなるのですか、世界が滅ぶかどうかの瀬戸際

なのですよ!？」

「分かってないねえ、お嬢ちゃん。

明日無様に死ぬとしても、今この時楽しけりゃいい……それが海賊、アタシらが何よりも誇る自由な生きざまってもんさ。

近いうちに何もかも無くなっちゃうってのが分かってんのなら尚のこと、最後まで楽しくやらなきゃ損じゃないか」

「そ、そんな……」

「もういいよマシュ、一旦引いて」

「マスター!？」

「ドレイクさんにとって価値があるもの、残り少ない時間を賭けるに値すると思えるようなものを示せないどころか、全く興味を感じない綺麗ごとを押し出すことしか出来ていないようじゃあ、どんな熱弁も意味は無いよ」

「……ふーん。

どうやらそっちは、まだいくらか冷静で話も分かるようだね。

馬鹿正直なお嬢ちゃんをからかうのも楽しかったが、アンタとだったらもうちょ

い詰めた話で盛り上がれそうだ」

「ば、馬鹿正直……」

完全に遊ばれていたことに気付いてショックを受けるマシュには悪かったが、何の裏も無しに真正面からぶつかってくれた彼女のおかげで、強烈な第一印象や海賊という存在への偏見に引きずられたものではない、ドレイクという個人の享楽主義と現実を見極める冷静さを併せ持った人となりを確認することが出来たし、それを考慮した作戦を考えた上での話し合いに臨める。

落ち込むマシュをロマニがフォローしてくれているのを横目で確認し、改めて気持ち切り替えた立香は、音が聞こえてしまうのではと不安になってしまう程に暴れる心臓を押さえながら、名だたる大海賊と対等の交渉を始めるべく口を開いた。

「冒険をしませんか？

知恵で乗り越え、力で切り開き、勇気で立ち向かい、その末に世界を救う……そんな大冒険を」

「……………いいねえ、やるじゃないか。

世界を救うっていう目的自体はさっきのお嬢ちゃんと同じなのに、ちょっと言葉を捻るだけでこうも印象が変わるもんなんだねえ。

面白くなってきたよ……アンタはアタシに興味を持たせることに成功した、なら次だ。

アンタ達にはそれが出来る、賭けるだけの価値があるんだってことを、アタシに証明して見せな」

興味と期待で輝く瞳の奥には、どれだけ本気なのか、この状況から逃れたいがための口先だけのハツタリではないかといった辺りまでを含めて、現状の全てを正確に見定めようとする冷静な思考が存在しているのを感じる。

決して間違えられない状況で、あまりの緊張にゴクリと喉を鳴らす立香が指さしたのは、ドレイクの背もたれになりながらいつの間にか寝息を立てていた紅の鳥。かの者の主……自身が持つ最も強力な手札を、ドレイクという大海賊への敬意の表れとして初手から切ろうとした立香の第一声を、完全に油断していたドレイクを

すっ転ばせる勢いで突如立ち上がったロフトバードの挙動が妨げた。

「ぎゃっ!？」

「ちよっ、なになに、急にどうしたの!!」

「姐御、楽しく飲んでるところ申し訳ありやせん!!」

傘下に入りたいって連中がまた……って潰れちまったみたいっすね、出直させますか」

「あほ抜かせ、まだまだ行けるよ!!」

あいたたた、思いつき顔打った……クソ鳥め、焼いて食っちゃおうか!!」

「冗談でもやめて下さい、ワシントン条約とかレッドリストとかいうレベルの存在じゃないんですから!!」

「……言ってることはよく分かんが。

アンタらの鳥だろ、食われたくないってんなら責任取ってちゃんと大人しくさせときな。

まずはあっちの件を片付ける、話の続きはその後でゆっくり聞いてやるよ」

飲んだくれから大海賊へと、纏う雰囲気と表情を一瞬で切り替えたドレイクは、広場を囲う木々の向こうから現れた見知らぬ一団を視界に入れる。

謎の海域に迷い込んで以降、最も強く、最も真つ当な航海を行なっているドレイクの元に、木っ端の海賊が少しでもマシな環境を求めてやってくることは珍しくなかった。

今回もそのようなものだろうと、既に慣れた様子で対応しようとしたドレイクの表情が、何とも言えない違和感を覚えたことによって強張る。

正しい海で航海を行なっていた頃からの、古参の船員が何となく察した程度の変化に、今この時初めてドレイクと対峙した者達が気づける筈もない。

集団のリーダー格と思われる、大柄でいかにも荒事に慣れているといった風貌の男が、十人にも満たない集団の先頭に立ち、慣れない敬語を使いながら仲間入りを願っている。

その表情や体の動きは、大海賊を前にして緊張していると考えても、やはり過度なものだと思ってしまうほどに強張っていて。

盛大に舌を鳴らしたドレイクは、腹の底から込み上げた不快感を押さえることなく露わにしながら、引き金に指をかけた銃を突きつけた。

一步進んだ位置で懸命な交渉を続けていた男でも、その後ろで息を呑みながら全身を強張らせていた船員達でもなく……全員の陰に隠れた一番後ろ、指示通りにただ付いていくことしか出来ない下っ端だと言わんばかりの位置に立っている、外套を頭から深くかぶった小柄な少年へと向けて。

「あ、姉御、いきなり何を!？」

「見くびるんじゃないよ、そんな小賢しい真似に引っかかるもんかい。

本物のアタマが引っ込んだ状態での交渉が上手くいくと……このアタシがその程度の存在だと、本気で思っているんだとしたら。

ガキだろうが関係ないね、その脳天に風穴開けて海のご真ん中に叩き落としてやる!!」

凄まじい覇気が込められたその一声は、射線上に居た者達の腰を一瞬で抜かせた

だけでなく、今の今まで宴会に興じていた者達の酔いと宴の場の高揚感を一瞬で吹っ飛ばした。

言葉を発するどころか、身じろぎすらも躊躇われるほどの重苦しい空気の中でただ一人、何事もなかったかのように平然と立ち続けている少年の姿が、異様なものとして一同の瞳に焼き付けられる。

喜んでいるかのように聞こえる、弾んだ鳥の鳴き声以外の音が一切失せた状況で、少年はゆっくりと、表情すら窺えないほどに深くかぶったフードへと手を伸ばした。

「フランシス・ドレイク船長、まずは謝罪を。」

あなたを見くびっていた……作戦が始まったばかりの状況で少しでも消耗を押さえないと、それで何とかなるだろうという侮りがあった。

あなたと、あなたが率いる海賊達に敬意を表し、予定を変更した方が良さそうだ。内側に潜り込んでから工作するのではなく、真正面から堂々と力を示して……ドレイク船長、あなた達にはカルデアの傘下に入って頂く」

いつものドレイクならば、『ふざけるな』もしくは『やってみろ』とでもと瞬時に言い返し、同時に鉛玉の2、3発でも贈っていたところだろうに。

取り払われた布の下から現れた、今までに目にしてきたお宝の悉くをくすませてしまうような、恐ろしいほどに美しい蒼い瞳。

物理的な威力を伴っていたのではないかと思わせるほどの眼差しに射貫かれて、ほんの一瞬とは言え思考を吹っ飛ばしてしまった事実を前に慄きながらも、少年を捉える銃口だけは決してブレさせない。

ドレイクが懸命に振り絞った意地と矜持を前に、少年が浮かべた満足そうな笑みが、居合わせた者達には獲物を前にした悪魔のそれに見えていた。

嵐の夜

「撃てっ!!」

雷鳴の如く轟いた女王の号令が、戦闘開始の合図よりも先に放たれた。

揃いも揃って酒と宴に酔い痴れ、ドレイクの殺気交じりの一喝に腰を抜かしていた海賊達が、その状態のまま未だ動けずにいる者達と瞬時に立ち上がって銃を抜いた者達に二分されている。

状況がまだよく分かっていない者は多いし、いくらコケにされたとは言えあんな少年一人に対して過剰な反応なのではないかと思う気持ちもあるけれど、そんな疑

問や躊躇いは船長の決断だという事実を前にすればたやすく吹っ飛ぶ程度の些細なもの。

反応しきれずにいる新参者達を尻目に瞬時に戦闘態勢を取った動きは、流石はかのドレイクと共に数多の困難を乗り越えてきた者達だと感心するに十分なものだったのだけだ。

今回に関しては、残念ながら相手が悪かった。

「な、何だこりゃ!？」

「銃が、剣まで!!」

数多の銃口から火が吹こうとしたその瞬間、少年が掲げた石板から放たれた光へと海賊達の武器が一斉に吸い寄せられ、一同が呆然と見上げる先で瞬く間に物騒な球体を作り上げた。

普通の人間にはまず対処できない方法でもって一瞬で武装解除してしまった容赦の無さを目にした立香は、第一・第二の特異点において効率最優先で大暴れしてい

るものとばかり思っていたリンクが、自分達の場所を自分達の力で守らんとする現地の人達のことを考えてあれでもかなり自重していたのだということを苦笑いと共に思い知る。

無数の武器が集まって出来た塊を腕の一振りでも木々の向こう側へと投げ捨てたりリンクの、「次はどうする？」と言わんばかりの余裕の笑みを前に、ドレイクは血が滴るのではないかと案じさせるほどの力で握りしめた拳を震わせた。

まともに戦おうとすらしないのは侮られているから……などとは思わない。

自分達の本領は操船技術やそれを生かした海戦で、向こうもそれを期待して取り込もうとしているのだから、貴重な人員をむやみに傷つけてしまうような行為はなるべく避けたいと思うのは自然だろう。

陸上で力の差を思い知らされたとしても、海の戦いでは決して負けないという自負と事実がありさえすれば、自分達の誇りは決して折れやしない。

ひとかけらのパンにも、一口の酒にもならない意地を張って死ぬよりも、良いように使われる不便と屈辱をほんの一時楽しみすらして、後で何倍にも増やして取り返してやろうと企てる遊び心だって、海賊の嗜みとして持ち合わせている。

化け物じみた金髪の少年が、先ほど自分に対して面白い交渉を行なおうとしていたあの黒髪の少年の仲間であるなら、例え傘下に下ったとしても悪いようにはされない筈……むしろ彼らと共に行けば、この謎の海域でかつてないような大冒険が出来るのだという確信だっている。

いつもの自分ならばそろそろ両手を上げて、カラカラと笑いながら「降参だ」と嘯いて、自分達がより多くを得てより多く楽しむための算段を飄々とした態度の下で練り始める頃合いなのに。

（そうした方が得だって分かってるのに……なぜだ、なぜアタシはこんなにもムキになって）

『海賊女王』なんて周りが勝手につけた呼び名に特に執着は無い、どころか持て囃しだとしても行き過ぎだと背中が痒くなるような思いをしていた筈なのに。

海の荒くれを統べるに値すると認められた女の力は断じてこんなものなどでは無いと、声を上げたい自分が確かにいる。

それこそ負け犬の遠吠えじみたみっともない真似だと、今にも吐き出しそうな激情を懸命に飲み込む胸元の熱さが、それを考慮したとしても異様なほどのものだ。少し離れたところから優男の素っ頓狂な声が聞こえてきたことで、ドレイクはようやく気が付いた。

《急激な魔力反応の増加……ば、馬鹿な、これは聖杯だ!!》
(せいはい……聖杯、まさかこいつか?)

この謎の海域に迷い込んでからしばらく経った頃に、巨大な船のようにも思える怪物を沈めた際に手に入れた戦利品。

食料や酒をどこからともなく出してくれる便利な代物として、主に宴を開く際に重宝していた、普段は光の塊となって自身の胸のあたりに隠れていたそれを徐に取り出す。

手の中で形を得た杯を見るや否や、目を見開いて言葉を失った少年と少女の姿を視界の端に捉えたドレイクは、最近のお気に入りだったこれが思った以上の代物

だったことを確信した。

持ち主の心を察したかのように力強く輝くそれを握り締める、使い方は既に分かっていた。

「聖杯とやら、アタシによこしな!!

酒や食料なんかじゃない、アタシが最もアタシらしく戦える場所を!!」

覚えのある感覚を経て、世界は瞬きの間に塗り替わる。

体は波音と共に上下左右に激しく揺すられ、痛さすら感じるほどの横殴りの雨と暴風によって五感の大部分が妨げられる。

普通の船乗りならば間違いなく絶望を覚えるような嵐の甲板を雄々しく踏みしめる、大海賊ドレイクの雄姿がそこにあった。

本当に久々の更新ですみません、量としては少なめですが少しでも調子を取り戻したかったので一旦上げることになりました。

本調子にはまだまだですが、書きたい気持ちちが失せたわけではないので頑張ります。

ティアキンの発売まで一か月切って本当に楽しみです、そっちばかりに夢中になるのではなく受けた刺激を是非とも創作意欲に繋げたい。

世界樹の迷宮の発売も迫っていてちょっと怖いところではありますが、頑張っ
続けていきますので宜しくお願いします。

成り代わりリンクのGrand Order

著者 文月葉月

発行日 2023 年 12 月 18 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/182479/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。